

私の世界は硬く冷たい

へっくすん165e83

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

20世紀末、イギリスにそびえ立つ紅魔館に通の手紙が届いた。 Hogwーツに入学することになった十六夜咲夜（メイド長見習い17歳）は愉快的仲間たちとどのような生活を送るのか。

咲夜「え？この人って箒使わないと空飛べないの？」

パチュリィ「杖がないと魔法すら使えないのよ。」

レミリア「料理も不味いしね。」

美鈴「それは関係ないです。」

注意。この小説は独自の設定や能力の解釈、原作キャラのキャラ崩壊、ストーリー改

変などが含まれます。元々毒にしかならない作品ですがこのような表現が苦手な方はご注意ください。そして、作者が忘れっぽく馬鹿な為、よく矛盾が発生します。その辺は適当に解釈して頂けると助かります。

賢者の石以降警告タグが真価を発揮し始めますので予めご注意の程よろしく願います。

2021.1.10 新作始めました <https://syosetu.org/novel/247370/>

目次

十六夜咲夜と賢者の石

手紙とか、買い物とか、列車とか

1

組み分けとか、授業とか、箒とか

34

決闘とか、ハロウィンとか、友情とか

81

クイディッチとか、クリスマスとか、勉強

強とか

124

鏡とか、勇気とか、賢者の石とか

164

十六夜咲夜と秘密の部屋

お嬢様とか、夜の闇横丁とか、書店とか

215

車とか、ロックハートとか、トム・リド

ルとか

257

ミセス・ノリスとか、決闘クラブとか、

偽物とか

299

日記とか、秘密の部屋とか、友達とか

330

十六夜咲夜とアズカバンの囚人

囚人とか、美鈴さんとか、吸魂鬼とか

372

死の予兆とか、ヒッポグリフとか、縮み

薬とか

410

まね妖怪とか、ホッグズ・ヘッドとか、

犬とか | 449

人狼とか、忍びの地図とか、三本の箒と

か | 486

金庫とか、妹様とか、科学とか

524

新学期とか、試合とか、厨房とか

562

試験とか、誤解とか、気絶とか

599

満月とか、医務室とか、ふくろう便とか

637

十六夜咲夜と炎のゴブレット

新入りとか、ワールドカップとか、闇の

印とか | 675

対抗試合とか、ムーデーとか、白イタチ

とか | 716

許されざる呪文とか、他校とか、ゴブ

レットとか | 757

四人の選手とか、英雄とか、杖調べとか

| 796

ドラゴンとか、金の卵とか、必要の部屋

とか | 837

ダンスパーティーとか、洞窟とか、缶詰

とか | 875

第二の課題とか、玉座とか、靴下とか

尋問官とか、査察とか、先生とか 1111
警告とか、苛めとか、傷痕とか 1071
尋問とか、監督生とか、雑誌とか 1030
退学とか、護衛とか、会議とか
十六夜咲夜と不死鳥の騎士団 992
涙とか、賞金とか、騎士団とか
校長室とか、第三の課題とか、復活とか 911
950

か
聖典とか、密告とか、誓いとか 1372
お見舞いとか、クラブとか、ピーターと 1297
聖マンガとか、予言とか、儀式とか 1254
セストラルとか、勧誘とか、病院とか 1222
防衛とか、王者とか、帰還とか 1184
会合とか、解散とか、申請とか 1149
1335

花火とか、進路指導とか、自由とか

1410

ふくろう試験とか、復讐とか、アーチと

か

1450

命とか、思いとか、繋がりとか

1490

十六夜咲夜と死の予言

魔法大臣とか、訪問とか、謝罪とか

1530

同期とか、目的とか、思い出とか

1570

予言の間とか、魔法薬学とか、個人授業

とか

1606

天才とか、傭兵とか、ネックレスとか

1650

家族とか、幸運の液体とか、旅行とか

1690

クリスマスパークティーとか、分霊箱と

か、要求とか

1728

恋愛とか、記憶とか、回想とか

1767

分断とか、引越しか、杖とか

1809

戦争とか、戦いとか、殺し合いとか

1849

生贄とか、疑問とか、旅立ちとか

1883 幸せとか、笑顔とか、始まりとか

1934 それからどした

紅く偉大な私が世界



1946

十六夜咲夜と賢者の石

手紙とか、買い物とか、列車とか

一九九一年、七月。

悪魔の住む館、紅魔館が幻想郷ではなく、まだ外の世界に存在していた頃。

一匹のフクロウが紅魔館を目指して闇夜を飛んでいた。

嘴には一通の手紙を咥えている。

似たようなものに伝書鳩というものがあるが、伝書鳩というのは鳩の帰巢本能を利用してゐる為、基本的には一方的な通信しかできない。

だがこのフクロウは明らかに自らの使命を明確に理解し、目的地を目指して飛んでいる。

あと少して紅魔館の門に降り立るといふ程の距離まで門に近づいたその時、突然フクロウは眩い閃光に焼かれポトリと地面に落ちた。

「よっしや、夜食ゲット。腹が減っては門番は出来ぬ……ってね。ん？ なんだこれ？」

一人の少女が地面に落ちたフクロウを拾い上げる。

「どうやら、この少女がフクロウを撃ち落としたようだ。」

緑色のチャイナ服に、腰まで伸ばした赤い髪。

頭には龍と書かれた星の飾りがつけられた帽子を被っている。

彼女の名前は紅美鈴（ほん めいりん）。

紅魔館の門番をしている妖怪だ。

彼女は絶命しているフクロウが啜えている手紙を抜き取ると、手紙ではなくフクロウのほうを心配そうに見つめる。

「伝書フクロウだったか。後で怒られないといいけど。……つて、手紙はうち宛ててみた
いね」

伝書フクロウはその性質上、ペットとして可愛がられていることが多い。

それ故に、勝手に殺してしまつてはまずいのだ。

美鈴は庭仕事をしている妖精メイドに一時的に門番の仕事を任せると、死んだフクロウ片手に紅魔館の中へと入る。

「おげうさま、おげうさま。お手紙が届きましたよ」

美鈴はこの館の当主である吸血鬼のレミリア・スカーレットを探し、館内を歩き回る。

この時間帯、レミリアは自室にはいない。

いつも通りなら、どこか忙しそうに館内を歩き回っている頃だろう。

「美鈴、うるさいわね。手紙なら私の部屋の机の上にも置いておけばいいでしょう」

探し始めてから五分も経たないうちに、美鈴はレミリアを発見した。

いや、逆に発見されたという方が正しいか。

淡いピンクのドレスに、ふんわりとした青い髪。

背丈はそれほど高くなく、外見だけで見れば十歳程の年齢に見えるが、彼女は既に五百年近くの時間を生きている。

レミリアは明らかに機嫌が悪そうに美鈴を睨みつけるが、美鈴はそんなことはお構いなしな態度で手紙をレミリアに渡した。

「だって緊急の手紙だったらどうするんです？ それはそれでおぜうさま怒るじゃないですか。おぜうさま、結構簡単にご飯抜きって仰いますけど、夕飯ならともかく朝飯抜きってのは結構堪えるんですよ？ 空腹だと寝付けないですからねえ……」

「なら咲夜に渡しておけばいいでしょう。あの子ももう十一歳よ」

「ホント咲夜ちゃん優秀ですよね。もうすっかりメイドとしての仕事もおぜうさまの側近としての仕事も板についてきましたし」

美鈴は顔をニヨニヨさせながら、大体こんなもんと手の平を上下させて咲夜の身長の高さあたりを指し示す。

レミリアはその様子がすこぶる気に入らなかつたらしく、美鈴を睨んで拳を握った。

最近、咲夜はレミリアの身長を追い抜いたのだ。

美鈴自身は可愛さのあまりの行動かも知れないが、レミリアからしたらただ単に煽っているようにしか見えない。

レミリアは美鈴の朝食を抜きにしようか真剣に検討しはじめながらも手紙の封蝋を破り、その中身を確認した。

「えーと、どれどれ。なにに……。美鈴、いつまでそこにいるの？ 仕事に戻りなさいよ」

レミリアは手紙から目を離すことなく、シッシと虫を追い払うかのような仕草をする。

「どんな内容だったんです？」

美鈴はそんな仕草を軽く無視して手紙を覗き込んだ。

「門番が主人に対して馴れ馴れしいとは思わないの？ まあ、この内容は少なからず貴方にも関係ある話だし、教えてあげないこともないけど。良い知らせと悪い知らせ、どちらから聞きたい？」

「良い知らせから」

美鈴は迷うことなく言った。

食事に例えるとするならば、美鈴は好きな物から食べるタイプと言ったところだろうか。

レミリアはそんな美鈴に呆れつつも話を続ける。

「では、まず一つ。咲夜が学校に通うことになったわ。それと、貴方がメイド長に復職するってのも一応良い知らせかもね」

「おお！ 咲夜ちゃん学校に通うんですね。で、私がメイド長に復職することは……」

「あら、察しがいいわね。咲夜、いるかしら？」

レミリアが虚空に向けて咲夜の名前を呼ぶ。

次の瞬間、レミリアの右後ろに何の前触れもなく人影が現れた。

白い髪に青い瞳。

まるで美術館の額縁の中から攫ってきたかのように整った容姿。

背は年相応に低いが、全身きっちりとしたメイド服に身を包んでいる。

レミリアのメイドの一人であり、この館唯一の人間の使用者である十六夜咲夜（いざよい さくや）だ。

レミリアはくるりと振り返り、咲夜に目線を合わせる。

そして自分の視線が少し上を向いていることに少しばかり苛立ちを覚えると、邪念を振り払うように頭を振り、手紙を咲夜に差し出した。

「貴方宛てよ。その手紙」

レミリアが差し出した手紙を咲夜は不思議そうな顔をして受け取る。

「私に手紙……ですか？ 珍しいですね」

咲夜は既に封が切られていることに違和感など全く抱くことなく、封筒から手紙を出してレミリアにも見えるように広げた。

『ホグワーツ魔法魔術学校 校長 アルバス・ダンブルドア

マリーリン勲章、勲一等、大魔法使い、魔法戦士隊長、最上級独立魔法使い、国際魔法
使い連盟会長

親愛なる十六夜殿

このたびホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。

新学期は九月一日に始まります。七月三十一日必着でフクロウ便にてのお返事をお待ちしております。

敬具

副校長 ミネルバ・マクゴナガル』

咲夜は中身を読み終えると、首を傾げた。

「ホグワーツ魔法魔術学校？ 聞いたことのない学校ですね。ですが私はこのメイド
ですので学校には——」

「いえ、行きなさい。咲夜」

咲夜が最後まで言い切る前にレミリアがそれを制す。

「この学校への入学は貴方が生まれた時から決まっていた運命だわ」

レミリアが言葉を紡いでいく。

その横で顔を青くしている門番が一人いた。

「あのお……おぜうさま？ 申し訳ありません。いえホントマジですんません」

レミリアは心底鬱陶しそうに美鈴の方に振り返る。

美鈴が話を切り出す前に、美鈴の手に握られている死んだフクロウを咲夜が目ざとく見つけていた。

「うちに伝書フクロウってありましたっけ？」

「取り敢えず美鈴はご飯抜きね。さあ咲夜、向こうの部屋でゆっくり入学に関して話しましょう？」

レミリアは冷たい目で死んだフクロウと美鈴を交互に見ると、もう何処かに行けと言わんばかりに罰を与え、咲夜の背中を押して近くの部屋に入っていく。

廊下には今日の飯抜きを言い渡された悲しい門番と、フクロウの死骸だけが残された。

レミリアお嬢様の勧めもあり、私はホグワーツ魔法魔術学校に入学することになった。

といつてもホグワーツがどのような学校なのか、何を教えているのか私は知らない。まあ魔法魔術学校というぐらいだから、魔法を習うのだろう。

私は今、手紙に書いてある教材を揃える為に紅魔館の地下にある大図書館に来ていた。

普段入用になる食材や日用品の買い出しは自分で行っているが、手紙に書いてあるような教材がロンドンの街に売っているとは思えない。

裏ルートで探せば案外見つかるのかもしれないが、もっと確実な方法がある。

その道のスペシャリストに聞けばいいのだ。

幸い紅魔館の地下に広がる大図書館には博識で偉大な魔女であるパチュリー・ノーレッジ様がいる。

私は大図書館中央のテーブルで本を読んでいるパチュリー様にホグワーツからの手紙を渡して事情を説明した。

パチュリー様は一通り説明を聞き終わると、一通の便箋を取り出し何かを書き始める。

そしてそれを封筒に収め、封蝋を押ししてから空中で燃やした。

手紙は消し炭になって消えてしまったが、多分あれで送れているんだろう。

パチュリー様は手紙が燃えた煙に小さく咳き込むと、私のほうに向き返った。

「さて、教材に関してはここにあるものもあるから全部を全部購入する必要はないわ。教科書類は図書館の蔵書にあるし、鍋や薬瓶などの学用品もある。買わないといけないのは制服と杖ぐらいかしら」

「お金はスターリング・ポンドでいいんでしょうか？」

「そもそも貴方これらが何処で売っているのすら知らないでしょうに。……そうね、今日の朝、レミイが寝たら買いに行きましようか」

やはり魔女である彼女を頼って正解だったようだ。

先ほどの手紙はホグワーツに宛てたものだろう。

対応を見るにホグワーツのことも知っているらしい。

私はパチュリー様に深々と頭を下げ、時間を止めて大図書館を後にした。

「パチュリー様、図書館から出発するのですか？」

お嬢様の朝食の片付けが終わり、日も少し昇ってきた頃。

私は外出の仕度を済ませて大図書館に来ていた。

パチュリー様の話だと大図書館から出発するらしいが、大図書館には外へ通じる扉はない。

私がパチュリー様のほうに視線を向けると、いつの間にかローブを身に纏い身支度を済ませていた。

「魔法界の暖炉はネットワーク化されていてね。煙突飛行ネットワークって言うんだけど……。まあやってみればわかるわ。この粉を暖炉の中に振りかけて炎の色が変わったら中に入る。そしてダイアゴン横丁って言えばロンドンで一番大きい魔法商店街に出れるわ」

「そんな便利な暖炉が紅魔館にあったのですね」

「本来なら魔法省が全部管理しているんだけど、ここの暖炉は少し細工がしてあってね。まあ、その話はどうでもいいか」

ほら、さっさと行く、とパチュリー様は私の背中を押す。

私は少々躊躇しながらパチュリー様が差し出した粉を暖炉の炎に振りかけ、暖炉の中に入った。

不思議なことに、緑色の変った炎は私の肌を撫でるだけで熱くはない。

そよ風に吹かれているようだ。

私は一度パチユリー様の顔を覗き、意を決して口を開く。

「ダイアゴン横丁ツ!!」

叫んだ瞬間、突如何かに強く引つ張られるような感覚が全身を襲う。

その感覚に目を回しているうちに暖炉間の移動は終わったらしく、私はいつのまにか古びたパブの店内にある暖炉の中に立っていた。

「さて、まずは制服から買いに行きましようか。……咲夜？　もしかして酔った？」

いつのまにか横に立っていたパチユリー様が心配そうに私の顔を覗き込む。

私はパチユリー様に一言大丈夫だと伝えると、軽く灰を払って暖炉から出た。

「ハイはっ。」

『漏れ鍋』って名前のパブよ。ダイアゴン横丁の入り口になってるの」

パチユリー様は私の手を引いてまっすぐ店の中庭へと向かうと、レンガでできた壁を指で小突く。

その瞬間、レンガの壁が大きなアーチ状に変化した。

アーチの向こうには活気に満ちた商店街が広がっている。

「ようこそ魔法界へ。ほどほどに歓迎するわ」

パチユリー様は私の顔を見ながらどこか嬉しそうにそう言った。

「ホグワーツで必要になる程度の魔法具なら大体ここで手に入るわ。まあ今回は特殊な物は買う必要はないけどね。取り敢えず制服はマダムマルキンの洋装店がいいと思う。この辺では一番腕がいいし」

あれこれと説明を聞きながら、パチュリー様と共に歩いていく。

私はパチュリー様の説明に耳を傾けながらダイアゴン横丁の店を眺めていた。

大小様々な鍋が並べられている店や、マントの店、高級箒の専門店などもあるようだ。

「……箒。パチュリー様、箒なんて何に使うのでしょうか？」

「あれは空を飛ぶために使うのよ。基本的に魔法使いは箒がないと空が飛べないの」

「パチュリー様は箒なしで空を飛べますよね？」

「私はほら、天才だから」

まあ、そんなパチュリー様に飛び方を習った私も、身体一つで空を飛ぶことが出来るのだが。

数分も歩かないうちに目当ての店に着いたらしく、パチュリー様の足が止まる。

「ここね。マダムマルキンの洋装店。私は利用したことないけど……まあホグワーツの生徒の殆どはここで制服を買うわけだし、外れではないと思うわよ」

店に入るとずんぐりした魔女が愛想よく出迎えてくれた。

彼女がマダム・マルキンらしい。

私が制服を買いたいという旨を伝えると、それ以外の何の用でこの店に来るつてのよと笑われた。

ジョークなのだろうが、少し反応に困ってしまった。

だが彼女はそんなことはお構いなしと言わんばかりに私を踏台の上に立たせ、ロープの丈を合わせながらピンで留め始める。

数分もしないうちに採寸は終わり、あとは仕立てるだけとなった。

仕立て終わるまでには少々時間がかかるらしく、私たちは杖を買うために洋装店を後にする。

「杖ですか……杖なんて何に使うんです？ チンカラホイみたいな？」

「あながち間違っちゃいないわ。魔法使いは杖がないと魔法が使えないのよ」

パチュリー様が魔法を使うとき、杖を使っているところを見たことはない。

本を開いて呪文を詠唱したり、手を振ったりしているところは見たことがあるが。

そのことを詳しく聞いてみると、どうやら魔力を引き出す方法が根本的に違うらしい。

杖を使う魔法も使えないことはないが、基本的に魔導書や指輪を用いる魔法の下位互

換になってしまふ為、使用することがないのだという。

でも杖を使う魔法の方が簡単で扱いやすいらしい。

呪文とコツ、杖の振りさえ覚えていれば複雑な原理を理解していなくても魔力さえあれば魔法が発動することもあるとのことだ。

そのような話をしているうちに、目的の店に到着した。

店の扉には剥がれかかった金色の文字で『オリバンダーの店——紀元前三八二年創業高級杖メーカー』と書いてある。

中に入ると店の奥の方で呼び鈴がなり、店の奥からソソソと一人の老人が出てきた。

彼がオリバンダーなのだろう。

「いらつしやいませ。今年からホグワーツですか？」

「はい、それで杖を買いに来たのですが……」

「どちらが杖腕かな？」

パチュリー様の方を見ると、利き腕のことだと教えてくれた。

私はそれを聞いて右手を差し出す。

まあ利き腕ではないのだが。

パチュリー様は利き腕を出さなかった私を見て少々呆れたような表情をしたが、止め

ないところを見るに反対の腕でも問題はないようだ。

オリバンダーは差し出した私の右腕を隅から隅まで計測しながら、杖に関する話を色々としてくれた。

「この杖は、強力な魔力を持った物を芯に使っております。ユニコーンのたてがみや不死鳥の尾羽、ドラゴンの心臓の琴線。そして素材1つ1つにも違いがあり、同じ杖は1本たりともないわけじゃ。故に、他の魔法使いの杖を使っても、決して自分の杖ほどの力が出せない」

計測が終わるとオリバンダーは柵の間を飛び回って杖が入っているであろう箱を取り出し始める。

そして着せ替え人形のように私に杖を持たせたり取り上げたりして一人でさんざん悩み、そして勝手に納得した。

「アカミノキと吸血馬のたてがみ。二十五センチ。やや硬い。貴方にはこれがぴったりなのじゃの」

結局私の杖はあるべきところに落ち着いたようなものだった。

血で染めたような赤く光沢のある杖。

ブラッドウッドの名に恥じない非常に綺麗な血の色だ。

「吸血馬のたてがみ……珍しいわね。ユニコーンじゃないのね」

パチュリー様がオリバンダーの説明を聞いて小さく呟く。

「先代が作成した杖でございますからの」

「なるほど」

「何にしても気に入りました。不思議と手に馴染みますし……」

「杖に選ばれるというのはそういうことじゃ」

杖に選ばれる。

なるほど、私はそれを聞いて妙に納得してしまった。

つまりこれは単なる道具などではないということなのだろう。

その後もオリバンダーは杖に関するうんちくを話していたようだが、私は自分の杖に気を取られて話半分程度にしか聞いていなかった。

オリバンダーにお礼を言い、私たちは店を後にする。

パチュリー様の話ではこれで買い物は終わりのはずだ。

洋装店で仕立てあがった制服を受け取り、来た道に戻る。

その道すがら、パチュリー様からこの世界の魔法と注意点について教えてもらった。

まず、この世界の魔法使いは基本的に箒無しでは飛べないらしい。

故に緊急時以外、箒無しで空を飛ぶというのが一つ。

次に言われたのは私が持っている能力に関する注意だった。

「貴方が持っている『時間を操る程度の能力』。わかっているとは思いますが、その能力はこの世界でも希少なもののよ。時間を巻き戻す魔法具とかもあるけど、魔法省が厳重に管理している。いい？ 学校でその能力を使うなどは言わないけど、能力がバレルような使い方はしないようにね」

そう、パチュリー様の言う通り、私は時間を操る能力を持っている。

時間を進めたり止めたり、制限はあるが戻すこともできなくはない。

私がこの能力に気が付いたのは物心がついて少し経った頃だった。

その後自分の能力を理解するために私は時間に関する科学的な学術書を読み漁った。

どんなに自分がいるところが魔術的な環境だとしても、根底にあるのはやはり科学なのだと思おう。

パチュリー様の手助けもあり、能力が発現してから数年も経たないうちに私は自分の能力で出来ること、出来ないことを理解した。

「やはりこの能力はおかしいのでしょうか。異端である魔法の世界でも更に異端……」

「あら？ 紅魔館に勤めている人間の言うセリフではないわよ？ それ」

パチュリー様は優しく微笑むと私の頭を撫でる。

私はそれが妙にむず痒く、そして温かかった。

「それで、九月の頭に入學だったかしら。もうあと数日じゃない。準備は済ませたの？」
いつも通りの深夜の紅茶の時間。

お嬢様はティーカップに紅茶を注いでいる私にそう聞いた。

「ええ、数日前に。思った以上にパチュリー様が教材を持っていらして、結局新しく買い足したのは制服と杖ぐらいです。」

「杖？　ピリカピリラポポリナペルトみたいなの？」

「はい、リーテ・ラトバリタ・ウルス・アリアロス・ボール・ネトリーヌです」

そう言つて二人でクスクスと笑い合う。

私はお嬢様に紅茶をお出しすると、メイド服のポケットから杖を取り出した。

「これを振るうと魔法が使えるらしいんですけど、私にはさっぱりで」

お嬢様は紅茶を一口飲んだ後、私が差し出した杖を手取る。

そしてくるくると指の間を回しながら眺めるとクスリと笑つた。

「私の分身のような杖ね。いい趣味しているわ。貴方の入学祝いに、少し能力を掛けてあげる」

はい、とお嬢様が杖を返してくる。

もう能力を掛け終わったのだろうか。

私の不思議そうな顔を見て察したのか、お嬢様が説明をしてくれた。

「これはパチエからの受け売りなんだけど、魔法使いが使う杖っていうのは使用者に忠誠心を抱くそうよ。その忠誠心っていうのは決闘などで杖を奪われると相手に移ってしまうものなのだけれど、この杖はどれだけ決闘を繰り返しても忠誠心は貴方から移らないわ」

「それはまた……一体どうしてなのでしょう？」

お嬢様はクスリと笑う。

「答えは簡単。電話の親機子機みたいなものね。私は今この杖に私に忠誠を尽くすように命令を掛けた。その杖を、貴方に渡すわ。貴方が私に対する忠誠心を失わない限り、私に忠誠を誓ったこの杖は貴方を仲間と認知していつも以上の力を貴方に与えてくれるでしょう。主は独りで十分。貴方が主になる必要はないわ」

「つまり、この杖は私の従者ではなく、同僚であり友であると……そういうことですね」
「まあそういうことね。杖自体は私に忠誠を尽くしているから、私がこの杖を使って決闘でもしない限り忠誠心が他の誰かに移ることはないってわけ。紅茶おかわり」
つまりこの杖はお嬢様の所有物ということだ。

その事実があるだけで、急にこの杖が愛おしくなる。

大切にしないではいけない。

私は杖を内ポケットに仕舞うと、お嬢様のティーカップに紅茶をお注ぎした。

ついに来た出発の日。

私は準備を整えると、ホグワーツで必要な全ての荷物を持って玄関ホールに来ていた。

全ての荷物と言っても、荷物は全て小さな鞆に収めている。

私の時間を操る能力は、そのまま空間を弄るのに使える。

いわば日本の漫画にある四次元ポケットのようなものだ。

玄関ホールには私の見送りに、パチユリー様、お嬢様、美鈴さんの姿があった。

「咲夜ちゃん！ 頑張つて！ 寂しかったら手紙送っていいからね」

「フクロウは貴方が撃ち落としたでしょうに」

「おげうさま、そんな昔のことを掘り返さなくても……」

美鈴さんとお嬢様がいつもの調子で言い争いを始める。

私はその光景を目に焼き付けると、改めてお嬢様の方に向き直った。

「では、行ってまいります。御不自由をお掛けしますが、どうかお許しください」

そう言つて私は深々とお辞儀をする。

次の瞬間三つの手のひらで頭を叩かれた。

私が不思議そうに頭を上げると、妙に頼もしい笑顔の三人が私の顔を見ていた。

「うぬぼれ過ぎですよ、咲夜ちゃん。メイド長としての私の実力、よく知っているでしょう？」

「咲夜、大きく成長してらっしやい」

「分からないことがあつたら手紙を頂戴。魔法に関しては魔法界の中でも私が一番だと自負しているぐらいだしね」

私はその光景を心に刻み、もう一度頭を下げると玄関の大きな扉を押し開く。

「行つてきます！」

そして新しい世界への一步を踏み出した。

人目につかないように時間を止めて空を飛び、キングス・クロス駅へと降り立った私はトイレの個室の中で時間停止を解除する。

ホグワーツ行きの列車が発車するのは『九と四分の三番線』ホームらしい。

普通に考えたらそんな中途半端なホームなど存在するわけがないが、どうやら少々細工がしてあるようだ。

私はパチュリー様の指示通り九番線と十番線の間壁の壁に向かって歩く。

そのままだと壁に激突して終わりだが、私の体はレンガをすり抜け、その先へと辿り着く。

私の目の前には紅色の蒸気機関車が止まっていた。

ホームの上の掲示板に『ホグワーツ行特急十一時発』と書かれているところを見ると、この列車で間違いないようだ。

駅のホームは人でごった返しており、私と同年ぐらいの子供から少し年上の子供まで様々な人間がそれぞれの時間を刻んでいた。

私は一人そそくさと客室の中に入り、空いているコンパートメントの席に座る。

このコンパートメントの広さを見る限り、荷物を小さくしてきて正解だったようだ。私は懐中時計を取り出すと、竜頭を押し込み時間を確認する。

今の時刻は十時半。

列車が発するまでにまだ少し時間がある。

なら本でも読もうかと鞆を開けた次の瞬間、コンパートメントの扉がノックされた。「あの……相席いいかしら？」

声の主は私と同じぐらいの歳の女の子だ。

髪は茶色である程度の長さがあり、あまり手入れをしていないのか全体的にぼさぼさとしている。

「構わないわ。一人で使うにはこのコンパートメントは広すぎるし」

私が少女を受け入れると、少女は不安そうな顔を一変させてコンパートメントの中に入ってきた。

私はその少女が席に座るのを見届け、先程鞆から取り出した本を読み始める。

『And then there were none』アガサ・クリステイの名作だ。

「私はハーマイオニー・グレンジャー。みんなからはハーマイオニーって呼ばれることが多いわ」

さつき入ってきた少女が自己紹介をしてくれる。

そういったやり取りは少々面倒くさいと感じたが、私も自己紹介を返した。

「そう、よろしくね。ハーマイオニー。私は十六夜咲夜よ。咲夜でいいわ」

「イザヨイサクヤ？ 変わった名前ね。どんなスペルなの？」

やはりこの名前は英語圏では珍しいようだ。

私の顔つきはどちらかと言うと西洋人寄りなので日常生活で不自由することはなかったが、名前だけは別だ。

私は鞆の中から手帳を取り出し、万年筆で名前の漢字とその読みの英語を書いていく。

「『十六夜』十六にナイト、夜ね。咲は花が咲くの咲。最後の『夜』もナイトよ」
「ということは東洋人？ 見えないわね」

「よく言われるわ」

一通りのやり取りが終わると、私もグレンジャーも本を読み始める。

グレンジャーが読んでいる本をちらりと見ると、魔法の学術書みたいなものだった。

こんなところでまで勉強しなくともいいだろうと思うが、まあそのへんはそれぞれの感性だろう。

読書を始めてしばらく時間が経っただろうか。

またコンパートメントの扉が叩かれる。

今度はグレンジャーが立ち上がり、扉を開けた。

「あの……席空いてる？ どこもかしこも一杯で……」

顔を出したのは何処か鈍臭そうな少年だった。

私は懐中時計をチラリと確認するが、既に十一時は過ぎている。

つまりこの少年は時間ギリギリで列車に乗り込んだということだろう。

「咲夜。そういうことらしいんだけど……いい？」

「まだ席は空いてるわ」

グレンジャーは私の了承を得ると、その少年をコンパートメントの中に招き入れる。少年はおずおずといった様子で席に座った。

ふと窓の外を見ると、いつの間にか列車は進み始めている。

「……僕はネビル。ネビル・ロングボトム」

少年は恐る恐る私とグレンジャーの顔色を窺うように自己紹介をした。

私もそれに習って自己紹介を返し、本の世界に戻る。

ロングボトムはやることがないのかむず痒そうに席に座っていた。

「あれ？ あれえ？ トレバーがいない！」

列車が走り出してから少し時間が経った頃。

ロングボトムのすつとんきような叫び声で、私は現実の世界に引き戻された。

「どうしたの？」

グレンジャーが興味深々といった雰囲気でロングボトムを問いただしている。

話を聞いている限りだと、どうやらロングボトムのペットのカエルが逃げ出したようだ。

「それは大変！　どうにかしなくちゃね」

グレンジャーは全て任せろと言わんばかりに胸を張る。

ただグレンジャーの態度を見る限りだと、どうもグレンジャーは本気でロングボトムを心配しているわけではないように見える。

カエル探しに自分の魔法が使えないかどうか考えているのではないだろうか。

どうやらグレンジャーはそういう性格の女の子らしい。

自己主張が激しいと言えはいいのだろうか。

「取り敢えず、手分けして探しましょう」

ロングボトムとグレンジャーの間で話が進み、結局はありきたりな結論に落ち着いた。

私まで付き合う必要はまるでないのだが、そこは世間体というものもある。

付き合わざるをえないだろう。

「そういうことなら私はこのコンパートメント内を詳しく調べるわ。ネビルとハーマイオニーは後ろの客車をお願い。私もこのコンパートメント内を調べ終わったらそつちとは反対方面に探しに行くから」

自分が一番楽になるように自ら探す範囲を指定する。

一見私が一番探す範囲が広いように感じるかも知れないが、一人なら自由に手を抜く

ことが出来る。

二人は私の意見に賛同したのか、列車の進行方向とは逆に向かって通路を歩いていった。

私は二人が居なくなったコンパートメント内で時間を止める。

そして鞆から制服を取り出すと、着替えを始めた。

グレンジャーが入ってきた時に気がついたが、列車がホグワーツに到着する前に着替えを済ませておかないといけならしい。

グレンジャー一人なら普通に着替えればいいが、ロングボトムが入ってきた時、どのようにその話を切り出そうか迷っていたのだ。

着替えを終わらせた私は一通り室内を探した後、一応形だけでも探すかとコンパートメントから外に出る。

列車の通路は狭く、歩きやすいとは言えない。

私は適当に通路を端まで歩くと、そのまま引き返した。

その道中でヒョロリとした金髪の少年が大柄の少年二人を引き連れて歩いているのに出くわす。

「ねえ貴方。ヒキガエルを見なかったかしら」

私がカエルのことを聞くと金髪の少年は軽く鼻を鳴らした。

「君もネビルのカエルを探しているのかい？ あいつのドジのせいで失くしたんだ。探す必要なんてないさ。僕たちのコンパートメント内でお菓子でも食べないか？」

「あら、ナンパかしら。大胆ね。いいわよ、一緒に過ごさせてもらおうかしら」

カエル探しが面倒になっていた私は、その金髪の少年の誘いに乗ることにした。

カエル探しよりかは幾分有意義な時間が過ごせることを期待しよう。

少年のコンパートメントはそう遠くなかった。

私が適当に椅子に座ると、大柄の少年がお菓子を勧めてくる。

馬鹿そうに見える二人だが、女性を尊重する精神ぐらいは持ち合わせているらしい。

「僕はドラコだ。ドラコ・マルフォイ。こっちがクラブでこっちがゴイルだ」

マルフォイは簡単に自己紹介をすると、何かを期待するようにこちらを見てくる。

その態度がどうも初々しく、私はクスリと笑ってしまった。

だが、その笑いのせいで妙な誤解を与えてしまったようで、マルフォイが少々顔を強

張らせる。

「君も変な名前だつて笑うのかい？」

「いえ、そうではないわ。名前が変わってるのは私も同じようなものよ。私の名前は十

六夜咲夜。笑ったのは貴方の態度が初々しかったから。よろしくね。ドラコ」

「イザヨイ・サクヤ……ファーストネームがイザヨイっていうのか？」

「こつちの言い方に直すとサクヤ・イザヨイね。咲夜つて呼んでくれればいいわ」
「確かに変わった名前だ。……東洋人かな？ 君は純血の家の子かい？」

純潔？ この場合は純血だろうか。

「どういう意味なのか大体想像はつくが、適当なことを言わない方がいいだろう。
「こつちの文化には詳しくなくて。どういう意味かしら？」

「両親が魔法使いかどうかってことさ」

なるほど、そういう意味か。

私は事実をありのままに伝えた。

「分からないわ。私、両親つて知らないもの」

私ははぐらかすように真実を伝える。

マルフォイはそんな私の返答に少しバツの悪そうな顔をした。

「おや、ごめん。でもきつと君は純血だと僕は思うよ」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

そういつて私はニッコリと笑顔を作る。

少々差別的な思想は持っているが、相手のことを気遣える良い人間ではないか。

私はその後もマルフォイに魔法界のことを聞いたり、何故か出血しているゴイルの指の怪我を処置したりと、カエル探しよりは有意義な時間を過ごした。

一時間程が経過した頃だろうか。

「あー！ こんなところにいた。探したのよ咲夜！」

そんな大声が聞こえてコンパートメントのドアがバンッと開かれる。

ドアの向こうには少々不機嫌になっているグレンジャーが立っていた。

「なんでこんなところで呑気にお菓子食べてるのよ！ カエル探しはどうしたの？！」

グレンジャーは私の様子が気に入らないらしい。

「そうは言うけどね、ハーマイオニー。別にカエルは私の所有物じゃないし、私が何処で何しようとする自由だと思うんだけど、その辺貴方はどのように考えるのかしら」

「それは、そうだけど……」

私が反論するとグレンジャーは口籠る。

どうもグレンジャーは直感で物事をとらえて論理的に考えるタイプの人間のようなだ。完璧主義の嫌いもあるのかも知れない。

「それに、カエル探しよりここでお菓子食べてる方が楽しいわ。そうでしょう？ ドラコ」

「勿論だとも。それに僕がもし家族からヒキガエルなんかペットに貰ったとしたら、

さっさと失くしてしまいたいぐらいだしね」

「あら、家族は大事にね」

「呆れた。随分と自己中心的な考え方なこと！」

グレンジャーは苛立ちというか怒りというか、色々なものを沸々と煮えたぎらせているようだった。

少し苛めすぎただろうか。

「それじゃあ、ドラコ。私はそろそろ自分のコンパートメントの中に戻るわ。誘ってくれてありがとう」

私は席を立つと、グレンジャーの手を取ってコンパートメントの外に引つ張り出した。

そしてマルフォイに手を振ると、自分たちのコンパートメント目指して通路を歩き始める。

「それで結局、ネビルのカエルは見つかったの？」

「よく言うわ。……結局見つからなかったの。でも途中で思わぬ収穫があったわ。ハリー・ポッターに会ったのよ！ 同い年だとは知っていたけど、まさか同じ学校になるなんて思わなかったわ！」

グレンジャーは興奮したように話を続けていくが、私はハリー・ポッターという人間

を知らない。

彼女がここまで興奮するのだ。

ハリー・ポッターとはモデルか何かなのだろうか。

「貴方、生き残った男の子を知らないの？ 赤子の頃、例のあの人を撃退した有名人よ」
意気揚々と語るグレンジャーに私は肩を竦める。

「私、こっちの世界のことは詳しくないのよ」

「そうなの？ じゃあ貴方もマグル生まれなのね！ 私もなの。ホグワーツから手紙が来たとき心底びつくりしたわ。まさか私が魔法使いだなんて。それから手当たり次第に本を読み漁って色々勉強したの。勿論、教科書も全部暗記したわ」

「マグル生まれ？」

「両親が魔法使いじゃない普通の人間って意味。貴方もそうなんでしょう？」

なるほど、マルフォイが言っていた純血云々というのは、こういうマグル生まれの魔法使いがいるからという話なのだろう。

どこの世界にも純血主義とはあるものだ。

「私、両親いないから」

私がそう告げるとグレンジャーもバツの悪い表情を浮かべる。

「あ……、ごめんなさい。私、その……」

「本人よりショック受けてどうするのよ。これは分からない感覚だとは思うけど、初めから親がいないのが当たり前だと、親なんてどうでもよくなるものよ。会ったことのない人間なんて生きていても死んでいても変わらないわ。観測して初めて意味を持つのよ」

グレンジャーは気まづくなつたのか、話題を変えようとハリー・ポッターや例のあの人に関する話をし始めた。

その話はコンパートメントに戻ってからも続き、列車がホグワーツに着くまで途切れることはなかった。

組み分けとか、授業とか、箸とか

「イツチ年生！ イツチ年生はこっち！ さあついて来いよ」

人間を縦に二倍、横に五倍ほど広げたような大男が右手にランタンを持ち、新入生の案内をしている。

グレンジャーの話によると、彼の名前はハグリッドというらしい。

ホグワーツの敷地内にある森の番人をしているそうだ。

私たちはハグリッドの案内で四人ずつボートに乗りこみ、湖を渡ってホグワーツ城を目指す。

グレンジャーとロングボトムは先に乗っていた男の子二人を含めた四人で先に出てしまったようで、すでに姿が見えない。

私は適当にボートに一人乗って待っていると、マルフォイとクラブ、ゴイルがボートへ乗り込んできた。

「みんな乗ったか？ よーし、では、進めえー」

ハグリッドの掛け声で一斉にボートが動き出す。

私は自分の鞆の重さでボートが転覆しないよう少し位置を調整すると、マルフォイに

話しかけた。

「さっきの女の子、マグル生まれなんですって。貴方の言っていたことが少し理解できた気がするわ」

「そうか、あのやかましいのはやっぱり穢れた血だったのか。やっぱり魔法使いは純血じゃないと」

マルフォイは自分の持論が認められたのが嬉しいのか、しきりに頷く。

私自身純血主義に傾倒するつもりはさらさらないが、家柄の判断材料にするぐらいには使えるだろう。

話を聞く限りだと、マルフォイの家は相当のお金持ちらしい。

「ただ、ハリー・ポッターつてのには少々がっかりさせられたな。あそこまで人の話に耳を傾けない性格だとは思わなかった。横にいるウィーズリー家の赤ネズミも生意気だ。純血にもああいうのがいるから、気を付けないとな」

マルフォイは得意げに話すが、すぐさま私がその言葉を否定する。

「みんな自分の中に自分だけの価値観を持っているものよ。他人に何と言われようが、簡単に揺らぐものじゃない。それは貴方も同じでしょう？」

マルフォイは私の言葉に少々驚いたような顔をしたが、すぐに言葉を返した。

「面白い考え方だね、咲夜。確かに他人の言葉なんかで僕の中の価値観は揺らがない。

誇り高きマルフォイ家の長男として、僕は僕であり続けるさ」

それは本気で言っているのか見栄を張っているだけなのかは分からないが、その歳でそんな傲慢なことを言ってもかっこよくはない。

まあ、微笑ましいとは思うが。

私たちを乗せたボートは鳶のカーテンをくぐり、その陰に隠れている崖の洞窟へと進んでいく。

洞窟の奥へと進むうちに少々肌寒くなり、私はローブを手繰り寄せた。

城の真下と思われる位置まで進むと、船着き場のような場所に到着する。

私はローブに袖を通すと、鞆を右手に立ち上がった。

「さて、到着だ。咲夜、足元に気を付けて」

一足先にボートから降りたマルフォイがいつちよまえにエスコートしてくれる。

余計なお世話ではあるが、一応素直にその好意を受け取ることにした。

「ホイ！ お前さん。これ、おまえのヒキガエルかい？」

「トレバー！」

後ろでそのような声が聞こえてきた。

どうやらロングボトムのカエルは無事に見つかったようだ。

ハグリッドは一度ぐるりと周囲を見渡し、声を張り上げる。

「みんな、いるか？ おまえさん、ちゃんとカエルは持つとるな？」

ハグリッドはズカズカと船着場にある階段を上っていく。

私たちがその後を追うと、城の裏手だと思われる場所に出た。

ハグリッドは手に持ったランタンで城の壁を照らし、裏口と思われる扉の前で立ち止まる。

そして大きなこぶしを振り上げ、城の扉を三回ノックした。

すると扉がゆつくりと開き、中からエメラルド色のローブを着た背の高い黒髪の魔女が現れる。

厳しそうな顔をしているが、ああいうのは身内には甘いということが多い。

孫を溺愛するおばあちゃんみたいな、そんな雰囲気を感じている女性だ。

「マクゴナガル教授、イツチ年生のみなさんです」

「ご苦労様、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう」

ハグリッドは魔女のことをマクゴナガル教授と呼んだ。

ということは手紙の送り主は彼女ということだろう。

確か役職は副校長だったか。

マクゴナガル先生はそのまま地下の扉を大きく開け、私たちをホグワーツ城に招き入れた。

入った先は玄関ホールで、紅魔館の玄関ホールと同じぐらい大きく、歴史を感じる。ただやはり城そのものが大きいだけはあり、天井はどこまで続くか分からないほど高かった。

マクゴナガル先生に引率され、私たち一年生は大広間横の小さな空き部屋に通される。

狭い部屋に詰め込まれて不安なのか、生徒たちはしきりに辺りをきよろきよろと見回しながら互いに寄り添って立っていた。

「ホグワーツへの入学おめでとうございます。新入生歓迎会がまもなく始まりますが、大広間の席に着く前に皆さんが入る寮を決めなくてはなりません。寮の組み分けはとも大事な儀式です」

組み分けがあるのか。

寮に入るとは聞いていたが、その寮を分けないといけないほど生徒数が多いとは思っていません。

私のそんな様子に感づいたのか、マルフォイが我が物顔で説明をしてくれる。

「寮は四つあってね。スリザリン、レイブンクロー、ハッフルパフ、グリフィンドール。スリザリンは純血や家柄のいい魔法使いが多い。レイブンクローは頭のいい魔法使いが多いらしい。その点ハッフルパフは馬鹿でドジなのが多いって聞くな。多分あのネ

ビルつてのはハツフルパフだ」

「その話を聞く限りじゃ、ハツフルパフには入りたくないわね。それで、グリフィンドールっていうのは何か特色があるの？」

「勇敢な魔法使いが多いっていう話だけど、父上の話では、正義感の強いウザい奴が多いらしいよ。君なら多分レイブンクローじゃないかな？」

「あら、おだてても何も出ないわよ。貴方は……スリザリンね」

「その通り、僕の家系は全員がスリザリンに入っている。僕もそうだろうね」

「クラッブやゴイルはハツフルパフに行きそうだけど……」

私がそう言うと、マルフォイは少し困ったように表情を曇らせた。

「あー……。その可能性を否定できないのがつらいな。でもクラッブもゴイルも両親はスリザリンの出だ。多分スリザリンに入れるだろう。君もスリザリンだといいね」

「確かに、そうかもね」

私は一旦マルフォイ達と別れてハーマイオニーの方に移動する。

ハーマイオニーたちも先ほどまで私たちがしていたような会話をしていた。

「僕絶対ハツフルパフだよ……。ドジで、間抜けだし」

ロングボトムが今にも気絶しそうな声で呟いている。

「あら、自覚があったのね」

私が軽口を叩くと、ロングボトムが縋るような視線を向けてきた。

グレンジャーはしきりに何かを呟いているが、心を落ち着かせる呪文か何かだろうか。

私が近づいていくと、それに気が付いたのかグレンジャーは視線を上げる。

「あ、咲夜。咲夜は試験でどんな呪文が出ると思う？」

ハーマイオニーの余りにも的外れな問いに私は少し頭が痛くなった。

「呪文は出ないと思うわよ。私みたいの一つも魔法が使えない子も多いと思うし。寮が性格で分かれるのだとしたら、その人の本質を問うような心理的な質問をされるとか、そんなところでしょうね」

「そ、それもそうよね。私ったら少し緊張して我を忘れてたみたい。咲夜は寮は何処に入りたいと思ってるの？」

「どこでもいいわ。大切なのは何処の寮に入るかじゃなくて、そこで何を学ぶかでしょう？ マクゴナガル先生も言っていたけど、何処の寮にも輝かしい歴史があつて、偉大な魔法使いが卒業したらしいじゃない」

それはそうだけど……とグレンジャーは口籠る。

やはり不安は拭い切れないようだ。

私はグレンジャーの近くにいる赤色の髪の子と眼鏡の少年に目を留める。

マルフォイが赤ネズミと言っていたのは、あの少年のことだろうか。

「貴方がウィーズリー？　ということとは……そっちがポッターね」

私の声を聞いて赤毛の男の子が驚いたように顔を上げる。

いきなり、それも自分の名前から呼ばれたのがそんなにも驚くことだったようだ。

ポッターだと思わしき男の子が口を開く。

「えつと、そういう君は？」

「別に私は誰でもないわ。ごめんなさいね。知人に貴方たちの特徴を聞いていたから、ちよつと確かめたくて」

それを聞いて赤毛の子がほつと息をつく。

「そうなんだ。僕はロン。それでこっちがハリー。知人から聞いたって、まさかハーマイオニーじゃないよね？」

「いえ、マルフォイよ」

ハーマイオニーと呟いた瞬間のウィーズリーはしかめっ面だったが、私がマルフォイの名前を出した瞬間、苦虫を噛み潰したような形相へと変わった。

「悪いことは言わないからさ、あいつとは付き合わない方がいいぜ？　差別主義者で、性格悪いし。何よりマルフォイ家のお坊ちゃんだ」

差別主義者とはよく言えたものだ。

「ふふっ。貴方、言ってることがマルフォイと変わらないって自覚ある？ あいつとは付き合わない方がいい。家で人を判断する。面白いわね。魔法族って」

私がそういうと、ウィーズリーは顔を真っ赤にする。

だが、言い返しては来なかった。

反論が思いつかなかったのだろう。

「でも、ありがとう。大丈夫よ。付き合う人間は自分で判断できるわ」

ここまで意識して無視してきたが、ポッターは不満そうな顔をしていた。

やはり自分が特別だという意識があるのだろうか。

自分が蚊帳の外なのが少々不満らしい。

まあ、十一歳の男子なんてそんなものだろう。

「そ、それはともかく。君は試験はどんな感じだと思う？ 僕の兄が凄く痛いって言っ

てただけど……多分冗談だよな」

「もしそうなら今頃もつと不満の声が聞こえてくるはずよ。悪い噂っていうのは伝達す

る速度が速いから」

「さあ、一列になって。ついてきてください」

世間話をしているうちに、マクゴナガル先生が声を張り上げる。

それに従い、私たちは一列で大広間に入ってしまった。

大広間の中は大きなテーブルが縦に四つ並んでおり、既に上級生が座っている。

私たちは机と垂直に、上級生の方を向くように並ばされた。

私たちの後ろには教職員の机があり、そこに教員らしき人間が座っている。

私もほかの生徒と同じようにキョロキョロと周囲を見渡していると、マクゴナガル先生が私たちの前に椅子を一つ置く。

そして、続いてその上にポロポロで継ぎ接ぎだらけの汚らしい帽子が置かれた。

一体何だと思ったが、次の瞬間帽子がいきなり歌いだした。

歌の内容自体は至って平凡な物だった。

要約すると各寮の紹介のようなものだ。

その歌を聞く限り、マルフォイの言っていたことはあながち間違いではなかったらしい。

グリフィンドールは勇氣、ハッフルパフは優しく忠実、レイブンクローは賢く、スリザリンは狡猾で狡賢いが真の友を得る。

この歌だけ聞くと、何処に入っても自分の寮に自信が持てるだろう。

歌が終わると同時に、大広間にいたほぼ全員が拍手喝采した。

その様子を見る限り、どうやらこの歌は毎年の恒例行事のようだ。

「僕たちはただ帽子を被ればいいんだ！」

何処からかそんなひそひそ声が聞こえてくるが、果たして本当にそうだろうかと私は内心怪しむ。

あの帽子、私たちの頭の中にある思想を読み取り、組み分けをしていくのだろう。精神に対する不法侵入もいいところだ。

あまり気が進むものではない。

そんな私の気持ちとは関係なく、マクゴナガル先生が説明を始める。

「名前を呼ばれたら帽子を被って椅子に座り、組み分けを受けてください」

そしてラストネームが『A』の子から順番に名前が呼ばれ始めた。

一番目の子はハンナ・アボットという少女だ。

少々慌て気味に前に出て、目が隠れるほど帽子を深々と被り椅子に腰かける。

一瞬の静寂のあと、帽子が大きな声でハツフルパフと叫んだ。

そこから先は流れ作業のように組み分けが進んでいく。

私は十六夜だから『I』、順番は真ん中辺りだろうか。

「イザヨイ・サクヤ」

考えているうちに私の名前が呼ばれた。

私は何も考えずに組み分け帽子を被り、椅子に座る。

「ふむ、また難しい子が入ってきたな……」

組み分け帽子の声だろうか、何かを悩んでいるようだ。

「頭もいい。忠誠心も高い。そして、素質だけ見れば圧倒的にスリザリンじゃな」

「どこでもいいわ。さっさと決めて頂戴」

「ほう、どこでもよいのかね？ ならばここはあえて……グリフィンドールツ!!」

どういう判断基準なのだろうか。

なんにしても私の寮はグリフィンドールに決まった。

帽子を脱ぎ、私はグリフィンドールの机へと進んでいく。

そして適当にグレンジャーの横に座った。

昼に知り合った人間では、グレンジャー、ネビル、ポッター、ウィーズリーが私と同じくグリフィンドールで、マルフォイ、クラブ、ゴイルは本人たちの予想通りスリザリンだった。

マルフォイに関しては帽子が頭に触れるか触れないかというギリギリのところでは帽子が寮名を叫んでいたぐらいだ。

そのあと校長の適当な挨拶があり、すぐに宴会に移る。

私は料理を楽しみつつも、周囲の状況を観察した。

皆一心不乱に料理を食べている。

まあ、確かに料理は美味しい。

館で出す料理と遜色ないと言えるだろう。

だが、そう考えているのもつかの間。

グレンジャーが私に声を掛けてきた。

「咲夜もグリフィンドールなのね。ちよつと意外だね。貴方は絶対レイブンクロードと
思っていたのに」

「完全に性格だけで分けているわけじゃないと思うわよ。じゃないと寮に入る新入生の
人数が偏ってしまうじゃない」

そのような話をしてしていると、上級生でこの寮の監督生のパーシーが会話に入つてく
る。

「確かに、完全に均等に割られるわけじゃないけど、大きく差が出ることもない。ああ、
自己紹介がまだだったね。僕はパーシー。パーシー・ウィーズリーだ。この寮の監督生
をしている」

「十六夜咲夜よ」

「ハーマイオニー・グレンジャーです。なんにしても私は授業が楽しみだわ。ほんとに、
早く始めればいいのに……。勉強することがいっぱいあるんですもの。私、特に変身術

に興味があるの。ほら、何かを他の物に変えるっていう術。勿論、凄く難しいって言われているけど……」

グレンジャーの疑問に監督生が胸を張ってこたえる。

「始めは小さなものから試すんだよ。マツチを針に変えるとか、そこから段々と形や大きさを変えていくんだ」

「変身術……変化の術のようなものかしら？　そこまで難しいとは思えないけど」

私がそう言うと、監督生がとんでもないと言わんばかりに声を張り上げる。

「ところがどっこい。これが中々うまくいかないんだ。フクロウ試験でも、みんな苦労するんだよ」

なるほど。それを聞いて私は一つの悪戯を思いつく。

「でも、ほら」

私は食事前のナイフを手にとると、それを近くの壁に向かって投げける。

そのナイフは真つ直ぐ壁に向かって飛んでいき、刺さった瞬間ポスターサイズの額付きの絵画に変わった。

その光景を見て、監督生とグレンジャーは目を丸くする。

もつとも、これは変身術ではない。

ナイフが刺さった瞬間に時間を止めナイフを抜き取り、ナイフが刺さっていた場所に

遠くから移動させてきた絵画を掛けただけだ。

でも傍から見たらナイフが絵画になったように見えるだろう。

「ね？」

私はグレンジャーの方を見てニコリと微笑む。

グレンジャーは何が起きたのか理解出来ないと言わんばかりに口をパクパクさせていた。

「凄いな。三年生……いや四年生レベルの変身術じゃないか？」

監督生はベーコンの塊を齧りながら拍手を始める。

私は少し得意げになりながら膝の上に隠したナイフを持ち直した。

ただ、誤算だったのはその光景を見ていたのが二人だけじゃなかったということぐらいか。

いきなり拍手喝采を受ける。

どうやら近くにいた十数人に見られていたらしく、いきなり目立ってしまった。

しかもその騒ぎを聞きつけてマクゴナガル先生まで登場する始末。

私は食事の時間が終わるまで適当に誤魔化すしかなかった。

監督生の指示でグリフィンドール生は談話室に入っていく。

各寮の談話室の入り口はそれぞれ隠してあり、合言葉を知らないと中に入ることができないらしい。

グリフィンドールの談話室は八階の廊下の突き当りにある太った婦人の肖像画の裏に入口があるようだ。

談話室で一通りの寮内での注意事項を聞いた後、監督生の指示で男子女子に分かれてそれぞれの部屋に入っていく。

部屋は五人部屋で、私はグレンジャーとその他数人の生徒と同じ部屋だった。

みんなベッドの横に大荷物が積んであるが、私はベッドの上に鞆が一つ置いてあるだけだ。

「咲夜、貴方荷物それだけなの？ もしかしてそれも魔法？」

「まあ、そんなところかしら。荷物の量で言えば貴方とそんなに変わらないわ」

私は鞆から寝間着を取り出すと、時間を止めて着替える。

そして着ていた制服をハンガーにかけ、鞆に仕舞い込むと時間停止を解いた。

そこまでして、気が付く。

恐る恐る横を見るとグレンジャーが口に手を当てて驚いていた。

「そ、それも変身術？ 咲夜つてもう既に高度な魔法が使えるのね」

パチュリー様に言われたことを思い出す。

確かに、私が元から持っている術は、この世界では酷く目立つ物らしい。

「そんなことはないわ。貴方寝ぼけてない？」

グレンジャーを適当に誤魔化し、鞆をポケットに仕舞うとベッドに潜り込む。

「お休み、ハーマイオニー。明日から貴方の楽しみになっている授業が始まるわけだし、早く寝た方がいいわよ」

それで納得したのか、グレンジャーはそそくさと着替えてベッドに潜り込む。

そういう素直なところは純粹に好意を持つことができる。

私はひとまず安心して、まどろみに身を任せた。

目を瞑って数分もしないうちに私は夢の中に吸い込まれていく。

授業が始まって数日が経った。

授業の内容は様々で、杖を振って呪文を唱えるだけという授業は思った以上に少ない。
い。

天文学や薬草学、魔法史などは杖を振らない代表的な授業と言えるだろう。

逆に変身術や呪文学などは実際に杖を振る呪文を唱えるのが主な授業のようだ。

今日は初めての変身術の授業なのだが、楽しみと言っていただけあって、グレンジャーのテンションが朝から高い。

「今日はずいに変身術の授業よ！ 私昨日の夜よく眠れなかったもの！」

と言つてはいるが、昨日の夜誰よりも早く寝ていたのはグレンジャーだと私は知っている。

「咲夜は変身術が得意なのでしよう！」

「それは誤解よ。あれはマジックのようなものだって説明したじゃない」

もつとも、ナイフを絵画に化けさせることぐらいはパチュリー様の英才教育によつてできなくはない。

物の偽装はメイドの嗜みだ。

授業が始まると同時にマクゴナガル先生が入ってくる。

そして全員が着席するなりいきなり説教から授業を始めた。

「変身術はホグワーツで学ぶ魔法の中で最も複雑で危険なものの一つです。いい加減な態度で私の授業を受ける生徒は教室を出て行ってもらいますし、二度とクラスには戻れないと思つてください。初めに警告しておきます」

それから先生は机を豚に変え、また机に戻して見せた。

その様子を見てグレンジャーはこの上なく興奮していたが、私からしたら大したことをしているようには見えなかったのでどう反応していいか少々迷つてしまう。

パチュリー様なら、ホグワーツ城そのものを高層ビルに変身させるぐらいはやっての

けるだろう。

その後は変身術の基本的な原理と魔術的な仕組み、術の扱い方などをノートにまとめる時間になった。

私は魔術的な仕組みを写しながら頭の中でその式を科学的な式に変換して、ノートに書き加えていく。

使っている言葉が違うだけで、やっていることは魔法も科学も変わらないと予想を立ててはいたが、おおむね予想通りだった。

例えば質量の違うものへ変身させる魔法では、魔力を別の空間に飛ばしたりどこから持って来たりしなくてはならないらしいのだが、原子量の操作と次元間の物質移動と言い換えたら科学的に説明できる。

大元にある原理が多少違ったりはするが、その辺は新しい記号や用語を足すことで補完することができた。

ノートを取り終わった後は一人一人にマッチ棒が配られ、それを針に変える練習が始まる。

私はマッチ棒を掌で覆い隠し、袖の下にある裁縫用の針と入れ替えた。

だがこれではただのマジックだ。

もう少し真面目にやるかと、私は懐から杖を取り出した。

「咲夜の杖って、綺麗ね。そんな色もあるんだ」

グレンジャーが私の杖を見て言葉を漏らす。

それには私も同感だ。

この杖の色は深く、人を魅了する赤色だと思う。

「それはいいとして、ハーマイオニーは変化させることができた？」

「もう少しわかりそう。銀色にはなるんだけど、やっぱり形そのものを変えようとする
と結構難しいみたい」

「そんなもののねえ」

私は机の上に置いてある針に向かって杖を振るう。

何も起こらない。

当たり前だ、私は杖を振っただけ。

これで何かが起こるはずがない。

私は先ほどノートに書いた変形式や、物質の移動式も組み入れて頭の中でマッチが針
に変形する理論を組み上げる。

そして意識を集中させて杖を振った。

ムクムクとマッチ棒が動き出し、細く鋭い針へと変わっていく。

私は変化の終わった針を手に取りその手触りや針の尖り具合を確かめた。

糸を通す穴が若干歪んでいる。

手で触った感覚では、少し全体的に湾曲しているようだ。

針の尖り具合は及第点といったところだろうか。

私は針を机の上に放り投げ、グレンジャーに向けて肩をすくめた。

「まあ、この程度よ。お粗末なものでしょ?」

「それ、どうやったの? 私、色しか変わらないんだけど……」

改めてグレンジャーの針をみる。

いや、どちらかというときと銀色のマツチ棒といったところか。

「さっき散々ノートに写したじゃない。理論は暗記だけじゃなく、理解しないとイケないわよ。変形させるための魔法の原理をもう少し意識したほうがいいわ」

それを聞いてグレンジャーは一度マツチの変身を解くと、再度杖を振るう。

グレンジャーのマツチ棒はスルリと変化し、既製品と変わらないような見事な裁縫針になっていた。

「お見事。私より全然上手いじゃない」

「これ……本当に私が?」

グレンジャーは自分が変化させた針を手に取り、本当に変化したのか確かめるように触っている。

そして次の瞬間、満面の笑みに変わった。

「あら、変身術って自分の顔を変身させる魔術なのね」

私が茶化すと、グレンジャーは恥ずかしそうに顔を伏せる。

そしてもっと練習が必要ねと言わんばかりに何度も何度も変身の魔法を繰り返した。

その直向きに頑張る姿勢に素直に感動しつつ、私は先ほどの反省を生かしながらマツチ棒に魔法をかける。

先ほどは糸を通す穴の精度が悪く、また針全体の湾曲が起こっていた。

空間を尺として変化させるとどうしても周りの重力に影響されて少し曲がってしまったようなのだ。

今度はノートの上にマツチ棒を置き、魔法をかける。

先ほど至らなかつた箇所を意識を持っていき、詳しい造形を脳内で思い浮かべそれを魔力に変換させていく。

すると今度は完璧な裁縫針へと姿を変えた。

結局この授業のうちにマツチ棒を少しでも変化させられたのは私とグレンジャーだけだったようでマクゴナガル先生に思いのほか褒められてしまった。

その後も闇の魔術に対する防衛術の授業が有ったりと様々な授業があったが、印象に残ったのは魔法薬学だろうか。

魔法薬学の授業は地下牢で行われた。

ここは城の中にある他の教室よりも肌寒く、いたるところにホルマリン漬けの動物のガラス瓶が置いてあつたりする。

紅魔館の地下も似たり寄つたりなところがあるが、学生が利用する分こつちのほうが幾分か健全だろう。

魔法薬学の授業の教師はスネイプという比較的若い教師だった。

だが、顔は老け顔で、あまり若いという印象はない。

そしてどうもグリフィン・ドール生を目の敵にしているような態度を取り、スリザリンを多大に鼻屑していた。

「ハリー・ポッター、我らが新しいスターだね」

授業の初めは出席を取るところから入つたのだが、その時点から先生はポッターを弄っている。

魔法薬学はスリザリンとの合同授業だったのだが、その様子を見てマルフォイたちはクスクスと笑っていた。

こういう機会にしか話をする機会がないので、私はマルフォイの前の席に座っている。

その様子をグレンジャーは呆れたように見ていたが、厄介な奴を抑えつけてくれるな

らまあいいかといった表情だった。

「スネイプ先生はスリザリンの寮監でね。ご鼻肩にしてくれる」

マルフォイがささやき声でそう教えてくれる。

マルフォイ自身グリフィンドールの生徒を小馬鹿にする態度をよく取るのだが、不思議なことに私には殆どそのような態度を取らない。

「でも、それに甘えちゃ駄目よ。他人からの好意は素直に受けるものだけど、頼りすぎると自分を墮落させるわ」

「そ、そうだよ。ははは。気を付けるよ」

そんな話をしているうちに出席の確認が終わり、魔法薬学の授業が始まった。

「このクラスでは魔法薬調剤の絶妙な科学と、美しき芸術性を学ぶ」

私はスネイプ先生のその言葉を聞いて少し驚いていた。

まさか魔法を教える教員の口から、科学という言葉が出てくるとは思わなかったからだ。

「このクラスでは杖を振り回すようなバカげたことはやらん。それが魔法なのかと思う者が多いかも知れないが、沸々と揺れる大釜、立ち上る湯気、人の中をめぐる液体の繊細な力は人の心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力となる。君たちがこの技術を真に理解することは期待していない。私が教えるのは名声を瓶詰にし、栄光を醸造し、地獄の窯に

さえ蓋をする方法である。もつとも、私がこれまでに教えてきたウスノ口たちより君たちがマシだったらの話だが」

スネイプ先生の大演説の後、クラスは一層静まり返った。

胡散臭い見た目の先生だが、人の目を引き付ける才能はあるようだ。

グレンジャーのほうに視線を向けると、今すぐにも自分がウスノ口じゃないと証明したいかのようにウズウズと身を乗り出すようにしている。

「ポッターッ!!」

急にスネイプ先生が声を張り上げる。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えるとな何になるか?」

ポッターは完全に目を点にしていて、横にいるウィーズリーと顔を見合わせている。

その様子を見てこれ見よがしにグレンジャーが天高くまつすぐと手を挙げた。

「わかりません」

おずおずとハリーが答える。

「ハッ、有名なだけではどうにもならんらしいな」

スネイプ先生はその答えをせせら笑うと同時に軽口を叩く。

どうやらグレンジャーの天にも昇りそうな挙手は無視されたようだった。

マルフォイたちはその様子を見てクツクツと笑いを堪えている。

まあ、今先生はポッターに質問を飛ばしているのだ。

いわばグレンジャーの挙手は勝手な行為と言える。

無視されても文句は言えない。

「ポッター。もう一つ聞こう。ベゾール石を見つけて来いと言われたら、何処を探すかね」

これは意地悪な問題だ。

確かベゾール石は石と名前がついてはいるがヤギの胃袋から取れるものだったと記憶している。

グレンジャーが懲りずに、椅子に座ったまま挙げられる限界の高さまで手を伸ばす。

あそこまで必死だと逆に尊敬できるといふものだ。

ついに堪えきれなくなったのか、マルフォイたちは体をよじって笑い始める。

まあ、これは仕方がない。

こんなのポッターやグレンジャーのことが嫌いじゃなくても笑えて来る状況だ。

「わかりません」

ポッターは素直にそう答えた。

「クラスに来る前に教科書を開いてみようとは思わなかったわけだな、ポッター。え？」
その言葉を聞いて、私は少しギクリとする。

教科書など授業が始まるまで開いたことすらなかったからだ。

「では、マルフォイの横に座っている……、なんだったか、そう十六夜よ。モンクスフー
ドとウルフスベーンとの違いは何だね？」

いきなりこちらに話を振られて、内心ドキリとする。

後ろで笑っていたマルフォイの笑い声もぴたりと止んだ。

そちらの方を見ると少々心配そうな顔をしてマルフォイがこちらを見ていた。

正直に答えると、全く分らない。

そもそもその二つがどのような物なのかすら見当がつかなかった。

なので、少々チートを使うことにする。

私は時間を止めて教科書を机の上に取り出す。

そしてペラペラとページをめくり、その二つについて記述してある項目を探した。

三十分程教科書を眺め、私はモンクスフードとウルフスベーンに関する記述を見つ
ける。

どうやらこの二つは同じ植物のようで、ようはトリカブトのこのようだ。

私は教科書を先ほどあった場所にしまうと、時間を止めたときとミリ単位で同じ体勢
をとり、服を整える。

そして時間停止を解除した。

「モンクスフードとウルフスベーンは同じ植物で別名アコナイトとも言います。要はトリカブトのことです」

「トリカブトの毒性は？」

「主成分はジテルペン系アルカイドのアコニチンで、他にメサコニチン、アコニン、ヒバコニチンなども含まれます。全草に毒を含みますが、特に根に強いですね。摂取すると嘔吐や呼吸困難、臓器不全を引き起こし最悪の場合死に至ることもあります。毒の強さは地域や収穫時期によつてこととなります」

「素晴らしい。グリフィンドールにも優秀な生徒はいるようだ」

トリカブトのことだと分かれば後はこつちのものだ。

私を使うナイフにも毒として塗ることがあるぐらい有名な毒草で、性質はよく知っている。

「少しでも教科書を読んではいればこれぐらいは答えられるだろうに。それとグレンジャー、座りなさい」

スネイプがぴしやりと言いつつ。

私がマルフォイの方を見ると、安堵のような尊敬のような、よくわからない表情を浮かべていた。

「流石、と言つておこうか。やっぱり君は頭がいいな。グリフィンドールに置いておく

には勿体ないぐらいだよ」

「教科書を読んだだけよ。買い被り過ぎ」

私は少し照れを隠すようにマルフォイの広いおでこをぺちりと叩く。

まあ本当に教科書を読んだだけだ。

そのあと、スネイプ先生は先ほどポッターに出した問題の答えを説明していく。

そして最後の「何故今のをノートに書きとらないのかね？」という一言で全員が一斉にノートを取り出し、先ほどの問題の答えを必死に思い出しながら書いていった。

その後も魔法薬の授業は続き、スネイプ先生は生徒を二人ずつ組にしておできを治す簡単な薬を調合させた。

私は調査の前に時間を止めて教科書を読み込む。

先ほどあったスネイプ先生の簡単な説明と注意も参考しながら頭の中で化学式を構築していく。

この魔法薬学は、魔法を使わない。

ということは全て理屈立てて説明できるとのことだ。

頭の中に作り方と反応式をたたき込み、時間停止を解除する。

スネイプ先生の指示で私はマルフォイと組むことになった。

慎重に干イラクサを計り、蛇の牙を砕いていく。

角ナメクジの茹で方をマルフォイに指示し、自分は鍋をかき混ぜていった。

マルフォイは知識は少ないが順応性は高いらしく、私の指示通り完璧に角ナメクジを茹で上げ、スネイプ先生にとっても褒められていた。

少々褒め方が大げさすぎる気もするが、みんなの話ではスネイプ先生はマルフォイを可愛がっているようなので、これぐらいで普通なのだろう。

そんな師弟の微笑ましいやり取りを観察していると、地下牢全体に強烈な緑色の煙が上がり蒸気が沸き上がるような音が聞こえてきた。

どうやらロングボトムがペアの男子生徒の大鍋を溶かしてよく分からない鉄塊にしちゃって、薬を溢しちゃったようなのだ。

たちまち他の人間たちは避難したが、ロングボトムだけは大鍋の中身をモロに被ってしまったようで、全身に真っ赤なおできを噴き出している。

「馬鹿者！」

スネイプ先生が怒声を上げ、魔法の杖を一振りする。

するとたちまちこぼれた薬は消え去った。

「大方、大鍋を火から降ろさないうちにヤマアラシの針を入れたんだな？」

説教のせいか痛みのせいか、はたまたその両方か、ロングボトムは泣き出してしまっていた。

「この馬鹿を医務室に連れていけ」

スネイプ先生は呆れたようにペアの男子生徒に言い放つと、怒りの矛先をロングボトムの隣で作業をしていたハリーとロンに向ける。

「ポッター、針を入れてはいけなと何故言わなかった？ 彼が間違えば自分の方がよく見えると考えたな？ 先ほどの無礼な態度と合わせてグリフィンボールは二点減点だ」

先ほどのロングボトムの失敗の時もそうだが、マルフォイは腹が振じ切れるほど笑っている。

その気持ちも分からなくはないが、流石にハリーが可哀想なのと、自分の寮の点数をあまり減らしたくないので助け舟を出すことにした。

「スネイプ先生、ハリー達の大鍋を見てください。ネビルが失敗するしない以前に壊滅的な出来です。ネビルの失敗と比べても良くは見えないでしょう」

その言葉を聞いてハリーがこちらを凄いい形相で睨んでくる。

マルフォイは息が出来ないと言わんばかりに机をバンバンと叩いていた。

「ふむ、十六夜の言うことももつともだ。減点を一点に減らしてやろう」

私の考えを知ってか知らずか、スネイプ先生は嫌らしく笑うと私の思惑通りに減点数を減らしてくれた。

スネイプ先生はようはハリーが惨めになればそれでいいのだ。

減点以外の方法でハリーが惨めになれば、不必要に減点する必要もなくなる。

助け舟も出し終えたので私は自分の鍋に専念する。

マルフォイが茹でた角ナメクジを加え、一定回数混ぜた後、火から降ろす。

その後、マルフォイに花を持たせる為、最後の仕上げをマルフォイに任せる。

マルフォイは慎重に大鍋にヤマアラシの針を入れ、おできを治す薬を完成させた。

結局魔法薬学の授業はスネイプ先生がマルフォイの調合した薬がいかにも優れているかを力説し、スリザリンに五点を与えて終わった。

マルフォイに適当に別れの挨拶をし、荷物を纏めて廊下に出るとグレンジャーが待ち伏せでもしていたかのように私に突っかかってくる。

「貴方、仮にもグリフィンドール生でしょう!?! なんでマルフォイやスネイプ、スリザリンの味方をするのよ!!」

グレンジャーは凄いい形相で私に捲し立てた。

「あら、私が助け舟を出さなければ、グリフィンドールは一点多く減点されてたのよ?」

感謝こそされど、恨まれる覚えはないわね。それと、スネイプ『先生』よ」

「それは結果論でしょ!? それに、スリザリンと合同授業の時は大体マルフォイの近くにいる」

「逆に聞くわ。寮に拘りすぎてない? マルフォイとは合同授業の時ぐらいしか顔を合わせることもないのだし。逆に聞くけど、寮がスリザリンだからってそこまで敵意むき出しにする必要性はあるの?」

もしその必要性があるというのなら、それは純血主義と言っていることは変わらな
い。

「それは……」

やはり口籠る。

「さて、今日はもう授業がないわけだし。談話室に戻りましょう? それとも図書室に寄って行く?」

私はグレンジャーの横に並ぶと、手を取って歩き出す。

グレンジャーは私のそんな行為に頭を抱えた。

「貴方の場合、ドライなのかフレンドリーなのか、時々分からなくなるわ」

「まだ会って数日じゃない。数日で理解できるほど、私の世界は単純じゃないわ」

その言葉に、グレンジャーは諦めたように私と共に歩き始めた。

授業が始まって数週間ほど経った頃だろうか。

ホグワーツの生活にも慣れ、大体の授業の勝手もわかってきた。

どうやら私はそこそこ優秀なようだ。

グレンジャーや一つ上のレイブンクローのチョウ・チャンと並んでホグワーツ低学年の三大才女と言われているらしい。

確かにグレンジャーは頭がいい。

いや、努力家というべきだろう。

人一倍勉強に取り組み、人一倍真剣に授業を受けている。

チョウ・チャンは分からないが、レイブンクロー生ということは頭はいいのだろう。

私自身、自分が頭がいいという自覚はない。

授業の半分は居眠りをしてしているし、談話室で必死になって勉強しているわけでもない。
い。

少々だらけ過ぎている気はするが。

「咲夜は勉強してないように見えて頭がいいからね。私、貴方が自主的に勉強しているところを見たことがないもの。なのに先生から受けた問題には的確で正確な答えを返すし。……教科書丸暗記でもしてるわけ？」

談話室で必死になって本を読んでいるグレンジャーが愚痴るように私に聞く。

私なんて必死に勉強しているのにと言わんばかりだ。

「それを言うなら貴方でしょ？ 教科書どころか参考書も全部暗記してそうだし。今だって頑張っているわ。それは何の本？」

私が聞くと、グレンジャーは呆れたように返事を返した。

「貴方、談話室の掲示板見てないの？ 今日から飛行訓練の授業があるのよ。他の教科は事前に勉強しておけばどうとでもなるけど、筈での飛行だけはそうもいかないわ」

「空を飛ぶなんて簡単よ。移動範囲が上に広がるだけじゃない」

「理屈ではそうだけど……って、咲夜だって飛んだ事ないでしょうに」

「そうかもね」

私は掲示板のほうをちらりと見る。

予定表を見ると、どうやら次の時間が飛行訓練のようだ。

確かに耳を澄ますと、色んな生徒が筈や飛行といった単語を用いて会話をしていた。「案ずるより産むが易しよ」

「なにそれ？」

「日本のことわざ。あれこれ考えるよりやってみた方が分かりやすく簡単ってこと」

私は座っていたソファから立ち上がるとぐーと伸びをする。

「さて、行きましょう。空を飛ぶのって、気持ちがいいと思うわよ」

グレンジャーを連れて校庭に出ると、外はよく晴れた絶好の飛行日和だった。

本場ならば箒など使わず久しぶりにのんびりと空中散歩を楽しみたいところだが、悪目立ちするのも良くないだろう。

集場所に歩いて行くとマルフォイやスリザリン生たちの姿が見えた。

そうか、合同授業なのか。

今朝の朝食時、ポッターの機嫌が妙に悪かった原因は、合同授業のせいだろう。

そして私は何故かポッターとウィーズリーに嫌われている。

どうやら初回の魔法薬学の件以降、私はマルフォイの一味とされているようだ。

確かに魔法薬学の時はいつもマルフォイとペアを組まされている。

だが私が自主的にマルフォイとペアになろうとしているわけじゃない。

確かに近くには座るが、いつも私とマルフォイがペアになれと言うのはスネイプ先生だ。

グレンジャー曰く、「咲夜と組ませれば、マルフォイを褒めやすいし、スリザリンにも

点を入れやすいでしょ？」とのことだ。

ようはマルフォイの成績を上げるために優秀らしい私と組ませて効率よくスリザリンに点を入れていると言いたいのだろう。

確かに、私は魔法薬学の授業で点を貰ったことはない。

どんなに上手に調合しても、褒められるのはマルフォイで、点が入るのはスリザリンだ。

なるほど、ポッターに嫌われるのもわかる気がする。

「やあ咲夜、今日の魔法薬学ぶりだね」

私の存在に気が付いたのか、マルフォイが私に話しかけてくる。

それと同時に隣にいたグレンジャーがルームメイトであるパチルの方へ走っていった。

意地でもマルフォイと顔を合わせたくないらしい。

「お久しぶりというほど時間が経ったわけじゃないでしょう？ ドラコ。今朝の朝食の時は随分陽気にクイディッチについて語っていたけど、そんなに面白いスポーツなの？」

私の問いに待つてましたと言わんばかりにマルフォイは胸を張った。

「勿論、魔法界で一番ホットなスポーツだよ。僕の一番得意なスポーツでもある。本当

に一年生がチームに入れないのが残念だ」

「そう。飛行訓練が楽しみね。期待してていいかしら？」

「勿論だとも。それはそうと咲夜、君はいつも穢れた血と一緒にいるけど……あまりああいうのと関わらないほうがいい。友達は選ぶべきだ」

マルフォイはそう言うが、別にアレは友達ではない。

「彼女は別に友達じゃないわ。ただ彼女私が居ないといつも一人なのだもの。あまりにも哀れだわ。慈しみの心を持つのも大切だと思うの。一応ルームメイトだしね」

それを聞いてマルフォイの後ろにいるクラップとゴイルが声を上げて笑う。

まあ友達じゃないといえば目の前にいるマルフォイも変わらないのだが。

吸血鬼の従者である私が、人間の子供と友達になれるはずはないのだ。

「何をボヤボヤしているんですか！ みんな箒の傍に立って！ さあ早く!!」

私が感傷に浸っていると、後ろからそんな声が聞こえてくる。

どうやらこの授業の講師であるマダム・フーチ先生が来たらしい。

生徒たちは慌てて箒の横に走っていく。

私もそれに続き、箒の横に立った。

「右手を箒の上に突き出して！ そして、『上がれ』と言う」

どうやら授業は箒を手にとるところから始めるらしい。

随分初歩的だが、重要なことなのだろう。

みんなが次々と上がれと唱え箒を手に収めようとする。

私はしばらく他の生徒の様子を観察することにした。

マルフォイは自信ありげに自慢していただけあって、一発で箒をキャッチしている。

そして意外なことにポッターも一発で箒を上げ、キャッチしていた。

グレンジャーは彼女の予想が的中した結果になったのか、ころりと転がっただけで上げるまでに時間を要しているようだった。

半数以上が箒を手に収めたのを見届け、そろそろかと私も箒に手をかざす。

すると何も言わないうちに箒は手の中に納まった。

なるほど、自らの魔力で浮かすわけではない。

箒自体に相当な魔力が蓄積されているらしく、まるで意思があるような挙動だ。

大多数が箒を浮かすことに成功すると、フーチ先生は次に箒の端から滑り落ちないように跨る方法を実演し、生徒たちの列の間を回って箒の握り方を指導していった。

少々驚くことに、マルフォイはずっと間違った握り方をしていたらしい。

マルフォイのミスが指摘されたのがとてつもなく嬉しかったのか、ポッターとウィーズリーは終始ニヤニヤしていた。

私はいとうと、マルフォイやグレンジャー以上に握り方、跨り方について指導を受け

た。

どうやら予習をしていなかった分、私の跨り方は素人以下だったようだ。

「さあ、私が笛を吹いたら地面を強く蹴るんですよ。箒はしっかり持って、数メートル浮上して、前かがみになってすぐ下りてきてください。笛を吹いたらですよ？　一、二の……」

フーチ先生が笛を吹く直前、物凄い速度で浮上するロングボトムが私の視界の端に映った。

どうやら焦って先に地面を蹴ってしまったらしい。

「いっくらー！　戻ってきなさいッ！」

先生の鋭い怒声をよそに、ロングボトムは暴れ馬にでも乗っているように天高く飛び上がる、箒から落ち地面に真つ逆さまに落下した。

地面までの距離は軽く二十メートル以上。

頭から落ちていた為、そのまま地面に激突したら即死だろう。

二十メートルの高さから地面に激突するまで約二秒。

フーチ先生が杖を取りだそうとしているが、多分間に合わない。

半分ほど落ちた。

あと一秒経たずにロングボトムは死ぬ。

「面倒くさいわね」

私は仕方がなしに時間を止めた。

箒を投げ捨てて体一つで宙に浮かび、落下途中で固まっているロングボトムの服をつまむ。

そしてそのまま引きずるように地面に下した。

投げ捨てた箒を取りに戻り、先ほどと全く同じ体勢を取る。

全ての準備が整うと、私は時間停止を解除した。

「うわああああああああ……あ、あ？」

ロングボトムは絶叫するが、思ったほどの衝撃がないことを不思議がつてキョロキョロと周囲を見渡す。

フーチ先生も何が起こったか分からないといった顔をしていた。

「い、いいたい、痛い！ 腕が折れてる……」

どうやらロングボトムは箒から落ちた時に変な風到手首を振ってしまったよううで、手首を脱臼したようだ。

フーチ先生はその声を聞いて慌ててロングボトムに駆け寄っていく。

「怪我は……、腕が折れているだけね。運がいいわ貴方。さあさあ、対した怪我ではないわネビル。大丈夫、立って」

フーチ先生がネビルを抱き起す。

そして他の生徒の方に向き直った。

「私がこの子を医務室に連れていきますから、その間誰も箒に乗るんじゃないやありませんよ。さもないとクイディッチの『ク』を言う前にホグワーツから出て行ってもらいますからね」

フーチ先生はそう言い残すとショックでぼんやりとしているロングボトムを連れて城の方に歩いて行つた。

二人が見えなくなつた途端、マルフォイが大声で笑いだす。

「見たかあの間抜け面。死ななかつたのが奇跡だよ」

その言葉を聞いて他のスリザリン生もはやし立てる。

「やめなよマルフォイ」

それを聞き、私のルームメイトであるパチルが咎めた。

「へえ、ロングボトムの肩を持つのか？ パーバティったら、まさか貴方がチビデブの泣き虫小僧に気があるなんて知らなかつたわ」

パチルの忠告にマルフォイの取り巻きの一人であるパーキンソンが冷やかしを入れる。

「ご覧よ！ ロングボトムのばあさんが送ってきた馬鹿玉だ」

マルフォイが草むらの中から何かを拾い上げた。
あれは何だろうか。

マルフォイの話を聞く限り、ロングボトムの持ち物らしいが。
そのガラス玉のようなものは太陽の光を受けてキラキラと輝いていた。

「マルフォイ、こつちへ渡してもらおう」

ポッターがマルフォイに対し声を上げる。

その様子を見て、多くの生徒が二人に注目した。

「嫌だね、ロングボトム自身に見つけさせる」

次の瞬間、マルフォイが颯爽と箒に跨り、ひらりと飛び上がった。

なるほど、傲慢していただけはあり、確かに手慣れた様子だ。

「ここまで取りに来いよポッター」

マルフォイがチラリと私を見て、声高々にそう言う。

その挑発に乗るつもりなのか、ポッターが箒を手を取った。

「ダメよ！ フーチ先生が言ってたでしょ。動いちゃいけないわ。私たちみんなが迷惑するのよ！」

グレンジャーが叫ぶ。

だがポッターは忠告を無視して箒に跨り地面を強く蹴った。

「へえ」

私は少し感心する。

ポッター自身は初めて空を飛ぶはずなのだが、その様子は実に様になっていた。

私は周囲で騒ぐ生徒を気にも留めずにその様子を見守る。

「こつちへ渡せよ。でないと箒から突き落としてやる！」

マルフォイに向き合ったポッターが挑発を返す。

マルフォイはその様子に少々呆然としていたが、すぐにいつもの調子を取り戻した。

「取れるものなら取ってみな」

そう叫んでマルフォイはガラス玉を空中に放り投げる。

驚いたことに、ポッターはそのガラス玉をキャッチするつもりらしい。

一気に急降下してガラス玉を追いかける。

私はまた時間を止める準備をした。

だが私の予想に反してポッターは見事ガラス玉をキャッチし、地面に軟着陸する。

グリフィン・ドール生が沸き立ち、拍手喝采でポッターを囲んだ。

「ハリー・ポッターアツ!!」

だがその喝采はすぐに止むことになる。

マクゴナガル先生が血相を変えて走ってきたのだ。

「まさか……こんなことはホグワーツで一度も……」

マクゴナガル先生は言葉も出ないといった感じでポッターに歩み寄る。

「よくもまあ、こんなことを。首の骨を折っていたかもしれないのに……」

「先生、ハリーが悪いんじゃないんです」

「おだまりなさいミス・パチル」

「でも……、マルフォイが……」

「くだいですよ。ミスター・ウィーズリー。ポッター、さあ一緒にいらつしやい」

マクゴナガル先生は聞く耳持たずという態度で急ぎ足で城に向かって歩き出す。

ポッターはまるで足に鉛でもつけているかのようにトボトボと先生の後をついていった。

どうやら、退学になるかと思っているようである。

マルフォイもポッターと同じことを思ったのか、勝ち誇ったようににやっていた。

その後、フーチ先生が帰ってきて何事もなかったかのように授業が再開される。

マルフォイとポッターが起こした珍事件のおかげで、ロングボトムが不自然に着地したことは目立たなかった。

「不幸な事故がありましたでしたが私の指示にきちんと従って、手順を踏めばあのようなことにはなりません。おや、ポッターがいらないようですが？」

フーチ先生はきよろきよろと校庭を見渡し、首をかしげる。

その様子を見てマルフォイが嫌味たっぷりに答えた。

「マクゴナガル先生に連れていかれました」

「副校長に？ まあいいでしょう。さあ、授業を続けますよ」

その後の授業は何の問題もなく進んでいった。

先生の合図で飛び上がり、ゆっくりと降りる。

そして慣れている生徒は先生の監視のもと、久しぶりの大空に羽を伸ばしていた。

半ば自由時間のようになってしまうている状況下で、グレンジャーが駆け寄ってくる。

予想はつくが、ポッターのことだろう。

「彼、大丈夫かしら？ 退学になってしまふんじゃ……」

まさか聡明なグレンジャーまでそのような心配をしているとは思わなかった。

勘違いをしているグレンジャーに私の見解を伝える。

「まさか。マクゴナガル先生はフーチ先生の「空を飛ぶな」との指示は聞いてない筈よ。

それに、空を勝手に飛んだぐらいで退学になるのだとしたら、ウィーズリーの双子なんてとつくの昔に退学になっているわ」

「そ、それもそうね。少し冷静さを欠いていたわ」

「まあ減点ぐらいはされるかもね」

私は草むらに座り込み空を見上げる。

箒で飛ぶのも悪くなかった。

飛びやすくないが、安定はしている。

自由に飛んでいるマルフォイに軽く手を振ると、マルフォイは機嫌がよさそうに手を振り返してくれた。

決闘とか、ハロウィンとか、友情とか

飛行訓練の授業中にマクゴナガルに連れていかれたポッターだったが、私の予想通り退学にはならなかった。

何かしらの処罰を受けたという話も聞かない。

どうやら本当にお咎め無しだったようだ。

その日の夕食時、大広間でポッターとウィーズリーが興奮したように夢中で何かを話している。

飛行訓練の時の話だろうか。

そこに双子のウィーズリーも加わって何かを楽しそうに話し始めた。

十分程経っただろうか、双子と入れ替わるようにしてマルフォイたちがグリフィンドールのテーブルに姿を見せる。

「ポッター、最後の食事かい？ マグルのところに帰る汽車にはいつ乗るんだい？」

マルフォイの挑発にポッターが冷ややかに返した。

「地上ではやけに元気だね。小さなお友達と自慢の家庭教師もいるしね」

それは取り巻きの二人のことだろうか。

そして家庭教師とは私のことだろうか。

もしそうなのだとしたら、色々解せないが。

マルフォイはそんなポッターの言葉を嘲笑うように笑みを浮かべる。

どうやらマルフォイには何か考えがあるようだ。

「僕独りでいっただって相手になろうじやないか。ご所望なら今夜だつていい。魔法使いの決闘だ。杖だけで相手には触れない。おっと、どうしたんだい？　魔法使いの決闘なんて聞いたこともないんじゃないかい？」

そんなマルフォイの言葉を聞いてポッターが少し困った顔をしたが、隣にいたウィーズリーが咄嗟に口を挟んだ。

「勿論あるさ。僕が介添人をする。そっちは誰だい？」

「クラップだ。真夜中でいいね？　トロフィー室にしよう。あそこはいつも鍵が開いてるんでね」

そう言い残しマルフォイはスリザリンのテーブルへと帰っていった。

ポッターはそれを睨みながら見送り、マルフォイの姿が見えなくなつた瞬間慌てたようにウィーズリーに聞く。

「魔法使いの決闘つてなんだい？　君が僕の介添人つてどういうこと？」

「介添人つていうのは、君が死んだら代わりに僕が戦うという意味さ」

ポッターはその言葉を聞いて顔を青ざめさせる。

そんなポッターの様子を見て、ウィーズリーは慌てて付け足した。

「死ぬのは本当の魔法使い同士の本格的な決闘の場合だけだよ。君とマルフォイだったら精々火花をぶつけ合う程度さ。君だって本当にダメージを与えるような魔法なんて使えないだろう？ マルフオイだって同じさ。あいつ、きつと君が断ると思っただよ」

ウィーズリーはそう言うが、ポッターはまだ不安そうである。

「もし僕が杖を振つても何も起こらなかったら？」

「杖なんか捨てちまえ。鼻にパンチでも浴びせてやれよ」

ふむ、実に妥当な意見だ。

「ちよつと失礼」

そんな話を聞いていたのか、グレンジャーが何処からともなく現れる。

私程ではないが、グレンジャーもあの二人から嫌われているみたいだ。

「まったく、ここじゃ落ち着いて食事もできないんですかね？」

そんなウィーズリーの軽口を無視して、グレンジャーはポッターに話しかけた。

「盗み聞きするつもりはなかったんだけど、貴方とマルフォイの話が聞こえちゃったの」
「聞くつもりがあつたんじゃないの？」

「……夜、談話室の外に出るのは絶対ダメ。もし先生方に見つかったら何点減点されるかわかったもんじやないわ。自分勝手もほどほどにしてよね」

飛行訓練の時のことも含めて言っているのだろうか。

だとしたら実に優しい忠告だと言えるだろう。

だがそれをポッターとウィーズリーは突き返す。

「まったく、大きなお世話だよ」

ポッターが呆れたように言う。

「バイバイ」

そして最後にウィーズリーがとどめを刺した。

その様子にグレンジャーは呆れたように肩を竦める。

そして何故か私に意見を求めてきた。

「咲夜からも何か言つてよ！ こんなバカなことでグリフィンドールが減点されるのは、咲夜も避けたいでしょ!？」

「なんだい？ スリザリン野郎も聞き耳を立ててたのか？」

ウィーズリーが勝手に矛先を私に変えてくる。

「野郎じゃないわ。まあ聞いていたのは事実だけど」

しかしスリザリン野郎とは。

ウィーズリーにとって私はマルフォイの腰巾着的な存在らしかった。

「まあ一言言わせてもらえば、あの誘いは限りなく怪しいわね。そんな幼稚な決闘の真似事だったら休み時間にでも校庭でやればいいじゃない。真夜中っていうのが怪しすぎる。マルフォイもそこまで馬鹿じゃないはずよ」

その言葉を聞いて、グレンジャーが「そうよ！」と私の意見に乗っかる。

ポッターも何か考え込んでいるようだ。

だが、そんな私の助言をウィーズリーが台無しにする。

「十六夜咲夜！ この腰巾着め。大方口八丁で決闘に来ないように仕向けて、明日マルフォイがハリーをいびるためのネタ作りをしようとしているんだろ？ 君たちってホント小汚いよな」

その言葉を聞いて、私は逆に素直に感心してしまった。

思い込みが激しい性格ともとれるが、そこまで自分を貫くのも凄と思う。

「あら、その発想はなかったわね。なんにしても、私は忠告したわよ」

私はそう言い残すと、人間三人を無視して夕食の続きを楽しんだ。

その日の夜。

就寝時間を過ぎてても、私は談話室の暖炉の前で本を読んでいた。

読書と言えば聞こえはいいが、そんなに難しい本でもない。

人間の世界で有名な推理小説だ。

やはり、本を読むなら物語に限る。

教科書や辞典はどうも退屈で、知識はつくが面白いものではない。

しばらく談話室で本を読んでいたら、女子寮のほうからグレンジャーが下りてきた。

「あら、貴方も馬鹿二人の監視？」

グレンジャーの問いに、私は本から視線を上げずに答える。

「いえ、本を読んでいただけよ。私はいつも寝たいときに寝るようにしているの。でも、

その言い草からしてハーマイオニーは二人の監視をしにきたのね」

「ええ。消灯後に談話室を抜け出そうなんて絶対ダメ。なんとしてでも食い止めなく

ちゃ」

グレンジャーは鼻息を荒くして私の横に腰かける。

しばらくすると、案の定グレンジャーの言うところの馬鹿二人が男子寮の階段を下り

てきた。

グレンジャーはそんな二人を見て、信じられないと言わんばかりに声を張り上げる。

「ハリー、まさかあなたがこんなことするとは思わなかったわ」

「また君か！ ベッドに戻れよ！」

「本当はあんたのお兄さんに言おうかと思つたのよ？ パーシーに。監督生の彼だつたら絶対に止めてくれそうだしね」

グレンジャーの忠告は、ポッターにとつても鬱陶しいものに聞こえたらしい。

ウィーズリーに自ら「行こう」と声を掛け、太ったレディの肖像画を押し開けた。

だがそれぐらいで諦めるグレンジャーではない。

ウィーズリーに続いて談話室入口の穴によじ登つていく。

三人とも外に出て、談話室の外で言い争いを始めてしまった。

なんというか、呆れたものだ。

私はこれ以上三人の会話に耳を傾けるものめんどくさくなり、三人の声が少し小さくなつたのをいいことに本の世界へと没入することにした。

そのまましばらく本を読み進めたが、もう言い争いの声がしないにも関わらずグレンジャーが戻つてこない。

まさか、二人について行つたのかと少し興味を持ち、肖像画を開け外を覗く。

そこには、三人の姿はなかった。

私は周囲を見渡すために、一度完全に談話室を出て肖像画を閉める。

だがその時、肖像画に軽い違和感を覚えた。

私は少し考え、すぐにその違和感に気が付く。

そう、肖像画の中に太った婦人がいないのだ。

「外出中？　なるほど、グレンジャーは閉め出されちゃったのね。それで仕方なしにポッター達についていったと」

夜のホグワーツは非常に暗いが、私は夜目が利く。

明るすぎるよりも、むしろよく見えるほどだ。

私は肖像画の近くの廊下に水滴がいくつか落ちているのを見つける。

一瞬雨漏りかと思つたが、今日は雨は降っていない。

私は少し考え、最終的に誰かの涙であると結論づけた。

グレンジャーだろうか？

いや、彼女の性格を考えるに、その程度のことではあの二人の前で泣かないだろう。

涙の滴の跡の量から考えて、かなり長い時間ここで泣いていたことがわかる。

だとしたらロングボトムだろうか。

いつも合言葉が覚えられず、肖像画の前で待ちぼうけを喰らっている姿を見たことがある。

きつと消灯時間になつても談話室へ戻れず、ここで一人泣いていたのだろう。

「にしても、今ここにいないことが気がかりね」

ポッター達について行ったのだろうか。

なんにしても、私も談話室に戻るには何処かに行つてしまつた太つた婦人を探さないとならない。

私は周囲に誰もいないことを確認すると、時間を止めた。

広い、広すぎる。

私は時間の止まつたホグワーツを自由に飛びながら、改めてそう思う。

横に広いのはもちろんのこと、縦にも広ければ階段も多い。

うんざりするほど廊下を飛んでいるが、太つた婦人は一向に見つからなかった。

私は一度廊下へ下り、適当な扉をガチャガチャと引つ張る。

やはり鍵が掛かっているようだ。

そんな状況下、私はふと思いつくことがあり、杖を取り出す。

そして扉の鍵に向かつて覚えてた魔法をかけた。

「アロホモラ」

鍵を開ける呪文らしい。

もしこれで本当に鍵が開くなら儲けものだ。

私は再度ドアノブを掴む。

そして軽く引くと簡単に扉は開いた。

「これは便利ね。というか、こういう魔法があるのなら、何故学校側は対策をしないのかしら？」

私は首を傾げながら部屋の中へ入る。

扉の向こうには、大きな可愛らしい三つ首のケルベロスが鎮座していた。

本来は凶暴なのかも知れないが、時間を止めている現在は置物同然だ。

「ペットは外で飼いなさいよ。……いや、もしこの犬が番犬なんだとしたら」

私は犬の後ろに回り込むが、扉があるわけではない。

だったら下かと覗き込んだら、ケルベロスの足の間に隠し扉を発見することができた。

私は隠し扉をこじ開ける。

中は暗く、降りるための梯子などは存在していない。

私は宙に浮きあがると、その穴をゆっくり降りていく。

入っている部屋だとは思えなかったが、好奇心には勝てない。

好奇心は猫も殺すとは言いが、私を殺すことはできるだろうか。下に降りていくと、何やら植物の上に着地する。

流星に時間停止を解除する勇氣はない。

私は植物の上を歩き、通り抜けられそうな隙間を見つけると、肌に触れないように注意しながら器用に体を滑り込ませた。

植物の下に降り立つと、今度は石造りの一本道が現れる。

なんだか初めて紅魔館に来たときの事を思い出した。

小さい頃はよく美鈴さんと一緒に紅魔館を探検したものだ。

私は石造りの道をまっすぐ歩いていく。

その通路の終わりには、まばゆい光に満ちた部屋が待ち構えていた。

天井は非常に高くアーチ状をしている。

そして部屋中に沢山の鍵の体を持った鳥のようなものが浮いていた。

「綺麗ね、私の秘密基地にしようかしら」

私は一旦時間停止を解除するが、鍵の鳥たちが襲い掛かってくることはない。

気を取り直し再度時間を止め、奥へと進むための扉へと手を掛ける。

だが、その扉には案の定鍵が掛かっていた。

「アロホモラ」

取り敢えず先程と同じように開錠呪文を掛け、気を取り直して扉に手を掛けるが、開く様子はない。

「この呪文で開かない扉もあるのね。まあ当然か」

私は改めて部屋を見渡す。

鍵鳥の数は数百はいるだろう。

時間は止まっているので一羽一羽試してもいいが、正直気は進まない。

私は一匹の鍵鳥を手に取り調べる。

鍵の形はそんなに難しくはない。

「これならピッキングしたほうが早いわね」

私は懐から折れ曲がった金属棒……いわゆるピッキングツールを取り出す。

あまり行儀のいい方法だとは思わないが、これで開いたら儲けだ。

開かないだろうという私の予想に反して、十秒程度でカチンと錠が落ちる音が聞こえた。

「あら、不用心。もしかしたら魔法的な鍵が掛かってたのかも知れないけど、時間を止めてたら意味がないのかしら？　でも、それだと鍵開きの呪文が効かなかった理由が分からないし……まあいいか」

私は取り合えず先に進む。

扉を開けた先の部屋は真っ暗だった。

鳥の部屋の光が差し込んでいる為、うつすらと全体像を確認することが出来る。

どうやら、大きなチェス盤のようだった。

手前側に黒、奥には白の駒が鎮座している。

「これは時間停止を解除したらチェスができるってことかしら？」

紅魔館では、よくお嬢様のチェスのお相手をした。

お嬢様は非常にチェスが上手く、勝てた例がなかったが、美鈴さんの話ではお嬢様が強すぎるだけらしい。

「やりたい気持ちはあるけど……時間帯的に時間停止を解除してプレイするのは得策じゃないわね。ケルベロス、変な植物、鍵の鳥ときて次はこれ。どうも侵入者を待ち構える罠のようにも見えるし」

案外あの変わり者の校長の趣味かも知れないが、樂觀視するのは危険だろう。

私は白の駒の横を素通りすると、先へと急いだ。

次の部屋に入ると、そこには一体の巨人のようなものが待ち構えていた。

オークともオーガとも言えないその巨人は、止まった時の中で他の物質と同じように固まっている。

「この豚巨人を見る限り、校長の趣味の部屋ではないわね。何かを撃退する罠と考えま

しよう。さて、進むべきか戻るべきか……」

私は今になって事の重大さを悟る。

生徒がおいそれと入っていい部屋ではないことは確かだ。

だが、やはり好奇心には勝てない。

今まで完全に時間停止によつて罨は封殺できている。

ならこの後も大丈夫だろう。

私は豚巨人の横を通り過ぎると、次の部屋へと入った。

部屋はうつすらと明るく、真ん中に机があるのが見える。

私はその机に歩み寄り、上に置いてあるものを確認した。

形の違う七つの瓶の横に、メモ書きのようなのが置かれている。

私はその紙を取り上げ、中身を読んだ。

「えくと、何々……。これは論理パズルね。多分時間を止めずに踏み込んでいたら閉じ

込められていたのかしら」

私はメモ書きを元の場所に戻して先に進む。

解いてもいいが、閉じ込められてもないのに解く必要はないだろう。

しばらく細い通路を進んでいくと、机が一つ置いてある部屋に出る。

その机の上には何かの包みが置かれていた。

「これは何かしら?」

私は恐る恐るそれに触れる。

慎重にその包みだけ時間停止を解除すると、ゆっくりと持ち上げて包みを開いた。

それは赤く透き通った石だった。

宝石のようにも見えるが、それにしてもカットが雑だ。

「宝探しの景品としては、少々物足りないわね」

私はその石をポケットに突っ込むと、少し戻ってチェスの部屋に転がっている同じぐらいの大きさの石を変身術で宝石のような石そっくりに変え、元あった通りに包み直した。

ちよつとした悪戯心だ。

私は包みを机の上に戻すと、来た道に戻り始める。

そしてケルベロスの廊下の隠し扉を元に戻し、太った婦人探しにいった。

その後無事同じ階、つまり四階の反対側の廊下で太った婦人を見つけると、私は時間停止を解く。

婦人はいきなり声を掛けられたことで少々驚いていたが、私が事情を説明すると快く

談話室の方に向かってくれた。

「さて、こんなところね。それにしてもこの石どうしようかしら。まあ折角の景品だし」

私がぼやいたその時、物凄い勢いで走る複数人の足音が聞こえてくる。

私はそれに驚き時間を止めるのも忘れて物陰に隠れてしまった。

どうやら足音の主はポッター御一行らしい。

ポッター、ウィーズリー、グレンジャーに続いてロングボトムもいる。

私の予想通り涙の主はロングボトムだったらしい。

なんにしても、彼らは足音を忍ばせるといふことはできないのだろうか。

何かに追われているようだったが、あれでは賑やかでは自分たちの居場所を教えているようなものではないか。

彼らはドタバタと私が先ほどこいた廊下に入っていく。

その後すぐにポルターガイストと管理人のフィルチが言い争いをしながら通り過ぎたので、正しい判断だと言えるだろう。

逃げ込んだ廊下のケルベロスが時間が動いていても大人しかかったらだが。

フィルチがポルターガイストに怒り狂って違う方向に走り出した後、血相を変えて四人が部屋から転がり出てきた。

どうやらあの犬は決して大人しいものではなかったらしい。

四人は物凄い勢いで談話室の方向へ走り去って行ってしまった。

「グレンジャーが付いてながら何やっているんだか」

「そんな君は何をやっているんだか？」

いきなり真後ろから声が聞こえる。

私は振り返らずに声の主の目星をつけた。

先ほど言い争いをしてきたポルターガイストのピーブズだろう。

確か生徒に悪戯をしては、その反応を楽しむ性格の悪い奴だったと記憶している。

私自身被害にあったことがないので、どうも印象は薄かった。

「なにしていたと思う？ 確か貴方はピーブズと言ったかしら？」

私は微笑みながら振り向いた。

そこには記憶通りの大口の小男が浮いている。

「そう、僕はみんなの嫌われ者ピーブズだ！ あれれ〜こんなところで一年生がウロウ

ロしているぞ〜？ フィルチにチクっちゃおうかなあ？」

「チクってもいいわよ。私は絶対に捕まらない。貴方の言葉はただの虚言と取られる

わ。オオカミ少年ね」

「随分な自信だねえ。その自信が自身を傷つけるよ……自信だけにナーンチャツテッ！

「ここだッ！ 四階の廊下にまだ一人いるぞッッ!!」
ピーブズが建物中に聞こえるほど大声を張り上げる。

私はその瞬間ピーブズのお腹を貫通し、ピーブズの死角へと入ると、時間を停止させた。

「じゃあね、オオカミ少年さん。いや、オオカミ中年かしら？」

聞こえてないことをいいことにピーブズの背中に好き放題な挨拶をすると、私は宙に浮かび談話室を目指す。

途中でポッター達を追い抜いたが、先に談話室に入っていたほうが都合は良いだろう。

私は廊下の曲がり角の陰で時間停止を解除すると、肖像画に近づき合言葉を唱えた。

「ただいま、ご婦人。『豚の鼻』」

「今度からはこんな時間に出歩いちゃ駄目よ?」

「気を付けます」

太った婦人からの忠告に適当な返事すると、私は談話室の穴によじ登る。

そして先ほどまでと同じように暖炉前のソファに座り、適当に薪を足した。

ワントンポ遅れて、酷く安堵した雰囲気のパッター御一行が談話室に転がり込んでくる。

各々が足をカクカク言わせながらやつとの思いで肘掛け椅子に座り込むと、全員が心ここにあらずといった感じで黙り込んだ。

「お帰り」

四人ともしばらく無言だったが、私がそう声を掛けた瞬間、堰を切ったように捲し立てる。

「あんな怪物を学校に閉じ込めておくなんて！」

「この世に運動不足の犬がいるとしたらまさにアイツだ！」

「貴方たち、犬の足元見なかったの!? 多分あれは番犬だわ！」

「あんな四階の隅で何を守ってるってんだ！」

「隠し扉があつたじゃない！」

と、私の存在も忘れてこの調子だ。

どうやらあのケルベロスに遭遇し、脇目も振らずに逃げ帰ってきたらしい。

グレンジャーは何か思い出したように顔を上げる。

そして後悔するように私の方を見た。

「そうだった……、談話室には咲夜がいるんだったわ。ノックして開けてもらえばよかつたのよ」

今頃そんなことに気が付いたのかと私は少し呆れたが、頭に血が上っているあの状況

下では仕方がないだろう。

「私も閉め出されたうちの一人よ、ハーマイオニー。貴方が帰ってこないから外に出て確認したんだけど、婦人がいなくてね。仕方がないから太った婦人を探してきたってわけ」

「じゃあ太った婦人が帰ってきてたのは貴方のおかげね」

「私が呼びに行かなくてもそのうち戻ってたとは思うけどね」

私は形だけは否定する。

ポッターはそんなことはどうでもいいと言わんばかりに安堵のため息をついた。

私はそんなポッターに、懐中時計の針を確認しながら言う。

「で、この時間で帰ってきたということはマルフォイの罠だったわけね。私の言った通りじゃない。それとも逃げ帰ってきたの？」

ポッターは談話室の掛け時計を確認し、まだそんなに時間が経っていないことに驚くと、何かを確認するように私に質問してきた。

「君の言った通りだったよ。……一つ教えてくれ。君は一体どっちの味方なんだい？」

君はいつも魔法薬学でマルフォイと一緒に授業を受けているし、飛行訓練に入る前の時間や食事の時なんかもそんな感じだろう？」

「そうね。確かに彼とは話をすることは多いわ。でも魔法薬学で一緒のペアになるのは

スネイプ先生が私とマルフォイを組ませたがるからよ。あと、そうね……彼と一緒にいる理由をあげるとするならば……あれかしら。公園を歩く鳩を観察する時のような気持ち」

「鳩？」

「そう、鳩。単純に見てて面白いじゃない。貴方たちと定期的に言い争いを始めるし、正直見てて飽きないわ。それに、私はあまり寮に拘らない性格みたい。相手がスリザリんだろうが殺人鬼だろうが、例のあの人だろうが。面白いならそれでいい。今回のことで、貴方にも興味を持ったぐらいよ。ハリー」

ポッターとウィーズリーは私のその言葉を聞いてぽかんとする。

「じゃ、じゃあグリフィンドールで見ていて面白いのは？」

「一番最初にハーマイオニー、次にそこで気絶しているネビルね」

そう言われて初めて気が付いたかのようにポッター達はロングボトムの方を見た。

ロングボトムは椅子に座ったまま白目を剥いている。

やはり、見ていて面白い。

ポッターがロングボトムに駆け寄り、彼の介護に取り掛かると、今度はウィーズリーが口を開く。

「僕は君がマルフォイのことを好きなんじゃないかと思っただけだ。あ、勿論友

人的な意味でき。それじゃあ変な動物を観察しているようなものだったってことか？」
「笑えるわね。私に友人と呼べる人間はいないわ。これまでも、そして多分これからもね」

その言葉を聞いてグレンジャーの顔色が悪くなる。

今頃になって先ほどの恐怖を感じてきたのだろうか。

「わ、私もう寝るわ。貴方たちもこれに懲りたら大人しく寝ることね。退学になっていたかも知れないのよ！」

グレンジャーは言葉の最後を捲し立てるように言い放つと、足早に女子寮に入っていく。

ポッターはその様子を見て首を傾げていたが、ウィーズリーは私に対して呆れ顔で口を開いた。

「おっどろきー。事実だとしてもさつきのはヘビイだと思ふよ。あいつ、多分咲夜以外に友達いないから」

「ルームメイトとはそれなりに仲がいいわよ」

私はウィーズリーの言いたいことが分からず、自分でもよくわからない返答をしてしまふ。

その後、私たち三人はしばらく無言だったが、何かを考え込んでいたハリーが小さな

声で呟いた。

「グリーンゴッツは何かを隠すには世界で一番安全な場所だ。多分ホグワーツ以外では……」

「ハリー、どうしたんだ？」

ウィーズリーが聞き返すとハグリッドがどうのこうのとポッターは続ける。

私は関係ない話が始まったと思い、女子寮へと上がった。

決闘の夜からしばらくの時が経った十月の末。

大広間で朝食を食べていると夕食用に焼いているパンプキンパイの美味しそうな匂いが漂ってくる。

私の周囲では、今日の夜のハロウィンパーティーの話で持ちきりだった。

やはりこれぐらいの歳の子供は、ハロウィンが楽しみで仕方がないらしい。

私は朝食のトーストにバターを塗りながらチラリとグレンジャーの方を見る。

決闘の夜からグレンジャーとは少し疎遠だ。

私は普段通り接しているのだが、グレンジャーの方から近づいてくることはない。

そして私も積極的に接しているわけではないので、自然と疎遠になっている。

それはこの日の呪文学でも同じだった。

今日の呪文学は皆が楽しみにしていた浮遊魔法だ。

そのせいもあつてか、グリフィンドール生は浮かれ気分で授業に臨んでいる生徒が多い。

呪文学の先生であるフリットウィック先生は実習のために生徒を二人ずつ組にさせていく。

以前ならグレンジャーと組むことが多かったのだが、最近はそのようなことも少ない。

フリットウィックは席が近くだったこともあり、グレンジャーとウィーズリーとペアにする。

確かあの二人はとてつもなく仲が悪かったはずだ。

「ポッター君は……、十六夜君と組みなさい」

そんな二人を観察していると、いつの間にか私のペアが決まっていた。

ポッターだ。

私自身はポッターを嫌っているわけではない。

ポッターは私のことを嫌っているようだが。

「よろしくね、ハリー」

「あ、ああ。よろしく」

あの日の夜、私がマルフォイのことをどう思っているかはポッターに説明したはずだが、どうもまだ信用されていないらしい。

ポッターは未だに私のことをスリザリンに入り損ねたグリフィンドール生だと思っているようだ。

「さあ、ハリー。練習しましょう。ビューン、ヒョイですって」

阿呆らしい。

杖を使わずに物を浮かすことが出来る私からしたら、ままごとでしかない。

「わかつてるよ。ウィンガー・ディ・アム・レ・ヴィ・オー・サ」

ポッターが杖を振るうと白い羽がピクリと動く。

だが、浮かすことは出来ていない。

「浮かばないわね」

「一回失敗しただけじゃないか!」

私の言い方が癪に障ったのかポッターは必死になって羽に向けて杖を振るう。

この様子では浮かすままではまだ時間が掛かるだろう。

私は視線をポッターの羽からグレンジャーの方に移した。

「言い方が間違っているわ。ウィン・ガー・ディ・アム・レ・ヴィ・オー・サ。『ガー』と長く

綺麗に言わなくちゃ」

「そんなによくご存じなら、君がやってみろよッ!!」

またグレンジャーとウィーズリーが口論をしている。

グレンジャーが杖を振るうと、羽は机を離れ頭上一メートルぐらいの所に浮かび上がった。

その様子を見て私はポッターに話しかける。

「あら、先を越されてしまったわね」

「うるさい、気が散る」

「さっきハーマイオニーが言っていたけど、貴方、『レビオーサ』の発音がおかしいわ。レヴィオーサじゃなくてレ『ビ』オーサよ」

「そ、そうなの?」

やはりポッターは根は素直だ。

純粹すぎると言い換えてもいいかも知れない。

「ほら、もう一度。発音に注意してね」

ポッターが発音に注意してもう一度杖を振るう。

見事羽は三十センチぐらい浮かび上がった。

「ほんとだ! 浮いた! あ、いやえつと……一応ありがとうございます?」

「一応どういたしまして」

このギクシヤクした感じがたまらない。

紅魔館にいた時はこのような会話をする機会がなかった。

仲の悪い人間との会話というのは面白い。

授業が終わった後、教室移動をしている最中にウィーズリーが先ほどの呪文学の授業のことを愚痴っていた。

「どうやら授業中にグレンジャーから受けた指摘が気に入らないらしい。

「だから誰だってアイツには我慢できないっていうんだ。全く、悪夢のようなヤツさ」
悪夢のようなヤツ。

私はそれを聞いて妹様のことを思い出す。

その呼び名の通り、妹様はお嬢様のご姉妹であるフランドール様のことだ。

私はまだ若すぎるといふ理由で直接お会いしたことはないが、妹様の部屋がある地下からは死神犬のグリムですら衰弱死するような瘴気が漂ってくる。

私がそんなことを考えていると、グレンジャーが大股で私を抜き去っていった。

その目には大粒の涙を浮かべている。

どうやら想像以上にウィーズリーの悪口が効いているようだ。

そんなグレンジャーを見て、ポッターとウィーズリーはバツの悪そうな顔をした。あの様子じゃ、グレンジャーは次の授業には来ないだろう。

私の予想通り、グレンジャーは次の授業に来なかった。

それどころか、夕食の時間になっても大広間に姿が見えない。

ルームメイトのパチルから聞いた話では、グレンジャーは女子トイレで泣いているらしい。

どうやらウィーズリーの言葉が相当ショックだったようだ。

まあ、私には関係ない話だ。

私はハロウィンのご馳走の一つであるかぼちやパイを一切れ自分の皿に盛ると、小さく切り分けて口に運ぶ。

少し甘すぎる気もするが、ハロウィンならこれぐらいの味付けのほうがいいだろう。

紅魔館でお嬢様にお出しするかぼちやパイはもう少し甘さ控えめだが、今度もう少し砂糖の量を増やしてみるか。

私がパイの味について考えていると、大広間の扉が突然勢いよく開かれる。

何事かと思いい視線を向けると、闇の魔術に対する防衛術の担当であるクイレル先生が全速力で大広間に駆け込んできた。

相当急いでいたのかターバンはズレ、先生は大きく息を切らせている。

先生はそのままダンブルドア校長の席まで駆け寄ると、テーブルにもたれ掛りながら喘ぎ喘ぎに叫んだ。

「と、トロールが……地下室に……。お知らせしなくてはと思って——」

次の瞬間、クイレル先生は気を失いその場に崩れ落ちてしまった。

そこから先は大混乱だ。

生徒はパニックに陥り、皆耳障りな悲鳴を上げながら席を立つ。

それを諫めようと監督生たちが声を張り上げるが、その怒声が混乱を更に加速させた。

何というか、非常にやかましい。

マルフォイなど手に持っていたコップを落としているのにも気が付かず悲鳴を上げている。

私はそんな状況の中、クイレル先生が話していた内容について考えていた。

地下室のトロール。

真っ先に思い浮かぶのは決闘の夜の日に見つけた隠し部屋だ。

隠し扉から伸びる穴は相当深く、穴の深さから考えると隠し部屋は地下に位置しているだろう。

あの部屋の先にはトロールがいた。

クイレル先生もあの部屋に入ってしまったということだろうか。

だがクイレル先生の服装を見る限り、番犬であるケルベロスと争った形跡は見られない。

ということとは地下は地下でも別の地下ということか。

その瞬間、大広間に爆音が鳴り響く。

パニックを起こしていた生徒たちは突然の爆発音に全員が音がした方向を向いた。

その視線の先にはダンブルドア校長が杖を天井に構えて立っている。

どうやら先ほどの爆音はダンブルドア校長が発した魔法によるものらしい。

「みな、落ち着くのじゃ。監督生は生徒を引き連れて談話室へと戻りなさい。先生方はわしのもとへ」

ダンブルドア校長は教員用のテーブルにいた先生たちを集めると、すぐに指示を飛ばし始める。

各寮の監督生はダンブルドア校長の指示に従い、自らの寮生をまとめ始めた。

「グリフィンドール生の皆は僕についてくるんだ。一年生から順番に。七年生は最後に

大広間に一年生が取り残されていないか確認してから談話室に戻ってきてほしい」

監督生の指示にグリフィンドール生たちは不安な表情を浮かべながら移動を始める。

私はその人の流れに乗りながら、不意にグレンジャーのことを思い出した。

グレンジャーはトロールの存在を知らないだろう。

もしグレンジャーが廊下でばったりトロールと鉢合わせたらどうなるか。

その後の結果は容易に予想できる。

「はあ、ホント、手間のかかる人間ね。世話を焼く義理はないけど、死んだら死んだで夢見が悪いし」

私は混乱に乗じて机の下に隠れ、時間を止める。

そして多くの人間が列を成して固まっている大広間から出ると、先生方を追い越し地下室の方へと飛んだ。

グレンジャーは地下室近くの人があまり利用しないトイレの個室にいた。

体勢から察するにまだ泣いているようだ。

私は個室の前に立ち、時間停止を解除する。

そしてゆっくりとトイレのドアをノックした。

「ハーマイオニー？ いるんでしょう？」

布が擦れる音が聞こえる。

どうやら蹲った体勢から体を起こしたらしい。

「さ、咲夜？ ……どうしたの、こんなトイレの個室まで」

「そっくりそのまま言葉を返すわ。どうしたの？ こんなトイレの個室で」

もつとも、どうしてこんな個室で泣いているのかは知っている。

「何でもないわ。ほつといてよ」

そう言ってグレンジャーは個室の扉を蹴っ飛ばした。

どうやら、まだ随分とご立腹のようだ。

私は小さく息を吐くと、扉越しに話しかける

「怒っているの？ それとも泣いているの？ 貴方は一体何を思っているの？ 私は

ね、貴方のことが知りたい。言葉を交わして理解したい。中に入ってもいい？」

「……………うん」

優しくされたのが嬉しかったのか、グレンジャーが返事を返す。

なんともわかりやすい。

少し待っていると、コトンと鍵が外れる音が聞こえてくる。

私はゆっくり扉を押し開くと、改めてグレンジャーと向き合った。

「やっぱり泣いてた。ロンの言葉は気にしないほうがいいわよ。彼だって本気じゃないと思うし」

「そんなことないわ！　だって……いつも、いつも……」

グレンジャーが私に泣きついている。

私はそれを抱きとめると、優しく頭を撫でた。

「あれぐらいの歳の子は、反発したいお年頃なのよ。お節介を焼けば焼くほど嫌われる。貴方は頑張っていると思うわ」

お嬢様の真似事だが、効果はあるだろうか。

次の瞬間、グレンジャーは大声をあげて泣き出してしまった。

何を間違えた？

私は半ば混乱しながらただグレンジャーの頭を撫で続けるしかなかった。

数分経っただろうか、入口の方から酷い悪臭が漂いはじめ、私は我に返る。

グレンジャーが突然泣き出したことで、ここに来た目的を完全に忘れていた。

私はグレンジャーを避難させにきたのだ。

グレンジャーもこの悪臭を不思議に思ったのか、私から離れ扉に手を掛ける。

そして静かに扉を開くと、少しトイレの個室から顔を覗かせた。

「ヒツ……あれ、なに？」

グレンジャーの押し殺したような悲鳴に、私も個室から顔を覗かせる。そこには決闘の夜に見たあの不細工面があった。

トロールだ。

どうやら私がグレンジャーを慰めている間にトイレの中へと入ってきてしまったらしい。

「あっちゃー……もうこんなところまで」

状況を理解したグレンジャーが鋭い悲鳴を上げる。

緊急事態だ。こうなってしまうては能力を行使するしかない。

私は意識を集中させると、時間を停止させた。

音のなくなった世界で、私は小さく息を吐く。

時間の止まった世界は、私にとってはこれ以上ない安全地帯だ。

私は落ち着いてトイレの入り口のほうに移動すると、逃走経路を確保するためトイレの入り口の扉に手を掛けた。

だが、開かない。

何度か押ししたり引いたりしてみるが、ガチャガチャと音を立てるだけで扉が開く気配はなかった。

トイレ入口の扉は簡素なものだ。

この感触から判断するに、外側から物理的に固定されている。こうなってしまうては扉を壊すぐらいしか対処のしようがない。

だが、それは余りにもリスクを孕む方法だと、私は思い直す。

ここで私の能力がバレルような行為は避けるべきだ。

こうなったらトロールと正面からぶつかるのが一番だろう。

私は元いた場所に戻ると、時間停止を解除した。

「あ、ああああ。な、なんで……」

グレンジャーが心此処に有らずといった感じでその場で腰を抜かしてしまふ。

「ごめん、これのことを言う為にここに来たことを忘れてた」

トロールは棍棒を振り上げるとグレンジャー目掛けて下から払い上げるように振り抜く。

この軌道だとグレンジャーは棍棒で吹き飛ばされて粉々だ。

運が良くても全身骨折だろう。

私は咄嗟にグレンジャーを後ろに突き飛ばし、間に割り込む。

そして甘んじて棍棒の一撃を受けた。

ハリーはその時焦っていた。

ハーマイオニーはトロールのことを知らないと思ひ、ロンと一緒に探しにきたのだが、運悪くハーマイオニーを発見するより早くトロールのほうを発見してしまう。

だが運よくトロールを近くの部屋に閉じ込めることに成功したのだ。

「やったー！」

隣にいるロンが歓声を上げる。

二人は初めての勝利に意気揚々と来た道を引き返したが、曲がり角まで来たときにトロールを閉じ込めたのは失策だと悟る。

心臓が止まるかのような悲鳴が先ほどの部屋から聞こえてきたのだ。

「しまった」

ロンが顔を真っ青にして呟く。

「女子トイレだ！」

ハリーも息をのんだ。

「ハーマイオニーだ！」

二人が同時に声の主に目星をつけ、叫び声をあげた。

咄嗟に先ほどの部屋に駆け戻り、急いでドアにつけた簡易的な門を外す。

扉を蹴り開けると、自分の正気を疑うようなショックな光景に目を疑った。

トロールが振りかぶった棍棒はハーマイオニーを押しつけた咲夜に直撃し、彼女を吹

き飛ばす。

咲夜は天井で跳ね返り、そのままの勢いで壁に叩きつけられた。

自分たちのせいで被害者が出てしまった。

ハリーとロンは自らが起こした過ちを信じられないといった雰囲気です。その場に立ち尽くしてしまおう。

壁の下に横たわっている咲夜は動かない。

ハリーには咲夜が生きているようにはとても見えなかった。

棍棒が私の前に迫る。

私は棍棒が当たるか当たらないかというギリギリのところで時間を止めることに成功した。

そして棍棒に触れると棍棒の時間のみを動かし、棍棒が持っていた運動エネルギーを消す。

これで私にあたる棍棒は私に触れた状態からまた加速されることになる。

加速された棍棒の一撃を食らうよりも随分と衝撃は少ないはずだ。

それに加え棍棒に合わせて吹き飛ばされたように空を飛ばせば、衝撃は実質ゼロになる

はず。

私は時間停止を解除し、棍棒に合わせて一気に後ろに飛びのいた。

棍棒から受ける加速も多少あるが、その力すらも利用して斜め後ろに飛び上がると、一旦天井で受け身を取る。

多少痛いですがそれは受け身を取った時に感じる表面的な痛みだ。

私は天井で一度跳ね返ると今度は壁に体をぶつけ、完全に停止する。

我ながら棍棒で殴り飛ばされる演技が完璧だ。

さて、次はこちらの番と目を開けたその時、先ほどまで閉まっていた入り口の扉が開いていることに気がつく。

その扉の前には、呆然とした表情のポッターとウィーズリーが立っていた。

それを見て私は目を開けたまま床に横たわり死んだふりをする。

これは多分いい機会だ。

危なくなったら今度こそ能力がバレるのも躊躇わず助けるつもりだが、ここでポッターとウィーズリーがトロールを倒したら、二人はグレンジャーと仲直りが出来るかもしれない。

今日そこまできかずとも、仲直りのきつかけ作りにはなるだろう。

そのような考えのもと私が静観していると、ポッター達は奇跡的な立ち回りを見せ、

あれよあれよという間にトロールを無力化してしまう。

決め手はウィーズリーが浮遊魔法でトロールの棍棒を奪い、それを頭にぶつけたことだろう。

トロールは浮遊させた棍棒の一撃を喰らい、白目を剥いて地面に倒れ伏している。

「これ……死んだの？」

グレンジャーがぼつりと呟く。

一瞬私のことかと思ったが、多分トロールの話だ。

「そうだ、咲夜！　咲夜っ!!」

冷静になったグレンジャーが私に縋りついてくる。

その光景をポッター達はトロールと対峙している時よりも顔を真っ青にして見守っていた。

きっと私が死んだものだと思っっているのだろう。

状況から察するに、このトイレに鍵を掛けたのは彼らだ。

これ以上苛めるのは流石に可愛そうだと思う、私は舌を出し微笑んだ。

「生きてるわ。そんな絶望的な顔しないでよ」

「さくやあ……、生きてたのね」

三人の顔が安堵の表情に変わる。

私はお腹をめくりあげ、傷がないことを確認させた。

「咄嗟に後ろに飛びのいたのよ。ちよつとふら付いてさつきまで地面で気絶していたけど、無傷だから安心しなさい」

私が服を直すのと同時に先生方がトイレに踏み込んでくる。

マクゴナガル先生にスネイプ先生、更には気絶していたはずのクイレル先生の姿もあつた。

「一体全体、貴方達はどういうつもりなんですか？」

マクゴナガル先生の声は冷静だが、物凄い怒りを含んでいるように感じる。

こうなる前に逃げればよかったと思ひ返すが、後の祭りもいいところだ。

「殺されなかったのは運が良かったからです。寮にいるはずの貴方たちがどうして、それも女子トイレなんかにいるんです？」

ポッターもウイーズリーも絶句している。

減点される前に口八丁で誤魔化そうと口を開きかけると、その前にグレンジャーが一步前に出て弱弱しく声を出した。

「あ、あの、先生。聞いてください。三人とも私を探しに来たんです」

グレンジャーは何を言うつもりなのだろうか。

引き留めても良かったが、ここは任せることにしよう。

「私がトロールを探しに来たんです。本で読んでトロールのことはよく知っていたので……独りで勝てると思って……。もし、三人が私を見つけてくれないかったら、きっと私は死んでいました。咲夜は私を庇ってくれて、ハリーはトロールの気を引いてくれて、ロンはトロールを棍棒でノックアウトしてくれました。人を呼びに行く余裕なんてなかったんです。駆けつけてくれた時には、もう殺される寸前で……」

ここはグレンジャーの話に合わせるのが良いだろう。

彼女の好意に甘えるでしょう。

それに、仲直りのいい材料にもなるはずだ。

「まあ、そういうことでしたら……」

マクゴナガル先生はグレンジャーを真剣な表情でじつと見つめる。

「ミス・グレンジャー。なんと愚かしいことを。たった一人で野生のトロールを捕まえようなんて、どうしてそんなことを考えたのですか。グリフィンドールから五点減点です。あなたには期待していたのですが……怪我がないなら談話室に帰ったほうがよいでしょう。生徒たちがさつき中断したパーティーの続きをやっています。」

グレンジャーは独りトボトボと帰っていく。

私はそれを追いかけようとするが、マクゴナガル先生に引き留められてしまった。

「先ほども言いましたが、貴方たちは運が良かっただけです。ですが、大人の野生トロー

ルと対決できる一年生はそうはいません。一人五点ずつあげましょう。ダンブルドア先生には私から報告しておきます。帰ってよろしい」

引かれることはあつても、点数が与えられるとは思つても見なかった。

三人に五点ずつで十五点。

グレンジャーの五点を差し引いて十点か。

私は二人を連れて談話室までの道のりを歩く。

途中気まづくなつたのか、ポッターが話しかけてきた。

「お腹、本当に大丈夫なのかい？ 内臓が飛び出てもおかしくないぐらいの勢いで殴られてただらう？」

「あら、もう一度私のお腹が見たいの？ 年頃なのに大胆なのね」

「茶化さないでよ！ 本気で心配しているんだから……」

ポッターが顔を真っ赤にして言い返してくる。

変な想像をしたのか、ウィーズリーが私のほうから顔を背けた。

「心配してくれてありがとう。本当に大丈夫よ。それよりも、早くハーマイオニーを追いましょ」

私はポッターとウィーズリー……いや、ハリーとロンの手を取ると、廊下の奥に小さく見えたハーマイオニーの背中を追いかける。

そしてハーマイオニー目掛けてハリーとロンを勢いよく送り出した。

二人はそのままバランスを崩すように走りながらハーマイオニーに追いつく。

そして三人とも気まずそうに顔を見合わせた。

そのまま沈黙してしまう。

「ありがとう。みんな」

私は最後の一押しをすべく全員に微笑みかける。

ハリーたちは照れ臭そうにお互いにお礼を言うと、私も含めて四人で一緒に談話室に

戻りハロウィンパーティーの続きを楽しんだ。

それ以来、ハリー、ロン、ハーマイオニーの三人は親友になった。

共通の経験をすることで互いに友情が芽生えたらしい。

私はそんな三人の微笑ましい青春を後ろから眺める。

人間の育む友情はとても美しく、そして私には一生得られないものだと感じた。

クイディッチとか、クリスマスとか、勉強とか

十一月に入ると気温も下がりに、途端に肌寒くなってきた。

だが暖炉の前で丸くなっている暇などないと、ロンは私に力説する。

「クイディッチシーズンの到来だぞ、咲夜！ 今日にはハリーの初陣じゃないか！」

私は暖炉の前に置かれたソファーに深く腰掛ける。

そして暖炉の火に手をかざした。

「あつたかい」

その様子を見てロンは大きいため息をつく。

いや、そもそもクイディッチが何だという話だ。

自分が所属していないクラブ活動など私の知ったことではない。

「それに、当の本人はあまり乗り気じゃないみたいよ」

私は男子寮の方を指し示す。

男子寮から出てきたハリーは、今にも死にそうな顔をしていた。

「緊張しているだけさ。なあハリー」

「そうだと信じたいわね」

初めての飛行訓練の時、ハリーは授業中にマクゴナガル先生に連れて行かれた。

もしかしたらハリーが退学になるんじゃないかと一時期話題になったが、どうやらその時ハリーはグリフィンボールのクイディッチチームに入れられたらしいのだ。

ハリーのポジションはシーカー。

クイディッチというスポーツは、シーカーがスニッチと呼ばれるボールをキャッチした時点で試合終了となる。

スニッチキャッチの得点は百五十点。

多少点差が付いても、一発でひっくり返せるほどの加点だ。

まさに、チームの命運を託されたポジションと言える……らしい。

まあ、私自身ロンなどの男子生徒がマグル生まれの生徒たちに説明しているのを又聞きしたただけだ。

詳しいルールはわからないし、興味もない。

「おはよう。ロン、咲夜」

私たちの近くまで歩いてきたハリーが弱々しく挨拶をする。

「しっかりしろハリー。君は神がかった才能を持っている。箒だつて一級品だ」

そんなハリーの背中をロンがバンバンと叩いた。

お熱いことで、私は暖炉へと向き直った。

その後、ハーマイオニーが女子寮から下りてきてハリーを大広間に引っ張っていく。ハーマイオニーはすっかり二人のお節介焼きが板についてきたようだ。

私はそんな微笑ましい光景を後ろから眺めると、後に続いて大広間に朝食を食べに向かった。

十一時には学校中の生徒がクイドイツ競技場の観客席に詰め掛けた。

どうやらクイドイツの試合の日はどの学年も授業がないらしい。

決して広くはない観客席が多くの子や教員で埋まっていた。

近くを見回すと、ロンが仲の良い友達と一緒に『ポッターを大統領に』と書かれた大きな旗を振っている。

その下にはグリフィンドールのシンボルであるライオンが描かれており、その絵は様々な色に光っていた。

細工をしたのはハーマイオニーだろう。

私がハーマイオニーのほうを見ると逃げるように顔を伏せた。

グラウンドを挟んで反対側の観客席では、スリザリンの象徴であるヘビをあしらった旗が振られている。

今日はグリフィンドールとスリザリンの試合だ。

普段仲の悪い寮との対決ということもあり、どちらのチームも応援に熱が入っている。

私はグリフィンドールの応援席から立つと、競技場を回り込みスリザリンの応援席に向かう。

そこには少し悔しそうな表情のマルフォイの姿があった。

「おはよう、ドラコ。いや、もうお昼だからこんにはかしら？」

私が声をかけるとマルフォイは少し慌てたように表情を取り繕い返事をする。

「や、やあ咲夜。何でこっちの席に？ もしかして、スリザリンチームの応援に来たとか？」

「どちらにも応援する気がおきないのよねえ。私クイディッチにあまり興味がないもの」

どっち付かずの返答ではあるが、これは勿論私の本心だ。

「そうなのかい？ 僕としてはスリザリンを応援してくれると嬉しいんだけど……」

「だから言ってるでしょ。どっちの味方もしないわ。でも、まあ、もしあなたが試合に出ているのなら、話は違ったかもしれないけど」

それを聞き、マルフォイは少し複雑そうな表情を浮かべる。

「二年生はチームに入れない。そういう規則のはずなんだ。マクゴナガルの鼻肩ババアめ。きつと規則を捻じ曲げて無理矢理ポッターを選手にしたに違いない」

「スネイプ先生に頼めなかったの？」

「許可できないって。まあ、規則違反は悪いことだからね。僕は真面目に二年生になってからチームに入るよ」

「貴方ならきつとチーム入り出来るわ。……つと、それじゃあ、私はこの辺で」

私はマルフォイに微笑むと、その場を後にする。

マルフォイは少しニヤけた顔で私の姿が見えなくなるまで手を振っていた。

私はそのままグリフィンドールの応援席へと戻る。

そして何事もなかったかのように私が席に座ると、ハーマイオニーが呆れたような顔をして話しかけてきた。

「よくやるわ。不思議なぐらいよ。なんでマルフォイは貴方と仲良くするのかしら。貴方とハーリーが仲良くなったから、てつきりマルフォイのほうから貴方と距離を取ると思っていたのに」

「スリザリン生全員が私に敵意を持っていないわけじゃないと思うわ。別にグリフィンドールはスリザリンと戦争しているわけじゃないでしょう？ 私としてはそこまでい

「でもマルフォイは——」

「選手たちが出てきたぞ！」

何処からともなく上がったそんな大声にハーマイオニーは意識を取られたらしくグラウンドの方に向き直る。

大歓声の中、選手たちがグラウンドに並び始めていた。

その中にはハリーの姿もある。

ハリーはガチガチに緊張しているようで、観客席に手を振りかえす余裕もないと言った感じだ。

「彼、大丈夫かしら」

「まあ、試合が始まったから少しは余裕が出てくると思うよ。シーカーはある意味スタジアムの中で一番自由な存在だし」

私の問いにロンが答える。

グラウンドではフーチ先生が双方のキャプテンに最後の確認を行っている。

そして試合の準備が整ったと判断したのか、ダンブルドアに軽く合図を送るとホイッスルを吹いた。

フーチ先生のけたたましいホイッスルの音が競技場全体に鳴り響く。

それと同時に選手たちが一齐に空へと飛び上がった。

試合開始だ。

選手たちはコート内を縦横無尽に飛び回り、クアツフルを取り合いブラッジャーを避

け、ゴールを目指していく。

飛行訓練の時の動きとは比べ物にならないほど高機動に飛ぶ箒に、私は純粹に感心した。

自分で乗ってみて分かったが、箒は直線的な動きは得意でも急旋回は苦手だ。

それをあそこまで巧みに制御しているのだ。

純粹に凄いことだと思う。

私はクアツフルの動きを追いながらハリーの姿を探す。

ハリーは競技場の上空をぐるぐる旋回しながらスニッチを探していた。

時折飛んでくるブラッジャーも器用に避けていく。

あの様子なら大丈夫そうだ。

そう思った次の瞬間、突如ハリーの箒が物凄い勢いで横に揺れた。

突風でも拭いたのかと思ったが、それだけで終わらない。

今度は上へ、次の瞬間には下へ。

まるで誰かハリーを振り落とすために、箒の柄を掴んでやたらめったら振り回しているかのようだった。

「ハリーは何をしとるんだ？」

いつの間にか後ろの席にいたハグリッドがブツブツと呟く。

「あれがハリーじゃなけりや箒のコントロールを失ったんじゃないかと思うわな。……しかしハリーに限ってそんなことはありえんだろう」

箒の暴走は更に激しさを増し、ハリーは片手だけで箒にしがみついているような状態になってしまふ。

「誰かの悪戯かなあ？」

「そんなことあない。強力な闇の魔術以外、箒には悪さは出来ん。スリザリンのチビどもじゃ競技用の箒に手出しは出来んはずだ」

ハグリッドのその言葉を聞くや否やハーマイオニーはハグリッドの持っている双眼鏡をひったくり、ハリーではなく観客席の方を気が狂ったように見回し始めた。

「何をしているんだよ？」

ロンが真っ青な顔でハーマイオニーに聞く。

その問いにハーマイオニーは思った通りだわと言わんばかりにロンに双眼鏡を押し付けた。

「スナイプよ。見てみなさい。何かしてる。多分箒に呪いをかけているのだわ」

ロンは顔を青くしながら頭を掻いた。

「僕たち、どうすりゃいいんだ？」

「私に任せて」

そう言い残すとハーマイオニーは観客席を離れてどこかに消えて行ってしまった。私はロンから双眼鏡をひったくると先ほどまでハーマイオニーが見ていた方向を見る。

確かにスネイプ先生はハリーの箒を凝視しながら何かをブツブツと呟いていた。魔法使いが呪いをかけるときの典型的な動作だ。

ロンも似たり寄ったりな顔で私の顔を見ながらブツブツ言ったが、呪いではなさそうなので無視する。

少し視線をずらすとハーマイオニーが物凄い速度でスネイプ先生の後方へ回り込むように走っていくのが見えた。

その途中でクイレル先生を突き飛ばしたが、ハーマイオニーは気にも留めてない。

その時、不穏な雰囲気を感じ取り私はそのままクイレル先生を観察する。

クイレル先生はいつものオドオドした表情からは想像も出来ないほどの鋭い顔つきでハーマイオニーを睨みつけている。

それはいつもスネイプがハリーに向けるような憎悪の表情ではなく、完全に殺意が籠った目つきだ。

ぶつからただけではあそこまで睨まない。

まるで何か大事な用事を邪魔されたかのような、そんな表情だ。

「やったー！ ハリーが持ち直したぞー！」

今度はロンが私から双眼鏡をひったくる。

次の瞬間、ハリーが一気に急降下した。

私は自分の時間だけを早くし、視覚的に疑似的なスローモーションを作り上げる。

ハリーの手の十センチ先をスニッチが飛んでいる。

どうやら一緒に急降下しているようだ。

ハリーは一度手を振るうが取り逃す。

そして体勢を崩した拍子に前のめりとなり、スニッチを飲み込んでしまった。

そしてそのまま地面に軟着陸すると、スニッチを手の平に吐き出す。

時間の流れを戻し、私はそのまま様子を見守った。

「スニッチを取ったぞー!!」

ハリーが天高くスニッチを掲げる。

その瞬間、物凄い大喝采が沸き起こった。

グリフィンボールの、それもかの有名なハリー・ポッターがスニッチをキャッチしたのだ。

「ちよつと来て。早く。ついでにハグリッドも」

私がパチパチ手を叩いていると、座席の裏側からハーマイオニーが顔を出す。

何か話したいことがあるらしいが、先ほどのスネイプ先生の件だろうか。

「おあ、ハーマイオニー、お前さんか。何かようか？」

「さっきの箒の話で話したいことがあるの。ハリーも引つ張つてくるわ」

「それじゃあ一段落したら俺の小屋に来るといい。紅茶とロツクケーキぐらいしかないけどな」

ハグリッドはそういうと、一足先に小屋の方に行つてしまふ。

私もまだ興奮気味のロンの肩を叩き、今後の予定を説明した。

「それじゃあハグリッドの小屋に行くんだね。ハリーは……もう少し掛かりそうだな」
そういつてロンは親指でコートを指した。

ハリーは今胴上げされている最中だ。

あれでは容易には連れ出せないだろう。

そう思っていたがハーマイオニーがずかずかとコート内に入つていき、ハリーを引つ張つていく。

その様子を見てロンも私も目を丸くした。

「前言撤回。今すぐ向かおう。全く、ハーマイオニーって結構無茶苦茶だよな」

これも返さないといけないし、とロンは手に持っている双眼鏡を示す。

すつかり忘れていたが、双眼鏡はハグリッドの物だ。

私たちはハリーと合流すると、ひとしきり彼を褒めたたえながらハグリッドの小屋に向かった。

「スネイプだったんだよ」

ハグリッドの部屋で濃い紅茶を飲みながら、ロンが口を開く。

「ハーマイオニーも僕も、そして咲夜も見えたんだ。君の箒にブツブツと何か呪文を掛けていた。ずっと君から目を離さずにね」

呪いかどうかは置いといて、スネイプ先生がハリーに何かしらの魔法を掛けていたのは事実だろう。

「バカな。なんでスネイプがそんなことをする必要があるんだ？」

ハグリッドがもつともなことを言った。

そうなのだ。

スネイプ先生がいくらハリーを恨んでいたとしても、そこまではしないだろう。

教師と生徒という立場もある。

だが三人には思うところがあるようで、ハリーが意を決したように話し始めた。

「僕、スネイプについて知っていることがあるんだ。あいつ、ハロウィーンの日、三頭犬

の裏をかこうとして足を噛まれたんだよ。あの犬が守っているものをスネイプが盗ろうとしたんじゃないかと思うんだ」

それを聞いて私がティーカップを、ハグリッドがティーポットを落とした。

「なんでフラッツフィーを知っているんだ？」

「フラッツフィー？」

「そう、あいつの名前だ。去年パブであったギリシャ人から買ったんだ。俺がダンブルドアに貸した。守るため——」

そこまで話して、ハグリッドは拙いことを言ったという顔をして口を噤んだ。

「何を？」

ハリーが身を乗り出す。

「もう、これ以上聞かなくてくれ。重大な秘密なんだ、これは」

ハグリッドは蚊でも払うかのようにぶつきらぼうに言った。

「だけど、スネイプが盗もうとしたんだよ？」

「スネイプ先生よ。ハリー。先生」

「スネイプはホグワーツの教師だろう。そんなことするわけなからう」

私の言葉は無視されてしまったようだ。

ついでに私が落としたティーカップも無視してくれているようで助かる。

「ならどうしてハリーを殺そうとしたの？ 私が邪魔しなかったらハリーは今頃……」

ハーマイオニーが神妙な顔をして言葉を続ける。

「ハグリッド。私、呪いを掛けているかどうかぐらいは一目でわかるわ。沢山勉強したものだ。じーと目を逸らさずに見続けるの。スネイプは瞬きひとつしてなかったわ。この目で見たんだから」

「きつと誤解だ。お前さんは間違つとる！ 俺が断言するぞ」

頑ななハーマイオニーと同様、ハグリッドも一步も譲らなかつた。

「俺はハリーの箒が何であんな動きをしたんかは分からん。だがスネイプは生徒を殺そうとしたりはせんぞ。四人ともよく聞け。お前さんたちは関係ないことに首を突っ込んでる。危険だ。あの犬のことも犬が守っている物も。あれはダンブルドア先生とニコラス・フラメルの——」

ハグリッドが漏らした名前をハリーは聞き逃さなかつた。

「ニコラス・フラメルって人が関係しているんだね？」

ハグリッドは自分の頭にごつんと拳を当てる。

どうやら口を滑らせた自分に猛烈に腹を立てているようだった。

「ところで、サクヤ、お前さんティーカップが粉々だがどうしたんだ？」

ハグリッドに指摘され、私は慌てて取り繕う。

その場はなんとか誤魔化し、事なきを得た。

十二月も半ば、地下牢の中は氷点下まで冷え込み、吐く息を白い靄に変える。

あの時出来心で手に入れた石がとてつもなく大切なものだとかわかったあの日から、ハリーたちは隠されている物の正体を調べるためにニコラス・フラメルという人物を追っていた。

結局私は三人に石のことを打ち明けられてない。

元の場所に戻そうとも思ったが、何者かから盗まれるのを警戒して隠してあるのだとしたら別に私が持つていても構わないだろう。

あの石は懐中時計の内部の空間を弄って仕込んである。

この懐中時計だけは私は絶対に手放さない。

そして空間を弄れる私ではないと物理的に取り出すことも出来ないようになっていく。

「かわいそうに」

魔法薬学の授業中、先ほどまで私の隣にいたマルフォイがいつの間にかハリーの近くにいた。

「家に帰ってくるなど言われて、クリスマスなのにホグワーツに居残る子がいるんだね」
マルフォイのその言葉で思い出した。

そうだ、私もクリスマスは紅魔館に帰るのだ。

先週、マクゴナガル先生がクリスマスに寮に残る生徒のリストを作っていた。
ということは、クリスマスに実家へと帰る生徒の方が多いということだろう。

ハリーは真つ先にその居残りリストに名前を書いていたが、その時の彼の態度を見る限り、死んでも帰るものかといった強い意志を感じる。

相当叔父と叔母の家に帰りたくないようだ。

私は大鍋の調査を一段落させると、ハリーとマルフォイの方に歩いていく。

「マルフォイ。その辺にしておきなさい。親がいないのは彼のせいではないわ」

その言葉を聞いてマルフォイはバツの悪い顔をする。

ハリーは思わぬ助け舟に少し驚いているようだった。

「そうだ、咲夜の家もご両親が居なかったね。ごめん。咲夜はクリスマスはどうするんだい？ もしよかったら僕の家に……」

マルフォイが私を氣遣ってそのような提案をしてくれる。

だが余計なお世話もいいところだ。

無論、私はその誘いを断った。

「ごめんなさい。クリスマスは本業に戻らないといけないから」

「本業？ 咲夜って何か仕事をしていたの？」

今度はハリーが聞いてくる。

そうか、ハリーにもマルフォイにも紅魔館のことは話したことがないのか。

思い返してみればホグワーツで紅魔館の話をした記憶は全くなかった。

これを機に少し話をしておこう。

「両親を知らないっていう話は入学当初にしたわよね。親戚もいないから私は大きな屋敷で住み込みのメイドとして働いているのよ。学校に入るということで今は一時的に休職しているってわけ」

そうなんだ、とハリーとマルフォイが同時に呟いた。

それなら尚更とマルフォイが口を開くが、私はその口に人差し指を立ててマルフォイの口に当て、閉じさせる。

その行為にマルフォイも、そして何故かハリーも顔を赤く染めた。

「私はメイドの仕事が気に入っているのよ。クリスマスは何か送るわ」

そう言い残して私は自分の鍋に戻る。

そして最後の材料を加え魔法薬を完成させた。

「ほう、またマルフォイの調合した魔法薬は完璧だな。スリザリンに五点やろう」

スネイプ先生がいつもの調子で私の調査した鍋を見て呟く。
私は魔法薬を小瓶に入れて先生に提出すると、片付けを開始した。

クリスマス休暇当日。

ロンドンへ帰るホグワーツ特急のコンパートメントの中で、私はハーマイオニーとニコラス・フラメルについて話し合っていた。

もつとも、例の石のことをハーマイオニーは知らない。

危険なものであるなら尚のこと、彼らを巻き込んではいけなと思えた。

「ハリーも言っていることなんだけど、私も絶対何処かでその名前を見たのよ。でも成果はゼロ。いろんな本を読み返したけど手がかりはなかったわ」

「ニコラス・フラメル……少なくとも私は聞き覚えがないわね」

「そもそも貴方そんなに本を読まないじゃない」

「それを言うならハリーも一緒よ」

ハーマイオニーが思い出せないということは、魔法界においてメジャーな人物ではないのだろう。

「スネイプが狙ってるということは、それなりに価値のあるものが隠されているはずだ

し……まああのハグリッドの三頭犬に阻まれたみたいだけど」

「スネイプ先生が……ねえ。でもハグリッドはあの犬を貸しているといった。ということは守らなければならぬ期間が明確ではなくてもある程度決まっているということよ。ということとは残された時間はそう多くはないんじゃない？」

「そうなのよ。ハリーによれば今まではグリーンゴッツに保管してあつた物らしいし。ダンプルドア校長先生は何かを察知してその何かの所在をホグワーツに移した。そしてその予感的中して何者かがグリーンゴッツに侵入。まさにタッチの差ね」

ハーマイオニーがまとめるようにそう言った。

私はグリーンゴッツという単語について確認を取る。

「グリーンゴッツ、確か魔法界で一番大きな銀行だったかしら。私には縁がない話だわ」

ハーマイオニーは軽く頷き、そのまま何かを考え込む。

どうやらニコラス・フラメルの話はそこで終わりのようで、ハーマイオニーはふと思ひ出したかのように別の話題を振った。

「そう言えばこれはハリーから聞いた話なんだけど……貴方ホグワーツに来る前は住み込みのメイドさんだったのね。それで少し気になったのだけれど……少しやましい話でごめんなさい。学費はどうしているの？」

「そのへんは私も良くわからないわ。私はただお嬢様に「学校に通いなさい」とのご命令

を受けたただけだもの」

「お嬢様……」

ハーマイオニーは聞きなれない言葉に少しときめいているようだ。

「全然想像がつかないわ。咲夜が人の指示で動いて、人の命令に従っているところなんて」

「私が人間の指示に従うわけじゃないじゃない」

「え？ でもお嬢様の命令で学校にきているんですよ？」

「勿論、お嬢様の命令は絶対よ。命に代えてでも遂行するわ」

ハーマイオニーはよくわからないといった感じで首を捻る。

「そういうハーマイオニーはどうなのよ？ 〴〵両親は歯医者だっけ？」

「ええ、厳しい両親だけど、私が魔法学校に通うことになったときには一緒になって喜んでくれたわ。自分で言うのもなんだけど、いいパパとママよ」

私は車内販売で売られていたカエルチョコレートを一口食べると、中からカードを取り出す。

そこには授業で習った偉人の写真と説明書きが書いてあった。

「こんなおまけ要素があったのね」

「というか、それが目当てで買い続けている人もいるぐらいよ。ロンとかね」

二人でクスクス笑っていると列車がゆっくりと停車する。いつの間にかロンドンに戻ってきたらしい。

「さあ、ついたわよ。行きましよう」

私はハーマイオニーの手を取ると、一緒に歩き出す。

ハーマイオニーもホグワーツ入学当初の大荷物よりかは随分と小さいトランクを引きずっていた。

まあ学用品全てを持って帰るほど間抜けではないということだろう。

ホームに出ると、見慣れた赤色が目に映る。

そして驚く暇もなく目の前が緑に包まれた。

「さあーくううやあちやーんっ!! あれ? 少し背が伸びた? 制服姿も可愛いねえ

……寂しかった!? 私はもう毎日死にそうだったわよ……」

数か月前までは毎日聞いていた声、美鈴さんの声と服だ。

この軟らかい感覚は彼女の豊満な胸だろう。

横目でハーマイオニーを見ると、呆れたような笑顔を浮かべている。

「あれ? 〴〵学友さん?」

美鈴さんはようやく私を解放し、ハーマイオニーの方を向く。

彼女自身百七十センチほどある長身なので、真つすぐ立つと自然と背の低い私たちを見下ろす形になる。

武人で姿勢がいいのも相まって、彼女は見た目以上に大きく見えた。

ハーマイオニーはそんな美鈴さんに目を奪われている。

「は、初めまして！ 私はハーマイオニー・グレンジャーです。えつと……、お嬢様？」
ハーマイオニーは混乱しているように目を白黒させると、トンチンカンなことを言いだした。

どうやら美鈴さんを私の主だと勘違いしているようだ。

「ハーマイオニー、彼女は紅美鈴。私と同じ館に仕えている従者よ」

「どうも！ 紅美鈴です。紅魔館の補欠メイド長つてところかな？」

美鈴さんは拳と掌を体の前で合わせて挨拶をした。

ハーマイオニーは慌てて同じような動作で挨拶を返す。

その様子に美鈴さんは満足したのか、笑顔で頷いた。

「なんとというか、昼夜とは全く違うタイプの人ね」

人じゃないんだけどね。

という突っ込みは置いといて取り敢えず同意する。

「咲夜ちゃんは真面目だからねーまあー私はこう適当なもんよ。今日も朝おせうさまにしこたま……いや、この話はやめよう」

美鈴さんは頭を掻き、言葉を濁した。

「まあなんにしても、咲夜ちゃんが帰ってきたことだし。紅魔館に帰りますか。早く帰って夜までに少し仮眠を取った方がいいわ。時差ボケ起こすといけないしね」

「時差ボケ？　咲夜の職場って海外なの？」

美鈴さんがこれ以上何かを言う前にハーマイオニーと別れた方がいいだろう。

私はハーマイオニーとクリスマスの約束を交わすと、美鈴さんの背中を押してレンガの壁を潜り抜けた。

私は割り振られた自室のベッドの上で寝転がっていた。

今日はクリスマスパーティーだったのだが、ホグワーツの生活で相当体が鈍ったと実感する。

イギリスの貴族や大金持ちを大勢呼び込み盛大に行われたクリスマスパーティーを、実質一人で仕切り切ったのだ。

朝になりようやくパーティーも終わり、私は今こうして自室でだらけきっている。

そういえば、多くのプレゼントが届いていたと思い出し、私は机の上に積んである包みをひとつずつ確認した。

まず目に付いたのはハーマイオニーのプレゼントだ。

箱を開けてみると紅茶用の少し高い角砂糖だった。

単純に高級品というわけではなく、ご当地品のようなだ。

その辺は気が利いていると言えいいのか、なんというか。

高級品では普段紅魔館に置いてある物に敵わないと思ったのだろう。

だったらプレゼントの内容を変えればいいのか、その不器用さにクスリと笑う。

次の包みはハリーからだ。

小さな包みの中には、銀製の髪留めが入っていた。

彼らしい贈り物だ。

ロンのプレゼントは小さなクイディッチ選手の人形で、私の手から飛び出すと部屋中をくるくると飛び回った。

最後の包みはマルフォイからだった。

少し大きい箱の包みを開けると、天球儀のようなものが入っている。

使い方が分からなかった私は、取りあえずそれを机の上に取り出す。

すると天球儀は光を放ち部屋中を星で満たした。

中々洒落たプレゼントを贈るものだ。

私は机の上にプレゼントを並べると、ベッドに身を沈める。

今日は疲れた。

クリスマスも終わったことだし明日の夜からはお嬢様とゆっくり会話したり、パチュー様と話す機会もあるだろう。

目を閉じるとすぐさま私の意識は闇に落ちていった。

「それで、ホグワーツでの生活は怎うなの？ 咲夜」

私がお嬢様の横で紅茶を用意していると、待ちきれないかのようにお嬢様が聞いてきた。

お嬢様の前にはそんな様子を呆れたように見ているパチュー様がいる。

「そこそこ楽しんでませてもらっております」

「友達は出来た？」

お嬢様はからかうように聞いてきた。

「いえ、やはり人間の子とは少し合わないみたいで。そうだ、お嬢様方に見てもらいたいものが」

私はお嬢様とパチュリー様にティーカップを置くと、懐中時計を取り出し裏蓋を開ける。

そして空間を弄って例の石を取り出した。

「これなのですが……、ホグワーツの校長が城内で大切に守っていたものです。少し悪戯心が働いて持ってきてしまったのですが、危険なものでしょうか」

お嬢様は私からその石を受け取ると透かすように眺める。

「年季は入っているようだけど……。パチエは何かわかる？」

お嬢様はパチュリー様に向けて例の石を放り投げる。

パチュリー様はその投げられた石をキャッチせずそのまま空中に留めさせると、手をかざして観察した。

「ふむ、これは賢者の石ね」

そう言って興味がないかのように石の浮遊を解いてテーブルに転がした。

「あまり価値はないものですか？」

「いえ、そうではないわ。特に魔法界ではね。賢者の石は卑金属を黄金に変え、ただの水を命の水に変える。これ一つあれば巨万の富と永遠の命が手に入る」

私はその石を見て目を見開いた。

ぱつと見た限りでは、とてもそのような貴重な石だと思えないからだ。

「でも、この程度の魔法具を有り難がるなんて魔法界も地に落ちたものね」

パチュリー様は無造作にポケットに手を入れると、カラフルな宝石をいくつか机の上に転がした。

「パチュリー様、これは？」

「全部賢者の石。私が調合したものよ。魔法界では魔法を生活を楽しむものとして使っている。それでは技術は大きく進歩しないわ。魔法使いとは知識を求める生き物なのよ。巨万の富や永遠の命は副産物でしかない。この程度で満足してそこで進化を止めてしまったら、一生本当の意味での魔法使いにはなれないわね」

ということ、この石自体に価値などないとパチュリー様は言い切った。

ようはその石を得るまでの工程や、その過程で見つけた新たな知識に価値があり、石自体に新たな知識を生み出す能力はないということだろう。

「パチエらしいわ。まあ、そういうことよ咲夜。石は自由にしなさい。パチエレベルでストイックになれとは言わないけど、魔法使いとは知識を求める種族よ。貴方、学業のほうはどうなの？」

その言葉を聞いて私はギクリとする。

適当に居眠りしながら聞いているとは言えない。

「咲夜、問題を出すわ。スペシアリス・レベリオとはどのような効果のある呪文？ 時間

を止めて教科書を取りに行くんじゃないわよ」

私は記憶の引き出しを引つ掻き回す。

だが、思い出すことは出来なかつた。

「……。えーっと」

「やっぱり、時間を止めてズルをしながら授業を受けているのね。レミイ、少し咲夜を借りるわよ」

「いつまで借りる気？ パチエ」

「クリスマス休暇が終わるまでかしら？ 取り敢えず休みの間に詰め込めるだけ詰め込むわ」

げえっと私は内心顔をゆがめる。

私はあまり勉強は好きではない。

あとはお嬢様がその提案を否定するのを期待するしかなかつた。

「ええ、私も自分の従者が馬鹿のままでは困るもの。限界まで詰め込みなさい。咲夜、授業や試験で時間を止めて成績を伸ばすことは別に禁止しないわ。自分の優位に働くと思ったら能力はどんどん使いなさい。そのほうが能力の練習にもなるしね。でも、それと勉強しないのは別問題よ」

お嬢様はぐいっと紅茶を飲み干す。

「瀟洒なメイドたるもの全ての知識に通じている必要があるわ。折角魔法学校に通うことになったんですもの。学年主席を狙えるぐらいでなきや。取り敢えず、仕事は美鈴にでも任せてクリスマス休暇は勉強をしなさい。もつとも、学校に帰ってからもただだね。これは命令よ」

「かしこまりました。お嬢様」

私はお嬢様が飲み終わった紅茶を下げると深々とお辞儀をする。

そしてティーセットを持ってその場を後にした。

「あー！ パチエ!? 多分咲夜逃げたわよ！ 追いなさい！」

「え!? そんなとこだけ幼稚なんだから！ レミイ、場所の見当はつく？」

「地下には行かないと思うし多分屋上よ！ 使い魔も貸すから徹底的に探しなさい！」

数時間後、地下の大図書館に引きずられていく咲夜を見て、廊下を掃除していた美鈴が苦笑いを浮かべた。

「オリジナルを尊重し、そこにさらにオリジナリティを付加して残すのが我々魔法使いの誇りよ。その為にはまず基礎を固め、そこへさらに新たな物を加えなければならな

「い」

パチュリー様は宙に浮いている黒板に文字を浮かべていく。

普段から見ている何気ない光景だったが、魔法を一から勉強して、改めてパチュリー様の技術に驚かされた。

「貴方にとつてのオリジナル性とは何？　そう、時間停止よ。既存の魔法に時間停止の要素を組み込み昇華させる。まあでも、その前に力の性質について理解する必要があるわね」

「力の性質？　ホグワーツではそのようなことは……」

ホグワーツでは理論と技術、そして知識を学ぶ。

そのようなことは話に聞いたことすらない。

「ホグワーツではやらないわ。魔法界では力は一つしかないと考えられているもの。この魔法界で一般的に普及している力を『魔力』と定義するわ。でも貴方はこの力とは別にもう一つ力の源を持っている。時間停止や飛行を可能としているのはそちらの方の力。つまり貴方が元々扱っていたものね。これを『霊力』と定義するわ」

魔力と霊力。

パチュリー様の話では、同じような力ではあるらしい。

「基本的に、魔力より霊力のほうが単純な力は強いわ。でも、霊力のほうが疲労度も高

い。ホグワーツで魔力の使い過ぎで倒れたという話は聞かないわよね？ もっとも、魔力も霊力も使い過ぎなければ尽きることはない。でもだからと言って魔力が霊力に劣るというわけではないわ」

そういつてパチュリー様は黒板に二つのピーカーを書いた。

一つに魔力、もう一つに霊力と上に書き加えた。

「霊力は咲夜もよく知っているように、その身一つで行使することが出来る。杖を媒介にする必要はないわ。でも、魔力は違う。杖を使わないと自らのピーカーから魔力を引き出すことが出来ないの。私の場合はこの指輪ね」

パチュリー様が人差し指に付けている指輪を示した。

あれは杖の代わりだったのか。

私の視線に気がついたのか、パチュリー様は媒介が無くても使えなくはないと付け足した。

「まずはこの二つの力の扱い方と微妙な性質の違いを理解する必要がある。魔力と霊力は混ぜ合わせて使うことは出来ない」

「それなら、魔法に私の時間操作を加えることが出来ないのでは？」

「混ぜ合わせて使うことは出来ないけど、同時に使うことは出来る。組み合わせることは出来るわけ。例えば魔法薬学ね。魔法薬学で扱う原料の中では時間経過によってど

んどん性質が変わるものがある。だから教科書とかには何回混ぜるとか記述してあるわけ。こういう場合貴方の時間操作は非常に有効的に使えるでしょう」

パチュリーは人差し指を立てた。

「二つ目に、……そうね。私が今から魔法を行使するわ。その瞬間時間を止めなさい。そして、自らも魔法を使ってみなさい」

パチュリー様は人差し指を立てたまま手をくるりと回す。

次の瞬間指の先から光の玉が打ち出された。

私はそれに合わせて時間を止める。

その魔法の玉は空中で静止した。

次に私は杖を取り出し光の玉を打ち上げる。

その光の玉は通常通り空中を進むと、ふっと消え去った。

私は時間停止を解除する。

「さて、どうなったかしら?」

「パチュリー様が打ち出した魔法は時間を止めるとともに停止しました。ですが私が行使した魔法は通常通り進んで、いつも通り消えました」

「そう、時間を止める以前に行使した魔法は止まり、止めた後に行使した魔法はそのまま動く。これは応用次第で便利に利用できるはずよ」

これは知らなかった。

というもののホグワーツでは緊急時以外あまり時間の操作を行っていないからだ。

パチュリー様が人差し指の他に中指も立てる。

「まあ、パツと思いつくのはこの二つね。自分の能力の弱点は自分が一番よく知っていると思うけど、それ自体も魔力を使えば解決できるはずよ」

私の能力の弱点。

その言葉を聞いて私は少しドキリとした。

いや、能力自体の弱点ではない。

能力の性質故仕方がないことだ。

「時間を止めるということはすなわち物体の動きを完全に静止させるということ。勿論全てを止めてしまつたら身動きも取れず息も吸えず、光すら見えずに死んでいくことになるんだろうけど。でも咲夜が時間を止めてもその世界で自由に動けるし重力だつてある。空気を吸うことも出来れば光を見ることも出来る」

パチュリー様は復習するように私の能力の謎を話していった。

「多分無意識に生存に必要なそれらの要素の時間を動かしているんでしょね。そして咲夜が止まった時間の中で物に触れるには、一時的にその物の時間を動かさないとならない」

「いえ、正確には時間停止を解除しなくても動かすことは出来ます」

「そうだったわね。でも、それをしない。出来ない。何故なら時間の止まっている物質は絶対零度。素手で触れれば自らの体が凍結してしまう。温度とはその物質を構成している原子の運動。全く動いていない原子はそれだけで生身の体には危険なものよね」「はい、ですので止まった世界で物質に触れるにはその物質の時間だけ動かさないと出来ない。止まった時間で人間を移動させるには直接触らないようにしなければなりません」

故に時間を止めた世界でその人間の時間を止めたままナイフを突き立てることは出来ない。

刺そうとしても物理的に刺さらないのだ。

止まった物質はダイヤモンドよりも強固で、どんな衝撃をもつても砕けない。

「浮遊魔法なら、好きなように時間が止まった人間を移動させることが出来るわ」
パチュリー様にそう言われて、私は目が覚める気持ちだった。

まさにその手が有ったか！ と言ったところである。

「大体理解出来たわね？ それじゃあ学校の勉強に移るわよ。さつき教えた魔力と霊力、能力の性質を意識しながら何処にその要素を組み込めるかよく考えながら聞きなさい」

「パチュリー様、おひとつ質問よろしいでしょうか」

私は学校のように手を挙げてパチュリー様に質問をする。

「お嬢様が扱う力は魔力ですか？ 霊力ですか？ 私の力とは違うと感じていたので多分魔力だと思うのですが……」

「レミイのは妖力よ。また別の力。美鈴のは気力ね。これもまた別の力。人間である貴方が使えるのは魔力と霊力だけ。まあ修行次第では気力も使えるかも知れないけど、武闘家になる気はないでしょうか？」

力と一言で言っても色々な種類があるようだ。

「まあ、あなたの場合もう少し自らの能力の定義を見直した方がいいんだけど、それに関してはまだ今度にしましょう。今は霊力と魔力の性質の話から——」

パチュリー様は話を切り替えると学校の授業のような形で色々な説明を始めた。

私はそれを学校の授業の時とはまるで違う真剣な態度で聞いていた。

パチュリー様の授業が学校のものより何倍も分かりやすく、何倍もスパルタだったの
は言うまでもない。

楽しい紅魔館でのクリスマス休暇も終わり、私はキングズ・クロス駅の九と四分の三番線で美鈴さんから見送りを受けていた。

美鈴さんは私に力いっぱいハグをしようと、そのまま動かさない。

しかもそのまま頭も撫で始める。

「ちよ、美鈴、美鈴さん！ 恥ずかしいって！」

私はそれがむず痒くジタバタと暴れるが、武の達人である彼女からの拘束からは逃げられない。

「寂しかったら、いや寂しくなくても手紙送ってね。この数か月おせうさま含める紅魔館一同すつごく寂しかったんだから」

私はそのまま美鈴さんのなすがまま揉みくちやにされるしかなかった。

「えっと、咲夜。久しぶりだね。その人は……お屋敷の人？」

誰かがこの恥ずかしい光景の中話しかけてきた。

この声はマルフォイだ。

それに気が付いたのか美鈴さんはようやくハグを止めてくれた。

私は改めてマルフォイに向き直す。

少し顔が火照っているのは決して恥ずかしさのためではないと自らに言い聞かせる。

「久しぶり、ドラコ。お隣にいるのは……ドラコのお父様かしら」

マルフォイの隣にはマルフォイをそのまま凛々しく、大きく成長させたような人物が立っていた。

「さよう。私はルシウス・マルフォイ。ドラコの父だ」

「父上はホグワーツの理事の一人で——」

「ドラコよ、それはお前が自慢すべき事ではない」

マルフォイのいつも通りの自慢を父親が制止する。

息子と比べるとやはり人間は出来ているようだ。

「ミス・十六夜。ドラコから話は聞いている。息子をよくしてくれているらしいな。私からも感謝の意を捧げよう」

「ということとはそっちの男の子は咲夜ちゃんのお友達ですね！」

美鈴さんは手を叩いて喜んだ。

「それで、そちらのチャイナ服のレディは？」

マルフォイの父親がそう聞いてくる。

まあその疑問はもつともだろう。

「あ！ 私は紅美鈴と言います。咲夜ちゃんの家族です」

「家族？ 咲夜、君親戚はいないって……」

「あ、といっても血のつながりはなくてですね。というか種族も違うし。マフィアでい

うところのファミリー的なニュアンス？」

「美鈴さん！ 少し黙ってて貰えますか？」

「これは愉快なお嬢さんだ。ドラコ、友人は大切にするといい。さあ、そろそろ列車が出る。行きなさい」

「そうですよ咲夜ちゃん！ 乗り遅れたら大変ですよお？」

美鈴さんが私とマルフォイの背中をぐいぐい押しつけて列車に押し込む。

そして親指を突き出した。

「行つてらっしゃい咲夜ちゃん。ドラコ君、咲夜ちゃんをよろしくね？」

そして次の瞬間、列車は警笛を鳴らして進みだした。

まあ取り敢えずカオスな空間からは解放されたということだろう。

私はマルフォイと共に一緒のコンパートメントに入る。

「中々テンションの高い人だね。咲夜とは大違いだ。彼女は一体？」

「そうね、言つてしまえば私の同僚兼、昔の教育係かしら？ 物心つく前から世話してもらっているし、家族のようなものと言えばその通りかも知れない」

「同僚。ということとは彼女もメイドさん？」

「ええ、私が居ない間、代理のメイド長を務めてくださっているわ」

「ということは普段は君がメイド長なのかい？ あ、いや僕の思っていた立場とは少し

違ったからさ。驚いてしまっただけだよ」

通路の方を見るとちようどハーマイオニーが前を通りかかった。

そしてハーマイオニーもこちらに気が付いたようだ。

私が手招きしたのでハーマイオニーはコンパートメント内に入ろうとするが、私の目の前に座っているマルフォイを見つけると途端に顔をしかめた。

入ってこないのだろうか。

ハーマイオニーは意を決したかのように顔を引き締めると扉を開ける。

「おや？ 誰かと思えば頭でつかちのマグル生まれじゃないか」

入ってきたハーマイオニーにマルフォイがすぐさま毒を飛ばす。

「あら、そんなマグル生まれに勉強で全く敵わない貴方は一体なんなのかしらね？」

それに対し自らの頭の良さを引き合いに出してハーマイオニーが言い返した。

「黙れグレンジャー」

「貴方が一番初めに喋ったのよマルフォイ。黙るのは貴方だわ」

「出っ歯」

「白イタチ！」

途端に口喧嘩が始まる。

「こら、理由もないのに争わない。ハーマイオニー、貴方は自分の知識を相手へひけらか

す為に使うのかしら？ ドラコ、貴方はこんなつまらない口論に大事な時間を割くほど愚かではないはずでしょ？」

私かなだめると、二人は幼稚な悪口の言い合いをぴたりとやめた。

「するならもう少し有意義な口論をしなさい。……そうね、例えば魔法界の純血主義に關してとか」

そして新たな火種を投下する。

ハーマイオニーとマルフォイは列車が Hogwarts に到着するまで私を議長に据えて純血主義に対する自分たちの考えをぶつけ合った。

仲が更に悪くなったのは言うまでもない。

鏡とか、勇気とか、賢者の石とか

クリスマス休暇が終わり、ホグワーツに戻った次の日には授業が始まった。

ハリーたちは授業の合間を縫って図書室に通いつめ、ニコラス・フラメルについて調べているらしい。

隠されている……いや、隠されていた石に関しては私はその正体を知っている。

隠されていたものは賢者の石と呼ばれる魔法具だ。

賢者の石は卑金属を黄金に変え、不老不死をもたらす命の水を作り出すことができる。

もつとも、現在ホグワーツにて大切に守られている石は私が作った外見だけはそのくちな偽物だが。

賢者の石には特殊な性質はあるが、石自体が力を発しているわけではない。

なので実際に誰かが使用してみるまでは石が偽物であるとバレないだろう。

……バレないと信じたい。

今のところハリーたちに石のことは話していない。

先生たちにバレれば退学になる恐れもある。

それは困るのだ。

「咲夜、何か見つかった？ こっちはさっぱりよ」

そして何故か私もハリーたちと一緒にになって図書室でニコラス・フラメルのことを調べていた。

完全に流れである。

「いえ、最近の魔法使いに関して少し勉強したんだけど、さっぱりね」

私はポケットからカエルチョコを取り出すと、素早く開封してカエルが逃げないうちに口に含んだ。

「咲夜、図書館での飲食は行儀が悪いわよ。マダム・ピンスに怒られるわ」

「頭使うときは糖分が欲しいのよ。閲覧禁止の棚を詳しく調べられればいいんだけど。そういうえば、ハリーが休暇中に侵入したらしいじゃない。何か面白いことはわかった？」

ハーマイオニーはやれやれと言った感じで頭を抱えた。

「ホント、三日も続けてベッドを抜け出すなんてどうかしてるわ。閲覧禁止の棚にも入れたみたいだけど、一冊二冊の本を調べるのがやつとだったみたい」

ハリーは今回のクリスマスにプレゼントとして透明マントを貰ったらしい。

なんでも、元はハリーの父親の持ち物だったようだ。

ハリーはそれを用いて深夜に閲覧禁止の棚に侵入した。

結局何も分からなかったという話だが、私としては透明マントを手に入れたという情報のほうが大きい気がする。

もしかしたら私が思っている以上に透明マントは魔法界では一般的な道具なのかもしれない。

「あら、このチョココのカードってダンブルドア校長先生のもあるのね。確かロンが集めていると言っていたっけ」

私はカードをハリーとロンのいる方向に放り投げると、再び本を広げる。

次の瞬間、ハリーの大声が図書室にこだました。

「見つけたぞー！」

「ポッターツ!! 図書室で大声出すんじゃないやありません！」

間髪入れずにマダム・ピンズがハリーよりも大きな声を上げ、私たちを追い出しに掛かる。

結局私たちはマダム・ピンズの勢いに押され、ハリーの発見を聞く前に図書室を追い出されてしまった。

図書室前の廊下でハーマイオニーがハリーに問う。

「ハリー！ 何を見つけたの？」

「これだ！ フラメルを見つけた！」

ハリーは喜々として先ほど私が投げたダンブルドア校長先生のカードを見せてくる。

そこにはパートナーであるニコラス・フラメルとの錬金術の共同研究で有名との記載があった。

それを見たハーマイオニーがあつと声を上げると、図書室の中に戻っていく。

そしてマダム・ピンスと格闘しながら一冊の本を持って帰ってきた。

「この本で探そうなんて考えつきもしなかつたわ」

一旦談話室に戻りましょうと言ひ、ハーマイオニーはページをめくりながら廊下を歩きます。

私たちもそれを追って談話室へと歩きだした。

「これだわ！ これ！」

談話室に帰ってきて十五分が経過しただろうか。

談話室のソファアの上で分厚い本をめくっていたハーマイオニーが飛び上がった。

その声を聞いてハリーとロンもハーマイオニーのところへすつ飛んでくる。

「ニコラス・フラメルは我々の知る限り、賢者の石の創造に成功した唯一の者！」

その言葉を聞いて私含め三人の顔が固まる。

時間の問題だとは思っていたが、ついに三人が賢者の石に辿り着いてしまった。

ハリーとロンはハーマイオニーの言葉に首を傾げる。

「なにそれ？」

ハリーとロンは石に関する知識がないらしい。

ハーマイオニーは呆れたと言わんばかりにため息を吐く。

「もう、貴方たち本読まないの？ こゝこ読んでみて」

ハーマイオニーはハリーのほうに本を突き出した。

ハリーはハーマイオニーが指差した場所を読み、目を丸くする。

「金を作る石、決して死なないようにする石！ スネイプが狙うのも無理はないよ！

誰だって欲しいもの」

「スネイプ先生よ、ハリー。先生」

訂正を求めるが、ハリーは私の言葉にピクリと反応しただけだった。

誰だって欲しい、賢者の石が。

私はポケットの中に手を入れるとその中にある懐中時計を握り締める。

パチュリー様は価値のない物だと言っていたが、やはり貴重な物なのだ。

そしてこの本の記述を見る限り、景品感覚で持っていいような物でもない。

私は失敗したと感じ、どさっとソファアに腰かける。

そのまま体の位置を正確に記憶した。

この状態で時間を止め、ソファアから立ち上がる。

「返してこよう。バレないうちに。バレた場合のリスクが多すぎるわ」

ハイリスクローリターンは馬鹿のやることだ。

私は急いで談話室と飛び出すと、四階の廊下までの最短ルートを飛行する。

勿論、時間が止まっている為、その行為にあまり意味はない。

ただ単純に、焦っているだけだ。

「アロホモラ」

私は扉の鍵を開け、四階の廊下に入る。

隠し扉は完全にフラツファイが踏みつけてしまっていた。

「ウインガーディアムレヴィオーサ」

私はフラツファイを浮かし少しずらすと、隠し扉を開け中に飛び込む。

変な植物（パチュリー様に聞いたところによると悪魔の罨）を素通りすると鍵鳥の部

屋の扉をピッキングする。

チェス盤、トロール、瓶の部屋を抜け、石の置いてあった部屋へと突入した。

「はあ……はあ……。まったく。焦りすぎよ私。しつかりしなさい」

私は自分の顔を軽く叩き気持ちを切り替える。

そして改めて部屋を見まわした。

「机がない！」

そして絶望した。

賢者の石が置いてあった机がなくなっており、大きな姿見に変わっている。

大事な物の割には無造作に置いてあるとあの時は感じたが、どうやらあれは中途半端な処置だったらしい。

この鏡が最後の罠なのだろう。

鏡の上の枠には奇妙な文字が彫ってある。

『すつうを みぞの のろここ のたなあ くなはで おか のたなあ はしたわ』

「私は貴方の顔ではなく貴方の心の望みを映す。なんで反対なのかしら？」

私は慎重に鏡の時間停止を解く。

先ほどもで私の姿を映していた鏡は、少し違う様子を映し出した。

私のお嬢様が映っている。

吸血鬼であるお嬢様が鏡に映っているということは、やはり普通の鏡ではないのだろう。

私はその横で紅茶をお出ししていた。

いつもの紅魔館の光景だ。

こんな普通のこと私が私の望みということなのだろうか。

「それで一体賢者の石は何処に……」

私は鏡に映っているお嬢様の部屋を隅々まで見回す。

中々それらしいものはない。

だが私はお嬢様の部屋にある、あるものを発見し、その場に座り込んでしまった。

それはカレンダーだった。

一月の日付が記載された、なんの変哲もない紅魔館のカレンダーだ。

そこに書かれている西暦以外は。

「……一九八四年。今から千年近く未来だ」

鏡に映る私は、千年後も変わらずお嬢様に仕えている。

これが示すことはつまり、そういうことなのだろう。

死にたくない、いつまでもいつまでもお嬢様に仕えていたい。

いずれ来る自分の死を直感的に感じ、私の体が震え出す。

そう、このままでは私はあと百年もせずに死ぬのだ。

私はポケットの中をまさぐり、懐中時計を取り出す。

この中には賢者の石が入っている。

石を使えば永遠の命が手に入る。

不老不死の体を手に入れることが出来る。

鏡の映す内容が変わる。

私がコップに入った水の中に賢者の石を入れ、命の水を作り飲んでいる。

そう、それこそが私の望み——

「い、いや……違う！ それは違う!!」

私は鏡に頭を打ち付ける。

割れることはなかったが、鏡がたわみその光景が少し揺らいだ。

「私は永遠の命が欲しいわけじゃない。私は……私は……」

懐中時計をポケットに仕舞い直し、鏡と向かい合った。

「私は十六夜咲夜。お嬢様の手となり足となる存在。いずれ永遠の命を手に入れるかも

知れないけど、それはお嬢様ご自身がそれを望んだ時だ」

私はメイドであり道具である。

勝手な行動はしてはいけない。

もし私が必要であるのなら、お嬢様のほうからその提案をしてくるだろう。

それまでは自分勝手なことは控えるべきだ。

私は部屋を後にする。

賢者の石を元の場所に戻すことは出来なかったが、この場合仕方がないだろう。

私は談話室に戻ると先ほどのソファーに腰かけ、時間停止を解除する。

「それに『魔法界における最近の進歩に関する研究』に載ってなかったわけだ。だって六百六十五歳じゃ厳密には最近とは言えないよなあ」

ちようどロンがハリーに対して話をしているところだった。

私は鏡のことを記憶の奥底に仕舞うと、会話に交ざった。

数日後、クイディッチの試合が行われた。

審判がスネイプ先生だということでハリーたちはギリギリまで試合に出るべきか悩んでいたようだったが、結果を見れば出て正解だっただろう。

ハリーは試合開始から五分も経たないうちにスニッチを見つけ、スネイプ先生が妨害を加える暇もなく試合を自分のチームの勝利という形で終わらせたのだ。

もつとも、スネイプ先生がそのような妨害を加えるとは私は思っていなかったが。

そんな試合があつてすぐのこと。

ハリーは浮かれているものかと思つたが、何か緊急のことがあるらしく神妙な面持ちをしている。

ハリーは私たちを空き教室に引っ張っていくと、誰もいないことを確認して話し始め

た。

「僕らは正しかった。賢者の石だったんだ。それを手に入れるのを手伝えつてスネイプがクイレルを脅していた」

「ハリー、スネイプ先生よ。それにクイレル先生」

「……スネイプ先生がクイレル先生を脅していた。スネイプ先生はフラッツフィーを出し抜く方法を知っているかって聞いてた……。それと、クイレルの——」

「先生」

「……クイレル先生の怪しげなまやかしのことも何か話してた……フラッツフィー以外にも何か特別なものが石を守っているんだと思う。きつと人を惑わすような魔法がいっぱい掛けてあるんだよ。クイレ……クイレル先生が闇の魔術に対抗する呪文をかけて、スネイプがそ——」

「ハリー、先生よ」

「大事な話をしてるんだッ！ 少し黙っててくれ！」

「礼節は大切よ？」

私がそういうとハリーは頭を抱えるようにため息をつく。

代わりにハーマイオニーが話し出した。

「つまり、賢者の石が安全なのはクイレル先生がスネイプ先生に抵抗している間だけと

いうことになるわね」

その言葉を聞いてロンが何かを想像したのか、苦笑いしながら呟く。

「それじゃあ、三日と保たないな。石はすぐに失くなっちまうよ」

私はその件に関しては安全だとみんなに伝えようか迷った。

石は私が持っている。多分まだ誰にも気が付かれていないと。

だが、私にはそのようなリスクを犯す勇気はなかった。

私はその日以降、鍵鳥の部屋でくつろぐことが多くなった。

今日も就寝時間が過ぎてから私はこの部屋に来ていた。

綺麗な羽を羽ばたかせ、自由に室内を飛ぶ何百羽の鍵鳥は見るだけで私の心に安らぎを与えてくれる。

少し進めばあの鏡があるが、覗きに行こうとは思えない。

本来なら学年末テストも近いので勉強しなければならぬのかも知れない。

だが時間という概念が人とは違う私は、どうにも勉強する気にはなれなかった。

第一、勉強しろと一番五月蠅いのはハーマイオニーなのだが、その本人ですら違うことに現を抜かしている。

ハグリッドと一緒にドラゴンを育てていたかと思えば、夜間出歩いているところをハ

リーやロングボトムと共にマクゴナガル先生に見つかり三人合計で百五十点もの減点を食らったり、それが原因で禁じられた森で罰則をこなさなければならなくなったりと。

そういえば罰則は今夜だったかと懐中時計を見て確認する。

どんな罰則を受けているかは分からないが、何とも阿呆らしいと感じた。

ぼんやりと鍵鳥を眺めながら私は色々と考え事をする。

賢者の石は私が手にしているので守りは盤石だ。

情報面でも物理的な面でも。

私が賢者の石を持っていることを知っているのはお嬢様とパチユリー様以外誰もいない。

私はお二人を信用している。

お嬢様方から情報が漏れることはないと言言できる。

次に物理的な面だが、賢者の石は私の懐中時計の中に空間操作の術を用いて仕込んである。

故に時間操作の能力をを扱うことが出来ない人間には取り出すことすらできないわけだ。

だがそのことをハリーたちは知らない。

石を守ろうと必死になって動いている。

まあそのわりには寄り道が多い気がするが。

今日の件とか。

「もしスネイプ先生がクイレル先生を問い詰めているとして、クイレル先生はよく保っているほうね。腐っても闇の魔術に対する防衛術の担当教師なだけはあるのかしら」

まあ、スネイプ先生がそのようなことをする人だとは思えないが、ハリーたちから言わせてみればスネイプ先生は私利私欲のために石を狙っている、ということにしたらしい。

まあそう仮定できるだけの判断材料が手元に集まってしまったからというのもあるだろうが。

この部屋に来て数時間が経ち、そろそろいい時間ではあるので私は時間を停止させて談話室に戻る。

談話室の中ではロンがソファアに座って眠っていた。

時間停止を解除し、毛布をロンに掛けると私も近くのソファアに腰掛ける。

ハリーたちを待っていたのだろうか。

まあ状況から察するにそうだろう。

ロンもハリーたちと共にドラゴンの世話をしていた。

自分だけが罰則を受けなかったのに引け目を感じているらしい。

私はロンを起こさないよう静かにソファアを立つと、もう寝ようと女子寮へと続く扉に手をかける。

だが、次の瞬間ハリーとハーマイオニーが慌てた様子で談話室の中に転がり込んできた。

ハリーはソファアに座っているロンを見つけると、力強く揺すり起こし始める。

「ハリー、寝ている人を起こすときはその人に殺されるかも知れないというぐらいの覚悟を持って起こした方がいいわよ？」

私がそう窘めるが、ハリーは全く私の話を聞いていなかった。

「大事な話があるんだ！　ロン起きてくれ！　咲夜も聞いてくれ！」

ハリーに叩き起こされロンは少し不機嫌だったが、ハリーはそんなことは気にも留めずに話し始める。

ハリーの支離滅裂な説明を簡単にまとめるとこうだった。

罰則中、禁じられた森で何者かに襲われ、ケンタウロスに助けられた。

その何者かというのはユニコーンの血を吸って生きながらえているヴォルデモートだ。

その簡単なことを説明するのに20分も話し続けている。

その長さ故か事態の深刻さ故か、ロンもすっかり目を覚ました。

ハリーはまだ落ち着かないのか、暖炉の前を行ったり来たりしていた。

「スネイプ……先生はヴォルデモートの為にあの石が欲しかったんだ。……ヴォルデモートは森の中で待ってるんだ。僕たち今までずっとスネイプはお金のためにあの石が欲しいんだと思ってたのに」

「その名前を言うのはやめてくれ！」

ヴォルデモート卿の名前を聞いてか、ロンが恐々と囁く。

だがハリーの耳には入っていない。

「フィレンツェは僕を助けてくれた。だけどそれはいけないことだったんだ。ベインが物凄く怒ってた」

誰とも知らない名前を連呼しながらハリーは誰に言うでもなくブツブツと呟き続ける。

「惑星はヴォルデモートが戻ってくるかと予言しているんだ。ヴォルデモートが僕を殺すならそれをフィレンツェが止めるのはいけないって、ベインはそう思ったんだ。僕が殺されることも星が予言していたんだ」

「頼むからその名前を言わないで！」

ロンが人差し指でも立てるかのようにハリーに忠告する。

要するにどちらも怖いのだ。

ヴォルデモート卿が。

「ハリー、落ち着いて。大丈夫よ。ロンも」

私は今にも取っ組み合いを始めそうなほど距離を詰めている両者の頭を一緒に抱きしめた。

二人は一瞬なにか起こったか分からないような顔をしていたが、状況を理解すると同時に固まる。

「この場には例のあの人はいないし、ホグワーツにはダンブルドア校長先生もいるのよ？　ダンブルドア先生がいる限りあの人も手出しは出来ないわ」

私はそのままゆっくり二人の頭を撫でる。

昔よくこうやって美鈴さんに慰められたが、とても落ち着いたものだ。

「あの、咲夜？　わかったから手を放して欲しいんだけど」

「同感」

ハリーとロンが意識を取り戻したかのように少しジタバタするが、すぐに顔を赤くして動かなくなる。

その様子を後ろで見ていたハーマイオニーが呆れたように肩を竦めた。

「それ天然でやっているのだとしたら大したものね」

私は何のことだか分からず固まった二人の頭を撫で続けるしかなかった。

数日が経ち、学期末テストが行われた。

お嬢様から言いつけられたということもあり、休み明けからは授業を真面目に聞くようにはしていたし、パチュリー様に言われたように復習やテスト対策もしている。

どうもハリーは例あの人のが気になるようで全く集中できていなかったが、ハーマイオニーは命でも懸かっているかのような気合の入りようだった。

筆記テストが終わると実技の試験に入る。

呪文学では一人ずつ教室に入り、パイナップルを机の端から端までタップダンスさせられるかどうかを試験した。

私は元々物質を操る呪文は得意だったので見事なタップダンスをパイナップルに躍らせることが出来た。

変身術ではネズミを嗅ぎたばこ入れに変えることが試験だった。

美しい箱は点数が高く、逆に髭でも生えているようだったら減点を貰う。

装飾はお手の物だ。

魔法薬学では忘れ薬の調合が試験だった。

みんなが必死になって頭を抱えている中、私とハーマイオニーだけ異様な速度で調合

を進めていったのでそれはそれは異様な光景だっただろう。

もつとも、私は時間を止めて手順を短縮していたが。

筆記と実技のテストが終わり、生徒たちはようやく解放される。

テストの時の緊張した顔を緩め、各々が自由な時間を満喫していた。

天気が良かったので私も芝の上で横になり、青い空を眺める。

今思えば不思議な光景だ。

一年前までは普段青空を眺める機会も少なかったというのに、今では昼間に行動するのが普通になっている。

今日は一日ここで昼寝でもして過ごそうかと、そんな呑気なことを考えていると私の目の前にハリリーの顔があった。

「咲夜！ 大変なことが分かったんだ！ 一緒に来て！」

ハリリーは私の上で大声で叫ぶ。

そのまま顔でも蹴っ飛ばしてやろうかとも考えたが、後ろにいる二人も焦ったような顔をしている。

私はゆっくり立ち上がると、背中についた芝を軽く手で払った。

「こんな天気の良い日に一体どうしたのよ」

私はハリリーの後ろついて歩き出す。

ハリーは早足で歩き出しながら口を開いた。

「ハグリッドが怪しい奴にフラッフィーの手懐け方を教えてしまった。ドラゴンの卵をハグリッドにあげたのは変装したスネイプかヴォルデモートだったんだ！ 村のパブでハグリッドを酔わせてしまえばあとは簡単だったに違いない。早くこのことをダンブルドア先生に伝えないと！」

「でもそれって随分と前の話じゃない。今更な感じがあるけど……」

私がそう反論するがハリーは聞く耳持たずだ。

ハリーたちは校長室を探しているようだが、一向に見つからない。

私自身、校長室が何処にあるか知らないし、そもそもダンブルドア先生が何処に住んでいるのかすら知らなかった。

「こうなったら僕たちとしては——」

ハリーがそう言いかけた時、急に反対側から声を掛けられる。

「そのの四人、こんなところで一体何をしているんですか？」

マクゴナガル先生だ。

何かの授業の準備なのか、両腕に山のように本を抱えている。

「ダンブルドア先生にお目にかかりたいんです」

「ダンブルドア先生にお目にかかる？」

マクゴナガル先生は生徒がどうしてそのようなことを望むのか怪しいともいうように、ハーマイオニーの言葉をオウム返しに聞き返した。

「理由は？」

マクゴナガルの問いにハリーが少し悩むような顔をする。

「……すみません。言えませんが」

そんなハリーの返答を聞いて私は失敗したと思う。

緊急なのだとしたら誰であれ事情を話すべきだ。

「ダンブルドア先生は十分ほど前にお出かけになりました。魔法省から緊急のふくろが来て、先ほどロンドンに飛び発ちました」

私は一瞬先生が嘘をついていると考えたが、一年生四人を追い返すのにそこまで大層な嘘はつかないだろうと考え直す。

「先生がいらっしゃらない？ この肝心な時に！」

ハリーが慌てたように叫ぶ。

「ポッター。ダンブルドア先生は偉大な魔法使いですから、大変多忙でいらつしやいます」

マクゴナガル先生の声色は完全に癩癩を起した子供を宥めるそれだった。

「でも重要なことなんです」

「魔法省の件よりもですか?」

マクゴナガル先生の眼鏡が光る。

これ以上は石のことを秘密にして話すの限界だ。

ハリーも同じ考えだったらしく、意を決して真実を告げる。

「実は……賢者の石のことなんです」

賢者の石という単語は完全にマクゴナガル先生の予想の外にあったものらしい。

先生の手からバラバラと本が落ちたが先生は拾おうとしなかった。

仕方がないので私が拾う。

その間にも私の上で話は進んでいた。

「どうしてそれを?」

もう既に先生はしどろもどろだ。

「誰かが石を盗もうとしています。どうしてもダンブルドア先生にお話ししなくてはならないんです」

「ダンブルドア先生は明日お帰りになります。どうやって石のことを知ったのか分かりませんが安心なさい。石の守りは盤石です。誰にも盗むことは出来ません」

「ふふ……」

私はマクゴナガル先生の余りにも自信たっぷりな言い分に途端に嘖き出してしまっ

た。

誰にも盗むことが出来ない？

今私の手元にあるのだけけれど。

「何が可笑しいのですかミス・十六夜。ポッター、大丈夫です。さあ、折角の良い天気なのでですから外に行きなさい」

マクゴナガル先生はそういうと散らばった本を拾おうとしたのか下を見て屈む。

だが本は私が全て拾っていたので一冊も地面には落ちていなかった。

「あ、ああ十六夜、ありがとう。貴方も外へ行きなさい。折角テストも終わったのですから」

「先生、本を運ぶのを手伝います。ハリー、ちよつと行つてくるわね」

私は先生の落とした本をトレーを持つかのように胸の位置で片手で持つと、先生の後をついてハリーたちと離れる。

そしてハリーたちの声の届かないところまで歩くと、私はマクゴナガル先生に質問をした。

「先生、本当に本気で石の守りは盤石だと思いますか？ あの様子じゃ今にも隠し扉の奥へと突つ込んでいって石を自らの手で保護しようとしていますよ、彼ら」

「勿論、石の守りにはホグワーツに勤めている多くの魔法使いが協力しています。新入

生が突破できるようなものではありません」

マクゴナガル先生はまだ少し気が動転しているようだ。

私は分かりやすいように付け足す。

「だったら尚更、ハリーたちが突っ込んでいったら危ないのでは？」

マクゴナガル先生の顔色が赤から青に変わる。

私の言いたいことを理解したらしい。

「この本は図書室に返しておきますので、急いで四階の廊下に向かった方がいいと思います。私も自分の通う学校から死者を出したくないので」

その言葉を聞いてマクゴナガル先生はすっ飛んでいった。

方向的にフラツフィーのいる扉の前に急いでいるのだろう。

これで今すぐハリーたちが部屋に入るのを防ぐことが出来る。

今止められても多分また夜に忍び込もうとするだろうが、それまで時間の猶予が生まれるというのはこちらの精神的にも楽だ。

私は図書室に先生の本を届けると、談話室に向かった。

談話室に戻るとハーマイオニーとハリーが何やら口論をしていた。

まあ石に関するのだとは容易に想像できるが。

「僕は今夜ここを抜け出す。『石』を何とか先に手に入れる」

「気は確かか!？」

「ダメよ! マクゴナガル先生にもスネイプにも言われたでしょ! 退学になっちゃうわ!」

「だからなんだっていうんだ! わからないのかい? もしスネイプが石を手に入れたらヴォルデモートが戻ってくるんだ。滅点なんて問題じゃない。今晚、僕は石を手に入れる。君たちがなんと言おうと僕は行く。いいかい? 僕の両親はヴォルデモートに殺されたんだ!!」

ハリーは完全に熱くなってしまうていた。

こうなった人間は中々止まるものじゃない。

「……その通りだわハリー」

その時、耳を疑うような言葉が聞こえてくる。

ハーマイオニーの声だ。

まさかハーマイオニーがハリーの滅茶苦茶な案に乗つかるとは思ってもみなかった。

「三人もマントに入れるかな? いや、四人か」

ロンが私の方を見て言った。

いやいや、冗談じゃない。

「私は行かないわよ。冗談じゃない」

少し薄情かも知れないが、私が肯定してしまつたらこの暴走を止める人間が居なくなる。

「そうかい。ハリー、今から作戦を考えよう」

「そうね、準備はしすぎるに越したことはないわ」

「だからどうかしていると云つているのよ。新入生三人が教員の仕掛けた罠に突っ込んで生きて帰れると思うの?」

私は一番確率的に高い死の予想をハリーに突き付ける。

だが、すぐにそれは無意味だと悟つた。

「ヴォルデモートの復活を食い止めなきゃどちらにしろ僕は殺されるんだ! だつたら僕は確率が低くても生きる道を選ぶ!」

私はもう何を言つても無駄だと悟り、それ以上の口出しはしなかった。

夕食後、ハリーたちは談話室でじつと機会を待っていた。

私はそんな三人を前に肩を竦める。

もつとも私が石を持っていると話してしまえばそれで済む話なのだろう。

だがそれは同時に私の能力についても話すということだ。
それは出来ない。

しばらくして、私たち以外の全員が寝室に上がっていくと、ロンが静かに口を開いた。
「ここで着てみた方がいいな。三人で隠れられるかどうか確かめよう。咲夜、完全に隠れられているかい？」

ハリーたちは一塊になるとマントを上から羽織る。

「ええ、完全に見えないわ。足音にさえ注意したら私にだって分からないぐらいね」
「君たち、何しているの？」

マントの確認が終わると同時に部屋の隅からひよっこりとロングボトムが顔を出す。
その手にはネビルのペットのヒキガエルであるトレバーがしっかりと握られていた。
「どうやら先ほどまで寝室内を探し回っていたようだ。」

「なんでもないよ、ネビル。なんでもない」
ハリーが急いでマントを隠し、誤魔化す。

「また外に出るんだろ」

ロングボトムが決めつけるように言い切った。

「ううん、違うわよ。何処にもいかないわ。ネビル、もう寝たら？」

ハーマイオニーがロングボトムに提案するが、ロングボトムは聞く耳を持たない。

案外ロングボトムとハリーは同じような性格なのかもしれない。

「君たちが見つかつたらグリフィンドールはまた減点されてしまう。い、いかせるもんか！ 僕、僕……君たちと戦うツ!!」

「ネビル、大切なことなんだ。僕たちは行かなくちやならない。例え君を気絶させてでも」

「やるならやってみろ！ 殴れよ！ いつでも掛かつてこい！」

とうとうロングボトムは拳を振り上げ言い切つた。

ハリーはその様子に心底困つたかのような顔をする。

それを見かねたハーマイオニーが申し訳なきように一歩進み出た。

「ネビル、本当にごめんなさい。ペトリフィカス・トタルス、石になれ！」

ロングボトムは頭の前からつま先まで一直線に硬直すると、そのままうつ伏せに倒れ込んでしまった。

私は咄嗟にそれを受け止めて仰向けにしてソファーに寝かせる。

「全身金縛りの呪文をかけたわ。まだ意識はあると思うけど……」

「ネビル、ごめん。今は理由を話している時間はないんだ」

ハリーたちはそう言い残し、透明マントを被つて談話室を出ていく。

私はロングボトム、いやネビルの頭を優しく撫でると、彼に話しかけた。

「自分の寮を守る為に仲間立ち向かう。中々出来ることではないわ。少し見直したわよ」

私は杖を取り出しネビルに向けて振るう。

「ステューピファイ」

私はネビルに失神呪文をかけた。

これから起きることを彼が認知しないように。

彼がこのまま恐怖に身を震わせながら朝まで談話室で転がっていなくともいいように。

ネビルの意識が落ちると私は時間を止めた。

「さて、盗人と馬鹿三人が鏡の前にたどり着く前に、私が先回りしないとね」

談話室を出て目指すは隠し扉の奥。

例の鏡が置いてある部屋へと私は向かった。

隠し扉を通り鏡の前まで来たが、誰ともすれ違いはしなかった。

ハリーたちは透明マントを着て廊下を歩いているから元々見えないだろう。

だがハリーたちが言うところの石を狙う何者かの姿も見えない。

先回りする形になったのだろう。

私は時間停止を解除すると鏡と向き合った。

鏡の中にはやはりお嬢様と私が映っている。

お嬢様に仕えている私はとても幸せそうな表情を浮かべていた。

カレンダーの年号は一九九一年十二月。

この前のクリスマス休暇のひと時と酷似していた。

「何者だ！」

突然後ろから怒鳴り声が聞こえている。

私はその場で優雅に振り返ると、その何者かと対面した。

「こんばんわ。いい夜ですわね。『クイレル』先生」

私の目の前にはいつものオドオドした表情ではなく、非常に凛々しい表情をしたクイレル先生が立っていた。

クイレル先生はこちらを油断なく睨みつけている。

「授業ではお世話になっております。十六夜咲夜です」

「十六夜か、そこをどけ。私はその鏡に用がある」

「賢者の石ですか？」

クイレル先生がジロリと私を睨む。

「どうやら君は事情を知っているようだ。私は我が主の為に賢者の石を手に入れないと
ならない。そこをどけ」

私は素直に鏡の前を空ける。

その様子を見てクイレル先生は不審そうな顔をした。

「……まあいい。この鏡からどうにかして石を取り出さなければ。一体どうなっている
んだ？ 鏡を割ってみるか？」

クイレル先生はブツブツと呟きながら鏡を叩いたり裏に回ったりしている。

私はその様子を手を前に組んだまま見守った。

「この鏡はどういう仕組みなんだ？ どういう使い方をするのだろうか……」

クイレル先生は顎に手を当てて考え込む。

私はクイレル先生の方に歩み寄る。

その様子にクイレル先生は一瞬警戒したが、何もできないだろうと結論付けたのか攻
撃はしてこなかった。

「この鏡は貴方の望みを映します。貴方の望みが賢者の石を使うことならその場面が映
り、賢者の石を見つけることならその場面が映るでしょう」

私も鏡を見る。

お嬢様と私が映し出される。

すると鏡の中に映る私が、私に微笑みかけた。

鏡に映る私はメイド服のポケットに手をつ突っ込むと、賢者の石を取り出す。

そしてそれを戻すように石をポケットに入れなおした。

途端にポケットにズシリとした重みを感じる。

私は目を見開いた。

「あ」

私はクイレル先生の前でポケットから賢者の石を取り出した。

「え？　こーういう？　手に入っちゃった」

私はクイレル先生の方を向く。

クイレル先生も驚いたように私の方を見ていた。

「それを渡——」

「はい、差し上げます」

私はクイレル先生の言葉を遮るように言葉を重ねる。

その言葉にクイレル先生は警戒心を強めた。

「何故だ？　お前の行動には謎しかない。一年生であるお前があのような罠を私より早く突破し、ここで待ち構えていた。私が石を入手するのを阻止するものかと思っただ、それもしない。いや、むしろ今こーうして差し出している」

「だって先生貧乏そうなんですもの。最近体調も悪そうですし……。この賢者の石があれば富も健康も手に入りますわ。それに、仕える者同士、理解し合えるものもあるでしょうし」

私はクイレル先生に笑顔で半年以上前に私が作った『偽物』の石を差し出した。

クイレル先生は事情をよく分かっているような顔をしていたが、目的を果たすために私が差し出した石に手を重ねる。

「まさか、二人が！」

その瞬間、いきなり通路の方から大声が聞こえてきた。

私とクイレル先生は手を重ねたまま固まってしまい、首だけを動かして声のしたほうを見る。

ハリーだ。

ハリーが信じられないものでも見るような目で私たちを見ていた。

「僕は……てつきりスネイプだとばかり……。それに咲夜、君まで！」

クイレル先生は私の手から賢者の石を受け取り大切そうに仕舞うと、ハリーの方に体ごと振り向く。

私は一歩下がりがりクイレル先生の右斜め後ろに立ってハリーの方を向いた。

いつもの癖でそうしてしまっただが、この立ち位置では本当に私とクイレル先生が仲間

のようではないか。

「セブルスカ。あのお邪魔虫さえいなければ私は我が主の宿敵を殺すことができているはずなのに。あやつさえいなければ」

「スネイプが僕を助けたってことか!？」

「先生よ。ハリー」

「それだけじゃない。私がハロウインの日にトロールをホグワーツ内に入れ混乱を起こした時でさえ、セブルスは真つ先に私の前に立ちはだかった。ポッター、君はここで死ぬのだ。ここには君のことを助けてくれる優しいスネイプ先生はいないぞ?」

「ほら、クイレル先生ですらスネイプ『先生』というじゃない。ハリー、礼節は大事よ」
「君は何の話をしているんだ!!」

ハリーは私の方を見て怒鳴る。

「君もヴォルデモートの仲間なのか? この一年間僕たちを騙していたのか?」

ハリーが私に怒鳴る。

この質問の答えはクイレル先生も興味があるのか、私のほうを見ていた。

「私は闇の支配者に仕える身。仲間など恐れ多いわ。私は我が主の手であり、足であり、道具だから」

そこまでノリノリで答えて、これでは更に誤解されてしまうと思ひ至る。

フオローを入れようと口を開く前にハリーが聞いた。

「そんな！ 友達だと思っていたのに……」

「え？ 貴方と私は友達じゃないわ」

ハリーは私に向けて杖を構える。

まずい、咄嗟に本音が出てしまった。

「ふつ、まさかこんなところに同志がいたとは。これは好都合だ。十六夜よ。ここでハリー・ポッターを足止めしなさい。私は我が主と共に一足早く安全な場所へと逃げることにする」

クイレル先生が杖を振るうと、クイレル先生の横に小さなゴブリンのようなものが見える。

そして瞬間移動でもするように何処かに消えてしまった。

「あ！ クソ。君のせいだ……ッ！」

ハリーが杖を振るう。

デタラメな振り方だ。

呪文も何もあつたものじゃないが、純粋な魔力が杖からは放たれていた。

「プロテゴ。守れ！」

私は魔法の障壁を張ると、ハリーの攻撃を受け流した。

「争う理由なんてないはずだけど」

私はハリーの撃ち出す魔力をはじきながらハリーに問いかける。

だがハリーはやはり人の話を聞いていなかった。

「君のせいで！ 君のせいで闇の帝王が復活してしまう！ ヴォルデモートが魔法界で何をしたか知らないわけじゃないだろうッ！」

「知らないわ。だって私魔法界にいなかったもの。それは貴方もでしょう？」

「そういう意味じゃない！ 君はいつもそうやって話をはぐらかす……僕は殺されるんだ！ 復活したヴォルデモートに！」

「そう言えばどうしてクイレル先生はあんなに急いでいたのかしら。脱兎のごとく逃げてしまったけれど」

私はハリーの攻撃を受け流しながら考えた。

ハリーは怒りに身を任せているためか、魔法らしい魔法は飛んでこない。

「貴方はどう思う？」

「知ったことか!!」

「わしじゃよ」

通路の方から声が聞こえる。

ハリーはその声を聞いて凄い勢いで振り返った。

ハリーからの攻撃が止むのと同時に私も声がした方向を見る。

「ダンブルドア先生！ 帰ってきたのですね！」

声の主はダンブルドア校長先生だった。

ダンブルドア先生は優しく微笑むと、私たちの無事を確認する。

「二人とも無事で何よりじゃ。ハーマイオニーが顔を真つ青にして飛び出してきた時は流石のわしでも遅かったかと思つたほどじゃよ」

「先生！ 咲夜が、クイレルに石を渡してしまいました！ 咲夜はヴォルデモートの手下だったんです！」

ハリーは物凄い勢いでダンブルドア先生に捲し立てる。

ダンブルドア先生はそれを聞き、私の瞳をじつと見つめた。

「服従の魔法は掛かつてないようじゃの。咲夜よ、ハリーの言っていることは本当かね？」

私はいつもの調子でダンブルドア先生に微笑むと、言葉を紡ぐ。

「ええ、本当です。鏡から石を取り出し、クイレル先生に渡しました」

ダンブルドア先生の目が厳しいものに変わる。

「脅されたのかね？」

「いいえ。自分の意思で」

「それは何故じゃ。まさかヴォルデモートに忠誠を誓っておるわけではあるまいな？」
私は静かに首を振る。

「それも『いいえ』です。私が仕えるのはレミア・スカーレットただ一人」
「でもさつき闇の支配者に仕えるってっ！」

ハリーが私の言った言葉を復唱するように怒鳴った。

ダンブルドア先生は今度はハリーの方に振り向く。

その前に私に目配せを飛ばしてきた。

お嬢様のことを知っているのだろうか。

私はこくりと頷いた。

「ハリー、本人から聞いておるかも知れんが、咲夜はあるお方に仕えておる。それはわしも、学校の先生たちも良く知っていることじゃ。レミア・スカーレット。彼女の主は数百年を生きる吸血鬼なのじゃよ」

ハリーは信じられないといった顔で私のほうを見た。

私は不敵な笑みを浮かべる。

「あら？ 言ってなかったかしら」

そう、お嬢様は凄いな。

「でもそれとこれとは別じゃ。咲夜よ。何故石をクイレルに？ 返答によつては君を退

学処分にせねばならん」

「先生、それはハリーを守るためです」

ダンブルドア先生の目が少し優しいものへと変わる。

ハリーも啞然といった表情を浮かべていた。

「クイレル先生……あ、もう先生じゃないのか。クイレルはハリーを殺そうとしていました。それは先生もよく知っていることだと思えます。あのまま二人きりで対面させてしまっていたら、ハリーが石を手に入れていたことでしょう。当然の流れでクイレルがそれを奪おうとしますが、ハリーが素直に渡すとも思えません」

私はハリーの顔を見る。

「ハリーの性格なら、意地でも石を守ろうとするはずですよ。命に代えてでも。なので私は先にクイレルに石を渡しました。彼が急いで逃げたところを見るにダンブルドア先生が帰ってきたことが分かっていましたよ。クイレルはこう思ったことでしょう。」「石は手に入れた。ハリーも殺していきたくところだが、時間がない。ここは一旦撤退して我が主を復活させ、再度ハリーを殺そう」と。一つ目的を達成したことによる妥協を狙ったのです」

「それって結局僕が死ぬことになるじゃないか!!」

ハリーは激怒して杖を構えるが、ダンブルドアが制した。

「咲夜、咲夜よ。君の行動は実に理に適っておる。じゃが、クイレルに石を渡すことは避けた方がよかつたじやろう。わしらが作った守りが弱かったのも原因じゃが、石は守り通すべきじゃった。だが終わったことをいくら言っても仕方がない。私は急いでクイレルを追うとしようかの」

ダンブルドアは急ぎ足で来た道を帰ろうとする。

私はそんな先生に言った。

「だとしたらパーフェクトです。先生。ハリーは生きていますし、クイレルも死んでいない。そしてヴォルデモートは『復活しない』」

ダンブルドア先生の足が止まる。

「どういふことかね」

先生が振り向き、私に尋ねてきた。

私はハリーが魔力で砕いた壁の一部を拾うと、魔法をかける。

壁の一部はみるみるうちに賢者の石のような外見へと変化した。

私はその偽物をダンブルドア先生に投げ渡す。

「クイレルさんには偽物を渡しておきました。本物はこちらに」

私はポケットの中で器用に懐中時計から石を取り出すと、あたかも石がポケットに入っていたかのように手渡した。

「先生、これが真正正銘の賢者の石です。ご確認ください」

ダンブルドア先生は私が渡した偽物と本物を見比べると、今度こそ満面の笑みを私に向けた。

「ああ、パーフェクトじゃよ。咲夜」

「つまり、君は僕を助けるために一芝居うつつたつてことかい？　こんな完璧な変身術を使つて」

ハリーが驚いたような声を上げる。

そして途端に申し訳なさそうな顔になった。

「あら、引け目を感じているの？　真に謝る相手はほかにいるんじゃない？　ほら、散々

疑つたけど結局無罪だった——」

「それつてスネイプのことかい？」

「ハリー、スネイプ先生じゃろう（でしよう）？」

私とダンブルドア先生の声が重なる。

ハリーはうんざりしたかのように顔をしかめた。

ダンブルドア先生は私の話を信用してくれたようで、私とハリーは簡単な質疑の後解

放された。

ハリーはしきりに私に謝っていたが、私はそもそも怒ってはいない。

それに、私はハリーを助ける為だけにクイレルに偽物の石を渡したわけじゃない。

クイレルには私が石を偽物に入れ替えたのか、ダンブルドア先生が石を偽物に入れ替えたのか判断が付かない。

つまり、ヴォルデモートからしたら、私は敵なのか味方なのか分からないのだ。

あそこで下手に反抗するとヴォルデモートは私のことを敵だと判断するだろう。

それでは私はヴォルデモートの敵という重荷を背負うことになってしまう。

お嬢様に迷惑を掛けないためにも中立でなくてはならないのだ。

これは予想だが、クイレルはダンブルドア先生が初めから石を入れ替えていたと判断するだろう。

外出をする前に入れ替え、本物は自分で所持し出かけたものだと思うはずだ。

「本当にごめん！ 咲夜。僕、君の話も聞かないで」

「ハリー、しつこいわよ。怒ってないって言っているし、許すとも言っているじゃない。

それともハリー、貴方は私に殴られでもしたら満足するのかしら？」

「そうじゃないけど……」

ハリーは困ったように頭を掻く。

「そうね、ハリー。それならこうしましょう。お嬢様のことは秘密にしてもらえると助かるわ。吸血鬼の従者だつてことが知れ渡ると色々やりにくそうだし」

「勿論！　口が裂けても言わないよ！」

これも一つの落としどころだろうか。

私はハリーを連れてみんなの待つ談話室へ続く廊下を歩いた。

あの夜から三日が経った。

今日は学年末パーティーが大広間で行われる。

大広間はグリーンとシルバーで装飾されており、スリザリンの蛇を描いた大きな横断幕が壁を覆っていた。

私は隣に座っているハーマイオニーに聞く。

「随分とスリザリン寄りの装飾ね。何か理由があるのかしら」

そんな私の問いにハーマイオニーは呆れたように頭を抱える。

「スリザリンが七年連続で寮對抗杯を獲得したのよ。貴方、賢者の石の件ではあんなに頭が切れていたのに、興味ないことに關しては本当に……」

そう、ハーマイオニーとロンにはあの日の夜に談話室で事の顛末を教えたのだ。

その結果ハーマイオニーには抱きつかれるぐらい褒め讃えられ、ロンは信じられないといった顔で感謝の言葉を言われた。

「へえ、スリザリンが。ドラコ、結構頑張ったのね」

私はちらりとマルフォイのいる方を見る。

マルフォイはいかにも誇らしげに取り巻き達と話し込んでいた。

「また一年が過ぎた!」

その時、ダンブルドア先生の大声が大広間に響く。

「どうやらダンブルドア先生の一年の締めの大演説が始まるようだ。

「ごちそうにかぶりつく前に寮對抗杯の表彰を行うことになっておる。点数は次の通りじゃ。四位、グリフィンドール三百十二点。三位、ハッフルパフ三百五十二点。二位のレイブンクローは四百二十六点。そして一位、スリザリン、四百七十二点」

次の瞬間、スリザリンから嵐のような歓声が上がった。

マルフォイなんてゴブレットでテーブルを叩いて喜んでいる。

「よしよしスリザリン。よくやった。しかし、つい最近の事も勘定に入れなくてはなるまい」

ダンブルドア先生の言葉に、スリザリンのテーブルが静まり返る。

何か不穏な空気を感じ取ったのだろう、皆緊張した面持ちでダンブルドア先生を見つ

めていた。

「駆け込みの点数をいくつか与えよう。まず最初はロナルド・ウィーズリー。この何年かホグワーツで見ることがなかったほどの、最高のチェス・ゲームを見せてくれたことを称え、グリフィンボールに五十点を与える」

グリフィンボールのテーブルから窓が割れんばかりの歓声が沸き起こる。

なるほど、あのチェスを破つたのはロンなのか。

「僕が一番下の弟さー！ マクゴナガルの巨大チェスを破つたんだー！」

パーシーが他の監督生にそう言っているのが聞こえてきた。

マクゴナガル先生……石を守るトラップのはずなのに遊び心がありすぎるのでは？

「次にハーマイオニー・グレンジャー。火に囲まれながらも、冷静な論理を用いて対処したことを称え、グリフィンボールに五十点を与える」

その言葉を聞いて隣にいるハーマイオニーが腕に顔を埋めた。

私はハーマイオニーの背中を優しく撫でる。

これで一気にグリフィンボールの点が百点も増えたことになる。

「三番目はハリー・ポッター。その強靱な精神力と並外れた勇気を称え、グリフィンボールに六十点を与える」

耳を割くような大歓声に私は咄嗟に耳を塞いだ。

まあそれも仕方がないだろう。

これでグリフィン・ドールはスリザリンと並んだのだ。

ダンブルドアが手を上げた。

その様子を見て大広間が少しずつ静かになる。

「勇気にも色々ある。敵に立ち向かっていくのにも大いなる勇気がある。しかし味方の友人に立ち向かっていくのにも同じぐらいの勇気が必要じゃ。そこでわしは、ネビル・ロングボトムに十点を与えたい」

私は急いで耳を塞ぐが、意味はなかった。

近くで大爆発でも起こったのではないかのような大歓声上がる。

先ほどまでうれし泣きしていたハーマイオニーでさえ興奮したような顔でネビルの肩を叩いていた。

次の瞬間本当に爆発音が大広間に響いた。

ダンブルドア先生が杖の先から爆竹を打ち上げたのだ。

「最後に十六夜咲夜。敵味方全てを翻弄するほどの見事な心理戦、たった一人で全ての関門を突破した勇気と知識と技術、冷静な論理的思考、完璧なまでの変身術。そしてなにより友の命を救う為にその友と敵対することもいとわなない精神力を称え、グリフィン・ドールにさらに百七十点を与えたい」

歓声は起こらなかった。

全員が顔を見合わせたのち、私の方を向いていた。

私は苦々しげに顔をゆがめる。

二位、スリザリン四百七十二点。

一位、グリフィンドール六百五十二点。

明らかなオーバーキルだ。

ダンブルドア先生は私に駆け込み四人の総合点数をそっくりそのまま与えたのだ。

シンと静まり返った大広間に一つの拍手の音が響く。

ダンブルドア先生のものだ。

それを境に先ほどとは比べ物にならないほどの拍手と大歓声が沸き起こった。

グリフィンドール生はかつてない点数に狂喜乱舞し、スリザリンを除く他の寮生もス

リザリンの七年連続寮対抗杯の獲得を阻止した為か拍手喝采を私に送っている。

「したがって、飾りつけをちよいと変えねばならんのだ」

ダンブルドア先生が手を叩くとスリザリン一色だった大広間はグリフィンドールの

カラーである赤と金に変わり、蛇もそびえ立つようなライオンへと変化した。

そのライオンの上には一匹のコウモリが描かれている。

多分そのコウモリの意味を理解できるのは私とハリーだけだろう。

学年末パーティーの翌日、試験の結果が発表された。

驚いたことにハリーとロンはそこまで成績が悪くなかった。

私と本人たちの予想では、もう少し悪いものだと思ったのだが。

そして更に驚いたことにハーマイオニーは私よりも成績が悪く、学年で二位だった。

ハーマイオニーはそれがとてつもなくシヨックだったようで、「筆記は満点なのに

……」と呟いている。

それが終われば夏季休暇だ。

散らかっていた女子寮もすっかり物がなくなり、落ちていたものは全て持ち主の旅行鞆に入っている。

私は全ての荷物が入ったみんなよりも小さい鞆を持つと、ホグワーツ特急に乗り込む。

途中でハリーたちとはぐれてしまったので、マルフォイのいるコンパートメントに入った。

「ドラコ、ここに空いてるかしら？」

マルフォイは不機嫌そうな顔をしてこちらを振り向いたが、私の顔を見た瞬間焦った

ように表情を取り繕うと不自然に笑った。

「あ、ああ。咲夜か。空いているとも」

私はマルフォイの前に腰かけ、荷物を床に置いた。

マルフォイは私が席についたのを確認すると、少し重そうに口を開く。

「まずは対抗杯の獲得おめでとう。百七十点って一体何をしたらそんなに点が貰えるんだい？」

「そうね、ハリーたちが四人でやったことを一人でこなしたからかしら？」

「やっぱり咲夜は凄い。ポッターたちなんて足元にも及ばないんだろうな。成績も学年トップだっただろう？」

マルフォイが羨ましげに呟いた。

「そういうドラコだつて十位以内に入っていたじゃない。十分凄いわ」

「僕としては穢れた血がトップを取らなかつただけで大満足さ。本当によくやつてくれたよ」

お菓子食べるかい？ とゴイルが百味ビーンズを勧めてくる。

私はヤバそうなのを一つ抓むと、ゴイルの口に突っ込んだ。

ゴイルが悶絶した。

「夏休み、よかつたら僕の屋敷に遊びに来なよ。一緒に新学期の買い出しに行こう」

「お嬢様の許可が下りたらね」

私はそのあともマルフォイに隠し部屋の話をしたりと、今年一年のことを語り合っ
た。

しばらくそのように時間を潰していると、コンパートメントの扉がノックされる。

クラップが扉を開けると、ハリーを含め数人のグリフィンドール生がそこに立っ
た。

「グリフィンドールの英雄を返してもらおうか。マルフォイ」

ハリーがマルフォイに言い放つ。

その挑発を聞いてゴイルが立ち上がり指を鳴らすが、多勢に無勢といえるほどの相手
の人数に少々たじろいでいた。

「返すも何も、咲夜は自分でこのコンパートメント内に入ってきたんだ。人を盗人扱い
するな」

マルフォイがハリーに言い返した。

マルフォイは尻込みしているクラップとゴイルを押しのと、一人でハリーの前に
立ちはだかる。

「帰ってもらおうか、ポッターと愉快な仲間たちの諸君」

クラップとゴイルは驚いたようにマルフォイを見ている。

私もそのマルフォイの行動に驚いていた。

彼にこんな勇敢な一面があったとは知らなかった。

ハリーたちもマルフォイの行動に面食らっているようだ。

私はマルフォイのそんな勇氣に応えるためにハリーに言う。

「あら、私はもうグリフィンドールの談話室でこれでもかというほどチャホヤされたし、十分よ。ハリー、また新学期に会いましょう」

その言葉を聞いてドラコが目を見開き自信満々といった表情で不敵な笑みを浮かべた。

ハリーたちも渋々といった顔で退散していく。

それを見届けるとドラコはピシヤリと扉を閉め、ドカつと席に座って先ほどと変わらない調子で話し始めた。

私はそんなマルフォイの話を聞きながら、ふと館のことを思い出す。

学生気分は一旦終わりだ。

私は、紅魔館のメイドであり、レミリア・スカーレットの従者なのだから。

十六夜咲夜と秘密の部屋

お嬢様とか、夜の闇横丁とか、書店とか

一九九二年、夏。

ホグワーツの学生が休みを満喫している頃、私は本業に勤しんでいた。

いつものように時間を止めて紅魔館内全ての掃除を終わらせ、夜中の三時にあるティータイムのためにお菓子の下ごしらえを進める。

キッチンでスコーンの生地を混ぜながら、ふとホグワーツから帰ってきた時のことを思い出していた。

紅魔館に帰ってきて一番初めにしたことは仮眠を取ることだった。

何せ、夜になるまで誰も起きてはこない。

まあ、当たり前の話だ。

紅魔館に帰着した時刻は午後一時。

吸血鬼であるお嬢様にとっては就寝時間真っ盛りといったところである。

そしてそのお嬢様を中心にして紅魔館は動いている為、従者も基本的には昼夜が逆転

した生活を送っているのだ。

唯一その生活習慣に縛られないのは不眠の魔法を会得しているパチュリー様ぐらいだろう。

紅魔館についた私は玄関ホールを抜けてそのまま自室に入り荷物を整理する。

そしていつも使っていた寝間着に着替え、自分の時間の流れだけを早めてベッドに潜り込んだ。

その日の夜は『メイド長帰宅パーティー』と銘打って美鈴さんが主体となりパーティーが行われた。

従者である私の為にこのような大騒ぎを開いてもらうのは申し訳ないと感じたが、お嬢様が一番楽しんでいたように見えたので、こういうのもアリかと自らを納得させる。

そして、パーティーの次の日の夜からは本格的に仕事に戻った。

私は練り上がったスコーンの生地を型で抜いていく。

そして抜いた生地をオーブンに入れ、オーブンの時間を早めた。

こうすることで完成が早くなるが、これは結構な高等技術だ。

術が難しいのではなく、焼き加減が難しいだけだ。

「……今ね」

私は焼きあがったスコーンの間を止め保温処理を済ませると、今度は紅茶の準備を

始める。

そういえば、数日前にマルフォイ家からの招待状が正式な形で私とお嬢様に来ていた。

お嬢様宛てと言っても実際は私宛のようなものだ。

ドラコの父親からの手紙には「貴方の屋敷のメイドを我が屋敷に招待したい」、「もし都合が合うのならスカレット嬢もご一緒してはどうか」などといった内容が記載されていたらしい。

私はティーポットに入った紅茶の時間を止め保温処理を済ませると、先に出来上がったいたスコーンと共にトレイに乗せ、時間を止めてお嬢様のもとへと運んだ。

お嬢様の部屋の前で時間停止を解除した私は、お嬢様の部屋の扉をノックする。

「お嬢様、紅茶が入りました」

「入っていいわよ」

お嬢様の許可をもらって部屋の中に入った私は、すでにティーテーブルについているお嬢様に紅茶をお出しした。

お嬢様はティーカップを手に取り一口紅茶を飲むと、味を確かめるように深く息をつ

く。

そしてまだ美鈴の方が美味しいわねと呟いた。

私もまだまだ力足らずなのは自覚していることだ。

お嬢様の言う通り、美鈴さんの淹れる紅茶は確かに美味しい。

中国もお茶が発達しているが、その為だろうか。

「でも腕は落ちていないようで安心したわ。ホグワーツでは紅茶を淹れる機会なんてないでしょうに」

「体が覚えていることですので」

お嬢様は私の焼いたスコーンをかじると、こっちは咲夜のほうが美味しいと呟く。

今の私にはその言葉だけで十分だ。

まあ焼きたてのまま保持できるから私のほうが美味しいのは当然のことなのだが。

「そう言えば、マルフォイのところから手紙が届いていたわね。咲夜、貴方自身はどうしたいの？」

「お嬢様の御心のままに」

「美鈴がルシウス・マルフォイ氏と色々と話したみたいね。息子のドラコとは友達なの？」

「いえ、友達というわけではありません」

まあそうよねえと、お嬢様は気だるげに紅茶を飲む。

「咲夜、貴方友達つて何だと思う？」

お嬢様は私のほうに向き直ると私の目を見て聞いた。

この様子のお嬢様を私はよく知っている。

こういう話の切り出し方をする場合、お嬢様は私に大切なことを話そうとしていることが多い。

「友達……ですか」

私は言葉を選んだ。

「信頼でき、同じような立場で……美鈴さん？」

私の答えに、お嬢様は紅茶のカップをソーサーに静かに戻した。

「そうね。長い間貴方にとつて友達とは美鈴のことだった。美鈴は貴方の友であり、育ての親であり、同僚であり。でも咲夜、それは貴方が吸血鬼が住まう館に住んでいただけだよ。今の貴方は違うわ。人間の学校に通う人間であつて、少し人とは違うことができるだけ。別に相手が普通の人間だからつて友達になれないことはないのよ？」

そこまで話してお嬢様は一度言葉を切る。

私に少し考える時間を与えているようだった。

「そこで、貴方に問うわ。貴方は人間の友達が欲しいと思う？ 人間の価値観に近づき、

人間と共に生きたいと願う？」

お嬢様は私の両頬に手を添えた。

私の答えを待っているようだ。

「おかしなことをおっしゃいます。私は吸血鬼であらせられるレミリア・スカーレット嬢の従者です。例え種族が人間であっても魂は人外のそれ。お嬢様が望むのなら私は何にでもなりますよ」

「本当にいいのね。後戻りはできない道よ？」

お嬢様が私の頭、いや髪の毛の生え際あたりに手を当てた。

「何を今更」

次の瞬間、私の頭の中でぶつつりと何かが切れる音が物理的に聞こえてきた。

ような気がした。

一瞬視界が暗転し、私は地面に転びそうになる。

「貴方を拾ったとき、私はパチエに相談したの。この子供をどうするべきか、どう育てるべきかって。今貴方の言葉を聞いて、貴方の心を覗いて決心がついたわ。紅魔館の主にして夜の支配者であるレミリア・スカーレットが命じる。私に仕えなさい」

その言葉を聞いて、私は重大なことに気が付いた。

私はお嬢様の命令は絶対だと思っている。

お嬢様に一生仕えるのが私の喜びであると思つてゐる。

だが、お嬢様から「私に仕えろ」と命じられたことは一度もなかったのだ。今までは私が勝手にお嬢様に奉仕しているだけであつたのだと、理解した。

先ほどお嬢様が私の頭に何をしたのかは分からない。

だが、聞く必要もない。

お嬢様のすることは絶対なのだから。

「さて、それじゃあ物は試しつてことでマルフォイの屋敷に行きましようか。貴方は私のお付きよ。そのように返事を出すけど、いいわね？」

「お嬢様にご意見など、恐れ多い」

私はお嬢様が飲み終わったティーカップを片付けると、深々と一礼して部屋を出た。

咲夜が出ていくのを見送つたレミリアは、どつと疲れが湧き出したようにベッドにボンと身を委ねる。

「あれでよかつたのかしらね。パチエ」

レミリアは図書館に繋がっている通信用の魔法具に話しかけた。

図書館でパチュリーも会話を一通り聞いていたのか、意見が返ってくる。

「だから言ったじゃない。あの子は貴方の従者である人生を選ぶって」
『人』生……ね」

レミアは咲夜に友達とは何かと聞いた時、感じ取ったイメージを思い出す。

大半は美鈴が何かドジをしているシーンだったが、レミアが知らない人間の子供のイメージも含まれていた。

眼鏡をかけた少年、赤毛で少し背の高い少年、少し出っ歯で栗色の髪の少女、金髪で青白い少年。

咲夜に友達とは何かと聞いた時に、無意識だとはいえ、人間の子供のことを思い浮かべていたのだ。

「今さっきレミイは咲夜の価値観を弄ったわ。そうでしょう？ あの子はどんな運命に導かれるの？」

「人間を人間と見るように価値観を弄っただけよ。今の状態ではあの子にとって人間も動物も変わらないようだったし。理解できる？ 咲夜にとって三つ首のケルペロスと

三人の人間の子供は同価値らしいわよ」

その言葉を聞いてパチュリーはため息をついた。

「だって仕方がないじゃない。あの子は小さな時から食材として——」

「『人間』を扱っているのだもの」

パチュリーは続ける。

「私の考えでは、咲夜の精神は一種の哲学的ゾンビのような状態だと思うわ。勿論、定義は色々違うけど。人間としての常識と化け物の従者としての常識が入り交じり、咲夜の思考を混乱させている。上の者は敬わなければならぬ。人間はただの食料だ。同僚の仲間やよく喋る知り合いは大切にされるものだ。人間と友達になんて豚と友達になるようなものだ。価値のないものと自覚しているものに無意識中に価値を抱き、意味ある行為だと思いやつていてもその行動になにも感じてはいない」

パチュリーはコホンと一度咳き込むと、更に言葉を紡ぐ。

「これは咲夜から聞いた話なのだけれど、完全に敵対している二つのグループにどっちつかずといった感じで参加しているそうよ。理由を聞いたら『敵を作らない為』ですつて。レミイが見たつていうイメージにいた眼鏡の子と金髪の青白い子は完全に敵対している。そして話を聞く限り、咲夜自身がどう思っているかは置いておいて、そのどちらとも仲良くしているそうよ。第三者から見た限りではそれはもう親友のように。レミイ、マルフォイの誘いを受けたのはその真偽を確かめる為って理由もあるのでしょうか？」

「私が弄った認識が上手く働いているか確認するついでにね。もし上手くいっていたら咲夜の態度は確実に変わるでしょうね。人間最良になるか、完全に料理の材料程度の認識になるか」

「そう都合よく吹っ切れるかしら」

「何のために私が寂しい思いをしてまで咲夜をホグワーツに通わせていると思っているのよ。早いところどちらかに吹っ切れてもらわないと困るわ。このまま咲夜を放っておけば、『卑怯なコウモリ』になりかねない」

「鳥と獣、有利な方に加担するコウモリの話ね。最終的に両方から仲間外れにされてしまふやつ」

レミリアはベッドの上でごろりと寝返りを打つと、天井に手を伸ばしてパチュリーに言った。

「私が言うのもなんだけど、運命は自分で切り開くもの。人生とは切り開いた結果ある未来への道よ。私が出るのは、ほんの少し相手の運命を切り開く力に手を添える程度ね」

「ブフツ……」

途端にパチュリーが嘔き出した。

「ふ、うふふふふ……あはははははははははは」

まるで堪えきれないでも言うかのように笑う。

それを聞いてレミリアも我慢できなくなったのか、大声で笑い始めた。ゲラゲラと、まるで先ほどとは別人のように。

真紅で染められた紅魔館に、まさに悪魔の笑い声がこだました。

「ふふふ、ふう。で、レミィ。今の話何処から何処までが貴方の本心？」

「殆ど嘘よ。人間を人間として見るように価値観弄ったとか『卑怯なコウモリ』の話とか」

「殆ど……全部じゃないのね」

レミリアはあーお腹痛いと腹をさする。

「咲夜の人間に関する認識の一部を弄ったのは本当よ。でもそんな良心的なものではないわ。そして何より咲夜には人間と仲良くしてもらいたいというのも本当。マルフォイとのつながりや不死鳥の騎士団へのコネクションは大切に育てていかないかね」

「ふふ、じゃあマルフォイからの招待を受けたのは——」

「勿論私の為よ。運命が言っているわ。今年のホグワーツは楽しそうだって。いや、『これから』かしら」

レミリアはガバつとベッドから跳ね起きると、便箋を取り出し手紙を書き始める。

そんな友人の様子にパチュリーは感心と共に満足すると通信を切った。

レミリアは手紙を書きながらブツブツと呟く。

『『卑怯なコウモリ』ね。大丈夫、そんな中途半端なことにはさせないわ。彼女は私のモノだもの。アルバス・ダンブルドア……それにトム・リドル。精々私を楽しませて頂戴ね』

手紙をくるりと丸めて妖力で縛ると、体の一部を変化させてコウモリを作り出し、手紙を括り付けて窓から放った。

「魔法界は荒れるわ。十二年前と同じように。勝つのはトムか、それともアルバスか。咲夜には是非とも死喰い人と騎士団メンバーになつて貰わないと」

じゃないと、平等な立場で楽しめないじゃない。

お嬢様はあの後すぐにドラコの家へ返事を出したらしく、次の日の夕方には「招待を受けてくれて嬉しい」というような内容の手紙が紅魔館に届いた。

お嬢様自身ドラコの家へのお呼ばれを非常に楽しみにしているようで、私に時間を操作させて昼間すつきり目が覚めるように調整したぐらいだ。

私はお嬢様用の大きい日傘を持つと、お嬢様と共に大図書館へと移動する。

「そういえば、本来の目的は買物だったわね。二年生になつて新たに必要な物でも出

来たの？」

お嬢様は私の前を歩きながら聞いた。

「はい。二年生で必要になる教科書は出版されてすぐの新しいものが多いらしく、大図書館の蔵書にないとパチュリー様が仰っていましたので」

私は必要な教科書のリストをお嬢様に手渡した。

「ちよつと見せて……げ、これは酷いわね」

二年生で用意しなければならない教科書の殆どは、ギルデロイ・ロックハートという人物が書いたものだ。

有名な魔法使いなのだろうか。

「そうね、じゃあパチュリーへの手土産も含めて二冊ずつ買いなさい」「かしこまりました」

そんな話をしているうちに私たちは図書館に到着した。

図書館に来た理由は他にもない。

マルフォイ邸まではパチュリー様が送迎をしてくれるらしいのだ。

私は今一度身だしなみを整え、お嬢様の服装も正す。

お嬢様はいつもの薄い桃色のドレスで、私はメイド服だ。

その段階で一つ気が付いた事があつた。

「そういえばお嬢様、羽はいかが致しましょう?」

そう、お嬢様の背中にはコウモリのような羽が生えている。

これではお嬢様の正体がバレてしまう。

「咲夜、一つ言っておくけど……私の羽は外したり仕舞ったり消したりすることは出来ないわよ? 筆るといふなら話は別だけど。私が吸血鬼だってバレたら拙い事情でもあるわけ?」

ふふん、とお嬢様は得意げに胸を張る。

「むしろ見せつけてやればいいのよ。私は人間のような地を這いずる下等な生物ではないとね。それにマグルの蔓延るロンドン市街を歩くわけでもない。魔法界では珍しくはあっても吸血鬼という存在は一般的よ」

「これは失礼致しました」

「その様子だと学校でも私の正体を隠しているようね。むしろ誇り、自慢しなさい。私は吸血鬼に仕えるメイドであるとね!」

そういうとお嬢様は羽をバサバサと動かした。

「かしこまりました。ではそのように振る舞います」

身だしなみを整えていると本の山の裏からパチュリー様が顔を出す。

そして準備が整っているか確かめるようにこちらを見ると、私に声を掛けた。

「咲夜、それではダメよ。日傘を差しなさい」

「図書館の中で……ですか？」

「ええそうよ。愛する主をローストチキンにしたくないならね」

「パチエ、吸血鬼って焼いたらチキンになるのかしら？」

「消し炭になるまで焼いたら区別なんてつかないでしょ？」

「それはもうローストチキンではないと思いますが……」

私はパチュリー様に言われたように日傘を差し、お嬢様のそばに立つ。

次の瞬間、パチンという軽い音が聞こえて私の視界が暗転した。

いや、立ちくらみを起こしたかのような感覚だ。

私はお嬢様の前ということもあり、なんとか持ちこたえると、急いで体勢を立て直す。顔を上げ前を見ると目の前には高く積まれた本ではなく、大きな屋敷が建っていた。

「咲夜、日傘をしつかりと差しなさい。私の羽がローストチキンになりかけてるわ」

お嬢様の声を聞いて私は急いで日傘の位置を調節する。

いつの間にか炎天下の屋外に私たちはいた。

「パチュリー様、先ほどのが姿くらましですか？」

パチュリー様は気だるげに「あっつい……」と呟いている。

「ええそうよ。そのうち教えてあげるわ。帰りは何処かの暖炉を使ってちょうだい」

パチンという大きな音がしてパチュリー様の姿が消える。物凄く便利な魔法だ。

「さて。咲夜、行くわよ」

お嬢様は目の前の屋敷へと歩いていく。

私はお嬢様が日傘の外に出ないように後に後を追った。

ここがドラコの家で合っているのだろうか。

扉の前に立つと蛇の顔の模様があしらわれたドアノッカーが目に残る。

蛇というところからして、多分ここで間違いないんだろう。

私はドアノッカーを掴むと、四回叩いた。

「どなたか?」

途端に蛇の顔の模様が話し出す。

私は少々それに驚いたが、落ち着いた声で返した。

「レミリア・スカーレット嬢とその従者の十六夜咲夜です」

「暫し待たれよ」

そう言つてドアノッカーは沈黙する。

「蹴り破つていいかしら?」

お嬢様が退屈そうに呟いたが、聞かなかつたことにした。

三十秒もしないうちに扉がひとりでに開き、色白の女性が戸口から現れる。

色白の女性は眩しそうに目を細めたが、すぐに優しい笑みを浮かべて私たちに挨拶した。

「今日はお越しくさいます。旦那から話は伺っておりますわ」

「お邪魔するわよ」

容姿を見る限りでは、どうやらドラコの母のようだ。

名をナルシツサ・マルフォイというらしい。

ナルシツサ夫人は私たちを客間に通すと、「今日旦那と息子を呼んできます」と言い残し客間を出て行った。

お嬢様が椅子に座るのを見て、私はその横に佇む。

入れ替わるようにボロボロの服を着たゴブリンのようなものが紅茶を運んできた。

「大層な手紙の書き方だったから少し期待していたけど、これでは庶民と変わらないわね」

ナルシツサ婦人が居なくなった途端にお嬢様が私に声を小さくすることもなく言う。

確かに紅魔館と比べるとマルフォイ家の屋敷は小さいかもしれない。

……いや、言い切つてしまえば確かに小さい。

「十分立派なお屋敷だと思うのですが……」

「別に住んでいる家なんてどーでもいいわ」

お嬢様が考えていることと私の考えたことはどうやら違うようだ。

お嬢様は出された紅茶を一口飲むと、顔を顰めてソーサーに戻す。

そして一言「咲夜」と呟いた。

私は大体その言葉の意味を察したので時間を止め鞆を取り出すと中に入っているティーセットを取り出し、紅茶を淹れ直す。

そして出された紅茶の中身と入れ替えると鞆を元に戻し時間停止を解除した。

「ありがとう」

お嬢様は紅茶の色が微妙に変わっていることを確認すると、再び紅茶を飲み始める。

ゴブリンのような使用人が出て行ってから数分もしないうちにマルフォイ氏がドラコを連れて現れた。

「遠くからご足労いただきました、ありがとうございます。お初にお目に掛かります。ルシウス・マルフォイと申します」

ルシウス氏がお嬢様に握手を求めてくる。

お嬢様は椅子から立ち上がるとその手を握り返した。

「レミリア・スカーレットよ。堅苦しいのは無しで行きましょう。社交ダンスでも始ま

るなら別だけどね。敬語も無しよ。私も敬語で返すの面倒なもの」

お嬢様がいつもの調子でマルフォイ氏に挨拶した。

「これは癖のようなものでね。では少し崩して話すことにしましょう」

お嬢様は自然と上座に座ると私にも椅子に座るようにと指示を出す。

私はお嬢様の隣の席に腰を掛けた。

その様子を見てマルフォイ氏はお嬢様の前に、ドラコは私の前の椅子に腰かける。

「それで今日は何だったかしら。確かダイアゴン横丁に行くんだっけ？」

お嬢様がマルフォイ氏に確認を取るように聞いた。

「ええ、息子の学用品を買いに行くのですね。少々寄り道もしますが。ドラコが是非とも

あなた方を誘いたいと」

「あら、気を使わなくてもいいのよ？ 私共々ではなく、咲夜を誘いたかったんでしょ

？」

「いえいえそんな、滅相もない」

お嬢様は完全にいつもの調子だ。

私はドラコの方を見るが、ドラコはお嬢様の羽に目を奪われているようだった。

「まあここでグダグダ話していても時間の無駄だし、早速行きましょう」

「では暖炉へ。こちらです」

マルフォイ氏が先頭になり、お嬢様、私、ドラコの順に続く。

ドラコは私の肩をちよんちよんと叩くと、ヒソヒソ声で私に話しかけてきた。

「君が仕えているお嬢様つてもしかして……」

「貴方が思っている通りよ」

私はドラコにそういうとお嬢様の後を追いかける。

ドラコは慌てて私の背中を追いかけてきた。

マルフォイ氏は私たちを玄関ホールにある暖炉へと案内する。

「ドラコ、先に行きなさい」

そして煙突飛行粉を暖炉に振りかけるとドラコにそう指示を出した。

ドラコは素直にそれに従い暖炉の中に入り目的地を言う。

「ノクターン横丁」

次の瞬間落ちるようにドラコの姿が見えなくなった。

「私は最後に後を追いますので、お先に」

マルフォイ氏がお嬢様の中に入るよう勧める。

私はお嬢様と共に暖炉の中へと入ると、ドラコと同じ横丁名を口にした。

次の瞬間、私は煙と共に煙突へと吸い込まれ、気がついた時には少し胡散臭い雰囲気
の店が並んだ横丁に立っていた。

私は日傘を差しお嬢様がその影に入るように合わせる。

お嬢様のほうを見ると、いかにもな雰囲気醸し出している店に目を輝かせていた。

「なんだか面白そうなもの、が沢山あるわね。咲夜、まずはあの店から行きましょう」

マルフォイ家の存在など忘れているかのようにお嬢様は店を指さしている。

ボージン・アンド・バークスという店だ。

この通りでは一番大きい店構えをしている。

「ボージン・アンド・バークス……私もあそこには用事があります。寄っていきましよう」

後ろから追いついてきたと思われるマルフォイ氏がそう提案する。

その提案を聞いてか聞かずかお嬢様は店の中に入ってしまった。

急いで後を追うが、店の中は見るからに怪しいもので一杯だ。

クッションに置かれたしなびた腕や、血に染まったトランプ、義眼、何かの耳らしきものなど闇の魔術に使われそうな物が多い。

「咲夜、これなんて可愛らしいわよ。勝手に飛んで行って対象の目を抉り、自らが収まる義眼ですって。こっちには爪を剥がさずにそれと同じような苦痛を与える魔法具もあるわね。このヘンテコな器具は何に使うのかしら？」

お嬢様は両端が螺子になっている二組の金属板を手取る。

「それは親指を押し潰す拷問器具です」

私はそれに見覚えがあつたので簡潔に答えた。

「親指を？ そんなことしても意味がないじゃない」

「痛みを与える道具ですので、死に至らせることが目的ではないようです。ですがこの程度いくらでも魔法で代用が効きそうですが……」

私が首を捻っていると、マルフォイ氏がその答えを教えてくれた。

「見た目が大切なのですよ。今からこの道具が自分にどのようなに使われるのか対象に想像させるだけで相応の効果が出る。杖での魔法では結果しか生まれないのでね。ドラコ、一切触るんじゃないぞ」

義眼を手に取りろうとしているドラコにマルフォイ氏が鋭く忠告した。

「なにかプレゼントを買ってくれるんだと思つたのに」

ドラコは抗議するようにマルフォイ氏に言う。

だがマルフォイ氏は取り合わないといった感じでドラコの考えを訂正した。

「競技用の箒を買ってやると言つたんだ」

その言葉を聞いてドラコが拗ねたように言い返す。

「そんなの寮の選手に選ばれなきゃ意味ないだろ？ ハリー・ポッターなんか、去年ニンバス2000を貰つたんだ。グリフィンドールの寮チームでプレーできるようにダン

ブルドアから特別許可まで貰った。そんなにうまくもないのに。単に有名だからなんだ……額に傷があるから有名なだけで……」

ドラコは頭蓋骨が陳列してある棚を眺めながら続ける。

「どいつもこいつもハリー・ポッターがかっこいいって思ってる。額に傷、手には箒の素敵なポッターさ」

「同じことをもう何十回と聞かされた。しかし、言っておくがハリー・ポッターが好きでないような素振りを人前で見せるのは、なんとというか賢明ではないぞ。特に今は多くの者が彼を闇の帝王を消したヒーローとして扱っているのだからな」

マルフォイ氏はドラコをそう窘めると店主と会話を始める。

私はマルフォイ氏からそのような言葉を聞くとは思わなかったので少し面を食らっていた。

それはお嬢様も同じらしい。

何かを見透かすように不敵な笑みを浮かべている。

「ハリー・ポッターか。確かに有名といったら有名ね。でもそれは貴方も同じでなくて？」

ドラコは会話が打ち切られたことに若干腹を立てているようだったが、お嬢様に話しかけられ咄嗟に表情を取り繕う。

「マルフォイ家といったら間違ひなく純血の血筋とされる聖二十八一族の一つじゃない。まあ貴方の言いたいことも分からなくはないけど。ハリー・ポッターがヴォルデモートを消し去ったというのには些か無理があるもの。赤ん坊が彼を消し去ったなんて冗談が過ぎるわ」

その意見にドラコは気を良くしたかのように表情に余裕が出来た。

お嬢様はドラコの頬に手を触れ微笑む。

「この世の中、真実とは常に隠されるもの。その真髄を覗いてみたい？」

ドラコは完全にお嬢様に目を奪われていた。

ぼんやりとした表情になり何かを求めるように手を伸ばす。

「うちの息子を魅了するのはやめて頂きたい。多分息子の血は美味しくないでしょう」

そんな様子を見かねてか、マルフォイ氏が割って入った。

お嬢様の手がドラコの頬を離れるとドラコは我に返ったかのようにあたりを見回す。

「純血は美味しいのよ。B型だと尚のことね。それにこの子臆病そうだし」

私はそんなお嬢様の言葉を聞いて初めてお嬢様が良くやる行動の意味を察した。

お嬢様は私によくあれと同じことをしている。

あれはそういうことだったのだろうか。

ドラコはひとしきりキョロキョロとあたりを見回すと、何かを見つけたように声を上

げた。

「あれを買ってくれる?」

私はドラコが指差している方向を見る。

クツシヨンの上に萎びた手のようなものが置かれていた。

店主は嬉しそうにドラコの方に駆け寄ると説明を始める。

『栄光の手』でございますね。蠟燭を差し込んで頂きますと手を持っている者だけにか見えない灯りが点ります。泥棒、強盗には最高の味方でございます。お坊ちゃまは
お目が高くていらっしやる!」

「ポージン、私の息子は泥棒、強盗よりかはマシなものになって欲しいが——」

マルフォイ氏は冷たく店主に言った。

店主に冷たいマルフォイ氏だったが、身内にはそれ以上に厳しいようだ。

「まあ、息子の成績がこれ以上上がらないようなら、行き着く先はせいぜいそんなところ
かもしれん」

「僕の責任じゃない。先生がみんな鼻根をするんだ。あのハーマイオニー・グレン
ジャーが——」

「私はむしろ魔法の家系でもなんでもない小娘に、全科目の試験で負けているお前が恥
じ入ってしかるべきだと思うが。十六夜君を見習いたまえ」

マルフォイ氏は私の方を向くと更に言葉を重ねる。

「総合成績では噂に聞くグレンジャーを抜いて一位だったそうじゃないか。魔法族とはそうあるべきだ。流石、スカーレット家に仕える従者は格が違いますな」

「私のメイドだもの。当然よ。そのグレンジャーとやりに負けていたら鞭で叩いていたわ」

お嬢様が茶化すようにマルフォイ氏に言った。

鞭のくだりは暗に息子に厳しく指導しろとマルフォイ氏に言っているのだ。

「ふむ、ボージン。この店に鞭は置いてあるか？」

その言葉を聞いてドラコは顔を更に青くする。

「どれだけ強く叩いても皮膚が裂けない鞭というものが——」

「冗談だ。私のリストに話を戻そう。少し急いでいるのでね。今日は他に大切な用事があるのだよ。」

ドラコはほっと息をつく。

お嬢様は店の奥、何処か遠くを見ていた。

「決まりだ。レミリア嬢もよろしいですか？」

私がお嬢様の視線に釣られて店の奥を見ようとしたその時、マルフォイ氏に声を掛けられる。

「ええ、面白いモノも見れたし。次に行きましよう」

お嬢様は既に興味を失くしたかのようには一番に外へ出て行った。

私はそれに続いて店の外に出て、日傘を用意する。

「ルシウス、少し見たい店があるのだけれどいいかしら？」

お嬢様は興奮したようにマルフォイ氏を呼び捨てにする。

マルフォイ氏はピクリと眉を動かしたが、気にしてないように聞き返してきた。

「どの店ですか？ レミリア嬢」

「あの店！ 大きな檻にまっくろくろすけのようなものが沢山入っているわ。何かしらアレ」

お嬢様は少し離れたところの店先に置いてある檻を指さしている。

私が思うにあれは黒蜘蛛だろう。

「そうだ。私は少し私用を済ませてこなくてはなりませんので、ドラコを少し見ておいてはくれませんか？」

「それじゃあ私たちは向こうの方にいるわ。何処かで待ち合わせをする？」

用事があるというマルフォイ氏に、お嬢様は聞き返した。

「用事が終わったらこちらから合流しましょう」

パチンと大きな音と共にマルフォイ氏が居なくなる。

その様子を見届けることもなくお嬢様は建物の影を器用に渡り黒蜘蛛の檻を覗いていた。

私とドラコはその後を追う。

お嬢様はその蜘蛛の群れに気を取られているようだったが、不意に思い出したかのようにならぬようにドラコの方を向いた。

「先ほども言ったことだけど、ハリリー・ポッターは今のところ別に凄くも何ともないわ。大切なのは生まれではない。死ぬまでに何をしでかすかよ」

『するか』ではなく『しでかすか』というあたりお嬢様には何か思い当たる節があるらしい。

ドラコもそんなお嬢様の言葉を聞いて、少し考えるように目を瞑った。

「わああー！」

「うわああああつ!!」

ドラコが目を瞑ったスキについてお嬢様がドラコを驚かす。

ドラコはその悪戯に必要以上と思えるほどの大声をあげてひっくり返った。

お嬢様はその様子を見てケタケタと笑っている。

「な、なにをするん……ですか!」

ドラコは服についた砂を叩き落としながらたどたどしい敬語でお嬢様に聞いた。

お嬢様はそこまで面白かったのか目に涙まで浮かべてひとしきり笑うと、改めてドラコのほうを見る。

「人前で簡単に目を瞑るからよ。人間はね、知覚の八十パーセントを視覚に頼っているらしいわ。外で不用意に目を瞑るべきではないわね」

さあ行きましようとお嬢様はノクターン横丁を歩き出す。

私とドラコはまた急いでその後を追った。

ハリーは独りでノクターン横丁を歩きながら考えていた。

ちよつとした手違いでロンの実家である隠れ穴からボージン・アンド・バークスの暖炉に煙突飛行してしまったハリーだが、そこでマルフォイとその父親、友達である咲夜と一人の少女の姿を見つけたのだ。

ハリーは壊れたキャビネットに隠れながらその様子を観察していたのだが、いくつか思うことがあった。

一つは咲夜が憎きマルフォイと買い物をしているということ。

ただでさえスリザリンとグリフィンドールという組み合わせがあり得ないのに、そのスリザリンでも飛びぬけて嫌な奴であるマルフォイと買い物をしている。

もう一つは咲夜と共に楽しそうに何かを話している少女の存在だ。

店の中では柵の隙間を縫って観察していたのでよく分からなかったが、その少女は背中にコウモリのような翼を生やしていた。

あれが咲夜の仕えているというお嬢様なのだろうか。

よく見れば咲夜はメイド服を着ており、普段よりも姿勢がよかったように感じる。

吸血鬼……ハリーは初めて吸血鬼という種族を目にしたが、その怪しげな美しさよりも吸血鬼とマルフォイ家の関係のほうが気になった。

もしかして咲夜は家の都合でマルフォイと仲がいいのでないか。

そのような妄想がハリーの頭を駆け巡り、親友の今までの不可解な行動に意味を持たせようとする。

咲夜の仕えている吸血鬼とマルフォイ家の仲が良く、咲夜は従者としてマルフォイと仲良くしなければならぬのか。

それは完全にハリーの都合のいいように考えた仮説でしかなかったが、そうであったらどれほどいいかとハリーは思った。

ダンブルドアはホグワーツの校長室で考え事をしていた。

その内容は学期末にあった賢者の石に関する騒動である。

いや、十六夜咲夜についてと言い直したほうが正確だろう。

あのレミリア・スカーレットの従者であるということで、入学したときから警戒はしていた。

だが、彼女はダンブルドア自身も驚くほどのことをやってのけてしまう。

ホグワーツ教員が腕によりをかけて作った罫を一人で突破しておきながら、その痕跡を残していない。

はたしてそんなことが可能なのだろうか。

賢者の石を守ったのは彼女の考えでのことなのか、彼女が仕えるレミリアの考えなのか。

なんにしても監視と警戒を強めなければならぬだろうとダンブルドアは考える。

何かあってからでは遅いのだ。

ノクターン横丁での買い物を済ませ、私たちはダイアゴン横丁へと足を運んでいた。

ダイアゴン横丁はノクターン横丁よりも日当たりが良い。

お嬢様の羽を焦がさないように気を付けなければならぬだろう。

まず最初に入ったのは箒の販売店だ。

様々な形の箒が並び、家庭用の安全性の高い箒から最新鋭の競技用箒までなんでも揃っている。

ホグワーツで授業用に採用しているシューティング・スターも売られていたが他の箒よりも物凄く安く中古品しかない。

型落ち品なのだろう。

お嬢様は乗りやすいように少々湾曲した箒を見て「これじゃあ掃きにくいでしょう」と呟いていた。

「お嬢様、ここにがある箒は掃除をするための物ではありませんよ?」

私がお嬢様の勘違いを訂正する。

だがお嬢様はそんなことは知っているわと言わんばかりに返してきた。

「高い箒で床を掃いたらさらに綺麗になるんじゃないかと思っただけよ。魔法使いが箒で空を飛ぶことぐらい知っているわ」

「それは失礼いたしました」

「でもこれ座席はついていないのよね。足を置く金具はついているのに。痛くないのかしら」

「箒にはクッションの魔法が掛けられており、痛くはありません。その魔法が作られる

以前は地獄だったようですが」

私がそう説明すると、お嬢様は驚いたようにこちらを向いた。

「貴方、箒に乗ったことがあるの？」

「はい、ホグワーツでは箒での飛行訓練が授業に組み込まれています」

私はドラコの方を見る。

マルフォイ氏に何かをせがんでいるようだ。

マルフォイ氏自身箒を買ってやるとは言っていたので、ドラコがまた何か無茶な要求

でも出したのだろう。

「私はお前に箒を買ってやると言ったんだ。全員になどは——」

「でも最新型だ。これがチーム全員に行き届けば——」

「そもそもお前がチームに入れる保証など——」

そのような会話がうっすらと聞こえてくる。

途切れ途切れに聞いた話を繋ぎ合わせると、どうもドラコはスリザリンのチーム全員

分の箒を買えと言っているようだ。

マルフォイ氏が渋るのも頷ける。

そんな二人の様子を見かねてか、お嬢様が二人に近づいていった。

「買ってあげればいいじゃない。貧相な考えはその者の姿形まで貧相に見せるわ。一本

「たつた二十一ガリオンでしょう？」

お嬢様の言葉を聞いて、マルフォイ氏は顎に手を当てて考える。

そして結論が出たのか、ドラコに対して言った。

「……ふむ。それではその新型をスリザリンチームに寄贈する形を取ろう。それでいいなドラコ」

その言葉を聞いてドラコは嬉しそうに頷く。

だが私はその後マルフォイ氏がぼそりと呟いた「まあチームに入れなかったらお前の箒は無しだが」という言葉を聞き逃さなかった。

「二年生からは自分の箒を持って行ってもいいのね。咲夜、紅魔館から愛用の掃除用の箒を持っていく？」

お嬢様が茶化すように私に聞く。

「いえ、ホグワーツには私よりも優秀な清掃員がいるようで。いつの間にか綺麗になっています」

「掃除用の箒じゃ空は飛べないって？」

「お嬢様がご命令なさるのでしたら掃除用の箒でそこにある最新型を追い抜いてみせましょう」

その答えがよほど面白かったのかお嬢様はひとしきり笑うと一本の箒を手を取った。

札には『オークシャフト79』と書かれている。

「店主、この箒を購入したい。いくらかしら？」

「一八七九年製造のそちらですと五十ガリオンほどになりますが……博物館に展示してあるほどの年代物ですよ？」

店主は困ったように言う。

それはそうだ。

大方、ボロく安い箒だと思い買おうとした客が過去に何人かいたのだろう。

「なるほど、希少ということね。ますます気に入ったわ。咲夜、貴方にプレゼントするわ」

「そんな、悪いですよ」

「箒が？」

「そうではなくてですね……」

私は断ろうとするがお嬢様はケタケタと笑い店主にガリオン金貨を放り投げる。

「形だけでも箒は持つておきなさい。例え使わなくとも持っているという事実は残るわ。本当に要らないと思ったらこれで紅魔館の掃除でもすればいいし」

「お嬢様からの贈り物でそんなことは……」

「でしょうね。なんにしても貴方なら荷物にはならないでしょう？」

なんでも入る鞆のことを指しているのだろう。

お嬢様は紙袋に包まれた箒を店主から受け取ると、私の方に差し出した。

「ありがとうございます。お嬢様。大切にします」

私はそれを受け取り丁寧に鞆に仕舞い込む。

「本当はその箒で有名なハリリー・ポッターにシーカー勝負で勝つてほしいところだけど、同じグリフィンボールだものね。まあ二年生になったお祝いということにしておきなさい」

私はお嬢様に深々と頭を下げる。

お嬢様はよく私に贈り物をしてくれるが、そのどれもが使い道のよくわからないものが多い。

だが私にとっては何よりの宝物だった。

その後マルフォイ氏は購入した箒をホグワーツに届けるようにと店主に言いつけると私たちは店を出る。

そして最後に『フロリーリッシュ・アンド・ブロッツ書店』に寄ることになった。

新しく必要になった教科書を揃えるためだ。

書店の棚は天井近くまで伸びており、様々なジャンルの本が並んでいる。

だがそれ以上に沢山の魔法使いがもみくちゃになりながら店に入ろうとしているの

が目付いた。

「あら、魔法使いって種族は随分と勤勉なのね。我先に本を購入しようとするほどに」
お嬢様が皮肉るように呟く。

私は人混みの原因を探るように店を見回すが、人混みの理由はすぐに見つかった。
上の階の窓に大きく横断幕が掛かっている。

その横断幕にはギルドロイ・ロックハートのサイン会があると書かれていた。

「少し買物順番を間違えたでしょうか。サイン会が始まる前に来ればよかったですね」

私はサイン会の終了時刻を見る。

あと数時間後だ。

とても待つていられる時間ではない。

「お嬢様、少々こちらでお待ちいただけますでしょうか？ 必要な買い物だけ済ませてすぐに出てまいります」

私はお嬢様の了承を得ると時間を止める。

そして新たに必要な七冊を二冊ずつ手に取るとドアの側で困惑している店主の後ろに移動し、人の視線がないことを確認してから時間停止を解いた。

「本を購入したいのですが、お金は貴方に支払えばいいのかしら」

後ろからいきなり声を掛けられた店主は驚いたように肩を撥ねさせるとこちらに向く。

そして私が持っている本の山を見て状況を察したのか、金額を提示してきた。

背表紙だけ見て瞬時に本の合計を計算する辺り、この店主も只者ではない。

いや、予め売れそうな本のセット料金を暗記しているのかもしれないが。

私はお金を払い本を鞆の中にしまうと、お嬢様のところへと戻った。

「咲夜、もしかしてあれが噂のハリー・ポッター？」

お嬢様は店の入口近くを指さし私に言う。

私はその方向を確認するとドラコとハリーが何やら言い争いをしているのが見えた。

その中に今度はマルフォイ氏と一人の男性が加わり話し始める。

話を聞いている限りだともう一人の男性はロンの父親のようだった。

「眼鏡を掛けた少年がハリー・ポッター、赤毛なのがロン・ウィーズリーです。ああ、よく見たらハーマイオニーの姿もありますね。家族ぐるみで買物に来たのでしょうか」

「なんとというか、家族ぐるみで犬猿の仲なのね。息子たちに代わって父親が喧嘩を始めたわよ」

「話聞く限りでは、どうもそのようで」

ついに殴り合いの喧嘩を始めた二人をお嬢様は手を叩きながら観戦する。

店主が止めに入るがどうにも力不足のようだ。

偶然店を訪れていたハグリッドが間に割って入り、ようやく二人は引き離される。

事態が終息してようやく周囲を観察する余裕が生まれたのか、ハーマイオニーは私のほうを見ると驚いたかのような顔をしながら近づいてきた。

「咲夜！ 久しぶり。ホグワーツ以来ね。ええっと、今日はメイド服なのね」

ハーマイオニーは私の服装を観察しながら挨拶をしてくる。

「ええ、今日はお嬢様の付き人としてここににいるから」

「お嬢様ということとは——」

ハーマイオニーがお嬢様の方を向くと途端に絶句した。

言葉が出てこないといった表情だ。

「咲夜、彼女固まってしまったわよ」

お嬢様がハーマイオニーの頬をぶにぶにと突きながら私に言う。

ハーマイオニーは我に返ったか、慌てて表情を取り繕うと、お嬢様に挨拶をした。

「は、初めまして。ハーマイオニー・グレンジャーと申します」

「スカーレット家の当主であり絶対的な夜の支配者であるレミリア・スカーレットよ。

咲夜から話は聞いているわ」

ハーマイオニーはお嬢様の羽と牙、そして私が日傘を差しているのを見てすぐさまお

嬢様の正体を悟ったようだ。

驚きと恐怖が入り交じったような表情をぎこちない笑顔の下に隠している。

「咲夜、貴方が仕えているお嬢様ってもしかして……」

私はその問いに答えようか少々迷ったが、私が答える前にお嬢様自身がハーマイオニーの質問に答えた。

「そう、私は吸血鬼よ」

パタパタを羽を揺らしながらお嬢様が答える。

そんな様子を見ていたのかハリーとロンもこちらに近づいてきた。

「咲夜！ 君も買い出しかい？」

ロンがいつもの様子で話しかけてくる。

「咲夜、久しぶりだね」

ハリーはお嬢様を少し警戒するように見ながら挨拶をしてきた。

お嬢様はそんな様子のハリーににこりと笑いかけると、ハリーに距離を詰める。

ハリーは驚いたように少し後ろに下がったが、その下がった分さえもお嬢様が詰め、今にも額がぶつかりそうになるほど二人の距離が詰まった。

「貴方……なるほどね」

お嬢様がハリーの額の傷に触れる。

その途端、ハリーが痛そうに呻きだした。

古傷を触られて違和感があるとといったような生易しい反応ではない。

今まさに傷口を抉られているかのような痛みが方だ。

「咲夜、ハリーが辛そう、止めてあげて」

ハーマイオニーが私に言うが、私にはお嬢様の行動を止める権限などない。

お嬢様はひとしきりハリーの額の傷を観察すると、満足したかのように手を放した。

ハリーはその場に倒れ込み、肩で息をしている。

ロンはハリーに手を貸し立ち上がるのを手伝うと、お嬢様に向けて抗議の視線を送ってきた。

「その傷は貴方とヴォルデモートとの繋がりなのね。今のように傷が痛むようなことがあつたら気をつけなさい。『Wer mit Ungeheuern kmpft, mag zusehn, dass er nicht dabei zum Ungeheuer wird. Und wenn du lange in den Abgrund blickst, blickt der Abgrund auch in dich hinein.』貴方が闇に落ちないことを期待しているわ」

もつとも、闇に落ちたら私の所に来なさいとお嬢様は笑う。

ハリーたちは言葉の意味が分からないといった表情で困惑していた。先ほどのお嬢様の言葉はドイツ語。

哲学者ニーチエが『善悪の彼岸』に残した言葉だ。

『怪物と闘う者は、その過程で自らが怪物と化さぬよう心せよ。おまえが長く深淵を覗くならば、深淵もまた等しくおまえを見返すのだ』

ハリーとヴォルデモートとの戦いの話をしているのだろうか。

私にもお嬢様が何を言いたいのか理解は出来なかった。

車とか、ロックハートとか、トム・リドルとか

楽しい紅魔館での奉仕の日々も終わり、ホグワーツに行く日がやってきた。

私は自室から鞆を持ち出すと、ロンドンの街を歩くために私服を着る。

今日は煙突飛行で駅に行くのではなく、バスなどの公共交通機関でキングズ・クロス駅に行くつもりだ。

ロンドンの街で買い物をするためだ。

私は全ての仕度を終わらせると玄関ホールへと向かう。

朝の紅魔館の玄関ホールは灯りが点っておらず薄暗い。

窓も少なく、日の光が余り差し込まない為だ。

私はそのまま静かに紅魔館を出ようとしたが、突如後ろから声を掛けられた。

お嬢様の声だ。

「咲夜、ホグワーツに向かう前に少々言っておくことがあるわ」

見送りがあると思っではいかなかったので私はお嬢様の姿に少々驚く。

お嬢様はそんな私の様子を気にも留めないように言葉が続けた。

「命令を下すわ。ホグワーツで『好き放題』やりなさい。といっても、別に悪さをしなさい

いと言っているわけではないわよ。貴方の思つた通りの行動をそのまま実行に移さないと言ふこと。あれをやつたら私に迷惑がかかるとか、常識としてあれをしてはいけないとか、そんな些細な問題を気にするのは吸血鬼の従者にはふさわしくないわ。必要だと感じたら人を殺しても構わない。必要だと感じたら人を助けても構わない」

お嬢様はそこで一旦言葉を切る。

「何が言いたいかというと、良くも悪くも人の視線を引き付けるような行動をしるとうことよ。貴方の好き勝手にね」

私は何故お嬢様がそのようなことを仰るのか分からなかつたが、命令とあらば実行しないわけにはいかないだろう。

「運命が私に囁いているわ。秘密の部屋が開かれると。さあ行きなさい。私の可愛い従者」

「行つてまいります。お嬢様」

私は深々とお嬢様にお辞儀をする。

そしてお嬢様のいる場所に日の光が差し込まないことを確かめると、紅魔館の玄関の扉を開き外に出た。

ロンドン市街で私は紅茶の茶葉を見ていた。

別にこの買ひ物は今日じゃなければならぬということはない。

休暇中に紅魔館で仕事をしていた時にも何度か買ひ物には行っているし、消耗品は定期的に仕入れてもいる。

なので今回のロンドンでの買ひ物は何か特別な意味があるわけではない。

適当に店のショーウィンドーを見て楽しむだけだ。

日本の電化製品や昔ながらのコーヒーのドリッパー、ポケットサイズの電卓など様々なものが陳列されている。

普段買い出しで訪れることが多いので、このように好きな物を見るといふ行為が新鮮に感じられた。

そういえば三年生になったらホグワーツの近くにあるホグズミード村へ休みの日に出かけることが許可されると記憶している。

それを聞いた時私は特に魅力を感じなかったが、少し楽しみになってきた。

大通りで小物をいくつか購入し、私はキングズ・クロス駅に向かうバスへと乗り込む。だがその途中で不幸に見舞われた。

道が物凄く渋滞し始めたのだ。

これなら時間を止めて空を飛んでいけばよかったと今更ながら後悔する。

今から時間を止めて空を飛んで行ってもいいが、その場合バスを不自然な形で降りな

ければならないのでそれは最後の手段だ。

私は懐から懐中時計を取り出し、現在の時刻を確認した。

午前十一時まであと残り十分と数秒。

バスの位置から考えてギリギリ着くか着かないかだろう。

私は大きいため息をつくとき、車の流れが速くなるよう祈った。

結局キングズ・クロス駅にバスが到着したのは十時五十九分三十秒と余りにもギリギリすぎる時間だった。

バスに乗っていた住民は皆、悪態をつきながら大慌てでバスを降りていく。

私もその人の流れに乗ってバスを降り、周囲の人の視線が切れたことを確かめると時間を止める。

懐中時計を確認すると十時五十九分四十五秒。

まだ十五秒も時間がある。

一秒でもあれば私にとっては永遠にも匹敵する余裕だった。

私はゆったりとしたペースで九番線と十番線があるホームに向かう。

時間を止めたまま九と四分の三番線を通り抜けられるか分からなかったが、十五秒もあればそこだけ時間停止を解除して進んでも問題はない。

そう、問題は何もないはずだった。

九と四分の三番線前でハリーとロンが困ったような顔をしているのを発見する。

二人が何をしているかは知らないが、声を掛けている時間の余裕はないだろう。

私は半ば二人を無視するような形で九番線と十番線の間柵に向かつてまっすぐ歩いた。

だが、通れない。

私のつま先は柵にあたり、そこから先に進むことはなかった。

やはり時間停止を解除しなければ無理だろうか。

私は一旦人混みの中に隠れると、その場で時間停止を解除し、あたかも初めからそこにいたかのように振る舞いもう一度柵に向けて歩き出す。

だが、やはり駄目だ。

私は柵に軽くぶつかると、小さく舌打ちした。

なるほど、ハリーたちがここに留まっている理由はこれか。

私はハリーたちの困り顔の理由を理解し、時計を凝視しているハリーに後ろから声を掛けた。

「もう間に合わないわよ」

私の声を聞いてハリーは驚くようにこちらを向くと、何かしやべろうと口をパクパク

させる。

「行っちゃったよ」

ロンが呆然とするように頭上の大時計を見上げる。

私も自分の懐中時計を確認するが、確かに十一時を回っていた。

「汽車が出ちゃった。パパもママもこつち側に戻ってこれなかつたらどうしよう？ マ

グルのお金、少し持つてる？」

ロンが私とハリーに問う。

その質問にハリーは力なく笑った。

「ダーズリーからは、去年の五十ペンス硬貨以来何も貰ってないよ」

ロンがポケットをまさぐるようにして五十ペンス硬貨を取り出す。

きつと形が珍しいとかそういう理由でハリーから貰ったのだろう。

私が財布を取り出すとハリーたちは希望の光が見えたと言わんばかりに目を輝かせた。

「お金ならあるけど何に使うの？ タクシーでも拾って「ホグワーツまで」って？ それ

は面白い冗談ね」

私がそういうとハリーたちの表情がまた暗くなる。

ハリーのふくろうが大声で騒いでいるせいでこちらを冷ややかな目で見ているマグ

ルも多い。

その視線に耐えかねたのか、ハリーが慌てたように提案した。

「取り敢えずここを出よう。人目に付きすぎると、車のそばとかで——」

「それだ。ハリー！ 車だよ！」

ハリーの声を遮ってロンが大声を上げた。

「車がどうかした？」

ハリーの問いにロンが自分の考えを言い始める。

簡単にまとめると緊急時だから空飛ぶ車に乗ってホグワーツに行こうという提案だった。

ハリーはそれを聞いて目を輝かせる。

やっつてはいけないことだと分かっているが、その先に待っている冒険が楽しみで仕方がないといった表情だ。

「勿論、咲夜も乗っていくよな？ 運転はまかせとけ。」

ロンが意気揚々と私に聞く。

当初私は紅魔館まで帰ってパチュリー様に送ってもらおうかと考えていたが、交通手段があるなら別だ。

私はその提案に乗ることにした。

話を聞く限り、車はロンの父親の所有物らしい。

私は魔法界の人間が車を持っていることに少々驚いたが、どうやらロンの父親が特殊なだけなようだ。

私たちは一度駐車場へと戻ると、見た目に反して無駄に荷物が乗るトランクに荷物を投げ入れる。

そして車に乗り込み誰もこの車を見ていないことを確かめると、ロンに合図を送った。

その合図を見てロンは計器盤にある小さな銀色のボタンを押しこむ。

目くらましの魔法だろうか。

私たちは車ごと透明になり、目に見えなくなった。

「行こうぜ」

先ほどロンが乗っていたところから声が聞こえ、途端に地面が遠くなる。

私たちを乗せた車はみるみるうちにロンドンの上空へ飛ぶと、そこで急に目くらましの魔法が切れた。

ロンが慌てて銀色のボタンを押すが、再び透明になることはない。

「つかまってろ！」

ロンがそう叫んだ瞬間車は急加速し雲の中へと突っ込んだ。

「さて、どの方向に進んだらいいやら……、汽車を見つけないと分からないな」

ロンの提案で少しだけ雲の下に降りて汽車を探す。

その段階で私は気が付いた。

別に車じゃなくてもいいじゃないかと。

私が窓の外を覗くと紅の汽車が小さく線路の上に見える。

私は迷わず車の扉を開いた。

「何やつてるんだ！ 咲夜！ 落っこちるぞ！」

ハリーが声を張り上げる。

「私途中下車するわ。ホグワーツで会いましょう」

私はそのまま転がり落ちるように車の外に移動し、ハリーが伸ばした手を払いのけて真つ逆さまにホグワーツ特急の汽車の上に落ちていく。

そのまま落下速度を調節し、落ちてるとも下に飛んでいるとも言えないような形でホグワーツ特急の屋根の上に着地する。

そして連結器に飛び降り、客車の扉を開けて中に入った。

その様子を見てハリーたちは目を丸くする。

「ハリー、君もあれやってみるか？」

ロンがそのように聞くがハリーは黙って首を横に振った。

列車の中に入った私は、空いているコンパートメントを探して通路を歩く。

もう列車が発発していることもあつてか、殆どのコンパートメントが生徒で一杯だった。

私は運よくハーマイオニーがいるコンパートメントを見つけると、軽くノックし中へと入る。

「ああ咲夜！ 貴方は乗っていたのね。ハリーとロンを見なかった？ もうかれこれ三十分ぐらい他のコンパートメントを探していたのだけれど何処にもいないのよ。それで咲夜の姿も見えなかったから揃って汽車に乗り遅れたものだとはばかり……」

ハーマイオニーは心配しているかのように手をせわしなく動かしながら大声で捲し立てた。

「汽車には乗り遅れたわ。でも走ったら追いついたの」

私は大して面白くもない冗談をハーマイオニーに言うとコンパートメントの座席に座る。

ハーマイオニーはその冗談を軽く受け流すと私に聞いた。

「ハリーたちを見なかった？ 多分二人も乗り遅れたと思うの」

「ハリーたちならいるわよ」

私は天井を指さす。

ハーマイオニーは一瞬不可解な目で天井を見たが、思いついたかのように窓を開けると身を乗り出して上を見た。

「いた！ なんてあんなところで車を飛ばしているのよ。ラリードライバーにでもなったつもり!」

ハーマイオニーは驚きの余り汽車の窓から外に落ちそうになる。

私はハーマイオニーのズボンのベルトを掴むとゆっくり手前に引きハーマイオニーを引き戻した。

「あ、ありがとう。ねえ咲夜。二人は一体何をしているの?」

「さあ? パイロットにでもなった気にいるんじゃない?」

ハーマイオニーは二人が何処にいるか分かった為か安心したように座席に深く腰を下ろす。

「そういえばなんだけどさ」

ハーマイオニーが口を開いた。

「咲夜はどうしてあの吸血鬼のお嬢様に仕えているの？」

「ハーマイオニーは「書店で会ってからずっと不思議だったのよ」とそのあとに付け足す。

「それはハーマイオニーの親がどうして歯医者なのかと聞くようなものだと思うけど……、まあしいて理由を上げるとすれば生まれた時からそこにいたからよ。私は小さい頃お嬢様に拾われたの」

「でも私吸血鬼って初めてみたわ。本では読んだことあったけど、実際には初めてで……なんというか、雰囲気というのかしら。言葉では上手く言えないけど凄かった。私たちとは全く別の種族なんだってひしひしと感じるというか。……咲夜が小さいときっていうけど、その時はそのお嬢様も小さかったんじゃない？ お嬢様のお父さんに拾われたとかか？」

ハーマイオニーは種族の違いというものをよく理解していないらしい。

私はハーマイオニーの考えを直すために答える。

「お嬢様はもうかれこれ四百九十年ほど生きてるわ。吸血鬼の寿命が長いというのは貴方も知っていることでしょう？」

ハーマイオニーはああそうか、と声を上げる。

本当にこの少女は頭はいいが何処か抜けている部分があるのだ。

「まあなんにしてもお嬢様は高貴なお方よ。粗相のないように気を付けてね」

私は車内販売のかぼちやジュースを購入する。

先ほどの車の中は暑かった。

冷たいかぼちやジュースが私の火照った体を適度に冷やす。

「車の中と比べると列車の中はそこそこ涼しいわね。魔法でもかけているのかしら」

「咲夜、まさかさつきまであの馬鹿二人と車に乗っていたの？」

小さい声で呟いたはずなのだが、ハーマイオニーは聞き逃さなかったぞとばかりに追及してくる。

「そんなわけないでしょう？ ジャンプしたら間に合ったのよ」

「ジャンプって……」

このように言っておけば駅のホームから急いで飛び移ったように聞こえるだろうか。

「キングズ・クロス駅行きのバスが渋滞で遅れてね。ギリギリだったのよ」

私は改めてコンパートメント内にいる人間を見る。

今話していたハーマイオニーの他にルームメイトのパチル、そして見かけない赤毛でそばかすの少女が一人。

この少女は見たことがある。

確かロンの妹だ。

「貴方は……確かジニーだったかしら。ロンの妹よね」

「ええ、ジニー・ウィーズリーよ。兄がお世話になってます」

日記帳に何かを書きながらジニーはペこりと頭を下げた。

「さつきまではジニーと貴方の話をしていたのよ。グリフィンドールにホグワーツについての秀才がいるって」

ハーマイオニーが付け足すように言った。

「それを言うなら貴方がパーシーじゃないの？ あと話に聞いたトム・リドルさんとか」
私はパチュリー様が良かったとえに出していたトム・リドルという生徒の名前を口に出す。

ハーマイオニーは誰それ？ と言った表情をしていたが、ジニーは途端に焦ったような表情になった。

「どうしたの？ 今頃になってロンのことが心配になってきた？」

私はその表情のわけを聞こうとジニーに話しかける。

ジニーは何でもないと大げさにジャスチャーをすると、急いで日記帳を鞆にしまった。

……あれは何かを隠している。

そしてその隠し事はトム・リドルという生徒に関することだろう。

私は懐中時計を握りしめ、時間を停止させる。

そしてジニーがしまった日記帳を取り出すと、表紙を開いた。

日記帳には何も書かれてはいなかった。

いや、それはおかしい。

先ほどジニーは確かにこの日記帳に何かを書きこんでいた。

私はページをめくるが、どここのページも白紙だ。

いや、初めのページにうつつすらと「T・M・リドル」とサインがしてある。

「なるほど、トム・リドルの日記というわけね」

ジニーが焦った理由に納得がいった。

だが何も書いていないのには納得いかない。

私はページの角のところに万年筆でインクを落とす。

紙の素材が特殊なのだろうか。

私の落としたインクは紙に染み込むように消えていった。

「へえ、日記帳に魔法が掛かっているとか？」

私はつうと万年筆で一本線を書いてみるが、それも先ほどのインクと同様に紙に染み込まれていった。

まるで日記帳が紙の上の情報を読み取っているように。

私は何かを思いつくと、紙の上で万年筆を滑らせた。

『貴方は誰?』

一瞬アホらしい考えだと思ったが、私の予想は間違つてはいなかったらしい。

私が書いた文字も消えるように染み込んでいき、違う文字が浮き上がってきた。

『僕はトム・マールヴォロ・リドル (Tom Marvolo Riddle) です。貴方は誰ですか?』

ジニーが夢中で何かを書きこんでいた理由が分かった。

それは返事をする日記帳なのだろう。

私には分からない感覚だが、年頃の女の子ならこんなものだろう。

私は消えゆくトム・リドルの名前を見つめる。

よくパチュリー様との勉強会で上がった名前だ。

名前が上がるというよりかは、「マーリンの髭」と同じような使われ方で「あのリドルでも」みたいなニュアンスだったが。

私は文字が消える寸前に次のことを書き込む。

『私は十六夜咲夜よ』

私はトム・マールヴォロ・リドル (Tom Marvolo Riddle) という名前をじっと見つめる。

その時、ふとインスピレーションのようなものが浮かび、そして少し前から浮かんでいたモヤモヤが一気に晴れたような気付きを得た。

私はその妄想にも似た思いつきを確かなものにするために、半ばカマかけのような形で日記帳に書き込む。

『貴方のことは知っていたけど、本名はトム・マールヴォロ・リドルっていうのね。並び変えたら『I am Lord Voldemort』（私はヴォルデモート卿だ）になるのだけれど、貴方はヴォルデモート卿なの？』

ただの秀才にしては、パチュリー様の例え話にあまりにもよくトム・リドルの名前が出てくる。

もしトム・リドルがただの秀才ではなく、ヴォルデモートなのだとしたらパチュリー様が話に出すのにも納得がいくというものだ。

意外と凶星だったのか、日記帳からの返事はない。

私は少し考え、もう一文付け足した。

『大丈夫、別に私は貴方が何者であっても興味はないし、誰かに言いふらしたりもしないわ』

こんなところで日記帳が発見されたとなったらヴォルデモートとしては赤面せざるを得ない事態だろうが、私にはあまり関係がない。

『ヴォルデモート卿とは、僕が学生時代から使用していた名前です。僕はトム・リドルという有り触れた名前が嫌いでした。咲夜、君はこの日記帳をどうするつもりですか？ 火にくべて燃やしますか？』

『人の話を聞かない人は嫌いよ。私は貴方のことを言わずにジニーに日記帳を返すし、このことを学校の先生方に報告することもしないわ』

『それは何故です？ ヴォルデモートという存在を知らないわけではないでしょう』

トム・リドルは私の答えに関して疑問を持っているようだった。

私は自分の考えを書き殴っていく。

『私はヴォルデモートという存在がどのような人物で、何をしようとしていたかは知っている。でも彼について知っていることはそれぐらいで、人柄や思想までは分からないわ。興味があるの。闇の帝王と言われたその人物がどのような考え方を持っているのか、どのような過去を持っているのか』

何かを考えているのかトム・リドルの反応が返ってくるのに時間がかかる。

やがて結論を出したかのようにゆっくりと文字が浮き上がってきた。

『私にはその言葉を信用する以外の選択肢がないようです。またゆっくりと話す機会を設けましょう。その時までこの日記帳のことはご内密にお願いします』

そして日記帳はパターンとひとりでに閉じた。

もう話すことはないということなのだろう。

私は日記帳をジニーの荷物の中に仕舞い込む。

そもそも何故ジニーがヴォルデモートの日記帳などという恥ずかしいものを持っているのか。

どこで入手したもので、この日記帳に関してどう思っているのだろうか。

まあジニーのあの夢中な様子を見る限り、ポケットに入る楽しいお友達程度の認識しかなさそうだが。

私は動かした全ての物の位置を微調整すると自らも先ほどと同じ体勢を取る。

一センチでもズレると違和感が残ってしまうのだ。

私は細かく姿勢を修正し、最後は視線さえにも気を配り、時間停止を解除した。

「トム・リドルさん？ 誰それ？」

動き出したハーマイオニーが先ほどの会話の続きを話し出す。

「昔ホグワーツにいた秀才らしいわ」

「そんなに凄い人なら今でも有名だと思っただけど……やっぱりそういう人って魔法省とかで働いているのかしら」

ハーマイオニーはそう呟くが、あながちそれは間違っではない。

魔法界でヴォルデモートの存在を知らない人間はいないだろう。

「で、でも十六夜さんって学期末に一人で百七十点も点数を稼いだって兄が言っていたわ。それに試験の成績も学年トップだったって」

ジニーが話題を変えようと私の話を持ち出す。

「運が良かっただけよ。試験だけは実力だと答えておくわ。じゃないとハーマイオニーが可哀想だし」

「あー……、そうね。私も頑張らないと。でも貴方が勉強しているところ殆ど見てないと思うんだけど、なにか秘訣があるの？」

ハーマイオニーが不思議だと言うように私に聞いてくる。

確かに私はハーマイオニーの前では殆ど勉強をしていない。

努力することは素晴らしいことだと思うが、それを人に見せるというのは優雅ではない。

私は勉強をする時、決まって時間を止める。

長時間時間を止めて勉強する場合、食事前というのがいつものパターンだった。

時間を止めている間もお腹は空くし、疲れもする。

紅魔館では食料に困ることはなかったが、ホグワーツではそうもいかない。

魔法で食料を出せればよいのだろうが、生憎魔法で食べるものを作り出すことは理論上不可能だった。

まあでもハーマイオニーに「時間を止めて好きなだけ勉強している」とは言えないが。「ハーマイオニーは授業を真面目に聞きすぎなのよ。授業に集中するのは勿論良いことだと思うけど、所詮一人の教師が一度に教えられる情報量には限界があるわ。基礎の理論さえ理解できていれば本を読むだけで十分勉強になるでしょ?」

「昨夜は授業中に授業とは全く違う勉強をしているの?」

今度はジニーが聞いてくる。

まあしているわけじゃないのだが、そう見えるように答えた。

「いえ、それも違うわ。授業で教えているのは基礎。特に1年生の授業なんてね。だってら自主的にその基礎を元にした上級魔法を勉強すればいいのよ」

ジニーは納得するように相槌を打つ。

「でも貴方が授業中に読んでるの大体が物語じゃない。参考書や学術書じゃないわ」

ハーマイオニーが私が読んでいた本のタイトルを思い出すように言った。

「そうだったかしら。そういえば、今年新しく購入した教科書、一通り読んだけど教科書らしくはなかったわ。たしか——」

「ギルデロイ・ロックハート! 彼の本ね!」

私が名前を言う前にハーマイオニーが興奮したように言った。

「彼って本当に素晴らしいわ。彼の凄いところはやっぱり勇気と発想力ね。どんな難題

にぶつかつても優雅に、そして素晴らしい策を用いて解決していくの！ それに、今年彼がホグワーツに来るのよ！ 彼の授業とつても楽しみだわ……」

ハーマイオニーはその後ロックハートについて自分の思っていることを長々と話し始めた。

もうすっかりハリーとロンのこととは頭にないといった感じだ。

私はハーマイオニーの話を一年生の時の最初の列車の中でもこんな感じだったなと思いつつ話半分聞く。

ハリーたちは無事に学校にたどり着くことができるだろうか。

私を乗せたホグワーツ特急は今年も変わらず線路の上を進んでいった。

ホグワーツに着くと去年と同じように新入生の組み分けがあり、それが終わると歓迎会になった。

私は適当に料理を皿に取り食べるが、どれも普通に美味しい。

ホグワーツの料理は誰が作っているのだろうか。

私はその人物を見たことはないが、腕が確かなのは間違いないだろう。

「十六夜咲夜。少し良いですか？」

いきなり後ろから話しかけられたので私はフォークを啜えたまま振り返ってしまふ。

振り返った後ではしたくないと思ひ急いでフォークを皿に戻した。

声を掛けてきたのはマクゴナガル先生だ。

「なんでしようか、マクゴナガル先生」

私はナプキンで口を拭いた後に答える。

マクゴナガル先生の顔は少々強張つたような表情をしていた。

「少し聞きたいことがあります。一緒にきてください」

丁寧な言い方だが命令形だ。

つまり私に拒否権はないということだろう。

心配そうにこちらを見つめるハーマイオニーに軽く手で大丈夫だと合図を送ると、私はマクゴナガル先生のあとについていった。

連れてこられた場所は地下牢にあるスネイプ先生の研究室だ。

マクゴナガル先生のあとに続いて中に入るとハリーとロンが申し訳なさそうな顔をしている。

大方車で学校に来たことがバレて説教をもらっているところなのだろう。

部屋の中には他にスネイプ先生やダンブルドア先生の姿も見えた。

あの2人の申し訳なさそうな顔を見る限り、2人のうちどちらかが私のことを漏らし

てしまったのだと予想を立てる。

「ここに居る2人は空を飛ぶ自動車で校庭にある暴れ柳に突っ込んだのですが、ウィーズリーがぼろりと貴方の名前を溢したのです。貴方もあの車に乗っていたのですか？」

マクゴナガル先生が私に聞いた。

できれば乗っていないと答えない。

だが2人が私の名前を漏らしたあと口を噤んでいたという保証もないのだ。

下手に嘘をつくとも矛盾を生むことになりかねない。

「はい、9と4分の3番線に入る鉄柵が通れませんでしたので」

「他の方法は思いつかなかったのですか？」

マクゴナガル先生は冷たく私に言った。

「勿論思いつきましたわ。箒で飛んでいく、ハリーのふくろうで助けを呼ぶ、ダイアゴン横丁まで行きホグズミード村まで煙突飛行するなどですかね。ですがロンが車を出してくれると言うので便乗してきたのです」

マクゴナガル先生は呆れたように頭を押さええると、何かに気が付いたかのように私の方に視線を戻した。

「それで、何故その2人は車で暴れ柳にぶつかって、貴方は汽車から降りてきたのです？」

それはもつともな疑問だろう。

「飛び降りたんです。車で空を飛んでいるときにホグワーツ特急が見えたので」

その言葉を聞いてマクゴナガル先生は驚愕に目を見開き、スネイプ先生は私の体を上から下まで観察した。

どうやら怪我をしていないか確認しているような感じだ。

「そ、それは本当ですか？」

「本当です。一瞬落っこちたのかと思いましたが」

マクゴナガル先生の問いにロンが答える。

「なんて馬鹿なことを……」

マクゴナガル先生の言葉が続かない。

言葉が出てこないといった表情だった。

マクゴナガル先生に代わってダンブルドア先生が口を開く。

「それは余りにも危険な行為じゃ。命を投げ捨てておるのにも等しい。それとも、十六夜咲夜よ。君には絶対に成功するという確証があったのかな？」

流石、ダンブルドア先生は鋭かった。

能力に関してはまだバレてはいないだろうが、何かしらの力を持っていることには気が付いているだろう。

「勿論です。この命は私の所有物ではありませんので、命を捨てるような真似は自分の判断では出来ません。そろそろ歓迎会に戻ってもよいでしょうか？」

その言葉にハリーとロンの目が輝く。

お腹が空いているのだろうか。

「それはならん。ならんと言いたい。じゃが咲夜、君は暴れ柳にはぶつかっておらんし、ホグワーツに到着する前のことで罰則を与えることも叱ることも出来ん。だからこれはわしからの忠告じゃ。あまり他人の心配するようなことをやるべきではない」

ダンブルドア先生はそういうと私に退室の許可をくれた。

ハリーとロンの表情は先ほどとは違い青ざめている。

私には罰則を与えられない、ということには自分たちにはあることを理解したからだろう。

私はぺこりと頭を下げると来た道を帰っていく。

そして先ほどまでいた席に座り夕食を再開した。

「なにを聞かれたの？」

ハーマイオニーが心配したと言わんばかりに聞いてくる。

「スカイダイビングのコツ」

私は茶化して答えた。

翌日の午後の授業は闇の魔術に対する防衛術だった。

ハーマイオニーは楽しみで仕方がないといった雰囲気だ。教科書の1つである『バンパイアとバツチリ船旅』を読んでいる。

この本を読んで私は思ったのだが、どうも魔法界では吸血鬼という存在はあまり恐れられていたようなものではないらしい。

去年、闇の魔術に対する防衛術の教師だったクイレル先生が余りにも吸血鬼を恐れていたのだ、あれが普通だと思っていたのだが。

そして驚くことに新しく購入した教科書8冊のうち7冊が闇の魔術に対する防衛術の教科書だった。

私の鞆だとかさばるといふことはないが、他の生徒は大変そうだ。

例えとして挙げるならば、真つすぐ積み上げて机に置くと黒板が見えないほどである。

ロックハート先生は全員が着席するのを見ると、一度大きく咳払いし視線を集める。

そしてネビルのほうへと歩いていきロックハート先生が大きく表紙に載っているものを取り上げ高々を掲げた。

「私だ」

ロックハート先生は本の表紙と同じようにウインクをする。

「ギルデロイ・ロックハート。勲三等マリーリン勲章、闇の魔術に対する防衛術連盟名誉会員、そして『週刊魔女』5回連続『チャーミング・スマイル賞』受賞。もつとも私はそんな話をするつもりではありませんよ。バントンの泣き妖怪バンシーをスマイルだけで追い払ったわけじゃありませんしね！」

今のはギャグなのだろうか。

ロックハート先生はみんなが笑うのを待っていたようだったが、数人が曖昧に笑っただけだった。

「全員が私の本を全巻揃えたようだね。たいへんよろしい。今日は最初にちよつとミニテストをやりようと思います。ですが心配ご無用！ 君たちが私の本をどれぐらい読んでいるか、そしてどのぐらい覚えていたかをチェックするだけですからね」

ロックハート先生はニコリと笑うとテスト用紙を配り始める。

私はそのテスト用紙に目を落とすが、ロックハート先生がテスト用紙を配り間違えたものだと思った。

テストの殆どが闇の魔術に対する防衛術とは全く関係なく、ロックハート先生自身の問題だからだ。

全部で54問。

制限時間は30分。

これは真面目に答えを書いた方がよいのだろうか。

私は最後の5分になった時点で時間を止め、ハーマイオニーの答案用紙をひつたくると答えを写していく。

完全にカンニングだが、まあこのテストではいいだろう。

私はハーマイオニーの答案用紙を元に戻すと何食わぬ顔で時間停止を解除する。

ロックハート先生は答案を回収するとクラス全員の前でペラペラとめくった。

「おやおや、私の好きな色がライラック色だということを殆ど誰も覚えていないようですね。それと『狼男との大いなる山歩き』の第12章ではつきり書いているように、私の誕生日の理想的なプレゼントは魔法界と非魔法界のハーモニーです。もつとも、オグデンのオールド・ファイア・ウイスキーの大瓶でもお断りはしませんよ!」

ロックハート先生はバチコンとウイソクをする。

クラスの男子の何人かは付き合ってられないといった顔で頭を抱えていた。

逆にハーマイオニーはうっとりとした顔でロックハート先生の言葉を聞いている。

「そしてハーマイオニー・グレンジャーと咲夜・十六夜は満点です! よく私の本を読み込んでいますよね。ミス・グレンジャーとミス・十六夜は何処にいますか?」

ハーマイオニーは素早く、だが震えるように手を挙げる。

私も自分の位置を教えるように軽く手を挙げた。

「すばらしい！」

ロックハート先生が賞賛を送る。

「まったく素晴らしい！ グリフィンドールに20点あげましょう。各10点ずつです」

ロックハート先生はひとしきり私たちを褒めると授業に入った。

それにしても驚いたのはハーマイオニーが満点だった点だろう。

本当に彼の本が大好きということだろうか。

「さあ、気を付けて！」

ロックハート先生は机の後ろから布のかかった大きな籠を取り出す。

「魔法界の中で最も穢れた生物と戦う術を授けるのが、私の役目なのです！ この教室で君たちは、これまで以上に恐ろしい目に遭うことになるでしょう。ただし、私がここにいるかぎり、何物も君たちに危害を加えることはないと思いたまえ。落ち着いているよう、それだけはお願しておきましょう」

ロックハート先生は籠にかかっている布を取り払った。

「さあ、どうだ。捕らえたばかりのピクシー妖精です！」

籠の中に入っている群青色をした小さな妖精は、尖った顔つきをしており可愛いとは言いがたい。

籠の中身を見て生徒の1人が嘔き出した。

大げさなことを言いながら、出したのが小さい妖精かよ。

そう言いたげな様子で嘔き出した生徒がロックハート先生に質問を飛ばす。

「あの、こいつらがそんなに危険なんですか？」

その生徒は笑いを堪えるのに必死だという表情をしていた。

「思い込みはいけません！ 連中は厄介な小悪魔になり得ますぞ」

ロックハート先生が籠の扉に手を掛ける。

「さあ、それでは……君たちがピクシーをどう対処するかやってみましょう！」

何を考えたのかロックハート先生は突然籠の扉を開け放った。

次の瞬間、ロケットのようにピクシー妖精が教室中に飛び立つ。

先生はどう対処するかと言っていた。

ということは好きに対処していいということだろう。

私は時間を止めてピクシー妖精の全部の位置を確認する。

そして時間停止を解除し、空間操作で何十本と隠し持っている投げナイフをピクシー

妖精目掛けて一気に投擲した。

精度を維持しながら投げられる最大数は3本。

それを両手で投げているので一度に6本のナイフが空間を切り裂きピクシー妖精に突き刺さる。

そして5秒もしないうちに全てのピクシー妖精が地面に墜落し、息絶えた。

「ふう」

私は一息つくと改めて周囲を見回す。

撃ち落としがないか確認する為だったのだが、全員が驚愕したかのような顔をしてこちらを向いているのしか目に入らなかった。

私はピクシー妖精に突き刺さっているナイフを回収しながらロックハート先生に言う。

「対処いたしました。ピクシー妖精の死骸はいかがいたしましたしょう」

ロックハート先生はハツと我に返るといつもの調子で笑おうとしたが、顔が引きつっていた。

「お、おみごとですミス・十六夜。グリフィンドールにもう20点あげましょう。死骸は私が片付けておきますから皆さんは荷物を纏めなさい。そろそろ終業の時間だ」

私はその言葉を聞いて懐中時計を取り出し時間を確認する。

確かにそろそろ授業が終わる時間だ。

私は荷物を纏め始めるが、全員が固まったかのように私を見ていた。

「みんなここに住み着く気なの？ 私は談話室に戻ろうと思うけど……」

私のその言葉でようやく教室内の時間が動き出す。

みんなが慌てたように教科書を仕舞いピクシー妖精の死骸を踏まないように気を付けながら教室を出ていく。

私もそれに続き外に出た。

教室を出る瞬間ロックハート先生が「次の授業どうしよう……」と呟いていたが無視することにする。

「咲夜、あれはどうやったんだい!? 一瞬でピクシー妖精があ……なんだ」

ロンが話しかけてくるが言葉が出ないようだ。

私は袖から1本のナイフを取り出すとロンに渡す。

そのナイフを不思議な物でも見るかのようにハリーとロン、そしてハーマイオニーが眺めた。

「別に何処にでもあるナイフよ。私はそれを投げただけ。昔から得意なのよ。こういう芸が」

私は袖からもう2本ナイフを取り出すと、左手の指だけでジャグリングをした。

そして2本同時に刃の部分の指の間で挟みキャッチする。

その曲芸をみて3人はサーカスでも見るように手を叩いた。

「すごい！ 僕こういうの初めてみたよ！」

ハリーが興奮したようにロンからナイフを受け取りそれをマジマジと観察する。

何かタネがないか探しているのかと思ったが、純粹にナイフの側面に彫つてある彫刻を眺めていただけだった。

「扱いには気を付けてね。切れ味は教室で見せた通りよ」

私がそういうとハリーの手つきが急に慎重になる。

そしておずおずと私にナイフを返してきた。

「でも咲夜、さっきのはやりすぎよ！ それに、闇の魔術に対する防衛術の授業なのだから呪文を使うべきだよ！」

今思い出したかのようにハーマイオニーが私に食つて掛かる。

「私なら縛り術をかけて大人しくさせるわ」

「そう、貴方は被害が出る前に全てのピクシー妖精に縛り術を掛けることができるのね。今度その秘訣を教えてもらいたいものだよ」

皮肉交じりにそういうと、ハーマイオニーの顔に向けて真つすぐナイフを突きつけた。

「どんなに綺麗な方法でも、被害が出てしまったら意味がないわ。素早くスマートに全

ての息の根を止める。対処とはそういうものよ。それに——」

私は一旦そこで言葉を切り、軽く微笑んだ。

「ロックハート先生は褒めてくださいましたわ。つまりはそういうこと」

私がロックハート先生の名前を出すと、ハーマイオニーは何故か納得したように「そうね！」と私の意見を肯定した。

この子大丈夫だろうか。

ハリーとロンもやれやれと言った顔で肩を竦めている。

私はナイフを袖に隠し直すと、興奮したようにロックハート先生の話をしだすハーマイオニーに、適当な相槌をうちながら談話室へと戻った。

9月ももうすぐ終わるといふ頃、私宛てにふくろう便が届いた。

私は一瞬紅魔館からの手紙だと思ったが、紅魔館にはふくろうはいない。

手紙が来るとしたらお嬢様のコウモリか、パチュリー様が手紙本体を飛ばしてくるだろう。

私は一応誰にも見えないように気をつけて手紙を開き、読んだ。

『今日の深夜1時。誰もいなくなった談話室で』

手紙にはその一文しか書かれていないが、私はこれを送ってきた人物が誰だか大体わ

かった。

私はその手紙をその場で焼却し、塵へと変える。

そして何食わぬ顔で学校の生活へと戻った。

その日の夜、私は談話室で本を読みながら指定の時間になるのを待っていた。

深夜1時、殆どの生徒がベッドにつく時間だろう。

それでも談話室を離れない生徒というものはいるものだ。

私はバレないように軽めの眠りの魔法をかけ、自発的にベッドに入るように促す。

そのようにして1時には談話室に私以外のグリフィンドール生はいなくなつた。

私は懐中時計を取り出し時間を確認する。

短針はきつかり1時を指していた。

「人払いをしてくれてありがとう」

現れたのはロンの妹のジニーだった。

女子寮のほうからパジャマのまままで降りてくる。

いや、あれはジニーではない。

あれは……。

「こんばんは。汽車以来ね。で、いいのかしら？」

私はジニーに取り憑いているのであろうトム・リドルに挨拶をした。

「ああ、ジニーの身体を少し借りている。無論、無断だけどね」

ジニーの可愛らしい声でリドルが言う。

話す機会を設けるとはリドルのほうが出たことだが、まさかこのような形で会話をすることになるとは思わなかった。

「それじゃあ、楽しくおしゃべりをしましょう」

私は時間を止めると談話室の机の上にクッキーと紅茶を並べる。

事前に用意して時間を止め、慎重にしまつてあつたものだ。

私はそのまま時間停止を解除する。

いきなり現れたお茶と茶菓子にリドルは欠片も驚く様子はなく、それらを眺め一言。

「これは楽しいお茶会になりそうだ」

そう呟いただけだった。

私とリドルは机を挟んで向かい合うように座る。

私がどんな話をしようかと考えていると、リドルのほうから話しかけてきた。

「君は、なんとというか奇妙だ」

リドルは一度そこで言葉を切る。

「そう、ジニーの中から君を観察していたよ。談話室にいる君はいつも本を読んでいた

ね。本が好きなのかい？」

「好きじゃなかったらこうしてあなたと話をしていないわ。ねえトム。この前ハリーが言っていたことなのだけけれど……」

私は少し前、ハリーが暴れ柳の件の罰則を受けているときに奇妙な声を聞いたということのリドルに話して聞かせた。

何故そんな話をしたのか私にも分からなかったが、もしホグワーツで奇妙なことが起こっているのだとしたらそれはリドルのせいであると思っただからだ。

リドルは何かを悩むように手を顎に当てる。

そして今更かといった表情で私のほうを見た。

「君は不思議な生徒だ。僕の正体を知っているのにそれをジニーに教えない。そして日記帳のことを先生たちに報告しない。実は君は僕の隠れたファンなのかい？」

何かを確認するようにリドルが私に聞いてくる。

「それは違うわ。でもそうね。誰かにこのことを言いつけることはしないわね。私の正義はそこにはないもの。ねえトム、貴方はこの学校で何をしようとしているの？ 私は

貴方に興味があるわ」

「僕がそれに答えると？」

「あら、ヴォルデモートの恥ずかしい日記をジニーが持っていますって校長にバラしたつ

ていいのよ?」

私が半分ふざけながら脅すように言うと、リドルはやれやれといった表情で肩を竦めた。

「言ってることがしつちやかめつちやかだけど、僕に拒否権はないってことかな。ふむ、この紅茶美味しいね。君が淹れたのかい?」

「そうよ」

リドルはそれを聞くともう一度紅茶に口をつけ、そしてソーサーに戻す。

そして紅茶の余韻を楽しむと、ゆっくりと口を開いた。

「僕はね、秘密の部屋を再び開こうと思うんだ」

その言葉を聞いて、私は息を呑んだ。

お嬢様が言っていた事を思い出したのだ。

「秘密の部屋が開かれる」と。

「サラザール・スリザリンがホグワーツを去る時に残したとされる部屋でね。スリザリンの真の継承者のみが秘密の部屋の封印を解くことが出来る。そして、僕は50年前に1度秘密の部屋の封印を解いた。そう、僕こそがスリザリンの、彼の継承者なんだ。秘密の部屋には僕にしか操れない怪物が封印されている。だが今年、再び秘密の部屋は開かれた。スリザリンの怪物は僕の指示でホグワーツの純血でない生徒を追放するだろ

う」

「面白そうなことを考えるわね」

私の同意にリドルは満足そうに頷く。

「優れているものだけが教育を受け、穢れた血は排除されるべきだ。それがサラザール・スリザリンの意思であり、僕の願いでもある」

リドルはクッキーを一つ手に取ると、軽く投げて口の中に入れた。

「ふむ、これも美味しいね。それでだ。多分これから被害に遭う生徒や最悪死ぬ生徒とも出てくると思うけど、まあ気にしないでくれ」

クッキーの味に満足したのか、リドルはやたらフレンドリーに私に言った。

「生徒が何人死のうが知ったことではないわ。でもまあ……そうね。その怪物とやらを私にけしかけなければ自由にやっていいわよ」

私は空になったリドルのティーカップに紅茶を注ぐ。

「ありがとう。是非ともけしかけて君を消したいところだけど、この調子だと本当に秘密にしてくれそうだからね。理由を聞かせてもらってもいいかな？」

それは私が何故日記のことを誰にも話さないかということだろうか。

「さっきから言っているように、私は貴方に興味があるのよ。日記として生きているということは既に人間ではないのでしょうか？ それに虐殺の限りを尽くしたヴォルデ

モート卿には親近感が湧くしね。まあこの話はこのぐらいいしておきましようか。紅茶と茶菓子はまだあるわ。貴方が学生だった頃の話聞かせて下さいな。50年前に秘密の部屋が開かれた時の話にも興味があるし」

私はクツキーを摘みながらリドルとの会話を続ける。

結局この日はリドルと一晩中語り合った。

結果私が理解したことは、リドルは私と非常に気が合うということだろうか。

リドルはジニーを使い秘密の部屋にいる化け物を解放したと言っていた。

怪物はバジリスクという巨大な蛇だという話だ。

「本当は在学中にスリザリンの崇高な仕事を成し遂げたかったんだ。だけどそれはあまりにも危険だと僕は判断した」

「それは正しい判断だと思っわ。もしそこで再び秘密の部屋を開けていたら睨みを利かせていたダンブルドア校長……この頃は変身術の先生だったかしら？ に見つかってハグリッドじゃなく貴方が退学になっていたわよ」

「ああ、僕もそうなると思っただ。だからこの日記帳に16歳の自分を保存しようと思った。いつか誰かに僕の足跡を追わせる為に。もっとも、自分自身で開けることになるとは思わなかったけどね。」

「なるほどね。貴方は16の時には既に記憶をそのまま本に記録するような高度な魔法

が使えたのね。感心するわ」

私はちらりと懐中時計を見た。

もうそろそろ誰かが起きてきても不思議ではない時間だ。

リドルもそれに気が付いたのかソファアールから立ち上がる。

「僕としたことが、久しぶりに本音で話したせいかな時間を忘れてしまっていたようだね。

君のような生徒に出会えてよかった」

「私も、貴方と会話出来て楽しかったわ。また機会があったらこうしてお茶会でもしましょう」

私は机の上に出していたティーセットを片付けていく。

リドルは女子寮の方へと上がっていった。

私はリドルの姿が見えなくなるとソファアールにどっと倒れ込み、時間を停止させる。

そして大きなあくびをすると襲い掛かってくる睡魔に抗うことなく眠りの中へと落ちていった。

ミセス・ノリスとか、決闘クラブとか、偽物とか

10月末、バジリスクに襲われた最初の被害者が出た。

私が騒ぎを聞きつけたとき何処かの混血かマグル生まれの生徒が殺されたものだと予想を立てたのだが、拍子抜けすることに最初の被害者は管理人フィルチのペットであり相棒でもあるミセス・ノリス……猫だった。

私はハロウィーンのパーティー終わりに廊下の一角がざわついているのを発見すると、楽しみにしていたテレビ番組が始まった時のような浮かれ気分でその場に向かったのだが、この結果には少しがっかりだ。

廊下の壁にはリドルのものとと思われる予告文と、死んで動かなくなっているとされるミセス・ノリスが吊るされている。

『秘密の部屋は開かれたり。継承者の敵よ、気をつけよ』

壁にはそのような血のような赤いペンキで書かれている。

警告するということはリドル自身純血以外を皆殺しにする気はないのかも知れない。私はC級ホラー映画のような惨状を期待していただけに、少し肩を落とした。

「わたしの猫だ！ わたしの猫だ！ ミセス・ノリスに何が起こったというんだ!」

フィルチが大声で騒ぎ、何故かその場に居合わせたハリーたちのせいにしようとするが、ハリーたちが弁明する前にダンブルドア先生と他数人の教師陣がハリーたち3人を連れていってしまった。

私は急いでその後を追う。

ダンブルドア先生はロックハート先生の提案によってロックハート先生の部屋へと入る。

私も何食わぬ顔でその後ろに続きロックハート先生の部屋に入った。

初めて入る部屋だが、ロックハート先生の部屋を一言で表すとしたら、自己主張の激しい部屋だ。

ロックハート先生の写真が何枚も額に入れられて飾られており、そのどれもがドヤ顔をしている。

まあでも別にそれが悪いわけではないだろう。

自信過剰になるのは少々危険なことだが、何事も成功すると思いきり組んだ方がモチベーションは上がる。

ダンブルドア先生はミセス・ノリスを机の上に置くと、優しい手つきで調べ始めた。

そして他の教師陣もそれに加わりあれやこれやと議論をし始める。

ロックハート先生も自らの持論を述べていたが、的外れな意見だったのでそれに反応

したのは既に泣きが入っているフィルチさんだけだ。

フィルチさんは手で顔を覆ったまま机の脇に置いてあつた椅子にがつくりと座り込むと、しくしくと泣き出してしまふ。

その様子をハリーが同情するような目で見ていた。

「アーガス、猫は死んでおらんよ」

「死んでない？」

ダンブルドア先生の判断に耳を疑つたのかフィルチさんは顔を上げる。

「それじゃ……どうしてこんなに固まつて、冷たくなつて……」

「石になつただけじゃ。ただし、どうしてそうなつたのか……わしには答えられん」

ダンブルドア先生が優しい声でフィルチさんにそう説明する。

フィルチさんはハリーたちのせいだと思つていようだったが、その意見もダンブル

ドア先生の「2年生がこんなことを出来るはずがない」という意見に否定された。

それを聞いてもフィルチさんはハリーたちがやったものだと言い続ける。

そしてフィルチさんはついに自分がスクイブだということを理由にあげ、それを知つているのはハリーだけだと証言した。

スクイブとは、魔法使いの小孩に生まれたが魔法が使えない者のことを指す言葉だ。

フィルチさんがスクイブではないかという噂は耳にしたことがあるが、本人の口から

語られたということは本当なのだろう。

その後もハリーたちは自分たちが絶命日パーティーにいたことなどをアリバイにあげ、反論する。

だが事件が起こった現場とパーティー会場の位置関係や行動の謎をスネイプ先生に指摘され、ハリーたちは徐々に追い詰められていった。

だが最終的にハリーたちはその場にいただけということになった。

このことについてスネイプ先生とフィルチさんは納得いかなかったようだが、ダンブルドア先生がミセス・ノリスを治す薬が作れる環境があると説明すると取り敢えずフィルチさんは納得したようだった。

「さて、と。それでどうして咲夜、君がここにいるのかね？」

話が一段落ついたところでダンブルドア先生がこちらを見る。

それに釣られて全員が私の方を見た。

まあ同じ部屋に堂々としたのだから指摘されないほうがおかしいだろう。

「別におかしなことではありませんわ。関係ないハリーたちがこの部屋にいるんです。だとしたら関係ない私がここにいるもおかしくはないですよね」

私はダンブルドア先生の意見を利用して反論した。

ダンブルドア先生は自分がハリーたちに下した意見を利用されたとわかったうえで、

一本取られたとばかりに「帰ってよろしい」とハリーたちと共に部屋から出す。

部屋の外でハリーたちと私の間に沈黙が流れるが、ハリーたちは急ぎ足で上の階へと歩いていってしまった。

私も夜ももう遅いのでそのまま談話室へと戻ることにした。

それから数日はミセス・ノリスの話で学校中がもちきりだった。

色々な憶測が飛び交い、中にはハリーたちが犯人という噂もあった。

まあ大方スリザリンの生徒が流したものだろう。

そして何よりも笑えたのがジニー・ウィーズリーだ。

ロンの話ではジニーは大の猫好きの人間らしく、ミセス・ノリス事件で酷くショックを受けたらしい。

だがミセス・ノリスをあのように固めて吊るしたのは、十中八九リドルに操られたジニーだろう。

真実を知った時ジニーはどのような顔を浮かべるのか、今から少し楽しみではあるが、真相が明かされる前にリドルに魂を全て食い尽くされて死ぬかも知れない。

そしてそれに関連して学校で一時的な読書ブームが沸き起こった。

いや、この言い方には語弊があるかもしれない。

正確には『ホグワーツの歴史』という分厚い本が図書室から全て消え失せ、予約も2週間先までは一杯の状態らしい。

なんでも秘密の部屋に関する記述があるとかないとかで、いち早く情報を仕入れようとしている生徒に大人気なのだとか。

私の近くではハーマイオニーがその生徒の中の1人だった。

ミセス・ノリスの一件以降、ハーマイオニーは必死に秘密の部屋に関しての情報を探している。

そしてついに魔法史の授業中、ハーマイオニーがピンズ先生に質問を飛ばした。

ピンズ先生は自分の講義の途中で質問が飛んできたのは初めてのことだったのか、驚いたようにハーマイオニーを見つめている。

「先生、秘密の部屋について何か教えていただけませんか？」

その瞬間睡魔に襲われていた生徒たちが一斉に意識を覚醒させた。

口をぽかんと開き窓の方を見ていた男子生徒は頬杖をついていた手を滑らせ机に勢いよく頭をぶつける。

両腕を枕替わりにしていたラベンダー・ブラウンは頭を持ち上げ、ネビルは机から落ちそうになる。

「あー……私が教えとるのは魔法史です。事実を教えとるのであり、神話や伝説ではな

いのです」

そういつてビンズ先生は授業を再開させようとするが、ハーマイオニーの手が下がることはなかった。

「お願いです。伝説というのは必ず事実に基づいているのではありませんか?」

ビンズ先生はその意見すらも否定しようとするが、教室中を見回し考えを改める。

なにせいとも死屍累々、殆どの生徒がビンズ先生の存在すら意識せずに各々が睡魔と格闘しているのだが、この時ばかりは全員がビンズ先生の言葉に耳を傾けているのだ。

「あー、よろしい。さて……秘密の部屋とは——」

気を良くしたのか先生はいつもの干からびた声で秘密の部屋について話し出す。

秘密の部屋に関する先生の説明は、リドルから聞いたこととあまり内容的には変わらなかつた。

もつとも、先生自身もあまり秘密の部屋に関しては詳しくないのか、リドルの説明に比べると曖昧な表現が多かつたが。

最終的に先生は秘密の部屋は存在しないという持論を持ち出し、授業に戻つていった。

それから数日経ったある日。

私が図書室で本を読んでいるとハリー御一行がマダム・ピンスと図書室で何やら話し込んでいるのが視界の端に映った。

また何かしでかしたのかと会話に耳を傾けてみるが、どうもそうではないらしい。

マダム・ピンスはハーマイオニーから一枚の紙きれを受け取ると、禁書の棚の方へと歩いていき、一冊の黴臭そうな本をハーマイオニーに手渡す。

ハーマイオニーはそれを大切に鞆に仕舞い込むと、急ぎ足でハリーとロンと共に図書室を出ていった。

つまりはハーマイオニーが先生の何方かから禁書の棚にある本の持ち出しを許可され、持ち出したということだろう。

また秘密の部屋に関する情報探しだろうか。

ロックハート先生のことともそうだが、ハーマイオニーは本当に夢中になり始めると一途だと思った。

そう言えば風の噂で聞いた話なのだが、最近私は一部の生徒の間で『正確無比のキングマシーン』と呼ばれているらしい。

ピクシー妖精の件が原因だということとは分かるが、キングマシーンとは随分な言われようだ。

……まんざらでもないのが少し悔しいが。

土曜の朝、グリフィンドールとスリザリンのクイディッチの試合があった。

驚くべきことに、ドラコはスリザリンのシーカーになることが出来たらしい。

実力で選ばれたかはこの際置いておくことにして。

グラウンドに入場するスリザリンの選手の箒は、マルフォイ氏が寄贈した箒で統一されていた。

ここからでは箒の刻印は見えないが、横にいるロンがニンバス2001だと教えてくれる。

ハリリーの箒がニンバス2000なので、スリザリンの選手全員がグリフィンドールの選手のシーカーよりも良い箒を持っていることになるだろう。

試合が始まると奇妙なことが起こった。

ブラッジャーの1つがハリリーを執拗に狙い続けるのだ。

これもロンの話だが、普通ブラッジャーが1人の選手を狙い続けることはないらしい。

ましてやあそこまで正確に狙っていると咲夜のようにだと……。

ロンはそこまでいうと何でもないとやわんばかりに口を閉ざす。

一度目のタイムアウトをグリフィンボールが要求し、何かを話し合っている。大方ブラッジャーをどうするかという話し合いだろう。

ハリーを狙うブラッジャーを打ち返すことはビーターであるウィーズリーの双子からしたら簡単な話である。

だがハリー一人にビーターが付きつ切りだとグリフィンボールの選手が戦いにくいのは当然の話だろう。

結局ハリーは一人で狂ったブラッジャーを避け続けることに決めたようだった。

ブラッジャーを掻い潜りつつもスニッチを探してグラウンド上を徘徊する。

そしてスニッチを見つけたのか手首にブラッジャーを食らいながらもドラコのほうに突っ込みスニッチをキャッチした。

ハリーはそのまま墜落し泥の上をはねる。

そして倒れたままスニッチを担げると、そのまま気を失った。

そして追い打ちをかけるようにロックハート先生がハリーの折れた手首を治そうとして腕の骨を全て消し去ってしまう。

ロックハート先生は「あー、こんなこともある。それに骨はもう折れていない」ようなことを呟くとそのまま隠れるように退散してしまった。

次の日の朝、また一人被害者が出たという情報が私の耳に入ってきた。

被害者が出たと聞いて一瞬ロックハート先生がまた何かやらかしたのかと思っただけ、
どうやら秘密の部屋関連らしい。

被害者はコリン・クリービー、マグル生まれの生徒だ。

皆はクリービーが襲われたことに驚いていたが、私はクリービーが生きているということに驚きを隠せなかった。

ミセス・ノリスの時もそうだったが、リドルは生徒を殺すつもりがないのだろうか。

同じ週の木曜日、魔法薬の時間に奇妙なことが起こった。

ハリーがゴイルの大鍋に花火を投げ込み、爆発させたのだ。

爆破と共に飛び散ったふくれ薬はクラス中に降り注ぐ。

私はドラコと一緒に薬の調査をしていたので、爆発現場からは相当近い。

反射的に時間を止め、周囲の全員が鍋の爆発に気を取られていることを確認すると使っていない鍋の蓋を手に取り構える。

そして時間停止を解除し飛んできたふくれ薬を器用に受けきった。

だが顔に飛んできたふくれ薬は受けきれたが、数滴が胸に当たってしまった。

私は自分の胸が膨らみ始めるのを見て内心ガツポーズをとってしまったが、すぐさま恥ずかしくなり鍋の蓋で胸を隠した。

ドラコは顔いっぱい薬を浴びてしまったようで、鼻が風船のように膨らみ始めている。

私はハリーに抗議の視線を送るが、クラスの他の生徒はハリーの仕業だと気が付いていないようだった。

ハリーはそこまでゴイルのことが憎たらしかったのだろうか。

悪戯するにはリスクが大きすぎると感じる。

私はスネイプ先生の表情を見るが、見たことないぐらいにカンカンに怒っていた。

スネイプ先生はふくれ薬を浴びてしまった全員にべしやんこ薬を配りながら大声を張り上げる。

「この惨事を引き起こした者が誰か分かった暁には、私が間違いなくそやつを退学にさせてやる」

私はスネイプ先生からべしやんこ薬を受け取ると、一口で飲み干す。

すると次第に膨らんだ胸が小さくなっていった。

私は落胆の声を漏らす。

隣にいたドラコも落胆の声をあげた。

魔法薬の授業から一週間ほど経ったある日、私は掲示板に張られた一枚の羊皮紙を見つける。

そこには今晚8時に決闘クラブの第一回目があると書かれていた。

魔法使いの決闘はパチュリー様から話には聞いている。

互いに相手に敬意を払い、一礼したあと、呪文を撃ち合う。

それは儀式のようなものなのだという。

ようは西部劇のガンマンが互いに背中を合わせ数歩歩き、撃ち合うようなものだ。

私は興味があったので決闘クラブを見に行くことにした。

戦いとは非情なものだが、決まりがあれば楽しむ余地は出てくる。

私が会場に着く頃には大広間は既に多くの生徒で一杯になっていた。

普段大広間に置いてある長机は全て取り払われている。

舞台の上では今まさにロックハート先生とスネイプ先生が決闘を始めようと向かい

合っていた。

「ご覧のように、私たちは作法に従って杖を構えています」

ロックハート先生はシンと静まっている観衆に向けて説明を始めた。

「3つ数えて、最初の術を掛けます。もちろん、どちらも相手を殺すつもりはありませんのでご安心を！」

私はその言葉を聞いてちらりとスネイプ先生の顔を見たが、殺意に満ち満ちている。とても殺す気がないとは思えなかった。

「1、2、3……」

2人が同時に杖を振り上げる。

そしてスネイプ先生が速攻を仕掛けた。

「エクスペリアームス！」

武装解除の呪文がスネイプ先生の杖から放たれ、ロックハート先生が吹き飛ばされる。

達人同士の勝負は一瞬だとよく言うが、この場合そういうことではないだろう。

ロックハート先生は背中をさすりながらも何とか立ち上がり表情を取り繕った

「さあみなさんわかったでしょうね！ あれが武装解除の術です。ご覧の通り、私は杖を失い吹き飛ばされました」

その後もロックハート先生は負け惜しみじみたことをスネイプ先生に言っていたが、スネイプ先生がひと睨みしたら口を噤んだ。

そして気を取り前して生徒に声を掛ける。

「模範演技はこれで十分！　これから2人ずつペアにします。スネイプ先生、お手伝い願えますか？」

先生たちは実力があっていると判断したペアを作っていく。

スネイプ先生はハリーはドラコと、ロンはフィネガンと、ハーマイオニーはミリセントと組ませた。

ロックハート先生は私のことを過大評価しているのか上級生であるセドリック・デイゴリーというハツフルパフ生と私を組ませる。

その組み合わせにデイゴリーは不満をとなえたが、あのロックハート先生だということもあり諦めたようだった。

「あー、そうだね。よろしく、えっと……」

「十六夜咲夜よ。ちなみにファーストネームが咲夜のほうね」

「そうか、咲夜。僕はセドリック・デイゴリーだ。よろしく」

ロックハート先生の強い勧めで私とデイゴリーが一番初めに模擬決闘をすることに
なった。

上級生と下級生という組み合わせに主にグリフィンドルとハツフルパフから不満
の声が出るが、ロックハート先生は気にしない。

思い込みの激しい人なのだろう。

「さあ！ 杖を構えて。セドリツク君、下級生だからって油断をしないように。ミス・十六夜、決闘ですのでナイフは投げないように……」

ロツクハート先生のそんな言葉を聞いて、デイゴリーの顔から血の気が引いた。

「まさか、君がピクシー妖精を皆殺しにしたっていう正確無比のキリングマシーンかい？ スリザリン生の誰かだと思っていたんだけど……」

「その呼び方ハツフルパフの間で流行ってるの？」

「ああいや、そんなつもりじゃ——」

「では私が3つ数えたら初めてください！ 1、2……3！」

私が右手で杖を抜き取る。

その様子にてデイゴリーも慌てて杖を構えた。

「エクスペリアームス！ 武器よ去れ！」

「プロテゴ、守れ！」

デイゴリーの武装解除の呪文を盾の呪文で弾き飛ばす。

私は左手をポケットに入れるとティースプーンを取り出し高速でデイゴリーの杖目掛けて投擲した。

「レダクト！ 粉々！」

デイゴリーは咄嗟に私が投げたティースプーンを粉碎する。

周囲ではマジで何か投げたぞ！ という歓声が沸き起こった。

「さっきの、よく見ずに砕いたけど……ナイフじゃないよな？」

「大丈夫。茶さじよ」

私は先ほど投げた物と同じティースプーンを放物線を描くようにデイゴリーに放り投げる。

デイゴリーは咄嗟にそのティースプーンを目で追うが、拙いと思い直したのか慌てたように視線を上げた。

だがもう遅い。

私は既にデイゴリーの杖目掛けて3本目のティースプーンを投擲していた。

デイゴリーは慌ててそのティースプーンを避ける。

だが遅れるように投擲された『4本目』のティースプーンがデイゴリーの杖を真上に弾き飛ばした。

デイゴリーは慌てて杖を掴み取ろうと手を伸ばすが3本目に投擲していたティースプーンが壁に当たって跳ね返り、そのまま私の方にデイゴリーの杖を弾く。

私は飛んでくるデイゴリーの杖をキャッチするとマジシャンが最後にするような大げさなお辞儀をした。

2本目のティースプーンがカランという音を立て床に落ち、啞然としていた観衆の時間が動き出す。

拍手喝采が沸き起こった。

これで少しは正確無比のキリングマシンという少々不名誉な二つ名の印象が薄れるだろう。

デイゴリーは何が起こったのか分からないといった顔をしている。

「十六夜よ。これは決闘クラブだ。魔法を用いて杖を奪わなければならん」

スネイプ先生が私に冷たく言った。

もつともな意見だ。

その事実が気が付き始めたのか、観衆の熱も冷めて歓声も次第に鎮まっていく。

「彼女の投げナイフのテクニクは非常に素晴らしいものではありますが……趣旨が違ったようですね！ 一度仕切り直しと行きましょう。さあミス・十六夜、セドリック君に杖を返して……そう、じゃあ改めて、1、2……3！」

私がデイゴリーに杖を返すとロックハート先生の掛け声で再び決闘が再開される。

私は面倒くさくなったので時間を止めた。

杖を振りかぶり何かの呪文を放とうとしているデイゴリーの杖を取り上げると代わりにスネイプ先生の杖を取り上げ、逆さまに持たせる。

そしてデイゴリーの杖はロックハート先生のポケットの中へと滑り込ませた。

私はもとの位置に戻ると時間停止を解除する。

「エクスペリアームス！ 武器よ——ツツ!!」

呪文を唱え終わる前に武装解除の呪文が逆噴射してデイゴリーを吹き飛ばす。

そして地面で痛みへのうち回ったあと、何とか起き上がり自分の杖に起きている異変に気が付いた。

「なんで僕、杖を逆なんかに……ってこれは僕の杖じゃないぞ!!」

その声を聞いたスネイプ先生が自分が今さっきまで持っていた杖が消えていることに気が付き咄嗟にデイゴリーの杖を見る。

「何故私の杖をお前が持つておるのだ。しかも逆さまに」

「おや？ 私のポケットに誰かの杖が……」

「それ僕のだ!」

私はその混乱に紛れて大衆の中に姿を消す。

デイゴリーとロックハート先生は首を傾げていたが、スネイプ先生だけは大衆に紛れた私の方を睨みつけていた。

少々やりすぎただろうか。

だがお嬢様からも視線を引く行動を取れと命令されているし、これでいいのだろう。

ロックハート先生は気を取り直したように誰か見本になる生徒はいないかと探し始める。

ということは先ほどの私の決闘は見本にすらならないということなのだろうか。

スネイプ先生の提案でハリーとドラコが皆の前で決闘することになった。

あの2人だったら実力は同じぐらいだ。

ロックハート先生はハリーに杖の振り方を教えているようだったが、途中で杖を取り落とす。

そんなロックハート先生をハリーは不安げに見ていた。

大方、もう少し役に立つアドバイスはないのかということだろうが。

スネイプ先生もドラコに向かって何かアドバイスをしている。

ドラコの嘲るような笑みを見る限り、そっちのアドバイスは使えるものだったらしい。

「それじゃあ、杖を構えて！ 1、2、3！」

ロックハート先生は不安そうなハリーを無視して開始の号令を掛けた。

ドラコは素早く杖を振り上げると呪文を唱える。

「サーペンソーティア！ 蛇よ出よ！」

ドラコの杖から大きな黒蛇が現れる。

周りを囲んでいた生徒は後ずさり、広く空間があいた。

「動くなポッター。私が追い払ってやろう……」

スネイプ先生はハリーが蛇を怖がっているのを楽しんでいるように前に出る。

だがそれをロックハート先生が阻んだ。

「私にお任せあれ！」

ロックハート先生が杖を振るうと大きな爆発音がして蛇が2メートルほど上に弾き飛ばされる。

あれでは対処するどころか完全に挑発行為だ。

蛇は怒り狂ったようにシューシューとなくと近くにいたハツフルパフ生に襲い掛かろうとする。

次の瞬間、ハリーが何かを叫んだ。

ように私は感じたが、どうやら気のせいだったようだ。

ハリーの口からはシューシューといったような音が漏れているだけで声を掛けてい
るわけではない。

だがそのシューシュー音にリラックス効果があつたのか、蛇が警戒態勢を解いた。

私は感心してハリーの方を見る。

ハリーもニツコリと笑ってハツフルパフ生の方を見た。

だが、そのハツフルパフ生の顔は恐怖に引きつっている。「いったい、何を悪ふざけしているんだ！」

そしてハリーに対して叫ぶと、怒ったように大広間から逃げるように出ていった。また。

私は彼が何故あんなに怒っていたのか理解できない。

そんな眉唾なりラックス法をあんな緊急時に試すなど言いたかつたのだろうか。

ロンはハリーの袖を掴むと大広間の外へと引つ張っていく。

私とハーマイオニーもそれに続いた。

ハリーは何が何だか分からないといった顔をしているが、私にも分からない。

ロンは説明を求めようとしているハリーをグリフィンドールの談話室まで延々と引つ張っていくと、そこで初めて口を開いた。

「君はパーセルマウスなんだ。どうして僕たちに話してくれなかったの？」

パーセルマウス。

その言葉を聞いて私は初めて周囲の反応に納得がいく。

パーセルマウスとは蛇と話すことが出来る人間のことだ。

先天的にパーセルタングを扱える魔法使いは殆どおらず、また習うことも容易ではないので魔法界で蛇と会話できる魔法使いは殆どいない。

私を知っているパーセルマウスはサラザール・スリザリンとリドルぐらいだ。

……美鈴さんが蛇を操ってるのを見たことはあるが、あれは多分違うだろう。

「サラザール・スリザリンは蛇と会話ができることで有名だったの。これはホグワーツの歴史にも書かれているわ。スリザリン寮のシンボルが蛇でしょう？」

ハーマイオニーの説明を聞いてハリーはぽかんと口を開けている。

「多分今頃学校中の生徒が君のことをスリザリンの曾々々孫だとかなんとか言いだすだろうな」

ロンが心配そうに呟いた。

ハリーは血縁関係について否定していたが、血が全く繋がっていないという保証はない。い。

スリザリンは1000年も前の人物なのだから。

翌日、また被害者が出た。

ほとんど首無しニックと決闘クラブの時蛇に殺されそうになっていたハツフルパ生、ジャステイン・フィンチーフレッツチリーだ。

そしてタイミング悪くハリーがこの現場に居合わせてしまったらしい。

そのせいで今ではハリーはグリフィンドール含めた殆どの生徒からスリザリンの継承者ではないかと疑われていた。

もつとも私はこれら一連の事件がバジリスクの仕業であると知っている。

なのでハリーは完全に冤罪なのだが、こういう噂は私一人が否定してもなくなならないものだ。

どれだけ真実に近い答えがあっても、噂の1つとして掻き消されてしまう。

そんな事件があつた為か、クリスマス休暇に学校に残る生徒は殆どいなかった。

皆が我先にと帰り支度を進める横で、私は今朝紅魔館から届いた手紙をベッドの上で読んでいた。

『実験に失敗して人間が吸うと即死する系のガスを紅魔館全体に充満させてしまったの。クリスマスに帰って来たら死ぬわよ』

この筆跡はパチュリー様だろう。

お嬢様は大丈夫なのだろうか。

なんにしてもガスが完全に抜け切るまでには1カ月程度かかるらしい。

これではパチュリー様の仰る通り、帰ったら文字通り死ぬだろう。

『それと、レミイからの言伝よ。2年生のうちに守護霊の呪文を習得しなさい』

最後の一文にはこのように書かれていた。

守護霊の呪文。

確か吸魂鬼を追い払う呪文だったか。

私は実際に吸魂鬼に出会ったことがないので何とも分らないが、お嬢様の命令ならば2年生のうちに完璧に覚える必要があるだろう。

クリスマス休暇はゆっくりと守護霊の呪文について図書室で調べることにした。

クリスマスの夜。

私はクリスマスデイナーを大広間で食べ終わると相も変わらず図書室に来ていた。

ここ数日食事の時間も惜しんで図書室に通っている甲斐あって私は守護霊の呪文に関する仕組みと理論を大体頭の中で整理しておえていた。

守護霊の呪文は自身の幸福な思い出を力に発動させるという特殊な呪文で、大人の魔法使いでも扱えるものが少ないという。

まずは守護霊を実体化させるところから始めないといけないらしい。

私は時間を止めて何度か練習はしているが、まだ白い靄のようなものが杖の先から出るだけだった。

やはり長い時間の練習が必要だろう。

私はマダム・ピンスに守護霊に関する本の持ち出しの許可を出してもらい、その本を脇に抱えながら廊下を歩く。

そして廊下の角を曲がった瞬間、信じられない光景が目飛び込んできた。そこには私が入った。

私が驚いたような顔をして廊下に立っていたのだ。

何故？

どうして私が2人？

ドツペルゲンガーだとしたら私もうすぐ死ぬ？

様々なものが頭の中をよぎったが、電源が落ちたかのように全ての考えが頭から抜け去った。

私はお嬢様に警戒されずに近づくことができる。

私の姿をしていればお嬢様に警戒されことなく接近することができる。

私の姿ならばお嬢様を暗殺することができる。

「——ツッツ!!」

私は刃渡り30センチはあるナイフを時間を止めることすら忘れて懐から抜くと同時に偽物に肉薄する。

そしてそのまま偽物を押し倒すとナイフを振り下ろし偽物の肩と地面を貫き通す形で固定させた。

「ああああああああああああああああ——ツ!!」

鮮血が飛び散り私と偽物を染める。

偽物の泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

私の声で泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

見てくれだけじゃなく声まで同じだとは。

やはりこの偽物は殺さなければならぬ!

私は袖口からもう一本ナイフを取り出すと偽物の脳天目掛けて振り下ろす。

次の瞬間、私の腕が後ろから掴まれた。

「咲夜! 話を聞いてくれ!」

それはハリーだった。

何故か身の丈に合っていないローブを着ており、眼鏡をしていない。

その横には同じくぶかぶかのローブを着ているロンが立っていた。

「その手を放しなさい。さもなければ貴方から殺すわよ。私はお嬢様の安全のためにこの偽物を殺さなければならぬッ!!」

私はハリーの手を振りほどきナイフを偽物に振り下ろそうとする。

だがそこにいたのはハーマイオニーだった。

肩を骨ごとナイフで貫かれ、地面に固定されている彼女は声も上げずに涙を流し私を見ている。

途端に私の心は冷めていった。

出血が酷くならないように杖を構えながらナイフを引き抜くと同時に呪文を掛け一時的な止血を施した。

私は顔についた血を拭うことすら忘れてハリーの方に振り返る。

「どういふことか説明してくれるのでしょうかね?」

その時の3人の顔が恐怖に歪んでいたことは言うまでもない。

医務室でハーマイオニーに治療を施してもらったあと、私たちはグリフィンドールの談話室に来ていた。

マダム・ポンフリーに怪我の原因を聞かれたが野外でこけて尖った石に思いつきり倒れ込んでしまったとハーマイオニー自身が説明した。

ハーマイオニー自身もこの怪我のことを公にはしたくないらしい。

私は談話室のソファアーにどっかりと座り込む前に清めの呪文で自らのローブに付着した血液を落とした。

「で？」

私は高圧的な態度で3人に一言そう聞いた。

「あ、あの。咲夜、ごめんさい。私そんなつもりじゃ……」

「謝罪を聞きたいわけじゃないわ。どうして、どうやって、どのぐらいの期間私に成りすましたのが聞きたいのよ。返答によつては……ハーマイオニー、私は貴方を殺すわ」
私のその言葉にハーマイオニーは小さく悲鳴を上げる。

そんな様子を見て意を決したようにハリーが話し始めた。

ハリーたちはどうにもドラコがスリザリンの継承者ではないかと疑っていたらしい。なんとかドラコの口からそのことを自白させるべく、他人に成りすませる魔法薬、ポリジューズ薬の調合に取り掛かったのだという。

ロックハート先生を利用し、スネイプ先生の目を欺き、1カ月の月日を要して完成したポリジューズ薬を用いてようやく今夜ドラコにスリザリンの継承者の話を聞き出せたらしいのだ。

「で、結局成果はなかったと。ハーマイオニー、何故貴方は私に成りすまそうなんて思っ

たの?」

「私はミリセント・ブルストロードの若白髪だと思ったの。でも、髪の毛は何処かでついた貴方のものだったらしくて……貴方はマルフォイと仲がいいし貴方でもいいかなとそのまま計画を進めたの」

「貴方って、本当に頭がいいのか悪いのか分からないわ。馬鹿と天才は紙一重っていうけど、本当だったみたいね。私に頼めばよかったじゃない。ドラコからスリザリンの継承者についての話を聞いてくれて」

その言葉を聞いて3人がその手が有ったかといったような表情を作った。

私は平手で3人の頭を1回ずつ叩く。

「いい? 他人に成り代わるといふのはとてつもないリスクを孕むものなの。だからポリジューズ薬の調合法が載っている本は禁書の棚にあるのよ。貴方ポリジューズ薬のことをかぼちやジューズと勘違いしてるんじゃないの? 言っておくけど、ハリーが止めてなかったりポリジューズ薬の効果が切れるのがあと数秒でも遅かったら——」

私はそこで一度言葉を切り、まな板の上に置かれた人肉を見るかのような目つきでハーマイオニーの瞳を覗く。

「貴方、本当に死んでいたわよ」

ハーマイオニーは体の時間が止まったかのように恐怖したような顔で表情が固まっ

ていたが、やがて死への実感が沸いてきたのかハーマイオニーの瞳から一滴の涙がこぼれ落ちた。

そこからは堰を切ったように涙が溢れ出し、ついには声をあげて泣き出してしまった。

この様子ならもう私に変装しようなどとは思わないだろう。

「私はもう寝るわ。今回の件は黙っていてあげるからこれに懲りたら危ないことはしないようにね。じゃあおやすみ」

私はすっかり血だらけになってしまった本を持ち上げ脇に抱えると女子寮に入っていく。

談話室には泣きじゃくるハーマイオニーとそれを見ていることしかできないハリートロンが取り残された。

日記とか、秘密の部屋とか、友達とか

「十六夜咲夜という生徒。彼女は何者ですか……」

校長室にスネイプの声が響く。

決して怒っているわけではない。

ただ単純に、普段の彼からは想像も出来ないほど興奮しているだけだ。

「もし私の予想が正しければ、私は杖を奪われたことになる。だが、杖を放した覚えなどない。転移魔法で飛ばしたのだとしたら何かしらの魔力を感じ取っているはずなのです」

スネイプは自らの杖を取り出しダンブルドアに差し出す。

ダンブルドアはその杖に残っているかも知れない魔力のかけらを探すために手をかざすが、見つけることはできなかつた。

「彼女は何か……既存の理論に縛られない魔法を使っておるのかもしれない。ホグワーツ特急での一件もそうじゃったのじやろう。ハリーの話を書く限り、車から汽車までは数百メートルはあったと聞く。着地の瞬間彼女は魔法を使っておらん。それは魔法省に問い合わせたから確実じゃよ」

ダンブルドアは一枚の紙を取り出す。

それは魔法省から取り寄せた未成年の魔法使いが魔法を使った履歴だったが、そのなかに十六夜咲夜の名前はなかった。

「では彼女はどうかやってホグワーツ特急に？ どのようにして私の杖を？」

「このような話は知っておるか。十六夜は何でも入る鞆を持っておると。勿論、魔法使いなら空間魔法を使えば簡単に空間を広げることは出来る。じゃが彼女は他にも体中あらゆるところからナイフが出てくるらしいの」

スネイプは思い返す。

確かに決闘クラブの時、咲夜はスプーンを投げてはいたが、取り出している様子はないかと。かかった。

「では彼女は……」

「おぬしの考えておる通りだとわしも思つてる。彼女はおそらく空間転移の魔法を使っているのじやろう。それも杖無しでじや」

確かにそれなら彼女の奇怪な謎を説明できる。

だが、2年生がそんな高度な魔法を？

その疑問は未だに付き纏つたままだ。

「セブルスよ。君には教えておこうかの。彼女の主の話を。彼女の主が、どのようなモ

ノかを」

ポリジューズ薬の事件から数か月が過ぎ、2月に入った。

私は時間を止めての訓練の結果、ようやく守護霊を実体化できるようになっていた。

私の守護霊の動物は狼だ。

守護霊特有の白色で光る狼は、私の指示通りに空中を駆け回る。

なぜお嬢様がこの呪文を習得するようにと私に命令したのかは分からないが、これは覚えていて損はない。

私はトイレの中に入り時間停止を解除すると談話室へと戻った。

そこで私は驚くべき光景を目にする。

ハリーたちがリドルの日記を持って何やら話し込んでいるのだ。

まだ本の謎自体には気が付いていないようだったが、トム・リドルについての議論を交わしている。

その内容はリドルの名前をトロフィー室で見ただとかリドルがスリザリンの継承者を捕まえたことで賞をもらったとか、何も書かれていないが透明インクじゃないだろうとか。

私は落ち着いて3人に歩み寄り、声を掛ける。

「ハリー、その本はなに？ 真っ白だけど……」

私が声を掛けると3人は首が千切れんばかりの速度で私のほうを見た。

ポリジューズ薬の一件以降、どうにもハリーたちは私を避けているような気がする。

それに、ハリーたちはあの日の夜のことを誰かに話してはいないとは思うのだが、正確無比のキリングマシンという二つ名は目を追うことにホグワーツに浸透しているようだった。

もつとも、今はホグワーツ中がハリーのことをスリザリンの継承者だと怖がり、避けている。

それに比べたら私の噂話など、ごくごく小さなものだろうけれど。

「これは……トム・リドルっていう生徒の日記帳らしいんだ。といつても50年前の生徒だからどんな人物かは分からないけど」

ハリーが正直に答えた。

なんだろうか。

私に嘘をついたらナイフで串刺しにされるとでも思っているかのような態度、いや怯え方だった。

「日記とはいふけどハリー、白紙よ？」

私は日記帳に現れ呪文を試していたハーマイオニーから日記帳を受け取る。

ハーマイオニーは私に日記帳を渡す時おっかなびっくりとした手つきだったが、まあんなことがあつた後だから仕方がないのかも知れない。

私は日記帳を受け取ると時間を止めそれを開いた。

そして万年筆で文字を書き込んでいく。

『貴方の日記帳、今ハリーが持つてるわよ？ 大丈夫なの？』

私がそう書き込むと、日記帳に文字が浮かび上がってくる。

『ジニーは怖くなって3階のトイレに日記帳を捨てたらしい。そうか……今この日記帳を手に行っているのはハリー・ポッターなんだね。いい、それは凄くいい。僕はハリー・ポッターと会いたいと思っている。是非とも会って話を聞きたいと』

『それは『何故貴方は赤ん坊だったハリーに敗れたか』。そんなところかしら』

『ああ、そうだね。日記帳のことはそのままハリーに持たせておいて構わない。もし出来たらだが、それとなくこの日記帳に何かを書きこむように誘導してくれないか？』

リドルは私にそうお願いする。

私はこの日記帳はハリーの手に渡つたらいけないものだと考えていたのだが、日記帳の本人がいいというならいいのだろう。

私は日記帳に書かれた文字がすべて消えるのを待つと、日記帳を閉じて時間停止を解

除させた。

「あら。本当に何も書いてないわね。リドルは新品のままこの日記帳を捨てたのかしら。ハリー、貴方が貰って再利用したらいいんじゃない？」

私はハリーに日記帳を返す。

ハリーは私の提案に曖昧に笑って返した。

どうやら日記帳として再利用するという提案は却下されてしまったらしい。

それからハリーはリドルのことを少しづつ調べているようだった。

次の日の休み時間にはトロフィー室をうろついているのを見かけたし、その次の日の休み時間には図書室で比較的最近のホグワーツの事が書かれた本を探していた。

ハリーが日記帳の本当の利用法について発見したのはそれから10日以上も経ってからだった。

談話室の隅の方で誰にも聞こえないような小さな声でそのことについて話している。何かを必死に語っているハリーの手にはリドルの日記帳が握られていたので時間を止めて失敬することにする。

私はリドルの日記帳をハリーの手から抜き取ると、それを開き文字を書いていた。

『ハリーと話ができたみたいね。一体何を教えたらあんなに必死になって頭を突き合わせることになるの?』

『ハリーにはハグリッドが捕まった時の一部始終を見せた。今頃はハグリッドがスリザリンの継承者だと勘違いしていることだろう。あんなウスノロが継承者なわけはないに』

『そう思うように見せたのは貴方でしよう、トム。犯人を提示することによって自分は味方だということを印象付ける。流石だわ』

『褒めても文字ぐぐらいしか出ないさ』

私はハリーの手に日記帳を戻し時間を動かす。

ハリーたちの話に耳を傾けてみると確かにハグリッドという単語が会話の中に出てきていた。

ハリーたちは自分たちが大好きなハグリッドがスリザリンの継承者だということを知ってどうするのだろうか。

私は今しばらく観察することにした。

イースターの休暇に入ると2年生には新しい課題が与えられた。

3年生の授業には選択科目があるのだが、その科目を選ぶ時期が来たのだ。

3年生で選択できる科目は『古代ルーン文字』『数占い』『魔法生物飼育学』『占い学』『マグル学』などだ。

ハーマイオニーなんかは脇目も振らずに全てに受講のチェックを入れていたが、体がいくつあっても足りないだろう。

私は取り合えず魔法生物飼育学と占い学を受講することにする。

数占いも興味はあるが、詰め込みすぎるのも良くはないだろう。

ハリーはロンと同じ科目を取ったようだ。

この辺の科目選びにも性格が出るのかも知れない。

金曜日の夕方。

私とハーマイオニーの関係はようやく円滑なものへと戻ってきていた。

私はハーマイオニーと3年生で選択できる科目の話題をしていると男子寮のほうからハリーとロンが転がり落ちるようにやってくる。

話を聞く限りだと、ハリーが持っていたリドルの日記が何者かに盗まれたようなのだ。

部屋は滅茶苦茶にひっくり返され、トランクの中身はそこらじゅうに散らばっていたという。

私はその部屋の様子を聞いて安堵のため息をついた。

犯人はおそらくジニーだろう。

もしダンブルドア先生などの教師が気が付いて持つて行つたのだとしたらそこまで仰々しく荷物を荒らすような真似はしない。

大方、ハリーが日記帳を持つていることを知つてジニーが焦つたのだ。

今まで日記帳に書いた私の秘密がリドルを通じてハリーへと流れて出てしまうと。

これは最近知つたことだが、男子は女子寮に入ることは出来ないが、女子は男子寮に入る事ができる。

その辺の理屈はよくわからないが、ジニーなら同じグリフィンドール生だし実行するのも簡単だつたらう。

まあ計画的な盗み方とは思えないが。

次の日、またバジリスクの被害者が出た。

ジニーが日記帳を手にしてからすぐの犯行とは、リドルも中々肝が据わつていと言

えるだろう。

この日はグリフィンとハツフルパフのクイディッチの試合があったのだが、流石に事件が起こったからか中止になった。

被害者はレイブンクローの監督生、ペネロピー・クリアウオーターとグリフィンドールのハーマイオニー・グレンジャー。

どちらも他の被害者と同じく石にされた状態で見つかった。

2人の近くには小さな手鏡が落ちていたらしい。

つまりハーマイオニーかレイブンクローの監督生のどちらかがバジリスクの存在に気が付いたということだろう。

何かの気配を感じ手鏡で廊下の先を確認した時に鏡に映ったバジリスクの目を見てしまった。

私はベッドの上に横たわっているハーマイオニーを見る。

きつと彼女は悲しむだろう。

解毒薬が出来るのは学期末テストの直前なのだから。

しばらくすると、ハグリッドがアズカバンに一時的に投獄された。

それだけなら別になんの問題もない。

厄介なおつちよこちよいが1人いなくなるだけなのだから。

だが、その次の知らせが多く生徒の不安を煽る結果になる。

ダンブルドア校長先生が理事らの決定によって停職させられたのだ。

これには理事の中でも代表格のルシウス・マルフォイ氏がホグワーツを訪れダンブル

ドア校長に直接停職を言い渡したらしい。

普通に考えたらこのタイミングでのダンブルドア先生の停職はあり得ない。

何者かの意図が見え見えな停職だった。

案外ジニーにリドルの日記帳を持たせたのはマルフォイ氏かも知れない。

彼は過去にヴォルデモートの手下だった経歴がある。

彼自身が服従の呪文で操られていただけだと証言している為に今もこうして普通に

お日様の下を闊歩できるのだ。

だがもし自らの意思で従っていたとしたら、ヴォルデモートから日記帳を受け取って
いた可能性は無きにしても非ずだろう。

私はその辺の話をドラコに聞こうかとも思ったが、あの父親がああ口の軽そうなドラ
コにそんなことを話して聞かせているとは思えなかつたので結局聞くことは諦めた。

学期末試験も間近に迫り、時間を止めての勉強をし始めた頃。

朝食の時間に一通の手紙が届いた。

私はこのような手紙に身に覚えがあつたので時間を止めてから手紙を開く。

『今日の午前9時。3階の女子トイレで』

この筆跡には見覚えがある。

あの時ジニーを通じて私に手紙を出したりリドルが、また同じように手紙を出してきたのだろう。

それにしても今日の朝の9時とは、リドルは私を授業に出さない気なのだろうか。

だが折角の誘いなので私は行くことにする。

私は9時になるのを待つと、3階の女子トイレへと向かった。

そこにはいつもなら嘆きのマートルがいるはずなのだが、今日はその姿は見えない。

その代わりにジニー、いやリドルがトイレの入り口付近に立っていた。

「よく来てくれた。ここまで秘密を守り通してくれた君だ。最後まで見せようと思つてね」

「あら、それはありがたいわね。具体的には何をやるのかしら」

リドルは蛇口を弄りながら説明してくれる。

ジニーを操り遺書を書かせ、これから秘密の部屋に降りるところだというのだ。リドルが掠れるような音を出すと、蛇口が眩い光を放ち、回り始めた。

次の瞬間手洗い台が沈み込み、見る見るうちに消え去ったあとに太いパイプが見える。

「あー、トム。なんだか汚らしいんだけど本当にこれ滑り降りるの?」

「嫌かい?」

「嫌ではないわ。でも少し掃除したくなっただけ」

リドルが飛び込むのを見て、私もその後が続く。

ぬるぬるしたパイプを器用に足の裏だけをつけて滑っていくリドルに習って、私もス

ケートでもするかのようにパイプを滑り降りた。

パイプの出口の先は暗い石のトンネルのようなどころだった。

リドルはその闇の中を明かりもつけずに進んでいく。

私も夜目は利くほうだったので不自由することはなかった。

「ここが秘密の部屋へと続く通路ってわけね」

私が前を歩くリドルに聞く。

「そう。偉大なるスリザリンが残した貴重な宝だ」

しばらく歩いていくと壁や柱の彫刻が段々と現れてきた。

その後も彫刻が施された壁や柱を見ながら奥へと進んでいくと、部屋の天井に届くほど高くそびえる石像が目に入る。

年老いた顔に細長い顎ひげがロープの裾あたりまで伸びており、その足は滑らかな床を踏みしめていた。

「彼がサラザール・スリザリンね」

「そう、ここがスリザリンが残した秘密の部屋だ」

急にリドルの声が変わり、私は咄嗟に振り返る。

先ほどまで操られていたジニーは床に倒れ伏しており、一人の少年がその横に立っていた。

彼が、リドルだろう。

リドルはうつ伏せに倒れているジニーを仰向けになるように転がし、腕の位置を整える。

案外几帳面な性格だ。

義理堅いだけかもしれないが。

「あら、案外ハンサムね。ようやく実体を取り戻したといった感じ？」

「ああ、そうだとも咲夜。ジニーの魂のお陰で、僕はこうして実体化することが出来た。全く、ウィーズリーさままだね。さて、僕はここでハリー・ポッターが来るのを待と

うと思う。君はどうする？」

私は微笑みながら返した。

「そうね、お嬢様への土産話を増やすためにここで見てるわ。バジリスクにだけは私を攻撃しないように命令しておいてね」

「僕としては真実を知るものは1人でも少ないほうがいいのだが……」

「あら、それじゃあバジリスクを私にけしかける？」

私はリドルに向けて不敵に微笑んだ。

「けしかけたら、どうなるんだい？」

「死ぬわ。バジリスクがね」

「ならやめておこう」

そんな軽口を楽しみつつ、私は1つ気が付いたことを話した。

「ねえ、トム。私は普通の人間とは感性が違うみたいなの。それは貴方も気が付いていることだとは思うのだけれど……。私はどうも人間の子供とは相性が悪くてね。人間の友達は出来そうにないわ」

「そうか。僕もそうだった。学校にいる全員は僕とは違う出来そこないで、僕だけが優れているような感覚だった。誰も僕に追いつけず、対等な友もいなかった」

「価値観が違うのかしら？ 倫理が違うのかしら？」

「種族が違うのだろうか、それとも僕だけがおかしいのだろうか」

「私、人間の友達は出来そうにないわ」

「僕に友達と言える存在は過去にはいなかった。いつも1人だった」

「ねえ」

「ああ」

一言の問いと一言の答え。

短い言葉だったが全てが伝わったような気がした。

「貴方は人間じゃない」

「君は普通じゃない」

「貴方はそれでいいのだと思う」

「君は君のままでもいいんだ」

言葉遊び、退屈しのぎ。

だが私は不思議とリドルが何を言いたいのかを理解していた。

確証はないが確信する。

リドルも私の言いたいことを全て理解していると。

「よろしくね」

「(イ)ち(イ)そ」

私に生まれてから二人目の友達が出来たその時、ハリーがこちらに向かつて走つてくるのが見えた。

「ジニーー！」

ハリーは倒れているジニーのそばに駆け寄り抱き起す。

「ジニーー！ 死んじゃだめだ！ お願いだから生きていて！」

ハリーが咄嗟に投げ捨てた杖が床に転がる。

余りにも不用心すぎるその行為に私は笑いを堪えるのに必死だった。

「その子は目を覚ましはしない！」

リドルが静かにそう告げる。

ハリーはその声に肩を震わせると、膝をついたまま振り返った。

ハリーはその人物に見覚えがあるのだろう。

丸い眼鏡の下にある目をぱちくりさせてリドルを見ていた。

「トム……トム・リドル？ それに咲夜も……目を覚まさないって、どういうこと？ ジ

ニーはまさか……！」

ハリーが絶望するような顔をするが、リドルはその考えを否定する。

「その子は、まだ生きています。しかし、かろうじてだ！」

ハリーは不思議そうな顔をしてリドルの顔を見ていたが、自分もつと緊急にしなけ

ればならないことを思い出したように私とリドルに言った。

「助けてくれないか？　ここからジニーを運び出さなきゃ。バジリスクがいるんだ……。どこにいるかはわからないけど、今出てくるかもしれない。お願い、手を貸して……」

リドルは動かない。

それに習い私も傍観することに決めた。

ハリーはやつとの思いでジニーを担ぎ上げると、杖を拾おうともう一度屈む。

だが、そこには既に杖がない。

私はリドルの方をチラリと見るが、ハリーの杖をクルクルと弄んでいた。

ハリーはリドルが杖を拾ってくれたものだと思いき手を伸ばす。

だがリドルはそれに応えなかった。

「ここを出なくちゃいけないんだよ！　もしバジリスクが来たら……」

ハリーが焦ったように声を出す。

それはそうだろう。

ハーマイオニーがあの状態でベッドに横になっっていることをハリーは知っている。

あのような状態ですら運が良かった場合だという事実を知っている。

そんな様子の子のハリーをなだめるように落ち着き払った声でリドルがハリーに告げた。

「呼ばれるまで、来やしない」

ハリーは足に限界が来たのかジニーを床に下した。

そしてリドルと向き直ると喧嘩のような口論を始める。

私はハリーの後ろから近づき、ぐったりしたジニーを肩に担ぐと一歩後ろに下がった。

リドルはハリーに説明をしていく。

ジニーがこうなった理由。

リドルが復活できた理由。

自分の目的。

スリザリンの残した崇高な仕事。

ハリーはそれを聞いて愕然としたような顔をするが、同時に少し嬉しそうでもあった。

ハグリッドは無実だったのだと。

その一つの喜びと希望が今のハリーを支えているのだろうか。

「これといって特別な魔力も持たない赤ん坊が、不世出の偉大な魔法使いをどうやって破った？ ヴォルデモート卿の力が打ち砕かれたのに、君の方は、たった一つの傷痕だけで逃れたのはなぜか？」

これを聞きたかったと言わんばかりにリドルはハリーに問う。

だがハリーはその問いに首を傾げた。

「僕がなぜ逃れたのか、どうして君が気にするんだ？ ヴォルデモート卿は君よりあとに出てきた人だろう」

「ヴォルデモートは、僕の過去であり、現在であり、未来なのだ……ハリー・ポッターよ」
リドルはハリーの杖を振るい、空中に文字を書いた。

『T O M M A R V O L O R I D D L E』

その文字は杖の一振りですぐ並びを変える。

『I A M L O R D V O L D E M O R T』

私はヴォルデモート卿だと。

ハリーはその真実に驚愕するように目を見開くと、数歩後ろに下がった。

私はその瞬間、秘密の部屋に入ってくる何かを感知する。

ジニーを部屋の隅のほうに降ろし、ローブの上に転がすと私は虚空を見つめた。

それは不死鳥だった。

ポロポロの布切れのようなものをハリーの足元へと落とし、不死鳥自身はハリーの肩にどっしりと乗る。

「不死鳥だな……」

リドルが警戒するようにそう呟いた。

「そして、それは——」

リドルがハリーの足元に落ちていているポロ布を見て言った。

「それは古い組み分け帽子だ」

リドルの言葉に私はようやくよくポロ布の正体を知る。

新入生が歓迎会の時に被るアレだろう。

私は自分の歓迎会の時の帽子の言葉を思い出していた。

「スリザリン、といきたいところだが、グリフィンドールッ!!」

あの時帽子はスリザリンと言いかけ、グリフィンドールに変えた。

あの時は人数的な都合だと思っただが、もしかしたら違う理由があるのかもしれない。

リドルはダンブルドア先生が送ったと思われるものがよほどおかしかったらしい。

声を上げて笑っていた。

「ダンブルドアが味方に送ってきたのはそんなものか？ 歌い鳥に古帽子じゃないか！

ハリー・ポッター、さぞや心強いだろう？ もう安心だと思おうか？」

「それだけじゃない」

ハリーがリドルの言葉を否定する。

「ここには咲夜もいる！ 僕は独りじゃないぞ！ リドル！」

リドルは冷めた目でハリーと私を交互に見る。

私は「あの馬鹿なに言ってるんだ？」というような表情を作り肩を竦めた。

「ハリー、本題に入ろうか」

ハリーの言葉を無視してリドルが続ける。

「君はどうやって生き残った？ 全て聞かせてもらおうか。長く話せば、君はそれだけ長く生きていられることになる」

ハリーは何かを考えるように押し黙る。

そして唐突に話し始めた。

「君が僕を襲ったとき、どうして君が力を失ったのか、誰にも分からない。僕自身にもわからないんだ。でも、なぜ君が僕を殺せなかったのか、僕にはわかる。母が、僕を庇って死んだからだ！」

ハリーのその言葉に、リドルは表情を歪める。

「そうか。母親が君を救うために死んだ。なるほど、それは呪いに対する強力な反対呪文だ。結局君自身には特別なものは何もないわけだ」

リドルはクツクツと笑う。

「さて、少し揉んでやろう。サラザール・スリザリンの継承者、ヴォルデモート卿の力と、有名なハリー・ポッターと、ダンブルドアがくださった精一杯の武器とを、お手合わせ

願おうか」

リドルはその場で深々とお辞儀をするとその場を離れる。

そしてスリザリンの石像の前まで行くと、パーセルタンクで何かを話し出す。

私には何を言っているか分からなかったが、ハリーには理解できているようだった。

バジリスクだ。

石像の口が大きく開き、中から巨大な蛇が出てくる。

ハリーは咄嗟に目を瞑ると転びながらも逃げていく。

すぐにでも決着がつくものだと思ったが、ハリーは意外とよく粘った。

不死鳥はバジリスクの目を潰し、帽子はハリーに銀色の剣を与えたのだ。

だが、ついにハリーはバジリスクの牙に貫かれてしまう。

バジリスクの牙には猛毒がある。

少し掠るだけでも致命傷となり得るのにあそこまで深々と刺さってしまったてはもう

助からない。

だがハリーの方も、銀の剣でバジリスクの脳天を貫き、殺していた。

「ハリー・ポッター。君は、死んだ」

リドルが勝ち誇ったように宣言した。

不死鳥がハリーの横に降り立ち、寄り添うように涙を流す。

私はその瞬間に慌てて時間を止めた。

急いで小瓶を取り出し不死鳥の涙を回収する。

確か不死鳥の涙は強力な癒し薬なのだ。

1滴だけでも回収しておきたい。

きつと回収していた時の私の表情はニヤケ顔だったことだろう。

私は不死鳥の涙の小瓶を仕舞い込むと元いた場所に戻り時間停止を解除する。

不死鳥の涙がハリーの傷口に落ちると、傷は跡形もなく消え去った。

癒しの効果があることは知っていたが、あそこまでのものだとはいえ。

「不死鳥の涙……そうだ、癒しの力……忘れていた」

リドルはハリーの杖で不死鳥を追い払うように魔法を飛ばす。

「しかし、結果は同じだ。むしろこの方がいい。1対1だ。ハリー・ポッター……2人だ

けの勝負だ」

その提案を聞いて私はジニーの杖をハリーに渡そうとジニーの体をまさぐる。

しかし不死鳥が再びハリーの頭上に舞い戻ると、ハリーの膝の上にリドルの日記をポトリと落としたのだ。

私は直感的にやばいと感じる。

ハリーは何を思ったかバジリスクの牙を手に取り日記帳に振り上げる。

私はその瞬間に咄嗟に時間を止めていた。

バジリスクの牙は日記帳に突き刺さる寸前で止まっている。

「ふう」

私は安堵の余りその場でため息をついてしまう。

そして日記帳の時間停止だけを解除し、手に取った。

次の瞬間、杖を振り上げたまま止まっていたリドルも動き出す。

「あ」

「えっ？」

私はその瞬間、やってしまったと感じた。

そうだ、リドルの本体はこの日記帳なのだ。

日記帳に触れる為に時間停止を解除したらリドルも動き出すに決まっている。

私とリドルは互いに何が起こったか分からないといった表情で顔を見合わせると、唐突にリドルのほうから口を開いた。

「咲夜、これは君がやったことなのかい？ これではまるで……」

バレた。

私はリドルの様子を見て察する。

まあ、バレたのがダンブルドアじゃないだけまだマシと言えるだろうか。

「ええ、私は時間を操れる。そしてリドル。今回は貴方の負けのようね。あのままバジリスクの牙が日記帳に刺さっていたら、貴方は死んでいたわ」

リドルは何かを確かめるように床や壁を叩く。

リドルには実体があるが感覚はないのか、冷たそうではなかった。

「物質が完全に固まっている。叩いても音がしないというのはそういうことだろう。そして、負けではない。この世界でならハリー・ポッターを殺すことが出来る！」

リドルはハリーに向けて杖を振るうが、魔法は出なかった。

「無理よ。この世界で動ける物質というのは決まっているの。それに、石のように固まっているハリーは今この瞬間ただのタンパク質の塊よ。生きてないから死の呪文は掛からない」

……多分。

試したことはないのかわからないが。

だがリドルは私の言葉を素直に信じたようで、納得したように杖を下ろした。

「この時間の止まった世界では他人に直接害を与えることは出来ないということか。君は僕をどうする？ このままハリーに日記帳を貫かせるか？」

リドルは私が持っている日記帳を見ながら警戒したようにいう。

私はそんなリドルに微笑んだ。

「まさか、でも、一芝居打ってもらうわ。ハリーを殺るのは今現在生きているヴォルデモートに任せなさいな。まさか、自分自身を信用できないとは言わないわよね？」

「一芝居、ね。僕は役者ではないのだけれど。拒否権はいつものごとくなさそうだ。で、僕に何をさせたいんだ？」

私は日記帳に向かって杖を振るう。

「ジェミニオ、そっくり」

すると日記帳が膨れ上がり2つに分裂した。

私は本物の方を胸に抱えると、偽物をハリーが振り下ろしている牙の真下に設置した。

「あとは、わかるでしょう？ 貫かれたら大げさに痛がるふりして適当に日記帳に戻りなさいな。ハリーに貴方が死んだように思わせるの。魂はジニーに返しなさいよ。ハリーやダンブルドア先生に事件は解決したと見せかける。そうじゃないと、きつとダンブルドア先生は日記帳を探し出し、確実に貴方を殺すわ」

私の提案を聞いてリドルは考えるように黙り込む。

だが私の言うようにここでハリーを殺してもダンブルドア先生がやってきて事件を解決してしまうのは確かだ。

リドルもそれがわかったのか静かに頷くと先ほどまでいた場所に戻り杖を同じよう

に振り上げた。

話が早くて助かる。

私はリドルの日記帳を鞆に仕舞い込むと、先ほどまでいた位置まで戻り時間停止を解除する。

ハリーが振り下ろした牙は勢いよく偽物の日記帳に突き刺さった。

日記帳からはインクが激流のように溢れ出て床を浸した。

リドルは身をよじり、悶え、悲鳴を上げてのたうち回る。

なんというか、あそこまでの演技が出来るのであれば役者も十分目指せるのではないだろうか。

リドルは一通りのたうち回ると消えていく。

日記帳に戻ったのだと思う。

リドルが持っていたハリーの杖が床に落ち、音を立てた。

ハリーはよろよろと立ち上がると杖と帽子を拾い、死んだバジリスクから剣を抜き取る。

そしてその杖を私の方に向けた。

「咲夜、答えてくれ。君はここで何をしていた？」

「ジニーの看病？」

私はとぼけたように答える。

「助けてくれてもよかったはずだ。咲夜が手伝ってくれたら、もつと早く……」

「そう、じゃあ貴方はジニーの命より、さっきのヴォルデモートを殺す方を優先させたかったのね」

私がそういうとハリーが固まる。

「ハリー、1つ言っておくわ。優先順位を間違えちゃ駄目よ。貴方はヴォルデモートを殺しにきたのではない。ジニーを助けにきたんでしょ？ 私がジニーを連れて逃げてなかったらジニーは今頃バジリスクに潰されて死んでいたわね」

私がジニーを抱き起すとジニーは身をよじりゆっくりと目を開けた。

ハリーはそれを見てジニーの方に駆け寄ると、ジニーはハリーと、バジリスクの死骸と、血に染まったハリーのローブを見た。

そのあと状況を察したジニーが自分に起こったことを打ち明けると、ハリーはジニーを安心させるように日記帳を手取る。

「もう大丈夫だよ。リドルはおしまいだ。見てごらん！リドル、バジリスクもだ。ジニー、早くここを出よう」

「わ、私……退学になるわ！」

ジニーは私の腕の中でさめざめと泣く。

私が頭をなでると私に抱きかかえられていることに気が付いたのかジニーは顔を真つ赤にした。

私はジニーを立ち上がらせると、改めてハリーの方に向き直る。

「ほら、こんな可愛い女の子を見殺しには出来ないでしょう？ それに、貴方がさつき言ったセリフ、少しヘタレっぽいわよ？ 貴方は独りでバジリスクもリドルも倒すことが出来た。それでいいじゃない」

私はハリーの背中を叩き前へと歩かせる。

それにジニーが続き、一番後ろを私が歩いた。

しばらく歩くと崩落した岩が通路を塞いでいるのが見えてくる。

私が来た時にはこのようなものはなかったが、どうやらこの崩落のせいでハリーと一緒に来ていたロンとロックハート先生が分断されてしまっていたようなのだ。

私はロンが汗水垂らして開けたのであろう小さな穴を魔法で補強する。

そして順番にその穴を通り抜け、無事に脱出することが出来た。

穴の向こう側にはロンが心配そうな顔をして立っている。

だが私の姿を見つけると不思議そうな顔をして言った。

「なんで咲夜がここにいるんだ？」

「そういえば咲夜、君はどうやってこの部屋に入ったんだい？」

ロンが私の存在を指摘し、ハリーが思い返すように聞いた。

「ジニーと一緒に入ってきたわ。ジニーは何者かに操られているようだったけど。止めようとも思ったけど止まりそうになかったし、彼女一人で秘密の部屋に入っていたら、それこそ心配でしょう？ だから付き添っていたのよ」

それっぽいことを言つて2人を納得させようとする。

悪は悪、正義は正義の思考回路を持つている2人ならそれで納得するだろう。

「ところで、あそこにいるロックハート先生は何をやっているのかしら」

私は出口のパイプのところで鼻歌を歌っているロックハート先生を指さす。

「記憶を失くしているんだ」

ロンが呆れたように答える。

「忘却術が逆噴射して。僕たちでなく自分にかかっちゃったんだ。自分が誰なのか、今どこにいるのか、僕たちが誰なのか、チンプンカンプンさ。ここに来て待つてるように言つたんだ。この状態で岩場に放つておくと怪我したりして危ないからね」

ロックハート先生は人が変わったかのように優しい表情をしている。

「やあ、なんだか変わったところだね。ここに住んでるの？」

私はその言葉聞いて状態を察する。

これは重症だ。

ハリーたちはパイプを見上げています。

どうやってここから戻ろうか考えているのだろう。

「君は初めて会う子だね。お元気してる？ 僕は？ 僕は…元気さ！ 凄い元気！」

ロックハート先生が何かを呟いていたようだが無視した。

結局ハリーたちは不死鳥に掴まっていくことにしたらしく、ハリーは不死鳥の尾羽に掴まり、ロンはハリーのローブの背中のところに掴まる。

そこから鎖のようにロンとジニーが手をつなぎ、ジニーとロックハート先生が手をつなぎ、ロックハート先生と私が手を繋いだ。

次の瞬間、私は浮遊魔法にでも掛かったかのように全身が軽くなった気がした。

不死鳥がいれば好きな物を好きなだけ食べられるといったアホなことを考えていると不死鳥は一気に私たちを連れてパイプを上昇していく。

そしてあつという間に3階の女子トイレまで戻ってきた。

私はトイレをするりと脱出すると、そのまま医務室へと向かう。

そしてマダム・ポンプリーに気が付かれないようにハーマイオニーのいるベッドまで近づいた。

私は不死鳥の涙が入った小瓶を取り出す。

自分でも何故このようなことしているのか分からなかった。

石化を解く薬はもうすぐにも完成するという話だ。

ここで使っても意味がない。

だが私は、不思議と勿体ないとは思わなかった。

不死鳥の涙が小瓶から滑り落ち、ハーマイオニーの口の中に入っていく。

次の瞬間、ハーマイオニーの瞳に光が戻った。

「おはよう、ハーマイオニー」

ハーマイオニーは一瞬何が起こったのか理解できないと言った表情で目をぱちくりさせていたが、自分がバジリスクに襲われたということを読み出すと我に返ったようだった。

「さ、咲夜！ バジリスク！ 生徒を襲っていたのはバジリスクだったのよ！ 私、クイデイツチの日の朝に思いついて図書館で調べたの……本の切れ端がない。でも本当なの！ 急いで先生に知らせないと！」

私は慌てるハーマイオニーの頭をぺちりと叩いた。

「落ち着きなさい。バジリスクはハリーが殺したわ。秘密の部屋に関する問題もね」

私はゆつくりとハーマイオニーが石化したあとのことについて話し始める。

ハグリッドがアズカバンに一時的に投獄になったこと。

ダンブルドア先生が理事たちの命令で停職処分になったこと。

ジニーが秘密の部屋に連れていかれ、ハリーが見事助けだしたこと。

ハーマイオニーは私の話を最後まで聞くと、安心したようにベッドに横になった。

私はそんなハーマイオニーの耳元で告げる。

「学期末テストまで、あと数日よ」

ハーマイオニーの顔が唖然とした表情で固まり、すぐさまベッドから跳ね起きると図書室の方に向かっていった。

「こらー！ ハーマイオニー・グレンジャー！ 病人が勝手にベッドから……なんで動けるの!？」

マダム・ポンフリーの驚愕したような声が医務室に響き渡る。

私はマダム・ポンフリーに見つからないように、こつそりと医務室を後にした。

ダンブルドア先生はハリーとロンに200点ずつ点数を与えたいらしい。

去年私が貰った170点を30点も上回る高得点を2つもだ。

ロンなど何もしていないような気がするが、まあ同じ寮生なので大目にみよう。

私もあの場に残っていればもう200点もらえたのだろうか。

なんにしてもこれでグリフィンドールが一気に400点も稼いだことになり、今年の

寮對抗杯もグリフィンボールのものとなった。

それと共に、ハリーとロン、そしてここでは何故か私にもホグワーツ特別功労賞が授与されることになった。

リドルのトロフィーの横に私のトロフィーが並ぶわけだ。

それはそれで笑える光景になることだろう。

そして風の噂でマルフォイ氏が理事を辞めさせられたという話を聞いた。

これは私の予想でしかないが、今回の件はマルフォイ氏のマッチポンプだったのではないかと思う。

でなければダンブルドア先生が停職処分にされた理由も、このタイミングでマルフォイ氏が理事を辞めさせられる理由もわからない。

そしてハーマイオニーにとって幸か不幸か学年末テストは事件が解決したお祝いに中止になった。

ハーマイオニーの叫び声を聞く限りでは、不幸のほうだったらしいが。

私は自分のベッドの上でリドルの日記に文字を書き込んでいく。

『ダンブルドア先生は貴方がまだ無事なことに気が付いてないわ。上手く行ったでしょう？』

『どうやらそのようだ。それで、これから僕はどうなる？ ハリー・ポッターを殺すのは

今の僕に任せるとして、君は僕をどうしたいんだ？」

私はクスリと微笑むと、万年筆を滑らせた。

『ポケットのの中の友達つて、素敵じゃない？』

『君には全く呆れるよ』

こうして忙しかった1年も終わり、私は紅魔館に帰ってきていた。

私はお嬢様に紅茶をお出しすると、そのままその場で待機する。

「あら、少し腕が上がったんじゃない？ ホグワーツで練習したの？」

お嬢様は私が淹れた紅茶に満足したのか私の方に振り返って聞いた。

「そうそう、咲夜。ホグワーツで友達は出来た？」

私は1冊の日記帳を取り出す。

「はい、トム・リドルさんです」

「ぶほおっ……！」

次の瞬間、お嬢様が紅茶を噴き出した。

私は時間を止めてテーブルとお嬢様の服についた紅茶をふき取り、時間停止を解除する。

「え？ マジ!? トムの日記!? ちょっと見せなさい!」

お嬢様は紅茶の入ったティーカップを投げ捨てると喜々として日記帳を捲った。

「白紙……透明インクね! パチエ! パチエ! ちょっと来なさい!!」

お嬢様が部屋の一隅に向けて笑い声を堪えるような声で叫ぶ。

すると何処からともなくといった感じでパチュリー様の声が聞こえてきた。

『うるさいわね……どうしたってのよ』

「トムの……トム・リドルの日記帳を手に入れたわ。しかも学生の頃の!」

『え!? どこで!? なんにしてもすぐに行くわ走っていくわ!』

ドタバタと廊下を走ってくる音が聞こえてくる。

次の瞬間パチュリー様が息を切らしながらもニヤニヤが止まらないといった表情で部屋に入ってきた。

「これ、透明インクかしら。真っ白なの。相当見られなくなかったんでしようね」

「でもリドルがそんな幼稚な魔法で自分の恥ずかしい記録を残すかしら」

「なんにしても中身を読むことが出来れば何でもいいわ。どんな面白いことが書いてあるか気になるし」

まるで知り合いの部屋から昔のアルバムでも見つけたかのような反応を見せる二人に私は戸惑ってしまう。

パチュリー様が手をかざして何やら呪文を掛けている。

そんな様子に耐え切れなくなったのか、白紙のページにひとりで文字が浮かび上がってきた。

『やめてください。この日記帳には僕の記憶が詰まっているだけです』

その文字を見て何かに気が付いたのか、パチュリー様が肩を落とす。

その様子を見てお嬢様がパチュリー様に聞いた。

「つまりどういうことなの？ これはトムの恥ずかしい日記帳なのでしょう？」

「恥ずかしいことが書かれていることは決定事項なのね……これは確かにリドルの日記帳らしいわ。でもリドルときたら自分の記憶をそのまま日記帳に宿したみたいなの。

つまり当時の生意気なガキがこの日記帳に宿っているだけよ」

その言葉を聞いてお嬢様も「なくんだ」と肩を落とした。

パチュリー様は日記帳に手をかざすと Hogwatts では到底習わないような呪文を唱えていく。

すると日記帳は新品同様に綺麗になった。

「仕上げにこれ」

パチュリー様はポケットから宝石のようなものを取り出す。

その宝石を日記帳の上に置き、手をかざした。

すると宝石は一体化するように表紙とくつつき、あたかもそのような装飾が施されていたような自然な形へと変化した。

次の瞬間、私の横にリドルが実体を持って現れる。

「はあい、トム。といつても、学生だった頃のトムと出会うのは初めてかしら」

お嬢様がリドルに向けて手をあげて挨拶をした。

「お嬢様はトム・リドルのことをよく存じなのですか？」

私はたまらずお嬢様に聞いていた。

だがその問いに答えたのはリドルのほうだった。

「ホグワーツを卒業した後、ボージン・アンド・バークスで働いているときに少し仲良くなったらしい。もつとも、売り手と買い手という関係でしかなかったですが」

リドルが続ける。

「それにしても、ここにいたのですね。パチュリー・ノーレッジ。噂に聞くように、凄まじい技術と魔力だ。貴方がここに姿を現したということは、僕はもうこの館の外には出れないということでしょうか」

私はなんの話をしているのか全く分からなかった。

そんな私を見かねてか、パチュリー様が説明してくれる。

「貴方なら喋らないと思っていたし、強くは言っていなかったから気が付いていなかった

かも知れないけど、実は私はここに匿われているのよ。この紅魔館にね」

衝撃の事実だった。

それにリドルが説明を付け加えてくれる。

「パチュリー・ノーレッジさえ自分の陣営に引き込むことが出来れば、それだけで魔法界を掌握することが出来る。それほど技術と力を持つているのです。彼女は。先ほど無造作に取り出した宝石一つとってもそうだ。今僕の媒介になっている宝石は『賢者の石』と呼ばれる錬金術の最終形です。この日記帳に關しても僕が掛けた魔法を欠片も傷つけずに修復してみせた。既に使う魔法の次元が違う」

「そういうこと。咲夜、ということパチエがうちにいることは内緒だから。わかったわね？」

私は一度に与えられた情報量に目を回す。

パチュリー様が飛びぬけて凄い魔法使いだとは聞いていたがそこまでのお人だったとは。

だったらそれを自分の陣営に引き込んでいるお嬢様は一体……。

リドルとお嬢様の繋がりは何？

私は思考を停止させて、頷くことしか出来なかった。

「かしこまりました。お嬢様」

リドルは実体と記憶を切り離され、大図書館で働かされることになった。主な仕事はパチュリー様の助手だ。

リドル自身向上心の塊のような人間なので、喜々として研究を手伝っている。

そして私の手元にはリドルの日記が握られていた。

リドルの本体はこの日記帳らしく、普通に日記帳を通じて会話も出来る。

脳みそと体が分かれているようなものだろう。

まったく、パチュリー様も滅茶苦茶な魔法をリドルに掛けたものだ。

私は日記帳を開き、文字を書き込んでいく。

『これでよかったのかしら。トムはパチュリー様の助手で不満はないの?』

『不満がないと言えば嘘になるかも知れない。だが、それは何処にいても同じだ。ここはその中でも最高の環境だと言える。あのパチュリー・ノーレッジの助手として働けるんだ。少しでも多くの知識を吸収して、僕は自身の研究を完成させる』

『そう、貴方が幸せそうだなによりよ』

私は日記帳を閉じるとベッドに横になる。

そしてこの1年のことを思い返していたが、いつの間にか夢の中へと落ちて行ってし

ま
っ
た。
。

十六夜咲夜とアズカバンの囚人

囚人とか、美鈴さんとか、吸魂鬼とか

私は大図書館でパチュリー様とリドルの手を借りて黙々と準備を進めていた。

真っ黒の服の上にローブを着こみ、怪しげな仮面をつける。

白い髪はかき上げカチューシャで止め、フードの中にすっぽりと隠した。

「このネットクレスをしなさい。声を変えることができるわ」

パチュリー様が私の首にシンプルな銀のネットクレスを掛ける。

試しに少し声を出してみたが、確かに男とも女とも取れないような中性的な声に変わっていた。

「これをつけるといい。かつての知識とここでの研究で作ったものだ。魔法を使った時の匂いを消すことができる」

リドルがブレスレットを渡してくる。

匂いとは、魔法を使ったときに残る痕跡のようなものだ。

成人未成年関係なく、残る魔法の残滓を消すことができるらしい。

「もつとも、時間を止めた状態で使った魔法に関しては何いは残らないから、緊急用と考

えるといい」

リドルはそう付け足した。

「いい？ 咲夜。これから行くのは北海にある孤島よ。魔法使いよりも厄介なものが待ち構えているわ。時間を止めるまで一瞬たりとも油断しないように。あと、これ。簡易的な姿現し妨害呪文妨害指輪。こっちは訓練しなくても姿現しができる指輪」

パチュリー様が魔法陣を図書館の床に書きながら片手間に渡してくる。

私はブレスレットと指輪をつけると、パチュリー様が書き終わった魔法陣の上に立つた。

「おお、これならどこからどう見ても死喰い人だ」

「それは褒めているのかしら、貶しているのかしら」

「この場合は褒め言葉よ」

全ての準備が整うと、パチュリー様は魔法陣に魔力を込め始める。

その様子を1秒たりとも見逃さないようにと、リドルは魔法陣とパチュリー様を見つめていた。

「では、行ってまいります」

私はパチュリー様の魔法で空間転移した。

私は地に足がつくと同時に時間を停止させる。

そして目の前に広がる大きな建物を見上げた。

北海の孤島にあるとされる刑務所『アズカバン』

私は現在その建物の前に立っている。

「さて、中にはどうやって入るのかしら」

私は建物の周りを飛び回りながら休暇中にお嬢様から言われたことを思い出す。

数日前、いつものティータイムの最中に不意にお嬢様が呟いたのだ。

「あ、そうだ。シリウス・ブラックを助けに行きなさい」と。

まるでその場で思い出したかのようにお嬢様は一言そう言うと、何事もなかったかのように紅茶を飲む。

あの時は二つ返事で了承してしまったが、パチュリー様にそのことを相談するとそう簡単な話でもないらしい。

シリウス・ブラックとは、ヴォルデモートの失踪直後に大量殺人をしたとされる魔法使いだ。

現在はこのアズカバンという監獄に収容されているらしい。

お嬢様はどうしてこのブラックという殺人鬼を助けようと思われたのか。

何か考えがあつてのことなのか、ただ退屈のぎにそう申されたのかは分からない。だが命令されれば従うだけである。

私は出入り口のようなものを見つけると建物の中に入る。

外もそうだが、建物のあらゆる場所に吸魂鬼が浮いており、それが非常に邪魔な障害物となつて私の前に立ちはだかつていた。

お嬢様が守護霊の呪文を私に練習しろと言つたのは今日の為だったのだろうか。

私は浮遊呪文を用いて吸魂鬼の位置をずらし、狭い監獄内を移動していく。

奥へ奥へと進んでいくと、ようやく囚人たちがいる牢屋へとたどり着くことができた。

そこには今にも死にそうな顔をした魔法使いや魔女が各々の檻でぐったりとしており、中には屋敷しもべ妖精の姿もある。

屋敷しもべ妖精も投獄されているということは、一般的な姿現しの妨害呪文とは違った特殊な呪文が使われているのだろう。

そんなところに空間転移させることが出来た。パチュリー様の技術は、リドルが言うように並大抵のものではない。

感心していると牢屋の中にシリウス・ブラックの顔を見つけた。

私は中に入ろうとするが、牢屋には鍵が掛かつており簡単に中に入ることができな

い。

仕方がないのでテストも兼ねてパチュリー様から渡された姿現し用の指輪を試すことにする。

「確か『どこに』を念じるだけで空間転移できるんだったわね」

私はシリウス・ブラックが座っている目の前あたりの空間に意識を集中させる。

次の瞬間、去年の夏にパチュリー様と共に姿現しした時のような感覚が全身を襲い、いつの間にか私はブラックの前に立っていた。

まったくもって便利な魔法具だ。

私はシリウス・ブラックがいる牢屋の時間だけを器用に動かすとそのままブラック本人の時間停止も解除させた。

そうしなければ、ブラックは壁や床から冷やされ凍死してしまう。

「……………ツ!？」

シリウス・ブラックは時間停止を解除してからも数秒はぼんやりと死にそうな顔をしていたが、いきなり目の前に現れた私を見て飛びのく。

私はいきなり襲われることも予想していたのでその反応に少々驚いた。

「き、君は誰だ? どうやってここに入った……」

ブラックは落ち着いた声で私に聞く。

私はネックレスによって中性的になった声で答えた。

「助けにきたぞ。シリウス・ブラックよ」

「死喰い人などの助けは借りん。帰るがいい！」

ん？

何かがおかしいぞ。

私は頭の中でシリウス・ブラックに関する情報を整理していく。

シリウス・ブラックは殺人鬼だ。

だがシリウス・ブラックが死喰い人だったという情報はなかった。

つまりシリウス・ブラックは殺人鬼だがヴォルデモートの敵？

もしくはヴォルデモートの敵であり殺人鬼だというのも冤罪？

取り敢えずこのまま帰るわけにもいかなないのでブラックの言葉を否定する。

「私は死喰い人ではない。この仮面は姿を隠す為の物だ」

「何故、私を助ける……お前は誰だ？」

何故……難しいことを尋ねるものだ。

「そのようなことはどうでもよい。シリウス・ブラックよ。ここから出たいか？ それ

とも一生をこの牢獄で過ごすか？」

ブラックは何かを考えるように押し黙った。

お嬢様からは、シリウス・ブラックを助けるだけ助けてあとは泳がせておけとの命令を受けている。

その命令を聞いて私はますます混乱したのだが、理由を知る必要などない。

お嬢様の命令なのだから。

私はブラックにまっすぐ手を伸ばす。

ブラックは静かにその手を見つめていた。

「1つだけ聞かせてくれ。君はどちら側だ？ 不死鳥の騎士団なのか、死喰い人なのか」

私はその問いの意味が分からなかった。

死喰い人というのはヴォルデモートの仲間のことだろう。

では不死鳥の騎士団とは？

先ほどブラックは死喰い人の手は借りないと言った。

ということはブラックは不死鳥の騎士団という組織の一員なのか？

私は少し悩み、答えを返した。

「どちらでもない。正義の為に」

ブラックは何かを覚悟したように私の手を取る。

次の瞬間、私は姿現しを発動させた。

場所はロンドンの路地裏だ。

かなりの長距離だが、そこはパチュリー様の魔法具だ。

体が欠損することなく私とブラックはロンドンの路地裏に現れることが出来た。

それと同時にアズカバンに着いた時から掛けていた時間停止を解除する。

「私はこれで失礼する。あとは君の自由にしたまえ」

私はそのまま路地裏の奥へと消えようと路地裏を歩く。

「君は一体……」

ブラックが何を言おうとしていたが、私はそのまま紅魔館へと姿現しした。

紅魔館では先ほどと全く変わらない光景が広がっている。

魔法陣の前でパチュリー様は手をかざしており、リドルはそれを見ていた。

「ただいま戻りました」

私が後ろからそういうと、リドルが驚いたように振り返った。

現実の時間では5秒も経ってないのだ。

ブラックと牢獄の中で話していた時も、時間は止まっていたのだから。

「早すぎないか？」

「成功したという証拠でしょう？ 咲夜、お疲れさま。シリウス・ブラックの脱獄は上手

くいった？」

パチュリー様が手を動かすと地面に書かれた魔法陣が消え去る。

「ええ、ロンドンに逃がしてきました。今からお嬢様に報告してきます」

私は協力してもらった2人に一礼すると時間を止め、いつものメイド服に着替える。

そしてそのままお嬢様の部屋まで飛んで行った。

時間停止を解除し、私は静かに扉をノックする。

「入っていいわよ」

お嬢様のお許しが出たところで私は静かに部屋に入る。

「シリウス・ブラックは無事脱獄しました。今頃はロンドンで一人困惑しているでしょう」

私は簡潔に仕事を完遂したことをお嬢様に報告した。

お嬢様はチェス盤の上でオセロの石を弄りながら私の報告を聞いている。

「彼は一体どちら側なのか、これではつきりすると思うわ。白なのか、黒なのか」

「と、おっしゃいますと?」

「興味があるのよ。チェス盤の上にオセロの石が立てた状態で置かれていたら困るじゃない? 彼の犯した罪は一見黒だわ。でもだからといって黒に交ぜてしまってもよいのかしら。黒に交ざらないのだとしたら白には交ざるのか。それとも、初めから白なのか。白であって黒と交ざり合うのかしら」

お嬢様はオセロの石を親指で上にはじく。

チエス盤に跳ねることなく落ちたその石は、白を表にしていた。

「楽しみじゃない? というわけで、今年も報告を期待しているわね。下がっていいわよ」

私にはやはりお嬢様の言いたいことがわからない。

そしてどんな報告を期待されているのかも、よくは分からなかった。

休暇中のある日、私が買い出しから帰つてくると美鈴さんが門の前でもも肉を焼いていた。

私は時間停止を解除して美鈴さんに声を掛ける。

「美鈴さん、また門の前で肉焼いているんですか? 頼んだら私が調理してあげるって言ってるじゃないですか……館の気品の為にも、そういう行為は慎んで頂きたいものです」

「こくゆくふんいきつてのがいいのよ! それに焼きたてが一番美味しいしね。そういうえば咲夜ちゃん、図書館に来たつていうクールなナイスガイ、彼つて咲夜ちゃんのボーイフレンド? 咲夜ちゃんも年頃ね」

「いえ、友達です。それと、ちゃんとあれ片付けておいてくださいよ?」

私は門の横に捨ててある人間を指さした。

右足をもぎ取られて呻いているそれは、手足の関節が外されているのか残された四肢は動いていなかった。

「肉は血抜きして熟成させないと美味しくないって何度言ったらわかるんですかねこの美鈴さんは」

私は呆れるように美鈴さんの横に座り込む。

美鈴さんは太ももを火の上でグルグルと回しながら言葉を返した。

「妖怪の味覚からしたら血が滴るぐらいのほうが美味しいんですよって何度言ったらわかるんですかねこの咲夜ちゃんは」

美鈴さんは先ほどの私の言葉をそのまま返すように言う。

私はそんな返答に少し頭を抱えると、門の横に捨ててある人間をもう一度指差す。

「あれ、まだ食べます?」

「料理に使う? それなら持つて行つてもいいけど。そうじゃなかったら適当に止血してその辺に吊るしておくからさ」

その言葉を聞いてか、呻いていた人間の顔が恐怖に歪んだ。

体をくの字に曲げ伸ばしし、少しでも遠くへと逃げようとする。

「美鈴さんはもう少し紅魔館の気品というものを保つ努力を……」

「そうは言うけど咲夜ちゃん、紅魔館ってそんなに気品溢れるところじゃないわよ。我儘で幼稚な吸血鬼にアホな妖精メイド、喘息持ちの紫もやしにうふふな妹様。おぜうさまは咲夜ちゃんの前でカツコつきたいだけじゃないかしら」

私はそれを否定しようと口を開きかけるが、言葉が出てこない。

私は私が来る前の紅魔館を知らないのだ。

リドルの日記を持って帰った時のあのはしやぎようが、本当のお嬢様なのかも知れない。

そんな思い悩んだ表情を見て何を思ったのか、美鈴さんがぺちりと私の頭を叩く。

「あつはつはつはつは、咲夜ちゃんは咲夜ちゃんがしたいようにすればいいのよ。おぜうさまはそれを否定しない。貴方がおぜうさまに仕えようと思うのならそうすればいいし、付き合いきれないと思ったら何処かに行けばいい。多分おぜうさまもそう考えていると思うし」

美鈴さんは「上手に焼けた」と呟くと太ももに齧りつく。

そして「咲夜ちゃんもどう？」と勧めてきた。

「だから私は好きなようにさせてもらっているわ。パチュリーもね。おぜうさまが縛るのは妹様だけ、おぜうさまが縛られるのは妹様だけ」

私はナイフで肉を少し切り取ると、口の中に放り込む。

やはりそこまで美味しくはなかった。

「そういうものなのですかね……それでは私は自分の好きでお嬢様に縛られることにしますわ」

美鈴さんはニッコリ笑うと私の頭を撫でる。

「美鈴さん、食料が逃げていきますよ?」

「あ! こら待て非常食!」

「あれ何処で捕まえてきたんですか……」

「その辺歩いてた」

私は逃げようとしている人間に浮遊魔法を掛け浮かべると美鈴さんのもとまで移動させる。

紅魔館周辺にはパチュリー様の居場所がバレないように魔法の匂い消しが掛かっている。

なのでここでは魔法を自由に使うことが出来た。

「おお、便利ね。ついでに止血もしといてくれない?」

「エピソード、癒えよ」

私が真紅の杖を振るうと途端に太ももの皮が伸び、欠損部に覆いかぶさる。

美鈴さんの外した関節はそのままだ。

美鈴さんは「勝手に逃げちゃ駄目だぞ？」と人間に忠告している。

私は少し気になって、美鈴さんに聞いてみた。

「そういえばパチュリー様から、美鈴さんが使う力は少し特殊だという話を聞いたのですが、どういう意味なのですか？」

「これのこと？」

美鈴さんは手をかざすが、私はそこに何も感じない。

やはり霊力や妖力、魔力とは違う。

「気というのはね、基本的には体の外に出ていくことはないわ。体内を廻らせ時に瞬発的な力を、時に驚異的な集中力を生み出す。多分咲夜ちゃんにも訓練したら使えるわよ？」

「簡単な力なのですか？」

「ん〜修行に10年ぐらい？　まずは武道の心を学ぶところからだから……」
「今は遠慮しておきます」

使えたら確かに便利そうだが、今それに打ち込めるほど暇ではない。

また時間が出来た時にでもゆっくり教えてもらおう。

私がふと横を見ると先ほど止血した人間が口から大量の血を流して窒息死していた。

美鈴さんもそれに気が付いたのか「あああ……」と残念そうな声を漏らしている。

「というわけだ咲夜ちゃん！ あれよろしく」

「何がというわけですか。まあ勿体ないので私が捌いておきますね」

私は杖を振るい人間に付いている血液を綺麗にすると、浮遊呪文をかけて持ち上げる。

そしてそのまま紅魔館の門をくぐった。

私は自室で新学期の準備を進めていた。

図書館からお借りした新しく必要になった教科書を鞆に詰めていく。

一冊とてつもなく凶暴な教科書『怪物的な怪物の本』があつたが、パチュリー様がひと睨みすると大人しくなった。

それから私はホグズミード村に行くための許可証も鞆の中に仕舞い込む。

この許可証にはお嬢様と美鈴さんの名前が重なって書いてある。

どうしてこんなことになっているかという点、どうやらどちらが私の保護者か揉めた結果らしい。

少し前の話になるが、突然美鈴さんが私の部屋に走り込んできて、許可証にサインしたのだ。

美鈴さんはその後すぐにいなくなってしまったが、入れ替わるようにお嬢様が入ってきた。

お嬢様は美鈴さんのサインが書かれた許可証を見るなり悲鳴と怒声が混じったような叫び声をあげると、美鈴さんのサインの上にご自身の名前を万年筆が折れそうになるほどの勢いで書き殴り、美鈴さんを追って部屋を飛び出していった。

その日の夜、お嬢様権限で美鈴さんの夕食が抜きになったのは言うまでもない。

私は全ての荷物を鞆の中に仕舞い込むとベッドに横になる。

明日には紅魔館を出発しなければならぬ。

毎年のことだが、それが妙に寂しく、そして虚しく感じられた。

私は去年の反省を生かして30分前にはキングズ・クロス駅の9と4分の3番線に来ていた。

見送りにきた美鈴さんがオーバーアクションで手を振っているのが少々恥ずかしいが、私は軽く手を振り返す。

少々恥ずかしいのでそそくさと Hogwarts 特急へ乗り込む。

流石にここまで早い時間だと殆どのコンパートメントが空いている。

私は適当なコンパートメント内に入り、扉を閉めると鞆からリドルの日記を取り出した。

このリドルの日記の取り扱いには、少々気を付けないといけない。

他の生徒や先生にバレたら拙いというのが1つ。

ヴォルデモートの日記を持って、更にはその日記と友達だなんて知られたら恥ずかしさのあまり悶死してしまうだろう。

それと時間を止めた状態で日記に触れられないのが1つ。

時間を止めたまま日記に触ってしまうと時間の止まった紅魔館でリドルの実体が自由に行動できてしまう。

リドル自身止まった時間の中で物を動かすことはできないので大したことはできないが、それでも危ないことには変わらない。

お嬢様やパチュリー様が危険に晒される可能性があるのなら、たとえ友達だとしても気を付けなくてはならない。

そしてさらに、この日記帳は今生きているヴォルデモートの魂の一部が宿っていると
いうのだ。

パチュリー様曰く、ホークラックスという魔法らしい。

自分が死んだときの保険のようなものだと言っていた。

リドル自身にも聞いてみたことがあったが、覚えていないらしい。

まあ流石に自分の弱点を弱点に記すことはしないということだろう。

日記のリドルと今いるヴォルデモートは意識では繋がっていないらしいので、自分の届かないところで自分の秘密が暴露されては困ると思ひ、あえて分霊箱のことに關しては日記から抹消したのでだろうとパチュリー様は予想を立てていた。

パチュリー様からしたら、分霊箱を作るなど阿呆の所業の一言らしい。

パチュリー様の話を聞く限りでは魂を軸にして肉体が死を迎えても別の場所に新たな肉体を作るといふ術を作ることとも理論上可能なようだ。

リドルはその理論に物凄く興味を持っていたが、難解な数学や物理学が関わってくるものだったので、今は諦めると言っていた。

私はリドルの日記を取り出すと文字を書き込んでいく。

『ホグワーツ特急に無事乗れたわ。美鈴さんがそろそろそちに帰ってくると思う』

『いま煙突飛行で到着したよ。寂しさの余り先生に抱き着いて泣いている』

『迷惑だからやめなさいと伝えておいて』

『大丈夫だ。今美鈴が何処かに飛ばされたから。あの人だけ自由すぎないか？』

『私も何故お嬢様が美鈴さんを雇っているのか、謎なのよ。でも仕事はできるのよね……』

リドルはパチュリー様のことを先生と呼ぶことにしたようだった。お嬢様のことは私と同じように敬意をもってお嬢様と呼んでいる。

美鈴さんは美鈴と呼び捨てだ。

私は一度リドルの日記を閉じ、表紙を見る。

リドルの日記の見た目は、秘密の部屋事件の時から大幅に変更が加えられていた。

小奇麗になり、装飾やデザインも変わっている。

リドルの名前や年号は消え、表紙には『FREE BOOK』と書かれていた。

段々とホグワーツ特急の中に人が増えていく。

私はリドルの日記を鞆にしまうと、今度は普通の推理小説を取り出した。

しばらく本を読んでいるとコンパートメントのドアが叩かれる。

ドアを叩いたのは生徒ではなく大人の男性だ。

ドアを開けた男性はまだ若そうな人なのだが、ライトブラウンの髪の毛には白髪が交じっている。

「ハハハハハ」

男性が少々フランクな態度で聞いてくる。

特に断る理由もないので私は軽く返事を返す。

男性は私とは向かい側の窓側の席に座ると、すぐさま眠ってしまった。

私はその男性を少々警戒しつつも本を読み進めていく。

しばらく本を読んでいると音を立てないように気を付けながらハリーとロン、そして猫の入った籠を持っているハーマイオニーが入ってきた。

「久しぶり、咲夜」

ハリーが声をひそめて言った。

ハリーたちは空いている席に座っていく。

「咲夜、この人誰？」

ロンが私に聞いてくるが、その問いに答えたのはハーマイオニーだった。

「ルーピン先生」

「どうして知っているんだ？」

「鞆に書いてあるわ」

ハーマイオニーは頭上にある荷物棚に置いてある古びた鞆を指さした。

その観察力には私は今読んでいた小説の探偵を重ねてしまう。

鞆には『R・J・ルーピン教授』と文字が入っている。

「いったい何を教えるんだろ？」

ロンの問いに対してまたしてもハーマイオニーが答えた。

「決まってるじゃない。空いているのは一つしかないでしょう？」

闇の魔術に対する防

衛術よ」

ということとは、ロックハート先生の後釜ということか。

「強力な呪いをかけられたら一発でノックアウトしちまうように見えないか？　ところでハリー、話したいことって？」

ロンがハリーに対して言った。

ハリーは私が居ることを少々気にしているようだったが、次第に話し出す。

シリウス・ブラックに狙われているということ。

シリウス・ブラックを探すと言われたこと。

やはり私が逃がしたシリウス・ブラックという男は凶悪な人物らしく、3人とも深刻そうな顔をして話をしていた。

「シリウス・ブラックが脱獄したのは貴方を狙うためですって？　ああ、ハリー……本当の気をつけなきゃ。自分からわざわざトラブルに飛び込んでいたりしないでね？」

ハーマイオニーが心配そうに声を上げたが、ハリーとしてはじれったそうさ。

「いつもトラブルの方が飛び込んでくるんだ」

「ハリーを殺そうとしている狂人だぜ？　自分からのこのご会いにいく馬鹿がいるかい？」

自分からのこのご会いに行つて脱獄の手助けをした私は馬鹿ということだろうか。

ロンが落ち着かない様子で続ける。

「ブラックがどうやってアズカバンから逃げたのか、誰にも分からないらしい。これまでアズカバンを脱獄した者は誰もいないんだぜ……しかもブラックは一番厳しい監視を受けていたらしいし」

脱獄を手伝った私からしたら、そこまで厳しい監視だったとは思えない。

パチュリー様の魔法具が凄すぎるだけかも知れないが。

「だけど、すぐにまた捕まるわ。そうでしょう？　だってマグルまで総動員してブラックを追跡してるじゃない」

ハーマイオニーが言うには、マグルの警察にも顔写真を流し、極悪非道の殺人鬼として捜索させているらしい。

そこまで魔法省は切羽詰まっているということなのだろうか。

お嬢様はそんな殺人鬼を逃がして何をしたいのだろうか。

私は色々と考えていたが、ハリーのトランクの中から微かに口笛を吹くような音が聞こえてくることに気が付いた。

ロンもそれに気が付いたらしく、ハリーのトランクからスニーコスコープを取り出した。

コマのようなそれは激しく光を放ち、ロンの手の平の上で激しく回転していた。

ルーピン先生が起きてしまう可能性があるのでロンは急いでスニークスコープをハリーのトランクに詰めなおすと、今度はホグズミード村の話題に移る。

ロンとハーマイオニー、2人の話を聞く限りでは、ホグズミード村は少々愉快的な場所らしい。

ホグワーツの近くにあるためか、子供が喜びそうな店が多いらしかった。

ダイアゴン横丁のようなものだろうか。

2人は目を輝かせながら語っていたが、ハリーは何故か悲しそうな表情をしている。

「ちよつと学校を離れて、ホグズミードを探検するのも素敵じゃない？」

ハーマイオニーがハリーに向かって言うが、ハリーの表情は硬かった。

「だろうね、見てきたら、僕に教えてくれ」

「どういふこと？」

ロンがハリーに聞いた。

「僕、行けないんだ。ダーズリーおじさんが許可証にサインしなかったし、ファッジ大臣もサインしてくれないんだ。保護者のサインじゃないとダメだって……」

私は保護者のサインという言葉を聞いて美鈴さんとお嬢様のやり取りを思い出す。

私の許可証はハリーに見られないようにしなくては。

取り合うように保護者欄に名前が書きこまれている許可証を見て、ハリーがどんな顔

をするか容易に想像がつくからだ。

一時を過ぎると、丸っこい魔女が食べ物を積んだカートを押してコンパートメントのドアの前にやってきた。

私はカエルチョコとかぼちゃパイを購入する。

ハリーは大きな魔女鍋スポンジケーキを1山購入している。

ホグズミードで使えない分、ここで散財するつもりなのだろう。

ロンとハーマイオニーはルーピン先生を起こそうか迷っていた。

だが結局声を掛けても起きる気配はなかった。

コンパートメントに入ってきてからルーピン先生はずっと寝ている。

顔色もあまり良くはなかったし、昨日の夜は徹夜だったのだろうか。

しばらく購入したお菓子を食べながら談笑をしていると、いきなりコンパートメントのドアが開け放たれる。

ドアの前に立っていたのはドラコだ。

横にはクラップとゴイルを付き従えている。

ハリーたちはそんなドラコたちにガンを飛ばす。

その様子を見てか、ドラコの横にいるクラップ、ゴイルも負けじとガンを飛ばした。

なんというか、ハリーたちとドラコたちは時間が経つごとに仲が悪くなっているような気がする。

「へえ、誰かと思えば……ポッター、ポツテイーのいかれポンチと、ウィーズリー、ウィーゼルのコソコソ君じゃあないか！　そして、咲夜。久しぶりだね」

ドラコが私にだけ少し優しい口調で言った。

ハーマイオニーの存在は無視したらしい。

大方、ハーマイオニーと口論しても負けることが分かっているからだろう。

「ウィーズリー、君の父親がこの夏やつと小銭を手に入れたと聞いたよ。母親がシヨックで死ななかつたかい？」

ロンがドラコの挑発に乗り立ち上がったとしたその時、ルーピン先生がいびきをか

く。
その音でドラコはルーピン先生の存在に気が付いたようだ。

「そいつは誰だ？」

ハリーはしめたとばかりに言い返した。

「新しい先生だ」

ドラコはそれを聞いた途端苦々しげに顔を歪め、コンパートメントを出て行った。

「ああ。そうだ、咲夜」

ドラコが振り返る。

「僕のコンプार्टメントにこないか？　こんなところよりも環境がいいよ」

その言葉にロンが怒ったように立ち上がった。

それに続いてハリーも立ち上がったが、その視線の方向を見る限りではロンを止める為に立ち上がったものだと思う。

「今日は遠慮しておくわ」

私がそう答えるとマルフォイは今度こそ逃げるように去っていった。

その様子を見てロンが座席に座って拳をさする。

「今年はマルフォイにゴチャゴチャ言わせないぞ。僕は本気だ。僕の家族の悪口を一言でも言ってみろ。首根っこひつつかんで、こうやって——」

ロンが空を切るような乱暴な動作をするが、それをハーマイオニーがたしなめた。

窓の外では雨が強くなっていた。

空の色はどんよりと黒く、通路に灯りが点るほどだ。

少し嫌な予感がする。

その予感の的中したようで、汽車は次第に速度を落としていった。

ハリーが心配そうにコンパートメントの中から通路を覗いている。私は反対に窓の外に目を向けた。

目を細めて遠くを見通すと、休暇中に散々目にした存在を見つけると、吸魂鬼だ。

汽車はガタンと音を立てて停車し、なんの前触れもなく明かりが一斉に消えた。

私は窓を開けると、慎重に杖を構え唱える。

「エクスペクト・パトロナム、守護霊よ来たれ」

私の杖の先から白い狼が飛び出すと、空を駆けていく。

私がコンパートメント内に振り返るとネビルとジニーが入ってきていた。

ルーピン先生は冷たい風が入ってきたことによってようやく目を覚ましたらしい。

コンパートメント内に入ってきた時とは比べ物にならないほど鋭い目つきで周囲を警戒している。

「先生」

「わかつている。動かないで」

ルーピン先生はしわがれた声で私の言葉を遮り答える。

先生はゆっくり立ち上がるとドアの方に近づいていく。

先生がドアに手を掛ける前に、ドアはゆっくりと開いた。

ドアの向こうには吸魂鬼が立っていた。

まるでハロウィーンの仮装のようだが、マントから突き出された手は人間のそれではない。

吸魂鬼はゆっくりとした動作で息を吸い込んだ。

途端に周囲にいるハリーやロンたちの様子がおかしくなる。

急に冷凍庫の中に放り込まれたかのように震え出したのだ。

ネビルは頭を抱えて泣き出し、ハリーなんかは気絶してしまっている。

私にはみんなの体に起こっている異常の正体が分からなかった。

吸魂鬼は人の幸せな記憶を吸うというが、そういうことなのだろうか。

だが、私の体にはそのような異常は起こっていない。

私はゆっくりと吸魂鬼の顔に手を伸ばす。

「貴方。ねえ、その貴方……貴方って」

吸魂鬼を抱きかかえるように私は吸魂鬼の頭を引き寄せる。

自分でも何故このようなことをしているのか分からなかった。

吸魂鬼に感情のようなものは感じられず、肌は氷のように冷たい。

次の瞬間私はルーピン先生の手につけられ、張られコンパートメントの端の席に半ば叩きつけられるように座った。

予想してなかった衝撃に私は「ぐへ」とカエルのような声を上げてしまう。

「シリウス・ブラックをマントの下に匿っている者は誰もいない。去れ」

シリウス・ブラックの脱獄を手伝った者ならいます。

私です。

吸魂鬼はルーピン先生の答えに納得いかなかったのか、コンパートメント内に入ってきた。

「エクスペクト・パトローナム」

ルーピン先生はブツブツといった発音で守護霊の呪文を唱えた。

ルーピン先生の守護霊が吸魂鬼を追い払う。

私は床に転がって気絶しているハリリーの頭を蹴り、意識を回復させる。

ハリリーが席に座り直すとルーピン先生は鞆から巨大な板チョコを取り出し、みんなに

ひとかけらずつ配っていった。

「食べるといい。気分が良くなるから」

私はチョコレートを受け取り、それを齧りながら窓の外を見る。

窓の外では私の守護霊が吸魂鬼を追い払っているのが見えた。

ルーピン先生も気が付いたのか、窓の外を見ている。

「あれはなんだったのですか？」

ハリーが頭をさすりながら聞いた。

「ディメンター、吸魂鬼だ。あれはアズカバンの看守のものだろう」

私の守護霊に追いかけてられて、吸魂鬼は逃げていく。

取り敢えずこれで大丈夫だろう。

守護霊はそのまま私のもとへと帰ってきたので、窓を開けて出迎えた。

まるでペットのようだが、守護霊の扱いはこういう感じでもいいのだろうか。

「驚いた。それは君が出した守護霊だったのかい？」

ルーピン先生が驚いたように私を見ている。

「先生も見事なパトローナスでした」

私は社交辞令のように答えた。

……言ってしまったら先生のパトローナスは形を成していなかったからだ。

狼の守護霊はふわんとその場で消えてしまう。

「では、私は少し運転手と話してくる。配ったチョコは全部食べなさい。元気になる。

それじゃあ」

そう言い残すとルーピン先生はコンパートメントを出て行った。

チョコ甘い。

あの後列車はホグズミード駅に到着した。

いつものようにハグリッドの案内でセストラルの引く馬車に乗り込んでく。

セストラルとは黒い毛を持つ骨ばった馬のような生き物で、目は白くドラゴンのような羽が生えている。

希少種のはずなのだが、100頭以上が馬車馬に使われていた。

なんというか、それでいいのかホグワーツ。

ホグワーツに到着するとマクゴナガル先生が足早にこちらに近づいてきてハリーとハーマイオニーを連れて行ってしまった。

ロンは心配そうに2人を見つめていたが、私からしたらそんなことよりも夕食のほう
が大事だ。

守護霊の呪文は意外とお腹が空くのだ。

今日のように本格的に使ったことはなかったが、持続時間が長い分魔力の消費も激しいらしい。

私は急ぎ足で大広間に入っていた。

全員が着席すると、いつものように組み分けが行われる。

組み分け帽子の歌は去年とも一昨年とも少しずつ違っていたが、おおむね最初に私が

聞いたような内容であった。

組み分けが終わるとダンブルドア先生が前に出る。

「新学期おめでとう！ 皆にいくつかお知らせがある。1つはとても深刻な問題じゃから、皆がご馳走でぼうつとなる前に片付けてしまおうがよかろう……」

ダンブルドア先生は大きく咳ばらいをした。

「ホグワーツ特急での捜査があつたから、皆も知つての通りだとはおもうが……わが校は今アズカバンの吸魂鬼を受け入れておる。魔法省のご用でここに來ておるのじゃ」

ということはホグワーツの周りを吸魂鬼が徘徊するということだろうか。

それは何とも……物騒な話だ。

「吸魂鬼たちは学校への入り口という入り口を固めておる。あの者たちがここにいる限り、はつきり言っておくが誰も許可なしに学校を離れてはならんぞ。吸魂鬼は悪戯や変装に引つかかるような代物ではない。透明マントでさえ無駄じゃ。姿現しでもしたら外に出ることは可能じゃろう。だが、ホグワーツでは姿現しは出来んようわしが呪文をかけておる」

ダンブルドア先生は一瞬ハリーの方を見た後、私の方を見た気がした。

私は指を見る。

パチュリー様から以前借りた指輪は既に返している。

故に私は今姿現しは使えない。

「言い訳やお願いを聞いてもらおうとしても、吸魂鬼は聞く耳を持たん。それじゃからひとりひとりに注意しておく。あの者たちが皆に危害を加える口実を与えるでないぞ。絶対に自分から近づいて行ってはいかん」

ダンブルドア先生は今度は確実に私の方を見た。

ルーピン先生からコンパートメント内での話を聞いたのかも知れない。

私はルーピン先生が座っている席を見る。

ルーピン先生もこちらを見ていた。

私が何をしたというんだ。

「楽しい話に移ろうかの」

ダンブルドア先生が言葉が続けた。

まだ夕食は出てこないらしい。

「今学期から新任の先生を2人もお迎えすることとなった。まず、ルーピン先生。有り難いことに空席になっている闇の魔術に対する防衛術の担当を引き受けてくださった」
パラパラとまばらな拍手が起こった。

ここ最近1年以上闇の魔術に対する防衛術の担当を務めた先生はいない。

今回はちゃんとした先生だろうか。

というかあの時逃げたクイレル先生は今何処にいるのだろう。

私が掴ませた偽物の石で、必死になってヴォルデモート卿を蘇らせようとしているのだろうか。

それとも偽物だとバレ、その責任でヴォルデモート卿に殺されてしまっているだろうか。

いや、それはない。

今のヴォルデモートには人一人を殺すほどの力も無い筈だ。

私はルーピン先生のほうを見る。

他の教師陣と比べると随分とみすぼらしい服装をしている。

私は見比べる段階でスネイプ先生のほうを見たのだが、怒りを通り越して今にも視線でルーピン先生を殺そうとしているかのように睨みつけていた。

過去に何かあったのだろうか。

もう一人の新任は驚くことにハグリッドだった。

魔法生物飼育学の担当であったケトルバーン先生が引退した後を継いだ形だ。

ハグリッドの授業と聞いて私は少々不安になる。

指定教科書に怪物の本を選ぶぐらいだ。

だが私の予想とは裏腹に比較的大きな拍手がハグリッドを包んだ。

主にグリフィンドールの机から大きな拍手が上がっている。

特にハリーたちは誰よりも大きな拍手を最後まで送っていた。

これで話は終わりだろう。

私はナイフとフォークを優雅に、そして誰よりも素早く構えた。

「さて、これで大切な話はみな終わった。宴じゃー！」

目の前の皿に料理が現れる。

私はその料理を頬張りニッコリと微笑んだ。

次の日の朝、私はハリーたち3人と朝食を取りに大広間に来ていた。

グリフィンドールの机に座るとパンを1つ取り、ジャムを塗って齧る。

好き嫌いはあまりないが、私はパンが好きだ。

もつとも、米もパスタも好物だが。

幸せな気分でパンを齧っている私とは裏腹にハリーは何故か不機嫌だった。

スリザリンの席が沸いているのが原因だろうか。

どうやら昨日コンパートメント内で気絶したハリーのモノマネをしているらしい。

その中心にいるのはドラコだ。

バカバカしい仕草で気絶をする真似をしている。

なんというか、ドラコは芸人でも目指しているのだろうか。

だとするとクラブ、ゴイルのうちどちらがツツコミだろう。

いや、ボケまくるクラブ、ゴイルにマルフォイがキレるというギャグが一番笑えるに決まっている。

ロンとその兄がハリーを慰めているが、私はハーマイオニーが持っている新しい時間割のほうに気になった。

ロンもそのことに気が付いたらしく、ハーマイオニーに指摘する。

「君の時間割、滅茶苦茶じゃないか。ほら、1日に10科目もあるんだぜ？ そんなに時間があるわけないのに」

「何とかなるわ。マクゴナガル先生と一緒に決めただから」

ハーマイオニーがつつけんどんに返す。

このことに触れてほしくないといった表情だった。

「でもほら、この日の午前中、わかるか？ 9時、占い学。そしてその下だ。9時、マグル学。それから……おいおいその下に数占い、これも9時ときたもんだ。そりゃ、君が優秀なのは知ってるよ、ハーマイオニー。だけど、そこまで優秀な人がいるわけないだろ。3つの授業にいつぱんにどうやって出席するんだ？」

私はそれを聞いてハーマイオニーの時間割をよく見る。

確かにいくつかの科目の時間がかぶっていた。

「ハーマイオニー。貴方、確かにマクゴナガル先生と一緒に決めたの？」

私が冷静にハーマイオニーを聞いたです。

ハーマイオニーは慌てて取り繕うように口早に答えた。

「勿論よ、咲夜。それとロン。私の時間割がちよっと詰まっているからって、貴方には関係ないことでしょうか？」

関係ない……か。

だがもしこの時間割が正しく、そしてハーマイオニーの言葉も正しいのだとしたらおかしいことになる。

ロンの指摘した通り、一度に2つの授業を受けることは出来ない。

分身でもできれば話は別だが、私でも疑似的な分身を作ることしか出来ない。

その分身で授業を受けるなんてことは出来ないだろう。

だとしたらビデオカメラのようなもので授業を撮り、映像を1か所に集めるのだろうか。

そのような魔法をマクゴナガル先生に教えてもらったのだとしたら、この時間割にも納得ができる。

私は適当なところで思考を切ると、トーストにもう一口齧りついた。

死の予兆とか、ヒツポグリフとか、縮み薬とか

ホグワーツの3年生になって初めての授業は占い学だった。

占い学は北塔の一番上でやるらしい。

城の中を歩いて北塔へと向かう。

塔の中は螺旋階段になっており、最後まで登りきると小さな踊り場になっていた。

私はそこで上を見上げる。

天井に丸い撥ね扉が見える。

そこには『シビル・トレローニー占い学教授』との文字があった。

どうやら占い学の教室はこの上のようなようだ。

しばらく踊り場で待っていると、次第に生徒が集まってくる。

慌てるように息を切らしながらハリーたちも階段を上がってきた。

ハリーたちは周囲に扉がないことを不思議に思ったのか辺りを見回している。

しばらく見回しロンが気が付いたのかハリーを小突き天井を指さした。

「どうやってあそこに行くのかな？」

ロンのそんな疑問に答えるように撥ね扉が空き、銀の梯子が降りてきた。

生徒たちが順番にその梯子を上っていく。

私は全員が上りきるのを確認すると、最後に梯子を上った。

占い学の教室は怪しげなレストランのような場所だった。

小さな丸テーブルがぎつと20ほど所狭しと並んでいる。

そして息苦しいほど蒸し暑い。

暖炉の中には大きなヤカンが火に掛けられており、頭が痛くなるような香りが周囲に漂っていた。

壁にある棚には水晶やティーカップなどが雑然と詰められている。

私は適当な椅子に腰を掛ける。

少しすると部屋の隅から如何にも胡散臭く、痩せた女性が現れた。

彼女がシビル・トレローニー先生だろう。

「占い学へようこそ。あたくしがトレローニー教授です。たぶん、あたくしの姿を見たことがある生徒は少ないでしょうね。学校の俗世の騒がしさの中にしばしば降りて参りますと、あたくしの心眼が曇ってしまいますの」

トレローニー先生は大きな眼鏡越しに教室にいる生徒を見渡す。

「みなさまがお選びになつた教科は……占い学。そう、魔法の学問の中でも一番難しいものですわ。初めに、お断りしておきましょう。眼力の備わってない方には、あたくし

がお教えできることは殆どありませんのよ。この学問では書物はあるところまでしか教えてくれませんの……」

つまりは才能がなければどれだけ勉強しても無意味ということを言いたいのだろうか。

そんな先生の言葉に私はハーマイオニーのほうをチラリと見る。

やはり驚いたような顔をしていた。

「いかに優れた魔法使いや魔女たりとも、派手な音や匂いに優れ、雲隠れに長けていても、未来の神秘の帳を見透かすことはできません。限られたものだけに与えられる天分とも言えましょう。あなた、……そう、その男の子」

先生は突然ネビルに話しかける。

いきなり話しかけられた為か、ネビルは椅子から転げ落ちそうになっていた。

「あなたのおばあさまは元氣？」

「元氣だと思えます」

「あたくしがあなたの立場だったら、そんなに自信ありげな言い方はできませんことよ」
ネビルは十分不安げな表情で答えていたと思うが、トレローニー先生から言わせたらまだ足りないようだ。

気絶して座席から落ちてヒクつきながら答えたらいいのだろうか。

列車の時のハリーみたいに。

「1年間、占いの基本的な方法をお勉強いたしました。今学期はお茶の葉を読むことに専念いたします。来学期は手相学に進みましょう」

先生は一通りの説明を終えると生徒に指示を出していく。

2人ずつの組を作らせ、ティーカップを配り、そこに紅茶を注いでいった。

私はハーマイオニーとペアを組み、先生に紅茶を注いでもらう。

私はその匂いを嗅いで、途端に顔を顰めた。

「咲夜、ど、どうしたの?」

「これは……酷いわ。先生もみんなもよく普通の顔して飲めるわね」

私のその言葉にそれを聞いていた生徒全員が一度飲むのをやめ紅茶の匂いを嗅ぐ。

ハーマイオニーも恐る恐る口をつけていたが、特に何も感じなかったようだ。

私は出来れば紅茶の中身を自分が淹れたものに交換したかったが、入れるときの手順に魔術的な要素がどうこうと言われることは分かっている。

私は我慢して一気に紅茶を飲み干した。

ハーマイオニーはその様子をハラハラしたような顔をして見ている。

紅茶として美味しくない。

それどころか茶葉を煮詰めたような味がした。

私は飲み終わったティーカップをソーサーに逆さまにして置くと、底の部分を2回叩く。

そして指で弾くようにひっくり返し表の状態に戻した。

「咲夜、貴方妙に手慣れてない?」

ハーマイオニーが自らのティーカップの水気を切りながら私に聞いてくる。

「お嬢様が得意なのよ。紅茶占い」

私は水気の切り終わったティーカップをハーマイオニーに渡した。

ハーマイオニーは私のティーカップを手に取ると、おもちゃでも与えられたかのように嬉々としながら教科書を捲り始める。

「えっと、これは……狼、それか犬ね。狼だったら警告で、犬だったら良い友達。こつちには雲かしら。疑心暗鬼になる?」

私はハーマイオニーのティーカップを手にとる。

「十字架に風車。ハーマイオニー、貴方そのうち過労死するわよ」

「ええ!?!」

過労死という言葉聞いてか、ハーマイオニーが悲鳴を上げる。

その声を聞いてトレローニー先生がこちらに近づいてきた。

「おお……まさにこれは死の前兆。重労働による苦難が貴方を襲い近いうちに悲惨な未

来が待ち受けていることでしょう」

それだけ言つて満足したのか、トレローニー先生は今度はハリーの方に近づいていった。

「えつと、冗談よね？」

ハーマイオニーが心配そうにこちらを見るが、私は残念そうに首を振つた。

ハーマイオニーは過労死まではいかずともこれから大変な日々が待ち構えているだろう。

何せ授業を取りすぎなのだ。

トレローニー先生はハリーのカップを覗き込んでいる。

そして驚くように言つた。

「隼……まあ、あなたは恐ろしい敵をお持ちね」

「でも、誰でもそんなこと知ってるわ」

先生のそんな言葉に反論したのはハーマイオニーだった。

トレローニー先生がキツとハーマイオニーを睨みつける。

「だつてそうでしょう？ ハリーと例のあの人のことはみんなが知っていることよ」

ハリーとロンはそんなハーマイオニーを驚きと賞賛が入り交じつたような目で見た。

私もハーマイオニーが先生に対し、このような口の利き方をするとは思わなかったの

で少し驚いている。

先生はあえてハーマイオニーを無視し、ハリーのカップにもう一度視線を落とした。そして、今度はハリーにグリムが憑いていると予言する。

グリム、死神犬のことだ。

グリムを見た者は近いうちに死ぬという言い伝えがある。

ハリーは心当たりがあるのか、顔を真つ青にしていた。

みんながハリーの方を心配そうに見ていたが、ハーマイオニーだけは違った。

ハリーのカップをまじまじと覗き込んでいる。

「グリムには見えないと思うわ」

そう、先生の言葉を真つ向から否定したのだ。

私はこれには普通に驚いた。

あのハーマイオニーが先生の出した予言を否定してまで自分の意見を言ったのだ。

これでハーマイオニーが占いについて先生よりも詳しいというならまだ話は分かる。

でもハーマイオニーは占いに関しては教科書を読んだことがあるだけだろう。

私もハリーのカップを覗き込む。

馬に、鳥に、茶葉が2枚。

まあ確かにこれをグリムというのは無理があるかも知れない。

「こんなこと言つてごめんあそばせ。あなたにはほとんど……資質というか、そう、オーラが感じられませんか。よ。未来の響きへの感受性というものがほとんどございませぬわ」

先生はハーマイオニーに向かつてびしやりと言つた。

まあその言葉は正鵠を射ているだろう。

ハーマイオニーの考え方はいわばデジタルだ。

魔法を数学や物理の延長のようにみている。

まあそれは私も同じようなものだ。

だが先生の言うように、占いという学問はそうではない。

魔力や科学では説明しきれない、もっと神秘的で神聖な何かだ。

教科書に載っていることが全てではない。

逆に教科書でまとめられるものではないとも言えるだろう。

ハリーは先ほどから自分が死ぬか死なないかという議論を目の前でされていることに相当イラついているようだった。

そんな珍事もあつた為か、占い学の授業は少し早めに終わることになった。

ハリーたちは逃げるように梯子を降りて北塔の奥へと消えていく。

私は最後まで教室に残ると、カップの後片付けを手伝つた。

「1年のうちに1人はあのような生徒がいますのよ……」

先生はハーマイオニーのことを思い出したのか頭を抱えるようにして呟いた。

「私もハーマイオニーに占いは向いてないと思うわ。確証が得られる結果が伴わないとあの子発狂するんじゃないかしら」

私は教室にある流し台で先生と共にティーカップを洗いながら話をする。

「それに比べると貴方は才能がおりよ。経験を積みめば霧の向こうに隠れている未来を見通すことが出来るでしょう」

「お嬢様の影響なのでしょう。私が仕えているお嬢様は吸血鬼なのですけど、運命を読み解き操る力を持っておられるらしく——」

カチャンと隣でカップの割れる音が聞こえる。

横を見るとトレローニー先生が驚いたような顔をしてこちらを見ていた。

「れ、レミリア・スカーレット氏のメイドさん……でしたの？」

「お嬢様をご存じなのですか？」

先生は流し台に散らばったカップの破片を拾いながら答えた。

「スカーレット嬢といったらこの界限では有名な予言者ですわ」

トレローニー先生の眼鏡がキラリと光る。

「あたくしも何度かお会いしたことがあります、彼女は素晴らしい予言者ですわよ。

大体の占い師は未来を大きく、おおよそにしか捉えることができませぬ。ですが彼女の予言は非常によく当たり、外れることが少ない。スカーレット嬢の講演会には毎回大勢の占い師が詰めかけますわ」

お嬢様はたまに出かけることがあったが、あれは講演会をしていたということなのだろうか。

お嬢様の意外な一面を知り、私は少し驚いていた。

「そういえばあなた、お名前は？」

トレローニー先生がカップを直しながら聞いてくる。

「十六夜咲夜と申します。グリフィンドール生です」

私は拭いていたカップを食器棚に戻すと懐中時計を取り出して時間を確認する。

トレローニー先生も部屋の掛け時計を見て何かに気が付いたかのように私に言った。

「あら、あと一分で次の授業が始まりますわね」

「余裕で間に合いますわ。」

私は一礼すると梯子を降り、時間を止める。

北塔の窓から外に飛び出ると、そのまま空を飛んで変身術の教室まで向かった。

私はトイレの個室に入り時間停止を解除する。

そして何食わぬ顔で変身術の教室に入った。

ハリーたちは教室の一番後ろの席に座っている。

教室を見回すと、皆が先ほどの占い学の授業で言われた予言を気にするようにハリーをチラ見していた。

まるでハリーが今にもばったりと死ぬんじゃないかといった表情だ。

ハリーはそれが気に入らないらしく、不機嫌そうに視線を伏せている。

私は授業の方に意識を移した。

3年生初めの授業は『動物もどき』についてやるようだ。

これは高度な呪文のようで、変身術のように好きな姿になれるというわけではないらしい。

だが、動物もどきとして変身した動物はまさに動物そのもので、非常にバレにくいという性質を持っている。

マクゴナガル先生も動物もどきの一人だ。

先生はみんなの目の前でトラ猫に変身して見せる。

それはまさに猫そのもので、動作がおかしかったり、匂いが変だったりもしない。まさしく完全な猫だった。

だが、クラスでの受けは悪い。

いや、どちらかというところ、多くの生徒が先ほどの占い学の授業を引きずっていると
いったほうが正しいだろう。

「まったく、今日はみんなどうしたんですか？」

先生が元の姿に戻るなり呆れたように生徒に聞いた。

「別に構いませんが、私の変身がクラスの拍手を浴びなかったのはこれが初めてです」
褒められたということなのだろうか。

いや、それは違うだろう。

単にいつもと生徒の様子が違うので先生自身も心配しているのだ。

皆一斉にハリーの方に振り向くが、喋ろうとする生徒はいない。

するとハーマイオニーが痺れを切らしたかのように手を挙げた。

「先生、私たち最初の占い学の授業を受けたばかりなんです。お茶の葉を読んで……」
「ああ、そういうことですか」

マクゴナガル先生はハーマイオニーの話を遮るように話し始める。

マクゴナガル先生は合点がいったようだったが、少々顔を顰めて話を続けた。

「ミス・グレンジャー、それ以上言わなくて結構です。今年は一体誰が死ぬことになった
のですか？」

その言葉を聞いて皆が一斉に先生を見つめた。
「僕です」

ハリーはマクゴナガル先生の問いに答える。

「わかりました。では教えておきましょう。シビル・トレローニーは本校に着任してからというもの、1年に1人、生徒の死を予言してきました。ですが、いまだに誰1人として死んではいません。死の前兆を予言するのは、新しいクラスを迎えるときのあの方のお気に入りの流儀です。私は同僚の先生の悪口は決して言いません。言いませんが……」

先生はそこで一度言葉を切る。

「占い学というのは魔法の中でも一番不正確な分野の1つです。私があの方の分野に関しては忍耐強くないということを隠す気はありません。真の予言者は滅多にいません。そしてトレローニー先生は……」

その先は言わずもがなといった表情だ。

「ポッター、私の見るところ貴方は健康そのものです。ですので今日の宿題を免除したりしませんからそのつもりで。ただし、もし貴方が死んだら提出しなくても結構です」

その言葉を聞いてハーマイオニーが嘖き出した。

ハリーも安心したような顔をしている。

だが、元々魔法界で生活していたロンからしたらグリムという存在は無視できるようなものではないらしく、他の生徒同様、まだ少し心配そうな顔をしていた。

変身術の授業が終わると私はハリーたちと共に大広間で昼食を取っていた。

シチューを食べながらハリーたちの会話を聞く。

「ロン、元氣出して。マクゴナガル先生のおっしゃったこと聞いていたでしょ?」

ハーマイオニーがシチューの入った大皿をロンのほうに押しながら言った。

ロンはシチューを小皿に取り分けフォークを握ったが、食べる気分ではないらしい。

ロンは深刻そうにハリーに呼びかける。

「君、どこかで大きな黒い犬を見かけたりしなかったよね?」

「うん、見たよ。ダーズリーのところから逃げたあの夜に見た」

それを聞いたロンはフォークを取り落とした。

「きつと野良犬か何かよ」

ハーマイオニーは落ち着いた態度でそういうが、ロンはその言葉を聞いて分かたないと言わんばかりにハーマイオニーを見た。

「ハーマイオニー、ハリーがグリムを見たなら……よくない、それは良くないよ。僕んち

のビリウスおじさんはあれを見てから丸一日で死んじやった!」

「偶然よ」

ハーマイオニーの返答は冷めきっている。

だが魔法使いの感覚で言えばおかしなのはハーマイオニーのほうなのだ。

銃を突き付けられながらも「撃たれるわけないわ」と言っているようなものである。

「グリムなら館でしばらく飼ってたわよ。お嬢様のお戯れで」

私がそういうとロンが椅子からシチューの皿ごと下に落ちた。

「ほら見なさい! 咲夜はまだ生きているわ。それがいい証拠よ」

「だって咲夜の主人は人間じゃないだろ!」

ロンが椅子の上に戻ってくる。

「吸血鬼だったらグリムぐらい飼うさ。僕としては信じられないけど……」

「でも妹様の狂気の中てられたみたいで、すぐ死んじやったのよ」

「君の家にはグリムより恐ろしいものがあるのかい!？」

ロンは今にも発狂しそうなほど声を荒げた。

まるで安全ピンを抜いた手榴弾でキャッチボールをしているかのような表情だ。

「それに、占い学ってとつてもいい加減だと思おうわ。言わせていただくなら当てずっぽうが多すぎる」

「あのカップのグリムはいい加減じゃなかった！」

「貴方自信満々にハリーに向かつて羊だつて言つてたじゃない」

「トレローニー先生は君にまともなオーラが無いって言つてた！ 君つたら自分が出来ないことがあるとすぐこれだ！」

2人はついに口喧嘩を初めてしまう。

この辺はマグルの環境で育つたのか魔法界の環境で育つたかの考え方の違いなので、仕方がないことだろう。

ハーマイオニーは怒つたように机を叩く。

「占いで優秀だつてことがお茶の葉の塊に死の予兆を読み取るふりをすることなんだつたら私、この学科といつまでお付き合いできるか自信がないわ！ あの授業は数占いに比べたら、まったくのクズよ！」

ハーマイオニーはカバンを手に取ると怒りながら大広間を出て行つた。

私はロンのほうに視線を向けるが、ロンは大げさに肩を竦めて言う。

「あいつ何言つてんだ？ まだ一回も数占いの授業に出てないんだぜ？」

「でもハーマイオニーの時間割では、占いで同じ時間に数占いが入っていたわね。でも同時に授業を見ているような感じはしなかったし……やっぱあの時間割はおかしいわ」

「僕が死ぬという占いがきれないんだったら数占いのほうがいいけどね」
ハリーは苦笑しげに笑った。

午後にある魔法生物飼育学はスリザリンとの合同授業だ。

私はきよろきよろとドラコの姿を探すが、探すまでもなくドラコのほうから私に近づいてくるのが見えた。

「やあ咲夜、昨日ぶりだね」

ドラコが私に挨拶をする。

昨日のハリーの気絶の件がよほど面白かったのか、いまだに引きずっているようだった。

まあ確かに座席から落ちて床で痙攣するハリーの姿はマヌケそのものだったが。

「昨日はごめんなさいね」

「いいさ、昨日はポッターと一緒にコンパートメント内にいたほうが正解だった。そうだろう？」

そう言つてドラコはハリーが気絶した時の真似をする。

それを見て大勢のスリザリン生が爆笑した。

もう完全に持ちネタの域だ。

私もそれを見てクスリと笑う。

「本当にね。吸魂鬼っていうのは面白い生物だわ。お嬢様が飼いたいと言い出さないといいけど……」

私はドラコたちとともにハグリッドの小屋に近づいていく。

ハグリッドは生徒が小屋に近づくといつもと変わらず大きな声で話しかけた。

「さあ急げ、こつちだ。今日は皆にいいもんがあるぞ！　すごい授業だ！　みんな来たか？　よし、ついてこい」

ハグリッドは生徒を引き連れて森の外周を歩いていく。

5分程歩くと放牧場のようなところに出た。

「みんな、ここの柵の周りに集まれ。そーだ、ちゃんと見えるようにな。さーて、イツチ番最初にやるこたあ、教科書を開くこつたな」

私は鞆から、よくわからない空間に押し込まれすっかり怯えきっている怪物本を取り出した。

怪物の精神衛生上鞆に入れるのはよろしくないみたいだ。

「どうやって？」

「ああ？」

ドラコがハグリッドに冷たく気取った声で言った。

「どうやって教科書を開けばいいのです?」

ドラコが紐でグルグル巻きに縛った教科書を取り出した。

他の生徒も方法はさまざまだが皆同じように教科書が開かないようにベルトやクリップなどで押さえている。

「だ、だーれも教科書を開けなんだのか?」

ハグリッドはガツクリとした表情で生徒に聞くが、私以外の全員がこっくりと頷いた。

そんなに暴れる本なのだろうか。

私は手の中ですっかり怯えている怪物本の背表紙をゆったりと撫でる。

すると少しは落ち着いたようだった。

「なんだ、わかっとする生徒もおるんだな。ああやって撫ぜりやあよかつたんだ」

ハグリッドはハーマイオニーの持っている怪物本を手に取ると、巻いてあるテープを剥がした。

途端に本はハグリッドの手に噛みつこうとしたが、背表紙をひと撫でされるとぶるつと震えてハグリッドの大きな手の上で開いた。

「ああ、僕たちって、みんななんて馬鹿だったんだろ」

皮肉混じりに、ドラコは鼻で笑うようにそう言った。

まあ普通、本を撫でるといふ発想はないだろう。

噛みつく本なら尚更だ。

「お、俺はこいつらが愉快なやつらだと思ったんだが」

最初の自信はどこへやらといった表情でハグリッドはハーマイオニーに本を返す。

「ああ、恐ろしく愉快痛快ですよ。僕たちの手を噛み切ろうとする本を持たせるなんて、まったくもってユーモアに溢れるね！」

「黙れマルフォイ」

ハリーがドラコに冷たく言った。

そのあと私を見てきたが、あの表情はなんだろうか。

近くにいるんだったら止めろよと言いたげな表情だ。

私は相手にしなきゃいいでしょと表情で伝える。

だがハリーはどうかしてハグリッドの最初の授業を成功させてやりたいらしい。

ハグリッドはその後少々ぐだつきながらも、魔法生物を連れてくる為に魔法の森の中に消えていく。

「まったく、この学校はどうなっているんだろうねえ」

ドラコが私の横で声を張り上げた。

「あのウドの太木が教えるなんて、父上に申し上げたら卒倒なさるだろうなあ……」

「黙れマルフォイ」

ハリーが繰り返すように言う。

「あら、言ったら駄目よドラコ。もし貴方のお父様が卒倒してしまつたら貴方の持ちネタが使えなくなるわ」

「それは確かに困る。ポッターの真似は受けがいいんだ」

ハリーが私を睨みつけてくる。

一応フォローしたのだが、伝わらなかつたようだ。

しばらくするとハグリッドが十数頭のヒツポグリフを連れて森から出てくる。

ハグリッドは十数頭のヒツポグリフの鎖を片手で握り、制御していた。

一体どんな怪力なのだろうか。

ハグリッドはヒツポグリフを柵へ繋ぐと大きな体をこちらに向けた。

「ヒツポグリフだ！ 美しかろう、え？」

ハグリッドの言うことも分からなくはない。

鷲のような頭と鉤爪と翼に馬のような体。

色も様々で灰色、赤銅色、褐色、漆黒などがある。

その姿には魔法界の生物特有の気持ち悪さはなく、物語の主人公の友達として小説な

どに出てきても違和感はない。

「そんじゃ、もうちつとこつちやこいや」

みんなその大きな嘴と鉤爪に警戒しているのか近づこうとしない。

私が無造作に柵の方へと近づくとハリー、ロン、ハーマイオニーも恐る恐る柵へと近づいた。

取り敢えず数名が近づいたからか、ハグリッドが説明を始める。

「まんず、イッチ番最初にヒツポグリフについて知らなきゃならんのは、こいつらは誇り高いというこつた。ヒツポグリフは怒りっぽい。絶対、侮辱しちやなんねえぞ？ そんなことしてみろ。それがお前さんたちの最後のしわざになるかもしんねえから——」

私は説明を続けるハグリッドをよそにヒツポグリフに近づいていく。

私が嘴に触れようとするとヒツポグリフはその手に噛みついてきた。

それを軽くないなし、頭を撫でる。

ヒツポグリフは今度は私を追い払うように鉤爪を振りかざした。

半身でそれを避け、胴体を撫で、また攻撃されそうになり、避け、受け流し、ヒツポグリフに触っていく。

ヒツポグリフは覆いかぶさるように私にのしかかってきたが、私はヒツポグリフの首を支点にしてぐるりと回り背中に飛び乗った。

マウントをとってしまえばこっちのものだ。

ヒツポグリフは必死に私を振り落とそうと暴れまわるが、私はその衝撃を器用にいなしていく。

数秒後にはヒツポグリフも諦めたのか大人しくなった。

私はゆつくりと目の前にある大きな頭を撫でる。

するとそれが気に入ったのかヒツポグリフは気持ちよさそうに目を細めた。

私はようやく周囲を見回す余裕ができたのでドラコたちがいる方を見る。

全員が口をぼかんと開けてこっちを見ていた。

唯一ハグリッドだけは私に気が付かずに、生徒が静かに説明を聞いているものだと思います。いしやべり続けている。

「——つてもいいつちゆうこつた。もし、お辞儀を返さなんだら、素早く離れるようにな。こいつの鉤爪はちと痛いからな。よーし、誰が一番乗りだ？」

全員が黙って私のほうを指さした。

ハグリッドはなんだ？ といったような表情で私のほうに振り返る。

そしてヒツポグリフに乗っている私の姿をとらえると、ただでさえ大きな目を更に大きくした。

「お、おまえさんなにやつとるんだ？」

「さつきから襲われました」

パチルが先ほどの私の様子を説明するように言った。

「いや、あれは上に乗ろうとしてたんだろ？」

「戦ってるようにしか見えなかったけど……」

「じゃれてただけよ！」

生徒が口々に先ほどの私の行動について言い合っている。

私は「なにやってるんだらうねー」といった表情でヒツポグリフと顔を見合わせていた。

「おい、おまえさん！ 危ないからはよ降りて来い！」

ハグリッドが慌てたように大声を出す。ヒツポグリフは大人しいままだ。

1回、2回と翼を動かし、まるで空を飛ぶ準備をしているようだった。

「連れて行ってくれるの？」

私が声を掛けるとヒツポグリフは一気に大空へと飛翔した。

一瞬加速について行けず落ちそうになるが、優しくヒツポグリフの首を抱き込みそのまま一緒に加速していく。

そしてあつという間にハグリッドが小さくなるほど上空へとたどり着いた。

私の脇で大きな翼が動いているのが分かる。

自分で空を飛ぶのとは少し違う感覚に私は心が躍った。そういえば私はホグワーツの周りを飛んだことがない。

ヒツポグリフは大きく禁じされた森の上を旋回し、私はしばらくその空中散歩を楽しんだ。

しばらくするともう1頭ヒツポグリフが上空目指して飛んでくるのが見える。

よく見ると背中にはハリーが必死にしがみつこうように乗っていた。

ハリーはヒツポグリフの背中の上で大声を上げる。

いや、大声を上げないと聞こえないのだ。

「咲夜！ しばらくしたら帰ってこいつてさ。ハグリッド、呆れてたけど怒ってはないみたいだった」

「ハグリッドとしては生徒が魔法の生物に興味を持つてくれていることがうれしいんでしょうね」

「ちがいない！」

ハリーは少し乗りにくそうにもぞもぞとしている。

やはり箒で飛び慣れているハリーからしたら少々ヒツポグリフは乗りにくいのだろうか。

私たちを乗せたヒツポグリフたちは放牧場付近をぐるりと1周すると、地上を目指し

て一気に降下した。

着陸時に物凄い衝撃がくると身構えていたが、思ったよりも軽やかにヒツポグリフは着陸する。

私が乗っているヒツポグリフの横にハリーを乗せたヒツポグリフも着陸した。

「よくできた、ハリー。咲夜、おまえさんもな」

ハグリッドは大声を出し、全員が歓声を上げた。

「よしと。ほかにやってみたいモンはおるか？」

私たちの成功に励まされたのか他の生徒も恐る恐るヒツポグリフに近づいていく。

本来だと、お辞儀をし、お辞儀を返されたら触っていいという合図らしい。

私の強引なやり方は間違っていたようだ。

私はヒツポグリフとの格闘で少し疲れたので木陰で休むことにする。

他の生徒がおずおずとヒツポグリフに頭を下げているのを見ながら、私はリドルの日記を取り出し開いた。

『貴方が退学にしたハグリッドが今教鞭をとっているわよ。時代の流れって怖いわね』

『あの偏屈な爺さんがやりそうなことだ。ハグリッドだと魔法生物飼育学ってところかい？』

『ええ、今ヒツポグリフの扱いについて生徒に実習させているわ』

『ああ、ヒツポグリフか。あれはいい』

『どうして?』

『敬意をもってお辞儀を返すからさ』

『どういう理由よ。それ』

ドラコがハリリーの乗っていたヒツポグリフに近づいていくのが見える。

名前はバックビークというらしい。

お辞儀をし、お辞儀を返され。

ああ、リドルの言うことも分からなくはない。

『だが誇り高すぎるのが玉に瑕だ。少しでも機嫌を損ねるような態度を取るとすぐに襲い掛かってくる』

ドラコがバックビークに襲われているのが見えた。

『なるほど、ああなるのね。今スリザリン生が1人襲われたわ』

『助けに行かなくていいのかい?』

『大した怪我じゃないわ。でも、そろそろ授業に戻らなくちゃ』

私はリドルの日記を閉じるとドラコに近づく。

腕には大きな傷があり、そこからどんとどんと血が溢れ出てきていた。

「死んじゃう! 僕、死んじゃうよ! 見てよ! あいつが僕を殺した!」

「死なないわ」

「死にやせんー！」

私とハグリッドが同時に言った。

ハグリッドは軽々とドラコを抱きかかえると一直線に城の方へと走っていく。

他の生徒たちもショックを受けたような表情でその後を追っていった。

私は1人放牧場に取り残される。

先ほど乗ったヒツポグリフが心配そうに頭を擦り付けてきた。

「大丈夫よ。貴方たちの大好きなハグリッドはクビになつてもいなくはならないわ。森番ができるのなんてハグリッドのほかにはいないもの」

私は1頭ずつに首輪をつけ直し鎖で柵に固定する。

ハグリッドはこれをせずに城の方へ走っていったが、ヒツポグリフが逃げて生徒を襲つたらどうする気だったのだろうか。

私は最後にバックブリークに首輪をつけて柵に鎖で固定すると、そのまま生徒たちの後を追って城の方へと歩いていった。

木曜の昼近く、魔法薬学の授業でようやくドラコは医務室から帰ってきた。

その様子はいつかの抗争の時に負傷して帰ってきた美鈴さんとよく似ていた。もつとも、怪我の程度は全然違うが。

ドラコは包帯を巻いた右手を吊り、ふんぞり返って地下牢教室に入ってくる。

「ドラコ、腕はどんな感じ？」

横に座ったドラコに私は聞いた。

「大丈夫だ。……とは、言えないかな」

ドラコは酷く顔をしかめて言ったが、様子を見る限りでは殆ど塞がっているのだから。

私は授業のほうに意識を向ける。

今日調合するのは縮み薬だ。

この薬の調合はそれほど難しいものではない。

でもドラコの腕では少しやりにくそうだ。

「先生」

ドラコが唐突に口を開いた。

「先生、僕、雛菊の根を刻むのを手伝ってもらわないと、こんな腕なので……」

「十六夜、マルフォイの根を切ってやりたまえ」

スネイプ先生はこつちを見ずにそういった。

私はドラコから根を受け取ると机の上でダダダダと切っていく。

その様子を見てロンがニヤリと笑った。

大方私がドラコの態度にイラついて根をメッタ切りにしたと思っただろう。

だが私はそこまで器の小さな人間ではない。

ドラコの根は寸分違わぬ大きさに切られ机の上に並んでいた。

「お見事」

ドラコが勝ち誇ったような顔でロンのほうを見る。

ロンは私をひと睨みすると自分の鍋に視線を戻した。

ドラコは気を良くしたかのようにもう一度スナイプ先生に言う。

「先生、それから僕、この萎び無花果の皮を剥いてもらわないと」

「十六夜、マルフォイの無花果を剥いてあげたまえ」

「既に」

ドラコの前には既に私が剥いた無花果が置いてあった。

ドラコは一層気を良くしたようにニンマリした。

私はその後も右手が動かない設定のドラコを手伝っていく。

私の手伝いもあつてかドラコの縮み薬は完璧に出来上がった。

だが問題は数個先の鍋で起こっていた。

ネビルの縮み葉が本来の色からかけ離れたものになっているのだ。縮み葉は本来明るい黄緑色の水薬だ。

だがネビルのそれは蛍光オレンジになっていた。

「オレンジ色か、ロングボトム」

スネイプ先生が柄杓で大鍋からネビルの薬を掬い上げる。

「オレンジ色。オレンジ……ふむ。私は言ったはずだぞロングボトム。ネズミの脾臓は1つでいいとな。聞こえてなかったのか？ ヒルの汁はほんの少しでいいと、明確に申し上げたつもりだが？ 君のほんの少しは茶さじ1杯分もあるのか？ ロングボトム。いったい私はどうすれば君に理解していただけるのかな？」

ネビルは今にも泣き出しそうに震えている。

魔法薬学の授業では、ネビルはいつもの数倍はドジだった。

「先生、お願いです。先生、私に手伝わせてください。ネビルにちゃんと直させます」
「君にでしゃばるよう頼んだ覚えはないがね、ミス・グレンジャー」

スネイプ先生は冷たくハーマイオニーに告げると言葉が続ける。

「ロングボトム、このクラスの最後にこの薬を君のヒキガエルに数滴飲ませて、どうなるか見てみることにする。そうすれば、君ももう少しまともなやろうという気になるだろう」

そう告げるとスネイプ先生はネビルの所から去っていった。

「助けてよ……」

ネビルがハーマイオニーに呻くように頼む。

ハーマイオニーはその様子に困惑しているようだった。

「助けては駄目よ、ハーマイオニー」

私はハーマイオニーに静かに言う。

「でも……」

ハーマイオニーはネビルの必死そうな顔をみていた。

「スネイプ先生は貴方にでしゃばるなど言つたわ。それに、ここで手を貸してしまったら本当にネビルは甘えん坊になってしまうわよ」

私はネビルのほうを向く。

「ネビル、一人で頑張ってみなさい。教科書を見て、先ほど先生が言っていた間違いを正すにはどうすればいいか考えなさい。じゃないと貴方の為にならないわ」

「でも、トレバーが……」

「そうね、そのカエルの為に頑張るのよ」

私のその言葉を聞いてネビルは慌てたように教科書を捲り始めた。

私の横ではドラコがナイスといった表情で左手の親指を突き上げている。

私も一応同じポーズで返した。

そして、授業も終わりの時間がやってきた。

「諸君、ここに集まりたまえ」

スネイプ先生が暗い目をぎらつかせる。

「ロングボトムスのヒキガエルがどうなるか、よく見たまえ。なんとか縮み薬が出来上がってれば、カエルはおたまじやくしになる。もし作り方を間違えてれば……ヒキガエルは毒にやられるはずだ」

私はスネイプ先生に見えるように手を挙げた。

「先生。いいでしょうか？」

スネイプ先生は鋭くこちらを見る。

「何がいいのかねミス・十六夜。カエルが可哀想とでも言うのか？」

「いえ」

私はそこで一度言葉を切った。

「その薬、私が飲んででもいいでしょうか？」

その言葉にクラス的全員が目を見開いた。

さきほどまで私の横でニヤニヤしていたドラコでさえ、私の顔を見上げて口を開けている。

スネイプ先生は一度考えるようにネビルの鍋をかき回すと、いやにあっさりと了承をくれた。

私はネビルの作った縮み薬の色を見る。

今は何故か紫色をしている。

「死んじやうよ！ 咲夜！」

ネビルが悲惨な声を上げる。

「そう、じゃあ私が死んだらお葬式には出てね」

私はそう軽口を言い、スネイプ先生から小さじを受け取ると慎重に掬って口の中に入れた。

次の瞬間、ポンという軽い音と煙と共に私の視線が20cmほど低くなる。

グリフィンドール生から喝采が沸き起こった。

ネビルは安心したかのように床にペタンと尻もちをついてしまった。

スネイプはやはり何かがおかしいといった表情でネビルの鍋をかき回している。

それはそのはずだ。

ネビルが作った縮み薬は劇毒なのだから。

私はネビルの薬を口の中に入れた瞬間時間を止め、スプーンを口から取り出すと、自らが調べた縮み薬を飲んだのだ。

スネイプからしたら私が劇毒を飲んだのに何故か縮んだように見えただろう。

スネイプ先生は黙って私に解毒薬だと思われる小瓶を渡してくる。

私がそれを飲むと身長が元通りに戻った。

何故か落胆するような声の一部から上がる。

スネイプ先生の苦しげな「授業終了」という声によつて魔法薬学の授業は終わった。

「ネビルの縮み薬が上手くできてたからよかつたものの、下手したら死んでたのよ？

分かつてる？」 咲夜

廊下を歩きながらハーマイオニーが怒るように私に言った。

「あら、もし死ぬような劇薬だったらスネイプ先生も私に飲ませたりはしないわよ。授

業中に死傷者がでたらハグリッドの二の舞じゃない」

その言葉を聞いてハリーとロンがこちらをギロリと睨んだ。

どうやら相当ドラコやその他スリザリン生からそのことについて言われたようだ。

私はハーマイオニーのほうを振り返るが既にそこにはいなかった。

トイレだろうか？

「どこ行っちゃったんだ？」

ロンがすつとんきよな声を上げる。

するとハーマイオニーは今上つていた階段の下から顔を出した。

息を切らせて、片手には大きな鞆を持っている。

「どうやったんだい？」

ロンがハーマイオニーに聞いた。

「何を？」

「君、ついさっきは僕らと一緒にいたのに、つぎの瞬間階段の一番下に戻ってた」

「え？」

ロンの問いにハーマイオニーは混乱するように声を上げた。

「ああ、私、忘れ物を取りに戻ったの。あ、あーあ……」

次の瞬間ハーマイオニーが持っていた鞆の縫い目が破れた。

それは当然だ。

ハーマイオニーの鞆には10冊以上の本が押し込まれている。

私はハーマイオニーが何をしているかおおよそだが察しがついた。

逆転時計だ。

この世界の時間操作系の魔法を調べていた時に見つけた貴重な魔法具の一種で、確か魔法省が厳重に管理しているものだ。

ひっくり返すことによってひっくり返した分だけ過去に戻る。

過去に戻る。

簡単に説明したが物凄いことなのだ。

私の能力では逆転時計ほどの過去への干渉は出来ない。

せいぜい動いたものを元あつた場所に戻すことが精一杯だ。

だが、逆転時計にも弱点がある。

未来が改変されない程度にしか過去に干渉出来ないのだ。

言ってしまうえばそれは自分の行動が縛られるということである。

考え方としては、ノヴィコフの首尾一貫の原則に似ているが、本には過去の自分を殺してしまった魔法使いもいると書かれていた。

つまり決定論とは異なる仕組みのものなのだろう。

ハーマイオニーはマクゴナガル先生と話し合つて決めたと言つていた。

マクゴナガル先生が一生徒の為に逆転時計の使用の許可を魔法省に取り付けたということだろうか。

「ハーマイオニー。あなた本当に過労死するかもね」

私が占い学の授業の事を思い出すかのように言う。

ハーマイオニーはそれに憤慨するように反論したが、鞆の裂け目から落ちた本が彼女の苦勞を雄弁に語っていた。

「レパロ、直れ。ハーマイオニー、貴方は授業を詰め込む前に空間魔法を覚えるべきね」

「そうよ！　咲夜つてなんでもその鞆から取り出すけど、どうなってるの？」

ハーマイオニーが羨ましそうに私の鞆を見ていた。

まあ確かにパツと見非常に軽そうに見えるからだろう。

だが軽いのは私がつっている場合だけだ。

「調べてみる？」

私は自分の鞆をハーマイオニーに手渡した。

次の瞬間ハーマイオニーの頭の高さがガクンと落ちた。

鞆の重さを支えきれずに鞆と共に地面に落ちたのだ。

「なにこれ……、滅茶苦茶重い」

それはそうだろう。

いくら空間を広げても重量までもが何処かへ行くわけではない。

かといって別に私が滅茶苦茶力持ちというわけでもないのだ。

私が触ることによって鞆の重量は一時的に消える。

これは無意識下で使っている術なので、私にもいまち原理が分かっていない。

予想を立てた中では、重力子の伝達を一時的にやめている為、重さが消えるのではない

いかというのが有力だ。

もつとも、科学の分野で重力子は予想はされているが発見はされていない素粒子であ

る。

私としても仮説を立てるしかない。

私の鞆をハーマイオニーは持ち上げようとするが、私の鞆は釘で打ち込まれたようにその場から動かなかった。

私は鞆を握るとヒョイと持ち上げ指一本で支えて見せる。

私が触ると鞆は羽のように軽くなるのだ。

「咲夜って実は滅茶苦茶力持ち？」

ハーマイオニーが私の二の腕を見ながら言う。

「そんなわけないでしょう？　ハーマイオニーもお腹空いてるみたいだし大広間に行きましよう」

私は勝手にハーマイオニーのお腹の状態を決めつけると昼食を取るために3人を連れて大広間へと向かった。

まね妖怪とか、ホッグズ・ヘッドとか、犬とか

今日の午後は闇の魔術に対する防衛術の授業がある。

今年新しくこの教科の担当になったルーピン先生は、一体どのような先生なのだろうか。

コンパートメントで感じた印象は、眠れる獅子といったところだ。

私が教室に入るとルーピン先生はまだ教室内には来ていなかった。

生徒たちは適当に席につき、教科書と羽ペン、羊皮紙を取り出している。

私もハリーたちの近くの席に腰かけた。

しばらくすると相変わらずみすばらしい服装のルーピン先生が教室内に入ってくる。

コンパートメント内で見た時よりかは幾分と顔色は良くなっていた。

「やあ、みんな。教科書は鞆にしまつてくれるかな？ 今日はいきなりだが実習をすることにしよう。杖だけあればいいよ」

その言葉を聞いて教科書や羊皮紙を広げていた生徒たちはそれらを鞆に戻し始める。

そういうえば、闇の魔術に対する防衛術では殆ど実習を受けたことがなかった。

もつとも一度だけあったロックハート先生のピクシー妖精の実習は、私が全て片付け

てしまったが。

「よし、それじゃ私についてきなさい」

生徒たちは戸惑いながらも面白そうだといった表情でルーピン先生のあとに続いて教室を出ていく。

途中でピーブズに遭遇してしまったが、ルーピン先生はそれを軽く対処した。

その様子を見て生徒たちから感心の声上がる。

今回はまともな先生なのだろうといった安堵と期待に満ちた表情を浮かべている生徒が殆どだ。

ルーピン先生は職員室の前で足を止める。

そして扉を開け生徒の中に入れた。

中には古い椅子が雑然と置いてあり、その一つにスネイプ先生が座っている。

スネイプ先生はルーピン先生と一言二言言葉を交わすと、職員室を出ていく。

「ヤッ」

スネイプ先生がいなくなったところでルーピン先生が皆に呼び掛けた。

先生はみんなに部屋の奥のほうへと来るよう合図を出す。

そこには先生方が着替え用のローブを入れる古いタンスが置かれていた。

先生がタンスの横に立つと途端にタンスがガタガタと揺れ始める。

何人かが驚いたように飛びのいたが、ルーピン先生は落ち着いた声で言った。

「心配しなくていい。中にまね妖怪のボガートが入っているんだ」

殆どの生徒がそれは心配すべきことじゃないのか？ といった顔でダンスを見ている。

「ボガートは暗くて狭いところを好む。ダンスやベッドの隙間、さらには食器棚とかだ。ここに居るのは昨日の昼過ぎに入り込んだやつで、実習に使いたかったからそのままにしておいて欲しいと校長先生にお願いしたんですよ」

ルーピン先生は揺れるダンスに手をつき楽な体勢を取った。

「それでは、最初の問題ですが、ボガートとは何でしょう？」

その言葉にハーマイオニーが電光石火の早業で手を挙げる。

「形態模写妖怪です。私たちが一番怖いと思うものに姿を変えることが出来ます」

「その通り。私でもそんなうまくは説明できなかっただろう」

ルーピン先生の言葉にハーマイオニーは少し恥ずかしそうに頬を染めた。

「だから暗闇の中にいるボガートはまだなんの姿にもなっていない。ボガートが独りぼっちの時にどんな姿をしているのか誰も知らないわけです。しかし、私が外に出してやると、たちまち目の前にいる人が一番怖いと思っっているものに姿を変えるはずですよ」

ルーピン先生は説明を続けていく。

「ボガートを退治するときは、誰かと一緒にいるのが一番だ。何に姿を変えればいいのか分からなくなるからね。私は一度ボガートが一度に2人の人間を驚かせようとしたのを見たことがある。それはとても滑稽な姿で、恐ろしいとは思えなかった」

その様子を思い出したのか、ルーピン先生が少し笑う。

「ボガートを退散させる呪文は簡単だ。しかし、精神力が必要になってくる。こいつを本当に退治するのは笑いなんだ。君たちはボガートに君たちが滑稽だと思ふ姿をとらせる必要がある。私に続いて言ってみよう……リディークラス、ばかばかしい！」

生徒たちはルーピン先生の言った呪文を繰り返す。

笑いがボガートを退治するのだとしたら、ドラコとスリザリン生を連れてくるのが一番早いのではないだろうか。

「そう、とつても上手だ。ここまでは簡単なんだけどね。呪文だけでは十分じゃない。ネビル、ちよつとおいで」

指名されたネビルはダンスと同じぐらいガタガタと震えていた。

それでも何とかダンスの前までたどり着く。

「よし、ネビル。君が一番怖いものはなんだい？」

先生のその言葉にネビルはぼそぼそと何かを呟くが、とても小さな声なので聞こえない。

「ん？ ごめんネビル。聞こえなかった。」

ネビルは助けを求めるようにきよろきよろとあたりを見回していたが、やがて耳をそばだててやつと聞こえるほど小さな声で呟いた。

「スネイプ先生」

その答えにクラスにいる全員が笑った。

ネビル自身もみんなのその反応に申し訳なさそうにニヤつと微笑む。

だがルーピン先生はいたって真面目な顔をしていた。

「スネイプ先生か……よし。ネビル、君はおばあさんと一緒に暮らしていたね」

「え、はい。でもおばあちゃんに変身されるのも嫌です」

「いやいや、そういう意味じゃないよ、ネビル」

先生も今度は微笑んで言った。

「ネビル、おばあさんはいつも、どんな服を着ているか思い出せるかい？」

ネビルはルーピン先生のその問いに、目を瞑って服装の特徴を挙げていった。

「たかくてハゲタカの剥製がついている帽子に緑色のドレス……時々狐の毛皮の襟巻してる」

「ハンドバッグは？」

「おつきな赤いやつ」

「よし、それじゃあその服装をはつきりと思い浮かべて。目を瞑ったら心の中にはつきり映し出されるように」

ネビルはいつものおばあさんの恰好を思い出すようにブツブツと特徴を呟く。

「ネビル、ボガートが出てきたら君は杖を上げてこう叫ぶんだ。「リディクラス、ばかばかしい」。そして君のおばあさんの服装に精神を集中させる。全て上手く行けばボガート・スネイプ先生はハゲタカのついた帽子をかぶって緑色のドレスを着て、赤いハンドバッグを持った姿になるだろう」

流石にみんな大爆笑だった。

それが気に入らないのかダンスはいっそう激しく揺れる。

「ネビルが首尾よくやつついたら、ボガートは君たちに向かってくるだろう。今のうちに考えておきなさい。自分が何が怖いのか。そしてどうやったたらそれをおかしな姿に変えられるか……」

怖いもの、難しい問いだ。

私にとって怖いものとはなんだろうか。

妹様の笑い声？ いやそれは昔怖かったものだ。

お嬢様の死？ 殺しても死にそうにないお方だ。

ヴォルデモート卿？ それこそ論外だ。

今現在リドルと友達なのだから。

「みんないいかい?」

私はまだ考えがまとまっていないが、授業は先へと進んでいく。

最悪対峙した時に時間を止め、ゆっくり考えればいだろう。

先生の指示でネビルが1人タンスの前に取り残される。

ボガートをネビル1人に集中させるためだ。

「ネビル、3つ数えてからだ」

ルーピン先生はタンスに向かって杖を構えた。

「いち、にーの、さん、それ!」

ルーピン先生の魔法でタンスの扉が勢いよく開く。

中からはスネイプ先生が恐ろしげな表情を浮かべて出てきた。

その様子にネビルは口をパクパクさせながら後ずさる。

だが覚悟を決めたように杖をスネイプ先生に向けた。

「り、りり、リディクラス!」

次の瞬間バチンという音が聞こえてスネイプ先生が躓いた。

緑色のドレスにハゲタカのついた帽子、手には大きな赤いハンドバッグを持っている。

どつと笑いが沸き起こった。

その様子にボガート・スネイプ先生は途方にくれたように立ち止まる。

「パーバティ、前へ！」

ルーピン先生の大声にパチルが引き締まった顔で前が出る。

バチンという音がしてボガートが血まみれのミイラの姿に変わった。

「リデイクラス！」

パチルが魔法を掛けると包帯が一本ほどけ、ミイラはそれを踏みつけ転んでしまう。

その後もルーピン先生が次々と生徒を指名し、ボガートに当たらせた。

ボガートは次々と姿を変えるが、ことごとく間抜けな姿に変えられてしまう。

「咲夜、次だ！」

私は一歩前に出てボガートと向き合った。

大蜘蛛の形をしていたボガートはバチンという音と共に姿を変える。

生徒の全員が私が怖がるものは何か興味津々といった顔でこちらを見ている。

ボガートはぐねぐねと迷うように形を変え、そして一人の少女の姿になった。

金色の髪に赤い瞳、枯れ枝のような羽には宝石のようなものが沢山ついている。

それはいつも肖像画で見る妹様そのものだった。

途端に職員室中にいつも妹様が出している狂気と同じような物が広がる。

妹様の狂気とは、吸魂鬼の幸せを吸い取るような生易しいものではない。

というか、普通の生徒が耐えられるものではないのだ。

一瞬にして職員室が地獄へと変わった。

「きやは、アハハハハハハハハハ!!」

生徒の殆どがしやがみ込み、自らを抱くように身を引き締め震え出す。

ネビルなど完全に気絶していた。

やはり今でも私の一番怖いものは妹様なのか。

私の背中に冷や汗が流れる。

小さい頃に経験した恐怖を思い出すかのように体が震え出す。

ボガートの変身した妹様はまっすぐ手をこちらに向けた。

「リディークラスー」

果たしてお嬢様のご姉妹である妹様にマヌケな恰好など取らせていいのだろうか。

私はそう考えていたので、妹様自体を変えることにする。

ボガートはバチンと音を立てると、妹様の服装をしたダンブルドア先生に姿を変えた。

スカートの長さが足りず縦縞のトランクスがはみ出ている。

私は息を漏らすように小さく笑ったが、クラスで笑う余裕を持っている生徒は一人も

いなかった。

ほぼ全員が立ち上がることにすらままならず、床に転がっている。

気絶している生徒も少なくないようだ。

「あー……、そうだね。ボガートには一旦ダンスに戻ってもらおうことにしよう」

ルーピン先生が教室を見回してそう言う。

そして杖を一振りすると、ボガートが押し込まれるようにダンスの中に入っていた。

「え？ この惨状もしかして私のせいですか？」

「いや、咲夜はよくやった。ボガートの対処も完璧だったと私が保証するよ。ただ咲夜が怖いと思うものの刺激が少々強すぎたようだ」

ルーピン先生が気絶している生徒に蘇生魔法を掛けながら私に言う。

不可抗力ということだろうか。

ルーピン先生は全員の意識が戻ったことを確認すると、コンパートメントで見た大きな板チョコを割り、生徒に配っていく。

妹様の狂気にチョコが効果があるのかは分からなかったが、顔色が少し良くなる生徒が多かった。

「今日はここで終わりにしよう。みんなこの後はゆっくり休み、しっかりと夕食を取る

ように。気分が悪い生徒は医務室に行つて安らぎの水薬を貰いなさい」
ルーピン先生はちらりとこちらを見た。

「昨夜は少し話したいことがあるから残りなさい。大丈夫。時間はそう取らないよ」
全員が死屍累々といった表情で職員室を出ていく。

そして全員がいなくなると私はルーピン先生に続いて外に出た。

招待された部屋はルーピン先生の私室のようだ。

中は少し物が多いが、汚いというわけではない。

置いてあるもののどれもこれもが年季の入ったものだった。

「紅茶はどうか？　生憎ティーバッグしかないが……」

「いただきますわ」

私はルーピン先生が紅茶を淹れている間、椅子に座つて静かに待つ。

ルーピン先生が淹れてくれた紅茶はティーバッグで淹れたものにしては美味しかった。
た。

「すまないね。早速だが本題に入らせて貰うよ」

ルーピン先生が紅茶の入ったマグカップを持ちながら言う。

「先ほどののは一体なんだい？　私は何度かボガートと対峙してきたが、ボガートがあそこまで影響力を持つのを見たのは初めてだ。もし仮にボガートが吸魂鬼に姿を変えた

としても、あそこまでの影響力は持てないだろう」
「やっぱりその話か。」

私は少し考える。

果たして妹様のことは話してもいいのだろうか。

私は少し考えたが、拙い気がするので適当な答えでお茶を濁すことにした。

「私が知っている中で一番恐ろしい吸血鬼です。知り合いからは破壊の象徴だと話を聞きました」

私はそこで一度言葉を切る。

「色々と見てきました、私が生きてきた中で彼女がダントツで一番怖いと思いますわ」
「確か君は吸血鬼に仕えているんだね。他の先生方から話を聞いたよ。彼女がそんなのかい？」

「いえ、私がお仕えしているお嬢様は占いの講演会が開けるほどには普通のお方です」
私がそういうとルーピン先生は安堵するように胸を撫で下ろした。

「そうかい。いや付き合ってもらって悪かったね。君も疲れているだろう、談話室に戻りなさい」

「紅茶、美味しかったです」

私がそういうとルーピン先生はいやいやと手を振った。

「本職には敵わないよ。今度は是非君の淹れた紅茶が飲みたいね」

私は一礼するとルーピン先生の部屋を後にした。

そしてその足でグリフィンドールの談話室に戻る。

太った婦人の肖像画を抜け中に入るとフィネガンが私に詰め寄ってくる。

いや、フィネガンだけではない。

先ほどの授業でのダメージが少なかつた生徒の多くが私に詰め寄ってきた。

「咲夜！ あのおつそろしいのはなんだ!? 君の『一番怖い』はあんなに怖いのか!？」

「次ボガートと遭遇したらどうしよう！ 絶対アレが出てくるよ……」

「私今日一人でトイレに行けないかも」

「うー、今だけは忘れ薬を飲みたい」

他の生徒は生気を吸い取られたようにソファアの上でぐったりとしている。

「あれはボガートよ。私も直接はお会いしたことないけど、あんなものじゃないでしょうね」

その言葉に大声で喋っていたグリフィンドール生の表情が固まった。

ぐったりとしている生徒が唸る。

妹様のお姿は多くのグリフィンドール生の『一番怖いモノ』を上書きしたようだった。

1回目の授業は私のせいで少しこけたが、闇の魔術に対する防衛術はたちまち人気の授業の1つになった。

ルーピン先生の教えることはとても分かりやすく、そして面白い。

何より実習が多いのが人気の理由だろう。

それに比べると魔法生物飼育学は初回と比べつまらない授業になってしまった。

一番初めに怪我人を出してしまった為か、授業の殆どがレタス食い虫の世話を学ぶものになった。

レタス食い虫の口の中にレタスを押し込んでいくのは少し面白いが、変化に欠ける。

個人的には多少危なくてもいいので危険な魔法生物の世話をしたいと思った。

そして、やはりといったところだが、ハーマイオニーと占い学の相性は悪いようだ。

私はどちらかという占いや学は好きだ。

理屈や理論では到底分らない世界の神秘を教えてくださいそうな気がする。

少しでもお嬢様に近づけるような気がするのだ。

私以外にも占いや学に嵌った生徒はいるようで、パチルやブラウンなんかは毎日のように昼食時、北塔のトレローニー先生の部屋に入り浸るようになり、みんなが知らないことを知っているといったような得意顔で帰ってくる。

あの2人は古い学に嵌ったというよりはトレローニー先生の予言に嵌ったといったほうがいいだろう。

先生のフアンのようなものだ。

ハリーはその2人を少々疎ましく思っていたようだったが、10月に入るとクイディッチの練習でそれどころではなくなつたようだ。

今年こそ優勝！ という大声がグリフィンドールのテーブルの何処かで上がるのを聞いたのを思い出す。

そんなこんなで比較的平和に今年もハロウィーンを迎えた。

ハロウィーンの朝、私は大広間でトーストにかじりついていた。

みんな興奮したように何かを話している。

どうやら今日のホッグズミード村行きが楽しみで仕方がないようだ。

私はつい昨日マクゴナガル先生に許可証を提出している。

マクゴナガル先生は2人のサインが重なるように書き殴られた私の許可証を見て少々目を細めたが、許可を出してくれた。

どうやら本当に保護者のサインなのか確認しづらかつたらしい。

私の横にはハリーが暗い顔をして座っている。

その様子を見る限り、ホグズミード村に行く許可を得ることが出来なかったのだらう。

ロンとハーマイオニーはそんなハリーを慰めるように声を掛けていた。

「ハニーデュークスからお菓子をたくさん持ってきてあげるわ」

ハーマイオニーが気の毒そうに言った。

「うん、めちゃくちゃ沢山ね」

それにつきロンも声を上げる。

最近ロンとハーマイオニーはペットのことで喧嘩ばかりしていたが、流石に今日ばかりは休戦協定を結んだらしい。

「僕のことには気にしなくていい。パーティーで会おうよ」

ハリーが出来るだけ元気を振り絞ったような顔でそう言った。

私も流石に気の毒になってきたので声を掛ける。

「一緒に連れて行ってあげることが出来るわよ」

その言葉にハリーが目を輝かせた。

「本当に!? マクゴナガル先生にバレないようにすること?」

「ええ、私の鞆に入っていくという方法があるわ。多分吸魂鬼も教師陣も気が付かない

と思う。まあ、あまりおすすめはしないけど」

私がそういうと、ハリーが不思議そうな顔をした。

「私はいつも鞆の中に怪物的な怪物の本を仕舞っているんだけど、この様子なのよ」

私が怪物的な怪物の本をテーブルの上に取り出す。

本来何かで縛っていないと途端に暴れ出す凶暴な本が、まるで死んだかのように大人しく机の上で震えていた。

「最悪発狂するかもね」

「遠慮しとくよ」

私の教科書の様子を見てハリーはこりや無理だと言わんばかりに首を振った。

命を削ってまで行くところではないと判断したのだろう。

私はトーストの最後のひとかけらを口の中に放り込むと、玄関ホールへと向かった。

今日は一人でホグズミード村を探検することに決めている。

ドラコやハーマイオニーたちと一緒に回ってもいいが、まだ先にも機会はあるだろう。

私は他の生徒に交じってホグズミード村への道を歩いた。

ホグズミード村は比較的小さな村だったが、ホグワーツが近い為か店は繁盛しているようだ。

私はエントロピー増大の法則に従うように人の少ない方へと流されていく。そして一軒のパブへとたどり着いた。

『ホッグズ・ヘッド』と看板が掛かっているそこは、他の店に比べると古臭く、なにより胡散臭い。

窓は煤けており店の中に日の光が殆ど射し込んでいなかった。

私はカウンターの方に近づき、椅子に座る。

「注文は？」

バーテンダーらしき老人が不機嫌そうにそう聞いた。

「ブランデー、きつついやつ」

私がそう注文するが、バーテンダーは難色を示した。

「学生がこんな時間から酒か？」

「あら、この店では客にお酒を出さないのかしら」

それを聞くとバーテンダーはブランデーグラスと年代物のブランデーの瓶を取り出す。

そしてそれを私の前にドカンと突き出した。

自分で好きだけけついで飲めということだろう。

私はラベルにXOと刻印してあるブランデーの瓶の栓を抜くとグラスに半分ぐらい

注ぐ。

そしてグラスを手で包み込むように持つと静かに揺らした。

「あら、古いだけかと思つたら結構上物じゃない」

私はグラスに口をつけるとぼつりと呟いた。

「随分飲み慣れてるな」

「味を知らないものを人に出すわけにはいかないしね」

私の口の中に芳醇な香りが広がる。

なるほど、こうして酒が飲めるのであれば案外ホッグズミード行きもありかもしれない。
い。

「なにかこうチョコやドライフルーツみたいなものはないかしら。一応酒場でしよう？」

「一応は余計だ。普通に酒場だよ」

バーテンダーの対応はつつけんどんだが、それでもおつまみは出てくる。

私はひとしきりブランデーを楽しむと、口止め料含めブランデーの価格より少々大目にお金を払って店を出た。

私は建物の陰に隠れると体内の時間を極限まで早くして一気に酔いを醒ます。

数秒もするとアルコールは完全に抜け素面に戻っていた。

「さて、他の店も見えて回りますか」

そのまま村の中をゆっくりと歩いていく。

しばらく歩くと人だかりが出来ている店を見つけたので覗き込んでみることにした。

店には悪戯専門店「ゾンコ」と書かれている。

いかにもロンの双子の兄たちが好みそうな店だ。

少し中に入ってみたい気もしたが、余りの人の多さに少し戸惑ってしまふ。

私はまた今度の機会にしようかと来た道を戻り始めた。

今日は他にもやりたいことがあるのだ。

私は城に戻る途中でキョロキョロと周囲を見回す。

すると人の気配が全く無い場所に一人の吸魂鬼の姿を見つけた。

私はそのまま吸魂鬼に歩み寄っていく。

やはり肌寒さや変な感覚はしない。

妹様の狂気に慣れているからと当初は予想を立てたが、それは違うようだ。

もしそうなら少しは影響を受けるはずである。

だが、その様子もない。

「はあい、元気？　では、なさそうね」

私は吸魂鬼に話しかける。

当たり前のことだが吸魂鬼からの返事はない。

「えっと、私の声は聞こえているのかしら」

私がそう聞くと吸魂鬼がふわりと近づいてきた。

ふわりふわりと次々に私の近くに吸魂鬼が近づいてくる。

私は城の影にある石段に腰かけるとゆっくりと話しかけた。

「よくわからないんだけどね、貴方たちと一緒にいると少し落ち着くのよ。蠟燭の炎を見ていると落ち着くような感じなのかしら」

既に10体以上の吸魂鬼が私の周りを取り囲むように飛んでいる。

魔法省の仕事でホグワーツに来たということは意思の疎通は出来る筈なのだが。

私は吸魂鬼の1人に触れる。

マントはボロボロの布切れのようで、その下にある肌はガサガサしていた。

確か人間が吸魂鬼に魂を吸い取られると廃人と化し時を経て吸魂鬼になるという話だったと思う。

ということとは元は人間なのだろうか。

次の瞬間、どこからともなく現れた不死鳥の守護霊が私の周りにいる吸魂鬼を追い払った。

私はゆっくりと守護霊が現れた方向を見る。

そこにはダンブルドア校長先生が立っていた。

「大丈夫かね？ 勝手に城を離れてはならんと言ったはずじゃ」

ダンブルドア先生はゆっくりとこちらに近づいてくる。

私は石段から立ち上がると先生と向かい合った。

「吸魂鬼とは意思の疎通が出来るんでしょうか。でも魔法省の仕事でここに来ていてということは何命令は聞くということですよ？」

ダンブルドアと私の目が合う。

私は咄嗟に視線をずらした。

「そうじゃな、じゃがそれは犬が飼い主の命令を聞いておるようなものじゃ。自由に会話が出来るわけではない。それよりもこれをお食べなさい」

ダンブルドア先生がポケットからカエルチョコを取り出す。

だが私はそれを丁寧に断った。

「いえ、大丈夫です。私はどうも吸魂鬼の影響を受けないようなので」「吸魂鬼の影響を受けないじゃと？」

私の言葉に先生は驚いたように近づいてくる。

私の顔色を確かめるように私の顔を覗き込んできたので私は目を瞑った。

「確かに影響を受けとらんようじゃ。やはり君の主人の影響かの？」

私は一歩離れてダンブルドア先生に言葉を返す。

「そうなのかもしれません。ルーピン先生から話は聞いています。ボガートの件——」

「ああ、聞いておるとも。ルーピン先生もあそこまでの大惨事になるとは思っておらなんだようじゃ」

私の言葉を遮るようにダンブルドア先生が続ける。

「君は生きている環境が特殊で、普通の子供とは全く違う経験を積んで生きてきたのじゃろう。だが、それでも13歳の少女じゃ。あまり危ないことに手を出さないぞ」
ダンブルドア先生は自分でカエルチョコの衣装を破るとチョコを食べ始めた。

私はふと思いついたことを先生に聞いてみる。

「先生、一つ知りたいことがあるのですが。不死鳥の騎士団について何か知りませんか？」

ダンブルドア先生は不死鳥の騎士団という言葉聞いて初めて私の前で隙を見せた。

だがそれも一瞬のことで、すぐに表情を取り繕うと私に向かって言う。

「そうじゃな、わしから言えることは死喰い人に対抗すべく結成された組織ということくらいじゃろうか」

「先生も団員なのですか？」

先生は黙ってこつちを見る。

私が何を考えているか探ろうとするような顔をしていた。

次の瞬間、頭の中に何かが滑り込んでくるような感覚を受ける。

私は何か拙いと思いい瞬で時間を止めた。

時間の止まった世界で先生の後ろに回り込み考える。

あれは開心術だろうか。

まさか校長先生ともあろうお方が生徒に対し開心術を使ってくるとは思わなかった。

それほど私は警戒されているのか、それともお嬢様のほうか。

なんにしても何か手を出されたのは事実だ。

セクハラオヤジは肅清せねばなるまい。

私は先生の背中に杖を突き付けると時間停止を解除する。

「乙女の心を覗こうだなんて。ダンブルドア先生はとんだ変態さんですね」

「——ッ!？」

ダンブルドア先生は突然目の前から消え、背後に現れた私に咄嗟に振り向こうとする。

私は更に杖を強く突き付けた。

「君は………やはり………」

「勘違いしないでください。先に手を出したのは貴方です。ダンブルドア校長先生。私
が人に言えない秘密を抱えているぐらいご存じでしょう？」

「ふむ、そうじゃな。君と君の主の紅い悪魔は大きな秘密を抱えておる。その能力もそ
うじゃ」

「その秘密を話すことができない事情ぐらい察して頂きたいものですわ」

「秘密にされると知りたくなるこちらの感情も察して欲しいのう」

私は杖を突き付けるのをやめる。

ダンブルドア先生はゆっくりとこちらに体を向けた。

「それは私も同じです。不死鳥の騎士団について先生はよくご存じのようですね」

「そうじゃな、良く知っておるとも。だが話してしまったら君をこちらの陣営に引き込
まないといけなくなってしまうのでな。時が来て、君がこちら側につく気であるのな
ら、わしは君に全てを話そう」

「その日まで、お嬢様に失望されないようお気を付けを」

私は時間を止めてダンブルドアの元から離れる。

はつきりいつて城に戻る気分ではなかったが、今からホッグズミード村に戻っても仕方
がないので城の方へと向かう。

そして物陰に隠れると時間停止を解除した。

「十六夜咲夜。やはり君の能力は空間移動のようじゃな」
取り残されたダブルドアはぼつりと呟く。
自身が大きな勘違いをしていることも知らずに。

私は城に戻る途中に1匹の猫を見つけた。

毛は赤みがかったオレンジで、とても大柄だ。

そして鼻が壁にぶつかったように潰れている。

ハーマイオニーの猫だ。

確か名をクルツクシャンクスといったか。

その猫は私のほうを振り向き「ニヤーン」と一鳴きすると一直線に歩いていく。

まるで私について来いと言っても言っているかのようだった。

私はクルツクシャンクスのあとに続いて城の中を歩いていく。

クルツクシャンクスは非常に賢い猫で、時折私がついてきているかを確認するようにこちらを向く。

ペットは飼い主に似るといいますが、どうやら本当らしい。

クルックシャンクスはそのまま校庭に出ると、暴れ柳の方に向かって歩いていく。暴れ柳はその枝を震わせ近づいてくるクルックシャンクスを殴り飛ばそうとしたが、クルックシャンクスが木の節の1つに足を乗せると時間を止めたように大人しくなった。

「あら、暴れ柳の泣き所つてやつかしら。……少し違うわね」

暴れ柳の根元には、人ひとりがやつと通れそうなほどの小さな穴が開いている。

「にゃーん」

どうやら入れと言っているようだった。

私はロープが汚れないように慎重に穴の中に入っていった。

「ルーモス」

私は杖に明かりを灯す。

暴れ柳の下は天井の低い横穴になっている。

クルックシャンクスが私に続いて穴に飛び降りてきて、そのまま横穴を進みだした。

「結構遠いのね。一体どこに連れていかれるのかしら」

これで行った先にネズミの死骸が1つあるだけだったらそれはそれで笑い話になる。

横穴はどこまで続いているのか分からないほど長かった。

方向的にはホグズミード村に向かっているのだろうか。

やがて横穴は上り坂になり、最終的には埃っぽい部屋に出た。

壁紙は剥がれ掛け、床は染みだらけだ。

家具はあるにはあるが、とても使えるような状態ではない。

窓は全て板が打ち付けてある。

方向的にホグズ・ヘッドだろうか。

いや、歩いてきた距離を考えるとその更に奥、直接は見えていないがここは『叫びの屋敷』だろう。

人の気配が全くないのに満月の夜に不気味な叫び声が聞こえてくるという心霊スポットだ。

魔法界で心霊スポットというのもおかしな話ではあるが。

クルックシャンクスは勝手知ったる様子でホールに出て階段を上っていく。

私もその後引き続き屋敷の中を進んでいった。

クルックシャンクスはそのまま1つの部屋に入っていく。

私もそれに続いて中に入ると、中には大きな黒い犬がいた。

「グリム……じゃないわね。普通の黒い犬かしら」

私とその犬に近づくと、犬は逃げる様子もない。

だがりラックスしているわけでもないようだった。
警戒するように私の顔をじっと見つめ動かない。

「クルックシャンクスはこの犬を私に見せたかったということかしらね」

犬は私に近づきクンクンと匂いを嗅ぐ。

そして何故か私の手を見つめていた。

どこか見覚えがあるかのように。

「君はあの時の……」

次の瞬間犬がいきなり死人のような姿に変わった。

いや、違う。

死人のように見えるだけだ。

汚れきった髪は肘まで垂れており、暗く窪んだ目をギラギラとさせている。

犬はシリウス・ブラックに姿を変えたのだ。

「あ、ああ……。え？」

あまりのことに変な声が出てしまう。

何故ブラックがここにいるかはこの際置いておこう。

問題なのは、ブラックに素顔を見られたということと、ブラックが私の正体に気が付いたということだろう。

「はあい、お元気？」

私は苦し紛れにそう挨拶をする。

「君はあの時私を外に出してくれた者だな。ホグワーツの学生だったとは」

やはり完全にバレている。

私は自身が出せる最高速度で右手で杖を振り抜き左手で懐中時計を握りしめた。

「ハリーを狙っているという話は本当だったのかしら。こんなに近くに潜伏しているだなんて」

「待ってくれ。話を聞いてくれないか。君は何故あの時私を助けた？ この際どうやってとは聞かないことにするよ」

ブラックはベッドに腰かけながらそういった。

「その前にその髪と服と体臭をなんとかしたらどうなの？ 酷い格好よ。顔も今にも餓死寸前って感じだし」

私は鞆を取り出すとクッキーと紅茶を取り出す。

そしてブラックにはパンと水を手渡した。

「スコージファイ、清めよ」

私はブラックに魔法を掛ける。

完全には綺麗にならないが、少し見てくれはよくなった。

「ありがとう。まったく君には感謝してもしきれないな」

ブラックがパンをもしやもしやしながら私に礼を言う。

私はクッキーをつまみつつリドルの日記帳を取り出した。

『お嬢様に緊急連絡。ブラックを発見したわ。どうすればいいかしら』

『ちよつと待つてね』

「何故助けた……ね。私はまずどうして貴方がここにいるかを聞きたいのだけど」

「裏切者を殺すためだ。ハリーの近くにあの子の両親を闇の帝王に差し出した奴がいる。ロンドンの漏れ鍋で新聞を見た時に愕然としたよ。何故あいつがそこにいるのかとね」

「話が見えないわ」

私は日記帳に視線を戻す。

そこには既に文字が浮かび上がっていた。

『まずは話を聞きなさい。ブラックがどちら側か確かめるのよ』

『わかりました』

「ハリーを殺そうとしているのは貴方だつて話を聞いたわよ？」

「それは違う。私は殺人など犯していないし、ハリーの両親を裏切ってもいない。アズカバンには無実の罪で投獄されただけに過ぎない」

「その話を信じる根拠が無いわね」

「ロン・ウィーズリーが持っているネズミだ。奴は私と同じ動物もどきで、名をピーター・ペティグリューという」

「スキヤバーズが動物もどき？　じゃあクルックシャンクスがよくスキヤバーズを襲っているのは」

私はクルックシャンクスのほうを見た。

クルックシャンクスはブラックの横で丸くなり、喉をゴロゴロ言わせている。

「ああ、本当に賢い猫だよ。私を見た途端に動物もどきだと見抜き警戒を解くのに時間がかかった。今では私に協力してくれている」

ピーター・ペティグリューとはブラックが殺したとされる人物の1人だ。

ブラックを助けに行く段階でブラックの事に関しては一通り調べたが、殺された後には小指しか残らなかったという。

もしその話が本当ならばスキヤバーズの小指が欠けているはずだ。

あとで確かめなければ。

私はブラックに見えないように日記帳に書き込んでいく。

『ブラックは自分は無実だと言っています。現在ホグワーツ近くに潜伏していますが、ハリーを殺す為ではなく救う為にここまで来たのだと』

『白で白。真っ白ということかしらね。つまらないわ』

『まだ完全に白だと決まったわけではないかと……』

「私は話した。今度は君が私の問いに答えてくれ」

ブラックがパンをもしゃもしゃしながら言う。

まともな物を食べるのは久しぶりだといった表情だ。

『申し訳ございません。実は今、ホグワーツの制服を着て素顔でブラックの前にいるのです。ブラックから「何故私を助けた」かと聞かれていますのですがどう答えればよいでしょうか』

『その様子だともしかして助けた時は変装していったの？ 別にそこまで気を張らなくていいわよ。言ってみなさい！ 我が偉大なる主人、レミア・スカーレットがそう望んだからよ！ って!! ……君のお嬢様本当に元気があるね。寝起きなのに』

最後の一文はリドル本人の言葉だろう。

「さつきから何を書いているんだ？」

ブラックがそう聞いてきたので私は適当に誤魔化して日記帳を閉じた。

「貴方を助けた理由だったわね。私の仕えているレミア・スカーレットお嬢様が望んだからよ。あ、パンもう一ついかが？」

「頂こう。レミア・スカーレット？ 聞いたことのない名前だが……」

「あまり表に出る方じゃないから。そういえば貴方はあの時死喰い人なんかの助けは借りないのどうのこうのと言っていたわね。貴方は不死鳥の騎士団の団員なのかしら」

「元、だけどね。私が無実だと知っている者は私以外にはいない。いや、今日の前にいる君と、その猫を除いてだが。とつくの昔に団員からは外されているだろう」

ブラックは2つ目のパンを食べ終わると水を一口飲んだ。

「そう。まあ貴方が無実であつてもなくても私にはあまり関係はないわね。ハリーが死のうが生きようが私には関係ないもの」

私は鞆の中から生活用品と予備の杖を取り出すとブラックに手渡す。

「貴方が身だしなみと生活習慣を改めるつてなら食料に関しての面倒ぐらいは見てあげるわ」

「君は何故私にそこまでしてくれる?」

ブラックは不思議そうに聞いた。

そんなの答えは決まっている。

「恩を売っておきたいだけよ。じゃあまた明日」

私はブラックの目の前で時間を止めるとクルックシャンクスを抱えて叫びの屋敷を後にした。

私がホグワーツに戻ると既にハロウィーンのパーティーは始まっていた。

私はクルックシャンクスを抱えたままグリフィンドールの席へと急ぎハーマイオニーの隣へと座る。

「あら、咲夜遅かったじゃない。それにクルックシャンクスも一緒だなんて。貴方猫好きなの？」

「それはハーマイオニーのほうでしょう？ まあ嫌いではないわね」

私はハロウィーンのご馳走を自分の皿に取り食べ始める。

やはりというか、ご馳走は非常に美味しかった。

ハーマイオニーとロンは夢中になってご馳走を食べているが、ハリーは何かを気にするようには教職員テーブルにいるルーピン先生の顔色を窺っていた。

「どうしたのよハリー。ルーピン先生がどうかしたのかしら」

「いや、何でもないよ」

私も気になってルーピン先生のほうを見るが、特別変わった様子もない。

呪文学のフリットウィック先生と楽しそうに談笑しているのが見えた。

少し視線を横に向けるとダンブルドア先生が陽気な顔をしてお酒を飲んでいる。

昼の事など気にしていないといった表情だ。

私も気にしては仕方がないと食事を再開させる。

このローストビーフなど最高だ。

是非ともこれを焼いたシェフに会いたいものだ。

楽しげなパーティーも終わり私はハリーたちと共にグリフィンドールの談話室に向かつて歩いてしたが、何やら入り口付近が騒がしい。

肖像画付近ではグリフィンドール生がすし詰め状態となっていた。

「なんでみんな中に入らないんだらう」

ロンが怪訝そうに言う。

「通してくれ、さあ。何をもたもたしているんだ。全員が合言葉を忘れたわけじゃないだろう？　ちよつと通してくれ。僕は首席だ」

監督生であるパーシー・ウィーズリーが人混みをかき分けて肖像画の方へと近づいていく。

そして騒ぎを聞きつけたのかダンブルドア先生も肖像画の方へと近づいて行った。

私はハリーたちと共に肖像画が見える位置まで移動する。

「ああ、なんてことー」

ハーマイオニーの絶叫するような声が廊下に響いた。

太った婦人は肖像画の中から消え去っており、絵は滅多切りにされている。

キャンバスの切れ端は床に散らばっており、何者かが無理やり談話室に入ろうとしたことを物語っていた。

「婦人を探さなければならん。マクゴナガル先生、すぐにフィルチさんのところに行つて城中の絵の中を探すよう言つてくださらんか」

いつの間にか駆けつけていたマクゴナガル先生に落ち着いた声でダンブルドア先生が言った。

マクゴナガル先生はそれを聞いて廊下を早足で歩いていったが、入れ替わるようにしてピーブズが現れる。

「見つかったらお慰み！」

甲高くしわがれた声が廊下に響いた。

「ピーブズ、どういうことかね？」

「これをやった奴は随分な癩癩持ちですな。ええ、本当に。あのシリウス・ブラックは」
ピーブズは全員が聞いている中、声高々に宣言した。

これをやったのはシリウス・ブラックだと。

人狼とか、忍びの地図とか、三本の筭とか

シリウス・ブラックが校内に侵入したということ、グリフィンドール生はダンブルドア先生の指示に従い大広間に戻っていた。

10分も経つと他の寮の生徒も困惑した表情で大広間に入ってくる。

私はなんとかこの場を抜け出そうと模索するが、何故か私の横にはスネイプ先生がいる。

ダンブルドア先生の言いつけで私を見張っているかのようにだった。

まあ、それはそうだろう。

昼間、私はダンブルドア先生に杖を突き付けた。

そしてその日の夜にこれだ。

ダンブルドア先生は私がブラックを手引きしたと思っっているに違いない。

そう思っていないなかったとしても、私がブラックと接触しようとすることは予想していたのだろう。

私は横目でスネイプ先生の顔を見る。

スネイプ先生は辺りを警戒しながらも意識だけはこちらに向けているようだった。

まあ確かに私とブラックは繋がっている。

そして私がブラックを探しに行こうとしたのも確かだ。

私は床一面に敷かれた寝袋の1つを持つと、それを引きずるようにして隅のほうに歩いていく。

スネイプ先生は流石についてくることはなかったが、しっかりと私を監視していた。

「ねえ、ブラックはまだ城の中かしら」

私に追いついてきたハーマイオニーが心配そうな声を上げた。

「ダンブルドアはそう思ってるみたいだけど……」

その後に続きロンとハリーが寝袋を持ってやってくる。

私は鞆の中から毛布を取り出すと、変身術でキングサイズのベッドに変えた。

「ハーマイオニー、一緒に寝ましょ。男子は床ね」

ハーマイオニーはベッドに入るかどうか戸惑っているようだったが、ふかふかのマットレスの誘惑には耐えられなかったらしい。

私と一緒にベッドの中に潜り込んだ。

ハリーたちはズルいといった顔をしていたが、流石に僕も一緒に寝たいとは言えないだろう。

「あの一、僕たちにもベッドを——」

「自分で作りなさい」

私はロンのその言葉をばっさり切り捨てる。

ロンは諦めたように寝袋の中に入っていった。

「ブラックが今夜襲ってきたのはラッキーだったと思わない？」

ハーマイオニーが布団に包まりながら言った。

「寮塔には誰もいなかったわけだし」

「きつとハロウィーンだって知らなかったんだろ。じゃなきゃこの広間を襲撃して
いたぜ」

私はそんなロンの言葉を否定する。

「流石にそれはないんじゃないかしら。ブラックも死にたがりじゃないだろうし」

「灯りを消すぞ！」

監督生のパーシーが大声で怒鳴った。

「全員寝袋に入って……どうしてベッドが？ まあいい、おしやべりはやめ！」

次の瞬間一斉に蠟燭の火が消えあたりが暗くなった。

私はベッドの上で天井を眺める。

大広間の天井は魔法により実際の空を映し出すようになっていたのだが、今日は満天の星空だった。

星を見ながら寝るというのも悪くない。

この瞬間だけはブラックに感謝しておこう。

次の日の朝、学校中がシリウス・ブラックの話でもちきりだった。

どうやって城に入ったのか、その目的は何なのか。

噂に尾ひれが付き一人歩きしていく。

私は休憩時間に時間を止め暴れ柳の通路を使い叫びの屋敷に向かう。

そして中に入り時間停止を解除した。

「ごめんください。って別に貴方もここの住民ってわけじゃなかったわね」

私はブラックを探しながら手当たり次第に清めの呪文を使い屋敷中を綺麗にしていく。

2階に行くとブラックが犬の状態でベッドの上で寝ていた。

「呑気なものね。まったく……」

私はブラックが寝ているうちに抱き上げシャワールームのほうに持っていく。

水道は完全に壊れているが、そこは魔法で代用できるだろう。

「アグアメンテイ、水よ出よ！」

私は杖先から水を出すとブラック犬に掛けていく。

ブラックはびっくりしたように飛び起きるとキヤインと鳴いた。

「じつとしてなさい体洗うんだから」

私はブラックの体を水で濡らしシャンプーをしていく。

初めは嫌がっていたがそのうち諦めるように大人しくなった。

私はもう1度杖先から水を出しブラックの体についた泡を落とすようにしていく。

そして完全に泡が落ち切ると水気をふき取り乾かした。

「よし、これでいい」

一通り乾いたので私はブラックを解放する。

ブラックはふらふらと数歩歩き人間の姿になった。

「洗うなら洗うと言ってくれ。いきなり水をぶっかけるな」

ブラックは息も絶え絶えといった表情で私を見る。

「ごめんなさいね。でも綺麗になったわ」

私はブラックを上から下まで観察する。

髪のごわごわや肌の色は少し良くなった気がする。

着ている服はボロボロのままだったが。

私は修復魔法で服の補修をしていく。

数回も魔法を掛ければブラックはすっかり綺麗になった。

「昨日グリフィンドールの談話室に侵入しようとしたみたいだけど、無茶するわね」

私はブラックの前にピザを出しながら言う。

ブラックはそのピザに目を輝かせたが、無論話を聞くまでは与えないつもりだ。

ブラックがピザに手を伸ばすがこちらに引き寄せて取らせないようにする。

「話してから」

ブラックはしぶしぶといった表情で話し始めた。

「本当はもう少し機を待つべきだったと私自身思っている。だが、自分を抑えきれなかった。いてもたってもいられなかったんだ」

「だからって太った婦人を切り刻んだのはあまり得策とは言えなかったわね。婦人に恨みでもあるの?」

「ない……とは言いい切れないな。夜の Hogwartz に探検に出るとき、一番初めに立ちふさがるのが彼女だった」

ブラックは思い出すように遠くを見た。

「ということは貴方は昔グリフィンドール生だったのかしら」

「ああ、そうだ。ムーニー、ワームテール、プロングズ。皆私の友人だった者の名だがよく一緒に夜の学校を探検したものだ」

私はブラックのほうにピザを押し返す。

ブラックはたまらないといった表情でピザを食べ始めた。

私も一切れ手に取り、口に運ぶ。

「ああそうだ。食料だが地下廊下の絵画の梨をくすぐるとホグワーツの厨房に入れる。中には多くの屋敷しもべ妖精が働いているから彼らから食料を貰うといいだろう。厨房に入った途端大歓迎を受けられる」

ブラックがそんな耳寄りな情報を教えてくれる。

今までこうして接してきたが、やはりブラックは新聞などに掲載されている性格とは全く違う性格のようだ。

「はあ……次侵入するときはもう少し慎重にね。私はダンブルドア先生から目をつけられているから協力は出来ないけど」

「ダンブルドアから？ 一体何をしでかしたんだ？」

「色々ね。貴方も学生時代問題児だったみたいだけど、私も負けず劣らずといったところよ」

といつても例の双子ほどではないが。

「問題児とは酷いな。これでも成績は学年トップクラスだったんだ」

「あら、気が合うわね。私もよ」

私の中の印象では、ブラックは少し子供っぽい人だと感じた。

言い方は悪いが頭のいい子供という印象を受ける。

休憩時間も残り少なくなってきたので私は一度学校に戻ることにした。

ブラックに適当に別れを言い時間を止め横穴を通っていく。

そして何食わぬ顔で次の教室へと入った。

それからというもの、私は毎日のように学校を抜け出しブラックに会うようになっていた。

そのたびに屋敷中に清めの魔法を掛けていただけあって、既に屋敷は人間が住める環境になっている。

ブラックの顔色も随分と良くなった。

初めて会ったときは餓死した死骸が動いているような様子だったが、今ではこけた頬も元に戻っている。

髪も肩口で切りそろえ、ブラックは既に昔のハンサムな恰好を取り戻していた。

学校ではひと騒ぎあった為か未だに警戒が続いていたが、ハリーはそうも言っていないらしい。

クイディッチの試合が近いのだ。

グリフィンボールのチームのキャプテンであるオリバー・ウツドはことあるごとにハリーを追い掛け回し、対ハッフルパフ戦の戦術を伝えていた。

ハッフルパフはキャプテンが新しくなったらしい。

元々シーカーだったセドリック・デイゴリーがキャプテンをしているとのことだ。

デイゴリーと言ったら去年私と決闘クラブで戦った生徒だったか。

ウツド曰く彼の戦術は鋭く、シーカーとしての腕もハリーに負けず劣らずらしい。

一度練習風景を見に行ったが、確かにチームメイトに出す指示は鋭く的確で、デイゴリー自身の動きにも無駄がない。

やはり上級生にもなるとレベルが違うということだろう。

そんなこんなで次の日にクイディッチの試合を控えた闇の魔術に対する防衛術の時間。

私は適当な席に座りルーピン先生が来るのを待っていた。

だが教室に入ってきたのはルーピン先生ではなくスネイプ先生だった。

「先生、今は魔法薬学の授業ではありません」

ハーマイオニーが当たり前のようなことをスネイプ先生に言う。

スネイプ先生はそんなことは分かっていると云わんばかりに口を開いた。

「流石の私も地下牢とこの教室を間違えるほど馬鹿ではない。それともミス・グレンジャー、君は私のことをそれほど馬鹿だと思っているのか？」

スネイプ先生のその言葉にハーマイオニーが小さくなる。

「ルーピン先生は今日は体調が優れない。故に私が今日は代理で授業を進めることになった」

スネイプ先生はいやに嬉しそうだつた。

スネイプ先生は毎年のように闇の魔術に対する防衛術の担当になりたいとダンブルドア先生に言っていると聞いたことがある。

先生は順番に出席を取っていく。

そしてそれが終わらぬ授業に入るという状況でハリーが教室に駆け込んできた。

「ルーピン先生、すみません僕……」

ハリーは教室内にいるのがルーピン先生ではないとすぐに気が付く。

そして愕然としたようにスネイプ先生の顔を見た。

「ポッター、授業は10分も前に始まっている。グリフィンドールから10点減点。早く座れ」

「ルーピン先生は？」

ハリーはその場でスネイプ先生に聞いた。

「今日は体調が悪く、教えられないとのことだ。座れと言ったはずだ」
だがハリーは動かなかった。

「どうなされたのですか?」

「命に別状があるようなものではない。グリフィンドールはさらに5点減点。次私に座れと言わせたなら50点減点とする」

その言葉を聞いてハリーはとぼとぼと席についた。

ルーピン先生のことを心配なのかスネイプ先生が授業をやることが不満なのか、いや両方だろう。

スネイプ先生はハリーが席に座ったのを見届けると話を再開させた。

「ポッターが授業の邪魔をする前に話していたことだが、ルーピン先生はどのような内容を教えたのか記録を残していないため——」

「先生、これまで授業でやったのはボガート、カッパ、グリーンデローです」

「黙れミス・グレンジャー。私はただルーピン先生のだらしなさを指摘しただけである」
スネイプ先生は教科書を後ろからめくるとニヤリと笑った。

「今日やるのは人狼だ」

私はペラペラと教科書を捲る。

人狼のページは確かに教科書の後ろの方にあった。

「でも先生、人狼はまだやる予定ではありません。これからやる予定なのはヒンキーパ
ンクで——」

「この授業は君の授業ではないミス・グレンジャー。私の授業だ。その私が諸君に39
0ページを開くように言っているのだ」

スネイプ先生が一度クラスを見回した。

「全員今すぐにだ！」

その大声に生徒たちは一斉に教科書を捲りだした。

その後はスネイプ先生が人狼に関しての授業を進めていく。

その授業はルーピン先生ほどの面白みはなかったが、非常に詳しく人狼に関しての授
業を進めていった。

私はその厳格な授業が少し気に入ったのだが他の生徒はそうではなかったようだ。

授業が終わり教室に声が届かないところまで歩くと皆次々に不満をぶちまける。

「いくら闇の魔術に対する防衛術の先生になりたいからってスネイプは他の闇の魔術に
対する防衛術の先生にあんなふうだったことはないよ。スネイプはルーピンになん
の恨みがあるんだろう。例のボガートのせいかと思うかい？」

ハリーがハーマイオニーに言った。

「わからないわ……でも本当に早くルーピン先生にはお元気になってほしい」

ハーマイオニーが心配そうな声を出す。

私はそんなハーマイオニーに言った。

「大丈夫よハーマイオニー。先生はすぐ良くなるわ」

「どうしてそう言い切れるんだ？」

ロンが後ろから追いついてきた。

先ほどスネイプ先生に失言をして罰則を受けていたのだ。

「そう、貴方たちがさっきの授業を全く聞いていなかったのは分かったわ」

先ほど何故スネイプ先生は無理やりまだやる予定のない人狼を授業でやったのか。

それは今夜が満月であることが影響しているのだろう。

「どういうことだ？」

ロンはまだ首を傾げていたが、ハーマイオニーは何かを思いついたように俯いていた。

グリフィン・ドールとハツフル・パフの試合当日。

私は朝食を食べながら窓の外を見ていた。

窓が割れるのではないかと思うほどの風と雨、そして眠っている全てのモノを起こし

てしまうのではないかと思えるほどの雷が鳴っている。

私は朝食にサンドイッチを食べながら考える。

叫びの屋敷は大丈夫だろうか。

あの建物は相当古い。

流石に雨だけで倒壊することはないだろうが、この風と雷だ。

早いうちにブラックを避難させておいたほうがいいかもしれない。

ハリーの方を見ると他のチームメイトと共に朝食を食べながら今日の試合のことを

話している。

どうやら試合は中止にはならないようだ。

私は他の生徒より一足早く大広間を出ると大きな黒い布に防水の呪文と目くらまし
の呪文を掛ける。

その布を全身が隠れるように纏った。

簡易的なポンチョだが傍から見ればローブ姿のままに見えるだろう。

私は周囲を見回し誰もいないことを確かめると時間を止め暴れ柳の穴の中に入る。

雨の中での時間停止は非常に気を使わないとならない。

空中に浮いている水滴はそれだけで障害物となり私の前に立ちはだかる。

もつとも水滴の時間を動かして進めばいいわけだが、その場合時間停止を解除した時

に私の通った痕跡が一瞬だけ残ってしまうのだ。

私は横穴の中に入ると透明になっていゝる布を畳み雨に濡れないところに置く。

そしてそのまま横穴をまっすぐと進んでいった。

「ブラック、いるかしら？」

私は叫びの屋敷に入るとブラックに呼びかける。

ブラックは私と鉢合わせするとビクリと動きを止めた。

ブラックはいそいそと雨具を着込んでいたのだ。

「えっと……これはあれだ。うん」

ブラックが気まずそうな顔をした。

「1つ聞いわ。まさかクイディッチの試合を見に行くつもりだったんじゃないでしょう

ね。それも人間用の雨具を着ているということは人間の恰好で」

「そんなわけないだろう。ああ、そうだとも」

「じゃあ見に行かないわけ？」

「いや見に行くともさ。あ……」

私の誘導尋問にブラックは見事引つかかり苦々しい顔をした。

「せめて犬の恰好にしなさい。犬用の雨具なら私が作つてあげるから」

ブラックと一緒にいて分かったことはいくつかあるが、その一番大きなものを上げる

としたらハリーを溺愛していることだろうか。

ブラックの話ではブラックはハリーの後見人らしい。

つまりハリーの保護者ということだ。

ことあるごとにハリーの話をし、今日の様子を見てもこれだ。

もし私が脱獄を手伝っておらず、アズカバンでペティグリウーの載っている新聞を見ていたら北海を泳いででも脱獄していただろうと話していたほどである。

叫びの屋敷は今にも倒壊しそうな音を発して揺れている。

早いところブラックを連れ出した方がいいだろう。

私は犬に変身したブラックに布を被せ雨具の形になるように魔法を掛ける。

その後その雨具に防水と目くらましの呪文を掛けた。

「それじゃあ行ってらっしゃい。別行動した方がいいからね。私も後から追うわ」

私のその言葉にブラックは横穴を抜けていく。

あまり高さのない横穴だが、犬に変身しているブラックには丁度良い高さらしくかった。

私は叫びの屋敷内で10分待って、横穴を通りホグワーツへと戻った。

もう既に選手がグラウンドに入場している。

私は防水された布を頭まで被っている為濡れることはないが、選手たちはまだ試合が

始まってすらいなのに全身びしょ濡れだった。

観客も大変そうだ。

ポンチョを着ている生徒もいればあつという間に傘を大破させ濡れながら応援している生徒もいる。

何人かが全く濡れていない私を不思議そうに見ていたが、気にしないことにした。

雨音混じりに微かにホイッスルの音がして試合が始まる。

この雨の中キャプテンが指揮を執り統率した動きをしていく。

チームとしての腕はグリフィンドールが勝っているようだったが、戦略的にはハッフ
ルパフのほうが勝っているだろう。

デイゴリーは視界が悪いことを逆に利用してグリフィンドールの選手が捉えにくい
位置から攻めたりパスの妨害をしたりといった指示を飛ばしている。

そして色々と考えながらも自分はしっかりとスニッチを探しているようだ。

だがやはり最終的には1人1人のスキルが物を言うのである。

現在の時点でグリフィンドールが50点のリードを作っている。

そんな中フーチ先生のホイッスルが鳴り響いた。

グリフィンドールのキャプテンがタイム・アウトを要求したのだ。

私は一度ボールを視線で追いかけるのをやめ、観客席を見渡す。

すると誰もいない上のほうの観客席に犬の姿のブラックを発見した。

舌を出しぶんぶん尻尾を振っている。

私はそんなブラックの様子に頭を抱えた。

いつもはあのような調子ではないのだ。

冷静沈着で、判断も冷静。

少々危険を好む性格ではあるが、命知らずというわけでもない。

だがハリリーのことになるとああなのだ。

試合が再開されたようで選手たちが次々と空へと飛び立つ。

ハリリーの動きがさつきと違っていることに私は気が付いた。

先ほどは迷走するように空中をふらふらと移動していたが、今は視界が開けたようにいつもの飛び方に戻っている。

遠目ではよくわからないが、防水呪文を眼鏡に掛けたのだろう。

一瞬ブラックとハリリーの目が合ったような気がしたが、ブラックがすぐに身を隠した
ことよって事なきを得る。

次の瞬間、私の横を一人の吸魂鬼が通った。

「あら、貴方もクイディッチを見に来たの？」

私は自分の言っていることが呑気な言葉だということを瞬時に悟る。

吸魂鬼の数は1人ではない。

1人、2人と次々に吸魂鬼が集まってきており、ついにはグラウンドが吸魂鬼でいっぱいになるほどの数が集まった。

「あっ!!」

一体誰が叫んだ言葉だろうか。

ハリーを指さしその指をゆっくり下に降ろしていく。

いや、そうではない。

指を指された対象のハリーが、地面に墜落していったのだ。

「エクスペクト・パトローナム!」

私は咄嗟に杖を振るい守護霊を出す。

グラウンドの方を見るとハリーに呪文を掛けて落下速度を遅くさせたダンブルドア先生が、私と同じように守護霊の呪文を使い吸魂鬼を追い払っていた。

ダンブルドア先生は私が出した守護霊の狼を不思議そうな顔で見ている。

私の守護霊は一通り空を駆けるとそのまま消滅した。

ハリーの方を見ると担架で城の方へと運ばれている。

デイゴリーは審判であるフーチ先生に何かを抗議しているようだった。

初めは吸魂鬼が現れたことについて抗議しているものだと思ったが、手にはスニッチ

が握られている。

つまりは試合のやり直しを求めているのだろう。

なんというか、正義感に溢れているというのだろうか。

それともクソ真面目なだけだろうか。

なんにしてもグリフィンドールのキャプテンであるウッドは負けを認めていた。

試合はハツフルパフの勝利という形で幕を閉じた。

私はブラックを探して雨の校庭を歩き回る。

あんなことがあつてすぐだ。

犬の姿のままハリーのところへ行つてしまつていても不思議ではない。

だが私の予想とは裏腹にブラックは暴れ柳のすぐ近くに犬の姿で座っていた。

私はブラックに近づいていく。

そんな私にブラックも気が付いたのかこちらを振り向いた。

「クーン」

ブラックが悲しそうな声を出す。

ハリーが心配なのだろうか。

私はそう思ったが、ブラックが啞えている物を見て察する。

それはハリーが愛用しているニンバス2000の残骸だった。

確かにハリーが落ちた時ニンバス2000は何処かへと飛んで行ってしまったが、この様子だと暴れ柳に激突したらしい。

ニンバス2000の残骸は全てブラックが1か所に集めたらしく、ブラックの周囲には箒の破片が纏めて置いてある。

私は素人目で見てもニンバス2000が修復不可能であることを察した。

ブラックはハリーが箒を失うと悲しむと思ひ、探しに来たのだろう。

だが箒は既にこの状態だったといったところだろうか。

「これを集めてたのね。心苦しいけど、この残骸はハリーに渡しておくわ。ブラック、吸魂鬼も出たことだし貴方は一旦叫びの屋敷に帰るべきよ」

もしブラックの他にハリーの箒を探している人間がいたとしたら姿を見られてしまう。

ブラックもそのことを理解しているのか暴れ柳の攻撃をすり抜け横穴に入っていた。

私はニンバス2000の残骸を簡単な布袋に詰めていく。

「君は……十六夜君かね？」

背後から声を掛けられたので振り返ると、フリットウィック先生が完全に雨を弾きながらこちらに歩いてきていた。

「はい、ハリーの箒を追いかけてここに来たのですが、このありさまで……」

私は袋の口を広げてフリットウィック先生に見せる。

フリットウィック先生は残念そうな顔をすると私に告げた。

「残念ですが、これはもう元には戻らないでしょう。箒はただ木と枝を合わせたものではありません。高度な魔法が掛かっているのです。ですのでこれでは……」

「やはりそうですか……」

私は布袋をフリットウィック先生に渡す。

フリットウィック先生はきよんとした表情でその布袋を見た。

「それじゃあそれはお願いします。私もいつまでも雨に打たれているわけにはいかないので。それでは」

私はそのまま城に向かって歩き出した。

フリットウィックは何が起こったのかわからないといった表情で袋と暎夜を交互に見ていたが、やがていいように厄介ごとを押し付けられたと悟るとやられたと言わんばかりに頭を抱えた。

クリスマス休暇に入る前の最後の週末にホグズミード村行きが許可された。

前回は一人でホグズミード村を歩いたが、何処も人が多くて店に入るのが億劫になってしまう。

なので今回はハーマイオニーとロンと共にホグズミード村に行くことになっていた。

「そう、じゃあロンもハーマイオニーもクリスマス休暇は学校に残るのね」

ホグズミード村までの道を歩きながら私は2人と談笑をする。

「ええ、図書館で調べたいことがあるの」

「別にいいじゃない、ハリーについてあげたいんでしょ？ ロンもね」

「僕はただパーシーと2週間も一緒に居たくないだけさ。せつかくあのうるさいのが家に帰るんだよ？」

2人ともそうは言っていたが、本当の理由が見え見えだった。

多分ハリーも気付いているだろう。

「そういう咲夜はクリスマスはお屋敷に帰るんでしょう？」

ハーマイオニーが聞いてくる。

「ええ、そうね。休暇中ぐらい本来の仕事に戻らないと。元々仕事を休んで学校に通つ

ているわけだし」

「あの吸血鬼のお嬢様のお屋敷かあ……機会があつたら行つてみたいな。お嬢様に頼んでみたりは出来ないかい？」

ロンが私に喜々という。

まあ見学したいという気持ちは分からなくもない。

だが私は使用人の身だ。

主人の家に客人を招くことは出来ない。

そこまで考えて、じゃありドルはどうなるのだという考えに至つたが……。

「ボガートが化けたあのお方。クリスマスは多分紅魔館にいるわよ」

私がそう言った瞬間、ロンの表情が固まった。

ボガートが化けた妹様はロンの心にも大きなトラウマを作つたらしかつた。

「あ、いや。やつぱり遠慮しておくよ。僕なんか吸血鬼のお屋敷に行こうだなんて身の程知らずもいいとこだ」

ロンがカチコチとした発音でそういった。

流石に苛めすぎたと思ひフオローをする。

「この前は結局小さなパブに入っただけで終わってしまったの。色々と店を教えてくださいな」

「それなら咲夜、ハニーデュークスの店がいい。咲夜って意外と甘いモノが好きだろ？ あそこで買えないお菓子は無いほどさ」

ロンが調子を取り戻したように前を歩いていく。

私とハーマイオニーはその後を追いかけた。

ハニーデュークスは確かにいい店だった。

何より魔法界のお菓子が充実している。

百味ビーンズに浮上炭酸キャンディー、ドールブル風船ガムや黒胡椒キャンディー、爆発ボンボンなどなど。

店内はホグワーツの生徒でいっぱいだったが、ロンとハーマイオニーと一緒に居るおかげでそこまで不快な思いはしなかった。

「これなんかハリーへのお土産にどうだ？ 『異常な味』だって。血の味がするらしいぜ」

「うーん、駄目よ。ハリーはこんなの欲しがらないわ。これって吸血鬼用でしょう？」
「ならお嬢様にぴったりかもね」

私は試食と書かれた盆の上から血の味がするという飴のかけらを一つつまむと口の中に放りこむ。

「うーん……駄目ね、この味はお嬢様は好まないわ」

その言葉を聞いてロンがびっくりしたように声を上げた。

「咲夜は人間の血の味をよく知っているのかい？」

「味を知らないものを自分の主人に出せるわけはないでしょう？」

「僕、吸血鬼の使用人にはなれそうにないな」

ロンが迷ったように棚を見回す。

そして豆板が入った大瓶を持ち上げた。

「じゃあこれは？ ゴキブリ・ゴソゴソ豆板」

「絶対嫌だよ」

突如後ろからハリーの声が響いた。

それにびつくりしたのかロンが瓶を落とすようになった。

私が振り返るとハリーが確かにそこに立っていた。

「ハリー！」

ハーマイオニーが驚いたように叫ぶ。

「どうしたの？ こんなところで……それにどうやってここに？」

「まさか……君姿現しが出来るようになったんだね！ おったまげー」

「そんなわけないでしょう？ 私もまだ出来ないのよ？」

「咲夜の言う通りさ」

ハリーは声を落として周りの生徒に聞こえないようにしながらここへ来れた理由を

話し始めた。

なんでもロンの兄であるフレッドとジョージに『忍びの地図』というホグワーツの詳細な地図を貰ったらしい。

その地図には様々な隠し通路とホグワーツ内にいる人間が映し出されるということだ。

「2人ともなんでこれまで僕にこれをくれなかったんだ！ 弟じゃないか！」

ロンが憤慨するように声を荒げた。

「それはロンがホグズミード村行き of 許可証を無事にマクゴナガル先生に提出できたからでしょう？ あの場合で許可証を暖炉に放り込んでいたら結果は変わっていたかもね」

「でもハリー、この地図はちゃんとマクゴナガル先生にお渡しするわよね？」

「まさか！」

ハーマイオニーのそんな素っ頓狂な言葉にハリーとロンと私の声が合わさる形になってしまった。

「僕、渡さない」

ハリーが力強く言った。

その言葉にロンが激しく同調する。

「ハーマイオニー、気は確かか？ こんないいものを先生に渡せだなんて」

「僕がこれを先生に渡したら、どこで手に入れたか言わなきゃならないじゃないか。それしたらフレッドとジョージの好意を仇で返すことになってしまふよ」

「これだけは言っておくわ、ハーマイオニー。シリウス・ブラックの件を心配してマクゴナガル先生にその地図を渡すのだとしたら、いつかハーマイオニーはハリーに謝罪することになってしまふわ」

「それってどういう意味よ」

ハーマイオニーが不思議そうな顔をして言った。

「いつまでも逃亡出来るわけがないって意味よ」

私はその問いに対して適当な言葉を返す。

結局ハーマイオニーはハリーとロンの必死な説得を受け、一応納得した様子だった。

ハニーデュークスを出ると私たちは三本の箒に向かう。

三本の箒はホッグズ・ヘッドと比べると活気に満ちたパブだった。

店の中は客でごった返しており、私たちは奇跡的に空いていた小さなテーブルへと腰かける。

「何か飲み物を買ってくるわ。何がいい？」

私がハリーたちに注文を問う。

その様子を見てロンがウエイトレスみたいだと言ったので一旦言い直す。

「ご注文はお決まりでしょうか」

その様子が妙に板についていたのか、3人は手を叩いた。

「あー、バタービールでいいよな。ハリーもいいだろう?」

「話に聞いて飲みたいと思つていたんだ」

「バタービールが3本ですね。ご注文は以上でよろしいでしょうか。では少々お待ちください」

私はハリーたちのテーブルを離れてカウンターの方に向かう。

そして店主の小粋な顔をした女性に注文を伝えた。

「店主、バタービール3つにピスコ1つ」

「はいよ、バタービール3つにピスコ……つてお前さんらはまだ学生だろう? バター

ビール4つにしときな」

やはりホツグズ・ヘッドのようにはいかないか。

私は店主がテーブルに叩きつけるように豪快に置いたバタービールの大ジョッキを片手で2本ずつ持つとテーブルに運ぶ。

「お待たせ致しました。バタービールです」

私はバタービールを3人の前へ置くと自分も椅子に座る。

「やっぱり本職は違うな。その辺にいるバイトのウエイトレスなんて目じゃないよ」

ロンが興奮したように言った。

「あら、私の本業はウエイトレスではないわよ。メイドよメイド。使用人ね」

そのあとはバタービールで乾杯を行った。

バタービールは不思議な味がする。

だがアルコールが殆ど入ってない為か少し物足りなかった。

バタービールを飲んでいると戸口の方から冷たい風が入ってくる。

誰かが入店したのだろうか。

私が戸口の方に目を向けると、そこにはマクゴナガル先生とフリットウィック先生、ハグリッド、そしてその後ろには魔法省大臣であるコーネリウス・ファッジ大臣がいる。

ハリーはその面子を見て仰天すると、ロンとハーマイオニーに机の下に押し込まれる。

ハリーのバタービールがこぼれそうになっていたので、咄嗟に取り上げて静かにテーブルの下のハリーに渡した。

「あ、ありがとう」

ハリーが全員に向けていった。

堂々とホグズミード村を歩いていたので意識してなかったが、ハリーは学校を無断で抜け出してここにいるのだ。

フリットウィック先生ならまだしも、マクゴナガル先生に見つかるのは大変よろしくない。

ハーマイオニーが咄嗟に呪文を使いハリーを隠すようにクリスマスツリーを動かす。そのツリーを挟んだ向かい側の席に先生方は着席した。

教師がここにくるのは分かる。

ホグズミード村で教師を見たという話は談話室で聞いていたからだ。

だが、なぜそこに魔法省の大臣がいて、しかもハグリッドと楽しそうに談笑しているのかが理解できない。

魔法省大臣はフランクな人だとは聞いていたが、暇人ではない筈だ。

「なあ、あれってファッジだよな？　なんであんなところにいるんだ？」

ロンが声を潜めてハーマイオニーに聞く。

「分からないわ。少し会話を聞いてみないと」

テーブルの下を覗くとハリーがツリー越しに4人の足を眺めながら静かにバタービールを飲んでるのが見えた。

4人の会話の内容は初めはただの世間話のような感じだったが、段々とシリウス・ブラックに関する内容になっていく。

その話は私がブラックに聞いた話と調べて知った話をごちゃ混ぜにしたような内容

だった。

ブラックとハリーの父親は無二の親友だったらしい。

そしてブラックから聞いた話の通り、彼はいたずらっ子の首謀者のような存在だったようだ。

だが頭が悪いわけではなく、成績も優秀。

教師からしたら一番厄介な存在かもしれない。

そしてある日ハリーの両親は自分たちがヴォルデモートに狙われていることを知った。

ダンブルドア先生の助言で忠誠の術を使うことに決めたハリーの両親はその忠誠の術の秘密の守人にシリウス・ブラックを選んだらしい。

忠誠の術というのは簡単に言ってしまうえば秘密の守人が口を割らない限り術者を見つけることが出来ないという魔法だ。

もつとも色々々と条件や制約はあるのだろうが、詳しい話は出てこなかった。

つまりここにいる4人はブラックがヴォルデモートにハリーの両親を売ったと考えているのだろう。

だがブラックの話では秘密の守人になったのはペティグリューだと言っていた。

この辺の勘違いがブラックを殺人鬼だと思わせる原因になってしまったのだと思う。

できることならブラックの無実を証明してあげたいが、まだ証拠が十分に集まっていない。

ペティグリューを突き出せば証拠になるかもしれないが、白を切られたら意味がない。

何よりダンブルドア先生に目をつけられている今、ブラックの無実を訴えたらそれだけでさらに怪しまれてしまうだろう。

だが私はそんな話よりも、もっと興味深い話を聞いた。

ブラックはアズカバンで吸魂鬼の影響を殆ど受けていなかったというのだ。

まるで私のようではないか。

ファッジの話では牢屋の中で新聞についているクロスワードを懐かしむほどの余裕があったらしい。

影響を受けなかった理由はあるのか、何か条件があるのか。

体質なのか、それとも性格なのか。

4人が去った後も、私はバタービールのジョッキに口をつけながら考えていた。

あの後ハリーは一直線に城へと帰ってしまった。

ふらふらとした足取りで前が見えてないような様子だったが大丈夫だろうか。

私はロンとハーマイオニーと別れると物陰に隠れ叫びの屋敷へと向かう。

この季節、叫びの屋敷内は非常に冷え込む。

ブラックは暖炉に火をつけて暖を取っていた。

煙は大丈夫かと思ったが、器用に消失魔法を掛けて消している。

秀才という話は伊達ではないらしい。

「ハリーが貴方の話を知ったわ。ハリーは貴方がポッター夫妻を裏切ったと信じている」

私が三本の箒での話をする、ブラックは悲しそうに視線を落とした。

「そうか……、ダンブルドアでさえ私のことを裏切者だと思っている。ハリーが知るのも時間の問題だと思っていたが……。ハリーの様子はどうだった？」

「……シヨックを受けていたわ。とてもね。そう言えば、ハリーが忍びの地図という魔法具を持っていたのだけれど、何か知ってる？　もし危ないものだったらすぐに取り上げるけど」

忍びの地図という言葉聞いて、ブラックの目の色が少し変わる。

「忍びの地図かあ……これも運命かもしれないな。ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングズ。上からリーマス・ルーピン、ピーター・ペティグリュー、シリウス・ブ

ラック、ジェームズ・ポッター。忍びの地図を作ったのはこの4人だ」
「リーマス・ルーピンですって!？」

私はルーピン先生の名前を聞いて柄にもなく驚いてしまった。

いつもブラックが学生時代の話をするときには、友の名を渾名で呼んでいた。

ムーニーという名前はよく聞いていたが、まさかそれがルーピン先生だったとは。

「ムーニーを知っているのか？」

「ええ、まさかルーピン先生のことだったなんて」

「先生？ アイツがか？ まさか今ホグワーツで？」

「ええ、闇の魔術に対する防衛術の教鞭をとっているわ」

私がそういうとブラックは大きな声で笑いだした。

「はっはっはっは！ ダンブルドアも食えないジジイだ！ いやダンブルドアだからか

！」

「その発言からして、話に出てきた狼男の友達ってやっぱりルーピン先生なのね」

私がそういうと、ブラックが肯定した。

「ああそうだ。叫びの屋敷に続く通路はもともとあいつの為に作られたものだ。暴れ柳もその時植えられた」

予想はしていたことだが、はつきり肯定されるとやはり少しは驚くものだ。

人狼の立場はそこまで高くはない。

基本的には危険なものとして認知されているぐらいだ。

「そう言えば、あなたクリスマスはどうするの？ 私は一度帰ろうと思っているけど」

「クリスマス……そうだクリスマスだ！ ハリーの筈が折れてしまっていたな」

クリスマスという言葉にブラックは何かを思い出した様子だった。

「まさか、クリスマスにハリーに筈をプレゼントしたいと言いつすんじゃないでしょうね」

「察しがよくて助かるよ。ハリーは今悲しみにくれているだろう？」

「ばっかじゃないの？」

私はすぐさまブラックの考えを否定する。

「金は？ 手段は？ のこのことダイアゴン横丁の高級筈用具店に筈を買いに行くの？」

そんなの喜劇もいとところよ」

ブラックは表情を曇らせる。

私はしようがないといった表情でため息をついた。

「しようがないわね。買ってきてあげるわよ。だけど、筈のお金はそっち持ちだから」

「勿論だとも。これが私の金庫の鍵だ。グリーンゴッツの711番金庫にブラック家の財産が入っている。一番いい筈を匿名でハリーに送ってやってほしい」

「……なんで金庫の鍵を持つてるのよ。私としてもハリーがいつまでもガラクタ同然の箒で試合に出るといふのは避けたいからね」

私はブラックから金色に輝く鍵を受け取ると鞆に仕舞い込む。

「クリスマス休暇の間凍死と餓死には気をつけなさい。杖があるから凍死はしないにしても、餓死はつらいわよ。一応缶詰を渡しておくけど、流石に2週間分も備蓄はないわ」
私はありつただけの缶詰を机の上に並べていく。

節約して食べたとしても2週間は持たないだろう。

「なにからなにまですまん。食料がなくなったら最悪ネズミでも食べるさ。もしよかったらだがブラック家の金庫から少し多めに金貨を掻っ攫ってきてもいい。どうせ私の金じゃないんだ」

「そんな卑しいことしないわよ」

私は手を振ると叫びの屋敷を後にする。

次ここに来るとしたらクリスマス休暇が終わってからだろう。

私は女子寮へと戻ると荷物を纏める。

ハーマイオニーが暗い顔をしていたが、それも仕方のないことだろう。

ブラックのあんな話を聞いたあとなのだ。

ハリーにどんな顔をして会えばいいかわからないのだろう。

「ねえ、咲夜。さっきの話、どう思う？」

ハーマイオニーがベッドに横になりながら私に聞いた。

「シリウス・ブラックの話？ もし本当なら酷い話よね。ブラックはハリーの両親と仲がよかつたんでしょ？」

「初めからヴォルデモートの手下で、命令で近づいていたとか……」

「それはないわ」

私はハーマイオニーの言葉を否定する。

「多分ヴォルデモートとのつながりが出来たのは大人になってからよ。まあどっちでもいいけどね」

私は全ての荷物を鞆に詰めると、ベッドに潜り込んだ。

今日はよく眠り、明日に備えよう。

私はハーマイオニーにおやすみと伝えると、夢の世界に落ちていった。

金庫とか、妹様とか、科学とか

私は一人、ダイアゴン横丁を歩いていった。

時刻はちやうど昼を過ぎたあたりで、先ほど漏れ鍋で昼食をとったばかりである。私は人の流れに乗りながらダイアゴン横丁を進み、高級箒用具店へと入った。

この店には一度訪れたことがある。

お嬢様に箒を買っていただいた店だ。

店の中には様々な箒が並んでいるが、その中に一際視線を集めるものがある。

シヨーウインドーに飾られた『それ』の下には大きな説明書きがなされていた。

炎の雷・ファイアボルト。

最高級のレース用の箒らしい。

針の先ほども狂わない精密さと僅か10秒で240kmまで加速できるんだとか。

そしてお値段なんと500ガリオン。

スターリング・ポンドで2560ポンドもする。

ブラックは一番いい箒をハリーに、と言っていたのでこれでいいだろう。

私は店を出ると再びダイアゴン横丁を歩き出した。

「ファイアボルトなんて最高級の箒を贈られたら心臓発作を起こすんじゃないかしら」
私はグリーンゴッツを目指して歩みを進める。

そう言えばまだ連絡をしていなかったと思いきりリドルの日記を取り出した。

『今日は帰るのが少し遅くなるかも。多分紅魔館に着くのは夜になると思うわ』

『何か用事かい？』

『ハリーの愛用の箒が真つ二つでね』

『そうか、そろそろクリスマスマスか。紅魔館でもクリスマスマスパーティーの準備で大忙しさ』

『去年は毒ガス騒動のせいで出来なかったわけだし、今年は去年の分の予算も使って盛大にやるみたい』

『それは大変だ。せいぜい雑用を押し付けられないように気を付けるよ』

私はリドルの日記を閉じ鞆に仕舞うと、目の前の白く大きな建物を見据えた。

「ここがグリーンゴッツね」

観音開きの扉を開け中へと入る。

中は大理石のホールだった。

カウンターの向こうでは多くのゴブリンが忙しそうに働いている。

私は空いているカウンターの前まで行くと受付のゴブリンに話しかけた。

「知り合いの金庫からお金を引き出しにきたのだけど……711金庫よ」

「鍵はお持ちですか？」

「ええ、本人から預かってきたわ」

私は鞆の中から黄金の鍵を取り出すとゴブリンに手渡す。

ゴブリンはその鍵を慎重に調べ始めた。

「間違いなくグリーンゴッツの金庫の鍵です。711番金庫ですとブラックさんの金庫です。ご案内いたしましたよ」

私はゴブリンのあとに続き銀行の奥へと入っていく。

そして細い通路を通りしばらく進むと小さなトロッコが置いてあった。

「グリーンゴッツの金庫は地下にあるのね」

「ええ、ここよりも管理が厳重な銀行は他にないでしょう」

私はゴブリンと共にトロッコに乗り込み線路を走る。

線路はグネグネと曲がりくねり、急上昇と急降下を繰り返した。

「これでもう少し効率よく通路を作ることが出来たと思うんだけど、そこどころどう思う？」

「これは侵入者対策です。不用意に立ち入ったら最後、二度と出ては来れません。」

「まず入られない努力をなささいよ」

しばらく地下深くへ進むとトロッコが急停車した。

目の前には小さな扉がある。

ゴブリンは黄金の鍵を扉に差し込み捻ると、ゆっくりと扉を開けた。

金庫の中はまさに宝の山だった。

ガリオン金貨が山のように積み重ねられており、そのほかにも高そうな調度品が積み重ねられている。

私はガリオン金貨を100枚ずつ袋に分けると500ガリオン全てを鞆の中に入れた。

「便利な鞆をお持ちのようだ。ご用は済みましたかな？」

「ええ、帰りも安全運転で頼むわ」

「速度は一定となっております」

「脱線しなければなんでもいいわ」

私はトロツコに乗り込み銀行のホールへと戻った。

カウンターで手続きを済ませゴブリンから鍵を受け取る。

「またのご利用お待ちしております」

私は鍵を鞆に仕舞うとグリーンゴッツを後にした。

来た道をまっすぐと戻りもう一度高級筈用具店に入る。

私は並んでいる筈には目もくれず店主のいるカウンターまで進んだ。

「ちよつといいかしら。クリスマスプレゼントに箒を贈りたいのだけれど」

店主は目をぱちくりとさせたが、慌ててこちらに向き直る。

「ああ、オークシャフト79を買ってつたお嬢さんのメイドさんかい」

どうやら店主は私のことを覚えていようだった。

「プレゼントだったね。どの箒かね？」

「あれよ」

私はファイアボルトを指さした。

「クイーンスイープかい？」

「その横」

「シルバーアローか。あれはちと高いぞ？」

「違うわ。逆よ」

私はもう一度ファイアボルトを指さした。

「まさか……」

「そのまさかね」

店主は大きくガツポーズをすると、小躍りし始めた。

「やった！ 仕入れたはいいものの凄い値段だから全然売れなくて困ってたところなんだよ。まだ4, 5本倉庫に在庫がある。そう、凄い値段……お嬢さんお金は大丈夫かい？」

500ガリオンですぞ」

私は鞆を開けるとガリオン金貨の詰まった袋を1つ取り出しカウンターに置いた。

「100ガリオン」

店主の目が輝いた。

私はもう1つ袋を取り出す。

「200ガリオン」

店主の口が横に広がった。

「300ガリオン」

店主は袋の口を開け、眩い光を放つ金貨に見とれている。

「400、500ガリオン。勿論レプラコーンの偽物ではないわ。さつきグリーンゴッツからおろしてきたところの本物よ」

「毎度あり！ 誰に贈りましょう」

店主は手を叩いて喜んだ。

「ホグワーツにいるハリー・ポッターにクリスマスプレゼントとして。匿名でね」

「サプライズですね。かしこまりました。しかしハリー・ポッターとは……お嬢さんも友好関係が広くいらっしやる」

「彼、腕のいいシーカーなのよ。でも前の試合で愛用の箒を折ってしまって」

「これを貰つて喜ばない選手はいませんぜ。さき、手続きを進めましょ」
私は店主の指示に従つて書類に書き込んでいく。

「そうだ、暖炉をお借りしてもよろしいかしら」

「煙突飛行ですかい？ 勿論ですとも。是非ご来店の際にもご使用ください」

私はプレゼントの手続きを済ませると、魔法で暖炉に火をつける。

そして煙突飛行を使い大図書館へと移動した。

「あら、夜になると聞いていたけど早かつたわね」

図書館の暖炉から出ると、机で本を読んでいたパチユリー様が私を出迎えてくれた。

「ただいま戻りました」

「紅魔館はクリスマススの準備で大忙しよ。美鈴の手伝いをしてあげなさい」

「承知しております」

「おや、早かつたじゃないか」

本の影からパーティー用の三角帽子を被つたりドルが顔を出した。

「あら、愉快なものを被つてるわね」

「巻き込まれたんだ。美鈴にね」

リドルは忌々し気に帽子を握りつぶす。

「僕は研究で忙しいと言っているのに食材の注文を押し付けられたり、賓客への招待状を書かされたり、会場への机運びを頼まれたり、仕舞いにはこれだ」

「抑えなさいリドル。パーティーの前日には私も手伝いに追われるんだから」
今にも帽子に火をつけそうな勢いのリドルをパチュリー様がなだめる。

「それに当日は巻き込まれないわ。私もリドルも表へ出るわけにはいかないもの」
「先生……それはそうですが……」

パチュリーが手を振るうと潰された三角帽子が元に戻る。

リドルは渋々それを被り直した。

……いや別に被らなくてもいいだろうに。

文句を言っているが案外準備を楽しんでいるのかも知れない。

「咲夜。レミイが部屋で待っているそうよ。荷物を置いて着替えたらレミイの部屋に行きなさい」

パチュリー様はそういうと何かを本に書いていく。

私は一礼して時間を止めた。

そのまま図書館を出て自室に向かう。

鞆を置いていつものメイド服に着替えると姿見の前で身だしなみを整えた。

「よし」

やはりメイド服を着て紅魔館にいるのが一番落ち着く。

私は自室を出るとお嬢様の部屋まで飛び、扉の前で時間停止を解除した。

「咲夜ね。入りなさい」

私がノックをする前に声が掛けられる。

私は静かに部屋へと入った。

「ただいま戻りました。お嬢様」

「お帰り。ついてきなさい。大事なことよ」

お嬢様はいつになく真面目な表情をしていた。

お嬢様は私の横を通り廊下へと出る。

私はその後続いた。

廊下をお嬢様の後について歩きながら私は考える。

大事なこと、とはなんだろうか。

訪ねたい気もするが、いつも以上に真面目な雰囲気のお嬢様に私は声を掛けることができなかつた。

私たちはそのまま地下の方に降り、図書館を通り過ぎる。

「お嬢様、こちらの方向は……」

「……」

そう、この方向はいつも妹様の笑い声が聞こえてくる方向だ。

私は一層に気を引き締めてお嬢様の後に続いた。

「咲夜、貴方もここに來てから少し経つわ」

お嬢様はそこで言葉を切る。

そう、お嬢様にとっては私と過ごした時間は少しなのだ。

「フランに貴方を紹介しようと思う」

お嬢様は私の目を見た。

「フランが手を握ろうとしたら、時間を止めて移動しなさい。少しでも遅れたら死ぬわ

よ」

お嬢様は私に向けて手を伸ばすとそれを握った。

「フランは手を握るだけで貴方を殺すことが出来る。そしてそれをあの子は躊躇しない

わ」

「承知致しました」

お嬢様は目の前にある扉を3回ノックした。

扉には鍵も封印もされていないことに私は少々驚く。

「フラン、入るわよ」

そしてお嬢様はゆつくりと扉を開いた。

中にいたのは肖像画通りの少女だった。

床にペタンと座り、手には熊の縫いぐるみ握っている。

金色の髪に赤い瞳、ちらりと見える牙。

そして背中から生える羽は枯れ枝のように細く、宝石のようなものがぶら下がっている。

この少女が、彼女がフランドール・スカレットお嬢様なのだろう。

突然妹様がふらりと右手をこちらに向けた。

そしてその指がゆつくりと握られていく。

私は握られる瞬間に時間を止め、お嬢様の右隣から左隣へと移動した。

時間停止を解除する。

「ん？ あれ？」

「やめなさいフラン。咲夜」

お嬢様から声を掛けられたので私は一步前に出て妹様に頭を下げた。

「お初にお目に掛かります。フランドールお嬢様。十六夜咲夜と申します」

「貴方は壊れないのね。お姉さまや美鈴、パチュリーと同じだわ」

妹様はにっこりと私に微笑む。

「最近紅魔館に入ったメイドよ。咲夜、これからはフランの世話も貴方の仕事の1つになるわ」

「かしこまりました。これからよろしくお願い致します。フランドールお嬢様」
妹様がふらりと立ち上がる。

「そう、咲夜ね」

次の瞬間既に妹様は半分以上手を握りこんでいた。

私は内心焦ったように時間を止める。

そして妹様の後ろに回り込むように立つと再度時間を動かした。

「あら」

「お止めください」

妹様は驚いたように後ろを振り返る。

その瞬間に時間を止め、今度はレミリアお嬢様の横へと移動した。

「あれ? ……やっぱり、貴方も普通じゃないのね。お姉さまもこんな隠し玉を持つているなら早く見せてくれたらよかったのに」

「貴方の気に慣らしていたのよ。フラン、仲良くしなさいね。咲夜、行くわよ」

「はい」

お嬢様が部屋の外に出たので私も後に続き部屋の扉を閉める。
次の瞬間、全身から冷や汗が湧き出た。

「はあ、はあ……はあ……」

まるで先ほども導火線に火をつけたダイナマイトを握りしめていたかのように。
足がガクつき、倒れそうになる。

お嬢様の前でなければその場で膝をついていただろう。

「あの子がフランドール・スカーレット。私の実の妹よ。見てわかったでしょう。あの子の部屋には鍵もなければ封印もしていない。あの子は自らの意思であそこにいるのよ。あの部屋から外に出ようとするいの」

お嬢様はゆっくりと廊下を歩いていく。

「あんな子だけど、可愛い妹なのよ。私のたった一人の家族なの」

お嬢様は立ち止まり顔を伏せた。

「お嬢様……」

「休暇中だけでも仲良くしてあげて頂戴。フランのことをよろしく頼むわ」

お嬢様は私のほうを見て微笑むが、その顔は儂く、とても弱々しく。

私は悟った。

妹様はお嬢様の弱みなのだ。

そして何よりも守るべきものなのだ。

「勿論ですとも、お嬢様。お嬢様にとっての大切な方は、私にとっても大切な方です。何が有ろうとも命を賭してお守り致します」

お嬢様は私の言葉を聞くと満足そうに頷く。

そして両手を上げて歩き出した。

「さて咲夜！ クリスマスよ！ 悪魔がクリスマスを祝うのはおかしいかもしれないけどその矛盾がいいじゃない！ 去年はパチュリーの毒ガス騒ぎで中止になっちゃったし盛大に行うわ。人も妖怪もわんさか呼ぶわよ」

「盛大にやりましょう、お嬢様」

私はお嬢様がことあるごとにパーティーを行う理由を理解したような気がした。

大忙しのクリスマスパーティーも終わり、私はリドルと共に図書館でぐったりとしていた。

今年のパーティーは本当に疲れた。

お嬢様にとっては一晩の出来事かもしれないが、時間を止めながら仕事をしている私の体感時間は1週間ほどにもなるのだ。

リドルが疲れている理由は私とは違う。

リドルには妖精メイドに服従の呪文を掛ける作業をして貰っていた。

服従の呪文と言つても妖精を無理やり服従させて仕事をさせているわけではない。

妖精たちは自ら進んで服従の呪文に掛かりにくるのだ。

妖精たちに理由を聞くと、考えなくても仕事が出来、なにより間違えることがないからだという。

リドルは一晚で30人もの妖精メイドを陰から操っていた。

疲労が残るのは致し方ないことだろう。

「紅魔館ではいつもこういうのかい？」

リドルが机の上に頭を乗せぐったりとしながら私に問う。

「ええ、基本的に毎年ね。肌荒れとかしてないかしら」

私は手鏡を出して顔を確認するが、いつも通りの私だった。

「というか、日記帳でも疲れるのね」

「君だつて休む時間は無尽蔵にあるだろう？」

私とリドルは顔を見合わせると同時にため息をつき机に突っ伏す。

その頭をパチュリー様が本で叩いた。

「いつまでぐうたらしている気かしら。パーティーが終わったら年越しの準備をするわ

よ。リドルは私を手伝いなさい。咲夜は美鈴と一緒に館の掃除と妹様の世話
「かしこまりました」

私は時間を止めると椅子から立ち上がり美鈴さんのもとへと向かう。

美鈴さんはいつも通り館の外に立っていた。

外の気温は氷点下を下回っているが、美鈴さんはいつも通りのチャイナ服だ。

「お、咲夜ちゃんどうしたの？ そういえば聞いたわよ！ 妹様のお世話が解禁になつたんだってね。お嬢様も咲夜ちゃんのことを一人前って認めたってことかしら」

「そんな格好じゃ風邪ひきますよ？ 寒くないんですか？」

私は美鈴さんの服装を見て言う。

それを聞いて美鈴さんはカラカラと楽しそうに笑った。

「私は妖怪だからあまり気温っていう概念に左右されないのよ」

「そういうものなのかしら。年末に向けて館中大掃除をするから、手伝ってくださいな」
「じゃあメイドを連れて先に掃除を始めるわね。咲夜は妹様に食事を届けて頂戴」

美鈴さんはそう言うのと紅魔館の中に入っていた。

私は近くで庭仕事をしている妖精に来客があれば教えるようにと指示を出すと厨房へと向かう。

妹様の夜食は夕方の時点で既に完成している。

私はそれを持ち地下へと進んでいった。

妹様の世話を初めて1週間。

そろそろ妹様の独特の雰囲気にも慣れたところだ。

初めの頃は私を壊そうとしてきた妹様も、私を壊すのは無理だと悟ったのか今ではそのようなことはなさらない。

私は妹様の部屋の前まで行き、ドアをノックした。

「失礼致します。お食事を届けに参りました」

私が室内に入ると妹様は顔をこちらに向けた。

「あら、咲夜じゃない。いつもありがとう。クリスマスは今年も盛大にやったみたいね。お姉さまの恥ずかしい演説がここまで聞こえてくるようだったわ」

私はテーブルの上に妹様の夜食を置くと、その食事の時間停止を解除した。

「そういえば咲夜は人間みたいだけど、なんでここにいるの？」

「私自身も覚えていないほど小さい頃に、お嬢様に拾われたのです」

「そう、お姉さまの戯れでここに飼われているのね。お姉さまもお姉さまだわ。いくら能力が特殊だからって人間の少女をそばに置くなんて。可哀想だとは思わないのかしらね」

「私は紅魔館で働けて幸せです」

「それしか知らないだけだと思わよ」

妹様は椅子に座ると夜食を取り始める。

「そうなのでしょうか。だとしたら、それしか知らない私は幸せ者のメイドですわ」

妹様は私の想像とは裏腹に非常に冷静で賢い方だった。

それはここ一週間お世話をしてみても気が付いたことでもある。

話す内容は論理的で、あまり感情には流されない。

私の話などに含まれている情報を頭の中で整理し、言葉以上のことを理解する。

変わったところと言えば、会って少しの間殺されそうになったことと部屋から出ないことぐらいだ。

「まあ貴方がそう思っているならそれでいいのかもね。このハンバーグ美味しいわね。肉が特別なのかしら」

「はい。今日の肉は特上のもんです。最高級の食用の人肉を仕入れました。男と女、つがいの肉を合い挽きにし、焼き上げたものでございます」

「ふうん、いかにもお姉さまが好みそうなものね。2人の愛が繋ぎになってるとかそういう話でしょう？ まあ美味しいからいいけどね」

妹様は一口血を飲むと、私のほうに振り向く。

「いいこと教えてあげるわ。お姉さまは貴方を不死鳥の騎士団に入れたいらしいの。死

喰い人にもよ。ようは3重スパイになれつてことね。美鈴の話ではシリウス・ブラツクの脱獄を手伝ったりしていたみたいだけど、それは下ごしらえつてところかしら。なんにしても、来年度あたりから忙しくなるかも」

私はその言葉に混乱した。

そんな情報一体どこで仕入れたのだろうか。

「貴方もお姉さまも不用心すぎるのよ。心が。そして私から目を放すまいとこちらを覗き込みすぎている」

妹様はご自身の目を指さした。

「パチュリーから閉心術を習いなさい。貴方は紅魔館の秘密を抱えすぎている。その情報は容易に敵に渡つてはいけないものよ。そして備えなさい。来年度から本格的に動き出すことになるわ」

美味しかったわ、と妹様がナプキンで口を拭いた。

「貴方がお姉さまの忠実な従者であり続けるのだとしたら、退屈はしないわよ。朝食も楽しみにしてるわ」

私は妹様の食べた料理の皿を片付ける。

そして一礼して部屋を後にした。

妹様の部屋から遠く離れ、私はようやく心の余裕を取り戻すと妹様の言葉に関して思

考を巡らせる。

あれは妹様の開心術ということだろうか。

妹様はお嬢様が私を両陣営に入れたかと思っていると云っていた。

あの言葉は果たして本当なのだろうか。

後ろを振り返ると妹様の部屋の扉が遠くに見える。

そこからはここからでもわかるほどの狂気が漏れていた。

取り敢えず助言には従っておこう。

私は意識を切り替えると美鈴さんが居そうな方向へ歩き出した。

「いいかい？ 閉心術というのは外部からの侵入に対して心を防衛する魔法だ。君は心を閉じ、僕の侵入を拒めばいい」

リドルが黒板に文字を書き込んでいく。

そこには開心術の仕組みが事細かに書かれていた。

「敵の侵入を防ぐには術のこの時点で閉心術を掛けなければならない。そして最終的には君の精神力が大切だ」

今私はリドルから閉心術に関する講義を受けていた。

妹様からの助言通りパチュリー様から閉心術を習おうと思つたのだが、リドルが名乗りを上げたのだ。

パチュリー様の話では、リドルは開心術の達人らしい。

リドルの開心術を防ぎきることが出来れば大体の魔法使いの開心術を防ぐことができるということだ。

「さて、では実習だ。初めにこれは見られたくないという記憶を取り出しておくといい」
リドルがそういうとパチュリー様が杖先で私の頭から何かを引っこ抜いた。

いや、そのような感覚があつただけだ。

パチュリー様は杖先についた白くモヤモヤとしたものを瓶へと収める。

「これでいいわ」

一通りの作業が終わるとパチュリー様がリドルに向けそういった。

これは予想だが、多分先ほどパチュリー様を取り出したのはリドルにバレては拙い紅魔館に関する記憶だろう。

「じゃあ掛けるよ。真の技術者が掛ける開心術とは全く気が付かないほど自然だ。知らず知らずのうちに心が覗かれ、大事な物を持つていかれる。君はダンブルドアに開心術を掛けられたとき違和感を感じたと言つた。ダンブルドアも開心術に関してはかなり
の使い手だ。開心術に気が付くということに関しては君は天性の才能を持っている」

ゾワリと、私の中に何かが入ってくる感覚がある。

私はすぐさま目線を外す。

「驚いた。今のに気が付くか。これなら基礎は大丈夫だ。今度は目線を逸らさず、心に壁を作る感覚で僕の侵入を拒むんだ」

私はリドルの言葉を聞いて自らの精神に集中する。

スルリと私の中にリドルが侵入してくる。

壁を作るとはどういうことだろう。

私は心の中で大きな壁を想像した。

「それでは駄目だ。来るな、来てはいけないという心の持ちようが大切だ。その心を壁とし、相手の侵入を防ぐ。そして防ぐだけでも駄目だ。相手の侵入を防いだら次は押し返さないといけない」

私は心の中でリドルを拒むように強く念じた。

「そうだ、それでいい」

だが押し返すとはどういう感覚だろうか。

私は心に入ってきたリドルの時間を止めるような想像をした。

次の瞬間目の前にいるリドルも止まる。

「ええ？」

私はそのまま心の中にいるリドルを『巻き戻した』。

これはあくまでそういう感覚というだけだ。

実際に術を科学的に行使しているわけではない。

だがリドルは時間が戻っているように先ほどとは逆向きに動き出す。

時間が逆に進んでいるわけではない。

ただリドルが逆向きに動いているだけだ。

私はリドルが私に侵入しようとしているところまで戻すと一旦その行為をやめた。

「驚いた。今のに気が付くか。これなら基礎は大丈夫だ。今度は目線を逸らさず、心に壁を作る感覚で僕の侵入を拒むんだ」

またリドルが私の中に侵入してくる。

私は先ほどと同じように侵入してきたリドルの時間を文字通り巻き戻す。

「驚いた。今のに気が付くか。これなら基礎は大丈夫だ。今度は目線を逸らさず、心に壁を作る感覚で僕の侵入を拒むんだ」

「フフ、気が付いてないのかしら」

パチュリー様が耐えきれないと言わんばかりに吹きだす。

「なんですか先生」

リドルが何か様子が変わだと言わんばかりにパチュリー様に聞き返した。

「貴方巻き戻つてゐるわよ。ほら」

パチュリー様が魔法石のようなもので黒板に映像を投影する。

そこには同じことを何度も何度も繰り返すリドルの姿があった。

「これは一体……閉心術を使つてもこうはならない」

「さつき私は試しに侵入してきたリドルの時間を巻き戻すような想像をしたわ。そしてそれからこのありさまよ」

その言葉を聞いてパチュリー様とリドルは何か考えを纏めるように議論を重ねた。

そしてリドルが口を開く。

「想像をしたというのはどういうことだい？ 能力を使つたわけじゃないだろうか？」

「ええ、ただそう想像しただけよ。いつもの感覚を頭の中で起こしたような？」

「それは能力を使うのとは違うの？」

今度はパチュリー様が聞いていた。

「能力は現実世界での現象です。精神的なものとは違うと思います」

「え？ どういう理屈よそれ」

パチュリー様は眉をひそめた。

私はその顔を見てさらに説明を加える。

「時間を止めるというのは現実世界の時間を止め、そこで動かすものの選択を――」

「だからそれが良く分からないのよ」

パチュリー様は一旦黒板の上を綺麗にする。

そして新たに文字を書き加えていった。

「貴方はどうも自分の能力を理論的に解釈しようとしすぎているわね。それも既存の科学を使って。時間を止めなさい。そして私だけその時間の中で動かしてみて」

私はパチュリー様に言われた通りに時間を止め、パチュリー様の時間だけを動かした。

「ふむ、まず一つ目の誤解だけど、貴方は以前時間の止まった物体に触れることが出来な
いと言っていたわね。凍傷を起こしてしまうからだ。でもそれは科学的な考え方よ。
貴方の能力は何？」

「時間を操る能力です」

「そうね。時間を操る能力。その能力自体は霊的なものだわ。これだけは言うておく
わ。貴方が頼りにしている科学では『時間が止まった世界の中で動くのは不可能』よ。
あらゆる物理的な相互作用が消え失せ全てが無に帰るわ」

無に帰る？ それは一体どういうことだろうか。

「貴方は自分の鞆の重さが無くなると言っていたわね。もしそれが重力子の伝達が時間
が止まった影響で行われていない為と考えたと、それは時間を停止された空間にも適用

されるはずよ。地球の時間は止まっているんだから伝達される重力子の数が圧倒的に少なくなる。つまりほぼ無重力だということよ」

次の瞬間パチュー様が浮き上がった。

いやそれは私も同じだ。

私の世界から重力が消え失せた。

「そして貴方は時間の止まった物質に触れると凍傷を起こすと言ったわね。基本的にエネルギーというものは無くならないわ。熱が奪われるというのはつまりこちらは冷やされるけど相手の方は温められるということ。原子的に言えば電磁気力によるぶつかり合いね。でも時間が止まっているということは電磁気力による力の伝達もないということ。温度は変化しないわ」

パチューり様は時間の止まっている机に触れる。

凍傷を起こしているような感じはしない。

私も触れるが、確かに冷たくない。

「そして電磁気力が無くなるということは物に触れることは出来ない」

私に触っていた机の感触が無くなる。

机に触れなくなる。

「光はどうなるのよ」

光が消える。

「つまりよ。貴方の能力の解釈は穴だらけ。貴方は自分の都合のいいように能力を解釈し、自分の力に枷を作ってしまったている。想像しなさい。物の動きだけが止まった世界を。机を叩けば音がして、光はそのまま乱反射し、物は暖かく、触れれば動き出し。貴方にとって都合がいい世界を構築するのよ」

ドスン。

私は床に尻もちをついた。

急に重力を取り戻したためだ。

そして地面に当たったということは物質に触れるということだ。

パチュリー様が私の前にふわりと降り立つ。

姿が見えるということは光があるということだ。

「それでいいわ。貴方の世界なのだから貴方の好きなようにすればいいのよ」

時間停止を解除した。

私は立ち上がりスカートについた埃を払う。

「パチュリー様、今のは一体……」

「マインド・コントロールっていうのかしら？　洗脳の1つよ。魔法と幻想の世界で科

学を中心とした考え方では限界があるわ」

「なんで尻餅をついているんだい？」

リドルが不思議そうな顔をした。

パチュリー様は黒板に文字を書き込んでいく。

「前までの時間が止まった世界での解釈では行動に不自由が生じていたわね」

パチュリー様は黒板に『物体の凍結、物質への干渉の不自由』と書き加えた。

「閉心術よりもまず先に『自分の世界』を構築しなさい。科学的な解釈は使わず、『時間』という概念だけに重きを置いて考えなさい」

パチュリー様はそういうと黒板の文字を消した。

私一人で考えろということだろう。

リドルは何があつたか分からないという顔をしていた。

「えっと、閉心術の講義は一旦中止と考えていいのかい？」

「その必要はないわ、トム」

私はリドルにそう言葉を掛けた。

そして時間を停止させた。

私は時間の止まった世界であらゆることを試していく。

空を飛んだり物に触れたり、能力を使ったり解除したりと。

慎重に物事を観測し、都合が悪いと感じたら能力自体の解釈を変更していく。

そして私の体感時間で1年ほどが過ぎた時、ようやく私は自分の世界を作り上げた。止まった時間の中で過ごした1年。

私はお腹も空かなければ爪が伸びたりなどもしなかった。

おかしいとは感じたが、つまりは『そういうこと』なのだろう。

私は時間停止を解除した。

「お待たせリドル。閉心術の練習を始めましょう」

私は固まったままそこで待つていたリドルに声を掛けた。

「リドルはもういいのかい？」と言った表情をしていたが、私の顔を見て何かを納得したかのように頷く。

「いったい何日時間を止めていたんだい？　今までと顔つきが全然違うじゃないか」

「1年ぐらいかしら？　この1年、目が覚める気分だったわ」

私はリドルの目を見つめる。

リドルは軽く合図をすると私の心に侵入しようとした。

「なに？ そんなはずはない……」

リドルは何度も何度も私に開心術を掛けようとする。

だが、心に入ることが全く出来ていなかった。

「まるで無機物のようだ。干渉が出来なくなっている。その辺にある本棚と区別がつかないレベルだよ」

「心の時間を概念上止めているのよ。今思えば吸魂鬼の影響を受けなかったりと前兆はあつたわ。多分影響を受けなかったのは無意識のうちに心を凍結させていたからでしょうね」

私は先ほど瓶に取り出した記憶を杖を使って頭の中に戻す。

そして軽く微笑むと図書館を後にした。

私は美鈴さんと一緒にロンドンの街を飛んでいた。

ホグワーツへ登校する日がやってきたのだ。

煙突飛行を使ってもいいのだが、たまにはこうして街を『飛ぶのも』いいだろう。

そう、私は今時間を止めている。

美鈴さんは時間の止まった空を自由に飛んでいた。

「へえ、前までは咲夜ちゃんから少しでも離れると冬とは比べ物にならないほど冷えたけど、今はそんなことないわね。能力が進化したってのはそういうこと？」

「同じようなものですよ。少し便利になっただけです。例えば……」

私は街を歩いている人間の首筋にナイフを投げる。

そのナイフは肌に弾かれることなく突き刺さった。

「とまあこんな感じ？」

「お見事。今までは時間が止まった世界では人を殺せなかったんだっけ？」

「ええ、今までは弾かれていたわね」

私はナイフを魔法で引き抜く。

傷口から血が漏れ出すことはない。

そう、人間の時間自体は止まっているのだ。

「便利ね」

「まあね」

私はロンドンの空を悠々と飛ぶ。

今までは私の周囲の空気の時間停止を解除することによって息をしていた。

だが今ではその必要もない。

私は美鈴さんの方を見る。

こんな真昼間に空を飛ぶのは久しぶりなのか、あちこち見回しながらフワフワと周囲を飛んでいた。

「さて、時間はあることですし、ゆっくり行きましょう。美鈴さんももう少し飛びたいでしょう?」

「咲夜ちゃんは学校が恋しくない?」

美鈴さんは冗談めかしている。

私はその言葉をバカバカしいと一蹴した。

「もう既に紅魔館が恋しいわ」

美鈴さんはその言葉を聞いてケタケタと笑う。

「今さっきお嬢様と妹様に挨拶して出てきたところじゃん。だったら早く帰れるように駅に急ぎましようか」

美鈴さんはキングズ・クロス駅に向けて一直線に飛び始めた。

私もその後を追う。

「そう言えばシリウス・ブラックとはどうなの? おぜうさまから聞いたけどお世話していたんでしよう?」

「ブラックに死なれたら困るわ。お嬢様の命令に逆らうことになるもの」

「情が移った?」

「少し違うわね。ほっとけないだけですよ。頭はいいのに自制が利かない。ほんとそつくりよ。どこかの誰かさんに」

私は肩を竦めたため息をつく。

「それはおげうさまも同じだと思っただけねー。見た目は子供、頭脳は大人、でも精神年齢は子供っていうね」

「それはどうなのかしら」

私はお嬢様が真面目なことを言っているときのことを思い出す。

お嬢様は確かに騒ぐときは騒ぐお人だが、私はお嬢様以上に聡明な人を知らない。

「そういえば、美鈴さん。美鈴さんは妹様のことをどう思いますか？」

「妹様？　そうですねえ……私はお嬢様よりまともな性格してると思ってますけど。なんにしても計り知れないわね」

「美鈴さんもそう思う？　私も同意見です。何故部屋にこもりつきりなのか分からないけど、もし外に出てきたらと思うと……」

「あー、それは少し拙いわね」

美鈴さんは苦笑いをした。

「紅魔館は余りにも多くの秘密を抱えすぎている。パチュリー様、妹様。その2つだけでも余りにも大きいわ。だから咲夜ちゃんは学校に通っているのではなくて？」

そして美鈴さんは私を見る。

私はその顔をまっすぐと見返した。

「そうかもしれない。行ってきますね。美鈴さん」

そして顔を見合わせたままニツコリと微笑んだ。

11時に汽車が出る。

今の時刻は10時59分59秒。

懐中時計の針はそこで静止していた。

私はキングズ・クロス駅で美鈴さんと別れると汽車に乗り、空いているコンパートメントを探す。

そして誰もいないコンパートメントに座ると、時間停止を解除した。

次の瞬間汽車が発車する。

懐中時計を見るとぴったり11時を指していた。

ゆっくりと過ぎていく風景を眺めながら紅魔館が遠くなっていくことを悟る。

そして目を瞑るとゆっくりと夢と現実の間を漂った。

他の生徒の声があふわふわと私の頭の中に入ってくる。

急にコンパートメントのドアが叩かれたので私は意識を覚醒させた。
「誰かしら」

私がドアについている窓を見るとそこにはドラコが立っていた。

「やあ咲夜。奇遇だね。隣いいかい？」

ドアを開け、ドラコを中に入れる。

ドラコの手はすっかり治っているようだった。

「腕はもう大丈夫なの？ 随分と長引いたようだけど」

「もうすっかりさ。そうだ、父上にその話をしたら、理事に訴えてくれたみたいでね。近いうちにヒツポグリフは裁判に掛けられるだろう。多分死刑だ。僕の腕を八つ裂きにしたんだから！」

「そんなに裂かれてないでしょう？ 一回よ、一回」

「怪我をしたのは事実だよ」

ドラコは傷があつたであろう場所をなぞる。

私はドラコの傷を調べるようにドラコの手に触れた。

「そうね。もう綺麗に治っているわ。長くかかっていたから痕ぐらい残るかと思つただけれど、その辺は流石ママダム・ポンフリーだわ」

「そ、そうだね」

ドラコは顔を真っ赤にして手を引つ込める。

私はクスクスと笑うと鞆の中から紅茶とスコーンを取り出した。

「一杯いかが？」

「頂こう」

ドラコは私から紅茶の入ったティーカップを受け取った。

「本当はハグリッドをクビに出来たらよかつただけど、父上曰くそれは少し難しいらしい」

「そうなの？ それは多分貴方が怪我したからよ」

「何故だい？」と言った顔でドラコは首を傾げる。

「もっと大きなへまをするまで泳がせるべきだったわ。生徒の一人でも死んでいればハグリッドの事だから自責の念に押しつぶされて自主的に教師を辞めていたわ」

「思いつめるタイプじゃないだろう。あいつは。ただのウドの大木さ」

ドラコは私の紅茶を一口飲むと目を丸くする。

「美味しい、やっぱり母上の淹れる紅茶は不味いんだな。それとも咲夜の淹れる紅茶が美味しいのかな？」

「お世辞が上手ねドラコ。……：そういえば、ドラコはブラックについて何か知っている」とはしないかしら」

そういえばと思ひ私はドラコにブラックに関する話を振った。

ハリーとブラックの関係について知っているようなことを言っていたのを休暇前の大広間で聞いたからだ。

「父上から聞いた話なんだが、ブラックはハリーの両親をあの人に差し出したらしい。貢物のかわりにしてね」

「ということはそれ以前までブラックは例のあの人の仲間ではなかったということなのかしら」

「多分そういうことだ。でもそのあとすぐに例のあの人は消えてしまった。ブラックもすぐに捕まった。まあブラックは脱獄したけどね。真相は誰にも分からない」

ドラコはやれやれと言った表情で肩を竦めた。

多分本当にこれ以上のことは知らないのだろう。

妹様から3重スパイの件を聞いた時に死喰い人と不死鳥の騎士団のことについて調べたのだ。

その過程でルシウス・マルフォイ氏が死喰い人じゃないかという情報が手に入った。

もつとも、ヴォルデモート卿が消えてからはシラを切り通しすつかり権力を取り戻したようだが。

「ブラックは死喰い人だったのかしら。何か知らない？」

「そういう話は聞いたことがないな」

これ以上有益な話は聞けないだろう。

私は1つため息をつくと目を閉じた。

「ドラコ、私少し寝るわ。へんな虫が寄り付かないように見張っててくれないかしら」

「そうかい？ 館での仕事は大変みたいだね」

ドラコの上承が取れると私は体の時間を器用に止め、私の体に他人が干渉出来ないようにする。

一通りの処理が終わると私は眠りに落ちていった。

新学期とか、試合とか、厨房とか

学校に着いた次の日には授業が始まった。

魔法生物飼育学ではハグリッドが火トカゲを扱う授業を行った。

寒い屋外で枯れ木や枯葉を集め焚火を起こし、その中に火トカゲを入れるのだ。

火トカゲは名前通り炎が好きなたカゲで、たき火の中を楽しそうにちよろちよろと走り回る。

占い学では新しく手相占いが始まった。

手相はお嬢様の専門外なので私自身あまり詳しくなかったが、ハリーは先生からクラスで一番生命線が短いとの指摘を受けていた。

ハリーはどうもそのことが気に入らないらしい。

確かハリーはクリスマスに死ぬほど喜ばしい出来事があつたはずなのだが、何故そこまでご機嫌斜めなのだろうか。

私は朝食の席でハリーに聞こえないようにロンに話しかけた。

「ねえ、新学期始まってからハリー凄く不機嫌じゃない。ハーマイオニーとも仲が悪そうだし。何かあつたの？」

ロンはハーマイオニーにも聞こえないようにヒソヒソ声で答えた。

「実はハリーはクリスマスマスプレゼントにファイアボルトを貰ったんだ。でも送り主が書いて無くて……ハーマイオニーがシリウス・ブラックから贈られた畏じやないかっていつて先生にチクつてマクゴナガル先生が持つて行っちゃったんだ」

「ハーマイオニー……鋭いわね」

私はロンの顔を見るが、ロンもハーマイオニーに対してある程度苛立ちを覚えているらしい。

「酷いと思うだろ！ ファイアボルトだぜ!? ウッドもカンカンさ。毎日のようにマクゴナガル先生に抗議に行ってるよ」

「まあハーマイオニーの考えも間違つてはいないわね。でも少し用心が過ぎるわ。それに少し飛んでみればわかることじゃない」

もつとも、贈った本人は私だが、プレゼント主はブラックなのでハーマイオニーの予想は正しい。

だがハリーを殺そうとするのであればわざわざ500ガリオンも出してファイアボルトを買う必要はない。

新しいニンバスでよいのだ。

「咲夜からもマクゴナガル先生に言ってやってくれよ。早くハリーに箒を返させて」

「その必要はないわね」

「何故さ!?!」

聞き耳を立てていたのかロンと共にハリーも声を荒げた。

私は2人に落ち着くように言ってから理由を話した。

「ハリーはどうやってグリフィンボールの最年少シーカーになったんだっただかしら?」

「それはマクゴナガル先生に空を飛ぶところを見られて……退学になるかと思ったけど違つて……そうか」

ロンは気が付いたようだった。

ハリーはまだ訝しげな顔をしていたので説明を続ける。

「規則を捻じ曲げてまでハリーをシーカーにして自らのポケットマネーで箒を買い与えるぐらいマクゴナガル先生はハリーや自分の寮に関しては甘いわ。必ず次の試合までには箒は返つてくるはず」

勿論私のこの言葉は箒が何ともないという前提での話だ。

だが箒に変な魔法が掛かってないのは保証できる。

私が注文した箒だからだ。

「絶対返つてくるからハーマイオニーと仲良くしなさい。もう小さくないんだからこんなことで喧嘩しないの。ハリーだつてハーマイオニーの行動がハリーを思つてのこと

だってわかってるんでしょ？」

「分かっているけど……」

理屈では分かっているけどやはり納得はいかないようだ。

するとグリフィンドールのキャプテンであるウッドがハリーに近づいてきた。

顔を見るに良い情報を持ってきたというわけではなさそうだった。

「ハリー、悪い知らせだ。マクゴナガル先生に箒のことで話をしに行ってきたんだが、先生は……その俺に対しておかんむりでね。ハリーが死ぬか生きるかよりクイディッチ優勝杯の方が大事だと思ってるんじゃないかって言われちゃった。俺はただスニッチを捕まえたあとだったらハリーが箒から振り落とされたって構わないって、そう言うただけなんだぜ？」

「あら、マクゴナガル先生の言うこともあながち間違いではなさそうよハリー」

私がそう茶化すとウッドはこちらをジロリと睨んだ。

私は冗談よと言わんばかりに肩を竦める。

「まったくマクゴナガルの怒鳴りようだったら……まるで俺が何か酷いことを言ったみたいじゃないか」

「言っただんじやないの？」

「言っていないさ！俺はただファイアボルトがあれば今年こそ優勝杯を獲得できるって

……。ハリー、もしかしたら新しい箒が必要になるかもしれない。この前貸した『賢い箒の選び方』の後ろに注文書が付いている。ニンバス2001なんかどうだ？ マルフォイと同じ奴」

ハリーはウツドの提案を聞いて少し考えるように顔を伏せた。

先ほどの私の言葉を思い出しているのかもしれない。

「咲夜の話では箒はそのうち返ってくるらしいけど……。買うとしてもマルフォイがいいと思っっているやつなんか、僕は買わないよ」

ハリーはそういうと口の中にオートミールを掻きこむ作業に戻っていった。

ウツドは驚いたようにその言葉を聞くと私のほうに振り向く。

「箒が返ってくるって本当かい？」

私は席を立ち鞆を持つとウツドに向けて言った。

「マクゴナガル先生も貴方と同じぐらい優勝杯が欲しいということよ」

そう言い残すと私は大広間から外に出る。

そしてトイレの個室に入ると時間を止めた。

私はそのまま個室から出て校庭へ出る。

そしてそのままホグズミード村の方向に向けて一直線に飛んだ。

前までは律儀に横穴を通っていたが、今思えばその必要はないだろう。

ホグズミード村を通り過ぎ私は叫びの屋敷内に入る。

そしてブラックに見えない位置で時間停止を解除した。

「ブラック、死んでないかしら？」

私がブラックに呼びかけると一匹の犬が顔を出す。

そしてその犬は一瞬のうちに人間の姿へと戻った。

「死んでたら魔法省は大喜びだったろうね。死んでないが」

久しぶりに見るブラックは痩せこけていたが死んではいなかった。

身だしなみもそこそこ整えているらしく、あつて間もないころほど汚くない。

私は鞆から大皿に盛られたパスタを取り出すと、パスタに掛けられた時間の停止を解

除させた。

途端に広がるパスタの香りにブラックは目を丸くする。

「君の鞆がミートソースまみれになってないことを祈るよ。それと、私のことはシリウスと呼んでくれると嬉しい。ブラックの姓にはいい思い出がない。もつとも、向こうにも私のことを家族とと思っている奴はいないだろうが」

「召し上がれ？ ガリガリの『ブラック』さん。あ、なんかガリガリのブラックって黒胡

椒挽いてるみたいね」

私はブラックにフォークを手渡した。

ブラックはそのフォークを恭しく受け取る。

そしてその辺のボロ布をナプキンに変え、パスタを食べ始めた。

「そうだ、ハリーが新しい箸で練習しているところをまだ見てないんだが、箸はどうなったんだ？　ちゃんと贈れたのか？」

ブラックがパスタをフォークで巻き取りながら聞いてくる。

「贈ったわ。ファイアボルトをね。500ガリオンもしたけどあれが最高峰らしいし」

ブラックはその言葉を聞いて分かりやすいほどに喜んだ。

「そうかファイアボルトか。話には聞いていたがあれをハリーが……よくやってくれた。感謝してもしきれないよ。だが練習をしてないのは何故だ？」

「貴方からの贈り物じゃないかって怪しまれているからよ」

「私からの贈り物だと何の問題が……。大ありだな」

ブラックは頭を抱える。

多分そこまで考えていなかったのだろう。

「呪いが掛かってないか検査しているだけだからそのうちハリーの手に渡るわよ。ハリー自身は親友と大喧嘩するぐらい嬉しかったようだわ」

「親友と大喧嘩？　それは何のことだがわからないが、なんにしても喜んでもらえたなら何よりだ」

ブラックは安心したようにパスタを掻きこみ始めた。

私はその横に水の入ったコップを置く。

「なんにしてもしばらくは大人しくしておきなさいな。ペティグリューは私が見張っておくから。それじゃあそろそろ授業が始まるし、私は行くわ」

ブラックがフォークをあげるような動作をする。

私はそれをわかったというサインだと判断し時間を止めホグワーツへと戻った。

2月に入るころにはようやくハリーの手元にファイアボルトが返ってきていた。

ハリーはそれをまるで戦争に送り出していた息子が帰ってきたかのように喜んでいたのを覚えている。

それからしばらくはハリーは注目の的だった。

いや、ハリーではなくファイアボルトにみんな興味があったただけだろうか。

なにせ500ガリオンもする筈だ。

学生という身分で持っているというだけでスターだろう。

私は今クイディッチの観客席に来ている。

ハリーが今から試合に向けての最後の練習を行う為だ。

私はグラウンドを見下ろす。

そこにはグリフィンドールの選手とフーチ先生、そしてロンがいる。

フーチ先生がファイアボルトを手に取りながら何かうんちくのようなものを話しているのが見えた。

ハリーと他の選手たちはその説明に聞き惚れていたが、ウッドがそれを中断させた。

「フーチ先生？ ハリーは練習をしないといけないので……その……」

「ああ、そうでしたね。はい、ポッター、それじゃあ私は向こうで……十六夜のところで座っていきましょう」

先生自身も実際に実物を手に取って見たのは初めてなのだろう。

いつもから快活な先生だが、今日はいつも以上に目をキラキラとさせていた。

「あれはいい筈です。ええそうですね。ミス・十六夜もそう思いますよね？」

フーチ先生はロンを連れてこっちへと歩いてくる。

ロンもフーチ先生と負けず劣らずの様子だった。

「ええ、そうですね。フーチ先生。そろそろ練習を始めるですよ」

いい筈なのは知っている。

私が選んだものなのだから。

ハリーが地面を蹴るとファイアボルトは信じられないような速度で急発進をした。

あつという間にグラウンドの端まで飛んでいき、速度を保ったまま一気にターンを決める。

「確かに凄い速さね。箒に乗っているとは思えないような速度だわ」

「どういうことだ？ 箒に乗ってないとあんな速度は出ないだろうか？」

ロンが私に聞き返した。

私はそうね、と軽く呟くとハリーの方を見る。

ハリーはウッドが放したスニッチをあつという間に捕まえる。

そして逃がし、捕まえ、逃がし、捕まえを繰り返す。

そのキヤッチのどれもが今までのモノよりキレが良く、何よりも早かった。

「あれなら敵なしだ。そうだろう咲夜」

「そうね。最高速だけ見たらお嬢様よりも速いかもしれないわ。比べてみたことがないからわからないけど」

もつとも、私はお嬢様が本気で空を飛んでいるところを見たことはないが。

「吸血鬼ってそんなに速く飛べるのかい!？」

「スニッチだってあんなに速く飛ぶじゃない。セストラルとかの魔法生物はもつと速いわよ」

「おつたまげ。でも今のハリーだったらそのセストラルにも勝っちゃうかもな」

「それは否定しないわ」

そう言い切れるほど今日のハリーは絶好調だった。

「そろそろ練習が終わるみたいだね。ハリーにファイアボルトに乗せてもらおうっていう約束しているんだ。ちよつと行ってくる！」

グリフィンボールの選手がロッカールームに入っていたのを見てロンがグラウンドに駆けていった。

私はそんなロンを見送りながらフーチ先生に言った。

「私も飛んでみようかしら。許可を出してくださいさる？ ……先生？」

返事がないので私は先生の顔を覗き込む。

どうやら先生は居眠りを始めてしまったみたいだ。

私は肩を竦めると鞆からオークシャフト79を取り出す。

この筈には数えるほどしか乗ったことがない。

いつも大事に鞆の中へと仕舞っていた。

「さて、行きますか」

私はオークシャフト79に跨ると本来の性能ではありえない速度で加速した。

理屈は単純だ。

ただ普通に空を飛び、その時間を早めているだけである。

もつとも動くこうと思えば光より速く動ける私だ。

速度という概念は余り関係ない。

私は楽しそうに空を飛んでいるロンに近づくと横に並び、声を掛けた。

「やっぱりいい箒は違う?」

「——ツわ!?! 咲夜かい? 君箒なんて持ってたっけ?」

「2年生の頃から持っているわよ」

「そうだったのか。うん、こりやたまらないよ。この加速、この最高速。うん凄い。見てー!」

ロンが一気に加速しようとする。

私は時間の緩急を調節してロンにびったりとついていった。

「本当に凄い速度が出るのね。感心しちゃうわ。これをハリーにプレゼントしてくれた人に感謝ね」

「ホントだぜ。もうこの際シリウス・ブラックからの贈り物でもいいや」

ロンは急旋回するとハリーの横に降り立った。

「ハリー、この箒凄いや。これならレイブンクローなんてイチコロさ」

「ああ、レイブンクローのシーカーはチョウ・チャンらしいけど、箒はコメット260号だ。ウッド曰くファイアボルトと比べたらおもちゃらしい」

「それはどうか分かりませんよ」

いきなりフーチ先生の声がして私たち3人は恐る恐る振り返る。

その声色が少し怒ったような感じだったからだ。

「何故起こさなかつたのですか！ ブラックが何処から現れるか分からないのですよ？

こんなに暗くなるまで箒で遊んで……まあ気持ちはわかりますが。早く城に入りな

さい」

「先生、「分からない」とはどういう意味ですか？ ファイアボルトがコメント260号

に負けるとでも？ ご冗談を……」

フーチ先生は驚いたような顔をして私の持つている箒を指さした。

「気が付いてなかつたのですか？ 先ほどそこにいるミス・十六夜はこの箒でファイア

ボルトと並走していたのですよ？ どんな箒でも乗り手次第ということですよ」

ロンは先ほどの空での会話を思い出すように頭を捻ると、ようやく私の悪戯に気が付

いたのか私を見た。

いや、正確には私の持つている箒を見た。

「咲夜の箒、見たことないやつだけ……ニンバスの最新作かい？」

どうやらロンはこの箒を知らないようだ。

フーチ先生が首を振るうと丁寧に説明してくれる。

「この箒はオークシャフト79といって1879年に作られた長距離移動用の箒です。1935年には大西洋横断に使われたこともある由緒正しき箒なのですよ」

「骨董品じゃないか!? 僕の飛行はそれに負けたのかい?」

ロンがファイアボルトとオークシャフト79を見比べて声を荒げた。

「それとは失礼ね。お嬢様からいただいた大切な物よ。10秒以内に訂正しないとその舌を切り落と——」

「大変貴重で素敵な箒です。僕のスキルが未熟なだけです」

ロンが私の袖元で光る銀色の光を見て咄嗟に訂正した。

「でも乗り手のスキルなら大丈夫だ。ハリーは箒の性能で選ばれたシーカーじゃない。ハリー、そうだろう?」

「勿論だとも。咲夜、今度の試合は絶対勝つ」

ハリーとロンは楽しそうに肩を組んで歩いていく。

私とフーチ先生はその後ろ姿を見ながら城の中へと入っていった。

次の日の朝、私はいち早く朝食取ると時間を止め、分からない程度に料理を皿に取り
鞆へと入れる。

今日はクイディッチの試合がある日だ。

故にブラックが何処かへ行ってしまう前に行動を制限しなければならない。

いつもは大人しくしているブラックだが、ハリーのことになるとう本当は何をするか分からないのだ。

私は時間を止めたまま城を文字通り飛び出し叫びの屋敷へと急ぐ。

「ブラック、いるかしら。勝手に試合に行くんじゃないわよ？」

私がブラックの姿を発見した時には既に横穴を通ろうとしているところだった。

尻尾を掴み引きずり出し、口にトーストを突っ込む。

ブラックは犬の姿からもとへ戻ると、痛そうにお尻をさすりながらトーストを齧った。

「痛いじゃないか。人間でいうところの髪の毛を引っ張られているようなものなんだぞ？」

「貴方ここでの生活が快適過ぎて自分が殺人の容疑で指名手配されていることを忘れてない？」

私のその言葉にブラックがギクリとする。

その様子だと本当に一瞬忘れていたようだった。

「だが聞いて驚くな。今日はこれがある」

ブラックは先ほどまで口で啜っていた黒っぽい布を私の前に広げた。

「ジエームズが持っていた透明マントを見様見真似で作ってみたものだ。効果が切れるのは早いが一晩は持つ。これで……」

私は能天気なことをいうブラックに大きなため息をつくど頭を抱える。

この様子を見せたら殺人の容疑も晴れるんじゃないだろうか。

「犬の状態だとずり落ちるわよ、それ。ほら、貸して」

私はブラックから疑似透明マントを受け取るとずり落ちないように加工をしていく。

足跡も残らないように足元に布を被せるような形で縫製した。

「少し落ち着きなさい。ホグワーツの秀才さん。そういえば、ハリーの元に箒が返ってきてたわよ。今日の試合はファイアボールトで出場すると思うわ」

「そうか、それはよかった。いつかハリーに私が送り主だと明かせる日がくるといいのだが……。よし、行こう」

ブラックは犬の姿になり器用に私が縫製したマントを着る。

ブラックの姿は見えなくなるが、足音と匂いから察するに横穴を通っていったようだ。

私はその後を追った。

久々に横穴を通るとその長さに嫌気が差してくる。

永遠と続くのではないかと思えるほどの横穴を通り過ぎると暴れ柳の下からホグワーツに出た。

まだクイディッチの試合には早い、一足先に競技場へと向かう。

そして1番上の普段誰も座らないようなところに透明なブラックと共に座った。

「さて、吠えるんじゃないわよ。吠えた瞬間喉元にナイフが刺さるものだと思いなさい」

「クーン」

ブラックが小さな声で唸った。

それは一体どういう声なのだろうか。

いつもは尻尾と表情で大体何が言いたいか分かるが、今はそのどちらも隠れている。

まあ分からなくても問題はない。

私は横にいるブラックの後ろに鞆を置き、ブラックの位置に誰も座らないようにする

と競技場を見回した。

競技場には段々と生徒が集まってきている。

10分もしないうちに競技場は生徒で埋め尽くされた。

先にレイブンクローの選手が入場し、遅れるようにグリフィンドールの選手が入ってくる。

ハリーの手にはしっかりとファイアポルトが握られていた。

それを見つけたのかブラックは透明マントがはだけそうになるほど尻尾を振っている。

グリフィンドールのキャプテンとレイブンクローのキャプテンが握手をし、フーチ先生のホイッスルで試合が開始された。

ハリーが他のどの選手よりもいち早く地面を蹴り上空へと飛翔する。

そして偵察機のようにスニッチを探し始めた。

「全員飛び立ちました！ 今回の試合の見どころは何と言ってもグリフィンドールのハリー・ポッター選手が操るファイアボルトでしょう。『賢い箒の選び方』によれば、ファイアボルトは今年の世界選手権大会ナショナル・チームの公式箒になってい——」

実況をしているリー・ジューダンはそんな調子でファイアボルトを褒め続け、マクゴナガル先生に怒られている。

レイブンクローのシーカーであるチョウ・チャンは正面からの勝負では勝てないと踏んだのかハリーを執拗に付け回していた。

ハリーがスニッチを見つけたらそれを横から攫うという作戦だろう。

少し姑息のような気はしなくてもないが、そうやることでしかハリーの箒に勝てないと踏んだのだ。

確かに遠目で見ててもわかるほど、ハリーとチャンの箒の性能は違っている。

ウツドがコメント260号をおもちやだと言っていたのも頷けるほどだ。

私はハリーたちを目で追うのも疲れたので一旦目を休める為にも観客席を見渡す。

すると観客席の外れ、人目につかないところでドラコたちが黒いマントに身を包み何かをやっていた。

大方吸魂鬼のマネでもしてハリーを箒から落とすつもりなのだろう。

ドラコの作戦にハリーが引つかかった形になるのだろうか。

チャンがドラコたちを指さして声を上げる。

ハリーは見事ドラコ達の姿を吸魂鬼だと勘違いしたのか、杖を取り出した。

「エクスペクト・パトロ・ナムー！ 守護霊よ来たれ！」

驚いたことにハリーは守護霊の呪文を使ってドラコたちを吹き飛ばした。

形を形成するところまでは至らなかったが、守護霊らしきものが出ただけでも大したものだ。

ドラコたちはグラウンドの上でジタバタともがいている。

そうこうしている間にもハリーがスニッチをキャッチし試合は終了した。

グリフィンドールの勝利である。

「あら、チョウ・チャンはよく粘ったほうかしら。ほんとハリーはクイディッチに關しては天性の勘の持ち主ね。ブラック、帰りなさい。慎重にね」

私がそういうとブラックは満足したのか暴れ柳の方向に向けて歩いて行った。あの様子だったらまっすぐと叫びの屋敷に帰るだろう。

私は観客席から飛び降りると地面に転がっているドラコのもとへと向かった。黒く長いローブを脱げずジタバタとしているので私は手を貸すことにする。

ドラコはふらふらとしていたが、何とか立ち上がった。

「うう……ありが——咲夜!？」

ドラコは驚いたように私の顔を見る。

何故私がここにいて、ドラコを助け起こしているのかわからないと言った表情だった。

「まさかハリーが守護霊の呪文を使えるなんてね。貴方も知らなかったのでしょうか?」

「ああ、そうだけ……ど……」

ドラコは私より後ろを見るように視線を向け、そして固まった。

私は大体予想がついているのでゆっくりと振り返る。

そこには鬼の形相のマクゴナガル先生が立っていた。

「あさましい悪戯です! 試合中のシーカーに危害を加えようとは下劣で卑しい行為ということを自覚しているのですか? 全員処罰の対象となります。さらにスリザリンからは50点減点です。このことはダンブルドア先生にも報告させてもらいますから

ね。そしてミス・十六夜。貴方はここで何をしていますのですか？」

マシンガントークとは少し違うが、マクゴナガル先生は呪文でも唱えるかのように捲し立てた。

「私はドラコが倒れていたの助け起こしただけですわ。ドラコ、罰則頑張つてね」
私はそう言い残すと城の中へと向かう。

今日は談話室は1日中パーティー会場と化すだろう。

早めに女子寮の方へ上がるか図書室に籠るか悩むところだ。

なんにしても、少しぐらいならパーティーに参加してもいいという気分だった。

グリフィンドール談話室では既にパーティーが始まっていた。

もう既に優勝杯を獲得したかのような騒ぎようだ。

1回試合に勝っただけでこれならば、優勝した場合どうなるのだろうか。

今のうちに談話室の窓という窓に飛散防止処理を行っておいた方がいいかもしれない。

私は紅茶や飲み物を配り、食料が無くなったら足し、物がこぼれたらふき取りと、何故か運営側の仕事をしていた。

クリスマスパーティーの癖が抜けていないのだろうか。
なんにしても忙しいことこの上ない。

だが、たまにはこういうのもいいだろう。

私は余興にとフレッドが持ってきた果物を数個上に投げると投げナイフで全て撃ち落とす。

落ちた果物は皿の上に落ち、食べやすい大きさに切れた。

やんややんやと喝采を浴びる。

私は静かに頭を下げると、一人パーティーに参加していないハーマイオニーの方に近づいて行った。

ハーマイオニーは手に『イギリスにおける、マグルの家庭生活と社会的慣習』と書かれた本を持っており、それを熱心に読みふけている。

「あら、ハーマイオニー。その本って果たして読む意味あるのかしら。その本よりも貴方のほうがマグルの生活には詳しいんじゃないやなくて？」

私が声を掛けるとハーマイオニーはちらりとこちらを見て、すぐさま本に視線を戻す。

「魔法使いの視点から見るマグルの生活習慣って面白いものよ。もつとも偏見があったりとか、間違っているところがあったりとかはあるけどね」

ハーマイオニーは本のページを捲る。

「どうやら話をしながらでも本の内容は頭に入っているようだ。」

「何か持つてきまししょうか？」

「気にしないで」

ハーマイオニーは今度は私ではなくロンの方をチラリと見る。

実をいうと、今ロンとハーマイオニーは喧嘩をしているのである。

原因はブラックだ。

ピーター・ペティグリュウが化けているネズミを捕まえようとクルックシャンクスは奮闘しているのだが、そのネズミはロンが監督生のパーシーから譲り受けたペットのネズミなのだ。

ロンはハーマイオニーの猫がスキヤバーズを狙っていると思い込んでいる。

そして最近僅かな血と共にスキヤバーズ、ペティグリュウがロンの元から消えたのだった。

もつとも、クルックシャンクスが捕まえたわけではない。

捕まえていたとしたら今頃ペティグリュウはブラックに殺されているだろう。

だがロンはクルックシャンクスがスキヤバーズを食べたと思いついでいる。

ハリーが間に立って仲直りさせようとはしているが、それも上手くは行っていないよ

うだ。

そんなようなことを話していると、ハリーがパーティーから抜けてこちらにやってきた。

「試合には来なかったのかい？ ハーマイオニーも咲夜も姿を見なかったけど」「行きましたとも」

ハリーのその問いにハーマイオニーは妙にツンツンした態度で返した。

「私も上の方の席で見てたわ。ハリー、貴方いつの間に守護霊の呪文が使えるようになったの？」

「最近ルーピン先生に習ってたんだ。今度箒から落ちたら本当にウッドに殺されちゃうよ」

ハリーは恥ずかしそうに頭を掻く。

「ハーマイオニーも何か食べたほうがいいよ。せっかくのパーティーだし……」

「無理よ。私この本を月曜日までに読まないといけないの。まだあと422ページもあるのよ！」

ハーマイオニーがヒステリック気味に叫んだ。

「それに、あの人が私に来てほしくないって視線で訴えてるわ」

ハーマイオニーは重そうに視線を上げロンの方を見る。

ロンはその視線に気が付いたのか聞こえよがしに言った。

「スキヤバースが食われちまってなければなあ……ハエ型ヌガーが貰えたのに。あいつ、これが大好物だった——」

そんなロンの言葉を聞いてハーマイオニーがワツと泣き出した。

ハリーはどうしていいか分からずおろおろとしている。

「まったく……2人とも子供過ぎるわ。ハーマイオニー、行きましよう？」

私は泣いているハーマイオニーの手を掴むと女子寮の方に引つ張っていく。

そしてハリーには視線でロンのフォローをしろと伝えておいた。

私はそのままベッドのある部屋まで引つ張っていき、ハーマイオニーを自分のベッドに腰かけさせる。

そして邪魔が入らないようにこの部屋だけを時間軸から隔離した。

ようは時間が止まった世界でこの部屋だけの時間停止を解除したということである。

「ロンの言葉なんて気にすることはないわ。クルックシャンクスは決して馬鹿な猫じゃない」

「でも、ロンのネズミは……状況から考えても……」

ハーマイオニーもクルックシャンクスがスキヤバースを襲ったものと考えているようだ。

まあ襲ったのは事実だが、まだ死んでいないのは確かだろう。

「大丈夫。スキヤバースはそのうちひよっこり出てくるわ。ロンが貴方に悪口を言った分だけ貴方のほうが有利になるのよ」

「そうかもだけど……」

ハーマイオニーがすすり泣く。

私は優しくその背中を撫でた。

「色々と背負い込みすぎなのよ。ロンとの喧嘩のこともそうだけど、授業のことだって。貴方逆転時計使ってるでしょ」

私がそういうとハーマイオニーがびっくりしたような顔をした。

バレていないと思っていたのだろう。

「バレていないと思っていたの？ あんな適当な言い訳に納得するのはハリーとロン、あとはネビルぐらいよ。大方マクゴナガル先生が貴方可愛さに無理やり魔法省から許可を取ったものだとは思うけど……いい？ 通常とは違う時間を生きるといのは色々不自由が生じるものなの。食事もそうだし、睡眠時間だって長く取らないといけないわ。でもあなたの様子を見てみると、そのどちらも疎かにしているでしょう？」

「咲夜、このことは内緒に……」

「それは勿論だけど……いい？ 逆転時計とは別に普通の時計を一つ持ちなさい。その

時計は別に時刻が合ってなくてもいいわ。起きてから何時間経ったのか、最後に食事を取ったのはいつか、何時間眠ることができたのか。異なる時間に生きるということはそういうことよ」

私は鞆の中から1つの機械式の懐中時計を取り出す。

そして懐中時計の竜頭をつまみ香箱内のゼンマイを目いっぱい巻いた。

その懐中時計をハーマイオニーに手渡す。

「毎朝起きたらこの懐中時計のゼンマイを巻いて時刻を12時に合わせることに。頭のいい貴方ならこの時計を見るだけで大体の体調管理が出来ると思うわ」

「わあ……、綺麗な時計ね。こんなの借りてもいいの？」

「あげるわ。もつとも、こんなお古なんていらないうんだったら返してくれてもいいけど」

「そ、そんなこと……ありがと。大切にするわ」

ハーマイオニーは目に涙を浮かべながらもニツコリと微笑んだ。

「大切にしないといけないのは時計じゃなく貴方の体よ」

私がそう言うのとハーマイオニーは顔を真っ赤にする。

「それじゃあ、私はパーティーに戻るわね。私が居ないとグリフィンドールの談話室が爆発しかねないもの。勉強頑張って」

く。

一気に男子寮の階段を駆け上がり、中に入ると信じられない光景が広がっていた。何故か男子寮に人間姿のブラックがいるのだ。

体勢から察するに談話室の肖像画のほうに逃げているのだろう。

いや、そんなことはどうでもいい。

問題は何故ブラックがここにいるのかだ。

私は男子寮から談話室に戻り、肖像画の前まで行く。

そして時間停止を解除し、肖像画を開いた。

途端にバタバタとこちらにブラックが走ってくる。

「この馬鹿！　なんでこんなところまで侵入しているのよ！」

私はブラックにそう叫びながらジェスチャーでブラックを急かした。

ブラックは滑り込むように肖像画を抜けると、犬の姿に変身する。

私はそのあともブラックの後ろ姿を追うようにしてブラックの後ろを走った。

まだ騒ぎが起こってからそれほど時間は経っていない。

ゴーストや教師に見つかることなく私たちは暴れ柳の近くまで来ることが出来た。

「急いで叫びの屋敷まで戻りなさい。そして言い訳でも考えておくことね。ちゃんとした理由がなかったら明日の朝食抜きにするわよ！」

私はそういうと犬の姿のブラツクの尻に足を付け、一気に蹴り飛ばした。

ブラツクは放物線を描いて暴れ柳の下にある横穴へと落ちていく。

「はあ……はあ……。もどろ……」

私は時間を止め呼吸を整える。

ここまで犬の走る速度で全力疾走してきたわけなので、流石に息が切れる。

ブラツクがいる手前時間を止めて逃がすわけにもいかない。

私は汗と呼吸が落ち着くの待って、談話室へと戻った。

私が時間の止まった廊下を戻っていると、マクゴナガル先生が苛立ちを隠せないと言った顔で肖像画を潜っているとところだった。

私はそこで時間停止を解除し、マクゴナガル先生と共に談話室へと入る。

「おやめなさい！ まったく、いい加減にしなさいよ貴方たちは!!」

マクゴナガル先生は開口一番に談話室にいる生徒を叱りつけた。

「グリフィンドールが勝つたのは私も嬉しいです。でもこれではあまりにもはしやぎすぎです！ パーシー、貴方がもう少ししっかりしなければ……」

マクゴナガル先生のそんな言葉にパーシーは憤慨した。

「先生、僕はこんなこと許可してません！僕は皆に寮に戻るようには言っただけです。

弟のロンが悪夢にうなされたようで……」

「悪い夢なんかじゃない！ 先生、僕、目が覚めたらシリウス・ブラックがナイフを持って僕の上に立っていたんです！」

ロンがパーシーの言葉を否定するように必死に叫んだ。

だがマクゴナガル先生はそんなバカバカしいことがあるかといった表情をしている。

「先生、ロンの言っていることは本当ですよ。私は叫び声がしてすぐ談話室に降りましたが走って逃げていくブラックの後ろ姿を見ました」

私その言葉にマクゴナガル先生は不可解な顔をしながら太った婦人の代理を務めているカドガン卿に話を聞きに行った。

談話室にいた面々全員がその会話に耳をそばだてる。

「カドガン卿、先ほど男を一人通しましたか？」

マクゴナガル先生の声だ。

「通しましたぞ！ ご婦人」

カドガン卿はその問いに対し嫌に誇らしく言葉を返した。

「と、通した？ 合言葉は!？」

「持つておりましたぞ！ それも一週間分も。小さな紙切れを順番に読み上げておりました」

その答えに皆がネビルの方を見る。

太った婦人の代理で談話室の前にいるカドガン卿は1日に2回も合言葉を換え、そのどれもがややこしいものだったのでネビルはそれを紙に書いて持ち歩いていたので。

マクゴナガル先生は顔を真っ青にしてこちらに戻ってくる。

「誰ですか」

先生の声は震えているが、とても怒りに満ちたものだった。

「今週の合言葉を書き出してその辺に放っておいた底抜けの愚か者は一体誰です？」

みんなに心配そうに見つめられながら、ネビルが今にも気絶しそうな顔でそろそろと手を上げた。

ああ、こういうのを、蛇に睨まれたカエルというのだろうか。

私は取り合えずブラックを無事逃がすことが出来たので女子寮に帰り眠ることにした。

私が女子寮に上がろうとするとバタバタと多くのグリフィンドール生が階段を降りてくる。

その中にいたハーマイオニーは私の姿を見つけると困惑した表情で聞いてきた。

「ねえ、男子寮にブラックが出たって話を聞いたんだけど。本当？」

「本当よ。もう逃げたわ。私はまだ眠いから寝るわね」

ふらふらと手を振りハーマイオニーの横を通り過ぎる。

ハーマイオニーは慌てたように私の手を掴み引き留めた。

「不用心すぎるわ！ ブラックが出たのよ!？」

「そうは言うけどハーマイオニー。逃げたならここに戻ってくることはないでしょ?」

私はハーマイオニーの手を振りほどきベッドまで移動する。

そしてパジャマに着替え直しベッドに潜り込んだ。

取り敢えず、明日の朝ステーキでも持ってブラックに会いに行こう。

話はそれからだ。

朝起きて談話室に行くと、まだ多くのグリフィンドール生が談話室でブラックの話をしていた。

どうやら殆どの生徒が昨日眠っていないらしい。

私は座り込んでいる生徒を踏まないように気を付けながら肖像画の方に行く。

そして肖像画を開け外に出ようとすると何人もの生徒に引き留められてしまった。

「まだブラックが校内をうろついているかもしれない!」

「危険だ! いくらキリングマシンの君だからって!」

「廊下でブラックに鉢合わせたらどうする!？」

と、こんな調子だ。

だが私は朝食を取らなければならない。

そしてどこからかステーキを調達しなければならないのだ。

談話室でじつとしてゐる時間はない。

「離しなさい。もしブラックに遭遇したら、その時がブラックの最期よ」

私の手を掴んで引き留めている女子生徒に私はそう言い放つ。

その女子生徒は私の顔が怖かったのか短く悲鳴を上げると私の手を放した。

「それと、さつき私のことキリングマシーンって言った人、後で折檻ね」

私はそう言い残すと肖像画を潜りぬけた。

そのまま大広間に向かい、誰もいないグリフィンドールのテーブルで簡単な食事を取るとテーブルを見渡す。

残念ながらステーキの姿はない。

まあ朝食の席でステーキが出てきたらそれはそれで驚くが。

どうにか出来ないかと頭を悩ませていると、少し前に聞いたブラックの言葉を思い出した。

確か厨房への入り方だったか。

用事がなかったため今まで訪れたことはなかったが、いい機会なので行ってみるこ

にする。

確か地下廊下だったか。

私は廊下を進みながら梨が描かれている絵画を探す。

数分もしないうちに果物皿の絵画を見つけたことが出来た。

「確か梨をくすぐるのよね」

私は手で梨の描かれているところをくすぐる。

すると梨は身をよじりながら笑い、急に大きな緑色のドアノブに変わった。

私はそのドアノブを掴むと恐る恐るドアを開ける。

そこには思っていたよりも大きな空間が広がっていた。

上の階にある大広間と同じぐらい広く、壁にはピカピカと輝く真鍮の鍋やフライパンが山積みになっている。

部屋の奥には大きな暖炉があった。

私が入ってきたのに気が付いたのか、多くの屋敷しもべ妖精がこちらに向けてお辞儀をする。

軽く数えても100人以上はいるだろうか。

全員がホグワーツの紋章が入ったキッチンタオルをトーガのような形で身に着けていた。

「これはこれはお嬢様、よくいらつしやいました。紅茶などいかがでしょう？」

「これを貰ってください。お友達とお食ってください」

「これはようこそホグワーツの厨房へ。狭いところですがゆつくりとくつろいでください」

屋敷しもべ妖精は寄つてたかつて私の世話をしようとする。

私は自分が何人もいるような感覚に襲われた。

「いや、紅茶はいいわ。私、ステーキを取りにきたのだけれど、流石に朝食中には作つてないわよね」

「すぐさまお作りしますとも！ 少々お待ちください。焼き加減はいかがでしたでしょうか？」

「ミディアムレアで願いますわ」

何人も屋敷しもべ妖精が私の要望を聞いて飛ぶようにコンロのもとへと向かつていく。

屋敷しもべ妖精とは、このような生物なのかと改めて感じた。

本当に人に仕えるのが好きな種族なのだろう。

料理を始めている屋敷しもべ妖精の顔を見ても凄く生き生きとしている。

「ステーキが出来るまで紅茶でも飲んでお待ちください」

「今茶菓子をお持ちします。お嬢様」

「クツションです。これにお座りください」

とまあこんな感じだ。

フレッドとジョージがたまにたんまりと料理を持つてくることがあるが、多分厨房に貰いに行っているのだろう。

この様子なら、頼めばいくらでも出てくる筈だ。

10分ほど紅茶を飲みながら屋敷しもべ妖精と話をしていると、いい感じに焼きあがった厚切りのビーフステーキがアツアツの鉄板に乗っているものが運ばれてきた。

私はそのステーキの時間を止めると無造作に鞆に放り込む。

その様子を屋敷しもべ妖精たちは不思議そうな顔をして見ていた。

「無理な要望に応えてくれてありがとう。何かあったらまた頼っていいかしら」

私がそういうと屋敷しもべ妖精たちは全員が手を振って応えてくれた。

私はそのまま厨房から出て廊下に戻り、時間を停止させる。

そしていい気分のまま叫びの屋敷へと向かった。

試験とか、誤解とか、気絶とか

男が1人、フラフラと獣道を歩いている。

その足取りは弱々しく、今にも地面に倒れそうだ。

男の服はもう何日も洗っていないような汚さで、男自身の汚れも酷い。

その男は何を指して歩いているのだろうか。

目はうつろで、今にも死に絶えそうだった。

やがて男は大きな屋敷を見つけると、もう限界だとばかりにその門の前に倒れた。

「今日の水やりはこれで終わり！ さて今度は朝食の準備でも……あら？」

その男を、庭の植物に水をやっていたメイドが見つける。

メイドと言っても、いつものチャイナ服の上にエプロンをしているだけだ。

彼女は紅美鈴。

そう、男は紅魔館の前で力尽き、倒れ伏したのだった。

「人？ が死んでる。いやまだ生きてる？ なんにしてもご馳走ゲット……いや食うところないぐらい痩せてるなこの人」

美鈴はその辺に落ちていた木の棒で男をツンツンと突いた。

男は動かない、動けるような状態ではない。

美鈴は何か悩むように考えると、何かを思いついたように手を叩いた。

「そうだ。太らせてから食べよう！　そうと決まればお嬢様に許可を〜」

美鈴は男をその場に放置すると鼻歌交じりで紅魔館の中に入っていく。

そして5分もしないうちに男の元へと戻ってきた。

「さて！　お嬢様の許可が得られたところで、まずはこの人間を綺麗にしないとね。食べ物も清潔に。パチュリーにでも頼んだら一瞬かな？」

美鈴は意識のない男を乱暴に肩に担ぎ紅魔館の中へと入っていく。

それはごく普通の紅魔館の日常だった。

私の前にはアツアツのミディアムレアのビーフステーキが置いてある。

そしてその向かい側にはブラックが涎を垂らしてステーキの前に座っていた。

「ホグワーツの屋敷しもべ妖精が腕によりをかけて焼いたステーキよ。食べたい？」

「食べたい！」

ブラックが目キラキラさせる。

私はステーキをブラツクの手が届かない位置まで引き寄せた。

犬のしついで大切なのは餌を与えるタイミングだ。

「じゃあ冷めないうちに昨日のことを話すことね。私が納得いく説明が得られたら食べていいわよ」

私のその言葉にブラツクは途端に表情を曇らせる。

そしてやむなしとばかりに口を開いた。

「わかった、私が悪かった。軽率な行動だったと私も思う。だが仕方がなかった。クルックシャンクスが談話室の合言葉らしきものを持ってきたんだ。あいつをこの手で捕まえられると思うと居ても立つても居られなくなつて……少し間違えば私はアズカバンに戻っていただろう」

「わかればよろしい。ほんとと心臓に悪いからやめてよね。ハリーを心配するハーマイオニーの気持ちが分かってきたわ」

私はステーキをブラツクの方に押し付ける。

ブラツクは何処からともなくナイフとフォークを取り出すと満面の笑みでステーキに齧り付いた。

「アズカバンと言えば……今更な話にはなるが、君はどうやって私を助けたんだ？ いきなり私の前に現れたが……」

ブラックは口一杯にステーキをモキユモキユしながら私に聞いた。
本当に今更な話だ。

「おいそれと話せるようなものではないわ。でも連れ出したのは姿現しのようなものと答えておくわね。魔法具ありきでの力だから今は使えないけど」

「そうか。君はいつも音も無く突然現れ、そして突然消えるから何か特殊な魔法を身に着けているものだと思うっていたのだが……」

ブラックのその言葉に私はギクリとする。

凶星だったからだ。

私は表情を取り繕うと、そう特別な物ではないとブラックに告げた。

「まあ確かに普通とは少し違う力を持つてはいるけど、何でもないようなものよ」

ブラックは取り敢えず納得したようだった。

ナイフでステーキを切り、口の中に入れていく。

肉の切り口から焼き加減が分かるが、屋敷しもべ妖精とは本当に料理が上手らしい。

「じゃあ、私は授業があるから学校に戻るわ。いい？ 次にかする時はもう少し慎重にやりなさい」

「分かってる。ああ、それと、ステーキありがとう」

私は呆れたように肩を竦めると、ブラックのいる部屋から出て時間を止め、ホグワー

ツへと戻った。

ブラツクの2度目の侵入以降、ホグワーツの安全対策が更に厳しくなった。結局あの後カドガン卿はクビになり、太った婦人が談話室前に戻ってきた。

そして婦人の要望なのか、肖像画の前にはよく躡けられたトロールが数匹警護についている。

それ以外にも、フリットウィック先生は校内のあらゆるところにブラツクの顔写真を貼り、生徒に人相を覚えさせ、フィルチさんは校内の穴という穴を板で塞いでいた。

先生方もピリピリしており、日が暮れてから外に出るなどもつてのほかといった表情だ。

そんな中、私は呪文学の授業を終え、占い学の授業を受ける為に北塔に向かって歩いていた。

階段を上り梯子を上り、私は占い学の教室へと入る。

教室の小さなテーブル一つに白い靄のようなものが詰まった水晶玉が置いてある。

前回の授業で次の時間には水晶の授業を行うと先生が言っていたのを思い出す。

私はハリーたちの姿を見つけ、その近くへと腰を下ろした。

「みなさま、こんにちは」

トレローニー先生がいつものように薄暗がりの中からゆつくりと登場する。

この授業のお決まりのパターンだ。

「あたくし、少し早めに水晶玉をお教えることにしましたの。6月の試験は玉に関するものだと、運命があたくしに知らせましたのよ。それであたくし、みなさまに十分練習させてさしあげたくて」

その先生の言葉にハーマイオニーがフンと鼻を鳴らした。

「あらまあ。『運命が知らせましたの』……どなたさまが試験をお出しになるの？ あの人自身じゃない！ なんて驚くべき予言でしょう！」

ハーマイオニーは声を小さくするような配慮もせず先生に聞こえるような声で言った。

トレローニー先生は聞こえているようだったが、いつものごとくハーマイオニーの言葉を無視する。

「水晶占いはとても高度な技術ですよ。水晶玉の無限の深奥を初めて覗き込んだ時、みなさまが初めから何かを見ることは期待していませんわ。まずは意識をリラックスさせるところから始めましょう」

そして皆が水晶を見る作業に取り掛かった。

お嬢様も水晶を用いて運命を見ることがある。

お嬢様曰く、ティーカップに見えるものよりも鮮明に運命を見ることが出来るらしい。

私は机の上に置かれた水晶玉を覗き込む。

何かが見えるような気もするが、よくは分からなかった。

お嬢様は運命を見通す時、どのようにしていただろうか。

確か水晶玉を驚掴みにし、妖力のようなものを水晶に籠めていた記憶がある。

そうすると水晶玉は煌々と紅く光り始めるのだ。

私はお嬢様がやっていたのを思い出しながら水晶玉を手を取った。

水晶はひやりと冷たく、そしてすぐ手に馴染む。

あとは妖力だが……霊力で代用できないだろうか。

私は水晶を胸の前まで持ち上げ、そのまま霊力を籠め始めた。

すると水晶玉はゆっくりと光を持ち始める。

お嬢様のような紅色ではない。

透き通るような青い光だった。

「あまり一気にやると割れちゃうわね。慎重に……」

私は水晶に籠める力を徐々に強めていく。それに応じて水晶玉の光は増していった。

私は光り輝く水晶玉を覗き込む。

何かが見えるだろうか。

水晶の中の靄は形を変え、蠢く。

だが、私はそれに意味を見出すことはできなかった。

「お嬢様のようには無理ね」

私は水晶玉を机の上に戻し、霊力を籠めるのをやめる。

そして視線を上げるとトレローニー先生の顔がとても近くにあった。

「先ほどのたまさしくスカート嬢の！ 貴方も同じことができますの？」

先生の眼鏡で拡大されている目がまん丸に見開かれ、更に大きく見える。

「光らせることは出来ましたが、私にはその中に何かを見出す力は無いようです」

私はそういつて肩を竦めた。

横を見るとハリーたちもつまらなさそうに水晶玉を覗き込んでいる。

どうやら先ほどの光は見えていないようだった。

結構強く光っていたのだが、周囲を見渡してもこちらに視線を向けている生徒はいな

い。

「どうやら先ほどの光は先生と私にしか見えていないようだ。」

「先生は何か見えますか？」

私は水晶玉に指を触れさせ靈力を籠める。

水晶玉は先ほどと同じように煌々と光り出した。

「そうですね……あたくしには何か恐ろしく、そして強大なものが近づいているのが見えますわ。来年、気を付けあそばせ？」

確か妹様も来年のことを言っていた。

来年は何か特別な年なのだろうか。

「何か見えた？」

ハリーがロンとハーマイオニーに対して退屈そうに呟くのが聞こえてくる。

「そうだな……このテーブルに焦げ跡がある。多分誰かが蠟燭を倒したんだ。僕の水晶

玉にはそう出てるね」

「まったく時間の無駄よ。もっと役に立つことを練習できるといいのに……」

ハーマイオニーが水晶玉を突きながらそう言った。

「まあ！ 何事ですよ!?!」

先生がハリーの座っているテーブルの水晶玉を覗き込み大声を張り上げた。

ハリーはそれをうんざりしたような顔で見ている。

「ここに何かありますわ。何かが蠢いている。でも何が……」

ハーマイオニーは先生のそんな様子をイライラしたような顔で睨んでいた。

ハリーも絶対良いことは言われないうと云った表情をしている。

「まあ、貴方……ここにこれまでよりはつきりと……ほら、こつそりと貴方に忍び寄り、だんだんと大きくなるグリムの——」

「いい加減にしてよ!!」

先生が何かを言う前に耐え切れないといった様子でハーマイオニーが怒鳴った。

「また、あのバカバカしいグリムじゃないでしょうね!」

先生を含めたクラスの全員が目を丸くしてハーマイオニーを見ている。

先生は初めは驚いたような顔をしていたが、ゆつくり立ち上がると紛れもなく怒りがこもった表情でハーマイオニーを睨んだ。

「まあ、また貴方。こんなことを申し上げるのは少々心苦しいのですけども、貴方がこの教室に初めて現れたときからはつきり分かっていたことでございますわ。貴方には占い学という高貴な技術に必要なものが備わっておりませんの。まったく、こんなに救いようのない『俗』な心を持った生徒にまだかつてお目にかかったことがありませんわ」

「何が必要なものよ! 水晶の中にまがい物のグリムを見るのが占い学なのだとしたら、占いつて本当にどうしようもない学問よ! 結構、私もうやめるわ!」

ハーマイオニーはそういうと教科書を鞆に詰め込み始める。

私はそんなハーマイオニーに努めて冷静に言った。

「ハーマイオニー、私のお嬢様は占いの権威なのだけれど……占い学が、なんですつて？」

途端に辺りが静まり返る。

ハーマイオニーはカバンを持ったまま固まると、逃げるように梯子を降りて行った。

「咲夜。ハーマイオニーもカッカしてるだけだ。だから……その……ナイフ仕舞いなよ」

ロンの言葉に、私は手元を見る。

ロンの言う通り、そこには一本のナイフが握られていた。

「ちよつと自分の思い通りにならないからあんなこと言っただけだよ咲夜。だからハーマイオニーを殺さないでね」

ハリーが慌てて付け足す。

私も慌てたようにナイフを袖の裏に隠した。

「大丈夫、大丈夫よ。冷静、クールダウンよ私」

私はゆつくりと椅子に座る。

これではブラックのことを言えないかもしれない。

私は苛立ちを隠すように水晶玉を掴むと、これでもかというほど靈力を籠める。

そして次の瞬間爆発するように水晶玉が砕け散った。

「ふうっ」

その衝撃と共に私の苛立ちも霧散したような気がする。

先生はその様子を恐る恐ると言った表情で見守っていたが、すぐにいつもの調子を取り戻し授業を再開させた。

その後、クイディッチの決勝戦が終わる頃までハーマイオニーが私に話しかけてくることはなかった。

ハーマイオニーは私に殺されるとでも思っているのか、私の姿を見ると逃げていく。

そしてスリザリンを破ってグリフィンボールが優勝杯を手に入れた時の談話室のパーティーで、ハーマイオニーはようやく恐る恐るだがこちらに近づいてきた。

「あの……はあい、 咲夜」

ハーマイオニーの声色はまるで割れ物でも扱っているように慎重なものだった。

ハーマイオニーは意を決したかのように口を開く。

「ごめんなさい。貴方の仕えているお嬢様が占い学をやっている人だとは知らなくて……私酷いこと言ったわ。許してもらえないとは思うけど……」

ハーマイオニーは私に対し深く頭を下げた。

「あのさ……ハーマイオニーには私が殺人鬼か何かに見えるの？ どうしてそこまで恐る恐るなのよ。赤の他人ならまだしもハーマイオニーを殺すわけないじゃない」

私は優しい声で言う。

その言葉にハーマイオニーは苦々し気に笑みを浮かべた。

「赤の他人なら殺すのね……でも、悪いと思っているのは本当なの」

「怒ってないわ。まあ最初の頃は確かに怒ってたけど。でもよく考えたら美鈴さんとかも「運命を操る能力(笑)」とか言ってお嬢様に殴られているしね。でもーっだけ覚えておいて。占い学というのは本当に素質がないとどれだけ勉強しても意味がないわ。そして、お嬢様の占いはまさしく『本物』よ」

「ええ、わかったわ」

何か食べましょうか？ と私はハーマイオニーの手を取り料理が並んでいるテーブルの方に引つ張っていく。

今思えば、ハーマイオニーと喧嘩のようなことをするのはこれが初めてかもしれない。かかった。

クイディッチの決勝戦が終わって1週間もしないうちに学年末テストが始まった。

みんながクイディッチに夢中になっている間勉強していた甲斐もあり、私は好調にテストをこなしていった。

変身術ではティーポットを陸亀に変えるという課題が出た。

私は真紅の杖を振るいティーポットを陸亀に変える。

ハーマイオニーは自分の変化させた陸亀に納得がいかなかったのか、陸亀よりも海亀に見えたとぼやいていた。

呪文学では『元気の出る呪文』が実技として出された。

私はネビルに呪文を掛けたが、ネビルは元気になりすぎて部屋中を走り回った。

魔法生物飼育学では、レタス食い虫の面倒を1時間見るという簡単なものがテストで出た。

レタス食い虫は放っておくと最高に調子がいいのだ。

ほほ何もすることなくテストは終わり、殆どの生徒が満点だったことだろう。

魔法薬学では『混乱薬』を調合するという実技が出た。

私は魔法薬学は得意なほうだ。

正確に分量を量り正確に調合したら失敗など起きるはずもない。

その後も天文学、魔法史、薬草学とテストが行われていく。

そして最後から2番目の闇の魔術に対する防衛術のテストは少々変わった形式のものであった。

屋外での障害物競争のようなものだ。

多分採点基準は突破した時間と対処の方法だろう。

私は難なく障害を全て突破したが、殆どの生徒が最後のまね妖怪を突破するのに手間取った。

理由は1番初めに行ったまね妖怪を使った授業にある。

あの時に見た妹様をトラウマに思っている生徒が多かったらしく、試験中に殆どの生徒がまね妖怪を妹様に変身させてしまったのだ。

そのせいでテスト中に気絶する生徒も出始め、マダム・ポンフリーがルーピン先生に對して怒っていた。

そして最後に占いのテストがあった。

1人ずつ占いの教室に入っていく、水晶に見えたものを答えるのだという。

私は自分の名前が呼ばれると教室の中に入っていく。

「こんにちはミス・十六夜。貴方には期待していますわ。さあさあここに腰かけて。こ

の水晶玉を覗き込むのです。ゆっくりでいいのよ。見えたものをあたしに教えてくださいいな」

トレローニー先生はそういうと私を水晶玉の前に座らせた。

私は水晶玉を掴み靈力を籠める。

この中に何かが見えなければ、この試験でいい点は取れないだろう。

私は蠢く靄の意味を考えるのはやめ、光を見て頭の中に浮かぶ情景を口に出していった。

「これは……お嬢様かしら。美鈴さんも見えるわ。何かを話しているみたい」

「何を話していますの?」

私は意識を集中させる。

「これは……夕食のメニューに関してですね。何故トーストとみそ汁を一緒に出すのか

と美鈴さんがお嬢様に怒られています」

「それはそれは……なんともよくわからないですわね」

「あ、美鈴さんがお嬢様に叩かれました。先生、これは一体!」

私とトレローニー先生は顔を見合わせる。

先生は私の目をじつと見ると神妙に呟いた。

「正直、あたくしにもわかりませんわ」

……私にもよくわからなかった。

テストが終わり談話室でのびのびとしているとハーマイオニーが神妙な顔をして口
ンと何かを話していた。

そこにハリーも加わり、やはり悲しそうに顔を伏せる。

何かあったのだろうか。

「何かあったの？ ……その手紙」

ハリーたちは一つの手紙を持っている。

その手紙には辛うじて読み取れるような字でドラコに怪我を負わせたヒツポグリフ
が処刑されるという内容が書かれていた。

そういえばと、私は新学期ホグワーツに来るときにドラコに聞いた話を思い出す。

「最近何かと裁判の事を調べていると思ったら、これのことだったのね」

「咲夜、なんとかならないかな？」

ロンが続けるように私に言う。

私としても何とかしてあげたい気持ちもあるが、決まったことはどうしようもないだ
ろう。

「それに、一応控訴したんでしょ？ それで駄目ということは上から大きな権力が押し掛かっているということよ。私にはどうしようもないわ」

私のその答えに3人は唖るように顔を伏せた。

話を聞き限りだと、この3人はクリスマスマスの時からどうにかバックビークが処刑にならないように色々と調べていたらしい。

珍獣1匹の為にそこまで出来る3人の優しさに、私は驚きを隠せなかった。

「なんにしても、ハグリッドの元に行かなきゃ。ハグリッドが1人で死刑執行人を待つなんてそんなことさせられないよ」

だがハグリッドからの手紙には処刑は日没だと書かれている。

野外に出る許可は下りないだろう。

ハリーは頭を抱えて考え込んだ。

「透明マントさえあればなあ……」

「なくしたの？ あんな貴重な物を？」

私が聞くとハリーは前回のホグズミード村行きの際にスネイプ先生に見つかりそうになり、抜け道の入り口にマントを置いてきてしまったと明かした。

私は呆れたようにため息をつく。

そして鞆を開き、中からハリーの透明マントを取り出した。

無論、初めから入っていたわけではない。

靴を開いた時に時間を止め、抜け道まで取りに行っただけだ。

私は目を丸くしているハリーに透明マントを手渡す。

「お父さんの形見なのではないですか？ 大切にしないさい」

「でも、どうして咲夜が？」

ハリーが不思議そうに聞いた。

「マジックよ」

私はハリーのもつともな疑問をその一言で誤魔化した。

私はその後皆と一緒に大広間に向かい夕食を食べた。

ハリーたちは凄い速度で夕食を掻き込んで飛び出していったが、大方ハグリッドを慰めにいったのだろう。

私としてはヒツポグリフの生死など全く興味がないのでゆっくりと夕食を味わう。

このローストビーフなど最高だ。

もしかしたら料理の腕では少し屋敷しもべ妖精に負けているかもしれない。

……厨房を借りて練習など出来ないだろうか。

そうしているうちにも日が沈んでいく。

そういうえばヒツポグリフは鳥のような馬のような姿をしているが、美味しいのだろうか。

もしヒツポグリフの死骸を譲ってもらえるようだったら、調理してみるのもありかもしれない。

いや、ハグリッドのことだから埋葬したいというか。

私としても埋葬された死骸を掘り起こしてまで食べようとは思わない。

私は時間を止めるとテーブルからローストビーフや野菜などを盛り合わせ鞆の中に入れる。

そしていつものように叫びの屋敷を目指し城を飛び出した。

道中ハリーたちの姿が見えないかと周囲を見渡したが、見つからない。

よほど上手に透明マントで隠れているのだろう。

私は叫びの屋敷に着くと時間停止を解除し中に入る。

だがそこには誰もいなかった。

「おかしいわね。餌の時間にはいつもいるのに」

完全に犬でも飼っているかのような感覚だったが、正直あまり変わらないだろう。

毎日食事を与え、たまにクイディッチ観戦という名の散歩に連れていき、面倒を見る。

成り行きで世話を始めたが、今では完全に日課になっていた。

「まあそのうちやつてくるわね」

私は当初と比べると見違えるほど綺麗になったベッドに腰かける。

ゆつくりと日が沈んでいくのが見える。

そして数分もしないうちに太陽はどっぷりと沈んだ。

バックブリークの処刑が終わった頃だろうか。

私としては生物1つの生き死にの為に大金をかけて裁判をする理由が分からない。

適当に殺してハイおしまいじゃダメなのだろうか。

それとも大人の事情というやつだろうか。

そんなアホなことを考えていると横穴のほうからドタバタと音が聞こえてくる。

ブラツクが帰ってきたのだろう。

私はそう予想したが、そのドタバタ音と共に聞こえてきた聞き覚えのある悲鳴を聞いて認識を改める。

「やめろ！ 放せッ！ この！ 犬めッ!!」

それはロンの声だった。

物音からして引きずられているようだ。

何に？

いや、この場合ブラック以外にはありえないだろう。

その物音は徐々にこちらへと近づいてきており、最終的にはロンの足を啞え引きずっているブラックが私のいる部屋へと入ってきた。

「咲夜!?! なんて君がここに!?!」

ロンがブラックに引きずられながらも私に聞いた。

私はそれを黙って見下ろすことしかできない。

ブラックは部屋の中央までロンを引きずると、そこで人間の姿に戻る。

「ああ、咲夜。ここにいたんだね。すまない、今日はどうも夕食の時間は取れなさそう
だ」

ロンは人間の姿に戻ったブラックを見て口をあんぐりと開けていた。

まさに言葉が出ないと言った表情だ。

「あら、ロン。怪我してるじゃない。だめよブラック。いくら抵抗されたからってこんな強引に引きずっちゃ……」

私はロンの横に屈みこみ、変な方向に折れ曲がったロンの足の治療を始めた。

時間を止め、丁寧に治療の魔法を掛けていく。

マダム・ポンフリーのように魔法一つではいれないが、重ね掛けすることによって

ロンの足は元通りに戻った。

そして時間停止を解除し改めてブラックに向き直る。

「こうして連れてきたということは、スキヤバーズはロンの手に戻ったのね」

「ああ、クルックシャンクスが教えてくれた。今しかないと思ひ咄嗟にな……」

「そ、そんな……まさか咲夜が……」

ロンがまさに息も絶え絶えといった様子でこちらを見ている。

大方私がブラックの仲間か何かだと思っているのだろう。

「ロン、貴方勘違いしているわ。私はただブラックに……」

「ロン！ 大丈夫!? 犬は何処？」

私がロンに向けて説明をしようとしたらクルックシャンクスとハリーとハーマイオ

ニーがロンに駆け寄ってくる。

ロンを追ってきたということだろう。

「犬じゃない」

ロンが2人に向けて言った。

「あいつが犬なんだ。……あいつは動物もどきだったんだ！」

ロンがそう言うが早いかブラックがハリーたちが入ってきた扉を閉めた。

そして杖を持っている2人に向けてブラックは武装解除の呪文を掛ける。

ハリーとハーマイオニーの持っていた杖は宙を舞うと、ブラックの手に収まった。

「君なら友を助けに来ると思つた」

ブラックがハリーを見てしみじみと語る。

まるで息子を自慢しているかのような口ぶりだ。

「君の父も私の為にそうしたに違いない。君は勇敢だ。先生の助けすら求めなかつた。まあ、その方が私としても都合が良いが」

いやそれは自慢以外の何物でもないのである。

ブラックはハリーと話が出来てとても幸せそう。

ハリーは恨めしそうにブラックを見て、そしてその視線を私のほうにも向けた。

「咲夜！　また君か！　なんで君はいつもいつも事件の一番奥で待ち構えているんだ！？」

ハリーが私に対して怒鳴る。

ハーマイオニーはブラックを観察して気が付いたかのように声を上げた。

「嫌に綺麗だわ。逃亡中なのだとしたらもっと汚れていて痩せこけているはずなのに……。咲夜、貴方もしかして……」

私が口を開く前にブラックがハーマイオニーの問いに答える。

「咲夜君にはお世話になった。毎日甲斐甲斐しく私に食事を運んできてくれた」

ハーマイオニーがやっぱりと云つた表情で手で顔を覆う。

酷い誤解だ。

いやブラックの言葉に嘘はないのだが、もう少し言い方というものがあるだろうに。毎回誤解を解くこっちの身にもなつてほしい。

もうなんというか、諦めてブラックの側についたほうがいいだろう。

「そうね。ここ一年間、私はブラックの世話をしてきたわ。食事を与え服を与え杖を与え。でもねハリー、それもこれも——」

「僕を殺す為か!？」

私の言葉を遮るようにハリーが怒鳴った。

「昨夜は分かかっていない!。こいつは僕の父さんと母さんを殺したんだ!!」

ハリーはブラック目掛けて杖もなしに跳びかかる。

私はもうお手上げと言わんばかりに肩を疎めるしかなかった。

ブラックはそんなハリーの様子に相当大きなショックを受けたのか、杖を上げそこなっている。

ハリーはブラックの手首を掴み捻りあげ、ブラックの杖を奪うとそのままブラックの横顔を殴りつけた。

ブラックは何が起こつたか分からないと言った表情でハリーを見ている。

このまま乱闘になるのも拙いと考えたので、流石に間に割つて入る。

だが怒ったハリーは私にも遠慮なく殴りかかってきた。

私はそのハリーの拳を掴み、捻りあげると重心を移動させ、ハリーを地面に叩きつける。

そしてハリーがブラックから奪った杖を今度は私が奪い返した。

「いい加減にしなさい。ハリー・ポッター。見苦しいわよ」

私は右手でハリーに杖を突き付けながら左手でブラックを助け起こす。

ハリーはなおもブラックに襲い掛かろうとしたが、流石に状況が状況なのでハーマイオニーが必死にしがみつきハリーを引き留めた。

私はブラックに杖を渡し、再度ハリーたちに向き直る。

ハリーたちは警戒するようにブラックと私を睨みつけていた。

「もう、貴方のせいよ。これじゃあ私が悪者じゃない」

私はブラックを睨みつける。

ブラックは申し訳なきそうにこちらに目を向けた。

「さて、ハリー。話を聞いてくれ。これは大事な話だ」

ブラックが優しい声色でハリーに話しかける。

だがハリーにはそれが死の宣告に聞こえているような様子だった。

「君は誤解をしている。いや、君だけじゃない。魔法界全体が私を誤解していると言っ

「の方がいいだろう」

ブラツクのそんな話などハリーの耳には入っていないようだった。

だが杖を突き付けられている手前、動くことも出来ないだろう。

その時、1階の方向から何か物音が聞こえてくる。

ブラツクはその音を聞き話を一度中断すると私のほうを向いた。

「見てきてくれ。私はこの子たちを見ている」

「ええ、わかつたわ」

私は杖を持ったままハリーたちの横を通りドアの方に向かう。

その時ハリーに「裏切者！」と言われてしまったが無視した。

私が階段を降りて1階に降りるとそこには杖を構えているルーピン先生が立っていた。

ルーピン先生は警戒するように私に杖を向けたが、私だと分かると咄嗟に杖を下ろす。

「君は今上から降りてきたが、上はどうなっている？」

ルーピン先生は声を潜めて私に聞いた。

「ブラツクがハリーたちが怪我をしないよう見張っています。でも今にも乱闘を始めそうな勢いなので早いところ誤解を解かないと……」

「その様子だと、君はもしかして——」

「ええ、知っています。貴方とブラツクの関係も、ペティグリュウの居場所も」

私がそう告げるとルーピン先生は驚いたように目を丸くした。

やはり事情を知っている人は話が早くて助かる。

「実は今年一年ブラツクの世話をしていたんです。ブラツクから色々と聞きましたわ。

ペティグリュウのことや先生のことを。とにかく、今は急いで上の階に」

「ああ、わかった。すぐ向かおう」

ルーピン先生は私の後に続いて階段を上っていく。

そしてハリーたちのいる部屋に入ってしまった。

私もそれに続く。

「シリウス、あいつはどこだ？」

ルーピン先生はブラツクの顔を見ると開口一番にそう尋ねた。

ブラツクはルーピン先生の顔を見ると静かにロンのローブを指さす。

私もその指を目で追うが、ロンのローブはそこだけ妙に盛り上がっていた。

多分あそこに入っているのはペティグリュウが変身しているスキヤバーズだろう。

「なるほど、あいつは君とあの時入れ替わりになったのか。だから地図にあいつが……」

「ルーピン先生？」

ハリーが心配そうな声を出した。

ハリーはきつとルーピン先生が自分たちを助けに来たものだと思っただろう。

だがルーピン先生は全てを察したような顔を見ると、シリウスを久しく会った兄弟のように強く抱きしめたのだ。

ハリーはその光景を見て絶望的な顔をした。

それはロンもハーマイオニーも同じだった。

「そんな……なんてことなの!?! 先生まで!」

先生までの『まで』とは私の事を指しているのだろうか。

だとしたら当たりでもあるし外れでもあるだろう。

ハーマイオニーはどうもルーピン先生もブラックの仲間だと思っただろう。

「わ、私……先生の為に隠していたのに……」

「ハーマイオニー、話を聞いてくれ」

ルーピンが事情を説明しようと優しくハーマイオニーに話しかける。

だがその言葉はハーマイオニーを更に混乱させるだけだった。

「僕は先生を信じてた! 咲夜のことだ! でも、2人ともずっとブラックの仲間だったんだ!」

今度はハリーがいつもの痲癩を起したように怒鳴った。

もうなんだか色々と面倒くさい。

ここにいる全員を殺して今すぐ紅魔館に帰りたい気分だ。

「それは違う。この12年間私はシリウスの仲間ではなかった。しかし、今となっては大事な友だ。説明させてほしい」

ルーピン先生は必死に語り掛ける。

だがその言葉をハーマイオニーが遮った。

「ダメよ！　ハリー、騙されないで……2人はブラックが城に入る手引きをしていたのよ。この人も貴方の死を願っているんだわ。この人、狼男なのよ！」

ハリーたちは驚いたような顔でルーピン先生を見る。

ルーピン先生はその事実を明かされて青ざめてはいたが、至って冷静だった。

私は沈黙を破りハーマイオニーに話しかける。

「ハーマイオニー。貴方らしくないわ。残念だけど、ルーピン先生はブラックが城に入る手引きはしていない。それをしていたのは私よ。それに、多分だけどハリーの死を願ってはいないと思うわよ。そしてそれは私も、ここにいるブラックも同じだわ」

「ああ、そうだ。そして、私は自分が狼男であることを否定しない」

私の言葉にルーピン先生がそう付け足した。

「やっぱりそうだ！　先生と咲夜がブラックの仲間だったんだ！　この裏切り者！」

そんなハリーの言葉に私とルーピン先生は肩を竦める。

ブラックはそんなハリーの言葉がショックで仕方ないのか、今にも気絶しそうな顔を片手で覆い隠している。

「わけを話させてくれれば、きっと君たちは納得するだろう。 咲夜」

先生が私の持つている杖に目線を落とし私の名を呼んだ。

多分ハリーたちに杖を返せと言っているのだろう。

私は素直にその言葉に従いロンとハーマイオニー、そしてハリーに杖を返した。

そして自分の杖はローブへと仕舞う。

ルーピン先生もブラックも、私に習い、杖を仕舞った。

「ほーら。これで君たちには武器がある。私たちは丸腰だ。話を聞いてくれるかい？」

私たちの行動に、ハリーたちはわけが分からないと言った表情をしている。

ルーピン先生は分かりやすいよう一つずつ話をしていった。

ルーピン先生がここに来れた理由。

スキヤバーズが動物もどきであるということ。

その正体は死んだはずのピーター・ペティグリューで、ペティグリューは死んだふりをしたただということ。

ブラックとペティグリューが動物もどきである理由。

叫びの屋敷の正体。

ルーピン先生はそれらを1つずつ説明をしていく。

その話は大体この1年間でブラックから聞いた話の通りだった。

ルーピン先生は一通り説明を終えると、改めて私のほうに向きなかつた。

「今度は君が話してくれ。正直、私も何故君がここにいて、ブラックの仲間になつていたかが分からない」

これは困つたことになつた。

はつきり言つて、よい言い訳が思いつかない。

果たして何処まで話してよいものだろうか。

だが私は話を始める前に先ほどから気になつてゐることを片付けることにした。

「ステューピファイ！」

私はルーピン先生の横を通り抜けるように麻痺呪文を撃つ。

その呪文は部屋にいる『透明な何者か』に当たると、その何者かを見事に気絶させた。

ゴトリという物音がしてそのものが倒れる。

私はその何かに近づくと、上に覆いかぶさつてゐる物を取り払つた。

そこから現れたのはスネイプ先生だった。

先ほどから透明マントに隠れて部屋の中にいたのだろう。

私はマントを丸めてハリーに投げる。

「また置き去りにしたのね」

私はハリーに対し呆れたようにため息をついた。

「ご、ごめん。ロンを助けるために無我夢中で……」

まあ物より友ということだろう。

私は気絶したスネイプ先生は放っておいて話を始めようとした。

「えっと、私の話ですよ。まず——」

「いやいやいや」

ルーピン先生が私の話を遮る。

「何故ここにスネイプ先生が？ それ以前によくわかったね」

半笑いのルーピン先生は気絶したスネイプ先生の頬を突くと感心したように言った。

「人の気配を感じ取るのには慣れてるんです。多分ルーピン先生の後を追ってきたのではないのですか？ いつからこの部屋にいたかはわかりませんが……。さて、邪魔者もいなくなつたところでスキヤバーズがペティグリューである証拠を見せましょうか。ロン、ネズミを渡しなさい。今すぐに」

スネイプ先生の突然の登場とあつけない退場に周囲が気を取られているのを利用して私は強引に話を進めていく。

このまま私とブラックの関係を有耶無耶にしておもう。
流石に堂々とアスカバンからブラックをここに連れ出したのは私だとは言えないか
らだ。

「冗談はやめてくれ。スキヤバーズなんかは手を下す為にわざわざここまでしたのか
?」

「ロン、渡しなさい」

「ネズミなんて何百万というじゃないか！ 何でスキヤバーズだつてわかるんだよ！」

「ロン？」

私がギロリと睨むとロンは黙ってスキヤバーズを私に渡した。

スキヤバーズは私の手の中でジタバタと暴れる。

私はスキヤバーズの時間を遅くし、動作をゆっくりなものへと変えた。

「ロンの疑問ももつともだ。シリウス、何故スキヤバーズがペティグリューだと分かつ
たんだ？」

「新聞だ」

ルーピン先生の問いにブラックはポケットからくしゃくしゃになった新聞の切れ端
を取り出した。

そこには旅行中のロンの家族の姿と、ロンの肩の上に乗っているスキヤバーズの写真

があった。

「ロンドンで偶然拾ったものだ。私にはすぐにこのネズミがアイツだと分かった。こいつが変身するのを何度見たと思う？」

ブラックは私の掌でゆくりともがくペティグリュウを指さした。

「なんにしても、こいつの変身を解けばわかることだ」

ブラックはそういうとスキヤバーズに向け杖を振るう。

私が手を放すとスキヤバーズは宙に浮かび、そこに静止した。

その様子を見て何をするか分かったのかルーピン先生も杖を構える。

そして掛け声と共にスキヤバーズに同時に魔法を掛けた。

途端にスキヤバーズは地面に落ち、小太りの人間へと姿を変える。

私は直接見たことはなかったが、多分この男がペティグリュウなのだろう。

人間に戻されたペティグリュウはどうしていいか分からないように周囲を見回している。

「やあ、ピーター。しばらくだったね」

「シ、シリウス……それにリーマスも……」

ペティグリュウはまるで今2人の存在に気が付いたかのように2人の名前を呼ぶ。

ブラックが杖を上げようとするがルーピン先生がその腕を押さえた。

取り敢えず証拠は揃った。

これでハリーたちもブラックの言葉に耳を貸すだろう。

私は先ほど気絶させたスネイプ先生に近づく。

何か違和感があるのだ。

私は看病する旨をブラックに伝えるとそのままスネイプ先生を部屋の外まで引きずらないように運んでいく。

そして隣の部屋のベッドに降ろそうとした瞬間、スネイプ先生は飛び起き私に杖を突き付けた。

「動くな。十六夜咲夜。あの時私には麻痺の呪文ではなくお得意のナイフを投げつけておくべきだったな」

スネイプ先生はゆっくりとベッドから起き上がる。

少しでも動けば死の呪文でもなんでも掛けるぞと言わんばかりの勢いだ。

「それだと先生を殺してしまいますわ。なんにしても……途中で気が付いてらしたので
すか？ それとも初めから全て演技か……」

私は何も持っていないと主張するように手を体の前で組んでスネイプ先生と向き合う。

部屋の隣では徐々にペティグリューが追い詰められていくような会話が聞こえてきていた。

「無論、学生の未熟な魔法など、防ぐのは容易い。答える、貴様は何をするためにブラックに加担した？ 何故ブラックと接触した？」

「ブラックは無罪でペティグリューは生きて——」

「そうではない。それを知るにはまず初めにブラックに接触しなければならない筈だ」
隙のない表情でスネイプ先生は私を睨みつける。

このまま時間が過ぎれば誰かがこちらの部屋に来て、この状況を打開してくれるだろう。

だが、それはスネイプ先生にも分かっていることだ。

私は小さくため息をつく、自分でもどうかと思うような歪で気味の悪い笑みを作った。

「何故私がブラックと接触したか、ですよね。それは先生も分かっているらっしゃるので
は？」

スネイプ先生は何も言わない。

黙って私に杖を突き付けている。

私は時間を止めるとスネイプ先生の杖を手から抜き取り、先ほどと同じ体勢を取る。
そして時間停止を解除した。

「——ッ!？」

スネイプ先生の視線が自分の杖腕を睨み、横に滑るように私の手に持たれている杖に移る。

どうやら杖を奪われたことを認識したようだ。

私はスネイプ先生の杖を掲げるように構える。

「少し気絶しててください。『先生』」

そして再度麻痺呪文を掛けた。

次の瞬間、私の体は後ろへと吹き飛ばされた。

何が起こったか分からない。

確かに麻痺の呪文を唱えたはずなのだが、杖の先からは何もでなかった。

いや、この感覚、これは……。

「その杖は魔法を使った術者自身に魔法を返すのだ。十六夜咲夜よ」

スネイプ先生はローブから1本の杖を取り出す。

その杖を見て私はようやくスネイプ先生の仕掛けた罠に掛かったのだと理解した。体から力が抜け、偽物の杖が落ちる。

スネイプ先生が私に向かい何か呪文を掛けようとしているのが見えた。

私は渾身の力を振り絞り魔法を掛けられるギリギリで時間を停止させる。

そしてそのまま床に倒れ伏すと、私は意識を失った。

満月とか、医務室とか、ふくろう便とか

私の意識が覚醒したのはそれからしばらく経ってからだった。

スネイプ先生が今まさに私に何かの魔法を掛けようと杖を振り上げたまま止まっている。

私は怠い体を無理やり地面から引き剥がすとスネイプ先生の持っている杖を奪い取り、私が先ほど掴まされた偽物の杖と取り換える。

そして本物の杖を先ほど偽物が落ちていた場所に置くと、私は先ほどと同じように地面に倒れ伏し、時間停止を解除させた。

先生が杖を振るうと同時に呪文が逆に放たれスネイプ先生を吹き飛ばす。スネイプ先生が驚きを隠せないといった顔で壁に激突し、意識を失った。

これで五分と五分だ。

まだ体に麻痺の呪文が残っているのか、私はそのまま意識を失いそうになる。

私は転びそうになりながらもスネイプ先生の杖を拾うと、それをポケットにしまった。

次の瞬間、物音を聞きつけ駆けつけてきたルーピン先生が部屋の入り口から顔を出

す。

「一体何があつたんだい？ その……2人とも元気がなさそうだ」

私はよろよろと床から立ち上がる。

掃除をしておいてよかつた。

以前のままでつたら、制服が埃だらけになっていただろう。

「いえ、2人とも自分の魔法が暴発しただけです。それよりもペティグリューは？」

「まだ死んではない。城に連行することになった」

それは何とも呑気な話だ。

私はスネイプ先生が自らの呪文によつて完全に伸びていることを確認すると、魔法で持ち上げた。

「ブラックのことだからその場でペティグリューを殺すと思つたのですが……」

「勿論、ブラックはそのつもりだった」

「ではハリーが？」

「ああそうだ」

大方ハリーが殺すなどでも言つたのだろう。

自分の両親をヴォルデモートに売り渡した張本人なのにだ。

……案外ハリーも私と同じで両親などどうでもいいと思つているのか？

私は気絶したスネイプ先生を浮かせたまま隣の部屋に移動する。

隣では縛られ猿轡を嘯まされたペティグリュウが床の上でもがいていた。

「咲夜、スネイプ先生は？」

ハーマイオニーが浮いているスネイプ先生を心配そうに見ながら言った。

「さつきよりもしつかり気絶しているだけよ。行きましよう？」

私は改めて部屋の中を見回す。

先ほどまでブラックを睨んでいたハリーの視線は、今度はペティグリュウに向けられている。

「どうやら、誤解は解けたようだ。」

私たちはペティグリュウが逃げないように気を付けながら階段を下り、横穴を通っていく。

横穴の天井は低く、スネイプ先生の頭をぶつけないようにするのに意外と労力を要した。

「これがどういうことなのかわかるかい？ ペティグリュウを引き渡すということが」

ブラックがハリーに話しかける。

私はブラックが絶対にその話を始めると思っていたので、スネイプ先生の頭に気を付けてつつ会話を耳を傾けた。

「あなたの罪が無くなる。自由になるということですか？」

「そうだ。しかし、それだけではない。誰かに聞いたかも知れないが……私は君の名付け親でもあるんだ」

ブラックの言葉に、ハリーは知っていると言葉を返した。

三本の箒での教師陣の会話を思い出しているのだろう。

「つまり、君の両親が私を君の後見人に決めたのだ。もし自分たちの身に何かあればと」
ブラックは私の後ろを歩いているので、表情を見ることは出来ない。

だが私はブラックが嬉しそうに、だが少しの恐れを持っているような顔をしていると容易に想像できた。

「これは例えばの話なのだが……あ、いや、勿論君がおじさんやおばさんとこのまま暮らしたいというなら、その気持ちはよくわかるつもりだ。でも、まあ……考えてくれないか？ 私の汚名が晴れたら、もし君が……別の家族が欲しいと思うなら……」

既にブラックの言葉は支離滅裂だ。

だがハリーはその意味を十二分に理解したようだった。

「貴方と一緒に暮らせる？ ダーズリー家と別れられるの？」

「無論君はそんなことは望まないだろうとは思う」

ブラックは少し落ち込んだように言う。

「よくわかる。共に暮らしている家族と別れるのはつらい。ただ、もしよかつたら私と、
と思つてね……」

むず痒い会話だ。

このギクシヤクした感じがたまらない。

ブラックも素直にハリーと暮らしたいとは言えないのだろうか。

私はフォローを入れようと口を開くが、言葉を発する前にハリーの大声が横穴に響いた。

「と、とんでもない！ ダーブリーのところなんか一刻も早く出たいです！ 住む家はありませんか？ 僕、いつ引越せますか!？」

つまるところ、ブラックとハリーの望みは同じだったというわけだ。

私は後ろに目が付いているわけではないので直接は見えないが、多分ブラックはステーキを食べていた時より強く満面の笑みを浮かべているだろう。

「落ち着くところに落ち着いた。といった感じかな？ 君には初めからこうなることが分かつていたのかい？」

前の方からルーピン先生が私に聞いてくる。

私はなんて言おうか迷った。

だがこの結果を見る限りブラックはダンブルドア先生側の人間だろう。

ブラックは自身を脱獄させたのは私だということをダンブルドア先生に報告するだろうか。

「いえ、私はただやりたいたいようにやっていただけです」

私はそう言葉を濁す。

お嬢様の指示を仰ぐのが一番確実だと考えたからだ。

しばらく歩くと暴れ柳の下に出た。

先頭を歩いていたクルックシャンクスが一番に飛び出し暴れ柳のコブを押してくれ
たらしい。

私たちが順番に這い出るが、暴れ柳が動く様子はなかった。

校庭は既に真っ暗だ。

私は周囲を見渡すが、城のほうにポツポツと窓から漏れる光が見えるだけで月明りも
ない。

上を見上げてても星が見えないということは、雲が空を覆っているのだろう。

私たちは杖明かりを頼りに校庭を歩いていく。

「少しでも変なまねをしてみろ、ピーター」

時折ルーピン先生がペティグリーを脅す声が聞こえた。

私はもう一度城の窓の明かりを確認する。

少しずつホグワーツに近づくように歩いているようだ。

すると、突然、空を覆っていた雲が途切れ月明りが校庭に差し込んだ。

私は月を見上げる。

今日はいいい満月だ。

……満月？

私は急いでルーピン先生の方を見る。

ルーピン先生は月を見上げたまま固まっていた。

「どうしましょう！ 先生は今日あの薬を飲んでいないわ！」

ハーマイオニーが叫んだ。

あの薬とはどの薬だろうか。

だが、私の予想が正しければ狼男になることを抑制させる薬であろう。

「逃げろ……逃げろ！ 早く！」

ブラックの低い声が校庭に響く。

「私に任せて逃げるんだ！」

狼男に変身したルーピン先生にブラックが犬の姿になって抑え込みにかかる。

私はそれに巻き込まれないように一歩後ろに下がった。

その時だった。

ペティグリュウがルーピン先生の落とした杖に飛びつき、近くにいたロンに呪文を掛けたのだ。

「エクスペリアームス！」

ハリーの武装解除の呪文がペティグリュウの手に当たりルーピン先生の杖を吹き飛ばす。

だがその瞬間にもペティグリュウは変身をはじめていた。

逃げられる。

ハリーもハーマイオニーも咄嗟にそう考えたのだろう。

ペティグリュウを捕まえようと飛びつくが、人間が素手で逃げるネズミを捕まえられないはずがない。

私は時間を止めてペティグリュウを捕まえようとした。

（お姉さまは貴方を不死鳥の騎士団に入れたらしいの。死喰い人にもよ。ようは3重スパイになれってことね）

妹様のそんな言葉が脳裏に響く。

もしお嬢様が本当に私を3重スパイとしたいのであればここでペティグリュウを捕まえるのは駄目だ。

一瞬私が迷っているうちに、ネズミになったペティグリュウは闇の彼方へと消えてし

まう。

もう捕まえることは出来ないだろう。

「シリウス！ あいつが、ペティグリューが変身して逃げた！」

私がブラックの方を見ると、狼男になったルーピン先生が森に逃げていくところだった。

ブラックはハリーの言葉を聞いて、ハリーの指さした方へ駆けていく。

ハリーはそれで安心だと思ったのかハーマイオニーと共にロンに駆け寄った。

私もスネイプ先生を地面に寝かせ、ロンの状態を見る。

目は半開きで口も力なく開いていた。

「ペティグリューはロンに何をしたのかしら」

ハーマイオニーがロンの目をこじ開け杖明かりで目を照らす。

瞳孔がしっかりと動いていることが確認できた。

「死んでないわね。取り敢えず城に行って誰かを呼んでこないと」

「そうだね。行こう」

私の言葉にハリーが返事をした次の瞬間、先ほどブラックが走っていった方向から犬の悲鳴のような鳴き声が聞こえてくる。

「シリウス！」

私たちはその声の主に身に覚えがあった。

先ほど向こうに駆けて行ったブラックが現在危機的状況だということだろうか。

「行きなさいハリー」

私は迷っているハリーに対して言う。

「ロンと先生は私が面倒を見ておくわ。ようやく出来た貴方の本当の家族なのでしょう？」

私の言葉にハリーは力強く頷くと悲鳴が聞こえる方向に駆けて行った。

「ロンを頼んだわ！」

ハーマイオニーもその後を追っていく。

しばらくすると、2人の姿は見えなくなった。

「エネルギー！ 活きよ！」

私は気絶しているスネイプ先生に魔法を掛ける。

スネイプ先生は気が付いたのか目を開け周囲の状況を確認する前に飛び起き私と距離を取った。

そして杖を構えようとローブに手を入れるが、無論ローブの中に先生の杖はない。

私は静かに杖を先生へと向けた。

「動かないでください、先生。傷に障ります」

「杖を向けながらという言葉ではないな」

スネイプ先生が朗々といった。

「あら、杖は傷を治すのにも使えますわ」

「その目的で君が杖を構えているのだとしたら、私としても助かるのだがな……そういうわけではなからう?」

「それはどうでしょう?」

私はクツクツと笑う。

スネイプ先生は鋭く私を睨んだ。

「あら大変ですわ! ロンがこんなところで倒れてます。早く手当てをしないと」

「ウィーズリーも君がやったのか?」

「まさか」

私はロンに視線を落とした後、スネイプ先生の目を見る。

スネイプ先生は私に開心術を掛けようとしているようだったが、私に開心術を使うことは出来ない。

「これをやったのはペティグリューです。逃げられてしまったのですよ。ロンはまさに飼いの鼠に腕を噛まれたということですよ」

「ほう、ではブラックの無実を証明することは出来なくなったということだな」

スネイプ先生はその事実を聞き不敵に笑った。

私はスネイプ先生が何を考えているか理解する。

何とかしてブラックをもう一度アズカバンに放り込みたいのだろう。

私はローブから先生の杖を取り出すと、先生に投げ渡した。

先生はその杖を本物かどうか確かめるように眺めると、不思議そうにこちらを見る。

「なんの真似だ？」

「おかしなことをいいますね。それは先生の杖でしょうか？　ならば先生が持つべきもの

です」

「そういう意味ではない」

「ではそういう意味です」

私は杖をローブに仕舞うとロンを抱き起こす。

先生はそんな私の様子に拍子抜けしたかのように警戒を緩めた。

私はその辺に落ちている木の棒に魔法を掛け担架に変化させると、ロンをその上に乗せた。

「私も先生も『自分の魔法』で勝手に気絶した。それでいいじゃないですか。もつとも、最初の一発に關しても五分五分です。いきなり呪文を掛けた私も悪いですが、隠れていた先生も悪いですからね」

私は担架を宙に浮かせる。

そしてスネイプ先生に向き直った。

「向こうのほうにブラックは駆けていきました。行きましょう先生」

「……待ちたまえ」

私がおスネイプ先生に背を向けて歩き出そうとすると、スネイプ先生は私に向けて杖を構えた。

「問題になりますよ？ 先生」

「一体何が目的なのだ」

先生は脅すような声で私に聞く。

私はもう一度スネイプ先生に向き直ると、杖を構えることなくゆっくりとした速度で先生に近づいていった。

1歩、2歩。

スネイプ先生は動かない。

そして私は胸に先生の杖が当たるほどの位置まで接近する。

そして静かに閉心術を解いた。

いや、ただ心を開いたのではない。

私がお嬢様に抱いている忠誠の気持ちだけをスネイプ先生に開示する。

スネイプ先生は驚いたように目を見開くと、開心術を解いた。

「仕えるべき主の為言えない。そういうことだな？」

スネイプ先生は私が開示した情報の意味を悟ったのか確認するように私に問う。

私はその言葉にゆっくりと頷いた。

「では先生、参りましょう。もしかしたらブラックを逮捕出来るかもしれません」

「そう言えば今日は魔法省大臣が城に来ていたな。引き渡せばマーリン勲章ものだろう」

スネイプ先生と私との間で暗黙の了解が生まれた。

スネイプ先生は私がブラックに接触していたことに関しては何も言及しない。

私はスネイプ先生に話を合わせ、無理にブラックの無実を主張しない。

ようは両者に都合がいいように話を合わせようということである。

はつきり言って、私としてはブラックが捕まったとしても何度でも助けることが出来る。

その場ですぐに処刑されない限りだ。

無実が証明できないブラックを人の目がある場所で助けるといのはリスクが余りにも高すぎる。

ここは一旦何も知らないふりをしてブラック逮捕に尽力しよう。

私たちがハリーたちの走っていったほうに向かうとハリー、ハーマイオニー、そしてブラックが湖の近くで何故か気絶していた。

私は気絶している理由が分からなかったが、スネイプ先生が空を指さす。

「吸魂鬼だ。まだ空に大量にいる。大方大勢の吸魂鬼に襲われ気絶したのであろう。何故吸魂鬼が逃げていったのかは分からんが」

スネイプ先生は杖を一振りするとその辺の木の棒を担架に変える。

私はハリーたちを持ち上げると担架に乗せた。

スネイプ先生はブラックを乗っている担架ごと縄で拘束すると、何か複雑な魔法を掛ける。

そして逃げられないように鉄の手錠でブラックと自分の腕を繋いだ。

「言っておくが——」

スネイプ先生がこちらを見る。

「連行している途中急にブラックが消えたりしたら、私はそれを君のせいにする。当然のことだ。それは分かっているな？」

「そうできないように先ほど複雑な呪文を掛けていたのではなくて？」

「念のためだ」

スネイプ先生はブラックの担架とハリーの乗った担架を引き城へと歩き出す。

私もハーマイオニーとロンの担架を引きながら後に続いた。

「誰も死ななかつたのは奇跡だ……こんなことは前代未聞、まったくスネイプ……君が居合わせたのは幸運だった」

医務室にファッジ大臣の声が響く。

私はスネイプ先生の横の椅子に座り先生の話に相槌をうつ機械と化していた。

「恐れ入ります。大臣閣下」

「マーリン勲章、勲二等……いや、私がやかましく言えば勲一等ものだ」

「まことにありがたいことです。閣下」

私は置物の人形のように身動きせず椅子に座り続ける。

スネイプ先生は私のことに関しては今のところ何も言っていない。

ならば私も先生の言葉に頷くだけだ。

あの後城に入るとスネイプ先生は真つ先にブラックを連れて西塔の方向に歩いて行った。

ハリーを放置してである。

私はそれを先に医務室に行っているということだろうと判断し、3人の乗った担架を

引いて医務室に向かった。

そこでマダム・ポンフリーからの熱烈な歓迎を受け、ハリーたちはベッドへ、怪我が殆どない私は椅子へと座らされたのだ。

数分もしないうちにスネイプ先生がファッジ大臣を連れて医務室に入ってくる。

スネイプ先生はファッジ大臣に嘘の報告をしている最中だった。

「酷い切り傷があるが……ブラックの仕業だろうか？」

ファッジ大臣がスネイプ先生の顔や腕について言及する。

その傷は私との対決中についたものだが、先生はなんていうだろうか。

「実は……ポッター、ウィーズリー、グレンジャーの仕業なのです。閣下……」

「そうなんです大臣」

そういうことにしたいらしい。

「ブラックが3人に魔法を掛けたのです。3人の行動から察しますに錯乱の呪文か服従の呪文でしょうな。3人はブラックが無実である可能性があると考えていたようです。

3人の行動には責任はありませんが、その3人が余計なことをしなければもっと早くブラックをとらえることが出来ていたでしょう」

「そうなんです大臣」

「この3人はこれまでも色々と上手くやり遂せておりまして、どうも自分たちの力を過

信している節があるようでして……それにポッターの場合校長が特別扱いで相当な自由を許してきました」

「そうなんです大臣」

「あまりポッターを特別扱いするのはどうかと私は思うのです。私自身、個人的にはポッターも他の生徒同様に扱うよう心掛けておりまして……他の生徒であれば退学でしような。少なくとも友人と、ここにいる十六夜咲夜君をあれほど危険な目に遭わせたのですから」

「そうなんです大臣」

「閣下、お考えください。様々な校則に違反し……ポッターを守るためあそこまでの警戒措置が取られたにも拘らず規則を破り夜間人狼や殺人鬼と密会する。それにポッターは規則を犯してホグズミードに出入りしていたようなのです」

「そうなんです大臣」

「まあ落ち着きたまえスネイプ。いずれそのうち……あの子の行動も確かに愚かではあつたが……」

スネイプ先生の言葉にファッジ大臣が唸る。

大臣もハリリーにはどうにも弱いらしい。

「私が一番驚かされたのは吸魂鬼の行動だよ。どうして退却したのか……君、本当に思

い当たる節はないのかね？ スネイプ」

「ありません、閣下。私の意識が戻った時には吸魂鬼はブラックを襲うのをやめ、持ち場に帰ろうとしていました」

「そうなんです大臣」

「不思議なこともあるものだ。咲夜君も知らないのかね」

「そうなんです大臣」

「ミス・十六夜に気付け呪文で起こされたあと、私は追いついたのですが、その時には全員が意識不明でした。私は当然ブラックを縛り上げ、気絶している生徒を担架に乗せ全員をまつすぐ城へと連れてきました」

「そうなんです大臣」

「ファッジ大臣は何かを考えるように唸る。

「なんにしても、ブラックは凶悪な殺人鬼だ。 Hogwーツ校内で吸魂鬼によるキスが行われる」

「ファッジ大臣が説明するように言った。

「その言葉にスネイプ先生は口元をにやりと歪ませた。

「私はその表情に一抹の不安を覚え、ファッジ大臣に聞く。

「大臣、キスとは一体なんですか？」

「驚いた。君会話ができるのかね?」

それはあまりにも失礼じゃなからうか。

私のその問いに大臣ではなくスネイプ先生がいやに機嫌よく答えてくれた。

「吸魂鬼は普段隠してある口を使つて人間の魂を直接吸い取ることが出来る。魂を吸い取られた人間は廃人状態となり、最終的に吸魂鬼となるのだ」

「つまり……」

「そう、吸魂鬼のキスは実質的には処刑と同じようなものだよ。アズカバンから脱獄し、ホグワーツになんども気が付かれずに侵入できるような男を生きたまま連行するのは少々危険すぎる」

ファッジ大臣がそう付け足した。

「えーっ!」

次の瞬間、ベッドで気絶しているものと思つていたハリーが大声を上げた。

私を含めた全員がハリーの方に振り向く。

「ハリー、どうしたのかね?」

ファッジ大臣がハリーの方に近づいていく。

このどきどきに紛れてブラックを救出しに行こうかと思つたが、スネイプ先生は隙のない表情で私の行動を監視していた。

「大臣、聞いてください！ シリウスは無実だったんです！ ピーター・ペティグリューは本当は生きていて自分が死んだと見せかけたんです！ 今夜ピーターをみました。大臣、吸魂鬼にあれをやらせてはダメです！ シリウスは——」

「ハリー、君は混乱している。あんな恐ろしい試練を受けたのだし。横になりなさい。さあ、全て我々が掌握している」

「してません！ 捕まえる人を間違えています！」

「大臣聞いてください！ お願いです」

ハリーの訴えにハーマイオニーも参加した。

2人でファッジ大臣にブラックの無実を訴える。

そんな様子の2人に肩を竦めるようにスネイプ先生は言った。

「お分かりでしょう？ 閣下。錯乱の呪文です。ブラックは見事に2人に術をかけたものですな」

「僕たち錯乱なんかしていません！」

マダム・ポンプフリーが慌てたようにこちらに駆けてきて、ハリーの口にチョコレート詰め込みベッドに押し戻す。

「患者を興奮させてはいけません。先生、大臣ここは一旦お引き取りを」

「僕、興奮していません。僕の言うことを聞いてくれたらきつと……そうだ咲夜！ 咲

夜なら事情に詳しい筈です！ 彼女に話を聞いてください」

ハリーの叫びにマダム・ポンフリーが貴方も患者を興奮させる原因ですか？ と言わんばかりの視線を投げかけてくる。

「ハリー、暎夜の言葉は沢山聞いた。「そうなんです大臣」これしか言っていなかったが……」

確かにそう言っていたが、その印象はどうなのだろうか。

すると今度はダンブルドア先生が医務室の中に入ってきた。

ダンブルドア先生の顔を見てハリーが継るように言う。

「ダンブルドア先生！ シリウス・ブラックは——」

「ダンブルドア先生、貴方もですか!？」

ハリーのそんな言葉はマダム・ポンフリーの大声に掻き消された。

ダンブルドア先生は落ち着いた様子でマダム・ポンフリーをなだめる。

「ポピー、すまんのう。だがわしはミスター・ポッターとミス・グレンジャー、それにミス・十六夜に話があるんじゃない」

ダンブルドア先生は私たちのほうに向きなおる。

「たつた今シリウス・ブラックと話をしてきたばかりじゃよ」

「それはさぞかしポッターに吹き込んだのと同じおとぎ話を聞かせられたことでしょう

な」

スネイプ先生は吐き捨てるように言う。

「ネズミがどうか、ペティグリューが生きていますか」

「さよう。ブラックの話はまさにそれじゃった。セブルス、私はこの3人と少しばかり話がしたい。席を外してくれるかの」

スネイプ先生は私を睨みつけるとファッジ大臣と共に医務室を出ていった。

マダム・ポンフリーも「次大声が聞こえたら本当に追い出しますからね」とダンブルドア先生を脅しつけ、別室へと入っていく。

「先生、ブラックの言っていることは本当です。僕たち、本当にペティグリューを見たんです」

「ペティグリューはルーピンが変身した時に逃げたんです」

「ペティグリューはネズミで……」

「ペティグリューの前足の鉤爪、じゃなかった。指、それは自分で切ったもので」

「ペティグリューがロンを襲ったんです。シリウスじゃありません！」

周囲に私たちしかいなかった途端、ハリーたちは本当に錯乱しているかのように話し始めた。

ダンブルドア先生はそんな洪水のようなハリーたちの説明を静止させる。

「ブラックの言っていることを証明するものは何も無い。君たちの証言だけじゃ。13歳の魔法使いが何を言おうと誰も納得せん。スネイプ先生が語る真相のほうだが、君たちの話より説得力があることを理解せねばならん」

ハリーが何かを言おうとするのをダンブルドア先生は手を上げて止める。

「必要なのは、時間じゃ」

ハーマイオニーはダンブルドア先生の言葉の意味を理解したのだろう。

ハッと息をのむように目を丸くした。

「時間が無い、急ぎ足で説明するからよく聞くように。シリウスはフリットウィック先生の事務室に閉じ込められておる。首尾よく運べば今夜1つと言わずもつと、罪なき者の命を救うことができるじやろう。ただし、見られてはならん。ミス・グレンジャー、規則は知っておろうな。誰にも、見られてはならんぞ？」

ダンブルドア先生はそういうとハリーたちから離れ、医務室の入り口の方に行く。

「ミス・十六夜。君は別に話がある。ついてきなさい。それと、医務室の扉には鍵をかけたおくかの。グレンジャー。3回、ひっくり返すのじや」

私はダンブルドア先生と共に医務室を出る。

隙を見計らってブラックを助けることはできるだろうか。

私はダンブルドア先生の後ろで考える。

ダンブルドア先生がドアを閉め、魔法で鍵を掛けようとした瞬間、ダンブルドア先生の前にハリーたちが割り込んできた。

おかしい。

先ほどまで2人は医務室にいたはずだ。

「やりました!」

ハリーが息を切らしながらも嬉しそうに何かを報告する。

「シリウスは行ってしまいました。バックビークに乗って……」

バックビークを逃がした?

バックビークに乗った?

私は先ほどのダンブルドアの言葉を思い出す。

あれはハーマイオニーに逆転時計を使えと言っていたのだろうか。

だとしたらハリーが変な方向から飛び出してきた理由もわかるというものだ。

「ようやくた。さてと……よし、2人とも行ったようじゃ。中へお入り、わしが鍵を掛けよう」

ダンブルドア先生は医務室の扉を開けハリーたちを中に入れる。

そして今度こそダンブルドア先生は鍵を掛けた。

先生は満足したようにうなずき、私に向き直る。

先ほどハリーたちに向けていたものとは違う、真剣な目だ。

「実はシリウスから興味深い話を聞いての。この言葉だけでも思い当たる節はあるじゃろ」

先生は私と視線を合わせる。

その視線に開心術独特の違和感を感じなかった。

「シリウスは君がアズカバンから自分を脱獄させたと言った。その後も世話になったと……シリウスをアズカバンから脱獄させたというのは本当かね？」

私はなるべく表情を変えずに考えこむ。

これは言ってもいいものだろうか。

先ほどのハリーたちへの助言を聞くに、ダンブルドア先生はブラックのことを無実だと考えている。

だとしたら先生に話したところで私がアズカバンに放り込まれるということはないだろう。

だが、軽々しく魔法界で脱獄不可能だと言われているアズカバンから一番監視が厳しいブラックを連れて出てきたとは言えないだろう。

「私一人の力では、そんなことは到底無理です」

私は慎重に言葉を紡いでいく。

「ですがここ一年ブラツクの世話をしていたのは否定しません」

私はそう言葉を濁した。

「私一人の力では。ということとは手助けがあれば出来る。そういうことじゃな」

「それも否定しませんわ」

「動機は？」

「……」

私は先生の言葉に口を紡ぐ。

これ以上私の口からは言えない。

私はまっすぐにダンブルドア先生の目を見つめ返した。

「なるほど」

ダンブルドア先生が納得したように眩き顔を上げる。

「君のお嬢様には困ったものじゃ」

私はそんな先生の言葉に目を見開いた。

「どうやら当たりのようじゃな」

……ここに何処にでもよくあるホグワーツの壁がある。

凄く硬い、石でできているため当たり前だ。

私はその壁に思いつきり頭を打ち付けた。

「ああ……私の馬鹿……」

ダンブルドア先生の言葉に反応してしまった罰として、何度も壁に頭を打ち付ける。だが3度目ほどから、壁に頭が当たる感触が無くなった。壁がクッションのようなフワフワした素材に変化している。

「自分の体は労わるものじゃよ」

ダンブルドア先生は軽く杖を振るうと私の額についた傷を治す。

「そして、顔は大事にしなさい」

そういうと先生は私の頭を撫でた。

「わしはレミリア・スカーレットという存在をトレローニー先生以上には知っておるつもりじゃ。スカーレット嬢の性格も、あの気まぐれさも知っておる。勿論、それがスカーレット嬢の魅力であり、強みでもある」

先生は何が言いたいのだろうか。

ただ静かに私の顔を見ていた。

「先生。私、来年荒れます。今のうちに予告しておきますね」

私は保険とばかりに先生にそう言った。

「スカーレット家のメイドは、敵に回すと恐ろしいですよ」

「ほっほっほ、そうじゃな。じゃが、それと同時に味方につけると頼もしそうじゃ。ヴォ

ルデモートにとられんよう、気を付けておかねばの」

私とダンブルドア先生は笑い合う。

次の瞬間廊下に怒声が響いた。

「貴様の仕業か!? 十六夜咲夜ツ!!」

スネイプ先生の声だ。

大方ブラックを逃がしたのは私だと思っているのだろう。

「どうしたのじゃセブルス。それと、咲夜には何かを成す時間はなかった。ずっとわたしとここでこうして会話していたからの」

「そんなはずはない! 貴様しかこのようなこと……」

「わしの言葉が信用できんかね。きつとブラックは姿現しを使ったのだろう、セブルス。誰か一緒に部屋に残しておくべきじゃった」

「ヤツは断じて姿現しをしたのではない!! この城では出来ないのだ! それは貴方が一番良くご存じのはずだダンブルドア校長! 十六夜でなかったらポッターだ!!」

「スネイプ、落ち着け。ほら、この部屋には外から鍵が……」

スネイプ先生はファッジ大臣のそんな静止を無視して扉に魔法を掛け、鍵を吹き飛ばし中に入っていく。

私はそんなスネイプ先生に肩を竦めると談話室の方向に向けて歩き出す。

なんだがここ数年で一番疲れたような気がする。

クリスマスパーティー以来の全身の倦怠感に、私は今すぐ寝たいと思った。

もう、今年度も終わる。

紅魔館に帰れるのだ。

私は肖像画を通り談話室から女子寮へと上がると、ベッドに潜り込む。

そして目を閉じると自然と私は夢の世界へと落ちていった。

ハリーたちは次の日の朝にはすっかり元気になり医務室から退院してきた。

朝食の席で逆転時計の話聞いたが、どうやらハリーとハーマイオニーは上手いことバックビークとブラックを助け出すことができたらしい。

ハグリッドはバックビークが逃げたことを泣くほど喜んでいた。

残念な知らせがあるとしたらルーピン先生が辞職したことだろうか。

どうやらスネイプ先生が『うっかり』ルーピン先生が狼男であるということをスリザリン生に話してしまったらしい。

ドラコはまるで自分が発見したことのように生徒に情報をばら撒いていた。

まあドラコ自身バックビークが逃げたと知って激怒していたので、その腹いせも兼

ねているのだろう。

ドラコはしきりにハグリッドが隙を見つけて逃がしたに違いないと言っていた。学年末の宴会では、グリフィンドールが3年連続で寮杯を獲得した。

どうやらクイディッチ優勝戦での成績が大きく反映される結果になったようだ。

テーブルは真紅と金色で彩られ、グリフィンドールのテーブルはお祭り騒ぎだった。だが私が思うにこの流れは良くない。

来年あたりはスリザリンか他の寮が寮杯を獲得すべきだろう。

でなければ1年目のスリザリンのように全ての寮が敵になってしまふと考えられるからだ。

私はそんなことを考えつつ、宴会のご馳走に手を付ける。

……うん、やはり美味しかった。

宴会の翌朝、私はハリーたちと共にホグワーツ特急に乗り込んでいた。

コンパートメント1つを占領し、お菓子を広げたり今年有ったことを話したりしているうちに時間も過ぎていく。

「そう言えば今朝、朝食の前にマクゴナガル先生に伝えてきたわ。私、マグル学をやめる

ことにしたの」

ハーマイオニーのそんな言葉にロンは手に持っていたかぼちゃパイを落とした。

「だって君、100点満点のテストで320点取ったじゃないか！」

ロンが当たり前だと言わんばかりに声を上げる。

まあ確かにハーマイオニーにマグル学はいらないだろう。

「流石に今年みたいになるのは少し耐え切れないわ。あの逆転時計。あれ、結構気が狂いそうだった。咲夜の助言の後は少し改善されたけど、来年も同じことをする気にはなれないの。逆転時計は返却したわ。マグル学と古い学を落とせばまた普通の時間割になるし」

「そう、まあ無理はいけないわ」

私はハーマイオニーにそんな言葉を掛ける。

まあどちらもハーマイオニーにはいらない学問だろう。

「でも酷いよな。君が僕たちにそのことを言わなかったなんて。いまだに信じられないよ」

ロンが先ほど落としたかぼちゃパイを拾いながら頬を膨らます。

「僕たち、君の友達じゃないか！」

「よく言うわ。あれだけ喧嘩ばかりしておいて」

私の言葉にロンが口を噤んだ。

心当たりしかないのだろう。

「冗談、貴方たちは誰から見ても仲良しトリオよ」

私はハリリーのほうをチラリと見る。

ハリリーは窓の遠くの方をじつと見ていた。

「ねえ、ハリリー。元氣だして！」

「大丈夫。休暇のことを少し考えていただけさ」

ハーマイオニーの心配そうな声に、ハリリーが答えた。

「うん、僕もそのこと考えてた。ハリリー、絶対僕たちのところに来て、泊まってよ。僕、

パパとママに話をして準備して、それから話電する。話電の使い方はもう分かったから

……」

ロンがハリリーを励ますようにそう言った。

「ロン、電話よ。ハーマイオニーの代わりに貴方がマグル学を取るべきね」

私が茶化すとロンは顔を真っ赤にして私に文句を言う。

私はそれを笑いながら受け流した。

「なんにしてもだ。今年の夏はクイディッチのワールドカップだぜ!!? どうだい、ハリリー? 泊まりにおいでよ。一緒に見に行こう。パパ、たいてい役所からチケットが手

に入るんだ」

ロンのこの提案は効果があったようだ。

「うん、ダーズリーは絶対僕を喜んで追い出すよ」

午後も過ぎた頃、窓の所に小さなフクロウが飛んでいるのが見える。

列車に手紙を届けようとする猛者もいるのだなと変なことを考えていたのだが、どうやらこのフクロウは私たちに手紙を届けようとしているみたいだった。

ハリーは窓を開けてフクロウを捕まえ、手紙を取り外す。

小さなフクロウは手紙を届けられたことが嬉しかったのかピヨンピヨンとコンパトメント内を飛び回り私の掌に乗った。

「シリウスからだー！」

私がフクロウで遊んでいるとハリーが叫んだ。

全員がその手紙を覗き込む。

内容を整理するところなことが書かれていた。

バックビークと共に隠れる場所を無事見つけたこと。

遠く離れたところでマグルに自分の姿を目撃させ、ホグワーツの警備を解くということ。

ファイアボルトの送り主は自分で、私に頼んで箒を贈って貰ったということ。

箒はハリーへの13年分の誕生日プレゼントであるということ。

そして来年もっとハリーがホグワーツでの生活が楽しくなるようにあるものを同封したということ。

ハリーは封筒の中にもう一枚羊皮紙が入っているのを見つける。

ハリーはその羊皮紙を見て目を輝かせた。

『私、シリウス・ブラックはハリー・ポッターの後見人として、ここに週末のホグズミード行の許可を与えるものである』

「ダンブルドアだったらこれで十分だ！」

ハリーは幸せそうに言った。

「ロン。ここに追伸があるわよ」

私は皆に見えるように羊皮紙を広げる。

そこにはロンがペットのネズミの代わりにこの小さなフクロウを飼ってくれたら嬉しいといった旨の文章が書かれていた。

ロンはその一文に目を丸くし、私からフクロウを受け取る。

「僕がこいつを飼うって？」

ロンはしげしげとフクロウを見ていたが、恐る恐るクルックシャンクスの方に突き出し匂いを嗅がせた。

「どう思う？ 間違いなくフクロウなの？」

ロンが心配そうにクルックシャンクスに聞く。

クルックシャンクスは満足げにゴロゴロと喉を鳴らした。

どうやら本当にただのフクロウだったようだ。

ロンはその返事で満足したのか、大事そうにフクロウを抱える。

ペットか。

ハリーにはヘドウィグ、ハーマイオニーにはクルックシャンクス、ロンには今持っている小さなフクロウ。

じゃあ私は？

私は少し考えて、鞆の中に入っているリドルの日記を思い出した。

そして自分の考えが余りにもバカバカしいモノだと気が付くと声を出して笑ってしまふ。

ハーマイオニーはそんな私を不思議そうに見ていたが、私はそんなことお構いなしだった。

そんなことをしているうちにホグワーツ特急はキングズ・クロス駅に到着する。

私が汽車から降りると途端に何者かに抱き着かれた。

「さくくうやちやーん！ お勤めご苦労さん！ 娑婆の空気はいかが？」

私はジタバタと美鈴さんの中で暴れる。

だがやはり抜け出すことはできない。

「やめてください美鈴さん！　これからお勤めしにいく子もいるんですから!!」

無論、ハリーのことだ。

ハリーは抱き着かかっている私を驚いたような顔で見ている。

私はやつとの思いで美鈴さんを引き剥がした。

「僕も毎年だけど……睨夜も大変だな」

ロンが頬を掻きながら言う。

ハーマイオニーは美鈴さんに挨拶をしていた。

「なるほど……じゃあこの3人が睨夜ちゃんのご学友ということかな？」

美鈴さんはハリーとロンの肩を抱き私のほうに向かせる。

ハリーたちは照れくさそうに頬を染めていた。

「そんなんじゃないわ。ルームメイトと、同じ寮の生徒よ」

「またまたく照れちゃって」

初めからどう否定してもそう言うに決まっている。

私は美鈴さんを強引に無視し、ハリーたちの方を向いた。

「次会うときは4年生かしら」

「ああ、いい夏休みを」

私はぐいぐいと美鈴さんを引っ張って3人から離れる。
そして紅魔館への帰路を急いだ。

十六夜咲夜と炎のゴブレット

新入りとか、ワールドカップとか、闇の印とか

私が美鈴さんをつれて紅魔館の地下図書館の暖炉に煙突飛行する。

視界が開けた瞬間に、いつもの図書館の光景が目の前に広がった。

「お帰りなさい。咲夜」

「ああ、帰ってきたんだね。咲夜」

「待っていたよ、十六夜君」

皆が口々に私に声を掛けてくる。

私は最後に聞こえた声に違和感を覚えた。

紅魔館に私のことを苗字で呼ぶ者はいない筈だ。

私は周囲をきよろきよろと見回す。

するとパチュリー様の向かい側に一人の男性を見つけることが出来た。

その男性は頭をスキンヘッドに剃りあげ、ローブを着ている。

私はその人物に見覚えがあった。

「えつと……。何でクイレル先生が？」

そう、一年生の頃賢者の石を手に入れようとホグワーツで暗躍し、最終的に偽物を掴まされたクイレル先生が何故かパチュリー様の前で魔導書を読んでいた。

「十六夜君、私はもう先生ではない。今はただのクイリナス・クイレルだ」

クイレルは読んでいた本を閉じると椅子から立ち上がり私に向き直る。

「どうやらあの時手に入れた賢者の石はダンブルドアに掴まされた偽物だったようですね。そのせいで私はヴォルデモート卿から捨てられ、廃人同然の状態でイギリス中を彷徨い歩いた。だが、捨てる帝王あれば拾う女王あり。私はレミアお嬢様に拾われたのだよ」

そういうとクイレルは遠い目をする。

「受けた恩義は忘れはしない。それに、ここには仕えるべき主が2人もいる。それに十六夜君、君のような同志もいるのだ」

仕えるべき主というのはお嬢様とリドルのことだろうか。

私がリドルに視線を向けるとリドルは肩を竦めた。

「えつと、パチュリー様。つまりどういうことなのでしょう？」

私はパチュリー様に助け舟を求めぬ。

パチュリー様は美鈴さんのほうをチラリと見ると説明を始めた。

「クイレルはヴォルデモートに捨てられ行く当てもなく放浪してたらユニコーンの呪い

で死にそうになり最終的に紅魔館の門の前で力尽きたのよ。それを美鈴が食用にならないかと拾ってきたの。でもこの魔法使いをレミイが気に入ってしまった。今ではリドルの助手のようなことをしているわ」

私は美鈴さんの方を見る。

美鈴さんは申し訳ねえ……と言わんばかりに頭を掻いていた。

「まあ、そういうことならいいんじゃないかしら。パチュリー様、情報面では大丈夫ですか?」

パチュリー様はここに姿を隠されている身の上だ。

パチュリー様の居場所が外に漏れるようなことは避けなければならぬ。

「それに関しては大丈夫。リドルもクイレルも紅魔館の仲間よ。最近レミイから外出許可が下りたの」

「ではお嬢様がお2人をお認めになったと?」

「当たらずとも遠からずね。吸血鬼というものは忠義に敏感なのよ。相手が誰を慕っているか直感的に分かるんですって。それによれば、リドルは私に、クイレルはレミイに忠義を持っている」

私はそんなパチュリー様の言葉にリドルを見る。

リドルは何か言いたげな私に気が付いたのか私に言った。

「僕一人でどうにかなる相手でもないだろう？ それに、先生を死喰い人側に引き込むよりも、先生のいる陣営に参加してしまったほうが手間がかからない」

まあもつともな話ではある。

そういえばクイレルは今ターバンをしていない。

いつものニンニクの匂いもしなかった。

私がそのことについてクイレルに聞くと、クイレルは訳を話してくれる。

「ターバンは頭の後ろに寄生させていたヴォルデモート卿を隠す為のものだよ。そして匂いもカモフラージュに過ぎない。私はアルバニアの森で吸血鬼に会ったのではない。ヴォルデモート卿に会ったのだ」

クイレルが後頭部を摩る。

多分そこに寄生していたのだろう。

「だが、ヴォルデモート卿が居なくなつた今、それは必要ない。吸血鬼に仕える身でありながらニンニクの匂いを振りまくなんて滑稽もいいところだ」

「まあ嫌いなだけであつて弱点ではないのだけけどね」

声が出した方向に顔を向けるとお嬢様が図書館に入ってきたところだった。

「ただいま戻りました。お嬢様」

「ええ、早速井戸端会議をしましょう！ パチエ、黒板」

井戸端会議？ どういう意味だったか……。

なんにしても何かの会議を行うようだ。

パチュリー様が空いている空間に向けて手を振ると何処にでもありそうな黒板が現れ、ひとりでに文字を綴っていく。

「さて、まずは報告を聞こうかしら。咲夜、シリウス・ブラックはどうなった？」

「ブラックは殺人鬼ではありませんでした。真犯人はブラックに殺されたものと思われる。いたピーター・ペティグリューで、現在逃亡中です」

私は先日起こった事件について話し始める。

パチュリー様はその情報を黒板にまとめしていく。

「このことを知っているのは誰と誰？」

「何人かの生徒とダンブルドア先生は信じています。ファッジ大臣などの耳にも入ったようですが、生徒のたわごとだと思っただけでしょう」

私の報告にパチュリー様はブラックと書かれたマグネットを作り出すと、黒板に書いた不死鳥の騎士団という円の中に貼り付けた。

「咲夜とブラックの関係は？」

お嬢様が更に私に問う。

「良好なものだと自負しております。ダンブルドア先生と一時期敵対するような関係に

なりそうにはなりましたが、最終的には和解を」

「なるほどね……。クイレル、今現在ヴォルデモート卿が何処にいるかわかるかしら？」
「別れてから2年経っているのです、何とも……。ですがヴォルデモート卿は自らにゆかりのある土地にいると思われれます」

「それは何故？」

お嬢様のその問いにクイレルに代わってリドルが答えた。

「ああ、僕ならそうするだろう。大人になりさらに誇り高くなつた僕なら尚更だ」
パチュリー様はこの言葉を聞き黒板に潜伏候補地をいくつか書き入れていく。

「ふむ……」

そしてお嬢様は黒板を睨みつけるように見る。

何かを考えているようだった。

「よし。咲夜はダンブルドアにつきなさい。クイレルはヴォルデモートね。パチエとリドルは引き続き紅魔館。美鈴は知らないわ」

「おくじょううさあまあまあああ!!」

「冗談よ。貴方が居なくなると紅茶を淹れる使用人が居なくなるでしょ」

お嬢様は話は終わったと言わんばかりに手を叩いた。

「クイレルはこれからヴォルデモート卿の追跡と元死喰い人への接触。咲夜は私の指示

ではなく自分の意思でダンブルドア側についているという意味表示をおきなさい。以上解散！」

「ちよ、ちよつと待つてくださいいお嬢様。話が飛躍しすぎていてついて行けません」

私は図書館を出ていこうとするお嬢様の背中に声を掛けた。

お嬢様は不思議な顔をしてこちらに振り向く。

「そうね、今まで通りハリー・ポッターやダンブルドアと仲良しこよししてればいいのよ。初めは3重スパイとして両陣営を駆けまわつてもらう予定だったけど、クイレルが居ればその必要もないわ。クイレルが死喰い人に戻つて向こうの情報をこつちに入れてくれるみたいだし」

私はクイレル先生の方を見る。

すでにお嬢様から話は聞いているのか、早速作業に取り掛かっていた。

「お嬢様は一体何をしようとしているのですか？ それによつて今後の私の判断も変わってくるものかと……」

「そうね、1つ言えることは魔力が必要な。とてつもなく大きなね。後は生贄。これも大量にいるわ。あと行動しにくいなら助言をあげる」

お嬢様は1歩私に近づく。

「こつちの利益や不利益を考えずに自由にやりなさい。基本的には死喰い人を敵だと判

断してダンブルドアの味方をしていければいいわ。今重要なのは、ヴォルデモートを復活させることと、ダンブルドアとヴォルデモートとの陣営が衝突すること」

魔力、生贄。

お嬢様はこの2つが必要だと言った。

つまりお嬢様は……。

「お嬢様は戦争を望まれている？　ということでしょうか」

私の言葉を聞き、お嬢様の口が三日月型に開かれる。

「結果が大事だけど、過程も楽しまなくちゃね。折角生きた駒でチェスできるのですもの」

ケタケタと笑い図書館から去っていく。

私はその後ろ姿をただ見つめるしかなかった。

「咲夜ちゃん咲夜ちゃん。ちよつとよろしいかな？」

私は美鈴さんに呼びかけられてようやく我に返る。

私が後ろを振り向くと美鈴さんが私の鞆を持って立っていた。

「取り敢えず荷物置いてきたらいいと思うよ。着替えもね。クイレルのこととかおぜうさまからの命令とか混乱すること多いと思うけど、指示がないということは自己判断でジャンジャンやっちゃっていいってことだからね。私からの助言はただ一つ。迷った

ら面白そうな方を選び。その方がおぜうさまも多分喜ぶ」

美鈴さんが私の鞆を足元に置く。

ズンという鈍い音が図書館内に響いた。

「咲夜ちゃんの鞆重すぎ。亀仙人にでもなるつもり？」

私は鞆を持つと、指一本で支えた。

「私にとつては重たくないんですよ」

色々と言われたが、取り敢えず荷物を置いてメイド服に着替えよう。

そして自分の部屋で横になりながらゆっくり考えたらいい。

私は時間を止めると図書館を後にした。

私は自室に入ると鞆を置き、ホグワーツの制服を脱いでいつものメイド服に着替える。

そしてそのまま自分のベッドにダイブした。

クイレルの件もあるが、まず考えないといけないのはお嬢様から命令されたことだろう。

お嬢様は魔法界に戦争を起こそうとしている。

その時に放出される魔力と戦死した人間の魂を使って何かをしようとしているのだ。一番早く戦争を起こす方法、それはお嬢様自身が魔法界に戦争を仕掛けることだ。だがそれは余りにもリスクが高すぎる。

火種があるならそれを利用した方がいいということだろう。

そして戦争を激化させる為、に両陣営に自分の配下を送り込み内部から操る。

生贄がいるということは戦死者が多く出なければいけないということだろうか。なんにしても戦いを激化させればさせるほど、戦死者は増える。

つまり私は不死鳥の騎士団に入り全滅しない程度に死喰い人を殺せばいいのだ。

クイレルは死喰い人を使って一般市民や魔法省の魔法使いを殺す。

どれぐらい殺せばいいのか、どれぐらいの魔力が必要なのかはわからない。

だが目的がはっきりしたことによって動きやすくはなった。

私はベッドから起き上がり時間停止を解除させる。

自室を出て図書館に向かうとちょうどクイレルが廊下をこちらに向かって歩いてきていた。

「ほう、メイド服だとまた少し印象が違うな。ホグワーツはどうだ？」

「そこそこつてところかしら。そういえばクイレル、貴方妹様の狂気は大丈夫なの？」

図書館は妹様のいる地下室に近い。

慣れていない人間が耐えられるとは思えないのだが。

「ヴォルデモート卿を一年以上も頭の後ろに匿っていた私だ。禍々しい気には慣れていない。もつとも、地下の方から漂ってくるものはヴォルデモート卿のそれとは比べ物にならないほど強いが……私では近づけんよ」

「そう……たぶん貴方の方が大変な仕事になると思うけど、頑張つて頂戴ね」

「ど、どどどもりのクイ、クイレル先生のイメージが強いかも知れないが、私はこれでも優秀だと自負している。問題はない」

「そういえばクイレルはグリーンゴッツに侵入して捕まらずに出てこれるほどの実力の持ち主だったか。」

「なんにしても、お嬢様がお認めになったということは、そういうことなのでしょう。お互い頑張つて潰し合いますよう?」

「勿論だ。偉大なる我が主の為に」

私はクイレル先生とすれ違う。

クイレル先生は仲間だが、同時に敵なのだ。

何とも奇妙な関係だが、それをお嬢様が望むならそれでいい。

私はそのまま図書館へと足を向けた。

「紅茶が入りました。お嬢様」

いつもの深夜のティータイムの時間。

私はいつものようにお嬢様にお茶をお出ししていた。

お嬢様は先ほど送られてきた手紙を机に広げ読んでいる。

「咲夜、便箋」

私は時間を止め便箋と万年筆を取つてくると机の上に並べる。

そして時間停止を解除した。

「お持ちしました」

お嬢様は当たり前前の光景のように机の上に置かれた万年筆を手にとると、手紙を書き始めた。

「マルフォイのところからプレゼントが届いたわ」

お嬢様は何か紙切れのようなものを私に手渡す。

私はそれを受け取りそれが何なのかを調べた。

「これは……クイディッチの試合のチケットですか？」

「そう、ブルガリア対アイルランドの。最上階貴賓席ですつて。それも3枚」

その席がどれ程凄いものなのか私にはピンとこない。

だが3枚ということはお嬢様、私、美鈴さんの分ということだろう。

「それともう一通、これは貴女宛ね」

そう言ってお嬢様は一通の手紙を取り出した。

「失礼します」

私は封蝋が既に破つてある便箋から手紙を取り出すと、中身を改める。どうやらロンからの手紙のようだった。

『やあ、咲夜。お屋敷での生活はどうだい？ こつちはこつちでバタバタさ！ ところで、今年のワールドカップのチケットが手に入ったんだ！ 貴賓席だぜ！ 仕事が忙しくなかつたら咲夜も一緒にどうだ？ ハリーとハーマイオニーも誘つてる。チケットにはまだ少し余りがあるから同封しておくよ。ロンより』

相変わらず滅茶苦茶な文章だ。まあロンだしこんなものだろう。

便箋には手紙と一緒に先程見たクイディッチのチケットが1枚同封されていた。

「これでチケットが4枚……ですか。どう思われますか？」

「そうね。せっかくの貰い物だし、行こうと思うんだけど、勿論ついてくるわよね」

「勿論です。お嬢様。もう1枚のチケットはいかががいたしましょう」

この屋敷で公的に動けるのはお嬢様、私、美鈴さんの3人だけ。つまり一枚余ることになる

「クイレルに渡しなさい。有効活用すると思うわ」

お嬢様は手紙を書く作業に戻る。

ということは今お嬢様が書かれている手紙はドラコの家に出すものだろう。

私はチケットを裏返し試合日を確認する。

そこに書いてある日付からすると、あと3日でワールドカップが開催されるようだ。

「多分フクロウ便が相当混み合っているのね。封蝋の刻印は1週間も前だし」

お嬢様は手紙を書き終えた後、ご自身の体の一部をコウモリへと変化させ、足に手紙を掴ませる。

私が窓を開けるとコウモリは空へと飛び立っていった。

「近くのポスト何処だったかしら」

「あ、普通に郵便で送るんですね」

「美鈴みたいに捕まえて食べちゃう人がいるかも知れないでしょう？ さて、試合は3日後ね。マルフォイのところとは会場で会うだろうし……ウィーズリーも貴賓席にいるようだし。さて、どうやって会場まで行きましょうか」

お嬢様は紅茶を飲み干すとソーサーにティーカップを戻す。

私はティーセットを片付けるとお嬢様に指輪を渡した。

「パチュリー様の魔法具なのですが、これで姿現しが出来るみたいです」

「貴方、まだ姿現しできないのね」

お嬢様に痛いところを突かれてしまった。

そう、実は私はまだ姿現しが出来ないのだ。

というよりかは、練習をしたことがないと言い換えた方が正しい。

「できれば、ホグワーツに行くまでには覚えておいた方がいいわ。あそこでは姿現し出来ないけど、便利ではあるからね」

「かしこまりました。それでは私は美鈴さんにクイディッチの試合の件をお伝えしてきますね」

私はお嬢様に頭を下げると指輪をつけて門の前へと姿現しする。

いきなり目の前に現れた私に驚くことなく美鈴さんは抱き着いてきた。

「さっくやちやーん!」

私は時間を止めて後ろへと回り込む。

美鈴さんは空を掴むようにつんのめった。

「おっと。で、なにかようかな?」

美鈴さんは片足で体勢を立て直すように前へと跳ぶと、改めて私のほうを向いた。

「ホグワーツの知人がスポーツの試合のチケットをくださいまして。4枚あるので美鈴さんも来いとのことのお嬢様からの命令です」

「ということは強制か。まあ娯楽っぽいからいいけどね。慰安旅行的な？」
「私たちはお嬢様のお付きとして行くんですよ。」

美鈴さんはそんな私の言葉を聞いてケラケラと笑った。

「真面目過ぎよさくつちゃん。こういうのは適当でいいのよ適当で。上司に気を使いますぎて逆に煙たがれるパターン？」

「美鈴さんが適当すぎるんですよ」

「まあなんにしても試合は見に行くわよ。試合はいつ？」

「3日後です」

3日、3日、と美鈴さんは繰り返す。

「じゃあ私はスーツでも用意して待つてるわ。出かけるときに呼んでね」
「わかりました」

私は軽く美鈴さんに頭を下げると館に戻る。

そしてそのまま図書館へと向かった。

「クイレル、いるかしら？」

図書館をぐるりと見回すが、クイレルがいる気配はない。

かわりに本の山の陰からパチュリー様がぴよこつと顔をだした。

「クイレルは今出かけているわ。急ぎの用？」

私はパチユリー様のもとまで行くと、事情を説明する。

「そう。なら私が預かっておくわ。機を見て渡しておく」

「お願い致します」

パチユリー様はチケットの裏に何かを書き入れると、それをポケットにしまう。私はもう一度パチユリー様に頭を下げ、図書館を後にした。

3日後、私は自分の身支度を整えお嬢様の部屋に来ていた。

私はお嬢様に外出用のドレスを着せ、身だしなみを整える。

試合はどうやら日が暮れてからのようだ。

一応日傘は持つてはいくが、必要になることはないだろう。

「準備が整いました。お嬢様。出発致しますよう」

全ての準備が整うとお嬢様に声を掛ける。

私は窓の外を確認するが、既に太陽は沈んでいた。

「ええ、まずはうちの門番を拾わないとね。咲夜」

私は時間を止め、お嬢様の時間だけを動かす。

お嬢様は時間が止まっていることを確かめると窓を開け門の方に飛び立っていった。

私も窓から外に出て、魔法で窓の鍵を掛ける。

そしてお嬢様に続き門の前へと降り立った。

「マヌケ面して固まっているわね。顔に落書きでもしてやろうかしら」

お嬢様が門の前で待っていた美鈴さんの顔を覗き込みながら言う。

美鈴さんはビシツとしたスーツを着込み、傍からみたらボディーガードのようだった。

まあボディーガードというのもあながち間違いではないが。

私はお嬢様に離れるように言うと、美鈴さんの時間停止を解除する。

美鈴さんは急に時間が止まったことに少し驚いたような表情をしていたが、すぐに状況を理解したようだった。

「お、じゃあ行きますか。咲夜ちゃんはいつも通りのメイド服なんだね。おぜうさまは

……ノーコメントで」

「なんでよ」

美鈴さんとお嬢様はいつもの調子で軽口を飛ばしている。

この2人の関係はどういったものなのか、私にもよくわからなかった。

「ではお嬢様、右手にお掴まりください。美鈴さんは左手に」

「やった！ 咲夜ちゃんと手を繋いで歩けるなんて！」

「飛ぶのよ。空間を」

お嬢様は私の右手を握る。

美鈴さんは私の左腕に抱き着いた。

私は指輪に魔力を籠めクイディッチの試合会場まで姿現しした。

引つ張られるような感覚のあと、私の目の前に森が広がる。

一瞬場所を間違えたかと思つたが、パチュリー様の魔法具なのでそれはあり得ない。

私が後ろを振り向くと、立派な競技場がそこに建つていた。

「相当大きな競技場ね。何処から入るのかしら」

お嬢様がきよろきよろと周囲を見回す。

私も建物を観察してみたが、黄金の壁が何処までも続いていることしか分からなかった。

「上から入った方がわかりやすいですよ！ 多分屋根はついていないタイプの競技場で
す」

美鈴さんが一気に空へと飛び立つ。

そして建物の上までいくと、腕で大きな円を作った。

上から入れるということだろう。

「行くわよ咲夜」

お嬢様が翼を羽ばたかせ空へと舞い上がった。
私もその後を追って空を飛ぶ。

「おお……」

競技場を覗き込んで、私はついそんな声を漏らしてしまった。

競技場はホグワーツにあるものとは比べ物にならないほど大きいのだ。

軽く見積もっても5万。

いや、10万人は入れるだろう。

「思った以上にでかいっすね。で、私たちの席は何処です？」

美鈴さんがチケットを裏返したりひっくり返したりしながら席を探している。

最上階ということは上の方で、貴賓席ということは試合が見やすいところだろう。

「美鈴、咲夜。多分あそこよ。マルフォイ家を見つけたわ。」

お嬢様が遠くの方をまつすぐと指さす。

「ああ、前に会った青白い魔法使いの親子ですね。今回チケットをくれたのはあの家族ですよね。マルフォイ家っていうんですか？」

「正確にはウィーズリーのところも一枚寄越したわ」

私はお嬢様が指差している方向を見るが、人が米粒のようにしか見えない。

人間の視力では限界があるということだろう。

お嬢様がそちらの方向に飛んでいったので、私もその後が続く。

近づくと、確かにドラコの姿を視認することが出来た。

ドラコの家族だけかと思っただが、それだけではない。

ウィーズリーの家族にハリーとハーマイオニーの姿もある。

そしてイギリスの魔法省大臣であるファッジ大臣や、ブルガリアの魔法省大臣の姿もあった。

その横にいるのはルード・バグマンだろうか。

確か魔法省魔法ゲーム・スポーツ部の部長だったはずだ。

お嬢様は空いている席にどっかりと座る。

美鈴さんもその隣に座った。

私はお嬢様を挟んで美鈴さんと反対側へと腰かける。

「えー、咲夜ちゃんそこは私の隣に座ろうよ……」

美鈴さんが残念そうな声を上げる。

お嬢様は呆れたように頭を抱えた。

「両端を固めるのは基本でしょうに。私を一番端にしてどうするのよ」

「時間停止を解除しますが、よろしいでしょうか？」

私はお嬢様に了承を取る。

「ええ、大丈夫よ。試合はすぐに始まるんでしょう?」

「はい、あと数分で始まると思われます」

私はお嬢様と美鈴さんが座っていることを確かめると、時間停止を解除する。

次の瞬間、世界に音が戻ってきた。

競技場のざわめきが一気に耳に入ってくる。

まさに競技場は熱気に包まれていた。

「凄い盛り上がりね」

お嬢様がぼつりと眩く。

美鈴さんは楽しそうに周囲を見渡していた。

いつの間にか現れた私たちに貴賓席の人間は驚いている。

だがそこは大臣といったところだろうか。

いち早くシヨックから立ち直ると私に話しかけてきた。

「やあやあ、十六夜君。しばらくぶりだね。ええつと……、お隣のレディーたちは何方かな?」

ファアツジ大臣はお嬢様のほうを見ながら私に聞いた。

「私がお仕えしているレミリア・スカーレットお嬢様です。そしてその隣にいるのが――」

「お初にお目に掛かります、コーネリウス・ファツジ閣下。わたくし、紅美鈴と申します。お嬢様に仕える使用人の一人です」

美鈴さんが凄く丁寧な大臣に挨拶した。

普段からこれぐらい真面目に出来ないのだろうか。

「いやはや硬くならなくて結構。私はコーネリウス・ファツジ。魔法省の大臣をしている」

大臣がお嬢様と握手をする。

美鈴さんに対してお嬢様は至っていつも通りだった。

「レミア・スカーレットよ。娯楽の場なんだし、無礼講は基本よね」

「ああ、その通りだとも。今日は楽しんでいってください」

大臣が席へと戻っていく。

入れ替わるようにマルフォイ氏が近づいてきた。

「ルシウス、今日はチケットをありがとう。楽しませてもらうわ」

「なに、息子のドラコが学校でスカーレット嬢の使用人に世話になってると聞いたもので。ほんの気持ちですよ」

「気前のいい男は好きよ。私」

お嬢様はマルフォイ氏と握手をする。

もうすっかり上下関係が出来ているようだった。

「ミス・十六夜。学校ではドラコが世話になつていゝな。よかつたらこれからも良くしてやつてくれ」

「はい、こちらこそよろしくお願い致します」

マルフォイ氏は私に挨拶すると美鈴さんの方に振り返る。

そういえば美鈴さんはマルフォイ氏と面識があるのだった。

「君は……あの時のチャイナ服のレディーだね。今日は雰囲気が違うな。それとも、これがいづつもの君なのかな？」

「今日はお嬢様のお付きとして来ていますので。いつもはチャイナ服ですよ」

美鈴さんはにこやかに笑つた。

マルフォイ氏は席へと戻つていく。

私はそれを目で追つていたが、その視線にドラコが気が付いたのかこちらに手を振つていた。

私はそれに軽く手を振つて応える。

マルフォイ氏と入れ替わるように、今度はハリーたちがロンの父親を率いてやつてきた。

「お初にお目に掛かります。レミアア・スカーレット嬢。私はアーサー・ウィーズリー。

魔法省マグル製品不正使用取締局の局長です」

ロンの父親がお嬢様に挨拶をする。

「ご丁寧にどうも。レミリア・スカレットよ。知つてるとは思うけど、こっちのが咲夜でこっちのが美鈴。よろしくね」

お嬢様はロンの父親と握手をする。

「咲夜、久しぶり！ 夏休みはどう？」

ハリーが儀式は終わったと言わんばかりに私に話しかけてきた。

一応挨拶が終わるまで自重していたようだ。

「ええ、充実しているわ。他のみんなは？」

私が尋ねようとする、お嬢様が私の肩に手を置いた。

私は話を止めお嬢様に向き直る。

「ハリーたちの近くの席に行つていいわよ、咲夜。今日は美鈴もいるしね」

「ですがお嬢様……私は今日お嬢様のお付きとして——」

私がお嬢様の提案を断ろうとすると、お嬢様が私の耳元で小さく呟く。

「不死鳥の騎士団。それに一応貴女はウィーズリーのところからも招待されているわ」

私はそのお嬢様の言葉一つで何が言いたいかを理解した。

要はハリーたち、そしてその家族と親交を深めろということだろう。

「わかりました。では私は向こうの席でハリーたちと観戦したいと思います」
「美鈴、マルフォイの近くの席に移動するわよ」

美鈴さんにそういうとお嬢様はマルフォイ氏のほうへと近づいていく。
私はその反対側のハリーたちがいる席へと向かった。

「よう、元気してたか？　グリフィンボールのデンジャラスクイーン」
双子のフレッドとジョージが示し合わせていたかのように私に言う。

周囲の席にはハリー、ロン、ハーマイオニーの他に、ジニー、フレッド、ジョージ、パシーの姿もある。

それに先ほどのアーサー氏に、あちらの女性はロンのお母さんだろうか。

多分ロンの上の兄と思われる人が2人、席に座っていた。

そのことに気が付いたのかロンが私に言う。

「パパはさつき挨拶した通りで、こつちが僕のママのモリー。そつちが次男のチャールズ。チャーリーはルーミアニアでドラゴンの研究をしているって話したことがあったよね。で、こつちが長男のウィリアム。ビルはグリーンゴッツのエジプト支店で呪い破りをやってるんだ」

紹介を受けてモリーさんはハグを、チャーリーとビルは握手を求めてきた。

「お初にお目にかかります。十六夜咲夜です。本日はお招き頂きありがとうございます」

す」

私はそれ1つ1つに丁寧に応える。

「貴方が咲夜ね！ ロンから聞いてるわ。とても頭が切れてなんでもできる凄い同級生がいるって」

モリーさんの熱烈なハグを私は甘んじて受ける。

なんというか、しつかりもののお母さんといった感じの人だった。

……そのままか。

「買い被り過ぎですよ。モリーさん。上のお兄さん方は初めてですね」

「確かにロンから話は聞いている。チャーリーと呼んでくれればいいよ」

チャーリーは背丈はそんなにないが、筋骨隆々といった感じで実際よりも大きく見える。

片腕に大きな火傷の痕があるが、ドラゴンに付けられたものだろうか。

「朝食の席ではハリーたちの次に名前が出てくるな。僕のことでもビルでいい」

「そう。チャーリー、ビル、よろしくね。ところでロンは私のことをなんて言っているのかしら」

「正確無比のキリングマシンだろう？」

2人の代わりにフレッドが答える。

私はフレッドの顔スレスレにナイフを投げる。

私の投げたナイフはフレッドの髪の毛を少し掠り、フレッドの顔の横の壁に突き刺さった。

「ほ、ほらね」

声を震わせながらもフレッドは私に軽口を飛ばす。

その精神力だけは評価しよう。

「フレッド坊やをビビらせるとは噂通りの女の子だな」

ビルが笑いながらそう答える。

呪い破りという職業柄、野蠻なことには慣れているのだろう。

「そういえばパーシーはなんだか雰囲気が変わったわね」

私はパーシーの方を見る。

パーシーはいつにもまして真面目な顔をしていた。

「今年から魔法省に勤務することになったんだ」

ビルがヒソヒソ声で教えてくれる。

私はその説明で納得してしまった。

ホグワーツにいた頃から責任感に溢れ滅茶苦茶真面目な青年だった彼だ。

そんな彼が魔法省なんかに入ったら、どうなるかは目に見えている。

きつと完全な仕事人間になつてゐるに違いない。

私はウィーズリー家に簡単に自己紹介を済ませるとハリーの隣の席へと腰かけた。

「遅かつたから心配したわ！　ホグワーツ特急ぶりね、咲夜」

ハーマイオニーが私に抱き着いてくる。

私も軽く抱き返した。

「ええ、久しぶり」

「君のお嬢様の横にいるスーツの女性つて、あの時の人かい？」

ロンが美鈴さんを指さしながら言った。

「ええ、キングズ・クロス駅で私を迎えにきてた人よ」

確かに美鈴さんはスーツを着ると印象がガラリと変わる。

スーツのスリムな感じが、彼女のスタイルの良さを引き立てるのだ。

「へえ、なんだかおかしな人だと思つたけど、少し印象変わったなあ」

ロンが感心したように言った。

「それに、僕たちと同じ赤毛だ。それだけで親近感がわくよ」

「ロンの髪はあそこまで見事な紅色じゃないでしょ？」

「それに、彼女人間じゃないしね」

私のそんな言葉にハリーたち3人は目を丸くした。

「じゃあ彼女も吸血鬼？」

「それも違うわ。中国のほうから来た妖怪らしいんだけど……私もよく知らないのよね。そもそも東と西では妖怪の定義も名前も違ったりするし」

3人は美鈴さんの方をじつと見る。

美鈴さんはそんなハリーたちの視線に気が付いたのか楽しそうに手を振っていた。

「まあどれだけ真面目そうな恰好をしても中身はアレよ。お嬢様とも口喧嘩するほどの」

「それは……よく解雇されないね」

ハリーが心配そうに呟いた。

「何やかんやでお嬢様も美鈴さんのことが気に入っているみたいだしね」

次の瞬間、先ほどまで何処かに行っていたバグマン氏が貴賓席に飛び込んできた。

「みなさん、よろしいですか？ 大臣、ご準備は？」

「ルード、君さえよければいつでもいい」

バグマン氏の言葉に大臣が大きく頷いた。

バグマン氏は杖を取り出すと自分の喉にそれを突き付け、「ソノーラス！」と呪文を唱えた。

あれは拡声の魔法だ。

どうやらワールドカップが始まるようである。

「レディース&ジェントルメン……ようこそ！ 第422回クイティツチワールドカップ決勝戦に！」

観衆がバグマン氏の挨拶に拍手喝采を送った。

「さて、前置きはこのぐらいにして。早速ご紹介しましょう！ ブルガリア・ナショナルチームのマスコット——」

私が競技場の方を見ると、ブルガリアのチームのマスコットキャラクターが競技場へと出てくる。

それはヴィーラだった。

ヴィーラというのは簡単に言えば、とてつもなく綺麗な女性の姿をしている魔法生物だ。

髪はシルバーブロンドで、風もないのになびいている。

そして肌は月のように輝いていた。

ヴィーラが躍り出すと男性陣の目が変わる。

まるで一瞬でひとめぼれしてしまったかのように、出来る限りヴィーラの目に付くようにと珍妙な行動を取り始めている。

ハリーは椅子から立ち上がり、今にも貴賓席から飛び降りそうな勢いだ。

ロンなど座席の上に立ち飛び込み台から飛び込まんばかりの体勢を取っている。他のウィーズリーの兄弟たちを見ても同じだった。

私は遠目でドラコの方を見るが、ドラコもしきりに髪の毛を手で梳いていた。

美鈴さんはヴィーラの踊りにやんややんやと手拍子を打ち楽しんでいる。

お嬢様はこちらの方が面白いと貴賓席にいる男性陣を観察していた。

しばらくするとヴィーラの踊りが終わり、競技場がブーイングに包まれる。

どうやら男性の殆どがヴィーラの退場を望んでいないようだった。

ヴィーラが退場すると今度はアイルランドのマスコットキャラクターが出てくる。

レプラコーンだ。

レプラコーンというのは言ってしまうえば小人のようなもので、数時間で消滅する黄金を作ることが出来る。

レプラコーンは金色か緑色のランプを持ち、競技場内をひとしきり飛行すると、空に大きなクローバーのマークを作る。

そしてそのクローバーからガリオン金貨の雨を降らせた。

私は金貨が降ってくる前に時間を止め、お嬢様のところへと移動する。

そして日傘を差し、時間停止を解除した。

次の瞬間大粒の黄金の雨が競技場へと降り注ぐ。

「あら、傘が壊れそうな勢いね」

バシバシとガリオン金貨が傘に弾かれ周囲に落ちる。

隣にいる美鈴さんは金貨を一つ掴み取ると匂いを嗅いだ。

「なんだ。チョコじゃないのか」

どうやら金貨チョコが降ってきたと思っただらしい。

まあ確かにこの量のガリオン金貨を降らせるのは現実的ではないので、そう思うのも無理はないだろう。

10万人に10枚ずつ金貨が行き渡ると考えても100万ガリオン。

競技場に落ちる分も考えればもつとか。

観衆は少しでも多くの金貨を拾おうと椅子の下に潜り込み、押し合いへし合いしている。

横を見るとロンが必死になって金貨を拾っていた。

「人間って愚かね。目先の欲に囚われて」

お嬢様が最高のショーだと言わんばかりに笑みを浮かべている。

少し考えればこの金貨が偽物であることぐらいは分かるだろうに。

金貨が降り終わると私は傘を畳んでハリーの方に行く。

ハリーたちは手に多くのガリオン金貨を抱えて喜んでいた。

「咲夜！ 急に何処かに行っちゃったから驚いたよ」

ハリーが冷静に私に話しかけてくる。

そういえばハリーは親の遺産があるのでそこまでお金には困っていないんだったか。

「さて、レディース&ジェントルメン！ どうぞ拍手を。選手たちの登場です！」

ついに試合が始まるらしい。

バグマン氏の掛け声とともに次々と選手たちが競技場に入ってくる。

両チームともハリーが乗っている物と同じ箒、ファイアボルトに乗っていた。

「クラムだ、クラムだ！」

ロンが双眼鏡のようなものを覗き込みながら叫ぶ。

私がロンの視線の先を追うと、色黒で黒髪のを痩せた選手が目に入った。

ロンが応援しているチームとは別のチームの選手なので、ロンはクラムという選手自

体が好きなのだろう。

選手は次々とピッチ内に整列していく。

そして両チームの中心に小柄で痩せた審判がやってきた。

手には木箱と箒を持っている。

審判は箒に跨り木箱を蹴って開けると中からクアツフルと2つのブラッジャー、そし

て金のスニッチが飛び出した。

スニツチの速度が凄く速い気がする。

学生が使うスニツチとは物が違うのかも知れない。

「それではあ……、試あああああい！ 開始！」

全ての準備が整ったのかバグマン氏が叫んだ。

次の瞬間全ての選手がスニツチを追っているシーカーと同じぐらいの速度で動き出す。

クアツフルをパスする動きが早すぎてバグマン氏の解説が全然追いついていなかった。

ブラッジャーも学生が行うクイデイツチの動きではない、もっと凶悪な動きをしている。

私はクイデイツチには詳しくはないが、どうやらアイルランドが押しているようだ。

みるみるうちにブルガリアと点差を広げていく。

私はどちらかのチームを応援しているというわけではないので試合の全体を目で追う。

途中クラムフェイントに引っかけなかったアイルランドのシーカーが地面に激突したり、審判がヴィーラに夢中になってしまったりとアクシデントが相次いだ。最終的にはブルガリアに10点の差をつけてアイルランドが勝利した。

だがスニッチを取ったのはブルガリアのクラムだ。

ハリーの話ではこれ以上点差が広がる前に試合を終わらせたということらしい。

確かにスニッチを取る前までは10対170で圧倒的にブルガリアのチームが負けていた。

そこまで点差が広がるということは、確かにハリーの言う通り巻き返しは難しいだろう。

「まあ、ヴあれヴあれは勇敢に戦った」

後ろの席でブルガリアの大臣が言った。

その言葉に先ほどまでボディージュエスチャーで物事を伝えていたファツジ大臣が顔を顰める。

「英語話せるんじゃないですか！ それなのに、1日中私にパントマイムをやらせるなんて！」

「いやあ、ヴおんとうにおもしろかったです」

ブルガリアの大臣は楽しそうに肩を竦める。

「さて、試合も終わったことだし。お嬢様のことだからもう帰ると思うわ」

私は伸びをしながらハリーたちに言う。

「そうなのかい？ これから表彰式もあるよ」

ロンがそう言うが、お嬢様はもう既に席を立っている。

「それじゃあ、また学校で」

ハリーが私に手を振った。

私は3人とウィーズリー家に別れを言うとお嬢様の方に行く。

お嬢様は私が来たことを確認すると、マルフォイ氏に簡単にお礼を言っ
て貴賓席の出入り口へと歩いていく。

私と美鈴さんもそれに続いた。

「咲夜」

「御意」

私はお嬢様の言葉の意味を理解すると時間を止める。

そしてお嬢様と美鈴さんの時間停止だけを解除した。

「いやあ、結構激しいスポーツなんですね」

美鈴さんは時間の止まった世界でキョロキョロと周囲を観察する。

「と言ってもあの速度だけどね。そこまで速いというわけでもないでしょうに」

お嬢様は私と比べるとこんなものよとも言いかのよう
に親指と人差し指で小さいモノをつまむように間を細めた。

「さて、マルフォイのところから面白い情報を仕入れたわ。咲夜、紅魔館に戻るわよ」

お嬢様が私に向けて右手を差し出して来る。

その様子を見て美鈴さんも私に右手を差し出した。

私は2人の手を掴むと指輪に魔力を溜めていく。

そして紅魔館のお嬢様の部屋に姿現しした。

「んー。やっぱり便利ですね。これ」

美鈴さんが窓を開けて門の方へと飛び降りる。

お嬢様は伸びをすると服を脱ぎ始めた。

私はいつもお嬢様が着ている部屋着を用意し、お嬢様に着せていく。

そして脱いだ服を畳み脇に置いた。

「今日はもう仕事に戻っていいわよ。館にまともに家事の指揮が執れる者がいなかったわけだし、仕事が溜まっているでしょう?」

お嬢様は机に座ると事務仕事を始めた。

暗に邪魔だから早く出ていけとおっしゃっているのだ。

私はお嬢様に深く頭を下げるとお嬢様の部屋を後にした。

次の日の紅茶の時間。

私はお嬢様に紅茶をお出ししていた。

お嬢様は机の上で魔法界の新聞を読んでいる。

新聞の1面には『クイディッチ・ワールドカップでの恐怖』と書かれている。

「あのあと少し事件があったようね。ごたごたに巻き込まれる前に帰ってきて正解だったわ」

お嬢様は私に新聞を渡してくる。

私は渡された新聞に目を通した。

どうやら、あの後闇の魔法使いがああたりの土地の管理者のマグルの家族をやりた
い放題にいたぶり、最終的には殺したらしいのだ。

それもこつそりとはなく、周囲の目を気にせず大々的にだ。

「死喰い人よ。でも闇の印が空に出た途端に逃げていったようね」

「闇の印……確かヴォルデモート卿の印でしたっけ」

記事を読んでいくと殺されたマグルの家族の死因が載っている。

どうやら磔の呪文で散々痛めつけられた挙句、死の呪文によって殺されたらしい。

「印を見て逃げていくということは信念を持って行動しているわけではないのですよね。なのにマグルの家族を殺したということは……」

私は新聞をお嬢様にお返しする。

お嬢様は私が淹れた紅茶を一口飲むと、満足そうに頷いた。

「クイレルを放った途端にこれ。本当に仕事が早いわ。多分マグルを殺したのはクイレルよ」

お嬢様が確信しているかのように言った。

「そう言えばお嬢様は生贄がいると言っていましたけど……どのぐらい戦死者が出れば良いのですか？」

「多ければ多いほどいいけど、量より質よ。取り敢えずダンプルドアとヴォルデモートには死んでもらうわ。……リドルをなんとかしないとヴォルデモートは死なないけどね」

そうか、ヴォルデモートを殺すとなると、分霊箱であるリドルも殺さないとならないのだ。

リドル自身そのことには気が付いているはずなので、パチュリー様と何かしら対策を考えているはずだ。

「そうだ、咲夜。これはマルフォイから聞いた話なんだけどね。約100年ぶりに三大魔法学校対抗試合が行われるそうよ。それもホグワーツで」

お嬢様は紅茶を飲み干すとソーサーに逆さまに被せ人差し指で弾く。

「三大魔法学校対抗試合……とは一体どのようなイベントなのでしょううか」

私がお嬢様に聞くと、お嬢様はティーカップの底を指でなぞりながら教えてくれた。「ホグワーツの他に有名な魔法学校が2つあってね。ボーバトンとダームストラング。それぞれの学校から1人ずつ代表選手を出して競わせるのよ。目的としては若い魔法使いの国際交流の場を設ける為といったところかしら。でも競技が少々危険で夥しい数の死者が出たから最近は行っていないかったみたい」

お嬢様は指でティーカップを弾き元の状態に戻すと、ティーカップを覗き込んだ。

「咲夜。私この試合の優勝トロフィーを部屋に飾りたいと思うのだけど。ちよつと取ってきてくれないかしら」

お嬢様は私の方を向いた。

私もお嬢様の顔を見る。

「かしこまりました。お嬢様。必ずや優勝トロフィーを持って帰ってきます」

私はお嬢様に頭を下げる。

「ヴォルデモートもまだ復活していないわけだし、しばらくはこの試合に専念しなさい」
「御意」

私はティーセットを片付けるともう一度お嬢様に頭を下げ部屋を後にした。

対抗試合とか、ムーデーとか、白イタチとか

10時50分。

私はホグワーツ特急のコンパートメントの中にいた。

『無事にホグワーツ特急に乗れたわ。今年は忙しくなりそうね』

私はリドルの日記に文字を書き込んでいく。

日記にはすぐに文字が浮かび上がってきた。

『三大魔法学校対抗試合だったね。お嬢様から優勝するようにとの命令を下されたんだらう?』

『ええ。必ず紅魔館にトロフィーを持って帰るわ』

私はちらりと窓の外を見た。

外は今大雨だ。

豪雨が窓を打ち、外の様子は殆ど見えない。

『自分の能力がバレないように気を付けるようにね』

『分かっているわ。私の生命線ですもの』

今日の朝、私は自分の部屋で荷物を纏めると紅魔館を出てキングズ・クロス駅を目指

した。

外は大雨で時間を止めて飛んでいくと全身びしょ濡れになることは目に見えていたので、今日は少し危ないが煙突飛行ネットワークを使って9と4分の3番線に出たのだ。

『そういえば約100年ぶりということはトムも三大魔法学校対抗試合のことは知らないのよね。学生に私が負ける道理はないけど、どんな競技があるのか少し楽しみよ』

そういえば今回は持ち物に正装用のドレスが指定されていた。

三大魔法学校対抗試合のパーティーか何かで着るのだろうか。

私は社交ダンス用のドレスを何着か持っている。

そのうちのベースが黒でそこに多少赤色が入ったドレスを今回は持つてきた。

『話には聞いたことがあるけどね。まあ開催されていたら僕以外に生き残る選手はいなかっただろう』

つまりは確実に参加できるし、他の参加者を血祭りにあげるということだろう。

何とも物騒な話だ。

『そろそろ汽車が出るみたい。またあとで』

私は日記を閉じる。

周囲に人の気配を感じ取ったからだ。

次の瞬間コンパートメントの扉がノックされた。

「やあ咲夜。ここいいかい？」

ドラコだ。

後ろにクラブとゴイルの姿もある。

「ええ、いいわよ。私一人にはこのコンパートメントは広すぎるもの」

ドラコは私が了承を出すとコンパートメント内に入ってくる。

ドラコは私の向かい側、クラブはドラコの横、ゴイルは私の横へと腰かけた。

「クイディッチの試合はどうだった？ 楽しんでもらえたなら嬉しいけど」

ドラコは開口一番にクイディッチワールドカップの話題を出した。

そういえばドラコはスリザリンのクイディッチチームのシーカーだ。

1年生の頃の飛行訓練の時から話題に出してくるぐらいなので、本当にクイディッチが好きなのだろう。

「ええ。私は学生のやるクイディッチしか見たことがなかったから、凄く新鮮だったわ。やっぱリプロのチームは実力が違うわね」

そうだろう！ とドラコは胸を張る。

まるで自分が主催した試合であったかのような態度だった。

「それに試合の後に面白い催し物もあったしな。マグルが4人も死んだ。穢れた血も少

なからず被害を受けたらしい」

ドラコが嬉しそうにそう付け足す。

「私たちはすぐ帰ってしまったから現場は見えていないんだけど、その顔を見る限り随分と愉快的な催し物だったみたいね」

「確かに最高だった」

「あのばばあの悲鳴聞いたか？」

クラブとゴイルが手を叩いて爆笑した。

「分かるわ。人間のもがき苦しむ姿を観察するのは楽しいわよね」

「そうだ。君のお嬢様から話は聞いていると思うけど、今年はホグワーツでも面白い催し物がある」

「三大魔法学校対抗試合でしょ」

ドラコの問いに私が答えた。

「そうだ。ホグワーツ、ボーバトン、ダームストラング校が代表選手を1人ずつ出し合って競わせるんだ。他校の生徒との交流を目的として行われるとは言っているけど、父上から言わせればそうではないらしい。ようは学校のランク付けの意味合いが強いな。だから各校の校長は意地でも自分の学校の代表選手を勝たせようとする」

「そうみたいね。私も詳しくはないんだけど。ドラコは参加するの？」

私が尋ねるとドラコは少し難しい顔をした。

「エントリーしたい気持ちはあるが、父上が難色を示してね。もしかしたら年齢制限のようなものがあるのかも知れない。咲夜は出るのかい？」

「ええ、必ず優勝するわ」

私の答えにドラコは少し引きつった笑みを浮かべる。

「へ、へえ。凄い自信だね。もし代表選手に選ばれたら応援するよ。もつとも、僕が代表選手になるかも知れないけど」

「それはないわ。代表選手になるのは私よ。必ずね」

「そうなのかい？ ……冗談のような話だけど、君が言うとは冗談に聞こえないな……」
まあ冗談ではない。

どんな障害があっても無理やり代表選手になって優勝するつもりだ。

正々堂々なんて言葉はいらない。

「咲夜がホグワーツの代表選手になるのだとしたら、僕はダームストラングに入校したほうが良かったかな？」

「そういう問題なのかしら」

ドラコは少し悔しそうな顔をしてダームストラングの話を始める。

「父上は僕をホグワーツではなく、ダームストラングに入校させようとお考えだったん

だ。父上はダームストラングの校長を良く知っているからね。ほら、父上がダンブルドアをどう評価しているか知っているだろう？ あいつは穢れた血鼻屑だ」

「穢れた血、ねえ。そういえばお嬢様も仰つてたわ。最近の若い吸血鬼は人間の血が混じりすぎて非常に弱体化してるって。純粋な吸血鬼の血を濃く引いていればいるほど成長が遅いらしいわよ」

「そう言う話が出てくるということはスカーレット家というのは吸血鬼の中での純血の家系なのかい？」

「純血かどうかは分からないけど、濃い吸血鬼の血を持つているのは確かよ。お嬢様は私よりお若く見えるけど、500年近く生きてらしているみたいだし」

ドラコはそれはいいことを聞いたと表情を明るくする。

「それは凄いな。流石咲夜の仕えているお嬢様だ」

「少し話がずれてしまったわね。ダンブルドアが穢れた血鼻屑って話だったかしら。ダームストラングの校長は違うの？」

私が話を戻すとドラコはまた喜々として自分の話に戻っていった。

「ああ、ダームストラングじゃ穢れた血は入学させないらしい。父上は僕をダームストラングに行かせたかったらしいんだけど、母上が反対したんだ。遠くの学校に行かせるのは心配だって」

「ドラコとしてはどっちの学校に行きたかったの？」

ドラコはそれは勿論と言わんばかりに頷いた。

「ダームストラングじや闇の魔術に関して、ホグワーツよりずっと気の利いたやり方をしているんだ。生徒が実際に闇の魔術を習得するんだよ。僕たちがやっているようなケチな防衛術じゃない」

「より実戦向けというわけね。確かにホグワーツの闇の魔術に対する防衛術の授業は生温いわ」

「君もそう思うかい？」

私はドラコの言葉に一本のナイフを取り出す。

「今のところ、授業で習った呪文より、こっちのほうが役に立つわ」

私は汽車の窓を開けると豪雨の中外に向かってナイフを投げる。

私の投げたナイフは近くを飛んでいた鳥に刺さり、見事その鳥を撃ち落とす。

雨が降りこんできたのでゴイルがぴしやりと窓を閉める。

「お見事」

ドラコが私のナイフ投げを見て言った。

「そう言えば咲夜はそのナイフ投げを誰に習ったんだ？」

「お嬢様よ。多少私の独学も入っているけどね。簡単な体術も美鈴さんから習っている

から近接戦闘も多少はできるわ」

ドラコはそれを聞いて少し驚いているようだった。

「そうか……僕も父上に魔術の指導をしてもらっているんだ」

「そうなの？ 貴方のお父様ってお強い人なのね」

「ああ、僕の父上は凄いんだ」

ドラコはそう言って胸を張る。

クラップとゴイルは車内販売に来た魔女からお菓子を買っていた。

私は懐中時計を確認する。

もう既に昼を回っていた。

クラップとゴイルはお菓子を大量に抱えてこちらへと戻ってくる。

どうやらみんなで山分けしようというところらしい。

私は鞆からダイアゴン横丁で買った宙に浮かぶ机とティーセットを取り出す。

この机は足場が不安定な場所でも安定して上に物が置ける便利なものだ。

特に列車の中のような机を置くスペースがない場所では重宝する。

私は4人分の紅茶を淹れると3人に振る舞った。

クラップとゴイルに紅茶の味が分かるとは思えないが……。

だがこういっただけのお菓子だけの食事でも、紅茶の有る無しで満足感が違ってくる。

ドラコもそれが分かっているのか嬉しそうに紅茶を受け取った。

その後はお菓子を食べながら三大魔法学校対抗試合の話やクイティッチワールドカップの話をドラコとした。

しばらくすると横のコンパートメントが騒がしくなっていく。

グリフィンドール生が入れ替わり立ち代わりで隣のコンパートメントに出入りしていくのだ。

ドラコもそれに気が付いたらしく、2杯目の紅茶を机に置き立ち上がった。

「多分ポッターと赤毛の馬鹿と穢れた血だ。少し挨拶をしてくるよ。クラブ、ゴイル、行くぞ」

ドラコは2人を引き連れてニヤニヤとした顔でコンパートメントを出ていく。

私はコンパートメントの扉を少し開け、耳を澄ませた。

「それに僕たちクラムをすぐそばで見ただぞ！ 貴賓席だったんだ——」

ロンが自慢するような声が聞こえてくる。

どうやら向こうでもクイティッチワールドカップの話をしていたようだ。

「君の人生最初で最後のな、ウィーズリー」

ロンの自慢話を遮るようにドラコの声が聞こえてくる。

「マルフォイ、君を招いた覚えはないぞ」

今度はハリーの声だ。

ハリーはドラコに対して滅茶苦茶冷たいが、それはお互い様だろう。

「ウィーズリー、なんだいそいつは？」

ドラコがロンの何かを見つけたらしい。

少し争うような音が聞こえたが、どうやらドラコがその何かを取り上げたようだった。

「これ見ろよ！ ウィーズリー、こんなお古を本当に着るつもりか？ 言っておくが、こ

れが流行ったのは1890年代だ」

着る、ということはドレスローブだろうか。

ロンの家はお金持ちではない。

多分お古の年代物を持たされたのだろう。

いつ使うものか分からないが、時期が合えば今年のロンへのクリスマスプレゼントは決まったなと思った。

「糞食らえ！」

ロンの怒鳴り声が聞こえてくる。

その様子にドラコは高笑いし、クラブとゴイルは爆笑した。

「それで……エントリーするの？ ウィーズリー。頑張れば少しは家名を上げること

ができるかもな。賞金もかかっているしねえ……勝てば少しはましなローブが買えるだろうよ」

「なにを言ってるんだ？」

「エントリーするのかい？」

話はどうやら三大魔法学校対抗試合の話題に移ったようだ。

だがどうやらハリーたちは対抗試合があることを知らないらしい。

そのことをドラコは対抗試合のことは明かさずに馬鹿にした。

「父親も兄貴も魔法省にいるのに、まるで知らないのか？ 驚いたね。父上なんか真っ先に僕に教えてくれたのに……ファッジ大臣から聞いたんだ。まあ父上はいつも魔法省の高官と付き合っているしな。多分君の父親は、ウィーズリー、下っ端だから知らないのかもしれないな。……そうだ、おそらく君の父親の前では重要事項は話さないのだろう」

ドラコはもう一度高笑いするとコンパートメントに帰ってきた。

隣ではロンが力任せにコンパートメントのドアを閉めて窓ガラスが粉々に割れる音が聞こえた。

「面白い話が2つほど聞けたよ。ウィーズリーの奴、おぼさんが着るようなドレスローブを持っていた。あれを着てパーティーで踊るのが見ものだね」

戻ってくるなりドラコはロンのドレスローブの話題を出す。

クラップとゴイルはそのドレスローブを思い出したのか爆笑していた。

「そう。それは楽しみね。あれを着るのはいつ頃になるのかしら」

「確かクリスマスパーティーだ。他校の生徒と入り交じってダンスをするらしい」ということはギリギリ間に合うか。

生地を仕入れておかないといけないだろう。

ホグズミードに上等な布が置いてある店はあっただろうか。

「そう言えば賞金がどのと言っていたわね。学校行事だからそれほど高額ではないんでしょ?」

「学校行事だが魔法省が深く関わっているんだ。父上曰く100年ぶりに行く分安全対策や設備の用意とかも大掛かりになっているらしい。賞金も期待できると思う」

ドラコはお菓子にもう一度手を付け始める。

私もカエルチョコレートの外装を剥いで暴れるカエルの足を引き千切り、口の中に放り込んだ。

「ふーん。あんまり賞金には興味ないけど、もしそこそこ入るんだつたらウィーズリーにでもあげようかしら」

「何故だい?」

ドラコが目を見開く。

それほど驚くようなことだったのだろうか。

「14歳の少女から金貨を恵んでもらう魔法省の役人の家族って、相当惨めだとは思わない？」

それを聞いてようやく趣旨を理解したのかドラコは爆笑した。

まさにその手が有ったかと言わんばかりだ。

「そりや傑作だ！ 末代まで笑いものにされるだろう。まああの卑しい一族だったら喜々として受け取りそうだけどね」

私はドラコの笑い声を聞きながら紅茶を飲む。

あと数時間もしないうちにホグワーツに到着するだろう。

歓迎会で新入生の組み分けが終わると、テーブルの上に料理が溢れる。

私はハリーたちの横に座り色々な料理を少しずつ皿に盛っていった。

ハリーたちは皿に溢れんばかりに料理を載せている。

「少しずつ食べればいいでしょうに。ハリーたちも列車の中でお菓子は食べたんですよ？」

私が話しかけると口一杯にマッシュポテトを詰め込んだロンが返事をした。

「別腹だよ。そういうえば咲夜は何処にいたんだ？ 列車では見なかったけど」

「隣のコンパートメントにいたわ」

ロンは気が付かなかったようだが、ハーマイオニーがハツと声を上げた。

「隣ってことはマルフォイのところのいたってこと？」

「ええ。どちらかというところ、私が座っていたコンパートメントにドラコが入ってきた形になるのだけれどね」

私が肯定するとロンがびたりと動きを止める。

「咲夜……こつちにくればよかったじゃないか。わざわざマルフォイの所に留まらなくても」

「ロンだって逆をされたらいい気分ではないでしょう？ そういうことよ」

ロンは納得できないと言った様子でステーキの塊を口の中に押し込む。

そのステーキが思った以上に美味しかったのかロンの表情が綻んだ。

「今夜はご馳走が出ただけでも運が良かったのですよ？」

私の背後で声がする。

くるりと振り返るとそこにはほとんど首無しニックが料理を恨めしそうに睨みながら浮かんでいた。

ほとんど首無しニツクはグリフィンドールに憑いているゴーストだ。

「さきほど厨房で問題がおきましてね」

「問題？ 何かあったの？」

ハリーが口一杯にステーキをモキュモキュしながらほとんど首無しニツクに聞いた。

「ピーブズですよ。いつものことなのですが、ピーブズが宴会に参加したいと駄々をこねまして」

「参加させてあげればいいじゃない」

私がそういうとほとんど首無しニツクは首をグラグラさせながら横に振った。

「到底無理な話です。あんな奴ですからね。行儀作法も知らず、食べ物皿を見れば投げつけずにはいられないようなやつです。太った修道士はピーブズにチャンスを与えてはどうかと言ったのですが、血みどろ男爵が駄目だと言いました。まあ私としてもそのほうが賢明だとは思いましたが」

「厨房で何をやったの？」

ハリーがほとんど首無しニツクに聞いた。

「ああ、いつもの通りです。何もかもひっくり返しての大暴れ。鍋は投げるしフライパンは投げるし。厨房の床はスープの海のようにでしたよ。屋敷しもべ妖精が喋れないほど怯えてしまって……」

その言葉を聞いた瞬間ハーマイオニーが手に持っていたゴブレットを落とした。

中に入っていたかぼちゃジュースがテーブルクロスを染めていくがハーマイオニーは気にも留めない。

「屋敷しもべ妖精がここにもいるって言うの?」

驚きのあまり声も出ないといった顔をしている。

「このホグワーツに?」

「さよう。イギリス中のどの屋敷よりも大勢いるでしょうな。100人以上は」

ほとんど首無しニツクが告げた真実にハーマイオニーは悲鳴のような叫び声を上げた。

「私、一人も見ることがないわ!!」

「そうね、普段は厨房にいるもの。深夜みんなが寝静まった後に校内の掃除や暖炉の火の始末をしているのよ」

「本当にいい屋敷しもべ妖精たちです。優秀な屋敷しもべ妖精ほど姿を見られないようにする」

私は厨房の中にいた屋敷しもべ妖精たちを思い出すように言った。

ほとんど首無しニツクも感心したように首をカックンカックンと縦に振っている。

ハーマイオニーは私がある存在を知っていたということにショックを隠せないよう

だった。

「も、勿論お給料はもらっているんでしょう？　休暇も取れるわよね？　療養休暇とか

年金とか……」

「うふふ、何の冗談よ」

ほとんど首無しニツクも私の含み笑いに同意する。

「療養休暇に、年金？　屋敷しもべ妖精は療養休暇や年金を望んでいません！」

「咲夜だったらわかるでしょう!?　メイドの仕事をしてるなら彼らの奴隷労働の酷さを

！　お給料もお休みももらえないだなんてあんまりだわ！」

ハーマイオニーが同意を求めるように私に叫ぶ。

「お嬢様からお給料なんて貰ったことがないわ。休暇もね。ハーマイオニー、貴方大丈

夫？」

ハーマイオニーは信じられないと言った顔で私を見ると、静かにナイフとフォークを机に置き、自分の皿を遠くに押しやった。

「ねえ、ハーマイオニー。君が絶食したって、屋敷しもべ妖精が療養休暇を取れるわけ

じゃないだろう？」

「奴隷労働よ！　このご馳走を作ったのがそれなんだわ」

ロンが口の中のモノを飲み込んでハーマイオニーの説得に掛かるが、無駄だったよう

だ。

「咲夜も何か言つてやれよ！ こいつ自覚がないみたいだけど咲夜のことにも奴隷同然だつて言つてるんだぜ？」

確かにロンの言葉ももつともだ。

それに気が付いたのかハーマイオニーは私のほうを見てあたふたと戸惑いだした。

「そ、そういう意味じゃないのよ咲夜……。私は屋敷しもべ妖精の労働環境がどれ程酷いかという話をね？」

「私からみたら幸せそうに働いていたけどねえ。この前厨房にお邪魔した時は色々どご馳走になつたし」

ハーマイオニーはむぐむぐと口を噤んだ。

料理に手を付ける様子はなかった。

「さて！ みんなよく食べ、よく飲んだことじやろう」

デザートも終わり皿の上が綺麗になるとダンブルドア先生が立ち上がり大きな声を出した。

大広間にいる生徒の殆どが話すのを止め先生の言葉に耳を傾ける。

「いくつか知らせておくことがある。よく聞いておくように」

ダンブルドア先生が全員の顔を見渡した。

「いつも通り、校庭内にある森は立ち入り禁止じゃ。ホグズミード村も、3年生になるまでは禁止じゃ。そしてこれを知らせるのはわしの辛い役目なのじゃが、寮対抗クイデイツチ試合は今年を取りやめになる」

「エーッ!?!」

テーブルのあちこちでそのような悲鳴にも聞こえる叫び声が聞こえてくる。

ハリーも絶句していた。

フレッド、ジョージの双子などダンブルドア先生のほうを見ながら口をパクパクとさせている。

そんな選手の反応を無視してダンブルドア先生は続けた。

「これは10月に始まり学年末まで続くイベントの為じゃ。先生方も殆どの時間と労力をこの行事の為に費やすことになる。クイデイツチの試合が無くなるのは悲しいことではあるが、わしは皆がこの行事を大いに楽しむであろうと確信しておる。ここに大なる喜びを持って発表しよう。今年ホグワーツで——」

ダンブルドア先生が三大魔法学校対抗試合のことを発表しようとしたその時、大広間の扉が雷鳴と共にバタンと開いた。

全員が何事かと戸口のほうに視線を向ける。

戸口には1人の男が立っていた。

私はその姿に見覚えがある。

傷だらけの顔に眼帯のような形で義眼をつけている。

歩き方はぎこちなく、情報通り左足が義足のようだ。

「マッドアイね。伝説的な強さを誇っていた闇祓いの英雄」

パチユリー様が集めた資料で読んだことがある。

アズカバンの半分を自らが捕まえた死喰い人で埋めたという逸話があるほどの闇払いだったはずだ。

ムーディはまっすぐダンブルドア先生に近づいていくと硬く握手をする。

簡単に挨拶を済ませるとムーディは空いている教員の席へと座った。

「闇の魔術に対する防衛術の新しい先生を紹介しよう」

ムーディが座るのを見届けるとダンブルドア先生が再び口を開いた。

「アラスター・ムーディ先生じゃ」

私は軽く拍手を送る。

だが他に拍手をしている人間はダンブルドア先生とハグリッド以外はいなかった。

3人の拍手が静寂の中でパラパラと虚しく鳴り響き、その拍手もすぐに止んだ。

「ムーディ?」

ハリーが小声でロンに話しかける。

私はロンの代わりにハリーに話しかけた。

「マッドアイって呼ばれてるわ。有名な元闇祓いよ」

ハリーはムーディ先生に魅入られたように見つめている。

ダンブルドア先生が話を切り替える為にゴホンと軽く咳ばらいをした。

「先ほど言いかけたことじゃが。これから数か月にわたり、ホグワーツは心躍るイベントを主催するという光榮に浴する。この催しはここ一〇〇年以上行われていない。今年、ホグワーツで三大魔法学校対抗試合を行う」

「ご冗談でしょう！」

フレッドが大声を上げた。

そのすつとんきよな叫び声に大広間にいた全員が笑いだし、ダンブルドア先生もその絶妙な掛け声を楽しむように言葉を返した。

「ミスター・ウィーズリー。わしは決して冗談など言っておらんよ」

ダンブルドア先生が三大魔法学校対抗試合の説明を始めた。

生徒の殆どがその説明に耳を傾けている。

三大魔法学校対抗試合の詳細についてはドラコから教えてもらった通りだった。

誰もが自分が代表選手になると息巻いている。

ダンブルドア先生は三大魔法学校対抗試合の説明のあとに少し残念そうに口を開い

た。

「全ての諸君が優勝杯をホグワーツにもたらそうと熱意に満ちていると承知しておる。しかし3校の校長、ならびに魔法省としては今年の選手に年齢制限を設けることで合意した。ある一定の年齢に達した、つまり17歳以上の生徒だけが代表候補として名乗りをあげることが許される」

ダンブルドア先生は静かに私の顔を見た。

私が参加しようとしていることなどお見通しだと言わんばかりだ。

「年少の者がホグワーツの代表選手になろうとして、公明正大なる選考の審査員を出し抜いたりせぬよう、わし自ら目を光らせることとする。17歳に満たない者は、名前を審査員に提出したりして時間の無駄をせんようによく願っておこう」

どのように選考がなされるのだろうか。

最悪服従の呪文を使うことも視野に入れつつ私はダンブルドア先生の言葉を聞いていた。

「そりゃないぜ！」

フレッドとジョージが叫び声を上げる。

「俺たち4月には17歳だぜ？　なんで参加できないんだ……」

「俺はエントリーするぞ。止められるもんなら止めてみる」

どうやら私と同じく年齢制限をどうにかする方法を考えているようだ。

その後歓迎会も終わり私たちはグリフィンドールの談話室に戻る。

そこで私はハリーたちと分かれ、女子寮へと上がると自分に割り当てられたベッドに潜り込んだ。

新学期が始まるとすぐに授業が始まった。

薬草学では腫れ草の膿を搾るといふ授業が行われた。

腫れ草の膿は貴重で、ニキビなどに効果がある。

私はドラゴンの革の手袋をして瓶に膿を集めていく。

黄緑色のどろりとした膿は強烈な石油臭を発しており、何とも言えない気分になる。

授業が終わるころには数リットルの膿が採取できた。

薬草学の次は魔法生物飼育学だ。

去年と同じくスリザリンとの合同授業らしい。

私はハリーたちと共に禁じられた森のはずれに建っているハグリッドの小屋を目指した。

「おっはよー！」

ハグリッドはハリーたちにニッコリとする。

ハグリッドの足元には蓋のない木箱が数個置いてあった。

私は周囲を見回すが、まだスリザリン生はやってきていないらしい。

「スリザリンを待ったほうがええ。あいつらもこいつを見逃したくはねえだろうからな。ほれ、尻尾爆発スクリュートだ！」

私はハグリッドの足元に置いてある箱を覗き込んだ。

その中にいた生物を見てブラウンが悲鳴を上げる。

ハリーも苦々しげな顔をしていた。

尻尾爆発スクリュートは殻を剥かれたロブスターのような姿で、青白くヌメヌメした胴体からは勝手気ままな場所から足が突き出している。

頭は何処にあるか分からなかった。

そのような奇怪な生物が箱の中で100匹ほどウジャウジャと蠢いているのだ。

匂いも腐った魚のようだ。

そしてこれが名前の由来になっているのか、時折尻尾のようなどころから火花が飛び、小さな爆発音とともに10センチほど前進している。

「今卵から孵ったばっかだ。だからお前たちが自分で育てられるっちゅうわけだな。」

そいつを今年のプロジェクトにしようと思っちよる！」

私はそんなハグリッドの言葉に眉をひそめた。

ハリーたちも表情が固まっている。

これを1年間も育てないといけないのか？　と言いたげな顔だった。

私が後ろを振り返ると既にスリザリン生が到着していた。

「それで、何故我々がそんなのを育てないといけないのでしょうかねえ？」

ドラコがハグリッドに向けて冷たく言い放った。

もつともな言い分だろう。

お嬢様のペットにはもつと奇怪な生物がいたが、だからと言ってこれを授業で1年間育てたいという気持ちにはならない。

「つまり、こいつらは何の役に立つんです？　これを育ててなんの意味があるっていう

んですかねえ……」

ドラコの言葉にハグリッドが口をパクパクさせている。

必死で理由を考えているようだった。

「マルフォイ、そいつは次の授業だ。今日は皆でこいつに餌を与えよう。俺はこいつを飼ったことがねえんで、何を食うかよくわからん。アリの卵、カエルの肝、それと毒のねえヤマカガシをちいと用意した。全部ちーとづつ試してみろや」

「ちよつと待ちなさいよハグリッド。飼ったことがない？」

私は敬語も忘れてハグリッドを問いただしていた。

「おお、その通り。だから生徒たちが全部1から世話が出来るっちゅうわけだ」

「それは……どうなのかしらね」

私はハリーの方を見る。

ハリーたちは恐る恐るスクリユートにカエルの肝を差し出していた。

私は肩を竦めるとスクリユートを1匹手で掴み持ち上げた。

なんというか、本当になんといえいいのか分からないような見た目をしている。

スクリユートは私の手の上でもぞもぞと動く。

私はカエルの肝を手の上に落とし食べるかどうか様子を見た。

「咲夜……よく触れるわね」

ハーマイオニーが私の手の上に乗っているスクリユートにびくびくとした視線を送っている。

「お嬢様が飼っていたペットにはもつとえげつないものも多かつたしね」

もつともそういうったペットは大体妹様の出す狂気に耐えられず死に絶えたが。

魔法生物飼育学の次は占い学の授業だ。

ハーマイオニーは占い学の受講をやめたので違う授業へと向かっていく。

私はハリーたちと共に北塔へ行き螺旋階段と梯子を上り、占いの教室へと入った。どうやら星を用いた占いを学習するようだ。

生徒たちは自分の生まれた時の惑星の位置を書き込む作業をしている。困ったことになった。

私は自分の誕生日を知らないのだ。

「どうされたのかしら、咲夜。白紙ではありませんか……」

トレローニー先生が心配そうな声を上げる。

「すみません。私、自分の誕生日を知らないんです。小さい頃に拾われた身ですので……」

「それはそれは……、では宿題で出す予定の課題を始めていてよろしくてよ。これから1か月間の惑星の動きが自らの運命にどう影響を与えるか、詳しく分析なさいな」

私は教科書を広げ言われたことをやっつけていく。

宿題に言うと言っていたが、授業の時間中に終わってしまった。

授業が終わると私はハリーたちと共に大広間へと向かう。

私たちが宿題の話をしながら夕食を取っていると、ドラコが新聞を持ってこちらへと歩いてきた。

「ウィーズリー！　おい、ウィーズリー！」

何やら嬉しくてたまらないと言った顔をしている。

ドラコの後ろにはいつものごとくクラップとゴイルが立っていた。

「君の父親が新聞に載っているぞ、ウィーズリー！ 聞けよ」

ドラコが手に持っている日刊予言者新聞の記事を読み上げ始めた。

その記事の内容はアーサー氏の失敗とムーディ先生のゴタゴタを書いたものだった。

「写真まで載ってるぞ。君の両親が家の前で写ってる。もつともこれが家と言えるかどうか！ 君の母親は少し減量したほうがいいんじゃないか？」

ドラコの言葉にロンが怒りで震えていた。

「失せろマルフォイ。ロン、行こう……」

ハリーが静かにロンに言う。

ロンが席を立つ前にドラコが続けた。

「そうだ、ポッター。君は夏休みにこの連中のところに泊まったんだろう？ それじゃあ教えてくれ。穴倉住まいのウィーズリーの母親は本当にこんなにデブなのか？ それとも単に写真写りかねえ？」

「マルフォイ、君の母親はどうなんだ？」

ドラコの言葉にハリーがたまらず言い返した。

「あの顔つきは何だい？ 鼻の下に糞でもぶら下げているみたいだ。いつもあんな顔を

しているのか？ それとも単に君がぶら下がっていたからなのかい？」

ドラコの青白い顔に少し赤みが差した。

「僕の母上を侮辱するな。ポッター」

「だったらその減らず口を閉じとけ」

ハリーはそう言つてドラコに背を向け夕食の続きを取ろうとした。

ドラコは杖を抜くと怒りに任せてハリーに呪いをかけようとする。

ドラコの放つた呪いはハリーの頬を掠めテーブルに当たつた。

次の瞬間後ろでその光景を見ていたムーデイ先生が物凄い勢いで杖を抜き放ちドラコに魔法を掛ける。

ドラコはその速度に全く反応出来ずあつという間に白いケナガイタチへと姿を変えてしまった。

「若造！ そんなことをするな！」

ムーデイ先生の大声が大広間に響き渡る。

イタチに変えられたドラコは地面の上でブルブルと震えていた。

私はイタチの首根っこを掴まえると抱きかかえる。

「やられたかね？」

ムーデイ先生がハリーに唸るように聞いた。

「いえ、掠っただけです」

「触るな!!」

いきなりムーディ先生が叫んだ。

その大声にハリーは面食らつていようだ。

ムーディ先生はドラコを抱きかかえている私のほうへと足を引きずりながら歩いてくる。

「そいつを引き渡せ。敵が後ろを見せた時に襲う奴は気に食わん!」

ムーディ先生は私のほうにグイと手を出した。

「つて言つてるけど、ドラコ。渡していい?」

イタチは私の手の中で首を横に激しく振る。

どうやら死んでも引き渡されたくはないようだった。

「というわけです先生。お渡しすることは出来そうにないですわ」

私はムーディ先生にニッコリと微笑んだ。

「いい度胸だ小娘! わしと殺り合おうつてののか? ええ!」

ムーディ先生は両方の目で私を睨みつけ大声を出す。

ハリーたちはそんな奴早く渡しちやえよといった表情をしていた。

「それも楽しそうですね」

ムーディ先生はそれを宣戦布告と判断したのか私に向けて杖を振るう。

私は放たれた呪文にナイフを投げ、空中で相殺した。

「見事な腕だ。だが油断大敵！」

次の瞬間私が片手で抱えていたドラコがムーディ先生の方に引き寄せられるように飛んでいく。

呼び寄せ呪文だ。

私も自らの時間を操作し一瞬で杖を抜くとドラコに向けて呼び寄せ呪文を掛ける。

「アクシオー！」

ムーディ先生と私の呼び寄せ呪文が拮抗しているのか、ドラコは空中で引き裂かれんばかりにもがいている。

どちらも杖を下ろすことは出来ない。

今呼び寄せ呪文を解除すると相手のほうにドラコを渡してしまう結果になるからだ。

だが私の利き手は左手。

杖腕は右手。

私は空いている左手にナイフを持つと、ドラコを掠めるぐらいにギリギリにムーディ先生に投げ放った。

「むっ!!」

私の投げたナイフはまっすぐとムーディ先生の顔目掛けて飛んでいく。

ムーディ先生は迫るナイフを魔法の義眼で追うと、左手でナイフの柄の部分をつまみ取った。

「見事な技術だ。だが投げナイフの欠点は敵に鹵獲されてしまうことだ！」

ムーディ先生はまっすぐ掴み取ったナイフを私に投げ返した。

そのナイフは再度ドラコを掠り私へと迫ってくる。

私は飛んでくるナイフを左手に構えたナイフで跳ね返し、更に3本のナイフを投げる。

4本全てが器用にドラコの体を掠り、ムーディ先生へと飛んでいった。

ムーディ先生は流石に全てを止めるのは無理だと判断したのだろう。

1本だけナイフを掴み取ると器用に後にくっついてナイフを弾き落とす。

弾かれたナイフは床や机に突き刺さった。

「呼び寄せ呪文を解け！ このイタチが引き裂かれても知らんぞ！」

「そうなたら困るのはムーディ先生ですよね？」

「ムッ！ そうかも知れんが今はそんなことはどうでもいい！」

私は時間を止める。

そして計50本程のナイフを投げ、空中で静止させた。

私が時間停止を解除すると空中に静止していたナイフは一斉にムーディ先生の元へと飛んでいく。

ムーディ先生はいきなり現れたナイフの弾幕に初めて驚いたように目を見開いた。ナイフの弾幕はドラコのすぐそばを通り過ぎムーディ先生へと迫る。

この数のナイフを魔法以外でどうにかすることは出来ないだろう。

しかしナイフはムーディ先生の元へと到達する前に何かに弾かれるように勢いをなくし地面へと散らばる。

私がムーディ先生を警戒しながら横を見るとマクゴナガル先生が血相を変えてこちらに走ってきていた。

「ムーディ先生！ それにミス・十六夜も！ 一体何事ですか!？」

先ほどのマクゴナガル先生の盾の呪文のようだ。

私とムーディ先生は呼び寄せ呪文をドラコに掛けながら顔を見合わせる。

「やあマクゴナガル先生。何って……そりゃ決闘だろうが。なあ?」

ムーディ先生が楽しそうに私に話しかけてくる。

「決闘……でいいんでしょうかこの場合。どちらかというとな綱引き?」

「な、何をなさっていたんですか? その白イタチは?」

マクゴナガル先生が地面に散らばるナイフと空中で苦しそうにもがいているドラコ

を交互に見ながら言った。

「不意打ちをかけた生徒に教育を施そうとしたらこの小娘が邪魔をした。それだけだ」
「私はドラコが助けを求めてきたので助けただけですが、なにか？」

マクゴナガル先生が腕に抱えていた本が地面に零れ落ちた。

「教……え？ その白イタチは生徒で、その生徒を挟んで先ほどからナイフを投げ合っていたのですか!？」

「さよう!」

「そうなんです先生」

「そんな!」

マクゴナガル先生が手に持っていた杖をドラコに向かって振るう。

するとバシッと大きな音を立ててドラコが人間の姿に戻った。

まだ呼び寄せ呪文は切れていないので空中で引き裂かれそうになっている。

「今すぐその呼び寄せ呪文を解きなさい!」

「だが……」

「今解くと負けたような気がするんです」

私たちは更に杖に籠める魔力を強める。

ドラコの腕や足が千切れんばかりに広がった。

「あー！ 痛い痛い痛い！ 千切れる！ 睽夜、千切れるって!!」

ドラコの悲痛な叫び声が大広間に木霊する。

「ドラコ、もう少しの辛抱よ。今ムーディ先生をどうにかしてあげるから」

「小娘！ そいつを助ける気が少しでもあるのなら今すぐ呼び寄せ呪文を解くんだな。中世では四肢をロープでくくり馬に引かせることによって4方向に体を引きちぎるという処刑があったらしい」

「もしそうなたら教師である貴方の責任になりそうですね。先生」

「いいからおやめなさい！」

マクゴナガル先生が叫び声を上げる。

だが実をいうと今魔法を解くわけにはいかないのだ。

「ですが先生。今魔法を解くとドラコはナイフの散らばった床に落ちることになるのですが」

「ひいひいひいひいひい!!」

ドラコが地面を確認したのか情けない叫び声を上げる。

マクゴナガル先生が杖を振るうとナイフが宙に浮かび一か所に集まった。

そしてマクゴナガル先生はドラコに向けて杖を振るう。

「フィニート・インカンターテム、呪文よ終われ」

私とムーディ先生の呪文の効力が消え、ドラコは地面に落下した。

「ムーディ、本校では懲罰に変身術を使うことは絶対ありません！」

マクゴナガル先生が困り果てたように言った。

「ダンブルドア先生がそうあなたにお話ししたはずですが？」

「そんな話は聞いて……聞いたかもしれない。フム。しかし、わしの考えでは一発敵しいシヨックで——」

「ムーディ！ アレのどこが一発ですか!! 本校では居残り罰を与えるだけです！ さもなければ規則破りの生徒が属する寮の寮監に話をします」

「わしは変身術を掛けただけだ。まだ体罰を行っておらん！ 少しその小娘と取り合いはしたが——」

「その取り合いが問題なのです！」

「フン、そうかね？」

ムーディ先生はコツツ、コツツと木製の義足の鈍い音をホール中に響かせて地面の上でまだ蹲っているドラコに近づいた。

そして静かにドラコに向けて言う。

「いいか、わしはお前の親父を良く知っているぞ……親父に言っておけ。ムーディが息子から目を離さんぞ、とな。わしがそう言ったと伝える……さて、お前の寮監はスネイ

「プだったな？」

「そ、そうです」

ドラコは震えながら言葉を絞り出した。

「やつも古い知り合いだ。懐かしのスネイプ殿と口をきくチャンスをずっと待っていた……来い」

ムーデイは全身の痛みでまだ動けないドラコの腕を掴み地下牢の方へと引きずっていく。

マクゴナガル先生はそんな2人の後ろ姿を心配そうに見送っていたが、やがてゆつくりと私のほうを向いた。

私は先生が集めたナイフを袖の下に仕舞っていく。

「ミス・十六夜。一体何をやっていたのですか？ 先生にナイフを投げるなど言語道断ですよ！」

「相手はあのマッド・アイです。生徒1人がどうこうしたところで怪我を負うような人間じゃないでしょう？」

私はすまし顔でマクゴナガル先生に言う。

「そういう問題ではありません。今回は不問にしますが次にこのような場面に出くわしたらどんな理由があろうと罰則を与えます。いいですね？」

「先生が私に許可を求める必要はないのでは？」

「そういう意味ではありません。私の言葉を理解したかと言っているのです」

私は今度はマクゴナガル先生と睨み合う。

流石に拙いと思ったのかハーマイオニーが私をテーブルの方へと引つ張った。

「先生、私たち早く夕食を食べて談話室に戻らないといけないので……咲夜には私からよく言い聞かせておきますから」

ハーマイオニーが早口で捲し立てる。

「そんなこと初耳——」

私が口を出そうとするとハーマイオニーは私の口にパンをねじ込んだ。

「ではミス・グレンジャー。この場は貴方に預けます」

マクゴナガル先生はそういうと落とした本を拾い去っていった。

私は口につつまれたパンをモシャモシャと食べながらハーマイオニーに抗議の視線を送る。

「いやあ、咲夜。流石だよ。ムーディも。あの光景を永久に僕の頭の中に焼き付けておかないと」

ロンは目を閉じ瞑想に耽けるように言った。

「ドラコ・マルフォイ。驚異の引き伸ばされるケナガイタチ……」

周囲にいたグリフィンドール生が爆笑する。

「だけど、あれじゃ本当にマルフォイに怪我をさせていたかも知れないわ。マクゴナガル先生が止めてくださったからよかったのよ——」

「ハーマイオニー！ 君ったら、僕の生涯で最良のときを台無しにしてるぜ！」

ハーマイオニーは呆れたように肩を竦めると凄い勢いで自分の皿を空にし何処かへと行ってしまった。

そしてハーマイオニーと入れ替わるようにフレッドが先ほどまでハーマイオニーのいた席に滑りこんだ。

「咲夜！ さっきのナイフ投げいかしてたぜ。でもムーデイのやつもクールさ」

「クールを超えてるぜ。普通飛んでくるナイフを掴み取るか？」

フレッドの向かい側に座ったジョージが言った。

「ああ、超クールだ」

ジョージの隣にクイディッチの実況でお馴染みのリー・ジョーダンが座る。

「午後にムーデイの授業があつたんだ」

ジョーダンが私たちに話しかけた。

「で、どうだったの？」

ハリーは授業の様子が聞きたくてたまらないようだった。

その言葉にフレッド、ジョージ、ジョーダン^①は示し合わせたかのように顔を見合わせる。

「あんな授業受けたことがないね」

「参った。分かってるぜ、あいつは」

フレッドとジョーダンがニヤニヤしながら言う。

「分かってるって、なにが？」

ロンが2人の方へと身を乗り出した。

「現実にやるってことがなんなのか、わかってるのさ」

ロンの問いにジョージがもったいぶって答える。

「やるって何を？」

今度はハリーだ。

「闇の魔術と戦うってことさ」

「ああ、あいつは全てを見てきたな」

「スツゲエぞ」

3人は口々にそういうと風のように去っていく。

ロンは鞆を覗き込み、何かを探しているようだった。

多分時間割だろう。

「闇の魔術に対する防衛術の授業は木曜日まで無いわよ」
私がそう伝えるとロンががっかりしたような顔をした。

許されざる呪文とか、他校とか、ゴブレットとか

木曜の昼。

私は昼食を済ませると闇の魔術に対する防衛術の授業に向かった。

授業が始まるまでにはまだ少し時間があるはずだが、既に多くのグリフィンドール生が着席している。

私はハリーとロンの横が空いていたのでそこに腰かけた。

少し遅れてハーマイオニーが教室に駆け込んでくる。

ハーマイオニーは私の隣へと腰かけた。

「遅くなったわ、私さつきまで——」

「図書館にいたんでしよう?」

私はハーマイオニーの言葉に被せるように言った。

「授業が始まるわよ。調べ物も程ほどにね」

「シッ、足音が聞こえる」

誰かが小さな声で言った。

その言葉にクラスにいる全員が押し黙り廊下のほうに意識を集中させる。

確かに義足を引きずるような音が聞こえてくる。

紛れもなくムーディ先生の足音だろう。

足音は段々と近づき、ムーディ先生が教室の中に入ってきた。

「そんなものは仕舞ってしまえ」

ムーディ先生が教卓に向かいながら唸るように言った。

「教科書だ。そんなものは必要ない」

みんなが一斉に教科書を鞆へと仕舞った。

ムーディ先生は生徒の出欠を確認し授業に入っていく。

「前任のルーピン先生から手紙を貰っている。お前たちは闇の怪物と対決するための基本をかなり満遍なく学んだようだ。だが、呪いの扱い方については著しく遅れている！
そう、呪い、呪いだ。魔法省によればわしが教えるべきは反対呪文であり、そこまで終わりらしい。違法とされている闇の呪文がどんなものか、6年生になるまでは生徒に見せてはいかんことになつとるようだ」

ムーディ先生はギロリと教室内を見回した。

「しかしダンブルドア校長はお前たちの根性をもっと高く評価しておられる。わしもお前たちを甘やかすつもりなど一切ない！魔法省が定めた教育方針など知ったことか！
闇の魔法使いは優しく礼儀正しく闇の呪文を掛けてくれたりはせん。お前たちの

ほうに備えがなければならぬのだ」

ムーディ先生はバンツと机を強く叩いた。

その音に教室内にいた殆どの生徒が飛び上がる。

「さて……魔法法律により最も厳しく罰せられる呪文がなにか、知っている者はいるか？」

その問いに何人かが手を上げた。

私も一応手を上げる。

「小娘。お前4年生だったのか？ 答えてみる」

ムーディ先生は今気が付いたかのように私の顔を見た。

「服従、磔、そして死の呪文です。『マッドアイ』先生」

「……その通りだ」

ムーディ先生は黒板に私が答えた3つの呪文を書き殴っていく。

そして机の引き出しを開けガラス瓶を取り出した。

ガラス瓶の中には黒蜘蛛が数匹、中で這い回っている。

ムーディ先生は中にいる蜘蛛を1匹捕まえると手の平に乗せて皆に見えるようにした。

「インペリオ！ 服従せよ……」

蜘蛛はムーディ先生の手の平の上で踊り出す。

空中ブランコのように指の間を揺れたり、後ろ向きに宙返りをしたりした。

しまいにはタップを踏み始める。

クラスにいる生徒の殆どが笑った。

私は鋭くムーディ先生を観察する。

私も服従の呪文は使ったことがある。

妖精メイドに完璧に仕事をさせたい時などに本人の同意を得てから使用するのだ。

「面白いと思うのか？」

掛けたことがあるからわかるが、この呪文は精神力が強くなければ絶対に術者の命令に逆らうことが出来ない。

「わしがお前たちに同じことをしたら、喜ぶか？」

ムーディ先生のその言葉に笑い声が一瞬にして消えた。

「完全な支配だ。わしはこいつを思いのままに出来る。窓から飛び降りさせることも、水に溺れさせることも、誰かの喉に飛び込ませることも……」

ロンが思わず身を引いた。

「何年も前の話にはなるが、多くの魔法使いたちがこの服従の呪文に支配された。誰が無理に動かされているのか、誰が自らの意思で動いているのか、それを見分けるのは魔

法省にとって重大かつ、困難極まりない仕事だった」

蜘蛛は丸くなりムーディ先生の手の平の上を転がった。

「服従の呪文と戦うことは出来る。これからの授業でそれを教えていこう。しかしこれには精神力が必要で誰にでも出来るというわけではない。出来れば呪文を掛けられぬようにするのが一番良い。油断大敵ツ!!」

ムーディ先生の大声に生徒が飛び上がった。

「次に磔の呪文だ。それがどんなものか分かりやすくするために少し大きくする必要があるな。エンゴージオ、肥大せよ」

蜘蛛がムーディ先生の手の上で大きく膨れ上がる。

タランチュラより一回り大きいかもしれない。

「クルーシオ、苦しめ!」

ムーディ先生が呪文を唱えた途端に蜘蛛が身を振りもがき始める。

たとえ蜘蛛の足を千切ったにしてもここまでもがき苦しみはしないだろう。

「やめて!」

ハーマイオニーが叫んだ。

私はハーマイオニーの視線を追うと、ハーマイオニーは蜘蛛ではなくネビルの方をじつと見ていた。

ネビルは拳を握りしめ、恐怖に満ちた目を大きく見開いている。

ムーディ先生は蜘蛛を元の大きさに戻すと瓶に一度戻した。

「苦痛……。そう、磔の呪文が使えれば拷問を行うときに親指締めもナイフも必要ない。これもかつて盛んに使われた。そして最後だ」

ムーディ先生が元気な蜘蛛を取り出す。

「最終最悪の呪文、『アバダ・ケダブラ』……死の呪いだ」

ムーディ先生は蜘蛛を机に置くと逃げられないように魔法で固定する。

私は咄嗟に身構えた。

「アバダ・ケダブラー！」

死の呪文が蜘蛛に当たると同時に、私はその蜘蛛の時間を止める。

これは実験のようなものだ。

時間停止で死の呪文を克服できるかどうかの。

結果から言うと、蜘蛛は死んだ。

つまるところ時間が止まっても死の呪文は問題なく効果を発揮するということがわかった。

ムーディ先生は死んだ蜘蛛を机から払い落す。

「よくない。気持ちのよいものではない。しかも、反対呪文は存在しない。防ぎようが

ないのだ。これを受けて生き残った者はただ一人。その者はわしの目の前に座っている」

クラス中の視線がハリーへと集まった。

ハリーは何かを考えるように視線を伏せている。

『アバダ・ケダブラ』の呪いの裏には、強力な魔力が必要だ。お前たちがこぞつて杖を取り出しわしに向けてこの呪文を唱えたところで、わしに鼻血さえ出させることができるものか。しか——」

「試してみても？」

私はムーディ先生の言葉を遮ってそう言った。

ムーディ先生はそれきたかと言わんばかりに私を睨みつける。

「随分と自信に満ち溢れているな十六夜。まるで既に誰かに掛けたことがあるかのようじゃないか、ええ？」

「そんなわけないじゃないですか」

「どうだかな。とにかく、この3つの呪文を同類である人に対して使っただけでアズカバンに生涯ぶち込まれることになる。冗談半分で呪文を行使した魔法使いが何人終身刑になったものか。お前たちが立ち向かうのはそういうものなのだ。そういうものに対する戦い方をわしはお前らに教えなければならない。備えが必要だ。武装が必要だ。」

しかし、なによりもまず、常に！ 絶えず！ 警戒する訓練が必要だ」

私はナイフを一本ムーデイ先生に無造作に投げた。

ムーデイ先生は何でもないことのようにそれをキャッチし机に突き刺す。

「このように、常に警戒していれば馬鹿な小娘が投げたナイフも簡単に掴み取ることが出来る。全員羽ペンを出せ、これを書きとるのだ……」

ムーデイ先生は黒板に許されざる呪文の詳細について書き殴っていく。

私は肩を竦めるとその内容を羊皮紙に書きとった。

闇の魔術に対する防衛術の授業が終わりムーデイ先生が教室から出ていくと、みんな一斉におしやべりを始める。

殆どの生徒が呪文の話や私が不意打ち気味に投げたナイフを掴み取った話をしていった。

私は教卓に刺さっているナイフを抜き取ると、刃こぼれがないか確認してから仕舞い込む。

「咲夜、流石に先生にナイフを投げるのはどうかと思うの」

ハーマイオニーが恐々と話しかけてきた。

「あれだけ生徒の前で啖呵を切ったんですもの。あれぐらいやってもらった方が先生の評判もよくなるでしょう？」

「貴方の評判が悪くなるわ」

「今更よ」

私は鞆を持ち、夕食を取るために大広間へと向かった。

その日の夜。

私が談話室で本を読んでいるとハーマイオニーが羊皮紙の束と箱を抱えて現れた。

私の横ではハリーとロンが占い学の宿題をでっちあげている。

「こんばんは。ついにできたわー!」

ハーマイオニーはなにやら嬉しそうだった。

ロンも出来たと言わんばかりに羽ペンを机に放り投げる。

「なんとというか、災難続きの1か月になりそうね」

私はロンの占い学の宿題を覗き込む。

賭けに負けたり溺れたり、仕舞いにはホグワーツの北塔から落ちて死んでいた。

「2回も溺れることになってるそうよ?」

ハーマイオニーもロンの占いを見ながら指摘する。

「え? そうか? どつちかを変えた方がいいな。ヒツポグリフに踏み潰されるってこ

とにしとこう」

「適当に書いたことが見え見えだって言ってるのよ」

ハーマイオニーの言葉にロンがふぎけたように憤慨する。

「なにをおっしゃる！ 僕たちは屋敷しもべ妖精のごとく働いていたのですぞ！」

ロンの言葉にハーマイオニーの眉がピクリと動いた。

「ほ、ほんの言葉のアヤだよ」

ロンが慌てて言った。

ハリーも書き終えたのか、静かに羽ペンを置くとハーマイオニーの持っている箱を指さす。

いつもハーマイオニーの腕に納まっているのは箱ではなく本だからだ。

「中身は何？」

「あら、間がいいわね」

ロンを軽く睨みつけながらハーマイオニーは箱の蓋を開いた。

中身はピンバッジのようだった。

その全てに『S・P・E・W』の文字が書かれている。

「スピュー？ 何に使うの？」

ハリーがバッジをしげしげと眺めながら言った。

「スピーユー（反吐）じゃないわ。S・P・E・W。『Society for Promotion of Elfish Welfare』つまり屋敷しもべ妖精福祉振興協会よ」

私はため息とともに頭を抱えた。

「聞いたことがないなあ」

ロンがそう呟くが無理はない。

「当然よ。私が始めたばかりですもの」

ハーマイオニーが嫌に威勢よくそう言った。

「へえ、メンバーは何人いるんだい？」

「そうね、貴方たち3人が入会すれば4人になるわ」

その自信は何処からくるのだろうか。

少なくとも私は絶対にそんなものには入らないが……。

「それじゃあ僕たちが反吐なんて書いたバッジを着けて歩き回るとでも思ってるわけ？」

ロンが驚いたように言う。

私もロンの意見に同意する。

「エス！ ピー！ イー！ ダブリュー！」

ハーマイオニーがロンの冷やかしに熱くなった。

「私、図書館で徹底的に調べたわ。小人妖精の奴隷制度は何世紀も前から続いているの。これまで誰もこういった活動をしてこなかったなんて信じられないわ!」

私は付き合ってもらえないと思いい先ほどまで読んでいた本にもう一度視線を落とした。

「気でも狂ったか? ハーマイオニー。あいつらは奴隷が好き。奴隷でいるのが好きなんだよ!」

「私たちの短期的目標は、屋敷しもべ妖精の正当な報酬と労働条件を確保することである。私たちの長期的目標は、以下の事項を含む。杖の使用禁止に関する法律改正。しもべ妖精代表を一人、魔法生物規制管理部に参加させること。なぜなら、彼らの代表権は愕然とするほど無視されているからである」

「それで、そんなに色々どうやってやるの?」

「まず、メンバー集めからよ。入会費2シツクルと考えたの。それでバッジを買う。その売上を資金にビラ撒きキャンペーンを展開するのよ。ロン、貴方財務担当ね。ハリ、貴方は書記よ。だから、私の今喋っていることを全部記録しておくといいわ。それと咲夜はビラの内容を——」

「これ以上私を愚弄すると本気で殺すわよ」

私は冷めた目でハーマイオニーを睨みつける。

ハーマイオニーは短い悲鳴を上げてバツジが入っている箱を取り落とした。

反吐と書かれたバツジが談話室の床に散らばる。

「ハーマイオニー、もう一度言うわ。これ以上私を愚弄するようなことを言ったら殺す。貴方は使用人をなんだと思っているの？ 仕事をしてその対価にお金を貰う、仕事なのだとしたらそれが普通よ。でもね……」

私はハーマイオニーの肩を掴むと力任せに引き寄せた。

「主に仕えるというのは仕事じゃないの。対価を得たいから仕えているわけじゃないわ。主の役に立ちたいから仕えるのよ。それは私も、屋敷しもべ妖精も変わらないわ。入会費2シツクル？ 何故お嬢様との関係を愚弄するためにお嬢様からお預かりしているお金を使わないといけないの？ 何故使用人としての生き方を穢す為に貴重な時間を浪費しないといけないの？」

私はハーマイオニーの肩から手を放す。

そして優しく微笑みかけた。

「で、ピラの内容がなんですか？」

ハーマイオニーはその場で腰を抜かすようにへたり込む。

そして震えた声で辛うじて言葉を紡いだ。

「な、なんでも……ないです……」

「そう、それじゃあ私は読書に戻るわね」

私はソファアーへと戻り本を開く。

ハーマイオニーは床に散らばったバツジを震える手でかき集めていた。

「ハーマイオニー」

私が声を掛けるとハーマイオニーの肩がピクンと震える。

「次にその反吐が出るようなバツジが私の目に映ったら、分かっているわよね？」

私は右手でナイフを一本投げる。

そのナイフは今まさにハーマイオニーが拾おうとしているバツジに突き刺さった。

談話室にハーマイオニーがすすり泣く声がかげに響く。

ハリーとロンはどうしていいか分からずその場で固まっていた。

やがて全てのバツジを拾い終わったのか、ハーマイオニーがふらりと立ち上がる。

そしてふらふらとした足取りで女子寮へと向かおうとした。

「ハーマイオニー」

私はもう一度優しくハーマイオニーに声を掛ける。

ハーマイオニーはびたりと歩みを止めた。

「私の言葉に納得がいかなかったら、地下廊下の果物皿の絵に描かれている梨をくすぐりなさい。彼らは昼間そこにいるわ。殆どの屋敷しもべ妖精が、私と同じことを言う」と

思うわよ」

ハーマイオニーはその言葉を聞くと、今度こそ女子寮へと入っていった。

ハリーとロンはどうしていいか分からないと言った表情で顔を見合わせている。

やがてロンが本を読んでいる私に言った。

「あー、咲夜？ 怒ってる？」

「怒ってないわ。私はハーマイオニーの愚かな行動を止めただけよ」

「うん。僕の軽口なんかより絶対効果あるよ。咲夜の言葉は」

「そう。ハーマイオニーがいつまでも立ち直れないようだったら貴方たちが支えてあげてね」

私は本を閉じ立ち上がる。

「おやすみ」

そして2人を談話室に残し、私は女子寮へと向かった。

新学期が始まって数週間、授業は少しずつ応用へと移っていった。

流石に日が経つとハーマイオニーも回復したのか、私に少しずつ話しかけるようになってくる。

私は怒っていないと言っているのだが、それでもハーマイオニーは恐る恐るといった様子だった。

そんな中での闇の魔術に対する防衛術の授業で、ムーデイ先生が学校の教師とは思えないことを言い出した。

なんと先生自身が服従の呪文を生徒一人ひとりにかけて、呪文の力を示し、それに対抗できるかどうかを試すと発表したのだ。

ムーデイ先生は杖を一振りして、教室の中央に広いスペースを作る。

その時、ハーマイオニーがどうしようかと迷いながら言った。

「でも、でも先生。それは違法だとおっしゃいました。同類である人にこれを使用することは……」

「ダンブルドアから許可は取っている。もつとも実際に誰かがお前にこの呪文をかけ、完全に支配したその時に学びたいというのであれば、授業を免除してもいい。ここから出ていくがよい」

ハーマイオニーはもごもごと何かを言いながら椅子に座り直す。

別に受けたくないといっているわけじゃないのにと言わんばかりの表情だ。

ムーデイ先生は生徒を呼び出して、服従の呪文を掛け始めた。

呪いのせいで生徒たちは次々と奇怪な行動を取っていく。

そしてムーディ先生が呪いを解いた時、初めて我に返るのだ。

「次だ。十六夜咲夜。……お前が十六夜咲夜か」

ムーディ先生は私を静かに見つめる。

私は手に何も持っていないことを示すように手の平をムーディ先生に向けた。

そして私は開心術を防ぐときのように心の中の時間を止める。

「インペリオ、服従せよ」

「先生？ 術を掛けないのです？」

先生の呪文は私の意識の中に入り込むことすらままならず、効力を失う。

私の軽口に先生は首を傾げた。

「インペリオ！ 服従せよ！」

先生はもう一度唸るように呪文を唱えた。

だが私が身構えていれば、精神に影響を与える魔法は全く通用しない。

「先生？ どうしたのです？ 私がか弱い少女だから、遠慮しているんですか？」

私はニヤニヤと笑みを浮かべた。

「信じられん。まるでダンスに服従の呪文を使っているようだ。お前には意識というも

のがないのか？」

「そんなわけないじゃないですか」

私は大げさに肩を竦める。

先生は悔しそうに私を睨みつけた。

結局この後の授業で服従の呪文に対抗できたのは私とハリーだけだった。

10月30日。

私たちは対抗試合で戦うことになるボーバトンとダームストラングの生徒を迎え入れる為に城の前へと集合していた。

マクゴナガル先生がテキパキと生徒を整列させていつている。

私の周囲にいるグリフィンドール生も他校の生徒がどうやって Hogwarts まで来るのか楽しみで仕方がないようだった。

そのとき、空を見ていたダンブルドア先生が叫ぶ。

「わしの目に狂いがなければ、ボーバトンの代表選手が近づいてくるようじゃの」

私はダンブルドア先生の視線の先を見る。

どうやらボーバトンの生徒は馬車で来たようだ。

大きな天馬が12頭、大きな館ほどある馬車を引いて空を飛んでいる。

そして地響きを立て城の横に着陸した。

馬車の中からはハグリッドと同じぐらいの背丈の女性が出てくる。

マダム・マクシーム。

ボーバトンの校長だ。

「これはこれは、マダム・マクシーム。ようこそホグワーツへ」

ダンブルドア先生が挨拶をした。

「ダンブリ・ドール、おかわりーありませんか?」

「おかげさまで上々じゃよ」

「わたし、のせいとです」

マダム・マクシームは大きな腕を後ろに回し、ひらひらと振った。

すると馬車の中から十数人ほどの男女学生が姿を現す。

全員が寒そうに震えていた。

それもその筈だ。

ボーバトンの生徒は誰一人としてマントなどの防寒着を着ていない。

「カルカロフはまーだきーませんか?」

マダム・マクシームがダンブルドアに聞いた。

「もうすぐくるじやろう。外でお待ちになつてお出迎えなさるかな? それとも城に入

られて、ちと暖を取られますかな？」

「あたたまりたいです」

マダム・マクシームは即答した。

「でもウーマは——」

「こちらの魔法生物飼育学の先生が喜んで世話をするじやろう」

天馬の心配をしているようだったが、ダンブルドア先生が責任をもつて世話を請け負うと伝える。

それを聞いて安心したのかマダム・マクシームは生徒を引き連れて城の中へと入っていく。

私はそれを見届けると城の外へと意識を向けた。

ダムストラングの生徒たちはどのように学校にくるのだろうか。

皆が期待を持って空を見つめている。

だが、皆の予想とは裏腹にダムストラングの生徒たちは湖の中からやってきた。大きな船が湖に浮上する。

まるで引き上げられた難破船のように、少し古めかしい船だった。

錨を下ろすと生徒達と思われる人影が船から降りてくる。

全員が真冬に着るような分厚い毛皮のマントを羽織っていた。

ボーバトンの生徒とは正反対だ。

「ダンブルドア！ やあやあしばらく。元気かね？」

生徒を率いていた男、カルカロフがダンブルドアに挨拶をした。

イゴール・カルカロフ、元死喰い人で一度アズカバンに投獄されたことがある。

その後魔法省と取引し、他の死喰い人を告発して今の地位を手に入れた人物だ。

「元気いっぱいじゃよ。カルカロフ校長」

ダンブルドアは微笑みながら挨拶を返した。

「ああ、懐かしの Hogworts 城」

カルカロフは城を見上げて微笑む。

だが取り繕ったような表情で、目は全く笑ってはいなかった。

何が苦々しい思い出があるのだろうか。

「ここに来たのは実に嬉しい。ビクトール、こっちへ。暖かいところにくるといい」

カルカロフは一人の生徒を手招いた。

ビクトールと呼ばれた青年はカルカロフの方へと近づいていく。

私はその顔に見覚えがあった。

クイディッチワールドカップの時に見た、ブルガリアのシーカー、ビクトール・クラ

ムその人だった。

「ハリー！ クラムだ！ クラムだぜ、ハリー！ ビクトール・クラム！」
私の横でロンが背伸びをしてクラムを見ている。

カルカロフはダームストラングの生徒を率いて城の中に入っていった。
ホグワーツの生徒もその後を追う。

「ロン、落ち着きなさい。たかがクイディッチの選手じゃない」

「たかが!？」

ハーマイオニーのたしなめるような言葉に、ロンが興奮したように反論した。

「ハーマイオニー、クラムは世界最高のシーカーの一人だぜ！ まだ学生だなんて、考え
てもみなかった！」

ダームストラングの生徒を追うように私たちは大広間へと入る。

ロンはダームストラングの生徒を、いやクラムをグリフィンドールのテーブルに招き
たかったようだが、ダームストラングの生徒はスリザリンのテーブルに座ってしまった。
た。

「マーリンの髭！ マルフォイの奴媚びを売ると思うけど、クラムはそんなのすぐお見
通しだぞ……。きつといつもみんながじゃれついてくるんだから、そういうのの対処は
上手い筈だ」

「貴方はクラムの何なのよ。親バカならぬファンバカ？」

私はたまらずロンに言った。

ロンはそんな私の言葉など聞いていないようにクラムの方を見ながらうつとりしている。

そんな中、ダンブルドア先生は大きく咳ばらいを一つすると椅子から立ち上がった。

「こんばんは、紳士、淑女、そしてゴーストのみなさん。そして今夜は特に客人の皆さん」

ダンブルドア先生は他校の生徒にニツコリと微笑んだ。

「ホグワーツへの来校、心から歓迎いたしますぞ。本校での滞在が快適で楽しいものになることをわしは希望し、また確信しておる。三大魔法学校対抗試合は、この宴が終わるとともに正式に開始される予定じゃ」

ダンブルドア先生はそこで一度言葉を切り大広間にいる全員を見た。

「さあ、それでは。大いに飲み、食らい、かつ寛いでくだされ！」

次の瞬間いつものように目の前の皿が料理で満たされた。

厨房の屋敷しもべ妖精が相当頑張ったらしく、これまで以上に様々な種類の料理がテーブルの上に所せましと並んでいる。

その中にはイギリスの料理でないものも多くあった。

ロンはそういった料理が珍しいのか、ハーマイオニーに料理の名前を聞いている。

「ブイヤベースよ」

「ハーマイオニー、いまくしやみした？」

「フランス語よ！ 一昨年の夏休み、フランスでこの料理を食べたわ。とつても美味しいわよ」

ロンがハーマイオニーの答えに半信半疑になりながらもブイヤベースを少し自分の皿によそう。

私はムール貝のマリネを食べながらその様子を見ていた。

しばらくするとハグリッドが教職員テーブルの後ろのドアから大広間へと入ってくる。

取り敢えず天馬の世話が一段落ついたということだろう。

ハグリッドは私たちを見つけると包帯だらけの手をぶんぶんと振る。

「ハグリッド、スクリユートは大丈夫なの？」

ハリーが心配そうに聞いた。

「ああ、ぐんぐん育つちよる」

ハグリッドは手の怪我などまるで気にしていないかのようだった。

ハグリッドはそのまま教職員テーブルに座り料理を食べ始める。

ロンはハグリッドに聞こえないように小声で言った。

「そりゃ育つだろうよ。あいつら、ついに好みの食べ物を見つけたらしい。ほら、ハグ

リッドの指さし」

「あのでーすね。ブイヤベース食べなーいでーすか？」

いきなり不慣れなフランス語訛りの英語が後ろから聞こえてくる。

私を含めた4人が声のした方向に振り返ると、そこにはボーバトンの女子生徒がいた。

ロンはその女子生徒に見とれているのか、顔を真っ赤にしている。

「ああ、どうぞ」

ハリーはその女子生徒の方にブイヤベースの皿を押しやった。

「もう食べ終わりまーしたのでーすか？」

私はその何とも言えない英語にクスクスと笑ってしまう。

するとそのボーバトンの女子生徒は少し不機嫌そうな顔をしてフランス語で言った。

『貴方たちに合わせて英語で喋っているのに笑うなんて失礼な生徒ね』

『あら、それは御免なさいね。でも貴方折角素敵な容姿なのに言葉遣いがそれを台無し

にしているから。意味が通じなくてもフランス語で押し通すべきだと私は思うのよ。

そもそもフランス人ってあんまり英語得意じゃないじゃない』

『あら、ホグワーツにフランス語が分かる生徒がいるとは思わなかったわ。それは私も

思うけど、コミュニケーションって大事よ？ 私はお飾りじゃないから』

女子生徒はブイヤベースの皿を持ち上げると溢さないようにレイブクローのテーブルへと運んでいった。

ロンはこれまで女の子を見たことがないかのように、穴が開くほどその女子生徒を見つめ続けていた。

「あの人、ヴィーラだ！」

「そんなわけないでしょう？」

ロンの掠れた声をハーマイオニーがぴしゃりと否定した。

「マヌケ顔でポカンと口を開けて見とれている人はロンの他には誰もいないわ」

ハーマイオニーのその言葉は必ずしも当たっているわけではなかった。

その女子生徒が大広間を横切る間、多くの男子生徒が振り向き、何人かはロンのように口を開けてポカンとしている。

「あれ、絶対普通じゃないよ。ホグワーツにはあんな子いない！」

ロンが女子生徒をよく見ようと体と体を横に傾ける。

「あら、あんなの見てくれだけよ」

今度は私がロンの言葉を否定した。

「それにホグワーツの女の子だって中々だよ」

ハリーが私の意見に同調する。

ハーマイオニーが軽く咳ばらいをした。

「たった今教員用のテーブルに誰かが来たみたいよ」

私がハーマイオニーの言葉に釣られて教員用のテーブルを見ると、ルード・バグマン氏とバーテミウス・クラウチ・シニア氏の姿があつた。

「いったい何しに来たのかな？」

「このタイミングで来たということは理由は一つさ」

ハリリーの問いにロンが自信があるように答えた。

「ええ、多分三大魔法学校対抗試合が始まるのを見たかつたんだと思うわ。この対抗試合を企画した2人だもの」

料理も一段落すると、テーブルに置かれた皿は元の金色を取り戻すかのように空になる。

そしてダンブルドア先生がゆっくりと立ち上がった。

「時は来た。三大魔法学校対抗試合は、まさに始まろうとしておる。箱を持ってこさせる前に、二言三言説明しておこうかの」

『箱』、それが代表選手の審査に使われるに違いない。

私はダンブルドア先生の言葉を一語一句聞き逃さないように耳を澄ませた。

ダンブルドア先生はまず来賓であるバグマン氏とクラウチ氏を紹介する。

ハーマイオニーが言った通り、この2人を中心に三大魔法学校対抗試合の準備をしてきたらしい。

そして代表選手の優劣を付ける審査員は、各校の校長とバグマン氏、クラウチ氏の計5人で行われるようだ。

「それでは、フィルチさん。箱をここへ」

管理人のフィルチさんが宝石がちりばめられた木箱を掲げてダンブルドア先生のところへ持っていく。

「代表選手たちが今年取り組むべき課題の内容は既にクラウチ氏とバグマン氏が検討を終えておる。課題は3つあり、代表選手はあらゆる角度から試されるのじゃ」

フィルチさんはダンブルドア先生の前へ恭しく木箱を置くと、役目は終えたと言わんばかりに足早に去っていった。

「みんなも知つての通り、試合を競うのは3人の代表選手じゃ。参加三校から各1人ずつ。選手は課題の一つひとつをどのように巧みにこなすかで採点され、3つの課題の総合点が最も高い者が、優勝杯を獲得する。代表選手を選ぶのは、公正なる選者……炎のゴブレットじゃ」

ここでダンブルドア先生は杖で木箱を叩き、木箱の蓋を開ける。

そして中から大きな粗削りの木のゴブレットを取り出した。

ゴブレットの縁からは、溢れんばかりに青白い炎が躍っている。

ダンブルドア先生はそのゴブレットを大広間にいる全員が良く見える位置に置き、再び口を開いた。

「代表選手に名乗りを上げる者は、羊皮紙に名前と所属校名をはっきりと記載し、このゴブレットの中に入れなければならぬ。24時間以内じゃ。明日のハロウィーンの夜に、ゴブレットは各校を代表するに最もふさわしいと判断した3人の名前を返してよこすであろう。このゴブレットは玄関ホールに置かれる。年齢に満たない生徒が誘惑に駆られることのないよう、その周囲にはわしが年齢線を引くことにする。17歳に満たない者は、何人たりともその線を越えることはできん。それと、これは例えばの話じゃが、この年齢線は自らの意思でそこに立ち入る者以外も入ることが出来ん仕掛けになっておる。寝ぼけて年齢線を越えてしまったり、他人に押し込まれたり、操られたりしても入ることは出来ないということじゃ」

ダンブルドア先生はもう隠すこともせず私を見た。

私が服従の呪文でも使うと思っているのだろうか。

「最後に、この試合で競おうとする者にはつきりと言うておこう。軽々しく名乗りを上げぬことじゃ。炎のゴブレットがいったん代表選手と選んだ者には、最後まで試合を戦い抜く義務が生じる。ゴブレットに名前を入れるということは、魔法契約によって拘束

されるといふことじゃ」

私は目を瞑り、どうしたら確実に代表選手になれるかを考える。

そして私は1つの方法を見つけた。

「じゃから、競技する覚悟があるものだけ、名前を入れるのじゃぞ。さて、もう寝る時間じゃ。皆、おやすみ」

私は一番に大広間を飛び出ると玄関ホールの一部に陣取る。

そして目くらまし術で簡易的な透明マントを作ると私はそれに隠れた。

ハロウィーンの夜。

私はハリーたちと共に大広間でハロウィーンのご馳走を食べていた。

今現在炎のゴブレットは教員用テーブルのダンブルドア先生の席の前に置いてある。

「アンジェリーナだといいな」

フレッドがそんな声を上げる。

ハーマイオニーもそれに同意した。

「もうすぐはつきりするわ」

私は静かにそう告げる。

流石に2日連続での宴会のせい、大広間にいる生徒は料理よりも誰が代表選手に選ばれるのが楽しみで仕方がないようだった。

金の皿の上の料理がきれいさっぱり無くなると、ダンブルドア先生がゆつくりと立ち上がる。

その様子を見て大広間にいる生徒の話し声がぴたりと止んだ。

「ゴブレットは代表選手の選考を終えたようじゃ。さて、名前が呼ばれた生徒は、大広間の一番前に来るがよい。そして、教員用のテーブルに沿って進み、隣の部屋に入るのじゃ。そこで、最初の指示が与えられるであろう」

ダンブルドア先生が杖を一振りすると、蠟燭の炎が消え大広間がゴブレットの光で照らされる。

全ての生徒がゴブレットへ視線を注いでいた。

次の瞬間ゴブレットが赤く燃え上がり焦げた羊皮紙を一枚吐き出す。

その落ちてきた羊皮紙をダンブルドア先生が掴み取った。

「ダームストラングの代表は……ピクトール・クラム！」

「そうこなくっちゃー！」

ロンが声を張り上げた。

大広間中が拍手の嵐、歓声の渦に包まれる。

クラムはスリザリンのテーブルから立ち上がるとダンブルドアの方に歩いていき、隣の部屋へと入っていった。

歓声が止んだ数秒後に、ゴブレットはまた赤く燃え上がり羊皮紙を吐き出す。

ダンブルドアはまた器用にそれを掴み取った。

「ポーター代表は……フラグ・デラクルー！」

ポーターから選ばれたのはブイヤベスを取りに来たあの女子生徒だった。

デラクルーはシルバードロンドの髪をなびかせるとレイブンクロウとハツフルパフのテーブルの間を滑るように進んでいった。

そして教員用のテーブルに沿って進み、隣の部屋に姿を消す。

しばらくすると歓声も止み、また大広間が緊張感に包まれる。

そしてゴブレットは再び赤く燃え上がると3枚目の羊皮紙を吐き出した。

私はその羊皮紙を見て確信する。

ダンブルドア先生が羊皮紙をキャッチすると同時に、私はグリフィンドールのテーブルから立ち上がった。

「……………」

ダンブルドア先生はその羊皮紙を見て固まる。

私の周囲では何故私が急に立ち上がったのか分からないといった様子でグリフィン

ドール生がひそひそと何かを話していた。

「ホグワーツの代表は……十六夜咲夜。君じゃよ」

ダームストラングとポーバトンの生徒と一部のホグワーツ生から溢れんばかりの拍手が沸き起こる。

私はその歓声に恭しく一礼すると、ダンブルドア先生の前まで進み、そのまま隣の部屋へと歩いていく。

ホグワーツの生徒で私に拍手を送っているのは、私の存在を知らない新入生と馬鹿な上級生だけだった。

ドアを開けるとそこには魔女や魔法使いの肖像画で溢れた小さな部屋があった。

向かい側では暖炉が轟々と燃えている。

クラムとテラクールは暖炉の周りにいた。

私もその近くへと移動する。

「君がホグワーツの代表選手ですね。よろしくお願ひします」

クラムが少し扱いにくそうに英語を話す。

私はそんなクラムにブルガリア語で話しかけた。

『よろしく、クラム。貴方の好敵手になれる様に努力はするつもりよ』

『君はブルガリア語が話せるのかい？ 賢いお嬢さんだ。手心を加えそうになるよ』

『あら、そういう意味じゃないわ。私が貴方に手加減するのよ』
『手厳しいな』

クラムと話していると、隣からデラクールがフランス語で割り込んでくる。

『随分仲が良さそうじゃない。なんの話をしていたの？』

『私がクラムに宣戦布告しただけよ。ついでに貴方にもしておこうかしらね』

『あら、生意気なお嬢さんは好きよ？ 私』

今度は反対側からブルガリア語が聞こえている。

『今のはフランス語かい？ 一体何カ国語を話せるんだ？』

『主要な国は大体ね。それに、分からなかったらその都度勉強すればいいのよ』

フランス語が聞こえてくる。

『なんだか悔しいわね。クラムに伝えなさい。有名なだけの男には負けないって』

『もう、英語で伝えればいいでしょう？』

『クラム、わたしはあなたには、まーけません』

『それはヴおくも同じです。負ける、道理がありません』

『あ、これはこれで滑稽ね』

そんな和気藹々とした会話をしているとハリーが部屋に入ってくる。

ハリーは酷く混乱したような顔をした。

「ハリー、もしかして何語で話せばいいか迷ってるの？ だったら普通に英語で大丈夫だよ」

私が軽口を飛ばすがハリーは反応しない。

その様子を見て不審に思ったのかデラクルールが口を開いた。

「どうしまーしたか？ わたーしたちに、広間にもどりなさいということですか？」
「何かヴおくらに伝言なのですか？」

ハリーが答える前にバグマン氏が部屋に入ってきた。

バグマン氏はハリーの腕を掴むと私たちの前に引き出す。

「すごい！ いや、まったくすごい！ ご紹介しよう。信じがたいかもしれないが、4人目の代表選手だ」

「おう、とてーも、おもしろーいジョークです」

『ジョークって雰囲気でもなさそうだけどね』

『じゃあ本当に4人？』

デラクルールのジョークという言葉にバグマン氏はいやいやと首を振る。

「とんでもない！ ハリーの名前がたった今炎のゴブレットから出てきたのだ！」

デラクルールもクラムも絶句している。

バグマン氏の話からその言葉が本当だろうと察したのだ。

「でも、このひと、競技できません。このひとは若すぎます」
「さよう……驚くべきことだ」

バグマン氏は髭のない顎を撫でながらハリーを見下ろしてニツコリした。

「しかし、知つての通り年齢制限は今年に限り特別安全措施として設けられたものだ。そして、ゴブレットからハリーの名前が出た。つまりはこの段階で逃げ隠れはできないだろう……これは規則であり、従う義務がある」

つまりゴブレットから名前が出た時点で出場する権利が与えられると。

私はその言葉にニヤリと口を歪ませた。

バグマン氏が楽しそうに話していると、背後のドアが開きダンブルドア先生を先頭にクラウチ氏、カルカロフ、マダム・マクシーム、マクゴナガル先生、スネイプ先生が入ってきた。

扉の向こう側からは、抗議にも聞こえるような声が聞こえてくる。

「マダム・マクシーム！ この小さい男の子も競技に出ると、みんないつてまーす！」
デラクルールの抗議の言葉を聞いて、マダム・マクシームはダンブルドア先生の方を向いた。

「ダンブリドル。これは、どういうことですか？」

そうとう威圧的な声だった。

「私も是非、知りたいものですな。ダンブルドア」

その言葉に乗っかるようにカルカロフ校長も言う。

「ホグワーツの代表選手が2人？ 開催校は2人の代表選手を出してもよいとは、初耳ですがね。私が規則を読み間違えたのですかな？」

カルカロフは意地悪そうな笑い声をあげる。

『ありえないことですわ』

マダム・マクシームもフランス語でそう言った。

「我々としては貴方の年齢線が年少の立候補者を締め出すだろうと思っていたわけですがね？ ダンブルドア。そうでなければ当然ながら我が校からも、もっと多くの候補者を連れてきてもよかったです」

「だれの咎でもない。ポッターと十六夜のせいだ。カルカロフ」

突然スネイプ先生の低い声が部屋に響いた。

その言葉にホグワーツの人間でない者全員が私を見た。

「スネイプ。ポッターは分かるが十六夜もとはどういうことだ？」

カルカロフは不思議そうな顔で私を見る。

そして気が付いたかのように目を見開いた。

「そうだ、カルカロフ。ホグワーツの代表選手として選ばれたこの十六夜咲夜は、まだ」

4歳だ」

その言葉に部屋にいた他校の代表選手と校長が驚くように1歩たじろぐ。

「この2人が規則は破るものと決めてかかっているのを、ダンブルドアの責任にすることはない。この2人はホグワーツに来て以来、決められた線を越えてばかりいるのだ――」

「もうよい、セブルス」

ダンブルドア先生がスネイプ先生の言葉を遮った。

そして先生は私たちの方を見下ろし静かに聞く。

「君たちは炎のゴブレットに名前を入れたのかね？」

「いいえ」

「先生、私たちは先生の引いた年齢線を越えられませんわ」

私はそういうが、ダンブルドア先生は私の言葉を無視するように続けた。

「上級生に頼んで、炎のゴブレットに名前を入れたのかね？」

「いいえ」

「はい」

ハリーが激しい口調で否定し、私は静かにダンブルドア先生の言葉を肯定する。

私のその返事に部屋にいた全員が私のほうを見た。

「誰に頼んだのじゃ……」

ダンブルドア先生の目つきが厳しいものになる。

私は正直に答えることにした。

「全員です。ダンブルドア先生」

ダンブルドア先生の目が見開かれるのを見て、私はにつこりと微笑む。

「ホグワーツで代表選手に立候補した全ての上級生が、私の名前を入れてくださいましたわ」

ダンブルドア先生が急いでマクゴナガル先生に目配せをすると、マクゴナガル先生は部屋の外へと走っていく。

そして火の消えたゴブレットを持つてくると部屋の机の上にその中身をひっくり返した。

先生たちは2つや4つに折られた羊皮紙を次々と開き名前を確認していく。

ポーバトン、ダームストラングの生徒の名前は見つかるが、羊皮紙の半分近く、ホグワーツと書かれた羊皮紙全てに『十六夜咲夜』という文字がまるで呪いのように書かれていた。

四人の選手とか、英雄とか、杖調べとか

時は戻って10月30日の歓迎会が終わってすぐ。

私はいち早く玄関ホールの一部を陣取ると簡易的な透明マントで身を隠した。

暫くするとダンブルドア先生がゴブレットを玄関ホールに設置する。

そして杖を取り出すとゴブレットの周りにぐるりと線を引いた。

私は時間を止め、年齢線を越えようと試みる。

だがそこには物理的な壁があるように年齢線を越えることは出来なかった。

私は結界のようなものをコツコツと叩く。

なるほど、年少者が入る時に結界を張るのではなく年長者が入った時だけ結界が解かれる仕様なのか。

なんにしても、年齢線を越えて自分の名前を自分で入れるつもりはない。

それでは選ばれる可能性が余りにも低すぎる。

私はもう一度透明マントを被ると時間停止を解除した。

暫く待っているとポーバトンとダームストラングの生徒が次々に羊皮紙を入れてい

く。

ホグワーツの生徒は迷っている者が多いらしい。

まだ誰も名前を入れていない。

私は辛抱強く息を殺してじっとホグワーツ生が動くのを待った。

すると決心を固めたのか一人のレイブンクロー生がゴブレットに近づいていく。

私はそのレイブンクロー生が羊皮紙を握りしめ年齢線を越える瞬間、時間を止めてその生徒に近づいた。

私は検証のために年齢線を越えてみる。

どうやら上級生と共になら越えることは出来るらしい。

私はレイブンクロー生が握りしめている羊皮紙を筆取り取ると、私の名前が書かれたものにすり替える。

そして先ほどの位置まで戻り透明マントを被った。

時間停止を解除するとレイブンクロー生は私の名前に入れ替わっていることも知らずに羊皮紙をゴブレットの中に入れる。

そしてドヤ顔で年齢線をもう一度越えて去っていった。

その後も数人のホグワーツ生が名前を入れようと年齢線を越える。

私はその羊皮紙を自分の名前に入れ替える。

これをホグワーツから立候補する全員に繰り返すのだ。

代表選手の選抜で重要な点は、『各校1人ずつ必ず選ばれる』ということである。

つまりホグワーツからの立候補者全員の名前を私の名前に入れ替えてしまえば必然的に私の名前がゴブレットから出てくるのだ。

これが私の考えた確実に私の名前がゴブレットから出てくる方法である。

ホグワーツからの立候補者が私しかいないなら私以外が選ばれることはない。

1時間も経つと殆どの生徒が談話室へと戻っていく。

懐中時計を確認するとそろそろ就寝時間だ。

だが私は寝るわけにはいかない。

ここで24時間ずっとゴブレットを見張っていないといけないのだ。

ゴブレットの周囲に人が全くいなくなると私は自分の中の時間を遅くした。

ようは疑似的な早送りである。

就寝時間が過ぎてから名前を入れる生徒がいるとは思えないが……。

現実の時間で4時間ほど経つただろうか。

人が入ってきたので時間の進みを元に戻す。

生徒かと思ったたら人影はムーディ先生だった。

何をしに来たのだろうか。

私は息をひそめ、その様子を観察する。

ムーディ先生は年齢線を越えるとゴブレットに杖を向け何か呪文のようなものを唱えた。

ゴブレットが苦しそうに赤い炎を上げる。

ムーディ先生はゴブレットに羊皮紙を入れようとした。

私は時間を止め、ムーディ先生が持っている羊皮紙を取り上げ確認する。

先生も立候補できるのだろうか。

ムーディ先生が持っている羊皮紙には『ハリー・ポッター』と名前が書かれている。

それを見た瞬間、私は固まってしまった。

ムーディ先生がハリーの名前を入れる？

何故？ 何のために？

この羊皮紙を入れ替えてしまっているものだろうか。

私は止まった時間の中で散々悩む。

結局私はハリーの名前はそのままにすることにした。

何故見逃したか、それはハリーの羊皮紙に学校名が書かれていなかったためである。

私はムーディ先生が何をしようとしているのか理解したのだ。

ハリーの名前を第四の『架空の学校』の生徒に見立ててゴブレットに入れ、確実に名前が出てくるようにする。

先ほどゴブレットに掛けた魔法は錯乱の呪文だろう。

ムーディ先生がそこまでしてハリーを試合に出そうとする理由は分からないが、私は自分の名前がゴブレットから出てくればそれでいい。

私はもとの場所に戻り透明マントを被り直す。

そして時間停止を解除した。

ムーディ先生は羊皮紙を入れると年齢線を越えて出てくる。

そして、私のほうに振り返った。

「そこで何をしている。十六夜咲夜」

ムーディ先生はこちらを睨み、唸るように言った。

私はその言葉に混乱する。

まさかムーディ先生の魔法の義眼は透明マントも透視するのか？

だとしたらこの方法は浅はかだったかも知れない。

私は透明マントを脱ぐと先生の前に躍り出た。

「ゴブレットが綺麗でしたので一晩中眺めていようかなと」

私は表情を取り繕ってムーディ先生の問いに答える。

ムーディ先生はこちらに近づいてくると物凄い速度で杖を抜いた。

私もそれに負けない速度で杖を抜く。

「オブリビエイト！ 忘れよ！」

どうやら同じことを考えていたようだ。

私の忘却呪文はムーディ先生に向かって直進したが、魔法でことごとく弾かれてしま
う。

逆にムーディ先生の忘却呪文は私に直撃した。

私は当たる瞬間に精神の時間を止め、忘却呪文を無効化し、忘却呪文が当たったこと
で一瞬生まれた油断を利用し、時間を停止させた。

私はムーディ先生の真後ろに回り込み、時間停止を解除する。

そして改めて忘却呪文をかけた。

今度こそムーディ先生に忘却呪文が直撃する。

その瞬間再度時間を止め、ムーディ先生を持ち上げ今まさに年齢線を越えたような体
勢で置き直した。

これでムーディ先生は今まさにハリーの名前を入れて年齢線を越えたと錯覚するだ
ろう。

私は一度城の外まで出て時間停止を解除する。

そして少し経ってからゴブレットの前まで戻った。

そこには既にムーディ先生の姿はない。

私は先ほどのマインドコントロールが上手く行ったことを願いつつ透明マントを被った。

忘却術とは強い精神力があれば破れてしまう。

だが周囲の状況ごとに変え、忘却術を掛けられたことすら気が付かないようにすれば破るのが難しくなるのだ。

私はもう一度自分の中の時間を遅くし、疑似的な早送りを作り出す。

朝になると生徒も降りてきて昨日の夜よりも多くのホグワーツの生徒がゴブレットに名前を入れにくる。

私はそれ一つひとつを自分の名前に差し替える。

それをハロウィーンのパーティまで続けた。

途中老け薬を飲み年齢線を越えようとしたフレッド、ジョージの双子が年齢線に弾き飛ばされるというアクシデントはあったが、私はホグワーツ生全ての名前を差し替えることに成功した。

「……………な、なんということですか!? これは……………」

マクゴナガル先生が私の名前が書かれた羊皮紙の山を見て絶句する。

いや、マクゴナガル先生だけではない。

この部屋にいる人間の殆どが言葉が出ないといったような顔で口をパクパクさせていた。

「十六夜、貴様まさか！」

スネイプ先生がいち早く混乱から復活し私を睨む。

「上級生に服従の魔法を掛けたんだな？」

「それは無理じゃセブルス。操られている生徒にはあの年齢線は越えられん」

スネイプ先生の言葉をダンブルドア先生が否定する。

そう、私はただゴブレットに入れる羊皮紙を私の名前にすり替えただけなのだ。

「こんなーのは、むこうです。投票をやりなーおすべきです」

マダム・マクシームが私の名前が書かれた羊皮紙を掴みとり怒鳴る。

「ですが規則には従うべきです。どのような事情があつたとしても、炎のゴブレットから名前が出てきた者は試合で競う義務がある」

クラウチ氏が厳格な声で言った。

「いやあ、バーティは規則集を隅から隅まで知り尽くしている。ミス・十六夜の件は余りにも異様だが、名前が出てきたということは試合で競わなくてはならない」

バグマン氏が楽しそうに言った。

バグマン氏はどうやらこの状況を素直に楽しんでいるようだ。

他校の校長はこんな投票は無効だとダブルドア先生に怒鳴りつけている。

私はその喧嘩から逃げるように暖炉の前に移動した。

『まさかあんな方法を取るなんて。しかもまだ14歳だったんだな』

クラムがブルガリア語で話しかけてくる。

『ええ、あれなら必ず出場できるでしょう？』

『何故そこまでして試合に出ようとするんだ？』

『私が仕えるお嬢様から優勝してこいとご命令を受けたのよ』

私はちらりと話し合っている校長たちを見る。

話は私はまだしもハリーはどういうことだという内容に移っていた。

ホグワーツの代表選手が2人いるというのが気に入らないらしい。

他の2校ももう1人ずつ代表選手を出すと言っているが、生憎ゴブレットの炎はすでに消えている。

『貴方の校長、今すぐにも帰りたいたと言っているわね。置いて行かれないうちに荷物をまとめたほうがいいんじゃない？ クラム』

『ご冗談を。例えばカルカロフ校長が帰ったとしても俺はホグワーツに残り試合をする』

次の瞬間ムーディ先生が部屋に入ってきて周囲を見回す。

そして机の上に広げられた羊皮紙の山を見てやりやがったな小娘と言わんばかりの視線を送ってきた。

私はその視線に籠められた感情を注意深く感じ取る。

これは予想でしかないが、昨日の夜の忘却術は上手くいったようだ。

ムーディ先生はお得意の陰謀論で他校の校長と憤慨しているデラクールを説得していく。

いや、半分脅しているのに近かったが……。

なんにしてもこの場にいる全員が名前が出てきてしまったからには仕方がないと納得した。

「さあ、それでは開始といきますかな」

バグマン氏はニコニコしながら前に歩み出る。

この人は多分悩みなどないのだろうなと内心思った。

「代表選手に指示を与えないといけませんな？ バージェイ、主催者としてこの役目を務めてくれるか？」

バグマン氏の言葉にクラウチ氏が我に返ったかのような顔をした。

「フム、指示ですな。よろしい……最初の課題は……」

クラウチ氏は私とクラムのいる暖炉の方へと歩いてきた。明るいところで話すということだろう。

「最初の課題は君たちの勇気を試すものだ。ここではどういった内容なのかは教えないことにする。どのような形であれ、先生方からの援助を頼むことも、受けることも許されない」

まああんなズルをした私に援助してくれる先生などいるはずがないが。

「未知のものに遭遇したときの勇気は、魔法使いにとつて非常に重要な資質である……非常に重要だ。最初の競技は11月24日。全生徒、審査員の前行われる。選手は杖だけを武器として最初の課題に立ち向かう。第一の課題が終了の後、第二の課題の情報を与えよう。試合は過酷で、また時間のかかるものであるため、選手たちは期末テストを免除される」

クラウチ氏はダンブルドア先生を見た。

「アルバス。これで全部だと思いが？」

「わしもそう思うよ」

話は終わったと言わんばかりにマダム・マクシームはデラクルールの肩を抱いて部屋を去っていった。

カルカロフもやはりクラムに合図をし、部屋を去っていく。

部屋の中にはホグワーツの教員とハリーと私、そしてバグマン氏とクラウチ氏が残った。

「咲夜、もう一度問おうかの。どのようにして名前をゴブレットに入れたのじゃ？」

ダンブルドア先生が改めて私に聞いてきた。

「だから言ってるじゃないですか。上級生に入れてもらったと」

「でも僕はアンジェリーナから立候補したと聞いたよ？ でも羊皮紙にアンジェリーナの名前はない」

ハリーが机に散らばった羊皮紙をガサゴソと弄りながら言う。

「ダンブルドア先生は私がどのようにしてこのようなことをしたのか予想がついているんじゃないですか？」

私の言葉にダンブルドア先生は考え込む。

「まさか、上級生の羊皮紙をそっくりそのまま入れ替えたということかの？」

私はその言葉にニッコリと頷くと、ポケットの中から立候補したホグワーツ生全員の羊皮紙を机の上にはら撒いた。

「正解です。ダンブルドア先生。簡単な入れ替え呪文ですよ」

その言葉を聞いてマクゴナガル先生が頭を抱える。

なんてことをしてくれたのだという表情だ。

「ですがこれはダンブルドア先生自身の失態です。演出を凝りすぎましたね。本当に私の参加を拒みたかったなら一度先生が羊皮紙を集めて、まとめてゴブレットに名前を入れるべきでした。それなら細工のしようがなかった」

「まあまあアルバス、ここは一杯食わされたと思えばいいじゃないか！ 14歳の生徒がここまでやったのだ。年齢制限はあくまで安全対策であって、このお嬢さんならそんな心配もない。なにせ私たちとゴブレットを出し抜くほどだからな！」

バグマン氏が笑いながらダンブルドア先生の背中をバシバシと叩く。

そのバグマン氏の言葉にダンブルドア先生は諦めたように首を振ると、私に向き直った。

「スカーレット嬢の命令じやな」

「ええ。そうですわ」

この情報は別に隠せと言われているわけではないので私は頷く。

そのほうがダンブルドア先生も納得すると考えたからだ。

「お嬢様が私に優勝してこいと。ですが優勝するにはまず代表選手に『必ず』選ばれなくてはなりません。ですのでこのような方法を」

「ダンブルドア校長、十六夜に罰則を与えるべきでは？」

「もうよいセブルス」

スネイプ先生の言葉にダンブルドア先生は首を振った。

「ハリー、咲夜、2人とも寮に戻って寝るがよい。グリフィンドールの談話室では既にどんちゃん騒ぎをする用意が整っておるじやろう」

ハリーは私をチラリとみた。

私はその視線に頷き、部屋を出ようとする。

「咲夜」

部屋を出る瞬間、ダンブルドア先生が私の名前を呼ぶ。

「法律だけは犯すでないぞ」

「承知しています」

随分と投げ槍で、半分諦めたような忠告だった。

私は内心ガッツポーズを決めると、改めてハリーの後を追って部屋を出た。

大広間には既に誰もいない。

私とハリーは大広間を抜けて廊下に出る。

そして談話室が近くなってきた時に、ハリーが意を決したかのように私に話しかけてきた。

「咲夜……僕は名前を入れていないし、なんで4人目の選手に選ばれたのかも分からない」

「へえ」

「嘘じゃないよ!？」

ハリーは私がハリーの話を信じていないと思っっているようだ。

「咲夜は何故あんなことをしたんだい?」

「あそこで言った通りよ。お嬢様が優勝杯を部屋に飾りたいらしくてね」

「そう……君も大変だな」

私はハリーと共に肖像画を通り談話室に入った。

次の瞬間爆発するような音が私の耳を直撃する。

それはグリフィンドール生の大喝采だった。

「すげえぞ咲夜! お前ならやると思った!」

「ハリーも名前を入れたなら教えてくれればいいのに!」

「グリフィンドールから2人も。すっげえなあ!」

皆が口々に私たちを褒めたたえた。

ジョージがバシバシと私の背中を叩きながら聞いてくる。

「髭も生やさずにどうやってやったんだ? すっげえ!」

「全員ちゅーもーく!!」

フレッドが大声を張り上げ拍手喝采を止めさせる。

グリフィンドールにいる生徒の全員が私とハリーに注目した。

「さてさて代表選手に選ばれた我らが英雄の2人ですが、ここでインタビューをしたいと思えます！」

フレッドは杖をマイク替わりに持ち、さながらテレビ番組の司会者のようだ。

「ハリー、今の気持ちはどうだ？」

「ぼ、僕どうしてこんなことになってるかわか——」

「どうしていいかわからないほどうれしいと！　じゃあ次咲夜！」

ジョージも杖を持ちハリーの言葉を曲解すると今度は私に杖を向けてきた。

「そうね。予定通りよ」

「大変余裕なお言葉を頂きましたー！　流石我らがグリフィンドールのデンジャラスクイーン」

私はジョージの頭をぺちんと叩く。

談話室中が爆笑の渦に飲み込まれた。

「さてさて次の質問だ！　ぶつちやけ皆が気になってることだとは思いますが……どうやってやったんだ？　年齢線はどうした？　俺たちなんか真っ白な髭生やして医務室にすつとんでいったのによ！」

本当にこの2人はジョークのセンスがある。

リー・ジョーダンと合わせて3人でクイディッチの司会をやればいいのにと思ったが、生憎フレッドとジョージは選手だ。

「まずは咲夜から聞いてみよう。どうしたんだ？」

「名前を入れようとしている上級生の羊皮紙を、私の名前が書かれたものに入れ替えたのよ」

談話室内からおおー！ という感心の声上がる。

アンジェリーナ含むゴブレットに名前を入れた生徒は「そんな!？」と声を上げた。

「ごめんなさいね、アンジェリーナ。でも安心して、ホグワーツの立候補者全員の名前を入れ替えたから。つまりグリフィンドールから代表選手が選ばれることは既に決定されていたわけよ！」

私は両手を上げてそう高らかに言い放つ。

談話室は拍手喝采に包まれた。

「やりやがったなこんちくしょう！」

「でも私よりも咲夜のほうが適任ね！ 絶対優勝するのよ！」

「スリザリンのワリントンが代表になるぐらいなら咲夜のほうが全然マシだ！」

多少の呆れと怒りはあるみたいだったが、殆どの立候補者は納得してくれたようだった。

私を知っているグリフィンホール生はああ、いつもの咲夜だという顔をしており、新入生からは凄い4年生がいるといった視線が飛んでくる。

「すっげえ！ すっげえ！ やっぱムーディにナイフ投げつけるだけはあるぜ！ 俺たちとは発想が違いすぎる！」

リー・ジョーダンが興奮したように叫ぶ。

「そんなことしたのか!? 咲夜！」

「闇の魔術に対する防衛術の授業では服従の呪文すら効かないようだったぜ！」

「ターミネーターかよ！」

「みなさんドウドウドウ！ 静粛に。今度はウルトラミラクル当選のハリーに聞いてみようと思う。ハリー、どうやって名前を入れたんだ？ しかも4人目って！」

フレッドが観衆をなだめハリーに質問した。

「僕、入れてない」

ハリーの戸惑い混じりのその答えに、ざわざわと疑問の声が出る。

「え？ なんだって？ 興奮のあまり俺の頭がおかしくなったか？ ハリー、僕には「入れてない」って聞こえたんだが」

ジョージが目をぱちくりさせて言った。

「僕、ゴブレットに名前を入れてないんだ」

「おいおいだったらなんでゴブレットからハリーの名前が出てくる?」

「分らない。でも本当に入れてないんだ」

ハリーが頭を抱えた。

「伝説のポッター様の答え聞いたか? 入れてないだつてよ!」

誰かが馬鹿にするようにハリーに言った。

「嘘をつくな!」

「咲夜は清々しいほど正直だぞ!」

「どうせダンブルドアにでも頼んで無理やり参加させてもらったに違いない!」

ハリーの答えにグリフィンボール生の殆どが怒ったように怒声を上げた。

「でも本当にやってないんだ! 僕は年齢線を越えられないし、越え方もわからない!」

ハリーも負けじと叫ぶ。

私はそんなハリーの態度をみて呆れたように肩を竦めた。

そこは普通嘘でも自分で入れたという場面だろう。

そんな言い方したら多くの生徒の反感を買うことは目に見えている。

司会のフレッドとジョージはこんな展開になるとは思っても見なかったのか困ったように顔を見合わせていた。

「僕、疲れた! 駄目だ、ほんとに。ごめん、もう寝る」

ハリーはキレたように怒鳴り散らすと男子寮の方へと歩いて行った。

殆どのグリフィンドール生が犯罪者でも見るかのような視線をハリーに向けている。

ハリーの姿が見えなくなると、また拍手喝采が沸き起こる。

「嘘つきなんてほっとけほっとけ！ 咲夜が真のホグワーツ代表だ！」

「どうせハリーなんて咲夜の足元にも及ばないさ！ 咲夜が優勝で決まりだな！」

「頑張つてー！ 咲夜ー！」

どうやら多くのグリフィンドール生がハリーを敵、私を味方と認識したようだ。

これはハリーが少し可哀想なことになるな、と私は内心ため息をつく。

フレッドとジョージは気を取り直したように杖を構え直した。

「うん、まあハリーは一時置いておこう。さてさてさて！ 代表選手に質問を続けましょう！ 代表選手になろうとした理由はなんですか？ そんなおったまげーな方法を使ってまで代表になりたかった訳をどうぞ！」

「皆さま、ご静粛に！」

私は声を張り上げる。

歓声が一時的にピタリと止んだ。

「私が何故ここまでして代表選手になったか疑問に思う人も多いと思うわ。でもね、理由は簡単よ。私が仕える吸血鬼にしてスカーレット家の当主！ レミリア・スカーレット

トお嬢様が私の優勝を望んだからよ！」

私はクリスマスパーティーの時のお嬢様のテンションを真似して談話室内で叫ぶ。

「故に、何が何でも優勝するわ。クラムが何？ デラクールが何？ クラムなんてただのクイディッチのシーカーじゃない。シーカーとしては優秀かも知れないけど魔法はどうかしらね。デラクールなんてただ可愛いだけだわ。大方ゴブレットに色目でも使ったんでしょ？ 私が負ける道理はないわね！」

談話室の窓ガラスが割れればかりの大喝采が起こる。

流石はお嬢様。

お嬢様のテンションに肖っただけでこの大喝采だ。

「いやー、何とも気持ちのいい啖呵を切っていただきました！ さてみんな今日はマクゴナガルがブチ切れるまで騒ぐぞー！」

「「「おおおおおっ!!!」」」

その後はもうお祭り騒ぎだ。

リー・ジョーダンは何処からかグリフィンドールの寮旗を持ち出してきて私にマントのように着せた。

テーブルの上にはバタービールやお菓子が並び、ジョージは厨房から取ってきたのか手に多くのパーティー料理を持って談話室に帰ってくる。

私はゴブレットの話やお嬢様の話を振られるたびにそれを明かしている部分だけ丁寧話に話していった。

これでグリフィンホール生の心を掴むことは出来ただろう。

あとは他の寮の生徒だ。

もつとも、優勝することが目的なので他の生徒がどう思おうが関係はない。

だが応援された方が優勝しやすくなるのは確かだろう。

やるからには徹底的に、そして確実に。

結局談話室でのパーティーはマクゴナガル先生が怒鳴りこみに来るまで続いた。

私は談話室をマクゴナガル先生と片付け、女子寮に行きベッドに入る。

「ねえ、咲夜。ハリーのことなんだけど……」

隣のベッドからハーマイオニーの声が聞こえてくる。

「大丈夫かしら。ハリーが自分で名前を入れるとは思えないし。4人目の代表選手っておかしいわ。なにか大変なことに巻き込まれないといいけど」

「……大丈夫、とは言えないわ。私のはやろうと思えば誰でも出来るだろうけど、ハリーのは普通じゃないもの」

私はムーディ先生のことは隠すことにした。

何の目的でムーディ先生がハリーの名前を入れたのか分からない。

目的が分からない以上、こちらから何かしらのアクションを起こすべきではないだろう。

「おやすみ、ハーマイオニー。ハリーの味方をしてあげてね」

「……おやすみ、咲夜」

私は目を瞑ると夢の世界へ落ちていった。

ハロウィーンの夜から数日も経つと、学校内での私とハリーの扱いがはっきりとしてきた。

私はホグワーツのダークヒーロー、ハリーは嘘つき。

どうやら年齢線を越えた方法を素直に明かしたのが功を奏したらしい。

私は他の寮の生徒からもある程度の支持を手に入れることが出来た。

もつとも立候補した上級生からの評判はあまりよくはなかったが、そういった生徒は周りからの「14歳に出し抜かれるようじゃ……」という言葉で私を応援するようになった。

言い訳がましく私に文句を垂れるよりも、天晴見事！ と私を認めた方が大物に見える気が付いたのだ。

そして驚くことにスリザリンの生徒も私を応援してくれている。

どうやらドラコが上手いことやってくれたようなのだ。

多くのスリザリンの胸にピンバッジが付いている。

そのピンバッジには『応援しよう！ ホグワーツの正直者 十六夜咲夜』と書かれている。

そしてピンバッジを一回押すと文字が変わるのだ。

『ポッターは嘘つきで嫌なやつ』

どうやらドラコは私をダシに使ってハリーを貶めるのが目的らしい。

私としてもスリザリン生から嫌がらせが来ないのは都合がいいのでハリーには悪いが放っておくことにした。

だがこのバッジのせいで魔法薬学の授業前にハリーとドラコが呪文を掛け合うという事件が発生したのには少々心が痛んだ。

なんとこの喧嘩のせいでグリフィンドールから50点も減点されてしまったのだ。

優勝するためとはいえ、少々心苦しい。

「はっはっは、ポッター、ざまあない！」

ドラコが私の近くへと戻ってきた。

魔法薬学の授業では私はいつもドラコと一緒に魔法薬の調査を行っている。

「あら、でもグリフィンドールから50点も減点されてしまったわ」

私の言葉を聞いてドラコが申し訳なきようにシユンとする。

「冗談よ。ドラコには感謝しているもの。貴方がこの素敵なバッジを作っていないからスリザリンの生徒は私を応援しなかつたと思うし」

「そ、そうだよな」

ドラコは得意げに胸のバッジを押し『ポッターは嘘つきで嫌なやつ』と点減させた。すると次の瞬間地下牢教室のドアをノックする音が聞こえてきた。

「なんだ？」

解毒薬の授業を今まさに始めようとしていたスネイプ先生がドアの方を振り向く。

ドアを開けて入ってきたのはコリン・クリービーだった。

私が2年生の頃バジリスクに石にされた生徒の1人である。

「先生。僕、代表選手を上に乗れてくるように言われました」

その顔は使命感に燃えていたが、スネイプ先生がひと睨みするとその表情は吹き飛んだ。

「ポッターと十六夜には1時間魔法薬の授業がある。2人は授業が終わってから上に行く」と伝える

「先生……でも、バグマンさんが呼んでます」

スネイプ先生の冷たい言葉にクリービーがおずおずと言った。

「代表選手は全員行かないといけないんです。写真を撮るんだと思います」

「ほう、写真か」

その言葉にスリザリン生が一齐にバッジを押し込み『ポッターは嘘つきで嫌なやつ』と点滅させた。

「それはそれは、では少しでもまともに写るよう、精々努力することだな。よかろう、2人とも行くがいい」

スネイプ先生はハリーのボサつとした髪を見ながら皮肉っぽく言った。

同時に私のほうもチラリとみたが、私の身嗜みに不備があるはずもなく、少し悔しそうに目を逸した。

「少し行つてくるわね」

私がクラスの皆に手を振ると歓声があがる。

ハリーが立ち上がるとスリザリン生は次々にバッジを押し込んだ。

私とハリーはクリービーについて廊下を歩いていく。

そして1つの教室にたどり着いた。

「がんばって！」

クリービーは私とハリーに握手を求める。

私はにこやかに笑いながらそれに応えた。

「まるでスターじゃないか、咲夜」

ハリーが皮肉を込めて言った。

「ズルをした咲夜は学校のヒーローで、正直に答えた僕が嘘つきつてのはどういう冗談なんだ？」

「あら、この結果も対抗試合の一部よ？ 今誰を味方につけるべきか。そんなの分かりきっていることじゃない。少しは頭を使いなさい。これ以上孤立する前にね」

私はドアを開けて部屋の中に入った。

そこはかなり狭い教室で、机は部屋の隅に押しやられており、真ん中に大きな空間が出来ている。

黒板の前には机が3卓、横に繋げて置いてあり、ビロードのカバーが掛けられていた。

その机の向こうには5脚の椅子が並んでおり、その一つにバグマン氏が座って魔女と話をしている。

『はあい、デラクルール。幸せそうね』

私はフランス語でデラクルールに話しかける。

デラクルールはフランス語を聞いて楽しそうにクルリと振り向いたが、私の顔を見てがっかりするように表情を暗くした。

『なんだ、貴方か。皮肉たっぷり挨拶をありがとう』

『見たまを言っただけじゃない』

「ああ、来たな！ 代表選手の3人目と4人目！ さあさあ、何も心配することはない。ほんの杖調べの儀式だ」

バグマン氏が私たちの存在に気が付いたのか椅子から立ち上がる。

「杖調べ？」

ハリーが心配そうに聞き返した。

「君たちの杖が万全の機能を備えているかどうか、調べないといかんのでね。専門家が今、ダンプルドアと話をしている。それから、ちよつと写真を撮る。ああ、こちらはリータ・スキーターさんだ」

バグマン氏が先ほどまで話してた魔女を紹介した。

リータ・スキーターは赤紫のローブを着ている。

「日刊予言者新聞の記者で、この試合について短い記事を――」

「リード、そんなに短くはないかもね」

リータ・スキーターはハリーをじつと見ていた。

「儀式が始まる前にハリーにちよつとお話ししていいかしら？ だって最年少の代表選手さんしょ……ちよつと味付けにね」

「いいとも！ あー、いや、ハリーさえ良ければだが」

スキーターの言葉にバグマン氏が返した。

「あの一最年少は——」

「素敵さんすわ！」

ハリーが私も最年少だと説明しようとする前にハリーはスキーターに引きずられていった。

私はデラクールと一緒に肩を竦める。

そんな私の方にクラムが近づいてきた。

『皆が君のことを噂しているよ。凄いホグワーツ生がいるって』

『あら、多くのダームストラングの生徒の中から選ばれたクラムには負けるわ。まあ試

合には負けないけど』

『もう、ブルガリア語で話してたら私が分からないじゃない』

『だったら英語で話せばいいって何度言ったら……』

『それは、うつくしくないと、あなたはいいまーした』

『ヴおくは英語でも大丈夫です。国際的な選手ですので』

『自慢なんてききたくなーいでーす』

『はっはっは、選手同士仲が良いみたいで何よりだ！』

段々と部屋の中の会話がカオスになってくる。

しばらく話していると、今にも死にそうな顔をしたハリーがスキーターに引きずられて戻ってきた。

「貴方も最年少の代表選手だなんて、素敵さんす！ 少しお話ししましょう」

スキーターはどうやらハリーから私の話を聞いたようだ。

「ずんずんどこつちに向かつて歩いてくる。」

「ええ、インタビュなんて初めてなので、緊張してしまいますが」

「嘘おっしゃい」

ハリーが椅子に座って俯きながらボソリと言った。

私はデラクールとクラムに手を振ると、スキーターと共に部屋の外に出る。

そして何故か小さな箒置き場に入った。

「さて、ここなら落ち着けるぞんす」

スキーターは狭い箒置き場に転がっているバケツを逆さにして座る。

「スキーターさん。よかつたらこれを」

私は鞆の中から小さな丸椅子を2つ、そして宙に浮かぶ机を1つ、更にはティーセットを取り出した。

「あら、素敵さんすわ！」

私はテキパキと準備を進め、スキーターに紅茶を出した。

「さて、それじゃ……」

スキーターはワニ革のハンドバッグの中から羊皮紙と羽ペンを取り出した。

私はオイルランプを取り出すと、火をつけ光量を調整する。

「あら、ありがと。咲夜、自動速記羽ペンQQQを使っているじゃないよ？ そのほうが自然におしやりできるし……」

「ええ、羽ペンを持ってたら紅茶が飲めませんしね」

私は鞆の中からクツキーを取り出した。

「さて、咲夜。貴方はどうして三校対抗試合に参加しようと思ったのかしら」

すぐにでもインタビューを始めるようだ。

私は基本的には素直に返事をしていく。

「私はレミリア・スカーレットお嬢様にお仕えしているメイドです。現在は休暇を頂き
学業に励んでおりますが……今回そのお嬢様から試合に出るとのご命令を受けたんで
す」

「でも貴方はまだ14歳じゃないよ？ どうやって代表選手に？」

「代表選手を決める方法はご存じですか？」

「ええ、炎のゴブレットですわよね。ダンブルドアが直々に年齢線を引いて対策をした

と聞いてるざんす」

私は一口紅茶を飲む。

「ホグワーツ生全員の羊皮紙を私の名前が書かれた羊皮紙に入れ替えたんです。魔法で」

「素敵ざんす！」

スキーターは手を叩いて喜んだ。

「ということは必然的に、ゴブレットからは必ず貴方の名前が出てくるわけざんすね」

「そういうことです」

スキーターも紅茶を飲む。

「あら、非常に美味しいざんす。流石メイドさんですわ。一面の見出しは決まったわね。」

『異質の14歳十六夜咲夜対伝説の少年ハリー・ポッター 果たして試合の行方は』素敵

ざんす！」

「あら、ハリーなんて相手にならないわ」

「ダークヒーローは読者に人気が出るざんす。そういった方向で書かせてもらってもよくなって？」

「ええ、よろしくお願ひします。スキーターさんの書いた記事は何度か拝見しました。凄く面白かったです」

私とスキーターは箒置き場で笑い合った。

言葉を介さなくともスキーターが何を言いたいか理解出来た。

ようはドラコと同じで私を引き合いに出してハリーを貶す記事を書きたいということだろう。

批判だけじゃ記事は成り立たない。

比較して、初めて批判に説得力が生まれてくる。

「わたくしにお任せなさい。悪いようにはしないぞ」

次の瞬間箒置き場のドアが外側から開いた。

そこにはダンブルドア先生が立っている。

「ダンブルドア！」

スキーターは嬉しそうに叫んだ。

そしてダンブルドアが羊皮紙の内容を見る前に物凄い速度でそれらをバッグに仕舞った。

「先生もどうです？」

私はダンブルドア先生の方にスキーターが座らなかつたバケツを転がした。

「素敵なお茶会中に悪いんじやが、そろそろ杖調べの儀式が始まるので」

「それは残念ぞんすね」

スキーターは紅茶を飲み干すと杖でティーカップを綺麗にして返してくれる。

私は靴から取り出した色々を仕舞い直すと箒置き場から出た。

そしてダンブルドア先生について先ほどの部屋に戻った。

ハリー、デラクルール、クラムは既に椅子に座っている。

私はハリーの隣に腰かけた。

正面には5人の審査員が座っている。

ダンブルドア先生、マダム・マクシーム、カルカロフ、バグマン氏、クラウチ氏だ。

「オリバンダーさんをご紹介しましょうか？ 試合に先立ち、皆の杖が良い状態かどうかを調べ、確認してくださいさるのじゃ」

紹介を受けて部屋の隅で窓の外を眺めていた老人、オリバンダーが部屋の中心へと歩いてきた。

ダイアゴン横丁で杖の専門店をやっている人間だ。

「マドモアゼル・デラクルール。まずあなたから、こちらに来てくださらんか？」

デラクルールは軽やかにオリバンダーのそばに行き、杖を渡した。

オリバンダーは杖を受け取るとバトンのようにクルクル回す。

すると杖はピンクとゴールドの火花をいくつか散らせた。

「そうじゃな……24センチ、しなりにくい、紫檀……芯には、おおなんと……」

「ヴィーラの髪の毛です。わたーしのおばーさまのものでーす」

デラクールは自信満々に言った。

なるほど、デラクールの美貌の理由はそれか。

そのあとオリバンダーはクラム、そしてハリーの杖を調べていく。

そして最後に私の番が来た。

私はお嬢様から預かっている真紅の杖をオリバンダーに手渡す。

オリバンダーは手に取った瞬間、この杖が私ではなくお嬢様に忠誠を誓っていると気が付いたようだ。

「よう覚えとるが……十六夜さん、君……この杖は……」

オリバンダーは杖をしげしげと眺める。

「不思議じゃ、まことに不思議じゃ。この杖は十六夜さんの所有物ではない。この杖は十六夜さんのことを仲間だと、そしてよき友であると思っておるようじゃ」

オリバンダーは杖を振るう。

杖からは嘲り笑うかのように小さなコウモリが部屋中に溢れ出た。

「アカミノキ……25センチ、やや硬い。芯には吸血馬のたてがみが使われておる」

オリバンダーは私に杖を返した。

「みんな、ごくろうじやった。授業に戻ってよろしい。いや、まっすぐ夕食の席に下りて

ゆくほうがよいかの」

ダンブルドアが審査員のテーブルから立ち上がって言った。

だがそこに慌てて黒いカメラを持った男が飛び出して1つ咳払いをする。

「写真！ ダンブルドア、写真ですよ」

バグマン氏が興奮するように叫んだ。

それから集合写真を何枚か、個人写真を何枚か撮るとようやく解散となった。

それからそう日が経たないうちに、日刊予言者新聞にスキーターの書いた記事が載った。

そこには1面の見出しに大きくこう書かれている。

『ホグワーツの英雄はどちらか。伝説の少年ハリー・ポッター対天才少女十六夜咲夜』

1面には大きく私とハリーがにらみ合っているような写真がデカデカと載っている。

そしてそれぞれからふきだしが出ており、私のところには「どんな手を使っても勝つのは私よ」の文字。

ハリーのふきだしには「それでも僕はやってない」という文字が書かれていた。

記事の内容の大半はホグワーツ生のインタビュー記事になっている。

私やハリーの身の上話、私が代表選手に選ばれた理由、ハリーがゴブレットに名前を入れたことを否定し続けているという事実。

そして記事の半分以上が他のホグワーツ生から聞いた私たちの印象になっているのだが、私のほうにはいい印象しかなく、逆にハリーの方には「嘘つき」「意地汚い」「臭い」などの絶対スリザリン生から聞いたと思われる単語が並んでいる。

これで情報操作に躍起になる必要はなくなるだろう。

私は第一の課題がどんなものか想像をめぐらせつつ、のほほんと学校生活を過ごした。

第一の課題の1日前。

私が早めに昼食を食べ終わり廊下を歩いていると、ハリーとハーマイオニー、そして何故かハツフルパフの上級生、セドリック・デイゴリーが空き教室で呪文の練習をしていた。

明日の為に覚えた呪文の復習をしているのだろうか。

私はなんの躊躇いもなくその教室に入っていく。

ハリーは夢中で教室中のあらゆるものを引き寄せていた。

もう目に付くもの全てに片っ端から呼び寄せ呪文を掛けている。

「はあい。奇妙なこと——」

「アクシオ! ……咲夜!」

ハリーは呪文を唱えた後に私に気が付いたのか私の名前を呼ぶ。

「え? ちよつ——」

私は琥珀浄瓶に吸い込まれるようにハリーの方に引き寄せられる。

そのまま私はハリーともみくちやになりながら教室の床の上を転がった。

「だ、大丈夫かい?」

デイゴリーが心配そうにこちらに駆け寄ってくる。

そして手を伸ばしてきた。

私はその手を取って立ち上がる。

「ハリー、スケベもいいところよ」

「不可抗力だよ……あいたた」

私の軽口も慣れたものだと言わんばかりにハリーは腰をさすりながら答える。

「でもハリー、さっきの呼び寄せ呪文は完璧だったわ。もっと集中すれば成功率が上がると思うの」

ハーマイオニーが言った。

呼び寄せ呪文は4年生の呪文学で習う呪文だが、確かハリーは殆ど成功していなかったはずだ。

そして少し前に終わった範囲である。

「ハリー、貴方今頃になつて呪文学の補習？ 明日第一の課題なのよ？ こんなに腕の立つ家庭教師が2人もいるならそつちの心配をした方がいいんじゃないやなくて？」

私はデイゴリーとハーマイオニーを見ながら言う。

2人は何か迷っているかのようにハリーの方へと視線を泳がせていた。

「そういう咲夜は大丈夫なのか？ 課題の内容を知らないんだらう？」

「あら、貴方は知っているかのような言い方じゃない。大丈夫よ。貴方が使える程度の魔法なら全て完璧に使えるわ。アクション」

私が呼び寄せ呪文を唱えると教室の入り口に置き去りにしてしまった私の鞆が飛んでくる。

私はその鞆を左手でキャッチした。

「まあ、こんなものね」

私に手を持った鞆を地面に落とすとズンツという音がする。

デイゴリーはその音を不思議に思ったのか私の鞆を手を取った。

「なんだこれ！ 持ち上がらない……」

まあ私の鞆は重たいので当たり前だ。

ハーマイオニーは心配そうにハリーの顔を見ている。

ハリーも何かを考えているようだった。

「咲夜、僕は第一の課題の内容を一部知ってる。それを君に教えることだって出来る」

「そう、やはりね。私は知らないわ」

私は特に驚くこともなく言った。

大方ダンブルドア先生あたりがこつそり教えたのだろうと推測を立てる。

これぐらいのハンデがなければハリーが私に敵わないと思つたのだろう。

「知りたいとは思わないのか？」

デイゴリーが私の方を見て言った。

その様子を見るにやはりハリーは第一の課題を突破するために2人に教えを乞っていたのだろう。

「知りたくないわけではないわ。でも第一の課題は明日よ？」

ハリーは現実逃避をするように視線が泳ぐ。

「今更つて感じもするわね。それじゃあ、午後の授業で」

私は鞆を持ち上げて教室の出入り口の方に歩く。

「咲夜、ドラゴンだ」

後ろからそんな声が聞こえた。

私は後ろ手に人差し指を立てる。

「借り1つね」

そして3人を残したまま私は教室を後にした。

ドラゴンとか、金の卵とか、必要の部屋とか

11月24日の昼。

第一の課題が始まろうとしていた。

私はハリーから得た情報をもとに様々なところから必要なものを仕入れ、鞆に詰めてある。

準備は完璧だ。

私は最終確認を取るべくリドルの日記を取り出した。

『リドル、昨日のお嬢様の言葉、嘘じゃないわよね?』

『ああ、第一の課題を優雅にクリアするために、能力がバレる危険性を犯すかもしれないという話だろ? 伝えた通りだ。どうせそのうちバレるから盛大にやれだとき』

『その言葉、心に刻むわ』

私は日記を閉じ鞆に仕舞う。

そして選手の集合場所であるテントの中に入っていった。

中には既にクラムとデラクールがいる。

デラクールは落ち着かない様子で椅子に座り、冷や汗をかいている。

クラムはむっとした表情で壁に背を付け立っていた。

『ポーバトンのお姫様は随分と余裕がなさそうね』

『逆になんで貴方がそんなに余裕を持つていられるのかが不思議だわ。少しその精神力を分けて』

デラクールは力なく頭を上げた。

『大丈夫。貴方はポーバトンの代表選手でしょ？ 自信をもって臨めばいいわ』

『年下に励まされている時点で自信もなにもないけどね』

デラクールはペチペチと両手で自らの両頬を叩いた。

『もう大丈夫よ。勝つのは私なんだから』

デラクールは笑顔を取り戻すと私に対して不敵な笑みを浮かべた。

次の瞬間おどおどとした足取りでハリーが入ってくる。

今から処刑されるかのような顔をしていた。

「ハリー！ よーし、よし！」

バグマン氏がテントの外から歩いてきたハリーを手招く。

そして選手全員を近くへと集合させた。

「さて、もう全員が集合したな。話して聞かせるときが来た！」

バグマン氏が陽気に話し始める。

「観衆が集まったら、私から諸君一人ひとりにこの袋を渡し、その中から諸君はこれから直面するものの小さな模型を選び取る！ 様々な……えー、違いがある。それから……そうだ。諸君の課題は金の卵を取ることだ！」

金の卵を取る。

その言葉を聞いてハリーとデラクルは胸を撫で下ろした。

少なくともドラゴンを殺すことが課題ではないと分かったからだろう。

暫く経つと何千もの足音がテントのそばを通り過ぎていくのが聞こえてくる。

そして足音が消えた頃にバグマン氏が袋の口を開いた。

「さて、レディー・ファーストだ。十六夜君、君から引きなさい」

私は無造作に袋の中に手をつまむ。

そして中からドラゴンの模型を取り出した。

ウクライナ・アイアンベリー種だ。

首周りに4という数字を付けている。

小さなドラゴンの模型は私の手の平の上でもぞもぞと動いていた。

そしてデラクルはウエルズ・グリーン種、数字は1。

クラムは中国火の玉種、数字は2。

ハリーはハンガリー・ホーンテール、数字は3だった。

「あつと、一番の外れを引いてしまったね。それが今回のジョーカーだったのに！」
バグマン氏が叫び声を上げる。

それはそうだろう。

ドラゴンの勉強は一通り済ませたが、ウクライナ・アイアンベリー種はドラゴンの中でも最大級の大きさを誇るドラゴンだ。

そして非常に凶暴であることも有名である。

「何はともあれ、諸君はそれぞれが出会うドラゴンを引き出した。番号はドラゴンと戦う順番だ。1番はミス・デラクルだね。私がホイッスルを鳴らしたら、まっすぐと競技場に出たまえ。私は司会なのでもう行かなければならんからね」

ハツハツハと笑いながらバグマン氏は出ていく。

私は自分の指を噛んでいるドラゴンを観察した。

「今更だけど聞いておきたい。咲夜はどうやってドラゴンを出し抜くつもりなんだい？」

ハリーがこちらに近づいてきた。

手にはしっかりとドラゴンの模型を持っている。

「そうね、適当に失神呪文でもかけようかしら」

ブザーが鳴った。

デラクールがびくびくしながら出ていく。

『頑張つて。生きて帰つて来たら一緒に食事でも食べましょう』

『貴方が出てくるとき同じセリフを言つてあげるわ』

デラクールが競技場へと出ていく。

数秒後に大歓声が沸き起こった。

「失神の呪文だつて？ それは無理だ咲夜。僕は見た。半ダースもの魔法使いが一斉に失神呪文をかけてようやく気絶するような相手だ」

ハリーは私の持っている模型を見る。

「しかもウクライナ・アイアンベリー種だよ、それ。そんなじゃ無理だと思うけど

……」

「味気ないって言いたいの？」

「そういう意味じゃないよ」

競技場の方からはバグマン氏の実況の声が途切れ途切れに聞こえてくる。

10分ほど経つと耳を劈くような大歓声が聞こえてきた。

「本当によくやりました。さて、審査員の点数です！」

本当に点数制なのだと改めて認識する。

「1人終わつてあと3人！ ミスター・クラム！」

ブザーが鳴り、クラムがズカズカと出て行った。

「デラクルは無事出し抜いたみたいよ。案外掛かったわね」

ハリーは自分の番が近くなってきたからか、カタカタとその場で震え出した。

私はその滑稽な光景に思わず嘖き出した。

「な、何が可笑しいんだよ……」

ハリーが震えながら抗議の視線を送ってくる。

「ご、ごめんなさい……まさかバジリスクを12歳の時に杖も無しに倒した少年が14にもなつてドラゴンに震えているなんて可笑しくつて」

その私の言葉にハリーは目をハッと見開いた。

私はハリーに微笑みかける。

「今回は出し抜くだけよ。何をそんなに怖がっているの？ 自信を持ちなさい。ドラゴン程度で揺らぐ貴方じゃないでしょう？」

ブザーが鳴り、ハリーの番が来た。

震えは、止まっていた。

「咲夜……行ってくる」

ハリーが杖を持って立ちあがる。

「ええ、いつてらっしゃいな」

私は適当に手を振って見送った。

ハリーが競技場の方向へ消えると私は鞆を開き中身の点検をする。

大きさにもよるが、そこまで大きいわけではない筈だ。

だが今回は点数制、ジョーカーとも言っていたので案外大型のものを連れてくるかもしれない。

競技場の方からはバグマン氏の威勢のいい実況が聞こえてくる。

どうやらハリーはファイアボルトを呼び寄せ、ドラゴンを陽動しているようだ。

そしてクラムよりも早い時間で金の卵をゲットしたらしい。

「やった！ やりました！ ハリー・ポッターが最短時間で卵を取りました！ これでポッター君の優勝の確率があがるでしょう！」

そんな実況が聞こえてきた。

そしてしばらくするとブザーが鳴る。

私は鞆をテントの中に置くと、時間を止め制服からメイド服に着替える。

そして時間停止を解除し、競技場へと躍り出た。

「さあ最後の選手の登場です。おーつと！ これはサービスか!? メイド服を着ています。みなさんよく心のカメラであの姿を……つと話がズレました」

競技場の中は簡単な岩場のようになっていた。

中央には本物の卵に交じって金の卵が置いてある。

そしてそれを守るようにウクライナ・アイアンベリ種がその上にいた。

私は杖を右手に持ち優雅にドラゴンにお辞儀をする。

「おっと、ドラゴンと決闘でもしようとしているのか？ ドラゴンは奇妙な物を見るような目で十六夜選手を見つめます」

私は頭を上げると近くにある岩に向かって呪文を飛ばす。

「レダクト！ 粉々。ウインガー・ダイヤモンド・レビオサー！ 浮遊せよ」

岩は粉々になり宙を舞うが、地面に落ちることはない。

何百という小石が私の杖の動きに合わせてドラゴンを包囲した。

小石はドラゴンの周りを包むように列を作り規則正しく飛ぶ。

そして私が杖を振るとその全てがナイフへと変化した。

「It's Show Time. 踊り狂いなさい」

私はその場にある岩を手当たり次第に砕き、ナイフへと変える。

そしてドラゴンの周囲に回っているナイフにぶつけるように次々とナイフを投擲した。

私が投げた数十本のナイフは周囲を回っていたナイフに当たると跳ね返り、そのどれもがドラゴンの方へと突き進んでいく。

ドラゴンはナイフの結界によって包まれ、その中で跳ね返り踊り狂うナイフに八つ裂きにされていった。

「これは何ということでしょう！　まるでナイフが意思を持っているかのようにドラゴンを包み込み傷つけていきます。ですがこれでは致命傷は与えられません」
そんなことは分かっている。

私はドラゴンを包み込むナイフが1341本になったところでナイフを追加するのを止め、ナイフの結界に向けて呪文を掛けた。

「秘儀『黒髭危機一発』」

ドラゴンの周りを舞っていたナイフ全てがドラゴンの方に先端を向ける。

そして初めに投げたナイフから順に物凄い速度でドラゴンの体へと突き刺さっていった。

「物凄い連撃です！　硬い鱗をもものともせずナイフがドラゴンに突き刺さっていきま

す。ドラゴンを針山にでもするつもりなのでしょうか!？」

千本以上のナイフが10秒足らずでドラゴンの体へと突き刺さっていく。

ドラゴンは苦しそうに唸り声をあげ、頭を高く上に上げた。

そして最後の1本が突き刺さった瞬間、私は時間を止める。
「ふう、あとは仕上げね」

私は額に浮いた汗を拭うと一度テントに鞆を取りに行った。

そしてその鞆の中から巨大なチェーンソーを取り出す。

リコイルスターターのロープを強く引き、100cc以上ある2ストロークのエンジンを始動させた。

魔法の世界には似つかわしくないエンジンの音が競技場内に木霊する。

私はそのチェーンソーで上を向いているドラゴンの首を横向きに切断した。

切断した頭部を一旦持ち上げ中にダイナマイトを計算して設置する。

そして火をつけ爆発する寸前で時間を停止させ、頭部を乗せた。

「そして時は動き出す」

私は時間停止を解除する。

次の瞬間爆発音と共にドラゴンの生首が宙へと打ちあがった。

「ど、ドラゴンの首が飛びました！ 一体どういうことだ!!」 どのような魔法を使ったのか見当もつきません！」

ドラゴンの首は計算通り切断面を焼きつかせ、まっすぐと地面に落ちてくる。

私は生首の落下地点に変身術で銀の皿を用意した。

ドシヤリという鈍い音を立ててドラゴンの首が銀の皿に載る。

私はもう一度お辞儀すると優雅に歩いて金の卵を持ち上げた。

「やりました！ 十六夜選手最短時間で金の卵を手に入れました！ しかもドラゴンを討伐してのクリアです。えー、非常に魅せてくれました。まさに優雅！ まさに瀟洒！ 傷どころか服さえも汚しておりません。これは高得点が期待できそうです」

バグマン氏の実況に、固まっていた観衆の時間が動き出す。

競技場内が揺れるほどの大歓声と拍手が沸き起こった。

私は金の卵を片手で天高く掲げる。

ここまででしたら文句をいう者などいないだろう。

「さあ！ 審査が終わったようです」

マダム・マクシームが杖を振る。

すると長い銀色のリボンのようなものが杖から噴き出し数字を作り出した。

10点、マダム・マクシームは満点だ。

続くクラウチ氏、10点。

ダンブルドア先生、10点。

バグマン氏、大きく拍手をしながら10点。

カルカロフ、3点。

「マジかよー！」

周囲の歓声がびたりと止み、誰かが叫んだ。

私は周囲が静かになったことを良いことにカルカロフに叫ぶ。

「あら、貴方の自慢のクラムは競技をクリアするのに何分掛かったのかしら？　自慢のクラムは私と同じことが出来ると？」

私の言葉に観衆の殆どが賛同しカルカロフにブーイングをぶつける。

カルカロフは悔しそうな顔をして10点と点数を変化させた。

これで50点満点、最高値だ。

その結果に観衆は割れんばかりの拍手を私に贈ってくれる。

「満点、満点が出ました！　今大会初の満点です！　学生とは思えないような……いや、聞かなくても単身でドラゴンの討伐などやってのけないでしょう！　文句のつけようがない技術と力量です！」

私は観衆に手を振りながらテントへと戻った。

テントの中には既にクラム、デラクール、ハリーの3人がいる。

「おー、さくーやあなた最高です！」

デラクールが怪我をした体で抱き着いてくる。

『やるじゃない！　私素直に見とれちゃったわ！　それに最後のあれは何？』

デラクールは私を抱きしめながらピョンピョン飛ぶ。

その度にデラクルールの胸部についている凶悪な物が私の顔に当たった。

『何よ、ただの変身術と浮遊魔法じゃない。最後のは流石に秘密だけど』

私はうつつとういと言わんばかりにデラクールを押し返す。

……やはり食べるものが違うのだろうか。

いや今はそんな話はどうでもいい。

デラクールが私から離れた次の瞬間、バグマン氏がテントの中に入ってきた。

「全員本当によくやった！」

バグマン氏は自分のことのように喜んでいる。

「さて、手短かに話そう。第二の課題までは十分に長い休みがある。第二の課題は、2月の24日の午前9時に開始される。だが時間があるとはいえ、諸君にはちゃんとやることを用意した」

バグマン氏は金の卵を指さす。

「蝶番が見えるかな？ そう、卵は開くようになっていく。その中に第二の課題のヒントを入れておいた。みんな分かったな？ では、解散！」

バグマン氏がパンパンと手を叩き笑いながら出ていく。

私は今一度金の卵を見た。

確かに底の部分に蝶番があり、殻が3つに割れるようになっていくようだ。

「ヒント、ねえ。準備がないと難しい競技なのかしら」

私はハリリーの方をチラリと見る。

ロンと楽しそうに話をしていった。

最近ロンとは疎遠になっていると感じていたが、いつの間に仲直りをしたのだろう。

私は金の卵を鞆に仕舞うとテントを出ようとした。

「ごめんあそばせ。少々お話を聞いてもよろしくて?」

私の目の前に赤紫色が広がる。

スキーターが私の進路を遮ったのだ。

「14歳の少女が満点なんて素敵なんです! 2位の2人と10点差をつけての1位さん

すけど、今の気分は? やっぱり誇らしい?」

「スキーターさん、立ち話は何ですのでこのテーブルでお茶にしましょう」

私はテント内に設置されているテーブルを指さした。

スキーターは「素敵なんです!」と叫ぶと飛ぶように椅子に座る。

私もその向かい側に腰かけ、鞆から一通りのティーセットを取り出した。

ティーカップの数は3つ。

私と、スキーターと、そしてダンブルドア先生の分だ。

「ほっほう。これは美味しそうじゃのう」

いきなり隣に現れたダンブルドア先生にスキーターが飛び上がる。

私はダンブルドア先生が会いに来るのは分かっていたので平然と紅茶を用意した。

「わしもインタビュアーに同席してもよろしいかの。なに、わしのはちよつと奇抜なケーキスタンドだと思えばよい」

ほっほっほ、とダンブルドア先生は私が淹れた紅茶を手に取りながら笑う。

スキーターは少々戸惑っていたが、気を取り直して羊皮紙と羽ペンを取り出した。

「ドラゴンとの対決、素敵でしたわ。縦横無尽に舞うナイフ、計算され尽された反射角度、そしてドラゴンの鱗をも貫く威力。そして驚きのクライマックス！ 素敵さんす！

一体どのような魔法を用いたのかしら……」

スキーターは興奮したように私のほうに身を乗り出す。

私は静かに一口紅茶を飲んだ。

「まず岩を砕いたのが粉碎呪文。それを浮遊呪文で浮かべ、変身術でナイフへと変化させました。その後は操作系の呪文を用いてナイフを舞わせ、襲撃呪文を用いてドラゴンを針山に。最後は爆破呪文です」

「思った以上に普通の魔法さんすね……でも技量は凄まじいですわ！」

「それでは特殊な術は今回使っておらんといいことかの？」

ダンブルドア先生が紅茶を一口飲んで言った。

「あら、ケーキスタンドが何か言ってるさんす」

「気にしなくていいですよ」

「ケーキスタンドだつて喋るじやろ」

一瞬の沈黙のあと、私は仕方なしに口を開いた。

「ダンブルドア先生、この質問に關してはお答えできませんわ。ですが殆どの魔法が学校で習う呪文であると答えておきます」

もつとも、能力をぎり押しして更に華やかにすることは出来た。

だがあまりやり過ぎると観衆と審査員が引いてしまう。

何をどうしたらそういうことが出来るのか、適度に考察できるほうがいいのだ。

「今回の他の選手の実力は分かったさんしょ？ ライバルになりそうな選手はいる？」

「そうですね。意外と高得点だったハリーが気になります。クラムと同じ点数でしたっけ？ 同じ年齢だけに意識してしまうのかも知れません」

そのような感じで無難にスキーターのインタビューに答えていく。

どうせスキーターの好きなように改変されるのだ。

ある程度私の伝えたいことを伝えればそれでいいだろう。

10分ほどの質疑の後、スキーターと分かれダンブルドア先生と共に城へと戻る。

禁じられた森に沿って校庭を歩いていく。

もうすぐ城につくというところでダンブルドア先生が口を開いた。

「少々意外じゃった。もつとわたしにも想像がつかん方法を取るものと思っていたので」

「買い被り過ぎですよ」

「わたしはそうとは思えんが……聞いてもよいかね。君の能力のことを」

「駄目です。せいぜい想像力を働かせてください」

では、と私は一度頭を下げる。

そしてその場で時間を停止させた。

私は止まったダンブルドア先生を置いて城へと帰る。

そして人目のない場所で時間停止を解除した。

そのままホグワーツの廊下を歩き大広間へと向かう。

取り敢えず夕食を取ろう。

談話室に一度帰ってもいいが、今帰るとやかましいぐらいの歓迎を受けることになるだろう。

私は意気揚々と大広間に入り、グリフィンドールの机に座り夕食を取り始めた。

第一の課題から少し経ち、暦の上でも12月になった。

私は午後の占いの授業を終らせると夕食も取らずに地下廊下に向かう。

そして果物皿の絵画の梨をくすぐり、絵画を開けて中に入った。

そう、この絵画の奥はホグワーツの厨房になっている。

ここに来たのは他でもない。

第二の課題に関して、屋敷しもべ妖精の意見が聞きたかったのだ。

第二の課題のヒントは金の卵にあるとバグマン氏は言った。

第一の課題の後ハリーは談話室内で金の卵をグリフィンドル生の前で開け放ったのだが、そこから聞こえてきたのは人の悲鳴を何重にも重ねたようなノイズミュージックだった。

私もあの後何度か時間を止めてその音楽を聞いてみたが、意味は分からない。

故に人間ではない生物の意見が聞きたくてここに来たのだ。

決して屋敷しもべ妖精のキーキー声がこの悲鳴の声に聞こえるからといった安直な理由でないことは言っておこう。

私が入ると何人もの屋敷しもべ妖精が主人の帰宅だと言わんばかりに出迎えてくれる。

ここに来るのは2度目どころではない。

私は厨房に毎週のように通っていた。

というのは、手持ちの紅茶の葉や水、そしてお菓子などは鞆から無尽蔵に出るわけではない。

今まではホグズミードに買いに出っていたが、ホグワーツ内で調達できるのならそれ越したことはないのだ。

「はあい、ゴリー。元氣？ スニツキンもね。ああ、ベリリー。そんな顔しないでよ」

私は屋敷しもべ妖精一人ひとりに挨拶をしていく。

もう大体の屋敷しもべ妖精の顔と名前は覚えた。

そう言えば、最近変わり者のドビーと泣き虫のウィンキーがホグワーツに移ってきた。

ドビーは屋敷しもべ妖精なのに金銭と休みを欲したらしい。

と言っても私利私欲のためではなく、あくまで自分の人生に味付けをするための些細な物のようなのだ。

そしてドビーは自分は誰の者でもないと言わんばかりに様々な服で身を固めている。

帽子代わりにティーポットカバーを被り、上半身にはネクタイ、下半身には短パンを履いている。

その恰好は屋敷しもべ妖精からしても異様なもののように、しかも金銭を欲したこと

により皆から疎まれていた。

「みんな、聞いてくれるかしら」

私が一声かけると伝言ゲームのようにそれが伝わっていき厨房にいた屋敷しもべ妖精が集まってくる。

私は全員が私の話を聞いていることを確かめるとゆつくりと説明を始めた。

「私が代表選手であることは周知の事実だとは思いますが、実は少し行き詰っていてね。少し力を貸して欲しいのよ。今からこの卵を開けるけど、大きな音で悲鳴のようなものが聞こえると思うわ。この悲鳴を聞いて何か思いついた者が居たら、報告して頂戴。準備はいいかしら？」

屋敷しもべ妖精は静かにコクコクと頷く。

そして全員が耳を澄ませた。

「行くわよ」

私は金の卵を開く。

すると相も変わらず悲鳴のようなノイズミュージックが流れ始めた。

何人かの屋敷しもべ妖精は耐え切れないと言わんばかりに耳を塞ぐ。

そして何人かの屋敷しもべ妖精は余りの大音量に気絶した。

私はその様子を見て急いで卵を閉じその屋敷しもべ妖精に駆け寄る。

そして気絶した屋敷しもべ妖精たちを抱きかかえた。

「冷水とタオルを！ 簡単な毛布を持つてきなさい。それと暖かいココアもね。あと何か気が付いたことがある者は私に報告するように」

私が指示を飛ばすと慌てたように屋敷しもべ妖精たちが動き出す。

そして私の指示通りの物を持って集合した。

「倒れた時に何処かぶつけてないかしら……大丈夫そうね。毛布をそこに敷いて。そう、貴方は濡れタオルを作って」

私は毛布の上に気絶した屋敷しもべ妖精たちを寝かせていく。

そして濡れタオルを額の上に置いた。

「起きたらココアを飲ませてあげて。しっかりとチョコを混ぜて甘くするのよ。あら、どうしたのウインキー」

私が屋敷しもべ妖精の看病を始めると新入りのウインキーが私の制服の端をチョンチョンと引つ張った。

何か気が付いたことがあるのだろうか。

ウインキーは私に近づくと、他の屋敷しもべ妖精には聞こえない声で小さく耳元で囁いた。

「あれはマーミッシュ語でございます。十六夜咲夜様。水中人の扱う言語です」

「水中人ね。ありがとう」

私はウィンキーに小さくウィンクを返した。

ウィンキーは赤くなるか暖炉のほうに行き恥ずかしそうに背を向け座り込む。

泣き虫なだけかと思つたが、案外博識のようだ。

その後も何人かの屋敷しもべ妖精たちが私に先ほどの悲鳴の意見を伝えてくれたが、

ウィンキーほどの信憑性のある話が出てこなかつた。

気絶した屋敷しもべ妖精たちは数十分もしないうちに意識を取り戻し、すっかり元気

になった。

「看病して頂きありがとうございます！ 十六夜咲夜様！ すっかり元気です」

数人の屋敷しもべ妖精がキーキー声でお礼を言ってくる。

だが今回非があるのは私のほうだ。

今度埋め合わせに何かご馳走することにしよう。

私は有益な情報も得られたし帰ろうかと荷物を纏める。

だが次の瞬間厨房の扉が開いた。

ハリーとハーマイオニー、そしてロンの姿もある。

ドビーはハリーと知り合いなのか、ハリーの姿を見るや否や入り口の方へと走って

いった。

「ハリー・ポッターさま！ ハリー・ポッター！」

ドビーは勢いよくハリーの胸にぶつかる。

その衝撃でハリーは少し苦しそうに呻いた。

「ど、ドビー？」

「はい、ドビーめでございます！」

やはり2人は知り合いのようだった。

再会を喜ぶようにはしゃいでいる。

ハリーはドビーに視線が向いているので気が付いていないが、ロンとハーマイオニーは私がいることに気が付いたようだ。

「咲夜、なんで君がここにいるんだ？」

ロンがそんな声を上げる。

その声を聞いてハリーもようやく私が居ることに気が付いた。

「咲夜さまはよく厨房にお越しになられるのでございます。今では厨房の名誉管理人のような存在です」

ドビーは入って日が浅いはずなのだが、このことを良く知っているようだ。

「そ、そうなんだ」

ハリーの返事は少し歯切れが悪い。

私がかここにいることが気に入らないといった表情だ。

「あら、貴方のおじさんの去年のご飯はここから捻出されたものなだけけれど。甲斐甲斐しく運んだのよ？」 私

「いや別に何か文句があるとかそういうわけじゃないんだ。ただ少し意外だっただけで」

「あら、じゃあそういうことにしておきましょう。デイーンとピースはお客様に紅茶をお出ししなさい。マーシユはクッキキーの用意。ドビーは積もる話もあるでしょう？」

あとのみんなは夕食の後片付けに戻ること！ いい？ 洗い物は分担し、汚れ物は水につけるのよ。洗った後の食器や調理器具には熱湯をかけて消毒し、フキンで拭くようなことはしないこと」

私は屋敷しもべ妖精に指示を出し、ハリーたちの横に座る。

「ホント、優秀よ。ここの使用人は。なんで紅魔館には屋敷しもべ妖精が居ないのかしら」

「なんとというか、まさにお山の大将だな」

「あら、意味分かって言ってる？」

私はロンのほうをちらりと見る。

ロンは分かりやすく顔を背けた。

「ドビーはどうしてここに居るの?」

ハリーはドビーに思い出したかのように聞く。

ドビーはここにいる理由を楽しそうに話し始めた。

簡単に説明すると、2年間ほど職を探しあちこちを放浪したが結局は見つからず、途中でウインキーを拾って2人で働けるところはなかと考えた結果ホグワーツに来たのだという。

ドビーは週に1ガリオンと、月に1回休みを貰っているそうだ。

「それは少ないわ!」

ハーマイオニーが不満そうな声を出す。

「いえ、お嬢様。ダンブルドア校長はドビーめに週に10ガリオンと週末を休みにすると仰いました。でもドビーはそんなにお金も休みもいりません。ドビーは自由も好きですが、働く方が好きなのです」

「分かったでしょう、ハーマイオニー。変わり者のドビーでさえこの意見よ」

ハーマイオニーは何か言いたげに口をもごもごさせるが、結局私に言い返してくることはなかった。

「それで、ウインキー。ダンブルドア校長先生はあなたにはいくら払っているの?」

ハーマイオニーは話題を切り替えたかったのか、期待を込めたような表情でウイン

キーに聞いた。

だが、その言葉を聞いてウインキーは泣き出してしまふ。

そして八つ当たりでもするようにハーマイオニーに対して怒った。

「ウインキーは不名誉なしも妖精でございます。でもウインキーはまだ、お給料をいただくようなことはしておりません！ ウインキーはそこまで落ちぶれてはいないのでございます！ ウインキーは自由になつたことをきちんと恥じております」

ウインキーは厨房全体に響くほどの大声で泣き出してしまふ。

私はゆっくりウインキーの頭を撫でた。

「分かるわ。愛すべきご主人にお暇を出されるというのは本当に悲しいことよね。ああ、よしよし泣くのはお止めなさいな」

ハーマイオニーは泣きじやくるウインキーを見てわかりやすく狼狽したが、励ますように言葉を重ねる。

だがそれは完全に火に油を注ぐ行為だった。

「でも……ウインキーしつかりしなさいよ！ 恥じるのはクラウチさんのほうでしょ？

貴方じゃないわ！ 貴方はなにも悪いことはしていないし、あの人は貴方に対して酷いことを——」

「あたしのご主人様を侮辱なさらないでいただきたい！ お嬢様！ クラウチさまは良

い魔法使いでございます。クラウチさまは悪いウィンキーをクビにするのが正しいの
でございます」

私はハーマイオニーとウィンキーの口論を聞き流しつつ頭の隅で思考する。

ウィンキーはクラウチ氏に仕えていたのか。

だとしたらあの悲鳴がマーミッシュ語であると知っていても不思議ではない。

クラウチ氏は200か国語を話すことが出来るエリートだ。

多分仕事の関係上、聞いたことがあつたのだろう。

私はハーマイオニーとウィンキーの口論に意識を戻す。

どうやらハーマイオニーがウィンキーに押し負けたようだった。

私は皆が飲んで紅茶のティーカップを片付け、それを屋敷しもべ妖精に渡すと3人と共に立ち上がる。

そして絵画の扉を通り地下廊下へと出た。

「凄い大歓迎だったね。僕、これまでずっと、フレッドとジョージのことを凄く思ってたんだ。厨房から食べ物にくすねてくるなんてさ。でも、そんなに難しいことじゃなかったんだ。そうだろ？」

ロンがポケットいっぱい詰めたお菓子を見て言う。

ハリーもそれに同意しているようだった。

「ドビーも楽しそうだなによりだ。ウインキーは……早く立ち直ればいいけど。咲夜はどう思う?」

「それはお嬢様に捨てられたらどう思うかって意味かしら」

「あ、いや。そんなつもりじゃ……」

ハリーは困ったような顔をした。

私は冗談めかしく笑い、ハリーに言う。

「そうね。もし私がお嬢様からお暇をいただくようなことになったら……自殺するわね。自分の不甲斐なさに」

私のその言葉に3人はその場で固まってしまう。

「冗談よ」

全く冗談ではなかったが、私は作り笑いをすると3人を談話室へと急かした。

明日の自由な時間にでも、水中人に関して調べないといけないだろう。

簡単な知識は頭の中に入っていたが、完璧ではない。

私は談話室に入ると女子寮に上がり、一足先にベッドに入った。

「ポッター! ウィーズリー! こちらに注目しなさい!」

木曜の変身術の授業も終わりに差し掛かったその時、マクゴナガル先生の怒声が教室中に響いた。

今度は何をやったんだとクラス中がハリーたちの方を見る。

そこではハリーとロンがフレッドとジョージが作っただまし杖を使ってチャンバラを始めていたところだった。

いや、本当に一体何をやっているんだ……あの2人は。

「……ポッターもウイーズリーも年相応な振る舞いをしていただきたいものです」

マクゴナガル先生は恐い目で2人を睨む。

ハリーとロンはだまし杖を慌てて投げ捨て、マクゴナガル先生の方を向いた。

「さて、皆さんにお話があります」

先生は何も見なかったと言わんばかりにいつもの表情で話し始める。

どうやら授業とは関係のない話のようだ。

「クリスマス・ダンスパーティーが近づきました。三大魔法学校対抗試合の伝統でもあり、外国からのお客様と知り合ういい機会でもあります。ダンスパーティーは大広間で、クリスマスの夜8時から始まり、夜の12時に終わります。クリスマス・ダンスパーティーは我々全員にとって羽目を外すチャンスではありますが、決してホグワーツの名を穢すことのないよう、心してください」

クリスマス、もうそんな時期なのか。

そういえばロンのドレスローブが酷いという話だったか。

そろそろホグズミード村に行って材料を仕入れ、縫製しないとイケないだろう。

私は教材を鞆の中に詰め、席を立とうとする。

だが私はその段階でマクゴナガル先生がこちらを見ていることに気が付いた。

「ポッターと十六夜は残りなさい。ちよつと話があります」

先ほどの視線はそういうことだったのかと、私は半ば諦めて鞆を机の上に降ろす。

そして先生の言葉を待った。

「代表選手とそのパートナーはダンスパーティーの最初に踊ります。これは古くからの伝統です。学校の代表として踊るのですから、それ相応の相手を見つけるようにしてくださいね」

「え？ パートナー？ 踊る？」

ハリーが疑問の声を上げる。

「ハリー、ダンスパーティーなのだからパートナーがいるじゃない。貴方一人でも踏むの？」

「僕、ダンスはしません」

ハリーはきつぱり断った。

「駄目です」

マクゴナガル先生もやはりきっぱりとハリーの言葉を否定した。

「ポッター、これは伝統なのです。貴方はホグワーツの代表選手なのですから、学校の代表としてなすべきことをするのですよ。必ずパートナーを連れてきなさい」

「でも、僕なんかと——」

「わかりましたね？ ポッター」

マクゴナガル先生は問答無用といった顔でハリーを睨むと教室を出ていった。

ハリーは呆然と教室の中で立ち尽くしている。

「あ、あの、咲夜？ もしよかつたらだけ——」

「お断りするわ。もう相手がいるし、それに代表選手同士がペアを作ったらいけないと思うもの」

「そ、そうだよね……。え？ もう相手がいるのかい？」

ハリーは我に返ったように顔を上げると私に聞いてきた。

まさにいつの間にかそんなことをといた顔だ。

「誘いを断るときの決まり文句よ。軽く流しなさいな」

私は鞆を持ち上げ教室を出る。

ハリーは慌てて私の後を追ってきた。

「僕ダンスとかやったことなくて……咲夜はこういうのに詳しいの？」

まさに藁にも縋るとはこのことだろうか。

少しでもダンスやパートナーに関しての情報を集めようと必死になって質問を飛ばしてくる。

「まあお嬢様は社交界にはよく行かれるし……というか主催する側になるのかしらね。私はよくパーティーを仕切ったりはしているわ」

私はここで少し意地の悪いことを思いついた。

「パートナーは基本的に男性から女性に頼むのよ。そしてそれは自分が好意を持っている女性にしかしてはいけないわ。ようは自分が愛する人をダンスに誘ってことね」

ハリーが持っていた鞆を落とす。

あんぐりと口を開け、固まっていた。

「愛する2人なら、例えばダンスを全くやったことがなくても楽しく踊れるでしょう？
じゃあ人生のパートナー探し頑張ってるね」

私は立ち止まってしまったハリーを廊下に置いて歩き出す。

さて、いつ私の冗談に気が付くか見物だ。

私は廊下を歩き太った婦人の肖像画を通る。

そして談話室に入ると暖炉の前のソファアーに腰かけリドルの日記を開いた。

私は今現在の時点でパートナーがいるわけではない。

だが、候補はいる。

『はあい、トム。今大丈夫？』

私は日記帳に万年筆を滑らせる。

『大丈夫も何も、会話をしていたら他が疎かになるほど僕は無能ではないし、それは君も分かっていることだろう？』

『そうね。そんな有能なりドル様に提案があるわ。クリスマスにホグワーツに来ない？』

ダンスパーティーがあるのだけれど代表選手は強制参加みたいで』

『僕にタップダンスでも踊れつてのかい？』

『それも魅力的ではあるのだけれど、違うわ。ようは社交ダンスのパートナーになって欲しいってことよ』

『それまたなんで僕なんだ？ 美鈴にでもやらせればいいじゃないか』

『貴方の中で美鈴さんはどういう位置づけなのよ……。美鈴さんと踊ったらダンスじゃなくて演武になっちゃうでしょ？』

『君も美鈴のことをどういった人物だと思ってるんだよ。なんで僕なのさ。ホグワーツには若い人間が腐って匂い立つほどいるじゃないか』

『足を踏まれたくないの。それに釣り合わないわ』

『僕なら釣り合うと？ 随分と自信過剰だね。仮に僕が行くとしよう。そしたらダンブルドアが「やあ咲夜、君のパートナーは若き日のヴォルデモートかね」とでも言うのかい？ 生憎死に行く趣味はないんだ』

『貴方ジョークの才能もあつたのね。それだけ口が回れば大丈夫よ。クリスマスの晩、秘密の部屋の入り口で待ってるわ』

『だから勝手に——』

私は文字が浮かび上がってくる前にリドルの日記を閉じた。

これで第二の課題に集中することが出来るだろう。

私は鞆からティーセットを取り出し紅茶を淹れる。

ウィンキーが教えてくれたヒントを基にあの後水中人に関して調べたのだが、マーマッシュ語というのは地上で聞くと悲鳴のようにしか聞こえないらしい。

ようは水中で卵を開けば通常の言語で聞こえるということだろう。

そして水中人ということは、第二の課題は水中で行われる何かに違いない。

私はもう一度リドルの日記を開いた。

『リドル、この学校ってお風呂つてあつたつけ？ 私はシャワーぐらいしか見たことがないのだけれど』

『……ダンスのことだが僕は——』

私はパタンと日記帳を閉じた。

そしてもう一度開く。

『リドル、この学校ってお風呂ってあったかしら。私は寮の中についているシャワーぐらいしか見たことがないのだけれど』

『日記を閉じたって再起動されるわけじゃないぞ。……ある。監督生用の風呂場が6階に。だがあそこは頻繁に合言葉が変わるはずだ。その合言葉をどこかで入手しないと入れないだろう。あと必要の部屋っていう手もあるが……これは正直おすすり出来ない』

『そう、合言葉が必要なのね。……必要の部屋ってなによ?』

『その様子じゃ知らないのかい? あそこは便利だ。特に隠れて何かをする時には便利だと言える。8階にあるトロールが描かれた壁掛けの向かい側だ。石壁前を自分の目的を念じながら3回往復すると扉が現れるようになってる』

『目的を念じながら3往復すれば扉が出てくるということは、その目的に合わせた部屋が出てくると考えていいの?』

『ああ、その通りだ』

『そう、少し試してみようかしら』

私はリドルの日記を閉じると時間を止め城の8階へと移動する。

そして時間停止を解除し、リドルに言われたように壁掛けの向かい側の壁の前で目的を念じながら3回往復した。

紅魔館、紅魔館、紅魔館……。

するといつの間にか壁に紅魔館の玄関と同じ扉が出来上がっている。

「おお、予想はしていたけど流石にこれには驚くわ」

本当に紅魔館と繋がっているのだろうか。

私は少し期待を込めて扉を開いた。

中に入ると紅魔館の玄関ホールが広がる。

だが、そこには騒がしい妖精メイドも妹様の狂気もなかった。

どうやら建物だけのようだ。

「まあそう便利な物ではないわよね」

取り敢えず紅魔館にはバスタブも、大きな浴場もある。

私は玄関を閉めると浴場に向けて紅魔館内を歩いた。

確かにリドルは必要の部屋と呼んでいたか。

確かに細部は違うが、紛れもなく紅魔館の内装をしている。

だが、机の中に入っている小物やダンスの中身などは再現されていなかった。

ここは私の記憶にある紅魔館なのだろう。

私は脱衣所でホグワーツの制服を脱ぐと浴場へと進んだ。

浴場には既にお湯が張ってあり、すぐにでも入れるような状態だ。

私は卵を持って湯へと浸かる。

「ふう……なんだか懐かしいわね。クリスマスに紅魔館に帰れないのが少し惜しいわ」
やはり温かい湯というのは良いものだ。

ただ体を清潔に保つこと以上の効果をもたらしてくれる。

私は大きく息を吸い込み湯の中へ潜ると、水中で卵を開けた。

すると悲鳴にしか聞こえなかった音が美しい歌へと変わる。

探しにおいて 声を頼りに

地上じや歌は 歌えない

探しながらも 考えよう

われらが捕らえし 大切なもの

探す時間は 1時間

取り返すべし 大切なもの

1時間のその後は——もはや望みはありえない

遅すぎたなら そのものは もはや 二度とは戻らない

「ふんしー」

私は歌を聞き終わったので一度顔を上げた。

「はあ、はあ、ふう。つまり大事なものを1時間以内に取り戻せばいいということね。つまり私が死なない限り時間無制限ということかしら」

私は少し名残惜しいが浴槽から上がり都合よく用意されていたタオルで体を拭く。

捕らえしということは、物じゃなくて者ということか。

私にとって大切な者、それは勿論お嬢様だが、お嬢様を探す課題などありえないだろう。

いやもしお嬢様が捕らえられたとしたら大会の本部ごと潰すが。

私は適度に髪を乾かすと、ホグワーツの制服を着直し紅魔館の廊下を歩く。

つまり1時間水の中で動けるだけの何かを用意する。

そういった課題なのだ。

私は体の火照りや髪の湿り気がないことを確認すると玄関ホールから出る。

私が振り返るころには、扉はなくなりただの石壁に戻っていた。

「さて、水の中か。ぼちぼち準備を始めないといけないわね」

私は周囲に誰もいないことを確認する。

そして時間を停止させ、談話室へと戻った。

ダンスパーティーとか、洞窟とか、缶詰とか

クリスマスが刻一刻と近づいてくるのを私は主に聴覚で感じる。

それは何故だろうか。

そう、自分に多大なる自信を持っている生徒があの手この手で私を誘いにくるからだ。

朝食時には毎日10通以上のふくろう便が届き、そのどれもがダンスパーティーの誘い。

授業の合間にはひっきりなしに声を掛けられ、私はその度に既にパーティーがいると言いつ断った。

何故パーティーがいると言っているのに誘いが絶えないか、それは私がパーティーの名前を誰にも教えていないからだろう。

だから皆私のパーティーはまだ決まっていけないものだと思いつてくるのだ。

「そう、僕は父上に連れられて王室の社交界に行ったことがある。社交ダンスは大の得意なんだ。咲夜が良かったらなんだけど、僕とダンスパーティーに行かないかい？」

ドラコが朝食の席で話しかけてきた時、私はついに来たかと思つた。

ドラコのことなので、そのうち私に声を掛けるだろうとは思っていた。

「あら、噂話を聞いていないの？ 私のパートナーは既に決まっているわ」

私がそう告げるとドラコは分かりやすくしよぼんとする。

「そう、なのか……誰と行くんだい？」

「内緒よ」

ドラコは重そうな足取りでスリザリンのテーブルへと戻っていく。

その様子をハリーとロンが喜劇でも楽しむかのように見ていた。

「ざまあねえやマルフォイのやつ。なんで断られることが分かっているのに咲夜を誘うかな」

ロンが今にもオートミールを嘔き出しそうになりながら言った。

「大方私が男子を断り続けているのは僕を待つていたからに違いないとか考えているのよ。ほんと分かりやす過ぎて面白いわ」

私はトーストにイチゴジャムを付けて食べる。

シンプルで飽きることのない味というものは、完成されていると言っても過言ではないだろう。

「そうは言うけどロン、貴方はどうなのよ。ハリーも、パートナーは見つかった？」

「あー……、咲夜、僕と一緒にダンスパーティーに——」

「だから既にパートナーがいるって言ってるじゃない」

「ハーマイオニーの遠慮の欠片もない言葉にロンは私をダンスパーティーに誘ってくる。」

勿論、言い切る前に断るが。

「そういうハーマイオニーはどうなんだよ。ネビルの誘いを断ったって聞いたぞ？ 本当はパートナーなんていないくせに」

「あら、お生憎様。素敵な男性が見つかったわ」

「え？ 誰？」

ハリーが自分の皿から顔を上げてハーマイオニーに尋ねた。

「秘密よ」

ハーマイオニーはすまし顔で答える。

「ホント、女の子って秘密が好きだよな。あつちでコソコソこつちでコソコソ。あー、やんなつちやう」

まあロンの言いたいことも分からなくはない。

私も同学年の女子特有のあの雰囲気にはついて行けないからだ。

「でも、みんなよくパートナーに誘えるよね。ようは告白大会みたいなものなんだろう？」

ハリーはクロワツサンを齧りながらブツブツと呟く。
その言葉にロンとハーマイオニーが目を丸くした。

「何言ってるんだよハリー。もしそうだったら殆どの生徒はパートナーを見つけれないぜ?」

「ハリー、貴方勘違いしているわ。ダンスのパートナーなんだから別に自分が踊りたい人と踊ればいいのよ?」

ロンとハーマイオニーはハリーの勘違いを訂正するように口々に言う。
それを聞いてハリーはゆっくりと私のほうを向いた。

「……咲夜?」

ハリーがぼつりと私の名前を呟く。

正直私自身驚いているのだ。

まさかまだあの与太話を信じていたなんて。

「ふふつ、騙される方が悪いのよ。こんなあからさまな嘘に」
私がクスクスと笑うとハリーは顔を真っ赤にして怒る。

「やってくれたな! あの後僕がどれ程悩んだかも知らずに!!」

「あら、悩むほど好きな人がホグワーツにいるの?」

「そうじゃなくて……あーもう」

ハリーは諦めたように頭を掻くと、朝食の続きを食べ始める。

クリスマス・ダンスパーティーまであと1週間。

私はのほほんとホグワーツの生活を楽しんでいた。

クリスマス・ダンスパーティー当日。

私は3階にある女子トイレでリドルを待っていた。

ここに住み着いている嘆きのマートルは一時的に追い出している。

今頃はホグワーツの湖にでもいるだろう。

私は今現在紅魔館から持ってきた黒のドレスを着ている。

違う色も持つてはいるが、これが一番きつちりして見えるだろう。

私が指定した時間はダンスパーティーの1時間前。

あと3秒でその時間になる。

そしてその時間ぴったりにトイレにポンという姿現し特有の音が響いた。

「時間ぴったりつてのは、なんだか一番印象が悪い気がするわ。そうは思わない？」

私はリドルであろう人物に声を掛ける。

「1秒でもズレると文句を言う人のセリフじゃないね」

声が中性的になっているが、この軽口は間違はなくリドル本人だろう。

リドルはタキシードを着ており、顔にはピエロのような仮面を付けている。

「先生にありつただけの認識阻害呪文を掛けてもらった。ダンブルドアでも僕の正体を見抜くことは出来ないだろう」

リドルは自信満々に言う。

確かに私もリドルが来るということを知りていなかったら今ここにいるのがリドルだと分からなかっただろう。

「じゃあ行きましょうか」

リドルと合流することができたので、私たちは玄関ホールへと向かう。

確か代表選手はそこに集合ということになっていたはずだ。

「ホグワーツは懐かしい？ ……ってほどでもなかったわね」

「そうだね。一昨年ジニー越しに嫌というほど見たよ。だけどここは僕の始まりの場所でもある。僕はここで自分を磨いた」

「そう言えば貴方はちゃんと学校を卒業しているのよね。なんだか意外だわ」

「ここにいる記憶の僕はまだ卒業はしていないけどね。さて、そろそろ玄関ホールだ。僕の話はジョン・ドウとでも呼んでくれ」

「分かったわ、ジョン」

玄関ホールは生徒でごった返していた。

皆が大広間のドアが開放される8時を待っているのである。

「しばらく人混みに紛れていたほうがいいかしら。貴方のその仮面凄く目立つし」

「なに、問題ないよ。君の方が目立っている。美鈴から聞いたよ。君学校でデンジャラス・クイーンだとかキリングマシーンとか言われているんだって？　僕より酷いじゃないか」

「貴方と違つて優等生演じてないもの」

そう、リドルの言葉通り私たちは凄く目立っていた。

それが私が代表選手であるせいなのか、リドルの仮面のせいなのかは分からないが、周囲の生徒は私たちを見ながら囁き合っている。

暫く待っているとハリーがパーバティを連れて、ロンがその後を追うように玄関ホールに入ってきた。

「やあ、咲夜。……そっちの人は君のパートナー？」

ハリーがリドルを見ながら呟く。

リドルは一言もしゃべらず静かに一礼した。

「親友のジョンよ。ジョン、こちらはハリー・ポッターとパーバティ・パチル。そしてそっちのノッポがロナルド・ウィーズリーね」

ハリーたちはリドルの見事な礼に思わず礼を返す。

私はロンの方をチラリと見た。

「あら、ロン。あのボロボロはどうしたの?」

ロンは今私がプレゼントした深いブルーのタキシードを着ている。

ロンは満足そうに自分の服装を眺めた。

「サイズもぴったりだったよ。今までのクリスマスで最高のプレゼントさ」

「そう、気に入って貰えてなによりよ。私はあのヒラヒラも悪くないと思うけどね」

私がそういうとハリーが苦笑する。

この一週間ほど、ロンはずっと自分のドレスローブについて愚痴っていたのだ。

暫くするとパーバティが妹のパドマを連れてきた。

どうやらロンのパートナーはパドマのようだ。

パドマはロンの服装を上から下まで眺め、安堵のため息をつく。

どうやら、ロンのドレスローブの噂は聞き及んでいたらしい。

「代表選手はこちらへ!」

マクゴナガル先生の声が玄関ホールに響く。

私たちはロンと別れると声の聞こえた方へと向かった。

私たちが玄関ホールを歩くとモーセが海を割るように人垣が割れていく。

マクゴナガル先生の指示を聞く限りだと、私たちは他の生徒が入場し終えてから列を作って入場するようだ。

私たちはそこでクラムとデラクルと合流する。

デラクルのパートナーはロジャー・デイビスというレイブンクロウ生だ。

そしてクラムのパートナーは驚くことにハーマイオニーだった。

ハーマイオニーはいつものボサボサのくせ毛ではなく、艶のある滑らかな髪をシンヨンにしている。

前歯を矯正したのは知っていたが、磨けばここまで輝く少女だとは思わなかった。

「はあい。ハーマイオニー。貴方のパートナーってクラムだったのね」

私は静かに手を振りながらハーマイオニーに挨拶する。

ハリーとパートナーは信じられないといった顔でハーマイオニーを見ていた。

「こんばんは、ハリー、パートナー、咲夜。ええつと……咲夜のパートナーの仮面の人はどなた？」

「ジョンよ。ジョン・ドウ」

「……いや、つまり誰よ？」

ハーマイオニーが眉を顰める。

「秘密だつて言ったじゃない。そういう意味よ」

リドルはハーマイオニーに優雅にお辞儀をした。

ハーマイオニーもそのお辞儀に苦笑いで返す。

「まあ、さくやがふつーうの人をつれてくることは、ありえないでーす」

デラクルールがリドルを見ながら笑う。

確かに滑稽ではあるが。

「随分な言いぐさだね。まあ普通じゃないから仮面をつけているわけだけど」

「あら、ジョン。無口キャラで通すんじゃないの？」

「喋ってないと釣り合わないだろう？ 君の軽口を封殺してこそこのパートナーだ」

「できてないけどね」

「君がそう思うんならそうなんだろう。君の中ではね」

私はリドルの頭をぺしりと叩く。

その光景をハリーとハーマイオニーは啞然とした顔で見ていた。

「なんとというか、咲夜が親友というだけはあるね」

「褒められているのかな？」

ハリーの言葉にリドルが返す。

「いえ、ただ珍しいだけです。ジョンさん。咲夜ってあまり人と仲良くしないから」

ハーマイオニーが困ったように言った。

身長からリドルのことを上級生だと思ったのだろう。

「言われているよ、咲夜。どうやら君は人間に馴染めていないらしい」

「貴方に言われたくないわ」

「君が仮面をつけろと言ったんだろう？」

「一言も仮面をつけろとは言っていないわ。正体を隠せとは言ったけど」

「静粛に、ミス・十六夜。そして仮面のパートナーさん。今から入場します。それぞれ組になって私についてきてください」

マクゴナガル先生の声が私たちの言い合いに水を差した。

私はピタリと口を閉じると、右手をリドルに差し出す。

リドルはそれを優雅に取った。

ハリーたちも私たちに倣い手をつないでいく。

マクゴナガル先生はそれを見ると大広間入り口の扉を開けた。

入った瞬間に私たちは拍手に包まれる。

そして先生の後に続き審査員用の大きな丸テーブルのほうへと歩いていく。

審査員テーブルには3人の校長とバグマン氏、そして何故かパーシーが座っている。

私たち代表選手は空いている席へと腰かけた。

「これはこれは、ダンスの前には食事があるのか。仮面なんてつけてくるべきじゃない

かったかも知れない」

リドルが愚痴るように言う。

もつとも、リドルはただの記憶なので食べることも飲むことも出来はしないのだが。「あら、じゃあ先生方の前でその仮面を剥いであげましょうか？ きつと面白いことになるわよ」

「僕が思うに面白いのは僕のほうではなく、その後色々追及される君の方だとは思うけどね」

テーブルの上には金色の皿が置かれているが、その上に料理は載っていない。

ダンブルドア先生が実演したが、どうやらメニューの中から選択して口に出すとその料理が現れるらしい。

「ルービックキューブ」

リドルが冗談めかして言うと、金の皿の上に本当にルービックキューブが現れた。

「へえ。貴方の主食ってパズルだったのね」

「ああ、これが意外と栄養になるんだ。カラフルなのがいい」

私は適当に料理を頼む。

私はリドルとは違い食べないと死んでしまう生き物だ。

「色のないルービックキューブでもいいじゃない。無限に回せるわよ」

「そもそもそれでは初めから完成しているじゃないか」

「なにやら愉快なパーティナーを連れておるのう。咲夜」

私がリドルと楽しく会話をしていると、やはりダンブルドア先生が話しかけてきた。

ダンブルドア先生の顔は笑っているが、目はしっかりとリドルの方を向いている。

「これはこれは、ダンブルドア校長先生」

リドルが礼をした。

礼はしたがルービックキューブを回すのはやめない。

リドルはたった10手でルービックキューブを完成させ、金の皿の上に戻した。

「ダンブルドア先生、紹介します。親友のジョン・ドウです」

「ほっほ、咲夜、君が自分の口から親友と言うのは少々意外じゃのう」

ダンブルドア先生がポークチョップを食べながら言う。

「ほれ、ジョン君。君も何か食べるとよい。ここの厨房にいるシェフの腕はわしが保証しよう」

どうやらダンブルドア先生はリドルに仮面を取らせる気が満々のようだった。

それはそうだろう。

リドルには今凄い数の魔法が掛かっている。

そのどれもがリドルの正体を隠す為のものだ。

リドルの言葉を信じるならばパチュリー様が直々に魔法をかけまくったことなので、例えばダンブルドア先生でも見破ることは出来ないだろう。

だがそれが却ってダンブルドア先生の警戒心を強めている。

「申し訳ない。虫歯の治療をしたところでね。歯科医から今夜一晩は何も食べるなど言われているんです」

「ほほう。マグル式の治療かね。わしはあれに少々興味があつての。なんでも悪い歯を抜いてしまふんじやろ？　そして偽物の歯を埋め込むとか」

「そこまで酷い虫歯ではないですが……基本的にはドリルで削り取ります」

「それは恐ろしい。よく耐えたものじや。それ、メニユーに書いてある飲み物なら大丈夫じやろ。こんな場で何も飲まないというのも勿体ない」

「申し訳ない。胃に穴が開いているんです。主に昼夜のせいです」

「あら、私の言葉つてそんな殺傷能力を持つていたのね。まるで一寸法師だわ」

「日本の昔話じやつたかのう。鬼の口に入つてチクチクと。わしはあれとレプラコーンの区別がつかなくて苦労したものじや」

私は皿の上に載っている牛肉を口へと運ぶ。

……ふむ、やはりダンスパーティーだけあつていい肉を使っている。

「ダンブルドア先生、これでもジョンは食べたいのを我慢しているのです。その苦労を

酌んでやってください」

「これは悪いことをしたのう。ほれ、お詫びのレモンキャンディーじゃ」

「これはどうも」

リドルはダンブルドア先生からレモンキャンディーを受け取る。

ダンブルドア先生はリドルに触れることで何かを感じ取るうとしたらしいが、結局それは叶わなかったようだ。

少し悔しそうな顔をしている。

「それにしても、今日はこんな場に呼んでもらうことができ大変うれしいです。咲夜から誘われたときは僕がパートナーでいいものかと散々悩んだものですよ」

「あら、貴方でも悩むのね」

「ほっほ、そう硬い場でもないからの。……咲夜、この方はホグワーツの生徒ではないのか？」

「何言ってるんですか。ダンブルドア先生。ホグワーツの生徒ですよ」

「やっぱ僕は印象が薄いみたいですね。いやあ仮面をつけてきて正解だった」

リドルはカラカラと笑うとルービックキューブを指で弾く。

そして器用に指の上で回転させた。

その頃になるとダンブルドア先生も諦めたのか今度はカルカロフと話を始める。

何やら必要の部屋のことに關して話しているが、どうやらダンブルドア先生自身必要の部屋に關しては詳しくはないようだった。

料理もあらかた食べ終わると私たちは一度席を立ち、テーブルから離れる。

ダンブルドア先生が杖を振るうと、テーブルが壁際に退き中央に広いスペースが出来た。

どうやらダンスが始まるみたいだ。

私はリドルの手を取り腰に手を回す。

そして物悲しい音楽に合わせてゆっくりと踊り出した。

「あら、上手いじゃない。ジョン」

「パーティーではいつも忙しそうに走り回っている君に言われたくはないな。礼儀作法は基本だ。礼儀を知らない人間は猿と区別がつかないくらいだな」

「美鈴さんは危うそうね」

「美鈴はやろうと思えばできる。やらないけどね」

私はリドルと共にダンスフロアを縫うように移動していく。

そして隅の方まで移動し、周囲の視線が切れたことを確認すると時間を停止させた。

「さて、咲夜。まずこれを渡しておこう。先生が改良したものだ。姿現しを妨害する魔法を無効化する指輪。魔術的なものは外部から感じ取ることが出来ないようになって

いるから他の指輪と交ぜてはいけないよ」

私とリドルは何も示し合わせていなかったが、思っていたことは同じようだった。

時間が止まったのでリドルは当たり前のようにパチュリー様が作った魔法具を私に持たせ、私も当たり前のようにそれを受け取る。

「まあこのために呼んだわけじゃないんだけど、こういう何かを持つてくるとは思っていたわ。他には？」

「お嬢様から伝言だ。不死鳥の騎士団に入るとき、ダンブルドアを説得する材料に咲夜の能力の話をしてもいいと。それとクイレルが大きく動いている。どうやらヴォルデモートと接触することができたようだ。ヴォルデモートはハリーを狙っている」

リドルは仮面を外す。

そこにはいつも紅魔館で見るリドルの顔があった。

「クイレルとは随分と連絡が取りにくくてね。なんせ『僕』の目を盗まないといけない。クイレルから何か情報が入ったらまた連絡するよ」

ポンという音と共にリドルは姿くらましてその場から消えた。

ダンブルドア先生のあの様子からして、長居するのはよくないと思ったのだろう。

私はリドルから貰った指輪を左手の人差し指につけると静かに時間停止を解除する。

これで独りになってしまったが、まあいいだろう。

私はフラフラとその辺を彷徨い歩き、やがてハーマイオニーとクラムのところにたどり着いた。

「咲夜！……ジョンはどうしたの？」

ハーマイオニーはバタービールの瓶を持ちながらキョロキョロと周囲を見渡す。

「帰ったわ。こういう場はあまり得意ではないみたい。仮面舞踏会だったらよかつたんだけどね」

「あー……そうね、確かに少し浮いてたかも」

「確かに、あの仮面のヴイとは、少し浮いていました。ですが、ヴおくよりも落ち着きがあつたとヴあ思います」

クラムが少したどたどしい英語で答える。

「ハームーオウンーニニー、咲夜も一緒でもいいかい？」

「どうやらクラムは私の同席をハーマイオニーに確認しているようだ。」

ハーマイオニーはその提案を快く飲んでくれた。

私はハーマイオニーの隣の椅子に腰かける。

「どうやら先ほどまでは踊っていたらしく、ハーマイオニーとクラムは少し汗を掻いていた。」

「そう言えヴあ、咲夜はあんな変身術をどこでおヴおえたんですか？」

「そうよ。第一の課題の時のやつ。びっくりしたわ」

小石をナイフに変えた時のことを話しているのだろう。

私は2人に理由を説明していく。

「そう難しい話でもないのよ。例えばだけど、人から話を聞いたことがあるものと、実際に見たことのあるものでは変身術の難易度は全然違うでしょう？ それと同じで非常に見慣れた物というのは変身させやすいのよ」

私は手元にあつたフォークを変身術でナイフに変える。

そして袖の下から本物のナイフを取り出した。

「こんな感じでモデルがあると尚の事変身させやすいわね。例えばあの数の小石を全てそれぞれ違う形に変えようと思つたら私には無理。全部見慣れて触れ慣れたナイフだからこそ、あそこまで一瞬で大量に変身させることが出来るの」

私は左手でランプを取り出すとバラバラと落とす。

私は右手でそれに変身術を掛けた。

するとランプは空中でナイフへと変身し、床へと落ちていく。

最終的に54本のナイフが床に降り積もった。

「こんな感じ」

おおー！ という歓声が2人から上がる。

私がそれに魔法を掛けると13本ずつ輪をつくり、私の周囲を衛星のように回り出す。

「で、あとは基本的な物体浮遊系の呪文」

ナイフたちは私の左手目指して飛び、手に刺さる寸前にトランプへと変わって54枚全てが左手の中に収まった。

「人にはそれぞれ得意分野があるものよ。クラムは世界レベルのクイディッチのシーカーでしょう？」

「はい、ヴोकがシーカーをすれば、スニッチを相手にうヴあわれるということはないです」

「アイルランド戦見たわ。貴方素晴らしかった！ 試合には負けちゃったけどあの判断で正しいと思う」

ハーマイオニーが興奮したように言う。

クラムは褒め言葉など言われなれているはずなのに、初めて褒められたかのように顔を赤くして照れた。

そういえばクラムの方からハーマイオニーを誘ったのだったか。

「さて、ジョンの相手をしていたら予想以上に疲れたみたい。私ももう寝に行くわね」
邪魔しては悪いと思い私は席を立つ。

そしてそのまま一直線に談話室へと向かった。

その途中マダム・マクシームが怒ったような声を張り上げているのが聞こえたが、何だったのだろうか。

なんにしても私は談話室へとたどり着き、女子寮へと上がるとドレスを脱ぎ着替えた。

楽な服装になると私は人差し指につけた指輪を眺める。

銀色でシンプルな指輪だ。

厚みが余りないのでナイフ投げの時に支障は出ないだろう。

取り敢えずこの指輪は紅魔館への切符のようなものだ。

あの様子だとこの指輪を持ってきたのはリドルの独断ではない。

お嬢様かパチュリー様に託されたことだ。

つまりは必要と感じたら戻ってこいという意味と捉えて差し支えないだろう。

私はそんなことを考えていると次第にうとうととしだし、気が付いた時には眠ってしまった。

「今日は冷え込むわね。店主さん。いつもの」

第二の課題まであと1月ぐらいだろうか。

週末に許可されたホグズミード村行で、私は迷わずホッグズ・ヘッドに来ていた。

店主は何も言わず私の前にブランデーの瓶を置く。

まさに「俺は酒瓶を机に置いただけ」といった態度だった。

なので私は置かれていた酒瓶から酒を注いで飲んだだけ。

売つてもないし買つてもいない。

最後に私が店主に場所代を払い、この奇妙なやり取りは終わりを告げる。

いつの間にか店主と私との間に暗黙の了解が出来上がっていた。

私はブランデーをグラスに注ぎ、手の平で包み込むように持つ。

そしてそれを少しずつ飲み始めた。

「そういやあ、代表選手なんだってな。見たところそんな年には見えねえが」

店主が不愛想な声を出す。

店主と私との会話はいつもこんなものだ。

「多分もう成人しているわ。多分」

「そんななりしてよく言うぜ。まったく……」

そこでプツリと会話が切れる。

もともとそう長く話すような間柄でもない。

会話がある時のほうが珍しいぐらいだ。

私はちらりと店に掛けてある肖像画を見る。

そこにいる女性は物悲しい表情でこちらをじっと見ている。

優しい目つきだったが、少し違う。

私の目に今から釘でも打ち込もうかとしているような、そんな目つきだった。

ガシャン、と私の手からグラスが滑り落ち、地面に落ちて割れる。

だが私はその肖像画から目を離せなくなっていた。

「……い、妹……様？」

その目つきはフランドール・スカーレットお嬢様のそれだった。

深く、何もかもに絶望し、だが同時に何とも思つてなく。

ただじつと私の目を見続けている。

まるで私の頭の中に滑り込もうとしているかのように。

「アリアナを知っているのか……？」

店主の驚いたような声が私の横から聞こえてくる。

私は急いで閉心術を掛け、平静を装った。

「何でもないわ。少し知人に似ていただけ。レバロ、直れ」

私は床に向けて杖を振るう。

割れたグラスは元あったとおりにくつついた。

「アリアナ……妹で反応したということは、あの肖像画の人は貴方の妹さん？」

私が店主に聞くが、反応はない。

私は肩を竦めて床を濡らしたブランドーを呪文で綺麗に拭くと、場所代を置いて立ち上がる。

そして私はそのままホッグズ・ヘッドを後にした。

ホグズミード村を真つすぐとホグワーツ城に向かって歩いてみると、後ろからハリーたちに追い抜かれる。

そういえば第二の課題まであと一月だが、ハリーたちは卵の謎を解けたのだろうか。

私はハリーの後を追い、話しかけた。

「目にももの見せてやる！ 馬鹿な小娘？ 私が？ 絶対にやつつけてやる。最初はハ

リー、次にハグリッド……」

「リータ・スキーターを刺激するなよ……ハーマイオニー、あの女は君の弱みを突いてくるぜ」

ハリーたちの進む速度が異様に速いと思ったが、どうやらハーマイオニーがご立腹だったようだ。

大股でズンズンと城の方へと歩いている。

スキーターの名前が聞こえたが、喧嘩でもしているのだろうか。

「ハリー。ちよつといい？」

私は必死にハーマイオニーを追いかけているハリーに声を掛ける。

「あ、え？ なに？ ……あ、咲夜か」

ハリーは一瞬どこから声を掛けられたかと周囲を見回したが、やがて私の姿を見つけた。

「卵の謎はもう解けた？」

その言葉を聞いて、ハリーは分かりやすく狼狽する。

「どうやらまだ解けていなかったようだ。」

「ウインキーを頼りなさい。屋敷しもべ妖精のね」

「ウインキーを？」

「ええ。第二の課題は準備に時間が掛かるから早いうちに行動した方がいいわ」

私は人差し指を立てるとゆっくりそれを握りこむ。

「これで貸し借り無しね。……置いていかれるわよ？」

私は既に小さくなっているハーマイオニーの背中を指さす。

ハリーは慌ててその後を追っていった。

私はその様子に軽く肩を竦めると、ハニーデュークスにでも行こうかとその場で踵を返す。

振り向いた瞬間、目の前にシリウス・ブラックが居た。

いや、その言い方は適切ではない。

正確にはホグズミード村の通りにこちらを凝視しながらブンブンと尻尾を振る黒い犬が1匹いた。

「こんなところにいたのね。調子はどう？」

私が声を掛けるとブラックはとててと走り寄ってくる。

「クーン」

そして物悲しそうに1回鳴いた。

多分お腹が空いているのだろう。

「なんにしてもここじゃ拙いわ。案内を頼めるかしら」

「ワン」

ブラックは一声鳴くとホグズミード村を歩き出す。

私はそれについていった。

暫くすると山道に入ったが、ブラックは構わず歩き続ける。

30分も経っただろうか。

ブラックは山の中にある小さな割れ目に身を滑り込ませた。

どうやらここがブラックの隠れ家ようだ。

私は制服を引っ掛けないようにして割れ目の中に入る。

中は薄暗い洞窟になっていた。

ブラックはもう安心だと言わんばかりに人間へと姿を変える。

「いやはや、咲夜に会えてよかった。この季節に何も食べないというのはキツくてね。

何か持っていないか？」

ブラックは開口一番に私に食べ物強請る。

私は鞆の中から缶詰を次々と取り出した。

「まさかこんなところにいるとは思ってもみなかったから、味気ないものしか持ってな

いわよ」

「食えれば十分だ。最近はずミしか食べてなかったからな」

「あなたほど大きくて黒い猫は見たことがないわね」

私はブラックに缶詰とフォークを渡すと、洞窟内部を見渡す。

洞窟内部には簡単な生活用品と古新聞、そして奥の方にはバックビークがロープで繋

がれていた。

「あんなところに大きな非常食があるじゃない」

「いや、あれは私の箒のようなものだ。マグルだつてお腹が空いたからと自動車は食べないだろう?」

「飢餓の時は馬でも食うのが人間よ」

私はバックビークに近づいていき、丁寧に頭を下げる。

バックビークは一瞬値踏みするような視線を送ってきたが、すぐに前脚を折り挨拶をした。

「去年よりも酷い生活をしてるじゃない。貴方つてもしかしてドMだつたりするの?」

「私のイニシャルはSだ。それに、こんなところで魔法を使ったら山に誰かが隠れていきますよと魔法省に伝えることになってしまふ」

「だとしても、これは酷いわね。人間の生活環境じゃないわ」

「愛すべき野良犬といったところか。あまりホグズミードから食べ物を盗むわけにもいかないしな」

ブラックが缶詰の中身を突きながら言う。

お腹が膨れたことで少し元気になったようだ。

「そう言えば対抗試合の代表選手になったと新聞で読んだよ。まったくもってヤンチャなお嬢さんだ。まるで学生時代のジェームズのようにだよ。ハリーは本当にジェームズのそういうところが似なくて良かった。それでだ——」

ブラックは一度缶詰を地面に置く。

「君は誰がハリーの名前をゴブレットに入れたか見たんじやないかい？」

ブラックはいつになく真面目な表情で私に聞いた。

「新聞に君が代表選手になった方法が書いてあった。あの方法を使って代表選手になるには24時間ゴブレットを監視しなくてはならない。そうだろう？」

私はその言葉にどう答えていいか迷った。

正直にムーディ先生が入れたと答えてもいい。

だがリドルのヴォルデモートはハリーを狙っているという言葉。

もしここでブラックにムーディ先生の話をし、それがダンブルドア先生の下まで情報が届いたらどうか。

一方的にヴォルデモート陣営が倒されてしまうということにはならないだろうか。

そうなってしまったらお嬢様の命令に背くことになる。

「へえ、鋭いじゃない」

「少し考えればわかることだ。ダンブルドアだって気が付いているだろう」

「そうかしら？ 追及されたことないけど。私が出し抜ける程度の年齢線しか引けない老いぼれよ？ スキーターが『時代遅れの変人』と書いたのもわかる気がするわ」

ブラックは私の言葉を聞いてニヤリと笑う。

「確かにダンブルドアは老いぼれだ。全盛期と比べて力が衰えてきているのは事実だろう。だが、ゴブレットに対策をしようと思えばいくらでも出来たはずだ。だがそれをしなかった。何かの為に」

「私の為に中途半端な年齢線を引いたって言いたいのか？ それこそなんの為よ」

ブラックは古新聞の1つを広げる。

そこには杖調べの時のインタビュ記事が載っていた。

ブラックはその記事に書いてある1文を指さす。

『お嬢様から試合に出るとのご命令を受けたんです』この文だ。君は自分の娯楽の為ではなく、主の命令でこの試合に参加している。じゃあその試合に参加できないとしたら？ 君は必然的に主の命令に背くことになる。これは私の予想だが、ダンブルドアは君が対抗試合に参加できるように敢えて穴のある方法を取ったのだろう。君を助ける為にね」

「私が……泳がされている？」

「いや違う。見守られている。こっちの方が正しいだろう。あの人は自分の生徒を何よりも大切にする人だ。ダンブルドアは君が君の主人の命令に逆らえないことを知っている。私をアズカバンから脱獄させたという話を聞いて主人の命令があればそこまで危険を冒す覚悟があることを知ったのだろう。まあ、ダンブルドアは今頃は後悔して

いるだろうけどね」

「後悔？」

「そう、後悔だ。咲夜の為に代表選手の選抜に穴を作ったことにより、何者かが付け入る隙まで作ってしまった。ハリーが代表選手になるという珍事が起きてしまったんだ。ダンブルドアが本気で対策をしていればハリーが代表選手になるということは十分防げる事態だったはずだ」

私は今まで見てきたダンブルドア先生の行動を思い出す。

見守られていた？ クリスマス・ダンスパーティーで思ったほどパートナーについて言及してこなかったのはそういうわけなのだろうか。

私はグルグルと頭の中で思考を巡らせる。

そしてある一つの仮説を思いついた。

「いえ、違うかも知れない。私が代表選手になるのは二の次で、もっと重要なことがあったのかも」

「重要なこと？」

ブラックが2つ目の缶詰の封を切る。

私はその辺にある岩に腰かけた。

「もしダンブルドア先生がハリーを代表選手にしたのだとしたらって話」

「それはあり得ない。ダンブルドアがそんな危険を冒すものか」
「冒すのよ。今までに2度冒しているわ」

私は1年生の時と2年生の時に起こった事件を思い出す。

「私たちが1年生の頃、先生はハリーたちに挽回のチャンスを与えようと敢えてハリーを泳がせたわ。2年生の頃もそう。ダンブルドア先生なら十分秘密の部屋をどうにかすることが出来たはず。なのに敢えてハリーたちにやらせた。ハリーたちが解決することによってハリーがスリザリンの継承者ではないと他の生徒に示したかったんでしょうね」

私は目を瞑りさらに思考を巡らせる。

今までのダンブルドア先生の行動から察するに、ダンブルドア先生は意図的にハリーを危険な場所に置いて置いているような気がする。

まるでハリーを鍛えているように……。

「ブラック」

「シリウスだ」

「ブラック、実を言うとハリーの名前を入れたのはムーディ先生なのよ」

「ムーディ？ マッド・アイか？」

ブラックが驚いたように目を見開く。

「ええ、ムーディ先生とダンブルドア先生は仲が良い。もしかしたらダンブルドア先生がムーディ先生に頼んでハリーの名前をゴブレットに入れたのかも知れないわ」

「マッド・アイがハリーの名前をゴブレットに……。マッド・アイは名のある闇祓いだ。死喰い人をアズカバンに送った数も半端ではない。今更ヴォルデモートの陣営にいるということはないだろう。だとしたら本当にダンブルドア先生がハリーを？」

「その可能性はあるということよ」

もつとも、あくまでこれは可能性の話だ。

こうでない可能性のほうが高いぐらいだとは思う。

「もしダンブルドアがハリーを代表選手にしたとして、その目的はなんだ？」

「分からない。何かをやらせたいのかも知れないし、その逆に皆の視線をハリーに集めておきたいだけかもしれない。監視の為にね。こればかりはダンブルドア先生本人に聞かないとなんとも……」

私は鞆を開け、入っているありったけの缶詰を洞窟内に並べた。

「また定期的に食料を届けてあげるわ。ここは少し遠いから毎日とはいかないけどね」

「そうして貰えるだけでも十分有り難い」

私は鞆を閉じ立ち上がる。

「今日は少し有意義な話が聞けたわ。ダンブルドア先生には十分用心しようと思う。ブ

ラックも見つからないようにね」

「シリウスと呼んでくれと言っているだろうか？　パッドフットでもいいぞ」

「じゃあね、『ブラック』」

私の言葉にブラックは呆れた顔をしながらも手を振ってくれた。

私は時間を止めホグワーツ城近くまで姿現しする。

そして物陰に隠れ時間停止を解除すると城の中に入り、談話室へと向かった。

その途中の廊下でハリーとデイゴリーの声が聞こえてくる。

何かを話しているようだ。

「マーミッツシュ語だとすると水中で聞かな——」

「ホグワーツにお風呂なんて——」

「監督生用の風呂が——」

どうやら卵の謎を解くためにお風呂を探しているようだ。

確かデイゴリーは監督生だったか。

大方ハリーに監督生用の風呂の合言葉を教えているのだろう。

私はハリーたちに見つからないようにその場を通り過ぎ、談話室へと入る。

暖炉の前に置いてあるソファアに座り、先ほどブラックに言われた言葉を思い出した。

『ダンブルドアは君を見守っている』

今まで強引な手段を用いて私の能力を暴こうとしてきたことはなかった。

リドルの時も無理やり仮面を剥ぐことも出来たはずだ。

賢者の石の時も秘密の部屋の時も、追及しようと思えばいくらでも追及できた。

だが、それをしなかった。

勿論、全ては杞憂かもしれない。

ただ私の行動に翻弄されている老いぼれかもしれない。

そして私の頭の中に最悪の組み合わせが浮かび上がる。

もしムーディ先生が死喰い人で、ダンブルドア先生がそのことに気が付いていたとしたら。

ヴォルデモートがハリーを狙っていることを分かっている、敢えて差し出すような真似をしているのだとしたら。

意図的にゴブレットの警戒を緩め、死喰い人にハリーの名前を入れさせ、ハリーをヴォルデモートのところに誘導する。

いや、これはないだろう。

第一ダンブルドア先生がそれをする理由が思いつかない。

もしダンブルドア先生自身がハリーを代表選手にしたのだとしても、それはきつと

ヴォルデモートと戦う為の準備なのだ。

私は軽く伸びをすると女子寮に上がる。

第二の課題まであと数週間。

準備は整ってきている。

私は鞆をベッドの下に滑り込ませ、鞆の時間を止めるとベッドに入った。

そして数分もしないうちに私は睡魔に負け、目を閉じ夢の世界へ落ちていった。

第二の課題とか、玉座とか、靴下とか

第二の課題当日。

私は大広間で朝食を取っていた。

懐中時計は現在午前の9時を指している。

食べてすぐ泳ぐのはどうかとも思うが、まあいいだろう。

お腹が空いて動けないよりかはいくらかマシだ。

クロワッサンをもさもさとしながら、私は懐中時計をポケットに仕舞い直す。

そしてお腹も膨れたところでグリフィンドールのテーブルから立ち上がった。

「やあ、咲夜。ハリーを見なかったか？」

私が大広間を出ようとするとデイゴリーが話しかけてくる。

「どうやら先ほどからハリーを探しているようだった。」

「朝はまだ見ていないけど……まだ降りてきてないの？」

「どこにいるか分からないんだ。もしまだ談話室で寝ているとしたら拙いことになる。」

競技に遅刻というのはどうもね」

そうか、もしハリーの大切な人がロンで、クラムの大切な人がハーマイオニーだった

場合、ハリーの助っ人はデイゴリーしかいなくなるのか。

「流石にハリーが競技をすつぽかすということはないと思うけど……随分と魔法を教え込んだんでしよう?」

「ああ、だがハリーが教えた術を使いこなせるかと言われると……少しね。時間もそんなになかったし」

デイゴリーは困ったように頭を掻いた。

「取り敢えず私は競技場の方へ向かうわ。ハリーのことは頼んだわよ」

私はデイゴリーと別れて湖の方へと向かう。

湖には大きな観客席が設けられており、既に多くの観客が詰め掛けていた。

私は審査員席へと近づく。

確か選手はそこに集合となっていたはずだ。

「やあやあ! 咲夜! 今回も期待しているよ?」

バグマン氏が声を上げ私に向けて手を振っている。

その近くにはクラムとデラクルルの姿があった。

クラムは既に水泳パンツ一丁だ。

デラクルルは寒そうにローブで体を包んでいるが、その下は水着なのだろう。

そこに制服でローブ姿の私が並ぶ。

その光景が少し異様なのだろう。

観客席からはざわざわと疑問の声が上がっていた。

私は懐中時計を取り出し時間を確認する。

現在の時刻は9時20分。

今のところハリーは現れていない。

審査員席にいるマダム・マクシームやカルカロフの表情からして、2人はハリーが来ないものだと思っっているのだろう。

私はローブを脱ぎ鞆の中に入れる。

そして鞆を制服のポケットに突っ込んだ。

「到着……しました……」

あと1分もしないうちに競技が始まるというところでハリーが審査員席に駆け寄ってくる。

あの急ぎようと制服姿を見る限り、どうやら寝坊したようだ。

バグマン氏は湖岸に沿って3メートル間隔に選手を立たせる。

「さて、全ての選手の準備が整いました。第二の課題はわたしのホイッスルを合図に始まります。果たして選手たちはきっちり1時間のうちに奪われたものを取り戻すことができるのでしょうか！ では、1、2の……3！」

ビーツ！ つとバグマン氏はホイッスルを鳴らす。

その瞬間に選手たちが水の中に入る準備を始めた。

私は服に防水呪文と防寒呪文を、頭に泡頭呪文を掛ける。

そしてそのまま空を飛ぶ要領で水の中へと飛び込んだ。

はつきり言つて空を飛ぶのも水の中を泳ぐのも原理は変わらない。

抵抗の違いや圧力の違い、酸素の有る無しといった違いはあるが、魔法を使えば些細な問題だった。

私は生きた魚雷のような速度で水中を進んでいく。

制限時間内に人質を助けられたいのだ。

私は全神経を集中させて水中人の歌が聞こえないか探る。

途中水魔が私の前を横切ったが、物凄い勢いで進む私の頭とぶつかり気絶して湖面へと浮かんでいった。

開始10分もしないうちに私の耳は水中人の歌を捉えた。

探す時間は 1時間

取り返すべし 大切なもの……

微かに北の方角から歌が聞こえてくる。

これは案外簡単に終わってしまうかも知れない。

私が歌の聞こえてきた方向へと進むと、藻に覆われた石の住居の群れが見えてくる。どうやらアレが水中人の家のようだ。

水中人の村を私は杖を構えて横切っていく。

すると広場のような場所に出た。

水中人のコーラス隊らしき群れがそこで歌を歌っている。

私は周囲を見回し人質を探した。

右からデラクルルの妹らしき少女、ハーマイオニー、そしてロン。

ということは右からデラクルルの人質、クラムの人質、ハリーの人質として残るは一

番左。

「えっ？」

そこにはお嬢様が潜水服のようなものを着て、楽しそうにこちらに手を振っていた。

お嬢様の口がパクパクと大きく開く。

どうやら読唇しろと言っているらしい。

『水の中にここまで深く潜つたのは初めてだけど、案外楽しいところね。潜水服は動きにくいけど』

そう言ってお嬢様は体を捻る。

『お嬢様?! どうしてここにいらっしやるのです?!』

『アルバスから頼まれたのよ。どうやら咲夜の大切な人を沈めないといけないらしいんだけど、ハリー・ポッターは選手だし、ハーマイオニー・グレンジャーとウィーズリーの赤毛は先客がいるじゃない？　そしてマルフォイ家のガキが沈んでも貴方助けないでしょ？』

お嬢様はやれやれと言わんばかりに手を上げて肩を竦めた。

『パチエは隠居中だから無理、リドルはダンブルドアの前に顔を出せない、美鈴は論外と考えて、残るは私しかないじゃない！　そう、私が咲夜の大切な人よ！』

お嬢様はそう口で表して胸を張る。

お嬢様の潜水服の中から鈍い音が聞こえるが、どうやら潜水服の中でいつものように羽ばたこうとしたようだ。

『それはそうかも知れませんが……吸血鬼が水に潜るなんて余りにも危険な行為ですよ？』

『あら、私はこれでも楽しんでるのだけれどね』

また潜水服から鈍い音がする。

これ以上お嬢様の翼にアザができないうちに何とかしないとイケないだろう。

『今地上にお連れします。もう少しのご辛抱を』

『あら、私を無様に地上に引っ張っていく気？』

『では最高の舞台をご用意します』

私はお嬢様を繋いでいるロープを切り、お嬢様を自由にする。

そしてお嬢様の手を取った。

『少し位置を調整します。それと、この潜水服は少々不格好ですね』

私はお嬢様が着ている潜水服に目くらましの呪文を掛ける。

すると潜水服だけが透明になり、いつものお嬢様の恰好になった。

もつとも、実際に潜水服が無くなったわけではないので、翼は窮屈そうに背中にへば

りついているし、何より空気の層を纏ったような姿になっているが。

私はお嬢様の手を引いて水中を移動する。

そして観客席と審査員席の位置を確認すると、杖に魔力を籠め始めた。

『やるからにはもつとパーっとやりなさい。ほら』

お嬢様が魔力を籠めていた杖に触れる。

次の瞬間物凄い大量の魔力が杖の中に流れ込んできた。

『流石はお嬢様です。想定以上に華やかな物になるでしょう』

私は今や魔力の塊である真紅の杖を湖底へと向ける。

そしてその魔力を全て使って変身術を湖底へと掛けた。

次の瞬間湖底の岩の1つが玉座へと変わった。

お嬢様は満足そうにそこに座る。

『これで終わり?』

『冗談を』

お嬢様が座った玉座を中心に湖底が姿を変えていく。

ゴツゴツとした石や岩は赤いカーペットとなり広がる。

そしてそのまま響きを立てて階段を作りながら上へ上へと盛り上がっていく。

その間にも玉座の周りの物質は変身を遂げていき、お嬢様の周りを装飾していった。

私はお嬢様の横に立ち制服をメイド服に変身させる。

そしてその場にあったロープを大きな日傘へと変えると、水中で広げお嬢様の上にかざした。

次第に玉座の高さは湖面を越え、水しぶきが上がる。

そのままぐんぐんと競りあがっていき、最終的には玉座から審査員席へと伸びるレッツドカーペットの敷かれた階段が出来上がった。

私はその光景に内心びっくりしている。

私一人の魔力では、玉座を用意するぐらいしかできなかつただろう。

「なんだなんだなんだー! 湖から玉座がせりあがってきました! あそこで日傘を差しているのは十六夜選手でしょうか!」

バグマン氏の実況が聞こえてくる。

お嬢様は玉座から立ち上がるのと透明な潜水服を弾き飛ばし、身軽になる。そしてゆっくりと階段を降り始めた。

私もお嬢様の後に続いて階段を下りていく。

観衆からは大喝采が、審査員席にいる校長たちも席を立ち、お嬢様を迎えた。

「今回はご協力に感謝しております。スカールレット嬢」

ダンブルドア先生がお嬢様に恭しく礼をする。

お嬢様はそれに手を上げて答えた。

「私と貴方の仲じゃない。それに愛すべき従者の晴れ舞台だしね」

お嬢様とダンブルドア先生はがっちり握手をする。

それに倣って他の審査員たちもお嬢様と握手を交わした。

パーシーだけはガチガチに緊張していたが。

バグマン氏は全ての審査員との握手が終わると同時に杖を喉に向け拡声の呪文を掛ける。

「十六夜咲夜選手がやりました！ 華やかに自らが仕える主人を連れて38分で第二の課題をクリア！ 玉座がせり出したことによつて他の選手に影響がないかだけ心配ですが、多分大丈夫でしょう！」

フリットウィック先生がそそくさと審査員席の隣に椅子とパラソルを出現させる。
お嬢様は迷うことなくその椅子に座った。

「お嬢様、私は——」

「まだ競技の途中でしよう？ 私についていなくてもいいわ」

お嬢様はペツペと手を払う。

そして何事もなかったかのように横にいるパーシーと話し始めた。

いや、あれは会話というよりかは一方的に弄っているだけだが。

「さて、十六夜選手は帰ってききましたが他の選手が上がっている様子がありません。クラム選手は変身術を用いて、デラクール選手は十六夜選手と同じく泡頭呪文、そしてポッター選手は鯉昆布を使用しています。水中での動作ではポッター選手に分があるかも知れませんね」

バグマン氏が実況を重ねていく。

変身術の魔力が切れたのか玉座はまたゆっくりと湖面へと消えていった。

私は杖から温風を出し髪を乾かすとメイド服を制服へと戻した。

お嬢様はいつの間にかパーシーの眼鏡を奪い、掛けて遊んでいる。

その様子をダンブルドア先生は笑いながら見ていた。

「おつかれー、さくっちゃんー！」

後ろから声を掛けられ私は咄嗟に振り向こうとしたが、その前に声の主は私に後ろから抱き着く。

「はー、懐かしき咲夜ちゃん」

「……美鈴さんも来ていたんですね」

私は首をギリギリまで回しその人物の顔を見る。

そこには満面の笑みの美鈴さんが立っていた。

「おぜうさまつたら酷いんですよ？ 私潜るって言うてるのに自分が潜るって言うて

聞かないの。吸血鬼に水はヤバいつちゆうねん。咲夜ちゃんもそう思うでしょ？」

「ちゆうねんって……まあ見た時には目を疑いましたか」

美鈴さんは私の脇腹を抱えてクルクルと自分ごと回り出す。

逃げようにも武人の彼女の拘束から逃げられるはずもなく、私は意味もなく回され続けた。

そして観客席の様子を見ていたが、殆どの生徒が暇を潰すように色々なことをやっている。

湖の中でのことは中継されているものとばかり考えていたが、どうやら競技が終わるまでは中での何が起こったのか分からないようだ。

私は回されながらも懐中時計を取り出し時刻を確認する。

10時20分、あと10分で競技時間は終了だ。

「よし、乾いた」

美鈴さんはようやく私を下ろしてくれた。

どうやら私自身を乾かしていたようなのだが、あまり変わった気はしない。

美鈴さんはお嬢様に近づいていくとお嬢様が掛けていたパーシーの眼鏡を奪い自分が掛ける。

パーシーはもう諦めたと言わんばかりに苦笑いを浮かべていた。

次の瞬間パシヤンと水しぶきの音が聞こえる。

私が湖面を見るとデラクールが水中人に抱えられて湖から出てきた。

急いでマダム・マクシームとマダム・ポンフリーが駆け寄り水中人からデラクールを受け取る。

そしてあっという間にデラクールは毛布で全身を包まれた。

その手際の良さといったら素直にマダム・ポンフリーに賞賛を贈りたくなるレベルである。

人を毛布で包む選手権を開催したら、間違いなく優勝出来るだろう。

マダム・マクシームが心配そうに見つめる中マダム・ポンフリーはデラクールに次々と呪文を掛けていく。

そして数十秒もしないうちにデラクルールの意識を覚醒させると元氣爆發藥を無理やりデラクルールに飲ませる。

次の瞬間デラクルールの耳から湯気が噴き出し、デラクルールは我に返ったように叫んだ。

『ガブリエル!!』

デラクルールは凄い速度で跳ね起きるともう一度湖に戻ろうとする。

そんなデラクルールをマダム・マクシームが必死に押さえつけた。

『フラァー! 戻ってはダメです! 貴方は十分頑張りました!』

『嫌よ! 嫌! ガブリエル、返事をしてガブリエル!!』

『ガブリエルなら大丈夫ですから! 貴方は大人しくしてなさい!』

デラクルールは今にも湖に飛び込んでいきそうな勢いだ。

そんなデラクルールをマダム・マクシームは襟の後ろを掴み持ち上げた。

まるで親猫が子猫でも運ぶかのようにデラクルールは簡単に持ち上がる。

マダム・マクシームの巨体だ。

デラクルールほどの人間なら持ち上げるのも容易いということだろう。

私は審査員席をチラリと見るが、美鈴さんがお嬢様で同じことをやろうとして綺麗なおデューブローを貰っていた。

「ど、ど……」

美鈴さんの口からそんな声が漏れるが、まあ彼女なら大丈夫だろう。

その様子をパーシーがおろおろとした表情で見ている。

なんというか、クラウチ氏の代理で試合の審査員になったりお嬢様に弄ばれたりと苦労が絶えない人だ。

そのうちアーサー氏のように頭部の毛が薄くならないかが心配である。

「さて！ 制限時間になりました。ですがまだクラム選手とポッター選手の姿は見えません。かなり水中で手こずっているのか、それとも人質が見つからないのか」

『ぎゃあああああ。ガブリエル！ ガブリエル！』

『駄目です、フラー！ 競技はもう終わりました！ ガブリエルは無事ですので少し大人しく……』

なんというか、あっちこっちで別のことで盛り上がっている。

観衆たちもそろそろ選手たちが上がってくると湖面を見つめている。すると湖の中から一匹のサメが飛び出した。

いや、サメではない。

頭だけをサメに変身させたクラムがハーマイオニーを手に抱えて飛び出したのだ。

クラムはそのまま2メートルほど飛ぶとドシンと湖岸に着地する。

そして頭の変身を解いた。

「大丈夫ですか？ ハームーオウンーニニ」

「けほ、うえ。……え、ええ大丈夫。ありがとうビクトール」

「クラム選手、制限時間を3分オーバーしましたが見事人質を取り戻しました！ いやはや素晴らしい！」

観客席の方から割れんばかりの拍手が聞こえてくるがクラムとハーマイオニーの耳には入っていないようだった。

すぐさまマダム・ポンフリーが飛んできて2人を毛布で包む。

これで湖から出てきていないのはハリーだけになった。

「ハリーは出てこないわね。死んだ？」

「不謹慎なこと言わないでくださいよ。美鈴さん」

いつの間に戻ってきたのか美鈴さんが私の横に立っている。

ハーマイオニーは美鈴さんの言った死という単語に敏感に反応した。

「ビクトール！ そういえばハリーは？」

「彼なら大丈夫です。ヴじに人質のいる場所にたどり着いていました」

「にしては遅いわね。やっぱり死んだ？」

「美鈴さん、不謹慎です」

「いやあお腹空いてて」

尚更アウトです。

ハーマイオニーは心配そうに湖を見つめている。

デラクルールは半ば発狂したように湖に向かって誰かの名前を叫んでいた。

その悲鳴に感化されたのかようやく眼鏡を取り戻した。パーシーが顔を真っ青にしなから席を立つ。

次の瞬間湖面にハリーの黒毛とロンの赤毛が見えた。

ロンは脇に銀色の髪の毛の少女を連れている。

歳は8歳ぐらいだろうか。

その少女を見てデラクルールの奇声が更に大きくなったので彼女の妹か何かだろう。

ハリーたちが湖岸へと歩いてくるとパーシーが心配そうな顔で3人に駆け寄る。

足が湖の水で濡れるのもお構いなしといった様子だった。

「ガブリエル！ ガブリエル！ あの子は生きてるの？ 怪我してないの？」

デラクルールが心配そうに少女を見て叫ぶ。

パーシーはロンの腕を掴み引つ張って行こうとしたが、ロンはそれを鬱陶しそうに断る。

そしてついにデラクルールはマダム・マクシームの静止を振り切って少女をしっかりと抱

きしめた。

『水魔に襲われて……私、もう駄目かと。ああ、ガブリエル。もう駄目かと……』
『何をそんなに心配してるの？ お姉ちゃん』

ガブリエルと呼ばれた少女はキョトンとした顔で姉を見ていた。

ハリーたちはいつの間にかすっ飛んできたマダム・ポンフリーに毛布で包まれている。

毛布で身動きが取れないハリーの口にマダム・ポンフリーは元氣爆發薬を飲ませた。

私は審査員席の方を見る。

ここではダンブルドア先生が水中人と何かを話していた。

どうやらダンブルドア先生はマーミッシュ語が話せるようだ。

悲鳴のような言葉で何かを言い合っている。

「どうやら、点数をつける前に協議が必要じゃな」

その言葉を聞いてマダム・ポンフリーがパーシーをロンから引き剥がしに掛かる。

普段気取ってはいるが、パーシーも弟思いのいい兄ということだろう。

パーシーが汐々審査員席に戻ると秘密会議が始まった。

何故かそこにお嬢様も参加している。

スペシャルゲスト的な扱いなのだろうか。

「生きてたか。案外丈夫だね」

美鈴さんは湖岸の様子を見ながらケラケラと笑っている。

ハリーたちは今まさにデラクルからキスを貰って顔を真っ赤にしているところだった。

「おお、情熱的！ 咲夜ちゃんもしてきたら？ あの赤毛の方の子なんて飛び上がるんじゃない？」

「冗談キツイですよ。理由もないですし」

暫くするとハリーたちも余裕が出てきたのかこちらに近づいてくる。

「お疲れ、咲夜。その様子を見ると……随分前に湖からは上がったみたいだね。そっちの人はワールドカップの時の、ええつと……」

「紅美鈴、美鈴でいいわよ」

「美鈴さん、ですわね。咲夜、君の人間はこの人なのかい？」

ハリーが美鈴さんにぺこりとお辞儀をしながら私に聞く。

私は審査員席の方を指示した。

「お嬢様が直々に来られたわ」

「え？ 吸血鬼って確か流水はアウトじゃ……」

「そこはダンブルドア先生が上手くやってくれたみたいね。まあ私も湖底で見たときは

度肝を抜かれたけど」

ハリーが審査員席の方を驚いた顔をしてみている。

お嬢様はパラソルの下で何やら意見を述べているようだった。

「ハリーは随分と遅かったけど、何かあったの？ 美鈴さんなんてもうすっかりハリーが死んだことにしていたわよ」

「ああ、うん。少しね」

ハリーは私から目を背ける。

今になって自分のやったことを後悔していると聞いた顔をしていた。

私はそんなハリーの顔から何をやったのか察する。

「もしかして人質が全員無事に助かるように湖底でずっと待ってたの？」

ギクリとハリーの肩が反応する。

なんというか、非常に分かりやすい。

美鈴さんもそんなハリーを見て苦笑いをしている。

「まあそれが吉と出るか凶と出るかは審査員次第ね」

私は審査員席をチラリと見る。

どうやら協議は終わったようだ。

全員が席に座り直し、バグマン氏だけが立っている。

「レディース&ジェントルメン！ 大変らくお待たせしました。審査結果が出ました！ 水中人の女長、マーカスが湖底でなにかあったのか仔細に話して聞かせてくれました。そこで、50点満点で各代表選手の得点を発表していききたいと思います……」

「最初に湖から姿を現したのは十六夜咲夜！ 湖の中では泡頭呪文と防水呪文、防寒呪文を使い、水中人でも追いつけないほどの速度で水中を自由自在に移動していたようです。そして最後の変身術を用いた演出。文句なしの満点！ 50点です！」

どつと観客席が沸く。

拍手や歓声が私へと飛んできた。

「次にミス・デラクル。素晴らしい泡頭呪文でしたが、途中で水魔に襲われゴールにたどり着けませんでした。得点は25点！」

スタンドから、それも主に男子から多大なる拍手が沸き起こる。

だがデラクル自身はその拍手に納得していないらしく、「本来なら0点」だと呟いていた。

「ビクトール・クラム君は変身術が中途半端でしたが、効果的なことには変わりありません。人質を連れ戻したのは2番目でした。得点は40点！」

ダムストラングの生徒が大喝采をクラムに贈る。

バグマン氏の解説は続いた。

「ハリー・ポッター君の用いた鯉昆布は特に効果が大きい。戻ってきたのは最後でしたし制限時間も大幅にオーバーしています。ですがマーカスの報告によればポッター君はミス・十六夜に続いて2番目に人質のもとへと到着したとのこと。遅れたのは自分の人質だけでなく、全部の人質を安全に戻らせようと決意した為だとのこと」

バグマン氏はカルカロフをちらりと見てから言葉が続ける。

「これこそ道徳的な力を示すものであり、満場一致で50点満点に値するとの意見が出ました。よって得点はミス・十六夜と並んで50点！」

ホグワーツの生徒がワツと歓声をハリーに贈る。

ハリーはきよとんとした顔で審査員席を見ていたが、すぐに我に返りロンと一緒に飛び跳ねた。

「やったぜハリー！ 君は結局マヌケじゃなかった。道徳的な力を見せたんだ！」

審査員席では苦しげな表情でカルカロフがお嬢様を見ている。

お嬢様はハリーの得点を聞いて満足そうに頷いた。

「ありやカルカロフを抑え込んだのはおせうさまね」

美鈴さんが隣で呟く。

私も同じことを考えていたところだ。

ハリーを満点にしようと言ったときにカルカロフだけが反対したに違いない。

だがお嬢様が脅すか何かして無理やり納得させたのだろう。

「第三の課題、最終課題は6月24日の夕暮れ時に行われます。代表選手はその1か月前に課題の内容を知らされることになります。諸君、代表選手の応援ありがとう！」

バグマン氏はそこで言葉を切ると審査員席と観客席に軽く頭を下げる。

「どうやら第二の課題はこれで終わりのようだ。」

私は観衆に大きく手を振ると美鈴さんと共にお嬢様のもとへと向かう。

お嬢様は軽く伸びをすると椅子から立ち上がった。

「お疲れ、咲夜。今のところ50点50点の100点満点じゃない」

「恐れ入ります」

「優勝は出来そう?」

「勿論です。優勝しますわ」

私はお嬢様に頭を下げる。

その様子を見てお嬢様は満足そうに頷いた。

「さて……と。美鈴、帰るわよ」

「お送りしましょうか?」

「大丈夫よ。来た方法で帰るわ」

お嬢様はポケットから汽車のチケットを取り出す。

どうやらホグワーツ特急で帰る予定のようだ。

「あれ？ おぜうさま。そのチケット一枚しかないように見えるんですが……気のせいですよ？」

「交通費が出るわけないでしょう？ 行きは出してあげたんだから帰りは走って帰りなさい」

「マジっすか!？」

おぜうさま、と美鈴さんは日傘を持ってお嬢様に駆け寄っていく。

「あ、そうだ咲夜。優勝杯は偽物とすり替えてでも持つてくること。いいわね？」

お嬢様は私にそう言い残すとホグズミード村の方に美鈴さんを連れて歩いていった。

どうやら優勝杯を飾りたいというのは冗談や比喻ではなかったらしい。

これは第三の課題までに双子の呪文の復習をしておかなければならぬだろう。

私はお嬢様を見送るとハリーたちと合流する。

なんの対策もしていなかったせいか、ハリーたちは全身びしょ濡れだった。

「お疲れさま。3人とも」

私が声を掛けると3人は振り返る。

「お嬢様についていなくていいのか？」

「今日は美鈴さんがいるからね」

「咲夜のお嬢様って吸血鬼でしょう？　水の中に沈められて大丈夫だったの？」

ハーマイオニーが心配そうな声を出した。

「潜水服のようなものを着ていたから取り敢えず大丈夫よ。それと水中で生きてはいけないのは人間も同じでしょう？　貴方たちこそ大丈夫だったの？」

「ダンブルドアが眠りの魔法をかけたの。水から上がった時に目が覚めるようになってると説明を受けたわ。……そういえばハリー、鯰昆布なんてどこで手に入れたの？　あれって凄く貴重だと思うんだけど。セドリックが泡頭呪文を教えてくれたじゃない」

「うん、実は今朝寝坊して……ドビーが起こしに来てくれたんだけどその時に貰ったんだよ。泡頭呪文は……ほら、あんまり成功率高くなかっただろう？」

どうやら当初はハリーも泡頭呪文を使う予定だったようだ。

「そう言えば咲夜は泡頭呪文を使っただよね。移動はどうしていたの？」

ハリーが誤魔化そうと私に話を振る。

私は飛行能力のことは言わずに呼び寄せ呪文で自らを引っ張ったと説明した。

「なるほど、呼び寄せ呪文か……ハリー、湖岸から僕を呼び寄せればよかったんだよ！」

ロンのそんな呑気な言葉に私たちはため息をついた。

「そんな簡単に競技が終わるなら誰も苦労しないさ。ロンだって水に沈まなくてもよかった」

「冗談だよ。流石の僕だつてそれぐらゐは理解してるさ」

私は3人と共に城の中へと入る。

あと残すは第三の課題だけだ。

3月に入ると寒い日も少なくなり、随分と過ごしやすくなった。

私はあれから毎週1週間分の食料を持ってブラックのもとを訪れている。

ブラックは私の姿が誰かに見られていないかを心配していたようだが、私に限ってその心配はなかった。

何回目かの訪問の時、ぼつりとブラックが思い出したかのように言う。

「そうだ、ハリーと少し話したいことがあるんだ」

ブラックは缶詰を開けながらこちらを向いた。

どうやら連れてくる機会がないかと窺っているようだ。

「それなら明日がホグズミード村行きよ」

「それ丁度いい。是非とも3人を連れてきてくれ」

「それは別にいいけど……。じゃあ大人しく待つてなさいよ。迎えに行こうとしてすれ

「違いましたなんて笑えないわ」

「勿論だとも。ついでにもう少し何か味気のあるものがあると嬉しい」

「缶詰の Pasta は嫌い？」

「コーンビーフは上手いんだが、所詮は缶詰だ」

ブラックは肩を竦める。

なんとも贅沢な犬だ。

「あまり文句言うとドッグフード持ってくるわよ。あれなら日持ちするし」

「んな殺生な！」

「流石に冗談よ。わかった。チキンでいいかしら」

私はブラックに軽く手を振ると時間を止め姿くらましする。

そしてホグワーツ城の中で姿現しすると物陰に隠れ時間停止を解除した。

この時間ならハリーたちは談話室にいるだろうか。

私は太った婦人の肖像画を開け談話室へと入る。

私の予想通りハリーたちは談話室の端にいた。

3人で固まってヒソヒソと何かを話している。

「ちよつといいかしらっ？」

私が声を掛けるとビクンとハリーたちの肩がはねた。

どうやら聞かれたくない話をしていたらしい。

「ど、どう、どうし——なんだ咲夜か」

ロンが安心したようにため息をつく。

私はロンの額に1発デコピンを食らわせる。

バチンという音が鳴りロンが後ろ向きに倒れた。

「なんだとはなによ」

「ぶつことないだろ!? いってー……デコピンの威力じゃないよ、まったく……」

ロンは頭を押さえて起き上がる。

だが自業自得だろう。

「なんの話をしていたの？ 随分と話し込んでいるようだったけど」

私がハリーに行くくとハリーは少し迷ったような顔をした。

話していいものかと悩んでいるのだろう。

「まあ言いたくないならいいわ。明日はホグズミード行きだけど、少しいいかしら」

私は早速本題に入る。

ロンはそれは困ると言わんばかりに声を上げた。

「明日はゾンコの悪戯専門店で色々と買い込まないといけないんだ。咲夜が付いてくるのは勝手だけど用事には付き合ってもらえないかもな」

ロンは頭を摩りながらそう言う。

ハリーもその意見に同意しているようだった。

「そう、まあそれなら無理にとは言わないわ。パッドフットにはハリーは忙しそうって伝えておくわね」

ハリーは私の言葉に目を輝かせる。

そして先ほどよりもヒソヒソ声になって私に囁いた。

「シリウスが近くまで来てるの？」

「少し前からホグズミード村の外れの山の中にいるわ。明日案内してあげる。それと、パッドフットの名前は出さない方がいいわよ」

ハリーはロンとハーマイオニーと顔を見合わせる。

そしてコクリと頷いた。

「わかった。明日案内してよ」

「ええ。じゃあ明日の朝。ホグワーツの玄関前に集合でいいわね」

私は約束を取り付けると暖炉の前のソファーに移動する。

そして鞆から本を取り出し読み始めた。

翌日私はホグズミード村に行く生徒に交じり玄関ホールへと来ていた。既にハリーたちとは合流している。

「少し寄り道をしてもいいかい？ ドビーにプレゼントを買ってあげたいんだ。鯉昆布のお礼に」

「ええ、勿論大丈夫よ。別に時間を指定して約束しているわけじゃないしね」

ハリーの提案でブラックの隠れ家に行く前にグラドラグス・魔法ファッション店に寄り道することとなった。

ロンのタキシードの素材を買ったのもこの店だ。

「靴下を集めているみたいでさ。いいのがあるといいんだけど……」

「それなら心配することはないみたいよ」

ハーマイオニーが店内の一角を指さす。

そこには多種多様の靴下が並んでいる。

「思いつきりケバケバしいのを買ってやろうぜ。やつこさんの方が喜ぶだろう」

ロンが点滅している靴下を持ち上げた。

確かにドビーは普通の靴下よりもそっちの方を好むだろう。

私は手元にある紫色の靴下を手取る。

一瞬。パチュリー様にどうかと思ったが、上品さに欠けるので却下した。

ドビーのプレゼント選びが終わると私たちはブラックのいる隠れ家へと足を向ける。山の麓に向かい、そのまま岩だらけの山道へと入っていく。

山道は結構険しく、私以外の3人はすぐに息を切らしてしまった。

「まったく、だらしないわね」

「なんで……さ、さくやは……息ひとつ切らしてないんだよ……」

ロンが喘ぎ喘ぎに言った。

「メイドだから？」

「それは理由にはなっていないわ」

ロンよりもハーマイオニーのほうが元気な気がする。

案外ハーマイオニーは家族と共に山登りなどに出かけるのかも知れない。

そして一番キツそうなのはハリーだ。

大きく息を切らし肩で呼吸をしている。

「大丈夫。あと10分もしないうちに到着するわ」

私がそう告げると3人の表情が少し明るくなった。

私たちはその後も曲がりくねった険しい山道をひたすら歩いて登っていく。

そして20分もしないうちにブラックの隠れ家へと到着した。

「いらっしやい。ようこそ我が家へ」

「家って呼べるのかしらね」

「住めば都さ」

ブラックは私たち4人を招き入れる。

私は靴からローストチキンを取り出すとブラックに与えた。

「ありがたい。本当に咲夜に見つけてもらえて助かった。ここに来た当初はネズミばかり食べていたからね」

「それって大丈夫なの？」

ハリーが心配そうな顔でブラックを見る。

ブラックは洞窟の隅に積まれている空き缶を指さした。

「1月の下旬ごろだったか。ホグズミード村で咲夜に会ってね。去年と同じように食料を届けてもらっている。といっても今回は隠れているところが遠く目に付きやすいから缶詰だね」

「そんな！ シリウスがここにいと知ってるならそう言ってよ！」

「言っただろうなのよ？ どうせホグズミード村行きの時しか会えないでしょうに」

ハリーが抗議の声を上げる。

「それに1月の下旬っていったら貴方方の謎を解くのに必死だったじゃない」

「ちよつと待って。その言い方から考えると、咲夜は少なくともホグズミード村行き以

外の日にここに来てゐるってこと?」

「ああ、毎週のように食料を届けてもらっている」

ブラックがチキンを齧りながら言った。

ハーマイオニーは信じられないといった顔をしているが、反対にロンは目を輝かせている。

「すげえや咲夜。姿現しが使えるのか?」

「ロン、何度も言わせないで。 Hogワーツの敷地内で姿現しは出来ないわ」

「だが咲夜はいつも姿現しでここから出ていくぞ?」

ハリーたちとブラックは同時にこちらを見る。

私は時間を止めるとバックビークの方へと歩き時間停止を解除した。

「ほら……消えて、そこに!」

ロンが大声を上げる。

「確かに姿現しだ! すっげえや咲夜。第二の課題も滅茶苦茶やってみただし、同学年とは思えないよ」

「でも姿現しするときにはもつと大きな音がするはずよ」

「そんなことはどうでもいいでしょう? ブラック、ハリーと話があるのよね」

私の言葉を聞いてハリーはブラックの方を見る。

「シリウスおじさん、どうしてこんなところにいるの？」

「後见人としての役目を果たしている。ああ、なに。私のことは心配しなくていい。愛くるしい野良犬のふりをしているから」

ブラックは食べ終わったチキンの骨をバクバクに投げた。

「もつとマシな物食べさせなさいよ。バクバクにはこれね」

私は鞆から大きな豚の生肉を取り出す。

「私のと大きさが違う」

「貴方とこの鳥じゃ大きさが違う」

私はブラックの言葉を受け流した。

ブラックはガシガシと頭を搔くとハリーに向き直る。

「私は現場にいたいだけだ。君が最後にくれた手紙、ますます臭くなっているとだけは言っておこう」

そこから先はクラウチ氏と闇の印に関する話題へとシフトしていった。

私はここで待っていてもよかったが、ホッグズ・ヘッドで待つことにする。

私はブラックとハリーに一声ずつかけると時間を止めてホッグズ・ヘッドの店の裏に姿現した。

そしてそのまま人目のない場所まで移動すると時間停止を解除する。

私は店の戸を開け中に入った。

「いつもの」

店主に一言注文を告げると店主はガンツとブランデーの入ったボトルとグラスをカウンターへと置く。

私はボトルからブランデーをグラスに注ぎ、リドルの日記を取り出した。

『そつちで何か変わったことはない？ この前お嬢様が学校に来られたけど、何か情報が漏れてたりはしないわよね』

『ああ、大丈夫だ。ダンブルドアからは書面で協力の依頼が届いた。お嬢様と美鈴は争うようにホグワーツにすつ飛んでいったよ。まったくあの2人の親バカには困ったものだ。……クイレルに関しては上手くやっているらしい。これは新しい情報だが、どうやらホグワーツにヴォルデモートの手の者が紛れ込んでいるようだ』

『スパイがいるというわけではなくて？』

『ああ、スパイではない。何か不自然な行動を取った人物はいなかったかい？』
私はグラスを右手で回す。

芳醇なブドウの香りが私の鼻を撫でた。

『1人いるわね。ムーディ先生よ。アラスター・ムーディ。元闇祓いね』

『根拠は何か？』

『ハリーの名前をゴブレットに入れたのはムーディ先生よ。なんの目的があつてそうしているかは分からないけど』

『ハリー・ポッターの名前をゴブレットに……確かに怪しいな。クイレルは自由に連絡が取れるような環境にいない。もし直接あつたら時間を止めてでもよく話し合つてくれ。認識の食い違いがあつては困る』

『分かつた。気を付けるわ。それと……少し気になることがあるの。調べてもらえないかしら』

私は万年筆を一度止め、リドルの言葉を待った。

『いいよ。なんだい?』

『アリアナという女性を調べてもらえないかしら。多分何かをしているか、その親族が有名な人かだとは思うんだけど……』

『アリアナだね。わかつた』

私はパタンと日記帳を閉じる。

あとはハリーたちが戻ってくるのを待つだけだ。

私はゆつくりとお酒を楽しんだ。

5月も終わりに差し掛かった変身術の授業の後、私とハリーはマクゴナガル先生に呼び止められる。

「ポッター、十六夜。今夜の9時にクイディッチ競技場に行きなさい。バグマンさんから第三の課題の説明があります」

そこで私とハリーは夜の8時半に談話室を後にし階段を下りていく。

その途中でハリーが私に聞いた。

「今度は何が来ると思う?」

「そうね、デラクルは地下トンネルのことばかり話していたわよ。宝探しをやらされると思っているみたいね」

「それならハグリッドからニフラーを借りれば早そうだ」

私たちは玄関ホールを抜けるとクイディッチの競技場の方へと歩いていく。

スタンドの隙間を通じてグラウンドに出ると、そこには背の低い生垣のようなものが植わっていた。

その生垣は四方八方に入り組んでおり、まさに迷路でも作ろうかとしているようだ。

ハリーは無残に姿を変えたグラウンドを見て口をパクパクとさせている。

「はい、代表選手の諸君。さあ、どうかね?」

ピッチの真ん中に立っていたバグマン氏が私たちへと向けて声を掛けた。

傍らには既にデラクールとクラムも立っている。

デラクールはハリーの姿を捉えるとにこやかに笑いかけた。

どうやら第二の課題の時の恩をまだ持っているようだ。

「しつかり育っているだろう？ あと一か月もすればハグリッドが6メートルほどの高さにしてくれるはずだ。ああ、ハリー、そんな顔をしないでくれ。心配ご無用。課題が終わればクイディッチのピッチは元通りにして返すよ。さて、私たちがここに何を作っているか、想像はできるかね？」

「見たまんまじゃない。迷路でしょ？」

「その通り！」

私がそう答えるとバグマン氏が声を張り上げた。

「迷路だ。第三の課題は、極めて明快だ。迷路の中心に三校対抗優勝杯が置かれる。最初にその優勝杯に触れた者が満点だ」

「迷路をあやく抜けるだけですか？」

チツチツチ、とバグマン氏は指を振る。

「障害物がある。ハグリッドが色んな生き物を置く。それに、いろいろ呪いを破らないと進めないようになっている。まあ、そんなところだ」

「ちよつと待つてください。優勝杯は1つしかないのですよね？　そして最初に触れた選手が満点と言うことは他の選手は？　今までの課題が無駄なことになりませんか？」

私がそう指摘すると、バグマン氏は首を振った。

「勿論、最初に杯に触ったものが優勝というのは変わらないが、第一、第二と課題をこなした意味はある。今までで獲得した点数が多い者から順にスタートして迷路に入る。まず、100点の十六夜君、その次にハリー、クラム、デラクルの順番だ。全員に優勝のチャンスはあるが、それは頑張り次第と言えるだろう」

まあそれなら文句はない。

誰よりも早くスタートできるということは、誰よりも早く優勝杯にたどり着くことができるということだ。

「よろしい、質問がなければ城に戻るとしよう。ここは少し冷えるようだ……」

私は育ちかけの生垣をチラリと見る。

そして見通せる分だけ記憶すると城へと足を向けた。

第三の課題は迷路。

迷路であるならこれ以上ないぐらい勝算がある。

時間を止めてゆっくりと攻略すればいいのだ。

だが、ダンブルドア先生がどのような妨害をしてくるかはわからない。もしかしたらムーディ先生も何か手を出してくるかもしれない。

十分に用心して課題に臨んだ方がいいだろう。

途中で私は他の代表選手と別れると、談話室へと上がる。

そして靴から紅茶とリドルの日記を取り出した。

『課題の内容が分かったわ。迷路よ。ようは障害物走のようなものね』

『大の得意分野じゃないか。負ける気がしないだろう？』

『それでもないわ。得意分野だからこそ警戒が必要だと思うし』

『まあ用心に越したことはないだろう』

『お嬢様に伝えておいて。必ず優勝するって』

『第三の課題も見に行きみたいだよ。うちのお嬢様は』

『それはいいこと聞いたわ』

私はぱたりと日記帳を閉じる。

そしてそのまま女子寮へと上がるとベッドへと潜り込んだ。

校長室とか、第三の課題とか、復活とか

6月24日の朝。

私は大広間で朝食を取っていた。

スライスした食パンに目玉焼きを載せる。

そして軽く塩を一振り。

昔、日本のアニメ映画でこのような食べ方をしていたのを思い出し、実践してみたが意外と美味しい。

目玉焼きだけじゃ味が物足りないかと思ったら、卵の独特のうま味を塩が引き立てている味を出している。

お嬢様に出せるような料理ではないが、時間のない時の朝食などにはいいだろう。

向かい側ではハリリーたちが日刊予言者新聞を顔を突き合わせて読んでいる。

どうやらハリリーの事が1面に載っているようだ。

表情から察するにあまりいいことが書いてあったとは思えないが。

突然ハーマイオニーは何かを思いついたのか飛ぶように大広間を出て行ってしまふ。

大方リータ・スキーターがらみだろう。

「あと10分で魔法史の試験だぞ!? おったまげー。試験に遅れるかも知れないのに、それでも行くなんてよっぽどのスキーターの奴を嫌っているんだな」

ロンが目を丸くしてハーマイオニーを見送る。

「どうやら私の予想は当たっていたようだった。」

「そういえばハリー。ビンズのクラスでどうやって時間を潰すつもりだ? 咲夜みたいに一緒に試験を受けるか?」

ロンが私を見ながら言う。

「そう、今の時期はまさに期末試験真つ盛りだ。」

来年にふくろう試験を控えているだけあり、今年の期末試験は皆気合が入っている。

そして代表選手は期末試験が免除されていたが、私は試験中にかするわけでもないのと一緒に試験を受けているのだ。

ハリーは勉強する気など起きないのか試験中は教室の隅で第三の課題で使えそうな呪文を探している。

ハリーはロンと私をチラリと見ると、「僕はパス」とロンに言った。

私はパンを食べ終り席を立とうとする。

するとマクゴナガル先生がグリフィンドールのテーブル沿いに私たちに近づいてきた。

「おふたりとも、代表選手は朝食後に大広間の脇にある小部屋に集合です」
「でも、競技は今夜です！」

ハリーが先生が何か勘違いをしているのではないかと言った表情で言葉を返した。
「それは分かっています。ポッター」

「先生、あと5分で魔法史の期末試験なのですが」

「ミス・十六夜。代表選手は期末試験を免除されると最初に伝えたはずですが？」

マクゴナガル先生が不思議そうな顔をして私を見る。

先生のその言葉に私ではなくロンが答えた。

「咲夜は暇つぶしに今までのテストを全部受けています」

「そうですか……折角スカーレット嬢が来ているのですが」

「行きます！」

私が余りにも早く即答した為か、マクゴナガル先生は少し後ろにふらついた。

お嬢様と期末試験を天秤にかけるなどとてもない。

マクゴナガル先生はなんとか持ち直すと言葉を続ける。

「よいですか、代表選手の家族が招待されて最終課題の観戦に來ています。皆さんにご挨拶する機会だというだけです。早く終われば試験にも途中から参加するとよいでしょう」

マクゴナガル先生は立ち去っていく。

私はハリーのほうを見るが、ハリーは唾然とした顔で固まっていた。

「まさか、マクゴナガル先生、ダーズリーたちが来ると思っているんじゃないだろうか？」

「さあ？ あ、ハリー、僕急がなくちゃ。ピンズのに遅れちゃう！」

じゃあね、とロンは大広間から走り去っていく。

ハリーは何やらモヤモヤとした顔で朝食を再開させた。

「ダーズリーの噂はよく聞くけど、そんなに酷いの？」

「あの連中は自分たちがまともであることに誇りを持っているんだよ」

だから魔法使いの祭典にはこない、そういうことらしい。

ハリーからダーズリー一家に関していい噂を聞いたことがないので、あまり良い家族とは言えないのだろう。

「取り敢えず私はお嬢様が待っているから行くけど、ハリーはどうするの？ 1人で部屋に入る？」

「それも嫌だな。一緒に行くよ」

ハリーは嫌々といった顔でテーブルから立ち上がる。

私はそんなハリーの手を掴むと引きずるように部屋を目指した。

部屋に入ると中央のソファーにお嬢様が座っているのが見えた。傍らには美鈴さんを引き連れている。

「咲夜、首尾はどう？」

お嬢様がすつと椅子から立ち上がる。

美鈴さんはワールドカップの時に着てきたようなキツチリとしたスーツを身に付けていた。

「上々です。お嬢様」

私はお嬢様に挨拶をしてから部屋の中を見回す。

クラムは父親と母親らしき人物とブルガリア語で課題に関することを話している。

部屋の反対側ではデラクールが母親らしき人と妹と共にホグワーツでの生活の話をつらな語で話していた。

そしてハリーの家族はというとロンの母親のモリーさんと兄のビルが来ていた。

きつとマクゴナガル先生かダンブルドア先生が計らってくれたのだろう。

ハリーにとってはロンの家族こそ本当の家族のようなものだ。

そうしているとお嬢様が私のほうにより耳元に近づく。

そして若干背伸びして私の耳に囁いた。

「今日はどんな手を使ってもいいわ。少しでも早く優勝杯に触れなさい。双子の呪文で

偽物を作るのも忘れるんじゃないわよ」

「心得ております」

私が頷くとお嬢様は満足そうに頭を撫でた。

若干背伸びしながらだが。

「おせうさま撫でにくそうですね。どれ、私がちよつとお手伝いを」

美鈴さんがお嬢様の脇を掴んで自分の胸元まで持ち上げた。

「ちよー！ 美鈴、下ろしなさい！ そこまで小さくないわ。下ろせて言ってるでしょうがッ!!」

お嬢様の後ろ蹴りが美鈴さんの顎にヒットする。

その威力は凄まじく美鈴さんはそのまま後ろに吹き飛ばされると掛けてある肖像画の1つを突き破り壁に頭から刺さった。

部屋中が揺れあたりに埃が舞う。

流石に全員が何事かとこちらを見ていた。

「お嬢様、お怪我はございませんか？」

私はお嬢様の着ている服についた埃を丁寧に払う。

ハリーは何事かと美鈴さんに駆け寄った。

「これ……死んでない、ですよね？」

「大丈夫よ。門番だし」

「美鈴さんですし」

私とお嬢様は口々に言う。

ハリーはそういう問題じゃないだろうとあたふたしていた。

「ほへふはは、はへへふははひっへ」

美鈴さんは壁から頭を引っかくと何か抗議しているようだったが、顎が外れているので何を言っているか全然分からない。

美鈴さんは自分の顎を叩きはめると改めて言った。

「おぜうさま、学校で暴れちゃ駄目ですよ？ ほらこの肖像画とかとつても高そうですし。あー私しーらない！」

美鈴さんは手を後ろで組むと口笛を吹き始める。

「部屋にいる殆どの人は、壁や肖像画よりも美鈴さんに怪我がないのかが気になるようだった。」

「咲夜」

「はい」

私はお嬢様の言葉の意味を理解し時間を止める。

そして部屋の壁や肖像画に修復呪文を掛け、元に戻すと時間停止を解除した。

「あら、美鈴。何も壊れていないようだけど。どこの何が高そうだった？」

美鈴さんはぐるりと頭を回し壁を確認する。

そしてため息を一つついた。

「直ればいいってもものでもないでしょうに……あ、咲夜ちゃん私の服も綺麗にしてくれない？」

「しなくていいわよ」

「してください！　お願いします！」

美鈴さんが私に抱き着いてくる。

流石にウザったいので美鈴さんに杖を向けた。

「スコージファイ！」

一瞬にして美鈴さんの服についていた壁の一部や埃が綺麗になった。

「サンクスさくつちゃん。よっ！　我らがメイド長」

美鈴さんは私の手を掴み上下にブンブンと振った。

「えっと、大丈夫ですか？　美鈴さん」

ハリーが恐る恐る美鈴さんに尋ねる。

美鈴さんはピンと背筋を伸ばした。

「ええ、大丈夫です。これでも丈夫なんですよ？」

美鈴さんは何処からともなくクナイのようなものを取り出すと手に突き刺す。

クナイは深々と美鈴さんの手の平を貫き地面に血を滴らせた。

デラクールとその妹が小さく悲鳴を上げる。

ハリーはその光景に目が釘付けになっていた。

モリーさんが慌ててこちらに駆けてくるのが見える。

「え？ 美鈴さん一体何を——」

ハリーはどうしていいかと動揺しているように美鈴さんの前であたふたとした。

次の瞬間美鈴さんはそんな反応が面白いというようにカラカラと笑う。

そして刺さっているクナイを引き抜いた。

一瞬クナイの軌道に沿うように血のアーチが出来たがまるで逆再生でも見ているかのように美鈴さんの傷は塞がる。

美鈴さんは手とクナイについた血をハンカチで拭くとハリーに向けて手を伸ばした。

「ほら、もう治ってる。私たち妖怪なんてこんなもんですよ」

「こら、美鈴さん。床が血で汚れたじゃないですか。これでも毎日屋敷しもべ妖精がですすね……」

私は美鈴さんに文句を言いながら杖を床に向け血を綺麗にする。

美鈴さんはタハハと頭を掻いた。

「さて、校内を少し歩きましょうか。咲夜。案内は頼むわよ」

「かしこまりました」

お嬢様はそのまま大広間の方へと歩いていく。

そのあとをすぐに美鈴さんが追った。

「ああいう方たちなのよ。気にしないで」

私は軽くフォローを入れるとお嬢様の後を追う。

お嬢様は大広間のテーブルに朝食として置いてあるリンゴを一つ掴むと私のほうへと投げた。

私は時間を止めそのリンゴを剥き8等分に切ると皿の上に盛り付け果物用のフォークを一つつける。

そして時間停止を解除しお嬢様の方へとリンゴを差し出した。

「ありがとう」

お嬢様は歩きながらリンゴを食べ始める。

美鈴さんはテーブルにあるリンゴをそのまま丸かじりした。

「んで、何処に向かうんです？ 校長室？」

美鈴さんはリンゴをシャクシャクと食べながらお嬢様に聞く。

「そうね、それも捨てがたいけど、個人的には秘密の部屋つてのに興味があるわ」

「ですが、あそこにあるのは蛇の死体ぐらいでして……」

「じゃあ校長室」

「かしこまりました」

私はハリーから聞いた話を頼りにガーゴイルの石像がある場所までお嬢様を案内する。

確かここで合言葉を言わなければならないらしいのだが、生憎私は合言葉を知らなかった。

「百味ビーンズ」

お嬢様がガーゴイル像に向けてお菓子の名前を言う。

するとガーゴイル像は突然生きた本物となり、ピヨンと脇へ飛びのいた。

そしてその背後にあった壁が音を立てて開いていく。

「よく合言葉を知ってましたね。おぜうさま」

美鈴さんが感心したように言う。

お嬢様は無警戒な様子でその中へと入っていった。

「夢で見たのよ。さあ、行きましよう」

壁の奥には螺旋階段があり、エスカレーターのように上へ上へと動いている。

私が先行し危険がないか確認するとお嬢様も階段へと乗った。

そのまま私たち3人は上へと運ばれていく。

そして最終的に輝くような櫛の扉にたどり着いた。

「お邪魔しまーすー！」

美鈴さんが一番にドアを掴んで中に入る。

お嬢様と私もその後が続いた。

どうやらここは校長室で間違いないようだ。

変な小物で溢れ、壁には歴代の校長の写真が掛かっている。

そして部屋には不死鳥のフォークスや組み分け帽子、グリフィンドールの剣なども置いてあった。

「小洒落た部屋ね。アルバスらしいわ」

お嬢様は机の上に置いてあった小物の一つを弄りながらぼつりと言う。

私はその言葉に反応しようと口を開きかけたがその前に違う人物の言葉が割り込んだ。

「スカレット嬢に褒められるとは光栄じゃのう」

一体いつからそこにいたのだろうか。

ダンブルドア先生は私たちの真正面にある大きな椅子に腰かけていた。

まるで1時間ほど前からそこに座っていたかのような違和感の無さである。

私は少々グクリとしたが、お嬢様は平静そのものだ。

「ええ、ここにあるやつなんか色々なものが当たり引つ込んだりしているわよ。これも魔法で動いているのでしょうか？　なんというか、万能過ぎて美しみに欠けるわね」

「ふむ、そういうものかのう」

「ええ、発達しすぎた技術というものは面白みがないわ。時計がいい例ね。クオーツの時計は確かに正確で価格も安いわ。でも、時計としての価値は機械式には敵わない。機械的な機構を用いて様々な機能を持つ複雑時計はそれだけで一つの美を持つわ」

お嬢様は小物の一つに手をかざす。

するとその小物はストーンと動きを止めた。

どうやらお嬢様がその小物が持っていた魔力を消し去ったようだ。

「少しでも前提が崩れたらストーンと、こうなってしまう」

「ふむ、そうかも知れんのう。じゃが、わしはそこまで魔法が便利なものとは思つたらんよ。したいことも満足にできぬ不完全なものじゃ」

ダンブルドア先生は何処か遠くを見るような目でそう呟いた。

その目はお嬢様が妹様のことを語る時の目に似ている。

どこか自分を責めている。

そんな目だ。

「さて、一つお聞きしてもよろしいかの？」

ダンブルドア先生はいつもの表情に戻り、お嬢様に尋ねる。

「どうしてスカーレット嬢がここにいるのかのう？」

「あら、城に招待したのは貴方じゃない。ボケるにはまだ早いわよ？」

「ふむ、もつともじゃないな。だがしかし、今生徒は試験中じゃ。なので試験が実施される教室には入らんようお願いしたい」

「そんなことぐらいは分かっているわ」

お嬢様はひらひらと手を振ると踵を返す。

美鈴さんは部屋の小物に興味津々だったが、お嬢様が部屋を出ていくと急いでついてきた。

そのまま螺旋階段を下り、ガーゴイル像の裏から廊下へと出る。

「さて、競技まではまだ時間があるけど。何をして時間を潰そうかしら」

「そうですね……ホグワーツで何か時間が潰せるようなところですよ……図書室、厨房、必要の部屋ぐらいでしょうか」

お嬢様の問いかけに私は答える。

お嬢様は少し悩んだ後私に告げた。

「ホグズミード村に行きましょう。夜まではまだ相当時間があるし競技に間に合わない

ということはないわ。美鈴、日傘」

「を？」

「ぶちのめすぞお前」

お嬢様の言葉の続きを催促した美鈴さんがお嬢様から鋭いボディブローを貰う。

美鈴さんは3メートルほど吹っ飛んだが、なんとか立て直し苦笑いを浮かべた。

「じよ、冗談ですよおぜうさま。誰もおぜうさまのローストチキンなんて見たく——
ぐうゆっ!!」

今度は頭を叩かれた。

その衝撃で凄い勢いで地面に叩きつけられたが大丈夫だろうか。

「大丈夫よ。美鈴だし」

お嬢様が私の心境を察したのかそう答えた。

「馬鹿はほつといいきましよう。咲夜」

「はっ」

私は日傘を取り出し、お嬢様を日傘の中に入れる。

そして苦しそうに呻く美鈴さんをその場に放置してホグズミード村へと向かう道を歩いた。

もつとも、美鈴さんはすぐに追いついてきたが。

三本の箒

レミリア「競技前だけあつて賑やかね」

美鈴「女将さんテキーラ3つ！」

咲夜「美鈴さん朝からお酒つて……」

悪戯専門店ゾンコ

レミリア「鼻食いつきティーカップですつて」

美鈴「クソ爆弾つてなんだろう」

咲夜「館で爆発させたら美鈴さんでも殺しますよ」

菓子店ハニーデュークス

レミリア「血の味がするペロペロ・キャンディー？」

咲夜「あ、それあんまりお嬢様の好みの味じゃなかったです」

美鈴「このゴキブリ・ゴソゴソ豆板つて——」

レミリア「貴方が1瓶全部食べるなら買ってあげてもいいわよ」

美鈴「じゃあいいです」

喫茶店マダム・パディフットの店

レミリア「私のカラーの喫茶店ね」

美鈴「あ、でも紅茶はあんまり……」

咲夜「こういうところのを紅魔館のと比べちゃ駄目です」

魔法用具店ダービッシュ&バングズ

レミリア「ガラクタ屋？」

美鈴「ジャンク屋」

咲夜「修理屋です」

スクリベンシヤフト羽ペン専門店

レミリア「そう言えば咲夜は羽ペンを使わないわよね」

咲夜「瓶に浸けるのが面倒で」

美鈴「インクの切れない羽ペンって売ってますよ？」

咲夜「羽毛が服につくので……」

グランドラグス魔法ファクション店

レミリア「普通の中からケバケバしいのまで何でもあるわね」

美鈴「魔法が切れた瞬間縫い目が全部ほどけてとかなりませんよね？」

咲夜「一部そうなりそうな商品があるのが怖いわね」

ホグズミード郵便局

レミリア「ほら、美鈴。食料が一杯よ？ どうしたの？ 食べないの？」

美鈴「あのことまだ引きずってるんですか？」
咲夜「あのフクロウはこのだったのかしら」

晩餐会に出るために私たちはホグズミード村からホグワーツへと戻る。

大広間には既に各校の生徒たちがテーブルについており、私たちは教職員用のテーブルへと座った。

「ホグワーツの料理ってどうなの？ 美味しい？」

お嬢様が目の前に現れた料理を見て私に聞く。

「そうですね。たまに私も手伝ったりすることがありますが、普通に美味しいですよ」
隣にいる美鈴さんは、美味しい美味しいと言いながら料理を食べている。

お嬢様は大きなローストビーフを自分の皿に取り食べ始めた。

「あら、普通に美味しいわね。ホグワーツでは腕のいいコックを雇っているようだよ」
私も第三の課題に向けてスタミナをつけるために軽く食事を取る。

そして皆が満足した頃を見計らって料理が皿の上から消え、ダンブルドア先生が立ち上がった。

「紳士、淑女のみなさん。あと5分も経つたらみなさんにクイディッチ競技場に行くように、わしからお願ひすることになる。三大魔法学校対抗試合、最後の課題が行われる

ためじゃ。代表選手は、バグマン氏に従って今すぐ競技場へ向かうように」

私はダンブルドア先生のそんな言葉を聞いて立ち上がる。

そしてお嬢様の方へと向いた。

「少々お使いに行つてまいります」

「ええ。行つてらっしゃい」

生徒用のテーブルを見るとハリーやクラム、デラクールも立ち上がっている。

私たちは拍手を受けながら大広間を抜け、バグマン氏のあとに続き競技場へと向かった。

クイディッチ競技場とはいうが、今やその面影は全くない。

生垣は6メートルほどまで成長しており、正面に隙間が開いている。

どうやらあれが迷路への入り口ようだ。

私たちが競技場に到着してから5分も経つとスタンドに人が入り始める。

何百人という生徒が次々に着席し、あたりは興奮した声と大勢の足音で満たされた。

私は空を見上げる。

もう既に日は落ちているのでお嬢様も日傘はいらないだろう。

しばらく経つとムーディ先生、マクゴナガル先生、フリットウィック先生、ハグリッドがグラウンドに入場してくる。

「私たちが迷路の外側を巡回します。何かに巻き込まれて助けを求めたいときは、空中に赤い火花を打ち上げなさい。私たちのうち誰かが救出します。よろしいですか？」

マクゴナガル先生の言葉に私たちは頷いた。

それを見ると先生たちはバラバラの方向へと歩き出す。

バグマン氏はその様子を見ると杖を喉に当て拡声呪文を唱える。

「レディース&ジェントルメン！ 第三の課題、そして、三大魔法学校対抗試合最後の課題がまもなく始まります！ 現在の得点状況をもう一度お知らせしましょう。1位、得点100点——十六夜咲夜選手！ ホグワーツ校！」

大歓声と拍手が競技場内に響き渡る。

「2位、得点90点——ハリー・ポッター選手！ ホグワーツ校！ 3位、得点80点——ビクトール・クラム選手！ ダームストラング専門学校！ 4位——フラー・デラクール選手！ ボーバトン・アカデミー！」

暫くすると歓声も収まり、バグマン氏は再び口を開いた。

「では……ホイッスルが鳴ったら十六夜選手が1番にスタートします」

私はその言葉を聞いて杖を抜いた。

「いち……に……さん！」

ピツという軽いホイッスルの音が聞こえ、私は全力でこの場から走り出す。

中心へと向かう道は記憶している。

「ルーモス！」

私は杖に明かりを灯し生垣の中に入っていく。

そして全員の視線が切れたところで私は時間を止めた。

「よし。これで私の勝ち」

私は走るのを止め、迷路を慎重に歩き始める。

まだ2回目のホイッスルの音は聞いていない。

ということはこのまま優勝杯にたどり着くことが出来たら私の優勝である。

私は記憶を頼りに迷路を進んでいく。

迷路内にはスクリーンや様々な魔法生物が放たれていたが、時間が止まっているのでただの障害物ではない。

というよりかは、生垣自体ただの障害物ではないのだ。

私は生垣の上まで飛ぶと空から優勝杯を探す。

すると競技場の真ん中らへんにぼっかりと開いている空間を見つけた。

「あそこね」

私はその空間へと降りる。

そこには三校対抗試合の優勝杯が置かれていた。

私はそれを確認し、手に取る。

確かに優勝杯だ。

私は時間を止めたまま優勝杯に双子の呪文を掛ける。

少々特殊な呪文が掛かっていたのか複製するのに時間が掛かったが、何とか偽物を作ることができた。

私は時間停止を解除し、本物を鞆に隠そうと手を触れる。

次の瞬間私はへその裏側のあたりが引つ張られるような感覚を受けた。

両足が地面から離れ、流石に拙いと感じた私は優勝杯から手を離そうとするが離れない。

しまった。

優勝杯はポートキーだったのだ。

私は優勝杯に引つ張られるように飛ばされる。

時間を止めようかとも思ったが、術の途中で不確定要素を混ぜ込んだら体がバラけるかも知れない。

私は何処かに足が付くのを辛抱強く待った。

次の瞬間私は何処かの地面に着地する。

私は手に持っている優勝杯を鞆に仕舞い、辺りを見渡す。

「ここは何処かしら」

あたりには草が生い茂り手入れがなされているとは思えない。

どうやらここは墓地のようだ。

右にはイチイの大木があり、その向こう側に小さな教会が見える。

私は墓の1つに目を向けた。

かなり古い墓だがしつかりとしたものだ。

しかも最近手入れがなされた形跡がある。

その墓石には『Tom Riddle』と書かれている。

「リドル……ヴォルデモートの墓？ いえ、違うわね。これはリドルの父親の墓だわ」

私は墓石に手を合わせる。

手を合わせるのは日本の仏教の文化だったか？

まあ取り敢えずリドルの父親の為に祈った。

もつとも、形だけだ。

後ろから私に接近している何者かを油断させるためである。

「誰だ？」

甲高く冷たい声が聞こえた。

私はゆっくりと後ろを振り返る。

「貴方は……ペティグリュース」

そこにはフード付きのマントをすっぽりと被っているピーター・ペティグリュースが赤子のようなものを抱えて立っていた。

その横にはクイレルの姿もある。

クイレルは私の姿を見て少し目を細めた。

「お前は……十六夜咲夜か」

ペティグリュースは私を思い出したようだ。

赤子を大事そうに抱えながら呟く。

私は何かされる前に時間を停止させた。

そしてクイレルに近づき、クイレルの時間だけを動かす。

「……ほう。時間が止められることは知っていたが、実際に体験してみると恐ろしい能力だな」

クイレルは周囲を見回す。

そして改めて私の方へと向き直った。

「十六夜君、何故君がここにいます？ というのは愚問だったな。君が優勝できないはずがない。優勝杯の偽物は残してきたか？」

「ええ、双子の呪文で増えた偽物がまだ競技場内に置いてあると思うわ。……今から何

が始まるの?」

私の問いにクイレルはペティグリユのほうをチラリと見る。

「ヴォルデモート卿が復活するのだ。こちらの予定ではハリーがここへ来る手筈だったのだが、まあそのうち来るだろう」

「じゃあその赤子は……」

「そう、力を失っているヴォルデモート卿だ。私は今年の秋にワームテールと出会いヴォルデモート卿に接触した。そして復活の計画を聞かされたのだ。クラウチの息子がムーディに成りすましホグワーツに潜伏している」

なるほど、ということはムーディ先生は今年の初めからずっと入れ替わっていたわけだ。

本物は何処にいるのだろうか。

「ヴォルデモートの復活は行えそうなの?」

「ああ、問題はない。ハリーがここに来ることができたのだが」

「取り敢えずはヴォルデモート卿の復活が最優先ね。復活して貰わないと戦争が起きないわけだし」

「ああ、全ては我らが仕えるレミリア・スカーレットの為に」

私たちは頷きあうと元の位置に戻る。

そして時間停止を解除した。

「余計なやつは殺せ」

赤子からおどろおどろしい声が聞こえてくる。

ヴォルデモート卿の指示でペティグリュウは杖を抜いた。

「アバダケダブラー！」

私は飛んでくる死の呪文を軽く避ける。

いくら即死する魔法だとしても、当たらなければ意味がない。

「まあ待てペティグリュウ。十六夜咲夜よ。我らにはやらなければならないことがある。邪魔はするなよ」

クイレルはそう言っ私を睨みつけた。

私は杖を仕舞うと一歩下がる。

ペティグリュウは迷っているようだったが、次の瞬間悩んでいる余裕がなくなった。

ハリーが偽物の優勝杯に引つ張られてここにつれてこられたのだ。

ハリーにとつたらこれ以上の地獄絵図はないだろう。

訳も分からず飛ばされて、ついた先にはペティグリュウとクイレルとヴォルデモート。

ペティグリュウは杖を私からハリーの方へと向け直し、ハリーをリドルの父親の墓石

へと縛り付ける。

そしていそいそと大鍋を用意し始めた。

大鍋には既に魔法薬が満たされており、沸騰するように泡立っている。

クイレルが鍋の下に杖を向け、鍋を火に掛けた。

「急げ」

甲高く冷たい声が聞こえてくる。

どうやらこの声はヴォルデモートのものらしい。

「準備ができました。ご主人様」

ペティグリューは赤子の状態のヴォルデモートを鍋の中に入れる。

ハリーは額が痛むのか酷く苦しそうに呻いていた。

「父親の骨、知らぬ間に与えられん。父親は息子を蘇らせん！」

クイレルがそう唱えるとハリーの足元の墓石が割れ、細かい塵が宙を飛ぶ。

そして静かに鍋の中に降り注いだ。

その瞬間鍋の中の液体は鮮やかな青色に変わる。

「しもべの肉、喜んで差し出されん。しもべはご主人様を蘇らせん」

クイレルはそう唱えた後にペティグリューの右手の先を切り落とす。

ペティグリューの右手はクルクルと宙を舞い、鍋の中に入った。

途端に鍋の中身は燃えるような赤色へと変わる。

右手を切り落とされたペティグリュウは痛そうに呻いている。

まあそれはそうだろう。

クイレルはペティグリュウの右手に杖を向け簡単な止血を施した。

「敵の血、力づくで奪われん。汝は敵を蘇らせん」

クイレルは大きな注射器を取り出すと慎重にハリリーの腕に射し、血を抜く。

なんとというか、何とも生易しい方法だった。

クイレルがハリリーの血を入れると鍋の中身は目も眩むような白色へと変わる。

私はその光景を静かに見守った。

次の瞬間白い蒸気がうねりながら立ち上がる。

そして鍋の中身は人の形を作った。

それは骸骨のように痩せ細った、背の高い男だ。

「ローブを着せろ」

クイレルは横に置いてあつたローブを手に取り、男に丁寧に着せていく。

私はその男の顔を見た。

男の顔は骸骨より白く、細長い。

そして真つ赤な不気味な目に蛇のように平たい鼻、唇の無い口。

そう、ヴォルデモートは今この時、復活を果たしたのだ。

ヴォルデモートは自らの体を確かめるように手を這わせると、ハリーを見て、次に私を見る。

クイレルは恭しく一本の杖をヴォルデモートに手渡した。

「腕を伸ばせワームテール」

その言葉にペティグリューは先のない右手を差し出したが、ヴォルデモートは反対の手を掴む。

そしてペティグリューの左手に彫られた赤い刺青のようなものを確認した。

「戻っているな。全員が、これに気が付いたはずだ。……そして今こそはつきりとするだろう」

ヴォルデモートは長細い指を刺青に押し当てる。

その瞬間赤い刺青は黒へと色を変えた。

その行為はかなりの激痛を伴うのか、ペティグリューが悲鳴を上げる。

ヴォルデモートはその悲鳴を楽しむかのようにさらに指を押し付けた。

「さて、戻る勇気のあるものは何人いるのだろうか」

ヴォルデモートはペティグリューを払いのけ、ハリーの方を見る。

その顔は復活した喜びを噛みしめているように上機嫌なものだった。

顔からはリドルの面影は感じられない。

「さて、イレギュラーがいるようだ。小娘、名をなんという」

ヴォルデモートは私に声を掛ける。

なるほど、闇の帝王と言われるだけのことはある。

声を掛けられただけで私の背筋に冷たいものが走った。

「十六夜咲夜」

「ではお前がレミリアのメイドか」

ヴォルデモートは懐かしいものを見るように私を見た。

開心術を使おうとしているようだが、私は心の時間を止め、それを阻む。

「強情なやつよ。……来たようだな」

次の瞬間ヴォルデモートの周りに次々と魔法使いが姿現して登場する。

全員がフードを被り、仮面を付けていた。

「ご主人様……ご主人様……」

死喰い人たちは恐る恐るヴォルデモートに近づき、跪いてローブの裾にキスをする。

そしてヴォルデモートを取り囲むように輪になって立った。

「よく来た、死喰い人たちよ。本当によく顔を出せたものだな」

ヴォルデモートは顔を歪ませて全員を見回す。

死喰い人たちは一斉に目を逸らした。

「お前たち全員が無傷で、魔力も失われていない。何故お前たちは私を助けに来なかった？」

ヴォルデモートは杖をふらりと上げる。

その瞬間死喰い人たちの体が強張った。

「お前たちには失望した。一度平伏せ。クルーシオ……」

ヴォルデモートは死喰い人の一人に杖を向け、磔の呪文を掛ける。

その死喰い人は地面に倒れ悲鳴を上げながらのたうち回った。

「も、もうじ……もうじわげございません。ああああああああッ!!」

その死喰い人は散々泥まみれになり、地面を転がる。

ヴォルデモートは不意に磔の呪文を解いた。

「まあよい。お前たちはこれから私も私に忠誠を誓え。使えるやつなら使つてやる。役立つはずは死ね」

ヴォルデモートはくるりとハリーの方を向く。

「私の最も忠実なる下僕は私の復活のために尽力したというのにな。それ」

ヴォルデモートが唇の無い口を歪めハリーを指さす。

死喰い人の全員の目がハリーへと向いた。

「ハリー・ポッターが楽しい楽しい私の蘇りパーティーにわざわざ参加してくれた。……拍手はどうした？」

ヴォルデモートが言うのと死喰い人全員が勢いよく手を叩きだす。

「五月蠅いッ！」

ヴォルデモートの理不尽な怒りに全員がぴたりと拍手を止めた。

「クルーシオ、苦しめ」

ヴォルデモートは杖をハリーに向け、磔の呪文を唱える。

墓場にハリーの悲鳴とヴォルデモートの笑い声が響き渡った。

「見ろ。こんなただの小僧が一度でも私より強かったなど考えられない。ただ悲鳴を上げて泣きわめくガキではないか」

ヴォルデモートは磔の呪文を解き、ハリーの縄に向かって引き裂きの呪文を掛ける。途端にハリーは地面に転がった。

ハリーは磔の呪文の痛みがまだ抜けきっていないのか苦しそうに地面でもがいている。

だがヴォルデモートはそんなことはお構いなしだった。

「杖を抜け、ハリー・ポッター。決闘のやり方は学んでいるな？ ……いつまでそこで寝ているのだ、さっさと立たんか小僧！」

ヴォルデモートが杖を向けるとハリーが達磨のように跳ね起きる。

物質操作系の魔法だろう。

「ハリー、決闘というのは儀式のようなものだ。互いに礼儀を守り、決まりに従う」
ヴォルデモートは楽しそうにハリーにそう語る。

「さあ、頭を下げる。それが礼儀だ。掟には従うものだぞ、ハリー。体を折るのだ！」
ヴォルデモートは再びハリーへと杖を向ける。

その瞬間ハリーは見えない手に押しつぶされるように体をくの字に曲げた。
死喰い人はその様子に笑い声を上げる。

「五月蠅い。お前らも礼儀を知らないと見える。黙って見ている」
ヴォルデモートが死喰い人を睨みつけると笑い声はピタリと止んだ。

「さあ、背筋を伸ばし、杖を構えろ。決闘だ」

ヴォルデモートは杖を構える。

ハリーは苦しそうに呻きながら杖を持ち上げた。

「アバダケダブラー！」

物凄い速度でヴォルデモートは杖を振るい、ハリーに死の呪文を掛ける。

ハリーも武装解除の呪文を叫んでいた。

緑と赤の閃光が空中でぶつかり合い、そしてそのまま拮抗する。

ヴォルデモートの杖とハリーの杖が一筋の閃光で繋がったのだ。

まさに刀で鏝迫り合いでもするかのようにハリーとヴォルデモートは杖を構えたまま動かない。

両者ともこの状況に困惑しているようだった。

次の瞬間ハリーが杖の繋がりを切り、必死に走り出す。

「アクシオ！ 優勝杯よ！」

そしてハリーは呼び寄せ呪文で優勝杯を引き寄せ、その場からいなくなった。

次の瞬間私は思い至る。

あれ？ 置いてかれた？

突然いなくなったハリーに死喰い人たちは困惑し、ヴォルデモートも怒りを露わにする。

そして全員が残された私のほうを向いた。

「まあよい。やつはそのうち殺す。……十六夜よ、置いてかれた気分はどうだ？」

ヴォルデモートが私に語り掛けた。

「まあ、アウエーよね。この状況的に」

全員が無言で私に杖を向ける。

そして口々に死の呪文を私に向けて放った。

私は時間を止め反対側へと回り込む。

そして時間停止を解除すると殆どの死喰い人がいきなり消えた私に驚いた。

「姿現し、ではないな。レミリアも面白い従者を持つているものだ。お前は私の味方か？ それとも敵か？」

「その2択なら敵ね」

次の瞬間ヴォルデモートの横に立っていた死喰い人の首がぽとりと落ちた。

先ほど時間を止めた際に切り落としておいたのだ。

「あら、その人形少し接合部が弱いみたいね。いい接着剤を持つてるわよ？」

ヴォルデモートは横にいる死喰い人をつまらなそうに見ると、私に向き直る。

「面白い力だ。度胸もある。私がお前の力を試してやろう。杖を抜け」

ヴォルデモートは先ほどと同じように杖を構える。

「どうやら決闘を行うらしい。」

私は優雅に一礼すると、真紅の杖を抜き放った。

「クイレル。合図をするのだ」

ヴォルデモートの言葉にクイレルはコインを一枚取り出す。

そしてそのコインを空へと弾いた。

そのコインが地面に落下し音を立てた時、ヴォルデモートの杖が動き出す。

私は杖をローブへと仕舞い込んだ。

「アバダケダブラ」

ヴォルデモートの杖から放たれた死の呪文は私に向けて直進する。

私はそれを半身で避け、ナイフを数本投擲する。

だがそのナイフはヴォルデモートに到達する前に勢いを失くし、地面へと転がった。

「ほう、決闘中に杖を仕舞うか。だが戦う気がないわけではない」

立て続けに緑色の閃光が私に迫る。

私は自分の中の時間を早め、高速で動きそのどれをも回避する。

「素質もある。動きも悪くない。ふむ、ハリーとは出来が違うな」

私は時間を止め、ナイフをヴォルデモートに投擲する。

ナイフは時間の止まった世界を進み、ヴォルデモートの首筋でピタリと動きを止めた。

時間停止を解除するとナイフはそのままヴォルデモートの首筋に突き刺さろうと動き出す。ヴォルデモートは杖を持っていない方の手でナイフを掴み取った。

「それほど能力を持っているというのに、お前はダンブルドアにつくというわけか」

「そうよ。貴方少しキモイもの」

「昔はもう少しまともだったのだが……やはり影響は出ているようだ。まあいい、敵対する者は皆殺しだ。死ね」

「貴方がね」

もつとも、私にはヴォルデモートを殺す気など更々ない。

ただ適度に煽り、敵対すればそれでいいのだ。

ヴォルデモートの杖の動きに合わせて私も杖を振るう。

「アバダケダブラ！」

私とヴォルデモートの死の呪文がぶつかり、辺りに飛び散った。

「ほう、この呪文を使いこなすか。ますます殺すしかなかったな」

「死なないし貴方には私を殺せないわ」

私の挑発にヴォルデモートはニヤリと口を歪ませる。

「それは何故だ？」

「あと3秒で私はここから消えるからよ。3、2、1」

ヴォルデモートが再び杖を振り上げた瞬間に私は時間を止める。

そして Hogwartz の校長室へと姿現しした。

一瞬体がバラけるかと思ったが、何とか私は姿現しを成功させる。

時間の止まった校長室をぐるりと見回すが、そこにはブラックの姿しかなかった。

私は時間停止を解く。

「——ッ!? ……なんだ咲夜か。君の術は校長室にまで入れるのか?」

「まあね」

私はブラックの隣に腰かける。

時間を止められるというアドバンテージがあるとはいえ、ヴォルデモートは相当手ごわい相手だと認めざるを得ないだろう。

もつとも殺してしまうことは簡単にできる。

だが分霊箱を壊さない限りヴォルデモートはいくらでも復活するのだ。

「第三の課題はどうなった? 一体競技場で何があつた?」

ブラックは私に説明を求めてきた。

私は墓場で起こったことをブラックへと説明していく。

その説明を聞いてブラックは信じられないと言った表情で頭を抱えた。

「ヴォルデモートが復活した? ハリーの血で? ……その話が本当だとしたら相当ヤバいな」

「ヤバいの?」

「ヤバい」

ヤバいらしい。

私たちはしばらく墓場で私が見たことについて話し合っていたが、不意に校長室の扉が開きダンブルドア先生と疲れ果てた表情のハリーが入ってきた。

「咲夜！」

ハリーが目を見開き叫ぶ。

その表情から察するに、どうやらハリーの中では私は死んだことになっているようだった。

「よくも置いてったわね」

「ご、ごめん。僕必死で……」

私がひと睨みするとハリーは申し訳なさそうに頭を下げた。

「咲夜よ。その話は後じゃ」

ダンブルドア先生はそう私を抑えるとブラックにムーディが偽物で、どのような目的でホグワーツに侵入していたかを話し始めた。

ハリーは今にも気絶しそうな表情で私の横に座る。

「本当にごめん。咲夜。僕は君を見捨てたようなものだ……」

ハリーはそう呟きがつくりと項垂れた。

「まあ、私は一人で帰ってこれたわけだし」

私はハリーの頭の上に手を置く。

そして優しく撫でた。

「貴方は自分のベストを尽くしたと思うわよ？」

暫くするとブラックにクラウチの息子のことを話し終えたのかダンブルドア先生がこちらへと向く。

「ハリー、迷路のポートキーに触れてから、何が起こったのか。わしは知る必要があるのじゃ」

「ダンブルドア、明日の朝まで待てませんか？」

ブラックはハリーの肩に手を置き、やや厳しい声で言う。

「今は休ませてあげましょう」

「一時的に痛みを麻痺させることはできる。深い眠りによつての。じゃが後になって感じる痛みは更に強いものになる。ハリー、話を聞かせておくれ」

そのダンブルドア先生の言葉を聞いてハリーは少しずつ墓場での出来事を話し始める。

ヴォルデモートが復活したこと。

死喰い人が集結したこと。

ヴォルデモートと杖が繋がったこと。

ハリーとダンブルドア先生は墓場であつたことについて質疑を繰り返す。

私は椅子から立ち上がり校長室内をふらふらと歩いた。

ダンブルドア先生はハリーと杖が繋がったことに関して話している。呪文逆戻し効果というらしいが、私にはあまり興味がない話だった。

私は暇つぶしに手元にあつた組み分け帽子を手に取り被る。

勿論、思考は読ませない。

少しの間話し相手になつてもらうだけだ。

『君は……十六夜咲夜だね』

頭の中に組み分け帽子の音が響く。

私は心の中で返事をした。

『ええ、そうよ。少し気になることがあるのだけれど、いいかしら』

『構わんよ』

『貴方は最初私をスリザリンに入れようとした。でもグリフィンドールに変えたわ。それは何故?』

組み分け帽子は暫し黙る。

私は言葉を重ねる。

『私自身。自分はスリザリン寄りの人間だと思っている。貴方も同意見でしょうか? 貴

方は何故私をグリフィンドールに入れたの?』

『より大きな善のために。君はスリザリンに入ればそれはそれは素晴らしい魔女になったことだろう。盛大に道を踏み外すことになるが。私の判断に間違いはなかった。君は仲間を救い、罪なき者の命を救った』

『そうね。結果的にはそうなったわ。貴方にはそれが見えていたというの？』

『希望だ。私のね』

そうなつて欲しいという希望を持って私をグリフィンホールに入れた。

そういうことなのだろう。

私は組み分け帽子を脱ぎ、元あつた場所に戻す。

ダンブルドア先生とハリーも話を終えたらしく、犬に変身したブラックと共に校長室を出ていこうとする。

「咲夜、少々ここで待っていてくれ。お主にも聞きたいことがあるからの」

ダンブルドア先生は私にそう釘を刺すと校長室を出て行った。

涙とか、賞金とか、騎士団とか

私は校長室で独りダンブルドア先生の帰りを待つ。

ハリーを医務室に送り届けたのか、10分もしないうちにダンブルドア先生は校長室へと戻ってきた。

そのままダンブルドア先生は私の向かい側の椅子に腰かける。

そしてゆっくりと話し出した。

「さて、ハリーが戻ってきたところまでの話は聞いた。じゃがそれ以降の話はまだじゃ。聞かせてくれるかの？」

ダンブルドア先生は私の顔を見る。

私は鞆の中からティーセットを取り出すと紅茶を淹れダンブルドア先生に差し出した。

「ハリーがポットキーで帰った後の話ですよね」

私は紅茶を一口飲み、話し始める。

死喰い人からの総攻撃にあったこと。

ヴォルデモートと一対一で対決したこと。

「そして、君はここへと戻ってきた。どうやってじゃ」

「姿現しですが——」

「この学校の敷地内では姿現しはできんことになっておる」

ダンブルドア先生はぴしやりと言った。

「ではこの学校の敷地外でしたらどうでしょうか。例えばホグズミードとか」

「シリウスから校長室に突如現れたことは聞いておるのじゃがね」

「むう……」

誤魔化すのも限界か、私は話題を切り替えることにした。

いつも以上に真面目な表情を取り繕い、ダンブルドア先生に話し掛ける。

「ダンブルドア先生……私の話を聞いてくださいますか？」

「聞いておるとも」

「私はヴォルデモートと敵対しました。いや、敵対してしまいました」

私は一度そこで言葉を切った。

「話を聞く限りそのようじゃな」

「敵対してしまっただけです。私は、私個人に敵意を向ける敵を作ってしまった……」

「咲夜、お主が怯えるのもわかる。学生が相手取るには……いや、例え闇払いでさえ、恐れ怯む相手じゃろう。じゃが——」

「貴方は何も分かっていないッ!!」

私の大声に、ダンブルドア先生は初めて驚いたような

顔をした。いや、大声に驚いたのではない。私が目に見えて狼狽していることに驚いたのだろう。

「私が狙われるということは、同時に私の周囲が狙われるということッ……失態です。失敗です。私は、私は……——ッ……私は自分自身の失敗でお嬢様を危険に晒してしまった……」

私は顔を歪め両手で顔を覆う。

私の目から涙が溢れ出た。

「私のせいでお嬢様が狙われるかもしれない……私のせいでお嬢さまに……」

私の両手を伝い、涙がボタボタと服の上に落ちる。

「私は、私は……私は……」

私は袖の中から大ぶりのナイフを取り出すと、自らの喉に刃を向ける。

そして震える声で言葉を紡いだ。

「わ、わた、私は……お嬢様の安全の為に、死ななければなりません。私がお嬢様のために危険に晒されることはあっても、逆は絶対に起こってはならない」

私はナイフの刃を首へと押し付ける。

だがナイフの刃が首の皮を裂く前にダンブルドア先生の手がナイフの動きを止めた。

「その必要はない。お主の言いたいことも分かる。じゃが、方法は他にもあるじやろう」
「ダンブルドア……せんせい」

私はダンブルドア先生の胸に飛び込んで泣いた。

悔しさと後悔が形を成して目から溢れ、私の顔とダンブルドア先生の胸元を濡らす。

ダンブルドア先生は私の背中を優しく撫でる。

そして優しく私に声を掛けた。

「大丈夫じゃ。大丈夫じゃとも、暎夜。今君が自分の仕える主を守るために何が出来るのか、よく考えるとよい。時間は過去へは戻らない。過ぎ去ったことよりも未来を考えるのじゃ」

私は涙を拭い、決心したような顔を作る。

そして感情を込めてダンブルドア先生に言った。

「先生……私は……ヴォルデモートを倒します。私の大切な方を守るために。友を守るために」

「君ならそう言ってくれると、わしは信じておったよ」

ダンブルドア先生は私の肩に手を置く。

「君は道を踏み外さなかった。主を思い、友を思い。健全なる……正義を尊ぶ魔法使い

へと成長していたのじゃ。咲夜、君の不思議な力について教えてくれんかの。教えてくれるならば、わしは喜んで君を不死鳥の騎士団に迎え入れよう」

私は涙でグシャグシャの顔を無理やり歪め、微笑んだ。

そして時間を止め、ダンブルドア先生の時間停止だけを解除する。

ダンブルドア先生は周囲を見渡すとなにか納得したかのように頷いた。

「君の力は時間を止める。そういうことじゃな」

「はい」

「今までもこの力を使い、テレポートの真似事のようなことをしてきたと」

「そうです。先生」

部屋中で忙しく動いていた小物はその動きを止めている。

私がある中の一つに触れると途端にそれは動き出した。

ダンブルドア先生も同じように手を触れるが、それは動き出さない。

私は一度時間停止を解除した。

「時間を操る。それが私の能力ですわ」

「よく教えてくれた。この力のことを話すのは途轍もなく勇気のいる行為だと、わしは思う。わしはその勇気を認め、ここに君を不死鳥の騎士団の一員だと認めよう。共に悪を絶つ為に戦おう」

「はー！」

「今日はもう寝るのじゃ。医務室に向かうがよい。そこでレミリア嬢も待つていることじゃろう」

私はダンブルドア先生に一礼すると時間を止め、顔をハンカチで拭う。

そして目の腫れが収まるのを待ち、医務室へと姿現しした。

医務室の一角にお嬢様と美鈴さんがおり、2人で何かを話しているような形で固まっている。

私は静かにお嬢様に近づき、お嬢様と美鈴さんの時間停止を解除した。

「お嬢様、不死鳥の騎士団への侵入は無事成功しました」

私はニヤリと笑い、お嬢様に報告する。

お嬢様はその報告を聞き満足そうに頷いた。

「よくやったわ。意外と早かったわね」

「ヴォルデモートの復活を利用させてもらいました」

美鈴さんが不思議そうに口を開く。

「どうやって説得したの？ 学生がホイホイ入れるような組織じゃないと思うけど」

「自殺の真似事と偽りの涙を少々。男というのはいくつになっても女性の涙には弱いものですよ」

そう、先ほどののは全て演技だ。

ヴォルデモートと敵対してしまつたじゃない。

敵対するように命令されているのだ。

「やるじゃん」

美鈴さんが私の頭をくしゃくしゃと撫でる。

私はそれがむず痒く、そして何より嬉しかった。

「あとそれと、優勝杯です」

私は鞆を開け、優勝杯を取り出す。

優勝杯のポルトキーの呪文は既に効力を失っているようだ。

お嬢様は満足そうに優勝杯を手にとると、何処かに消し去ってしまった。

「パチエのところを送つただけよ。いつまでも持つてると返せつて言われそうだし。そ

う言えばクイレルの調子はどうかだ？ 会つたんでしよう？」

「見たところでは死喰い人の中でもそこそこの地位を手に入れたようです」

「そう……。暎夜。2年後よ。戦争は2年後に起こすわ」

お嬢様は人差し指と中指を立てる。

「それまでに不死鳥の騎士団を大きく強く強くしなさい。死喰い人とぶつかったときに多数

の死者が出るように。それまでは出来るだけ仲間が死なないように気を付けなさい」

「かしこまりました」

お嬢様はもう一度満足そうに頷く。

「さて、私たちはもう帰るわ。優勝賞金は……そうね。貴方の好きに使えばいいと思うけど、特に使うあてが無いならウィーズリーの双子にでもあげなさい」

「それはまた一体何故です？」

私は今年度の初めにドラコとした会話を思い出す。

お嬢様はその会話の内容を誰かから聞いたのだろうか。

「今朝ウィーズリー夫人と話したのだけれど、その双子が何やら面白そうなことをしているらしいわ。悪戯グッズっていうの？ 夢を持つ若者は応援しないとね」

そしてお嬢様は窓を開けた。

空には星が満ち、若潮の薄い月が浮かんでいる。

お嬢様はそのまま外へと飛び出ると、翼を羽ばたかせ宙に留まった。

「じゃあ帰るわ。夜だから人目にはつかないと思うけど。時間の停止は適当に解除していいわよ」

「じゃあね、咲夜ちゃん。また夏休みに会おう」

美鈴さんもお嬢様に続き外へと出る。

そしてファイアボルトも真つ青な速度で一気に上空まで飛び上がると、一瞬で姿が見

えなくなつた。

昔言つた言葉を撤回しよう。

フアイアボルトなんかよりお嬢様のほうが全然速い。

私は窓を閉めると時間停止を解除する。

あの速度なら万が一マグルに見られてもジェット機にしか見えないだろう。

私はハリリーの横のベッドに移動すると汚れた服を着替えベッドに潜り込む。

「正義の魔法使い……ね」

何が正義で、何が悪か。

そんなこと簡単だ。

私の中ではお嬢様こそ正義であり、お嬢様を妨げるもの全てが悪だ。

ダンブルドア、私は貴方に協力するが、決して貴方の正義の魔法使いではない。

私は私の正義を貫き通すだけである。

私はシーツを頭の上まで手繰り寄せるとそのまま朝までゆっくり眠つた。

「あの人たち、静かにしてもらわないと、この子たちを起こしてしまふわ」

「いったい何を喚いているんだろう？　また何か起こるなんて、ありえないよね？」

モリーさんとビルがヒソヒソと話す声に私は目を覚ます。

そしてそのままでもぞと布団の中で制服へと着替えた。

「大惨事だ！ 取り逃がすとは、ダンブルドアも不甲斐ない!!」

あの叫び声はフアッジ大臣だろうか。

マクゴナガル先生と怒鳴り合っているようだ。

そして10秒も経たないうちに医務室へと入ってきた。

「ダンブルドアは何処かね？」

フアッジ大臣はモリーさんに詰め寄る。

「ここにはいらつしやいせんわ。大臣、ここは病室です。少しお静かに——」

「何事じゃ」

モリーさんが大臣をたしなめようとしたその時、医務室の扉が開きダンブルドア先生が入ってくる。

「病人たちに迷惑じゃろう？ ミネルバ、貴方らしくない。バーティ・クラウチを監視するようお願いしたはずじゃが」

バーティ・クラウチ。

この場合は息子のほうだろうか。

「もう見張る必要はなくなりました。ダンブルドア！」

マクゴナガル先生が珍しく叫ぶ。

「逃げたのです！ 忽然と監禁していた部屋からいなくなりました」

「ふむ、それは困ったのう。重要な証人だったんじゃないが」

「そんなことはどうでもいい！ ダンブルドア、これは貴方の失敗だ！」

ファッジ大臣はダンブルドア先生に怒鳴りつける。

どうやらかなり怒っているようだ。

「いや、クラウチの証言が必要じゃった。ヴォルデモートが復活を遂げたのじゃ」

「例のあの人が……復活した？ バカバカしい。おいおいダンブルドア……」

ついにボケたか？ と言わんばかりにファッジ大臣はダンブルドア先生の肩を叩く。

「ミネルバもセブルスも貴方にお話ししたことと思うが。真実薬で聞いたクラウチの告白を貴方にも教えたじゃろう」

「いいか、ダンブルドア。まさか、まさかそんなことを本気にしているのではあるまいね？ 例のあの人が……戻った？ まあ、まあ落ち着け。まったく。クラウチは例のあの人の命令で動いていると錯覚していた、思い込んでいただけだ」

「ハリーが優勝杯に触れた時、まっすぐヴォルデモートの元に運ばれていったのじゃ。咲夜も、ハリーもヴォルデモートが蘇るのを目撃した。わしの部屋まで来てくださったれば一部始終をお話ししますぞ」

ダンブルドアはハリーと私をチラリと見る。

私はベッドから起き上がり、そのまま腰掛けた。

「大臣、ヴォルデモートは確かに復活しました。まあ信じるも信じないも大臣の勝手ですが、信じずになんの対策も立てぬまま時間を浪費し、いざ復活してましたとなったら困るのは大臣ですよ。失脚することは確実に、最悪民衆に嬲り殺されるでしょう」

私はファッジ大臣の顔を見る。

私の言葉にかなり狼狽しているようだった。

「だ、だが……そんなことはありえない」

「そうですか。ではそのように。最終的に死ぬのは貴方です。コーネリウス・ファッジ魔法大臣」

「そんなことには——」

「なりません。貴方は社会的にも肉体的にも死ぬことになるでしょう。魔法省始まって以来の無能として死んでいくのです」

「これ、咲夜。これでは脅迫と変わりない」

ダンブルドア先生が私の言葉をたしなめた。

「じゃが、ヴォルデモートが帰ってきたのは確かじゃ。ファッジ、貴方がこの事実を認め、必要な措置を講じれば、我々はこの状況を救えるかもしれぬ。まず最初取るべき

処置は、アズカバンを吸魂鬼の支配から解き放つことじゃ——」
「とんでもない！」

フアツジ大臣がダンブルドア先生の言葉を遮った。

「吸魂鬼を取り除けと？ そんな提案をしようものなら私は大臣職から蹴り落されるだろう。魔法使いの半数が、夜安眠できるのは吸魂鬼がアズカバンの警備に当たっていることを知っているからなのだ！」

「コーネリウス、あとの半分は安眠できるところではない。あの生き物に監視されているのは、ヴォルデモートの最も危険な支持者たちじゃ。そしてあの吸魂鬼はヴォルデモートの一声でたちまちヴォルデモートと手を組むであろう。連中はいつまでも貴方に忠誠を尽したりはせん」

大臣は言葉が出てこないと言わんばかりに口をパクパクとさせている。

ダンブルドアが言葉を続けた。

「第二に取るべき措置は巨人に使者を送ることじゃ。しかも早急にの」
「巨人に使者だと!?! 狂気の沙汰だ！」

大臣が叫ぶ。

「友好の手を差し伸べるのじゃ、今すぐ、手遅れにならぬうちに。さもないとヴォルデモートが以前やったように巨人を説得するじゃろう」

「ま、まさか本気で言っていないよな？ 私か巨人と接触したなどと、魔法界に噂が流れたら……ダンブルドア、みな巨人を毛嫌いしている。そのことは知っているだろう」

「はつきり言うぞ。わしの言う措置を取るのじや。そうすれば大臣職に留まろうが去ろうが、貴方は歴代の魔法大臣の中で最も勇敢で偉大な大臣として名を残すじやろう。もし、行動しなければ——」

「貴方は無能の烙印を押され、一生辱めを受ける。その扱いは末代まで変わらないでしょうね」

私がダンブルドア先生の言葉の続きを言った。

「狂気の沙汰ではない。狂っている……ダンブルドア、一体何をふざけているのだ。私にはさっぱりだ。しかし、もう聞くだけは聞いた。私ももう何も言うことはない。この学校の経営については少々話があるので明日連絡しよう。私は魔法省に戻らなければらん」

「ええ、戻りなさい。そして自由に死ねばいいわ。できればさっさと大臣職を降りることをおすすめするけど」

「咲夜」

ダンブルドアの言葉に私は軽く肩を竦める。

だがダンブルドアもマクゴナガル先生も同意見なのだろう。

そんな顔をしていた。

ファアツジは頭を抱え首を振り、病室を出ていこうとする。

しかし、途中で向きを変え私のほうに歩み寄った。

「この賞金をどちらに渡していいか私には分からん。ここに置いておくぞ。本来ならば授賞式が行われる予定だったがこの状況では……では失礼する」

ファアツジ大臣は今度こそ医務室を出ていった。

ハリーのベッドの方を見ると、ハリーも起き上がっている。

私はガリオン金貨の袋を持ち上げた。

「ハリー、ということらしいけど。どっちが優勝かしら」

「……君だろうか？」

「じゃあこの金貨は私の自由に使うわね」

私は鞆を開けると金貨の入った袋を放り込んだ。

あとでハリーと共にフレッドとジョージに渡そう。

ダンブルドア先生はファアツジ大臣が出ていくのを見送ると、改めてベッドにいる人々のほうに向きなおる。

「やるべきことがある」

ダンブルドア先生はいつになく真面目な声を出した。

「モリー……あなたとアーサーは頼りにできると考えてよいかな？」

「勿論ですわ」

モリーさんは唇まで真つ青だったが、決然とした顔で頷いた。

「ウイリアムはすぐに城を発ちアーサーに何が起こったかを伝えてほしい。近々わしが直接連絡するとも言ううとくれ。ただし、アーサーは目立たぬよう事を運ばなくてはならぬ。わしが魔法省の内政干渉をしているとファッジにそう思われると——」

「僕に任せてください」

ビルはダンブルドアが言い切る前に力強く頷くと、モリーさんの頬に軽くキスしマントを着て足早に部屋を出ていった。

「ミネルバ。わしの部屋でできるだけ早くハグリッドに会いたい。それからもし来ていただけるようならマダム・マクシームもじゃ」

マクゴナガル先生は黙って部屋を出ていく。

「ポピー。頼みがある。ムーディ先生の部屋に行つてウインキーという屋敷しもべ妖精を探してくれるか？ 酷く落ち込んでおると思うからできるだけの手を尽して厨房に連れて帰つてくれ。ドビーが面倒を見てくれるはずじゃ」

「は、はい！」

驚いたような顔をしてマダム・ポンフリーも医務室を出ていった。

そしてマダム・ポンフリーの足音が聞こえなくなるとダンブルドア先生は再び口を開く。

「さて、そこでじゃ。ここににいる者の中で2名の者がお互いに真の姿で認め合うべきときがきた。シリウス、普通の姿に戻ってくれぬか」

ハリリーのベッドの影から大きな黒いブラック犬が姿を現す。

そして一瞬で人の姿になった。

「シリウス・ブラック!？」

モリーさんが金切り声を上げる。

スネイプ先生は叫びも飛びのきもしなかったが、怒りと憎悪が入り混じったような表情をしていた。

「なんでこやつがここにいるのだ?」

「わしが招待したのじゃよ」

ダンブルドア先生が静かに言った。

「セブルス、君もわしの招待じゃ。わしは2人を信頼しておる。そろそろ2人とも昔のいざごきは水に流し、お互いに信頼し合うべきときじゃ」

ダンブルドア先生が2人を交互に見るが、ブラックとスネイプ先生はこれ以上の憎しみはないといった表情でにらみ合っている。

私は時間を止め、2人の右手を動かし握手をさせた。

そして時間停止を解除する。

「——ッ!?!」

「ナイスじゃ咲夜。あからさまな敵意をしばらく棚上げにするということでもよい」

ブラックとスネイプ先生は互いに手が白くなるほどの力で互いの拳を握り潰そうとするが、やがて中で爆発でも起きたかのように手を放す。

「今はそれで十分じゃ。シリウス、すぐさまここを出発し、昔の仲間を集めてくれ。リーマス、アラベラ、マンダンガス。しばらくはルーピンのところに潜伏すればよいじゃろう。わしからそこに連絡する」

ブラックは心配そうな顔をするハリーの手をギュツと強く、しかし優しく握ると再び黒い犬に変身し、医務室を出ていった。

「セブルス。君に何を頼まねばならぬのか、もうわかっておろう。もし、準備ができてい
るなら……もし、やってくれるなら……」

「大丈夫です」

スネイプ先生は冷たく暗い目を光らせて頷いた。

「それでは、幸運を祈る」

ダンブルドア先生がそう言うと、スネイプ先生はブラックの後を追うように医務室か

ら出ていく。

ダンブルドア先生はスネイプ先生の後ろ姿を微かに心配そうな色を浮かべて見送った。

「咲夜」

ダンブルドア先生はこちらに向き直る。

「不死鳥の騎士団の活動に、君の能力を使わせてもらうことになるじやろう。先ほどのあれはファインプレーじゃった。活動の目途が立ったら、こつそりと連絡を送る」
「わかったわ」

私は時間を止めると鞆を掴む。

取り敢えずお腹が空いた。

屋敷しもべ妖精たちとゆっくり話でもしながら何か食べよう。

私はそのままふわりと飛び上がると医務室を後にした。

ヴォルデモート卿の復活から一カ月が経ち、ようやく今年も終わりを告げた。

私は全ての荷物を鞆の中に入れたか確認すると玄関ホールへと向かう。

玄関ホールには既に馬車待ちの生徒が溢れかえっていた。

『咲夜！』

フランス語で呼びかけられる。

デラクールだ。

『また会いましょう。次はもう少し英語を勉強してくるわ』

『十分上手いとは思うけどね』

デラクールは笑顔で私に手を振ると、ハリーたちの方へと歩いていく。

『優勝おめでとう。まったく大した14歳だよ。君は』

今度はブルガリア語が聞こえてくる。

クラムだ。

『あら、ワールドカップで活躍するクイディッチのシーカーさんに言われても褒められた気がしないわね』

『そういうところも含めて大したものだって言ってるんだよ。また機会があったら会おう』

そういうとクラムもハリーの方へと歩いていった。

私は一足先に馬車へと乗り込む。

そしてしばらくすると私が乗った馬車にハリーたちも乗り込んできた。

ホグズミード駅で馬車からホグワーツ特急に乗り換える。

私たちは私とハリー、ロン、ハーマイオニーの4人で1つのコンパートメントを独占した。

ハリーたちはヴォルデモートのことやスキーターを捕獲したという話で盛り上がっている。

……いやスキーターを捕獲したってなによ。

私は車内販売で適当にお菓子を買い込み茶菓子にする。

そして今年を静かに振り返った。

色々なことが起こった1年だったが、なんとか全ての目標を達成することが出来た。

優勝杯を手に入れ、ヴォルデモートが復活し、不死鳥の騎士団にも入れた。

だが、本番はここからだ。

これからどんな戦いを激化させていき、多数の戦死者を出さないといけない。

私はちらりとハーマイオニーの方を見る。

ハーマイオニーは小瓶に捕獲したスキーターを見てニツコリとしている。

「私、ロンドンに着いたら出してあげるってリータに言ったの。ガラス瓶に割れない呪文を掛けたのよ。だからリータは変身できない」

ハーマイオニーは満足そうに微笑みながらコガネムシが入った瓶を鞆に戻した。

次の瞬間コンパートメントのドアがスツと開く。

「なかなかやるじゃないか。グレンジャー」

そこにはドラコが立っていた。

後ろにはクラッブとゴイルを引き連れている。

そういえばこの3人の親は死喰い人だったか。

次の瞬間四方八方から飛んできた呪いの数々がドラコと後ろの2人に直撃した。

ハリー、ロン、ハーマイオニーが同時に杖を抜いて呪いをかけたのだ。

しかもよく見ると、コンパートメントの外にはフレッドとジョージもおり、その2人も杖を構えている。

「ありやまあ。話ぐらい聞いてあげてもよかったんじゃない？」

「聞く価値もないさ」

フレッドが丁寧にゴイルを踏みつけて入ってくる。

ジョージも絶対にドラコ以外の地面を踏まないように気を付けながらコンパートメントに入ってきた。

「面白い効果が出たなあ」

ジョージがクラッブを見下ろして言う。

「誰だ？ できものの呪いをかけたのは」

「僕」

ハリーが手を上げた。

「変だな。俺はくらげ足を使つたんだ。この2つは同時に使つちや駄目みたいだ。こいつ、顔中にクラゲの足が生えてるぜ」

「まったく……」

私は3人に向けて杖を振るう。

すると呪いの効果はたちまち消え失せた。

気絶している3人はそのまま床を滑るように移動し、隣のコンパートメントに押し込まれる。

「手緩いぜ、我らが女王。蹴つ飛ばしてやればいいんだよ」

フレッドが私に言う。

「いや、それは駄目だ」

ジヨージがすぐさま否定した。

「咲夜がやつたらご褒美になりかねん。特にあの3人にはな」

ハリーたちは笑つたが、私は苦笑いしか浮かばなかつた。

そんなイメージがあるのだろうか。

私たちはその後双子の持つてきたカードゲームをして時間を潰した。

そんな時間はあっという間に過ぎていき、ホグワーツ特急は9と4分の3番線に入線していく。

生徒が列車を降りるときのいつもの混雑と騒音が廊下に溢れた。

ロンとハーマイオニーは先に列車を降りていく。

私はハリーとフレッド、ジョージをコンパートメント内に引き留めた。

「私の中では私の単独優勝つてことになっているんだけど、一応ね」

私は鞆を開けるとガリオン金貨の入った大袋を双子に手渡す。

「ハリーと、私からのプレゼントよ。受け取りなさいな」

「狂ったか？」

「それはいつものことだろう？」

フレッド、ジョージが顔を見合わせる。

ハリーも目を輝かせていた。

「お嬢様が悪戯グッズを気に入ってしまったってね。貴方たちの夢を応援したいって。ハ

リーもそれでいいわよね」

「勿論」

「でも……」

フレッドはどうしていいか分からず金貨の袋を抱えてジョージの顔色を窺っている。

それはジョージも同じだった。

「あら、断るの？ お嬢様に食べられるわよ。紅魔館では常時人肉候補を募集しているわ」

「有り難く頂戴させていただきますはい！」

双子は揃って敬礼をすると金貨の袋を鞆の中に押し込む。

そして逃げるように列車を降りていった。

「でも、本当によかったのかい？ 咲夜。あれは君のお嬢様のもではなく、君が獲得したものでしょう？」

私はハリーの額を指で弾く。

ハリーは痛そうに頭を押さえた。

「私はお嬢様の所有物よ。だとしたら私が獲得したものはお嬢様の物だわ。仕えるというのはそういうことよ」

私はコンパートメントにハリーを残し先に列車を降りる。

そこにはいつものように美鈴さんが立っており、いつものように迎えてくれた。

「お帰り、咲夜ちゃん」

「ただいま。美鈴さん」

私たちは簡単な挨拶を交わすと柵の向こうへと抜ける。

そして人混みに紛れ時間を止め、空を飛んで紅魔館へと帰った。

ある日の紅魔館。

私は久々に帰ってきたクイレルに紅茶を淹れていた。

クイレルは少しでも役立つ知識を蓄えようと紅魔館にいるときは図書館に籠る。

今日もパチュリー様の前で本とにらめっこだ。

「クイレル、紅茶が入ったわ。ほどほどにね」

私はクイレルの前にティーカップを置く。

クイレルは本から目を離さずにそれを持ち上げ口をつけた。

「ふむ、ワームテールが淹れるものより断然美味い。死喰い人の中ではベラトリックスが紅茶を淹れるのが上手いらしいが今はアズカバンにいるしな……」

「ワームテールと比べるのはおこがましいと思うんだけど……。まあいいわ。向こうの様子はどうか？」

私が聞くとクイレルは苦々しい顔をした。

「ヴォルデモートが帰ってきたということもあり大混乱だ。歓喜する者もいれば恐れ逃

げる者もいる。……まずはアズカバンから死喰い人を連れ戻さないとな」

まあ派手にやるよ、とクイレルは肩を竦めた。

「そういう君はどうなんだ？ 不死鳥の騎士団の方は」

クイレルが一度本から顔を上げ、こちらを見た。

「今のところは目立った動きはないわ。そつちと同じでこつちも大混乱よ。ダンブルドア先生があちこちに連絡して仲間を集めている段階ね」

まあそのうち大きな動きがあるかも知れない。

お嬢様には館の仕事よりも不死鳥の騎士団の仕事を優先して行うようにとの指示を受けている。

「なんにしてもここ一年はどちらも戦力の増強に努めましょう。今ハグリッドとマダム・マクシームが巨人の説得に向かっていているわ」

「そうか、こちらからもマクネアが巨人の住処へと向かっている。鉢合わせにならないといいがな」

「戦力的にはどちらについた方がいいかしらね」

「……私の考えでは死喰い人だと思う。何処で戦うかにもよるが、戦争になった時、関係のない魔法使いたちがどちらに味方をするかは目に見えているからな」

クイレルは本に視線を落とす。

「なんにしても、そちらも準備を進めるようにな。片方が叩き潰されましたじゃ、駄目だ。全ては我が主の為に」

「ええ、崇高たるお嬢様の為に」

私はクイレルとがっちり握手をする。

クイレルはすぐに本の世界へと戻っていつてしまったので私は館の仕事へと戻ることにした。

厨房へと向かい昼のうちに完成させておいた料理を持って地下へと向かう。

そして地下の扉を静かにノックした。

「妹様、夕食をお届けに参りました」

……返事はない。

それはいつものことだ。

私はゆっくりと扉を開けると中へと入る。

驚いたことに妹様はまだ寝ていた。

普段なら既に起きていている時間だ。

「妹様、もう夜ですよ」

私は料理をテーブルへと置いて、妹様の体を静かに揺する。

「……………うん……………zzzz」

「どうやらまだ眠いようだ。」

布団を掴み、更に奥へと入っていつてしまおう。

「妹様？ お寝坊はあまりお体によろしくくないですよ」

「……あ、り……あ……あ、さくや。おはよう」

妹様は目を擦りながら起き上がる。

「おはようございます。妹様。食事の用意ができております」

私は眠そうな妹様を寝間着から普段着に着替えさせる。

妹様はフラフラと椅子に座った。

「……お姉さまも面白い駒を手に入れたものね。リドルにクイレル。素敵だわ」

「妹様から見て、あの2人はどう思いますか？」

妹様はナイフとフォークを手に取り、夕食を食べ始めた。

「そうね、クイレルはお姉さまを裏切らないわ。お姉さまの魅了で縛られているっていうのもあるけど、心の底からお姉さまに忠誠を誓っているし。分からないのはリドルの方よ。大人しいのが逆に不気味だわ。……このサラダ美味しいわね」

「恐れ入ります」

「本来ならもつと自由に泳がせるべきなのでしょうけど、パチュリーの事情もあってそうはいかない。難しいわよね」

私は妹様が食べている後ろで紅茶を用意し始める。

「まあ長引くような事態でもないし、私としては言うことないわ」

「紅茶が入りました」

「ありがとう」

妹様は夕食を取り終わると紅茶を一口飲む。

そして私の方へと振り向いた。

「頑張りなさい。お姉さまの為にね」

「承知しております」

私は妹様に一礼すると地下の部屋から出る。

妹様はあの部屋に引きこもっていらつしやるのに外の情勢に詳しい。

何か理由があるのだろうか。

……美鈴さんは閉心術を使えないので多分そこからだろう。

クイレルとリドルは直接妹様に会ったことはない。

狂気云々の話ではない。

お嬢様が会わせようとしらないのだ。

私は厨房へと戻り食器を洗う。

するとその時、ポケットの中に違和感を感じた。

私は時間を止め洗い物を終わらせると、ポケットの中に手をつ突っ込む。

違和感の正体はダンプルドア先生から渡された小さなオープンフェイスの懐中時計だった。

時刻は3時を示している。

もつとも現在の時刻とは異なる。

3時は招集の合図だ。

私は懐中時計をひっくり返す。

そこにはカレンダーが付いており、針は木曜日を差していた。

木曜日は本部という意味。

不死鳥の騎士団本部はロンドンのグリモールド・プレイスにある。

何かあったのだろうか。

私は懐中時計を仕舞い、お嬢様の部屋の前まで移動する。

時間停止を解除し、ドアをノックした。

「お嬢様、不死鳥の騎士団の招集が掛かりました」

「入りなさい」

私はドアを開けてお嬢様の部屋へと入る。

お嬢様は部屋の机で事務仕事を行っていた。

「ブラック邸で集合とのことですよ」

「ええ、行ってきなさい。仕事は美鈴にやらせるわ。あつちに向かう前に門に寄って声を掛けておきなさい」

「かしこまりました。それでは少々出かけてきます」

私は時間を止めお嬢様の部屋を出る。

そして紅魔館内を飛び、門の前へと移動した。

美鈴さんは暇そうに空を見上げたまま固まっている。

私は時間停止を解除した。

「美鈴さん」

「ん？ ああ咲夜ちゃんか。どうしたの？」

美鈴さんはいきなり現れた私に驚くことなく振り返る。

私は不死鳥の騎士団から招集を受けたとの旨を伝えた。

「なので少しの間、館の仕事を頼みたいのですが」

「はいよー、了解。門番しゅーりよー！」

美鈴さんは大きく伸びをして玄関の方へ歩いていく。

私はその後ろ姿を見送ると時間を止めブラック邸の正面に姿現しした。

ブラック邸は現在その所在地を知るものには見えなくなっている。

私はすり減った階段を上りドアの前へ移動する。

そして周囲に人影がないことを確認すると杖を取り出しドアを1回叩く。すると何かの金属音が中から聞こえ、古びた扉が音を立ててゆっくり開いた。私はブラック邸へと入る。

ここが今現在、不死鳥の騎士団の本部となっている。

私は中に入るともう一度時間を止める。

そして暗闇の中を明かりもつけずに歩いていき、厨房へと入った。

厨房にはモリーさんが固まっている。

手に持っているお玉から察するに夕食を作っていたところなのだろう。

私は時間停止を解除し、モリーさんに挨拶をした。

「こんばんは。招集を受けたのだけれど、何かあったのかしら」

後ろから急に声を掛けられてモリーさんは悲鳴を上げる。

そしてバネ人形のようにこちらに振り向いた。

「——ッ!? 咲夜か、びつくりさせないでちょうだい」

モリーさんは鍋をかき混ぜる作業に戻る。

悲鳴を聞きつけたのか、ブラックとビルが厨房に駆け込んできた。

2人とも騎士団員だ。

「なんだ！ どうした？」

ブラックが厨房を見回して叫ぶ。

ブラックは穴倉生活を送っていた頃とは比べ物にならないほど着ている物も髪も清潔になっている。

「ごめんなさい、シリウス。咲夜にびつくりしたただけよ。この子ったら急に現れるんですもの」

私の能力の本質を知っているのはダンプルドア先生しかいない。

他の騎士団員は何か特殊なことができるといったぐらいの認識しかないのだ。

「招集が掛かったわよね。何かあったのでしょう？」

私が聞くとブラックは安堵のため息をついた。

「ああ。少し話し合わなければならぬことがある。今後の騎士団の活動についてだ。会議は今日の深夜。ある程度騎士団員が集まってからだ」

「わかったわ。モリーさん、手伝いますよ」

私はモリーさんの横に並びまな板の上に置いてあるジャガイモの皮を剥き始める。

モリーさんは心配そうな顔で私を見ていた。

「無理に参加しなくてもいいのよ？ 貴方はまだ未成年なのだし……」

モリーさんは未成年が騎士団の活動に参加するのに凄く反対している。

会議の時にも嚴重過ぎるぐらい厨房のドアに魔法を掛け、ここにいるウィーズリーの子供たちに聞こえないようにするぐらいだ。

「あら、信用無いのね私」

「そういう意味じゃないわ。私は貴方が心配で——」

私は時間を止め、料理を進める。

そして30分ほどの時間をかけて夕食の準備を全て終わらせた。

時間の停止を解除する。

「ありがとう。でも心配いらさないわ。みんなを呼んでくるわね。夕食にしましょう。」

「え？　まだ料理は……!?!」

モリーさんはいつの間にか自分のかき混ぜていた鍋の中身が完成しているのを見て目を丸くする。

私は厨房を出て上の階に上がった。

上の階は子供部屋になっている。

ウィーズリーの家族は現在殆どここに集まっているのだ。

「ロン、フレッド、ジョージ。夕食が出来たわよ」

私が声を掛けるとバタバタと部屋の中から音がして何故かハーマイオニーが飛び出してきた。

そういうえば夏休みの間はここに移動すると騎士団員の誰かが言っていたか。

「咲夜！ 咲夜もここに来ていたのね！ 館の方は大丈夫なの？」

ハーマイオニーは私が騎士団員だということを知らないようだった。

私の手を掴み埃が舞うのも構わずピョンピョン飛び跳ねている。

「ええ、美鈴さんに任せてあるわ。いつの間にかここへ来ていたのね。ハーマイオニー」

「今朝ルーピン先生の案内で到着したの。ロン、ロン！」

ハーマイオニーが部屋の中に向かって叫ぶ。

ロンはのそりのそりと部屋の外へ出てきた。

その後引き続き2人の双子も姿を現す。

「夕食だったつけ。今行くよ……そうだ、咲夜。騎士団の活動はどんな感じだ？」

ロンは私が騎士団の活動を秘密にしていることが気に入らないらしい。

最近会うといつもこの調子なのだ。

「上々とは言えないわね。ほら。さっきと厨房に行きなさい」

私が号令をかけるとロンとフレッドとジョージは下の階へと下りていった。

「ジニーはどっ？」

「多分部屋だと思うけど……咲夜、もしかして貴方って」

「騎士団員よ」

私は部屋の中へと入る。

そこには既に布団に包まれているジニーがいた。

「ジニー、夕食はどうするの？」

私はジニーを揺すが起きる気配はない。

埒が明かないのでハーマイオニーだけを連れて厨房へと下りた。

厨房のテーブルには既にウィーズリーの兄弟とブラック、ルーピンが座っている。

「さて、よくわからないけど予定よりも早く料理が完成したわ」

モリーさんは狐につままれたような顔をして料理をテーブルに並べている。

私が最後にテーブルの一角に座ると皆夕食を取り始めた。

「最近変わったことはないかしら」

私は食事に手を付けずにブラックに聞いた。

ブラックはこの家に軟禁状態になっている。

裏を返せば一番情報が集まるこの本部にずっといるということになる。

「今のところは大丈夫だ。ハリーを含めてね」

私たちの会話にハーマイオニー含めるウィーズリーの下の兄弟たちは耳をそばだてる。

一語一句たりとも聞き逃さないという態度だ。

「そう、それは安心ね」

「君こそ館はいいのかい？ 休暇中はメイド長をやっていると聞いたぞ」

「大丈夫よ。いつも何かしらの用事を作って館を抜け出してきているわ」

それに夕食も館で取ったしね、と付け加える。

私は鞆から紅茶の入ったティーカップをそのまま取り出した。

時間を止めていれば液体も固体と変わらない。

匂う物は匂わず、暖かいものは冷めない。

全員がその異様な光景を目を丸くして見ていた。

「……なによ。マグルじゃないんだからそんなに驚かないで」

ただの保温魔法よと嘘をつく。

そのままブラック邸での時間は過ぎていった。

十六夜咲夜と不死鳥の騎士団 退学とか、護衛とか、会議とか

8月2日、もう日も暮れようとしている頃。

私は不死鳥の騎士団の任務でハリーの護衛をしていた。

護衛と言っても堂々とハリーの前に立ちサングラスを光らせているわけではない。

マグルやハリーに見つからないように透明マントを羽織り、静かにハリーを監視する。

この近くの通りに住むミス・フィツグも監視の1人だが、彼女はスクイブなので護衛として何かを期待することはできないのだ。

「にしても、なにやっているんだろう」

私はハリーへと目を向ける。

ハリーは何故か庭で寝転がっている。

本当に一体何をやっているのだろう。

聞いてみたい気もしたが、極秘で護衛しているということもありそれはできなかつた。

私は点検するように今現在の自分の所持品を確認する。

姿現し用の指輪に、匂い消しのブレスレット。

ダンブルドア先生はハリーが何かの拍子で魔法を使ってしまわないかを警戒しているのだ。

現在魔法省はハリーを目の敵にしている。

少しでもハリーが法律を犯したらその弱みに付け込みこちらに都合の悪いアクションを起こすだろう。

私はハリーが家の外に出たのでその後を追う。

尾行は得意な方だ。

万が一相手が違和感を感じて振り返っても、時間を止めて物陰に隠れてしまえば気のせいとしか相手は感じない。

ハリーは何かに腹を立てているようで、ズンズンと大股で通りを歩きだした。

何処に行こうというのだろうか。

これは私の感覚でしかないが、ハリーはあてもなく歩いているようにしか見えない。とても目的地があるとは思えなかった。

ハリーは角を曲がってマグノリア・クレセント通りの小道に入っていく。

そのままマグノリア・クレセント通りを横切ってマグノリア通りへと曲がり、門に鍵

のかかった公園へと入っていく。

どうやら独りになりたかっただけらしい。

ハリーは2つあるうちの壊れていないブランコに腰かけると何かを考えるように俯いた。

私はハリーに気がつかれないように隅のほうに移動し様子を観察する。

まったく暇な任務を任されたものだ。

もつともずつとハリーの監視をしているわけではない。

何人かの騎士団員と交代でだが、それでも暇なことには変わりなかった。

ハリーは30分ほどブランコの上で何かを考えるように顔を伏せ、不意に顔を上げる。

私がハリーの視線の先を追うとハリーが居候しているダーズリー一家の一人息子であるダドリーが仲間を率いて公園を横切っていた。

ハリーはその集団を憎らしそうに見つめる。

今にも襲い掛かりそうな雰囲気だったが、なんとか自分を抑え込んだようだ。

ダドリーたちはマグノリア通りの方へと姿を消した。

ハリーはその様子を見てブランコから立ち上がり急ぎ足でダドリーたちの後を追う。

私もハリーに気がつかれないようにその後を追った。

あまり長い時間を掛けずにハリーはダドリーたちに追いついた。

ハリーはダドリーに見つかからないようにリラの大木の陰に隠れる。

闇討ちでもする気なのだろうか。

私はハリーがそこまでの馬鹿ではないと信じつつその様子を見守った。

「いい右フックだったぜ、ビッグD」

取り巻きの1人がダドリーに言う。

「また明日、同じ時間だな？」

ダドリーが違う取り巻きに聞いた。

「俺のところだな。親父たちは出かけるし」

「じゃあまたな」

「バイバイ、ダッド！」

「じゃあな、ビッグD！」

なんだ、仲のいい子供たちではないか。

最近はずんぷらの真似事をして遊んでいることが多いみたいだが、ヤンチャしたいお年頃なのだろう。

ハリーはダドリーの取り巻きがすべていなくなるのを待つてから家の方へと歩き出した。ダドリーを追って歩き出す。

今気がついたが、尾行が2重になっているな。

ハリーはダドリーに気がつかれないように。

私はハリーに気がつかれないように尾行を続ける。

ハリーは角を曲がってマグノリア・クレセント通りに入ると、早足で歩きダドリーに追いつく。

そして何を思ったのかダドリーに話しかけた。

「おい、ビッグD！」

ダドリーは取り巻きの1人だと思ったのだろう。

上機嫌でハリーの方に振り返る。

「なんだ、おまえか」

だがその顔はすぐに歪んだ。

「ところでいつからビッグDになったんだい？」

「黙れ」

「かっこいい名前だ。だけど僕にとっちゃ君はいつまでもちっちゃなダドリー坊やだな」

なんとということだろう。

ハリーはダドリーに喧嘩を売り始めた。

なんというか、もう少し大人しくは出来ないのだろうか。

監視、護衛する私の身にもなってもらいたい。

「黙れって言ってるんだ！」

ダドリーはむっちりした両手の拳を握る。

脂肪も多いがその下には確かな筋肉が備わっているようだ。

「あの連中はママが君をそう呼んでいるのを知らないのか？」

「黙れよ」

「ママにも黙れって言えるかい？ かわいい子ちゃんとかダディちゃんなんてのはどうだい？ じゃあ僕もそう呼んでいいかい？」

ダドリーは黙っている。

全てをぶつけてしまいたいのは山々だが、ハリーが魔法使いだということを警戒しているらしい。

なんというか、自製の利くいい子じゃないか。

手の付けようがないうちの美鈴さんとは大違いである。

ハリーの挑発は続く。

「それで、今夜は誰を殴ったんだい？ また10歳の子か？ 一昨日の晩、マーク・エバンスを殴ったのは知ってるぞ——」

「あいつがそうさせたんだ」

「へー、そうかい」

「生意氣言つたんだ！」

「そうかな？ 君は後ろ足で歩くことを覚えた豚みたいだ、とか言つたのかい？ そりゃ、ダッド、生意氣じゃない。だつて本当のことだからな」

ダドリーの顎の筋肉がひくひくと痙攣している。

反面、ハリーはニヤニヤと意地悪く笑っていた。

全ての鬱憤をダドリーで晴らしている。

そんな表情だ。

……なんと醜い顔だろう。

これがかの伝説のハリー・ポッターかと思うと、護衛する気が無くなってくる。

2人は角を曲がり狭い路地へと入っていく。

「あれを持つてるから、自分は偉いと思つてるんだろ？」

ダドリーは怒りをかみ殺すと静かに言った。

「あれつて？」

ハリーはとぼける。

「あれ——お前が隠しているあれだよ」

多分杖のことだろう。

ハリーはダドリーの言葉を聞いて笑みを強くした。

「ダド、見かけほど馬鹿じゃないんだな？ 歩きながら同時に話すなんて芸当は、君みたいな馬鹿面には出来ないと思っただけだ」

ハリーがズボンから杖を取り出す。

私は呆れたように片手で顔を覆った。

馬鹿はお前だ。

「許されてないだろう？ 知ってるぞ。お前の通っているあのへんちくりんな学校から追い出されるんだ」

ダドリーが正論を言う。

喧嘩と同じで、先に自分の不利な物を出した方が負けなのだ。

反対に、先に自分の切り札を切った方も負ける。

「学校が校則を変えたかもしれないだろう？ ビッグD」

「変えないさ。お前なんか、そいつがなけりや、俺に掛かってくる度胸もないんだ。そうだろう？」

ダドリーは歯を剥く。

ハリーも負けじと言い返した。

「君の方は4人の仲間に護衛してもらわなきゃ、10歳の子供を打ちのめすこともできないんだ。君が散々宣伝している、ほら、ボクシングのタイトルだっけ？ 相手は何歳だ？ 7つ？ 6つ？」

「16だ。俺よりいつこ上。しかもお前よりも2倍は重たい。お前が杖を出したってパパに言いつけてやるから覚えてろ——」

「今度はパパに言いつけるのかい？ パパの可愛いボクシングチャンピオンはハリリーの凄じ杖が怖いのかい？」

私は時間を止めてハリリーの杖を取り上げようかとも思った。

だがハリリー自身散々警告を貰っているので魔法を使つてはいけないことはよく知っているだろう。

魔法を使うなら私のように匂いをどうにか消さなくてはならない。

「夜はそんな度胸はないくせに。そうだろ？」

「もう夜だよ。ダッド坊や。こんなふうにあたりが暗くなると、夜つて呼ぶんだ」
「お前がベッドに入ったあとのことさ！」

ダドリーがハリリーに凄む。

ハリリーは身に覚えがないのか首を傾げた。

「僕がベッドの上で度胸がないってなんのことだ？」

「昨日の夜聞いたぞ。お前の寝言を。呻いてた」

「何を言ってるんだ？」

ダドリーはその反応に吠えるような笑い声を上げ、それから甲高い声でハリリーの口真似をした。

「『あいつが！ あいつが帰ってくる！ 僕を殺さないで！ お父さん、僕を助けて！ ヴオルデモートが咲夜を殺そうとしている！』咲夜って誰だ？ お前のガールフレンドか？」

「き、君は嘘をついている」

ハリリーが否定するが、嘘のはずがない。

嘘だとしたらダドリーは開心術の使い手だろう。

「『父さん！ 助けて……父さん！ あいつが僕を殺そうとしている。父さん！ うえーん！ うえーん！』」

「黙れ！ 黙れ、ダドリー。さもないと……」

さもないとどうするというのだろうか。

杖で突くのか？

ぼきりと折られて終わりだろう。

「『父さん、助けに来て！ 母さん、助けに来て！ あいつは僕を殺そうとしている。父

さん、母さん！ あいつが僕を——』そいつをぼくに向けるな！」

ハリーが真つすぐダドリーに杖を突き付けた。

ダドリーは路地の壁際まで後ずさる。

そろそろ本当に止めた方がいいだろうか。

だが、私が姿を現すとこれからの護衛がしにくくなる。

「そのことは二度と口にするな。わかったか？」

「そいつをどつか他のところに向ける！」

「聞こえないのか？ わかったかかって言ってるんだ」

「そいつを他のところに向ける！」

「わかったのか？」

「そいつを僕から——ひいひい!!」

ダドリーがまるで冷水を浴びせられたかのような悲鳴を上げて息をのんだ。

次の瞬間辺り一面が真つ暗になる。

私は一瞬ハリーが魔法を使ったものかと思ったが、ハリーにはこのような技能はないはずだ。

私は杖を抜きあたりを警戒する。

透明マントを脱いだ方がいいだろうか。

この暗さなら見つかる可能性は低い。

私は透明マントを脱ぎ、鞆へと押し込む。

そしてこの暗さの原因を探った。

「何をするつもりだ？ や、やめろ！」

「僕はなんもしていないぞ！ 黙ってろ！」

「み、見えない！ ぼく、め、目が見えなくなつた！」

まあそう錯覚するのも無理はない。

私ですら周囲の様子が余り分からないほどの暗闇なのだ。

「黙ってろって言つたらう！」

次の瞬間何か鈍い音とハリーのうめき声が聞こえる。

一瞬敵にハリーが襲われたものかと思つたが、どうやら恐怖のあまりダドリーがハリーを殴りつけたものらしかった。

「ルーモス！」

だが何かが起こっているのは事実だ。

私は杖先に明かりを灯すと周囲を照らす。

そこには側頭を押さえながら杖を探しているハリーと何故かこの通りにいる『吸魂鬼』に向かつて走っているダドリーの姿があつた。

「エクスペクト・パトロナム！」

私は守護霊を作り出しダドリーのほうへと走らせる。

それに集中していた為か、ハリーの行動をよく見ていなかった。

私がダドリーにキスをしようとしている吸魂鬼を追い払っていると、後ろから銀色の霧のようなものが見える。

私は慌ててそちらの方向を振り向いた。

「ハリー！ 貴方何しているの!?!」

そう、ハリーは吸魂鬼に向けて守護霊の呪文を使っていた。

周りが見えていないにもほどがある。

ハリーの守護霊は牡鹿へと変身するともう一匹いた吸魂鬼を撥ね飛ばす。

私はハリーがこれ以上魔法を行使しないように後ろ回し蹴りでハリーの杖を弾き飛ばす。

そしてダドリーの吸魂鬼を追い払った自分の狼の守護霊を今度はハリーの方へと飛ばし残る吸魂鬼を追い払った。

「え？ …… 咲夜？」

ハリーが蹴られた手を摩りながら私のほうを見る。

いつの間にか路地には明かりが戻り、私は普通にハリーの顔を視認することができ

た。

「ハリー、貴方何をしたか分かってるの？ こんな情勢で今のは非常に拙いわ。……今すぐ帰った方がいい」

私は泣いているダドリーを肩に担ぎ上げる。

ボクシングのヘビー級のチャンピオンと自慢しているのを聞いたことがあるが、確かに80から90キロぐらいはあるかもしれない。

「ほら、行くわよ」

「ど、どうして咲夜がここに？ それに行くつてどこへ？」

ハリーが混乱したように杖を拾う。

「ダーズリーの家に決まっているでしょう？ あそこなら安全よ」

「でも、僕今魔法を使って……ってそれは咲夜もだろう？」

「私は大丈夫なのよ。匂いを消しているから」

私は泣いているダドリーを担ぎながら通りを駆ける。

ハリーも独りになりたくないのか必死についてきた。

急いでいるのには訳がある。

一刻も早くこの事態をダンブルドア先生に知らせなければならぬからだ。

そう時間は掛からずに私たちはダーズリーの家へと到着する。

私は杖で扉の施錠を解除するとダドリーを抱えたまま家の中に突入した。

「ひやああああああ！ なに！ 何事なの!？」

ダーズリー夫人の叫び声が聞こえる。

私はリビングのソファアの上へとダドリーを下ろし、ハリーに振り向いた。

「手遅れになる前に私はこのことをダンブルドア先生に伝えてくるわ。……あ、ダーズ

リーさんお邪魔してます。すみません勝手に家に押し入ってしまった……。いい？

ハリー。絶対にここを離れては駄目よ。もう一度言うから頭の中によく叩き込みなさい。

ここを絶対に離れるんじゃないわよ！」

混乱しているハリーを置いて、私はバチンと姿をくらます。

そしてそのままホグワーツの校長室へと姿現しした。

「ダンブルドア先生。大変です」

私は校長室の椅子に座っていたダンブルドア先生に詰め寄る。

ダンブルドア先生は片手を上げ、私を静止させた。

「何かあったのじゃな」

「ええ、ハリーが吸魂鬼に襲われました。私の注意不足の為にハリーに守護霊の呪文を

――」

「魔法省へ出かけてくる。君は本部へと行き騎士団員にこのことを知らせてほしい」

ダンブルドア先生はそういうと校長室から消えさった。
姿くらましだろうか。

術の詳細が気になるがそんな状況でもない。

私は姿現しでブラック邸へと移動する。

普段は玄関から中に入るが、急いでいるため今回は直接厨房へと移動した。

バチンという姿現し特有の音がして私は厨房へと着地する。

そこではモリーさんが今まさに夕食を作っているところだった。

「咲夜！ どうしたの？」

一緒に台所に立っていたハーマイオニーが心配そうに聞く。

私はハーマイオニーに急いでこの家の中にいる騎士団員メンバーを厨房へ集めるように指示を出した。

「え？ 何かあったのね？ 教えて！ 何があったの!？」

ハーマイオニーはその場から動こうとしない。

私は杖を取り出すと爆竹を打ち鳴らし大きく悲鳴を上げた。

「キヤアアアアアアアアアアアッ!!」

なんだなんだと本部にいた騎士団員たちが杖を持って厨房の中へと駆け込んでくる。

私はケロリと表情を戻すとハーマイオニーを厨房から追い出した。

「これでここにいる騎士団員は全員？」

私がブラックに尋ねるとブラックはコクリと頷く。

「ああ、全員だ……あんな方法で人を呼ぶものじゃない。誤解を招くから……」

「そんな場合じゃないわ。聞いて。ハリーが吸魂鬼に襲われたわ」

ざわざわと厨房内が騒がしくなる。

私は机をバンツと一度叩く。

全員がこちらに向き直った。

「話は最後まで聞きなさい。吸魂鬼は全て撃退したのだけれどハリーが焦って守護霊の呪文を使ってしまつてね。今ごろ魔法省から無茶苦茶な令状が届いている筈」

「このことはダンブルドアには？」

ルーピンが私に聞いた。

「勿論一番に伝えたわ。既に魔法省に向かつている。ダンブルドア先生ならなんとかちやいそうだけど、懲戒尋問は避けられないでしょうね」

「ああ、ハリー。きつと独りで震えているわ。家を飛び出さないといいけど……」

モリーさんが机に頭を伏せる。

ブラックはその言葉を聞いて羊皮紙に何かを書くときくろろくに付けて飛ばした。

「家から離れるなど忠告を出しておいた。この言葉が何処までハリーを引き留めてくれ

るかわからないが……」

「まるで構ってほしい犬みたいなのを言うのね」

「こんな状況で茶化すな咲夜。……このことはロンやハーマイオニーにも教えてやってくれ。モリー、いいよな？」

ブラックの言葉にモリーさんは少し悩んでいるようだったが、やがて小さく頷いた。「私からの報告は以上よ。やることのある人はさっさと動く！ ルーピン、ムーディに連絡を付けておきなさい。きつと彼の助けが必要になるわ。マンダンガスはスネイプ先生にこのことを知らせて可能なら吸魂鬼の出処を押しさえること。ビルはあちこちに伝書ふくろうを飛ばしまくって。情報の伝達は早い方がいいわ。モリーさん、夕食が焦げるわよ？ トンクスは魔法省に行つてキングズリーとアーサーと合流して頂戴。多分その2人とともにダンブルドア先生もいるわ！ ほらポケつとしてないでさっさとしなさい。対処が遅くなればなるほど状況は酷くなるわよ？」

厨房にいる殆どの騎士団員が慌ただしく行動を開始する。

その様子をブラックが呆れた顔で見ている。

「なんとというか、全員君の尻に敷かれているみたいだな」

「みんな不甲斐ないのよ。……いや、今回一番不甲斐ないのは私ね。もう少し注意していればこんなことには……」

「そう自分を責めるな。マンダンガスの奴だったら現場に居合わせることも知らないかも知れない。なんにしても被害自体はないのだから?」

「……そうね。被害はないわ。ダーズリーの息子が少し精神的にダメージを受けた。かも知れないけど」

私はひらひらと右手を振ると厨房から出ようと扉に手を掛ける。

だが扉を開けた瞬間ドミノ倒しになるようにロンとハーマイオニー、フレッド、ジョージ、ジニーが厨房に倒れ込んだ。できた。

「何があったんだ!?! ハリーがどうしたって!?!」

ロンが一番下で混乱するように叫ぶ。

「ちよつと、フレッド! 重たい!!」

「ジョージに言ってくれよハーマイオニー! おい、ジョージ重たいぞ!」

「ジニーに言ってくれ! おい、ジニー重たいぞ!」

「ハリーに何かあったの?」

一番上に乗っかっているジニーが顔を上げて私に聞いた。

順番にジニーから起き上がり全員が立ち上がっていく。

私がブラックに目配せすると、ブラックは小さく頷いた。

「ハリーが吸魂鬼に襲われたわ。守護霊の呪文を使って撃退したのだけれど……ハリー

は魔法の匂いを消すことが出来ないから十中八九魔法省からなにか令状が届くでしょうね。……モリーさん夕食焦げてるわよ？」

私は焦げ臭い匂いがしたので鍋のある方を見る。

モリーさんは今にも鍋をひっくり返しそうになりながら中身をかき混ぜ始めた。

「それマジかよ咲夜！　咲夜が護衛についてたんじや？」

「なんでそれを貴方が知っているのかしら？　ロン」

私の言葉にロンが拙いと言わんばかりに視線を逸らす。

私はため息をつくと事情を話して聞かせた。

「勿論吸魂鬼は私が追い払ったわ。でもハリー自身焦っていたみたいでね。私が止めようと振り向いた時にはもう守護霊の呪文を使っていたのよ」

「でも未成年でも命の危険があれば魔法を使ってもいいんでしょう!?　私本で読んだわ。ちょっと調べてくる」

ハーマイオニーは勢いよく厨房から飛び出していった。

次の瞬間厨房にアーサーとキングズリー、トンクス、ダンブルドア先生が姿現ししてくる。

「シリウス、咲夜から事情は聞いているな。咲夜、一体何があった？」

アーサーが私に質問を飛ばした。

「大方そつちが掴んでいる通りよ。ダンブルドア先生もここにいるということはある程度状況はよくなったのでしよう?」

私はちらりとロンを見て言う。

その視線でアーサーは察したのか軽く頷いた。

「ああ、そうだな。状況はだいぶ良くなった。魔法省は真つ先にハリーに退学処分と杖の破壊を言い渡した。だがこれは余りにも不当だ。ダンブルドアが直々に抗議をし懲戒尋問をすることになった。全てはそれまで保留だ」

「尋問の日程は?」

「10日後じゃよ。咲夜」

アーサーに代わってダンブルドア先生が答える。

結構時間があるものだとは感じた。

「フレッド! ジョージ! ロン! ジニー! 2階に上がきなさい! ここから先は騎士団員以外は聞いてはいけません!」

「そりゃないぜママ!」

「そうさ! こんな生殺しで寝れるわけないよ!」

双子が叫ぶ。

「ハリーが危ないんだらう!」

ロンも叫んだ。

「貴方たちは若すぎます！」

「だからどうした!? 咲夜だって未成年だ。ようは実力さえあれば——」

私はノーモーションでこの場にいる全員に同時にナイフを投げる。

アーサー、モリーさんは呪文でそのナイフを砕き、トンクスは払いのけ、キングズリーは片手でそれをキャッチする。

ブラックやダンプルドアに至っては指2本でそれを掴み取っていた。

一方ウィーズリーの兄弟たちは全員反応できず、全員の目の前でナイフが止まってる。

勿論初めから当てる気はない。

私を手を振るうと投げたナイフが全て手元に戻ってきた。

「騎士団員は止められて、貴方たちは止められない。これが実力の差よ。反応速度が桁違いだわ。言っておくけどさつきのはかなり低速よ。分かったらさつきと2階に上がりなさい。今、すぐに」

私は厨房のドアを指さす。

フレッド、ジョージ、ロン、ジニーは顔を真っ青にして厨房から出ていった。

「焦ってるのはわかるがそうトチ狂うな咲夜。普通に危ない」

ブラックが静かに言う。

「私は何が？　という態度を取った。」

「アーサーとモリーさんは顔を真っ青にしている。」

「トングスも冷や汗を掻いていた。」

「……なによ。だらしのないわね。それでダンブルドア先生、ハリーはどうするのですか？」

「私は何事もなかったかのようにダンブルドア先生に聞いた。」

「ふむ、頃合いを見計らってここへ連れてくるかの。トングスの話じゃ既に指示は出しておるのじゃろう？」

「このことを伝達しただけです。もし迎えに行くのだとしたらその計画も立てなければなりません」

「トングス」

ダンブルドアはトングスに声を掛けた。

「ダーズリー一家を一時的に家から遠ざけてほしい。そうじゃな、あの一家だったら何かの式典があると手紙を出せば喜んですつ飛んでくじやろ」

「わかったわ」

トングスは椅子に座り羊皮紙を取り出す。

私はその羊皮紙の上に郵便はがきを置いた。

「こつちで頼むわ。多分ふくろうが飛んで来たら撃ち落としちゃうから」

「撃ち落とす?」

トンクスは首を捻ったが、郵便はがきに全英郊外芝生手入れコンテストで最終候補に残ったと書いた。

私はその手紙にダーズリー家の住所を書き込むと切手を貼る。

「郵便ポストってわかる?」

「それは大丈夫。場所も完璧。お父さんはマグルだしね」

トンクスはバチンと姿くらましました。

「さて、郵便が届くまで暫し時間があるじやろ。リーマスがアラスターを連れてきたら作戦を考ええんとならんのだ」

ダンブルドア先生はどっしりと椅子に座る。

私は取り敢えずこの騒動が一段落したのでモリーさんの横に立ち夕食の準備を手伝おうとする。

だが鍋の中身は既に食べられるような代物ではなかった。

「……モリーさん。これは砂糖じゃなくて粉石鹼よ。スコージファイ」

私が杖を振るうと焦げ付いた鍋は新品同様に輝く。

「つらいなら無理しなくていいと思うわ。夕食は私が作っておくから少し休みなさい」
アーサーにモリーさんを任せ夕食の準備を始める。

することがないからか、ブラックが私の横に立ち手伝い始めた。

「まったく、君にはいつも驚かされるね。ダンブルドアが2人いるみたいだ」

「そう？ それは困ったわね。じゃあこれの皮を剥いてくれるかの？ わしやもう歳
じやから細かいことをすると手先が震えてのう……」

私はダンブルドア先生の声真似をする。

「まだそこまで老けてはおらんよ」

「100歳越えてるでしょう？ よく言うわ」

ブラックは苦笑しながらジャガイモを受け取る。

私はコンソメと少しの調味料でスープの味を調えた。

これから忙しくなるだろう。

私は鍋を混ぜながらそのようなことを考えていた。

その4日後、ようやくハリーの護送が行われることとなった。

聞かぬのであるキングズリーがあちこちに秘密裏に手を回し、安全を確保したとのことだ。

ハリーの護送任務には多くの騎士団員が名乗りを上げた。

私たちは前衛、後衛、支援の3組に分かれ、作戦を開始する。

作戦自体は簡単だ。

前衛が姿現しでハリーの家の近くまで移動し、ハリーを家から連れ出す。

そして箒に乗って本部まで戻ってくる。

途中前衛が何者かに襲われたら後衛がハリーと合流しやはり本部へとハリーを護送する。

支援の組は安全を確認し、前衛へと合図を送ることになっていた。

後衛、支援の組は既に本部を離れて配置についている頃だろう。

私は前衛に選ばれた人物をぐるりと見回した。

ムーディ、ルーピン、キングズリー、トンクス、ドージ、デイグル、バンス、ボドモア、ジョーンズ。

そして私だ。

ムーディが広いホールにいる面々をぐるりと見ると、手で軽く合図をした。

次々に魔法使いが姿くらまししていく。

私もそれに合わせて姿くらしをした。

私が地に足をつけるころには殆どのメンバーがダーズリーの家の前に集合していた。

「アロホモラ」

トンクスがドアのカギを開錠するとわらわらと家の中へと入る。

マグルの家に入ったのは初めてなのか半数ぐらいが電化製品をあちこち触り楽しそうに話し合っていた。

「呑気なものね」

「全員警戒を怠るな」

ムーデイは油断なく杖を構えている。

次の瞬間上の階で扉が開く音が聞こえた。

全員が咄嗟に音のした方を見る。

すると非常に警戒した様子のハリーが杖を持って現れた。

「おい坊主、杖を下ろせ。誰かの目玉をくり貫くつもりか？」

ムーデイが低く唸る。

「ムーデイ先生？」

ハリーは半信半疑といった表情だった。

それはそうだろう。

去年ハリーがムーディだと思って接してきた人は、実は死喰い人だったのだから。

「先生かどうかはよくわからん。何せ教える機会がなかっただろうが？　ここに降りてくるんだ。ちゃんと顔を見せろ」

ハリーは次の行動を決めかねているようだった。

杖を降ろさず迷ったように私たちを見つめている。

どうやらこの暗さで私たちの顔が良く見えていないらしい。

「大丈夫だよ、ハリー。私たちは君を迎えに来た」

「ルーピン先生？　本当に？」

「そっか、わたしたちどうしてこんな暗いところに立つてるんだろ。ルーモス」

トンクスが杖先に明かりを灯す。

ハリーは驚いたように私たちを見回した。

「わあああ、私の思った通りの顔してる。よっ！　ハリー！」

トンクスが楽しそうに杖を振る。

なんとというかトンクスは美鈴さんに通じるところがある気がする。

「うむ、リーマス、君の言っていた通りだ。ジェームズの生き写しだ」

「目だけ違うな。リリーの目だ」

キングズリーの言葉にドージが半分同意する。

ムーディは左右2つの目でハリリーを怪しむように見ていた。

「ルーピン、咲夜、確かにポッターだと思うか？ ポッターに化けた死喰い人を連れ帰つたら笑いごとじゃ済まないぞ。誰か真実薬を持つてないか？」

「あるわよ」

私は鞆の中をゴソゴソと漁る。

その様子にルーピンは慌ててハリリーに質問を飛ばした。

「ハリリー、君の守護霊はどんな形をしている？」

「牡鹿」

ハリリーは短く答える。

確かにハリリーの守護霊は牡鹿だ。

ルーピンは安堵したようにため息をつく。

「マッドアイ、間違いなくハリリーだ」

ルーピンはそう断言した。

ハリリーはその言葉を聞いて恐る恐る階段を下りてくる。

そして下りながら杖をズボンの尻ポケットに仕舞おうとした。

「おい、そんなところに杖を仕舞うな！」

その瞬間ムーディが怒鳴った。

「火が点いたらどうする？ おまえよりもしつかりした魔法使いがそれでケツを失くしたんだぞ！」

「それマジ？ 一体誰？」

トunksが興味津々に聞いた。

「誰でもよからう。とにかく尻ポケットに杖を入れるな」

ムーデイはそう唸ると調子が悪そうに義眼を動かす。

ルーピンが順番にここにいるハリーと初対面の魔法使いを紹介していった。

「くそつ……動きが悪くなった。あの馬鹿がこの目を使つてからずっとだ。ハリー、コップに水を入れてくれんか？」

ムーデイは義眼を指で引っこ抜く。

その様子を見てトunksが顔を顰めた。

「マッドアイ、それかなり気持ち悪いわよ？ わかつてるの？」

「これ以上に便利な義眼を他に知らんのでな。や、どうも」

ムーデイはハリーの持つてきた水入りのコップに義眼を入れ、指で突いて浮き沈みさせる。

「帰路には360度全方位の視野が必要になる」

「どうやって行くんですか？ ……どこへ行くかも知らないけど」

ハリーがムーディの言葉を聞いて尋ねた。

「筈だ。それしかない」

ハリーの問いにルーピンが答える。

「君は姿現しには若すぎるし、煙突飛行ネットワークは見張られている。未承認のポトキーを作れば我々の命がいくつあっても足りないことになる」

「リーマスが、君は良い飛び手だと言うのでね」

「ああ、素晴らしいよ。とにかくハリー、荷造りをした方がいい。合図がきたときに出発できるように」

キングズリーの言葉にルーピンは笑顔で頷き、ハリーに荷造りをするようにと指示を出す。

「私手伝うわ」

トンクスがハリーの肩を持って2階へと上がっていった。

ルーピンはその様子を少し心配そうに見送ると机に便箋を広げこの家へ残していく手紙を書き始める。

キングズリーとポドモアは楽しそうに電子レンジを調べていた。

私は目の調子確かめているムーディに声を掛ける。

「どうしても拙いことになったら声を掛けて。なんとかするから」

「小娘が何を言う。……と言いたるところだがダンブルドアがお前の力を認めていることは確かだ。じゃないと騎士団の主要メンバーには置かないからな。期待はしておくぞ」

ムーディは通常の目で私を見る。

私は小さく頷いた。

しばらくするとトランクスがハリーのトランクを浮かせ下りてくる。

ハリーもその後が続いていた。

「よし、あと一分ほどで安全確認が終わるはずだ。庭に出て待つていた方がいいかもしれないな。ハリー、叔父さんと叔母さんが心配しないように手紙を残したから——」

「心配なんてしないよ」

ルーピンの言葉をハリーは遮った。

「——君は安全だと——」

「がっかりするだけさ」

「——そして君がまた来年の夏休みに戻ってくるって——」

「そうしなきゃいけない?」

ルーピンはそんなハリーの様子を見て軽く微笑む。

大方、「ああ、ジェームズの子だなあ」などと思っているのだろう。

「おい、こつちへ来るんだ。お前に目くらましをかけないといかん」

ムーデイが乱暴にハリーを引き寄せる。

「えつと……何をしなきゃつて？」

ハリーが心配そうに尋ねた。

「目くらまし術だ。お前さんは透明マントを持つているようだが飛んでいたら脱げてしまふ。こつちのほうが上手く隠してくれるだろう。それ——」

ムーデイはハリーに目くらまし術を掛ける。

するとハリーはまるで背後を透過しているように色を変えた。

「これでいい。行こう」

ムーデイが杖を振るうと裏庭に続く扉の鍵が開く。

私たちは見事に手入れされた芝生の上に出た。

鞆を開き、オークシャフト79を取り出す。

ハリーは既にファイアボルトに跨っていた。

「ハリー、お前は真ん中だ。トンクスの後に続け。ルーピンはハリーの下だ。わしは背後にいる。十六夜は先頭を飛べ。他の者は周囲を旋回しながら警戒する。いいか？

何事があつても隊列を乱すな。例え誰かが殺されても——」

「そんなことがあるの？」

「——ほかのものは飛び続ける。止まるな。列を崩すな。もし死喰い人どもがわしらを全滅させたとしてもハリー、お前はまっすぐ飛び続ける。後衛が合流しお前の護送をする」

ハリーの言葉は軽く無視されてしまったようだ。

私は赤い閃光を確認し、箒へと跨る。

「そろそろ出るわよ。準備をしなさい」

私の言葉にハリーは急いでファイアポルトの柄を掴みなおした。

次の瞬間緑色の光が私の目に映る。

私は地面を強く蹴り大空へと飛び立った。

そのまま上空へと昇り、ムーデイの指示に従って進路を変える。

ムーデイは非常に用心深い性格だ。

彼の指示通りに飛んでいれば大体の危険は回避できるだろう。

私はハリーの方を見る。

ハリーは寒そうに凍えていた。

この季節とはいえ、上空は冷える。

少し急いだほうがいいかもしれない。

私はオークシャフトで出せる限界の速度でブラック邸へと一直線に飛ぶ。

そして一気に降下して小さな広場の上に着地した。
その横にハリーも着地し、辺りを見回している。

「ここは何処？」

「あとで教えるわ」

私は上空を見上げる。

次々と魔法使いたちが広場へと着地していった。

ムーディはマントの中をゴソゴソと漁ると小さなライターを取り出す。

そして火をつけるように一度カチツと鳴らすと近くの街灯の明かりがポンと消えた。

ムーディはそれを繰り返し広場の明かりを全て消した。

「ダンブルドアから借りた。これでマグルが窓からこちらを覗いても大丈夫だろうか？」

「さあ、行くぞ、急げ」

ムーディは暗闇の中をハリーの腕を掴んで歩き出す。

私は杖を構えその後続いた。

そして数分も歩かないうちにムーディは立ち止まる。

私は首を回し建物を見た。

そう、ブラック邸だ。

「急いで読め。そして覚えてしまえ」

ムーデイが杖明かりと共にハリーに羊皮紙を押し付ける。

大方ブラック邸の住所だろう。

「なんですか？ この騎士団って……」

どうやら羊皮紙には不死鳥の騎士団のことも書いてあったらしい。

ハリーがムーデイに聞くが、ムーデイは口を噤んだ。

「中に入るまで待て」

ムーデイはハリーから羊皮紙をひつたくると杖でそれに火をつける。

ルーピンはブラック邸の玄関へと進み、古びた扉に杖で一回叩いた。

途端に中で鍵の開く音がしてゆっくりと扉が開く。

「早く入るんだハリー。ただし、あまり奥には入らないようにね」

ルーピンがハリーを急かす。

ハリーがブラック邸へと入ったのを見て騎士団員が次々と中へと入っていった。

私も中へと入るとムーデイは街灯の明かりを戻し扉を閉める。

任務は無事終了というわけだ。

「みんな、じつとしていろ……わしがここに少し明かりを点けるまでな」

ムーデイが壁についている蠟燭に火をつける。

玄関ホールが蠟燭の弱い光で照らされた。

厨房の方からドタバタと誰かが走ってくる音が聞こえてくる。
ブラックだろうか。

いや、ブラックにしては足音が重たい。

「まあハリー、また会えて嬉しいわ！」

足音の主はモリーさんだった。

モリーさんはハリーの肋骨を折らんばかりに強く抱きしめる。

「瘦せたわね。ちゃんと食べさせなくちゃ。でも残念ながら夕食までちよつと時間があ
るわ」

モリーさんはようやくハリーを解放すると、私たちに声を掛けた。

「あの方がいましたがたお着きになって、会議が始まっていますよ」

あの方とはダンブルドア先生のことだろう。

モリーさんの言葉を聞いて騎士団員たちが次々に厨房へと入っていく。

ハリーはルーピンについて厨房に入ろうとしたが、モリーさんに引き留められた。

「だめよ、ハリー。騎士団のメンバーだけの会議ですからね。ロンもハーマイオニーも
上の階にいるわ。会議が終わったら夕食よ。案内するわ」

モリーさんはハリーを引き連れて2階へと上がっていった。

私は騎士団員に続き厨房へと入る。

上座にはダンブルドア先生が座っており、殆どの騎士団員が席についていた。

「護送は無事終了だ。支援の班から聞いた話だが、死喰い人の姿は確認できなかったら
しう」

ムーデイが自分の酒瓶から酒を飲みつつダンブルドア先生に報告する。

「皆のもの、よう頑張ってくれた。ハリリーの身柄はこの本部で預かる。警備の者はいつ
も以上に警戒するように。ムーデイは近場におつてくれ。ハリリーを動かすときの護衛
をして欲しいのです。他の者は自分の任務に戻つてよろしい。今まで交代でハリリーの
監視、護衛をおこなつておつたものは死喰い人の搜索と関係者の安全確保に努めてく
れ。さて、ムーデイよ。護送の時の話を詳しく教えてくれるかの？」

ダンブルドア先生の言葉にムーデイが答えようとしたその時、上の階からハリリーの大
声が聞こえてくる。

それと同時にモリーさんが厨房に入つてきた。

「え？ 何？ ハリリーに何か……」

モリーさんはいきなりのことに肩をビクつかせる。

私はモリーさんを座らせ厨房の扉の方へと向かった。

「ちよつと見えます。盗聴対策に呪文を掛けておいてください」

「ほどほどにな、小娘」

「本当にほどほどで頼むよ?」

ムーディの言葉にルーピンが同意した。

「なに、殺す気で行け」

「スネイプ、今皆で命がけでハリーの命を守っていたところなんだが?」

低く冷たいスネイプ先生の冗談を、ブラックが問い返した。

「会議を続けておいてください。すぐに戻ってきますので」

私は厨房を出ると2階へと上がる。

2階の子供部屋に近づくにつれてハリーの声が大きくなってきた。

どうやらかなり興奮しているようだ。

「4年生のとき、いったい誰が、ドラゴンやスフィンクスや、他の汚いやつらを出し抜いた? 誰がアイツの復活を目撃した!? 誰があいつから逃げさせた!? 僕だ!!」

何か言っている。

正直うるさい。

「だけど何が起こっているかなんて、どうせ僕には知らせる必要はないよな!? 誰もわざわざ僕に教える必要なんてないものな? 4週間もだぞ! 僕はプリベット通りに缶詰で、何がどうなっているのか知りたくて、ごみ箱から新聞を漁ってた!!」

ああ、あの奇行の正体は気が狂った末の行動ではなかったわけだ。

あの光景を見たときにはもうハリーは駄目かも知れないと本気で考えたものだ。

「君たち散々僕を笑いものにしてたんだ!! そうだろう!!? みんな一緒にここに隠れて——」

「五月蠅いッ!! 口を縫い合わすわよ!!」

私はドアを蹴り開けてハリーに怒鳴る。

少々スマートではないが、大声で叫ぶ相手にはそれ以上の大声で圧倒するしかない。ハリーはいきなりの大きな音と大声で弾かれるようにこちらを見る。

一緒の部屋にいたハーマイオニーとロンは腰を抜かしていた。

「今下で会議をしているの。静かにしてください」

「咲夜、君だって——」

「ハリー、やめとけよ。咲夜には——」

「僕はこの4週間何も知らなかったんだ!! けど咲夜はあの場にも今日この場にもいた!! 一体どうい——」

私は鞆から裁縫道具を取り出す。

そして湾曲している縫い針を取り出した。

「ロン、ハーマイオニー。ハリーを押しえておきなさい」

「冗談きついで咲夜!!? ハリー、もう黙った方がいい。あの目は本気だ」

ロンがハリーの口を手でふさぐ。

私はその様子を見て裁縫道具を仕舞い直した。

「ハリー、事情はその2人から聞きなさい。私は会議に戻るわね」

私は手をひらひらと振って厨房へと姿現しする。

そして何食わぬ顔で会議へと戻った。

尋問とか、監督生とか、雑誌とか

8月12日、早朝。

私は1日の仕事を終わらせて自分の部屋で仮眠を取っていた。

不死鳥の騎士団とメイド長との二重生活は正直少し疲れる。

夜は紅魔館で使用人としての仕事をこなし、昼は不死鳥の騎士団員として仕事をこなす。

私はベッドから起き上がると一度大きく伸びをした。

そして寝間着からピシツとしたスーツへと着替える。

今日はハリーの懲戒尋問の日だ。

私も証人として呼ばれるかもしれない。

化粧台の前に座り薄く化粧をする。

全ての準備が整うと地下の大図書館へと向かった。

この紅魔館で外と繋がっている暖炉は図書館の物しかない。

というよりかは、暖炉の管理ができるのがパチュリー様しかないだけだが。

「あら、今日は一段とおしゃれなのね」

パチュリー様が私の服装を見て言う。
スーツはおしゃれ……なのだろうか。

「今日はハリーの懲戒尋問ですのぞ」

「そう、……あ、そうぞ。ハリーの裁判は法廷10号で行われるわ。エレベーターで降りれるところまで降りて、更に階段を下った先よ」

「変更になったのですか？」

私が聞いていた場所と時間とは随分と異なる。

「そうよ。あと10分ぞ変更になるの。あと、魔法省なら煙突飛行より姿現しの方がいいわ」

「わかりました。では、行ってまいります」

私はパチュリー様に頭を下げると図書館から姿をくらませる。

そして魔法省の玄関ホールへと姿を現した。

魔法省には一度来たことがある。

と言つてもムーディの付き添いで、多少顔を出したという程度なのでここに用事であることは初めてぞ。

私は慌ただしく動き回る役人たちの間を縫うように進み受付へと向かう。

そして無精髭の魔法使いに声を掛けた。

「外来です。杖の登録をしたいのですが」

「杖」

係員は片手をつまらなそうに突き出す。

私が自分の杖を差し出すと皿が一つしかない秤のような魔法具に杖を置く。すると台のところにある切れ目から細長い羊皮紙がスルスルと出てきた。

係員はそれを破り取り、読み上げる。

「25センチ、吸血馬のたてがみ、使用年数4年。間違いないか？」

「ええ」

「これは保管する。これはそっちに返す」

係員は羊皮紙を真鍮の釘に刺すと、杖を私の方へと手渡した。

「どうも」

私はそのままゲートをくぐり、その向こう側の小ホールへと出る。

そこには20機以上のエレベーターが並んでいた。

確かパチュリー様はエレベーターで降りれるところまで降りろと言っていたか。

私は1つのエレベーターの前に出来ている列へと加わる。

そう長い時間を掛けずにエレベーターは目の前に降りてきた。

私は待っていた他の魔法省の役人と共にエレベーターに乗り込む。

そして地下9階のボタンを押した。

本来なら地下2階で行われるはずなのだが、パチュリー様の仕入れた情報に限って間違いはないだろう。

子供の冗談ならまだしも、お嬢様やパチュリー様の言葉は信じて従わないとこちらが死ぬような場合もある。

疑う余裕などないのだ。

エレベーターは途中で何度も停止しながら下へ下へと降りていく。

私は懐中時計で時間を確認した。

午前7時30分。

まだ全然余裕があるはずだ。

もつとも、本来ならば開廷1時間前にはその場にはいないといけなのかも知れない。だが流石にそこまで時間を潤沢に使っている余裕はないのだ。

私は地下9階でエレベーターを降り、異様な雰囲気の中を進んでいく。

廊下の壁は剥き出しで、廊下の突き当たりにある真っ黒な扉以外は何も無い。

いや、更に下に下りる階段はあるようだ。

私は左の方へと向かい階段を下りる。

階層でいうと地下10階になるのだろうか？

階段を下りきると石壁に松明という何とも胡散臭い廊下が広がっている。

ホグワーツの地下牢教室に行く廊下に似ているかも知れない。

廊下にはとどころ重厚な扉となっており、私は横に掛かっている表札を見ながら法廷10号を探す。

そして数分も歩かないうちに私は法廷10号を見つけることができた。

「時間は……7時50分。ギリギリセーフ……よね」

私は確証なく頷く。

そして魔法でこじんまりとした丸椅子を取り出すと扉の横に置き腰を掛けた。

多分ハリーは既に法廷内だろう。

被告人がこんな時間まで何処か違う場所をほつつき歩いていたら印象を下げるところではない。

ダンブルドア先生からは法廷の外で待つようにとの連絡を受けている。

証言が必要な時に呼び出されるということだろう。

私は椅子の上で背筋を伸ばすと法廷内の会話を聞こうと耳を澄ます。

だが特殊な魔法が掛かっている為か、会話どころか人の気配さえしなかった。

もしかして場所を間違えたか？

私は一度立ち上がり法廷の表札を確認し直す。

法廷10号、確かにここのはずだ。

パチユリー様が間違っていることなどまずありえない。

清掃員が表札を間違えてつけ直してしまったと言う方がまだ信じられるというものだ。

私は懐中時計をもう一度取り出し時間を確認する。

8時ジャスト。

懲戒尋問が始まった。

私は柄にもなく緊張しているようで、少し手の平に汗を掻いている。

多分これが自分の裁判だったらこのような心境になることはないのだろうと、そんなよくわからないことを考えていると、廊下の端の方から誰かが走ってくる音が聞こえてきた。

私はそちらに視線を向ける。

「はっ。」

なんとこちらに走ってきているのは被告人であるはずのハリーと、案内をしている手筈のアーサーだった。

時計で時間を確認するが現在の時刻は8時10分。

あまりにも大きな遅刻だ。

「なんで貴方がそこにいるのよ。ハリー」

私が呆れたような声を出す。ハリーは取り敢えずハリーを法廷の中へと押し込める。

そして額に浮いた汗を拭い喘ぎ喘ぎに言った。

「逆になんて君が間に合っているんだ。咲夜。君の方には時間の変更の知らせが届いていたのか？」

「あー……まあね。それじゃあ本部には届かなかった？」

「まあ、少し違うがそんなところだ。この遅刻でハリーが不利にならなければいいが……」

アーサーは杖を一振りし私と同じような丸椅子を取り出し膝を笑わせながら腰かける。

私は鞆から一杯の水を取り出すとアーサーに渡した。

「ああ、ありがとう。ダンブルドアも知らせを受け取っているといいが……」

「ダンブルドア先生ですもの。大丈夫よ」

「ああ、ダンブルドアだからな。例え受け取っていなくても時間通りについているだろう」

私とアーサーの間に妙な安心感が生まれる。

ダンブルドアなら何とかしている。

確証はないが、確信できるような人物なのだ。

「アーサーはここにいてもいいの?」

私はアーサーの顔を見て聞く。

「咲夜らしくもない。今日は土曜日だ」

「休日には1日早いと思うのだけれど……」

「魔法省は週休2日だ。ホワイトだろう? ……まあ忙しい時はこの限りではないが」

アーサーは少し表情を曇らせる。

「ファッジがあまり私に仕事を回さなくなつた。まあ理由は分かっているし、自由な時間が増えるというのはいい。それだけ騎士団の仕事に従事できるからね」

「たまには家族とゆつくり話をした方がいいわよ。私が言えたことじゃないかも知れないけど」

「うちほど仲のいい家族もそうそう居ないさ」

「パーシー」

「あの子は例外だ」

アーサーはびしやりと言いつつた。

そう、パーシーは夏休みに入つてすぐぐらいの頃に大臣付下級補佐官に昇進したの

だ。

ホグワーツを卒業して一年目にしては凄くいい役職と言えるだろう。

だが、仕事があのでファッジ大臣の補佐なのだ。

あることないこと色々吹き込まれたらしく、アーサーと大喧嘩をしたらしい。

それもあつてパーシーは今ウィーズリー家からは少し疎遠になっているのだ。

「そういう咲夜はどうなんだ？ 館の仕事もしているんだらう？」

「お嬢様は夜型だしね。この時間は眠っていらっしやるわ」

「そうじゃない。君はいつ寝ているんだ。あまり無理をすると体調を崩すぞ。そうだ、

私がダンブルドアに掛け合つて少し君の仕事を——」

「ハーマイオニーと同じこと言つてるわよ？ 大丈夫。ちゃんと寝てるし食事だつて

取つてるわ。寝不足は肌に悪いもの」

私はそう言つて人差し指で自分の頬を軽く突く。

その様子を見てアーサーは少し微笑んだ。

「こつやつて何も無い時に話すと君は普通の女の子だ。ジニーやハーマイオニーのよう
にね」

「普段は普通じゃないと？」

アーサーは私から視線を逸らす。

「あー、……仕事中の君は少し怖い。私としては——これはほんの提案なのだが、もう少し柔らかい物言いをしてもいいとは思うよ」

「嫌よ。騎士団の活動中は全員がムーデイのように振る舞うべきだと私は思うわ。誰かが死んでしまつてからじゃ遅いもの」

「その通りだ。だから私もそういう意識を持つているムーデイや君を信頼しているし、頼つてもいる。騎士団員には少し危機感に欠ける者が多い……」

マンダンガスやブラックなどがいい例だろう。

逆に言えばモリーさんなどは危機感を持ちすぎて少し心配になるぐらいだ。

私が口を開こうとした次の瞬間、法廷のドアが静かに開いた。

「証人が外で待つているという話だったか？」

中から出てきたのはパーシーだった。

アーサーはパーシーの姿を目で捉えるとギロリと睨む。

パーシーも負けじと睨み返した。

「私よ」

「来い」

パーシーはアーサーから視線を私へと移すと短く言った。

そしてそのまま法廷の中へと戻っていく。

私はパーシーに続いて法廷内へと足を踏み入れた。

中には赤紫色のローブを着た魔法使いたちが50人ほど居て、その全員が私を見てい

る。
その魔法使いたちの最前列の真ん中に魔法大臣であるコーネリウス・ファッジが座つていた。

パーシーは最前列の一番端へと座り直し、大臣の言葉を待つ。

私は視線を横にずらしハリーの方を見る。

証人と言われダドリーが出てくるとでも思っていたのだろうか、安堵のため息をついていた。

「ここに座りなさい」

ハリーの横にはダンブルドア先生がおり、私に椅子を譲っている。

年寄りから椅子を奪う趣味はないのだがと思っていたらダンブルドア先生はもう一つ椅子を取り出し座り直す。

私はその様子を見て遠慮なく空けてもらった席に腰かけた。

「姓名は？」

私が座った途端にファッジ大臣が大声を上げる。

「咲夜・十六夜と申します」

「それでは証言しろ」

大臣は何の説明も無しに話を進めていく。

それも作戦の1つなのだろう。

私はどんなことを証言すればいいかわかっていたので静かに椅子から立ち上がり証言を始めた。

「8月2日、夜の9時頃だったと思います。私はマグノリア・クレセント通りとウイステリア・ウオークの間の路地で男の悲鳴を聞きました。何かあったのだろうと思いい路地の入口に行ってみると、そこでハリーとハリーのいとこのダドリーが吸魂鬼に襲われていたのです」

「それで？」

フアツジ大臣が高飛車な態度で先を促す。

「吸魂鬼は2人いました。1人はダドリーにキスを施そうとしており、1人はハリーに襲い掛かっていました。ハリーの守護霊が間に合わなかったら2人とも、もしかしたら私も魂を吸い取られていたことでしょう」

「君は何故そんな場所をそんな時間にうろついていたんだい？」

魔法使いの1人が私に質問を投げかけた。

「フィッグおばさんのところに遊びに行っていたのです。フィッグおばさんというのは

リトル・ウインディングに住んでいるスクイブの——」

「その話はもうよい。話はそれだけか」

「いえ、まだあ——」

「ん、ん！」

突然何故か音が大きい咳払いのようなものが聞こえて全員がそちらに注目する。

そこには青白いアマガエルのような魔女が立っており、肩の高さで手を上げていた。

「ドローレス・ジェーン・アンブリッジ上級次官に発言を許す」

どうやらその魔女のような生物はアンブリッジというらしかった。

アンブリッジは少女のような甲高い声でニタニタと笑いながら言葉を紡ぎ始める。

「残念ですが貴方の証言には、んー、証拠がない。こんな小さなお嬢さんの言葉なんて一体誰が信用すると？ それにこの女の子は……有名人だわ。被告人と同じ部類のね」

「あら、今のは貶されたのかしら。褒められたのかしら」

私が咄嗟に言い返すとアンブリッジはニタニタを強くする。

だが笑っているのは口元だけで目は冷ややかだった。

「では貴方の言葉に一つでも証拠が提示できるものがあるかと？」

「逆に問うわ。吸魂鬼を追い払う目的以外で守護霊の呪文を使うものなのですか？」

これがくらげ足呪文や簡単な浮遊魔法なら話は分かります。論理的に考えれば自ず

と答えは見えてくるものだと思うのですけど」

私は暗に「お前は馬鹿だ」とアンブリッジに言う。

アンブリッジはその意味を十分に理解したようだ。

顔を赤くし、口元が変に歪んだ。

「カッツとなつて悪戯系の呪文を使つてしまいましたならわかります。去年のハリーがそうでしたので。ですがなんの目的もなく守護霊の呪文を使いましたというのは筋が通りません。守護霊が紅茶でも淹れてくれるんですか？ 熟練者となれば守護霊に伝言を託すこともできるでしょう。ですがハリーはふくろうを持つています。アンブリッジ上級次官、守護霊の呪文というのは邪悪なものを追い払うこと以外に使い道があるのですか？」

「で、伝言を託した——」

「それは先ほど私が言いました。他には？ 吸魂鬼が現れたという状況以外にどんな時に使うのでしょうか。まさかここにいる魔法使いの中に口喧嘩になつたら相手に対して守護霊を飛ばして悪口を伝えるような人はいませんかよね？」

私の発言が終わると法廷内がざわつく。

半分が今私が提示した吸魂鬼がいなければ守護霊を出す必要がないという意見に對する議論だ。

だがもう半分は「あのアンブリッジが少女に言い負かされたぞ」といった内容だった。その発言から私はあのアンブリッジという魔女がどのように出世してきたのか分かった気がした。

「証人。退出してよい」

ファツジ大臣が苦し紛れに言った。

どうやらこれ以上なにか喋る前にさっさと法廷から追い出すつもりらしい。

……少々逆らいたい気もするが、ここは大人しく退出するべきだろう。

私はちらりと横目でダンブルドア先生を見る。

ダンブルドア先生も目で「退出してもよい」と言っていた。

「では失礼します」

私は一度頭を下げドアの方へと歩く。

そしてそのまま法廷から退出した。

「どうだった？ ハリーの様子は？」

私が法廷から出ると、アーサーが心配したような顔で声を掛けてくる。

私は先ほども座っていた椅子に座り直し、改めてアーサーの問いに答えた。

「そうね、死にそうな顔をしていたわ。ダンブルドア先生がいなかったら恐怖のあまり気絶してるんじゃないかしら」

アーサーは私の答えに顔を真っ青にする。

「……冗談よ。でも辛そうだったのは本当。ダンブルドア先生が法廷にいるから退学にはならないと思うわ」

「そうだな。……ああそうだ」

そこから先は会話もなく、2人ともじつと懲戒尋問が終わるのを待つ。

10分、20分と時間が過ぎていき、不意に扉が開いた。

「おおアーサー。尋問は終わった。わしはこれから行くところがあるので。ハリーを頼む。咲夜、今日はわざわざわざわざご苦労じやった。今日はもう自由にしてよろしい」

ダンブルドア先生だ。

ダンブルドア先生は口早にそう言うのと薄暗い廊下を歩いていつてしまふ。

私が法廷に視線を戻すと法廷内にいた魔法使いが次々と出てきた。

「ハリーは、どこだ？ 懲戒尋問はどうなった?！」

アーサーは人の流れに逆らうように法廷に入ろうとする。

その瞬間に法廷から出てきたハリーと衝突しそうになっていた。

「ダンブルドアは何も言わな——」

「無罪だよ！ 無罪放免！」

ハリーはアーサーの言葉に口早にそう答える。

アーサーは満面の笑みになってハリリーの両肩を掴んだ。

「そうか、そりゃよかった！ もちろん、君を有罪にできるはずがないんだ。証拠の上では」

私は開け放たれた法廷を廊下から覗きこむ。

ファッジ大臣が苦虫を噛み潰したような顔で羊皮紙の束を片付けていた。

「咲夜、今日はありがとう」

ハリリーはアーサーに肩を叩かれながらも私の方に振り向く。

「君の意見が多くのか裁判官に疑問を与えたんだと思う。あの、えっと……」

ハリリーは中々言葉が出てこないようだった。

「もともとこつちのミスでもあるし、気にしないで。それよりも、この知らせを早くみんなに伝えてあげなくちゃね」

「ああ、そうだ。そうだと。ハリリー、急いで帰ろう。咲夜はどうする？」

「私は館に帰るわ。夕食と明日の朝食の仕込みもあるし。それに館は広いからお掃除も大変で」

それを聞いてハリリーは少しバツの悪い顔をする。

「なんだか、ごめん。忙しいのに、こんな」

そして今気がついたかのようにハリリーは私の服装を上から下まで見た。

「はは、今の咲夜。どこかの秘書みたいだ。美鈴さんはSPみたいだったけど」

「……そうね。美鈴さんは武人だし、言っつてしまえばお嬢様のSPみたいなものね。まあお嬢様に護衛は必要ないけど。私たちなんて足手まといにしかならないもの」

ハリーは随分と落ち着きを取り戻したようだった。

これならもう安心だろう。

「じゃあ、私はもう行くわ。アーサー、ハリーを生きた状態で本部に連れ帰ってね？」

「はは、善処するよ。もつとも、そんな危険はないと言い切れないのが今の情勢の悲しいところだ」

私は2人に手を振ると時間を止めて姿くらましする。

そしてそのまま紅魔館の図書館へと姿現しした。

「おかえり、ハリーの懲戒尋問はどうだった？」

私が現れた瞬間気配を感じ取ったのかパチュリー様が本から顔を上げた。

「はい、無罪放免です」

「そう。まあ予定通りね」

パチュリー様はそう呟くと本に視線を戻す。

私は図書館内を見回しリドルの姿を探した。

図書館には柵が多く、その分死角も多い。

パチュリー様ほどの魔法使いになると肉眼で本棚の裏を透視することができるらしいのだが、私には到底無理だ。

私は図書館内を軽く歩きリドルの姿を探す。

リドルは少し奥の本棚に本を戻しているところだった。

「勉強熱心とは感心ね」

「自分の生死に関わることだからね。……いや待てよ？ ヴォルデモートの魂を殺したらそれは自殺ということになるのだろうか。だとしたら記憶を抜き出して魂だけ殺すというのは自分の存在を否定することになり記憶自体も——」

どうやら分霊箱を壊した時に自分が死なない方法を考えているようだった。

きつとお嬢様のことだからリドルには「死にたくなかったら自分で生き残る方法を見つけてください」などと言ったのだろう。

パチュリー様も手伝ってはいるみたいだが、まだいい方法は見つかっていないらしい。

「あ、そうだ。何か用だったか？　と言っても僕自身こんな状況だからあまり時間の掛かることはよしてくれよ」

「そう言うんじゃないわ。少し貴方の顔を見たかっただけ」

「そうか、それなら数年後も僕の顔が見れることを願っていてくれ」

リドルはそう言うのと本棚から1冊の本を抜き出す。

『魂と肉体 パチュリー・ノーレッジ著』

本にはそう書かれていた。

「先生は優しいのか厳しいのか時々分からなくなるよ。こういうように研究のデータを本として残しておいてくれるのは非常にありがたいんだが、内容は全然易しくない」

リドルは軽くその本を開いて私の方に見せてくる。

そこには謎の数式や記号などが説明書きと共に書かれていた。

「……さっぱりね。まったく分からないわ」

その言葉を聞いてリドルは肩を竦めた。

書いてある内容は物凄く分かりやすい。

分かりやすいし理解も出来るのだが、書いてある内容が全く分からないのだ。

矛盾しているかも知れないが、そうとしか言いようがない。

分かるのに分からない。

理解できるのに理解できない。

多分それがパチュリー様の仕込んだ研究成果の隠蔽方法なのだろう。

「先生の書かれた本は殆どがこんな感じだ。……まあそのうち何とかするさ」

リドルは何冊か本を脇に抱えると図書館中央にあるテーブルへと向かっていく。

ヴォルデモートを殺すということは、リドルを殺すことになるということだ。

リドルには何としても生き残る方法を見つけてほしいと思う。

私はリドルの後を追うようにテールブルへと向かい、リドルの横に腰かける。

そして騎士団関係の書類の整理と制作を行い始めた。

「ほう、勉強熱心とは感心だな」

突然真後ろから男性の声が聞こえる。

「この声はクイレルだ。」

「私は仕事に近いけどね」

「魔法使いは勉強してなんぼよ。一生勉強」

「僕の場合はサバイバルに近いかも知れないけどね。クイレル、もう一人の僕はどんな感じだい？」

クイレルは恭しく頭を下げて報告した。

「現在ヴォルデモートは予言を入手するために死喰い人を動かしています」

「予言……というハリリー・ポッターの？」

「はい、その通りです」

リドルは予言というものがどんなものか知っているようだ。

予言を手に入れる。

少し言葉は変だが多分予言というのはそういう物なのだろう。

「騎士団の方はどうだ。十六夜君」

「そうだわ、聞き忘れてたけどハリーに吸魂鬼を送り付けたのは死喰い人よね？」

クイレルの言葉に私は気になっていることを聞いた。

「他に誰がいるというんだ？ 予言者新聞の熱烈なファンとかか？」

クイレルが不思議そうな顔をする。

まあ言われてしまえばその通りだ。

他にハリーに対して吸魂鬼を送りつけるような人物も団体も思い浮かばない。

「騎士団は最近その対処に追われていたわ。と言つてももう片付いたことだけだね」

私は一枚の羊皮紙をクイレルに見せる。

そこにはハリーが無罪放免になったということが書かれていた。

「ふくろうで遠方へと飛ばすものよ。まあ簡単な情報交換ね」

「ふむ、魔法省大臣は随分と優秀なようだ。ハリーを退学？ こちらの仕事がやりやすくなるな。もつとも、無罪放免では意味がないが」

「そうか。死喰い人側からしたら、ファッジ大臣の無能さはむしろ有能ということになるのね。死喰い人も仕事がやりやすくなるし……実は死喰い人と繋がってたりするの

？」

「いや、単に無能なだけだ。向こうから寝返ってきてもお断りするレベルでね。そんな積極的な無能はいらない」

まあ、有能すぎてもそれはそれで困るが。

大臣には今のまま程度の良い無能でいてもらおう。

「今日はゆつくりしていくの？」

「いや、少し顔を出したただけだ。しばらく死喰い人としての仕事に追われることになる」
クイレルはそういうとバチンと音を立てて姿をくらませた。

そう長いことヴォルデモートのそばを離れるのは危険ということなのだろう。

私は騎士団関係の書類を纏めると鞆の中に詰め込む。

そして静かに椅子から立ち上がった。

「料理の仕込みをしてくるわ。お勉強頑張ってるね」

「ああ、そうだな。せいぜい頑張るさ」

リドルはひらひらとこちらに手を振る。

私はパチュリー様に一礼すると図書館を後にした。

9月1日、早朝。

私はお嬢様が就寝したのを確認すると自室の鍵を締める。

今日はホグワーツへと向かう日だ。

もつとも、今日は一人でキングズ・クロス駅に向かうわけではない。

ハリリーの護衛も兼ねて、本部から皆と一緒に往くことになっている。

私は館の中を一度見て回り、不備がないことを確認すると本部の中へと姿現しをした。

次の瞬間ジニーが上から落ちてくる。

私はジニーを抱きかかえるようにキャッチし、あとに続くように飛んできたトランクを足で止めた。

「まったく、何事なの？ ジニー、大丈夫？」

ジニーは何が起こったのか分からないと言った表情でポカンと私の顔を見ている。

そして顔を真っ赤にして私の腕の中から脱出した。

「あ、ありがとう、咲夜さん。フレッド！ ジョージ！ トランクが飛んできたんだけど！！」

ジニーはそのまま逃げるように階段を駆け上がっていった。

避けられているのかと一瞬思ったが、あの様子は多分違う。

私は宙に浮いているトランクを地面に下し、改めて屋敷中を見回した。全員がてんやわんやに準備を進めている。

あちらこちらで怒声がし、慌ただしい足音が響く。

全員そろって寝坊したのだろうか。

モリーさんが私の方に駆けてくる。

「ああ、咲夜。咲夜は準備できているわね。みんなすぐに下りてきなさい!!
今すぐに!!」

モリーさんは上の階に向けて声を張り上げた。

次の瞬間子供たちがバタバタと部屋から飛び出し階段を下りてくる。

「トランクとふくろうは置いていきなさい。アラスターが面倒をみる筈よ。……ブラック、まさかついてくる気じゃないでしょうね?」

私は黒い犬の恰好になっているブラックを見て冷ややかに言った。

「バウ!」

「バウじゃないわよ。……まあいいわ」

私たちは本部から出るとキングズ・クロス駅まで歩いて向かう。

ここからキングズ・クロス駅まではそう遠くない。

20分も歩かないうちに駅に到着した。

私たちは9と4分の3番線へと入り、そこでムーディと合流する。そしてトランクを汽車へと詰め込みようやく一息つくことができた。

「まさか私が時間に追われるなんて思わなかったわ」

私は軽いため息をつく。駅のホームに設置されている時計を見た。

10時58分、ギリギリもいいところだ。

私はハリーたちと共にホグワーツ特急へと乗り込む。

中は生徒で溢れかえり、コンパートメントは何処も一杯だった。

「……それじゃあ、コンパートメントを探そうか」

ハリーが気だるそうに口を開く。

その言葉を聞いてハーマイオニーは申し訳なさそうな顔をした。

「えーと……私たち、監督生の車両に行くことになってるの」

そうか、この歳になると監督生に選ばれることがあるのか。

ハーマイオニーの言葉からしてロンも監督生なのだろう。

「そう、おめでとう。それじゃあ私はハリーとコンパートメントを探しているわ」

「ごめんなさい。でもずっとそこにいなくてもいいと思う」

「いいよ。うん、また後で」

ハリーはただどどしくそう言った。

私たちはロンとハーマイオニーと別れるとコンパートメント探しを始める。

最後尾まで歩いてくると通路でネビルと鉢合わせた。

「やあ、ハリー。ジニーと咲夜も。……どこも一杯だ。僕、全然席が見つからなくて

……」

ネビルは暴れるヒキガエルを握りしめながらオドオドといった。

私はちらりと近くのコンパートメントを確認する。

そこにはジニーと同じぐらいの歳の女の子が一人いるだけだった。

「そこが空いているわ」

「ああ、ルーナ・ラブグッドじゃない。ここに入りましょう？」

どうやらジニーはその女の子のことを知っているようだった。

気が進まないといったネビルの小声を無視してジニーはコンパートの扉を開ける。

「こんにちはルーナ。ここに座ってもいい？」

ジニーがトランクをコンパートメントの中に入れながらルーナに挨拶をする。

ルーナは少し変わった少女だった。

杖を左耳に挟みバタービールのコルクを繋ぎ合わせたネックレスをしている。

そして何故か雑誌を逆さまにして読んでいた。

ルーナは私たちを軽く見回すと、コクリと一回頷く。

私はルーナの隣に、ハリーたちは私とは向かい側の席に3人並んで座った。

ルーナは読んでいた雑誌から軽く顔を上げるとハリーの事をじつと見つめる。

その様子はまるでルーナがハリーに対して開心術でもかけているかのようだった。

「ルーナ、いい休みだった？」

ジニーがルーナに声を掛ける。

「うん、とつても楽しかったよ。あなたはハリー・ポッターだ」

「知ってるよ」

ルーナのいきなりの言葉にハリーが肩を竦める。

どうやらハリーはルーナの視線をあまり好ましくは思っていないらしい。

ルーナはくるりと私の方を見る。

「あなたは十六夜咲夜」

「ええ、初めましてかしら？」

「だけどあなたが分からない」

ルーナは最後にネビルの方へと向いた。

「僕、誰でもない」

「そう、誰でもないさんね」

ネビルは慌てて言う。

いや、誰でもないという答え方は少しおかしいと思うのだが。

「あなたはネビル・ロングボトムでしよう？ 一体何をそんなに緊張しているのよ」

私は鞆から1冊の本を取り出し読み始める。

その様子を見てルーナも雑誌を逆さまに持ち直した。

ネビルは少しやりにくそうに体を振ったが、気を取り直してハリーやジニーと話し始めた。

「誕生日に何を貰ったと思う？」

「また思い出し玉？」

「違うよ。でも、それも必要かも。前に貰ったのはとつくに失くしちゃったし。これ見て……」

私が今読んでいるのは哲学書だ。

お嬢様は結構昔の哲学が好きなのだが、私はどちらかというと近代哲学に興味がある。

論理的に見た人間のあり方や感じ方というのは面白いものだ。

「ミンビュラス・ミンブルトニア。これ、とっても貴重なんだ」

スワンプマンや哲学的ゾンビの話は非常に興味を持てる。

今の科学や魔術では解き明かすことのできない精神の仕組みなど……うん、いい。

「ホグワーツの温室にだってないかもしれない。僕、スプラウト先生に早く見せたくて。アルジー大叔父さんが、アツシリアから僕のために持つてきてくれたんだ。繁殖させられるかどうか、僕、やってみる」

精神的な技術が進んでいる魔術の観点から見ても近代哲学というのはいいいものだ。

自分とは何か、存在とは、感覚とは。

「あの、これ役に立つの?」

「いっぱい! これびっくりするような防衛機能を持つてるんだ。ほら、ちよつとトレバーを持つてて」

「ちよつと待つて?」

私は座席から立ち上がるとジニーとルーナを連れてコンパートメントを出る。

そしてぴしやりと扉を閉じ、その扉にもたれ掛るようにして立つて読書を再開した。

「どうして外に出たの? とういか出したの?」

ルーナが私に聞いた次の瞬間、コンパートメントの扉のガラスに暗緑色の液体がこびりついた。

何が起こったか、簡単なことである。

ネビルの持つていたミンビュラス・ミンブルトニアが臭液を噴出したのだ。

私の予想通りにネビルは下手な刺激をミンビュラス・ミンブルトニアに与えたのだろ

う。

私はコンパートメントの扉を開けると呪文を唱えコンパートメントの中を綺麗にし、先ほど座っていた場所へと座り直した。

「……咲夜、こうなるのが分かっていたんだっただら教えてよ」

ネビルが泣きそうな声を出す。

ハリーも私に抗議の視線を送っていた。

「二度痛い目みないと学習しないじゃない」

ルーナとジニーは私に軽くお礼を言うのと座席に座り直した。

「できれば僕も一緒に連れ出して欲しかった」

「あら、貴方は男の子じゃない」

ハリーの言葉をびしやりとはねのけ読書を再開する。

ルーナも真似をするように雑誌を持ち上げた。

しばらく本を読んでいるとコンパートメントの扉が開いてロンとハーマイオニーが入ってくる。

どうやら監督生も楽ではないらしい。

ロンはハリーからカエルチョコを引つたくると外装を剥ぎ取り食べ始める。

ハーマイオニーは不機嫌そうに口を開いた。

「あのね、5年生は各寮に2人ずつ監督生がいるの。男女1人ずつね」

「男女1人ずつか。私てつきりロンじゃなくて咲夜さんが監督生になると思ってたわ。でもそれじゃあ女の子2人になっちゃうわけね」

「ジーが感心したように頷いた。」

「スリザリンの監督生は誰だったと思う?」

ロンが疲れたと言わんばかりに目を閉じたまま言う。

まあ、表情から察するとドラコあたりだろう。

「マルフォイ」

ハリーが即答した。

「大当たり」

ロンは手に持っていた残りのカエルチョコを口の中に詰め込む。

「それに、あのいかれた牝牛のパンジー・パーキンソンよ」

私はその言葉を聞いて少し驚く。

まさかあのハーマイオニーからそのような悪口が飛び出してくるとは思わなかった。

「脳震盪を起こしたトロールより馬鹿なのに、どうして監督生になれたのかしら」

「ある意味スリザリンらしいじゃない。ハッフルパフは誰なの?」

私の質問にロンが答える。

「アーニーとハンナ」

「それからレイブンクローはアンソニーとパドマよ」

ハーマイオニーがそう付け足した。

「あんだ、ダンスパーティーの時にパドマ・パチルと行った」

ルーナがなんの脈絡もなく言った。

ルーナがいきなり言葉を発したからか、みな一斉にルーナの方を見る。

ルーナは雑誌を少し下にずらしロンを見ている。

ロンはその様子に口の中に詰まっていたカエルチョコを飲み込んだ。

「ああ、そうだけど？」

「あの子、あんまり楽しくなかったって。あなたがあの子とダンスをしなかったから、ちやんと扱ってくれなかったと思ってるんだと思う。私だったら気にしないけどなあ」

言うだけ言ってルーナはまた雑誌を読み始める。

ロンはどうしていいか分からないといった表情でハリーと顔を見合わせていた。

私は懐中時計を取り出し到着するまでの時間を確認する。

それに釣られるようにロンも自分の腕時計を見た。

「一定時間ごとに通路を見回ることになっているんだ。それから、態度が悪いやつには

罰則を与えることができる。クラブとゴイルに難癖をつけてやるのが今から楽しみだ」

その言葉を聞いてハリーは少しニヤリとしたが、ハーマイオニーは厳しく言った。

「ロン、権力を濫用するのは駄目よ」

「ああ、そうだな。マルフォイは絶対濫用しないだろうよ」

「あれと同じところに身を落とすわけ？」

「違うよ。こっちの仲間がやられるよりも先にやつ仲間をやつつけるだけさ」

「まったく。ロンあのね——」

ハーマイオニーがロンの態度をたしなめようとするが、それを遮るようにロンは言葉を続けた。

「ゴイルには書き取りの罰則をやらせよう。あいつまず文字が書けるのか？」

ロンはニヤニヤと笑ったあとゴイルのように声を低くし、顔を顰めて何かを書いているような真似をする。

「ぼ、僕が……罰則を……受けたのは……ヒヒの……尻に……似ているから」

その場にいた殆どがロンのギャグに大笑いした。

ハーマイオニーも呆れたように肩を竦めるだけだ。

ギャグを言ったロン自身も相当笑っていたが、それでもルーナの笑い方には到底敵わ

なかった。

ルーナは悲鳴のような奇声を上げ、膝を叩いて大笑いする。

その拍子に持っていた雑誌が床に滑り落ち、ハーマイオニーの猫は荷物棚のところまで跳びあがった。

「それって、おつかしい!!」

ルーナは目に涙が浮かぶまで笑い続ける。

ロンは途方に暮れたように周りを見回した。

ルーナの笑い方も面白いが、そのロンの表情も十分面白いものだと言えるだろう。

「君、からかっているの?」

「ヒヒの……尻!」

「ルーナ、あんまり笑うと死んじゃうわよ?」

私は笑い転げているルーナの背中を摩ると先ほどまでルーナが読んでいた雑誌を拾い上げる。

『ザ・クイブラー』と表紙に大きく書かれたそれは、ゴシップ誌のようだった。私は時間を止めてその雑誌をペラペラと捲る。

何とも嘘か本当か分からないような記事が多いが、1つ納得したことがあった。

雑誌の最後の方に小さく『編集 ゼノフィリウス・ラブグッド』と書かれている。

これは予想でしかないが、編集長はルーナの父親か親族だろう。

私は時間停止を解除するとまだ笑い転がっているルーナの顔に雑誌を被せる。

「これ、少し読んでもいい?」

ハリーがルーナの顔から雑誌を掴み取った。

「うん、いいよ」

ルーナは少し落ち着いてきたのか、呼吸を整えている。

私は鞆から冷たいかぼちやジューズを取り出すとルーナに手渡した。

「ありがとう」

ルーナはそれを遠慮なしに受け取ると一気に煽る。

うん、なんというか、どこまでも変わった少女だと言えるだろう。

「そういえば咲夜は吸血鬼に仕えているんだよね。吸血鬼って昼間は寝ているらしいけど、咲夜もそうなの?」

ルーナは雑誌という暇つぶしを失くし少し手持ち無沙汰なのか私に話しかけてくる。

「ええ、私が勤めている館では昼夜が逆転しているわ。使用人は皆夜に起きて朝に寝る

のよ」

「じゃあ朝ごはんが夜ご飯で夜ご飯が朝ごはんになるわけだ。お昼はどうしよう」

「私たちの間では夜食と呼んでいるわ」

ルーナは楽しそうに笑う。

「本で読んだんだけど、吸血鬼って血しか吸わないって、ほんと?」

「そんなことないわ。普通の食材や動物、人間まで幅広くお出ししているわよ」

「じゃあ貴方は殺人鬼ね。ブラックとおなじだ。でも今週の記事にはブラックは殺人鬼じゃないかも知れないと書いてあるし、同じだとしたら貴方も殺人鬼じゃないかも知れない」

ほう、私はルーナの言葉に素直に感心してしまう。

人間そう思っても中々面と向かって相手の事を殺人鬼などと言えたものではない。

それをこの少女は私に向かってなんの臆面も無しに言い切った。

ジーナがたしなめようと身を乗り出すが、私は敢えてそれを制す。

「貴方だつて豚肉や牛肉を食べるでしょう? それと同じよ。貴方は肉屋を殺豚鬼というのかしら」

「人を殺したというのとは否定しないのね」

「ええ、そうね。否定しないわ。肯定もしないけど」

その言葉を聞いてジーナとハーマイオニーが青ざめる。

ロンとネビルは話に夢中になっていてこちらの話を聞いていないようだった。

「お肉屋つてことは捌いたことがあるの?」

話が少し飛躍するタイプの人間らしい。

馬鹿なのかとも思ったが、レイブンクロー生という話だったので多分頭の回転が速すぎるだけだろう。

「どんな感じ？ なにかコツとかあるの？」

「そうね、まず皮はまだ死骸が温かいうちに剥ぐのがコツよ。もつとも料理によつては皮を剥がさずに使うこともあるわ。しっかり血と内臓を抜いて、部位ごとに切り分けていくの。料理によつて使う部位が違うからね」

「咲夜、君つて本当に、その……人を……」

ネビルが顔を真っ青にして呟いた。

「何を言ってるの？ 動物の話よ？」

私はその言葉をはぐらかす。

堂々と人を殺して捌いてますなどと言えるわけではない。

私が視線を前に戻すとハリーが雑誌を閉じていた。

「ハリー、何か面白い記事があったかい？」

ロンがハリーに聞く。

「あるはずないわ」

ハリーが口を開く前にハーマイオニーが辛辣に言った。

私はハーマイオニーが次何を言うか容易に想像できたのでルーナを私の方にパタンと倒し膝枕の状態にする。

そして太ももと手の平でルーナの両耳を塞いだ。

「ザ・クイブラーってクズよ。みんな知ってるわ」

案の定ハーマイオニーはルーナが持っていた雑誌の悪口を言う。

だが耳を塞いでいるのでその言葉はルーナには届かなかったことだろう。

私はよくわからないといった顔をしているルーナの耳を引き続き塞ぎながらハーマイオニーに言葉を掛けた。

「ハーマイオニー、雑誌の裏の、編集者の名前をよく見なさい」

ハーマイオニーは私の言葉にハリーから雑誌を奪い一番後ろのページを捲る。

そしてバツの悪い顔をした。

「私、あの……咲夜、ありがと」

私の考えを察したらしい。

困り顔でこちらにお礼を言ってきた。

「あまり考え無しで批判するものじゃないわ。知らないにしろ、ルーナがそれを熱心に読んでるってことは少なからず気に入っているってことだろうし」

私はルーナを解放する。

ルーナは私とハーマイオニーの顔を交互に見ると、ハーマイオニーから雑誌を受け取り再び読み始めた。

私も先ほどまで読んでいた本を再び取り出し読み始める。

多分あと1時間もしないうちに列車はホグワーツにつくだろう。

私は憂鬱な気分で列車に揺れていた。

警告とか、苛めとか、傷痕とか

ホグワーツの新入生歓迎会。

組み分け帽子の歌が終わると同時に拍手が沸き起こった。

だが、例年と比べると盛り上がり欠ける。

それは、何故か。

今回の組み分け帽子の歌が少々異質で、警告を含むものだったからだろう。

私が聞いた限りでは、組み分け帽子が学校に対して警告を発する歌など今までなかった。

やはりヴォルデモートが復活したからなのだろう。

「今年はずよつと守備範囲が広がったと思わないか？」

ロンがそう言って眉を吊り上げる。

「どうやらハリーとハーマイオニーも同じ意見らしい。」

「これまでに警告を発したことなんてあった？」

「左様。実はあるのです」

ハーマイオニーの不安そうな声に答えたのはほとんど首無しニツクだった。

ニツクはネビルの体をすり抜けるように身を乗り出し、ひそひそを続ける。

「あの帽子は必要と感じたら自分の名誉にかけて学校に警告を発するのです」

ニツクは話を続けようとするが、マクゴナガル先生に睨まれて何処かに消えてしまった。

あの帽子はグリフィンドールの持ち物だったか。

そのあとは肅々と組み分けが行われ、そしてそれも終わるとテーブルの上に料理が溢れかえった。

ハリーたちは口の中に料理をかき込み始める。

私も目の前に置かれたミートパイに手を付けた。

「おお、そうでした。あの帽子はこれまでに何度かあのような警告を発しております。いつも学校が危機に直面している時でした。忠告の内容はいつも同じですよ。団結せ

よ、内側から強くせよと」

「もつともな意見ね」

ニツクは食事が始まると先ほどの組み分け帽子の歌について話してくれる。

私としても帽子の意見には賛成だ。

できるだけ団結し、多くの仲間を持ち、そして死んでいって貰いたい。

「じゃあ全部の寮に仲良くなれってことか。……無理だね」

ハリーがスリザリンのテーブルを見て呟いた。

そこではドラコが胸の監督生バッジを他のスリザリン生に見せびらかしている。

「でも驚きね。昔はスリザリンとグリフィンドールが親友だったなんて」

私は歌の内容を思い出しながら言う。

今現在のグリフィンボール寮とスリザリン寮はおかしなほど対立している。

きつとどちらも自分が正義だと思っているに違いない。

そしてその抗争のようなものを上から見て阿呆らしいと笑うのがレイブンクローで、

間に挟まれておろおろするのがハッフルパフ。

私の中の寮のイメージはそんな感じだ。

しばらくすると宴会のご馳走もテーブルから消え失せ、ダンブルドア先生が立ち上がる。

大広間がシンと静まり返り、皆がダンブルドア先生の顔を見た。

「さて、素晴らしいご馳走を皆が消化しているところで、学年度始めのお知らせといこうかの。1年生に注意しておくが、校庭にある禁じられた森は生徒立ち入り禁止じゃ。そして管理人のフィルチさんからの要請で……これが462回目になるそうじゃが、全生徒に伝えてほしいとのことじゃ。授業と授業の間に廊下で魔法を使ってはならん。その他の禁止事項はフィルチさんの事務所のドアに貼り出してあるので、確かめられると

のことじゃ」

ハリーはロンと顔を見合わせる。

誰が見に行くかそんなもん、2人の顔はそう言っていた。

「今年は先生が2人替わった。魔法生物飼育学にプランク先生がお戻りになった。さらにご紹介するのが、アンブリッジ先生、闇の魔術に対する防衛術の新任教授じゃ」

私はその言葉を聞いて改めて教職員テーブルを見回す。
するとそれはそこにあつた。

なんというか……いや、私がここまで人間に対して嫌悪感を抱くのは珍しいことだと自分でも思うのだが……私はアンブリッジ先生のことを生理的に無理なようだ。

カエルのような顔に甲高い声、ピンクで統一された服装。

まだカエルの方が何十倍もマシだろう。

何故ここまで嫌悪感を持つのかは自分でもわからない。

だが、本能がこいつはダメだと訴え続けていた。

ダンブルドア先生は話を続ける。

「クイディッチの寮代表選手の選抜の日は——」

「エヘン、エヘン！」

次の瞬間アンブリッジ先生が咳払いと共に立ち上がる。

その様子を見てダンブルドア先生が静かにアンブリッジ先生を見下ろした。

そして何かを察したのかすぐに優雅に腰かけアンブリッジ先生の話の静かに聞く体勢に入った。

「校長先生、歓迎のお言葉感謝いたします」

その声を聞いて殆どの生徒が顔を顰める。

なんとというか、全員がガラスを釘で引つ掻いた音を聞いたかのような表情をしていた。

「さて、ホグワーツに戻ってこれて本当にうれしいですわ。そして皆さんの幸せそうな可愛い顔が私を見上げているのは素敵ですわ！」

私は周囲をもう一度見回す。

見る限りでは幸せそうな顔をしている生徒はクラブとゴイルぐらいだった。

「みなさんとお知り合いになれるのを、とても楽しみにしております。きつと良いお友達になりますわよ！」

私はそつと少し離れた席にいるフレッドに声を掛ける。

「フレッド、ちよつといい？」

「え？ あ、咲夜か。ごめん今耳を塞ぐのに忙しいんだ。話なら後で——」

「面白いものを見せてあげるわ。貴方たちが作ってたゲーゲー・トローチ出しなさい」

「……なんで知ってるんだ？ あれは企業秘密で——」

「いいから。あ、効果が出る方の半分だけでいいわよ」

フレッドは肩を竦めながらポケットから一粒のトローチを取り出した。

このトローチは双子の2人が開発したもので、食べると嘔吐を起こすというものである。

私はそれを手の平の上に乗せフレッドとジョージの目の前に出す。

そして時間を停止させた。

「ヤッ」

私はトローチを握りしめ大広間を飛んでアンブリッジ先生に近づく。

そして鳴き声を出そうと口を大きく開けているアンブリッジ先生の口の中にゲー・トローチを投げ入れた。

トローチは喉を転がっていき胃袋の中に無事収まる。

私はグリフィンドールのテーブルへと戻り先ほどと同じ体勢を取った。もつとも、手の上のトローチはもう無くなっているが。

そして時間停止を解除する。

「おい、トローチが消えちまったぜ？ これを見せたかったのか？」

ジョージが少し興奮したように声を上げる。

ハリーたちもニヤニヤとアンブリッジ先生を見ていた。

私は次の瞬間教職員テーブルの方から視線を感じる。

ダンブルドア先生が静かにこちらを見ていた。

私はその視線に微笑み返す。

どうせ証拠なんてないのだ。

その後は顔を自分の服よりも赤くしてアンブリッジ先生が座り、代わりにダンブルドア先生が立ち上がる。

そしてその後の連絡事項を告げていった。

私は取り敢えず満足して椅子に座り直す。

そう、今までで最も私の態度の悪い1年が始まろうとしていた。

魔法史の授業が終わると今年初めての魔法薬学、スリザリンとの合同授業だ。

私はいつものようにドラコの横に腰かけた。

「やあ、咲夜。夏休みはどうだった？」

ドラコはご機嫌のようだった。

何かいいことがあったのだろうか。

「そうね、楽しかったわ。色々。……ドラコは監督生に選ばれたのね」

「マルフォイ家の長男だからね。僕の予想ではグリフィンドールの監督生はあの穢れた血じゃなくて咲夜だと思っていたんだが、あのヘンテコジジイが考えることはわからないな。まあ監督生なんて面倒くさいだけさ」

そう言つてドラコは肩を竦めたが、表情から察するに監督生としての生活を存分に満喫しているようだった。

しばらくドラコと談笑しているとスネイプ先生が教室に入ってくる。

「静まれ」

スネイプ先生はハリーたちを睨みながら冷たく言つた。

その言葉を聞いてクラスにいた生徒がシンと静まり返る。

「本日の授業を始める前に、忘れぬようにはつきりと言つておこう。来年の6月、諸君は重要な試験に臨む。そこで魔法薬の成分、使用方法について諸君がどれほど学習したかが試される。このクラスの何人かは確かに愚鈍であるが、私としてはふくろう合格スレスレの『可』以上を期待する」

スネイプ先生はハリーを見た後ネビルを睨みつけた。

確かにネビルは魔法薬学がすこぶる苦手だ。

「来年までに私の授業を去る者もでしょう。私は優秀なものにしか、いもりレベルの受講を許さん。つまり、ここにいる何人かは必ずや別れを告げるということだ」

スネイプ先生は黒板に魔法薬のレシピを書き始める。

「今日はふくろう試験にしばしば出てくる魔法薬である安らぎの水薬を調合する。もつともグリフィンドールの生徒には2年前この水薬にお世話になった者もいるようだが……」

先生は今度は私を睨んだ。

ボガート事件のことと違っていいだろう。

クラスの何人かは嫌なことを思い出したと言わんばかりに顔を歪める。

嫌悪感というよりは、純粋な恐怖によるものだった。

「この水薬を調合するときには注意することが多々ある。成分が強すぎると、飲んだ者は深い眠りに落ち、時にはそのままとなる。故に、調合には細心の注意を払いたまえ。1時間半、時間を与える。始めたまえ」

私はドラコに材料を持ってくるよう伝えると大鍋をドラコの分も用意する。

そして黒板に書かれた調合法をよく見て暗記すると、ドラコの持ってきた魔法薬を手で摘み感覚で量り始めた。

「いつも思うんだけど、それどうやっているんだ？ ミリグラム単位で材料とかもある

だろう?」

「そうね、魔法薬学は料理に近いから」

私は普段魔法薬を調合するとき目分量で入れていくが、ドラコが同じことが出来るとは思えない。

なのでいつもドラコの分は私が分量を量り皿に盛るのだ。

私はドラコに正確に指示を出しながら自分の鍋を片手でかき混ぜ魔法薬を量らずに入れていく。

安らぎの水薬は正確な回数かき混ぜなくてはならないのだが、逆に正確にかき混ぜたら完璧に調合できるということである。

私は匙を横に置くと炎の強さを決められた大きさまで下げる。

そして数分経つと軽い銀色の湯気が私の鍋から立ち上った。

ドラコは指定された回数に注意しつつ鍋をかき混ぜている。

そして私から遅れること10分。

ドラコも魔法薬を完成させた。

スネイプ先生は私の鍋を覗き込み、次にドラコの鍋を覗き込む。

そしてひとしきりドラコの魔法薬を褒めるとハリーの方へと歩いていった。

「ポッター、これは何のつもりだ?」

スネイプ先生がハリーの鍋の中身を匙で掬い静かに鍋の中に戻す。

「安らぎの水薬」

ハリーは頑なにそう答えた。

「教えてくれポッター。お前は字が読めるのか？」

スネイプ先生は冷ややかに言う。

その言葉を聞いてドラコは鼻で軽く笑った。

「読めませう」

「ポッター、黒板に書かれた調合法の3行目を読んでみたまえ」

「月長石の粉を加え、右に3回攪拌し、7分間ぐつぐつ煮る。そのあと、バイアン草のエキスを2滴加える」

ハリーはそこまで読んでがっくりと項垂れたような顔をした。

「3行目をすべてやったか？ポッター？」

「いいえ」

スネイプ先生の問いにハリーは小声で答えた。

「答えは？」

スネイプ先生は聞こえなかったと言わんばかりにハリーに問い直す。

ハリーは少し声を大きくして言った。

「いいえ。バイアン草を忘れました」

「そうだろう、ポッター。つまりここにあるごった煮はなんの役にも立たない。エバネスコ、消えよ」

先生が杖を振るとハリーの鍋の中身がきれいさっぱり消え去った。

ハリーはそれを見て絶望的な顔をする。

「課題がなんとか『読めた』者は自分の作った薬のサンプルを小瓶に入れ、名前を書いたラベルを貼って提出したまえ」

つまり魔法薬モドキが消え去ったハリーは0点ということだ。

「そして次の時間までに月長石の特性と魔法薬調合に関するその用途を羊皮紙に30センチ書いてくるように」

私は出来上がった魔法薬を小瓶に詰め、ドラコと共に机に提出する。

そして大鍋を綺麗にし鞆の中へと仕舞い込んだ。

「じゃあね、ドラコ。また次の合同授業で」

私はドラコと分かれハリーたちと合流する。

次は占い学だったか。

占い学では夢占いの授業に入った。

見た夢の内容から自分の未来を占うという授業だが、正直私は自分の夢に自分で引く

タイプである。

1 か月夢日記をつけるという宿題が出たが、本当に見たままを書いていいのか分からなかった。

……ロンドンの街に繰り出して人を殺して歩く夢を見たなど、書けるわけない。

次の時間は闇の魔術に関する防衛術の授業だった。

私はハリーたちと共に教室に入るとアンブリッジ先生は既に教壇の前に座っている。私たちは教室の一番後ろの席へと座った。

「さあ、こんにちは！」

アンブリッジ先生は立ち上がり気持ち悪い声で挨拶する。

教室にいる何人かの生徒が挨拶を返した。

「チツチツ、それではいけませんねえ。みなさん、どうぞこんなふうに。「こんにちは、アンブリッジ先生」ではもう一度いきみますよ？ はい、こんにちは、みなさん！」

「コンニチハアンブリッジセンセイ」

教室にいる全員が呪文のように唱えた。

「そうです。難しくしないでしょ？ 杖を仕舞って羽ペンを出してくださいね」

先生はそう言つて黒板の前を開けるように教壇を横にずらすと、黒板の横に椅子を置きそこに座つた。

「あう!？」

途端にアンブリッジ先生が悲鳴を上げて跳び上がる。

そしてそのまま何回かジャンプし、机に躓き床の上に転がつた。

何が起こつたか、簡単である。

私が時間を止めてアンブリッジ先生の椅子の上に画鋏を10本ほど置いただけだ。

「せ、先生!？ 何かあつたんですか？」

前の方に座つていたパーバティが悲鳴のような声を上げた。

ハリーとロンはアンブリッジ先生のそんな様子を見て机の上に突つ伏し笑いを堪えている。

「だ、誰でもか椅子の上にこんな画鋏を置いたのは……あれ？ 画鋏がない」

話は簡単だ。

先生が転げまわっているうちに時間を止め、私がすべて画鋏を消失させただけである。

アンブリッジは大きい尻を摩りながら立ち上がると気を取り直して黒板を杖で叩いた。

『闇の魔術に対する防衛術　　～基本に返れ～』

黒板にはそう文字が浮かび上がる。

「さ、さて、みなさん。この学科の授業はかなり乱れていましたね。毎年先生が変わり、殆どの先生が魔法省指導要領に従っていなかったようです。その結果として、不幸なこととに皆さんは魔法省がふくろう試験を受ける学年に期待するレベルを遥かに下回っています。しかしご安心なさい。こうした問題は全て解決します。今年は慎重に構築された理論中心の魔法省指導要領どおりの防衛術を学んでいきます。さあ、これを書き写してください」

先生はまた黒板を杖で叩いた。

私は叩いた瞬間に時間を止めアンブリッジ先生の尻を蹴飛ばす。

そして元いた場所に戻り時間停止を解除した。

「あうっ——!?!」

黒板に文字が浮かび上がると同時にアンブリッジ先生はまた跳び上がる。

何故こんなことをするかと聞かれたら、……なんと答えればいいのだろうか。

あれが生きていることが気に入らないとも言えればいいだろうか。

少々幼稚だとは思いますが、まあ憂さ晴らしぐらいにはなるだろう。

「ちよつと、さつきからなに!?　この教室に何かいるの!?!」

「えっと、先生。大丈夫ですか？」

トーマスが奇怪なものを見るような目で先生を見た。

何人かの真面目な生徒は既に黒板の文字を写しにかかっているが、殆どの生徒が「この先生なにかがおかしい」と言わんばかりの表情で先生を見ている。

「あのアンブリッジってやつやべえよ。挨拶の時には吐いたし、今度は一人で教室中を転げまわるし」

ロンがヒソヒソとハリーに言う。

ハリーも変人という意見に同意していた。

「は、早く黒板の文字を写しなさい」

先生は教室中を見回しながら生徒にそう告げる。

大方ゴーストでもいると思っっているのだろう。

そして全員が写し終わり羽ペンを机に置くと、先生は再び口を開いた。

「みなさん、ウィルバート・スリンクハードの防衛術の理論を持っていますか？」
持っていますと何人かがぼそぼそという。

その様子に先生は馬鹿にしたように首を横に振った。

「もう一度やりましょうね。私が質問したら答えはこうですよ。「はい、アンブリッジ先生」または「いいえ、アンブリッジ先生」では、みなさん、ウィルバート・スリンクハー

ドの防衛術の理論を持っていますか？」

「ハイ、アンブリッジセンセイ」

全員の呪文の詠唱に、教室中がわーんと鳴った。

「よろしい。では5ページを開いてください。『第1章、初心者基礎』おしゃべりはしないこと」

アンブリッジ先生は椅子の上を手で払い、画鋏がないことを確認して椅子に座る。

私は座ろうとした瞬間に時間を止め画鋏を椅子に並べた。

「あうちっ!!」

……この先生は頭までカエルなのだろうか。

先生のそんな奇声を聞いてクラスの殆どが教科書で顔を隠した。

顔は隠れているが、クスクスといった笑い声は微塵も消せてはいない。

次の瞬間、ハーマイオニーが真つすぐと手を上げた。

驚いたことに、教科書は閉じて机の上に置いてある。

先生は尻をさすりながら立ち上がると椅子を魔法で消し、黒板の前に立った。

「この章について、何か聞きたかったの？」

そして手を上げているハーマイオニーを見て鳴き声を上げた。

「この章についてではありません」

「おやまあ、今は読む時間よ。他の質問なら、授業が終わってからにしましょうね」

アンブリッジ先生はそう言つて話を切り上げようとするが、ハーマイオニーは座らなかつた。

「授業の目的に質問があります」

その言葉を聞いてアンブリッジ先生の眉が上り上がった。

「貴方のお名前は？」

「ハーマイオニー・グレンジャーです」

「さあ、ミス・グレンジャー。ちゃんと全部読めば、授業の目的ははっきりしていると思いますよ」

アンブリッジ先生は優しい声で言った。

「でも、わかりません。防衛呪文を使うことに関しては何も書いてありません」

ハーマイオニーの言葉に生徒の多くが教科書から顔を上げる。

「呪文を……使う？ まあ、まあまあまあ。ミス・グレンジャー。このクラスで貴方が防

衛呪文を使う必要があるような状況が起ころうとは考えられませんけど？ まさか授

業中に襲われるなんて思つてはいないでしょうね」

クラスの全員が後ろの席にいる私の方に振り返つた。

確かに皆の視線のとおり、私は去年の闇の魔術に対する防衛術の授業中に先生を襲つ

ている。

ナイフを投げた回数も2桁に達するだろう。

「魔法を使わないの?」

ロンが声を張り上げた。

「私のクラスで発言したい生徒は手を挙げることに。ミスター——?」

「ウィーズリー」

ロンは高く手を挙げた。

アンブリッジ先生はニッコリ笑うとロンに背を向けた。

それを見てハリーとハーマイオニーが手を挙げる。

「はい、ミス・グレンジャー? 何か他に聞きたいの?」

「はい。闇の魔術に対する防衛術の真の狙いは防衛呪文を練習することではありませんか?」

「か?」

「ミス・グレンジャー、貴方は魔法省の訓練を受けた教育専門家ですか?」

「いいえ、でも——」

「なら残念ながら貴方には授業の内容に口を出す資格はありませんね。貴方よりも年上で賢い魔法使いたちが新しい指導要領を決めたのです。あなた方が防衛呪文について学ぶのは、安全で危険のない方法で——」

「そんなの何の役に立つ?」

先生の言葉を妨げるようにハリーが大声を上げる。

「もし僕たちが襲われるとしたら、そんな方法——」

「挙手、ミスター・ポッター!」

そう言われハリーは拳を宙に突き上げた。

アンブリッジ先生はそっぽを向く。

だが今度はハリーたちだけでなく他の生徒の手も拳がった。

「貴方のお名前は?」

アンブリッジ先生はトーマスに聞く。

「デイン・トーマス」

「それで? ミスター・トーマス?」

「えっと、ハリーの言う通りでしょ? もし僕たちが襲われるとしたら、危険のない方法

なんかじゃない」

「もう一度言いましょう。このクラスで襲われると思うのですか?」

「「「はい、アンブリッジ先生」」」

生徒の殆どが声を揃えて唱えた。

その様子を見てアンブリッジ先生は口をパクパクさせる。

そしてようやく言葉を取り戻したのか少しづつ話し始めた。

「あなた方のような子供を、一体誰が襲うというんですか」

その言葉にクラス的全員がまた私を見る。

「襲うわけないでしょう？ こっち見るのを止めなさい」

私は肩を竦めた。

襲うのは生徒ではなく先生だけだ。

「うーん、ヴォルデモートとか？ 僕たちを襲うとしたら」

ハリーがぼつりと呟いた。

その名前にクラスの半数がギクリとする。

「グリフィンドール10点減点です。ミスター・ポッター」

アンブリッジ先生は気味の悪い満足げな表情を浮かべている。

「さて、いくつかはつきりさせておきましょう。みなさんは、ある闇の魔法使いが戻って

きたという話を聞かされてきました。死から蘇ったと——」

「あいつは死んでいなかった！ だけど、ああ、蘇ったんだ！」

ハリーが怒ったように声を張り上げた。

「ミスター・ポッター、貴方はもう自分の寮に10点も失わせたのにこれ以上自分の立場を悪くしないよう。今言いかけたように、皆さんはある闇の魔法使いが再び野に放たれ

たという話を聞かされてきました。これは嘘です」

「嘘じゃない！ 僕は見た。僕はあいつと戦ったんだ！」

「罰則です。ミスター・ポッター！」

アンブリッジ先生が勝ち誇ったように言った。

私はその様子に頭を抱えた。

ああいうのには、真正面から立ち向かつてはいけない。

陰から陰湿に攻撃しなくてはならないのだ。

「明日の夕方、5時に私の部屋に来なさい。もう一度言いましよう。それは嘘です。魔法省は皆さんに危険はないと保証します。さて、ではどうぞ読み続けてください。5

ページ、初心者者の基礎」

ハリーはついに椅子から立ち上がる。

そしてハーマイオニーの静止を払いのけ先生に言った。

「咲夜も見たんだ！ あいつは帰ってきた！」

「そうなのですか？ ミス・十六夜」

アンブリッジ先生はニタニタと笑いながら私の方を見る。

私はハリーの方をチラリと見て肩を竦めた。

「そんなわけないじゃないですか？ あの人が帰ってきた？ バカバカしい」

「ほら見なさい！ 貴方は嘘つきです。適当なことを言つて生徒を混乱させないように」

ハリーは驚いたような顔でこちらを見る。

「ミスター・ポッター、いい子だからこつちにいらつしやい」

ハリーは怒りのあまりか椅子を蹴飛ばし私を睨みながら大股で先生の方へと歩いていった。

アンブリッジ先生は羊皮紙に何かを書くときハリーが見れないように丸め、封蠟を押す。

そしてそれをハリーに手渡した。

「さあ、これをマクゴナガル先生のところへ持つていらつしやいね」

ハリーはそれをもぎ取るように掴み取ると一言も言わずに教室を出ていく。

私は静かに挙手をした。

「どうしたの？ ミス・十六夜」

「ハリーがちゃんとマクゴナガル先生のところに行くか見張つてもよろしいでしょうか？ ほら、あの様子ですと……」

私は先生に言葉の意味が伝わるようにニタリと表情を歪ませた。

先生はその表情の意味を悟つたのだらう。

快く了承してくれた。

私は教科書を鞆に詰めハリリーの後ろを追いかける。

そしてハリリーに追いついた瞬間時間を止め、1回教室へと戻りアンブリッジ先生の頭を思いつきり蹴つ飛ばしてハリリーのいる場所まで戻った。

これでアリバイは完璧である。

「ハリリー、あれは拙いわ」

「五月蠅い。嘘つきはどつちだ。何でさつき嘘をついたんだ!？」

ハリリーが私に食って掛かった。

私はハリリーの顔を手で掴み引き離すと隣のドアをノックする。

そこには副校長室と書かれていた。

「いったい何を騒いでいるのですか？ まだ授業中ですよ?！」

次の瞬間マクゴナガル先生が扉を開けて現れる。

「先生のところに行つてこいと言われました」

ハリリーはブスツとした表情で羊皮紙を先生に手渡した。

マクゴナガル先生は羊皮紙を広げ、読み始める。

そして読み終わったのかハリリーと私を交互に見た。

「入りなさい。ポッター、十六夜」

私たちは先生に続いて副校長室に入る。

「それで、本当なのですか？」

マクゴナガル先生は単刀直入に言った。

「本当って……何が？ ……ですか？ マクゴナガル先生」

「アンブリッジ先生に対して怒鳴ったというのは本当ですか？」

マクゴナガル先生が改めて言った。

「はい」

「嘘つき呼ばわりしたのですか？」

「はい」

「例のあの人が帰ってきたと言ったのですか？」

「はい」

「十六夜を嘘つき呼ばわりしたのですか？」

「はい、でもそれは咲夜が——」

マクゴナガル先生が座るように促す。

私とハリーはマクゴナガル先生と向かい合うように座った。

「ビスケットをおあがりなさい」

「え？」

ハリーはすつとんきよな声を上げた。

先生は机の上に置いてあるチエック模様の缶を指さす。

私はそれを見て靴から3人分の紅茶を用意した。

「ポッター、気を付けなければなりません。アンブリッジのクラスで態度が悪いと、貴方にとっては寮の減点や罰則だけではすみませんよ」

「どういふことですか？」

ハリーはビスケットを齧りながら先生に聞く。

私は呆れたように口を開いた。

「常識的に考えなさい。あいつが何処から来ているか。誰に報告を入れているか」

「でもヴォルデモートが帰ってきたというのは事実だ！ 咲夜だって見たはずなのに何で——」

「ポッター、十六夜は不死鳥の騎士団のメンバーです。そんなことは分かりきっています」

マクゴナガル先生はぴしやりと言った。

「ポッター、自分を抑えなさい。今はあの人帰ってきたのが嘘か真かを議論している時ではないのですよ」

「そうよ。あれの言うことは適当に聞き流しなさい。じゃないといつか痛い目を見るわ

よ」

私とマクゴナガル先生の言葉聞いてハリーは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「なんにしてもポッター、十六夜は騎士団員です。貴方の不利になるようなことは絶対に言いません」

「ですが……」

「自分を制御しろってことよ」

ハリーは自分の意見が通らなくて不服なのかブスツとした表情のままだ。

「十六夜、くれぐれもポッターをよろしくお願いしますよ。私も目を光らせますが、一番近くにいる騎士団員は貴方です」

「分かっています」

次の瞬間終業のベルが鳴り響いた。

マクゴナガル先生は私の出した紅茶を飲み干すとティーカップを返してくる。

ハリーは結局紅茶には手を付けなかったようだ。

私は手早くティーカップを片付けるとハリーの手を引いて副校長室を出る。

そして夕食を取るために大広間までハリーを引っ張っていった。

「僕、いらない」

ハリーはそう言うが私は情け容赦なく引っ張り続ける。

「そういうわけにはいかないわ。脳に糖分を送らないと正常に思考できなくなるもの。それに貴方この夏で少しやつれたような気がするし。ハーマイオニーたちだって貴方を探していると思うもの」

「食べないったら!」

ハリーが私の手を振りほどく。

私は時間を止め再度ハリーの手を握った。

「!?!」

「バカなこと言っていないで早く行くわよ。出来れば自分の意思で歩いて欲しいところだけど……」

「今、確かに手を振りほどいたよね?」

ハリーは呆然と引つ張られている手を見て言う。

「ほら、やつぱり記憶が飛んでるじゃない。そのあとすぐ掴み直したでしょ?」

私は適当に誤魔化してそのままハリーを大広間まで引つ張っていった。

数日後、私たちは魔法生物飼育学を受けるためにハグリッドの小屋近くへと来た。た。

と言つてもハグリッドは今ホグワーツにはいない。

ハグリッドは不死鳥の騎士団の仕事でマダム・マクシームと巨人の説得に向かつているのだ。

あれから少しずつ連絡があつたがもうすぐ巨人の住処につくらしい。

なんにしても、生きているということが分かつただけでも朗報と言えるだろう。

巨人と言えば死喰い人陣営も人材を送つていと言つていたか。

プランク先生はグリフィン・ドールとスリザリンの生徒全員が揃うと授業を始めた。

「早速始めようかね。ここにるのが何だか、名前が分かる者はいるかい？」

そう言つてプランク先生は目の前に積まれた小枝を指さした。

ハーマイオニーの手がすぐに挙がる。

私もこれの正体の予想はついていた。

プランク先生が軽く小枝を蹴飛ばすとそれは宙に跳ねて小さなピクシー妖精のような姿になる。

「さてと。誰かこの生き物の名前を知っているかい？ ミス・グレンジャー？」

「ボウトラックルです。木の守番で、普通は杖に使う木に棲んでいます」

プランク先生は満足そうに頷きグリフィン・ドールに5点を与えた。

その後もプランク先生の授業は進んでいく。

私はボウトラックルと遊びながらハリーたちの様子を観察した。

やはりというか、ハリーたちはハグリッドがいなことを心配しているようだ。だが、ハグリッドが巨人と接触しているというのは極秘中の極秘である。

まあそのうち帰ってくるだろう。

ふと我に返ると私は10匹ぐらいのボウトラックルに囲まれていた。

「貴方たちも一緒に遊びたいの？」

私はボウトラックルの手を取る。

ボウトラックルたちはキーキー声を出して喜び、私の周りを飛び跳ね回った。

「大人気ですね。ミス・十六夜」

プランク先生はそんな様子を見て声を掛けてくる。

私はボウトラックルを肩に乗せながら返事をした。

「動物に好かれやすい体質なのかも知れません」

私はスケッチブックを取り出すとボウトラックルを書き写す。

ボウトラックルも炭のようなものを持ち私のスケッチブックに色々と書き込み始めた。

「あいたー！」

突然ハリーの大声が聞こえる。

そちらの方に視線を向けると何故かハリーは手から血を流していた。どうやらドラコに煽られて手に持っていたボウトラックルを強く握りしめてしまっただけらしい。

私は片手間に杖を取り出しハリーの手に向けて治癒の呪文を掛ける。

「ハリー、苛めちゃかわいそうよ」

「ご、ごめん。ついカツとなつて。……ありがとう」

ハリーは完全に傷口が塞がった手をさすりながら言った。

私は改めてスケッチブックに視線を落とす。

そこには私が描いたボウトラックルのスケッチと、ボウトラックル直筆のサインと落書きが書かれていた。

うん、これはこれで様になるだろう。

私は満足してスケッチブックを鞆へと仕舞った。

金曜日の夕方6時、私は談話室の前でハリーを待っていた。

アンブリッジ先生がハリーに与えた罰則は今日で3日目のはずなのだが、ロンからその罰則に関する事で面白いことを聞いたのだ。

なんとハリーがアンブリッジ先生の罰則で体罰を受けているというのだ。

私はその真偽を確かめるべく、ここで待っている。

しばらく待っているとハリーが手に血を滴らせながら帰ってきた。

私の姿を見て咄嗟にローブで手を隠したが、床に落ちた血までは消すことができない。

私はハリーに歩み寄ると隠した手をローブから引つ張り出した。

「ハリー、これは一体何？」

私の言葉にハリーは目を逸らす。

私はハリーの手の甲に書かれている文字を口に出して読んだ。

「『僕は嘘をついてはいけない』これはアンブリッジ先生が刻んだものなのよね？ ハリー」

ハリーは答えなかった。

視線をずらし、じつと床を見つめている。

「そう、アンブリッジが刻んだのね」

私はハリーの沈黙をそう受け取った。

ハリーは否定しない。

私はハリーの手の甲の傷に治癒の呪文を掛けるとハリーにっこり微笑んだ。

「安心しなさい、ハリー。明日は罰則をしなくても良くなるわよ」

「え、それってどういう」

私は袖の下から彫刻刀を取り出すと呪文を掛ける。

「ちよつと刻んでくるわ。先に談話室に戻っていいわよ」

私はもう一度ハリーに微笑むと時間を止めてホグワーツの廊下を走った。

廊下をいくつか曲がり階段を降り、私はアンブリッジ先生の部屋へと直行する。

そしてドアを呪文で開け、中で固まっているアンブリッジ先生を発見した。

私は彫刻刀に呪文を何度も重ね掛けをし、簡易的な魔法具へと変化させる。

そしてアンブリッジの額に文字を彫り始めた。

『私は生徒に体罰を与えた』

何度も何度も、その傷口を彫刻刀でなぞっていく。

何度も何度も何度も。

やがて白く骨が見えたとところで私はその行為を止めた。

この傷口には魔法が掛けてある。

上から布などを当てて覆い隠すと酷く痛み出し、更に傷が深くなるのだ。

勿論、髪の毛などでも同じである。

治す為には髪をかき上げ、額を晒し、傷口を見せながら生活するしかない。

これはパチュリー様から教わった魔法で、昔の罪人などに刻まれたものらしい。

「よし」

私は満足すると魔法で自分の服や手についた血を拭う。

そして証拠品である彫刻刀を消失させるとグリフィンドールの談話室へと戻った。

次の日の朝、アンブリッジ先生は朝食の席へと現れなかった。

だが既に学校中の噂になっていることがある。

それはアンブリッジ先生の額に『私は生徒に体罰を与えた』と刻まれているというもののだ。

もつとも噂の発信源は私だ。

どうやらアンブリッジ先生は自分の部屋に籠っているらしい。

だが、それでは折角刻んだ意味がない。

私はトーストを一枚口に咥えると時間を止めアンブリッジ先生の部屋へと向かう。

アンブリッジ先生は私の思惑通り前髪をヘアピンで留めて額を晒していた。

そして重病の病人のように唸っているような顔でベッドに横になっている。

私は時間を止めたままアンブリッジ先生に触れると大広間まで付き添い姿現しをする。

そして大広間のご真ん中にアンブリッジ先生を設置し先ほどまで座っていた場所に座り直した。

先ほどと同じようにトーストを啜え私は時間停止を解除する。

「……………え？ きゃあああああああああ！」

時間停止を解除して数秒後、大広間にアンブリッジ先生の悲鳴が響き渡った。

生徒は何事かと言わんばかりにアンブリッジ先生を見る。

そしてアンブリッジ先生を見た生徒の殆どが先生の額に刻まれた『私は生徒に体罰を与えた』という文字を見た。

途端に大広間にざわめきと悲鳴が沸き起こる。

アンブリッジ先生は見られては拙いと咄嗟に手で傷口を隠すが、隠した瞬間に悲鳴を上げて手を退かした。

そう、覆えないのだ。

隠すことすらできないのだ。

「うわ……………マジかよ」

私の隣に座っていたロンがアンブリッジ先生を見ながら声を上げる。

ハリーはアンブリッジ先生を見た後すぐにこちらを見た。

「咲夜……………あの——」

「私じゃないわよ。あの後すぐに談話室に入ったのを貴方も見たでしょう?」

「……そうだね。そうだ」

アンブリッジ先生は一刻も早く大広間から逃げようと出口目指して走り出す。

そして大広間から出ていった瞬間、大広間中の生徒が大笑いした。

「ハリー、今日は罰則に行かなくてもいいわ。あの様子だと多分傷口を見られたくないでしょうから」

私はトーストを食べ終わり静かに紅茶を飲んだ。

「うん。むしろ行ったら更に罰則を増やされそうだ」

ハリーはニヤリと笑ってオートミールをかき込む。

そう言えばと思い出し私はまだ啞然としているロンに声を掛けた。

「そう言えば、ロン。貴方グリフィンドールのクイディッチチームのキーパーになったんですって?」

私のその言葉を聞いてロンは我に返り、嬉しそうな顔をした。

「うん。僕今年から監督生になっただろう? そのお祝いにママが新品の箒を買ってくれたんだ。チャーリーもフレッドもジョージもクイディッチをやってるし、いい機会だから僕もね」

そう言っつてロンは胸を張る。

「選抜試験があつたんでしよう？」

「ああ、でも僕が選ばれたつてことは僕が一番だつたつてことだろ？」

確か選抜試験は昨日だったか。

私はもう一度大広間の中をぐるりと見回す。

先ほどのアレで噂の信憑性はぐんと増すだろう。

私は内心ほくそ笑むと紅茶を飲み干した。

尋問官とか、査察とか、先生とか

「アルバス……この事態をどう見ますか？」

マクゴナガルが感情を押し殺した声で言った。

ダンブルドアはマクゴナガルの声を聞きながらも、机の上の資料を見る。

その資料の随所に『十六夜咲夜』という名前が見受けられた。

「これは余りにも異常です。確かにアンブリッジという女性は周りのヘイトを集めるタイプの人間かもしれませんが……」

資料の中には何枚か写真が交じっている。

その写真には額に高度な魔術で文字を彫られたアンブリッジの顔の写真もあった。

「余りにも残虐的で、そして理由がない。……アルバス、聞いているのですか？」

「おお、聞いておるとも、ミネルバよ」

マクゴナガルの大声にダンブルドアはゆっくりと言葉を返した。

ダンブルドアは次々と資料に目を通していく。

その資料には十六夜咲夜がホグワーツに入学する前の情報が載っていた。

「ミネルバ、これにはもう目を通したかの」

「ええ……。にわかには信じられません」

マクゴナガルはそう言つて目を伏せる。

それはそうだろう。

資料には確認できるだけの十六夜咲夜の殺人歴が載っている。

そしてその数はヴォルデモート卿の殺人数を超えるほどだったのだから。

「今までホグワーツで一人も殺していないのが奇跡のような殺害数です。吸血鬼に仕えているという話は入学前に聞きましたが、これでは余りにも……」

「そうじゃの。とても表に出てきていいような人間ではない。ホグワーツに入学するまで、十六夜咲夜は人間を只の食料として見てきたのじゃ」

ダンブルドアは一枚の写真をマクゴナガルに差し出した。

そこには人間を器用に捌いている咲夜が写っている。

このような写真を一体どこから入手したのだろうか。

そしてこのような写真を一体誰が撮ったのだろうか。

マクゴナガルの脳内に様々な疑問が過つたが、今は目の前の物事に集中することにした。

「わしはの、咲夜はここ数年で変わってきたと思つとつた。人間と触れあい、共に学ぶことによつて普通へと近づいておるとの。だが、それは違つたようじゃな。ただ残酷な本

性が『隠れていた』だけ。強力な自制心によって抑え込まれていただけ」

ダンブルドア先生はもう一度アンブリッジの傷痕の写真を見る。

『私は生徒に体罰を与えた』

そこにはそう刻まれている。

「抑え込んでいた衝動が、仲間のためという大義名分を持って溢れ出てきてしまった。咲夜の中で正当性を持ってしまった」

もつとも、アンブリッジの傷痕は既に綺麗さっぱり消え去っている。

ダンブルドアが呪いを解き、マダム・ポンフリーが治療したためだ。

だがアンブリッジの心の傷は全く癒えてはいない。

見えないモノの恐怖。

アンブリッジは常にそれに怯えることになるだろう。

「……アルバス。私は十六夜咲夜を退学にするべきだと進言します。出来ればアズカバに引き渡すべきです」

「それは無理じゃミネルバ。君も分かかっておろう？」

ダンブルドアは更に資料を何枚か捲る。

そこにはレミリア・スカーレットの詳細と経歴がまとめられていた。

「例え咲夜をアズカバンに送ったとしても、彼女は何食わぬ顔で脱獄するじやろう。単

独で脱獄できないようにしたとしても、レミリア・スカーレットが自分の従者を取り戻す為にあズカバンを物理的に破壊する。レミリア・スカーレットは自身のやりたいことは意地でもやる。十六夜咲夜は彼女の命令なら何でもするじやろうな」

マクゴナガルは横目で校長室に置かれた対抗試合の優勝杯を見る。

これは双子の呪文で作られた精巧な偽物だ。

ダンブルドアの話では、本物はレミリア・スカーレットの手に渡っていることだろうとのことだった。

「では、どうしろと言うんですか……このまま見逃せと？ 放っておいたら大変なことになりかねないのは貴方も分かっていることでしょう」

「分かっている。だからこそ、わしは咲夜を退学にせんし、不死鳥の騎士団へと入団させたのじやよ。彼女の行動を少しでもこちらが把握できるように。彼女の行動を少しでもこちらが制御できるようにの。もつとも、彼女を本当の意味で制御できるのは、レミリア・スカーレットただ一人じやが」

「彼女に手紙を出してはどうでしょうか。このようなことがあったからやめるように言っただけでいいよ」

マクゴナガルはそう提案したがダンブルドアは黙って首を横に振った。

「彼女の事じゃ「気に入らないんだっただらさっさと殺しなさい」多分咲夜にこう言うじや

ろ。……咲夜の行動を制限する方法はちゃんと考えておるよ。わしを誰じやと思つてる」

ダンブルドアは杖を一振りし机の上にある資料を全て消し去る。

そしてポケットから一つの懐中時計を取り出すと、竜頭を引き時計の針を合わせた。

次の瞬間、十六夜咲夜が校長室に姿を現した。

私はベッドの中で先ほどあつたことを振り返っていた。

談話室でハリーたちと共にロンに送られてきたパーシーからの手紙を読んでいたのだが、いきなりブラツクの顔が暖炉に浮かび上がったのだ。

煙突飛行ネットワークでこのように会話ができることは知っていたが、実際に見るのが初めてだった。

ブラツクはハリーにいくつかの情報を教えるとまた暖炉の中に消えてしまう。

まあ、私の場合会おうと思えばいつでも会えるのだが。

私は軽く寝返りをうってシーツにうずまる。

明日はどのような嫌がらせをアンブリッジ先生にしようか。

結局あの時刻んだ傷は次の日には消されてしまっていた。

だがまあ、消されたならそれはそれでいい。また新たに違う何かを刻めばいいからだ。

指を切り落とすぐらいならいいだろうか？

それとも骨に何か文字を刻もうか。

骨髓に何かを挟み込ませるのも面白いかもしれない。

飲み物に塩酸を混ぜるというのはどうだろう。

美鈴さんなら太ももをもいで焼いて食べるのだろうか。

いや、あれは少し不味そうだ。

私が本格的に眠ろうとしていたその時、ポケットの中の懐中時計から違和感がした。

私は咄嗟に時間を止めベッドから出る。

そして懐中時計を確認した。

時間と曜日を見るに、今すぐ校長室に来いと言うことだろう。

私は素早く制服へと着替えると寝室から姿をくらます。

そして校長室へと姿を現した。

時間停止を解除する。

「お呼びでしょうか。ダンブルドア先生」

私は椅子に座っているダンブルドア先生へと声を掛けた。

その横にはマクゴナガル先生も立っている。

「寝ているところを悪いの。騎士団の仕事じゃ」

ダンブルドア先生は一枚の羊皮紙を私に手渡ししてくる。

私はそれを受け取り内容を改めた。

「……アンブリッジ先生と仲良くなればいい。そういうことですか？」

羊皮紙にはそのような内容が書かれている。

「学生の君にスパイのような仕事を頼むのは気が引けるんじゃないが、教職員は警戒されて近づけないので。君は一部のスリザリン生とも仲が良い。適任だと思ったんじゃないが」

私は今までのことを整理する。

「……アンブリッジ先生には悪戯に関することはバレていないはずだ。

やろうと思えば簡単にできるだろう。」

「了解です。アンブリッジ先生に近づいて魔法省の情報を出来るだけ引き抜けばいいということですな」

「そこまでは期待しとらん。アンブリッジが何を考え、これから Hogwartz をどうするつもりなのかを探って欲しい。丁度彼女は今弱っておる。誰の仕業か ケントウモツカ ンが、確実に付け入る隙はあるんじゃないか」

バレてる。」

まああたり前か。

「わかりました。では明日からはそのように」

これは暗にもうアンブリッジ先生を痛めつけるなど言っているのかも知れない。

やはり少し派手にやり過ぎたか。

今度からはもう少し慎重に攻撃しよう。

私は校長室を出ようと時間を止めようとするが、マクゴナガル先生の目が少し気になつた。

あの目は何かを警戒している目だ。

「マクゴナガル先生、なにか私に御用でしょうか？」

私は先生の目をじつと見つめる。

先生は咄嗟に視線を横にずらした。

明らかに開心術を警戒している動きだ。

「マクゴナガル先生？」

「——っ、……どうしましたか？ ミス・十六夜」

「先生は嘘が下手ですね」

私は先生の顔を覗き込みニッコリと笑つた。

もつとも、私は開心術は使えないし、掛けたとしてもすぐに破られてしまうだろう。

だが適當なことを言つて表情から心境を察することぐらいはできる。

先生は私の行動に分かりやすいほど動揺を見せた。

「では失礼いたします」

私は先生方に一礼すると時間を止める。

そして寢室へ姿現ししてぐっすりと眠つた。

「——ッ……はあ……はあ」

咲夜が居なくなつた途端、マクゴナガルの背中にどつと冷や汗が出る。

ダンブルドアは椅子から立ち上がり、そつとマクゴナガルの肩を抱いた。

「フアイトじゃよミネルバ。生徒に負けてどうする」

「……大丈夫です。アルバス、これで彼女を止めれるとお思いで?」

「止まらんじやろな」

「なっ——」

マクゴナガルはダンブルドアの言葉を聞いて呆然と口を開いた。

「じゃが少しマシになるはずじゃよ。彼女はアンブリッジに近づくために表向きは仲良くするはずじゃ」

ダンブルドアは先ほど消し去った資料を復元し、文字を書き加える。そして先ほどあった通りに並べ直した。

「フアツジはアンブリッジを復活させるためにある措置を取るつもりじゃ。それを何処までこちらが操作できるかがこれからの鍵となろう」

そこに一枚の資料を加え、一つにまとめる。

最後に追加した資料には『ドローレス・アンブリッジ 初代高等尋問官』と書かれていた。

私は朝起きてすぐに時間を止めアンブリッジに一発蹴りを入れに行き、それが済むと朝食を取るために大広間へと向かった。

少し朝早い為か大広間にはあまり人がいない。

だがハリーたちは起きてきており、何かを覗き込むように顔を突き合わせていた。「どうしたの？ 3人とも」

「ああ、咲夜。いいところだ」

ハーマイオニーが振り返り私に予言者新聞を差し出した。

「この記事を読んで」

私はハーマイオニーに指示された記事に目を通す。

そこにはアンブリッジ先生が高等尋問官になったという内容が書かれていた。

「高等尋問官？」

私は眉をひそめて呟く。

ハーマイオニーが記事の内容を読むように言った。

「『高等尋問官は同僚の教育者を査察する権利を持ち、教師たちが然るべき基準を満たしているどうか確認します』つまりはアンブリッジがホグワーツの授業を管理する役職になったということよ」

「なるほどね。これはやりやすくなったわ」

私は時間を止めアンブリッジの近くまで姿現しすると背中を一発蹴る。

そしてすぐ元の場所へと戻り時間停止を解除した。

「なんにしても、一部の先生は危ないわね……」

「なんでさ？ ……あー、トレローニーとか危ないかもな」

ロンが私の言葉に同意するように呟いた。

トレローニー先生は古い自体の技術はあるのだが、才能はさっぱりなのだ。

傍から見たら役に立たないことを教えている無能教師としか映らないだろう。

「ハグリッドもよ」

私が付け加えるとハリーたち3人は驚いたようにこちらを向いた。

「ハグリッドが帰ってくるの!?!」

ハリーが驚いたような声を上げる。

私は人差し指を口の前で立て静かにと囁いた。

「多分そのうちね。いつとは言えないけど。私も詳しくは言えないし、そもそも知らないもの」

ハリーはコクリと一度頷いた。

ハグリッドが帰ってくるという情報があっただけでもうれしかったのだろう。

「さ、行きましょう。もしもビンズ先生のクラスを査察するようなら、遅刻するのは拙いわ」

私たちは1限目の授業を受けるために魔法史の教室に向かったが、アンブリッジ先生は査察には来なかった。

私は授業中に10回ほど時間を止めてアンブリッジを蹴りに行った。

次の授業は2時間続きの魔法薬の授業だ。

地下牢に入り、私はいつものようにドラコの横へと座る。

スネイプ先生は出席を取ると同時に少し前の授業で出した月長石のレポートを返していった。

「諸君のレポートがふくろう試験であればどのような点数がつけられるか、それに基づいて採点してある。試験の結果がどうなるか。これで諸君も具体的に分かるだろう」

私のレポートには『O』と書かれている。

『O』は大いによろしい、だっただろうか。

私は記念に時間を止めて別の授業の査察をしているアンブリッジ先生の頭を蹴飛ばした。

「へえ、流石咲夜だ」

ドラコが私のレポートを覗き込んで笑った。

どうやらドラコもドラコの予想以上にいい評価だったらしい。

ドラコのレポートを覗き込むとそこには『E』と書かれていた。

「やるじゃない、ドラコ。『E』って『O』の次にいい評価でしょう？ 期待以上だったかしら」

「まあ僕だからね！」

私はドラコのお祝いにアンブリッジ先生のお腹に膝蹴りを入れた。

時間の止まった教室をそのまま歩き、私はハリーのレポートも確認する。

そこには『D』と荒々しく殴り書きされていた。

『D』はどん底、つまりは落第である。

私はその後も魔法薬を調査しながら10分に一度はアンブリッジ先生に蹴りを入れるに行く。

もつともこれはただ無意味にやっている為ではない。

ダンブルドア先生から受けた騎士団の仕事を全うする為だ。

私は地下牢教室を出るとハリーたちと合流する。

話を聞く限りだと、ハリーは今日こそ魔法薬を消されずに済んだらしい。

まあ、それが普通なのだが。

私たちは大広間へと向かい昼食を取り始めた。

今日は沢山動いたので非常にお腹が空いている。

午後からも忙しく動き回る可能性がある為しつかりとスタミナをつけておかななくては。

「最高点が『O』で、次が『A』」

ハーマイオニーがハリーとロンにふくろう試験に関する評価の仕方について話していたが、思わぬところから訂正が入った。

「いや、『O』の次は『E』さ。期待以上ってことだな」

ハーマイオニーの言葉を訂正するようにジョージが口を挟んできたのだ。

「それじゃあ、その次が『A』で、最低合格点の『可』なのね？」

「そつ」

今度はフレッドが答える。

「その下に良くないの『P』が来て、そして最低の『D』が来るわけだな」

ロンが感心したように言ったが、ジョージ曰くまだ下があるようだった。

「ところがどっこい。『T』を忘れてもらっちゃ困るぜ」

「『T』? 『D』より下があるっていの?」

「トロールのT」

その言葉に流石の私も少し笑う。

ハリーは自分の取った『D』より更に下があると知って少し安心した様子だった。

「そういうえば、君たちはもう授業査察を受けたか?」

ふくろう試験の話はこれで終わりなのだろう。

アンブリッジ先生の査察の話へと移っていく。

「いえ、まだ受けてないわね。そういう話が出てくるということはさつき査察があったのね?」

私が聞くと2人は大きく頷いた。

「ああ。たった今、昼食の前にね」

「呪文学さ。フリットウィックのね」

「どうだった？」

ハリーが聞くとフレッドが肩を竦める。

「大したことがなかった……とは言えねえな。アンブリッジのやつは隅の方でコソコソとクリップボードに何かを書きこんでいるんだが、10分に1回、発作のように悲鳴を上げるんだ」

ジョージが笑いを堪えたような顔で続ける。

「大きく跳び上がるボディーアクションもつけてな。3回目ぐらいから見えない誰かに向かつて切れてたよ。あいつ絶対頭イカれてるぜ。闇の魔術に対する防衛術の担任つてのは変なのしか選ばれないのか？ でも査察はちゃんとしていたな。アリスアに2つ3つ質問していた」

あ、それ私の仕業です。

とは、口が裂けても言えない。

だがその様子ならアンブリッジ先生は随分と精神的にキテいるだろう。

このまま続け、様子を見ることにする。

私はいつもより多めに昼食を胃袋に詰め込むとハリーとロンと共に占いの教室へと向かった。

古い学の授業が始まる寸前、アンブリッジ先生が北塔の教室へと姿を現した。

その瞬間にペちやくちやと楽しげだったクラスが、たちまち静かになる。

「こんにちは、トレローニー先生。私が送ったメモを受け取りましたわね？ 査察の時間をお知らせしたはずですが」

トレローニー先生は少し機嫌が悪いと言わんばかりに素っ気なく頷き、アンブリッジ先生に背を向ける。

私は授業が始まる前にことを起こすことにした。

時間を止め、渾身の力でアンブリッジ先生の尻を蹴飛ばす。

そしてバレないように先ほどと全く同じ体勢を取って時間停止を解除した。

「ぎゃあ!! ——!?!」

アンブリッジ先生は鋭い悲鳴を上げ、余りの痛みに床を転がり呻く。

私はそれに急いで駆け寄った。

「先生!?! 大丈夫ですか!?! ……この悪霊め!」

私は何も無い虚空へと手をかざし、霊力を溜め、撃ちだす。

霊弾は真つすぐ飛んで空中で破裂した。

「先生、ご安心ください。悪霊は追い払いました」

「や、やつぱりゴーストの仕業だったの!？」

アンブリッジ先生は驚きと安堵が混じり合った顔で私を見る。

私は先生に対してニッコリと微笑んだ。

「しばらくは帰ってこないでしょう。安心して授業の査察をしてください」

私はアンブリッジ先生を引き起こすとハリーたちの元へと戻る。

ハリーたちは目を丸くしてこちらを見ていた。

「おつたまげー。君そんなキャラじゃないだろう?」

ロンはトレローニー先生から配られた「夢のお告げ」という本で頭を叩きながら言う。

ハリーもロンと同意見らしい。

私はアンブリッジ先生に聞こえないほど小さな声で2人に囁いた。

「不死鳥の?」

「騎士団」

「仕事か……。大変だな、咲夜も」

取り敢えず納得したようだった。

授業が始まり、私は1つのことに気がつく。

トレローニー先生は凄くアンブリッジ先生の事を避けている。

どうやらトレローニー先生も生理的にアンブリッジ先生のことを駄目なのだろう。

まるでトイレでも掃除するかのような顔をしていた。

生徒たちが自分たちの課題に取り組んでいる間、アンブリッジ先生はトレローニー先生に質問を飛ばす。

「貴方はこの職についてからどれぐらいになりますか？」

「そうですね。もうかれこれ16年になるでしょうか」

「相当な期間ね」

アンブリッジ先生はクリップボードにメモを取る。

「で、ダンブルドア先生が貴方を任命なさったのかしら」

「そうですわ」

トレローニー先生の態度は素っ気ない。

だがアンブリッジ先生はこのうえなく上機嫌だった。

この授業に入ってからまだ1度も目に見えない何者かに蹴飛ばされてないからだろう。

まあ、それは私なのだが。

私の狙いはまさにこれなのだ。

「それで、あなたはあの有名な予言者である、カツサンドラ・トレローニーの曾々孫です

ね?」

「ええ」

「でも、間違っていたらごめんなさいね。貴方は、同じ家系でカツサンドラ以来初めての『第二の目』の持ち主だとか?」

「こういうものはよく隔世しますの。そう、3世代飛ばして」

アンブリッジ先生はまたメモ書きをする。

「……そうですね。では私の為に何か予言をしてくださらない?」

トレローニー先生はその言葉にただでさえ大きい目を更に大きくした。

「おっしゃることが分かりませんわ」

「私の為に、予言を一つして頂きたいの」

「内なる目は命令で未来を予見したりはしませんわ!」

トレローニー先生はとんでもない恥辱だと言わんばかりに大声を張り上げる。

その言葉にアンブリッジ先生のニヤニヤは更に強くなった。

私はいい機会だと思いい時間を止めて羊皮紙を取り出しトレローニー先生の羽ペンとインクで文字を書く。

『アンブリッジは悪霊に取り憑かれている』

そしてその羊皮紙を小さく折りたたむとトレローニー先生の手の平に握りこませた。

時間停止を解除すると違和感に気がついたのか先生は手に握られた羊皮紙をアンブリッジに見えないように開く。

そして声を出さなかったのが奇跡だと思えるほど肩を震わせ驚くと、その羊皮紙をポケットの中に突っ込んだ。

「あたくし——でも、でも……お待ちになって！」

トレローニー先生は慌てたような声を出す。

だが声の調子が悪いのか怒っているようにも聞き取れた。

「あたくし……そう、あたくしには確かに見えますわ。何か貴方に関するものが……ああ！　なんとということでしょう!?　何かを感じます。何か暗く、恐ろしいもの……」

その言葉にアンブリッジは平静を保とうとしているが、私はアンブリッジがごとりと唾を飲んだ音を聞いた。

トレローニー先生は続ける。

「お気の毒に……まあ、あなたは恐ろしい危機に陥っていますわ！　悪霊に取り憑かれています……」

トレローニー先生はそう締めくくった。

アンブリッジ先生はしばらく口をパクパクとしていたが、やがて口を閉じ小さく「そう」と呟いた。

「何か対処法のようなものはあるの？ あ、いえいえ。怖がっているわけじゃないのよ？」

「……ないとしたら」

アンブリッジ先生はしばらく唾然としたように沈黙し、苦し紛れに「それが精一杯と
いうことでしたら……」と付け加えた。

これで下ごしらえはおしまいだ。

あとはサーカスの動物を調教するのと同じである。

いつの間にかアンブリッジ先生はトレローニー先生から離れフラフラと梯子を降り
ていく。

そしてそのまま古い学の教室を後にした。

私は先生が出ていってから一分待ち、時間を止めてアンブリッジ先生の太ももにロ
キックを入れる。

そして教室へと戻り何食わぬ顔で時間停止を解除した。

トレローニー先生は不思議そうにポケットから羊皮紙を取り出しよく眺める。

そして何か納得したかのように頷くと授業へと戻っていった。

私はその後の授業中、10分に1回は時間を止め姿現しをし、自室に戻ったアンブ
リッジを蹴るという行為を繰り返す。

服で隠れているところ全てにあざが出来るように、徹底的に何度も何度も。

しばらくそんなことを繰り返していると、終業のベルが鳴った。

私はハリーたちと共に北塔を下り、次の授業である闇の魔術に対する防衛術の教室へと入る。

私は教室に入った瞬間に時間を止めアンブリッジ先生の頭を蹴飛ばした。

「ぎゃあ!!」

アンブリッジ先生は側頭を蹴られ無様に地面に転がる。

その様子をグリフィンボールの生徒はまたかといった表情で見っていた。

私は先生に駆け寄り何者かから先生を守るように仁王立ちする。

そしてまた意味もなく空中に霊弾を放った。

「先生、これでもう安心です。また入ってきてても私が追いかけてますわ」

私は先生にニコリと笑うとハリーたち3人の元へと戻る。

この中ではハーマイオニーだけが信じられないものを見たと言わんばかりの顔をしてこちらを見ていた。

「貴方アンブリッジ先生を滅茶苦茶嫌悪してたじゃない!」

私はハリーとロンと顔を見合わせる。

そして3人で小さな声でハーマイオニーに囁いた。

「不死鳥の？」

「騎士団。なるほど、それ関係の任務ってわけね」

ハーマイオニーも他2人と同じぐらい察しが良かった。

私はアンブリッジ先生の方を見る。

側頭部を押さえながらこちらを見ていた。

だがその目には敵意はない。

何か期待をしているようなそんな目だ。

「エフン、静粛に。杖は仕舞ってね」

先生は気を取り直して咳ぼらいをし、授業を開始する。

「前回の授業で第1章が終わりましたので、今日は第2章を始めましょう。おしゃべりは要りませんよ」

先生は椅子を取り出すと恐る恐る座る。

そして何かに安堵した。

私は形だけ教科書を開き、リドルと会話でもしようかとリドルの日記を取り出そうとする。

だが、次の瞬間ハーマイオニーが手を挙げているのが目に映った。

アンブリッジ先生はそれに気がついたのかハーマイオニーに近づいていく。

そして他の生徒に聞こえないように体を屈めて囁いた。

「ミス・グレンジャー。今度は何ですか？」

「第2章はもう読んでしまいました」

「では第3章に進みなさい」

「そこも読みました。この本は全部読んでしまいました」

……まあ、ハーマイオニーならそうだろう。

教科書なんて夏休みの中に全て読み終わっているはずだ。

アンブリッジ先生はその言葉に少し驚いたような顔をしたが、すぐに平静を取り戻した。

「では、スリンクハートが第15章で逆呪いについてどのようなことを書いているか。勿論言えるのでしょね」

アンブリッジ先生は汚く表情を歪ませる。

だが、そのような質問をハーマイオニーにすべきではなかっただろう。

「著者は逆呪いという名前は正確ではないと述べています。逆呪いというのは自分自身がかけた呪いを受け入れやすくするためにそう呼んでいるだけだと書いています」

私はアンブリッジ先生がハーマイオニーの答えに対して屁理屈をつけるだろうと予想し返答を待つ。

だが、驚いたことにアンブリッジ先生は少し感心したような顔をしていた。お、いい空気ではないか。

「でも私はそうだとは思いません」

ハーマイオニーがその一言で空気を台無しにする。

「そうは思わないの？」

「思いません」

ハーマイオニーはクラス中に響くような声ではつきりと言い切った。

「著者であるスリンクハート先生は呪い自体が嫌いなのではありませんか？ 私は防衛術の為に呪いを使えば、とても役に立つ可能性があると思つています」

「おーや、貴方はそう思うわけね」

私は渾身の力を籠めてハーマイオニーにガンを飛ばす。

ハーマイオニーは私の目を見てようやく自分が拙いことを言つたことを理解したようだった。

先生が口を開く前に、私は穏やかな表情を作りハーマイオニーに語り掛ける。

「ハーマイオニー、この授業で大切なのは貴方の意見ではなくてスリンクハート先生の意見よ。魔法省が指定した教材の内容を否定してはいけないわ」

私の意見にアンブリッジ先生は満足そうに頷き、言葉を付け足した。

「これまでこの学科を教えていた先生方は、みなさんにもっと好き勝手をさせたかも知れませんが、誰一人として……ああ、クイレル先生は例外かも知れませんか。少なくとも年齢にふさわしい教材だけを教えようと自己規制していたようですから。でも魔法省の査察をパスした先生はいなかったでしょう」

私はクイレルの名前がいきなり出てきて内心ドキリとする。

今の先生の言葉を文字通り解釈するなら……面白いことができそうだ。

ハリーもクイレルの名前を聞いて頭に血を上らせたのか大声で言い返そうとした。

私はハリーが口を開いた瞬間にハリーの脛をつま先で蹴る。

「——っ!？」

ハリーは痛みのあまり悲鳴も出せずにその場に蹲った。

「ええ、本当に。ふくろう試験がある大事な年にアンブリッジ先生が担任になってくださって本当に助かったわ」

アンブリッジ先生は私のその言葉に満足したのか黒板の方に戻っていった。

ハリーは私の方を睨んできたが、私も眉間に皺を寄せて睨み返す。

その瞬間ハリーは目を背け、小さく「ごめん」と謝った。

「マクゴナガル先生に言われたでしょ? 自制しなさいって」

私は教科書を捲るふりをしながらハリーに小さな声で囁く。

ハリーはまだ脛が痛むのか目に涙を浮かべて脛を摩っていた。

次の日の変身術の時間、私は既に日課になりつつあるアンブリッジ蹴りを1時間休むことになった。

変身術の授業にアンブリッジ先生が査察に来たのだ。

私は儀式のように教室に向けて霊弾を撃つと、アンブリッジ先生に微笑んで机にく。

ロンはハリーの横で何かを期待するようにマクゴナガル先生を見ていた。

私は教室内を軽く見回すが、少なくとも生徒がロンと同じように期待したような目でマクゴナガル先生を見ている。

どうやらマクゴナガル先生がアンブリッジ先生をどうあしらうかを期待しているようだ。

「ミスター・フィネガン、ここに置いてある宿題をみなさんに返却してください。ミス・ブラウン、ネズミの箱を取りに来てください。1人に1匹ずつ配って——」

「エヘン、エヘン」

アンブリッジが先生の気を引くように大きく咳ばらいをするが、マクゴナガル先生は華麗に無視した。

「さて、それではよく聞いてください。トーマス、ネズミに二度とそんなことをしたら罰則ですよ。……カタツムリを消失させるのは、殆どの皆さんができるようになりまし、完全ではない生徒も呪文の要領は掴めてきていることだと思えます。今日の授業では——」

「エヘン、エヘン！」

アンブリッジ先生は先ほどよりはつきりと咳ばらいをした。

マクゴナガル先生は一度話すのを止め、アンブリッジ先生の方を見る。

まるで養豚所の豚でも見るかのような目をしていた。

「なにか？」

「先生、私のメモが届いているかどうかと思ひまして。査察の日時を——」

「当然受け取っています。さもなければ私の授業に何の用があるのかとお尋ねするところですよ」

そう言うなりマクゴナガル先生はアンブリッジ先生に背を向け授業を再開した。

生徒の多くが歓喜の色を目に浮かべ顔を見合わせる。

「先ほど言いかけていたように、今日はそれよりも難しい、ネズミを消失させる練習をします。さて、消失呪文とは——」

「エヘン、エヘン」

「いったい、そのように中断ばかりなさって、私の通常の教授法がどんなものか、お分かりになるのですか？ いいですか。私は通常、自分が話しているときに私語は許しません」

アンブリッジ先生はその言葉にまるで私に蹴られた時のような顔を浮かべると、表情を歪め猛烈な勢いでクリップボードに何かを書き込み始める。

だがそんな様子をマクゴナガル先生は全く気にしていないようだった。

「先ほど言いかけたように、消失呪文は消失させる動物が複雑であればあるほど難度が上がります。無脊椎動物と哺乳類では大きく違うことを頭の中に入れておいてください」

「アンブリッジに癩癩を起こすなんて、よく僕に説教できるな！」

ハリーはヒソヒソと隣にいるロンに囁きかける。

その顔はニヤリと笑っていた。

私は配られたネズミに消失呪文を掛け消し去る。

マクゴナガル先生は難しいというが、そう難しい物でもないと思うのだが……。

私は消し去ったネズミを元通りに戻し、教室内に放す。

ネズミは元気よく教室中を走り回った。

10月に入ると週末にホグズミード行が許可された旨の掲示が談話室に貼られた。ホグズミードか。

実際あまり魅力は感じない。

行こうと思えばいつでも行けるから、私の中でホグズミード行きはあまり貴重なことではないのだ。

私は談話室の中をぐるりと見回す。

現在の時刻は午後11時。

驚いたことにまだそんなに遅い時間ではないのに談話室には私の他には誰もいなかった。

私は暖炉の前のソファアに腰を掛けると読みかけの本を取り出し読み始める。

読書を始めて10分程経っただろうか。

いきなり後ろから声を掛けられた。

「咲夜、ちよつといい？」

私は本にしおりを挟んで振り返る。

ハーマイオニーだ。

後ろにはハリーとロンの姿もある。

3人は真面目な顔をして私の後ろに立っていた。

「あのね……私、いや、私たち、考えていたんだけど……」

ハーマイオニーはハリーの方をチラリと見る。

ハリーは1回頷いた。

「闇の魔術に対する防衛術の自習をするべきだと思うの。今日3人で話し合ったわ。このままでは私たちは魔法省の思惑通りに無能になってしまう。自分たちで戦う力を身に付けなくちゃって」

「いいんじゃない?」

私は適当に返事を返し読書に戻った。

「あ、話はまだ終わりじゃなくて。咲夜、私たち、貴方に呪文を教わりたいのよ」

私は静かに本を閉じる。

そして改めて3人のほうへ向き直った。

「つまり何がしたいわけ? 私に何をさせたいって?」

「今言った通り。同じ志を持つ仲間を集めて、闇の魔法使いと戦う力を付けたいと思っているの。咲夜にはその先生をや——」

「軍隊でも作るつもり?」

私がそういうとハーマイオニーがしどろもどろになる。

だが代わりにハリーがはつきりと答えた。

「ああそうだ。僕たちは力が欲しい。闇の魔術と戦えるための力が」

「本気？」

「ああ」

「正気？」

「勿論だよ」

「ほかの2人もそれでいいの？」

私はハリーの後ろに立っているロンとハーマイオニーを見据える。

2人とも決意をもって頷いた。

「そう。いいわよ」

「え？」

ハーマイオニーが驚いたように聞き返す。

「OK、つて言ったの。ただし、少し私の意見を取り入れなさい」

私はまずハーマイオニーを見据えた。

「ハーマイオニー。貴方は出来る限り、闇の魔術に関する情報を集めること。そういうものを作る前にね」

次に私はロンを見据える。

「ロン、貴方は軍隊でいうところの参謀よ。こういった活動はアンブリッジ先生、またはスリザリン生からの妨害を受けると思うわ。人材を用いてもいいから相手の状況と自分たちの状況を把握しなさい。駒の数と動き方が違うチェスをやると思えばいいわ」

最後に私はハリーを見据えた。

「そして、私が先生をやるのは構わないけど、全体の指揮を取るのには、ハリー、貴方よ」
「僕が？」

「ええ、ネームバリューが違うわ。私はただこの学校で有名なだけ。それに貴方は全校生徒が知っているほどに魔法省に対して反発している。そのような人材を集めるのなら貴方がリーダーをやったほうがいいわ」

私はもう一度本を開いた。

「取り敢えず、次のホグズミード行きまでにめぼしい生徒に声を掛けておきなさい。場所が私が用意するわ。……そうね、ホグズ・ヘッドなんてどうかしら」

あそこなら店員とも知り合いなので融通も利くだろう。

私は結構素っ気ない態度をとってはいたが、内心では少し感心していた。

癩癩を起すだけの子供かと思っていたが、ちゃんと対策を練っているではないか。

私は少し次のホグズミード行きが楽しみになってきた。

ハーマイオニーは私の言葉に何かを考えるように指を折ると、小さく頷く。

「……うん、わかったわ。それじゃあ次のホグズミード行に、ホッグズ・ヘッドで」

ハーマイオニーは何かの準備があるのか飛ぶように女子寮へと上がっていく。

ハリーとロンも緊張のあまり忘れていた眠気がぶり返してきたのか眠そうに欠伸びしながら男子寮へと上がっていった。

私はそのまま朝まで本を読んで、時間を止めて女子寮に行く。

そしてベッドに入り夢の中へと落ちていった。

会合とか、解散とか、申請とか

10月のホグズミード行き。

私は朝食を食べ終わると一足先にホッグズ・ヘッドへと向かった。

店主にはもう話をつけてあるのだが、今日この店で小さな集まりがあるのだ。

「じゃあ、遠慮なく店の2階を借りるわね。大丈夫、中で騒ごうってわけじゃないから」
「当たり前だ。騒いだら追い出すぞ」

店主は虫でも払うかのように私を2階へと追いやった。

私は肩を竦めて階段を上っていく。

そしてその先にある小さな部屋のドアを開けた。

「これは……想定以上に小さいわね」

部屋の端から端まで5メートルもないだろう。

ハーマイオニーがどれほどの人を連れてくるか分からないが、少々手狭だ。

私は懐中時計を握りしめ、意識を集中させる。

そして一気に部屋の大きさを広げた。

部屋は一気に拡張され、グリフィンドールの談話室ほどの大きさとなる。

これだけ大きければ問題ないだろう。

私は部屋の中に椅子を30ほど弧を描くように数列並べ、その前に演台を置く。

これで取り敢えず話をする空間は出来上がった。

私は部屋から出て階段を下り、カウンターに腰かける。

「店主さん、いつもの」

「なんだ……用事があつたから上を借りたんだろう？」

「そうよ。だからここにいるの」

マスターはカウンターのの上に私がボトルキープしているブランデーを置く。

私は自分でグラスへと注ぎ、少しずつ飲み始めた。

10分もすると戸口に子供が話し合うような声が聞こえてくる。

私が視線を向けるとハリーたちが店の前で立ち往生していた。

「そんなところに立ってたら邪魔でしょう。さっさと入りなさいよ」

私は手早くグラスとボトルをカウンターの向こうに押しつけ、3人を店の中に呼んだ。

「咲夜……ここで、あっているのよね？」

ハーマイオニーは店の中を見回した。

ハリーとロンも同じことを考えているらしく、しきりに周囲を気にしている。

「ええ、だから私はここに居るのよ。……上よ。許可は取つてあるわ」
私は指を立てて階段を指さした。

ハーマイオニーは私の指さした方向を確認すると、静かに頷く。

「わかった、ありがとう」

ハリーも頷き、3人は店の2階へと上がっていった。

私はその後、会合に来た生徒たちを次々に2階へと案内する。

新しく人が2階に上がっていくたびに、店主の表情が険しくなっていた。

「おい、うちの店を潰す気か？ 物理的に」

「んなわけないでしょう？ 大丈夫よ……多分」

正直、私が考えていたよりも人の入りがいい。

ハーマイオニーはここまで多くの人に声を掛けていたのか。

ネビル、トーマス、ジニー、ラベンダー、パチルの双子、チャンとその連れ1人、デイ
ゴリー、ルーナ、ベル、スピネット、ジョンソン、クリービー兄弟、マクミラン、フレッ
チリー、アボット、その他たくさん。

そして最後にフレッド、ジョージの双子とジョーダンがゾンコで買ったものが入つて
いるであろう紙袋を抱えて2階へ上がっていった。

「ひい、ふう、みい……そうね。バタービール30本つてところかしら」

「そんなにねえよ」

「あら、いいの？ 折角お金を落としていってあげると言っているのに」

店主は何かを考えるように固まるとカウンターの下から埃の積もったバタービールの箱を取り出す。

私は埃が舞わないように慎重に蓋を開けた。

「なんだ。あるんじゃない」

私は中に並んでいる綺麗な状態のバタービールの瓶の数を数える。

ちようど30本ぐらいあるだろう。

「持ってくんだったら全部買ってけ。新しく開けると少しだけ余っていつも捨てることになる」

瓶入りの飲み物にその理屈はおかしいが、まあいいだろう。

私は1箱分のガリオン金貨を支払うとその箱を抱えて2階へと上がった。

「ああ、咲夜。待ってたよ。……その箱は何だい？」

ハリーがひよこつと部屋から顔を出す。

「ん？ 差し入れてるところかしら。持ってくださいる？」

私はバタービールの箱をハリーに押し付けると部屋の中に入った。

私が並べた椅子には既に多くの生徒が座り、ハーマイオニーが簡単に何をする集まり

かということを説明している。

簡単に話を聞いた限りでは、闇の魔術に対する防衛術の技能を自習する集まりを作るという話らしかった。

なんだ、軍隊を作るわけではないのか。

「私たちは自分たちで技術を磨くべきであり、共に助け合い、教え合い。知識だけの防衛術ではない、本物を勉強するべきなのです」

「そうだそうだ！」

「去年までのクールな闇の魔術に対する防衛術の授業を取り戻そうぜ」

ハーマイオニーの言葉に参列者は賛同している。

まあ賛同しなければここに来ることもないのだから当たり前ではあるが。

「それで先生は誰なの？ マッドアイとか？」

チヨウ・チャンが少し期待を込めたような顔で言った。

「いや？ ハリーじゃないか？」

「うちのデイゴリーを推薦するわ」

「悪戯の腕なら双子に勝るやつらはいないぜ？」

皆が口々に意見を言い合う。

「エヘン、エヘン！」

ハーマイオニーがわざとらしくアンブリッジ先生のモノマネをして注意を引いた。

「ちやんと考えてあります。まず、リーダーは例のあの人と真つ向から対峙して、何度も無事に生還しているハリーです」

その言葉に皆が一斉にハリーの方を向いた。

ハリーは少し恥ずかしそうにしながらロンと手分けしてバタービールを配っていく。

「そして、防衛術自体は、上級生の呪文が上手い人、例えばセドリックとか、この場合はハリーとかもかしら。防衛術を既に使える人が使えない生徒に教えていく形を取ろうと思つています」

「じゃあ、既に防衛術を知っている人は、新しく学ぶことはないじゃないか。僕は専門家に教えてもらえるのかと思つただけ……」

ハーマイオニーの言葉に間髪入れずにハツフルパフのザカリアス・スミスが言った。

「どうやらその制度に不満を持っているようだ。」

「勿論、先生はいます。あくまでどのような形で進めていくかを説明しただけであつて

……。お願い」

ハーマイオニーはこちらを見て声を掛けると、一步後ろに下がった。

私に演説をしろということだろうか。

私は部屋の隅から演台の方へと歩いていく。

そして静かに皆の前に立った。

「私が教師の、十六夜咲夜よ。もつともここにいる人の中で私の事を知らないという生徒はいないと思うけど」

全員が私の顔を見ている。

まさかここで出てくるとはと言ったような表情だ。

「文句のある人は申し出なさい。聞いてあげるわ。……貴方さつき何か言いたそうな顔をしていたわね？　話を聞くわよ？」

私はザカリアス・スミスに声を掛けるが、スミスは凄い勢いで首を横に振った。

「これ以上の適任はいないだろう!!　すっげえやー!」

ジョーダンが我慢できないとばかりに笑いながら拍手する。

やがて大きな拍手が巻き起こった。

私は右手を軽く上げる。

途端に拍手は止み、また部屋の中は静かになった。

「防衛というのはさまざまよ。簡単な呪いから難しいものまで。はたまた魔法ではないものもあるわ。それらをどのように扱うかという問題も出てくる。いい？」

私は杖を振るう。

すると空中に大きな黒板が出現した。

その黒板は自動的に文字を浮かび上がらせる。

『まず逃げろ。それが無理なら。殺される前に殺せ』

その文字を読んで、何人かの生徒は小さく息を飲んだ。

「闇の魔法使いに学生が勝てるわけないわ。まず戦うことを放棄して全力で逃げる方法を教える。そしてどうしても戦わざるを得ないとき、大切なのはこれ。『殺られる前に殺れ』手加減して勝てる相手ではないわ。そして、なにより安易に呪文を使わないこと。『Take my tip-don't shoot it at people, unless you get to be a better shot. Remember?』使えないのと使わないのは違うし、使えるのと扱えるのは違うのよ」

私は全員の瞳を順番に覗き込む。

……少々怖気づいている生徒もいるが、まあこんなものだろう。

私はまた壁際に移動し、ハーマイオニーに演台を譲った。

その後はハーマイオニーの司会のもとに練習する日の間隔や、どのようにその日を決めるかということを決めていった。

「さて、どこに集まるかだけど。いい場所を知っているわよ」

ハーマイオニーが話し出す前に私は話を切り出す。

「何かあてがあるの？」

「ええ、いい場所があるわ。必要の部屋よ」

私の言った場所に心当たりがないのか、全員が等しく首を傾げた。

「まあ言ってしまうえば、都合のいい部屋つてところね。8階にあるからあとで場所を教えるわ」

この会合を開くにはびつたり部屋だと思ふ。

防衛術を学習するなら、色々と教材などが必要になつてくるだろう。

紅魔館を細部まで再現したあの部屋なら、それぐらいのものを用意すること自体は簡単なはずだ。

「わかった、後で場所を確認しに行くわ。最初の集まりの日時と場所が決まったら、みんなに伝言を回すことにします」

ハーマイオニーはそう言つて話を締めくくる。

その後には何かを躊躇うようにして羊皮紙とペンを取り出した。

「私……、考えたんだけど、ここに全員名前を書いてほしいの。誰がきたか分かるように。それと、私たちのしていることをアンブリッジにも誰にも知らせないと約束して欲しいの」

私はその羊皮紙と羽ペンを見て、口を開きかける。

だが、考え直しても一度口を閉じ直した。

あれには強力な呪いが掛かっている。

私がアンブリッジ先生に掛けたものと比べても、遜色ない代物である。

私が羊皮紙に視線を戻したときには、既に何人かの名前が書かれた後だった。

何人かは名前を書くことを躊躇ったが、結局ハーマイオニーの迫力に負けて羊皮紙に名前を書く。

ハーマイオニーは全員の名前が書かれた羊皮紙をスミスから受け取ると、最後に私に回してきた。

「さて、あとは咲夜だけよ」

私は羊皮紙の上で羽ペンを滑らせる動きをする。

もつとも、まだ文字は書いていない。

そして書き終わったように見せると時間を止め自分のペンで羊皮紙に名前を書いた。

その呪いには羊皮紙と羽ペンがセットになつていないといけない筈だ。

このようにしてペンを換え名前を書けば呪いの効果を受けることはない。

私は時間停止を解除し羊皮紙をハーマイオニーに返す。

それをもって会合は解散となった。

もつとも、会合中も10分に一度は時間を止め、アンブリッジを蹴飛ばしに行つてい

たが。

私は生徒が帰っていったのを見てハリーたち3人と共に部屋を片付ける。

そして部屋がすっかり元通りになったところで私は部屋を元の大きさに戻した。

「うわーお」

ロンが感嘆の声を上げる。

それ以上にハーマイオニーが啞然とした顔をしていた。

「……そこまで驚くことじゃないでしょう？ ただの空間を広げる魔法よ」

「……そうよね。ええ、そうだよ」

ハーマイオニーは何か自分を納得させるように言い聞かせ、ハリーたちと共に店を出ていく。

私も店主に一言お礼を言い、ホッグズ・ヘッドを後にした。

すでに毎日のように来ているアンブリッジ先生の自室に、私は時間を止めずに座っていた。

目の前ではアンブリッジがいそいそと紅茶の準備をしている。

なぜこのようなことになっているのか。

話を今日の朝食の時間まで戻そう。

ホッグズ・ヘッドで会合があった次の日、私は朝食を食べるために大広間へと来ていた。

昨日が土曜日なので今日は日曜日、授業はない。

1年生などはやることがないのかのほほんと朝食を取っている。

だが5年生ともなればそうとはいかないらしい。

ふくろう試験の年なので、先生方も山のように宿題を出すのだ。

皆さつさと朝食を腹の中に入れ、図書館や談話室へと散っていく。

ハリーとロンも昨日のことで少し浮ついてはいたが、ハーマイオニーに何処かへと引きずられていった。

では私はどうなのかと聞かれたら、時間による拘束などあるはずもなく、下級生に交じってのほほんと朝食を取っている。

下級生からしたら、どうも私は憧れの存在というやつらしい。

2年生から上は去年、大会に出場していた私を知っているし、1年生は上級生から耳にタコができるほど私の話を聞いていることだろう。

何年か前にお嬢様は私に目立てといったが、これでいいのだろうか。

まあなんにしても、休日によつくりできるといふのはいいことだ。

週に一度は何もしない日を設けると神も言っている。

……まあ紅魔館ではその教えは実行されていないが。

なんにしてもこのクロワツサンの焼き加減ときたら、うん、いい。

紅茶に合うように私が徐々に徐々に厨房の料理のレシピに手を加えているのだが、その成果が出てきているようである。

そしてこのベーコンの焼き具合など……あ、これは少しよくない。

この感じはウインキーだろうか。

最近クラウチシヨックからも立ち直って真面目に仕事をしていると思っていたが、まだ少し酒癖が治っていないようである。

多分二日酔いでこのベーコンを焼いたのだろう。

「少々いいかしら？」

私が朝食を食べていると後ろから声を掛けられる。

もつとも何者かに接近されたことは分かっていた。

だが、急に振り向くと逃げて行ってしまいそうな雰囲気だったのだ。

私はゆつくりと振り向いて、その人物を見た。

そこにはカエルが後ろ足で立っていた。

……違う違う。

アンブリッジ先生が後ろ足で立ってこちらを見ていた。

「どうしましたか？ アンブリッジ先生」

私は表情を作りアンブリッジ先生に微笑みかける。

アンブリッジ先生はいつもの態度とは180度違うような、おどおどとした態度で言葉が続けた。

「今日の午後、空いているかしら。少しお茶をしたいと思つてね。いい茶葉が入つたの。

ああ、勿論用事があるなら無理には言わないわ」

ついに来たか。

私は内心ほくそ笑むとにこやかに笑つて返事をした。

「そうなのですか!? 私、紅茶好きなんです。是非よろしくお願いします。今日の3時でいいのかしら」

「ええ、じゃあ3時に。私の部屋で待つているわ。……今も私の近くに悪霊はいるのかしら」

アンブリッジ先生は少し表情を暗くして呟いた。

勿論そんなものはいるはずがない。

「……そうですね、横に2体、後ろに3体と言つたところでしょうか。追い払つておきま

しようか？」

「お願いするわ」

私は虚空へ向かつて霊弾を撃つ。

アンブリッジ先生の表情が少し明るくなった。

私はテーブルを立つとアンブリッジ先生に体を向ける。

「では、今日の3時に。楽しみにしていますね」

そしてペこりと頭を下げ、大広間を後にしたのだ。

で、今に至る。

「ロンドンにいる友人が送ってきてくれたものなのよ」

アンブリッジ先生は紅茶の入ったティーカップを私の前に置いた。

私は時間を止めアンブリッジ先生の出した紅茶のサンプルを取ると、紅茶を消失させる。

そして自分で入れた紅茶をティーカップに注ぎ直した。

「いい香りですね。……これはダーズリンでしょうか」

私は紅茶を一口飲み、アンブリッジ先生にそう言った。

もつとも、私はアンブリッジ先生が淹れた紅茶を飲んでいない。

だが紅茶の銘柄ぐらいなら匂いを嗅ぐだけで判断できる。

「夏摘みですね。そして等級は……」

「TGFPよ。本当に詳しいのね。去年の記事で読んだけど、確か貴方はメイドさんだったのでしたっけ？」

少し頭にくるが、ここは抑える。

何故過去形なのだろうか。

勘違いにしても、酷い。

「今もメイドですよ」

「でも貴方は学校に通っているでしょう？ 仕事の方はどうしているの？」

「そうですね……休暇中は仕事をしていますし、ホグワーツにいる間は修行という意味合いも強いでしょうか。去年あの対抗試合に若輩ながら参加したのは、そういう意味合いもあるのです」

勿論嘘だ。

私はただお嬢様の命令を遂行しただけである。

「そうなの……ずば抜けた才能を持っていると他の先生方も自分のことのように自慢してましたわ」

「そんなことないです。まだまだ至らないことが多く苦労しています」

アンブリッジ先生はそわそわと周囲を見回している。

どうやら悪霊に襲われないかと気にしているようだった。

先生、悪霊は目の前にいますよ？

「いえ、貴方は素晴らしい力を持つているわ！ ……その、ね。貴方ならわかるでしょう？ 私についている悪霊が。見えるのでしょうか？」

アンブリッジ先生は周囲を鋭く見た。

だが、その方向には悪霊はいない。

「……先生には見えないのですか？ それは確かに怖いですね」

私は紅茶を一口飲む。

うん、自分で淹れた紅茶なので美味しい。

「貴方は悪霊については詳しいの？ ゴーストとはどう違うの？」

アンブリッジ先生は藁にも縋るような顔でこちらを見た。

あの目は本気だ。

どうやら私の仕掛けている嫌がらせに相当参っているらしい。

もつとも、私としてもかなり手間が掛かっているのです、それなりに参って貰わないと困るが。

「先生、悪霊というのは元々東洋の国の概念です。私の名前からも分かるように私は東洋から来た人間なのですが、そう言った悪霊を退治する『陰陽道』の家系に生まれた子

供なのです」

勿論嘘だ。

私は生まれも育ちもイギリスである。

「そこでは扱う力の概念も、宗教観も違います。そして魔力ではなく違う力を使うのです。それは杖無しで扱うことのできる不思議な力で、私がいつも手から出しているこれです」

私はアンブリッジ先生の前に手の平を出し、その上に小さな霊力のボールを作る。

アンブリッジ先生はその光の玉を愛おしそうに見つめた。

「これを使えば悪霊を退治することができます。そういうことね」

「はい。もっとも、悪霊の力が強いと追い払うことぐらいしかできませんが。悪霊の強さはその霊が持っている恨みの強さによって決まります。……先生、何か恨まれるようなことでもしたのですか？」

その言葉にアンブリッジ先生は大きく体を震わせた。

多分思い当たる節が多すぎたのだろう。

「ど、どうすればいいの？ 私最近貴方がいない時間は常に何かに殴られているような痛みを受けて……。私にもその力が使えないかしら」

「遺伝的なものなので、多分無理かと……」

これも嘘だ。

パチユリー様曰く練習したら誰でも霊弾ぐらいなら出すことが出来るという。

もつとも、私のように時間が止められるかと聞かれれば、そうではないが。

「私が一緒にいる間は何とでもできますが、離れているとなつては他にも……その様子ですと悪霊たちはすぐに戻ってきてしまっているようですし」

私は残念そうに首を振った。

アンブリッジ先生は私を見て少し絶望的な表情をする。

「では、私はこの辺で失礼しようかと思えます。紅茶、ご馳走様でした」

私はペコーりと頭を下げて部屋から出ようとした。

「ああああ待つて待つて!! もう一杯いかが? クッキーもあるの!」

「私、魔法薬学の宿題が……明日提出なんです」

「それは私の権限で免除するわ! だから私を独りにしないで!!」

アンブリッジ先生は私の腕に縋りついて懇願した。

私は心の中で大きくガッツポーズを取る。

調教完了。

あとは麻薬に溺れさせるようにじわじわと。

「……そうですね。では夕食までここでお茶にしましょう。悪霊に関して、私の知って

いる限りを話しますわ」

私は静かに椅子に座り直す。

その瞬間アンブリッジ先生の顔は安堵の色に染まった。

「え、ええ。よろしくお願いいたしますね。はい、紅茶のおかわりです。ちよつと待ってね。今クツキーを持ってくるわ」

アンブリッジ先生はそう言って近くの棚を漁り出す。

私は出された紅茶を自分が淹れたものに入れ替え、先生がクツキーを持ってくるのを待った。

次の日の朝、私は日課であるアンブリッジエクササイズをしに時間を止めアンブリッジ先生の部屋に行こうと談話室を通った。

その時に談話室の掲示板に大きな告示が貼られているのが目に留まる。

「ホグワーツ高等尋問官令？」

そこにはホグワーツにある学生による組織は一度全て解散となるとの告示が書かれていた。

そして再編成したい場合は高等尋問官、つまりはアンブリッジ先生に願い出ればい

らしい。

登録なしに活動した場合、退学になるとのことだ。

「へえ、慎重にことを運んだつもりだったけど、噂程度は流れたということかしら。すぐ
に行動に移すなんて、アンブリッジ先生も意外と優秀ね。変な方向に」

つまりハリリーたちが計画している防衛術の会合は、完全に校則違反ということだ。

逆に言えば、申請さえ通してしまえば、こつちのものである。

「さて、どのように偽造しましょうか」

私は取り敢えず姿現しでアンブリッジの部屋に行つて目覚めの一発をお見舞いする。

そしてまた姿現しで談話室へと戻り、時間停止を解除した。

私はしばらく掲示板の前のソファアーへと腰かけハリリーたちが下りてくるのを待つ。

しばらくするとハリリーが眠そうな目を擦りながら男子寮から下りてきた。

「おはよう、咲夜。君はいつも早起きだ。そして全然眠そうじゃないのはなんでなんだろうね」

ハリリーが欠伸をしながら言う。

「さあ？　でも、貴方もスグにぱっちり目が覚めるわ。これ読んでみなさい」

「ん？」

ハリリーとロンはしよぼしよぼした目で掲示板の告示に目を通す。

そして意識を覚醒させた。

「な、え？」

ハリーが驚いたような声を出す。

ロンも目を大きく見開いて告示を何度も読み返していた。

「誰かが垂れ込んだってことか？ 土曜日の会合のことを」

ロンが結論づけるようにそう言った。

「取り敢えずハーマイオニーに知らせに行こう」

言うが早いかハリーとロンは女子寮の階段に向けて走り出す。

「ああ、やめといたほうが——」

私が止める前にロンが談話室の方へと転がり落ちてきた。

女子寮の階段は男子が歩くと摩擦係数の低い滑り台へと変化するのだ。

「あー、僕たちは女子寮に入っちゃいけないみたいだね」

ハリーが笑いを堪えながらロンを引き起こす。

ロンも体についた埃を叩き落としながら苦笑を浮かべた。

「女子は男子寮に入れるのに、その逆は無理だなんて不公平だ。マーリンの髭！」

ロンはよくわからない怒り方をしているが、まああまり本気で怒っているわけじゃないんだらう。

そんな騒ぎを聞きつけたのか、ハーマイオニーが女子寮から顔を出した。

「誰か女子寮に入ろうとしたの? ……その様子を見ると貴方みたいね、ロン。ホグワーツの歴史に創始者は男の方が女よりも信用できないと考えたって書いてあるわ。……なんで女子寮に入ろうとしたの?」

ハーマイオニーの言葉にハリーとロンは無言で掲示板を指さした。

ハーマイオニーは掲示板へと寄っていき、告示に目を通す。

そして表情を硬くした。

「誰かがあのカエルに喋ったに違いない!」

「それはあり得ないわ」

ロンの言葉をハーマイオニーは即座に否定する。

そして羊皮紙に掛けた呪いのことを2人へと話した。

「ハーマイオニー、少しいいかしら。その呪い、細部を変更してもいい?」

私は説明を終えたハーマイオニーに声を掛ける。

ハーマイオニーは不思議そうな顔をしてこちらを向いた。

「細部を変更するって、どんな風に?」

「防衛術の会合を正式なものにしちゃおうと思つてね。アンブリッジ先生に申請を出す

のよ」

「あの女が許可するはずないわ！（ないよ！）」

私の提案に3人が同時に声を上げた。

まあ、3人からしたら私のいったことは無謀そのものだろう。

「でも、デメリットは実はないのよ。防衛術の会合ということを隠して、違う組織として登録しちやえばいいわ。必要の部屋を使えば中で何が起こっているのなんて分からないわけだし」

「多分僕の名前が入っているだけで、あいつは申請を通さない。これは確実だ」

ハリーが首を振る。

ロンもそれに同意しているようだった。

「今のアンブリッジ先生なら、私の名前が入っているだけで申請を通すわ」

私は自信満々に言い切った。

その言葉に3人は目を丸くする。

私は小声で言った。

「不死鳥の騎士団の任務でアンブリッジ先生にかなり近づいているのよ。今のあいつは私を誰よりも頼りにしているし、機嫌を損ねないように必死になってる」

「一体なにをしたらそんな関係になるんだ？」

ハリーが驚いたような声を上げた。

「そうね。マツチポンプと飴と鞭？」

私は適当にはぐらかす。

「なんにしても、申請を通させることは出来る。もつとも、リーダーはハリー、貴方なのだからもし駄目だと思うのなら駄目だと言つてもいいわ」

ハリーは私の提案に乗るべきかどうかをじっくりと考え込む。

そしてハーマイオニーの方をチラリと見た。

「ハーマイオニー、君はどう思う？」

「……そうね。もし本当に申請を通すことができるのなら、これ以上はないほどこちらが有利になるわ。会合の告知も堂々とできるし、仲間も募りやすくなる。そしてなにやり一回アンブリッジがそれを許可したという事実は、こちらにだいぶ有利よ。でも、申請が通らなかつた場合や、違うことをしているとバレた場合などは、少し拙いことになるかもね。それは申請をしなくても同じだけど」

そう、申請を出すこと自体にはそこまでのデメリットはないのだ。

何かやっていることを感づかれてこのような令が出されたのである。

バレているなら、それでいいじゃないかと。

「……分かった。それで行こう。でも、申請が通らなくとも活動は続ける。それは譲れないよ」

ハリーは私を見て、はつきりと言った。

ハーマイオニーはその言葉に鞆から皆の名前が書かれた羊皮紙を取り出す。

そして杖で羊皮紙を叩き、呪いの条件を多少変更させた。

「会合の本当の目的をアンブリッジにバラしたら呪いが掛かるように設定し直したわ。これで、申請を通して顔中が酷いことにならずに済むと思う」

私は手帳を取り出すと羊皮紙に書かれた名前を書き写していく。

「申請は私が出しておくわ。……組織の名前や目的はこつちで適当に決めておくわよ？」

どうせ偽装用の物なんだし」

「ああ、そうしてくれ」

私たちはそのまま談話室から出て大広間へと向かう。

どうやら掲示は全部の寮の掲示板に貼られていたらしく、大広間はいつも以上にざわついていた。

グリフィンドールのテーブルに着くや否や会合に出席したグリフィンドール生がハリーを取り囲んだ。

どうやら今後どうするかの指示をリーダーに仰いでいるらしい。

ハリーは先ほど談話室内で決まったことを小さな声で伝えている。

私はそんな様子を尻目にトーストにかじりついた。

その日の魔法薬学の時間、私はいつものようにドラコの横へと座った。

ドラコは今日もご機嫌そうだ。

どうやら朝一番に出しに行ったクイディッチチームの再編成が、その場で許可が下りたらしいのだ。

「先生は父上のことを良く知っている。父上は魔法省に出入り自由なんだ」

ドラコは得意げにそう言った。

やはりアンブリッジ先生は気に入った生徒にはとことん甘い性格らしかった。

これなら会合の申請もすんなりと通るだろう。

「そう、貴方のお父様って凄いのね」

私は感心したような声を出す。

私の言葉にドラコは更に鼻を高く上げた。

「そうだと、僕の父上は凄いな」

……なんていうか、ドラコって成長しないな。

これが甘やかされて育った子供の末路ということなのだろうか。

なんにしても、見ている分には面白いし、扱いやすい。

しばらく経つと教室にアンブリッジ先生とスネイプ先生が入ってくる。

私はそれを見て羊皮紙と万年筆、そして教科書を取り出した。

「気づいていることだろうが、今日は客人が見えている」

スネイプ先生は軽くアンブリッジ先生を紹介し、授業へと入った。

「今日は前回作った強化薬を仕上げる。前の時間に作った混合液が正しく調合されていれば、既に熟成は済んでいるだろう」

先生は杖を黒板へと向け、調合法を記した。

「説明は全て黒板にある。取り掛かれ」

私はいつものようにドラコと共に魔法薬を作っていく。

毎回私が手伝っていることを抜きにしても、ドラコは魔法薬学がかなり得意だ。

1人で調合しなくてはいけない試験の時にも、そこそこの成績を叩きだしていた。

私は開始10分で強化薬を完成させるとドラコの手伝いに掛かる。

そして手伝いいつもアンブリッジ先生とスネイプ先生の会話に耳を傾けた。

「このクラスはこの学年にしてはかなり進んでいますね。でも強化薬のような薬をこの子たちに教えるのはいかなものかしら。魔法省はこの薬を教材から外すべきだと考えています」

スネイプ先生はアンブリッジ先生の方へと向き直る。

アンブリッジ先生は言葉を続けた。

「さてと……貴方はホグワーツでどのぐらいの年数教師をしていますか？」
「14年」

「最初は闇の魔術に対する防衛術の職に応募したのですたわね？」

「左様」

「ドラコ、次はサラマンダーの血液よ」

私はドラコに指示を出しながら静かに会話を聞いた。

「でも、上手いかなかったのよね」

アンブリッジ先生がスネイプ先生に問うと、スネイプ先生は少し自虐的な笑みを浮かべた。

「ご覧の通り」

アンブリッジ先生はクリップボードにその情報を書き記していく。

「赴任以来毎年応募し直しているみたいね？」

「左様」

「ダンブルドアが貴方の任命を拒否してきたのは何故なのか、おわかり？」

「本人に聞きたまえ」

先生は冷ややかに言った。

こっちが知りたいと言わんばかりだ。

その後もスネイプ先生とアンブリッジ先生は簡単な質疑を繰り返していく。やがて聞きたいことは全て聞き終えたのか、アンブリッジ先生はパーキンソンに近づき授業についての質問をしはじめた。

私はドラコの強化薬が無事完成したことを見届けるとアンブリッジ先生に視線を送る。

するとアンブリッジ先生はこちらへと歩いてきた。

「貴方たちはどうかしら。この授業のことどう思う？」

先生は私とドラコに対して質問する。

「凄く良い授業だと思います。先生も素晴らしいです」

ドラコは笑顔でそう言った。

「ドラコの言う通りだね。優秀な生徒には手助けを、出来そこないにはギロチンを」

その言葉にドラコはハリーをチラリと見て、嘖き出した。

丁度今ハリーは魔法薬の入った大鍋を綺麗にされたところだ。

今日も0点だろう。

「そう。ああ、そうだ。今日の昼食を一緒にとれないかしら？」

アンブリッジ先生は私に対して言った。

やはり来たか。

「勿論です。食事に誘って頂けるなんて光栄ですわ」

私は作り笑いを浮かべて先生に微笑んだ。

先生はほつと息をつくと違う生徒に質問に行く。

「アンブリッジ先生と仲が良いんだね。少し意外だ」

ドラコは出来上がった魔法薬を小瓶に詰めながらぽつりと呟く。

「あら、そうかしら。ドラコもあの先生とは仲が良いんでしょう？」

「勿論。いい先生だよ、あれは。いろんな意味でね」

ドラコはニヤリと笑い、強化薬を教壇へと提出する。

そして私に手を振ってスリザリン生と共に教室を出て行った。

「さあ、では行きましょう？」

アンブリッジ先生がクリップボードを手に私に声を掛ける。

私はハリーたちに視線で先に行ってくれと伝えるとアンブリッジ先生と共に先生の自室へと向かった。

「さあさあ、お掛けになって。料理はいつものように机の上に現れるようになってい
わ」

先生の言葉どおり、先生の自室のテーブルの上にいつものような料理が現れる。

私と先生はそれに少しずつ手を付けた。

「そう言えば、先生。少し見てもらいたいものがあるのですが……」

私は鞆から一枚の羊皮紙を取り出す。

ハリーたちの会合の申請書だ。

先生は私の出した羊皮紙に目を通すと質問を飛ばしてくる。

「ふくろう同好会？ えつと活動目的は……伝書ふくろうの飼育と研究。これは昔からあるものなの？」

「いえ、元々ふくろう小屋でたまに集まる程度でしたが、今朝の告示を機に、正式なものにしようかと思ひまして」

アンブリッジ先生は穴が開くほど羊皮紙を見ている。

多分参加者のところにあるハリーたちの名前が目にとまったのだろう。

「ハリーは優秀なふくろうを飼っているんです。ヘドウィグっていうんですけど、白くて可愛らしんですよ？ それに、ロンも豆ふくろうを飼っています」

先生は何かを考えるように羊皮紙をよく読む。

そして私の顔を窺い言った。

「貴方が責任をもって管理するというのなら、許可を出しましょう。その代わり、危ない魔法や呪文を使っては駄目よ」

「勿論です。危ないのはフクロウの爪の手入れに使う鋏ぐらいですよ」

私はその後も学校にいるふくろうで可愛い子や、ホグズミードにいる豆ふくろうなどの話をしていく。

アンブリッジ先生は取り敢えず納得したように相槌を打っていた。

私は古い学、闇の魔術に対する防衛術と午後の授業を終わらせ、夕食の席で昼の事について詳しくハリーたちに聞かせていた。

許可が取れたという話だ。

「驚き桃の木。マジかよ咲夜」

ロンが良く分からない驚き方をする。

だがハリーもそれに同意しているようだった。

「ふくろう同好会とは……考えたね。これなら危険になる要素がない。アンブリッジも指を齧られる危険性があるとか言って禁止するぐらいしかできないだろう」

「これで申請は通ったわけだし。ハーマイオニー、告知をお願いね」

私は教員用テーブルで夕食を取っているアンブリッジ先生を見る。

あとはバレないように活動をするだけだ。

その日の夜、私は暖炉の前のソファを陣取り本を読んでいた。

ハリーは魔法薬のレポートに取り掛かり、ロンとハーマイオニーはフレッド、ジョージの方を見ている。

フレッド、ジョージの2人はずる休みスナックボックスの1つを実演している。

歓迎会の時にアンブリッジに食べさせた、あのゲートローチだ。

フレッドはトローチのオレンジ色の端を噛み、前に置いたバケツに派手に嘔吐する。それから反対側の紫色の端を無理やり飲み込むと、たちまち嘔吐は止まった。

なんとというか、私がお嬢様の命令で与えた賞金は、有効活用されているようである。ハリーたちはその後も談話室に人がいなくなるまで静かに待っている。

どうやら、また暖炉でブラックと会話をするらしい。

私は暖炉の前を開けると少し離れた位置にあるソファへと座り直した。

次の瞬間、暖炉の中にブラックの顔がぽつと現れる。

「シリウス！」

最初に気がついたロンが声を上げた。

その後ハリーたちは防衛術の会合のことをブラックに伝え、何かアドバイスはないか

と聞いていた。

「なら話は簡単だ。咲夜に頼れ。一番頼りになるだろう」

「それはもうしているわ」

私はブラックの提案を素っ気なく流す。

なら何も言うことはないと言いつつブラックは満足そうに頷いた。

「そつちの様子はどうか？」

ハリーが聞くとブラックは苦笑を浮かべる。

「母親と仲良くやってるさ。クリーチャーも一緒だったか」

その言葉にハリーも苦笑いを浮かべた。

「なんにしても、騎士団の動きが活発になってきている。君たちも十分に気を付けるんだ」

ブラックは念を押すようにそう言った。

ハリーはその言葉にしきりに頷いている。

ハリーにとってブラックは頼れる友であり、親であり、教師なのだろう。

「おつと拙い」

ブラックは少し横を見るとすぐさま暖炉からいなくなる。

次の瞬間アンブリッジ先生の手が暖炉から出てきて炎の中をまさぐるように動いて

いた。

ハリーたちは一目散に男子寮、女子寮へと別れて逃げていく。

私は少し離れて静かにアンブリッジ先生の手首を観察した。

本当に、有能なのか無能なのかよくわからない先生だ。

私は先生の手が消えたことを確認すると、女子寮の方へと上がっていく。

そして既にベッドに入っているハーマイオニーを確認すると、自分のベッドに入つて眠つた。

申請から数日が経ち、ようやく今夜8時に初会合が行われることになった。

私たちは羊皮紙に名前を書き込んだ生徒全員にその話を伝えていく。

会合の場所は8階の『バカのバーナバス』がトロールに棍棒で打たれている壁掛けの向かい側だ。

ようは必要の部屋の場所だった。

私は一足先に必要の部屋に向かい部屋を出現させに掛かる。

防衛術が練習できる、広く道具の揃った部屋。

私は石壁の前を何度か往復し、部屋を出現させた。

私は部屋に入り中を見回す。

壁には本棚が並び、椅子の代わりにクッションが並べられている。

奥の棚には様々なものが収められていた。

「まあ、及第点ね。防衛術を学ぶ程度なら十分だわ」

私がしばらく部屋で待っていると、ハリーたちが参加者を連れて部屋へと入ってくる。

そして8時には全員が集まった。

私は必要の部屋のドアにカギを掛け、これ以上外から入ってこれないようにする。

全員がクッションに座つたのを確認すると、ハーマイオニーが前に立った。

「リーダーはこの前ハリーに決めたから……名前を決めるべきね。つと、その前に咲夜から報告があるわ」

ハーマイオニーは私に目配せをする。

どうやら偽装の事を説明して欲しいということらしい。

私は必要の部屋に黒板を出現させると、『ふくろう同好会』と大きく書き記した。

「ふくろう同好会。これは私たちの会合の仮の名前よ。私はこの名前でアンブリッジ先生に申請を出し、許可を得たわ。つまり、貴方たちは今ふくろう同好会の集まりでここに集まっていることになっている。本来の目的は別として、表向きはね」

私は黒板を消し去った。

「だから外でこの会合の話をするときはふくろう同好会の名前を使いなさい。真の目的を教師や他の生徒に密告したものは……どうなるか分かっているわね」

その言葉に一部の生徒が冷や汗を流す。

別にナイフをちらつかせているわけではないのだが……。

なんにしても、前座はこんなものでいいだろう。

私は話し終えるとハーマイオニーに場所を譲った。

ハーマイオニーは意見を集め、会合の名前を決める作業に入る。

最終的には防衛協会とダンブルドア・アーミーを掛け合わせたDAという名称に決まった。

防衛とか、王者とか、帰還とか

会合の名前が無事決まり、本格的に防衛術の練習が始まろうとしていた。

私はハーマイオニーに代わって皆の前に立つ。

そして全員を見回した。

「じゃあ、取り敢えずみんな立ちなさい。杖は仕舞っておくように」

私のその言葉にその場にいる殆どの生徒が呆れたように声を上げる。

ハリーたちも意外そうな顔をしていた。

「取り敢えず教科書でも読めつつか？」

フレッドが茶化したように言う。

私は自然な動作でフレッドに近づいていくと、顔スレスレに裏拳を叩き込んだ。

その風圧でフレッドの前髪が揺れる。

「あら、避けなかつたら死んでるわよ？」

その言葉を聞いてフレッドはジョージと顔を見合わせ冷や汗を流す。

皆今から何をやるか察しがついたようだった。

「防衛呪文というのは、それはそれは便利なものでしょうね。でも、武器を扱う為には杖

だけじゃ駄目なの。例えば……そうね。ハリー、私に向かって失神呪文を掛けてみなさい」

「え？ いいのかい？」

「本人がいいって言ってるんだからいいに決まっているでしょう？」

私の言葉にハリーは少し戸惑っているようだったが、やがてそこそこの速度で杖を抜くと私に向けて失神呪文を撃った。

私はそれを軽く体を捻りかわす。

「ね、当たらなければ呪文というものは意味を成さない。呪文が飛んでいく速度というのは意外と遅いものよ。こうやって呪文を避けることができれば、死の呪文だって怖くないわ」

私は杖を一振りして床に置いてあるクッションを全て壁側に移動させた。

「全員部屋に散らばりなさいな。私が威力の全くない閃光を放つから、まずはそれを避ける練習。使える人は杖を使って防衛してもいいけど、そんなに早くないから避ける方が多分楽よ」

私は部屋の端に移動する。

そして杖を抜き放ち、ジョーダンに向けて閃光を放った。

ジョーダンは頭を抱えるようにしてそれを避ける。

「その調子、じゃあどどん行くわよ」

私は狙いを定め次々と閃光を放っていく。

こうやって部屋中を走らせてみるとわかることだが、魔法族というものはあまり体力を持っていない。

10分もしないうちに全員が床に膝をついた。

「まあ準備体操はこんなものかしら。呪文を避ける練習はD Aの時に毎回必ず入れていくわよ。これが完璧になれば例え1つも防衛呪文を知らなくても死喰い人から逃げることができるようになるわ」

私は息を切らしてメンバーたちに杖を出すように指示を出す。

皆肩で息をしながら立ち上がり、杖を構えた。

「ハリー、まず何からやるべきかしらね。予定はあるの?」

「一番初めは武装解除がいいと思う。あれなら怪我也少ない」

そしてこれは初めて知ったことだが、ハリーは呪文を避けることに関しては相当な技量を持っていた。

1つも閃光に当たらなかつたのはハリーだけだろう。

「はいじゃあ2人組つくってー」

私は手をパンパンと叩きながら皆に言う。

皆私の指示に従い次々と組を作っていった。

「ネビルはハリーと組みなさい。セドリックは私とやりましょう」

「リベンジのチャンスかな？」

リベンジのチャンス？

そう言えば2年生の時に決闘クラブで戦っているんだったか。

「あら怖い。月まで吹っ飛ばされそうね」

私は適当に茶化すと皆の方に向き直る。

「全員よく聞きなさい。杖を狙おうとしては駄目よ。相手の体の中心を狙いなさい。相手の手元なんて動いて素人には狙えたものじゃないわ」

初めの頃は的が大きければ大きいほうがよい。

ストッピングパワーよりもまずは命中率だ。

「じゃあ、各々自由に練習していいわよ。さて、セドリック。1戦交えたらみんなの指導をお願いするわ」

「ああ、そうだね」

デイゴリーは油断なく杖を構える。

私は西部劇に出てくるガンマンのように杖をローブの中に仕舞い、両手を空けていた。

「エクスペリアームス！」

私はデイゴリーから放たれた武装解除呪文を横に飛ぶようにしてかわすと杖を抜き、デイゴリーの鳩尾に閃光を放った。

デイゴリーは当たった瞬間身構えたが、やがて痛みも何もないことが分かると不思議な顔をする。

「ん？ あれ……？」

「意識が戻らないと大切な教師が一人減ってしまうもの。じゃあ指導に行きましょうか」

私はポカンとしているデイゴリーから離れ他の生徒の指導に回る。

意外なことに、思った以上に皆が武装解除の呪文を使えないことが分かった。

これは他の呪文も少し段階を踏んで教えていかなければならないかもしれない。

「たかが武装解除の呪文なんて例のあの人に使って効果があるのかな……」

私が部屋中を歩いて指導をしていると、何かぶつくさ言いながら練習している人間を見つけた。

ハツフルパフのザカリアス・スミスだ。

私はスミスの肩にそつと手を置きこちらへと振り向かせた。

「効果あるのよ。エクスペリアームス！」

私が放った武装解除の呪文はスミスの腹部に直撃する。

スミスはその衝撃で反対側の壁まで飛ばされ、盛大に壁に体を打ち付けた。

「皆、今のを見たかしら？ 武装解除の呪文というのはこのように相手を吹き飛ばすこともできる。技量次第でね」

私は地面に転がり悶絶しているスミスを抱き起し、治癒の呪文を掛ける。

途端にスミスに出来たアザや擦り傷が消え失せた。

「分かったかしら、たかが武装解除の呪文でも痛いよ。それに、この呪文でハリーはあの人から生還したようなものだしね」

私はハリーの方をチラリと見る。

ハリーは丁度チャンに武装解除呪文を教えているところだった。

「生き残りたいなら励みなさい。自分の身ぐらい自分で守れるようになったほうがいいわよ？」

スミスにそう言い残し、他の生徒の元へと行く。

次の瞬間、ルーナが私に向けて武装解除の呪文を放った。

私は軽くそれを避け、ルーナに声を掛ける。

「私の方に飛んできたわよ。よく狙いなさい」

「よく狙った結果あんなったのだとしたら？」

ルーナはケロリとした表情でそう言い切る。

ペアを組んでいたフレッチリーが必死に止めようとしていた。

「あら、挑戦的なことはいいいことだわ。でもまだ少し技量が足りないわね」

私はルーナに向けて真つすぐと手を伸ばす。

そして左手の指を鳴らした。

次の瞬間ルーナの杖が私の左手の中に収まっている。

まあなんてことはない。

ただ時間を停止させてルーナから杖を引き抜き、先ほどと同じ体勢を取っただけだ。

フレッチリーはその光景を見てあたふたと周囲を見回している。

ルーナは不思議そうに自分の手と私の手にある杖を交互に見ていた。

「いい武装解除呪文だったわ。練習次第では私にも当てられるようになるかもね」

私はルーナに杖を返し、懐中時計を取り出す。

現在の時刻は午後9時。

そろそろタイムリミットか。

私は会合の終わりをハリーに伝えようと周囲を見回す。

その瞬間また武装解除の呪文がルーナの方から飛んできた。

私は手に霊力を籠め、素手で魔法を受け流す。

「今のは惜しいけど、威力が足りないわね。ハリー、そろそろ時間よ」

私はようやくハリーを見つけると声を掛けた。

ハリーは腕時計を確認し、驚いたような顔をする。

どうやら完全に気にしていなかったようだ。

ハリーはどこで手に入れたのかホイッスルを吹き、皆の視線を集めた。

「そろそろ時間オーバーだ。今日はこの辺でやめておこう。来週、同じ時間に、同じ場所でいいかな？」

「もつと早く！」

ハリーの言葉にトーマスが声を上げる。

そしてその言葉に同意する声も、結構多かった。

だが、グリフィンドールのクイディッチチームのキャプテンであるアンジェリーナがすかさず言う。

「クイディッチの試合に近い。こっちの練習も大事だ！」

「じゃあ水曜日ね。ハリー、忍びの地図で確認しなさい」

私の言葉にハリーは忍びの地図を取り出し、8階に教師がいないことを確認した。

そして皆を3、4人の組にして帰らせる。

ハリーは皆が無事に談話室についたかどうかを緊張した面持ちで見守っていた。

やがて必要の部屋に私とハリー、ロン、ハーマイオニー、デイゴリーの5人が残される。

「ハリー、今日は大成功だ。凄く良かった」

デイゴリーが手を叩いてハリーを褒める。

それにすかさずロンが続けた。

「ああ、本当だとも。最高にクールだった。咲夜もね。……咲夜はどこで防衛術を学んだんだ？」

「私のは防衛術ではないわ」

「確かに、どちらかというと殺人術だもんな」

ロンの冷やかにその場にいる全員が笑う。

私も微笑んで言葉を返した。

「あら、よくわかったわね」

私のその言葉にロンの表情が笑った状態のまま固まる。

「さて、私たちも帰りましょうか。セドリック、それじゃあまた水曜日」

「あ、ああ。それじゃあまた」

固まっているロンをよそにデイゴリーが扉を開けて8階の廊下に消えていく。

私は今一度忍びの地図を確認した。

「さてと……アンブリッジ先生は自室、1階の廊下にフィルチさんね。私たちも帰りましょうか。ロン、いつまで固まっているのよ」

「怖いこと言うなよ！ 咲夜が言うのと冗談に聞こえないんだ！」

「褒められているのか分からないわね」

私は肩を竦めるとロンの背中を一度叩く。

そして皆と共に部屋から出て、扉が消えるのを見届けると談話室へと帰った。

それからの2週間ほど、毎日とまではいかないが、週に2回はD Aの集会を行うことができた。

勿論他の先生方やアンブリッジ先生にはふくろう同好会と言っているのですが、私はそれらの資料の作成もしなくてはいけない。

万が一アンブリッジ先生が視察に来た時にいくらでも誤魔化せるようにだ。

そしてこの2週間、毎日のようにアンブリッジ先生から昼食に誘われた。

どうやらアンブリッジ先生は体を蹴られることがお嫌いらしい。

まあ私が居ない間は結構な頻度で体中を蹴られているので当たり前と言ったら当たり前か。

もう少しで完全に私に依存させることが出来るだろう。そうしたらこっちのものだ。

DAの集会は、毎回違う曜日の違う時間に行われる。

それは3つの寮のクイディッチチームの練習時間を考慮しての事だったが、隠匿性の面から見てもその方がいいだろう。

だが、毎回時間を告知するのは少々骨が折れる。

ハーマイオニーも同じことを考えていたのか、4回目の集会の時にガリオン金貨の入った箱を持ってきた。

ハーマイオニーは集会が終わったあとに、皆にその金貨を配っていく。

そして1枚を掲げ説明を始めた。

「金貨の縁に数字があるでしょう？ 本物にはそれを鑄造したゴブリンの番号が打つてあるだけです。この偽金貨の数字は次の集会の日付と時間に応じて変化します。数字が変わるごとに金貨が熱くなるからポケットにでも入れておけばいいわ。ハリーが次の日時を決めたら、ハリーの金貨の日付を変更します。私が全部の金貨に変幻自在術を掛けたから、ハリーの金貨が変化したら一斉にハリーの金貨を真似て変化を始めます」
私は手探りでポケットの中に入っている不死鳥の騎士団の連絡用の懐中時計に触れる。

ようはこれと原理は同じというわけだろう。

ハーマイオニーが説明を終えても、皆しんとして何の反応もなかった。

その様子にハーマイオニーは自信を無くしたように周囲を見回し、おろおろとし始める。

「えっと、いい考えだと思っただけど……これならアンブリッジがポケットの中身を見せなさいって言っても、大丈夫でしょう？ 金貨ぐらい誰でも持っているわけだし……」

ゴホゴホとロンがわざとらしく咳ばらいをする。

ハーマイオニーはそれを無視した。

「その呪文っていもり試験レベルだぜ？」

テリー・ブートが声を上げる。

どうやら皆高度な魔法に驚いていただけだったようだ。

賛成の声が上がりがり始め、ようやくハーマイオニーの顔に笑顔が戻った。

「便利よね、その魔法」

私はほっとしているハーマイオニーに声を掛ける。

「ええ、ちよっと難しかったけど、何とかなったわ」

そこで何とかなってしまるのがハーマイオニーらしい。

ロンやハリーではこうも簡単にはいかなかっただろう。

「ハーマイオニー、僕これで何を思い出したと思う？」

ハリーが金貨を観察しながらハーマイオニーに言った。

ハーマイオニーは少し首を傾げる。

「わからないわ」

「死喰い人の印。ヴォルデモートはこれで仲間集合命令を出すんだ」

ハリーは自分の杖を手首に当てる。

死喰い人の左手首には闇の印と呼ばれる刺青が彫つてあるのだ。

「……ええ、実はそこからヒントを得たの。でも、流石にみんなの皮膚に刻もうとは思わないわ」

ハーマイオニーはそう言つて肩を竦めた。

「ああ、君のやり方のほうが断然いい」

ハリーは金貨をポケットに滑り込ませる。

「1つ危険なのは、うっかり使っちゃうかもしれないってことだな」

その言葉にロンはポケットをひっくり返す。

そこからは羊皮紙の切れ端しか出てこなかった。

「残念でした。……僕はまず本物を持ってない」

ロンが少し悲しそうにそう言った。

シーズン最初のクイディッチの試合、グリフィンドール対スリザリン戦が近づいてくるとDAの集会をする時間はなくなった。

どこのチームも毎日のように練習を始めたからだ。

まあ、この時期に忙しいのは仕方がないだろう。

生徒だけではない、各寮の寮監までもが宿題を減らしたりなどして自分の寮の生徒を応援する始末である。

だが、DAの活動に構わなくてよいというのは、私にとつても都合だ。

自分のことは時間を止めればいくらでもできるが、他のことはそうもいかない。

まあでも、考慮する対象が減るといえるのはそれだけ気が楽になる。

確か今日がその試合の日だったか。

なんにしても私にはあまり関係のないことだ。

私は大広間でゆつくりと朝食を取る。

しばらくそうしているとハリーが顔を真っ青にしているロンを連れて大広間に入ってきた。

「あら、一年生の時とは真逆ね」

ロンはその軽口さえ聞こえていないかのように何も言わずに椅子に座る。

ハリーもその隣へと座った。

「大丈夫だ、ロン。君は選抜で選ばれたキーパーじゃないか」

「そしてチームの勝敗を分かť大事な役職ね」

「……」

私の言葉にロンは更に顔を青くする。

ハリーが抗議の視線を私に送ってきた。

私はその視線から逃げるようにスリザリンのテーブルを見る。

グリフィン・ドールもそうだが、やはり今日試合のある寮は途轍もない活気に満ちている。

スリザリンの生徒は胸に銀色のバッジを着けていた。

王冠のような形をしているが、何とか本当にバッジが好きだなと思う。

確か対抗試合の時にも作っていたはずだ。

私は目を凝らしそこに書いてある文字を読み取った。

「ウィーズリーこそ我が王者。ね」

なるほど、スリザリンは徹底的にロンを攻撃して、ゴール前をがら空きにするつもり

らしい。

「僕、どうかしてた。クイドイツのチームに入るなんて……こんなことするなんて……本当にどうかしている」

「バカ言うな。君は大丈夫だ。神経質になるのは当たり前のことだよ」

ハリーがロンを励ますが、あまり効果は無いようだった。

「僕、最低だ。出来っこないよ、下手くそなんだもん。一体何を考えてたんだろう……」

「しつかりしろよ！」

ハリーがロンの背中を叩く。

「この間、足でゴールを守った時のことを考えて見ろ。フレッドとジョージでさえ凄
いって言ってたじゃないか」

「偶然だったんだ。意図的にやったことじゃない。誰も見ていない時に箒から滑って

……何とか元の位置に戻ろうとしたときにクアツフルを偶然蹴ったんだ」

なんの話をしているか分からなかったが、取り敢えずロンは絶不調だった。

その後もハリーはロンを励ますが、あまり効果はなかった。

「もう仕方がないわね」

私はロンの頭を横から叩く。

ロンは顔をオートミールに埋めた。

「ブクブク……ぶはっ！ 何するんだ!!」

ロンは怒りで真っ赤になって私に抗議してきた。

私はロンに杖を向け、顔中についたオートミールを綺麗に拭う。

「沈んでいるよりかは怒っていたほうがまだいいわ。熱く冷静に。そうよね？ ハリー」

「……ああ、そうだと。ロン」

ロンはしばらく私を睨んでいたが、やがて1回自分の両頬を叩き、気合を入れなおした。

これで試合には出てくるだろう。

私はもしやもしやと食べていたパンの最後のひとかけらを口の中に放り込むと椅子から立ち上がりスリザリンのテーブルの方へと向かう。

そこでは今まさにロンをどうやって潰すかの最終確認をしているところだった。

「ああ、咲夜。ここはグリフィンドル生立ち入り禁止だよ」

私の姿を見つけたのかドラコが人混みの中からひよっこり顔を出す。

「あら、それは残念ね。なにが楽しそうなことをしているから、なにかと思ったのだけだ」

「いいバッジだろう?」

ドラコは胸を張って銀色のバッジをこちらに向けた。

「ええ、とっても愉快だね。ロンったら幸せものね」

ドラコはその言葉に含まれている蔑みの感情を器用に読み取ったのかニヤリと笑った。

なんというか、ドラコはそういうことを考える脳みそをもう少し別の所で使えば成績が良くなるのではないかと思う。

「それじゃあ今日の試合は楽しみにしているわ」

私はひらひらと手を振りドラコを別れると大広間を後にする。

そして1人クイディッチの競技場へと向かった。

そこには既に早起きして席を取っている生徒で埋まっている。

普段起きられないのにこういうときだけ早起きするのは、どうなのだろうか。

まあ、人間とは都合の良い生き物である。

私はグリフィンドールの観戦席に向かい、既に席を取っていたハーマイオニーの横へと着席した。

「ロン、大丈夫かしら……」

ハーマイオニーが心配そうに声を上げる。

「さあ、大丈夫ではなさそうだったけど。……今年はスリザリンの作戦勝ちかな？」

私がそういうとハーマイオニーは怒ったようにこちらを睨んだ。

「ロンなら大丈夫よ！」

「なら心配する必要ないじゃない。ほら、選手が出てきたわよ」

私はグラウンドを指さす。

丁度グリフィンドールの選手が入場してくるところだった。

ロンの顔色は大広間で少し良くなったものと思っていたが、いざ試合となるとそうもいかないらしい。

先ほど以上に顔を青くし、絶望的な表情をしている。

「あー………咲夜に賛同するわ。あれは駄目な顔だわ」

ハーマイオニーが呆れたような声を上げた。

ロンのそれはクイディッチの試合を出来るようなものではない。

今すぐ医務室に向かった方が良いレベルだ。

「箒に跨って！」

マダム・フーチの声がグラウンド内に響く。

そしてホイッスルの音で試合が開始された。

ボールが放たれ、14人の選手が一斉に飛翔する。

ロンもゴールポストの方へと一直線に飛び、ゴールの前で止まった。

「さあジョenson選手、ジョensonがクアツフルを手にスリザリンのゴールへと、向かいます。なんとという飛びっぷり。僕は何年もそう言い続けているのに、彼女は僕とデートしてくれなくて——」

「ジョーダン！」

リー・ジョーダンの実況をマクゴナガル先生が叱りつける。

これもいつもの光景だった。

「——ほんの愛嬌ですよ先生。盛り上がってますから——おつとアンジェリーナ選手ワリントンをかわしモンタギューを抜き、まだ、まだ進む！ いけるか？ アイタツ、クラツプの打ったブラツジャヤーに後ろからやられました……モンタギューがクアツフルをキャッチ、だがウィーズリーの放ったブラツジャヤーがモンタギューの頭に当たりました。ご冥福をお祈りいたします」

「ジョーダン！ 彼はまだ死んでいません！」

「先生それも酷くね。いやいやハイハイ実況を続けますはい。おつと……この歌は何でしょうか？」

ジョーダンは一旦実況を止めて耳を澄ませる。

私はスリザリンの観戦席の方を見た。

ウィーズリーは守れない 万に一つも守れない

だから歌うぞ スリザリン ウィーズリーこそ我が王者
ウィーズリーの生まれは豚小屋だ いつでもクアツフルを見逃した

おかげで我らは大勝利 ウィーズリーこそ我が王者

スリザリンの生徒の殆どがそのような大合唱をしていた。

なんというか、やり方は非常にうまいと思う。

キーパーを潰してしまえばゴールに得点し放題だ。

逆にどれだけチームがへっぽこでも、キーパーさえしつかりしていれば負けることはない。

精神攻撃は基本とよく言うが、スリザリンの狡猾さが良く表れている作戦だった。

その歌にただでさえ悪い調子を崩されたのか、ロンはクアツフルを本当に見逃してしまふ。

スリザリンの先制点に、スリザリン生は更に歌声を大きくした。

ウィーズリーは守れない 万に一つも守れない

「咲夜、あれ何とかならないの!?!」

ハーマイオニーは私の裾を引っ張りながらスリザリンを指さす。

私は首を横に振った。

「無理よ。だって別にロンに直接危害を加えているわけじゃないもの。それに皮肉だと

しても王者っていうのは別に悪口でも何でもなしね」

「それはそうだけど……」

ハーマイオニーは納得いかないと言った顔でロンを見つめる。

歌のせいもあってか、今日のスリザリンは絶好調だった。

もう既にスリザリンは4回もシュートを決めている。

全てロンのポカミスによるものだった。

「実際スリザリンのやっている作戦は有効なものよ。ロンだったらあんなに顔を真っ青にして、それで少し髪の毛の赤を中和したら……駄目だわ。紫になる」

「何の話をしているのよ。あー、ハリーが動いたわー」

ハーマイオニーが双眼鏡のようなものを覗き込みながらピョンピョンと跳ねた。

ハリーとドラコは並んでスニッチを追っている。

ハリーとドラコの箒では性能に結構な差があるはずだが、ドラコは辛うじてハリーに食らいついていた。

そして2人が同時にスニッチに手を伸ばす。

最終的にはハリーがスニッチを見事捕まえた。

「危ない!!」

私の隣でハーマイオニーが叫ぶ。

次の瞬間ハリーの腰をブラッジャーが襲った。

私はブラッジャーが飛んできた方向を見る。

そこにはニタニタとした顔のクラップが棍棒を得意げに振り回していた。

ハリーは地面に軟着陸し、それをアンジェリーナが追う。

どうやら、ハリーに酷い怪我は無いようだった。

ハリーはスニッチを握りしめたままクラップの方を睨んでいる。

そのハリーの後ろにドラコが着陸した。

そして何かを話している。

いや、ドラコが何かを熱心にハリーに話していると言った感じか。

ハリーはへの字に口を結び、鋭くドラコを睨んでいた。

「咲夜、ちよつといいかい?」

いきなり後ろから声を掛けられ、私は咄嗟に気配を探る。

そしてその声がデイゴリーのものだと分かるとゆっくりと振り返った。

「どうしたの?」

「いや、少し話したいことがあって……——ッ!? ハリー!?!」

デイゴリーは言葉の続きを話そうとしていきなり口を紡ぐ。

いや、何かに驚いたかのように目を見開くとハリーの名前を叫びグラウンドを指さし

た。

「は？」

そこには信じられない光景が広がっていた。

ハリーとジョージがドラコをタコ殴りにしているのだ。

蹲るドラコにハリーは何度も何度も拳を振り下ろしていく。

ジョージも当たることならどこでもいいと言わんばかりにドラコを蹴飛ばしていた。

「ドラコ!!」

私は座席が壊れるのも構わずに座席を足場にし、グラウンドへと一気に飛び降りる。

そしてハリーとジョージに蹴りを入れドラコから弾き飛ばすと、優しくドラコを抱き

起した。

「大丈夫……じゃなそうね。全身の骨折に内臓破裂、歯も数本折れてるわ」

私は杖を取り出し応急処置を施そうとする。

その瞬間にまたハリーとジョージがこちらに走ってきた。

私は走ってくる2人を気にも留めずにドラコに応急処置を施していく。

ハリーは再びドラコに傷を付けるために拳を振り上げた。

「いい加減にしなさいッ!!」

私は渾身の力を籠めて2人に向けて叫んだ。

ハリーはその声に怖気づいたのか、ガクンとその場に立ち止まる。

ジョージはそれでもこちらに向けて足を振り上げたので、少しお灸を据えることにした。

私は時間を止めて、ジョージの今現在加速させている右足の方向を弄る。

そして時間停止を解除した。

ジョージが振りぬいた右足は途中で軌道を変え、私の顔に向かって直進する。

私はその蹴りを食らったふりをした。

もつとも、防護呪文を掛けている為、本当に傷がつくわけではない。

だがジョージも蹴り飛ばしたのが私の顔だと理解し、頭を冷やしたようだった。

「あ、ああのご、ごめんー！」

ジョージが咄嗟に私に謝る。

私は時間を止め、顔に血のりと傷痕をかき込む。

そして時間停止を解除し、傷だらけに見える顔でドラコの治療を再開した。

「一体何のまねです……!? これは……」

どうやらようやく教員が到着したようだ。

「こんな……ああ酷い。——城に戻りなさい、2人ともです。まっすぐ寮監の部屋に行

きなさい！ さあ！ 今すぐ！」

ハリーとジョージはフラフラと競技場を出ていく。

私は自分の顔に杖を振るうと血のりとペイントを消し去った。

「先生、酷い状態です。ある程度の骨と内臓は修復しましたが、今すぐマダム・ポンフリーに見せた方がいいでしょう」

「貴方は大丈夫なの？ さつき凄く怪我をしているように見えたけど」

「どうやら駆けつけた先生はマダム・フーチ先生らしかった。

「ん？ 私の何処にそんな傷が？ ……なんにしてもドラコが優先です」

「そうね。みんなそこをどいて！ 重傷患者が通るわ！」

先生は魔法で担架を作り出すとその上にドラコを乗せる。

そして城の方へと運んでいった。

「大丈夫!? 咲夜!!」

すぐさまハーマイオニーとジニーがこちらに駆けてくる。

私はケロリとした表情で2人に微笑みかけた。

「どうしたの？ そんなに慌てて」

「いや、思いつきりジョージに顔を……」

ハーマイオニーは言葉が出てこないようだった。

私は蹴られたであろう場所を手で撫でる。

「簡単な盾の呪文よ。蹴られたふりをしただけ。そうでもしないと2人は止まらなさそうな雰囲気だったし」

私は芝生の上から立ち上がった。

そしてスカートについた芝生の草を軽く落とす。

「それよりも心配なのは——」

「ハリーたちよね。ええわかるわ。マルフォイにあんなことをしてアンブリッジが黙っているわけ……」

「違うわ。心配なのはドラコの方よ。いつ死んでもおかしくないような状態だったのだから」

私はドラコの怪我の状態を思い出す。

すぐに処置を始めないと、本当に命に関わってくるだろう。

もしかしてハリーもジョージもともに喧嘩をしたことがないのか？

どこをどれだけ蹴飛ばしたり殴ったら死ぬなんてことは常識中の常識だと思うのだが……。

まあでも確かにハーマイオニーが言った事も心配ではある。

あの行為がいいように取られないのは明白だ。

アンブリッジ先生の判断次第では、少し強引な手を使わざるを得なくなるだろう。

その日の夜、談話室にて。

「禁止？」

アンジェリーナが虚ろな目でハリーたちに聞き返した。

「禁止……シーカーもビーターもない……いったいどうしろっての？」

試合の勝ち負けどころではない。

いまこの場でチームの大事なシーカーとビーターを失うということが、何を招くのか
アンジェリーナは良く知っているのだ。

アンジェリーナは虚ろな目で女子寮の階段を上がっていく。

しばらくしてフレッドとジョージも男子寮へと消えていった。

ことの顛末はこうだ。

マクゴナガル先生がハリーとジョージに対し怒っているとそこにアンブリッジ先生
が登場。

そして新しい教育令を取り出し、ハリー、フレッド、ジョージが以後二度とクイディツ
チを出来ないようにしたのだ。

もしかしたら私がアンブリッジ先生に圧力を掛けたらその処罰をひっくり返せるか

も知れない。

だが、これに関しては自業自得だと私は考えていた。

ドラコの負け惜しみをハリーは真に受け、先に手を出した。

口だけで戦っていたドラコを寄つてたかつてタコ殴りにしたのだ。

本来なら退学になつてもおかしくはない。

私は次の瞬間、ポケットの中に違和感を覚える。

取り出してみるとそれは不死鳥の騎士団の連絡用の懐中時計だった。

針は召集、そして場所は校長室になっている。

私はこっそり喧噪の中に溶け込むと時間を止め校長室に姿現しした。

そして時間停止を解除する。

「お呼びでしょうか……ハグリッド？」

私は校長室にいたダンブルドア先生に一礼し、頭を軽く上げた段階でその巨体が目に留まる。

ハグリッドは全身傷だらけで、何かと汚らしい。

「よかった。無事に帰つてくれたのね」

「おう、咲夜。元気にしてたか」

そういうとハグリッドは私の頭をポンポンと撫でる。

声を聞く限りでは、ハグリッドはそこそこの元氣そうだった。

ダンブルドア先生はハグリッドと私の為の椅子を作り出すと、自分も椅子に座る。そしてハグリッドから任務の報告を聞き始めた。

「あんまり上手くいったとは、言えねえです。なにせこのありさまで……」

ハグリッドはダンブルドア先生の使いとして巨人族の住処へと行っていたのだ。

「途中で死喰い人どもに邪魔されちまいました。交渉中にガークが変わつちまうし、もう散々でさあ。ですが、ちゃんと伝言は伝えてきました。耳を傾ける巨人も何人かいましたです」

「そうか、そうか。ご苦労じゃった。しばし休んでいてもよろしい。では咲夜、今度はお主の報告を聞こうかの。アンブリッジ先生のほうはどうじゃ」

どうやらこの会議の目的はハグリッドの帰還を祝う為のものではないらしい。

私はゆっくり口を開いた。

「既に相当近づくことは出来ています。こちらの要求も少しずつですが飲むようになってきました。完全に調教が終わるまでにはそう時間は掛からないかと」

「ふむ、そうじゃの。ほどほどに、しとくのじゃよ。魔法省にバレたら拙いのでな」

ふおっほっほとダンブルドア先生は笑う。

ハグリッドは全身が痛むのか、立ち上がる時に少し呻くと校長室から出て行った。

「あとそれと、耳には入っていると思いますが、ふくろう同好会のこと」

「勿論、耳に入っておるとも。そちらも程ほどの。生徒を軍人にはしないように」
「心得ております」

私はペこりとダンブルドア先生に頭を下げ、時間を止める。

そして談話室へと戻った。

「ごめん」

丁度その時ロンが肖像画を抜けて談話室に入ってくる。

どうやら騒動の事を全く知らないらしい。

ハリーから出場禁止になったという話を聞いて目を丸くしていた。

「みんな、僕のせいだ……」

ロンが更に表情を暗くする。

「君のせいじゃない！」

「でも僕が試合であんなに酷くなけりや……」

「それとは関係ないだろう？」

「あの歌で上がっちゃって……」

ハーマイオニーはその喧嘩から逃げるように窓際へと移動する。

そして何かを発見したように目を輝かせた。

「ねえ、1つだけ、2人を元気づけられることがあるかもしれないわ」

「へーそうかい」

ハリーは素っ気ない態度を取る。

そんなものあるはずがないと思っっているのだろう。

「ええ、そうよ」

ハーマイオニーはわざと溜めた。

だが笑顔を隠しきれていない。

私はハーマイオニーが何を言おうとしているのか、大体の予想を付けることが出来た。

「ハグリッドが帰ってきたわ」

それは3人にとってこれでもないほどの朗報に違いなかったことだろう。

セストラルとか、勧誘とか、病院とか

ハグリッドが帰ってきたという知らせを聞いて、ハリーとロンは全力で男子寮の方向へと走っていった。

その様子を見て何かを察したのかハーマイオニーも女子寮へと走っていく。

次に3人が談話室に揃ったときには、全員が防寒着でもこもこになっていた。

「咲夜も早く準備！」

ハーマイオニーは声を張り上げる。

だが、私の場合この程度だったら防寒着は要らない。

「一足早くハグリッドの所に行ってるわ。雪が降ってるから足跡には注意するのよ」

「なんでだよ？　一緒に行けばいいじゃないか」

「そのマントに4人は少し窮屈よ。野郎4人ならまだしもね」

野郎4人という言葉聞いて少しハリリーの表情が柔らかくなる。

勿論、その4人とはジェームズ、シリウス、リーマス、ピーターの4人のことだ。

私は3人に手を振ると、女子寮の方へと上がる。

そして視線が切れたところで時間を止め、ハグリッドの小屋の中へと姿現した。

時間停止を解除する。

「こんばんは、ハグリッド」

私が後ろから声を掛けるとハグリッドは少しオーバーに肩を震わせ急いでこちらを向いた。

「……なんだ、咲夜か。どうした、こんな時間に？」

ハグリッドは自分で傷の手当をしているようだった。

よく見ると髪は血でべつとりと汚れ、全身傷まみれだ。

「……酷いわね。随分と苦勞の多い旅路だったみたいだけど」

「なんてことはねえ。こんなもんすぐ治るわい」

私は杖を振るいハグリッドの体を綺麗にする。

そして傷だらけの腕に治癒の魔法を掛けるとその上に丁寧に包帯を巻いた。

「ポピーを頼ればいいのに。強情ね」

「できるだけ心配かけたかあねえからな。ほれ、なんか飲むか？」

ハグリッドは包帯の巻かれた腕の調子確かめるようにグルグルと回すと、炬にかけていたヤカンを持ち上げた。

「さてと……紅茶はどこだったか。ん、あちこち埃まみれだ」

それはそうだろう。

なにせここ数カ月この小屋には人が入っていない。
フアングも違うところで世話をされていたはずだ。

「ハグリッド、紅茶の用意をするなら5人分用意しなさいな」

「あと3人も誰が来るっていうんだ？ 3人……」

ハグリッドは気がついたかのようにはつと顔を上げる。

そう、3人と言ったらハリー、ロン、ハーマイオニーと相場が決まっているのだ。
次の瞬間小屋のドアが外側から叩かれる。

「ハグリッド、僕たちだよ！」

ハリーの嬉しそうな声が聞こえてきた。

「紅茶の用意は私がしておくから、ドアを開けてあげなさい。外は冷えるわ」

「おお、そうだな。ちよいと頼む」

ハグリッドは紅茶の缶を机の上に置くと、ドアの方へと歩いていった。

私はその缶の蓋を開ける。

「……これは駄目ね」

そして自分の鞆からティーセットを取り出すと、紅茶を5人分用意した。

「よう、来たか！」

ハグリッドがドアを開けると足音が3つ入ってきた。

そして何もない虚空から突然3人が姿を現す。

「まだ帰ってから3秒も経ってねえってのに……」

「あら、貴方の体内時計、相当ゆっくり時間を刻むのね」

ハリーたちは中に入ると傷だらけのハグリッドを見上げる。

ハーマイオニーなどは軽く悲鳴を上げていた。

「一体何があつたの!?!」

ハリーが驚いたような声を上げる。

「なんでもねえ! お、咲夜。茶の用意ありがとな」

「何でもないはずないよ。酷い状態だぜ? 何かに襲われたんだろう!?!」

「ほれ、座れ」

ロンの言葉をハグリッドが適当に流した。

ハリーたちは渋々ながら椅子に座っていく。

私は皆の前に紅茶を並べた。

「ハグリッド、巨人に襲われたの?」

ハーマイオニーが静かに言う。

その言葉にハグリッドは分かりやすいほどギクリとした。

「誰が巨人なんぞと言った? お前さん誰と話をしたんだ? 誰が言った? 咲夜か

「？」

「貴方よ、ハグリッド」

私は軽く頭を抱える。

それでは肯定しているようなものだ。

「カマ掛けられたことぐらい気がつきなさい。そんなんだといつか痛い目を……いや、もう随分と痛い目を見ているようだけど」

ハグリッドはそれを聞いてようやく気がついたのか、はっと目を丸くしハーマイオニーを見る。

「おまえさんらみてえな小童は初めてだ。なんとというか……必要以上に知りすぎとる。決して褒めとるわけじゃねえぞ。知りたがり屋、お節介つちゆう意味だ」

ハグリッドは口では厳しいことを言っているが、表情は軽く笑っていた。

あまり厳しく咎める気はないのだろう。

「それじゃあ、巨人を探していたんだね？」

ハリーは紅茶のカップを手に取りニヤつと笑う。

「しようがねえ、そうだ」

それからハグリッドはダンブルドアの使いとして巨人を探していたという話を3人にし始めた。

その話は大体がダンブルドア先生にした報告通りだったが、若干マダム・マクシームに関する話が多かった気がする。

話を簡単にまとめると、ダンブルドアの使いとして巨人に接触したが、途中で相手の頭領が代わったり、死喰い人と接触しそうになったりと、あまり上手くは行かなかつたようだ。

「誰か来たわね」

私は不意に気配を感じ取りドアの方を見る。

その様子に話をしていた4人は息をひそめた。

ザク、ザク、と雪を踏みしめこちらに歩いてくる足音が聞こえてくる。

私は身振り手振りでハリーたちに透明マントを被るようにジェスチャーした。

そして杖を振るいティーカップを3つ消し去る。

それで先ほどのジェスチャーの意味を理解したのかハリーたち3人は素早く部屋の隅に移動し透明マントを被った。

ドンドンとドアがノックされる。

ハグリッドが急いでドアを引いて開ける。

そこにはアンブリッジ先生が立っていた。

アンブリッジ先生は口を堅く結びのけざるようにしてハグリッドを見上げる。

「それでは、貴方がハグリッドなの？」

アンブリッジ先生はまるで耳の遠い人に話しかけるように大きな声でゆっくりと喋った。

どうやらハグリッドの陰に隠れて私の姿を発見していないらしい。

ハグリッドが返事をする前にズカズカと小屋に上がり込んだアンブリッジ先生は、ようやく私の姿を発見したのかハッと息を飲んだ。

そして軽く息をつく。

「あー、失礼だとは思いますが……いったいお前さんは誰ですかい？」

「私はドローレス・アンブリッジです」

先生は私の横に腰を掛ける。

私は鞆から一つティーカップを取り出すと、紅茶を注ぎアンブリッジ先生の前に出した。

「ありがとう。なんで貴方がここにいるの？」

アンブリッジ先生は紅茶を受け取ると、改めて私に聞く。

「ふくろうのことで少し相談があったので」

私は適当に嘘をついた。

「ドローレス・アンブリッジ……たしか魔法省の人だと思ったが。あんたファッジのと

「ところで仕事をしてなさらんか？」

「大臣の上級次官でした。いまは闇の魔術に対する防衛術の教師です」

「そいつは豪気なもんだ。今じゃあの職に就く奴ああんまりいねえ」

ハグリッドは感心したようにアンブリッジ先生を見ると、ハグリッド自身も椅子に腰をかける。

「それに、ホグワーツの高等尋問官です」

「そりや何ですかい？」

ハグリッドは聞きなれない役職に顔を顰める。

「私としては何故貴方が今までいなかったのが気になるのですけどね」

アンブリッジ先生は紅茶を飲みながら静かに言った。

「学校は2カ月前に始まっていきます。貴方の授業は他の先生が代わりに教えるしかありませんでしたよ。一体どこで何をしていたの？」

「あー、俺あ……健康上の理由で休んでた」

「健康上の？」

アンブリッジは傷だらけのハグリッドの体を探るように見る。

「動けるほどには回復したので、戻ってきたっちゆうわけです」

「そうですか」

「そうとも」

アンブリッジ先生は何かを値踏みするようにハグリッドを見ると用は済んだと言わんばかりに椅子から立ち上がる。

「大臣には貴方が遅れて戻ったことは報告します」

「ああ」

「それに、高等尋問官として残念ながら私は同僚の先生方を査察するという義務があるということをご認識していただきましょう。ですから、近いうちにまた貴方にお会いすることになると申し上げておきます」

アンブリッジ先生はそう言うのと、ドアの方へ歩き出す。

ハグリッドはすつとんきよな声を上げた。

「お前さんが俺たちを査察？」

「ええ、そうですよ。魔法省は教師として不適切な者を取り除く覚悟です。では、おやすみ。咲夜も遅くなる前には帰るのですよ？」

そう言い残しアンブリッジ先生は小屋を出ていった。

私は軽くカーテンを開け、アンブリッジ先生が城の方へと帰ったのを確認すると、3人に合図を送る。

「査察だと？ あいつが？」

ハグリッドが唾然とした。

「そうなんだ。もう殆どの先生が査察を受けてる」

ハリーは透明マントを片付けながらハグリッドに言った。

「あの……ハグリッド。授業でどんなものを教えるつもり？」

ハーマイオニーが恐る恐る聞く。

ハグリッドはその言葉に嬉しそうに答えた。

「おう、心配するな。授業の計画はどつさりあるぞ。ふくろう年用にくつつか取ってお

いた動物がおる。まあ見てろ、特別の特別だ」

「えつと……どんなふうに特別なの？」

「教えねえ。びつくりさせたいからな」

ハーマイオニーは遠回しに言っても通じないと判断したのか、切り口をかえた。

「ねえ、ハグリッド。アンブリッジは貴方があんまり危険なものを授業に連れてきたら、

絶対に気に入らないと思うわ」

「危険？ 馬鹿言え。お前たちに危険なものまで連れてこねえぞ！」

「よく言うわ」

私が大げさに肩を竦めるとむぐつとハグリッドが押し黙る。

自分で言っておいてなんだが、心当たりがあるのだろう。

「まあ、なんだ。連中は自己防衛ぐれえはするが——」

「ハグリッド、アンブリッジの査察に合格しなきゃならないのよ。そのためにはポロツクの世話の仕方とか、ナールとハリネズミの見分け方とか、そういうのを教えているところを見せた方が絶対いいの」

ハーマイオニーはハグリッドの言い訳染みた言葉を遮り真剣に訴える。

「だけど、ハーマイオニー。それじゃ面白くもなんともねえ。俺の持つてるのは、もつとすごいぞ。何年もかけて育ててきたんだ。イギリスで飼育に成功してるのは俺ぐれえだな」

「ハグリッド……お願い……。アンブリッジはダンブルドアに近い先生方を追い出す口実を探しているの。頼むからふくろうに出てくるようなつまらないものを教えて頂戴」

ハーマイオニーは必死に訴えるが、ハグリッドは聞く耳持たずだ。

大あくびをして、暖炉の火を弱くしはじめた。

「ええか？ 俺の事はなんも心配せんでええ。まかしとけ……さあ、もう城に帰ったほうがええだろう。足跡を残さんようにな」

ハグリッドの言葉に3人は渋々帰っていく。

「まあ、貴方のやりたいようにやればいいと私は思うわよ。でも、ダンブルドア先生に迷惑を掛けないようにね」

「それと授業の内容がどう関係するっちゅうんだ？」

「なんでもないわ。おやすみ、ハグリッド」

私はハグリッドに挨拶すると時間を止めて女子寮へと姿現しする。

そしてベッドに潜り込みぐっすりと眠った。

火曜日、ハグリッドが帰ってきてから初めての魔法生物飼育学の授業があった。

私はハリーたち3人と共に授業へと向かう。

ハリーたちは心配そうな顔をしていた。

授業の内容がということもあるのだろうが、この場合はアンブリッジ先生の査察のほうの心配だろう。

「今日はあそこで授業だ！」

ハグリッドは集まったグリフィンドール生とスリザリン生に向かって声を掛ける。

そして背後の暗い木立を指さした。

「少しは寒さしのぎになるぞ！ どっちみち、あいつら暗いところが好きなんだ」

「何が暗いところが好きだって？」

私の横にいるドラコが声を上げる。

マダム・ポンフリーの懸命な治療でドラコは日常生活を送れるほどには回復したようだ。

「怪我はもう大丈夫なの？ ドラコ。一昨年の怪我は随分長引いていたようだけど」
「鍛えているから。……咲夜、ありがとう。真つ先に駆けつけて応急処置をしてくれたって聞いたよ。そのおかげさ」

ドラコは体を見せるように両腕を広げる。

まだ軽い青あざなどの怪我の痕が服の隙間から覗いていた。

「よし、森の探索は5年生まで楽しみに取っておいた。連中を自然な生息地で見せてやろうと思ってな。さあ、いまから勉強するやつあ珍しいぞ。飼い馴らすのに成功したのは多分イギリスじゃ俺だけだ」

ハグリッドはそう言うのと森の中へと入っていく。

「本当に飼い馴らされてるんだらうな？ あれの言葉が今まで正しかったことがあるか？」

ドラコだけではない、誰も森の中へと入りたくなさそうだった。

だがハリーを先頭にグリフィンドル生が森に入っていくのを見ると、スリザリン生もその後には続き始める。

私はドラコと最後尾を歩いた。

「まあ、警戒しておけば襲われることはないと思うわ。それに、シーカーである貴方なら動物の攻撃を避けるぐらい造作もないことでしょう？」

「まあ、そうだけどね」

ドラコはそう言つて前を向く。

恐怖を感じているのは見え見えだった。

森の中を10分も歩くと少し暗い広場のようなところに出る。

そこには雪は積もっておらず、全て上に覆いかぶさっている木が雪を遮っているようだった。

「集まれ集まれ」

ハグリッドは肩に担いでいた牛の死体を地面に置く。

「さあ、あいつらは肉の臭いに引かれてやってくるぞ。だが、俺の方でも呼んでみる」

そう言うハグリッドは甲高い奇妙な叫び声をあげる。

その様子に殆どの生徒は恐怖で声も出ない様子だった。

1分、2分と時間が経過していく。

私は周囲を見回した。

何かが接近してきている。

すると暗がりの中から1匹のセストラルが姿を現した。

セストラルとはドラゴンのような顔と首で、翼のある大きな馬のような胴体を持っている。

珍しい魔法生物のはずなのだが、ホグワーツではこれを馬車馬として使っているのだ。

……本当にそれでいいのかホグワーツ。

「ハグリッド、どうしても一度呼ばないのかな？」

ロンがぼつりとそう呟く。

殆どの生徒が全く違う方向を、グルグルと見回していた。

どうやらセストラルが見えている生徒は殆どいないらしい。

「さーて……こいつらが見える者は手を挙げてみるや」

ハグリッドが喜々として生徒に聞く。

私は静かに手を挙げた。

他に見える生徒はスリザリン生が一人とネビルだけのようだ。

「咲夜、一体何が見えるって言うんだ？」

ドラコが少し表情を強張らせて私に聞いた。

私は牛の死体が置いてある方向を指さす。

そこでは丁度セストラルがお食事をしている真つ最中だ。

もしセストラルが見えていないとしたら、肉が勝手に骨から剥がれて空中で消えていく様を見ていることだろう。

「セストラルだ。心配はねえ。こいつらは凄く大人しいからな。お前さんらもこいつらが引いている馬車に毎年乗つとるだろう」

ハグリッドの言葉に何人かの生徒が気がついたかのように声を上げる。

毎年ホグワーツ特急へと行き来する馬車、それを引いていたのがセストラルだと気がついたからだろう。

「よし、そんなじゃ知つとる者はいるか？ どうして見える者と見えない者がおるのか」
ハグリッドの言葉にハーマイオニーが手を挙げる。

「言ってみろ」

ハグリッドがニッコリと微笑みかけた。

「セストラルを見ることができるのは……死を見たことがある者だけです」

「その通りだ。グリフィンドールに10点。さして、セストラルっちゅうのは——」

「エヘン、エヘン」

特徴的な咳払いが森の中に響き渡った。

私はついに追いついてきたかとその方向を見る。

そこには痛そうに尻をさすっているアンブリッジ先生の姿があった。

10分置きに全身くまなく蹴つ飛ばしているので、痛いのは尻だけではないはずなのだ。

「今朝、貴方の小屋に送ったメモには授業の査察をするという内容が書かれていたと思いましたが」

アンブリッジ先生は少し眉をひそめて言った。

「ああ、うん。この場所が分かつてよかった！ ほーれ、見ての通り今日はセストラルをやっとる」

「え？ 何？」

アンブリッジ先生は耳に手を当て、顔を顰めて大声で聞き返した。

「なんて言いましたか？」

アンブリッジ先生は完全にハグリッドを異国の人間のように扱っている。

いや、人間として見ていないのかも知れない。

ハグリッドはアンブリッジ先生の言葉に少し戸惑ったような顔をした。

「あー……セストラル！」

ハグリッドも大声を出す。

「大っきな、翼のある馬だ。ほれ！」

ハグリッドはややオーバーな動作で巨大な両腕をバタバタと上下させた。

その様子にアンブリッジ先生はブツブツと言いながらクリップボードに何かを書き始める。

「原始的な……身振りによる……言葉に……頼らなければならない。つと」

「さあ、とにかく……」

ハグリッドは生徒の方に向き直る。

「む……俺は何を言いかけてた？」

その言葉にアンブリッジ先生は更にクリップボードに書き足した。

「記憶力が……弱く……直前の……ことも……覚えて……いないらしい」

アンブリッジ先生の嫌に大きいブツブツとした咳きにドラコが嘔き出す。

まあ、強ち間違っていないかもしれない。

「ご存じかしら？ 魔法省はセストラルを危険動物に分類しているのですが」

アンブリッジ先生はクリップボードに書き終えるとハグリッドに話しかける。

「セストラルが危険なものか。そりゃ散々嫌がらせをすりゃあ、噛みつくかもしれないが

――」

「暴力の……行使を……楽しむ……傾向が……見られる」

アンブリッジ先生はハグリッドの言葉を曲解してクリップボードに走り書きをした。

ハグリッドは必死に弁明を始めたが、アンブリッジ先生は聞く耳持たずだった。

アンブリッジ先生はメモを書き終わるとハグリッドに向き直る。そして大きな声でゆっくりと話し始めた。

「授業を普段通り続けてください。私は歩いて見て回ります」

そこでアンブリッジ先生は歩く仕草をして見せる。

「生徒さんの間をね」

次にその場にいる生徒一人ひとりを指差し。

「そして、みんなに質問します」

最後に自分の口を指さし、口をパクパクさせた。

ハグリッドはその様子をマジマジと見ている。

どうやら自分が馬鹿にされていると気がついていないらしい。

ハーマイオニーなどは悔し涙を浮かべてるといふのに。

アンブリッジ先生は私たちの方へと歩いてくる。

そしてドラコの横にいるパーキンソンに質問した。

「どうかしら？ あなた、ハグリッド先生が話していること、理解できるかしら？」

パーキンソンは目に涙を浮かべている。

だがこれはハーマイオニーのとは違い、笑いすぎて出た涙だ。

パーキンソンはクスクスと笑いながら喘ぎ喘ぎに答える。

「いいえ……だって、あの話し方が……いつも唸ってるみたいで……」

その答えに殆どのスリザリン生が大爆笑する。

ハグリッドは少し顔を赤くした。

「いや、ハグリッドが甲高い声で話し出したら、それはそれで……」

私がそう言うときさらに笑いが大きくなる。

グリフィンドール生からも、少し笑いがこぼれた。

結局その後アンブリッジ先生は授業が終わるまで私の横から離れることはなかった。

邪魔だったので時間を止めずに一度蹴つ飛ばしてやろうかとも考えたが、ぐつと自制する。

授業が終わり解散したあとで、好きなかだけ蹴飛ばせばいいのだ。

「あの腐れ、嘘つき、根性曲がり、怪物ばばあー」

城へと帰る道中、ハーマイオニーが狂ったように悪態をついた。

「怪物ばばあは酷いわね」

私は冷静につっこむが、ハーマイオニーには聞こえていないらしい。

「あの人は何を目論んでいるかわかる？ 混血を毛嫌いしてるのだけ。ハグリッドをウ

スノ口のトロールか何かみたいに見せようとしているのよ！」

「あら、トロールに失礼でしょ？」

私がそう言うとハーマイオニーはキツとこちらを睨んだ。

「でも授業は悪くなかったわ。ほんと、ハグリッドにしてはとってもいい授業だった！」
「ハグリッドにしては……」

「アンブリッジはあいつらが危険生物だと言ってたけど」

私の言葉を遮るようにしてロンがハーマイオニーに聞く。

「そりゃハグリッドが言ってたようにあの生物は確かに自己防衛するわ。でも、ねえ、あの馬。本当に面白いと思わない？ 見える人と見えない人がいるなんて！ 私にも見えたらしいのに！」

ハーマイオニーは嬉しそうにそう叫ぶ。

私は袖の下から一本、大ぶりのナイフを取り出しハーマイオニーに差し出した。

「はい」

「え？ これはなに？」

ハーマイオニーは恐る恐るナイフの柄を掴み、持ち上げる。

「その辺にいる生徒を適当に殺してきなさい。見えるようになるわよ」

私は静かにそう言った。

ハーマイオニーは顔を真っ青にしてナイフを私に返す。

自分が言った言葉の不謹慎さに気がついたようだ。

「あの……咲夜、本当にごめんなさい。——ううん、勿論そうは思わないわ。ああ、なんて馬鹿なことを言ったんでしょ」

「少し冷静になりなさい。ほんと、血が上ると何をするか分からないのはハリーもハイマイオニーも変わらないわね」

私は咎めるように2人を見る。

ロンは「え？ 僕は？」というような顔をしていた。

「なんにしても、そのうち嫌でも見えるようになるわ」

私はそう言い残し、次の授業のある温室へと歩き出す。

その途中で時間を止め、アンブリッジの背中を骨が折れない程度に蹴った。

12月に入ると気温は更に下がり雪の日も多くなった。

ようやくクイデッチのシーズンも終わりDAの会合が開けるようになっていった。

DAの会合も回数を重ねるごとにレベルが上がっていく。

初めの頃は全員が息を切らしていた準備体操も、もう殆どの生徒が難なくこなすようになっていた。

呪文の方も少しずつ上達してきている。

私を中心にハリー、ハーマイオニー、デイゴリーが教師役となり丁寧に教えているためだ。

そしてクリスマス休暇に入る前の最後のD.A.の会合がある日、大広間で朝食を取っていた私にアンジェリーナが話しかけてきた。

「咲夜、ちよつといい？」

アンジェリーナは遠慮がちに私の横に座る。

「どうしたの？ ふくろう同好会の話？」

「いいえ、ふくろうじゃないわ。実はクイディッチの件で少し相談があつて……」

アンジェリーナはちらりと私の顔色を窺う。

「咲夜、グリフィンドールのシーカーになつてくれない？」

私はその言葉に食べていたクロワッサンを一度置いてアンジェリーナの方を見た。

「なんで私なの？」

「咲夜つてなんでもそつなくこなすし……ね？」

ね？ つて、言葉足らずにも程がある。

だが、クイディッチを試してみるのは良い提案だろう。

お嬢様からいただいた箒もトランクの中にずっと仕舞つてあるだけだし、久しぶりに飛びたい気もする。

だが、シーカーは駄目だ。

「ビーターならやってあげてもいいわよ」

その言葉にアンジェリーナは目を輝かせた。

だが途端に不思議そうな顔をする。

「どうしてビーター？」

「いやだつて私がシーカーやったら優勝しちゃうじゃない」

私はそう言い切る。

アンジェリーナはその言葉に目を丸くした。

「優勝しちゃつていいじゃない！ 何がいけないの？」

「そうね、例え私以外の選手が全員何もできない豚でも、優勝できてしまうつて意味よ」

その言葉にアンジェリーナは更に首を傾げた。

「まあいいわ、さっきの言葉覚えておきなさいよ！ ビーターやるつて言つたわよね！」

アンジェリーナは嬉しそうに叫ぶとバタバタと大広間から出ていった。

多分マクゴナガル先生にでも報告に行ったのだろう。

私は先ほども食べていたクロワッサンを手に取り食べ始める。

そして静かに紅茶を飲んだ。

まあ、アンジェリーナにはああ言つたが、勿論違う理由がある。

私が能力を使ってシーカーをしてしまつては完全にゲームが成立しなくなるというのも理由の1つではあるのだが、一番大きな理由は単純に私がビーターをやりたいからだ。

合法的に人に鉄の球を叩き込めるなんて、面白いに決まつてる。

あわよくばアンブリッジに鉄球を叩き込んでやろう。

最後のD Aの会合は無事終わり、私は女子寮の自分に割り当てられたベッドに横になつていた。

その時にアンジェリーナに教えられたことだが、シーカーはジニーに決まつたらしい。

なんでもかなり筋が良いとのことだった。

人は見かけによらないというのは、こういうことを言うのだろう。

なんにしても、今日はもう寝よう。

時間は有り余るほど沢山あるが、無駄にできるわけではない。

私は目を瞑り、静かに眠りに落ちていった。

私はロンドンに立っている。

右手にナイフ、左手には大きな袋を持っていた。

さて、今日も首を集めよう。

歩道を歩く親子を見つけた。

殺した。

首を切り落とし袋に入れる。

悲鳴を上げて逃げていく子供がいる。

殺した。

首を切り落とし袋に入れる。

警官が私の方に走ってきた。

殺した。

首を切り落とし袋に入れる。

私の前に人間がいなくなつた。

よかつた、これで……。

誰も殺さなくて済む。

「……………うん。……………」

私は腹部に違和感を感じ、ポケットの中をまさぐる。

そして我に返り時間を停止させ、懐中時計を取り出した。

不死鳥の騎士団の緊急招集だ。

私は寝間着から制服に着替えると、意識がはつきりとするまでベッドの上に座る。

段々と脳に血液が回ってきて、寝起き特有の頭痛もなくなってきた。

「よし」

鞆から手鏡を取り出し、目が充血していないことを確認する。

一通りの確認が済んだ私は鞆をポケットに入れ校長室へと姿現した。

ここにはダンブルドア先生の他にマクゴナガル先生とハリー、ロンがいた。

私はハリーとロンの後ろに回り込み、時間停止を解除する。

「ダンブルドア先生、お呼びででしょうか？」

私が声を掛けるとハリーとロンは跳び上がった。驚いた。

「昨夜、アーサーが任務中に襲われた。今エバラードとデイリスが確認に向かっている」

アーサーが襲われた。

確か今日の晩、アーサーは神秘部の廊下を監視する任についているはずだ。そこで襲われたということだろうか。

「ダンブルドア！」

突然歴代校長の肖像画の1つから声が聞こえてくる。

どうやらエバラードというのは歴代校長の1人らしい。

「誰かが駆けつけてくるまで叫び続けましたよ。みんな半信半疑で、確かめるように下りていきました。下の階に私の肖像画はないので、確認には行けなかつたのですが……。ともかく、まもなく皆がその男を運び出してきました。症状は良くない。血だけだった」

「ご苦労。なれば、デイリスがその男の到着を見届けたじやろう」

エバラードの報告を聞いてダンブルドア先生は冷静に言う。

ダンブルドア先生の言葉通り間髪入れずに肖像画に駆け戻ってきた魔女、デイリスが言った。

「ええ、ダンブルドア。皆がその男を聖マンゴに運び込みました……。酷い状態のようです」

聖マンゴ、確か魔法界の総合病院のところだったと記憶している。

私はまだ入院が必要なほどの大怪我をしたことがないので、行った事はない。

「ご苦労じやった」

ダンブルドア先生は歴代の校長たちにそう言うと、マクゴナガル先生の方を見た。

「ミネルバ、ウィーズリーの子供たちを起こしてきておくれ」

「わかりました……」

マクゴナガル先生はすぐさま校長室を出ていく。

ハリーは横目でチラリとロンの顔色を窺っていた。

ロンは怯えたように表情を強張らせている。

ダンブルドア先生は今度は戸棚から古いヤカンを取り出した。

「ポータス……」

ダンブルドア先生が呪文を唱えると、ヤカンは青白い光を発し、震え出す。

「先生……。まあ緊急事態だしいいか」

ダンブルドア先生は緊急でポータキーを作ったのだろう。

だが、ポータキーを勝手に作成するのは犯罪だ。

「そうじやよ咲夜。固いことを言うでない」

ヤカンの震えが止まるとダンブルドア先生は違う肖像画に歩み寄る。

確かその肖像画はブラック邸で見たことのあるものだった。

「フィニアス、フィニアス」

ダンブルドア先生が名前を呼ぶが、その肖像画にいる人物は反応しない。

だが、鼻がびくびくと動いていたので、多分狸寝入りだろう。

「フィニアス！」

何人かの肖像画がダンブルドア先生と共に叫ぶ。

もはや眠ったふりは出来ないと思つたのだろう。

フィニアスと呼ばれた魔法使いは芝居がかった身振りで目を見開いた。

「——っ？ 誰か呼んだかね？」

「フィニアス、貴方の別の肖像画を、もう一度訪ねてほしいのじゃ。また伝言があるのでな」

「ほうほう、わかりましたよ。ただ、あいつがもう私の肖像画を破棄してしまつたかもしれませんかね。何しろあいつは家族の殆どを——」

フィニアスが言い訳を始める前に、ダンブルドア先生がそれを遮つた。

「シリウスは貴方の肖像画を処分すべきでないことを理解しておる。シリウスに伝言するのじゃ。『アーサーが重傷で、妻、子供たち、ハリー、が間もなくそちらに到着する。護衛には咲夜を付ける』よいかな？」

「アーサー負傷の妻子供ハリーが滞在。護衛が咲夜。……咲夜？ 誰だそいつは」

「私よ」

私は軽く手を挙げた。

「まだ小娘じゃないか」

「否定はしないわ」

「フィニアス」

ダンブルドア先生が静かに言うと、フィニアスは気乗りしない調子で肖像画の奥へと消えていった。

次の瞬間校長室のドアが開き、フレッド、ジョージ、ジニーがパジャマ姿で入ってくる。

その後ろにはマクゴナガル先生の姿があった。

「ハリー、マクゴナガル先生が貴方が。パパの怪我するところを見たっておっしゃるの」

「お父上は不死鳥の騎士団の任務中に怪我をなさったのじゃ」

ジニーの言葉にハリーが返事をする前にダンブルドア先生が答えた。

「お父上はもう聖マンゴ魔法疾患傷病院に運び込まれておる。きみたちをシリウスの家送ることにした。病院へはその方が隠れ穴よりも便利じゃからの。お母上とは向こうで会える」

「どうやって行くんですか？ 煙突飛行粉で？」

フレッドが珍しく敬語でダンブルドア先生に聞いた。

どうやら動揺しているらしい。

「いや、煙突飛行は監視されておるのでな。ポートキーに乗るのじゃ」

ダンブルドア先生は机の上に置かれたヤカンを指さした。

次の瞬間、部屋の真ん中に炎が燃え上がり、その場に一枚の金色の羽が舞い降りる。

ダンブルドア先生は器用に空中でその羽を捕まえた。

「フオークス、わしの飼つとる不死鳥からの警告じゃ。アンブリッジ先生が君たちがベッドを抜け出したことに気がついたに違いない」

「私が足止めに行きましようか？」

私はダンブルドア先生にそう進言するが、ダンブルドア先生は首を横に振った。

「君には護衛の任があるじやろう？ ミネルバ、適当な作り話で足止めしてください」

マクゴナガル先生はその言葉を聞いて校長室から出ていった。

「あいつは喜んでと言っておりますぞ」

私が声にした方向に視線を向けると、そこにはフィニアスが気乗りしない顔で口を開いていた。

「私の曾々孫は家に迎える客に関して、昔からおかしな趣味を持っていた」

「どうやら向こうは安全のようだ。」

私はダンブルドア先生と頷き合い子供たちを集める。

そして全員をポートキーに触れさせた。

私もヤカンの取っ手を持つ。

「ポートキーは使ったことがあるじやろな？」

ダンブルドア先生がそう聞くと、皆頷く。

「よからう。では、3つ数えて……1、2……」

次の瞬間ハリーがダンブルドア先生を見上げる。

「3」

次の瞬間、私はハリーから殺気を感じ取った。

私は咄嗟に逃げようと思ったが、既にポートキーは発動している。

もう手を放すことはできない。

次に地面に足が付いた時には、私たちは既にブラック邸の厨房へと降り立っていた。

「ハリー、今のはどういうこと？」

私はハリーが立ち上がる前にその上に馬乗りになる。

ハリーは訳が分からないといった表情で私の顔を見上げていた。

「なんの話だ？」

「とほけないで。今さっきダンブルドア先生を殺そうとしたでしょう？」

私の言葉にハリーは分かりやすく動揺する。

「な、なんでそれを咲夜が？ いや、違う。僕の意思じゃない。本当だ！」

一体何事かと、ウィーズリーの兄弟たちがこちらを見ていた。

「……まあいいわ。後で事情を詳しく話さない」

私は立ち上がり、慌ててこちらに駆けてきたシリウスに事情を説明した。

「まあ、詳しくはハリーに聞いて」

私は簡単に説明を終えるとハリーに全て丸投げする。

ハリーは少はずつ話し始めた。

どうやらハリーはアーサーが蛇に襲われた夢を見たというのだ。

そしてその夢の通り、確かにアーサーは襲われていた。

「ママはもう来てる？」

フレッドがブラックに聞く。

「多分まだ、何が起こったかさえ知らないだろう。アンブリッジの邪魔が入るまえに君たちを逃がすことが大事だったんだ。今頃はダンブルドアがモリーに連絡を入れる手配をしているだろう」

「聖マンゴに行かなくちゃ」

ジニーが慌てたように声を上げる。

そして全員を見回して、皆がパジャマ姿なのに気がついたようだった。

「シリウス、マントを貸してくれない？」

ブラックは首を横に振る。

私もブラックと同意見だ。

「駄目よ。ここで大人しくしておきなさい。そのうち面会には行けるわ」

「でも——」

「大人しくしてなさい」

「はい」

ジョージが諦めたように項垂れた。

その様子にブラックが口を開く。

「辛いのは分かる。しかし、ここにいる者全員がまだ何も知らないように振る舞わなければならぬ。少なくとも、君たちの母さんから連絡があるまでは、ここでじつとしていなければならない。いいね？」

ウィーズリーの兄弟たちは、渋々頷いた。

ハリーはまだ顔を真っ青にして厨房の椅子に座っている。

「それでいい。ビールでも飲んでリラックスしなさい。アクシオ、バタービール！」

シリウスが杖を振ると食糧庫からバタービールが数本飛んでくる。

私はそれを片手でキャッチした。

「もっと強いのか——」

「君は護衛だと聞いたが？」

私が文句を言い切る前にブラックが冷やかに言った。

まあ、この場合ブラックのほうが正しいので素直にバタービールで我慢することにする。

皆椅子に座り、じつと何かが起こるのを待っていた。

次の瞬間空中に炎が上がり、薄暗い部屋を照らす。

「きゃあー！」

ジニーの可愛らしい悲鳴も部屋中に響いた。

「フォークスー！」

ブラックはそう言うなり炎と共に現れた羊皮紙に目を通す。

「ダンブルドアの筆跡ではない……君たちの母さんからの伝言に違いない、さあ……」

ブラックは羊皮紙をジョージにへと手渡した。

ジョージはそれをもぎ取るように受け取ると、引きちぎらんばかりに広げ、読みあげた。

『お父さまはまだ生きています。母さんは聖マンゴに行くところです。じつとしているのですよ。できるだけ早く知らせを送ります……まだ生きています。だけど、それ

じやまるで……」

そう、まだ生きているということは、今にも死にそうということだ。

全員そのことに気がついたらしい。

皆顔を青くしていた。

その後は全員が押し黙り、ただ時間が過ぎるのを辛抱強く待っていた。

ジニーが今にも泣きだしそうなので、私はジニーのそばへと行き、優しく抱きかかえる。

「大丈夫。アーサーは死なないわ」

ジニーは私の胸に顔を埋めた。

それから数時間が経過し、そろそろ明け方だという時刻になった頃、厨房のドアが急に開いた。

私は咄嗟に杖を構えるが、そこに立っていたのはモリーさんだった。

皆一斉にモリーさんを見る。

モリーさんの顔色は優れなかったが、みんなを見回し力なく微笑んだ。

「大丈夫ですよ。お父さまは眠っています。あとでみんなで面会に行きましょう。今は、ビルが様子を看んでいます」

フレッドはそれを聞き、両手で顔を覆うとどさりと机に突っ伏した。

ジョージとジニーは立ち上がり、モリーさんに抱き着く。

「さあ、朝食だ！」

ブラックが勢いよく立ち上がり、嬉しそうに大声で言った。

次の瞬間にテーブルが料理で満たされる。

その光景に全員がブラックに賞賛の声を送った。

「あ、いや……これをやったのは私じゃない」

ブラックは気まずそうにこちらを見る。

「咲夜、君だろう？」

ブラックは確信しているかのようにそう言った。

そう、ブラックの言う通りだ。

ブラックが「朝食だ」と叫んだ瞬間に時間を止め、全員分の食事を用意しただけである。

「あら、なんのことかしら？ 魔法使いさん。さあ食べましょう？」

私はぼかんとしているブラックをよそに椅子に座り直す。

皆状況が分からないといった顔でテーブルについていった。

「シリウス、子供たちを一晩中見ててくれてありがとう」

モリーさんが優しくブラックに微笑む。

だが私は知っている。

多分私たちがここにいて、一番喜ぶのはブラツクだ。

「なに、役に立てて嬉しいよ。アーサーが入院している間はここでゆつくりするといい」「まあ、シリウス。とてもありがたいわ……アーサーはしばらく入院することになると言われたし、なるべく近くにいられたら助かるわ。……もしかしたら、クリスマスもここで過ごすことになるかもしれないけど」

「大勢の方が楽しいさ」

ブラツクはクールにそう答えたが、多分内心では狂喜乱舞しているだろう。

尻尾があつたら千切れんばかりに振っているに違いない。

その後は全員がそこそこの量の食事を取り、昼まで仮眠を取った。

もつとも私は厨房で昼食の下ごしらえをしてから時間を止めて寝たが。

昼食を取り終わる頃になると全員のトランクがホグワーツから送られてきた。

私は既に制服から動きやすい服装に着替えていたが、他の皆はまだパジャマだったからだ。

皆トランクから服を取り出すとそそくさと着替えていく。

どうやら一刻も早く聖マンガに向かいたい、そのような感じだった。

「全員揃つとるか？ ええ？」

突然厨房のドアが開きムーディとトunksが入ってくる。

ノックも無しに突然だったので、私は咄嗟に杖を向けていた。

「なんだ!? わしに杖を向けるとは! 決闘か!? こい!!」

「なんだマッドアイか」

私はつまらなさそうに杖を降ろす。

ムーディは今にも私に呪いを掛けそうな勢いだったが、何とか自制し、改めて周囲を見回した。

「ハリーたちの護衛をダンプルドアから頼まれたのだ」

「私って信用無いのね」

「バカを言え。もし信用してなかったらお前みたいな小娘を騎士団員にしとらんわ。ほれ小僧ども。出発するぞ!」

私の軽口をムーディは軽く流し子供たちを集合させる。

「もしかして、徒歩で向かうの?」

ジニーがトunksに聞いた。

「まあね。地下鉄を使うわ。みんなマグルの服装を着ているわね?」

トunksが全員を見回す。

私はトunksの頭を叩いた。

「貴方が一番目立ってるわ」

トunksの髪は鮮やかなピンク色をしていた。

トunksはてへと舌を出す。

「私よりマッドアイの方が……ね？」

トunksは笑いを堪えてムーデイを指さす。

確かにムーデイは義眼を隠す為に少々奇妙な帽子の被り方をしている。

その様子を見て双子が笑った。

「なんだ？ 変か？ 顔の前で義眼がギョロついておるよりはマシだが。ええ？」

ムーデイは眉を吊り上げる。

まあ、マシンなのは確かだ。

私たちはロンドン市内へと向かう電車に乗り込み、ロンドンの中心部にある駅で降りる。

そして駅から少し歩き、ページ・アンド・ダウズ商会と書かれたレンガ造りの大きなデパートの前まで来た。

そのデパートは営業をしている様子はなく、ショーウィンドーにはマネキンが数体放置されている。

まあこの外装はマグル避けのためのものだ。

トunksがマネキンへと話しかけると、マネキンが小さく頷き手招きを始める。トunksはジニーとモリーさんの肘を掴み、ガラスを真つすぐ突き抜けて姿を消した。

ウィーズリーの兄弟たちもその後が続いていく。

そして最後に私がハリーの背中を押して共にガラスを抜けた。

中は病院の受付になっている。

グラグラとした椅子が何列にもなつて並び、そこには多くの魔女や魔法使いが座つていた。

患者の容体も様々だ。

何ともなさそうな人もいれば、体中から腕を生やした奇妙な風体の人もいる。

ハリーは周囲をききよろきよろと見回し、横にいるロンに声を掛けた。

「あの人たちは医者（ドクター）なのかい？」

ハリーは近くにいる薄い緑色のローブを着た魔法使いたちを指さした。

「医者つて人間を切り刻んじやうマグルの変人の事？ 違うさ、あれは癒しの癒者（ヒーラー）だよ。」

癒者とは、マグルで言うところの医者のようなものだ。

身近な癒者といえば、マダム・ポンフリーとかだろうか。

「ほら、こっちよ！」

モリーさんが受付のところまで手を振っている。

「ほら、行くわよ」

私は2人の背中を押して、受付へと向かった。

聖マンガとか、予言とか、儀式とか

『「危険な野郎」ダイ・ルウエリン記念病棟——重篤な噛み傷』

私はドアの横に書いてある文字を読んだ。

モリーさんの話では、アーサーの病棟はここらしい。

「私たちは外で待つてるわ」

トックスが私の肩を掴んで言った。

「大勢でいっぺんにお見舞いしたら、アーサーにもよくないしね。最初は家族だけで」

私はその言葉の意味を察する。

家族との面会の後に騎士団メンバーだけで重要な話をするということだろう。

「ええ、そうしたほうがいいわ。ムーデイもそれでいいでしょう?」

「あ? ああ、そうだな。そうすべきだ」

私の言葉にムーデイも同意する。

モリーさんは一度周囲を見回し、自分の子供とハリーを連れて病室へと入っていった。

「ダンブルドアからある程度の事情は聞いている。昨日は一晚ご苦労だったな」

私たちが病室の前の廊下で待っている間、ムーデイがぼつりと私に呟いた。

「苦勞も何も、私が一番近くにいたというだけよ。自由に動かせる騎士団員って少ないし」

「咲夜は自由に動くからね。是非私にもその不思議な術の事を教えてほしいわ」

「あら、私が思うに貴方の七変化のほうが不思議な術だと思うんだけど？」

私は適当に軽口を言つてトランクスの話をはぐらかす。

「私的には普通なんだけどね」

「そう、じゃあ私もそういうことで」

その会話を聞いてムーデイが肩を竦める。

しばらくすると病室の扉が開き、子供たちが出てきた。

「行くぞ」

ムーデイが先頭になって、子供たちと入れ替わるように病室へと入っていく。

アーサーが一番奥の小さな高窓のそばにあるベッドに横になっていた。

その横ではモリーさんが心配そうな顔をして座っている。

「傷はどんなだ？　アーサー」

ムーデイが無遠慮に聞いた。

その言い方にモリーさんが少し顔を顰めたが、アーサーは力なく笑う。

「血が止まらないだけさ。蛇の毒に少々厄介な物が含まれていたみたいだね。それさえ良くなれば家に帰れるだろう」

「そう、その蛇だけど——」

トンクスが羊皮紙を取り出しながら口を開く。

「隈なく探したんだけど、蛇は何処にも見つからなかったらしいよ。アーサー、貴方を襲った後、蛇は消えちゃったみたい」

「消えた？ どういうことかしら……」

「まあ、例のあの人も蛇が中に入れるとは期待してなかったはずだよね？」

トンクスが言葉を続ける。

神秘部の奥にはハリーとヴォルデモートに関する予言が仕舞われている。

ヴォルデモートはその予言が欲しいらしいのだ。

「わしの考えでは、蛇を偵察に送り込んだのだろう」

「偵察？」

私が聞き返すとムーディはしつかりと頷いた。

「何しろこれまでは全くの不首尾に終わっているだろうが？ やつは立ち向かうべきものをよりはつきり見ておこうとしたのだろう。アーサーがそこにいなければ、蛇の奴はもつと時間を掛けて見回ったはずだ」

ムーディはそこで一度言葉を切った。

「それで、ポッターは一部始終を見たと言っておるのだな？」

「ええ。……ねえ、ダンブルドアはハリーがこんなことを見るのをまるで待ち構えていたような様子なの」

モリーさんが小さな声で答えた。

「うむ。確かにあの坊主は何かおかしい。それこそそこにいる小娘のようにな」

「言われているわよ。トンクス」

「え？ 今の私？」

「どっちもだわい」

そのやり取りを聞いてアーサーは苦笑いを浮かべた。

ムーディがそんな空気を振り払うように首を振る。

「なんにしても、あの坊主は例のあの人の蛇の内側から事を見ておる。それが何を意味するか、ポッターは当然気づいておらぬ。しかし、もし例のあの人がポッターに取り憑いておるのなら今まで以上に注意が必要だ」

「取り憑いているって言うのは多分ないわ。四六時中ハリーを監視しているけど、へんな行動を取ることはないもの。どちらかというところ……繋がつている。こつちの方が近いんじゃない？」

私がそう言うと、ムーデイが小さく唸った。

「……確かに、覗かかれていたんじゃない。今回は覗いていたんだ。例のあの人は開心術の使い手だ。あんな小僧に心を覗かせるほどやわじやないだろう」

私は頭の中で考える。

少しおかしい。

ハリーはヴォルデモートではなく、使いの蛇の中に入ったという話だ。

なぜその蛇の中に入れた？

その蛇とは繋がりが無い筈なのに。

そもそも繋がりとはいわんか？

クリスマスに紅魔館に帰った時にパチュリー様にも相談してみよう。

「まあ慎重に事を運んだ方がいいのは確かね。私は一度館に戻るわ。普段通りに帰らないとお嬢様に心配されてしまうもの」

私の言葉にムーデイとアーサーが頷く。

「お大事に、アーサー。また見舞いにくるわ」

私はそう言い残すと時間を止め、ホグワーツ特急が今いるであろう付近に姿現しする。

無論何処を走っているか分からないので、上空にだが。

私はそのまま線路に沿って飛び、白煙を吐き出しながら固まっているホグワーツ特急に乗り込んだ。

通路を歩き、空いているコンパートメントを探すが、まあ見つかるはずはないか。

私はホグワーツ特急の一番後ろのドアを開け、外に出た。

そして時間停止を解除する。

「おおっと」

途端に列車は動き出し私は柵に押し付けられる。

だが、一度流れに乗ってしまえばこちらのものだ。

私はそのまま列車の外の柵に腰かけ、リドルの日記を取り出した。

『今からそちらに帰るわ。到着は今日の夕方かしら』

『わかった』

素っ気ない返事がすぐ返ってきて、そして消えていく。

研究の真つ最中なのだろうか。

私はリドルの日記を鞆の中へと仕舞い、今度は普通の本を取り出し読み始めた。

「咲夜！ おじさんは大丈夫なの!？」

9と4分の3番線で私の姿を見つけたのか、ハーマイオニーがこちらに走ってくる。どうやら朝一番にマクゴナガル先生から事情を聞いたようだ。

「命に別状はないわ。ハリーたちはクリスマスをブラック邸で過ごすみたいね。貴方はスキーだったかしら」

「そう……スキーに関しては悩んでいるわ」

ハーマイオニーは目を伏せぽつりと言う。

「悩んでいるようには見えないわね。貴方の中では既に決まっているんでしょう？」

私は適当な言葉でハーマイオニーをたきつける。

ハーマイオニーは私の言葉を聞いて目を見開いた。

「ええ……ええ！ そうね。迷ってなんかいないわ！」

「そう。じゃあまたそのうち」

ハーマイオニーは何かを決意したように表情を固めると。パタパタと何処かへ入っていった。

私は周囲を見回し美鈴さんを探す。

いや、よく見たら探すまでもなかった。

私は急に目線が1メートル以上も上がる。

首を振り後ろを見ると美鈴さんが私の脇の下に手を入れ上に持ち上げていた。

「あの、美鈴さん」

「なに？」

美鈴さんはそのまま私を肩車する。

そしてがっしりと足を掴んだ。

「それじゃあ降りられないのですが」

「降ろす気ないしね。いやあお帰り咲夜ちゃん。今年は連絡なかったから心配してたんだよ？ あ、ちよつと足太くなった？」

私は平手でペシペシと美鈴さんの頭を叩く。

だが美鈴さんには効いていないようだった。

カラカラと笑いながら駅のホームを歩いていく。

私は仕方がなしに時間を停止させ、せめて誰からも見られないようにした。

「照れ隠し？」

「いや、紅魔館で一番のアホを隠しているだけです。美鈴さんはもつと紅魔館の一員としての自覚をですな」

「わははははははは！ 聞こえんぞ聞こえんぞ!!」

私がつつくさ文句を言い始めると美鈴さんは凄い速度で駅を走り抜け、ロンドン市街を真つすぐ紅魔館のある方へと走った。

「聞こえんぞの時点で聞こえているという矛盾はどうするんです?」

「いやあ咲夜ちゃんも成長したよね。もう15だっけ?」

「話を誤魔化さない!」

私はもう一度美鈴さんの頭を叩いた。

そして足でがっちり和美鈴さんの頭をロックすると、そのまま空を飛び始める。

「あ、それちよつと苦しい。苦しい」

首を吊る形になった美鈴さんはニヤニヤと笑いながら私のふくらはぎを叩いた。

なんというか、まったく苦しそうな気持ちはないのせいでないだろう。

「あ、でも咲夜ちゃんの太もも柔らかい」

私は咄嗟に足をほだき美鈴さんを落とした。

「おっと」

美鈴さんは少し落下したがそのまま空中で反転してこちらへと戻ってくる。

いつも思うことだが、美鈴さんの動きは無駄が少ない。

自分が受けた力を上手く利用しているような気がする。

「おっさんみたいなこと言わないでください」

私はたしなめるように美鈴さんを睨む。

「押し付けてきたのは咲夜ちゃんではありませんか。まあいいや。取り敢えず紅魔館

へ戻ろう」

美鈴さんはカラカラと笑うと紅魔館の方向へと飛び始めた。

私もその後を追ってロンドンの上空を飛ぶ。

「館の方はどう？ 何か変わったことはありませんでしたか？」

「んー、そだね。パチュリーとリドルは相変わらず忙しそう。クイレルは帰ってくる頻度が多くなつたわ。任務であちこち飛び回ることが増えたみたい。おぜうさまは相変わらずかな？ いつも通り事務仕事をしたり講演会をしに外に出たり妹様と話したり」

美鈴さんは軽く顎に手を当てる。

「何か始めるつもりなんだろうけど、そんな風には見えないのよねえ、これが。でも近いうちに騎士団と死喰い人がぶつかるといわれるらしいわ」

そしてそんな重要な情報をさらりと云った。

「ふむ。ということとは準備が必要ということね。また詳しい話をお嬢様から聞いてみます」

そう長い時間も経たずに私たちは紅魔館の門の前へと降り立った。

私は懐中時計を確認する。

時間からして、あと数時間でお嬢様は目覚めるだろう。

それまでに夕食の準備をしなければ。

私はそこで時間停止を解除すると美鈴さんと別れる。

そして紅魔館の中へと入り自室へと向かった。

「ん〜……ただいま」

私は鞆を床に置きベッドに飛び込む。

やはり自分のベッドは良い。

なんというか、安心感が違うというのだろうか。

ホグワーツのベッドはどうしても借り物という感覚が拭えないのだ。

だがいつまでもそうしているわけにはいかない。

私はベッドから起き上がりいつものメイド服に着替えると厨房へと向かう。

そして夕食の準備を始めた。

「お嬢様、夕食の用意が出来ました」

私はいつもの時間にお嬢様の部屋のドアをノックする。

「入っていいわよ」

すぐに返事が戻ってくる。

「失礼いたします」

私はドアを開けて中に入った。

部屋の中はいつも通りで、夏ここを離れたときと全く変わっていない。

お嬢様は既に椅子に座っており、私の方を見ていた。

「おかえり、咲夜」

「ただいま戻りました。お嬢様」

私にはっこりと微笑むとお嬢様の前に食事を並べていく。

お嬢様は料理に手を付けながら私に話しかけた。

「そうだ。騎士団の様子はどうか？」

「今現在は予言の防衛と魔法省への干渉、あとは重要人物の護衛でしょうか」

「ふうん。予言ね」

お嬢様はフォークをクルリと回す。

「トレローニーごときの予言を有り難がるなんて、ダンブルドアもヴォルデモートも地に落ちたものね。咲夜も知っているように、今騎士団が防衛している予言はトレローニーが16年前にしたものよ。しかも無意識で」

「いえ、知りませんでした」

「ん？ 貴方は私の話を聞かなかったのかしら？」

「いえ、知ってました。今知りました」

私は急いで言葉を付け加えた。

「そう、じゃあ話を戻すわよ。要するにあの予言にはあまり力がないということよ」
「お嬢様は何故そこまで詳しく事情を？」

私が質問するとお嬢様は不思議そうに私の顔を見る。

「占いの権威が神秘部の予言保管庫に入れないわけないでしょう？」

……え？　そういうものなのだろうか。

「まあ、あそこは面白いところよ。愛だの死後の世界だの色々と研究しているわ。確か時間の研究もしていたはずよ」

時間の研究、私は一瞬その言葉に心惹かれた。

だがこれ以上自分の術に変な影響を与えないほうが良いだろうと思ひ直す。

「お詳しいのですね」

「まあね。神秘部の予言保管庫の棚の半分を埋めたのは私だし」

……流石に冗談だろう。

お嬢様はフォークでサラダを刺し、食べ始める。

「なんにしてもよ、魔法使いという人種がそこまで予言を重視するんだとしたら、多分再来年の夏にはすべて終わるわ。……サラダ美味しい」

「恐れ入ります。ですが何故終わると？」

「随分と質問が多くなったじゃない？ 騎士団に入れた影響かしら」

私はハツと口を噤む。

お嬢様はその様子を見てケラケラと笑った。

「傀儡は要らないわ。……そうね。これは教えておいてもいいかしら」

お嬢様は一度フオークを置き私へと向き直る。

そしてニヤリと口元を歪めた。

「だってアルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドアに1997年6月に死ぬと予言を出したのは私だもの。その時のあいつの顔と来たら……あははははははは！」

ゲラゲラとお嬢様は笑い始める。

その姿は余りにも悍ましく、そして何よりも美しかった。

「というわけでダンブルドアは自分が生きている間に無理にでもヴォルデモートを殺したいというわけ。まあ、私の計画が上手くいけば嫌でも叶うことになるわけだけど。

……咲夜？ さーくーやー？ 聞いているの？」

「……はい、聞いております。そう言えばお嬢様、少しお耳に入れていただきたい情報が」

「何かしら」

私はいきなり伝えられた決戦の日の情報に一瞬思考停止してしまう。

だが咄嗟に我に返りお嬢様に神祕部でアーサーが襲われたということ話を話した。

お嬢様は夕食の続きを取りながらその話を聞いている。

「ふうん」

そして私が話し終わると同時に軽く相槌を打った。

「なるほどね。その情報はパチュリーにも伝えなさい。ヴォルデモートを殺すうえで重要な要素になり得るわ」

「やはりハリーとヴォルデモートとの間には確かな繋がりがあるということでしょうか？」

「そんな不確かなものじゃないわ。私の予想ではもっと大きく強いもの……そう、魂とかね」

お嬢様はフォークを置き、ナプキンで口を拭いた。

私はそれを見て皿を片付けていく。

そして一杯の紅茶をお嬢様へとお出した。

「魂……殺すうえで重要な要素……分霊箱？」

「確証はないわ。でももしそうならハリー・ポッターもダンブルドアと一緒に死んでもらうことになるわね」

「いざとなったら私がこの手で殺しますわ」

お嬢様はそれを聞いて少し表情を緩めた。

『一方が他方の手にかかって死なねばならぬ。』トレローニーの予言の一部よ。ようはヴォルデモートとハリー、どちらかがどちらかを殺さないといけないってことね。そのせいもあってダンブルドアは弱っているヴォルデモートを殺さなかったと考えられるわ。まあうかうかしている間にヴォルデモートは復活してしまったわけだけど」

お嬢様は一口紅茶を飲んだ。

「ダンブルドアがハリー・ポッターを特別視しているのはそのためよ。アレはアレがヴォルデモートと戦う運命にあると思っ込んでいる。馬鹿よね。トレローニーなんかの予言を信用するなんて。ダンブルドアは占いや予言に関しての知識が低いと見えるわ。占いも予言もそうだけど、ああいう物は干渉を受けやすいの。少しでも周りを取り巻く状況が変わったり、もつと力の強い予見者が予言を上書きしてしまったりとかするとすぐに効力が無くなってしまふ」

お嬢様は手元で懐中時計のゼンマイを巻くような動作をした。

「多分逆転時計の影響ね。あれは未来を確定的なものとしてそこに至る過程を変える。使用者が一度経験してしまった事を変更することはできないのよ。そういう事例から見て、予言が絶対の物であると思っ込んでいる。おかしいわよね。でも重要なことなの

よ。この場合」

お嬢様は紅茶を飲み干しソーサーに被せる。

そして指で弾きカップをコマのように回転させた。

「予言が本当であるという思い込みが強ければ強いほど予言と言うのは的中する。本人自身が予言と同じ行動を無意識に取ってしまうから。ようは墓穴を掘る感じ？ 実際

ヴォルデモートも予言を信じたばつかりに死にかけてるし」

カップは次第に回転力を失い、上手いこと表を向いてソーサーの上で静止する。

お嬢様はティーカップを持ち上げてその模様を観察した。

そして軽く頷く。

「図書館へ向かいなさい。貴方にとっていいことがあるわ」

私はお嬢様が飲み終わったティーカップを片付ける。

「では、失礼いたします」

そして部屋を出てお嬢様の指示通りに図書館へと向かった。

図書館に入った瞬間黒い影が私の方へと走ってくる。

リドルだ。

私は一瞬何事かと思ったが、リドルの顔を見て事情を察した。

リドルはそのまま私へと抱き着くと子供のようにピョンピョンとジャンプする。

そして私の肩を掴んで無理やり私を引き剥がすと満面の笑みで報告してきた。

「見つかった！ 見つかったぞ！ これで僕は生きたまま僕を殺すことができる。僕を殺しても僕は死なないんだ！ これで僕は気兼ねなく僕を殺す計画に従事できるというもの、ああ、本当に僕が助かる方法が見つかってよかった」

「本当に!?!」

私もリドルと一緒になってピヨンピヨンと飛び跳ねた。

そしてもう一度、今度は私からリドルにハグをした。

「でも貴方Aと貴方Bがごっちゃになってるわよ。少し冷静になりなさい」

私はリドルを引き剥がし一息つく。

リドルも冷静さを取り戻したのか、苦笑いを浮かべていた。

「それで、どうすることにしたの?」

私は冷静にリドルに聞いた。

「研究の末に僕の本体は本に記録されている記憶ではなく分霊箱としての魂のほうだということが分かったんだ。この場合分霊箱としての魂を日記から引き剥がすと僕は死ぬことになる」

私はリドルと話しながら図書館中央にあるテーブルへと歩いていく。

「それだとつまりヴォルデモートを殺すには貴方を殺さないといけないことになるわよ

ね」

「ああ、そうだとも。それが分かつてから僕は必死だった。僕自身できれば死にたくはないからね。そして今さつき、その方法を見つけたんだ」

リドルは椅子に座ると1冊の本を机の上に置いてページを捲った。

そしてあるページで手を止め、私に指し示す。

『悪魔への転生とその工程　く魂の変化のさせ方から悪魔としての心得まで』　つまりは魂を全く別の物に変化させてしまえばいい。この魂そのものを人間の物ではない違うものに変化させてしまえばいいんだ」

「……悪魔に生まれ変わるといふこと？」

「本質的にはそうね」

少し離れた席で本を読んでいたパチユリー様が本の上から少し顔を出して答えた。

「本来なら闇に落ちるだけの深い業を背負っている必要があるのだけれど、まあそこはなんとでもなるわ」

そしてまたすぐ本の影へと姿を消した。

「……まあ先生の言つた通りだ。僕はこれからその準備に取り掛かる。それが終わったから本格的に他の分霊箱の搜索を始めるよ」

私はその言葉を聞いて先ほどのお嬢様の言葉を思い出した。

「トム。それとパチュリー様も聞いてください。昨晚の事なのですが……」

私はお嬢様に言われた通りに昨晚あつた神秘部前の廊下での襲撃事件の事を話す。

お嬢様と同じようにパチュリー様とリドルはハリーとその蛇の繋がりに関する部分に食いついた。

「……そもそも予言があるというだけでヴォルデモートがハリー・ポッターと繋がるはずがない。つまりもつと直接的な——」

「違うわ、リドル。逆よ」

パチュリー様がリドルの言葉を遮った。

逆とはどういうことだろうか。

「これはレミイから聞いた話なのだけど……まずトレローニーがした予言の内容ね。簡単にまとめるとヴォルデモートを打ち破る力を持った者がヴォルデモートに3度抗つた者たちの間に7月に生まれる。ヴォルデモートはその者に自ら印を刻むだろう。だがその者はヴォルデモートも知らない力を持つ。そしてその者とヴォルデモート、どちらかがどちらかの手によって死ななければいけない。どちらかが生きている限り、もう1人は生きられない」

パチュリー様はそこで一度言葉を切る。

そして手を振るい私の鞆からリドルの日記を取り出した。

「さて、この予言を『こうなるもの』という曖昧なものではなく、もつと理屈付けて考えたらどうなるかしら。分霊箱、殺人、そして繋がり。リドル、貴方ならわかるでしょう？ ホークラックス、分霊箱に関しては一通り勉強したわよね」

「分霊箱を作るには殺人を犯さないといけない。ということは――」

「ええ、ハリー・ポッターはヴォルデモートが意図せずに作った分霊箱の可能性があるわね。いや、その蛇との繋がりなどを考えたら、分霊箱だと断言してしまってもいいかもしれないわ。そしてその蛇も分霊箱でしょう」

パチュリー様はそう言い切った。

「これで分かっている分霊箱は3つ。日記に、ハリーに、蛇。リドル、率直に聞いわ。貴方ももし分霊箱を作るとしたらいくつ作る？」

「7だ。魔法界では7が一番強い数字だとされている」

「じゃあ分霊箱はヴォルデモート本体を除いて6つ。意図せず作ったハリーを含めて7つね。で、分霊箱にするとしたら？」

「由緒あるものにするだろう。その辺の鉄屑を分霊箱にするのが一番安全だとわかってはいるが、そのようなものに自分の魂を入れようとは思わない」

分霊箱を作った本人がいると何とも話が早い。

その後もパチュリー様とリドルは考察を繰り返し、ヴォルデモートの殺人歴を考慮に

入れつつ分霊箱候補を絞っていった。

「まとめるわよ。確定的なのは日記とハリーと蛇。可能性が高いのはマールヴオロ・ゴーンの指輪とスリザリンのロケット、ハッフルパフのカップにレイブンクローの髪飾り、グリフィンドールの剣ね」

「一番可能性が低いのはグリフィンドールの剣でしょうか。あれの所在だけははつきりしていますし……」

「マールヴオロ・ゴーンの指輪は分霊箱の可能性が高い。マールヴオロ・ゴントは僕の祖父だ」

「なら殆ど絞れたわね。可能性としてはグリフィンドールの剣が分霊箱である可能性は限りなく低いわ。ダンブルドアが所持している時点だね。もし分霊箱であった場合、とつくの昔に壊されているでしょうし」

なら、取り敢えず分霊箱7つの候補が出たことになる。

「まあ集めて調べてみればいいわ。取り敢えず地面にでも叩きつけなさい。壊れたらそれは分霊箱ではないし、傷すらつかなかったら分霊箱よ。……リドル、取り敢えず貴方を何とかしちやいましょう。ダンブルドアより先に分霊箱を全て手に入れることなんて造作もないことだけど、念には念を入れた方がいいわ」

パチュリー様はそういうと黒板に凄い勢いで何かを書き記し始めた。

リドルはその光景を目を輝かせて見ている。

だが、私にはそこに書いてある内容はさっぱりだった。

「咲夜、レミイに伝えておきなさい。今年のクリスマスは中止にするわ。それと7歳の処女をいくつか持つてきなさい。ホムンクルスで代用してもいいんだけど、なんせ成長に時間が掛かるわ」

「どの程度必要でしょうか？」

「そうね。……3つよ。残りの魔法具やそういった物は全部こちらで用意するわ。貴方はソレだけお願いね」

「かしこまりました」

クリスマスは中止、その言葉を聞いて私は何とも言えない気分になる。

お嬢様は残念がるだろうが分霊箱の収集を優先するだろう。

私としてもクリスマスパーティーに向けて色々と準備をしなくともよいというのは気が楽なものだ。

「ほう、戻ったのか」

突然暖炉が激しく燃え上がり、中からクイレルが顔を出した。

何ともタイミングの良い男である。

私はクイレルに先ほどしていた分霊箱の話をした。

「ナギニ……そうか、ではあの時に」

クイレルは話を聞くとぼつりとそう呟いた。

「何か心当たりが？」

リドルが聞くとクイレルは無言で頷く。

「ヴォルデモートは去年の夏にバーサ・ジューキンズを殺してナギニを分霊箱にしている」

その言葉を聞いてリドルが確信したように言った。

「よし、全て繋がった。分霊箱は日記、指輪、ロケット、カップ、髪飾り、ポッター、ナギニの順番で作られた。僕は本来ならば Hogwatts の創始者全ての所縁の品で分霊箱を作りたかったがグリフィンドールの剣だけは守りが固くて中々手に入れられなかったに違いない。もたもたとしていた間に予言の事を知りハリー・ポッターを殺しに行くが、あえなく失敗。その後力を失くした為に剣を手に入れることを諦めナギニで妥協したんだろう」

リドルは自分が助かる方法が見つかり、更にはそれにパチュリー様も全面協力してくれるということもあって物凄く上機嫌だった。

私だつたら自分を殺すという話をここまで喜々として話すことはできないだろう。

取り敢えず先が見えたと、私たちは4人で頷き合う。

「私は魔法具を集めるわ」

「僕は術式を構成しよう」

「私は他の分霊箱の所在地を調べて参ります」

「適当にその辺にいる処女を3つ持ってきますね」

それぞれが行うことを確認し合い、私たちは別々の方向へと分かれる。

私は取りあえず街に向かうことにした。

クリスマス・イブの夜。

図書館にある本棚や机は全て隅に押しやられ、中央に大きなスペースができている。

その中心には半径2メートルほどの大きな魔法陣が描かれ、様々な模様や文字が刻まれている。

そしてその中心の魔法陣を囲うように正三角形の配置に小さな魔法陣が描かれており、その上には怯えて動くこともままならない7歳の処女3つが置かれていた。

私は懐中時計を取り出し時間を確認する。

現在の時刻は1995年12月24日午後11時59分。

私は最終確認をするために一度周囲を見渡した。

魔法陣の中心にはリドル。

その前にはパチュリー様が立っている。

そして儀式に影響を与えないように少し離れた位置にお嬢様と美鈴さんとクイレルがいる。

「10秒前よ。ミリ秒単位でキツチリお願いね」

パチュリー様が私に合図を出した。

私は懐中時計を取り出し時間を確認する。

そして徐々に時間を遅くしていき、指定された時間ぴったりに止めた。

1995年12月25日0時00分00秒。

……取り敢えず第1段階は終了だ。

私はそのまま部屋にいる全員に触れ、時間停止を解除させる。

「これで時間の固定は無事完了。リドル」

「はい」

リドルはふらりと杖を上げる。

その動きに合わせて処女3つも浮かび上がった。

「鳴け。クルーシオ！」

「きゃあああああああああああああああつっ!!!」

リドルの磔の呪文の効果で処女が合唱を始める。

その声は不協和音となり、図書館中に響き渡った。

「裂ける」

次の瞬間処女の胴体から四肢と頭が離れ、6つの物体に分かれる。

頭、胴、右腕、左腕、右脚、左脚は正六角形の頂点となるような配置で小さな魔法陣の上に落ちた。

666、処女たちの体で魔法陣上にそれが刻まれた。

「自然界をつかさどる素数、魔法界で一番強いとされる数字は7。7つの素数は下から2、3、5、7、11、13、17。それら全てを2乗し足し合わせると666。それらが全て7歳の処女の体にて刻まれた」

パチュリー様が歌うように唱えていく。

もつと小難しい言葉を使う物かと思ったが、意味が同じなら別に何でもいいらしい。

「さあ考えなさい。獣の数字を解きなさい。その数字とは人間を指すものである。そして、その数字は666である」

次の瞬間分かれた肉体から血が溢れ出し、リドルの体を覆っていく。

その血液はまだ新しい為か、真紅の色を失っていない。

「ここに生まれし悪魔が1人。分かれた魂とは別の記録を刻む。その者の罪により魂を

変化させるべし」

ビシヤツとリドルの体が消え去り、浮いていた血液は魔法陣の上に落ち血だまりを作った。

一瞬失敗したかと思つたが、パチュリー様やお嬢様の表情を見る限りこれでいいらしい。

「堕ちた人間の行く末は、果たして天国か地獄か。否、現世に縛られ、形をなす」魔法陣の上に落ちた血は形を成していく。

そして私よりも少し背の高い人型を形成した。

「ここに悪魔が生まれた」

パチュリー様がそう締めくくつた瞬間、人型だった血が地面に落ちた。

いや、表面に纏つていた血だけが落ちただけで人型自体は魔法陣の上に立っている。

私は時間停止を解除し、その人型を観察する。

透き通るような白い肌、腰まで届く真紅の髪、紅い瞳。

そして悪魔である象徴かのように、背中と頭に蝙蝠のような羽が生えていた。

「気分はどうかしら」

パチュリー様は魔法陣の中心にいる者に話しかける。

お嬢様も不敵な笑みを浮かべてその様子を見ていたが、私は言葉が出なかった。

腕や足は男の物とは思えないほど細く、しなやかだ。

そして、何故か胸がある。

いや、違う。

リドルが女の子になっちゃった。

「そうですね。やはりちゃんとした肉体があるというのはいい。そして、非力でもないです」

リドルは確かめるように手を握ったり開いたりしている。

そして手を一振りし白いシャツに黒いジャケット、赤いネクタイ、そして膝下まであるスカートを魔法で身につけた。

「そして作りが違う為か杖無しで魔法を行使できる。これはいいですね。煩わしさが少ない」

「悪魔というのは全身に強い魔力を持っているからね。魔族とはそういうものよ」

パチュリー様もお嬢様も、それが普通の事だと言わんばかりにリドルに向かって歩いていく。

こういうものなのだろうか。

中々動き出すことができない私の表情を見て察したのか、パチュリー様が説明をしてくれた。

「女の子を生贄にして作ったんだから女になるに決まってるでしょう？ リドル本人、男の肉体があればもう少し違う結果になったかもしれないけど、リドルは記憶だけの存在だし」

「そうですね、咲夜。それに容姿が変わった方が動きやすいですし」

声は透き通るような儚さを持っているが、力強い。

そして喋り方も中性的になっていた。

取り敢えず儀式は成功したようだ。

パチュリー様が手を振るうと処女の死骸、搾りカスと魔法陣が消え去り、机と棚が元の位置に戻る。

そして何事もなかったかのようにリドルは椅子へと座り白紙の本に結果を書き込んだ。

「儀式は成功。健康状態、最悪。悪魔だから。っと」

そのジョークにお嬢様がケラケラと笑う。

私としては笑えるような心境じゃなかった。

「ふむ、興味深いな」

クイレルも数秒固まっていたようだが、すぐに平静を取り戻した。

「ヴォルデモートが復活した時、見るも無残な姿になったことを考えれば、大成功と言え

るかもしれない」

もしかして大きなシヨックを受けているのは私だけなのだろうか。だつたら、もうそういうものとして割り切るしかない。

私は鞆からティーセットを取り出すと、人数分紅茶を用意し机に並べた。

「さて！ 命名式よ！」

お嬢様は紅茶を一口飲むと机をバンと叩いた。

次の瞬間空中に黒板が浮かび上がる。

「いえーい！ 咲夜ちゃん以来じゃない？」

美鈴さんが楽しそうにそう叫んだ。

その様子にリドルは少し困惑したような表情を見せる。

「いや、私には既にトム・リドルという名前が……」

「名前は大事よ。折角元の存在と別れを告げたのだからね」

リドルの文句はお嬢様に一蹴されてしまった。

「はい！」

美鈴さんがハーマイオニーのように天高く手を上げ叫んだ。

「キングサタンバージョン18！」

「絶対嫌です」

「魔王」

「ダメです」

「マイファーザー！ マイファーザー！」

「それはゲーテの魔王って、美鈴真面目に考える気無いですよね？」

リドルがびしやりと言うと、美鈴さんはつまらなさそうに机に突っ伏した。

「そうね、悪魔でリドルだからリトルデビルでどうかしら」

お嬢様がそう提案したが、リドルはまだ少し不安そうだった。

「露骨に私の元の名前が入っていないほうが良いのでは？」

私はその瞬間ピンとくる。

「じゃあ小悪魔ね」

「もう既に人の名前じゃないだろう？」

リドルはそう言うが、途端に気がついたように顔を上げた。

「貴方もう人間じゃないでしょうに」

リドルが気がついたことであろうことをパチュリー様が冷静に突っ込む。

「じゃあ決まりね。咲夜の命名にちなんで表記は漢字にしましょうか。丁度美鈴と同じ赤毛だし」

お嬢様がバンと黒板を叩くと漢字で大きく『小悪魔』と浮かび上がった。

リドル、いや小悪魔は取り敢えず納得したかのように頷く。

「さて、それじゃあ指示を出すからよく聞きなさい」

その様子を見てお嬢様は手早く黒板を消し、クイレルを指さした。

「クイレル、引き続き死喰い人としてヴォルデモートに接近し、情報を探りなさい」

次に私を指さす。

「咲夜、不死鳥の騎士団としてダンブルドアの信用を勝ち取りなさい」

最後に小悪魔を指さした。

「小悪魔、分霊箱を収集しなさい。日記は既に分霊箱としての機能を失っているから残るは6つよ。以上解散！」

「おぜうさま？ 私は？」

何も指示が与えられなかった美鈴さんがお嬢様にぼつりと聞いた。

「いや、お前に仕事任せるわけないじゃん」

「ひでえ」

まあ冗談半分だろう。

お嬢様が真に信頼しているのは美鈴さんのように感じる時がある。

美鈴さんにそういった仕事を任せないのとはできるだけ自分の手元に置いておきたいからだと思う。

「さて……。以上解散。じゃあ私はこれで」

お嬢様はいち早く話を切り上げると図書館から出ていった。

私は皆が飲んだあとのティーカップを片付けながら周囲の様子を観察する。

美鈴さんは小悪魔を抱きかかえクルクルと回っていた。

「うひょー！ 可愛いのが増えた！」

「ちよ、やめてください美鈴！」

小悪魔は必死に抵抗しているが、美鈴さんは小悪魔の攻撃を全て受け流している。

やがて諦めたのか小悪魔がぐったりと力を抜いた。

こうやって見ると小悪魔は羽の生えた美鈴さんのようにも見える。

「美鈴さん、小悪魔死んじやいますって……。あ、もう死んでるのか？」

「悪魔って生死の概念あるのかね？ その辺どう思うよこあちゃん」

こあちゃん。

なんとも可愛らしい響きだ。

「こあちゃんはやめてください……。魂を変化させて作った命なので案外死ねるかもし

れませんね。さあ、美鈴降ろしてください。それでも私はやるのが山のよう——わっ

！ だから回さ——」

「あははははははは——」

私はその様子に肩を竦める。

クイレルも私と同意見のようだった。

「なんとというか、緊張感の欠片もないな。ここは」

「死喰い人の陣営はどんな雰囲気なの？」

「そうだな。基本失敗したら死ぬ世界だ」

クイレルはそう言うと、ローブから本を取り出し読み始める。

私はそういえばクイレルに伝える情報があるのだったと思い立ち、机を挟んで向かい側に腰かけた。

「そういえば、魔法省は貴方が死喰い人であるということを確認していないわ」

「……なるほど。魔法省としてはヴォルデモートの存在は死んだものとしたいわけだ。だから4年前私がヴォルデモートに寄生されていたら都合が悪いというわけだな」

「ええ。そしてこの情報は魔法省大臣の上級次官から仕入れたものだから、信憑性の高いものよ」

「確かアンブリッジと言ったか」

クイレルはわずかに微笑んだ。

「確かに使える情報だ。ありがとう。となると準備が必要だな」

クイレルは言うが早いか立ち上がり、暖炉の中へと姿を消した。

何かの準備を始めるようだが、何にしても面白いことになりそうである。

私はようやく美鈴さんから解放された小悪魔に近づいた。

「これでようやく自由に外に出れるというわけね」

声を掛けると小悪魔は呼吸を整え、私に向かい合う。

こうして改めて向き合っても、やはり別人だ。

「とはいっても、マグルの街を歩くときは多少の変装が必要ですけどね。……目くらま

しの呪文で大丈夫かな？」

私は小悪魔の顔や手に触れる。

そこには確かに体温を感じられた。

「……やっぱり感覚があるというのは良いものです」

小悪魔はしみじみと言う。

そして頭に生えた羽を隠すようにシルクハットをかぶった。

「うん、まあ羽ぐらいならあまり目立たないでしょう。ハロウィーンの子供なら案外このまま街を歩いても大丈夫かもしれません」

「あら、警察に捕まるわよ？」

「そんなに悪人面だと？」

「自覚があったのね」

「悪魔ですのぞ」

あ、リドルだ。

やはり会話をしてみるとその本質は全く変化していないと気づかされる。

「さつきはさらりと流してしまつたけど、これでリドルの日記は分霊箱としての力を失つたのよね。日記帳としての力はどうなの？」

私が小悪魔にそう質問すると、小悪魔は日記帳を手元に呼び寄せた。

「今は完全にただの白紙の本。この本に入つていた魂と記憶は形を変え私の体となつたので、媒介だつた本は元に戻つたというわけですよ」

私は日記帳を受け取り、万年筆で文字を書く。

その文字が消えることはなかつた。

それを見て、ようやく私はリドルが悪魔になつたのだという実感が沸いてくる。

小悪魔はその様子を見ておかしなものでも見たかのようにケタケタと笑つた。

「この本、私が貰つていいかしら。記念というか……自由帳として」

「いいですよ。装飾に賢者の石が使われている何とも豪華な自由帳ですが」

小悪魔の了承を得てから私は自由帳を鞆へと仕舞い込んだ。

……宝物にしよう。

なんというか、友達からの貰い物は捨てられない。

「それでは、私はこの辺で。分霊箱の位置をさっさと特定しないとイケないのでね」
小悪魔はそう言い残して本棚の陰へと消えていく。

なんだが、普段のクリスマスマスよりも疲れたような気がする。

私は案外自分を取り巻く環境が変化することに弱いかもしれない。

時間を止め大きく伸びをすると、私は館の掃除に取り掛かった。

お見舞いとか、クラブとか、ピーターとか

クリスマス当日。

私は懐中時計で現在の時刻を確認した。

午後の1時を少し過ぎた時間だ。

私は今、お嬢様と小悪魔と共に聖マンガ病院に來ている。

お嬢様は初めて來た為か受付を見回していた。

「小悪魔は來たことがあるんだったかしら」

私が声を掛けると隣にいる小悪魔が苦笑する。

「実はあまりないです。病院にくるよりも病院送りにした回数の方が多いで」

確かにそれは苦笑いをせざるを得ない。

私はお嬢様を連れて案内係と書かれたデスクに寄っていく。

そこにはブロンドのふつくらした魔女が座っていた。

「お見舞いにきたのですが」

私は受付の魔女に話しかける。

魔女は私を見た後に両隣にいるお嬢様と小悪魔を見た。

「……ああ、はい。お見舞いね。どなたのお見舞いかしら」

魔女は一瞬固まったがすぐさま話し始める。

「ギルデロイ・ロックハートです」

「まあギルデイのお見舞い？ 5階の呪文性損傷の長期療養病棟よ」

そう、私たちはロックハートのお見舞いにきたのだ。

何故アーサーではなくロックハートなのか。

理由をあげるとすれば、お嬢様がロックハートの著書に嵌ってしまったからである。

お嬢様曰く、『バンパイアとバッチリ船旅』など最高にクールらしい。

勿論、お嬢様自身ロックハートが本に書いてあることを実際にやったとは思っていない。

ただ単に創作物として、気に入っているのだ。

私たちは階段を上がり5階を目指す。

「なんとというか、病院らしくないわね。患者が愉快すぎるわ」

階段を上りながらお嬢様はぼつりと言った。

「愉快って、見た目がですか？」

「受付前にいた頭から手を生やしている少女なんて、傑作じゃない？ 手も途中で分かれて全部で5本になってるし」

小悪魔が聞き返すとお嬢様は手を頭の後ろに回し、真似をした。

「私は頭が鳥になつてゐる女性の風体が結構好きですが。あの目が紫色の」
「キモイ」

小悪魔の意見をお嬢様が冷ややかに否定した。
にしてもキモイって……。

「あ、ここです。お嬢様。長期療養病棟は……。あちらだと思ひます」

私は階段を5階まで上ると廊下を見回す。

そしてそれっぽいドアを見つけ、近づいた。

「ヤヌス・シツキー病棟……ここでしょうか？」

ヤヌス・シツキー、どこかで見た名前だ。

私が少し首を捻っていると小悪魔が教えてくれた。

「ヤヌス・シツキーは1973年にレシフオールドに殺されたかのような走り書きを残し失踪した魔法使いです。それよりも、今はこの中にロックハートがいるかどうか問題かと」

「いなかつたら他を当たればいいだけでしょう？」

お嬢様はドアノブに手を掛け、軽く捻る。

だが、ガチャガチャと音がするだけで開かない。

「鍵がかかっていますね」

「そんなことないわ」

ガコツと鈍い音がしてドアノブが回る。

そして静かにドアが開いた。

「咲夜、後で直しておきなさい」

「かしこまりました」

お嬢様は鍵の振り切れたドアを開け、中に入っていく。

その様子を見て小悪魔が肩を竦めていた。

「言ってくれたら開けたのに……」

「ああいう方だつて知ってるでしょ？ ほら、直しておくから先に入つてて」

私は杖を取り出しドアノブに修復魔法を掛ける。

すると一瞬でドアノブは新品同様になった。

「咲夜、何をもたもたしているのよ。いたわよ！」

「ただいま参ります」

私は改めてドアを開け病室へと入る。

ロックハートのベッドはすぐに見つかった。

壁の一角がロックハートの写真だらけになっている。

そしてその下のベッドにロックハートが楽しそうに鼻歌を歌いながら腰かけていた。

「こんにちは、ロックハート」

「やあ、こんにちは！ お嬢様が3人も。私のサインが欲しいんでしよう？」

お嬢様が話しかけるとロックハートはにこやかに笑いながら白い歯を見せる。

少しは状態が良くなっているものかと思つたが、秘密の部屋で見たときと大差なかつた。

いや、案外普段の授業中とも大差ないかもしれないが。

小悪魔は手早く丸椅子を3つ用意する。

お嬢様は当たり前のようにそれに腰かけた。

「貴方の著書を読んだわ。なんとというか、ファンタスティックね」

「そうでしよう、そうでしよう……私が本を書いたつて？ 何かの間違いでは？」

ああ、そうだサイン、とロックハートは自分のベッドの横に置いてある机の上に山積みされた自分の写真にサインを始める。

その字は子供っぽいバラバラな字だったが、ちゃんと筆記体になっていた。

「私はもう続け字を書けるようになったんですよ！ さあ何枚書きましようか？ 今で

も私にはファンレターが沢山届きましたねえ、なんでか分からないけど。多分私がハンサムだからですね！」

「いや、違うわ。それもあるけど、貴方の書いた本が面白いからよ」

「いやあ写真が足りるといいけど……」

お嬢様とロックハートは会話をしているようなのだが、噛み合ってはいない。

その様子を面白そうに小悪魔が見ていた。

「運が悪ければ貴方もロックハートの武勇伝の一部になっていたわけだけど……そのところどう思う？」

「ありえないです」

小悪魔はにこやかに笑いながら冷酷なことを言う。

いや、悪魔だからそれでいいのだろう。

私は話になんか夢中になっているお嬢様から視線を外し、病室内をぐるりと見回した。

ロックハートの反対側のベッドには土気色の肌をした顔の魔法使いが天井を見つめて横たわっている。

その二つ向こうのベッドには頭全体に動物の毛のようなものが生えた魔女がいた。

そして一番奥のベッドには痩せ細った男女が隣り合わせになって別々のベッドに横たわっている。

「フランク？ ……アリス？」

私はその魔法使いと魔女に見覚えがあった。

以前ムーディに見せてもらった騎士団員の写真に写っていた、フランク・ロングボトムとアリス・ロングボトム。

そう、ネビルの父親と母親だ。

ベラトリックス・レストレンジに拷問され廃人になったとは聞いていたが、まさかまだ生きていたとは思ってもみなかった。

「咲夜、知り合い？」

私の眩く声を聞いていたのか、お嬢様が一度ロックハートとの会話を切ってこちらに顔を向ける。

「はい、フランク・ロングボトムとアリス・ロングボトム。どちらも元騎士団員です」

「ああ、ロングボトム夫妻ですか。あれには苦渋を飲まされたようですね。ヴォルデモート卿は」

小悪魔はまるで他人事のように言った。

いや、実際に今では他人事なのだろう。

「騎士団員……ね。こんな状態になってまで生きている価値あるの？」

「ないでしょ」

お嬢様の問いに小悪魔が答える。

まあ、私としてもこんな状態になってしまったら殺してもらいたいが。

「アロホモロー。……ん？　元から開いてる？」

突然呪文を唱える声が聞こえたかと思うとドアを開け一人の癒者が入ってくる。

私は一瞬ドキリとしたが、お嬢様と小悪魔は平静そのものだった。

「あら、ギルデロイのお見舞い？　ああ、よかった。クリスマスだというのにこの子には一人もお見舞いにこないの。ゆっくりしていつて。ささ、ミセス・ロングボトムとお孫さん。こちらへ」

癒者は私たちがここにいることに対して別に怒ってはいないようだった。

……いや、私たちは受付でお見舞いに行くと言ったはずである。普通ならば鍵を開けておくものだと思うのだが。

私が病院の対応について考えていると、癒者に連れられてオーガスタ・ロングボトムとネビルが入ってきた。

オーガスタ・ロングボトムは度々ネビルの話に出てくるネビルの祖母だ。

少し前にムーディから聞いた話では、フランク・ロングボトムの母親らしい。

ネビルはロックハートの見舞いが誰なのか気になったのかこちらに視線を向け、私と目を合わせた。

そして石のように固まってしまふ。

その様子を見て、ネビルの祖母が話しかけてきた。

「ネビルのお友達かえ？」

「十六夜咲夜と申します」

「おお、良く知つとるとも。去年の対抗試合で優勝した方ですね。ネビルがよく貴方のことを食事の席で話すんですよ。ということはそちらのお嬢様方は——」

「レミリア・スカーレットよ」

「小悪魔です」

「コアクマさんはご存じないですが……そしたら貴方が咲夜さんの」

ネビルの祖母の言葉にお嬢様は胸を張つて答える。

「ええ。私がこの2人の主の吸血鬼よ！ 貴方たちはロングボトム夫妻のお見舞いかしら」

お嬢様の言葉にネビルは更に表情を固くした。

知られたくないことだったのだろうか。

「はい。ネビルがホグワーツから帰つてきたときには毎回お見舞いに来ていますよ」

「お嬢様」

「言つていいわよ」

私が確認を取るとお嬢様は快く了承してくれた。

「大丈夫、そう固くならないでネビル。貴方のご両親の事情は知つているわ。私も騎士

団員だもの」

「ええ!? そうなの?」

ネビルは目を丸くして驚く。

その様子が面白かったのか小悪魔はクスクス笑っていた。

「立派な闇祓いだったと聞いているわ」

「ええ、それはもう。2人とも一族の誇りです」

ネビルの祖母は誇らしげにそう答える。

私はちらりとロックハートのベッドを見るが、いつの間にかいなくなっていた。

「それにしてもその歳で騎士団員なんて……立派な従者をお持ちですね」

「当たり前よ。私の従者だもの。ロングボトム夫妻のお見舞いに来たのでしょ? 私

たちには構わず2人のもとへと行ってあげなさい」

ネビルと祖母は私たちに軽く頭を下げるとロングボトム夫妻のベッドへと歩いてい

きベッドを囲うようにカーテンを引いた。

お嬢様はロックハートのベッドへと視線を戻すが、既にロックハートの姿はない。

「あら。そのうち戻ってくるかしら」

「あの癒者、ドアのカギを閉め忘れたんですかね?」

2人ともさして驚いてはいないようだ。

私は机の上に置かれたロックハートの写真とファンレターを手に取る。
数年前まで熱狂的なファンが多数いたロックハートだが、ファンレターもそういった人たちからだろう。

「そう言えば、お嬢様はロックハートの著書のどのようところが気に入ったのですか？」

私は少し気になってお嬢様に質問をする。

お嬢様は考え込むように顎に手を当てるとポンと手を打った。

「今考えたらあんまり面白くもないわね」

……うん、なんとというか、流石お嬢様ですとしか言いようがない。

お嬢様は机の上のロックハートの写真を一枚手に取ると、そこに何かを書き込み始めた。
た。

「そう言えばホグワーツでロックハートはどのようなことを教えていたの？」

「闇の魔術に対する防衛術ですが、その殆どが自分の自慢と座学でした」

「ふうん、噂通りの無能だったわけね。……これでよし」

お嬢様はペンを置き、一度そこに書いた文章を読み返す。

次の瞬間ロックハートが癒者に連れられて病室へと戻ってきた。

その後ろにはハリー、ロン、ハーマイオニーのいつもの3人のほか、ジニーが続く。

ハリーは病室を見回し、私の顔を見た途端に固まった。

「もう、貴方もなの？ ハリー」

だがハリーはネビルより早くシヨックから立ち直ったらしく、驚いたような声を上げてこちらに声を掛けた。

「咲夜！ と、スカーレットさん。なんでここに居るの？」

その声にハリーの後ろに続いていた面々も私に気がつく。

「ロックハートのお見舞いにきたのだけれど……それは貴方たちもでしょ？」

私は癒者の様子とハリーたちの少し困惑したような様子からそう判断した。

これは私の予想だが、アーサーのお見舞いでここに来て、廊下を歩いているロックハートを発見し声を掛けたらその様子を癒者に見つかり見舞いだと勘違いされてここに連れてこられたのだろう。

私の問いに対しハリー含めて全員が癒者の顔色を窺いながら曖昧に頷いた。

ロックハートは癒者が用意した肘掛け椅子に座り新しく写真を取り出しサインを書き始める。

そしてサインし終わった写真を次々とジニーに渡していた。

「封筒に入れるといい。私はまだまだ忘れられていないんですよ？ いまでもファンレターがどっさり来る。私にはどうしてなのかわからないけど……多分私がハンサムだ

からでしょうね！」

ジニーは次々と溜まっていくサイン入りロックハートの写真に困った顔をする。ハリーたちは病室にいる人たちが珍しいのか病室内を見回していた。

……いや、ロンだけは小悪魔に視線が釘付けになっている。

小悪魔が軽く手を振るとロンは鼻の下を伸ばした。

途端にハーマイオニーに足を踏まれ、その表情を歪ませる。

「なにすんだよハーマイオニー。……咲夜、そちらの女性は何？」

ついに好奇心が恐れ多さに勝ったのか、ロンは私に小悪魔について聞いていた。

「ああ、彼女は私の使い魔よ」

私の代わりにお嬢様がそう答える。

使い魔と聞いてロンの表情が笑顔のまま固まった。

小悪魔は微笑みながら手を差し出し、4人と握手をする。

その時にハリーに触れていたが、ハリーが苦しむ様子はない。

どうやら完全に魂が変化しているらしい。

「初めまして。レミリア・スカーレットに仕えている悪魔です」

小悪魔はそう自己紹介したが、4人は小悪魔の背中についている翼のほうが気になるようだった。

ロックハートとハリーたち4人を連れてきた癒者は病室にいる患者にクリスマスプレゼントや手紙などを配っている。

ロックハートの向かいにいた魔法使いには鉢植えが届いたようだった。

そうしているうちに、ロングボトム夫妻のベッドを覆っていたカーテンが開きネビルと祖母が出てくる。

「あら、ミセス・ロングボトム。もうお帰りですか？」

癒者の言葉に4人は思わず振り返った。

ネビルとハリーの目が合う。

その瞬間咄嗟にハリーは3人の注意を逸らそうと努力したようだったが、その前に口ンがネビルの名前を叫んでいた。

「ネビル！ ネビル、僕たちだよ。ねえ、見た？ ロックハート先生がいるよ！ 君は誰

のお見舞いなんだい？」

ロンは立ち上がって明るく言う。

ネビルは先ほど私と目が合ったとき以上に縮こまっていた。

ネビルの祖母は順番にハリーたちに挨拶をしていく。

そしてその段階でロンが気がついたのか、大きな墓穴を掘った。

「えー!？」

ロンが分かりやすく仰天する。

「ネビル、奥にいるのは君の両親なの？」

その瞬間ハリーは頭を抱えた。

あの様子だと、どうもハリーは事情を知っているようだ。

「何たることですか？ ネビル、お前はお友達に両親のことを話していなかったのですか？」

ネビルの祖母が厳しい声でネビルに聞いた。

ネビルは苦しげに天井を見上げ、首を振る。

「いいですか、何も恥じることはありません。貴方は自分の両親を誇りに思うべきです。

あのように正常な体と心を失ったのは一人息子が親を恥に思うためではありませんよ。

お分かりか！」

「僕、思っていないよ……」

ネビルは確かにそう言ったが、その声は余りにも小さかった。

ハリーはここまで不憚なものを見たことがないと言わんばかりにネビルから目線を逸らしている。

ネビルもハリーたちから目線を逸らしていた。

「それにしておかしな態度ですね」

ネビルの祖母は誇らしげにハリーたちの方へと向き直る。

「私の息子と嫁は例のあの人の配下に正気を失うまで拷問されたのです」

私はちらりと小悪魔を見るが、小悪魔は知らんぷりだった。

自分は関係ないと言わんばかりである。

「2人とも非常に優秀な闇祓いだったのですよ。夫婦揃って才能豊かでした。私は——
おや、アリス。どうしたのかえ？」

ネビルの母親のアリスが寝間着のままフラフラとこちらに寄ってくる。

そしてネビルの方に何かを持った手を差し伸ばした。

「またかえ？ よしよしアリスや……ネビル、何でもいから受け取っておあげ」

祖母がそう言う前にネビルは既に母親へと手を差し出していた。

ネビルの母親はネビルの手の平に風船ガムの包み紙をポトリと落とす。

「ありがとママ」

ネビルは今にも泣きそうな顔をしてそれを受け取る。

その瞬間、お嬢様が私の服の裾を引っ張った。

私は反射的に時間を止め、お嬢様の時間停止だけを解除する。

お嬢様は無言でネビルに近づいていくと、包み紙を広げ小さな字で何かを書き込み始めた。

そして一通り書き終わると元通りに折り丸め、ネビルの手の平へと戻す。

そして元の位置へと戻った。

一体何を書いたのだろうか。

少し気になったが盗み見るわけにもいかないもので私はそのまま時間停止を解除した。ネビルの母親は鼻歌を歌いながら自分のベッドへと戻っていく。

「さて、もう失礼しましょう。皆さんにお会いできて本当によかった。ネビル、その包み紙はゴミ箱にお捨て。あの子がこれまでにくれた分で壁が一枚貼れるほどでしょう」

ネビルの祖母はそういうと、私たちに丁寧に辞儀をして病室を出ていく。

ネビルはそれに包み紙をこっそりポケットに滑り込ませるとその後を追って病室を出ていった。

「……知らなかったわ」

ハーマイオニーが目に涙を浮かべて言った。

ロンとジニーがそれに同意する。

「僕、知ってた」

ハリーだけが暗い声でそう答えた。

「ダンブルドアが話してくれた。でも、誰にも言わないって約束したんだ」

そのあとには長い沈黙が続く。

だがショックを受けているのは4人だけで、私たち3人はただ黙っているだけだった。

いや、お嬢様と小悪魔は4人の表情を見て楽しんでるようだったが。
沈黙を破ったのはお嬢様だった。

「咲夜、小悪魔、帰るわよ。ロックハート、機会があつたらまた会いましょう」

お嬢様は先ほど何かを書いていた写真をロックハートに手渡す。

そして真つすぐドアの方へと歩き出した。

私は4人に軽く手を振りお嬢様の後を追う。

小悪魔は丸椅子を消失させ、病室から出るとドアを閉めた。

「まあ、来た価値はあつたかしら。ついでにウィーズリーのお見舞いもしていく?」

お嬢様は楽しげに私に言う。

私は静かに首を横に振った。

「そう、じゃあ帰りましょうか。でもロックハートの向かいに寝ていた魔法使い。なん
でベッドの脇に悪魔の罫なんて飾つてたのかしら」

お嬢様はさらりとそんなことを言った。

癒者が持つてきた鉢植えは悪魔の罫だったのか。

まあ、私には関係のないことである。

私はお嬢様と小悪魔の手を掴んで紅魔館の大図書館へと姿現しする。

お嬢様は眠そうに目を擦りながら図書館を出ていった。

私も小悪魔と分かれ厨房へと向かう。

そして今日の夕食の準備を開始した。

休暇が終わり学校に戻るとすぐに授業が始まった。

とはいっても少し宿題が多いだけであまり変わったことは起こっていない。

強いて挙げるとすれば、アンブリッジ先生が何かと理由を付けて私のいる授業に居座ることだろうか。

休暇中も、新学期が始まってからもアンブリッジエクササイズは続けていた。

流石に紅魔館から10分置きにアンブリッジ先生を蹴りに行くのは面倒くさかったが、これも仕事のうちだ。

無論時間の都合上蹴れない時もあったが。

そしてこれはハリー自身から聞いたことなのだが、最近ハリーはスネイプ先生に閉心術を習っているらしい。

ダンブルドア先生からの指示らしく、スネイプ先生もハリーも嫌々行っている状態である。

でも確かに閉心術を使えばハリーが変な夢を見ることも、ハリーの中にヴォルデモートが侵入してくることもないだろう。

だが、ハリーの話を聞く限りでは上手くいっていないようである。

むしろヴォルデモートと繋がるが増えたという話を聞いたときには流石に呆れた。

だが私はそんなハリーに付き合っている暇などない。

不死鳥の騎士団の動きが活発化してきたためだ。

新学期始まって早々にアズカバンから死喰い人が10人も集団脱獄した。

もっともクイレルから事前に連絡は入っていたのでそこまで驚きはしなかったが、そのせいで仕事が増えたのは確かだ。

ホグワーツの外に出て何かをやるということは少ないが、ダンブルドア先生からもマクゴナガル先生からもハリーのそばを離れるなど厳命される。

普段生活していてハリーから離れることは少なかつたが、少し過保護すぎる気もした。

アンブリッジ先生のスパイかハリーの護衛かどちらかにして欲しい。

集団脱獄が影響を与えたのは騎士団だけではない。

DAも一層にやる気を増し、以前よりも活動が活発になってきている。

そしてDAのメンバーで誰よりも進歩を遂げたのはネビルだ。

まるで乾ききったスポンジが水を吸収するように私が教えた呪文を習得していく。

さらに言えば、何よりも私の時間を奪ったのはクイディッチの練習だろう。

私はアンジェリーナに頼まれたときにグリフィンドールのピーターをやると安請け合ひしてしまったが、何せ練習量が半端じゃないのだ。

もつとも、物を飛ばすのは得意中の得意なので技術的な面では全く問題はない。

ピッチの端からブラッジャーを撃ち込んで飛んでいる選手に当てれるほどだ。

だが、大雨の中でも構わず練習を始めるアンジェリーナの執念には脱帽した。

私は大丈夫だと練習を断ろうとしても「ピーターがいないと練習にならないでしょう！」とヒステリックに叫ばれてしまう。

どうにかならないかとハリーに相談してみたが、ハリーも横で話を聞いていたフレッド、ジョージも肩を竦めるだけだった。

今思い返せばウッドの時代からこうだったと思い返す。

私は新学期が始まって1か月、アンブリッジ先生を蹴り、ハリーを守り、DAの会合を開き、アンブリッジ先生と食事し、クイディッチの練習をし、授業を受け、アンブリッ

ジ先生を蹴つ飛ばし、D Aの会合を開いて、宿題を終わらせ、クイディッチの練習をした。

そんなこんなで2月の14日。

今日はホグズミード村へ行くことが許可されている日である。

いつもホグズミード村行があるのは土曜日だが、今日は聖バレンタインデーということで祝日なのだ。

多分ダンブルドア先生あたりがカップルに気を利かせて許可を出したのだろう。

私は朝起きて朝食を取りに大広間へと行くと、丁度ハリーとハーマイオニーが今日のホグズミード村行に関して話し合っていた。

ハーマイオニーは分かるがハリーがこんなに早起きなのは珍しい。

またヴォルデモートの夢でも見たのだろうか。

だとしたらあまりいい傾向とは言えないだろう。

私はトーストにバターを塗り、軽くバジルをちらし炙る。

それに齧りつきながらハリーとハーマイオニーの会話に耳を傾けた。

「ねえ。ハリー」

ハーマイオニーは手に持っている小さな羊皮紙を見ながらハリーに声を掛けた。

「とつても大事な用事があるんだけど、お昼頃に三本の筭で会えないかしら」

お、まさか告白か？　と思つたが表情を見る限りではそうではないらしい。

ハリーはその誘いに少し困つたような顔をした。

「どうかな……今日はチョウと約束しているんだけど。僕と一日中一緒だつて期待しているかもしれない。何かするとうう約束はしてないけど」

「じゃあどうしてもつて場合はチョウも連れてきて。とにかく、貴方は来てくれる？」

ハリーは曖昧に返事をするが、ハーマイオニーはお構いなしに話を進めていく。

「うーん……いいよ」

いいんかい。

「でもどうして？」

「いまは説明している暇はないわ。急いで返事を書かなきゃいけないのよ」

ハーマイオニーは右手にトースト、左手に手紙を掴み、急ぎ足で大広間を出ていった。

ハリーはぼかんとしながらハーマイオニーの後ろ姿を見ている。

そして首を捻りながら食事を再開した。

「OKしちゃつてよかつたの？　今日はチョウとデートなのでしよう？」

私はトーストを持つて席を立つと先ほどまでハーマイオニーが座っていた場所に座

り直した。

「ハーマイオニーがどうしてもって言うんだ。断れないだろう？」

……もしかしてハリーって相当鈍いのだろうか。

なんにしても今日はハリーたちについて行くことはできない。

アンジェリーナが今日は一日中練習すると言い出したのだ。

「まあ、若いうちに一回痛い目を見ておくというのはいいことよ」

「どうして失敗するって分かるんだよ」

ハリーはむっとした表情で聞き返してきた。

「じゃあ予行練習しましょう。私をチョウだと思って、ハーマイオニーの所に行くとい

うことを伝えてみなさい」

「え？……ゴホン。あー、チョウ。お昼に僕と一緒に三本の箒に行かないか？　そこで

ハーマイオニーと待ち合わせしてるんだ」

「3点」

私が冷ややかにハリーのセリフを切り捨てるとハリーは少しむくれた。

「じゃあどうしろって言うんだよ」

「まずハーマイオニーは駄目よ。グレンジャーって言いなさい。待ち合わせって言葉も

禁止。だからここは『ごめん、チョウ。本当に申し訳ないんだけど昼にグレンジャーか

ら呼び出されてさ、大した用事じゃなさそうなんだけど顔を出さないのも悪いじゃん？だから少し三本の筭まで付き合ってくれないか？いいことを思いついた。できれば君も一緒に来てほしい。多分そしたらグレンジャーも僕を早く解放してくれるはずだ』と、こんなものね」

「新しい呪文学の呪文か何かか？」

横からひよっこりロンが顔をだす。

ハリーはまるで暗号でも聞いたかのように頭を振るうと、話を逸らすようにロンに話しかけた。

「ロンは今日どうする？」

「一日中クイデイツチの練習だろ。それで何とかあるわけじゃないと思うんだけど……」

「そう言えば新しく入ったメンバーは？」

ハリーがロンに聞いた。

自分たちが抜けた穴を誰が埋めているのか興味があるようだ。

「シーカーにはジニー。ジニーはまあ、そこそこ上手い。ピーターには咲夜とカークだ。……言っちゃ悪いけど、ピーターは咲夜一人でクラブを2本持ったほうがマシなレベルだ」

ハリーはロンの言葉に苦笑いを浮かべる。

確かにカークはいないほうがよいレベルで下手くそだった。

「……と言っても僕も人のことを言えるほど上手くないけど。アンジェリーナはどうして僕を退部させてくれないんだろう」

「そりゃあ、調子のいいときの君は上手いからだよ」

ハリーは少しイライラした口調でいった。

ハリーからしたら自分から辞めたいなんていうのが許せないんだろう。

「ロン、安心しなさい」

私は思いつめた表情をしているロンに声を掛ける。

ロンは何かを期待するような目でこちらを見たが、すぐにガツクリと視線を落とした。

「10分もしないうちに相手のシーカーとチェイサーは全滅するわ。それまでゴールの前で飛んでいればこっちの勝ちよ。次はハツフルパフ戦だったかしら。相手はセドリックね」

「頼むからセドリックを殺さないでくれよ。あれは大事なふくろう同好会のメンバーなんだから」

ハリーが顔を真っ青にしていた。

私ってそこまで信用されてないのだろうか。

私は玄関ホールでハリーと別れると、ロンと共に競技場へと向かう。

そしてアンジェリーナの指示に従いオークシャフト79に跨り練習を始めた。

ついに来たハツフルパフ対グリフィンドールのクイディッチの試合。

私は皆より早く朝食をとると一直線にクイディッチ競技場へと向かっていた。

ここでは既にアンジェリーナがユニフォームに着替え、準備運動をしている。

私も軽く体操をし、ユニフォームに身を包んだ。

「さあ、ついに試合だ。咲夜は試合に出るのは初めてだよね？」

「ええ、そうね」

「じゃあーっただけ言っておくわ」

アンジェリーナは私の前でビシツと人差し指を立てる。

「本気でやりなさい。手加減は不要よ。思いつきり相手のチームにブラッジャーを叩き

込みなさい」

アンジェリーナは意気揚々とそう叫んだ。

「勿論そうさせていただくつもりよ。……そうだ、ジニーに言っておいて」

「……？ なにを？」

アンジェリーナはぼかんとした表情で私に聞き返す。

私はニヤリと笑って言った。

「早くスニッチを取らないと悲惨なことになるわよって」

私はクラブを掴むと霊力を流し込みその場にあつた木製の机に思いつき叩きつける。

その瞬間木製の机は粉々になった。

「レパロ。ね？」

私は机に修復呪文を掛け、待機所にあるベンチに静かに腰かけた。

10分もしないうちにチームは集まり、作戦会議が始まる。

そして最後に皆で掛け声をあげるとピッチへと出た。

「キャプテン、握手を」

フーチ先生がそう言うのと、アンジェリーナとデイゴリーはがっしりと握手をする。

そしてフーチ先生が吹いた笛の音が合図となり、私は放たれたブラッジャーを追うように空へと舞い上がった。

「さあ始まりましたグリフィンドール対ハッフルパフ！ 実況は毎度おなじみの僕、リー・ジョーダンが務めさせていただきます。さあ最初にクアッフルを取ったのはグリ

フィンドールのアンジェリーナだ！」

私は自分の中の時間を加速させ、疑似的な高速移動を手にする。

そのままブラッジャーに追いつき、クラブにありつただけの霊力を籠めてブラッジャーをデイゴリーへと撃ち込んだ。

ブラッジャーは物凄い速度で撃ちだされ空中で軌道を変える。

そしてデイゴリーの後頭部にぶち当たった。

「おーとー！ 開始早々にハツフルパフのキャプテンを務めるセドリック・デイゴリー選手の後頭部にブラッジャーが直撃！ 先ほどのは咲夜選手が撃つたものでしょうか。えー、咲夜選手は今試合が初試合ということで、非常に好奇心をそそられる選手であります。あの太ももの奥とか……」

「ジョーダン！」

「何でもありませんマクゴナガル先生」

私はまっすぐと落下していくデイゴリーを見ながらまたブラッジャーを追う。

そしてすぐさま追いつくとハツフルパフのチェイサーに向けて本気でブラッジャーを打った。

この時に相手の飛ぶルートも計算に入れて撃ち出しているので、また吸い込まれるようにブラッジャーはハツフルパフの選手に当たる。

もつと当てにくいものかと思つたが、ブラッジャーには魔法が掛けてあるので若干ホーミングするのだ。

これなら案外早くハツフルパフの選手を全滅させることができるかもしれない。

私はグリフィンドールの選手へと飛んできたブラッジャーを跳ね返し、ハツフルパフのチエイサーの鼻をへし折る。

あと一人。

私は渾身の力を籠めてブラッジャーを殴り飛ばした。

そのブラッジャーは軌道を何度も変えながらザカリアス・スミスに突っ込んでいく。そして見事スミスを箒から叩き落とした。

「これは大惨事になってしまいました。開始5分と経たずにハツフルパフの選手は残り3人！ キーパーとビーターだけです！ もう既にハツフルパフは点数を増やすことができない！ セドリック早く帰ってこないと負けが確定しちまうぞ!!」

「ジョーダン！ 嬉しそうに言うんじゃないやありません!!」

「冗談ですよ、先生」

私はグリフィンドールの選手を守りながら残る選手にもブラッジャーを叩き込んでいく。

キーパーには一番当てやすかつたかもしれない。

だが一番の鬼門は相手チームのピーターだ。

奴らは自分の身を守る武器を持っている。

私は正面からブラッジャーを撃ちこんですぐに時間を止め、その選手とは反対の方向に向かって飛んでいたブラッジャーを叩き込んだ。

ハツフルパフのピーターは正面から飛んできたブラッジャーには何の問題も無しに対処したが、後ろから急に軌道を変えて飛んできたブラッジャーは避けられない。

ブラッジャーが後頭部に直撃し、ピーターの一人目が墜落していった。

残るハツフルパフ選手は一人。

クラブを持つ手にも力が入るといふものだ。

私はブラッジャーを追いかけピーターから一メートルほど右を狙って撃ち込む。

そして更に速い速度で2つ目を放ち、空中で弾かせて1つ目のブラッジャーを残るピーターの腹部に直撃させた。

これでピッチ上にハツフルパフの選手はいなくなつたわけだ。

「いれどよし」

私は満足そうに呟くとグリフィンドールの選手を守るためにブラッジャー2つを交互に打ち一人キヤッチボールを始める。

「えー、ジニー選手涙目になって必死にスニッチを探しております。あ、アンジェリーナ

？ 執着心は分かるけどキーパーのいないゴールにそんなにゴールしても……あ、いえ何でもありません。ジニー！ アンジェリーナが止まらないから早くスニッチを掴んでくれー！ グリフィン・ドールまた得点、200対0！」

私の予想通りスコアはおかしなことになっていった。

いや、試合自体もおかしなことになっていると言ってしまったでもいいだろう。

アンジェリーナは発狂したようにハッフルパフのゴールにクアッフルを押し込みそれをアリシアとケイティが必死に止めようとしている。

ロンは手持ち無沙汰にゴールの前をクルクルと回り、カークは私が1つ逃がしたブラッジャーに追い掛け回されていた。

そしてジニーは既に半分泣きながらスニッチを探し回っている。

私はそれを見て、世界大会レベルのサッカー選手が子供相手に本気になったらこんな感じになるんだろうなーと、ぼんやり想像していた。

「とつた！ やつと取ってくれました！ ジニー・ウィーズリーがスニッチをキャッチ！ 450対0でグリフィン・ドールの勝利です！ ハッフルパフとその選手のご冥福をお祈りします。アンジェリーナ！ 試合はもう終わったぞ!! いい加減戻ってこー

いー！」

「ふう」

私は一息ついてピッチへと降り立つ。

そこで呆然とした顔でスニッチを見つめているジニーに声を掛けた。

「おつかれ。ナイスキャッチだったわよ」

「え、ええ。そうね」

ジニーは曖昧に返事をする。パタパタと控室の方へと逃げていく。

観客も嫌なものでも見たかのように眉をひそめながらこちらを見ていた。

私は首を傾げながらジニーの後を追うように控室へと向かう。

ここではマクゴナガル先生が顔を真っ赤にして待っていた。

「ミス・十六夜！ あれは一体何事ですか!？」

マクゴナガル先生は私を怒鳴りつける。

私は怒鳴られた意味が分からず首を傾げた。

「え？ 一体何事ですか？」

私はマクゴナガル先生に言われたことをそのまま聞き返してしまう。

「あの試合です！ 相手の選手が全滅するなんて前代未聞ですよ。少なくともホグワ―

ツでは一度も……」

「あの、先生」

正気に戻ったアンジェリーナが恐る恐る口を開いた。

「咲夜は別に何もルールを犯していません。ただブラッジャーを打って、相手に当てただけです」

アンジェリーナの言葉にマクゴナガル先生は口をパクパクさせる。

言葉が出てこないといった表情だった。

「クイディッチのルールは私も知っています。学生時代は選手でしたので。ですがあのプレーはあまりにも……グリフィンドールの選手らしくない。もつと騎士道に則って試合をすべきです。勝つことだけがクイディッチではありません」

マクゴナガル先生はそう言い残すと控室を出ていく。

なんというか、理不尽極まりない。

敵を倒さずして何がビーターだ。

フレッドとジョージに教えてもらったのだが、ビーターたるもの箒から選手を叩き落としてなんぼらしい。

私が更に首を捻っていると、フレッドとジョージが控室に飛び込んできた。

「ひゃっほーい！ 最高だったな相棒！ 咲夜、最後のアレはなんだ？ 今度教えてくれよ！」

「ビーターにブラッジャーを叩き込むなんてプロの選手でもそうそうできたものじゃないぞ！ ピクシー殺しの名は伊達じゃないな！」

2人してバツシンバツシンと私の背中を叩き私を称える。

なんだ、先ほどので合っているのではないか。

私は安心して一息つくつと、時間を止めてユニフォームを着替え、制服姿へと戻った。

そしてフレッドジョージと共に控室を出る。

「2人もブラッジャーの進路を予測するぐらいはできるでしょう?」

「ああ、ブラッジャーの進み方は決して真つすぐじゃない。他の選手に引き寄せられるように多少カーブを描いたり途中で目標を変えたりするんだ。……最初にセドリックの坊ちゃんが行われたのがそれだな」

「あいつの父親は泣いて悲しむぞ! 逆にハリーは喜ぶかもな。これでセドリックも箒から落ちたわけだし」

「……? セドリックの話は分からないけど、ようは進路が予想できるなら後はそれに当てるようにもう1つのブラッジャーを打つだけよ。ブラッジャーなんてそう速いものじゃないでしょう?」

「ああ、そうだな。あれ以上速いと本当に死人が出るぜ」

そう、ブラッジャーは決して追いつけない速度ではない。

ハリーが前乗っていたニンバス2000レベルの箒でも十分追いつくことが可能だろう。

私の乗っているオークシャフト79は元々クイティツ用の箒ではないので少々こちらから手を加えないといけないが。

「そういうえば、ずる休みスナックボックスはどうなったの？ 談話室でたまに実演販売しているけど」

私は去年2人にあげた金貨のことをふと思い出し聞いた。

2人は顔を見合わせると、ニッコリと笑う。

「例の箱はいつでも売り出せる状態さ。ここだけの話、実はもう店を出す場所も決めている。ダイアゴン横丁だ」

ジョージが羊皮紙に何かを書いて私に渡してきた。

私はその羊皮紙をそつと開く。

『ダイアゴン横丁903番地 ウィーズリー・ウィザード・ウィーズ店』

「俺たち2人の新しい住所だ。そのうち引越す予定だぜ？」

「おつと咲夜、先生方には知らせてくれるなよ？ それと、ママにも」

2人同時に苦虫でも噛み潰したような顔をしてコクコクと頷き私に同意を求めてくる。

「何言っているのよ。お嬢様がスポンサーなのよ？ 言うわけないじゃない」

「流石咲夜だ。頭の固い連中とは違うね」

「夏休みにでも是非来てくれ。もしよかったら、君のお嬢様も連れてさ」
私はやれやれと肩を竦めた。

「お嬢様には店が出来たとだけ報告しておくわ。お嬢様が行きたいと仰ったら、2人で行くかも」

「そこなくっちゃ!!」

2人は私に手を振ると楽しそうに廊下を掛けていく。

その様子を見てフィルチさんが「廊下を走るなー!」と追っていった。

私は2人を見送ると談話室に向かって歩き出す。

そして談話室に入る前に一度時間を止めアンブリッジ先生を蹴飛ばした。

聖典とか、密告とか、誓いとか

月曜の朝、朝食を取りに大広間へ入るといつもよりもふくろう便の数が多いことに気がつく。

まあ、今日ほどじゃないにしても最近大広間に来るふくろうは多いのだ。

日刊予言者新聞を取っている生徒が増えたらしい。

いつもハーマイオニーの取った物を軽く読ませてもらっているが、最近はめぼしい記事は無かった。

私はハリーとハーマイオニーの向かい側に座り朝食を取り始める。

次の瞬間私の目の前にふくろうが降り立った。

どうやらハリーに郵便を渡しに来たようだ。

「誰を探しているんだい？」

ハリーは目の前に降り立ったふくろうの受取人の名前を覗き込む。

そして自分宛ての手紙だということを確認した。

その後も次々とふくろうがハリーの前へと降り立っていく。

いつもよりふくろうが多い理由はこれだったのかと、私は一度席を立ちハリーたちか

ら距離を取った。

ハリーたちの近くは、もう物を食べれる環境ではない。

私はテーブルからサンドイッチを手に取ると、テーブルの反対側へと回り込みハリーに來た手紙を覗き込んだ。

「これは一体何？」

私が聞くとハリーは恥ずかしそうに笑いながらザ・クイブラーの3月号を手渡してくる。

表紙には今のハリーと同じように気恥ずかしげに笑っているハリーの顔が印刷されていた。

『ハリー・ポッターついに語る 名前を呼んではいけないあの人の真相——僕がその人の復活を見た夜』

表紙には真つ赤な字でそう書かれている。

「いいでしょう？」

いつの間にか私の横にルーナが立っていた。

「昨日出たんだよ。パパに一部無料で貴方に送るように頼んだの。きつとこのふくろうの山は、読者からの手紙だよ」

「ハリー、いつの間にこんなことを？ ダンブルドア先生に確認は取ったのよね？」

私はザ・クイブラーを捲り内容を確認しながらハリーに聞く。

ハリーは困ったように頭を掻いた。

あの様子では確認はしていないのだろう。

「この前、バレンタインのホグズミード行でスキーターから取材を受けたんだ。でもこれはハーマイオニーが計画したことだよ。ね？　ハーマイオニー」

私はハーマイオニーを見る。

その瞬間ハーマイオニーはおろおろと慌てだした。

「だって正しいことを世に伝える必要があると思ったのよ。だからスキーターを脅して記事を書かせて……本当は日刊予言者新聞に記事を書かせたかっただけで、スキーター曰くそれは無理だって……」

「……馬鹿と天才は紙一重って言うけど、本当なのね。確かに正しいことを伝えることはいいことよ。でも、タイミングというものが分かっていないわ」

私はバンとザ・クイブラーを叩く。

ハーマイオニーの体がビクリと揺れた。

「こんな記事、アンブリッジ先生を挑発しているだけじゃない。それだけじゃないわ。今まで曖昧だったハリーへの誹謗中傷が、この記事によって明確な物となる。日刊予言者新聞しか読んでいない人がこれの噂を聞いたらどう思うかしら。ついにあの目立ち

たがり屋が本性を現したか！ そのように捉えるのよ」

「僕、目立ちたがり屋じゃない！」

「そんなことは分かっているわ。認識の問題よ。いい？ ハーマイオニー。今度余計なことを勝手にしたら貴方の舌をコンビネーションプライヤで挟んで引っこ抜くわよ？」

ハーマイオニーは私のその言葉を聞いて涙目になる。

ポリジューズ薬の時もあの反吐の時もそうだが、どうしてハーマイオニーはこうドジを踏むのだろうか。

ブラツクや小悪魔みたいに、もう少し器用に物事を進めてほしい。

「あの、私……そんなつもりじゃ……」

「貴方、自分の失敗で人を殺してそのまま立ち直れなくなるタイプね、多分。いい？ 今回は私があるとかしてあげるから、今度から何かやる前に私に相談しなさい。いいわね？」

「……………」

ハーマイオニーは涙目で俯いている。

「返事は？」

「はい」

私が脅しをかけるとハーマイオニーは小さな声で頷いた。

「何事なの？」

やはり来たかと、私は後ろを振り向く。

そこにはここ半年ほどですっかり痩せたアンブリッジ先生が立っていた。

どうやらアンブリッジエクササイズは私だけでなくアンブリッジ先生にもある程度の効果があるようだった。

「どうしてこんなに沢山の手紙が来たのですか？」

アンブリッジ先生の言葉にハリーは困ったような顔をする。

ハーマイオニーが一層目に涙を浮かべた。

私の言った意味がようやく理解できたらしい。

「僕がインタビュウを受けたので、みんなが手紙をくれたんです。6月に起きたことのインタビュウです」

「インタビュウ？ どういう意味ですか？」

「つまり記者が……あ、記者というのは線路を走る方ではなく雑誌を書く方なのですが、その記者が僕に質問をして、僕がそれに答えました」

「そんなことは分かっています」

アンブリッジ先生はハリーからザ・クイブラーをもぎ取り目を通す。

その手はわなわなと震えていた。

……そろそろか。

私はアンブリッジ先生の肩を叩く。

そしてにつこりと微笑んだ。

「アンブリッジ先生、ザ・クイブラー3月号って素晴らしいですね。ホグワーツ指定の必読書にして全校生徒が持ち歩くべきです」

次の瞬間、アンブリッジ先生の顔が面白い形に歪んだ。

その顔は磔の呪いを掛けられながら無理やり笑っているかのような表情だ。

「で、でもここに書いてあることは全部嘘なのですよ？」

アンブリッジ先生はできるだけ私の機嫌を損ねないように恐々とそう言う。

「先生。読めばわかると思うのですが……この場に私もいたんですよ？」

アンブリッジ先生はぎよつとした顔でザ・クイブラーを捲る。

そして目を皿のようにして内容を読み取ると、また歪に笑った。

「あ、あ、ああ新しい教育令を出さないといけないので……私はこの辺で失礼させてもらいます。素晴らしい内容にグリフィンボールに10点！」

アンブリッジ先生は完全に裏返った声でテンパったようにそう言うと、ダカダカと大広間から出ていった。

ハリーたちはアンブリッジ先生を見送ると、驚いたように私を見る。

「君一体あいつに何をしたんだ？ 尋常じやない怯え方だったぞ？」

「それに加えて尋常じやないほどに媚びを売ってたね」

ロンとハリーが続けざまに私に質問する。

私は適当に誤魔化すとサンドイッチの最後のひとかけらを口の中に突っ込んだ。

昼前には学校中に告知が出た。

寮の掲示板だけではない。

廊下や教室などにも貼り出されている。

『ホグワーツ高等尋問官令 ザ・クイブラー3月号をホグワーツ指定必読書とし、所持していないことが発覚した生徒は退学処分に処す』

そして廊下や教室、談話室にザ・クイブラーの3月号がフリーペーパーのように山積みになっていた。

どうやら持っていない生徒は今すぐに所持しろということらしい。

いい感じにアンブリッジ先生もキマってきたようだ。

生徒たちは半信半疑でザ・クイブラーを手にとっては鞆に仕舞っていく。

スリザリンの生徒は最後まで渋っていたようだが、こんなことで退学になってなるものかと凄いい形相になりながらザ・クイブラーを手を取っていた。

「いっくんなことになるなんて……」

ハーマイオニーがザ・クイブラーを1冊鞆の中に仕舞いながらボソリと呟いた。

フレッドとジョージなんてまるで鎧を着るかのように雑誌を体中に貼り付けている。

「さあさあ我こそはミスター・クイブラー！ 聖典を装備し我が歩みを止められるものなら止めてみよ！」

と、この調子だ。

私も置かれたザ・クイブラーを鞆へと仕舞う。

実はこんなことをしたのは歴とした理由がある。

私の一言にどこまでアンブリッジ先生が影響されるのか試したのだ。

もつとも私の話を否定されるのが癪だったという理由もないことにはないが、一番の理由はそれだ。

結果として、私の曖昧な一言でここまでのことをしてしまうほど冷静な判断能力を失い、私に依存していることが分かった。

これはよい傾向にあると言えるだろう。

さて、テストが終わったところで、あとは泳がせるだけである。

ザ・クイブラーの一件から数週間が経った。

あの時何故あのような教育令を出してしまったのかとアンブリッジ先生は散々後悔したようだったが、数日も経つといつものウザいおばさんに戻っていた。

私の見ていないところでハリーに意地悪をし、トレローニー先生に嫌味を言い、気に入らない生徒を不当に処罰する。

なんというか、典型的なクズだった。

いつそのこと私が服従の呪文で操っていたほうがマシなのではなからうか。

そしてついに事件は起こった。

私が夜、談話室で本を読んでいたら玄関ホールのほうから微かに悲鳴が聞こえてきたのだ。

私はその声に聞き覚えがあった。

この声はトレローニー先生だ。

私は時間を停止させると急いで玄関ホールへと向かう。

そこは既に大広間から溢れてきた群衆でいっぱいだった。

その群衆の中心にトレローニー先生は立っている。

だがその姿は荒れに荒れ、あまり見れたものではなかった。

私は群衆の中に紛れ、時間停止を解除する。

「いやよー！ いやですよー！ こんなことが許されるはずがありません……あたくし、受け

入れませんわ！」

トレローニー先生が甲高い声で誰かに叫んだ。

私がトレローニー先生の視線を追うと、その先にはアンブリッジ先生が立っている。

「貴方、こういう事態になると予見できなかったの？ 明日の天気でさえ予見できない無能力な貴方でも、解雇が避けられないことぐらいは予見できたでしょう？」

アンブリッジ先生の言葉を聞いてトレローニー先生が泣き喚く。

なんとというか、水に溺れたコガネムシみたいになっていた。

正直笑える。

「あ、あなたにそんなこと……で、できないわ！ あたくしをクビにだなんて！ ここにあたくしは16年も……ホグワーツはあ、あたくしの家です！」

「家だった、のよ。1時間前に魔法大臣が解雇辞令に署名なさるまではね。さあ、どうぞ。ここから出ていってちょうだい。恥さらしですよ」

トレローニー先生は投げ捨てられた自分のトランクにしがみつき意地でも動こうとしない。

アンブリッジ先生は無理やり外に出そうとはしなかった。

どうやらこの様子を楽しんでいるようだ。

次の瞬間トレローニー先生に近づくと人影が2つ見える。

ダンブルドア先生とマクゴナガル先生だ。

「さあ、シビル。落ち着いて……貴方が考えているほど酷いことにはなりません。ホグワーツを出ることにはなりませんよ」

マクゴナガル先生がいつになく優しい声でトレローニー先生に語り掛ける。

その様子を見てアンブリッジ先生が眉をひそめた。

「あら、マクゴナガル先生。そうですね？　そう宣言なさる権限があたりで？」

「それはわしの権限じゃ」

ダンブルドア先生がくるとアンブリッジ先生の方へと振り返った。

「あなたの？　どうやら貴方は立場をお分かりになっていないようですね。私の手元には魔法省大臣が署名なされた解雇辞令がありましてよ。ホグワーツ高等尋問官は教育に不適切だと思われる教師を停職に処し、解雇する権利を有するのです。トレローニー先生は基準を満たさないと私が判断し、そして解雇しました」

アンブリッジ先生は誇らしげにローブから丸められた羊皮紙を取り出しダンブルドア先生に見せる。

だがダンブルドア先生は冷静に言った。

「アンブリッジ先生。確かに貴方は教師を解雇する権利をお持ちじゃ。しかしこの城から追い出す権限は持つておられん。それはまだ校長であるわしの権利じゃ」

お分かりかな？

ダンブルドア先生はそのような表情を浮かべてアンブリッジ先生の顔を見る。

アンブリッジ先生の顎にわずかに残っている脂肪がヒクついた。

「マクゴナガル先生、シビルに付き添って上まで連れて行ってくれるかの？」

その言葉を聞いてマクゴナガル先生と、どこからともなく現れたスプラウト先生がトレローニー先生の手を取り引率していく。

そして少し遅れてやってきたフリットウィック先生が前に出てトレローニー先生のトランクを宙に浮かせた。

そのままフリットウィック先生も階段を上っていく。

そんな様子にアンブリッジ先生はダンブルドア先生を見つめながら石のように突っ立っていた。

ダンブルドア先生は逆に柔らかく微笑んでいる。

「それで、私が占い学の新しい教師を任命し、あの方の住処を使う必要ができたら、どうなさるおつもりですか？」

「心配には及ばん。わしはもう新しい占い学の教師を見つけておる。その方は一階に棲むほうが好ましいそうじゃ」

ダンブルドア先生が朗らかに言うと、アンブリッジ先生は更に表情を硬くした。

「見つけた？ 貴方が？ お忘れかしら、教育令第22号によれば——」

「魔法省は適切な候補者を任命する権利がある。ただし、校長が候補者を見つけられなかった場合のみじゃ。さて、ではご紹介させていただけようかの」

ダンブルドア先生が玄関のドアへと視線を向けると急にドアが開け放たれる。

そこにはプラチナブロンドの髪に青い目、そして頭と胴体は人間でその下が黄金の馬になっているケンタウルスが立っていた。

「フィレンツェじゃ。あなたも適任だと思われることじやろう」

アンブリッジ先生の顔が今まで見たこともないようなものへと歪んだ。

その瞬間私はアンブリッジ先生にこれまで以上に嫌悪感と憎悪を覚える。

あの目は知っている。

『人』が『人ならざる者』を軽蔑するときに向ける目だ。

……そうか、ようやくわかった。

何故私がかここまでアンブリッジに嫌悪感を抱くのか。

本能的に察していたのだ。

こいつはお嬢様の敵だと。

私は無意識にナイフを握りこんでいたが、ふと気がつくやうにダンブルドア先生がこちらを真つすぐと見ている。

そしてたしなめるようにチラリと私の手元に視線を落としたり。

私は静かに頷きナイフを袖の中に仕舞い直す。

私はそれ以上アンブリッジの顔を見たくなかったので群衆に紛れ談話室へと戻った。

フィレンツェが教師になって初めての占い学の時間。

私はハリーとロンと共に1階の11番教室に来ていた。

その教室にはケンタウルのフィレンツェに合わせて森のような内装になっている。

床は土になっており、そこから苔や樹木が生えている。

「ハリー・ポッター」

私たちが教室に入った途端にフィレンツェはハリーに声を掛けた。

「どうやらハリーとフィレンツェは知り合いのようだ。」

ハリーは戸惑いつつもフィレンツェと握手をしている。

「また会うことは、予言されていました。さて、授業を始めましょう」

クラスに人が揃うとフィレンツェは授業を開始した。

「ダンブルドア先生のご厚意でこの教室が用意されました。私の棲息地に似せてあります。できれば禁じられた森で授業をしたかったのですが……しかし、もはやそれも叶わ

ないことです。まあ、そんなことは気にしていても仕方がないので授業に移りましょう」

フィレンツェが天井に手を向けると徐々に部屋が薄暗くなつていく。

そして天井が小さなプラネタリウムのようなつた。

「驚き桃の木」

ロンが訳の分からない驚き方をする。

まあでも、クラスの他の生徒も驚いているようだった。

「床に仰向けに寝転んで。星空を観察してください。見る目を持った者にとっては我々の種族の運命がここに書かれているのです。皆さんは天文学で惑星やその衛星の名前を勉強しましたね。ケンタウルスは何世紀も掛けて天体の動きの神秘を解き明かしてきました。その結果、空には未来が隠れている可能性がある」と知ったのです」

フィレンツェはその後ケンタウルスの行う予言がどのようなものかを説明していく。その予言は人間本位なものではなく、もつと壮大で複雑なものだと語った。

「この10年間、魔法界が2つの戦争の合間の、ほんのわずかな静けさを生きているにすぎないと印されていました。戦いをもたらす火星が我々の頭上に明るく輝いているのは、まもなく再び戦いが起こるであろうということを示唆しているのです。どのぐらい差し迫っているのかを、ケンタウルスは薬草や木の葉を燃やして、その炎や煙を読むこ

とで占おうとしています」

その後は教室内で様々な葉草を燃やしてその煙の形から占いをした。

といつても私は煙の揺らめきから何かを察することはできないし、それは皆同じようだった。

ファイレンツェから言わせたら、人間がこのようなことが得意だった例がないとのことだ。

ファイレンツェは最後にケンタウルスの予言も外れるし、この世には確かなことは何ひとつないと言葉を締めくくった。

「ハリー・ポッター、ちよつとお話があります。ああ、その男の子と女の子もいていいですよ」

授業が終わるとファイレンツェは私たちを引き留める。

男の子と女の子とはロンと私のことだろうか。

「ハリー・ポッター、貴方はハグリッドの友人ですね？」

「はい」

ファイレンツェの問いにハリーが答える。

「それなら、私からの忠告を伝えてください。ハグリッドがやろうとしていることは上手くいけません」

「やろうとしていることが上手くないかない？」

「ええ、放棄した方がいいと。自分でハグリッドに忠告してもよいのですが、私は追放された身ですので」

「追放された？」

私は思わずファイルンツェに聞き返した。

「ええ、この職につくことに反対されて。まあそれは過ぎたことです。ではハリー、頼みましたよ」

一通り話が終わると私たちは教室を出る。

「なんだか不思議な授業だったな。ケンタウルスじゃあれが普通なのか？」

ロンが首を傾げた。

まあ、一風変わった授業であったことは確かだ。

DAの会合中、私の予想だにしていなかった事件が起こった。

この頃DAではついに守護霊の練習を始め、皆必死になって杖の先から守護霊を出そうとしていたのだが、次の瞬間必要の部屋のドアが大きく開け放たれる。

私は咄嗟にその方向に杖を向けたが、そこには屋敷しもべ妖精のドビーが息を切らせ

て立っていた。

「ハリー・ポッターさま……ドビーめはご忠告に参りました」

ドビーは息も絶え絶えに必要な部屋に蹲る。

私はゆつくりドビーを引き起こした。

「どうしたの？ ……何かあったのね」

「ここへ……あの人が……」

私はその言葉を聞いて一瞬混乱する。

アンブリッジだとしたらここにくるはずはない。

アンブリッジは私たちの活動がふくろう同好会であると信じ切っているからだ。

そしてこれは推察だが、D Aの活動がバレたとしても見て見ぬふりをするだろう。

「アンブリッジがここにくるのか？」

その言葉を聞いてドビーは大きく首を振る。

「アンブリッジはその逆です。必死に閣下を引き留めようとしているのです。」

「閣下……ファッジ大臣がここに向かっているのね」

私はドビーの少ない言葉で全てを理解すると、全員に指示を出した。

「全員ふくろう同好会の集会が終わったように見せかけながら自分の寮に戻りなさい！

ハリー、貴方もよ。ここには私独りが残るわ」

私が声を掛けると全員ドアから一目散に逃げ去っていった。だがハリーだけは動こうとしない。

「……咲夜だけを置いてはいけない」

「なに馬鹿なことを言っているのよ。貴方がいると邪魔なのよ。足手まといなのが分からない？」

ハリーはその言葉を聞いて悲しそうな表情を見せる。

その後すぐにドアに向けて走り出した。

ついに私は必要の部屋に独りになる。

私はそこで一度目を瞑ると、必要の部屋に語り掛けた。

この部屋を箒置き場に偽装して欲しいと。

私の要望に応じて必要の部屋はみるみるうちに小さくなり、あつという間に箒置き場へと変わる。

次の瞬間ファッジ大臣が必要の部屋の扉を開いた。

「……そこで何をしている？」

「おかしなことを聞きますね。箒を置く以外に何かできるのですか？ それとも今から何かやろうとしているのですか？」

私は適当にはぐらかしつつファッジ大臣の周囲を観察する。

そこにはおろおろとした表情を私に向けているアンブリッジと、パーシーがいた。いや、それ以外にも後ろに護衛を2人引き連れている。

そのうちの1人はキングズリーだ。

「あら、皆さんお揃いで。……あの、そこを通してもらいたいのですが」

私は出口を塞いでいるファツジ大臣の顔を困ったように見つめた。

その瞬間アンブリッジ先生は更にどうしていいかといった顔をし、キングズリーとパーシーも心配そうな顔をファツジ大臣に向ける。

「ここで何人もの生徒が集まって戦闘訓練をしていると聞いたのだが……首謀者はお前とハリリー・ポッターらしいな」

……なるほど、密告か。

私はファツジ大臣の言葉で大体のことを察する。

大方DAメンバーの誰かが先生に会合のことを密告したのだろう。

この可能性は考えていかなかったわけではないが、まさかファツジ大臣が直々に来るとは思ってもみなかった。

「一体誰がそんなことを？　そして、何故ここに来たのですか？」

私はそう言ってアンブリッジをチラリと見る。

次の瞬間アンブリッジは弾かれるように生徒の名前を口にした。

「マリエッタ・エツジコムよ！ ……あ」

ファアツジ大臣はギロリとアンブリッヅ先生を睨みつける。なるほど、レイブンクローのマリエッタか。

「戦闘訓練なんて……マリエッタの言葉を信じたのですか？」

私は肩を竦めて見せる。

そしてファアツジ大臣の横を通り抜けようとした。

「待ちたまえ。裏は取れている」

ファアツジ大臣は私の肩を掴み無理やり私を引き留めた。

「「おおっ……」」

途端に私のことを知っている3人が変な声を出す。

ファアツジ大臣を称えているようなそんな声だ。

裏を返せば「いい度胸してる」といった感じだろうか。

まあ、流石の私も引き留められたぐらいでナイフを投げるほど器の小さい女ではない。

「裏は取れているとは？」

「ついてきたまえ。校長室だ。キングズリー、咲夜を逃がすなよ」

「分かりました閣下」

キングズリーはファッジ大臣に返事をする、私の後ろについた。

まあ、逃げようと思えばいつでも逃げられるのだし、私は素直にファッジ大臣について行くことにする。

しばらく歩きガーゴイル像を抜け、私はファッジ大臣に連れられて校長室に入った。そこにはダンブルドア先生がいつものように椅子に腰かけている。

「一体何事かね。コーネリウス」

ダンブルドア先生はそう言いつつも私へと視線を向けた。

私はその視線の意味をよく知っている。

「何もするな」ダンブルドア先生の視線はそう告げていた。

「校則を破った生徒を一人連れてきたまでだ」

「破ってませんわ。ふくろう同好会はアンブリッジ先生が認めてくださってます」

私がケロリとした表情でそういうと、アンブリッジが縮こまった。

「ああ、ふくろう同好会に関しては確かにドローレスが許可を出したかもしれない。だがDAに関してはどうか？ 白を切るつもりなら通報者を連れてきてもいい。ドローレス、連れてきなさい」

ファッジ大臣がそう指示して数分、アンブリッジはすすり泣いているマリエッタを連れて校長室に入ってきた。

「気絶しているだけです」

キングズブリーはほっとしたように息をつく。

当たり前だ。

私は何もしていない。

「動かぬ証拠ではないか！ 彼女がDAについて密告している時にこのブツブツが浮かび上がってきたそうだ」

まったくハーマイオニーも余計なことをしてくれる。

私は頭の中で新しい言い訳を構築させると口を開いた。

「ファッジ大臣——」

「コーネリウス、DAがなんの略かご存知か？」

そんな私の言葉を遮るように立ち上がったダンブルドア先生が1歩前に出る。

私は咄嗟にダンブルドア先生の顔を見るが、あれは何か考えがある顔だった。

「……なんの話だ。DAがなんだと言うんだ」

ファッジ大臣は迫ってきたダンブルドア先生から1歩退いた。

ダンブルドア先生は微笑んだまま、ファッジ大臣に告げる。

「ダンブルドア軍の略じゃよ。ダンブルドア・アーミーじゃ」

ファッジ大臣に電流走る。

ぎよつとなつて後退りし、短い悲鳴をあげダンブルドア先生を見た。

「し……しかし。貴方が？」

「そうじゃ」

「貴方がこれを組織した？」

「いかにも」

「貴方が生徒を集めて、貴方の軍隊を？」

「おお、そうじゃとも。コーネリウス。全てわしが計画したことじゃよ」

ダンブルドア先生はそう言い切った。

私は流石に我慢できなくなり、時間を停止させてダンブルドア先生だけの時間を動かす。

ダンブルドア先生は部屋を見回すと状況を確認したように頷いた。

「止まった時間の中を動くのはこれが2回目じゃのう」

ダンブルドア先生はそんな呑気なことを言いながら私へと向き直る。

「さて、時間が止まっているということとは、全てを説明してくれるということかのかの？」

「先生が何をしようとしているのか、後で話してくれるというのでしたら」

私の言葉にダンブルドア先生は微笑みながら頷いた。

私はDAの始まったきっかけから今までの活動の内容まで事細かにダンブルドア先

生に説明をする。

ダンブルドア先生はそれを静かに聞くと、一度頷いた。

「なるほどの。ハリーとハーマイオニーが中心になって活動が始まったと。君が計画したにしては情報管理がずさんじゃと思つたらそういうことじゃったか。じゃが安心するといい。この状況、わしが利用させてもらう」

「利用？」

私は思わずダンブルドア先生に聞き返した。

「暫し時間が欲しいのじゃ。実をいうと優雅に学校の校長をしているほどわしも暇ではないのう。いい機会じゃから少し自由に使える時間が欲しい」

私はダンブルドア先生が分霊箱の搜索を始めるのだと察した。

もしそうだとすると少し拙いことになる。

小悪魔と鉢合わせる可能性が出てくるのだ。

だが、引き留めることはできない。

「ヴォルデモートを倒す為……ですか？」

私は自分の立場や、去年ダンブルドア先生に打ち明けた心境などを利用して神妙な声でダンブルドア先生に尋ねた。

ダンブルドア先生は一度につきりと微笑むと、しつかりと頷く。

「君がハリーたちの手伝いをしてくれていたのも、その為なのじゃろう？ 騎士団には顔を出さじやろうし、話すのがこれで最後とは思わん。じゃがこれは急を要することじゃから伝えておこうかの。マリエッタを殺すでないぞ？ 怪我を負わすのも精神的に苛めぬくのも禁止じや。アンブリッジ先生のようにの」

「何の話やら」

「ほっほ。では、時間を進めておくれ。何も口出しするでないぞ。コーネリウスから何か聞かれても適当にはぐらかすのじや」

ダンブルドア先生は先ほどと同じ体勢を取り直す。

それを見て私も同じ体勢を取り時間停止を解除した。

「では、やっぱり貴方は私を陥れようとしていたのだな！」

時間を動かしした瞬間にファッジ大臣が喚く。

「その通りじや」

ダンブルドア先生は朗らかに言い返した。

ファッジ大臣は私とダンブルドア先生を交互に見ると、恐怖と喜びが入り混じったような顔をして軽く笑う。

「ウィーズリー！ 今のを全部書き取ったか？ ダンブルドアの告白を、一語一句」

「はい、閣下。大丈夫です」

パーシーは待つてましたと言わんばかりに答えた。

「すぐさま日刊予言者新聞に送れ！……さてさてダンブルドア。お前をこれから魔法省に連行する。そこで正式に起訴されアズカバンに送られるのだ」

「残念じゃがコーネリウス。わしはびつくりワクワク脱出ゲームを楽しんでいる時間など無いのじゃ。ということでも失礼させてもらおうかの」

ダンブルドア先生はそのまま校長室を出ていこうとする。

そこにファッジ大臣が連れていた闇祓いのもう一人の方であるドーリッシュが立ちはだかった。

ドーリッシュはまっすぐダンブルドア先生に杖を構えている。

「ドーリッシュ、愚かなことはやめるがよい。君がいもり試験でいい点を取ったのは覚えておる。しかし、君ではわしに勝てんじやろ」

完全に凶星だったようだ。

ドーリッシュと呼ばれた魔法使いは困ったようにファッジ大臣に視線を向ける。

「すると、お前はたった一人で私たち4人を相手にする気かね？ え？ ダンブルドア」「いやまさか。貴方が愚かにも無理やりそうさせるなら別じゃが」

私がダンブルドア先生に加勢しようと杖を振り上げるのをダンブルドア先生がたしなめる。

「そのまさかだ！ ドーリツシユ、シャツクルボルト！ かかれ！」

次の瞬間ダンブルドア先生は高速で杖を抜き放ちファツジ大臣、アンブリッジ、キンクスリー、ドーリツシユに失神の呪文を掛ける。

その余りの速さに私でも目で追うのがやっとだった。

次々と4人が床に倒れていき、積み重なる。

「さて、暎夜よ。マリエツタに忘却術を掛けておいてほしい。コーネリウスやアンブリッジ先生がこれ以上何かをしないうちにの。わしはちよつと出かけてくる。おお、そうじゃ。マクゴナガル先生にわしの不在を伝えておいてくれんか」

「先生はこれからどちらに？」

私が聞くと先生は人差し指を立て口に当てた。

「秘密じゃ。何せ極秘裏に動く必要があるのです。フォークス」

ダンブルドア先生の一声で不死鳥が宙を舞い先生はその尾羽を掴んだ。

その瞬間炎が上がり、ダンブルドア先生は姿を消す。

どうやら不死鳥を用いた特殊な姿現しらしい。

私は動くものいなくなった校長室を改めて見回す。

そして倒れている4人に忘却術を掛けここに私がいたという記憶を消すと、マリエツタの首根っこを掴んで引きずり校長室を後にした。

私は一度しつかりとマリエツタに失神呪文をかけ、起きないようにする。

その後時間を止め、必要の部屋前へと姿現しした。

私はそこで必要の部屋に念じる。

白く、真ん中に椅子が一つ置かれた部屋が欲しいと。

3 回部屋の前を往復して目を開けるとそこには小さな扉が現れていた。

私はその中にマリエツタを放り込むと自分も中に入る。

そしてマリエツタを中央にポツンと一つ置かれた椅子に鎖で縛りつけた。

「エネルギー、活きよ」

マリエツタに呪文を掛けるとマリエツタはすぐさま意識を取り戻す。

そして部屋を見回し、私の姿を捉えた。

「ひっ！」

マリエツタは小さく悲鳴をあげ、椅子から立ち上がろうとする。

だが巻き付いている鎖がそれを許さなかった。

「マリエツタ。貴方は何をしたのか理解できている？」

私はマリエツタのできものだらけの顔を覗き込む。

マリエツタは少しでも私から逃げようと体を振った。

「失望したわ。レイブンクロー生の貴方ならもう少し賢いものだと思ったのだけど。私

私は先ほどマリエッタのできものを刺した裁縫針をマリエッタに手渡す。

そしてマリエッタの両手を自由にした。

「その針を自分自身のどこでもいいから刺しなさい。刺した場所と刺した深さによって貴方がどれだけ反省しているか判断するわ。安心しなさい。針で刺した程度だったら私でも完璧に治してあげられるわ。だから、何処に刺してもいいわよ」

私のその言葉にマリエッタは絶望的な顔をする。

そして恐る恐る針を右手で持つと、左腕の二の腕へと近づけた。

「そう、貴方はその程度しか反省していかないのね。貴方は仲間を売ったのよ?」

私がそう言うとマリエッタの手が止まる。

「おすすめは眼球、爪と指の間よ。何でもないとところに刺すんだったら3センチは欲しいわね」

マリエッタの体が震え出し、針を取り落としてしまう。

私はその針を拾いマリエッタに渡しながら微笑みかけた。

「次落としたら2本に増やすわ」

「ご、ごめ……。ごめんなさい……」

マリエッタは顔を涙でぐちゃぐちゃにして私に謝る。

「反省しているのね?」

「反省しでいまず!!」

「じゃあできるわよね」

「……へ？」

私は微笑みながら1歩下がった。

マリエッタは私の言葉に驚いたのか、また針を落としてしまった。

「あら、残念ね。1本追加よ。そうね、1本だけ手伝ってあげるわ」

私は床に落ちた針を拾い上げマリエッタの指に近づける。

それをそのままマリエッタの爪の間に――

時間を止めて30時間余り。

私は一通りの拷問が終わるとマリエッタに治癒の呪文を掛け、拷問の痕を消し去った。

さらにその上から忘却術を掛け、記憶を操作していく。

そして自分がDAについて密告し、それを深く反省したという記憶だけを残し、DAが何をやっていったのか何故自分が反省したのかなどの記憶は綺麗さっぱり消し去った。

私はマリエッタが混乱している間に医務室に届け、自分は夕食を取りに大広間へと向かう。

その途中でアンブリッジに捕まった。

「咲夜。夕食前にちよつとお話を聞いてもらってもいいかしら？」

私は面倒くさそうにアンブリッジを見る。

そしてその後ろにドラコ率いるスリザリンの生徒がいることに気がついた。

「できれば早く夕食を取りたいと思っているので、巻きをお願いします」

「大丈夫。時間は取らせませんわ。貴方を校長補佐官に任命したいの。つまり、私の補佐官を務めて欲しいのよ。授業や試験は全部免除します。私の部屋にいれば好きなことをしてもいいわ」

なるほど、どうやらアンブリッジはダンブルドア先生に代わって校長になったようだ。

そして多分これは悪霊対策だが、私を補佐官に任命したいらしい。

「ですが今年はいくらも試験が……」

「全て免除して全ての試験に『O』の判定を付けます。悪い話ではないでしょう？」

「ふむ」

私は一瞬考え込んでしまう。

はつきり言つてダンプルドアがない今、学校でいい子ちゃんぶる必要もない。試験の点数も、あまり眼中にない。

そしてなにより私はアンブリッジが嫌いだ。

なので私はその提案を飲むことにした。

「いいですよ。お受けしましょう。……後ろのドラコたちは？」

「彼らは私が認定した私の親衛隊です。特別に監督生からも減点する権限を持っています」

アンブリッジ先生は得意げにそう言った。

ドラコは胸を張り私に『I』の形をした小さな銀バッジを見せてくる。

なんとというか、本当にバッジが好きだな hogwarts 生。

「先生、1ついいでしょうか。なつても良いですが約束して欲しいことがあります。一度約束したら必ず守ってもらいます」

その言葉にアンブリッジはキョトンとする。

「私に罰則をくださないこと、私を退学にしないこと、私の行動でグリフィンドールから減点しないこと。この3つを飲んでくださるなら私は校長補佐官になります」

アンブリッジは私に対して微笑む。

「補佐官に対してそんなことするはずないでしょう？ 約束しますよ」

「では契約の握手を」

私はアンブリッジに右手を差し出した。

アンブリッジは私の右手を握った。

私はそのままアンブリッジの手を引き床に座らせる。

「ドラコ、結び手をお願いするわ」

「ちよちよちよ、ちよつと待つて？ 破れぬ誓いを結ぶの？」

アンブリッジは咄嗟に手を振り解こうとするが、私は手を離さない。

「約束を違えないなら、何の問題もありません」

私の言葉を聞いてドラコが意気揚々と杖を取り出す。

アンブリッジも渋々それに応じた。

「私、ドローレス・アンブリッジは十六夜咲夜に処罰を下したり、退学にさせたりするこ

とをしません。また、彼女を口実にグリフィンドルから点を引きません」

「私、十六夜咲夜はドローレス・アンブリッジ校長が私を退任させない限り、校長であり

続ける限り、補佐官であり続けます」

次の瞬間ドラコの杖から蛇の舌のような眩しい炎が飛び出し、私とアンブリッジに巻

き付く。

そして両者の頷きをもって誓いを成立させた。

私は儀式が終わると満足げに頷き、そっと立ち上がる。

そしていい位置にあるアンブリッジの頭を思いつき蹴りつけた。

「——ッ!? こ、ここの感覚うううううう?!?!」

アンブリッジは口から血を流しながら目を白黒させて私を見る。

私は口を三日月の形に歪め舌を出し、アンブリッジに言った。

「ひっかかった馬鹿がここに一人」

私はもう一度アンブリッジの頭部を蹴飛ばす。

アンブリッジはようやく状況を理解したらしく、わなわたと拳を握った。

「い、今までののは全て貴方だったの?」

「はい」

「私を騙していたのね?」

「はい。そうです」

「貴方をた——………たい、退が……」

「いいんですか先生。破れぬ誓いを破ると死にますよ?」

途端にアンブリッジの顔色が真っ青になった。

ようやく自分が嵌められたことに気がついたらしい。

私はダメ押しにもう一発アンブリッジの腹を蹴飛ばすと、ニッコリと笑う。

「では、これから補佐官として精一杯先生の補佐をつとめるので、先生も死なない程度に頑張ってくださいね」

私は呆然と地面に転がっている汚物に背を向けると、大広間へと向かった。

いやあ、少し大変だったが頑張った甲斐あり、ようやくこの状況にありつくことができた。

これで私がアンブリッジになにをしようが、私が学校で何をしようが退学にできなければ減点することもできない。

私はグリフィンドールの机に着くと平然とした表情で夕食を取り始めた。

花火とか、進路指導とか、自由とか

アンブリッジが校長になった次の日の朝。

私はグリフィンボールのテーブルの隅に腰かけ、フレッドとジョージと話していた。勿論話題はダンブルドア先生がいなくなったことに関してだ。

「つまり、今こそ弾けろという火星の暗示だ」

フレッドが茶化して言う。

だが、私もジョージも同じような意見だった。

「今まで俺たちはダンブルドアがいたから自制してきた。ちよつとした混乱は起こしてきたが最後の一线は常に守っていた。そうだろうか？」

「ああ」

「ええ」

ジョージの言葉に私とフレッドは頷いた。

「聞いて、2人とも。耳寄りな情報があつてね。実は私、今アンブリッジに何をしても退学にも処罰の対象にもならないのよ？」

私は自慢するように2人に言う。

2人とも目を丸くして驚いた。

「マジかよ……一体何をしたんだ？ 弱みを握ったとかか？」

「破れぬ誓いを結んだの」

その言葉に2人が同時に口笛を吹く。

「すっげえなそれ。俺も昔ロン相手に結ぼうとしたことがあるけど……」

「ああ、パパが烈火の如く怒ったな。珍しいことに」

「なにやってるのよ……。なんにしてもアンブリッジで商品を試したいときは私に言いなさい」

私はそう得意げに言ったがフレッドが指を左右に振った。

「ところがどっこい。商品は既に完成している。店も殆ど出来上がった」

「しいてお願いするとしたら俺たちの邪魔をしないで欲しいってところだな。俺たちだけでやった方が商品の良い宣伝になる。おおっと勘違いはするなよ？ やっこさんに手を出すなって言ってるわけじゃない」

フレッドは教職員テーブルからこちらを睨んでいるアンブリッジをチラリと見た。

「死なない程度に盛大にやってくれ」

「ああ、盛大にね」

「勿論。あのカエル相手に容赦はしないわ」

私たちは器用に3人で握手をすると、今日の昼過ぎに計画している花火大会の打ち合わせを始める。

今日一日は騒がしいものになるだろう。

昼食を手早く食べ、私と双子は玄関ホールへと来ていた。

フレッドとジョージは次々と花火に火をつけていく。

「ウイーズリーの暴れバンバン花火さ。今日でありつただけの在庫を使っちゃおう」
「手伝うわ」

私も喜々として大量の花火に火をつけた。

お嬢様は花火が好きだ。

たまに紅魔館でも扱うことがあるが、この2人の花火は格別だった。

見た目は小さい花火なのだが、火をつけると同時に大きなドラゴンの姿になり火の粉を振り撒きながらバンバンと激しい爆発音を響かせる。

大きなネズミ花火はUFOのように縦横無尽に城中を飛び回り破壊活動を行っていた。

ロケット花火は壁に当たると方向を変え、いつまでも飛び続けている。

「凄いわ。2人に金貨を託して正解だったわね」

「そりやどうも」

「お嬢さまさまってね」

普通花火は数十秒で火薬を燃やしきってしまうが、この花火にはそのような問題はな
いらしい。

火をつけて少し時間が経つが、まだ花火は元気なままだった。

「一体なにが……ぎゃあー！」

次の瞬間アンブリッジが階段を下りてくる。

私は反射的に手に持っていたロケット花火をアンブリッジに向けて発射していた。

ロケット花火はまっすぐアンブリッジへと飛んでいくとお腹に当たり大爆発を起
す。

その衝撃でアンブリッジは数メートルほど吹っ飛んだ。

フレッドとジョージはアンブリッジに見つかる前に何処かに隠れたらしい。

既に私の近くにはいなかった。

「ほう、凄いわね。アンブリッジは火傷をしてない。普通なら体が真っ二つになつても
おかしくないのに……。安全面にも気を使っているということかしら」

「な、何をするんですか！ グリフィンドールから……」

「グリフィンドールから、なんですか？」

アンブリッジは減点しようとして咄嗟に口を噤む。

私は手に持っていたロケット花火に火をつけもう一度アンブリッジへと飛ばす。

アンブリッジは今度は杖を取り出すと消失呪文を唱えた。

アンブリッジの杖から放たれた呪文はまっすぐ花火へと飛んでいき、見事命中する。

その瞬間ロケット花火の本数が10本に増え、その全てがアンブリッジの体に命中した。

「あはははは。あー、おかつしい」

私はケタケタと笑いながら他の花火にも火をつけていく。

私は周囲をぐるりと見回した。

すると廊下に掛かっているタペストリーの隙間から2本の右手が突き出ておりその

どちらかが親指を立てている。

多分フレッドとジョージのものだろう。

その手はアンブリッジが起き上がると同時にタペストリーの隙間へと引っ込んだ。

「あ、貴方こんなことをしてどうなるか分かっているの!？」

「どうするんです?」

「あ……ぐっ」

アンブリッジは苦しげに呻く。

私は高速で動いてアンブリッジに接近すると横腹を蹴つ飛ばした。

あばらが数本折れたかもしれないが、まあいいだろう。

肺に刺さっていないければ致命傷ではない。

「それでは私は授業へと向かいます。花火は校長である貴方が何とかしてくださいね」

「め、命令します！ 校長として補佐官に命令します！ 私の言うことを聞きなさい!!」

「補佐官をやるとは言いましたが貴方の言うことを聞くとは言ってません」

私はびしやりと言いつけると変身術の教室に向かった。

その日1日は学校中が大混乱だった。

あちこちで双子お手製の花火が爆発し、光り輝く。

そして何より驚いたのは他の先生の対応だろう。

花火程度自分たちでなんとでもすることができはすなのに毎回アンブリッジを呼んで対処させるのだ。

そして決まっそう言う。

「先生、どうもありがとうございます。花火程度どうにでもできるのですが、なにしろそんな権限があるかどうかはつきりわからなかったもので」

どうやら先生方もダンブルドア先生を追い出されてご立腹のようだった。

まあ、その原因は私なのだが。

ダンブルドア先生は私に伝言役を任せた。

私は若干話を膨らませて他の先生方にダンブルドアの失踪を伝えたのだ。

簡潔に言ってしまうえば「なんもかんも魔法省が悪い」というやつである。

そのせいでアンブリッジはスリザリン以外の生徒と教職員から鼻つまみ者にされているのだ。

なんにしても、今日一日は楽しく過ごせそうである。

その日の夜。

私は談話室で花火の予約を取っているフレッドとジョージを見ながらハーマイオニーを待っていた。

ハーマイオニーは今興奮した声で双子に賞賛を送っている。

どうやら私と同じく少し反抗的な気分らしい。

ロンもその光景を目を丸くして見ていた。

ハーマイオニーは跳ねるように私たちのいるテーブルへと戻ってくる。

「大丈夫？ 気分は悪くないか？」

ロンが心配するような顔をして言った。

「ええ、すこぶる良好……とは言えないわね。ちよつと反抗的なもの」

「そう、じゃあそこに座りなさい」

私は表情を作りハーマイオニーに座るように促す。

ハーマイオニーは私の横の椅子に腰かけた。

「何を勘違いしているの？ 床に、正座しなさいと言ったのよ」

ハーマイオニーはそれを聞いた瞬間ビクンと体を震わせる。

ロンとハリーは正座という言葉が聞きなれないのか首を傾げた。

「星座？ 星でも見るのか？」

ロンのそんな言葉を尻目にハーマイオニーはおずおずと私の前に正座する。

そして顔を伏せた。

「なんで正座させられたのか分かってるわよね？」

ハーマイオニーは気落ちしているようにじつと黙り答えない。

ハリーとロンは何が始まったのか理解したのか、急に先ほどまで全く手についていなかった宿題に取り組み始めた。

「マリエッタの額に浮かび上がったアレは何？」

「……いです」

「聞こえないわよ。もう一回」

「呪いです」

ハーマイオニーが今にも泣きそうな声で答えた。

いや、実際もう半分泣いている。

「ここで一つ問題を出すわ。もし私が今貴方に「私は死喰い人なんです。」って告白した

ら、普通信じる？」

「信じません」

「そうよね。じゃあ告白した瞬間左手に闇の印が浮かび上がったら？」

「信じます」

「そうよね？ で、マリエッタのアレは何？」

そこまで丁寧に説明して、ようやく理解したようだった。

ハーマイオニーは小さく「あ」と声を漏らす。

そう、マリエッタの額に密告者と浮かび上がらなければD Aの活動はバレなかったのだ。
だ。

マリエッタの言葉になんの信憑性もなければいくらでも話を誤魔化すことができる。

「わ、わたし……こんなことになるとは思わなくて……」

「嘘ね。こんなことになると思わなかったらあんな呪い掛けないでしょ？」

「でも咲夜だってあの呪いの改変を——」

「私は発動条件を弄っただけよ。中身までは確認してないわ。だから今、ここで、貴方を正座させているのよ？ わかる？」

私は椅子から立ち上がりハーマイオニーの顔を上から覗き込む。

そしてゆっくり囁いた。

「ねえ。私今何をしてても退学にならないの」

勿論嘘だが、その言葉を信じたハーマイオニーはプルプルと震え出す。

目からは涙が零れ、その様子をチラチラと観察しているハリーたちは一層宿題に集中した。

「取り敢えずここは人目につくから女子寮へと行きましょうか」

「い、いや……」

「返事は？」

「……はい」

私はハーマイオニーの腕を掴むと嫌に優しく女子寮の方へと引つ張っていく。

ハーマイオニーはまるで屠殺場へ連れていかれる人間のような目をしていく。

私はそのままハーマイオニーをハーマイオニーのベッドまで引つ張っていき、そこに腰を下ろさせる。

私はその隣へと座った。

「ねえ。ハーマイオニー。人を管理するって、どういうことだか分かる？ 人の上に立つって、どういうことだか分かる？」

私はできるだけ優しい声を作ってハーマイオニーに語り掛ける。

ハーマイオニーは噁り泣き始めた。

「組織の上に立つ人間はね。責任を背負うのよ。特にDAのような何かに逆らうような、秘密裏に行う活動の場合は特にね。今回、責任を取ったのは誰？ ハリー？ ハーマイオニー？」

「……ち、違うわ。責任を取ったのは……全く、関係ない、ダンプルドア先生。先生は私のせいで……。私の……ミスで……」

ボタボタと大粒の涙がハーマイオニーの膝を濡らしていく。

「そう。まったく関係のないダンプルドア先生が全ての責任を背負い込んでくれたわ。だからハリーも、貴方も退学にならずに済んだ。……おかげであの最悪が校長になったけど。本来なら責任を背負うのはハリーだったはずなのよ」

「そう、そうよね。私、いつもいつも肝心なところでミスばかり……私……私……」

ハーマイオニーの体の震えが更に強くなった。

この震えは私に対する恐怖の震えではない。

もつと本質的な、ハーマイオニーの根底に関わるものだろう。

私は優しく肩を抱き、ハーマイオニーに体重を預けさせた。

「貴方の不安の種を言い当てるわ。貴方は失敗が怖いのだよ。他の何よりも失敗することを恐れ、成功してもそれは喜びではなく安堵でしかない。成功することが普通になつてしまつてゐる。だから人一倍勉強しないと気が済まないし、テストも一番を狙いたがる。だから貴方は失敗するのだよ」

私がそう言い切るとハーマイオニーの体が小さく跳ねた。

「叱られたことのない子供が社会に出てから急に叱られて大きなショックを受け、立ち直れなくなるのと同じ。貴方は失敗を知らなすぎさる。そのせいで最後の詰めが甘かったり失敗したときに人よりショックを受けることになるのだよ」

「でも——じゃあ、私。どうすれば……」

「本当に大切だと思う部分は人に頼りなさい。そして何度も何度も考えなさい。1から10まで完璧にしなくていい。一番大事な部分だけにありつたけの力を使うの。これからの世の中、失敗は許されない情勢になつていくわ。そういつたときに仲間を守るかどうかは貴方次第よ」

私はそのままペタンとハーマイオニーの頭を太ももに乗せる。

ハーマイオニーはそのまま声をあげて泣き始めた。

私は優しくハーマイオニーの頭を撫でる。

そしてハーマイオニーを乗せたままベッドに倒れ込み、柄にもないことをしたと少し反省した。

まあでも、こういうのもたまにはいいだろう。

私はそのままベッドの上で目を瞑る。

ハーマイオニーもそのうち私の上で寝てしまっただろう。

だとしたら私もこのまま寝てしまう方が良い。

私は睡魔に襲われるまま夢の世界に引きずり込まれていった。

ロンドンの街。

私は目の前にいる人間を殺した。

その人間は死んだことに気がつかない。

次にテーブルに座っている人間を殺した。

その人間は死んだことに気がつかない。

次に歩道を歩いている人間を殺した。

その人間は死んだことに気がつかない。

次に花屋の店員を殺した。

その人間は死んだことに気がつかない。

次に親と歩いている子供を殺した。

その人間は死んだことに気がつかない。

誰も殺されたことには気がつかない。

死んだことに気がつかない。

誰も私を見ていない。

誰も自分自身を見ていない。

動かない。

動けない。

私が鏡を見てそこに映っている人間を殺した。

その人間は死んだことに気がつかない。

その人間は死んだことに気がつかない。

その人間は死んだことに気がつくことはない。

「全部消えて無くなってしまうばい」

——ッ!?

私は急に誰かの声が聞こえてベッドから跳ね起きる。

その瞬間太ももの上に乗っていたハーマイオニーを落としてしまおうが、そんなことに構っている暇はなかった。

私は必死に周囲を見渡し、声の主を探す。

だが、そこには誰もいなかった。

「夢？　ではないと思うけど……」

私は声が出た方向を鋭く睨みつける。

だが、やはりそこには誰もいなかった。

私は首を傾げつつもベッドに戻り布団を被る。

そして周囲に警戒しつつ眠りへと入った。

イースター休暇も終わりに差し掛かる頃、談話室の掲示板に進路指導に関するの掲示がなされた。

それと共に魔法界の職業を紹介するピラや小冊子が談話室のテーブルに積まれるようになる。

「ホグワーツの5年生はもう将来に関して考えなければいけない歳になったというこ

とだろう。

掲示板のリストを辿ると、私はどうやら月曜日の朝食が終わってすぐにマクゴナガル先生の部屋に行かなければならないようだった。

つまり休暇が終わってすぐだ。

まあ、進路指導など私には必要ない。

卒業、いや無事卒業できるかどうかも分からないが、卒業と同時に紅魔館への永久就職が決まっているようなものだ。

……就職とは少し違うが、でもマクゴナガル先生にはそう言うしかないだろう。

月曜日の朝、私はいつものようにフレッド、ジョージと朝食を共にする。

彼らの話では、今日の放課後にホグワーツを発つらしい。

まさに新しい人生の始まりというわけだ。

「おべんちゃらのグレゴリー像のある廊下の方に歩いて来れば、俺たちの雄姿が見れると思うぜ」

「ああ、その間にハリーも何かしでかすようだが、まあ知ったこっちゃないな」

「個人的にはそのハリーの話を知りたいんだけど……」

私はトーストを齧りながらアンブリッジの口の中に鼻血ヌルヌル・ヌガーを投擲する。

ヌガーは見事アンブリッジの口の中に入り、その瞬間盛大に鼻血が噴き出した。

「お見事」

「凄い即効性ね。あつという間にアンブリッジが血だらけになったわよ。……あれ、失血死するまで止まらない感じ？」

「残念なことに失血死一步手前で安全装置が働く。ああ、残念なことにな」

ジョージがニヤニヤ笑いながら私にケチャップの瓶を渡してきた。

私はその意味を察しケチャップの瓶をアンブリッジへと投擲する。

アンブリッジは頭からケチャップを被った。

「お見事」

「……つっても外見あんまり変わらないな。元からピンクだし今は鼻血で赤いし」

アンブリッジ先生はキツとこちらを睨みつける。

私は知らん顔してトーストを齧り続けた。

アンブリッジ先生は急いで医務室へと駆けていく。

このままだと失血死すると思っただろう。

朝食も終わると生徒たちは1限目の授業を受けるために教室を移動していく。

私はその流れに逆らいマクゴナガル先生の部屋を目指した。

マクゴナガル先生の部屋には一度来たことがある。

私は廊下を進み部屋の前まで行くと、ドアをノックした。

「どうぞ？」

中から声が聞こえてきたので私は静かにドアを開け中へと入る。

そこには先ほど医務室に駆けていったアンブリッジ先生が隅の方に立っていた。

「お掛けなさい。」

マクゴナガル先生は広げられた資料を机の隅に積み直しながら私に言う。

私はマクゴナガル先生の向かい側へと腰を下ろした。

「さて咲夜。この面接は貴方の進路に関して話し合い、これからの学年でどのような学科を継続するかを決めるためのものです。貴方の場合進路は決まっていますでしょうし、あとはどの学科を選択するかだけを——」

「エヘン、エヘン！」

「——相談するだけです。貴方の場合ですと変身術や魔法薬学、魔法生物飼育学などが——」

「エヘン、エヘン！」

マクゴナガル先生はアンブリッジの咳ばらいを無視する。

いや、アンブリッジにのど飴を一つ差し出した。

「魔法生物飼育学などが適しているでしょう。館には危険なペットも多いと聞きます。」

それと呪文学も——」

「エヘン、エヘン」

「校長。何か御用でしようか?」

マクゴナガル先生はイライラした表情でアンブリッジに聞いた。

アンブリッジはできるだけ私と距離を取りつつマクゴナガル先生の方へと近づいていく。

「十六夜咲夜は一体どのような職場を希望なさっているの? 当人の間だけで話を進めてもらっては困りますわ」

「当人の間だけで話を進めるべき案件です」

「校長命令です。教えなさい」

アンブリッジはできるだけ私を見ないようにしてマクゴナガル先生を問いただす。

マクゴナガル先生は軽くため息をつけてアンブリッジに教えた。

「彼女は使用人として屋敷で働く予定です。いや、既に働いています。卒業してもその道を外れることはないでしょう」

そのことはアンブリッジも知っているはずだ。

アンブリッジは顔にニヤニヤと笑みを浮かべた。

「まあ、既に使われる身ということね。一体何処の屋敷で働いているの?」

「紅魔館です」

「あら、聞いたことのないお屋敷ですわ」

アンブリッジ先生は持っていたクリップボードにガリガリと何かを書き記す。

その様子を見てマクゴナガル先生は話を戻した。

「貴方としてはこれが続けたいといった授業はありますか？」

「いえ、卒業できれば結構なんでもいいです。勿論、無様な点数は取れませんが」

全科目『T』など取ったら恥ずかしさの余り自殺するかもしれない。

ハーマイオニーではないが、取っている科目の成績は全て『O』を取るつもりだ。

「ですが、ホグワーツにいる間は貴方は学生です。学生の本分は勉強であつて——」

「学年首席に言う話ではないですよね？ それ」

「おっと、そうでした。貴方に対し多くを語る必要はないのは確かです。では——」

「エヘン、エヘン」

マクゴナガル先生は呆れたようにアンブリッジを見る。

アンブリッジは軽く資料に目を通すと、何でもないことのように言った。

「紅魔館……確かスカーレットという吸血鬼が当主の屋敷ですわよね。貴方、吸血鬼なんか仕えているの？ あのような野蛮で低俗な生物……ど、どうしたのですマクゴナガル先生!？」

しく腐食し、生えている歯が全て重度の虫歯に冒されたような痛みを発する。

磔の呪文など遠く及ばないほどの痛みがアンブリッジを襲っていることだろう。

「吸血鬼がなんでしたっけ？ 先生。もう一度お願いします」

私は地面を転がっているアンブリッジの顔を蹴飛ばす。

マクゴナガル先生は急いでアンブリッジへと近づくと何が起こったのか理解できないように目を白黒させた。

「早くマダム・ポンフリーのところに連れていったほうがいいですよ。フツ化水素酸つて猛毒ですの」

マクゴナガル先生は博識だ。

フツ化水素酸と聞いただけで何が起こったのか察したらしい。

アンブリッジの口へと清めの呪文を使うと物凄い勢いで医務室へと引きずっていった。

これでアンブリッジも少しは懲りればいいのだが。

何というか、蹴り続けてもフツ化水素酸口に含ませてもショック死しないところを見るに、神経だけは凶太らしい。

なんにしてもこれで進路指導は終了だ。

私は軽く伸びをすると既に始まっている1限目の授業へと向かった。

結局マダム・ポンフリーの治療が適切だったせいでアンブリッジは昼には復活した。フツ化水素酸の怪我をそこまで最短で治すとは、やはりホグワーツの医務室は凄い。いや、これが呪いによる怪我ならもつと治すのに時間が掛かるのだろうが、フツ化水素酸による怪我には魔術的な要素は何もない。

消え去った骨すら一晩で再生させる腕だ。

焼け爛れぐらいちよちよいのちよいなのだろう。

これが生徒だったらポピーも長いことアンブリッジを入院させただろう。

だがアンブリッジは治療が終わった瞬間医務室から放り出されたらしい。

昼食の席で私はアンブリッジを発見したが、アンブリッジは私と視線が合っただけでガクガクと震え出し、必死に目を伏せる。

私はそんな様子にニヤリと笑うと着々と午後の準備をしているフレッド、ジョージに話しかけた。

「調子はどう?」

「バツチリ。なあ」

「おうともよ」

2人は顔を見合わせ、ニヤリと笑う。

「悪ガキ大将の座は咲夜に譲ろう。精々あのクソババアを困らせてやれ」

フレッドが楽しそうに笑いながら私の手に暴れバンバン花火を押し付けてくる。

「あら、お願いしなくても争うようにその座を目指すわよ。色んな生徒がね」

私は花火を鞆の中へと仕舞う。

フレッドとジョージはホグワーツで食べる最後の料理を精一杯腹に詰め込むと満足した顔で大広間を去っていった。

これはホグワーツに限った話ではないが、目的もなく生きている人間が多いような気がする。

何をするでもなく、ただ流されるように生きている人間。

特に裕福な国の人間はそうだ。

そう思えばあの2人の行動は非常に夢に満ち溢れている。

自らが生きる目的というものをしっかりと見ているような気がするのだ。

午後の授業が終わると同時にハリーはアンブリッジの部屋がある方向へと駆けだしていく。

ハーマイオニーはそれを必死になって止めようとしていたが、ハリーはその制止を完全に無視した。

フレッド、ジョージが言っていたハリーの用事とやらだろうか。

ハーマイオニーは心配そうな顔をしてハリーの後ろ姿を見ている。

私はその後ろからハーマイオニーに話しかけた。

「ハーマイオニー、ハリーがどうかしたの？」

ハーマイオニーは何かを迷っているかのように表情を曇らせると、ロンの顔を見る。

どうやら意見を求めているようだったが、ロンは肩を竦めるだけだった。

「……あのね、咲夜」

ハーマイオニーは決心がついたのか、ようやく口を開いた。

「ハリーはシリウスに会いに行こうとしているの。どうしても今話したいんですっ

て。私は止めたんだけど言っても聞かなくて……」

「どうやって話をするつもりなの？」

「多分煙突飛行粉だと思うわ。アンブリッジの部屋に行くって言ってたから。咲夜、ハ

リーを止めた方がいいのかしら」

ハーマイオニーはそう言って表情を曇らせる。

私はそんなハーマイオニーに言った。

「そこまで深刻に考える必要はないわ。ロンの兄を信じなさい。彼らの陽動は凄いわよ。……でも心配なのは確かね。私はブラック邸に先回りしておくわ」

「ちよつと待って、どうやって先回りするの？ その方法が安全なのだとしたら是非ともハリーにもそつちの方法を取らせて……」

「無理よ。それに何事も経験だわ」

私はハリーの後を追うように走り出す。

そして角を曲がった瞬間時間を止めてブラック邸へと姿現しした。

そう言えばここに来るのもクリスマス休暇以来だろうか。

私は時間を止めたままブラック邸の中を歩き回る。

今この屋敷にいるのはルーピンとブラック、そしてクリーチャーだけだった。

私は急に襲われないようにルーピンの真ん前に立って時間停止を解除する。

ルーピンは急に現れた私に一瞬体を震わせたが、すぐに冷静な表情へと戻った。

「やあ、咲夜か。久しぶりだね。……何かあったのか？」

ルーピンは厨房の暖炉の前のテーブルに腰かけている。

その位置ならハリーがきたことにも気がつけるだろう。

「ええ、何かあったのよ。ハリーがここに来るわ。多分頭だけ。ブラックと緊急で何かを話したいみたい」

その言葉にルーピンは目を見開く。

そして急いでブラックを呼びに行った。

「シリ……咲夜？」

次の瞬間ハリリーの顔が暖炉から出てくる。

そして困惑したような声を出した。

「あれ……談話室の暖炉に出ちゃったのかなあ」

「いえ、ここはブラック邸で合っているわよ。すぐにルーピンとブラックが来るわ」

私がそう言うのと今度こそハリリーは目を丸くした。

「何で咲夜がそこにいるんだ？」

「騎士団員だから？」

「……最初から素直に咲夜に相談すればよかった」

ハリリーはしょぼんと表情を暗くした。

中々話が私の耳に入ってこないと思ったら、どうやら意図的に隠蔽していたらしい。

そうこうしているうちにルーピンがブラックを連れて厨房に帰ってきた。

「どうした？」

ブラックはちらりと私を見たが、すぐに暖炉の方へと駆けていく。

「大丈夫か？ 助けが必要なのか？」

ブラックは暖炉の煙に咳き込みつつハリーに聞いた。

「ううん、そんなことじゃないんだ。僕……ちよつと話したくて。父さんのことで」
ルーピンとブラックは驚いたように顔を見合わせる。

ハリーは一瞬私を気にしたようだが、時間がないと言わんばかりに話し始めた。

ハリーは閉心術の授業中に憂いの篩という魔法具でスネイプ先生の過去を見たらしいのだ。

その過去には苛められるスネイプ先生と、スネイプ先生を苛めているハリーの父親があつたらしい。

その振る舞いはスネイプ先生がいつも言うように、傲慢そのものだったようだ。

そしてそれはハリーの想像していた優しい父親とは程遠い存在だったらしい。

ハリーがその話をし終えたとき、ブラックもルーピンも一瞬黙った。

まさに凶星を突かれたといった表情だ。

少し間をあけてルーピンが口を開いた。

「ハリー、そこで見たことだけでジェームズを判断しないでほしい。あの頃はまだ15歳だったんだ」

「僕だつて15だ！」

ハリーは何か焦るような表情で答えた。

今度はシリウスが口を開いた。

「いいかハリー。ジェームズとスネイプは出会った瞬間から憎み合っていた。そういうことがあるということは、君にもわかるね」

「うん。でも父さんは特に理由もないのにスネイプを攻撃した。ただ単に、シリウスおじさんが退屈だと言ったからなんだ」

「なるほど、シリウスもジェームズも昔から傲慢で嫌なガキだったわけね」

「ああ、君のようにな」

私の軽口をブラックは軽く受け流す。

まあ何というか、傲慢で嫌なガキというのは否定できない。

「当時から相当馬鹿をやったんでしょう?」

「ああ、まさに君のようにな。だが、私とジェームズだけじゃない。みんな馬鹿だった。

……あー、ムーニーはそうでもなかったが」

ブラックはちらりとルーピンの顔を見る。

そして言葉が続けた。

「特にジェームズはリリーがそばにいつも馬鹿をやったものだ」

「どうして母さんは父さんと結婚したの?」

ハリーは情けなさそうに言った。

「母さんは当時父さんのことが大嫌いだったくせに！」

「それは違う」

「7年生のときにジエームズはリリーとデートをし始めたよ」

「ジエームズの高慢ちきが少し治ってからだ」

「そして面白半分にかいを掛けたりしなくなってきたよ」

ハリリーの叫びにブラックとルーピンは口々にジエームズのフォローをする。

ハリリーはまだモヤモヤしているようだ。

まあ、それはそうだろう。

自分が信じていたものが崩れるというのは、つらい。

「ハリリー、時間よ。そろそろヤバイわ」

私は懐中時計を取り出して時間を確認する。

すでに20分が経過していた。

「帰らなくっちゃー！」

ハリリーは慌てたように叫ぶとポンという音と共に消えた。

私とルーピンとブラックの間に気まずい沈黙が流れる。

「いやあ、ハリリーがジエームズに似なくて良かった。リリーの子だよ。あれは」

ルーピンがしみじみという。

その言葉にシリウスは苦笑した。

「ジエームズが聞いたら泣くぞぞ？」

2人で顔を見合わせて苦笑いする。

なんというか、仲がよろしくて何よりだ。

「それじゃあ、私も城に帰るわ。何か伝えておくことはある？」

私が2人に確認すると、ルーピンが口を開いた。

「スネイプの閉心術だけはしっかりとやるように伝えておいてくれ」

「了解」

私は時間を止めてホグワーツの女子トイレの個室へと姿現しする。

そしてそのまま玄関ホールへと急いだ。

その瞬間私の横をフレッドとジョージが箒で通り過ぎる。

「じゃあな！ ホグワーツは任せませ!!」

2人はそのまま正面の扉を蹴り開け、ホグワーツの空へと飛び去って行った。

……残念、どうやら2人の雄姿を見逃してしまったようだ。

2人を追うようにしてアンブリッジや親衛隊のドラコが玄関から外へ飛び出している。
く。

その後ろではポルターガイストのピープズが2人に敬礼の姿勢を取っていた。

ピーブズが生徒にあそこまで敬意を払うところを私は見たことがない。それほどまでにあの2人の影響力は大きかったということだろう。

フレッドとジョージの自由への逃走はそれから数日の間、生徒の間で何度も繰り返して語られた。

まさに2人はホグワーツの伝説となったのだ。

そしてどうやらフレッドとジョージはホグワーツに置き土産を残していったらしい。東棟の6階の廊下に大きな沼地を作ったのだ。

フィルチさんとアンブリッジは必死にこの沼地を消そうと奮闘したが、成功していない。

この沼地に関しても他の先生方は手を貸そうとはしなかった。

フリットウィック先生だったら、一瞬であの沼地を消すことができるだろう。

だがそんなことでアンブリッジの苦勞は終わらない。

私を筆頭に2人に触発された生徒が悪ガキ大将の座を目指して競い始めたのだ。

ホグワーツの廊下のあちこちにクソ爆弾や臭い玉が落とされ、酷い悪臭を漂わせている。

アンブリッジの部屋は更に酷い。

もう既に人の住める状況ではなくなっている。

まさにホグワーツは大混乱になっていた。

もつとも、その筆頭は私とピーブズだ。

私はとにかくアンブリッジを集中的に攻撃し、ピーブズはとにかく無差別に城中を荒らし回る。

私がアンブリッジの食事にゲーゲー・トローチを混ぜている時にはピーブズは大広間にタランチュラの大袋を放り込み、私がアンブリッジの腹部を蹴飛ばしている時には、ピーブズは積まれた羊皮紙の束を暖炉のある方向へと押し倒していた。

それだけではない。

ずる休みスナックボックスの影響で普段あまりヤンチャをしない生徒もおかしな行動を取るようになった。

アンブリッジが教室に入ってくるだけで多くの生徒が気絶したり吐いたり高熱を出したりするのだ。

そして皆決まって「アンブリッジ炎です」と答える。

アンブリッジはどうしてそんなことになっているか全く理解できていないようだったので、取り敢えずふくらはぎを蹴って転ばせておいた。

クイディッチ・シーズンの最後の試合、グリフィンドール対レイブンクロー戦は5月の最後の週末に行われることになっている。

その頃になると学校は少し平穏を取り戻したようだった。

いや、皆がその状況に慣れたと言い換えてもいいかもしれない。

グリフィンドールは優勝候補で、この試合に勝てば優勝が決まっていた。

ロンは相変わらず下手だったが、まあ今回も前回みたいに素早く終わらせればいだろう。

試合の日の朝食の席で、ジニーが少し遠慮がちに私の方へと近づいてきた。

「……咲夜、今回も前の試合と同じようになるの?」

「私としてはその予定なのだけど。何か不都合が?」

「……。私、頑張るわ。咲夜がレイブンクローの選手を全滅させる前にスニッチを取ってみせる」

ジニーは何かを決心したように私に向かって言い切った。

私はテーブルから立ち上がり、ジニーの頭に手を乗せる。

そして優しく撫でた。

「期待しているわよ」

私はその手を頬へと滑らせ、最後に力強く肩を叩く。

ジニーは力強く頷いた。

「さあ始まりましたクイディッチ最終戦。実況は毎度おなじみの僕、リー・ジョーダンがお送りします。えー、見どころの選手と言ったらやっぱり十六夜咲夜選手でしょうか。フレッド、ジョージの2人が失踪する前からアンブリッジに猛威を振るっていた彼女ですが、前回の試合ではハツフルパフの選手を全て箒から叩き落とすという偉業を見せてくれました。今回もその細腕からどのような強打が放たれるのか注目していきたいところです。そして前回可愛らしく涙目になっていたジニー選手。あれから練習を積み重ね、試合前のインタビューでは「レイブンクローの選手のためにも全力でスニッチを掴みにいきます」と話していました。さあそして何よりも気になるのはアンジェリーナ選手の精神状態でしょうか。前回の試合では我を忘れてゴールにクアツフルを入れ、試合後は赤面していた彼女ですが……おおっといい笑顔！ 今日は大丈夫なようです。これは安心だー！ 対するレイブンクローは毎度おなじみチョウ・チャンをシーカーに置いたチーム編成です。チエイサーの気合も十分、デイビーズなど現在進行形で

咆えています。おotto? レイブンクローのビーターが中々出てきませんね……へい! ビーターびびってる!!」

「ジョーダン! 選手を煽らない!!」

「了解です、先生」

私はジョーダンの実況を聞きながらピッチに立つ。

グリフィンボールの観戦席もレイブンクローの観戦席も気合十分だ。

「咲夜、ほどほどにね」

アンジェリーナが笑いながら私の背中を叩く。

「それは貴方の方でしょうか?」

「あー……まあ今回は大丈夫だ。ジニーも気合十分だしね。ただ一つ心配なのが……」

アンジェリーナはロンの方を見た。

ロンは歓声のせいもあってか半分諦めたような顔をしている。

そう、スリザリンはまたウィーズリーは我が王者を歌っていた。

「逆転できる点数までならいいんだけど、調子が悪いととことん駄目な男だからさ」

「さあ、始めるわよ!」

レイブンクローのビーターがフーチ先生に引きずられながらピッチに出てくる。

どうやら自分のチームの選手を守り切れるか不安なようだ。

「正々堂々と戦うのですよ!」

フーチ先生は選手を並ばせると各種ボールを解き放つ。

次の瞬間ホイッスルを鳴らした。

試合開始だ。

「さあホイッスルが高らかに鳴り響き選手たちが一齐に飛び立ちました。クアツフルを取ったのはレイブンクローだ! レイブンクローのデイビーズが一直線にゴールを指していきますが、あーつと!! ここでブラッジャー直撃!! 後ろを確認せずに飛んでいたのが仇となったようです。咲夜選手百発百中! ここで彼女の経歴を振り返ってみましょう。えー、十六夜咲夜選手、2年生の時に数十匹のピクシー妖精をナイフで全て惨殺。4年生の頃にはダンブルドアをも出し抜いて対抗試合の代表選手の座を勝ち取りました。その後見事ナイフ捌きでドラゴンを討伐するなど、生徒とは思えない魔法の腕前を持ち合わせております。狙った獲物は百発百中! 決して殺りそこねることとは——」

「試合の実況をなさい!!」

「はい、はい! マクゴナガル先生」

私はレイブンクローの司令塔であるデイビーズを真っ先に落としました。

デイビーズは担架に乗せられてピッチから退場していく。

その様子を見て殆どのレイブンクロー生が青ざめていた。

私はブラッジャーを追いかけ、クラブ一本で両端を交互に叩きその場に留める。

そして近くを通ったレイブンクローのチェイサーに打ち出した。

ブラッジャーは真つすぐチェイサーに向けて飛んでいくが、途中でレイブンクローのビーターが割って入る。

ブラッジャーはビーターの側頭に当たり、レイブンクローのビーター一人はそのまま地面へと落ちていった。

「よし、2人目」

私は一度本気でブラッジャーをアンブリッジへと叩き込む。

本来ならばブラッジャーはピッチの外へは出ないようになっていたが、私が靈力で操作しているので普通にアンブリッジの顔面へと吸い込まれる。

そのままアンブリッジの顔面を陥没させた。

「おおっと！ グリフィンドール10点！」

「ジョーダン、あれはゴールポストではありませんし、クアッフルでもありません」

「失礼しました。なんと不幸なことにブラッジャーが校長先生の顔を潰してしまつた！

！ ポピー！ 早く来てくれー！ そうこうしているうちにも試合は進んでいきます。

咲夜選手まるでロケットのように一直線にブラッジャーを追いかけていきます。そし

て手元で何度か跳ね返し……撃った！ 命中！ またもやチェイサーを1人撃ち落としました。さあさながら戦場と化してきました。スニツチを探すシーカーにも焦りを感じます。どうやらどちらも早く試合を終わらせたくて仕方がないようです」

私はブラッジャー2つを弄びながらジニーの様子を確認する。

ジニーは必死にピツチ内を見回し、スニツチを探しているようだった。

次の瞬間チョウが動き始める。

ジニーもすかさずその後を追った。

「おおっと！ 各チームのシーカーがスニツチを見つけたようです。ですがチョウ、気を付ける!? グリフィンドールのスナイパーはいつでもお前の後ろを狙っているぞ？

おおっと!? これはどういうことだ!? 残っているレイブンクローの選手がシーカーを守るように隊列を組みます。どうやら自分たちの勝敗全てをシーカーに任せようです。さあキラリと光る金のスニツチ。その栄光を掴み取るのはどちらの選手になるのでしょうか。ジニーが前に出るチョウが前に出る。おっと、ここで咲夜選手シーカーから少し距離を取りました。どうやら全てをシーカーへと託したようです。さあここで一気にスニツチに接近し……どっちだ？ ジニーだ!! ジニーがスニツチを取りました！ 試合終了です!! 今年の優勝はグリフィンドール！ グリフィンドールです!!」

ジニーは幸せそうに笑いながらピッチに下りてくる。

チヨウは悔し涙を浮かべて芝生の上に膝をついた。

「やるじゃない。まさにウイーズリーは我が王者ね」

私はジニーの頭を撫でる。

ジニーはくすぐつたいと頭を振った。

その後も次々とグリフィンドールの選手が下りてきてジニーを褒めたたえる。

ロンもニツコリ笑ってジニーの肩を叩いていた。

「凄い！ 凄いぞ！ ハリーに負けず劣らずの逸材だ！」

私は観客席を見回してハリーとハーマイオニーの姿を探す。

だが、2人は何処にもいなかった。

さらに言えばハグリッドもない。

「……一体何をやっているのかしら」

私は肩を竦めると控室へと入った。

ふくろう試験とか、復讐とか、アーチとか

ふくろう試験は2週間に渡り行われる。

基本的には午前は筆記で午後は実技だ。

私はこの日の為に時間を止めて勉強してきたが、正直がっかりするほどレベルが低かった。

どの試験も基本的なことしか出ず、話にならない。

実技のテストも使えて当たり前のような呪文しか出なかった。

だが、それでも普通の生徒にとっては難しいらしく、皆テストとテストの合間に教科書や羊皮紙とにらめっこをしている。

ハーマイオニーもその様子なのを見て大きいため息をついたものだ。

全ての試験が何の問題もなく終わったわけではない。

夜に行われた天文学の試験中にハグリッドが捕まりそうになり、マクゴナガル先生が失神呪文を胸に4発も食らうという事件が発生したのだ。

私はその時既に回答を終えていたのでその様子を観察していたが、ハグリッドは魔法使いたちの妨害を振り切って全速力で校門の奥の闇へと消えていった。

そう、目立った事件とさえいえばそのぐらいだ。

マクゴナガル先生はまだ昏睡状態らしいが、裏を返せばダンブルドア先生もマクゴナガル先生もいないのでやりたい放題できるということである。

私は最後の試験日の朝に皆と一緒に朝食を取っていたのだが、一通のふくろう便が私へと届いた。

届いた羊皮紙にはクイレルの筆跡で『9時 図書室』と書かれている。

なるほど、9時に紅魔館の図書館に来てほしいということだろう。

私は懐中時計を見て時間を確認する。

そして9時までそんなに時間がないことを確認し、急いで朝食を食べきった。

「ハーマイオニー、ちょっと談話室に戻ってるわね」

私は横で必死になって魔法史の教科書を読んでいるハーマイオニーに声を掛けると大広間を出ていく。

そして廊下を曲がり誰もいないことを確認すると時間を止め大図書館へと姿現しした。

そこには小悪魔の姿はあらず、パチュリー様とクイレルだけがいる。

私は2人へと近づき時間停止を解除した。

「待たせたかしら」

私は後ろからクイレルに声を掛ける。

クイレルはそんな私に驚くこともなく平然と振り返った。

「8時57分。まだ時間には余裕があるだろうか？」

「もし時間よりも早くても、相手が先に来ていたら待たせたことになるのよ。で、何か用だったの？ 学校にふくろうを送ってくるなんて珍しいじゃない」

私はパチュリー様の横へと座る。

クイレルはその向かい側に座った。

「なに、時間を取るようなことではない。今日、ヴォルデモートはハリー・ポッターの心へと侵入し嘘の情報を流す。上手くいけばハリー・ポッターは神秘部の最深部へこのこやってくるはずなのだ。そこには多くの死喰い人が集まる」

クイレルはニヤリと笑う。

私はクイレルが何をしたいか理解できた。

「ここで一戦交えるわけね。私はハリーを神秘部最深部へ誘導すればいいということでしょう？」

「物分かりが早くて助かるよ。まさしくその通りだ。事前に伝えておかないと君はハリーが神秘部に行くのを妨害するだろうか？」

……確かに何かあると言われなかったらハリーの行動を妨害するだろう。

「ええ、そうだったかもしれないわね。取り敢えず了解よ。私はハリーの行動を邪魔しないわ。それと、死喰い人を全滅させることもしないと云っておこうかしら」

「良い返事が聞けてなによりだ。では私は向こうへと戻ろうと思う。試験頑張りましたよ」

そう言い残しクイレルは姿くらました。

私はそのままパチュリー様の方を向く。

「パチュリー様、一つお願いしたいことが……」

「破れぬ誓いなら既に解除したわ。まったく、なんてものを学校で使っているのよ。今度から面白半分で自分に呪いを掛けるのはやめなさい」

……バレてた。

「申し訳ございません。つい出来心で。そしてありがとうございます」

私はパチュリー様に深々と頭を下げる。

それを見てパチュリー様は四角錐の石が付いた指輪と銀色で青白い宝石が付いている髪飾りと金色のカップを私の前に並べた。

「それ、全部分霊箱よ。この数カ月の間に小悪魔が集めたものね。マールヴオロ・ゴーントの指輪、ロウエナ・レイブンクローの髪飾り、ヘルガ・ハップルパフのカップ。今はサラザール・スリザリンのロケットを搜索しているんだけど、既に何者かに取られた後

だったらしいのよ。ダンブルドアに先を越されていなければいいのだけど」
「では、所在不明なのですか？」

その質問にパチュリー様は首を横に振る。

「いえ、書き置きに名前のイニシャルがあつたわ。S・A・B……シリウス・ブラックの親族で、元死喰い人。スリザリンのロケツトはブラック邸にあると見て間違いないわね。というわけで暇な時間ができたらブラック邸を隅から隅まで探索して頂戴な。」

パチュリー様が手を一振りすると分霊箱が元あつた場所へと戻っていく。

そしてパチュリー様は指輪だけを机の上に残した。

「貴方童話とかつて読むかしら」

「はい、グリム童話とかなら少しは」

「魔法界の物は？」

「……。読んだことがないです」

私は正直に答える。

「この指輪に使われている石は死の秘宝の1つである蘇りの石よ。まあ簡単に説明すると死の秘宝っていうのは最強の杖と死人を蘇らせる石と透明マントのことね。これがその1つ。蘇りの石」

「……それって貴重な物なのでしょうか？」

「んなわけないでしょう？　こんなものより賢者の石の方がよっぽど使えるわ。ただの骨董品よ」

パチュリー様はそう言つて指輪を仕舞い込む。

私は懐中時計を確認し、少し長い間ホグワーツを離れすぎたことを知った。

「ロケットの件はお任せください。私は一度ホグワーツへと戻りますね」

「ええ、そうしなさい」

私はパチュリー様に頭を下げると時間を止めホグワーツへと姿現しする。

そして適当に人目のない場所で時間停止を解除させると談話室へと向かった。

午後2時。

私は最後の試験を受けるために大広間へと来ていた。

私は試験問題が裏返しに置いてある机の1つへと座る。

そして全員が揃うとすぐさま試験が始まった。

まあ試験の内容自体は何の問題もない。

私はさつさと試験を終わらせ、居眠りをするふりをしながらハリーの身に何か起きるのをじっと待っていた。

「あああああああああああああつ!!」

予定通りなのかは分からないが、ハリーがいきなり叫び声をあげて椅子から落ちる。そして落ちた瞬間に我に返ったように辺りを見回し始めた。

「ど、どうしたのかね?」

試験官がハリーのもとへと駆け寄っていく。

ハリーは苦しそうに起き上がった。

「な、なんでもありません……」

「そんなわけなからう! 凄い形相じやったぞ。医務室に行く必要がある。さあ」

「行きません……医務室に行く必要はありません……」

そう言いつつもハリーは試験官に引きずられていく。

ハリーと試験官は大広間を出ていき、姿が見えなくなつた。

「さてみなさん! 試験の時間は残り少ないですよ!! 集中してください!」

ほかの試験官の声に大体の生徒がぎよつとして答案用紙に食らいつく。

私はできればすぐさまハリーを追いかけたが、試験中に抜け出すのは至難の業だろう。

あと10分もせずに試験が終わる。

それからゆっくりでいいはずだ。

私は最後に自分の回答を一通り確認し、ミスがないことを確認する。
それが終わると同時に試験が終了した。

私は素早く席を立つとハーマイオニーとロンと共にハリーを探しに向かう。

いや、ハリーもこちらのことを探していたらしく、すぐに合流することができた。

「何があつたの？ 大丈夫？ 気分が悪いの？」

「どこに行つていたんだよ？」

ハーマイオニーとロンがハリーへと同時に聞いた。

「一緒に来て！」

ハリーは早口でしゃべりすぎて多少せき込む。

「早く、話したいことがあるんだ！」

言うが早いかハリーは足早に廊下を歩いていく。

そして空いている教室を見つけると中に転がり込んだ。

ハリーは全員教室内に入ったことを確認するとすぐにドアを閉める。

「シリウスがヴォルデモートに捕まった」

ハリーは焦つたように早口で言った。

その言葉にロンは驚愕を、ハーマイオニーは息をのむ。

「見たんだ。ついさつき。神秘部のガラス玉が沢山ある部屋でシリウスは拷問されてい

る。あいつはシリウスを使って何かを手に入れようとしているんだ」

私はハリーを観察するが、嘘を言っているようには見えない。

「……僕たち、どうやったならそこに行けるかな?」

「行きたいなら私が連れて行ってあげるけど……本当に行くの?」

なるほど、ヴォルデモートが流した嘘の情報というのはこのことか。

だとしたら怪しまれない程度に全力でハリーを神秘部に連れて行かないといけないだろう。

ハーマイオニーは何かを言おうとしたが、その前にハリーが口を開いた。

「当たり前だろう!? たった一人の家族なんだ! そりゃ世間から見たらまだお尋ね者の殺人鬼かもしれない。それでも僕からしたら親同然の存在なんだよ!」

その言葉を聞いてハーマイオニーは開きかけていた口を噤んだ。

ハーマイオニーのことだ。

この夢の怪しさや確認したほうが良いことなど様々なことが脳内を駆け巡っているのだろう。

だが、ハリーの言葉を聞いてそんなことを言っている場合じゃないと気が付いたらしい。

これだけは言わないとといった表情でハーマイオニーが口を開いた。

「ハリー、まずはシリウスが屋敷にいないかどうか確かめましょう。もしブラック邸にシリウスがいるようだったらこれはヴォルデモートの見せた罠よ」

「時間がないんだ。確認している間にシリウスが殺されてしまったらどうする!？」

ハリーはハーマイオニーを怒鳴りつけるが、ハーマイオニーの必死の説得もあつてまずはブラック邸に向かうことになった。

私はハリーの手を掴む。

そしてそのままホグワーツから姿くらましした。

ブラック邸の厨房に姿を現すと、私はハリーの手を放し時間を止める。

まずはここにブラックがいるかどうかを確認しなくてはいけない。

ついでにスリザリンのロケットの搜索もしよう。

私は止まった世界の中を歩き、厨房を出る。

そして全ての部屋の隅から隅まで探索を始めた。

1階には厨房に屋敷しもべ妖精のクリーチャー以外誰も居らず、部屋の隅々まで探索したがロケットは見つからなかった。

私は1階の探索を切り上げて上の階へと向かう。

上の階の部屋の1つでブラックがバックビークの怪我の手当てをしているのを発見した。

そのまま探索を続行するがやはりロケットは見つからない。

……だとしたらあと探していないのは屋根裏だけだ。

私は埃の積もった屋根裏に足跡をつけないように注意しつつ上る。

そしてそこでスリザリンのロケットを発見した。

「これで残る分霊箱はハリーと蛇だけね」

私はそのまま屋根裏を出て2階で姿くらましする。

そして一度紅魔館の大図書館へと立ち寄り、本を読みながら固まっているパチュリー様の時間停止だけを解いた。

「パチュリー様、これを」

私は時間の止まった世界でパチュリー様にロケットを差し出す。

「あら、早かったじゃない。もっとゆっくりでも良かったのよ!」

「偶然ブラック邸に顔を出す機会がありましたので。では私はこれで」

私はパチュリー様に一礼するとブラック邸の厨房へと戻り、時間停止を解除した。

「シリウスおじさん? シリウス、いないの?」

ハリーは厨房内に呼びかけるがそこにはクリーチャーしかいない。

クリーチャーは急に現れた私たちに少し驚いていたが、すぐさま嬉しそうにこちらを向いた。

「ポッターと十六夜がここにいます。こいつらは何故ここにやってきたのだろうか？ クリーチャーは考えます」

「クリーチャー、シリウスはどこだ？」

ハリーが聞いたでした。

「ご主人様はお出かけです。ハリー・ポッター」

「どこへ出かけたんだ？ クリーチャー、どこへ行つたんだ？」

ハリーの問いにクリーチャーはツクツクと笑うばかりだった。

もつとも私はクリーチャーの言葉が嘘だということを知っている。

ブラックは上の階でバックビークの手当てをしているのだ。

「クリーチャー、シリウスは神祕部に行ったのか？」

クリーチャーはその言葉を肯定も否定もしなかった。

「ご主人様は哀れなクリーチャーにどこに出かけるかを教えてくれませんか」

「でも知っているんだらう？ どこに行つたか知ってるんだ！」

「ご主人様は神祕部から帰つてこない！」

クリーチャーはこの上ないほど上機嫌で高笑いする。

「こいつ!!」

ハリーがクリーチャーに手を上げようとしたその瞬間に私はハリーの手を掴み先ほ

アンブリッジの命令でクラツプは空き教室を出ていく。

そしてゴイルは後ろから私を羽交い絞めにした。

そして数分もしないうちにクラツプがドスドスと足音を響かせながら帰ってくる。

その後ろにはスネイプ先生が立っていた。

「校長お呼びですか……咲夜、君にはそんな趣味があつたのか？」

スネイプ先生は羽交い絞めされている私を冷ややかに見る。

私は軽く肩を竦めた。

アンブリッジはスネイプ先生に向けてニンマリと笑顔を向ける。

「ああ、スネイプ先生。真実薬を1瓶欲しいのですが、なるべく早くお願いしたいの」

「最後の瓶をポッターを尋問するのに持っていかれたではありませんか」

スネイプ先生はアンブリッジの顔を見る。

「まさか、あれを全て使ってしまったということはないでしょうな？ 3滴で十分だと

申し上げたはずですが？」

アンブリッジの顔が少し赤くなった。

あの様子だとすべて使い切ってしまったようだ。

……というかハリーに真実薬を使ったということか？

いや、スネイプ先生も仮にも騎士団メンバーだ。

渡したものは偽物だろう。

「もう少し調べていたただけるわよね？」

「勿論。今から作業に取り掛かりますと成熟に満月から満月までを要しますので……大
体1か月で準備できますな」

「1か月!？」

アンブリッジが憤慨した。

「私は今すぐこのクソガキを尋問したいのよ!! この生意気な少女に無理に真実を吐か
せる薬が今すぐ欲しいの!」

「……ほう。それは何とも面白そうな話ですな」

スネイプの手が一瞬ローブへのびる。

まさか本当に渡したりしないだろうな。

だが、スネイプ先生はそこまで愚かではなかった。

「面白そうな話ではありませんが、申し上げた通り真実薬の在庫はもうありません。咲夜
に毒薬を飲ませたいなら別ですが……まあ、お役には立てません」

「……貴方は停職です!」

アンブリッジは金切り声をあげて叫ぶ。

スネイプ先生は皮肉っぽくアンブリッジに礼をして教室を出ていこうとした。

「あの人がパッドフットを捕まえた！ あれが隠されている場所で、あの人がパッドフットを捕まえた！」

次の瞬間ハリーがスネイプ先生に向けて叫んだ。

スネイプ先生はハリーの言葉を聞いて足を止める。

「パッドフットとは何なの？ 何が隠されているの？ スネイプ、こいつは何を言っているの？」

アンブリッジは混乱するようにスネイプ先生に問う。

「さっぱりですな。ポッター、頭がおかしくなりたいのならいつでも私の研究室に来るがいい。戯言を飲ませてやろう」

そういうとスネイプ先生は教室を出て行った。

多分ハリーの今の言葉で十分意味は通じてしまっただろう。

スネイプ先生がシリウスの安否を確かめる前にここを発つしかない。

アンブリッジはスネイプ先生の様子をイライラした表情で見送ると、静かに杖を取り出した。

「……いいでしょう。しかたがない、ほかに手はない」

アンブリッジは少し興奮したような顔で私を見る。

「ゴイル、しっかり押さえつけておくのです。磔の呪いならこいつの舌も緩むでしょう」

その言葉を聞いてドラコ含める殆どの生徒が顔を真っ青にする。後ろで私を拘束しているゴイルもカタカタと歯を鳴らしていた。

「校長先生。それ違法ですよ？ わかってますか？」

私は冷静にアンブリッジに問う。

「バレなければ犯罪ではないのです。複数の生徒の戯言よりも私の証言1つのほうが社会的な信用は上です。クルーシオ!!」

アンブリッジは極限まで私に対する憎しみを込めて磔の呪いを使った。

私は開心術を防ぐときのように体と心の時間をずらし、磔の呪いを無効化する。

タンスに磔の呪いをかけても何も起きないように、今の私に磔の呪いを使っても全くの無駄だ。

私は指一本動かさずにアンブリッジを鋭く睨む。

アンブリッジは私が必死に痛みを我慢しているものだと思っているのか、ケタケタと笑いながら何度も私に磔の呪文を使った。

「我慢しなくてもいいんですよ？ 痛かったら泣き叫べばいい。これは罰ではありません。私の私怨です」

「つまり先生は私に敵意を持って攻撃している。そう受け取ってもよろしいのでしょうか」

私は先ほどと全く声色を変えずにアンブリッジに聞いた。

アンブリッジはその段階になってようやく私に磔の呪いが効いていないことに気が付いたようだ。

「……その力の秘密を教えなさい。ゴイル、しっかりと押さえつけておくのですよ」

呪文が効かないとわかるとアンブリッジは私の腹部を思いつき蹴っ飛ばした。

おお、そうくるかと私は少し驚く。

だが、この1年で相当やつれたアンブリッジの体では、私の体にダメージが入るほどの蹴りは出せない。

そのあともアンブリッジは私の顔を殴ったり脛を蹴ったりと散々ほかの生徒が見ている前で私に暴力を振るっていく。

だがそのどれもが力が入っておらず、血が出るところか私の体にかすり傷すらつけることができなかった。

だが、結果はどうであれ過程は残る。

ここには10人ほどの目撃者がいるのだ。

彼らからしたらアンブリッジが一方的に私に磔の呪文を使い、暴行を加えたようにしか見えない。

たとえば私の体に怪我がなくても、一方的にアンブリッジが悪いようにしか見えないの

だ。

アンブリッジが息を切らせながら腹部に蹴りを入れたところで私は静かに口を開く。

「お教えしましょう」

私のその言葉にアンブリッジは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「はあ……はあ……、ついに……、口を、割ったわね」

「ダンブルドア先生は私に武器を残していききました。その武器の効果によって私は校内でも姿現しが使え、呪文が効きません」

私はするりとゴイルの拘束を抜ける。

そしてアンブリッジに近づいた。

「ご案内しましょう。ダンブルドアが私に残した武器のもとへ」

私はアンブリッジの肩に触れると魔法の森の中へと姿現した。

アンブリッジはいきなり周囲の情景が変わったことに驚き、グルグルと周囲を見回す。

そんなアンブリッジの顔を私は蹴り飛ばした。

「ぐぎゃあー」

アンブリッジは悲鳴を上げて地面を転がる。

アンブリッジが私に対して行った暴行は、人の目についている。

あとは私が目につかないところで仕返しをするだけだ。

私は地面に転がっているアンブリッジに向けて全く手加減せずに蹴りを入れる。普段骨が折れない程度に加減していたが、もうその必要もないだろう。

「たず、だずげ……」

足の骨をへし折りあばらを折り、膝を破壊する。

アンブリッジは私から少しでも逃げるように森の奥へ奥へと這っていった。

私はそれをゆっくり追いながらたまに一発蹴りを入れる。

どうやら私が本気で蹴ると少し肉が弾け飛ぶらしい。

蹴りを入れる度にアンブリッジは血に染まっていった。

「そこで何をしている。人間」

突然何者かの声が聞こえて私は後ろを振り返る。

そこには多くのケンタウルスがおり、鋭く私たち2人を睨みつけていた。

「た、たすがった！ お願ひ、その半獣、私を助けなさい！ 私はドローレス・アンブ

リッジ。魔法大臣上級次官、ホグワーツ校長、並びにホグワーツ高等尋問官です!!」

「半獣だ?!」

ケンタウルスは口々に半獣と言われたことに抗議の声を漏らした。

アンブリッジはどうやら冷静さを失っているようだ。

「この汚らしい半獣ども！ さっさとそこにいるガキを仕留めなさい！！ 何をしていの？ あなたたちは頭も馬なみというこう r とう r s j w !!」

あまりにも汚らしく喚くので最後のほうは聞き取れなかった。

「ケンタウルスを侮辱するな!!」

私は怒りを込めてアンブリッジの背中を踏みつける。

純粹な怒りもあるが、これはパフォーマンスのようなものだ。

私の行動を真似るように怒り狂ったケンタウルスたちはアンブリッジを四方八方から踏みつけていく。

その度にアンブリッジの骨が折れ、肉が抉れ、アンブリッジの形状を人ではない何かへと変えていった。

「ぎゃああああああああああああああああ!!」

アンブリッジの断末魔が聞こえるが私は気にしない。

ケンタウルスと共にアンブリッジの体を踏みつける。

10分ほどアンブリッジはそのように蹴られ続けただろうか。

ケンタウルスの気がすむ頃には手足はバラバラになり腹は破れ、腸が細切れになって辺りに散らばっていた。

だが、アンブリッジはまだ死んではない。

私がアンブリッジの体の時間を止めたせいである。

時間を進めればすぐにでもアンブリッジは死に絶えるだろう。

私はアンブリッジをアンブリッジの破片と共に袋に詰める。

そしてその袋の時間を止め、それをケンタウルスに渡した。

「そのうちにダンブルドア先生がこの肉片を取りに来ると思うわ。袋を開けると中に入っている肉片が死ぬから開けないように注意して」

「……小娘、この袋は預かろう。1つ聞かせるのだ。何故我々が侮辱されたときにあれほど怒った？」

ケンタウルスの1人が袋を受け取りながら私へと問う。

「私の体は人間ですが、心は人ならざる者です。私は吸血鬼に仕え、妖怪に育てられ、悪魔を友に持っています。誇り高きケンタウルスをこの肉片は侮辱した。私にはそれを許すことができなかった。それだけです」

私がそう答えると群れの中から1人のケンタウルスが飛び出し私の姿を確認した。

「ロナン。私はこの少女を知っている。彼女はレミア・スカーレットの従者だ」

その言葉を聞いて周囲にいたケンタウルスはざわざわと騒ぎ出す。

ロナンと呼ばれたケンタウルスも目を見開き驚いた。

「お嬢様を知っておられるのですか？」

私はロナンに聞く。

ロナンは何かを思い出すように目を瞑るとゆつくりと一度頷いた。

「レミリア・スカーレットは腕のいい占い師だ。彼女は元気になっているか？」

「ええ」

私の返事にロナンは満足そうに頷いた。

「彼女の従者の頼みだ。この袋は我々が責任をもつてダンブルドアに渡そう。娘、名は何という？」

「十六夜咲夜と申します」

「……名付け親はレミリア・スカーレットだな。良い名だ。では十六夜咲夜、また機会があれば会おう」

ケンタウルス達はアンブリッジのミンチを持って森の奥へと消えていった。

よし、これで何の問題もなく魔法省に向かうことができるだろう。

私は一度時間を止めると先ほどの空き教室へと姿現しした。

だが私はそこで奇妙な光景を目にする。

既にハリーたちの姿が教室にないのだ。

教室の中にはドラコ率いる親衛隊が倒れているだけである。

私は周囲に意識のあるものは誰もいないことを確認し、時間停止を解除した。

「ドラコ、ドラコ? ……完全に伸びてるわね。これは失神呪文かしら」

私は教室内にベッドを出現させると親衛隊員たちを順番に寝かせていく。

寒い季節はとつくの昔に過ぎ去ったが、床で寝ていては風邪を引いてしまうだろう。

私は最後にドラコをベッドへと乗せ、軽く頭を撫でる。

そしてそのままその教室を後にした。

一体ハリーたちはどこへ行ってしまったのだろうか。

いや、考えるまでもなく魔法省に行こうとしているに決まっている。

だとしたらアンブリッジの部屋だ。

ハリーはシリウスと話をしたときにアンブリッジの部屋の暖炉を使ったと言っていた。

今回も同じ方法を取るに決まっている。

私が急いでアンブリッジの部屋に姿現しすると、そこにはすでにルーナの姿しかなかった。

「ルーナ、みんなは?」

「先に煙突飛行を使って魔法省に行ったよ。私は一番最後なんだ」

「残念、最後から2番目よ。さっさと行きなさい」

どうやら私の予想通りハリーたちはすでに魔法省のようだ。

ルーナは私の言葉に頷くと暖炉に入り「魔法省」と唱えて姿を消した。私もすぐさまそのあとを追う。

暖炉の横に置いてある煙突飛行粉を暖炉に投げ入れその中へと入る。

「魔法省」

次の瞬間私は上に落ちるように煙突の中へと吸い込まれていった。

グルグルと目の前の情景が変化し、ようやく私は地面に足をつける。

どうやら無事に魔法省についたようである。

魔法省の入り口にあるアトリウムが目の前に広がるが、いつものように多くの魔法使いが忙しく仕事をしているわけではなかった。

アトリウムにはハリー、ロン、ハーマイオニー、ジニー、ルーナ、ネビル、そして私の7人しかいない。

魔法省は完全にもぬけの殻と化していた。

「おかしい、受付にも守衛室にも誰もいない」

ハリーが杖を抜きつつ言う。

「社員旅行かな？」

「あら、ホワイトな職場ね」

ルーナの言葉に私が付け足すと、ふざけている場合じゃないとハリーに怒られた。

「こっちだ。エレベーターに乗ろう」

ハリーは先陣を切ってアトリウムを歩き出す。

私は最後尾にいるルーナに話しかけた。

「あの後どうやって親衛隊をまいたの？」

私が聞くとルーナは不思議そうに首をかしげる。

「どうやるかを教えたのは咲夜じゃない」

そうだった。

既にDAが活動をしなくなっただけでしばらく経つため、すっかり忘れていたが、ここにいる6人には私が対人用の技をこれでもかというほど叩き込んだのだった。

ロンなど素手でステューピファイ（打撃）が撃てるほどである。

「咲夜こそ校長先生をどうしたの？ 一緒に消えちゃったけど」

今度はジニーが話しかけてきた。

その話題は皆興味があるのか、エレベーターを待ちながら全員が私へと振り向く。

「ケンタウルスに引き渡したわ。多分そのうち帰ってくるわよ」

私が曖昧に答えた瞬間、ジャラジャラガラガラ鳴りながらエレベーターが上がってきた。
た。

私が先頭を切ってエレベーターに乗り込むと次々とエレベーターに乗り込んでくる。

ハリーは全員乗ったのを確認すると9階のボタンを押した。

「怪我は大丈夫なの？ あんなに沢山……酷いことを……」

ハーマイオニーが泣きそうな顔になりながら私のお腹をさすった。

「怪我はしてないわ。あんなの幼児がじやれてきたのとそんなに変わらないわよ」

私は服の裾をめくりあげ傷のない綺麗なお腹を見せる。

ハリー、ロン、ネビルは咄嗟に顔をそむけた。

「わかった、わかったからさっさとお腹をしまってください」

ロンが顔を赤くして言う。

何というか、皆年頃というわけだろう。

「神秘部です」

アナウンスが聞こえ、エレベーターが止まる。

私たちはエレベーターを降り奥の扉へと向かった。

「OK、いいか」

ハリーは扉の前で立ち止まり、口を開く。

「どうだろう、何人かはここに残って、見張りとして——」

「そう、じゃあ私が残るわね」

ハリーが言い切る前に私はハリーの提案に乗った。

それを聞いてネビルが不安そうな声を出す。

「咲夜が残っちゃうの？　この中で一番強いのに」

ジニーもネビルの意見に賛成のようだった。

私はみんなを説得させるために例え話をする。

「そう、じゃあ私が中の様子を見てくるから貴方たち全員がここに残りなさい」

「ダメだ！　危険すぎる！」

ハリーが慌てたように叫んだ。

私は一度みんなに向き直る。

「ここにいる人間を単純に戦闘能力で分けたら私と他全員よ。これはおごりや自慢ではなく、皆を教育した私が分析した結果。私なら自由に姿現しできるし何かが来たらすぐ伝えることができるわ」

勿論、本当のことを言ってしまうえば見張りなど必要ない。

全員で予言のある所に向かえばいいのだが、それでは戦死者が出ない気がするのだ。

ダンブルドアは私の能力を知っている。

誰かが私の見ているところで死になつたら助けられることを知っている。

だからこそ私は皆と一緒に行くことはできない。

ハリーは悩むように唸ると、私の顔を見た。

「僕は咲夜を信用している。その実力も、不思議な能力も、頭の良さも、見張りを頼めるかい？」

「ええ、引き受けましょう。ブラックを必ず救ってくるのよ」

ハリーは大きく頷くとみんなと共に神秘部の扉の向こうへと消えていった。

私は扉が閉まるのを確認すると静かにその前に仁王立ちする。

これで完全にハリーはヴォルデモートの罠にかかったはずだ。

そしてスネイプが騎士団員としての仕事を全うしていたらそう長い時間も掛からずにここに騎士団員が到着するだろう。

私は懐中時計を取り出すとクロノグラフを動かす。

10分経つても団員が到着しなかった場合単身神秘部に乗り込もう。

死者は出てほしいが、ハリーが死ぬと厄介だ。

「十六夜君。時間を止めてくれ」

どこからともなくクイレルの声が聞こえてくる。

私は躊躇することなく時間を止めた。

先ほどの声はどこから聞こえたものだろうか。

私は止まった時間の廊下を歩き、階段の陰に立っているクイレルを発見した。

クイレルは死喰い人の服装をしておらず、いつものローブ姿だ。

私はクイレルを持ち上げ廊下まで運ぶと時間停止を解除する。

クイレルはいきなり目の前の光景が変わった為か周囲を見回すと、私に話しかけた。

「ふむ、打ち合わせ通りハリーたちは神秘部に入っていったな」

「貴方は神秘部にいないの？」

「ああ。私は君と同じく見張りだ。先ほどルシウスにハリーたちが神秘部に入ったと連絡を入れたところだよ」

クイレルは腕に刻まれた闇の印を見せる。

そしてその印をシールでも剥がすかのようにはぐりつつた。

「パチュリー様に弄って貰ってね。取り外しが効くようにしてもらった」

クイレルはひらひらと印シールを振ると、クルリと巻いてポケットに仕舞う。

「本当に素晴らしい魔女だ。ヴォルデモートが彼女に協力を仰ごうとするもの頷ける」

「ヴォルデモートがパチュリー様と接触しようとしているの？」

「逆に問おう。ダンブルドアは彼女に接触しようとしていないのか？」

クイレルの言葉に私は少し考える。

「そういった話は聞かないわね。でもこここのところ数カ月話をしていないしもしかしたらパチュリー様を探している可能性はあるわ」

「なるほど、その言葉から察するにダンブルドアは自分の過去を語らない性格らしい。」

パチュリー様とダンブルドアはホグワーツの同期だ」

クイレルはさらりとそんなことを言った。

「パチュリー様がホグワーツの生徒？」

「ああ。といつてもこれは本人から直接聞いた話ではないから信憑性には欠けるがな。レイブンクロー生だったようだ。ダンブルドアが当時一番目立つ生徒だったとしたら、パチュリー様は当時一番目立たない生徒だったらしい」

それは少し衝撃の事実だった。

パチュリー様の原点が、ホグワーツにあったなんて思いもよらなかつたからだ。

「……その様子だとロクにダンブルドアの過去も知らないらしいな。夏休みに館に帰つたら聞いてみるといい。ああ、そうだ。時間を止めて話したかったのはこんな話ではない」

クイレルは禿げ頭をぺちりと叩いた。

「ここに私は来ていない。そもそも死喰い人ではないと魔法省に印象つけたいのだ」

クイレルは改めて口を開いた。

「印を外せるようにしてもらつたのもそういう理由でね。いいか、もう一度言おう。

私はここに来てはいない。いいね？」

「ええ、わかつたわ。貴方はここにいなかった。そういうことにしておけばいいのよね」

「ああそうだ。それじゃあ私は少しやる必要がある。姿をくらませたら時間停止を解除してくれ」

そういうとクイレルはどこかへと姿くらまししていった。

私は誰もいなくなつた廊下で時間停止を解除する。

クイレルは一体何をしようとしているのだろうか。

だが、あのクイレルの楽しそうな表情を見る限り、ロクなことでないのは確かだ。

私は元の位置に戻ると扉に背を向けて立つ。

そして待つこと8分、ジャラジャラガラガラいいながらエレベーターが下りてきた。

私は先ほどのクイレルのように階段の隅に隠れて様子を窺う。

「そんなところで何をやっている小娘ー」

突然ムーディの声が廊下に響き渡つた。

どうやら廊下の壁を透視して私の姿を捉えたらしい。

私は最大限警戒しながらエレベーターの方へと向かつた。

そこにはムーディを先頭にブラック、ルーピン、トンクス、キングズリーがいる。

不死鳥の騎士団が誇る最強の面子といつてもいいかもしれない人間たちだ。

「どうしてハリーたちと一緒にじゃない。ええ!？」

ムーディが大声を上げる。

私は軽く肩をすくめた。

「挟み撃ちにあつたら一網打尽でしょ？ 脳みそまで腐ってきたのかしら。戦力を2つに分けて私は入り口で見張つてたのよ。それよりどうしてブラックがここにいるのよ。貴方は捕まって拷問を受けていると聞いたのだけど」

「まさかそんな話を信用したのか？ あれはクリーチャーの戯言だ。ヴォルデモートの仕掛けた罠とも言える」

ブラックが冷ややかに言った。

勿論そんなことは端から理解している。

だがこうやって言っておかなければ私がここにいる理由がなくなってしまうではないか。

「だとしたら拙いわね。既にハリーたちが突入してから9分が経つわ。既に何人か死んでるかもね」

「むしろしっかりと罠に掛かつてたほうが生存率高いかもね。よし、マッドアイを先頭にして全員で突撃だ！」

トックスはグイグイとムーデイの背中を押しして神秘部の中へと入っていく。

私たちもそのあとに続いた。

扉を抜けるとそこは大きな円形の部屋だった。床も天井も何もかも黒く、私たちを囲

むように扉が並んでいる。

そしてそのうちの3つに大きく『X』が焼き印されていた。

「どの扉だ？」

ブラックがムーデイに聞く。

ムーデイはグルリと部屋全体を義眼で見回すと、焼き印がしてある扉に突入していった。

次の瞬間部屋にいた死喰い人との乱戦が始まる。

私は時間を止め一度冷静に部屋の中を見回した。

部屋にはハリーとネビル、ハリーは予言の入っていると思われるガラス玉を持っている。

あと他には死喰い人が沢山いるといった感じだ。

私は時間停止を解除し死喰い人に失神の呪文をかけていく。

これは相手を倒すための呪いではなく、けん制の意味合いが強かった。

そのまま私はハリーへと接近し、ハリーの首を絞めている死喰い人にナイフを突き立てた。

「グアアアアッ！」

「ステューピファイ！」

ハリーは追撃するように死喰い人に失神の呪文をかける。

「ありがとう！」

ハリーはそう叫びながらネビルに攻撃しようとしていた死喰い人に呪文を飛ばした。ネビルも死喰い人に負けじと応戦している。

「ほかのみんなは？」

私が聞くとハリーは困ったような顔をする。

「どうやらどこかで逸れてしまったようだ。」

「でも、予言はバッチリだ。おっと、あー！」

ハリーはガラス玉を掲げるが、ネビルが躓いた拍子に落としてしまう。

ガラス玉は粉々に砕け予言を吐き出し、ただのガラス片へと戻った。

「予言がどうしたって？　このお馬鹿」

私はハリーの頭をグーで叩く。

私たちの後を追うようにしてブラックがこちらに接近してきた。

「ハリー無事か!?!」

「シリウス予言が!」

ハリーは足元を見て必死に叫ぶ。

私はハリーに向けて飛んできていた死の呪文をナイフで撃ち落とす。

「……まあこれは記憶媒体に過ぎない。ほかの皆はどうした？」

ブラックは一度予言の残骸に視線を落としたが、すぐにハリーのほうへと向き直った。

「みんなばばがのべやにいる」

ネビルが喋りにくそうに口を開く。

その言葉を聞いてハリーとブラックは頷いた。

「ここは私に任せて3人は子供たちを探して逃げて」

私はそう言つてアーチのある部屋へと体を向ける。

「ほどほどにな」

ブラックは苦笑いするとハリーたちと共に石段を上つていった。

私が改めて部屋を見回すと結構酷いことになっていた。

ムーディは既に頭から血を流し床に倒れていた。

トンクスも何人もの死喰い人に囲まれて劣勢だ。

あ、今倒れた。

「やっと思つけたぞ小娘!!」

私はその物言いに覚えがありそちらを向く。

するともう目の前まで死の呪文が迫っていた。

私は時間を止めて死の呪文を回避し、その人物を見る。

先ほどの物言いから私はムーディを想像したのだが、違った。

そこに立っていたのは去年逃走したバーティ・クラウチ・ジュニアだ。

私は周囲の状況を確認して時間停止を解除する。

それと同時に3本のナイフを投げつけた。

「ふん」

クラウチは魔法を使わず杖だけでそれをはじき飛ばす。

「相変わらずそればかりだな貴様は。ええ？」

「貴方喋り方がムーディっぽくなってらわよ。気が付いてる？」

「そりゃ1年もあんな変人演じてたら口調ぐらいは似るだろう。ああそうだ」

私は冷静に去年学校で教師をしていた偽ムーディを思い出す。

少なくとも今いるムーディと変わらないぐらいには魔法の腕に長けていたはずだ。

「アバダ ケダブラー！」

突然背後から女の声が聞こえて私は身を振る。

そこにはアズカバンから脱走した死喰い人の1人であるベラトリックス・レストレン

ジが立っていた。

私の頭上を死の呪文が通過していき壁に当たる。

私は体勢を立て直し、2人を同時に視界に収められる位置まで後退した。

「この嬢ちゃんが一番の騎士団員だつて？ まだガキじゃないか！ クラウチ、こいつは私の獲物にすることにしたよ」

「何を言う！ こいつは俺の獲物だ！」

「両方まとめて殺してやるわ」

私は2人を鋭く睨む。

2人はその言葉を聞いて鋭い視線をこちらに向けてきた。

「思い上がりもほどほどにしたほうがいいねえ……いくら去年わが主のところから逃げさせたとしても所詮実力はそんなもんさ！」

「油断大敵!! こやつは変な術を使う。心してかかれベラトリックス！」

クラウチとレストレンジが同時に杖をこちらに向ける。

私は自分の中の時間を3倍ほど速くした。

だがそれほどまで私の速度を速くしても2人の魔法の速度は相当なものだった。

私は何とか2人の攻撃を受け流しつつ、2人に死の呪文で返していく。

私と2人の間は既に死の呪文の洪水と化していると言つてもいいだろう。

一発でも当たれば即死という状況でクラウチとレストレンジは笑っている。

もしかしたら死喰い人の中ではこいつらが一番やばいのかも知れない。

私は徐々に2人に押されていき、ついには1メートルと離れていない位置まで接近される。

もうここまで来たら杖でやりあうのは意味がない。

私は杖をしまい込みコンバットナイフを両手に構えるとそこに霊力を流し込む。

これなら呪文を反らすことが可能だ。

私はクラウチへと一気に距離を詰め切りかかる。

クラウチは一瞬ギョツとした表情をしたがすぐさま一步下がり私に向けて杖を振るう。

私は杖先から出た死の呪文を切り裂くとクラウチの足をすくうように回し蹴りをする。

その私の背中を蹴ろうとレストレンジが接近してきたので片足だけで一気に跳躍しレストレンジの後ろに回り込んだ。

「ちよこまかとー！」

レストレンジは後ろになぐように裏拳を叩き込んでくる。

私はそれを体を反らして避けるがそれが失敗だったらしい。

レストレンジの足の下を抜けるようにクラウチが私の腹目掛けて蹴りを繰り返して出した。

流石にこの体勢では避けようがないので私は石のアーチがある方に飛ぶ。だが、それが間違いだと後になってわかった。

アーチから何か囁くような声が聞こえてきたのだ。

私はこの囁きが何なのか本能的に察する。

これは死者の声だ。

このアーチを潜るともう戻ってこれない。

だが、それに気が付いたのはアーチを半分潜った後だった。

私はそのままアーチの中へと落ちていく。

私は死んだ。

命とか、思いとか、繋がりとか

ここはどこだろう。

私はぐるりと周囲を見回す。

ああ、そうか。

私は殺さなければならない。

生あるものに死を。

死んだ者には幸運を。

私はロンドンの街に降り立つと歩いていた老人にナイフを振り下ろした。

彼に幸運を。

私は走って逃げていく女性にナイフを突き立てた。

彼女に幸運を。

私は机の下に隠れている男性にナイフを突き立てた。

彼に幸運を。

私はその横で泣いている子供にナイフを突き立てた。

君に幸運を。

さよなら。

きつと貴方は幸せでしょう。

きつと私も幸せでしょう。

「貴方はそれで幸せなのでしょうね」

私は血に濡れたナイフを片手に声の聞こえた方を見る。

そこには茶色い髪を腰まで伸ばした少女が立っていた。

「私は幸せ。彼らも幸せよ」

「そうね。貴方は幸せね。咲夜」

少女はこちらへと歩いてくる。

私はその少女にナイフを突き立てた。

彼女に幸運を。

今日も私の周囲は血に染まる。

ああ、いい天気だ——

あ

あ

あ

私の咆哮が死の世界へと響く。

まだアーチの向こう側は見えている。

今なら戻る。

例え戻れなくとも意地でも戻る。

「時よ戻れッ!!」

バキンッ！ 懐中時計の風防にヒビが入り時計の針が逆向きに動き出す。

私はそのまま引つ張られるようにアーチの外へと飛び出した。

「——ッ!？」

アーチから飛び出るとクラウチとレストレンジの驚愕するような顔が見える。

どうやら巻き戻ったのは私の体の位置だけらしい。

だが、アーチから脱出できたならそれでいい。

私はひび割れた風防に修復呪文をかけるとポケットに仕舞い直した。

「お前今自滅して死んだじゃないか!？ なんで生きているんだい?」

レストレンジが目を剥く。

私は肩を竦めた。

「さあ? 自分が入って確かめてみれば?」

私の挑発にレストレンジが杖を向ける。

だがそれをクラウチが制止させた。

「奴が来たと知らせが入った。撤退だ」

「少し遅かったのう」

私は声が出た方に視線を向ける。

そこにはダンブルドア先生が立っていた。

それを見た瞬間クラウチとレストレンジは咄嗟にダンブルドア先生と距離を取る。

私は2人をダンブルドア先生に任せ倒れているトンクスに駆け寄った。

トンクスは既に虫の息だ。

腹部から流れ出ている血を必死に手で押さえ、細い呼吸をしている。

私は結局混ぜ合わせ使うことができなかつた魔力を使いトンクスの治療を進めていった。

そうこうしている間にもダンブルドア先生とクラウチ、レストレンジの戦いの決着がつく。

ダンブルドア先生はものの3分で2人を倒してしまった。

「さて、この2人さえのしてしまえば今日のところはわたしの勝利じゃ。適当に縛ってアズカバンにポイじゃよ」

「それはどうかな? ダンブルドア」

背筋が凍るようなと比喻すればいいのだろうか、ヴォルデモートの声が部屋の入り口のところから聞こえてきた。

私とダンブルドア先生がこちらを振り向くとヴォルデモートが単身で立っていた。

だがおかしい。

ヴォルデモートの体は透けており、その場に存在していないようだった。

どうやら魔法でどこか遠くの光景をこちらに映しているようだ。

「トムか。いったいどこにおるのかね。君の大切なお仲間が既にここに伸びておるよ」

ダンブルドア先生が指を打ち鳴らす。

するとどこからともなく気絶した死喰い人が縄に巻かれた状態で目の前に出現した。

「全員残らず捕まったか。情けない」

ヴォルデモートはゴミでも見るような目で死喰い人を見る。

そしてニヤリと笑った。

「だがなダンブルドア、人質を持っているのはお前だけではないと教えておこう」

宙に浮かぶ映像はヴォルデモートではなくその周囲を映す。

そこにはホグワーツから来た子供たちとブラック、それと帰ってきたのであろう魔法

省の役人たちが縄で縛られていた。

あの様子から察するにハリーとブラックはいち早く子供たちを回収し上の階に上

がったが、そこでヴォルデモートに鉢合わせたようだ。

そして結果は言わずもがなということだろう。

ファッジ大臣などありえないものを見るような目でヴォルデモートを見ている。

「ふむ、困ったのう。トム、ここは一時休戦といかんか？ お互い生きておればまた戦う機会もあるじゃろ」

ダンブルドア先生は朗らかに笑うと羊皮紙を折り部屋の外に向けて飛ばす。

その様子を見てヴォルデモートも同じように羊皮紙を飛ばした。

「予言はどうやら失われてしまったらしい。私としてもこれ以上にここに滞在する意味はなくなってしまったわけだ。互いに馬鹿じゃない。ここは一度仕切りなおそう」

数分もしないうちにヴォルデモートが送ってきた羊皮紙をダンブルドア先生が受け取る。

次の瞬間死喰い人たちが消え、ハリーたちとブラック、魔法省の役人たちに変わった。

「先生、今のは？」

「昔の戦場で使われた捕虜交換用の魔法じゃよ」

私の質問にダンブルドア先生は答える。

ハリーはいち早く自分の状況を理解するとダンブルドア先生に食ってかかった。

「先生！ 逃がして良かったのですか!？」

「ハリー、落ち着くのじゃ。あのままでは多数の死者が出た。そのようなことはわしもヴォルデモートも望んではおらん」

私としてはそちらの方が望ましいのだが、と口から出かかると、私はグツと我慢する。ブラックは立ち上がると犬に変身し縄を抜け、拘束されている人間たちの縄を次々とかみ切っていった。

「ダンブルドア……これは一体どういうことだ？ なぜあの人がいる!? なぜ魔法省に例のあの人がいるんだ!!」

ファッジは混乱したようにダンブルドア先生に喚き散らす。

ダンブルドア先生はファッジの顔を見て冷静に言った。

「……一年間、わしはずっと貴方に警告を続けてきたはずじゃ。あの人が帰ってきたとそれを信じず何の対策もしておらなんだ無能大臣はどこのどいつかのう?」

ダンブルドア先生は送られてきた役人たちを見回す。

ファッジは苦々しげに呻いた。

ダンブルドア先生は近くに落ちていた瓦礫を2つ手元に引き寄せ、ポートキーを作る。

そしてその一つをブラックに、もう一つを私に手渡した。

「咲夜、ハリーと一緒に校長室へと行きなさい。シリウス、子供たちを医務室へ。そのど

「ちらも目的の場所へと行くポートキーになっておる」

「ちよつと待つてくれダンブルドア！ 君にはポートキーを作る権限はない。魔法大臣の前で堂々と……君は……君は……」

「そうじゃの、君はドロレス・アンブリッジをホグワーツから除籍する命令を出すよ。そして部下たちにハグリッドを追跡するのをやめさせ職に復帰できるようにするのじゃ」

「フアッジ大臣の言葉を受け流しダンブルドア先生は私のほうに向く。」

「私はハリーへと近づき共にポートキーに触れた。」

「次の瞬間へその奥を引っ張られるような感覚を受け、私の両足は地面から離れる。」

「そして飛ばされるまま飛ばされ私とハリーは校長室へと降り立った。」

「……………」。今夜のはヴォルデモートが仕掛けた罠だった。僕のせいでも多くの人が出てしまった」

「ハリーはそう言つて項垂れる。」

「私はハリーの言葉に耳を疑つた。」

「怪我人が出た？ ……もしかして誰も死んでないんじゃないでしょうね？」

「ああ、本当に死者が出なかつたのは奇跡だ」

「……………どうやら聞き間違えではないようだ。」

あれだけの乱戦があつたのに、誰一人死んでいないとハリーは言う。

それは、なんとというか、あまりよろしくない。

お嬢様は多数の戦死者を望んでいるのだ。

「死喰い人はどうかしら。誰か一人でも死んでいるのを見た？」

「いや、僕は確認していないけど……ど、って、なんでそんなことを気にするんだ？」

ハリーの言葉に私は咄嗟に口を噤む。

そして自分のことを話題に上げて誤魔化した。

「いや、もし死んだのが私だけなんだとしたら少し恥ずかしいなど」

「咲夜は生きているじゃないか」

ハリーは私の言葉に目を白黒させる。

私は軽く微笑んで空いている椅子に腰かけた。

と、次の瞬間ダンブルドア先生が校長室の暖炉へと現れる。

ハリーは思わずその場から飛びのいた。

「咲夜、護衛ご苦労じゃった。30分だけ、席を外してくれるかの？ 少しハリーと2人

だけで話したいことがあるんじゃないよ」

「分かりました」

現在私の霊力は尽きている。

魔力自体はまだあるので生命活動に支障はないが、自由に時間の操作ができないのは流石に拙い。

いい機会なので30分間に霊力を回復させるとしよう。

私は校長室から出るとそのまま大図書館へと姿現しする。

そしてふらふらとパチュリー様の前に腰かけた。

「おかえり、なんかやつれてるわよ?」

パチュリー様は本から視線を上げずに私を出迎えてくれる。

「ただいま戻りました」

私は机の上へばりながら口を開いた。

「霊力が殆ど残っていないじゃない。言っておくけど大図書館は宿屋じゃないのよ?」

「ここが私の家のようなものです」

私は「はあ……」と一息ついた。

「お疲れのようですね。咲夜」

私がグルリと反対の方向を向くと、そこには小悪魔が立っている。

そして私に宝石のようなものを差し出した。

「……あれは?」

「賢者の石です。霊力が中に籠められているので少しは元気出ますよ」

私は小悪魔から賢者の石を受け取ると胸ポケットに入れる。

すると小悪魔の言う通り徐々に力が私の中に入ってくるのが分かった。

「……いいわねこれ」

「そう思うなら賢者の石を数個あげるわ。暇な時間にも霊力を注ぎ込んでおきなさい」

私がぼつりと言葉を零すとパチュリー様がポケットの中から賢者の石を数個取り出して私のほうに投げた。

私は力なくそれを受け取りポケットの中へとしまう。

そんな私の様子を笑いながら小悪魔が私に聞いた。

「一体何をやったんです？ 霊力が空っぽになるまで力行使するなんて」

「ちよつと死んじやって。生き返るのに使ったのよ」

パチュリー様はそれを聞いて初めて本から顔を上げた。

小悪魔もぼかんとした表情でこちらを見ている。

「今なんて言ったのかしら。生き返った？」

「はい、神秘部にあるアーチをくぐってしまつて。直観的に「あ、死んだ」と思ったのですが何とかになりました」

パチュリー様と小悪魔は顔を見合わせる。

そして2人して立ち上がると私を椅子から立たせ全身を調べ始めた。

「え？　ちよ、なんですか？　きや！」

「動いたら調べにくいでしょう？」

「そうですよ。少し我慢しててください」

私はくすぐったくて身を振るが、2人はそんなことはお構いなしだった。

流石に裸に剥かれることはなかったが、10分ほど好き放題体を触られる。

それが終わった後、またもや2人して首を傾げた。

「外傷はなし、バイタルも正常」

「死の呪文のようなものなのでしょうか。ですが帰ってこれたところを見るに………咲夜、どうやってこっちへ帰ってきたのです？」

「どうやら2人は私の体に怪我や傷がないか調べていたようだ。」

私は小悪魔の言葉にアーチの中へ入ったあとのことを思い出す。

「私は確か時間を戻そうとしたんです。ですが実際に時間が戻ったわけではなく、私の体の動きだけが巻き戻るように動いて、アーチから飛び出た感じでしょうか」

「よく思い出しなさい。生き返ったのは術を発動させた後？　それともアーチを潜った後？」

パチユリー様はもう少し具体的に話を聞いてくる。

「アーチを潜った後です」

私はそこだけは確信があった。

アーチを潜った瞬間に死んで、反対から潜った瞬間生き返ったのだ。

「なるほど、多分貴方は時間を戻したわけではないわね。自分の体の位置を巻き戻した。話を聞く限りアーチには生と死を切り替える力があると思われるわ。アーチを死の世界へと潜ったから死んで、反対に生の世界へと潜ったから生き返った。これは面白いわ」

パチュリー様は一人で納得したように呟くと図書館のあちこちから本を取り寄せ何かを調べ始める。

私が首をかしげていると小悪魔が説明してくれた。

「つまり死後の世界でアーチを見つけることができれば、生き返ることができるかもしれないということです。といっても、体の位置を巻き戻すというぐらゐの荒業を使わないと潜れないのであれば、何か条件があるのかもしれないが」

入り口は出口、逆から通れば出口が入り口になるといふことだろう。

「レミイが神秘部は面白いというのが頷けるわね。……クイレルのが上手くいったら私も見学に行こうかしら。咲夜、多分そろそろよ」

パチュリー様は調べ物をしながら私に言った。

私はそれを聞いて急いで懐中時計を確認する。確かにもうすぐ30分になるだろう。

私は椅子から立ち上がるとパチュリー様と小悪魔にお礼を言つて図書館を後にする。そして校長室の前へと姿現しした。

次の瞬間、校長室の扉が開き、ハリリーが疲れきつた表情で出てくる。

私はすれ違ふように中へと入った。

「おお、待たせたのう。咲夜。ちと散らかつておるが好きに掛けてくれ」
私は校長室に入った瞬間足を止める。

部屋の中は荒れに荒れており、様々な小物が床に散らばり壊れていた。

「……部屋の中で竜巻でも発生したのですか？」

「そうじゃな、若きとはハリケーンのようなものじゃ」

ダンブルドア先生は柔らかな笑みを浮かべる。

ダンブルドア先生の言葉から察するにこれをやつたのはハリリーらしい。

先生が杖を振るうと壊れたものがひとりでに動き直つていく。

部屋が完全に元通りになると、改めて私に声をかけてきた。

「今日はご苦労じゃつた。クラウチとレストレンジ相手に大立ち回りだったと聞いたじゃが、無茶をしすぎるのはよくない。アーチを潜つたそうじゃな」

ダンブルドア先生はまっすぐ私の目を見る。

私はダンブルドア先生に近づき椅子へと座った。

「少し失礼かもしれんが、言わせてほしい。何故生きてるんじや?」

……本当に失礼だった。

私はダンブルドア先生に向けて手首を差し出す。

「脈があるかどうか確認しますか?」

「いや、どうやら予想以上に元気なようじゃの。……あのアーチを潜ると戻ってはこれないと言われておる。じゃが、君は確かに戻ってきた。一体どうやって?」

「……わかりません。あの時は無我夢中で。柄にもなく叫んでしまったぐらいですの
で」

私は嘘をついた。

どのように帰ってきたかは理解しているが、教えてしまったら拙いことは確かだろ
う。

「……そうか、ではナイフで呪文を弾いたのは、あれはどうやったのじや?」

やはりそれも聞いてくるか。

というか、そのような話を誰から聞いたのだろう。

ダンブルドア先生には時間を操る能力を持っているという話しかしていない。

靈力に関する情報は一切与えていないのだ。

「……そうですね」

私は手の平の上に靈力を集める。

それを静かに空中へと浮かべた。

ダンブルドア先生の目が大きく開く。

まるで初めて靈力を見たかのような反応だった。

「これは……一体」

「靈力ですが……もしかしてご存じないのですか？」

だとしたら見せたのは少し拙かったかもしれない。

パチュリー様とダンブルドア先生の能力の差が、靈力を知っているかいないかといったものだったら……うん、拙い。

ダンブルドア先生は恐る恐る靈力の塊へと手を伸ばす。

「危ない！」

私が叫ぶとダンブルドア先生はビクンと動きを止めた。

その様子から私はダンブルドア先生が靈力に関して完全に無知であることを悟る。

私はすぐさま靈力の塊を消した。

「下手に触ると指が消し飛ぶところでしたよ？」

勿論嘘だ。

霊力はそこまで危険なものではない。

ただダンブルドア先生に詳しく調べさせたくなかっただけである。

ダンブルドア先生は一度目を瞑ると、改めて私に聞いた。

「霊力……と言うんじやったな。君はそれを何処で教わったのじや？ その力は魔法界には存在しない。まさしく神秘の力と言えよう」

「生まれつきです。誰かに何かを教わった経験はありませんよ」

私はダンブルドア先生の意識を反らすために椅子から浮き上がる。

そのままふわふわと校長室を浮遊し、ダンブルドア先生から少し距離を取って床に降り立った。

「調べますか？ 私の力を。勿論、私は抵抗しますし、無理やり調べようとしたらセクハラで訴えますが」

私は冗談めかして言う。

ダンブルドア先生は少し悩んだあと、いつものように朗らかに微笑み首を横に振った。

「わしに残されておる時間は残り少ない。今更新しい力に手を付けても遅いじやろ。だが、約束して欲しい。その力を、自分の大切な者を守るのに使うと」

ダンブルドア先生は真剣な顔で私の顔を見る。

私は軽く微笑むとしつかりと頷いた。

「勿論です」

私の大切な者を守るために。

大切な者を守るためだったら私はホグワーツの全生徒でも殺そう。

大切な者を守るためだったら罪無き命を奪おう。

全ては私が仕えるお嬢様の為に。

『名前を呼んではいけないあの人 復活す』

私は予言者新聞をテーブルの上に広げながらトーストにジャムを塗っていた。

どうやら魔法省はヴォルデモートが復活したことを認めたらしい。

まあ、魔法省の役人の多くがヴォルデモートの人質にされたので、認めないほうがどうにかしているのだが。

なんにしても、これでファッジ大臣は辞任せざるを得なくなるだろう。

新聞には魔法省がヴォルデモートの復活を認めたという記事の他に、ダンブルドア先

生が校長に復職したという記事や、ハリリーの独占インタビューなどが載っていた。

もつとも、独占インタビューは3月にザ・クイブラーに掲載されたものだったが。

多分ルーナの父親あたりが予言者新聞に記事を買ったのだろう。

私は新聞を折りたたむと鞆に仕舞い、私は大広間を後にした。

確かハリリーたちが医務室で寝ているはずである。

医務室にはふくろうは入れなかつたはずなので、まだ新聞を読んでいないだろう。

私はそのままホグワーツの廊下を歩き、少し時間をかけて医務室へと向かった。

姿現しをすれば一瞬でつくが、たまには時間をかけるのもいいだろう。

医務室に入るとハリリー、ロン、ハーマイオニー、ジニー、ネビル、ルーナが1か所に

固まって何かを話していた。

どうやら互いの怪我の状態を確認しているようだ。

「調子はどう?」

私はハーマイオニーに新聞を渡しながら声をかける。

ハーマイオニーは待ってましたと言わんばかりに新聞を広げた。

「うーん、ぼちぼち?」

ロンが苦笑いを浮かべながら私に返事をする。

この中で一番の重傷はロンなのだが、ロンがあの状態だとしたらまあ大丈夫だろう。

「咲夜は怪我してないんだね。なんというか、流石だよ」

ネビルが私に尊敬の眼差しを向けてくる。

ジニーもそれに同意しているようだった。

「ねえみんなこれ見て。咲夜が持つてきてくれた今日の新聞なんだけど」

ハーマイオニーはある程度の見出しに目を通し終わったのか全員の前に新聞を広げる。

一面にはファアツジ大臣がアタフタとしながら会見をしている写真が載っていた。

『ファアツジ大臣は金曜の夜、短い声明を発表し、名前を呼んではいけないあの人が再び活動を始めたことを確認したと話した』そのあとは魔法省批判とハーリーのよいしょね。本当にマスコミって都合のいい生き物だわ」

ハーマイオニーが呆れたように声を上げる。

「でもこれでハーリーはまた生き残った男の子になったわけだ。この1年新聞の上ではハーリーは頭のイカれた目立ちたがり屋だったもんな」

ロンが顔を顰めていうと、ハーリーは苦笑いをする。

確かにこの1年、予言者新聞は散々ハーリーを馬鹿にしたような記事を書いていた。

だが今日の新聞には褒め称える文章しか載っていない。

気持ちのいいぐらいの手のひら返しである。

そういえばファツジ大臣がこの調子だとアンブリッジはどういう風に思うのだろうか。私はカーテンで囲まれているベッドの方を見る。

あの中にダンブルドア先生が持つて帰つてきたアンブリッジがあるはずだ。

「ああ、咲夜。あれは見ない方がいいぜ。人間の形をしてない」

ロンは嫌なものを思い出したかのように首を振る。

「元から人の形をしてなかったじゃない。……生きてるの？」

「僕だったら死んでたほうがましだと思ふね。あんな状態だと」

ロンが肩を竦めていう。

ハーマイオニーも顔を青ざめさせた。

「ダンブルドアの話では、体がどうにか整つたらアズカバンに投獄されるそうよ。それはそうよね。咲夜に対して磔の呪文を使つたんですもの。去年習つた通り、許されざる呪文を同族に対して使つたらアズカバンで終身刑になる。まさかファツジも自分の部下をアズカバンに送ることになるなんて思いもよらなかつたでしょうね」

ジニーは楽しそうにそう語る。

どうやらあの場にいた生徒がそう証言してくれたそうだ。

だが、ハリーたちだけでは証拠不十分となつていただろう。

アンブリッジにトドメを刺したのは何とドラコだ。

親衛隊だったドラコがハリーと同じ証言をしたことによって呪文の行使の信憑性が増し、アンブリッジのアズカバン行きが決定したらしい。

「そーいや、こーやると生きてるって証拠を見せるぜ」

ロンが軽く舌を鳴らし馬の足音のような音を出す。

次の瞬間ゴボボボという何かが泡立つような音が聞こえた。

「うえ……ほんとどんな格好になってもキモイよな」

口直しと言わんばかりにロンはカエルチョコを口に突っ込む。

ネビルとジニーも吐き出しそうな顔をした。

ルーナは話を聞いているのか聞いていないのか、ベッドの端の方に腰かけてザ・クイブラーを読んでいた。

「そーいえば、逃げた死喰い人たちはどこに行っただろう。結局全員逃げられてしまっただろう？」

ネビルが少し不安そうに私に聞く。

ハーマイオニーはそのことに関して何か載っていないか新聞にくまなく目を通し始めた。

「さあ？ 死喰い人の行く先なんて知らないわ。重要なのは今後ヴォルデモートがどんな手を打ってくるかよ。敵の目的は何なのか、どういった手段を用いてくるのか」

「目的なら簡単さ。世界征服。そうだろうか？」

ロンが何を分かり切ったことをとといった表情をする。

皆も概ねそれに同意しているようだった。

つまりそれが魔法界に住んでいる人間の認識ということだ。

だがハリーだけはロンの言葉に生返事をした。

何かを思い詰めるような、そんな顔だ。

「ハリー、大丈夫？ まだ体調が優れないんじゃない？」

私はその何かを探るようにハリーに声をかける。

ハリーはふと我に返り私の顔を正面から見つめると、顔を赤くしてすぐさま視線を

ベッドに向ける。

「大丈夫、大丈夫だから……。ああ、そうだ。僕、ハグリッドに会いに行つてくるよ」

そういうとハリーは逃げるように医務室からいなくなる。

ハーマイオニーはやれやれといった顔で肩を竦めた。

「ほんと、男子つて不器用ね」

「ん？ 今ちよつと馬鹿にした？」

ロンがハーマイオニーの言葉に眉を擡める。

その様子を見てジニーがクスクスと笑った。

私はそんな会話を聞きながら思考を巡らせる。

今回、死者は1人も出なかった。

そして新聞の記事を読む限り死喰い人の方にも死者は出ていないらしい。

果たしてあの乱戦の中でそれが有り得るのだろうか。

頭上を死の呪文が飛び交うような戦場で、死者が出ないというのは本当に奇跡に近い。

この結果が偶然なのか、必然なのか。

……確かめる術はないだろう。

私は空いているベッドに腰かけると会話に交じる。

なんにしても、今年も1年が終わったのだ。

学校も終わり私たちはいつものようにホグワーツ特急で帰路につく。

もうすっかり元気を取り戻したのか、魔法省に行った面々は思い思いのことをしていた。

ハーマイオニーは予言者新聞を読んでおり、時折ぶつくささと批評を言う。

ジニーはザ・クイブラーのクイズに興じ、ネビルはこの1年で大きく育ったミンピユ

ラス・ミンブルトニアを撫でている。

ハリーとロンは時折ハーマイオニーが読み上げる予言者新聞の抜粋を聞きながら魔法チエスをしていた。

私はというと、いつものごとく読書だ。

キングズ・クロス駅に近づいてくると列車は徐々に速度を落としていく。

そしてそのまま9と4分の3番線へと停車した。

止まった瞬間ルーナが一番にトランクを転がして列車を降りていく。

そのあとにネビル、ジニーと続いていき、私もそのあとを追った。

列車を降りた次の瞬間、私の足が地面から離れる。

一体何事かと思ったが、どうやら美鈴さんの仕業のようだ。

美鈴さんは列車の上に腰かけており、私の襟をつかんで上に持ち上げていた。

「あの……降ろしていただけないでしょうか？」

「何を？」

美鈴さんは器用にそのまま手首を捻ると私を反転させる。

首を振じらなくても美鈴さんの姿が見えるようになったが、持ち上げられているこの状況はあまりいい気はしない。

「冗談だって！ よつとー！」

美鈴さんは私を掴んだまま列車から飛び降りるとハリーたちの前に着地する。そしてドスンと私を地面に下した。

「こんにちは、美鈴さん」

ハーマイオニーが戸惑いつつも美鈴さんに挨拶をする。

それに倣いハリーとロンも頭を下げた。

「やあやあ、こんにちは諸君。咲夜ちゃんは今一年いい子にしたのかな？」

「ふざけないでください。館の気品が落ちます」

「私ってそんなに!?!」

私は美鈴さんの頭を叩く。

そういえば、もう普通に美鈴さんの頭に手が届くようになっていた。

私たちは美鈴さんと共に柵を潜り抜けマグルのホームへと行く。

そこには少々意外な集団が私たちを出迎えた。

ムーディにトンクス、ルーピン。

さらにはモリーさんにフレッド、ジョージだ。

美鈴さんはその全員に丁寧な挨拶をすると、がっちり私の手を握る。

私は無理やり引き剥がそうとしたが、妖怪の彼女の力に勝てるわけがなかった。

ムーディとルーピンは意外そうな顔をし、トンクスはクスクスと笑っている。

「やはりまだ小娘だな」

ムーディはニヤリと笑みを浮かべた。

「ところで貴方たちはハリーの護衛？」

私は美鈴さんの手を振りほどくのを諦めてルーピンに聞く。

「いや、彼の保護者に少し話があるだけだよ。君は家の人と一緒に帰るといい」

ルーピンはそういうとムーディとトンクスと共にダーズリー一家へと近づいていった。

3人と入れ替わるように今度はフレッドとジョージが近づいてくる。

2人はケバケバしい緑色の鱗生地のできた新品のジャケットを着ていた。

「素敵なジャケットだね」

「最高級のドラゴンの革さ。事業は大繁盛。これは自分たちへのちよつとしたご褒美つてところだな」

フレッドは私の顔を見て嬉しそうに笑う。

ジョージは目ざとくも私が美鈴さんと手を繋いでいることに気が付いたようだ。

「咲夜こそ素敵な状況だな。そうしている方が可愛く見えるぜ」

「ああ、子供っぽいとも言えるが。15だったらその方がいい」

2人してケラケラと笑う。

いや、美鈴さんも笑ったので実質3人に笑われたことになるのか。私はその怒りを全力で美鈴さんの足へとぶつける。

脛をガンガン蹴るが、全く効いていないようだった。

「勉強不足だな咲夜ちゃん！ 武人は脛すら鍛えるのよ」

蹴つてみるとわかるが、彼女の脛は鋼鉄のように硬い。

体力の無駄だとわかると、私は小さくため息をつき蹴るのをやめた。

私は美鈴さんと手を繋ぎながらハリーたちに手を振る。

そして美鈴さんと共に人混みへと紛れると、時間を止めた。

「おかえり、咲夜ちゃん」

美鈴さんは私の手を握ったまま空へと飛びあがる。

「ただいま。美鈴さん」

私も笑いながら空へと飛びあがる。

その瞬間、私はふと思いついたことがあった。

そうか、これが幸せというものなのだろう。

用語解説

アーチ

ヤバイ。アーチヤバイ。まじでヤバイよ、マジヤバイ。

アーチヤバイ。

まず石。もう石造りなんてもんじやない。超石。

石とかつても

「最高級大理石？」

とか、もう、そういうレベルじゃない。

何しろ死ぬ。スゲエ！なんかラグとか無いの。バイタルとか超越して（ry

そんなヤバイアーチに入っていった咲夜とか超偉い。もつとがんばれ。超がんばれ。

懐中時計の風防

文字盤前のガラスのことです。

一時休戦

意外と話分かるヴォルデモート

おにやのこ2人に全身を調べられる咲夜

やましいことは何もありません。ええ。

靈力を知らないダンブルドア

意外と無知、いや、探求をやめてしまった末路ともいえる。

フレッド、ジョージ

商売大繁盛です。

「貴方は少し人間に冷たすぎる。このままでは川を渡れないかも知れない」

どこからか声が聞こえる。

誰の声だろう。

「川の幅は、その靈の歴史の幅。生前の行いで幅が決まるのです」

川？ 幅？

何の話をしているのだろう。

「貴方は人に生まれるべきではなかった。人として生まれてしまったばかりに、自覚することなく罪を重ねてしまった。私が判決を下すまでもなく、貴方は真つ黒です」

人として生まれた？ 私が黒い？

「ですが、まだその時では無いようです。行きなさい、十六夜咲夜。その罪で穢れた身を清める為に、善行を積みなさい」

声の主はどこかへ行つてしまった。

ここはどこだ？

私は……一体。

「みくつけた」

妹様だ。

「咲夜、こんなところにいたのね。アリアナが教えてくれなかったら気が付かなかったわ」

妹様が私の目の前にいる。

「咲夜。置いてくわよ？」

妹様がどうしてここにいるのだろう。

いや、まずここが何処かわからないのだが。

そもそも、なぜ私は妹様だとわかった？

「あ、そつか。慣れないとこの世界では動きにくいものね。大丈夫。私が導いてあげるわ」

妹様に連れられて私は進む。

いや、そもそも進んでいることすらわからない。

「人を死へと導く門よ。その中に取り込みし魂と肉体を現世に返せ」

今度はパチュリー様の声が聞こえてくる。

どうやら何かに近づいているようだ。

「咲夜」

誰かが私の名前を呼んだ。

「十六夜咲夜」

誰かが優しく私の名前を呼んでいる。

「咲夜。おかえり」

お嬢様が私の体を抱きしめ、アーチから引きずり出した。

「あ、あああああ。え?」

途端に私は我に返る。

ここはどこだ?

何故私はお嬢様に抱きしめられている?

何故私は『今』アーチから引きずり出された?

「お、お嬢様。ここは一体……」

私はお嬢様に抱きかかえられながら周囲を見回す。

そこには涙目になっている美鈴さんと、安堵のため息をついている小悪魔とクイレル。

そして今まさに魔導書を閉じたパチュリー様がいた。

私は後ろを振り返る。

そこにはクラウチとレストレンジと戦っているときにうっかり入ってしまった石のアーチが立っている。

私は今どこにいるのかをようやく理解した。

「ここは……神祕部ですか？」

私が問うとパチュリー様が頷いた。

私は自分の足で立とうとするが、お嬢様が放してくれない。

「あの、お嬢様？ もう大丈夫ですのよ」

私はお嬢様に声をかけるが、お嬢様は放してくれない。

逆にさらに強く、そして優しく抱きしめられた。

「私の命令も無しに死ぬなんて……ほんとに、ほんとに……」

「お嬢様？」

「本当に……——っ、勝手に、居なくなっちゃ駄目なんだから！ おかえりっ！」

お嬢様はそのまま私を押し倒す。

お嬢様に覆いかぶさるように美鈴さんが上に乗り、そこに乗つかないようにパチュリイ様と小悪魔が覆いかぶさった。

クイレルだけがその光景を部屋の端で見ている。

「重いです！ 潰れちゃいますって！」

「潰れちゃえばいいのよ！ 体があるってことじゃない！」

「そうだよ咲夜ちゃん！ おかえり！」

「おかえり、咲夜」

「よく帰ってきましたね。咲夜」

「無事帰ってこれて何よりだ。十六夜君」

全員が畳みかけるように私に声を掛けてくる。

次の瞬間姿現しの感覚を体を受け、気が付いた時には紅魔館の大図書館に転がっていた。

私はこのままでは窒息してしまおうと思ひ命からがら抜け出す。

そしてよろよろとテーブルの椅子に腰かけた。

「えっと、何がどうなったのでしょうか。私はホグワーツ特急で学校から帰ってきて、美鈴さんとロンドンの街を飛んで……」

「一体なんの話をしているの？ まあ確かにホグワーツは夏休みに入っているけど」

パチュリー様が怪訝な声を出す。

「咲夜ちゃん、大丈夫？ 混乱してる？」

美鈴さんが心配そうに声を掛けた。

ゴホンと一度咳払いをしてパチュリー様が言葉を続ける。

「6月19日の朝一番にレミイ宛てにふくろう便が届いたわ。貴方が神秘部の戦いで死亡したという知らせよ」

「そんなはずはありません！ 私は体の時間を巻き戻してアーチから飛び出し生き返ったんです。そのあと——」

「だから混乱していると言っているの」

パチュリー様が私の言葉を遮る。

「いい？ 貴方はアーチを潜ってしまい死んだの。その後ダンブルドアが駆けつけて死喰い人を一網打尽にし、ハリーたちがヴォルデモートに捕まって人質交換。貴方はこの戦いで唯一の戦死者になったのよ」

「ですが私は生きています」

「そうね、私とレミイが全力を上げて取り戻したのだから」

私は告げられた真実に戸惑いを隠せない。

では、私がアーチから飛び出した後に見ていたのはなんだ？

そこから先、私はパチュリー様の話を黙って聞いた。

お嬢様が知らせを受け取った瞬間に美鈴を連れてホグワーツの校長室に殴り込みをかけた。

お嬢様はそこで私がアーチに飛び込んでしまったことを知ったらしい。

そのあとすぐお嬢様は館へと戻り、パチュリー様に相談したようだ。

死んだ私を取り戻しに行きたいと。

幸い、パチュリー様の手元に道具は揃っていたらしい。

神祕部の戦い前に見せてもらった蘇りの石。

それを媒質にしてアーチ付近に巨大な魔法陣を作り上げ、お嬢様と私の主従の繋がりを利用して私を死後の世界から引きずり出したそうだ。

「というわけで、魔法界では既に貴方は死んだことになっているわ」

パチュリー様はそう話を締めくくる。

そうか、私は死んだことになっているのか。

私はアーチに入った後、私が見ていたのであろう『夢』の話をしていく。

皆、静かに私が見た夢を聞いていた。

「概ねその通りだ」

クイレルが口を開く。

「人質のくだりも魔法省がヴォルデモートを認めたというくだりも、そしてアンブリッジのアズカバン行きが決まった話もな」

「ええそうですね。違うところを挙げるとすれば、貴方が死んだか死んでいないかということよ」

パチュリー様がクイレルの言葉に同意した。

「では、私はどうすればよいのでしょうか。このまま新学期、普通に学校に通ったほうがいいでしょうか？」

私の問いにお嬢様は顎に手を当てて考える。

「そうですね、ダンブルドアの動き方次第かしら。ダンブルドアは貴方という大きな武器を失ったことで何かしらの行動に出るはずよ。それを見てから決めても遅くはないわ。それまで、館から出ることを禁ずる。いいわね？ 貴方が生きているということは極秘中の極秘よ」

「かしこまりました」

ということとは、私はしばらく館の仕事に専念できるということだろう。

私が見ていた夢の世界とのギャップも気になるので、願ったり叶ったりだ。

「咲夜奪還作戦も成功したことだし、今日のところは解散！ ほら、みんな寝るわよ。もう朝も更けてきたわ」

お嬢様は大きく欠伸をすると図書館を出ていく。それを追うように美鈴さんも図書館を出ていった。

クイレルも図書館にある暖炉から煙突飛行でどこかへと消える。

「小悪魔、咲夜の看病をしてあげなさい。死に上がりでまだ本調子じゃなさそうだし、1日しっかり寝た方がいいわ」

「了解です、先生。咲夜、行きましょう」

私が椅子から立ち上がる和小悪魔は私を横抱きにする。

なんとというか、非常に恥ずかしい。

「小悪魔、自分で歩けるから……」

「さつきまで死んでたんですよ？ ほら、力を抜いてください」

私は真つ赤になった顔を伏せ、小悪魔から見えないようにする。

小悪魔はそのまま私を私の部屋へと運び、ベッドに寝かせた。

「咲夜。眠る前に少しいいですか？」

小悪魔は私の服を寝間着へと着替えさせながら口を開く。

「……あまり無茶はなさらないでください。お嬢様を筆頭に館の全員がそれなりに悲しんだのですよ？」

小悪魔は寝間着姿になった私にシーツを掛けた。

「命令を守るのも大切ですが、貴方の命が一番大事だと、ここにいる全員が思っています」

「悪魔のセリフじゃないわね」

「あくまで、元人間ですから」

小悪魔はクスクス笑うと私の頭を優しく撫でる。

私はそれが妙に心地よく、次第に深い眠りにへと落ちていった。

十六夜咲夜と死の予言

魔法大臣とか、訪問とか、謝罪とか

小悪魔は一人田舎道を歩いていて。

その道はもう随分と人が通つてないのか、草は伸び放題になっている。

だが小悪魔はそんなことには全く気にせず、一人夜道を進んでいく。

そして10分も歩かないうちに古びた屋敷へとたどり着いた。

「私の予想ではここなんですけどね」

ぼつりと独り言を呟きながら小悪魔はその屋敷に入っていく。

その屋敷は何年も人が住んでいないのか、いたるところに蜘蛛の巣が張り、部屋の家具も全体的に埃っぽい。

小悪魔はそんな屋敷の中心に立ち、静かに精神を集中させる。

まるで何かを感じ取るように。

「キャビネット棚の中か」

何かを感じ取ったのか小悪魔はゆっくりと屋敷の中を歩いていく。

そして古びたキャビネット棚から指輪を一つ取り出した。

金色のリングに、黒い菱形の石が嵌まっている。

「1つ目発見。流石私、考えることは同じか」

小悪魔は納得したように頷くと無造作にその指輪をポケットに入れる。

指輪のあつたキャビネット棚には、1枚の羊皮紙を残した。

そして次の目的地へと姿をくらます。

小悪魔は1人入り組んだ線路の上を歩いていった。

ここはロンドンの地下に広がるグリーンゴッツ魔法銀行の金庫の通路だ。

本来ならばトロツコで移動する道を小悪魔はゆっくり歩いていく。

そして1つの金庫の前で立ち止まった。

「確かレストレンジの金庫はここですよね」

小悪魔は金庫の扉に手を押し付ける。

次の瞬間小悪魔は金庫の中へと吸い込まれた。

これは一種の泥棒対策なのだ。

ゴブリン以外が扉を開けようと手を触れるとそのものは永久に金庫の中に閉じ込められる。

だが、裏を返せば金庫の中には容易に侵入できるということもある。

小悪魔は吸い込まれるままに金庫の中に入ると、中に入っている財宝の中から小さな金色のカップを手に取った。

そのカップは触れられた瞬間から物凄い速度で分裂し、焼きゴテのように熱くなる。

その熱で小悪魔の手の平は炭化していくが、小悪魔は気にしていないかのようにそのまま次の目的地へと姿をくらませた。

小悪魔は暗い廊下に一人立っていた。

廊下の窓からはうつつすらと月明かりが射し、小悪魔の周囲を照らしている。

小悪魔は廊下の窓から下を見下ろし、自分が今何階のどこにいるか確認すると石壁の前に歩み出る。

そのまま何度か石壁の前を往復し、石壁に扉を出現させた。

「この部屋に入るのも久しぶりですね」

小悪魔は扉を開け中に入っていく。

そこには何千人という生徒たちが隠したのであろう品物が積み重なって部屋に鎮座していた。

「前回入った時より乱雑になっている。やはりここに隠すのは得策じゃなかったみたいですね」

小悪魔は目を瞑り精神を集中させる。

そして何かを感じ取ったのか迷いなく部屋の隙間を通っていき、古そうな黒ずんだティアラを手を取った。

「これも確かにそうです。ではあと一つ」

小悪魔は次の目的地へと姿をくらませた。

小悪魔は一人、大きな洞穴に続く階段を上がっていく。

洞穴の真ん中は大きな空洞となっており、そこで行き止まりになっていた。

小悪魔は迷うことなく壁に近づくと自分の手首を切りつける。

そこから噴き出した血が壁に掛かるとアーチ型に壁が光り、通路ができあがった。

「まあなんとというか、私の考えそうなことですね」

小悪魔が軽く手首を捻ると次の瞬間手首の傷が癒える。

そしてそのまま明かりも灯さずに通路の奥へと進んでいく。

通路の奥には大きな空間と黒い湖が広がっていた。

小悪魔は湖の縁をなぞる様に歩き、何かに気が付いたのか立ち止まる。

「なるほど、船が用意してありますね。それを利用してもいいんですが……」

小悪魔はそのまま湖の中心にある小島へと姿現しした。

「それも癪です。さて、最後の分霊箱はっ」と

小悪魔は小島の中央に置かれている石の水盆に目を向ける。

その水盆の中には光り輝くエメラルド色の液体が入っていた。

小悪魔は躊躇うことなくその液体の中に手を入れようとするが、入らない。

表面にガラスでも張ってあるかのように、その液体は守られていた。

「ふむ、消失呪文も効かないですし、ということとは……飲めつてことですかね」

小悪魔が水盆の上で手を振るうとクリスタルのゴブレットが現れる。

そのゴブレットであれば、問題なく水盆の中の液体を掬うことができた。

「いただきまーす」

小悪魔はその毒々しい液体を喉を鳴らしながら飲んでいく。

まるでビールでも煽るかのように軽快に、美味しそうに。

そう、人間にとつて毒であっても悪魔にとつて毒だとは限らない。

「さて、最後のーっは……ん？」

小悪魔は空になった水盆から古びたロケットを取り出す。

だが、そのロケットが分霊箱であるとは思えなかった。

「それ以前にスリザリンのロケットですらなさそうですね。お、中に羊皮紙が」

小悪魔はロケットを開き中に入っていた羊皮紙を確認する。

そして何者かによってロケットが既に取り換えられていたことを知った。

「ふむ、ということとはここに分霊箱はない。そういうことですかね。ならまあそれでいいですが」

小悪魔は一通りの用事を終え、大図書館へと姿をくらませた。

「今年も終わりがやってきた」

ホグワーツの大広間にダンブルドアの朗々とした声が響き渡る。

大広間にいる生徒や教師は、皆静まり返りダンブルドアの次の言葉を待った。

「まずはじめに、一人の立派な生徒を失ったことを悼もう。本来ならグリフィンドールのテーブルに座って、一緒に宴を楽しんでいるはずじゃった。さあ、皆立ち上がり、杯を上げよう。十六夜咲夜の為に」

ダンブルドアの言葉に全員がそれに従った。

皆ゴブレットを上げ、重たい表情をしている。

「十六夜咲夜。彼女はこの数十年間で一番と言つてもいいほどの魔法の使い手で、非常に優秀な魔女じゃった。決して模範的な生徒とは言えなんだが、皆から慕われておつた」

テールブルのあちこちですすり泣く声上がる。

「それ故に、わしはその死がどのようにしてもたらされたかを、皆が正確に知る権利があると思う。十六夜咲夜は先日の魔法省での戦いで、死喰い人との死闘の末、命を落としたのじゃ。悲しいことに彼女の遺体は見つかつておらん。だが、彼女はもうこの世にはいない。あれを潜るということは、死の呪文よりも確実な死が訪れるということなのじゃ」

その言葉に魔法省に向いた面々が顔を伏せる。

その中でもハリーは一番ショックを受けているようだった。

「魔法省はついにヴォルデモートが復活したことを認めた。そのうち大臣も替わるじやろう。そして魔法省がその存在を認めることによつて死喰い人たちの活動が活発になることは確かじゃ。故に、皆用心を怠らないように。ホグワーツからこれ以上死者を出さないためにも、重要なことじゃ」

ダンブルドアがゴブレットを高く上げる。

生徒もそれに倣った。

「十六夜咲夜に」

全員がゴブレットの中身を飲み干す。

中身と一緒に、別の何かも飲み込むように。

夜中の12時。

イギリスの首相は執務室に1人籠り、長つたらしい文章に目を通していた。

だがその内容は頭に入っていないようで、違うことに頭を悩ましているのかガシガシと頭を掻く。

そう、このところの数週間イギリスでは不可解な事件が次々と起こっているのだ。

建ててから10年と経っていない橋が何の前触れもなく落ち多数の死傷者が出たりだとか、西部地方でハリケーンが発生したりだとか、不自然な殺人事件が何度も起こったりだとか。

「ゴホン」

首相以外誰もいないはずの執務室に突如咳払いが1つ聞こえる。

首相はいきなりのそれに内心驚きつつも声だけは気丈に聞き返した。
「誰かね？」

すると次の瞬間、執務室に掛かっている絵画の1つから返事が聞こえる。

首相が絵画を見ると、気だるげな表情の小男が絵画の中で喋っていた。

「マグルの首相閣下。ファッジ大臣がそちらに参ります。至急ご準備を」

「今すぐかね？ ……うーむ。いいでしょう」

首相は動揺しつつも絵画に返事をする。

このようなことが起こったのは初めてではないのだろう。

首相はネクタイを締めなおし椅子に座りなおす。

そして平静を取り繕った途端に執務室の暖炉が薪もないのに緑色の炎を上げて燃え

あがり、その炎の中から1人の男が這い出た。

魔法大臣のコーネリウス・ファッジだ。

「おお、首相閣下」

ファッジは手を軽く上げ首相に挨拶をする。

「またお目にかかれて嬉しいですね」

ファッジはそう言って弱々しく笑う。

首相が最後に見たときよりも、一段とファッジはやつれて見えた。

髪はますます禿げ上がり、白髪も増えている。

「それで、何の御用ですか」

首相がフアツジに聞いた。

イギリスがこんな状況の時に、いきなりの訪問だ。

いい話ではないことは確かだろう。

フアツジはやつれた顔で椅子に座ると魔法界で今起こっていることを一つずつ説明していく。

例のあの人が復活したということ、そのせいでマグルの世界にも被害が及んでいるということ。

さらに言えば自分が3日前に魔法大臣をクビになったということだった。

首相は冷静にその言葉を聞いて、どんだん顔を青ざめさせていく。

魔法界のことをこっちの世界に持ち込まないでほしい。

首相の気持ちを代弁するとしたらまさにこれだろう。

「それで今夜は私の後任を紹介する役割で参りました。事故がなければそろそろつく頃だと思うのですが……」

次の瞬間、執務室の扉がノックさせる。

もしかしたら秘書が様子を見に来たのだろうか、首相は内心焦りながら扉の向こう

に声を掛けた。

「誰かね」

「コーネリウス・ファッジの後任のものです」

その言葉に首相とファッジは顔を見合わせる。

煙突飛行でこの部屋に來ると思っていたからだ。

「どついで」

首相が返事をする、執務室の扉がゆっくりと開かれる。

そこには一見魔法使いには見えない男が立っていた。

服装はスーツを着込んでおり、手には革のビジネスバッグを持っている。

唯一目につくとしたら刈り上げた頭だろうか。

だが顔が厳つくないせいか、自然と威圧感を感じない。

その男は静かに扉を閉めると首相に向かって右手を差し出した。

「初めまして」

男は首相と握手を交わすと首相の指示した椅子へと座る。

首相は既にその男に好印象を持っていた。

こいつは私たちの常識を知っている。

それが首相を安心させたのだろう。

「では貴方が後任の？」

「はい。クイリナス・クイレルと申します。お目にかかれて光栄です。首相閣下」

「いやはや、貴方みたいな人を待っていた。実に話が合いそうだ」

首相はそう言つて安心したように微笑む。

クイレルもそれに合わせて軽く微笑んだ。

「着任したばかりで私は実に忙しい。早速ですが本題に入らせていただこうと思いません。まず、貴方の安全を確保するための話です」

「安全に関する話ですか？ 私は現在ある安全対策で十分満足しております」

首相は軽く顔を顰めるが、クイレルは気にした様子を見せない。

「首相、魔法使いの扱う魔法に服従の呪文というものがあることをご存知でしょうか。この呪文を掛けられると掛けられたものは術者の命令に従うしかない。絶対服従の身となってしまうのです。イギリスの首相である貴方がヴォルデモートに操られでもしたら、市民に危険が及ぶということをご理解ください」

その説明を聞いて首相はギクリとする。

「そ、そのようなものをどのようによいのかね。生憎私は魔法を防ぐ術を持つていない」

「ご安心ください。既に魔法省の人間を一人大臣の傍に就かせております」

「まさかあのキングズリー・シャツクルボルトは……」

「ええ、彼は魔法使いです。それも飛び切り腕の立つ」

首相はその事実を聞かされて椅子の上で小さくなる。

最近採用した秘書官が魔法使いだなんて、夢にも思わなかったのだろう。

「あれはとでもできる男だ。ほかの人間の2倍は仕事をこなす。……それは彼が魔法使いだからということか」

「彼自身も優秀であります、概ねその通りです。首相。魔法省としても魔法界の問題は魔法界で完結させたい。一刻も早くけりをつけるつもりではありません。しばしご辛抱ください」

では、とクイレルは立ち上がる。

そして部屋で絶望的な顔をしている首相を置いて部屋の外へと出ていった。

『クイリナス・クイレル 魔法大臣就任 あの人に打ち勝った魔法使い』

『魔法省が例のあの人の復活を発表したことはまだ記憶に新しいと思う。コーネリウス・ファッジは当然のように大臣職を追われたのだが、その後任にクイリナス・クイレルが選ばれた。クイリナス・クイレルはマグル学の教授としてホグワーツに勤めていた

という経歴を持っているが、魔法大臣に選ばれた理由はそこではない。クイレルはここ数年の間、例のあの人に体を乗っ取られていたのだ。1990年、修行の為1年間ホグワーツの教授職を休んでいた時、アルバニアの森で例のあの人に寄生されるとクイレルは語る。「そこから1年以上は全く記憶がなかった。あとから知ったことだが、その時例のあの人は私の後頭部に寄生していたらしいのです。しかしある時、例のあの人は私から離れ、肉体を持った。そこから数年は服従の呪いで操られる毎日でした。チャンスが訪れたのは今年に入ってからです。例のあの人が完全に体を取り戻し、徐々に力を取り戻していくのと比例して、私への呪いが弱くなっていきました。そしてついに私は例のあの人の服従の呪いを打ち破り、表の世界に帰ってくることができました」クイレルは服従の呪文が解けたと同時に逃げたのではなく、しばらくは呪いにかかったふりをしていたという。「内部の情報をできる限り集める為です。苦勞の末、私は例のあの人を打倒するに十分の情報を掴んでいます。今後それらの情報を基にした政策を進めていこうと思っています」

「選ばれし2人目の魔法使い……ねえ。よく信用されたものね。魔法大臣さん」

紅魔館地下にある大図書館。

私は図書館中央の机で新聞を広げているクイレルに紅茶を出した。

「開心術士10人の前で向こうの用意した真実薬を飲んで証言したからな。魔法省としても疑いようがない。そして一度大臣職に就いてしまえばこっちのものだよ、ゴーストさん」

クイレルはそう言つて紅茶を受け取つた。

今年の初めからクイレルは徐々に魔法省の役人と接触し、自分を信用させていったのだという。

そしてついに魔法大臣になつたのだ。

「まあファツジが引きずり降ろされるのは時間の問題だったし、このご時世魔法大臣をやりたいがる人もいないか。貴方じゃなかったら誰になつていたと思う?」

「大方、闇祓い局長のスクリムジョールだろうな。奴には人望がある」

「貴方と違つてね」

「これでも支持率が高いんだがね。私も」

私が生き返つてからというものの、色々なことがあつた。

まず、一番驚いたことは私が完全に死んだことになつていてということだろう。

日刊予言者新聞は私が死んだことを記事にし魔法界中にばら撒いた。

さらにはホグワーツで簡単な葬式まで行われてしまったというのだから驚きだ。

私はお嬢様の命令でその扱いを甘んじて受けている。

お嬢様としても、世間的に私が死んでいるほうが都合がいいらしい。

そして生き返って一週間も経たないうちに、私はもう一度驚かさせられることになった。

クイリナス・クイレルが魔法大臣に就任したという知らせだ。

「死喰い人は卒業つてわけ？　魔法大臣が闇の帝王と仲良しこよしつてわけにはいかないでしょう？」

私は一番気になってることを聞く。

死喰い人の中のクイレルの扱いだ。

「いや、死喰い人もヴォルデモートも私が魔法大臣に就任することを了承している。言つてしまえば魔法省はヴォルデモートの手に落ちたと、死喰い人たちは思っていることだろう」

「つまりヴォルデモートは貴方をスパイとして魔法省に送り込んだということね」

「スパイと呼べるほど可愛らしい役職ではないがな。何せ魔法界のトップだ」

そしてクイレルはお嬢様に忠誠を誓っている。

つまり魔法界はお嬢様の手に落ちたということだろう。

「ヴォルデモートからは来るべき時まで有能な大臣を演じろと言われている。民の信用を勝ち取れとな。もつとも、それはお嬢様からも言われていることだ。しばらくは闇の

陣營と戦う良き大臣を演じるよ」

クイレルはそういうとこちらに新聞を差し出してくる。

差し出してきた記事にはホグワーツから死者が出たと書いてあった。

「私は君の扱いのほうが気になるがね。あと一か月としないうちに学校が始まるだろう？　もうホグワーツには通わないのか？」

「お嬢様次第よ。まあ私自身ここで仕事をしていたほうが楽しいし、そっちの方が本望だけどね」

私は箒で床を掃く動作をする。

それを見てクイレルが少し笑った。

「学校はどうでもいいけど、不死鳥の騎士団はどうするのですか？」

急に後ろから声を掛けられた。

この声は小悪魔だ。

「確かに向こうの情報がこつちに入ってこないというのは深刻よね。……小悪魔、私の代わりにホグワーツに——」

「通いませんか？　私はもう卒業した身ですから」

「だったらパチュ——」

「論外よ」

机の端にいたパチュリー様が小さな声で呟いた。

「冗談です」

私は苦笑いを浮かべる。

パチュリー様は一度つまらなさそうにため息をついたが、何かを感じ取ったように眉を上げた。

「何者かが私の仕掛けた罠に引っかけたわね。これで10回目よ」

「罠……ですか？」

私が聞き返すとパチュリー様は頷く。

「そう、罠。ようは私があちこちに作ったダミーの隠れ家よ。私を追跡しようとするものはそれに引っかかるようになってるの。最近私の存在を躍起になって探している者が2人ほどいてね。ここにたどり着くことはないと思うけど」

パチュリー様は落ち着き払った表情で本に視線を戻す。

「2人……ですか」

「そう、ダンブルドアとヴォルデモートね」

パチュリー様が明かした2人の名前は、私が想像した2人と一致した。

「なんというか、パチュリー様本当に狙われているんですね」

私がそういうとクイレルと小悪魔が呆れたようにため息をつく。

2人ともまるで分っていないと言いたげな表情をしていた。

「咲夜、貴方も先生の技術と知識は知っているでしょう？　先生がどちらかの陣営に手を貸すだけでパワーバランスが崩れる」

「そうだぞ、十六夜君。彼女の技術がなかったら君を生き返らせることは到底不可能だった」

「そう、片方に手を貸したらパワーバランスが崩れるのよ」

違う方向からいきなり声が聞こえて私は咄嗟に振り返る。

いつの間にかお嬢様が私の反対側に座っていた。

「そういうわけだからパチエ。両方にバランスよく手を貸せばいいのよ」

そんなお嬢様の言葉にパチュリー様は軽く頭を抱えた。

「んな面倒くさいことを……。とは言っても1年だけか。だったらべ——」

パチュリー様が急に押し黙る。

お嬢様も何かを感じ取ったように羽をピクつかせた。

「何かが結界を越えたわね。パチエと咲夜とクイレルは大図書館から動かないこと」

何かが結界を越えた。

そのようなことがあり得るのだろうか。

「紅魔館を覆う結界を越えることは可能よ。あれは物理的なものではないもの。紅魔館

に自分や他人の利益の為に近づこうとする人間や妖怪を締め出すためのものよ。だからふくろうなどは入ってこれるし、クイレルがここに迷い込んだのは自分の意思が保てないぐらい精神的に不安定だったから。外の様子を映すわね」

パチュリー様は机の上に紅魔館の門前の光景を映し出す。

そこには驚いた顔の美鈴さんと、ハリー・ポッターがいた。

ハリー・ポッターは後悔していた。

ハリーは今年の6月に自分の名付け親を助けるために魔法省に向かったのだが、それは敵側が仕掛けた罠だったのだ。

結果多くの怪我人と1人の死者を出した。

死んだ者の名前は十六夜咲夜。

ハリーがホグワーツに入学したときからの親友だ。

ハリーはここ2か月ほど、自分の判断を悔いていた。

魔法省からホグワーツに戻ったときに咲夜が死んだことを聞かされた。

大広間での宴の時に、ダンブルドアから咲夜が死んだことを宣言された。

ダーズリー家に配達された予言者新聞に咲夜が死んだことが掲載された。

ダンブルドアの手でブラック邸に連れていかれた時、咲夜が死んだということを騎士団員の話から再確認させられた。

そう、ハリーの判断ミスで、ハリーは一人の友人を失ったのだ。

その事実がハリーを深く抑え込み、締め付ける。

咲夜のことを思い出すだけで心臓を鎖で締め付けるような感覚が襲うのだ。

その苦しみは日に日に強くなっていき、ハリーを苦しめる。

ついに耐え切れなくなったハリーは、ブラック邸を後にしたのだ。

マグルの交通機関を乗り継ぎ、あてもなくイギリスを彷徨い歩く。

ただ一言彼女の関係者に直接謝りたい。

その一心でハリーは何処にあるのか全く知らない紅魔館を目指す。

手掛かりはただひたすらに紅いということ。

そして放浪すること3日。

既に何処を歩いているのかわからなくなってきた頃に、ついにハリーは紅魔館へとたどり着いたのだった。

それはもう運命に誘い込まれたといったほうが正しいのかもしれない。

ハリーは門の前に立つ美鈴と、その奥にそびえ立つ紅魔館を目にすると、一気に意識

を覚醒させる。

「ありやまあ」

美鈴はそんな呆れ半分の声を出す。

何故ハリーがここにいるのかというよりも、何故ここに人がいるのか不思議がついてい
るような、そんな声だ。

「こんなところまでどうしたの？　なんとというか小汚いし……道に迷った？　知らない
のなら教えてあげるけど、君って実は死喰い人に狙われてるんだよ？」

ハリーはそんな能天気なことをいう美鈴に内心凄く驚いていた。
会った瞬間殴られるか殺されると思っていたからだ。

「あ、あの、美鈴……さん。僕、実は……」

「まあまあ、あがりんしゃいあがりんしゃい。小汚いしマーリンの髭みたくなってるよ。
はいはい一名様ごあんない！」

美鈴は何かを喋ろうとするハリーの背中をバンバンと叩き黙らせるとハリーを腰に
抱えて紅魔館へと運び入れる。

ハリーはそんな美鈴の顔を困ったように見ていた。

だが美鈴はハリーのそんな表情などお構いなしと言わんばかりにハリーを抱えなが
ら館の中を歩いていく。

そしてバスルームにハリーを放り込んだ。

「まずはしっかりと体を洗ったほうがいいわ。そんな汚れと臭いじやお嬢様には会わせられないし。浴槽にお湯を張っていいからゆっくり浸かりなさい。お風呂は命の洗濯よ」
そう言つて美鈴はバスルームの扉を閉めてしまう。

ハリーは混乱したように立ち上がりバスルームを見回したが、やがて諦めたように服を脱ぎ体を洗つた。

この浴槽は特殊な魔法が掛けてあるようで、必要の部屋のようにハリーが必要だと思つたものが次々と出現した。

石鹸が必要だと思つたら流しの上に現れ、剃刀が必要だと思つたら浴槽の縁に置かれていた。

ハリーは体を綺麗にすると、美鈴に言われた通りに浴槽にお湯を張り、その中に浸かつた。

体全体を温かなお湯が包み込む。

ハリーは美鈴の言葉の意味を理解した。

確かにこれはいい。

全身がポカポカと温められ、非常に心地が良い。

ここ2か月の間、心を締め付けていた何かが解れるような感覚がする。

ハリーはここが吸血鬼の住まう館だということも忘れて10分ほどゆつくりと湯船に浸かる。

そして不意に自分がどうしてここに来たのかを思い出し、急いで浴槽から出た。

ハリーがバスルーム内を見回すと、都合よくふわふわとしたタオルが見つかる。

それで体を拭き、何故か綺麗になっている服を着込む。

ハリーは最後に眼鏡をかけ、鏡を見て自分の身だしなみをチェックした。

そして不備がないことを確認するとバスルームの扉を開ける。

そこには聖マングで見た赤い髪の少女が立っていた。

その少女の頭と背中には蝙蝠のような羽が生えている。

確か種族は悪魔だっただろうか。

「貴方は確か聖マングでお会いした……」

「小悪魔です。こっちの言葉に直すならリトルデビルってところですかね」

ハリーに声を掛けられて小悪魔はにこりと微笑む。

ハリーもその笑顔に釣られて軽く微笑んだ。

「小悪魔さん、実は——」

「食事の準備ができていますよ。さあ、こちらに」

小悪魔はハリーの手を引いて歩き出す。

それは美鈴ほど強引な方法ではなかったが、ハリーはその手を振りほどこうとは思えなかった。

そのままハリーは客室へと通される。

そこは広いとは言えない部屋だったが、ベッドがあり机があり棚がありと、生活に必要な家具が一通り揃っている部屋だった。

その部屋の机の上には焼きたてのパンと温かなスープなどの簡単な料理が並んでいる。

「どうぞ召し上がりください。しばらく何も食べていないかのような顔をしていますよ」

確かにハリーはこの3日間ロクに食事を取っていないかった。

ハリーは勧められるままに机の上にある料理を口に運んでいく。

そのどれもが今まで食べたことないぐらい美味しく、そして暖かかった。

「無茶をすると体に障ります。今日はもうすぐ朝ですので今日はもう寝て、明日ゆっくりお話ししましょう」

小悪魔が指を鳴らすと空になった皿がどこかへと消える。

ハリーは小悪魔にベッドに誘導され、その上に寝かせられた。

「あの、僕——」

「大丈夫。だいじょうぶ」

小悪魔は優しくハリリーの頭を撫でると部屋を出ていく。

ハリリーはそんな小悪魔を呆然と見ていた。

体も綺麗になりお腹も膨れると、ハリリーはやつと冷静な思考を取り戻す。

そしてよくわからない熱いものが、ハリリーの両目から溢れ出た。

それはここまでしてもらった感謝の涙なのか、それともこのような優しさに溢れる館から咲夜を奪ってしまったという自責の涙なのか。

ハリリーは心にあらゆる感情を抱きながら夢の中へと落ちていく。

まるで睡眠を取ることが最後の仕上げだというように。

「何故ハリリーがここに？ それ以前に一人で出歩いているのよ」

美鈴さんに抱えられて紅魔館に運び込まれていくハリリーを見ながら咲夜がブスッと呟いた。

クイレルもじつと机の上に映し出された光景を見ている。

「なんにしても、ハリリーが何かの目的のためにここに来たのは事実よ。小悪魔、地下に結界は張り終わった？」

パチュリー様が確認を取ると小悪魔が親指を立てる。

そうか、ハリーには妹様の狂気は刺激が強すぎるのだ。

紅魔館でパーティーを開くときのように、地下に一時的に結界を張り、狂気を漏らさないようにしたのだろう。

美鈴さんとハリーを追うように机の上に映し出されている光景の視点が変わっていく。

美鈴さんは薄汚れたハリーを来客用の小さなバスルームに押し込むと、こちらに視線を向けた。

どうやら自分の行動が見られているという自覚があつたらしい。

私は一度時間を止めると、近くにいる者たちの時間停止を解いていく。

そして最後に美鈴さんのところまで姿現しで飛んで、美鈴さんを連れて大図書館へと戻った。

「さて、ハリーの目的は何だと思う？ 護衛も無しにここまで独りで来るなんて不自然よ」

止まった時間の中で私たちは大図書館の机を囲んでいた。

お嬢様は指で小さな丸を2つ作り目に当てる。

どうやらハリーの真似らしい。

「咲夜、貴方ハリーにこの位置を教えたとか、そういったことはしていないのよね」

「当然です、お嬢様。紅い館であるという程度しか情報を与えておりません」

私がそういうとお嬢様は考え込む。

すると美鈴さんがポンと手を叩いた。

「そうか、謝罪に来たんだ」

「謝罪？」

小悪魔が美鈴さんに聞き返すが、自分でも気が付いたように言葉を漏らした。

「ああ、なるほど。ハリーは咲夜が死んだのは自分のせいだと思っっているわけですね。それで、お嬢様に謝ろうとここまで来た」と

「なるほど」

私を含める全員がそれなりに納得した。

そう、私自身死んでいないから感覚が薄いのが、冷静に考えたら私はハリーのせいで死んだことになる。

いや、死んでいないが。

ハリーがあんな見え透いた罠に引っかからなかったら、私は死ななかつたのだ。

まあ、罠に掛かる様に仕込んだのは私だが。

「なるほど、謝罪することが目的なら結界を通り抜けられたのも納得できるわ」

パチュリー様は自分の掛けた術に不備がないことを確認し、満足したように頷く。私はお嬢様の判断を仰いだ。

「……そうね。ハリーを正式な客人として迎え入れるわ。小悪魔はハリーと面識があったわね。ハリーが風呂から上がったら客室に案内しなさい。咲夜はハリーに見られないように客室と食事の準備、美鈴は外から不死鳥の騎士団や死喰い人が入ってこないか、警戒して。クイレルはそのうち魔法省に本社するから論外として、パチエはフランの管理を頼むわよ」

お嬢様の指示で私たちはバタバタと動き出す。

お嬢様は眠たそうに目をこするとお嬢様の自室のほうへと歩いていった。

私は時間停止を解除すると厨房へと向かう。

そこで簡単な料理を作り客室へと運び込んだ。

それと同時に廊下から2つの足音が聞こえてくる。

どうやら小悪魔がハリーを連れてきたらしい。

私は一度時間を止めると大図書館へと姿をくらませる。

机に映し出されている映像を見る限り、ハリーは私が作った料理を気に入ったようだった。

ハリーは日が昇っている間ゆっくり眠り、日が沈むのと同時に目を覚ます。

ハリー自身こんな時間に目覚めたのが初めてなのか、多少混乱していた。

窓の外に見える夕焼けを朝焼けと勘違いし、段々と暗くなるのを見て時間が巻き戻っているのではないかと錯覚する。

だがすぐに自分の見ているものが朝焼けではないと確認した。

部屋に置かれた時計を確認すると、時刻は午後の8時前。

ハリーは一瞬寝過ごしたと思ったが、すぐさまここが吸血鬼の館であることを思い出す。

咲夜から聞いた話だが、確か夜型のお嬢様に合わせて昼夜逆転しているんだったか。だったらこの時間に起きるのが正しいはずだ。

ハリーの考えは見事の中し、身支度を整えると同時に部屋の扉が叩かれた。

「ポッターさん。夕食の用意が出来ております」

「あ、はい」

ハリーが生返事を返すと小悪魔がカートを引いて部屋の中に入ってきた。

小悪魔はハリーを机へとつかせるとその前に食事を並べていく。

夕食とは言っていたが、メニューは朝食のそれだった。

「随分と顔色が良くなりましたね。お風呂に食事に睡眠に。どれも健康的な生活を送る上では大切なことです」

小悪魔は夕食を食べているハリーに話しかける。

「それで、本日はどのような御用で紅魔館にいらしたのでしょうか」

ハリーはその言葉に体を震わせた。

今の今までここに来た目的を忘れていたかのような反応だ。

ハリーは静かにナイフとフォークを置くと小悪魔に向き直る。

「実は……話があって来たんです。レミリアさんに」

ハリーは放浪中の3日間に何度も何度も繰り返し頭の中で考えていたことを口に出していく。

「そう言われると思っておりました。10時にここへお迎えに上がります。応接間へと案内しましょう。館の中は自由に歩き回っていいですが、大変複雑な造りになっていますので迷いたくなければここでじっとしているのが一番かと」

小悪魔は手慣れた手つきで皿をカートに戻すと部屋を出ていく。

ハリーは自分以外誰もいなくなった部屋の中をグルグルと歩きながら考えを巡らせていった。

そしてしばらく歩き回ると、疲れたようにハリーはポスンとベッドに腰をおろす。

この2か月ずっと同じことを考えてきたはずなのにハリーの頭の中は全く整理され
ておらず、壊れたプログラムのように同じことを何度も何度も考える。

謝って許してもらえるのだろうか、謝ったら何かが変わるのだろうか。

だが、何もしなかったら何も変わらないことだけはハリーは確信していた。

「ポッターさん、お時間でございませす」

ドアを挟んで聞こえてくる小悪魔の声を聞いてハリーは我に返った。

急いで身だしなみを整えドアを開ける。

「準備はよろしいでしょうか。ではご案内しますね」

ハリーは小悪魔に続いて廊下を歩いていく。

改めて歩いてみると紅魔館の構造はホグワーツとは比べ物にならない程複雑だ。

1人で出歩いていたらハリーは一生元の場所に戻ってこれなかつただろう。

小悪魔はそのまま10分程廊下を歩き、不意に立ち止まる。

ハリーは目の前にある扉をまじまじと観察した。

「ここが応接間となっております」

小悪魔がノックの後に扉を開ける。

そこには去年見た姿から全く変わっていないレミリア・スカーレット嬢がソファアに座っていた。

「ポッターさんをお連れしました」

小悪魔はレミリアに一礼するとハリーを応接間に残して何処かに消えてしまった。

ハリーはレミリアのいる部屋に一人残されてどうしていいかわからないように部屋を見回してしまう。

「座りなさいな。立ち話もなんでしよう?」

ハリーはレミリアに促されて向かい側のソファアに腰を下ろした。

「今日は何の用で私に会いに来たのかしら」

レミリアが手を振るうと机の上に2人分の紅茶が現れる。

レミリアはそれを手に取ると一口飲んだ。

「レミリアさん……実は、咲夜の件で——」

「十六夜咲夜、彼女は私の従者だわ。それで、彼女がどうかしたの?」

「……咲夜が死んだのは僕のせいなんです。僕が、魔法省に行くだなんて言わなかったら」

ハリーは固く拳を握りしめる。

レミリアはそんなハリーをまっすぐ見つめた。

「貴方のせいではないわ」

「ですが——」

「おこがましいとは思わないの？　人間の生き死にを人間が左右するなんて。咲夜はあそこで死ぬ運命だったのよ」

レミリアはそう言つてティーカップの縁を指でなぞる。

口ではそう言っているが、レミリアの目には哀愁が漂つていた。

「彼女はいい従者よ。仕事はできるし物分かりもいい。彼女を失つたのは紅魔館にとつて一番の損失かもね」

「そんな、彼女を物みたいに——」

「道具よ。従者というものはね。咲夜は私の扱う道具。このティーカップと同じようなものね」

レミリアはゆっくりとカップを机に戻す。

ハリーはレミリアの言葉に納得がいていかなかった。

人間であるハリーからしたら、レミリアの価値観は理解できないものなのかもしれない。

「ですが！　ですが……、彼女は僕の友達です。ホグワーツの生徒です。1人の人間です……」

「そう、彼女は人間。だから死んだ。それは仕方のないことよ」
仕方のないこと。

ハリーはその物言いが癪に障ったのかソフアーから立ち上がって叫んだ。

「レミリアさんは咲夜が死んで悲しくないんですか!?! 僕は彼女の死を仕方のないことだと割り切ることはできません!! 彼女は僕のせいで……彼女は……」

ハリーは最後まで言えずに俯いてしまう。

無力な自分が悔しかった。

自分の判断で人の生き死にが決まってしまうとは思ってもみなかった。

突然ハリーはソフアーの上に押し倒される。

ハリーは一瞬殺されると感じたが、そうではないようだ。

レミリアはハリーの頭を優しく抱いていた。

「この2か月余り、貴方はずっと咲夜のことを思い続けていたのね」

レミリアはハリーの頭を優しく撫でる。

1回撫でられるごとに、ハリーの高ぶった気持ちは消えていった。

「私も悲しいわ。家族のようなものでもありますもの。悲しくないわけ……ないじゃない」

「レミリアさん、僕……あの……」

「大丈夫、全て私に任せればいい。貴方は何もなくていい。力を抜いて、リラックスし

て、全てを私に委ねて……」

ハリーの頭が徐々に思考能力を失っていく。

それはまるで服従の呪いのように、愛の妙薬のようにハリーの体全体に浸透していく。

全てを彼女に委ねてしまえばいい、全て彼女の言う通りにすればいい。

ハリーの目に力がなくなった次の瞬間、レミリアがハリーの首筋に噛みつこうと口を大きく開けた。

「それぐらいにしといて欲しいかのう。レミリア嬢」

突然部屋の扉が開け放たれ、ハリーは冷水を浴びせられたように意識を取り戻す。

レミリアはせっかくのご馳走を邪魔されて、不機嫌そうに扉の方向に視線を向けた。

「美鈴、誰も館に入れるなど言ったはずよ」

応接間の入り口にはダンブルドアが立っている。

その足には美鈴がしがみついている、苦笑いを浮かべていた。

「いやあ、お歳の割には力が強くて……殺してしまうわけにもいきませんし」

「レディをこんなところまで引きずってしまつて悪かつたのう。レミリア嬢、ハリーを迎えにきた」

レミリアは未練がましくハリーの首筋に視線を向けるとゆっくりと立ち上がる。

ハリーは何が起こったのかわからないというように2人の顔を交互に見ていた。

「それはそれはご苦労様。でも勝手に上がってきたのは感心しないわね。不法侵入って言葉を知ってる？」

「勿論知っておるとも。マグルの法律じゃろう？ その件については謝ろうかの。さて、ハリー。この3日4日どこをほつつき歩いていると思ったら、こんなところにいたとは。皆心配しておる」

「ごめんなさい。でも、どうしても謝りたくて」

ハリーはソファァーから立ち上がりダンブルドアの方へと歩いていく。

「ではレミリア嬢、またいつかお会いしましょう」

ダンブルドアはそのままハリーを連れて応接間から出ようと踵を返した。

だがそれをレミリアが呼び止める。

「ダンブルドア、覚えていてほしいね」

ハリーには何の話か全く分からなかったが、ダンブルドアにはその意味が通じたらしい。

ダンブルドアは肩越しに振り返った。

「覚えておるとも。覚えていいるからこそ、わしはこうして事を急いでおる」

今度こそダンブルドアはハリーを連れて応接間を出ていった。

後にはレミリアと床にへばりついていて美鈴だけが残される。

レミリアはソファーに座りなおすと紅茶を飲み始めた。

「美鈴、いつまで這い蹲っているの？ そんな大きくて重たいモップは要らないわ」

「いやはや、夏場つて結構ひんやりして気持ちがいいんですよ？ これが」

「だつたら一生そこで這い蹲つて——いや、やっぱ迷惑だからいいわ」

美鈴は片手を地面につき逆立ちするようにして立ち上がる。

そしてレミリアの反対側に腰かけ結局ハリリーが口を付けなかつたティーカップを手に取つた。

「あれでよかつたんですか？ ハリーを送り出すならそれこそクイレルでも良かったと思うんですがね。私は」

美鈴は一息でティーカップを空にする。

「いいのよ。ハリリーはまだクイレルを信用していないと思うし。美鈴、パチエに結果を戻すようにいいなさい。あの2人が外に出たらね」

「えー、面倒くさいい」

「頭振じ切るわよ」

レミリアがひと睨みすると美鈴は体を震わせて応接間から逃げていった。

「咲夜」

お嬢様に呼ばれたので私は応接間へと姿現しする。

私は美鈴さんが飲んだティーカップを片付けるとお嬢様のティーカップに紅茶を注いだ。

「ダンブルドア先生を紅魔館に招き入れてよかったですか？ 結界まで緩めて……」

そう、ダンブルドア先生は無理やり結界を抉じ開けて入ってきたわけではない。

お嬢様がパチュリー様に頼んで結界を緩め、わざと招き入れたのだ。

「いいのよ。あれでね。私とクイレルの関係知られても拙いし、無理やり入ってこれるとパチエが危ないわ。どこに繋がるかわかったものじゃない。だとしたら見られてもいい場所に誘い込むのが一番。ダンブルドア自身に自覚はなくともね」

お嬢様は紅茶を一口飲んで話を続ける。

「それとこれはパチエと話し合って決めたことだけど、少し手を貸すことにしたわ」「両陣営にということですか？」

「ええ、そうよ。もつとも、戦いが終結するまでの1年だけっていう条件付きだけど」

お嬢様は飲み終わったティーカップをソーサーに被せ指で弾く。

そして空中にティーカップを弾き中を覗いた。

「なるほどね。今晚ダンブルドアとパチエが接触するわ」

「それは色々と拙いのではないでしょうか……。パチユリー様は隠居中の身ですし」

そう、パチユリー様は紅魔館に隠れ住んでいる。

その力があまりにも強すぎるためだ。

「だから1年なのよ」

1年、そう聞かされて私はあることを思い出す。

お嬢様が戦争を起こし、そこで出る魔力と戦死者の命によって何かの儀式を行うことは知っているが、その儀式によって何をどうするつもりなのか私は知らないのだ。

てつきり魔法界を征服するのが目的かと思っていたが、クイレルが魔法大臣になった今、それも違うとわかった。

「お嬢様、儀式の後には何が起こるのでしょうか」

確認しなくてはいけないだろう。

お嬢様の意思を、目的を。

お嬢様はティーカップをソーサーに戻すと私へと向き直る。

「戦争よ。侵略、破壊、殺戮」

戦争の果てには戦争が待っている。

お嬢様は楽しそうにそう語った。

同期とか、目的とか、思い出とか

「ハリー、誰にも目的地を告げずにふらふらと出歩くのは、あまり良いことではない。今回のように都合よく誰かが君を保護してくれるわけじゃないのじゃ」

ダンブルドアは館の門から歩いて出るとしばらくハリーと共に道を歩く。

ハリーは何が起こったのかわからないといったような顔でダンブルドアの後ろをびったりとついて歩いていった。

「すみません、先生。堪えきれなくて。どうしても何か行動しないと気が済まなかったんです」

「大事がなくてよかった。さて、そろそろ良いかのう」

ダンブルドアは紅魔館が見えなくなるとハリーに右手を差し出す。

「少し野暮用に付き合ってくれんか。ホラスの時のようにの」

その言葉を聞いてハリーは今から姿現しをするのだと察する。

この夏、ハリーは一度このようにダンブルドアの用事に付き合ったことを思い出した。

その用事というのはホラス・スラグホーンという魔法使いから記憶をもらうというも

のだ。

何故ダンブルドアがその用事にハリーを連れて行ったのかはわからなかったが、スラグホーンはハリーの顔を見て、その言葉を聞いてダンブルドアに協力することを決心したらしい。

嘘の記憶を渡して悪かったとダンブルドアに一言謝り、スラグホーンは記憶を小瓶に入れて差し出したのだった。

ハリーがダンブルドアの右手に掴まると、2人はそのまま目的地へと姿をくらませる。

ゴム管を無理やり通るような感覚に襲われてハリーはよろけてしまうが、何とか体勢を立て直した。

そこは暗い空間だった。

どこか建物の中なのか、地下なのか。

そもそもこの世なのかどうかもわからない。

「ハリー、杖を構えておくのじゃ。ここへ来るルートを確立するのはそれはそれは大変な作業じゃった。半年以上もあてもなく彷徨つてのう」

ハリーにはダンブルドアの言葉の意味がよくわからなかったが、ここがダンブルドアでも来ることが難しい空間だということは理解する。

ダンブルドアが杖に光を灯すと、ハリーはようやくここが何処なのかを確認することができた。

多くのフラスコやビーカーがひとりでに煮え立ち、薬を調合している。

いくつもの試験管が勝手に棚から飛び出し、グツグツと煮え立つ大鍋へと中身を落としていた。

「スネイプの実験室？」

ハリーはぱっと思いついたことを述べる。

ダンブルドアは静かに首を振った。

「ここにくる予定がなかったら、ホラスの件はもつとゆっくりでもよかったのじゃ」

ダンブルドアは研究室のような空間を縫うように歩いていく。

ハリーは絶対に逸れまいと必死にダンブルドアの後を追った。

「何をしに行くんですか？」

「おお、そうじゃ。まだ話していなかったのう。アンブリッジがいなくなった今、またしても先生が一人足りんのじゃ。ここに来たのは、わしの古い同期を隠居から引つ張り出し、 Hogワーツで働いてもらえるように説得するためじゃよ」

ダンブルドアは薬の材料が入った戸棚を曲がり、更に歩いていく。

ハリーはその中に置かれた石に見覚えがあった。

「先生、この石って……賢者の石ではないですか？」

「ああ、そうじゃ」

ハリーは何かを確信したようにダンブルドアに問う。

「それじゃあ今から会いに行く人物というのは、ニコラス・フラメル？」

ダンブルドアはハリーの言葉を聞いて立ち止まる。

そしてハリーの方へと振り返った。

「ハリー、ニコラスは確かにわしの友じゃが、同期ではない。ニコラスはわしよりも50

0歳以上年上じゃよ」

「では、何故ここに賢者の石が……」

ダンブルドアは柵から賢者の石を取り出す。

その石は確かにハリーが1年生の時に見た賢者の石にそっくりだった。

「彼女にとってこれはそう価値のあるものではないらしいの。少なくともこのような空
間に放置できるぐらいには」

ダンブルドアはハリーに石を見せるともあつた場所に石を戻し、再び歩き始める。

ハリーもその後を追った。

「ハリー、今から会う魔女はわしと同じ年にホグワーツに入学した魔女じゃ。名をパ
チユリー・ノーレッジという。聞いたことはあるかの？」

「いいえ」

「それはそうじゃ。彼女はホグワーツ卒業と同時に姿をくらませた。そこからは誰も消息を掴めておらんかったのじゃから……ここじゃよ」

ダンブルドアが急に立ち止まったのでハリーはその背中にぶつかってしまった。

2人の前には木製の扉がある。

どうやらこの先にパチュリー・ノーレッジはいるらしい。

「ハリー、彼女に会う前に1つ忠告しておこう。彼女は魔女じゃ」

「知ってます。僕も先生も魔法使いです」

ハリーは不思議そうな顔をしてそう答えたが、ダンブルドア先生は静かに首を振る。

「そうではない。マグルが想像するような、魔としての魔女という意味じゃよ。我々のような魔法を扱う人間ではない。魔女という種族と言ってしまっても過言ではないかもしれない。彼女には決して心を許さぬよう、用心するのじゃ」

ダンブルドアはハリーの顔をじつと見る。

いつになく真剣なダンブルドアの表情を見て、ハリーは無言で頷いた。

「では、参ろう」

ダンブルドアが木製の扉を丁寧に4回ノックする。

するとひとりでに扉が開いた。

「あら、老けたわね。ダンブルドア」

ハリーはダンブルドアと共に中へと入る。

そこには薄紫のローブを着た少女が机の上に紅茶を用意していた。

ティーカップの数は3つ。

ハリーたちが来ることを前から知っていたかのような表情だ。

ダンブルドアはパチュリーを見て数秒呆然としていたが、すぐに我に返ってテーブルにつく。

ハリーもそれに倣い椅子に座った。

ハリーは改めてパチュリーの容姿を観察する。

肌は白く透き通るようで、髪も目も服も紫で統一されている。

そして、自分よりも年下のように見えるのに、印象ではダンブルドアよりも年を取って見えた。

ダンブルドアはパチュリーが自分と同じ歳だと言っていたが、にわかには信じられない。

まるで時間を止めてしまったかのように、目の前にいる少女は若かった。

「そういう君はホグワーツにいた頃と何も変わらんの。こうやって引き籠る癖も」
「引き籠もっているわけではないわ。ただやりたいことが少しインドアだけよ」

パチュリーはそう言つて紅茶を一口飲んだ。

ダンブルドアは警戒するようにティーカップには触れない。

「毒なんて入つてないわ。何せ数十年ぶりの来客ですもの」

「わざわざ会いに来たのは話があるからじゃ。パチュリー」

「そうなの？ 数十年分の積もる話があると思つただけで、まあいいわね。で、用件は何？」

ハリーはどうしていいかわからずじつと2人の会話を聞いていた。

ダンブルドアはゆっくりと話し始める。

「実はホグワーツの教員を1人探しておるのじゃ。是非とも、君をホグワーツに招きたいと思つておる」

「いいわよ」

パチュリーは2つ返事でそれを了承した。

ハリーはそのあつけなさに少々目を丸くする。

だが、ダンブルドアはそう答えるとわかつていたかのように平静そのものだった。

「君がそう答えるということは確信しておつた。本当に、君は昔から変わらんの」

ダンブルドアはホツとしたように微笑むと、1枚の羊皮紙を懐から取り出した。

パチュリーはそれを受け取ると軽く目を通す。

「ただし、1つだけ条件がある。私が指導するのは生徒であつて、貴方ではないわ。そのところをよく理解して頂戴ね。カエルチョコレート1つ分ぐらいの働きは約束するけど」

「勿論じゃとも」

ダンブルドアが返事をする。パチュリーは手を叩く。

次の瞬間ダンブルドアとハリーはブラック邸の前に立っていた。

姿現しをした感覚などはなく、まるで1時間前からその場に立っていたかのように体に違和感がない。

「ダンブルドア先生、今のは……」

「彼女の術は謎に満ちておる。わしらが先ほど見た彼女が本物だったのか偽物だったのかも、わしには到底判断のつかんことじゃ」

ダンブルドアは一度ハリーの方を向く。

「話は変わるが。今年度、きみにわしの個人授業を受けてほしいと思つとる」

「個人、というとダンブルドア先生とですか？」

ハリーは驚いた表情でダンブルドアに問い返す。

ダンブルドアはそれを肯定した。

「そうじゃ。君の教育に、わしがより大きく関わる時が来たと思う」

「先生、何を教えてくださるのですか？」

「なに、あつちをちよこちよこ。こつちをちよこちよこじや。ほれ、皆が中で待つておる」

ハリーはダンブルドアに促されてブラック邸の中へと入る。

まるでここ数日間夢でも見ていたかのような感覚をハリーは覚えた。

それほどまでに現実感のない数日間だったと言えるだろう。

「まあそういうことよ。騎士団側への干渉は私が引き継ぐわ」

パチュリー様は大図書館のいつもの場所で事の経緯を話してくれる。

「でも良かったのですか？ 教師ということは多くの生徒の目につくところに行くということですよね」

私がそう確認するとパチュリー様はじとつとした目でこちらを見た。

「私は別に人との関係を断ち切りただけじゃないわ。誰かの都合のいいように使われるのが嫌なだけ。それに、向こうへ行く前に母校に一度帰るといいのはいいことだと思うしね」

「向こうへ行く………といますと？」

私がそういうとパチュリー様は驚いたように目を見開いた。

「もしかして貴方レミイから何も聞いていないの？ ……なるほど、情報が外部に漏れないようにするためね」

パチュリー様が手を振るうと球体が机の上に出現した。

その球体は徐々に色を持ち始め、地球儀のように世界中の島々を映し出す。

「これが私たちの住んでいる星、地球よ。紅魔館の位置はここ。ホグワーツはここね」

パチュリー様は地球儀をくるりと回すと、イギリスを拡大し場所を指し示した。

するとその部分がどんどん拡大され、紅魔館とホグワーツが映し出される。

紅魔館の門前に美鈴さんが立っているのを見る限り、どうやらこの映像はリアルタイムのものらしい。

「私たちはね、ある場所への移住を考えているのよ。それはここ、日本にあるわ」

「移住……ですか？」

「そう、移住。レミイに言わせたなら侵略かもね。その場所は私の術を用いても表示することができないほどの秘境。巧妙に隠されているせいで位置を特定するのに凄い時間が掛かったわ」

「移住するだけなら普通に移動すればいいのではないのでしょうか。それこそ姿現しとかを用いて」

その方が早く、そして簡単だ。

私がそう提案すると、パチュリー様はやれやれと首を振る。

「嚴重な結界に守られているのよ。その場所は。悔しいことにその結界を無理やり抜けるには相当な力が必要よ。それこそ伝説になるほどの戦いや、犠牲の上に魔法陣を描いて術を発動させないといけない程に」

「お嬢様はその場所へと移り住もうとしている……妹様の為？」

「はい。大正解」

パチュリー様は抑揚をつけずにそう言った。

「レミイは探し続けているわ。自分と妹が何の心配もせずに暮らし続けられる安息の地を。時代の波に飲まれない凍結させた世界を。本当に、妹思いの姉よ、あれは」

確かにこの世界では妹様は外に出ることができない。

この魔法界では吸血鬼は亜人として捉えられている。

お嬢様のように権力を持っていれば別だが、通常吸血鬼というものは忌み嫌われるものなのだ。

人間が中心の世界に、なじむことはできない。

「お嬢様は安息の地を探している……」

「否、もう見つけたわ。後は移り住むだけ」

「そのためには魔法界で戦争が起こらないといけない」

「そう、そして多数の死者が必要。わかったかしら。これが貴方の主人がやろうとしてるんだよ」

私は頭の中で今パチュリー様から教わったことを整理する。

「——素晴らしいですわ」

そして一言そう呟いた。

9月1日、早朝。

私は紅魔館の玄関ホールでパチュリー様の見送りをしていた。

パチュリー様はいつもと全く変わらない服装で、手荷物も何も持つてはいない。

彼女の場合、必要な物は全て転移魔法で呼び出せばいいと考えているのだろう。

実際その方が便利で、何より確実だ。

「何かあったら呼んで頂戴。すぐ帰ってくるから」

パチュリー様は私の横にいるお嬢様に声を掛ける。

お嬢様は目を眠たそうに擦りながらもふらふらと手を振った。

「いつてらっしゃい、パチエ。先生としての生活を楽しんできてね」

お嬢様は大きく欠伸をすると、一足先に自室へとお戻りになった。

「なんとというか、生活習慣だけは見た目通りよね、レミイって。小悪魔、図書館の管理を任せるわ。咲夜、ちゃんとレミイの面倒を見るのよ」

「心得ております」

私たちがそう答えるとパチュリー様の姿が消える。

まるで初めからそこにいなかったかのように姿が霧散した。

「小悪魔、今の術なんだと思う？」

私はその不思議な術を知っているかと小悪魔に問う。

「いや、なんとというか次元が違いますよね。姿現しとはまた全然違う種類の術みたいですし」

小悪魔もパチュリー様の不思議な術に感心したように頷いていた。

「これでどちらの陣営もそれなりに力を得たことになるのでしょいか。死喰い人は魔法省を。不死鳥の騎士団は先生を」

「そうね、力を得たと『錯覚』するでしょうね。それがまやかしの物だとも知らずに」

小悪魔と私は顔を見合わせて笑う。

その2つの力を握っているのは実質的にはお嬢様なのだ。

この借り物の力がどのような情勢を動かしていくのか、非常に気になるところであ

る。

9月1日、9と4分の3番線。

パチユリー・ノーレッジはホグワーツの生徒に交じって駅のホームに立っていた。

もつとも、パチユリー自身自分の好きなどころへ姿現しすることができるので、列車で移動する必要などない。

だが、この機会を逃すともう二度とこの列車に乗る機会はないだろうとパチユリーは考えていた。

パチユリーは生徒に交じって列車に乗り込み、空いているコンパートメントの1つに座る。

そしてぼんやりと窓から駅のホームを眺めた。

パチユリーはふと思い出す。

確か一番初めにダンプルドアと会ったのはホグワーツ特急の中だったと。

突如コンパートメントのドアが開きダーク・ブロンドの少女が男の子を引きずりながら入ってくる。

パチユリーは入ってきた2人とは面識がなかったが、その後ろにいるもう1人とは

会ったことがあった。

そう、コンパートメントに入ってきたのはルーナ、ネビル、ハリーの3人だ。

「()空いてる？」

「見たままよ」

ルーナの問いにパチュリーはそつげなく答える。

それを了承だと受け取ったのか、ルーナはパチュリーの横に遠慮なく座った。

ネビルはそろそろとパチュリーとは一番離れた座席に座り、ハリーはネビルの向かい側に座る。

ハリーはここにおいてもよいものか、少し迷っているような顔をしていた。

「貴方見ない顔だね。寮は何処？」

ルーナはパチュリーのことを生徒だと思っているようだ。

ハリーがその間違いを訂正しようと口を開きかけるが、その前にパチュリーが答える。

「レイブンクローの生徒だったわ」

「レイブンクロー？ 私と同じだ」

ルーナはレイブンクローの寮にこのような生徒がいたかと、首をかしげている。

「でも見たことないわ」

「そうでしょうね。ホグワーツは100年ほど昔に卒業したし」

ハリーはついに耐え切れなくなったのか、ルーナに説明を始めた。

「ルーナ、この人は新しいホグワーツの先生なんだ」

その言葉を聞いてルーナとネビルは目を丸くする。

「ハリー、それ、ほんとかい？ だって、この人どう見ても僕より年下にしか……」

ネビルが恐る恐るハリーに聞く。

ハリーはこれ以上何かを喋っていいかわからない様子だった。

「なるほど、貴方はネビル・ロングボトムね。ネビル、目の前に見ているものが全て現実だと思わないほうがいいわ。固定概念は思考を固くしてしまう。柔軟な発想こそこれから受けるイモリレベルでの授業には必要になってくるわよ。それと……私はダンブルドアと同じ年よ」

ネビルは横で口をパクパクさせていた。

それはそうだろう。

目の前にいる少女が自分の祖母よりも年上だと言われたら、誰でもそうなるというものだ。

「私のことは気にしないでいいわ。1か月ぶりに会って積もる話もあるでしょう？」
「そう言うパチュリーは何もない虚空から1冊の本を取り出し読み始める。」

ハリーは少し気まずそうな顔をしたが、やがて3人で話を始めた。

「魔法省での僕たちのちよつとした冒険が日刊予言者新聞に書きまくられていたよ。君たちも見ただろう?」

「うん、あんなに書き立てられて、ばあちゃんが怒るだろうと思つたんだ。ところがばあちゃんつたらとつても喜んでた。魔法省で僕の杖が折れちゃつたでしょ? ばあちゃんが新しい杖を買ってくれたんだ。見て!」

ネビルは嬉しそうに杖を取り出しハリーに見せる。

「桜とユニコーンの毛。オリバンダーが売つた最後の一本だと思う。その次の日にいなくなつちやつたんだもの」

ハリーが苦笑いで返すとネビルはいそいそと新しい杖をしまう。

次に口を開いたのはルーナだ。

「ハリー、今年もまだD Aの会合はするの?」

「考えてはいたんだけど、アンブリッジを追い出した今、もうD Aの会合をする意味もないだろう?」

ハリーはちらりとパチユリーを見ながらそう答える。

闇の魔術に対する防衛術の先生の前でD Aの話をするのは拙いと思つたのだろう。

もつとも、パチユリーが防衛術の先生だとハリーが勝手に思い込んでいるだけである

が。

ハリーの言葉にネビルは分かりやすく失望したような顔をした。

「そんな!? 僕、DAが好きだった。咲夜からも沢山習ったし……」

咲夜の名前が出てコンパートメントの中の空気が一気に重たくなる。

だが、気を落としているのはハリーとネビルだけだったようだ。

「私、DAの会合が楽しかったよ。咲夜も好きだった。まるで友達ができたみたいでルーナはけろりとした表情で答えた。

その言葉にハリーとネビルはぎくりとする。

そう、ハリーもネビルも、過去に苛められた経験があるのだ。

ハリーが何かを言いかけた瞬間に、コンパートメントの扉が開く。

そこには黒髪で大胆そうな顔だちの女の子が立っていた。

「こんにちは、ハリー。わたし、ロミルダ。ロミルダ・ベインよ」

ロミルダは大きな声で自信たっぷり続ける。

「私たちのコンパートメントに来ない? この人たちと一緒にいる必要はないわ」

ロミルダはパチュリーとネビルとルーナを指さしながら、聞こえよがしの囁き声でハリーに言う。

ネビルはその言葉に小さく縮こまったが、ルーナとパチュリーは全く気にしていない

ようだった。

「この人たちは僕の友達だ。……一人は違うけど」

「あら、酷いわ」

ハリーの言葉にパチュリーが無表情で返事をする。

ロミルダはその様子に少し驚いたような顔をしてコンパートメントのドアを閉めた。

「みんなハリーに私たちよりもかっこいい友達を期待するんだ。咲夜がここにいたら良かったのかな？」

ルーナはまたしてもハリーとネビルが面食らうような発言をする。

「君たちはかっこいいよ。少なくとも、あの子たちは魔法省にいなかった。誰も僕と一緒に戦わなかった」

ハリーの言葉にネビルは自信を取り戻したように笑顔になる。

ルーナもにっこり微笑んだ。

「だけど、あの人に人質に取られたとき、立ち向かったのは君とシリウスだけだ」
ネビルはその時の情景を思い出したのか、ブルリと一度身を震わせる。

「君は僕たちを守る様にあの人の前に立ちはだかった。魔法省の役人でさえ怯えて動けないような状況で、君と、シリウスさんだけがあの人に反抗したんだ。ばあちゃんが君のことをなんて言っているか、聞かせたいな。『あのハリー・ポッターは魔法省全部を束

にしたよりも根性があります！』だつてさ。ばあちゃんは君を孫に持てたら、ほかには何もいらないだろうね」

ハリーは気まずそうに笑う。

そして急いで話題を変えてふくろう試験の結果を話しはじめた。

パチュリーは気が付かれないようにネビルの顔を見る。

ネビル・ロングボトムはトレローニーが予言したヴォルデモートの敵となりうる子供の1人だ。

ヴォルデモートがハリーではなくネビルに印を刻んでいたら、ネビルが選ばれしものだったのだろうか。

そして偶然、ハリーもネビルを見て同じことを考えていた。

もしヴォルデモートがネビルを予言の子だと判断したらどうなっていたのだろうか。

「ハリー、大丈夫？　なんだか変だよ？」

ネビルが心配そうにハリーの顔を覗き込む。

ハリーはその瞬間ハツと我に返って言葉を取り繕おうとした。

「ごめん、僕——」

「ラックスパートにやられた？」

ルーナが気の毒そうにハリーを覗き見た。

「僕——えっ?」

「ラックスパート……目には見えないんだ。耳にふわふわ入って行って、頭をポーっとさせるやつ。この辺を一匹飛んでいるような気がしたんだ」

ルーナは蚊でも叩くかのように両手でバシツ、バシツと空中を叩く。

ハリーはまたルーナの不思議な性格が出てきたと思ったが、思わぬ人物が動いたのでギョツとしてしまった。

本を読んでいたパチュリーが物凄い速度で右手を宙に突き出し、何かを捕まえる動作をしたのだ。

パチュリーは右手を握りながら一言二言ボソボソを呟く。

そして手を開くと手の平の上にはタンポポの綿毛のようなものが現れた。

「ラックスパートというのは小さな虫よ。デミガイズの毛をこのように身に纏うことによつて姿を消し、風に乗って移動していく。頭の中に入るかどうかは分からないけど、確かにこのコンパートメントの中にいたわね」

パチュリーは透明ではなくなったラックスパートをコンパートメントに放す。

ルーナは得意げな顔をしながらハリーの顔を見た。

「ほら、いるじゃない」

「まさか本当にいるなんて……しわしわ角スノーカックが見つかるのも時間の問題か

も」

ネビルはふわふわと漂うラックスパートを指でツンツンと触る。

ハリーも、もう少しルーナの話を実剣に聞こうと心に誓った。

しばらく経つとロンとハーマイオニーが疲れ顔でコンパートメントの中に入ってくる。

そういえばあと2人増える予定だとパチュリーに伝えていなかったと、ハリーは少しばつの悪い顔をした。

「ランチのカート、早く来てくれないかなあ。腹ペコだ」

ロンはハリーの横にドサリと座る。

ハーマイオニーはいち早くパチュリーの存在に気が付いたのか、座席に座りながらハリーに聞いた。

「こちらの方は？」

「パチュリー・ノーレッジ先生」

ハリーは何気なしに答えたが、その名前を聞いてハーマイオニーが凄い速度で立ち上がる。

そして唾然とするように両手で口を覆った。

「パチュリー・ノーレッジ先生ですって!？」

コンパートメントの中にいたパチュリーを除く全員がハーマイオニーの大声に何事かと視線を向ける。

ハーマイオニーはそんな視線を気にせずに深々とパチュリーに礼をした。

「は、初めまして！ ハーマイオニー・グレンジャーと言います。先生にお会いできるなんて……ああどうしよう！」

ハーマイオニーは興奮したような顔でそわそわと座席に座りなおす。

パチュリーは持っている本を何処かに消失させた。

「先生？ 冗談だろ？ だってどう見ても僕より年下じゃないか！」

ロンがパチュリーを見ながら言う。

「それに、少なくとも僕は一度も名前を聞いたことがないよ」

ロンのそんな言葉を聞いてハーマイオニーは何と失礼なといったような顔をする。

「貴方本読まないの？ ……読まないわね。ホグワーツの図書室にノーレッツジ先生が書いた本がいくつもあるわ。私、先生の大ファンなんです。著書は全部読みました！」

ハーマイオニーは興奮したような顔をパチュリーに向ける。

「ホグワーツの図書室に私の本が残っていたのね」

パチュリーはつまらなさそうに続けた。

「あれは私が学生時代に悪戯で図書室に仕込んだものよ。一般向けの内容だね。卒業し

てからは本を出したことがなかったし」

パチュリーは何処からともなく1冊の本を取り出す。

その本を見てハーマイオニーが息を飲んだ。

『変身術とその危険性』、これは4年生の時に書いたものだったかしら」

パチュリーはその本を閉まっている窓の方へと投げる。

本はぶつかることなく窓ガラスをすり抜けると虚空へと消えていった。

「貴方、私の著書に興味があるの？」

パチュリーは死んだ魚のような目でハーマイオニーの顔を見る。

ハーマイオニーは今まで読んだパチュリーの本が学生時代に書かれたものだとして知り

少しショックを受けていた。

この場合のショックは失望したという意味とは正反対のものだが。

「は、はい。先生の授業をイモリレベルで受けれるなんて……感激です！」

ハーマイオニーは手でも叩かんばかりに喜んでいたが、ロンはまだ不審そうな顔でパ

チュリーを見ている。

「ロックハートと同系列じゃなかったらいいけど」

ロンのそんな呟きにハーマイオニーは烈火の如く怒った。

「ロン！ 失礼にも程があるわ！ 20世紀の偉大な魔法使いを読んでないの？ パ

「チュリー・ノーレツジ、生きる伝説、動かない大図書館！ あのダンブルドアでも敵わないと言わしめた大賢者よ!？」

ダンブルドアでも敵わないという言葉にその場にいるほぼ全員が目を丸くする。パチュリーだけがすまし顔でじつとロンの顔を見ていた。

「ロナルド・ビリウス・ウィーズリー。1980年にウィーズリー家の6男として誕生。趣味はクイディッチとチェス」

そして何かを透視するようにパチュリーはスラスラとロンの情報を口にする。

「私のことを知らないのは無理ないわ。 Hogワーツを卒業したあとは研究漬けだったもの。まあ、動かない大図書館っていうのは面白い表現だけど」

ロンは顔を真っ青にしてハリーの方を見る。

まさに、何者なのこの人と言った表情だ。

「魔女よ」

ロンの心を見通すようにパチュリーが短く答える。

早くもロンは少しパチュリーのことが苦手になっていた。

その後もハリーたちは話を続け、たまにその話題にパチュリーが参加するということが繰り返された。

だがやはり話題に上がるのは魔法省での戦いや、咲夜のことだ。

そしてついに新しく就任した魔法大臣の話になった。

「魔法省と言ったらさ、魔法大臣が新しくなったよね。クイレルってどんな人？」

ルーナがザ・クイブラーを読みながら何気なしに答える。

それを聞いてハリーたちは難しい顔をした。

「正直言つてわからない。あいつは確かにヴォルデモートの手先だった。だけど操られていなかったという証拠もない」

ハリーは神妙な顔をして答える。

クイレルはほかの死喰い人とは成り立ちが違う。

アルバニアでヴォルデモートに寄生される前までは、マグル学の教授だったのだ。

マグル学は死喰い人の思想とは正反対に位置する学問だ。

もしクイレルが闇の魔法使いと同じ思想の持ち主だったらそのような学問の教授になどならなかっただろう。

「それに、クイレルは魔法省の戦いの時にはいなかった。インタビューによればその頃には既に服従の呪文が解けていたと答えているし」

「どちらにしても、打ち出している政策は素晴らしいわ。ファッジがいかに屑だったかよくわかるもの。全家庭への安全対策マニユアルの配布や闇祓い局の強化。死喰い人だって毎週のように捕まっているし」

ハーマイオニーも真剣な顔をしてそういった。

ロンは納得できないのか、しかめっ面で俯いている。

「ノーレッツジ先生はどう思いますか？ 新しい魔法大臣について」

ネビルは恐る恐るパチュリーに聞いた。

パチュリーは読んでいた本から少し視線を上げて答える。

「そうね、ファッジやスクリムジョールよりかは適任ね。能力もあるみたいだし、馬鹿ではない」

「そうよね！ それにハリー、この記事を見て。クイレルは何人もの開心術士の前で証言したのよ。それにその時真実薬も飲んだみたいだし。ハリーは真実薬の力をよく知っているでしょう？」

ハーマイオニーにそう言われてハリーは思い出す。

4年生の時ムーディに扮していたパーティー・クラウチ・ジュニアはたった3滴の真実薬で例のあの人の計画を洗いざらい吐いたのだ。

そしてハーマイオニーの言う通り、クイレルが就任してから魔法界は安定した。

ファッジがあまりにも無能だったせいもあるが、クイレルの政治は物凄くまともに見えるのだ。

「僕としてはあまり僕を持ち上げすぎないことだけは好印象だな。少なくともクイレル

が就任してから、僕が選ばれし者と新聞で書き立てられることはなくなつた」
気が楽だよ、とハリーは苦笑いする。

反応を見れば一目瞭然だが、ハーマイオニーはクイレルのことを信用しているようだ。

ネビルもクイレルにあまり悪い印象を抱いていないためか、ハーマイオニーの話に同意している。

「ダンブルドアはどうなんだ？ ハリー、ダンブルドアから何か話を聞いていないか？」

ロンがむつとした顔でハリーに聞いた。

「……ダンブルドアとはその話をしなかった。多分自分で判断しろということだと思う。……みんな、クイレルを信用してはいけない。クイレルが本当にヴォルデモートの手先ではないと決まったわけじゃないんだ。捕まえている死喰い人だって本当はアズカバンに送つてないのかもしれない。疑心暗鬼になれと言っているわけじゃない。用心しろと言つてるんだ」

その言葉に皆感心したように頷く。

その判断力の高さは様々な修羅場を抜けてきただけはあるようだ。

パチュリーはその話を聞きながら上手くことが進んでいることを再確認する。

クイレルが魔法省に信用されるまでは様々なことに手を貸したものだ。

真実薬の解毒剤や開心術の影響を受けにくくする魔法具などだろうか。

そういった道具の能力もあつてだが、クイレルはあれよあれよという間に魔法省のトツプへと躍り出た。

もつとも、このご時世だ。

誰も魔法大臣などという職務には就きたがらない。

だからこそ簡単に上にいくことができたとも言えるだろう。

パチュリーはハリーたちの話を聞きながら本を読む。

もうすぐこの列車はホグワーツに到着するだろう。

新生生の歓迎会はいつものように行われた。

相変わらず組み分け帽子の歌は警告を含むものだったが、不思議とハリーの心に焦りはない。

去年と比べるといくらか状況がマシだからだろう。

ハリーは宴会のご馳走を食べながら教職員テーブルを見る。

驚くことに占い学のトレローニーが大広間に来ていた。

普段トレローニー先生は北塔にある自分の部屋を滅多に離れない。

ハリーは一瞬何故トレローニーが宴会に来ていられるかわからなかったが、先生の視線の先を辿ると自然とその理由が理解できた。

トレローニーはまるで水晶玉でも覗き込むかのようにパチュリーを見ている。

パチュリーはそのような視線に気が付いているのかいないのか、平然と夕食を取っていた。

そして耳を澄ませば聞こえてくることだが、どの机でもひそひそと彼女のことを囁かれている。

何故あのような少女が教職員テーブルに座っているのかと。

誰かほかの先生の子供なのか、それとも彼女自身が先生なのかと。

デザートも終わるとテーブルに置かれた金色の皿の上が綺麗になる。

それと同時にダンブルドアが立ち上がった。

「みなさん、素晴らしい夜じゃー！」

その大声と同時に大広間がシンと静まり返った。

「新入生の諸君、歓迎いたしますぞ。そして上級生にはお帰りなさいじゃ。今年もまた、魔法教育がびっしりと待ち受けておる。まず初めに禁じられた森には生徒立ち入り禁止じゃ。そしてホグズミード村には3年生から行くことが許可される。それと、管理人のフィルチさんから皆に伝えるようにと言われたのじゃが、ウィーズリー・ウィザード・

ウィーズとかいう店で購入した悪戯用具は全て校内持ち込み禁止じゃ」

ダンブルドアはそこでニヤツと笑う。

このような規則を生真面目に守る生徒など、 Hogワーツにはいないと考えているのだろうか。

「各寮のクイディッチチームに入団したいものは寮監に名前を提出すること。今年度は試合の解説も同時に募集しておるので、興味のあるものは同じく応募するとよい」

ダンブルドアはそこで一度言葉を切った。

生徒たちはついに教職員テーブルにいる少女の正体がわかるのかと耳をそばだてる。

「今年度は新しい先生をお迎えしておる。ノーレッヅジ先生じゃ」

名前を呼ばれてパチュリーはゆっくりと立ち上がった。

紹介を受けて初めてパチュリーの存在を認識した生徒は、どう見ても自分たちとあまり歳の変わらなさそうな少女に目をぱちくりさせる。

「ノーレッヅジ先生は、かつてわしと共に Hogワーツで学んでいた同期の方じゃ。魔法薬学の教師としてこの Hogワーツで教鞭をとってもらったことになっておる」

「同期?」

「同期だつて?」

聞き間違えたのでは、という声が大広間のあちこちで上がる。

だが事情を知っているハリーたちにとってはそれ以上に衝撃的なことがあった。

「魔法薬？ 僕はてつきり闇の魔術に対する防衛術の先生かと……」

ハリーがすつとんきよな声をあげるが、ロンもハーマイオニーもそれに同意しているようだった。

何故新しく入ってきた先生が魔法薬の先生なのか、全く理解できない。

「もしかしてスネイプはクビになったのかな？」

ロンが最後の望みをかけてそういうが、その可能性はダンブルドアの次の言葉によって否定された。

「それに伴ってスネイプ先生は、闇の魔術に対する防衛術の後任の教師とられる」

今度こそハリーたちは絶望的な顔をする。

スネイプの闇の魔術に対する防衛術の授業を一度受けたことがあるが、相変わらずいつもの調子だったからだ。

ハリーは今年の授業に一抹の不安を覚える。

ハリーの一番の得意科目は闇の魔術に対する防衛術だ。

その得意科目をスネイプのせいで苦手にならないか、それだけが一番の不安要素だった。

クイレルは魔法大臣室で書類の山を片付けていた。

魔法大臣は決して楽な仕事ではない。

各局の出してくる申請に目を通し、指導をしていく。

プロパガンダの作成はもちろんのこと、まだ完全にクイレルのことを信用していない役人からの目も厳しい。

そんな中、パーシー・ウィーズリーは熱狂的なクイレルの支持者だった。

パーシーは魔法大臣付き下級補佐官だ。

そしてクイレルがホグワーツで教えていた生徒の1人でもある。

「クイレル大臣、闇祓い局から報告書です。新たに死喰い人の隠れ家を発見したのと、至急襲撃の許可をいただきたいと」

パーシーは闇祓い局から預かってきた書類をクイレルに提出する。

クイレルの前にまた1つ大きな書類の山ができたが、クイレルはさほど気にしていないようだった。

「ふむ、報告ご苦労。ところでパーシー君、最近家には帰っているのか？」

パーシーはその言葉にぎくりとした。

あれだけファッジ大臣を慕っていたパーシーだ。

去年は家族と仲違いをして、ロンドンで一人暮らしをしていた。

そして今になっても仲直りができていない。

クイレルはそんな話を何処で聞いたのだろうとパーシーは一瞬考えたが、無駄なことだと思いつ返し素直にクイレルに報告した。

「いえ、実は最近家族とは疎遠になつてしまつていまして……。ここ一年ほど実家には歸つておりません」

「なるほど……：ファッジの影響か」

クイレルはズバリと仲違いの原因を言い当てた。

「確かアーサー君はダンブルドア校長と親密な間柄だったな。不死鳥の騎士団員という話も聞いている。パーシー君、去年君は特殊な状況下に置かれていたようだね。両挟みとも言えるかもしれない。だが、今年はそのような心配は無用だ。素直に家族と仲直りをしなさい」

話をしつつもクイレルは凄く速度で書類の山を片付けていく。

その仕事の速さをパーシーは尊敬していた。

そして家族のことを考えていたパーシーの胸に、書類の束が押し付けられる。

パーシーはハッと我に返つた。

「その書類を『偽の防衛呪文ならびに保護器具の発見ならびに没収局』の局長へと届けて

欲しい。つまり、君の父親にだ。今は丁度魔法省の中で仕事をしているはずだからね。そして書類を渡して、父親とよく話し合いなさい。仲直りが出来たら、今日は一緒に実家へと帰って家族と食事を取ると良い。最近はどこも空気が張り詰まっている。家族のぬくもりというのはいいものだよ」

クイレルはそういうと一度書類から視線を上げパーシーを見る。

パーシーは呆然とそこに立っていた。

まさに何が起こったかわからないといったような顔をしている。

「どうしたのかね？」

「い、いえー！失礼します」

パーシーは慌てて頭を下げると早歩きで魔法大臣室を出ていった。

クイレルはそんなパーシーを微笑ましく思いながら書類の山を片付けていく。

こういった地道な印象操作が大切なのだ。

少しずつ自分の周りを固めていき、最後には全てを手駒へと変える。

全ては仕える主の為に。

クイレルは先ほどパーシーが持ってきた闇祓い局からの書類に手を付ける。

闇祓い局の局長はルーファス・スクリムジョールだ。

スクリムジョールは正義感の強い男だが、悪を滅するためには手段を選ばない強引さ

がある。

今回の書類にも、隠れ家にいる死喰い人を殲滅するべきだとの内容が記されていた。もつとも、このように隠れ家がポコポコと見つかったり容易に死喰い人が捕まったりするのは全てクイレルが手を引いていることである。

魔法省の人間は誰も知らないことだが、アスカバンは既に死喰い人の手に落ちているのだ。

いわばアスカバンはヴォルデモートの本拠地と言っても過言ではないかもしれない。吸魂鬼は全てヴォルデモートの配下についており、中に収容されていた罪人たちも全て解放された。

死喰い人は捕まっているのではない。

ただ本拠地に帰っているだけなのだ。

クイレルは魔法省の頂上でそのような活動が世間にバレないようにうまく情報統制をしている。

魔法界は着々と闇の陣営が大きくなっていることを知らない。

今や犯罪者を捕まえれば捕まえるほど闇の勢力が強くなることを知らないのだ。

ヴォルデモートは既に吸魂鬼、巨人、人狼を自らの勢力に加えている。

そして自らの力が最大に高まったとき、全てを変えるために動き出すだろう。

予言の間とか、魔法薬学とか、個人授業とか

そろそろホグワーツでは新学期の授業が始まる頃だろうか。

私はお嬢様の命を受けて魔法省に来ていた。

もつとも、変身術と変装で自らの姿かたちを変えてはいるが。

私は正式なルートで受付を通り、そのまま地下1階にある魔法大臣室へと入る。

そこには普段の姿からは想像もつかない程の速度で書類を捌いているクイレルの姿があった。

「……ん、小望月くんか。ここにくるなんて珍しいじゃないか」

「凄いわね貴方。ついに禿げ頭のとっぺんに目を付けることに成功したの?」

私が来ても全く書類から顔を上げないクイレルに皮肉を飛ばす。

ちなみに小望月とは私の偽名だ。

小望月幾望、どちらも満月の前夜の月の日本名だ。

「生憎この禿げ頭では魔法界の行く末に明かりを灯すこともできないよ」

「自覚のある禿げって最強よね」

「私のこれは禿げではなくスキンヘッドだがな」

クイレルは書類がひと段落ついたのか、ようやく私へと視線を向ける。

そして1枚の書類を私へと手渡した。

「君がここへ来るといふことは、お嬢様の命令だろうか？　ほら、神秘部への入室許可証だ」

なんとというか、物分かりがよくて非常に助かる。

私とクイレルが長いこと会っているのは少々危険なので、私はすぐに魔法大臣室を出た。

私は鞆へと書類をしまうと、改めてエレベーターに乗り地下9階を目指す。

そう、お嬢様のお使いとして神秘部へと足を運ぶために今日は魔法省に来たのだ。

ガラガラジャラジャラとうるさいエレベーターは途中で各階に止まりつつも最終的には一番下へと到達する。

9階に来る頃にはエレベーターに私以外の乗員はいなくなっていた。

「さて、ここにくるのも生き返った時以来ね」

クイレルの話では、魔法省での戦い以降神秘部は一時的に閉鎖されているらしい。

つまり中に職員はいないということである。

私は暗い廊下を進み神秘部の入り口の扉を開ける。

中に入ると大きな円型の部屋が目についた。

あの時扉につけられていたX字の刻印は綺麗になくなっており、私が中に入ると同時にゴロゴロと大きな音がして円形の部屋が回り始める。

まるでルーレットのように壁がグルグルと回り、来た道をわからなくした。

私は適当に扉を一つ開けようとするが、鍵が掛かっており開かない。

開錠の呪文やピッキングツールなども試したが、鍵を開けることはできなかった。

確か開かない扉の奥には愛を研究する部屋があるのだったか。

少し気になる気もするが、今回はそこに用事があるわけではない。

私がすつぱりと諦めると部屋の壁がまた勢いよく回転を始めた。

私は扉を目で追い、先ほど開けようとした扉の横にある扉に手を掛ける。

その扉は鍵は掛かっておらず、すんなりと開いた。

部屋の中にはあらゆる時計が煌いていた。

床に置くタイプの時計や大きな振り子時計、そして小さな腕時計まで様々だ。

「まあ、素敵な部屋ね」

私は部屋に置いてある懐中時計を一つ手に取る。

これはブレゲの作品だろう。

白い文字盤にブルーのブレゲ針、そして何よりもシンプルだった。

「おっと、私の用事はもっと先だったわ」

私は一瞬自分の用事を忘れそうになったが、なんとか踏みとどまる。

懐中時計は既に良いものを持っているため、新しいものは必要ないだろう。

私は懐中時計を元の場所に戻すと、部屋の中を進んでいく。

部屋の奥には扉があった。

私の目的地はこの扉の向こうだ。

扉を開け中に進むと天井が高く、びっしりと棚が置かれた部屋に出る。

お嬢様は予言の間と言っていたか。

私は棚の数字を確認しながら部屋の中を歩いた。

目的の棚は68番。

今いる棚が53なので、そう時間が掛からず目的の棚まで行けるだろう。

私は68番の棚を指しながらこの部屋を注意深く観察する。

棚の上には小さなガラス玉が置かれており、そのどれもが和らかな光を放っていた。

数分も歩かないうちに私は目的の棚に到着する。

お嬢様の話ではこの列の中心付近だという話だ。

順番に棚を辿りながら進んでいくとお嬢様に言われた予言を見つける。

1897年、R・S・からA・P・W・B・D・へ。

「……がお嬢様の言っていた場所……」

私は鞆の中からお嬢様から預かってきた新しい予言を取り出し、その横へと置いた。

『1996年 R. S. から L. D. へ ダンブルドア』

さらにその横にもう1つ予言を並べる。

『1996年 R. S. から S. I. へ 闇の帝王』

これでお嬢様の予言が3つ並ぶことになる。

「ん？ いや、違うわ」

よく見たらこの棚にある予言は全てお嬢様がなされたものだった。

お嬢様が予言の間の棚を半分埋めたというのは、冗談ではなかったのかもしれない。

いや、3分の1だったか？

生き返ってからというものそれ以前の記憶が少し曖昧だ。

パチュリー様の話では一度肉体を失った影響らしい。

写本と同じだ。

完璧に書き写したと思っていても何処かに間違いが生じている可能性がある。

死んでいた数週間、私の命や肉体は何処を彷徨っていたのだろうか。

死後の世界の記憶はない……はずだ。

妹様の声が聞こえたような気はしたが、妹様はあの場にはいなかった。

私は人間として生まれるべきではなかった。

これは誰の言葉だったか……。

「ん〜……？」

考えていても仕方がない。

取りあえずお嬢様から頼まれた仕事はこれで終わりだ。

このまま姿現しで紅魔館へと戻ってもいいが、クイレルに挨拶もしていききたいし歩いて帰ろう。

私は来た道をまっすぐ戻ると神秘部を出てエレベーターのボタンを押す。

しばらく待つっているとガラガラジャジャラと音を鳴らしながらエレベーターが降りてきた。

格子戸を抜けエレベーターに乗り込むと、地下1階のボタンを押す。

一番下からかなり上まで行くので、結構時間が掛かるだろう。

私の予想は見事的中し、エレベーターは途中で何度も他の階に停止した。

だが待つていれればいつか目的地には着くもので、5分と掛からず目的の地下1階へと到着する。

私は廊下をまっすぐ進むと奥にある魔法大臣室の扉をノックした。

「入りましたまえ」

中からクイレルの威厳たつぷりな声が聞こえてくる。

「失礼します」

私はわざと丁寧な返事をして扉を開けた。

魔法大臣室にはクイレルの他に下級補佐官のパーシーがいる。

どうやら仕事の話をしていたようだ。

「ああ、君か。仕事の程はどうだ？」

「もう終わったよ。今から帰るところだから一応挨拶に来たってわけさ」

私はわざといつもと口調を変えて喋る。

イメージとしては陽気な女大将風だ。

「それはご苦労だった。……ああ、紹介しよう。こちら、魔法大臣付下級補佐官のパー

シー・ウィーズリー君だ」

クイレルの紹介でパーシーは頭を下げる。

私は片手を上げて挨拶をした。

「よろしくな！ 私は小望月幾望。日本魔法省の役人だよ」

取りあえずそういうことにしておくことにする。

日本ほどの辺境の地なら誰も知り合いがいる人はいないだろう。

「日本魔法省ですと出身はマホウトコ魔法学校ですか？」

「へえ、詳しいじゃないか。ああ、私は魔所魔女（マジョマジョ）だよ」

まさかパーシーが日本の魔法界の知識を持っているとは思わなかった。

「クラウチさんから話を聞いたことがあります。生徒は学校へは大きな海燕に乗って移動するんですよ。そして何より校則が厳しいだとか」

「イギリスと比べても変なところだよ、あそこはね」

私はパーシーと喋りながらもクイレルに書類を返す。

クイレルが書類に触った瞬間書類の内容が書き換わり、偽造された。

「じゃ、私はここらで失礼するよ。クイレル大臣も補佐官君もお達者で！」

私は踵を返すと軽く手を振りながら魔法大臣室を出る。

意外と魔法使いには国際的な人が多いのかもしれない。

日本人設定は拙かっただろうか。

私は再度エレベーターに乗り地下8階のアトリウムを目指す。

役人が通勤するための暖炉はアトリウムのある階にあるのだ。

何故そんな中途半端な階にあるのか理解不能だったが、多分魔法大臣室を一番奥まつた場所に設置したかったからだろう。

それなら一番地下でいいと思うのだが、どうも偉い者は一番上という感覚が抜けないようだ。

私は8階でエレベーターを降りるとアトリウムの壁際にある暖炉の1つに煙突飛行

粉を投げ入れる。

そして中に入り大図書館へと移動した。

「大臣、先ほどの方は？」

「休暇中に出会った友人だ。ヤマトナデシコというのだろうね。ああいうのを」

「どちらかと言えば江戸っ子かと……」

新学期が始まって次の日、ハリーは自分の時間割を見て唖っていた。

3年生の時に選択した占い学と魔法生物飼育学は取らないことに決めたのだが、魔法薬学が取れないのが思い悔やまれる。

「さて、ポッター、ポッターは、と……」

マクゴナガルがハリーの取った教科を自分のノートで調べていた。

「呪文学に闇の魔術に対する防衛術、薬草学、変身術、全て大丈夫です。特に私は貴方の変身術の成績には大変満足しています。ええ、本当に。でも、なぜ魔法薬学を続ける申し込みをしなかったのですか？ 闇祓いになるのが貴方の目標だったと思いますか？」

ハリーはその言葉に肩を落とす。

スネイプは去年ふくろう試験の成績が『O』、つまり最高点を取れている生徒しか魔法薬学を受けさせないと言っていた。

そしてハリーの魔法薬学の成績はその下の『E』、あと一步届かなかったわけだ。

「そうでした。でも、スネイプは僕にふくろうで『O』を取らないとダメだつて——」
「確かにスネイプ先生がこの教科を教えていらつしやる間はそうでした。しかし、ノーレッジ先生はふくろう試験でたとえ『T』、最低点を取った生徒でも授業を受けて構わないと仰っています。貴方の成績は確か『E』だったはずですよ。魔法薬学を続けたいですか？」

ハリーはマクゴナガルに言われて初めて気が付いた。

そう、先生が変わっているのだ。

「はい。ですが、教科書も材料も、何も買ってません」

「教室にあるものを借りれば良いでしょう。そのような些細なことで闒祓いになる夢を諦める必要はありません。ではポッター、これが貴方の新しい時間割ですよ」

ハリーはマクゴナガルが修正を加えた時間割を受け取る。

そこには今日の午後に魔法薬学があることが記されていた。

ダンブルドアが半年以上も探し回って、ようやく見つけた人物の授業だ。

そしてハーマイオニーの触れ込みのおかげで既に学校中にパチュリー・ノーレッジの逸話が広まっていた。

もつとも噂というものは段々と話が変わっていくものだ。

ハリーがシェーマスから聞いた話では、片手でドラゴンを倒したりだとか手が伸びるだとか、変なことになっていた。

ハリーたちは2限続きの魔法薬学を受けるために地下牢教室へと来ていた。

教室の前には30人ほどの生徒が授業が始まるのを待っている。

スネイプの授業でこんなに『O』が取れた生徒がいるとは思えない。

どうやらマクゴナガル先生の言葉通り、受けたいと思つた生徒は全員この授業を取ることができたようだ。

その中には魔法薬学が酷い点数だったであろうネビルの姿もある。

スリザリンからはマルフォイを含む何人か。

一番多いのはレイブンクロウの生徒だろうか。

「入りなさい」

ハリーたちが生徒を見回していると教室の中から女性の声が聞こえてくる。

パチュリーの声だ。

前の方にいる生徒は顔を見合わせ、警戒するように中に入っていく。

地下牢教室は前年度と比べると、全くの別物になっていた。

教室の中は蛍光灯で照らされており、黒板もホワイトボードに替わっている。

机も木製ではなく、白く滑らかな素材だ。

マグルの世界で生活していたハリーとハーマイオニーにはわかる。

この教室はまるでマグルの大学にあるような研究室だ。

壁にはフラスコやビーカーが並び、材料も金属のキャップのついた瓶に入っている。

このような光景を見たことのない生徒が多いのか、半分以上の生徒が目を見つめていた。

「各テーブルに4人ぐらい座って。……机が足りないわね」

ハリーたちは3人でいち早く前のテーブルを陣取ったが、確かに20人あまりが椅子に座れていない。

本来ならば受講者数はもっと少ないはずだったからだろう。

パチュリーが軽く手を振ると壁がガクンと後ろに下がり、床から机がせり上がってくる。

教室が倍以上に広がったが、無理やり広げたような跡はなく、まるで初めからそのよ

うな造りであつたように自然だ。

溢れた生徒たちは新しく現れた机に恐る恐るついていく。

全員が席に着いたことを確認したらパチュリーは全員の顔を眺め、ノートに何かを書き留めた。

「全員いるわね。……グレンジャー、教科書は仕舞いなさい。今朝急遽この授業を取ることにした生徒は、新しく教科書を購入しないように。金貨の無駄よ。マクミラン、新品だったらホグワーツで買い取るわよ？」

パチュリーは生徒の心を読むようにスラスラと言葉を並べていく。

「さて、授業に入る前に忠告しておくわ。私の授業を受けても別にイモリ試験には受からない」

その言葉を聞いてハーマイオニーが不安そうな顔をする。

ハリーとロンも唾を飲み込んだ。

「魔法界の魔法薬学は非常に遅れているわ。無駄が多い、偏見が多い、古い情報が多い。まあこれは魔法界で使われている魔法全てに当てはまるものかしら。私が教える魔法薬は魔法省の教育方針なんか無視した、独自のものよ。故に、この授業で習ったことはイモリ試験には使えないと思いなさい。そんな時間の無駄を犯すのが嫌だという生徒は、今すぐ教室を出ていくことをお勧めするわ」

パチュリーはじっとりとした目で生徒全員を見る。

誰も席を立とうとはしなかった。

「……よろしい。今の魔法界で必要な物はテストの点ではない。自分や、自分の大切な人を守るための能力よ。では授業を始めましょう」

パチュリーはそういうとホワイトボードに材料の分量を書いていく。

ハーマイオニーはその内容を必死で羊皮紙に書き留めたが、ハリーとロンはそこまでする気にはなれなかった。

今までの魔法薬学でてきた材料の数に比べると物凄く少なかったからだ。

1年生でも暗記できてしまいそうな分量や数である。

「先生、質問よろしいですか？」

パチュリーがホワイトボードに理論を書こうとした瞬間、ハーマイオニーの手が天井につかンばかりに上がる。

「グレンジャー、どうしたの？」

「材料の分量に小数点単位の数字がないのは何故ですか？」

「数グラムの誤差なんて気にしないでいいわ。そんなに難しい薬じゃないし」

その言葉を聞いて魔法薬学が得意な生徒数人が驚いたように目を見開く。

イモリレベルの授業になれば、コンマ何ミリグラムの精度が求められると思っていた

からだ。

材料とその分量を書き終ると今度はその材料がどのような反応を起こすかをパチュリーが早口で説明していく。

その様子はまるで生徒に理解させる気が無いようだった。

ハーマイオニーは必死にその反応式を羊皮紙に書き留めていくが、やがて追いつかなくなる。

ハリーとロンは初めから材料の反応式まで理解する必要がないと思っっているのか、話半分にその呪文のようなものを聞いていた。

「と、ここまで簡単に説明したけど、別にこれを覚える必要はないわ。ラジオの仕組みを完全に理解してラジオを聞いている人のほうが少ないわけだしね。ここまで聞いて何の魔法薬を作るか分かった人はいるかしら？」

ハリーは期待したような顔でハーマイオニーを見た。

このような質問に答えて点をもらうのはハーマイオニーの十八番だからだ。

だがハリーの考えとは裏腹に、ハーマイオニーは自分の書いた内容とホワイトボードの内容を見比べ、考え込むように唸ると首を横に振るう。

他の生徒もホワイトボードに書いてある魔法薬が何なのかわからないようだった。

「……まあわからないでしょうね。これはポリジューズ薬の反応式よ。そして、今日授

業で作る魔法薬でもある」

「先生、ポリジューズ薬を作るには満月草が必須のはずです。それに調合には1か月以上の時間が——」

「ハーマイオニー・グレンジャー。貴方、その歳でポリジューズ薬を調合したことがあるの?」

パチュリリーの見透かすような質問に、ハリーたち3人はドキツとする。

確かにハーマイオニーはポリジューズ薬を2年生の時に作ったことがある。

だが、それは授業ではない。

校則を破ったり盗みを働いたり、少し後ろ暗い環境でのことだった。

「まあいいわ。確かに古臭い方法で作ろうとするとポリジューズ薬は貴重な材料と多大な時間を要する」

パチュリリーが手を叩くと各テーブルに材料と試験管が現れた。

「じゃあ、私の言ったとおりに材料を試験管に入れなさい。……秤なんていらないわ。邪魔になるから床に置いておきなさい」

パチュリリーは手本を見せるように材料を順番に指で摘み試験管の中に入れていく。

生徒たちは半信半疑で同じように試験管に材料を入れていった。

勿論、全員の感覚が違うように皆それぞれ試験管の中に入っている材料の分量は異なる

る。

「なんとというか、これは簡単でいいな」

ロンがハリーと頷き合うが、ハーマイオニーはどうしていいかわからないといった表情だった。

「材料を無事入れ終えたら、机の上に置いてあるヤカンからお湯を注ぎなさい。そしてコルク栓をして、何度か振るう。回数は適当でいいわ」

ハリーは自分の試験管にお湯を注いで栓をすると、ガシヤガシヤと何度か振る。すると水飴状の透き通った液体が完成した。

ロンの試験管を見ると赤色で、ハーマイオニーは紺色の液体になっている。

「さて、完成よ。色がそれぞれ違うのは各自の配合具合が違うからね。でも、性能に問題はないはずだわ。各自同じ性別同士で髪の毛を交換しあい、自分の薬の効果を確かめると」

ハリーは自分の髪の毛を一本引っこ抜くとロンの赤毛と交換する。

ロンの髪を自分の試験管に入れると、中身が赤色に変わった。

「ハリーの髪の毛を入れたら金色に変わったぞ。ハーマイオニーも試してみろよ」

ハーマイオニーも恐る恐るパドマの髪の毛を入れる。

すると薬は水色へと色を変えた。

髪の毛を試験管へは入れたが、誰も試そうとはしない。

「どうやら皆自分の作ったポリジユース薬に自信がないようだ。」

「大丈夫よ。毒になる成分は入ってないから、たとえ失敗したとしても体に害はない」

それを聞いてハリーが先陣を切って一気に試験管の中身を飲み干した。

「凄い、不味くないぞ。トマトジュースのような味がする」

「こっちはマンゴー味だ」

「……サイダーのような感じ？」

それに続いてロンとハーマイオニー、が薬を煽る。

次第に3人の姿形は変わっていき、ハリーはロンに、ロンはハリーに、ハーマイオニーはパドマになった。

「反応式を見ればわかると思うけど、この薬の調合で重要なのは分量ではなく、何が入っているかよ」

その後、全員が自分の作成したポリジユース薬を試したが、その全てがちやんと本来の効能を示した。

パチュリーがもう一度手を叩くと机の上が綺麗になる。

「教科書に載っている調合法がどれほど遅れているか分かったかしら。私の開発したレシピを用いれば失敗はないわ。このクラスにはもともと魔法薬学があまり得意ではな

かった生徒が多いみたいだけど、何の問題もないわよ。この授業はずっとこんな感じだから。難しいことを授業でやったとしても、それがテストに出ることはない」

パチュリーはちらりと時計を見る。

まだ授業の時間は1時間以上残っていた。

「結構残ったわね。……そうね、ではもう少し詳しくこの調合法のメリットや何故この材料でポリジューズ薬……まあ、正確にはポリジューズ薬のような何かんだけど、これが作れるのか説明していこうかしら。このへんはテストには出ないから興味の無い生徒は教室の後ろで遊んでいいいわ。友達とおしゃべりするのも許可するし、なんなら他の教科の宿題をやってもいい。真に魔法薬学を学びたいと思う生徒だけ、私の周りに集まりなさい」

その言葉を聞いて、ハーマイオニーを筆頭に数人の生徒がパチュリーに近づいていく。

ハリーはどうかと周囲を見回していたが、ロンは既に机に突っ伏していた。

「列車の中の無礼を全力で詫げるよ、僕は。ありや最高の先生だ。そうだろ？ ネビル」

ハリーの容姿をしているロンがネビルに話しかける。

「僕はアーニーだよ。ネビルはあっち」

ネビルの容姿をしているアーニーが向かい側を指さす。

そこには完璧にアーニーの姿に変わっているネビルが変身した自分の体を見渡していた。

「僕、ちゃんと魔法薬を調合できたの初めてかも。マクゴナガル先生が、魔法薬学は薬草学と相性がいいから取った方がいいって言ってたけど、嘘じゃなかった」

「ああ、言うのを忘れていたわ」

急にパチュリーが教室にいる生徒全員に対して言った。

「この薬に効果時間という概念はないから、元の姿に戻りたいときは耳たぶを引っ張ること。何かの影響で耳がない場合は鼻でもいいわ」

ハリーはそれを聞いて耳たぶを引っ張る。

すると電球のスイッチを切るようにすぐさまハリーの姿へと戻った。

「さいつこうにクールだ。これ多分学校中で流行るぜ。廊下を7人のスネイプが闊歩する日も遠くないかもな」

その光景を想像してしまったのかハリーは嘔き出してしまふ。

少なくとも、ハリーが受けた魔法薬学の授業の中では、今日が一番楽しかったと言えるだろう。

そろそろ授業が終わるといふ時間帯になると、ハーマイオニーは先生の元から疲れた

ような顔をして帰ってくる。

疲労の色は確かに浮かんでいるのだが、それでも何故か満足げな表情だった。

「ほんつとうに、素晴らしい先生だわ。このポリジューズ薬の調合法も画期的としか言
いようがないもの。ポリジューズ薬の欠点を完全に無くしているし、効き目は長すぎる
と思えるほどに長い。一昨年のムーディのように1時間おきに薬を飲まなくてもいい
の。理論から簡単に計算すると……1回飲めば1年ぐらいは持ちそうね」

ハーマイオニーは目をキラキラと輝かせながら言う。

「ただ1つ問題があるとすれば……本当にイモリの試験では使えそうにないってこと
ね」

「だけど実用的だ」

ロンがハーマイオニーの言葉に意見する。

「ええ、勿論。先生の魔法薬に文句を付けようってわけじゃないの。本当に実用的だわ
……。材料だってホグズミードに行けば全て子供の小遣いで買えるものですよ」

「材料の貴重さが問題ではないのよ」

ロンの頭上からいきなりパチュリーの声がする。

いつの間にかパチュリーはハリーたちのいる机へと来ていた。

「60 kg換算で、酸素37.8 kg、炭素12 kg、水素6 kg、窒素1.8 kg、カルシウム1.

2 kg、リン720 g、硫黄145 g、カリウム130 g、ナトリウム95 g、塩素92 g、マグネシウム30 g、鉄4.5 g、フッ素4.2 g、亜鉛2.1 g、ケイ素1.2 g。その他1グラムに満たない54種類の元素で人間の体は構成されているわ。原価にして20ポンド前後。それが人間1人の値段よ。これだけの材料があればホームクルスを製造することもできる。もつとも、学校の授業ではやらないけど。倫理に反するし」

パチュリーは言い切るとホワイトボードの前へと戻っていく。

3人は困惑した表情で顔を見合わせた。

「前言撤回、マッドアイ以上にイカレてるかも」

ロンがぼつりと言ったのと同時に終業のベルが鳴る。

生徒たちは満足げな表情を浮かべて地下牢教室を出ていった。

ハリーたちもそのあとに続いて地下牢教室を出る。

「ダンブルドアもそうだけど……長く生きるとちよつと頭がおかしくなるのかな?」

「ロン、失礼でしょう? ……まあダンブルドアやムーディが少しおかしいのは否定しないけど」

ハリーは先ほど授業でやったポリジューズ薬の材料と作り方を思い出す。

忘れないうちに何処かにメモっておいた方がいいかもしれない。

授業だからと話半分聞いていたが、ポリジュース薬は身を守るのに非常に役に立つ。

それがあんなに簡単に作れるのだ。

そして何より貴重と言えるのが、この調合法を知っているのはパチュリー・ノーレッツジ以外には自分たちだけということだ。

魔法省やスネイプですら、この調合法は知らないだろう。

「そういえば、一時間ぐらい余分に説明を受けていたけど、理解できたの？」

ハリーが何気なしにハーマイオニーに聞くと、ハーマイオニーはピクンと体を震わせる。

そして軽く冷や汗を流した。

「実をいうと、あんまり……作り方は滅茶苦茶簡単なんだけど、理論となると物凄く難しいの。新しい記号や成分名が次々に出てくるし、反応式も凄く複雑で……」

ハーマイオニーが反応式を書き写したとも思われる羊皮紙をハリーとロンに見せるが、2人はそれが子供の落書きのようにしか見えなかった。

「落書きみたいに見えるでしょ？　実は本当に落書き同然なの。書いたことのない文字も多くて……書いた私にも既に解読不能だわ」

ハーマイオニーは肩を竦めているが、ハリーたちにとっては驚くべきことだ。

ハーマイオニーが授業についていけないところを見るのは、これが初めてだった。

パチュリーの授業が始まって一週間もすると、ホグワーツは空前の魔法薬ブームが訪れていた。

一気に手ごろになった魔法薬を生徒たちは冗談半分で使用していく。

ポリジューズ薬を筆頭に生ける屍の水薬や愛の妙薬、戯言薬、そして酷いときには真実薬まで出回る始末だ。

ホグワーツの生徒の殆どはムーデイのように飲み物を持参し、銀のフォークで食事を取る。

何処に誰が仕掛けた魔法薬があるかわからないような状態なのだ。

勿論、既に校則で授業時間外の魔法薬の勝手な製造は禁止されている。

だが、それを守っている生徒がいるとは思えなかった。

そしてこの状況に一番不快な思いをしているのはスネイプだ。

パチュリーが新しく教えている調合法は全て斬新で、全く新しいものである為、今までの調合法など全く役に立たない知識になってしまう。

今現在スネイプよりも生徒の方が容易に真実薬を調べることができるようになってしまったのだ。

しかもこれでパチュリーの専門が魔法薬学ならまだしも、パチュリーの専門は呪文学だという。

つまりスネイプは全く専門でも何でもない分野で、パチュリーに負けたことになるのだ。

「やっこさん絶対気に入らないだろうな。今じゃスネイプよりも僕の方が上手く魔法薬を調べることができるって言うんだからさ。スネイプがノーレッツ先生から調合法を素直に習うとも思えないし」

ロンは朝食を食べながらかぼちやジュースの瓶の栓を抜く。

そして手元で隠すことなくハリーとハーマイオニーのゴブレットに注いだ。

「何も入れてないぜ。全財産を掛けてもいい。全く、物騒な世の中になったよなあ？」

朝食の席では毎日のように何人かがバタリと倒れたり凄惨な速度で変な言葉を口走ったりすることがある。

生ける屍の水薬と戯言葉だ。

医務室には既にいたずらで使われそうな魔法薬の解毒剤が大鍋でいくつも置いてある。

それでも医務室は常時満員状態だというから驚きだ。

ハリーとハーマイオニーはロンに軽くお礼を言っただけでかぼちやジュースを手取る。

唯一救いなのは、パチュリーがまだ固形物に混ぜられるような魔法薬を授業でやってないことだろう。

「先生の魔法薬は素晴らしいけど、それを扱う魔法使いの頭がなつちやいなわ。薬の危険性を全く理解していない」

ハーマイオニーが膨れ面で言う。

ハリーは苦笑いするしかなかった。

「でも、ノーレッジ先生はなんであの調合法を本にまとめたり魔法省に届けたりしないんだらう。だってあんなに簡単で、どれも安全だ。教科書が全部書き換わってもおかしくないレベルなのに」

「ダンブルドアと一緒に勧誘に行ったんだらう？ 何か聞いていないのか？」

ロンの言葉にハリーは首を振る。

「隠居していたってぐらいしかわからない。……ハーマイオニーは何か知ってる？ 彼女について書かれた本をいくつか読んだらう？」

「ええ、20世紀の偉大な魔法使いには、知識だけを求めた魔女っていう記述があったわ。これは私の推測でしかないんだけど、多分彼女は富や名声には全く興味がなかった

んでしようね。じゃないとこのような凄い技術を持ったまま隠居なんかしないもの」
「そうだ、1つ思い出した。彼女が隠れていた場所に、賢者の石がいくつか置いてあったんだ。彼女の外見が若いのは命の水のおかげかも知れない」

ハリーは確信したように頷く。

「それはないわ。ほら」

ハーマイオニーはテーブルの上に料理を押しつけて古新聞を取り出す。

それは1890年代の日刊予言者新聞だった。

見出しには『ホグワーツの秀才、ついに卒業』と書かれている。

「ダンブルドアと同期という話を聞いて少し昔の新聞を調べてみたの。といっても、これ自体はダンブルドアの記事だけど。ここを見て」

ハーマイオニーが古新聞に載っている1枚の写真を指さす。

そこには若い青年がにこやかな顔をして首席の表彰状を掲げていた。

17, 18歳頃のダンブルドアだろう。

その横にはダルそうな顔の少女がマグショットでも取られるかのように表彰状を胸の前に持って写っている。

パチュリー・ノーレッジだ。

だが、今のパチュリーよりも少し背が高い気がする。

今のパチュリーは、この頃よりも少し幼い容姿だ。

「本当だ。若返つてる。しかも首席か……」

ロンが新聞の写真をまじまじと観察する。

「そう。でもこの頃は全く有名じゃなかったみたい。記事はダンブルドアについて書かれた物だし、パチュリー・ノーレッジという名前は写真の説明書きに少し書いてあるだけ」

ハーマイオニーが指さした先には確かにパチュリー・ノーレッジという名前が書かれている。

だが本当に説明書きの域を出ていなかった。

「つまり卒業した後に、何らかの方法を見つけて若返つたつてことかな。ホグワーツを卒業したばかりの生徒が賢者の石を作り出せるとも思えないし」

「そういうことよ。彼女の若さには、何か私たちの知らない秘密が隠されている可能性が高いわ」

ハーマイオニーはいそいそと新聞を仕舞う。

次の瞬間ジニーがロンとハリーの間から顔を出した。

「ノーレッジ先生の話？ あの人を教えてくれた愛の妙薬の作り方つて便利よね。その辺の材料で調べできるし、なにより簡単だわ」

その言葉を聞いてロンが憤慨する。

「ディーン・トーマスに盛ってるのか？」

「あら、勿論そんなことしないわ。喧嘩したときに彼のゴブレットに数滴垂らすだけよ。ハリー。これ、貴方宛てよ」

ジニーはハリーの手に羊皮紙の巻紙を押し付けると何処かへ歩いて行ってしまった。ロンは困ったもんだと顔を顰めていたが、ハリーは既にその羊皮紙に集中している。「ダンブルドアからだ。多分個人授業のことだと思う」

ハリーはロンとハーマイオニーにも羊皮紙に書かれた内容を見せる。

そこには今夜の午後8時に校長室に来るようになるとのことが書かれていた。

『P. S. わしはペロペロ酸飴が好きじゃ』だつてさ。……ペロペロ酸飴が好きだつて？』

ロンはそれこそわけが分からないといった顔をする。

「校長室の外にいるガーゴイルを通過するための合言葉なんだ」

ハリーはロンの間違いを訂正すると羊皮紙をポケットへと仕舞う。

そして1限目の授業へと向かった。

午後7時55分前。

ハリーは8階の廊下のガーゴイル像の前に立っていた。

「ペロペロ酸飴」

ハリーが唱えるとガーゴイルは命が吹き込まれたかのように飛びのき、その背後の壁が2つに割れる。

奥には動く螺旋階段があり、ハリーはそれに乗って上にある校長室を目指した。

一番上まで到着すると、ハリーは真鍮製のドア・ノッカーを叩く。

「お入り」

すぐさまダンブルドアの声が聞こえた。

ハリーは校長室の扉を開けて中に入る。

「先生、こんばんは」

「こんばんは、ハリー。ここへお座り。新学期の1週間は楽しかったかの？」

ダンブルドアは微笑んでハリーに椅子に座るようにと促す。

「はい、ちよつと去年の後期を思い出しますが」

「ふむ、確かに彼女を魔法薬学の教師としたのは間違いだつたかもしれない。だが彼女を闇の魔術に対する防衛術の教師にするよりはマシというものじゃよ。少なくとも、今のところは既存の魔法薬しか教えておらん。作り方はちと奇妙じゃが」

ダンブルドアはクルクルとポリジューズ薬の入った小瓶を振る。そしてその小瓶を棚に戻した。

「さて、ヴォルデモート卿が15年前、何故君を殺そうとしたのかを君が知ってしまった以上、わしは何らかの情報を君に与える時が来たと判断した。もつとも、前年度の終わりに君に話したことが事の全てじゃが」

ダンブルドアはそこで一度言葉を切り、憂いの篩の前へ移動する。

この魔法具は自分や他人の記憶を見ることが出来る魔法具だ。

「まず話しておかんと行かんのは、ヴォルデモートとの決戦はもう間近に迫っておるということじゃ。いや決着を急がんといかんと言い直したほうが語弊がないかの」

ダンブルドアは一筋の銀色の霧を杖で頭から引っこ抜くと、憂いの篩の中に入れる。

「これはわしの記憶じゃ。入ってみなさい」

小手調べと言わんばかりにダンブルドアはハリーを促す。

ハリーは恐る恐る篩の水盆に顔をつけた。

途端にハリーは校長室を離れ下へ下へと落ちていく。

そして両足が床についたとき、ハリーはグリフィンドールの談話室にいた。

そこには新聞の記事の写真で見た若いダンブルドアが、机の上で羊皮紙に何かを書いている。

どうやら手紙の返事を出しているようだ。

「この……予言は……正しい……ものとは……思えません。少し失礼か?」

ダンブルドアはガリガリと羽ペンを動かしながら難しそうな顔をする。

ダンブルドアが書いている羊皮紙の横には綺麗に装飾された手紙が1つ置いてあった。

『手紙をありがとう。若い人が占いに興味を持つてくれるというのは、嬉しいものね。そこで特別に貴方に対して予言を1つ授けるわ。これは貴方の、いや、将来の魔法界に関わってくるものだからしかと胸に刻みなさい。「アルバス・パージバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドアは1997年の6月に死ぬ」良かったわね。普段の占いで寿命に関することが出る時は、1年程度先のことが多いんだけど、100年ほど猶予があるわよ』

手紙の内容は喜んでいいのか悲しんでいいのかわからないような内容だ。

明日死ぬわと言われたわけではない、100年という時間はあまりにも長く感じられる。

ハリーは手紙の差出人を名前を見つけた。

そこにはレミア・スカーレットという名前が書かれている。

「一体……どのような……占いで……このような……結果が……出たのですか? う

ん、まあこれなら少し柔らかいな。本当に占い師というのはたまに突拍子もないことを言うから困るよ……」

次の瞬間ハリーは無重力の暗闇の中を舞い上がり、校長室へと戻ってくる。

「先生、今のは一体……」

ハリーは憂いの篩から顔を上げ、ダンブルドアに聞いた。

「ハリーよ。その頃のわしはあまりにも愚かだった。少し勉強のできる大馬鹿者と言い直してもよいかもしれん。じゃが、この記憶で大切なのは手紙に書かれている予言の内容なのじゃよ。1997年6月。つまり、わしは来年の6月に死ぬのじゃ」

ダンブルドアはいつになく真面目な顔でハリーを見る。

「でも先生、予言は絶対ではないですよね」

ハリーが心配そうに聞くがダンブルドアは静かに首を横に振った。

「驚くことにの、レミア嬢の死に関する予言的中率は100%なのじゃよ。わしはあの後少しの時間をかけて彼女の予言を調べたが、あのように死の予言をされたものはしっかりとその年や月になくなっておった。幼心に恐怖したものじゃ」

ダンブルドアは記憶を頭に戻すと椅子に座りなおす。

ハリーもその向かい側に座った。

「ハリー、わしは死ぬ前にヴォルデモートと決着をつけるつもりじゃ。それまでに奴を

殺せる状態にしておかなければならん」

「殺せる状態に？」

「左様。夏にホラスに無理を言つて記憶をもらったのもそのためでのう。実は、ホラスはヴォルデモートが学生だったときのスリザリンの寮監なのじゃよ。ヴォルデモートはホラスのことを恩師としてそこそこ信用しておつた。そのおかげで、わしはヴォルデモートの不死性の秘密を握れたと言えるかもしれん」

ダンブルドアはローブのポケットからクリスタルの小瓶を取り出した。

ハリーはそれに見覚えがある。

スラグホーンが自分の記憶を入れた小瓶だ。

「では先生、その小瓶の中にはヴォルデモート倒す手がかりが入っているのですか？」

ハリーはダンブルドアの死の予言にシヨックを受けていたが、何か期待を込めたような表情でダンブルドアに聞く。

「そうじゃ。この記憶こそ、これから行う個人授業で最も重要な部分と言えるじゃろう。全ての始まりであつて、全てを終わらすものでもある」

ダンブルドアは静かに立ち上がり、憂いの篩の中に記憶を落としていく。

ハリーは恐々としながらも足早に憂いの篩に近づいた。

そして再びハリーは暗闇へと落ちていく。

そこは何処か部屋のようなだった。

蠟燭で明るく照らされており、数人がテーブルを囲んでいる。

その中心にいるのはホラス・スラグホーンだろうか。

現在と違い髪の毛も多く、お腹もそこまで出てはいない。

次の瞬間、ハリーの横にダンブルドアも現れる。

それをきっかけにハリーは改めて周囲を見回した。

多分ここはホグワーツのスラグホーンの部屋なのだろう。

部屋にいるスラグホーン以外の人は、皆子供でホグワーツの制服を着ている。

ハリーはその中にリドルを見つけた。

リドルは生徒たちの中で一番ハンサムで、一番くつろいでいる様子だ。

どうやらスラグホーンがお気に入りの生徒を何人か集めて食事会を開いていたらし

い。

「先生、メリソート先生が退職なさるといふのは本当ですか？」

リドルがスラグホーンに何気なしに聞いた。

「トム、トムよ。例え知っていても君には教えられんよ」

スラグホーンは砂糖漬けのパイナップルの箱をいじりながら、トムに叱るように言う。

だがあまり本気で叱っているわけではないようだ。だつた。

「まったく、君つて子は何処でそのような情報を仕入れてくるのか知りたいものだよ。教師の半数以上よりも情報通だね、君は」

リドルは微笑する。

周りにいる生徒たちは笑つて、リドルを賞賛の眼差しで見た。

「知るべきではないことを知るといふ、君の謎のような能力。大事な人間を嬉しがらせる心遣い。ところで、パイナップルをありがとう。これは私の好物だ。これも、君の考え通りなのかもしれないね」

スラグホーンが愉快そうに笑つた瞬間、部屋の中が白く濃い霧に包まれ、急に晴れた。ハリーは何が起こつたのかわからないといったように部屋を見回したが、ダンブルドアが置き時計を指さす。

「どうやら少し時間が飛んだらしい。」

「なんとまあ、もうこんな時間か？」

スラグホーンは腕時計を見て言う。

「みんな、もう戻つた方がいい。そうしないと、みんな困つたことになるからね。レストレンジ、明日までにレポートを書いてこないと罰則だぞ。エイブリー、君もだ」

生徒がゾロゾロと部屋を出ていく間、スラグホーンは椅子から立ち上がり、机の上の

食器を片付けていた。

しかし、リドルだけはまだ椅子に座っている。

全員が部屋を出ていくのを、わざとグズグズしながら待っているようだった。

「トム、早くせんか。時間外にベッドを抜け出しているところを捕まりたくはないだろう。君は監督生なのだし……」

スラグホーンは少し心配そうに言うが、リドルはお構いなしだ。

「先生、お伺いしたいことがあるんです」

「それじゃ、遠慮なく聞きなさい。トム、遠慮なく」

スラグホーンは朗らかに笑う。

だがリドルの次の言葉でスラグホーンの顔が不自然に引きつった。

「先生、ご存知でしょうか。……ホークラックスのことなのですが」

「闇の魔術に対する防衛術の課題か何かかね？」

学校でそのような課題が出るはずがないと、スラグホーンは百も承知だっただろう。

「いいえ、先生。そういうことでは……本を読んでいて見つけた言葉ですが、完全には分かりませんでした」

「ふむ……まあ……トム。 Hogワーツでホークラックスの詳細を書いた本を見つけるのは難儀と言える。闇の魔術の中でも断トツで恐ろしい術だ」

「でも、先生は全てご存知なのでしよう？　先生ほどの魔法使いなら……。誰かが教えてくれるとしたら、先生しかいないと思っただけです。ですから、とにかく伺ってみよう」と

スラグホーンは迷うように視線を泳がせたが、やがてリドルの押しに負けてしまう。

「……ホークラックスというのは、人が魂の一部を隠すために用いられる物を指す言葉で、分霊箱のことを言う」

「でも先生。どうやってやるのか僕にはわかりませんでした」

「それはだね……魂を分断するわけだ。そして、それを自分の体とは違う物に隠す。すると体が攻撃されたり破滅したりしても死ぬことはない。なぜなら、魂の一部は滅びずに地上に残るからだ。しかし、トム。それを望む者は滅多にいない。分霊箱で生きながらえた魂というのは、ゴーストの端くれにも劣る存在なのだ。死の方がいくらか望ましいだろう」

スラグホーンはたしなめるように言うが、リドルはそんなことは気にしていないようだった。

何かを求めるように欲望をむき出しにしており、貪欲な表情になっている。

「どうやって魂を分離するんです？」

「それは……」

スラグホーンは当惑する。

「……魂は完全なものであるということを理解しなければならぬ。分断するのは暴力行為であり、自然に逆らう」

「でも、どうやるのですか？」

「とてつもなく邪悪な行為による。殺人は自らの魂を引き裂く。分霊箱を作ろうとする魔法使いは、破壊を自らの為に利用するのだ。殺人によって引き裂かれた部分を、物に閉じ込める」

「閉じ込める？ でも、どうやって——」

「呪文がある。聞かないでくれ、これ以上は知らない！」

スラグホーンは首を振った。

「私がやったことがあるように見えるかね？ 私が殺人者に」

「いいえ、勿論そんなことは……すみません。お気を悪くさせるつもりは……」

リドルは慌てて言葉を取り繕うが、まだ何か知りたいことがあるようだ。

「でも、僕がわからないのは……本当にこれはただの好奇心なのですが、1つの分霊箱で役に立つのでしょうか？ 魂は1回しか分断できないのでしょうか？ もつとたくさん分断するほうがより確かで、より強力になれるのではないのでしょうか？ つまり、例えばですが、7という数字が一番強い魔法数字です。7個の場合は——」

「とんでもない、トム！」

リドルの言葉を遮ってスラグホーンが叫んだ。

「人を一人殺すだけでも十分に悪いことじゃないかね？ それに、いずれにしても魂を2つに分断するだけでも十分に悪い。7つに引き裂くなど……」

スラグホーンは困り果てた顔で黙り込む。

このような話を始めるべきではなかったと後悔しているようだった。

「……勿論、すべて仮定の上での話だ。我々が話していることは、学問的な話。そうだね？」

「ええ、勿論です。先生」

リドルはすぐさま答えた。

「いずれにしても、トム……黙っていてくれ。私が話したことは少し世間体に悪い。ホグワーツでは……この話題は禁じられている。ダンブルドアは特にこのことについては厳しい」

「一言も言いません。先生」

リドルはそう言い残し部屋を出ていった。

「ハリー、ありがとう。戻ろうぞ」

ダンブルドアはグイとハリーの肘を引き上げる。

そのまま暗闇の中を舞い上がり、2人は校長室へと戻ってきた。

「ヴォルデモートは分霊箱を作った……それも複数」

ハリーが確認するようにダンブルドアに問う。

ダンブルドアは何かを思い出すように目を瞑った。

「4年前、わしはヴォルデモートが魂を分断した確かな証拠と考えられる物を受け取った。リドルの日記じゃよ」

「どういふことですか、先生」

「君が説明してくれた現象は、わしが一度も目撃したことのないものじゃった。あの日記に籠められたものが、単なる記憶だったとしたらあそこまでの惨事にはならなかったじゃろう。単なる記憶が手中にした少女の命を搾り取るだろうか。それはありえぬ。あの本の中には何かもつと邪悪なものが棲みついておったのじゃよ。……魂の欠片じゃ」

ダンブルドアはキャビネットから穴の開いた日記帳を取り出す。

「わしは確信した。日記は分霊箱だと。しかし、1つの答えは得たものの、より多くの疑問が残った。わしが最も関心を持ち、また驚愕したのはあの日記が護りの道具としてだけでなく、武器として意図されていたことじゃった」

ハリーは考える。

確かに自分の魂の一部を、そんな無造作に武器として使用するだろうか。

もし分霊箱が1つであるとしたら、それはあまりにも不用心だ。

「気が付いたようじゃの。ヴォルデモートは複数の分霊箱を持つておる。信じたくはないが、そう考えると説明がつくのじゃ。そして、今見たホラスの記憶が、2つ目の証拠じゃ」

「リドルは7つの分霊箱を求めた。それも学生の頃に。つまり……」

「いや、ハリー。分霊箱を7つ作ってしまったら魂は8つに分かれることになってしまう。分霊箱は日記を含めて6つあると推測できる。ハリー、わしは死ぬ前に全ての分霊箱を壊すつもりじゃ。その準備として、パチュリー・ノーレッジを自らの城へと引き入れた」

ダンブルドアは1枚の写真をハリーに見せる。

そこにはダンブルドアとドージ、そしてパチュリーが写っていた。

「彼女を教師にしたのは分霊箱を見つげるため？」

「そうではない。邪魔をされないためじゃ。不確定要素を自分の管理できる場所に置いておきたかったというのが大きい。もし彼女がヴォルデモートに全面的に協力したら、明日にでも魔法界はヴォルデモートの手に落ちるじゃろう」

「そんなことは……ありえるのでしょうか？」

「ありうることなのじゃ。……ハリー、今日はここまでにしよう。次の授業の日程は今日と同じように伝えよう」

ハリーはできれば今日全てを教えてほしかったが、ダンブルドアはこれ以上情報を与えてもハリーが混乱するだけだと思ったのだろう。

「ハリー、次の授業までによく考えてくるのじゃ」

ハリーは少し未練を感じたが、校長室を後にする。

ダンブルドアは自分以外誰もいなくなった校長室で一枚の羊皮紙を取り出した。

『マールヴォロ・ゴーンの指輪は既に我が手に T・M・L』

T・M・Lとは一体誰なのかとダンブルドアは考える。

ヴォルデモートの本名はトム・マールヴォロ・リドル。

LではなくRだ。

そしてヴォルデモートは自らの本名を嫌っている。

もしダンブルドアに向けてメッセージを残すとしても、このような形で名前を残すとは思えない。

そう、この羊皮紙はゴーンの屋敷で見つけたものだ。

ダンブルドアはこの羊皮紙を見たとき、一瞬自分の思惑がバレてヴォルデモートが分霊箱を回収したものと思った。

だが、羊皮紙に書かれた名前を見てそうではないと考え直す。

「なんにしてもゆっくりとしている時間はなさそうじゃの」

ダンブルドアは机の引き出しに羊皮紙を仕舞い、憂いの篩から記憶を回収した。

天才とか、傭兵とか、ネックレスとか

「そういえば、……なんというかそれでいいの？」

私は大図書館の掃除をしながら小悪魔に問う。

小悪魔は少々珍妙な格好で本の整理をしていた。

右手に指輪を付け、首からロケットを下げている。

頭にはティアアラが乗っており、ポケットは不自然に膨らんでいた。

そう、小悪魔は全ての分霊箱を身に着けている。

「机の上に置いておくわけにもいかないじゃないですか」

小悪魔はそういうが、その表情は何処か誇らしげだ。

「なんとというか、お宝マニア？」

「否定はしませんよ。元古物商の下働きとして」

小悪魔が手を振るうと机の上に置かれた本が本棚に戻っていく。

「どれもこれも曰くのあるものばかりです。蘇りの石に、蛇語でしか開くことができないロケット、かぶると頭のよくなるティアアラ、金のカップ」

小悪魔は楽しそうにクルクル回る。

体が女性のものになると、心も次第に女性に近づいていくのだろうか。

小悪魔の動きには男性特有の重たい動作が見られなくなっている。

口調こそ中性だが、しぐさは既に女性のそれだった。

「分霊箱はまだ一つも破壊していないのよね」

「はい、日記は破壊したと言ってしまってもいいのかもしれないが」

恰好こそチグハグではあるが、ティアラはそこそこ小悪魔に似合っているといえる。

小悪魔はびたりと動きを止めると、思い出したかのように私に言った。

「そういえば、これでヴォルデモートの魂は7つになったわけですよ。余分に作ってしまったハリリー・ポッターと変化した日記でプラスマイナスゼロ。少しはパワーアップしたのかな？」

「そこまで7という数字にこだわる必要があるの？」

「願掛けみたいなものです。魔法界では7が最も強力な数字と言われている。そういうえば、咲夜は今年成人ですよね」

確かに私は今年で17になる。

魔法界では17歳で成人したということになるのだ。

マグルの世界、特にイギリスでは18歳で成人なので、魔法界の成人年齢は1年早い。

小悪魔が言うには、それも7という数字が関わっているからだという話だ。

「年齢って言葉は私の体には通用しない気はするけどね。そもそも時間の流れは相対的なものだから——」

「理屈ではそうかもしれないませんが、基準は大切ですよ。理詰めでは世界は回りません」
「知った風な口を利くじゃない」

「知った風な口を利くんです。少なくとも、咲夜より50年は長く生きていますので」

小悪魔は綺麗に磨かれたティアアラを自分の頭から取ると、私の頭の上に乗せる。

「うん、やはり私の赤髪よりも咲夜の銀髪の方が似合いますね。素敵ですよ」

ティアアラが頭の上に乗った途端、霧が晴れるように頭の中がスッキリとした。

今ならどのような複雑な計算でも瞬時に行えそうな気がする。

それと同時に、懐かしい感覚が心の中に響いた。

「貴方の魂を感じるわ。と言っても、今は別人か」

妙に胸が暖かくなる。

小悪魔は納得するように頷いていた。

「まだ私がハンサムだった頃に籠められたものですからね。と言っても、これを作った時少し顔が崩れてしまいました」

私はティアアラを小悪魔の頭の上に戻す。

「そういえば、ダブルドアはパチュリー様を見つけてきたのよね？ パチュ

リー様がそう簡単に見つかるとは思えないんだけど」

「咲夜の考えている通りですよ。パチュリー様は自分からダンブルドアの前に姿を現した。もつとも、ダンブルドアは自らが苦勞して見つけ出したと思つていてと思います。ダンブルドアと先生は古い友人なのです。ダンブルドア自身、純粋な気持ちで先生に協力を求めたのでしょうか」

小悪魔が手を振るうと図書館の机の上に1つの写真立てが現れる。

その中にはホグワーツの制服を着ているパチュリー様と、若い頃のダンブルドアであろう青年、そして騎士団員のドージが写つていた。

「2人は親友とはいかないまでも、顔見知りだったようです。ダンブルドアは貪欲に名声を求め、先生は貪欲に知識を求めた。いや、今でも求め続けている。あの事件がなければダンブルドアは先生と肩を並べて研究をしていたかもしれませぬ」

「あの事件?」

「そう、ダンブルドアの母親の死です。この話をするには少しダンブルドア家について先に話さなければならぬでしょう」

小悪魔は写真立ての前に腰かける。

私もその向かい側に座った。

そして時間を止め小悪魔と私の前に紅茶を用意する。

時間停止を解除すると小悪魔は自然な動作でティーカップを手に取り一口飲んだ。

「ふむ、トリカブトですかね？　ちようど体調が優れていたところですよ」

勿論私の分は毒を入れていない。

小悪魔は苦しうに咳ばらいを一つすると、ゆっくりと話し始めた。

「アリアナ・ダンブルドア。聞いたことはあるでしょう。貴方が私に調べろと言ったの

ですから」

「そうだったけ？」

「……………まあいいでしよう」

小悪魔はじとつとした目で私を見る。

私は記憶を探るが、確かにそのようなことを頼んだような気がした。

「ごめんなさいね。生き返ってからその前の記憶が曖昧で」

「晝夜の魂は不安定そのものだから。それ故に死後の世界から引つ張り出せたともい

えます」

「ちよつと待って、私はそつちの話のほうに気になるのだけれど——」

私が小悪魔の話に口を挟むと、小悪魔は困ったように眉を顰めた。

「先生から聞いていないのですか？　もしくはお嬢様からとか……」

小悪魔はまっすぐ私の顔を見る。

私は静かに首を横に振った。

「……ではそこから話しましょう。殺人を犯すと、その者の魂が引き裂かれるのです。分霊箱はその性質を利用した魔術ですが……まあそれはこの際置いておきましょう。つまり人を殺せば殺すほど、魂に傷が入ります。そのものの魂は人間のそれではなくなっていく。咲夜の場合引き裂かれた魂を分断し、箱に詰めたりはしていませんので、魂が不安定な状態というところに保たれています」

「そんなの……いや、それはどうなの？　もう星の数ほどの人間をこの手で殺してきているけど、私はまだ人間よ？」

「普通なら魂が異質なものに変化していてもおかしくはない。ですが咲夜の魂はまだ人間そのもの。それは罪の意識に関係してきています。憎しみや自らの利の為に人を殺しているわけではない。故に貴方の殺人には罪の意識は殆ど無いと言える」

つまり効率よく人を殺しているということだろうか。

「だが何度も引き裂かれ、傷を負った魂はとも不安定なものです。それこそ自分の意思と関係なく人を殺してしまえるほどに。そんな体から浮いているような状態の魂だったからこそ、状態を曖昧にしてこちらの世界に引き戻すことができた。話を戻しますよ？」

たしなめるような目で見られたので、私は少し肩を竦めた。

「アリアナ・ダンブルドア。ダンブルドア家崩壊の始まりにして、ダンブルドア自身の未来に一番影響を与えた人物の一人と言えるでしょう」

机の上に1枚の写真が現れる。

私はその人物に見覚えがあった。

「ホッグズ・ヘッドの肖像画……」

「その話も後程。まず、ダンブルドア家の家族構成です。都合によりアルバスという呼び名で話を進めますが——アルバスには弟と妹がいます。2つ下にアバーフォース、そのさらに2つ下にアリアナ。それに両親です。少々秘密主義な家庭ではありましたが、この頃の魔法族ではそれが普通なぐらいでした」

小悪魔が手を振るうごこに机の上に写真が増えていく。

その写真の中には何処から持ってきたものかわからないものも多かった。

「全ての始まりはアリアナが6歳だった頃に起ります。アリアナが家の裏庭で魔法を用いて遊んでいるときに、偶然それをマグルの少年たちに見られてしまったのです。哀れなことに、アリアナはこの少年たちに暴行されてしまいます。それ以降、アリアナはおかしくなってしまう。精神は不安定になり、魔力を制御できなくなりました」

「アリアナの父親であるパーシバルはこのことに激怒し、娘に暴行を働いた少年たちに復讐しました。勿論、それは許されることではありません。パーシバルは魔法省に捕ま

り、アズカバンに収監されました。ダンブルドア家はアリアナを守るためにゴドリツクの谷へと引越したのです。魔法省がアリアナの状態を知ったら、アリアナは一生聖マングに閉じ込められることになったでしょう。もしかしたら、ロックハートの隣にアリアナが並んでいるという状況もあり得たのかもしれないですね」

小悪魔は楽しそうにクツクツ笑う。

「ですが、そうはならなかった。ダンブルドア家はアリアナが病気だと言い張り、家の中に軟禁したのです。時々狂気に取りつかれたようにおかしくなる妹を隠し、静かに暮らしていた。もつとも、アルバスとアバーフォースはホグワーツに通っていました。妹の世話ばかりだったアルバスは、ホグワーツで才能を開花させます。あらゆる賞を総なめにし、世界中の有名な魔法使いや偉人と手紙のやり取りをした。その中にはお嬢様もいたという話ですが、まあその話は今はいいでしょう。なんにしても、先生と共に首席でホグワーツを卒業しました。その先には輝かしい未来が待ち受けていたことでしょう！」

やったー！ と小悪魔は両手を上げる。

だが、顔は笑っていない。

「……そうはならなかったのです。アリアナの発作は月日が流れるごとに酷くなってきました。そして、ついにアリアナは母親であるケンドラを殺してしまいます。ダンブ

ルドアはアバーフォースとアリアナの面倒を見るためにゴドリックに戻らざるを得なかったのです。それがなかったら、アルバスは違う道に進んでいったでしょう。めでたしめでたし」

「……ちよつと待つて。もしそこで話が終わつたら、ダンブルドアは今のような功績を残さなかつたはずよ」

私が指摘すると、小悪魔はニヤリと口を歪める。

「そう、ここで話は終わりません」

机に写真が一枚増えた。

私はこの魔法使いを知っている。

「グリーンデルバルド。ダンブルドアが倒したとされる闇の魔法使いね。確か貴方よりも古い魔法使いだったかしら」

ゲラート・グリーンデルバルド、ヴォルデモートが現れなかつたら史上最悪の闇の魔法使いであつたと評される人物だ。

1945年にヌルメンガードの戦いでダンブルドアに破れ、その後はヌルメンガードに収監されている。

「ゲラートとアルバスは、親友になつたのです。と言つても、戦いの後ではなく、戦いのおつと前、アルバスがホグワーツを卒業し、家に帰つてきてすぐのことですが。アリア

ナの世話に辟易としていたアルバスは、ゲラートを自分と対等な話し相手として認識し、すぐに仲良くなりました。アルバスはこのとき自らと対等な存在というものに、初めて出会ったのです」

「パチュリー様とは会っているはずだけど？」

「アルバスは在学中、自分と先生との間にある、力の壁に気が付いていたことでしよう。アルバスが他のことに現を抜かしている間も、先生はひたすら知識と技術を求めています。追いつこうと足掻いた跡も少なからず見わかりますが、追いつけるわけがありません。先生は友達も作らず、ただひたすらに知識だけを求めていたのですから。アルバスとゲラートはよく似ていました。能力も、知識も、そして思想も」

闇の魔法使いと思想が似ている。

今のダンブルドアからは想像もつかないことだ。

「2人は出会ってすぐに意気投合し、やがて新しい魔法秩序の計画を練るようになったのです。アリアナの面倒を見ることを二の次にして。マグルを力で従属させ、魔法族の生きやすい世界を作る。ああ、私があと50年も早く生まれていたら、その話し合いの中に参加できたのに。なんにしても、2人は『より大きな善のため』という志で自らの思想を正当化し、そのような面白そうな計画を練っていききました。それと同時に、死の秘宝を求めたとも言われています」

「死の秘宝……パチュリー様の話では、ニワトコの杖に蘇りの石に透明マント、だったかしら」

「ええ、3つ集めれば死を克服することができる。アルバスがそれを求めたのには明確な理由がありました。その頃にはもうお嬢様によって死の予言をされたあとだったんです。アルバスは自らが生きながらえる手段として、死の秘宝を求めた」

そのうちの1つがこれですが、と小悪魔は右手を差し出す。

指輪に嵌っている黒い石、それが蘇りの石。

私を死の世界から引き戻した媒体でもある。

「世界を統一するという計画に、アバーフォースは反対だったのでしよう。言い争いになり、ついには三つ巴の戦いへと発展する。魔力に感化されたのか、そのタイミングでアリアナは発作を起こし、気が付いた時には――」

アリアナは、死んでいた。

小悪魔はケタケタと笑い始める。

「喜劇にも程がありますよね？　結局この事件で頭を冷やしたアルバスは権力を持たないよう、持たないように学校の教師となります。グリンデルバルドはイギリスから逃走し、アバーフォースはバブのバーテンに。ホッグズ・ヘッドの店主は、アバーフォース・ダンプルドアなのです。いまだに妹のことが忘れられず、肖像画にして飾っているんで

すよ」

私はあの肖像画を見たときの違和感を思い出す。

ふと妹様に似ていると思ったが、それはあながち間違つてはいなかったのだ。

2人の境遇は、似ていると言える。

私は空になったティーカップに紅茶を注ぎ足す。

小悪魔の方のカップには紅茶とともに少量のシアン化カリウムを入れた。

「どうも」

小悪魔はそれを受け取り、一口味わう。

「ダンブルドアの人生がそこで狂わなければ、パチュリー様と共に研究をしていたとしても不思議ではなかったということね」

私が確認を取ると、小悪魔はコクリと頷く。

「グリーンデルバルドと出会っていなかったら、ダンブルドアは先生の力を借りてさらに強大な力を手にしていたことでしょう。魔法大臣になり様々な改革を進め……まあ全て仮定の話ですが」

「一体どこでそんな話を聞いたの？ ダンブルドアが喋るとも思えないし、アバーフォース？」

「いえ、流石にノコノコと表に出ていこうとは思わないですよ」

小悪魔は指輪を外すと手の平の上でコロコロと転がす。

すると小悪魔の後ろにパーシバル、ケンドラ、アリアナの3人が姿を現した。

アリアナは私の姿を見ると嬉しそうに手を振っている。

「本人から直接聞いただけです。いやあ、便利ですよ。この蘇りの石は。この石のおかげで分霊箱探しも捗りましたし。わからないことがあれば死者に聞けばよいのです」

小悪魔が指輪を嵌め直すと、3人は霧散するように消えた。

「私はこれが蘇りの石の本当の使い方だと思いますね。便利な情報ツール」

「ダンブルドアが見たらなんというかしら」

「悪魔の私に道徳を説くつもりですか？」

小悪魔が肩を竦めるが、私は笑った。

「冗談。私もそれが一番賢い使い方だと思うわ」

生きている者よりも死んでいる者の方が多く、生きている者もいずれは死ぬ。

そう思えば死者と言うのは無限に増えていくと言えなくもない。

つまり情報はこれからも限りなく増えていくのだ。

「ダンブルドアは力を恐れていたのかもしれない。権力を持つことを恐れたのと同じように。だから今まで先生を本気で探さなかった。ですがあと1年足らずで死ぬという今、それも言っていられない状況なのでしょう」

小悪魔が机を撫でると上に置いてあった写真や資料が消えていく。

そしてティーカップの中身をグイと飲み干した。

「なんにしても、来年の6月には全てが終わるんです」

「そうね。そして、私たちにとつては始まりとも言える」

私は立ち上がりティーカップを片付ける。

「では、私は館の掃除に戻るわ。また何か面白い情報があったら教えて頂戴」

「ええ、勿論。友達のよしみで」

「そうね、友達のよしみで」

私は時間を止めて厨房へと向かう。

夕食の準備が終わったら、魔法省にお嬢様からのお使いを済ませに行こう。

クイレルの仕事ぶりも見ておきたい気がするし。

私はそのまま時間の止まった紅魔館を歩いていった。

ホグズミード行きが許可された休日朝。

ハリーたち3人は何故かパチュリーと共にフィルチの不審物検査を受けていた。

何故ハリーたちがパチュリーと共に城から出ようとしているか、それは簡単な話であ

る。

玄関ホールに向かう途中で、ハーマイオニーとパチュリーが話し込んでしまい、あれよあれよという間にここまで流されてきただけである。

4人は検査を受けると村までの道のりを歩いていく。

パチュリーの魔術のおかげでパチュリーの周囲は異様に暖かかった。

「ですから幸運の液体による中毒性は麻薬と似た……ハーリー？　なんで私たち外にいるの？」

ハーマイオニーが我に返ったように周囲を見回す。

「何かに取り憑かれてないか？　ほら、ヴォルデモートとか」

ロンは呆れたようにそう言った。

「とにかく何処か落ち着けるところに入ろう。三本の箒なんかどうだろう？」

ハーリーが村まで続く道を歩きながら提案する。

ハーマイオニーがパチュリーに確認を取り、4人は三本の箒に入った。

「懐かしいわね。在学中に来ることはなかったけど」

パチュリーはボソリと呟き、ハーリーたちと共に丸テーブルにつく。

「ハーリーとロンもバタービールでいいわね。ノーレッジ先生はどうします？」

「ワイン。赤でも白でも何でもいいわ」

ハーマイオニーは皆に注文を取ると、カウンターの方に歩いて行った。

「普通気が付かないってことあるか？ まあ随分会話に集中してみたいだけだ」

ロンがハーマイオニーの背中を視線で追いながらハリーに言った。

ハリーは苦笑いを浮かべ答える。

「まあ、わからなくもないよ。経験がある。先生、付き合わせてしまつてすみません」

「気にしてないわ。何処にしようよ、あまり変わらないもの」

数分も経つとハーマイオニーはバタービールの瓶を3本抱えて戻ってくる。

その後ろからこのパブの店主であるマダム・ロスメルタとトンクスがやってきた。

マダム・ロスメルタは盆の上にワインを載せている。

「あまり上物じゃないけど、ごめんよ」

マダム・ロスメルタはワインを置くとカウンターの方へと戻っていくが、トンクスは

そのままハリーたちと同じテーブルに腰かけた。

手にはファイアー・ウイスキーの小瓶を持っている。

「よっ！ ハリー、ロン。久しぶりだね。お友達も一緒？」

トンクスはパチュリーの方を見ながらケラケラと笑う。

「どうやら少しお酒が回っているようだ。」

「トンクス、ダンブルドア先生から何も聞いていないの？」

ハリーがバタービールを飲みながらトンクスに聞くが、トンクスは目を白黒させるだけだった。

「なんでダンブルドアの名前が出てくるのさ」

「トンクス、ここにいるのはパチュリー・ノーレッジ先生よ。魔法薬学の」

「ハーマイオニーがそう教えるが、トンクスは怪訝な顔をする。

「先生？ まだホグワーツを卒業していないような年齢に見えるけど……」

トンクスは赤くなった顔を「ごしごし」と擦る。

パチュリーはトンクスの頭に手を乗せた。

途端にトンクスの赤かった顔が白く戻る。

ハリーには何をしたのか分からなかったが、傍から見た限りでは一瞬で酔いを醒ませたようにしか見えなかった。

「——ッ!? あ、あれ? ……一体何をしたの?」

目をパチュリーとさせながらトンクスがパチュリーに聞く。

「貴方の体からアルコールを適度に消失させただけよ。昼間つから酔っぱらってたら向こうの彼に怒られるわよ?」

パチュリーが店の奥に視線を向ける。

そこにはマダム・ロスマルタと話し込んでいるシリウスがいた。

「シリウス!!」

今気が付いたのか、ハリーは嬉しそうに声を上げる。

魔法大臣がクイレルに替わってから、シリウスの指名手配はすぐに解かれたのだ。

シリウスはハリーの存在に気が付くとマダム・ロスメルタとの会話を打ち切ってハリーたちのテーブルに近づいてくる。

「やあハリー、学校生活はどうだ?」

「んー、まあボチボチだよ」

シリウスは今、魔法戦士となつて死喰い人を捕らえる仕事をしている。

ようは魔法省に雇われている傭兵のようなものだ。

聞祓いより待遇は悪いが、比較的自由に仕事ができるらしい。

なんとも自由な、シリウスらしい仕事と言える。

「シリウスの方はどうなの?」

「最近はおっぱら調査ばかりだよ。連中も最近用心深くなつてきている。相手も馬鹿じゃないってわけだ。……こちらの女性は?」

シリウスはパチュリーを見ながらハリーに聞いた。

女性と言つたのは、パチュリーが Hogwartz の制服を着ていなかったためであろう。

シリウスは少ない情報で、彼女を部外者と判断したわけだ。

「魔法薬学の先生だよ」

「パチュリー・ノーレッツよ」

その名前を聞いてシリウスは目を剥く。

「パチュリー・ノーレッツって、あの『地図と地点』を書いたあのパチュリー・ノーレッツか？」

「あら、懐かしい本の名前が出てきたわね」

シリウスはどうやらパチュリーの書いた本を読んだことがあるようだった。

「シリウスおじさん、ノーレッツ先生を知っているの？」

「彼女自身は知らないが、彼女の書いた本にはお世話になった。あの本がなければ、忍びの地図は完成しなかっただろう」

シリウスはパチュリーとがっしり握手をする。

ハリーはトランクの中に入れてある忍びの地図を思い出した。

確かにあれには想像もつかないような魔法が使われている。

「会えて光栄だ。こんな少女だとは思わなかったがね」

「見た目だけ、少女でしょ？ シリウスが子供の時に彼女の本が図書室にあったという
ハ」とはさけ」

トランクが少し居心地悪そうに身を振る。

急にアルコールが抜けて、まだ落ち着かないらしい。

パチユリーは自らダンブルドアと同期であることを明かし、シリウスにあの本の感想を聞いていた。

そのあとも色々なことが話題に上がりすぐに時間が過ぎていく。

「つと、もうこんな時間か。城まで送るよ。最近は何騒だしね」

トンクスが時計を見ながら立ち上がった。

確かにそろそろ帰った方がよい時間帯である。

ハリーは名残惜しそうにシリウスに別れを告げると、トンクスと共に城への道歩き出す。

「でも、ああやって外で自由に行っているシリウスを見ると、本当に無罪放免になったと実感するわ。いきいきしてるもの」

ハーマイオニーが少し火照った顔で言う。

「バタービールの中には決してアルコールが入っていないわけではない。」

「その点はクイレル様々かな？ 彼が魔法大臣になった次の日には無罪の判決が出てたしね。しかも補償金付きで」

トンクスは嬉しそうに言うが、ハリーたち3人は少し同意しかねるようだった。

「でも、クイレルはヴォルデモートの手下だった。本人は操られていたって言うてるけ

ど」

ハリーが怪訝な声を出すと、トンクスも真面目な表情になる。

「うん、ダンブルドアも警戒してる。でも今のところ不審な動きは全くないんだ。それと一応私の上司だし。産休の申請もすんなり通ったしね」

トンクスはスツとお腹を撫でる。

ハリーたち3人はその様子に驚いた。

「もう子供がいるの!? 夏に結婚式を挙げたばかりじゃないか!」

ロンが大声を出す。

そう、トンクスは今年の夏にルーピンと式を挙げたのだ。

ハリーはてっきりトンクスはシリウスのことが好きなのではないかと思っていたので、夏休みにブラック邸でその情報を聞かされたときは面食らったものだ。

「夜は狼——ゲフンゲフン。なんにしても、今のところいい大臣だよあれは。物分かりますもいいし。なんとあのハゲ頭の——」

「リーアン! 貴方には関係ないわ!!」

突如前方から大声がする。

そこではリーアンとケイティが小さな包みを巡って争っていた。

「あー、女の子って怖いね。私も女の子だけだ」

ネットクレスはまっすぐパチュリィの方へと引き寄せられ、彼女の素手の右手に収まった。

「とりあえず私はこの子をホグワーツの医務室に連れていくわ。ハリーたちはノーレッジ先生から離れないように！ 先生、ハリーたちをよろしくお願い」

トunksはケイティを抱き上げると城の方へと走っていく。

パチュリィはそんなことも気にせずネットクレスを観察していた。

「なんとというか、チープ？」

「あの、先生。素手で触って大丈夫なのですか？」

ハリーは恐る恐るパチュリィに尋ねる。

「素手では触ってないわよ。手のひらに薄く魔力を張っているわ。多分素手で触ったら即死ぬ」

ついてきなさい、とパチュリィは城に向けて歩き出す。

ハリーたちはリーアンを連れてパチュリィの後を追った。

「あのネットクレス、見たことがあります。4年前にボージン・アンド・バークスで」

「そう、確かにあそこの店にお誂え向きな一品ね。こういう呪いは時間が経てば経つほど強力になっていくから。ケイティはどうしてこんなものを持っていたのかしら」

そんなことわかるはずがないとハリーは思ったが、ここには当事者がいるのだ。

リーアンは自分に声を掛けられたと気が付くと少しずつ話し始めた。

「そのことで口論になったの。ケイティは三本の箒のトイレから出てきたとき、それを持っていて……ホグワーツの誰かを驚かすものだって。それを自分が届けなきやいけないうて言つてたわ。そのときの顔がとても変だった……あ、ああ、きつと服従の呪文に掛かっていたんだわ。私、それに気が付かなかった！」

リーアンは体を震わせてすすり泣き始める。

パチュリーは何か言いたげな表情を一瞬浮かべたが、すぐに言葉を飲み込んだ。

レミリアに言われた2つの勢力のバランスを取るといふ言葉を思い出したのだろう。

もうすぐホグワーツの門が見えてくるといふ段階で、城の石段をマクゴナガルが駆け下りてきた。

その顔には相当な焦りの色が浮かんでいる。

「トンクスの話では貴方たち5人が目撃したと……ああ、ノーレッジ先生が一緒でしたか。なんにしても今すぐ上の私の部屋まで来てください」

そこからはマクゴナガルに引率されて城の中を歩いていく。

そしてマクゴナガルの部屋に6人は入った。

「それで、なにが起こったのですか？」

マクゴナガルがパチュリーに聞いた。

パチュリーはリーアンから聞いた話と自分が見た光景を器用に組み合わせ、説明していく。

その間もずっとネックレスを握りしめたままだった。

「なるほど……リーアン、医務室においてください。マダム・ポンフリーが何かショックに効く物を出してくれるでしょう」

マクゴナガルは一足先にリーアンを部屋から出す。

「その問題のネックレスというのは？」

マクゴナガルが問うと、パチュリーは右手を持ち上げる。

マクゴナガルはパチュリーが素手でネックレスを持っているのを見て、目を見開いた。

「確か貴方の話では呪いが掛かっているネックレスだということでしたが？」

「というよりかはこのネックレスそのものが呪いね。素手で触ったら死ぬわよ」

カチャンとネックレスを机に置く。

「先生、ダンブルドア校長にお目にかかれないでしょうか？」

ハリーが何か深刻な表情でマクゴナガルに聞いた。

「ポッター、校長先生は月曜日までお留守です」

「留守!?!」

「そうです、ポッター。お留守です！」

ハリーの憤慨するような叫び声にマクゴナガルがピシツとした態度で返す。

「今回の恐ろしい事件に関しての貴方の言い分でしたら、私に言っても構わないはずですよ」

ハリーは迷ったように視線を泳がす。

だが意を決したのかマクゴナガルに打ち明けた。

「先生、僕はドラコ・マルフォイがケイティにネックレスを渡したのだと思います」

一瞬間が空く。

「どうやらロンとハーマイオニーはあまりハリーの意見に賛同していないようで、そわと体を振っていた。」

やがてマクゴナガルが沈黙を破る。

「ポッター、それは由々しき告発です。何か証拠があるのですか？」

「……いいえ、ですが、今年の夏休みに、僕はこれが売られていた店でマルフォイを見ました。その時にこれを買ったのだと思います。ボージン・アンド・バークスという店です。それに、マルフォイはその店で店主に何かの直し方を聞いているみたいでした」

「マルフォイはボージン・アンド・バークスにその物を持っていったのですか？」

マクゴナガルは少し混乱しているようだった。

「いえ、マルフォイの話から推測するに、持ち歩くと目立つような大きなものだと思います。でもその時に同時に何かを買っていったんです。僕はそれがあのネックレスだと

「マルフォイは似たような包みを持って店から出たのですか？」

「いいえ、先生。マルフォイは店主にそれを店で保管するようにと言いました」

マクゴナガルは何かを考え込むように俯いた。

そして唐突にパチュリーに視線を向ける。

「ノーレッツジ先生はこの件についてどう思われますか？」

いきなり話を振られたにも関わらず、パチュリーは何の動揺もなく答える。

「犯人が誰にせよ、ケイティに直接あの包みを渡したとは考えられないわ。……これは服従の呪文を使い慣れていないと知らないことだと思っただけで、服従の呪文を掛けられ、操られている者でも誰かに服従の呪文を掛けることができるの。つまり何者かを操って違う対象を間接的に服従させることができるってわけ。つまり実行犯を特定するのは限りなく難しいわね」

「間接的な服従の呪文……それは初耳です」

マクゴナガルは明らかに動揺している。

そのようなことを聞いたのは初めてだったからだ。

「それはそうだと思わね。このような呪文の使い方は死喰い人の十八番で、彼らの中でしかやり取りされてない情報ですもの」

じゃあそれを知っているパチュリーは何者なんだとこの場にいる全員が思ったが、口には出さなかった。

「……そういうことです、ポッター。マルフォイだけを疑うことはできません。ホグワーツの城の中での事件ならもう少し考慮しますが、この事件はホグズミードで起きたことです。部外者が入ってこれるあそこでわざわざ生徒を犯人にすることもないでしょう」

マクゴナガル先生はそこまで言うのと部屋を出ていく。

多分ケイティの様子を見に行ったのだろう。

「ノーレッツジ先生、ケイティは大丈夫なのでしょうか？」

ハーマイオニーが心配そうに聞く。

「すぐに処置したから命に別状はないわ。明日には元気に動き回れると思うわよ」

パチュリーは机の上に置いてあるネックレスを無造作にポケットの中に入れてと椅子から立ち上がる。

「今日はもう休みなさい。精神的な疲労というものは放っておくと怪我より恐ろしいものになるから」

そしてマクゴナガルの部屋に3人を残して部屋を出ていった。

「何というか、いつ見ても不思議な先生だよな。ダンブルドアぐらい皺くちやだったらもう少し印象変わるのかな？」

ロンがボソリと呟いたが、ハリーはそれを無視して椅子から立ち上がった。

ここに残っている必要もないだろうということだろう。

3人はそのまま部屋から出て、談話室へと向かった。

2回目のダンブルドアとの個人授業は月曜日の午後8時に行われることになった。

ハリーはガーゴイルに合言葉を言い校長室へと上がっていく。

そしていつものようにドアを叩くと、入るように言われた。

土曜日にダンブルドアが留守にしているというようなことをマクゴナガルが言っていたので、時間通り個人授業があるのかどうかハリーは心配だったが、どうやら杞憂だったようだ。

ダンブルドアはいつものように校長室の中にいる。

「わしの留守中、忙しかったようじゃの。ケイティの事件を目撃したのじゃな？」

「はい、先生。ですが昨日には既に大広間に顔を見せていました」

「彼女は幸運じゃった。ネックレスは皮膚のごく一部をかすただけらしく、手袋に小さな穴が開いておった。首にかけたり、素手で掴んでいたらケイティは死んでおったじやろう。即死じや。そして、何よりの幸運は、あの場にノーレッヅジ先生がいたことじやな」

ハリーはあの時の情景を思い出す。

パチュリーが手をケイティに向けた瞬間、ケイティの症状が一瞬にしてよくなったのだ。

「彼女の処置がなかったらケイティは今頃聖マングに入院しておったじやろう。彼女以上呪いに詳しい魔法使いも居るまい。いや、彼女の知識ほどの分野においても抜き出しておる」

ダンブルドアは話しながらも記憶の準備をしていく。

クリスタルの瓶から記憶を取り出すと憂いの篩の中へと落としたりした。

「先生、ケイティの事件のあとに、僕がドラコ・マルフォイについて言ったことをマクゴナガル先生からお聞きになりましたか？」

「君が疑っているということを先生が話してくださいました」

ダンブルドアは落ち着いた声色で言う。

だがその声には僅かな動揺の色があった。

「それで、先生はどのように考えますか？」

「わしとしてはノーレッジ先生と同意見じゃよ、ハリー。ドラコがボージン・アンド・パークスで何かの修理法を聞いたのと、この件を結びつけるのは難しかろうて。それよりも今は我々の授業に集中するのじゃ」

ハリーは少し不満そうな顔で立ち上がる。

だが、今は授業に集中しなくてはならないというのはもつともな話だ。

ハリーは前回の授業を思い出す。

ダンブルドアの死の予言のことや、ヴォルデモートの分霊箱のこと。

「ハリー、実を言うとなしは既にヴォルデモートの分霊箱に関しては大体のことが分かっている」

「どういうことですか？」

「本来ならば君自身にある程度の予想を立てて欲しかったのじゃが、そんな時間もなからうて。わしは今年の初めから徐々にヴォルデモートに関する記憶を収集しておった。分霊箱がどのようなものなのか目星をつけるために。ハリー、記憶を辿る旅というのは、地道で時間の掛かるものなのじゃ。ことが差し迫ってなかったら、1つ1つをゆっくり見せてもよかったのじゃがのう」

ダンブルドアは机の上に1冊の本を取り出す。

そこに4つの絵柄が浮かび上がった。

ぱつと見た感じ、それは指輪、ロケット、ティアラ、カップに見える。

「この指輪は……この前のスラグホーンの記憶の中でリドルがしていたものですか？」
「よう観察しとつたようじゃの。これはマールヴォロ・ゴントの指輪、ヴォルデモートの祖父の物じゃ。そしてサラザール・スリザリンのロケット、ヘルガ・ハッフルパフのカップ、ロウエナ・レイブンクローの髪飾り。これに合わせてリドルの日記、さらにはヴォルデモートの近くにいるナギニという蛇。わしはこれらがヴォルデモートの分霊箱だと推測しておる」

ハリーは1つ2つと数を数え、わかっている分霊箱の数を数える。

「5、6。つまりもう全ての分霊箱の正体が分かっている？」

「あくまで推測じゃがな。しかし、ここで問題が1つ出てくる。実を言うとヴォルデモートの日記以外何処にあるのか全く分かっておらんのだ」

ダンブルドアは朗らかに笑うが、ハリーには笑える状況だとは思えなかった。

「そこで今日は少しわしの過去を見てもらおうと思っておる。わしと、ノーレッジ先生の関係についての」

ダンブルドアはハリーを憂いの篩へと誘導する。

ハリーは水盆へと顔を付け、そのまま暗闇へと落ちていった。急に目の前が明るくなり、ハリーは立ちくらみを起こす。

そこは9と4分の3番線だった。

ホームには沢山の生徒が汽車へと乗り込んでいる。

「9と4分の3番線」

ハリーの背後から急に声が聞こえた。

そこには今年入学であろう小さな少年が立っている。

ハリーは一瞬それが誰なのかわからなかったが、すぐに11歳のダンブルドアなのだろうとあたりをつける。

ダンブルドアは大きな荷物を引きずって汽車の中へと入っていく。

見送りはないのかとハリーは周囲を見回したが、ダンブルドアの見送りに来ている人は1人もいなかった。

ダンブルドアは通路を歩きながら空いているコンパートメントを探していく。

この時点で同級生の友達はいなかったのだろう。

少々人が少ないコンパートメントも無視してダンブルドアはどんどん奥へ奥へと進んでいった。

やがてダンブルドアは本を読んでいる少女が1人座っているだけのコンパートメン

トを発見する。

少し値踏みするように眉を顰めたが、やがてダンブルドアはそのコンパートメントに入った。

「……、いいかい？」

ダンブルドアが聞くと少女は本から軽く視線を持ち上げて小さく頷く。

何とも不愛想な少女だ。

だが、ハリーはその姿にひどく見覚えがあった。

今のパチュリー・ノーレッジをさらに数歳若くしたら、このような容姿になるだろう。ダンブルドアはパチュリーに声を掛けるべきかどうか迷っていたようだが、読書の邪魔をしては悪いと自分も荷物から本を取り出し読み始めた。

その後は汽車が出発する時間まで会話もなく静かに時間が過ぎていく。

やがて出発間近になったとき、急にコンパートメントのドアが開かれた。

そこには顔を少し緑色にした少年が立っている。

不安そうな表情をしており、ハリーはネビルみたいだと思った。

「あ、あの……、いい？」

少年が恐る恐る聞くとダンブルドアは笑顔で少年をコンパートメントに迎え入れる。

パチュリーに許可を取った方がよかったかとダンブルドアはちらりと顔色を窺った

が、大して気にしていないようだった。

「ぼ、僕……エルファイアス・ドージ。今年からホグワーツなんだ」

「僕はアルバス・ダンブルドア。同じく今年からホグワーツだ」

ダンブルドアという名前を聞いてドージはピクリと反応する。

ハリーは知らないことだが、パーシバル・ダンブルドアがマグルの少年を襲ってアズカバンに入れられたことはそこそこ有名な話だった。

ドージは遠慮がちにパチュリーの方を見る。

パチュリーはこのコンパートメントに自分以外はいないと思っっているかのように、ダンブルドアとドージの話に関心を示さなかった。

ダンブルドアはパチュリーにわからないように小さく肩を竦めて見せる。

ドージはどう反応していいかわからず曖昧に笑った。

急に白い靄に覆われたかと思うと、またスツと靄が晴れる。

時間が進んだのだとハリーは認識した。

既にホグワーツ特急は草原を進んでおり、日も高く昇っている。

ダンブルドアとドージは楽しそうに話し込んでおり、パチュリーは相変わらず本を読んでいた。

しばらくすると車内販売の魔女がコンパートメントの扉を叩く。

「坊ちゃん嬢ちゃんら、何か買うかえ？」

ダンブルドアは定番のお菓子をいくつか買い込み、ドージと分け合った。

そして不意に思いついたのかカエルチョコレートをパチュリーに差し出す。

パチュリーは手に持っているのはなんだと言わんばかりにチョコレートを見つめた。

「ほら、あげるよ。何も食べないとお腹が鳴るぞ？」

ダンブルドアの言葉でパチュリーはようやくそれが自分へ贈られたものだとして認識する。

ダンブルドアの手からカエルチョコレートを手に取った。

「……ありがとう」

ガタゴトという汽車の音で掻き消えそうなほど小さな声だったが、ハリーには不思議とはつきりお礼の言葉が聞こえた。

ダンブルドアも満足そうに頷くとドージと話し始める。

パチュリーはチョコの箱を回したりひっくり返したりして一通り眺めると、中からチョコを取り出し口の中に入れた。

「……………」

口をもごもごとしながらパチュリーは読書を再開させる。

その顔は心なしか嬉しそうだった。

次の瞬間ハリーは暗闇の中を舞い上がり、校長室へと戻ってくる。

「先生、今の記憶は……」

ハリーは先ほど見た光景を思い出し、少し疲れ気味に椅子に腰かけた。

「わしとドージ、そしてパチュリーとの出会いじゃ。ドージとは同じくグリフィンドル寮だったため、付き合いも多かった。じゃがパチュリーはレイブンクローの寮だったため、交流も少なくてのう。なんと彼女の名前を知ったのは、わしが2年生になった時ののじゃよ。それまでわしは彼女の名前すら知らないような間柄だったわけじゃ。ただ同じコンパルトメントに座り、カエルチョコレートあげただけの間柄じゃ」

ハリーはダンブルドアとパチュリーの勧誘に行ったときのことを思い出す。

カエルチョコレート1つ分の仕事はする。

彼女が言っていたのはこれのことだったのだ。

「ノーレッジ先生は今でもダンブルドア先生があげたチョコのことを覚えている？」

「彼女は変わらない。今も、昔もの。見た目も、性格も。彼女にとっては、ホグワーツに入学したことも、つい昨日の出来事のようなものなのかもしれない」

「先生、それは……えっと、大切なことなのでしようか？」

ハリーは、今見た記憶の価値がよくわからなかった。

ダンブルドアの過去というには、あまりにも普通すぎる内容だった。

わざわざハリーに見せる意味が分からない。

「彼女の関心を引くというのはそれはそれは難しいことなのじゃ。彼女が何を考えているのか、どうすれば仲間に引き入れることができるのか。言ってしまうえば、恋のようなものなのかもしれない。もつとも、そのままの意味で捉えるでないぞ？　彼女の心を掴むことが、この先起きる戦いには重要なのじゃ」

ハリーは前回の授業でダンブルドアが言っていたことを思い出した。

彼女が闇の陣営に全面的に協力すれば、魔法界は一晩と持たないと。

彼女自身が、彼女の知識そのものが強力な兵器なのだと、ダンブルドアは言いたいのだろう。

「彼女のご機嫌を取ればいい。そういうことですか？」

「それは違う。難しい問題じゃろうて。友人とよく話し合い、正しい答えを見つければいい。今日はここまでにしようかの」

ダンブルドアは憂いの篩の中から記憶を取り出すと、小瓶へと戻す。

ハリーは今得た情報を整理しつつ校長室を後にした。

「じゃあダンブルドアはノーレッジ先生を口説き落とさせて、そう言ってるわけか？」

誰もいなくなった夜の談話室にロンのそんな声が響く。

「いや、そうじゃないと思うわ。ようは気に入られろってことでしょ？」

ハーマイオニーがロンの勘違いを指摘した。

ハリーはダンブルドアの言葉通り今日の個人授業のことを2人に話して聞かせていたのだ。

「同じだろ？」

「全然違うわ」

ハーマイオニーがびしやりと告げる。

「でもなんでダンブルドアがそのようなことを僕に話したのか、よくわからないんだ。ノーレッジ先生の知識や能力が凄いことは学校中の誰もが知っていることだけど、教師という時点でもうダンブルドアの味方のようなものだろう？」

3人は首を捻る。

ダンブルドアが何を考えているのか、よくわからないといった表情だ。

「私としては例のあの人の分霊箱のほうに気になるわ。特に Hogwartz の創設者に関わる品々は追跡しやすいと思う。どうして例のあの人はそのような目立つものを分霊箱にしたのかしら」

「逆に聞くけど、例のあの人が空き缶に自分の魂を隠すと思うか？」

ハーマイオニーの疑問に考え無しのロンが言った。

だが、不思議とハリーはロンの意見に納得してしまふ。

あのヴォルデモートが何でもないうなものに自分の魂を隠すとは思えないと。

これ以上考えても何かしらの結論は出ないと判断し、ハリーたちは寝室へと上がる。何をしたいのか、何をすべきなのかわからないままハリーは眠りへと落ちていった。

家族とか、幸運の液体とか、旅行とか

パーシーは隠れ穴にある自分の部屋で書類の仕上げをしていた。

クイレルの取り計らいでパーシーは家族と仲直りし、ロンドンからまた隠れ穴へと戻ってきたのだ。

パーシーは羊皮紙を一枚ずつ捲り、綴り間違いがないか確認しながら内容を読み進めていく。

この書類は反人狼法を撤廃させるためのものだった。

これが通れば、人狼でも問題なく就職ができるようになる。

クイレルが推し進めている政策の1つだ。

そもそも反人狼法というのは最近アンブリッジが作った法律であり、撤廃させるのも容易だとパーシーは考えている。

これを通したアンブリッジは、今は生徒虐待の罪でアズカバンに居るのだ。

パーシーは知らないことだが、アンブリッジは既に獄死している。

精神的なものではなく、その場にいた死喰い人に殺されただけだ。

「書類は完璧、大臣が進めている政策にも沿っているし、これが通らないはずがない」

パーシーは満足げに頷くと次の仕事に取り掛かる。

昨年までの魔法省は巫人を毛嫌いしていた節があつたが、今では180度ひっくり返つていふ言つていいだろう。

クイレルは巫人の人権を訴えかけ、人狼や吸血鬼などの地位向上を目指している。

パーシーはクイレルの仕事ぶりやその思想を物凄く尊敬していた。

まさに、パーシーの思い浮かべる完璧な人間の下で仕事ができる。

今のパーシーはそう思うだけでいつでも絶好調だった。

「パーシー？ 夕食はどうするの？」

下の階からモリーの大声が聞こえてきた。

「すぐ行くよ、母さん」

パーシーはすぐさま返事をする。机の上に置いてある資料を綺麗にまとめ下の階へと降りていく。

机には既に料理が並んでおり、アーサーが日刊予言者新聞の夕刊を読みながら席についていた。

「ささ、冷めないうちにいただきますしよう？」

パーシーが机につくとすぐさま夕食が開始される。

去年までパーシーは自炊をしてきたが、やはり母の作る料理には敵わないと、食事を

取るたびに思うのだ。

「あと少して反人狼法が撤廃される。あとは書類を出すだけだ」

パーシーはミートパイを食べながらアーサーに話しかける。

「それは本当か？ ルーピンがさぞ喜ぶだろうね」

アーサーは嬉しそうに頷いた。

「今現在は物騒な世の中だが、クイレルが大臣になってから随分と治安が安定した。彼は今までに類を見ない程まっとうな大臣だよ。魔法省の仕事も随分と効率化が図られてね、こうして家族と夕食を共にできるのも彼のおかげだ」

アーサーは現在魔法省の高級官僚だ。

主に偽の防衛呪文や保護器具などの取り締まりをしている。

「父さんのほうは仕事はどうなんです？」

「……やはり市民の不安に付け込んだ悪党というのは多くてね。毎日てんてこ舞いだよ。この間なんかピクシーの……いや、この話はやめよう。なんにしても、例のあの人を何とかしないかぎり私の仕事はなくならないだろうね」

それに、とアーサーは付け加える。

「フレッドとジョージが売っている闇の魔術に対する防衛術グッズのほうはまだ良心的だよ。あれはちゃんと効果がある。本当にあの2人は商売上手だよ。ニーズというも

のをよくわかつている」

パーシーはそれを聞いて少し苦笑する。

魔法省の役人には2人が開発した魔法具を使っている者が結構いる。

「勿論、効果がないと思われるものがあつたらすぐに取り締まるけどね」

アーサーはモリーのたしなめるような視線を受けて慌てて付け足した。

「パーシー、クイレル大臣は最近はどうなんだい？ 何か変わった様子はなにか？」

アーサーは慎重に言葉を選びながらパーシーに聞く。

パーシーの前でクイレルを悪く言わないようにと、細心の注意を払っているようだった。

「クイレル大臣は相変わらずだよ。誰よりも仕事をこなして誰よりも部下に気を使っている。体調を崩さないかだけが少し心配だけど、クイレル大臣曰く自分の体調一つ管理できない人間が部下を管理できるわけがないって」

アーサーはそれを聞いてほっと溜息をつく。

実をいうとアーサー自身まだあまりクイレルのことを信用してはいないのだ。

ダンブルドアが警戒しろと言っているからである。

そういつた点ではアーサーはスネイプのほうが少しは信用できると考えていた。

少なくともダンブルドアはスネイプを信用している。

たったそれだけの違いだが、騎士団員にとっては大きな違いだ。

「そういえばロンから手紙が届いてました。クリスマスにはハリーと共に帰ってくるぞうよ」

モリーが口を開いた瞬間、玄関の扉が叩かれる。

3人は顔を見合わせ、アーサーが静かに席を立った。

「誰だ？」

アーサーが扉を開けずに警戒したような声で告げる。

「ビル・ウィーズリーとフラー・デラクールだ」

それを聞いてモリーがほっと溜息をつく。

アーサーはまだ警戒を解かずに扉越しに質問をした。

「2人は一番初めに何処で出会った？」

「ホグワーツの大広間横の小部屋。父さん、貴方の一番の望みは？」

「飛行機がどうして浮いていられるか説明することだ。おかえり、ビル、フラー」

今度こそアーサーは警戒を解き、2人を招き入れる。

ビルはパーシーの横に腰かけ、フラーは2人分の食事を用意しているモリーを手伝いに行った。

「こんなご時世なのにグリーンゴッツは大忙しだよ。腹ペコだ」

ビルはグテツと机に突っ伏す。

長い髪が机に垂れ、パーシーは少し嫌な顔をした。

「仕事中に絡まることがないのかい？ 兄さん」

パーシーはビルの髪を払いながら怪訝な声をあげる。

「髪の毛が邪魔な存在だと思うんだったら、パーシーも上司みたく綺麗さっぱりスキンヘッドにしちまえよ。言っておくが好きでこの髪型なんだ、ほっといてくれ」

「お食事でーすよ？」

フラーが2人分のスープを持ってビルの向かい側に腰かける。

ビルとフラーは今年の夏に婚約し、それからというものの交際が続いているのだ。

もつとも、モリーもジニーもハーマイオニーも、この交際にいい顔をしていない。

アーサーは美男美女の良きカップルだと思っっているが、女性にしかわからない事情というものがあるのだろう。

ビルはミートパイを齧りながらスープをすすする。

フラーも食事を取り始めた。

「最近魔法省はどうなんだ？ 日刊予言者新聞ではいい噂しか聞かないが」

ビルが聞くとパーシーが得意げな表情で語り出す。

「絶好調だよ。闇の勢力も次第に弱まってきているし、クイレル大臣が例のあの人を打

ち破る日も近いと思う」

「そりやいい。盛大に潰してくれ。景気が良くなれば銀行の仕事も増える。寝る暇もないね」

「そうは言ってるけど、ちゃんと家には帰ってきてるじゃないか」

「グリーンゴッツに人間用のベッドがあると思うのか？」

ビルは肩を竦める。

元々はエジプトでグリーンゴッツの呪い破りとして働いていたが、不死鳥の騎士団のメンバーになってからはグリーンゴッツの事務員として働いているのだ。

そしてフラーもボーバトンを卒業してからは英語の勉強も兼ねてグリーンゴッツで働いている。

職場では2人は上司と部下の関係だ。

「ニュースにはなっていないが、グリーンゴッツで盗難があったことが最近わかってね。死喰い人のレストレンジの金庫に何者かが侵入した痕跡があったんだ。このことを知っている者はほとんどいない。銀行の信用に関わるからね。こういった事件は闇から闇へさ」

「何か盗まれたのか？」

アーサーは興味ありげにビルに聞いた。

「本人に確認を取ってないからさっぱりさ。肝心のレストレンジは今アズカバンにいるから確認の取りようがない。魔法省もいい仕事をしてくれるよ。こんなことでこつちが迷惑するとは思わなかった」

ビルの言葉にアーサーとパーシーは苦笑する。

「でも、最近ではないですよ?」

フラーが付け足すように口を開く。

「金庫が開けられたのは何か月も前でーす」

「何か月も前だって?」

パーシーが驚いたように聞き返す。

ビルも呆れ果てたように肩を竦めた。

「本当に管理のゴブリンは何をしていたのかって感じだよ。だからこそ、公にはできないんだ。言うのを忘れていたが、このことは内緒だぞ? 特にパーシー、お前は大臣に對して口が軽すぎる」

「気を付けるよ。極力ね」

パーシーはすまし顔で答えた。

「母さん、ごちそうさま。書類の最後の仕上げをしなくちゃならないから、もう上に戻るよ」

パーシーは一足早く夕食を食べ終え、自分の部屋へと上がる。そして書類の確認作業へと戻った。

「調子はどう？ 魔法大臣さん」

私はお嬢様からの手紙を届けるために魔法省の魔法大臣室を訪れていた。

相変わらずクイレルは忙しそうに仕事をしていたが、私が手紙を渡すとぴたりと仕事を止めそれを読み始める。

「ほう、確かに承った」

「お嬢様はなんて？」

「ゴブリンの地位向上を進めろとのこと命令だ。ヴォルデモートのほうと上手く掛け合わないとならないだろう」

クイレルは最近巫人の地位向上を積極的に進めている。

それはお嬢様の命令でもあるからだ、ヴォルデモートからもそう言った政策を取れとの命令を受けているらしい。

「最近、紅魔館の方はどうなの？ ここのところ滅多に帰ることができないからな」

「お嬢様も妹様もいつも通りよ。小悪魔は図書館の管理をしながら魔法の勉強。美鈴さんは私と同じくお使いを頼まれる頻度が増えたわね。パチユリー様は相変わらず Hogwarts で元気にやっているみたいだし」

ふむ、とクイレルは顎に手を当てる。

「それよりも、貴方とお嬢様の関係は何処かに漏れてないわよね？」

「大丈夫だ。ザ・クイブラーという雑誌に私が宇宙人なのではないかという記事が載ったぐらいだな。吸血鬼や人狼ならわかるが、宇宙人とは……どういった見なのだろうな」

ザ・クイブラー、ルーナの父親が編集をしている雑誌だったか。

まあシルエットだけ見るならグレイに見えなくもない。

「あの雑誌は常にそんな感じだからアレでいいと思うわよ。……そういえば、死喰い人のほうはどんな感じなの？ アズカバンを本拠地にして活動しているという話だけど」

「アズカバンは犯罪者の楽園のような場所になっているよ。グリンデルバルドの手下だったものがヴォルデモートの下についてね。既に1つの街のようになっている」

それはなんとも愉快そうな場所に変貌したものだ。

私が3年生の時に訪れたアズカバンは死屍累々だったが、今ではそうではないのだろう。

「中は強力な空間魔法により10倍ほどに広げられていてね。多くの死喰い人がそこで寝泊りしている。夜の闇横丁にある店がアスカバンに支店を開いているレベルだと言え、わかりやすいかな?」

「それでバランスが取れているの? 闇の陣営が一方的に蹂躪する、じゃ犠牲者が増えるとは思えないわ」

私が指摘するとクイレルは不敵に笑った。

「その為の傭兵制度だ。悲しいことに魔法省でまともに戦える人材は闇祓い程度でね。戦闘訓練を何度か実施してはいるが効果があるとは思えない。だったら魔法界中から腕っ節の強そうな魔法戦士を集めるまでだ。シリウス・ブラックなどそのいい例だろう」

傭兵制度。

そう、魔法省は今闇祓いとは別に戦闘要員を募っている。

魔法省の傭兵になるには闇祓いほどの厳しい審査はなく、それこそ腕っ節が強ければ誰でも登録することができるのだ。

そしてその筆頭にブラックがいる。

闇祓いを引退したムーデイも、その傭兵制度に登録だけはしているようだ。

「この2つの勢力がぶつかれば、それこそ国と国との戦争レベルで死者が出るだろう。」

あとは頃合いを見計らうだけだ」

クイレルはお嬢様からの手紙を跡形もなく消失させるとまた忙しそうに仕事を始める。

私は誰かが来る前に立ち去ろうと紅魔館へと姿現しした。

咲夜がいなくなると同時に魔法大臣室の扉がノックされる。

「入りましたまえ」

クイレルが声を掛けるとパーシーが書類を抱えて中に入ってきた。

「クイレル大臣、書類が仕上がりました」

パーシーが机の上に書類を置くとクイレルはその内容を確認する。

「ふむ、いい出来だ。明日にでも反人狼法は撤廃されるだろう。最近家族とはどうかね？」

クイレルはパラパラと書類に目を通すとドンと判子を押す。

パーシーは少し照れながら答えた。

「良好です、大臣。最近朝食と夕食を家族と共に取ってます」

「素晴らしい。このような時代だからこそ、そのような繋がりを大切にせねばならん。」

魔法省の役人たるもの人々の手本となるよう、心がけないといけない」

「はい！ 大臣！」

パーシーはピシツと姿勢を正す。

クイレルは何か思い出したように口を開いた。

「そう……確か闇祓いのニンファドーラ・トンクスの夫が人狼だったか。彼との面識は？」

「父が友人です。リーマス・ルーピンといいます」

パーシーはよどみなく答える。

「優秀な人材と聞いている。もしよかったら魔法省に勤めないかと声を掛けておいてくれ。今はどこも人手不足だ。猫の手も借りたいような状況だからね」

「クリスマスには会おうと思いますのでその時にでも」

パーシーはクイレルに一礼すると魔法大臣室を出ていった。

「優秀な人材は1人でも欲しい。その通りだ。1人でも多く殺し、最後には死んでくれると尚良し」

クイレルは不敵に微笑むと仕事を再開させた。

グリフィンドール対スリザリンのクイディッチの試合が近づいてくるとクイディッチの練習で非常に忙しくなった。

ハリーは今年からグリフィンドールのキャプテンを務めていたので尚更だ。

チームは新学期が始まってすぐにあつた選抜で選ばれたメンバーでチェイサーにケイティ、ジニー、デメルザ、ビーターにピークス、クート、キーパーはロン、そしてシーカーにハリーだ。

チェイサーの3人は連携が取れておりパス回しも非常に上手い。

ビーターの2人はフレッド、ジョージコンビほどの腕はないが、それでも及第点と言えるだろう。

問題はキーパーのロンだ。

ハリーには初めからわかっていたことだが、ロンのプレイには非常にムラがある。

神経質になったり自信喪失になったりと、精神の状態によってキーパーとしての能力がガクンと落ちることがよくあるのだ。

そういう昔からのロンの不安定さが、試合が近づくとつれてぶり返してきていた。

練習中にジニーに何度もゴールを抜かれ、怒りによって次第にプレイが荒くなつてきている。

そしてついに攻めてくるデメルザの口にパンチを食らわせるところまで来てしまつ

た。

「ごめん！ デメルザ。わざとじゃないんだ、事故だよ、事故」

デメルザはふらふらと地上に戻っていく。

「事故じゃなかったらなんだって言うんでしょ？ このヘボ！ デメルザの顔を見てよ！」

ジニーはいち早くデメルザの隣に降り立ち、傷の具合を調べながらロンに怒鳴った。

ハリーも近くへと降り立ちデメルザの怪我を確認する。

幸い唇を少し切っただけのようだった。

「僕が治すよ。エピスキー、唇癒えよ。それからジニー、ロンのことをヘボなんて言うな。君はチームのキャプテンではないんだし——」

「あら、貴方がロンのことをヘボ呼ばわりできないぐらい忙しそうだったから私が代わりに言っただよ」

ブフツと傷が治ったデメルザが嘔き出す。

ハリーも少し笑いかけたがロンのことを思っただけで何とか堪えた。

練習が終わり皆が更衣室を出るとロンが死にそうな顔で眩く。

「僕のプレイ、ドラゴンの鼻くそみたいだった」

ロン自身も自分のプレイの酷さに気が付いているようだ。

「そうじゃないさ。少なくとも選抜した中では君が一番いいキーパーだったんだ。問題は君の精神面さ」

ハリーはロンを励ましつつ城へと戻ったが、談話室までの近道である近道を通ろうとタペストリーを押し開けた時、その奥でディーンとジニーが抱き合いながら激しくキスをしているところを目撃してしまう。

ハリー自身あまり自覚していないことだが、ハリーはジニーのことが好きなのだ。

ハリーはその光景を見た瞬間急に頭に血が上がり、ディーンを粉々にしてやりたいという野蛮な衝動で頭がいっぱいになった。

それはどうやらロンも同じようでズカズカと2人に近づいていき怒鳴りつけるように声を掛ける。

「おいー」

急に声を掛けられて弾かれたようにディーンとジニーが離れる。

ハリーはそれを見て内心ガツツポーズを取ってしまった。

「なんなの？」

ジニーが不機嫌そうな目でロンを睨む。

「自分の妹が公衆の面前でイチャイチャするのを見たくないだけさ！」

「あら、貴方たちが来るまでここには私とディーンしかいなかったわ」

2人が喧嘩を始めるとディーンは気まずそうに視線を泳がす。

「あー……ジニー、談話室に帰ろう」

ディーンは恐る恐るジニーに声を掛けたが、ジニーはつつけんどんにその提案を跳ね除けた。

「先に帰ってて！ 私は大好きなお兄様とお話があるからー」

それを聞いてディーンはおずおずとその場からいなくなる。

ジニーは邪魔はいなくなったと言わんばかりに捲し立てた。

「はつきり白黒つけましょう？ 私が誰と付き合おうと、その人と何をしようと、ロン、貴方には関係ないわー」

「あるさー！ みんなが僕の妹のことをなんて呼ぶか——」

「何て呼ぶの？ 何て呼ぶって言うのよー！」

次第にヒートアップしていくロンとジニーに、ハリーはどうしていいか分からず立ちつくしてしまふ。

「ロン、貴方は自分がまだ誰ともいちゃついたりしないからそんなことを言うのよ！

自分ももらった最高のキスがミュリエルおばさんのキスだから——」

「黙れ！」

「黙らないわ！ 貴方がヌラーと一緒にいるところを私はいつも見てたわ。貴方ったら

彼女を見るたびに頬つぺたにキスしてくれないかって、そう願ってるみたいだった。ほんととなっさけないわ!! 世の中に出て、少しは自分でもいちゃついてみなさいよ! そんなことが出来ただけどね」

ジニーのそんな煽り文句についてロンは杖を取り出す。

ハリーは慌てて2人の間に割り込んだ。

「僕が公衆の面前でやらないからといって——」

ロンがハリーを押しつけてジニーを狙おうとする。

ジニーはロンの言葉を聞いて嘲るようにヒステリックに笑った。

「あら? ピックウイジョンにでもキスしたの? それともミュリエルおばさんの写真を枕の下に入れていいのかしら!」

ついにロンの怒りが爆発し、通路内にオレンジ色の閃光が走る。

その閃光は僅かにジニーを逸れ、壁に跳ね返って通路の奥に消えた。

「危ないわね」

次の瞬間ロンの後ろにパチュリーが出現する。

いきなりのことにハリーたち3人は飛び上がり尻餅をついてしまった。

「こんな狭い通路で呪文を放った馬鹿は誰かしら。怒らないから手をあげなさい」

パチュリーは手のひらの上に先ほどロンが放ったオレンジ色の閃光を『持っている』

どういった原理かまるで理解できなかったが、確かに閃光は手の平の上に留まっていた。

ロンはパチュリーの表情を窺いながら恐る恐る手をあげる。

「正直でよろしい」

パチュリーが手を握ると閃光は霧散した。

「もう少し広いところでやりなさい」

パチュリーは短く告げると音もなく何処かに消え去る。

ハリーが周囲を見回すとジニーもいつの間にかいなくなっていた。

「行こう」

ハリーはロンと共に立ち上がり談話室までの道を歩く。

いきなりの出来事に一瞬怒りを忘れていたロンだったが、次第にまた沸々と怒りが沸

き起こってきたようで、その歩き方もドスドスといった荒いものになっていく。

ハリーの頭の中には愛だの恋だのといった言葉がぐるぐると駆け巡っていた。

「ああいうのを若さって言うのかしら」

誰もいなくなった隠し通路にパチュリーの声が響く。

「年を取らない私にとって、老いも若きもないか」

そして一人納得したように頷くと、今度こそ自室へと姿をくらませた。

次の日になってもロンの機嫌は直らなかつた。

それどころかますます酷くなっているようにハリーは感じる。

ロンはジニーとデイーンを無視しただけでなく、ハーマイオニーをも氷のように冷たい意地悪さで無視した。

それによつてハーマイオニーがわけもわからず傷ついたのは言うまでもない。

ハリーはその日一日中ロンとハーマイオニーを仲直りさせようと努力したが、結局無駄だった。

とうとうハーマイオニーは憤慨して寝室へと去り、ロンは自分にガンを飛ばしたと言つて1年生を怒鳴りつけ悪態をついた末、猛烈に怒り狂いながら男子寮へと歩いて行つた。

その後数日経つてもロンの攻撃性は治まらず、ハリーは頭を抱えることになる。

そして追い打ちをかけるようにロンのキーパーとしての技術が一段と落ち込み、それにイラつくロンはさらに攻撃的になっていく。

まさに負の連鎖と言えるだろう。

土曜日の試合を控えた最後のクイディッチの練習ではチエイサーがロン目掛けて放つシュートを一つとして防げなくなっていた。

完全に自分の失態なのにロンは誰かれ構わず怒鳴り散らし、とうとうデメルザを泣かせてしまう。

「黙れよ。デメルザにかまうな！」

ピーターのピークスがロンに叫ぶ。

ピークス自身あまり体格に恵まれている選手とは言えないが、ピークスの手には重たい棍棒が握られている。

「いい加減にしろ!!」

ハリーは手に負えなくなる前に急いで間に入る。

「ピークス、クラブはブラッジャーを殴るものだ。戻ってブラッジャーを仕舞ってくれ。デメルザ、しっかりしろ。今日のプレイはとてもよかった」

ハリーは急いでロンの周囲から選手を離れさせる。

そしてほかの選手が声の届かないところまで行くのを待つてから言葉を続けた。

「ロン、君は僕の親友だ。だけど他のメンバーにあんな風な態度を取り続けるなら、僕は君をチームから追い出す」

ハリーはロンが激怒して殴りかかってくるのではないかと思つたが、もつと悪いこと

になつてしまった。

ロンは途端に小さくなり、闘志がすっかり消え失せてしまった。

「僕、やめる。僕つて最低だ」

「最低なもんか！ やめるな！」

ハリーはロンの胸座を掴んで引き起こす。

「好調な時の君はどんなシユートでも止めるじゃないか！ 精神的な問題だ！」

「僕のこと弱虫だつていうのか？」

「ああ、そうかもしれない！」

ロンは少し怒つたようにハリーを睨みつけたが、やがて無気力に首を振る。

「代わりを見つける時間がないことは分かつてる。だから、明日はプレイするよ。でも、もし明日僕のせいで負けたら、負けるに決まつてるけど、僕はチームを抜ける」

ロンはフラフラと更衣室の方へと歩いていく。

ハリーにはどうしていいか全く分からなかつた。

次の日の朝、ハリーとロンは2人で朝食を取つていた。

「ロン、何か飲んだ方がいい。紅茶か？ コーヒーか？ かぼちやジュースか？」

昨日のあの一件からロンは亡者のようにどんよりとしており、背中を叩いただけで死

んでしまいそうな雰囲気醸し出していた。

「なんでもいい」

ロンは何とも覇気のない声色で言葉を返す。

「2人とも調子はどうか？」

ロンの最近の態度にすっかり嫌気が差したハーマイオニーは2人とは別に朝食に下りてきたのだが、テーブルにつく途中で足を止め遠慮がちに聞いた。

「最高さ」

ハリーは適当に答えつつかぼちやジュースを用意し、ロンに差し出す。

「ほら、ロン。飲めよ。イツキだ」

ロンは力なくグラスを口元に持っていく。

次の瞬間ハーマイオニーが鋭く叫んだ。

「ロン、それを飲んで駄目よ！」

ロンは驚いたようにハーマイオニーを見上げる。

「なんでさっ？」

ハーマイオニーは逆にロンを見ておらず、その視線はハリーに向いている。

「ハリー、さっきロンの飲み物に何を入れたの？」

「かぼちやジュース？」

ハリーは急いで手に持っている小瓶をポケットに滑り込ませる。

「ロン、危ないわ。それを飲んじゃ駄目よ」

「ほら、イツキだロン」

ハーマイオニーは警戒したようにもう一度叫んだが、ロンは構わずかぼちゃジュースを一気に飲み干した。

「ハーマイオニー、僕に命令するのはやめてくれ」

ハーマイオニーは信じられないといったような顔をしてその場を去っていく。

ロンに少し元気が戻ったようだった。

ハリーは時間を確認しながらロンに言う。

「そろそろ時間だ。いい天気だな。こんなにいい天気なのはラッキーだな。そうだろう？」

「そうかも」

ロンは青い顔をしつつもハリーの言葉に頷く。

更衣室に行くとき既にジニーとデメルザが準備を進めていた。

「ハリー、聞いた？ スリザリンから2人も病欠が出たんですって。ベイジーとマルフォイよ」

「なんだって？ 馬鹿って病気でも発症したのか？」

ジニーの言葉にハリーは驚く。

「さあね。でも、私たちにとっては都合がいいわ」

ハリーはマルフォイの病欠に関して少し怪しむ。

何か変な意図があるように思うのだ。

「怪しいとは思わないか？ マルフォイがプレイしないなんてさ」

ハリーが声をひそめてロンに聞いた。

「僕ならラツキーと思うけどな。ベイジーっていったら向こうの得点王だ。あいつとは

対抗したいと思わないし——ちよつと待てよ」

ロンはピクリと動きを止める。

「どうした？」

ロンは何かに気が付いたように声を落とし、興奮を押し殺してハリーに言った。

「まさか君……今朝のかぼちやジュースって……」

「何言ってるんだ？ 今朝のかぼちやジュースに幸運の液体なんか入ってないぜ？」

ハリーは不敵に笑う。

ロンはその笑顔で全てを察したように表情を明るくし、シツシツと笑った。

「人が悪いぜハリー、行ってくる！」

ロンは意気揚々とピッチに出ていく。

ロンは完全に幸運の液体を飲まされたと勘違いしていた。

パチュリーの調合法を使えば幸運の液体を作るのもそう難しい話ではない。ただ材料が厄介なだけだ。

「……ほんと、ロンってわかりやすいよな」

ハリーは頭を掻きながらピッチへと出ていく。

観客席は既に生徒で一杯で、ピッチには選手が並んでいる。

どうやらハリーが一番最後だったようだ。

「キャプテン、握手」

ハリーはスリザリンのキャプテンとギリギリと握手を交わし、ひとしきりガンを飛ばしあうとスツと離れる。

その様子を見てマダム・フーチはホイッスルを啜えた。

「さあ箒に乗って！」

ホイッスルが鳴り響き、選手たちは一斉に地面を蹴る。

グリフィンドール対スリザリンの試合が始まった。

結局その試合は250対0でグリフィンドールの大勝利で終わった。

ロンはスリザリンからの攻撃を全て防ぎ切り、まさしく絶好調だった。すっかり自信を取り戻したロンは鼻歌を歌いながら着替えを済ませる。

そこに不意にハーマイオニーが入ってきた。

「ハリー、お話があるの」

ハーマイオニーは決心したようにハリーに声を掛ける。

「貴方も知ってるでしょ？ アレを試合で使うのは違法よ」

「だったらどうするんだ？ 僕たちを警察に突き出すのか？」

ハーマイオニーの言葉にロンがぶつきらぼうに言う。

「何の話をしているんだ2人とも」

ハリーがニヤけた顔を隠しながら言った。

「朝食の時にロンのジュースに幸運の液体を入れたでしょ？ フェリックス・フェリシ

スよー！」

「入れてないよ」

「入れたわ！ だから何もかもラッキーだったのよ。スリザリンの選手は欠場するし、

ロンは全てセーブするし！」

ハリーは今度こそ隠さずにニヤリと笑う。

「ハーマイオニー、一度ゆっくり幸運の液体に必要な材料を考えてみるんだ。少し魔法

薬っていうものが身近になりすぎてないか？」

ハーマイオニーはブツブツと指を折りながら材料を暗唱していく。

「その中で生徒が手に入れられそうなものは？」

「ないわ。あ……」

ハーマイオニーは気が付いたように手をダランとさせる。

「僕が入れたとロンに思わせたかったんだ。僕は幸運の液体を持ってないし、材料だつて手に入らない。ノーレッツジ先生も言っていただろう？ ホグワーツで材料を揃えるのは不可能だつて」

ハリーはロンを見る。

ロンも愕然としたような表情をしていた。

「ラツキーだと思ひ込んで、君は全部のシニートを止めた。気持ちの問題さ！ 君はやればできる！」

ハリーがロンの背中を叩くと、ロンはにっこりと微笑んだ。

「どうだ！ ハーマイオニー！ 助けなんかなくなつたつて僕はゴールを守るんだ!!」

ロンは笑顔で更衣室を去っていく。

更衣室に取り残されたハリーとハーマイオニーの間に気まずい沈黙が走つた。

「じゃ……。それじゃあ、パーティーに行こうか？」

「行けばいいわ！」

ハーマイオニーは目に涙を浮かべて叫ぶ。

「ロンなんて、もう……うんざりよ！ 私が一体何をしたっていうの？」

ハーマイオニーは嵐のように更衣室を去っていく。

ハリーにはどうしていいか全く分からなかった。

「こういう時、咲夜なら何て声を掛けるんだろう……」

ハリーは更衣室で一人ぼつりと呟き、その答えが一生分らないものだど気が付くと少し項垂れて更衣室を後にした。

「へっくちん」

夜早く起きて図書館の掃除をしていると変なクシャミが出た。

誰かが私のうわさでもしているのだろうか。

棚の上に薄く積もった埃のせいかもしれない。

「随分可愛らしいクシャミですね」

聞こえていたのか小悪魔がクスクスと笑った。

私は少し恥ずかしくなり咄嗟に顔を背ける。

「少し棚の上が埃っぽくてね」

適当に誤魔化して私は下へと戻る。

「今日は随分と早起きですね」

「お嬢様と出かけるからね。美鈴さんに留守番を頼むけど、貴方も一応警戒しておいて」
そう、今晩はお嬢様と少し出かける予定なのだ。

一緒に出掛けるのは久々なので少し浮かれていると自分でも思う。

「そうですか、いつ頃戻るぞ予定で？」

「日が昇る前には戻ってくるわ」

私はもう一度クシヤミが出ないように棚の上の埃を全て消し去り、図書館を後にする。
そしてお嬢様の夕食を準備するために厨房へと向かった。

「そろそろ向かいましょうか。日も完全に沈んだしね」

夕食を取り終わり外出用の服に着替えるとお嬢様は改めて私に言う。

お嬢様は周囲に妖力を放出し、部屋の中を力で満たす。

「では、参りましょう」

私はお嬢様に触れ、その妖力を使って姿現しをした。通常、姿現しで飛べる距離には限りがある。

遠くへ飛ばば飛ぶほど多大な魔力が必要で、バラける確率も高くなるのだ。

だが、もし無尽蔵に力があり、針の穴に糸を通すような精度があれば地球の反対側にも行ける。

膨大なお嬢様の妖力で空間を捻じ曲げ、私とお嬢様は東の端、日本まで飛んできたのだ。

バラけることなく無事日本についたことを確認し、私は時間を止める。

流石に数百メートル単位で場所がズレることが予想できたので、出た場所は上空だ。

「さて、視察視察」

お嬢様は一瞬で地面まで下降していく。

私は姿現しでそのあとを追った。

「おお、まさに日本って感じの場所ね。瓦屋根に木造住宅」

お嬢様は止まった時の中を歩いていく。

「はい、ここは二年坂と言いまして、日本の伝統的な建物が多い場所です」

私は頭の中で日本に関する情報を思い出しながらお嬢様に説明する。

昨日の朝、寝る前に突然お嬢様が日本に視察に行きたいと言いだしたのだ。

視察とは言っているが、お嬢様の様子を見る限り小旅行をしたいただけのように見える。

だが、お嬢様が望むなら、私はそれに全力で付き合おう。

「日本の建物は全部こうなの？」

「いえ、最近は西洋風の街並みも多くなってきたらしくて」

「大戦の影響ね……」

お嬢様は感傷的に呟く。

「あの……多分ペリーが日本を開国させたからだと思うのですが……」

「……そう、開国よ！ 開国。うん」

どうやらお嬢様の知識には結構偏りがあるようだった。

お嬢様はそんなことはお構いなしに二年坂を上っていく。

「店はどこも閉まつてるわね。不況？」

「オイルシヨックでしようか？」

いや、どう考えても営業時間外だ。

懐中時計を確認すると、既に深夜と呼べるような時間帯になっている。

二年坂を過ぎると三年坂だ。

「ゆどうぶ、でいいのかしら。新種の豆腐？ そもそも豆腐ってなんで豆腐なのかしら

ね」

お嬢様は建物に掛かっている木の看板を見ながら不思議そうに言った。

「それは空は何故青いのか、とか、そういう話でしょうか？」

「いや、そうじゃなくて……まあ難しいからいいわ」

三年坂をまつすぐ上がっていくと五条坂近くにぶつかり、清水寺という文字が多く見受けられるようになった。

「咲夜、ここをまつすぐ上がれば清水の舞台に行けるそうよ。しかも英語で案内が書いてあるわ。親切ね。イギリスには日本語の案内なんて空港ぐらいにしかないのに」

「この松原通をまつすぐですね。そういえば今更なのですが、京都でよかったのですか？」

「だって都を見た方がいいじゃない。……ん、日本の都って江戸に移ったんだっけ？」

「随分前のことだと記憶しているのですが。現在の首都は東京です。京都は都市部は発展していますが、歴史的な建物が多く、特に今歩いているこの道など数百年は変わっていないかと」

へえ、とお嬢様は軽く頷いて坂を上がっていく。

「これがかの有名な五重塔？」

そして道が突き当たる頃には大きな塔が見えてきた。

「前方にありますのが仁王門、その奥が西門、そして五重塔ではなく、あれは三重塔ですね。右から回り込みましようか。そろそろ清水の舞台が見えてくるはずです」

「嫌に詳しいわね」

「実は最近勉強しまして」

そう、小望月幾望を演じる時にボロが出ないようと、日本の有名な観光スポットの情報を調べておいたのだ。

まさかこんなところで役に立つとは思ってもみなかったが。

「ふうん、暇なのね」

お嬢様は冗談交じりに笑う。

「ええ、暇すぎて昨日など1日に30時間も寝てしまいました」

私も軽く茶化して答えた。

三重塔をぐるりと回り込むように進むと次第に木材を組み合わせて土台にしている大きな建物が見えてくる。

清水寺の本堂だ。

「あちらが、かの有名な清水の舞台でございます」

「あちらがかの有名な清水の舞台？ 意外ね。もつと断崖絶壁にあるのかと思ってた」

お嬢様はふわりと飛び上がると本堂に着地する。

私も空を飛びそのあとを追った。

「あら、上から見たら結構あるわ。どれぐらい？」

「そうですね……目測12メートルと言ったところでしょうか」

私は地面を覗き込み大体の高さを測る。

お嬢様は何の躊躇いもなく地面へと飛び降りた。

そのまま放物線を描きながら落ちていき、普通に着地する。

私もスカートを押さええながらその後を追い、やはり何の問題もなくお嬢様の横に着地した。

「……」

「……」

お嬢様と私の間に沈黙が走る。

「これ、飛び降りたらどうなるんだったっけ？」

「確か願掛けのようなものだったかと。神を信じて飛び降りれば命は助かり願いが叶う、みたいな」

「じゃあ神を信じていない私たちは今死んだことになるのかしらね」

「私はもう既に一度死にましたけどね」

お嬢様は軽く服を正すと水場の方へと歩き出す。

音羽の瀧と呼ばれる場所だ。

「お嬢様、お気を付けてください。流れ落ちているのは聖水です」

「違うわよ。聖水と清水は全然別物。同じ物にしてしまつてはいけないわ」

お嬢様は階段を上がり柄杓を持つと、空中で止まつている水を器用に掬う。

そして静かにそれを一口飲んだ。

「ここの清水は黄金水とか延命の水と言われているの。こういった単語に身に覚えはない？」

「黄金……延命……賢者の石ですか？」

「そう、よく知っていたわね。グリフィンドールに10点」

お嬢様は冗談めかして柄杓を杖のように振る。

「昔は本当にそのような効果があつたんでしょね。時代が流れるにつれて効果が薄れてきた。私はここの源泉には賢者の石が埋まつていると考えているわ」

私もお嬢様から柄杓を受け取ると、水を掬い一口飲む。

その水に何か力を感じることはなかったが、少し感慨深い気持ちになった。

私は柄杓を綺麗にすると元あつた場所に戻す。

「誰かが賢者の石を埋め込んだということですか？」

「それか、自然発生したという可能性もあるわ。……悪いわね、少し持つてくわよ」

お嬢様は本堂の方へ声を掛けると小瓶に清水を入れる。
そしてしっかりと蓋をした。

「さて、視察はこれで終了。目的も果たせたしもう帰りましょうか」
「かしこまりました」

私はお嬢様の手を取るとイギリス上空へと姿現しする。

そこから位置を微調整し、紅魔館のお嬢様の部屋へと出現した。

私は時間停止を解除し、お嬢様が着ている外套を受け取る。

お嬢様は大きく伸びをすると椅子に腰を下ろした。

私はお嬢様に紅茶をお出しし、自分は1歩下がる。

「いきなり日本にいったら戸惑うかしらね。そもそも咲夜、貴方日本語喋れる?」

「日常会話でしたら。……一番心配なのは美鈴さんでしょうか」

「美鈴は大丈夫よ。漢字ができるのなら日本語もできるわ。きつと」

それはどうなのだろうか。

中国語と日本語では随分違うように聞こえるのだが。

お嬢様は紅茶を一口飲み、先ほど清水を入れた小瓶を取り出す。

そしてそれを虚空へと消し去った。

「そういえばパチュリーは元気でやっているかしら」

私はホグワーツのある方向を見る。

そういえば私も数か月ほどホグワーツには行っていない。

今のような大切な時期に学校になど行っている場合ではないことは分かっている。

だがここのところ5年間ほど1年の大半を学校で過ごしていたので、少々違和感があつた。

「さて、もうすぐクリスマスよ。盛大にパーティーしなくちやね」

「はい、最後ですので盛大に」

私は紅茶を片付けるとお嬢様に一礼し、部屋を後にした。

クリスマスマスパーティーとか、分霊箱とか、要求とか

クリスマスマス休暇に入る1日前の夕方、大広間に多くの蝙蝠が飛び込んだ。

生徒たちは一瞬何が起こったか分からなかったが、その蝙蝠たちはまっすぐ特定の人物の元へと降り立つ。

1匹はダンブルドアへと、もう1匹はマクゴナガルへと。

その他にも多くの職員のもとへ蝙蝠が降り立っていく。

ハリーは何事かと教職員テーブルを見たが、そのうちの数羽がハリーの前へと降りたつた。

生徒の一部から悲鳴が上がるが、ハリーはその蝙蝠の足に掴まれた手紙に気が付く。

1匹はハリーに、ほか数匹はロン、ジニー、ハーマイオニー宛てだった。

「伝書蝙蝠？ そんなの聞いたことないけど……」

ハーマイオニーが少し警戒しながら手紙を受け取る。

手紙を配達し終えた蝙蝠たちは隊列を組んで夜の闇へと消えていく。

ハリーたちは顔を見合わせつつも、手紙の差出人を確認した。

手紙には封蝋がしてあり、そこには厳つい紋章が刻印してある。

ハーマイオニーはその紋章の模様の中にスカレットの文字を確認した。

「これ、レミアリアさんからじゃないかしら。ほら、ハリーの手紙の紋章も同じ」

ハーマイオニーは極力ロンを見ずにハリーに教える。

ロンはクイディッチの試合が終わった時からラベンダーと付き合っており、そのせいもあって現在2人は喧嘩中なのだ。

「とにかく開けてみよう」

ハリーは封蝋を破り手紙を取り出す。

そこには1枚のカードが入っていた。

『紅魔館で開かれるクリスマススパティーへご招待致します。12月24日午後10時にこの招待状をお持ちください』

「招待状みたいだ」

ハリーはちらりとロンの顔を見る。

どうやら全く同じものが送られてきたようだった。

ハーマイオニーは顔を覆って驚いている。

「まあ、どうしましょう！ 一昨年のドレスローブが着れるとは思えないし……」

「この招待状をお持ちくださいってどういうことだろう？」

ハリーが頭を捻っているとハーマイオニーが教えてくれた。

「これ、ポートキーになってるわ。多分クリスマスはこの時間になると発動するものだと思う」

ハーマイオニーはすっかり行く気になってるようだった。

ハリーは招待状をもう一度読み、裏返したりして調べた後にローブの中に仕舞い込む。

行くかどうかはクリスマス休暇に隠れ穴に行つたときにも考えよう。

ハリーはもう一度教職員テーブルの方を見る。

ダンブルドアは面白いものでも見るかのように招待状を持つて微笑んでいる。

マクゴナガルは怪訝な顔をし、ハグリッドは何故俺まで？　と言つた顔をしていた。

そのほかにもスネイプやトレローニーなど、結構多くの職員が招待されていることが分かる。

ハリーが一番驚いたことは、パチュリーも招待状を受け取つていたことだろうか。

「これ凄く行きたいんだけどママが許可するかな？」

男子寮の寝室で、ロンがベッドに寝転がりながら招待状を見ている。

あとでわかつたことだが、ネビルも招待状を受け取つたようだ。

「ばあちゃんはきつといいって思う。ばあちゃんはスカレットさんのことを凄

く気に入っていたし」

ネビルがまさに夢心地だと言わんばかりに答えた。

ハリーは目を瞑りパーティーの様子を想像してみる。

きつと物凄いパーティーに違いないと、ハリーは思った。

だが、少し気にかけていることもある。

「レミリアさん、咲夜のことはどう思っているんだろう？」

ハリーがぼつりと呟くとロンとネビルの顔が少し暗くなる。

「ハリーは夏に彼女の館に行ったんだろ？ どうだったんだ？」

「殆ど意識がないような状態だったって言っただろう？ 今思えば、流されるままに行

動してた気がする」

「そうじゃなくて、建物の内装とか」

ハリーは小悪魔と一緒に歩いた廊下を思い出した。

「なんというか……ホグワーツを赤く豪華にして3回ぐらい振じったような感じかな」

ハリー自身うまく説明できたとは思えなかった。

ロンとネビルも首をかしげている。

「でも、パーティーをするのだとしたら大きなホールを使うんだと思うし、僕はそこには行ってない」

「そうだよな」

ロンは大きく伸びをし、招待状をトランクに投げ込む。

ハリーも招待状を仕舞い込むとベッドで眠りについた。

「勿論いいですとも。私もお父さまも、騎士団メンバーは全員受け取っているそうよ」

隠れ穴に帰ってロンは開口一番にクリスマスマスパーティーのことを聞いたのだが、モリーから返ってきた答えは予想外のものだった。

その時隠れ穴にはモリーの他にビルとフラーがいたのだが、皆招待状を持っている。

「騎士団員全員ということは、シリウスも？」

「ええ」

ハリーはほっと安堵する。

つまりは主催者がスカレット家になっただけで、いつも通りのクリスマスが過ごせると思っただからだ。

「さあ、ロンもハリーもローブを新調しないかね。一昨年から比べるともう20センチは大きくなっているでしょう？」

モリーは嬉々としてロンの肩を叩くが、ロンは何か思い詰めたような顔をした。

「ねえ、ママ。このローブ、少し大きくできないかな?」

ロンは荷物の中から深いブルーのタキシードを取り出す。

モリーは少し眉を顰めた。

「貴方に買い与えたローブってそんな立派なものだったかしら」

「これ、咲夜が仕立ててくれたやつなんだ。勿論、無理ならそれでいいんだけど……」

ロンは少し目を伏せる。

モリーはロンの肩を優しく抱いた。

「大丈夫。少し大きくすればまだ着れるわ」

「なんだよ。やめろよなそういうの。弄れないじゃないか」

「あのオンボロフリフリのほうが受けがいいぜ兄弟」

突然バチンと大きな音がしてフレッドとジョージが姿現ししてくる。

そして交互にロンの髪の毛を滅茶苦茶にした。

「やめろよ! 店はいいいのか?」

ロンは髪を押さえつけながら双子に問う。

フレッドが窓の外を指さした。

「見る。もう日が沈んだ。このご時世日が沈んだ後に出歩く奴なんていないぜ」

それはもつともだとハリーは頷く。

とくにフレッドとジョージの店は子供を対象としている。あまり遅い時間まで営業していても意味がないんだろう。

「それにうちは基本的にはふくろう通信販売だからな。客の殆どはホグワーツだ」
ジョージが答えた。

2人の手にもしつかりと招待状が握られている。

どうやらレミリアは多くの人間をパーティーに誘ったようだった。

「さあ、夕食にしましょう。すぐにお父さまとパーシーも帰ってくるわ」

「パーシーだって!？」

フレッドとジョージが同時に声を上げる。

いや、2人だけではない。

ロンも、そしてジニーも愕然とした顔をモリーに向けていた。

「あの石頭が帰ってくるのか? どういう風の吹き回しさ?」

「とつくに仲直りしました。ほら、運んで頂戴」

モリーの言葉にフラワーがいそいそと料理の配膳をしていく。

ロンはどうしていいか分からないようにハリーと顔を見合わせる。

まさに驚くことが続いていると言わんばかりの表情だ。

「何というか、幸運の液体効果がまだ続いているのかな?」

ロンがスープレの器を運びながらハリーに聞く。

「そんなはずはないよ。だって盛ってないんだから」

ハリーは軽く肩を竦める。

「お帰りだわ。ここに任せるわよ！」

モリーは台所の指揮をフラーに任せて玄関口へと駆けていく。

そして数秒ほど扉越しにやり取りを交わし、アーサーとパーシーの2人を家の中へと入れた。

「うわ、ほんとに一緒に帰還だ」

ジニーが小声で呟く。

確かにアーサーとパーシーは親しそうに話しながらマントを脱いでいる。

「やあみんなお揃いじゃないか！ ハリー、よく来た」

アーサーはハリーを見つけると朗らかに笑い、テーブルについた。

「母さん、先に鞆を上置いてきます」

パーシーはモリーに微笑むと軽快に駆け上がっていく。

あまりにも変わり果てた三男を見てフレッドは軽く口笛を吹いた。

「ありや一体誰だ？ あのカチンコチンに何があつたらあなるんだよ」

ジヨージはポカンとした表情をしたままそう唸った。

パーシーは一分としないうちに下に戻ってきて席につく。ハリーとロンも椅子に腰かけた。

「皆スカーレット氏からの招待状をもらったようだね。魔法省にも多数舞い込んでそりやてんでこ舞いだった。魔法省の事務所は蝙蝠が飛ぶようにできていないからね。特に昇降機から何匹ものオオコウモリが出てきたときなんか隣にいた女性職員が倒れてしまつて」

アーサーは全員が着席したのを見計らつて食事を始める。

やはりアーサーとパーシーの2人も招待状を受け取っているようだった。

「ようパーシー、あのハゲの調子はどうか？」

フレッドがパーシーを煽るようにそういうが、パーシーは微笑みながら首を振るだけだった。

「クイレル大臣を侮辱しようと思うんだつたら言葉を選んだ方がいい。あの人はご自分で禿げていることをジョークに上げるぐらいだ」

「そいつはクールだ。ダンブルドアみたいなやつだな。ジョークがどうあるべきかよくわかっている」

ジョージはニヤリと笑う。

他人の特徴を上げて笑うよりも自分の特徴を上げて笑わせる方が何倍も価値がある

とわかつているのだ。

「最近魔法省はどうなの？ 死喰い人は？」

ハリーはアーサーに聞いた。

「忙しいかぎりだが、状況は今年の夏に比べれば全然よくなってきた。全体の状況に関してはパーシーの方が詳しいだろう」

アーサーがパーシーに話を振る。

パーシーはパンをもしやもしやと食べながら口を開いた。

「情勢は安定してきているよ。ようやく各局が新しい政策に慣れてきたようですね。仕事も効率化が随分図られてきている」

「だめだ。全然変わってねえ」

ジョージがぐでつと肩を落とした。

その様子にパーシーは首をかしげる。

「なんにしてもクイレル大臣は素晴らしい。誰よりも献身的に働いて、そして何より人を思っている」

ハリーは全く変わっていないというジョージの言葉の意味を理解した。

相変わらず大臣にぞつこんで、その人物にとことん振り回される、そういう意味だろう。

大臣が悪い人間だったらパーシーも悪い人間になり、大臣がいい人間だったらパーシーもいい人間になる。

物凄い流されやすい人間なのだ。

その後は各自が自分たちの近況を順番に話していく。

ウィーズリー・ウィザード・ウィーズは大繁盛しているらしい。

グリーンゴッツは相変わらず忙しいが、魔法省との連携もうまくいつているようだ。

ハリーにはグリーンゴッツと魔法省が何故連携しないといけないのかわからなかったが、銀行と政府は切っても切れない間柄にあるものだ。

「ホグワーツはどうなんだ？ 変わったことはないか？」

アーサーはハリーとロン、ジニーを見ながら聞いた。

「別に普通よ。ちよつと危険な薬が流行ってるけどね」

危険な薬という言葉にその場にいる全員が何かしらの反応を見せる。

ハリーが慌てて言葉を付け加えた。

「魔法薬ブームなんだ。みんな警戒してムーディみたいになってる」

ハリーはパチュリーのことから順に説明をしていく。

凄い人が教師になったということと、その先生が開発した調合法がホグワーツで流行っているということを話した。

「そんな危ない授業……ダンブルドアは何も言わないの？」

モリーは怪訝な声を出す。

「ダンブルドアには一言言いたいね。なんでそんな面白そうな先生を僕らが卒業した後
に持つてくるんだよ！」

フレッドが冗談半分で怒った。

ジョージもブーブーと不平等だと訴える。

「そういう問題じゃありません！」

モリーが怒鳴った。

「だがね、モリー。その先生は便利な方法を教えたただけであって、それで問題を起こせと
言ったわけじゃない。そうだろ？ ハリー」

「はい。それにきちんと解毒薬の調合法も共に教えています。」

解毒薬という単語にパーシーがピクリと反応した。

「先ほどイモリ年の生徒には真実薬も教えていると言ったね。その解毒剤も教えてい
るのかい？」

「ん？ うん、そうだよ。じゃないと今頃ホグワーツじゃ暴露大会だ」

ロンがハリーの代わりに答える。

パーシーの言いたいこと理解し、アーサーも顔を顰める。

「真実薬の解毒剤だって？ 真実薬に解毒剤なんてあるのか？」

「あることにはあるよ、父さん。でも調査するのが物凄く難しく、今ではホラス・スラグホーンにしか調査できないと言われている」

ビルは難しい表情をしながら言う。

もし真実薬の解毒剤が生徒でも作れてしまうほど簡単な物だったら、真実薬を用いた証言は無効になると言えるだろう。

数秒全員が何かを考え込むように沈黙する。

その後は何事もなかったかのように話題を変え話を続けた。
触れてはいけない話だと、全員が察したのだろう。

クリスマスパーティー前日、私はパーティーホールの準備を進めていた。

私は机を一つずつ持ってきて会場に設置していく。

魔法でテーブルを出現させることもできるのだが、魔法で作った道具ではあまりに品がない。

美鈴さんは運んできたテーブルにクロスを掛けていつている。

小悪魔は結界を何重にも張りなおし、ポートキー用の設定を組み込んでいた。

「結局何人呼んだんだっけ？」

美鈴さんが会場の端から大声を張り上げる。

「50人ぐらいですよ」

「じゃあいつもと規模は変わらないんですね」

いつもならマグルの世界の富豪や首相なども呼ぶのだが、今回は魔法界の人間を多く呼んでいる。

お嬢様には何か考えがあるようだが、今年で最後と思うと少し寂しい気がする。

私はテーブルの配置を終え、小悪魔はテーブルに料理を出現させるための魔法を掛けていった。

会場を飾り付けるのが普通なのかもしれないが、無駄な装飾は逆に品を悪くする。

「明日のパティーには誰を呼んだの？」

「魔法省、ホグワーツ、騎士団から大勢です」

「なんて曖昧な」

美鈴さんの問いに私は答えるが、人名を挙げ始めるとキリがない。

紅魔館で開かれるパーティーは立食形式なので人数をきつちり把握する必要はないのだ。

「ポートキーの設定終わりました。でも大丈夫なんですか？　こんなに多くのポート

キーを使つて。魔法省にバレませんか？」

小悪魔が魔導書を抱えながらこちらへと近づいてくる。

「大丈夫よ。全部魔法省公認のものだから。別に非合法的なパーティーを開こうつてわけじゃないし」

「魔法省に身内がいるとやりたい放題ですね」

小悪魔は笑うが、そう簡単な話でもない。

クイレルとお嬢様の繋がりは極力隠さないといけないのだ。

「クイレルが色々と手を回してくれたのもあるけど、ちゃんと正規のルートで申請を通したわ」

「へえ、事務仕事は私にはさっぱりだ」

うがー！ と美鈴さんは床の上を転がるが、美鈴さんも事務仕事はできるはずだ。

私がいなかった時代やホグワーツにいた頃は美鈴さんがそのような仕事をやっていった。

「それじゃあ私は明日のパーティー用の料理を作ってくるわ。美鈴さんはこのまま会場の準備を続けてください。小悪魔は館にいる妖精メイドを集めて。今の時間が4時だから……5時までに頼むわ」

私は一度会場を離れて厨房に移動する。

そして時間を止め、かたっぱしから食材を調理し、出来上がった料理の時間を停止させて転送用の棚に並べていった。

止まった時間の中で20時間ほど調理をし、ようやく全ての料理を作り終わる。

その頃には厨房の中は出来上がった料理で溢れかえっていた。

「ちよつと作りすぎたかしらね」

夢中で料理していたせいかわ何時もの倍以上の料理が目の前に並んでいる。

まあ、作ってしまったものは仕方がない。

料理がなくなったらすぐに補充されるように魔法を組み直し、私は時間を確認した。

時間を止めて料理をするといっても料理の過程でどうしても時間停止を解除しない

といけない時がある。

懐中時計は4時55分を指していた。

もうすぐ小悪魔と約束した時間だ。

私は厨房の片づけをし、パーティーホールへと戻った。

そこには既に多くの妖精メイドが集まっている。

その中心には小悪魔がおり、手には板チョコを持っていた。

どうやらチョコで釣ってきたようだ。

「咲夜、集めておきましたよ。はいみんな、整列してください」

ワイワイガヤガヤと妖精たちが小悪魔の周りに集まっていく。

私は小悪魔の横に立ち、杖を高く上げた。

「美鈴さん、小悪魔、しつかり目を瞑ってください」

私が声を掛けると2人はしつかりと目を瞑る。

「はいはい、みんな注目！」

私は全員がこちらを向いたのを確認し、自分もしつかり目を瞑って服従の呪文を掛けた。

私がゆっくり目を開けると妖精メイドたちは虚ろな目をして立っている。

これはパチュリー様が改良したもので、私は目を瞑っているので分からないが、杖の先がピカッと光ってその光を見たものは服従の呪文に掛かるといふものだ。

ようはメン・イン・ブラックが使っているアレと似たようなものである。

「よし、みんな無事服従の呪文に掛かったわね。明日のパーティーでは私が陰から指揮を執るわ。皆私の言う通りに動いたらいい。たったそれだけでいいの。幸せでしょう？」

妖精メイドは先ほどのぐちゃぐちゃな配列はどこへやら、1センチの狂いもなく整列し、私に敬礼する。

私は妖精メイドたちの時間を停止させた。

「妖精メイドたちの保存は終わったわ。明日のパティー1時間前に解凍すればいいと思う」

「便利ねえ」

美鈴さんがつんつんと妖精メイドの頬をつつく。

人権のへつたくれもないが、本人たちも納得しているので何の問題もない。

何も考えなくても仕事ができるというのは、妖精メイドにとっては非常に都合がいいのだ。

私は明日姿を見られるわけにはいかない。

妖精メイドの髪の毛を1本引っこ抜き、小瓶に保存した。

ポリジューズ葉での変装が減多に見破られることがないのは4年生の頃のパティー・クラウチ・ジュニアの件でよくわかってる。

明日は妖精メイドに変装して指示を出せばいいだろう。

私は会場内を見回し、不備がないことを確認する。

そして意識を集中し、パーティーホール全体の時間を止めた。

「冷凍保存、便利だよな。ほんとに」

私たち3人は会場の外へと避難し、最後に完全に会場内の空気を固定させる。

これで明日パーティーを行うまでは埃が舞うことがない。

「正確には固定なので冷凍とは違うんですけどね」

「同じだつて。そういえば小悪魔のパティーローブはどうするの?」

美鈴さんは小悪魔の今の服装を見る。

制服のような服はパーティーに相応しいものだとは思えなかった。

「従者として参加する予定ですので……メイド服?」

「ぴつたりなサイズを用意しておくわ。……悪魔に転生する前に着せたかったわね」

その姿を想像したのか美鈴さんが噴き出した。

小悪魔は少し顔を赤くして怒る。

「もう、ふざけないでください。メイド服の準備は任せます。分霊箱はどうするんでしょう。お嬢様から何か聞いていますか?」

「ああ、そのことなんだけど、お嬢様の部屋に持っていつて。この時間帯は部屋で事務仕事をなさつてると思うから。そのあとに妹様の部屋の掃除をお願い」

「わかりました」

小悪魔はまっすぐお嬢様の部屋へと飛んでいく。

最近小悪魔は妹様と会うことをお嬢様に許可されたのだ。

妹様は相変わらず地下の部屋から出てこようとしない。

出てこられたらそれはそれで問題になりそうだが、お嬢様はそれを望んでいる。

「小悪魔もすっかり一人前かあ……」

美鈴さんはほっこりとした笑顔で呟いた。

「やっぱり一人前の基準はそこなんですか？」

「多分ね」

美鈴さんは大きく伸びをすると自分の部屋の方へと歩き出す。

私も自分の部屋に向かった。

クリスマスイブの夜。

隠れ穴では綺麗に着飾った魔法使いと魔女で溢れていた。

「みんな着替えたわね。フレッド、変なものを持っていくんじゃないわよ」

モリーが皆の服装をチェックしていく。

ハリーは新しい深緑のダンスローブを、ロンは深い青色のタキシードを着ていた。

ジニーはオレンジ色のドレスローブを着ており、軽く化粧もしている。

「持つてくなだつて？ 商売道具だぜ？」

「営業に行くんじゃないんですからね！」

モリーが指摘するとフレッドとジョージは渋々ローブの中から悪戯用品を出してい

く。

素直にに応じているが、きつとまだ多くの悪戯用品を隠し持っているだろう。

「あと10分！」

アーサーが大きな声を出す。

それを聞いて全員がバタバタと用意をし始めた。

と言つても何かを持っていく必要はない。

準備をしなくてはいけないとしたら、服装と平常心ぐらいだ。

「みんな招待状を手に持つて！」

モリーは鞆の中から招待状を取り出した。

皆各自送られてきた招待状を手に持つ。

ロンが慌てたようにタキシードのポケットを漁つたが、無事に招待状を引っ張り出した。

「あと1分」

全員ができるだけ普通の顔をしようとなつたが、その瞬間を待つ。

ハリーは横目でロンの顔を見たが、カチンコチンに固まっていた。

「5、4、3、2、1……」

次の瞬間ハリーの両足が地面から離れる。

そして気が付くと目の前に大きなパーティー会場が広がっていた。

煌びやかに飾り付けがしてあるわけではないが、内装は決して地味というわけではない。

ハリーはこのような会場をダーズリーのところで見た映画でしか見たことがなかった。

まさにおとぎ話の中のような雰囲気だ。

「すっげえ……」

ロンが目を輝かせながら呟く。

周囲を見回すと多くの人間で会場は溢れかえっていた。

先ほどまで一緒にいたウィーズリー一家は勿論のこと、ムーディやトンクス、ルーピン、シリウスなどの騎士団のメンバー、魔法省の役人、ホグワーツの教師など。

他にもハリーが知らない人も大勢いる。

「ハリー！ メリークリスマス！」

声を掛けられて振り返るとそこにはネビルが祖母を連れて立っていた。

その横にはハーマイオニーの姿もある。

「メリークリスマス、ネビル、ハーマイオニー」

「ハリー、メリークリスマス！」

ハーマイオニーは目に見えて興奮している。

一昨年とは比べ物にならない程めかしこんでいた。

パーティーに来た人々は皆思い思いに会話を楽しんでいる。

ここに到着してから5分ほど経つただろうか、突如足音が会場内に響き渡った。

その足音はこの世の物とは思えないような音だ。

大きな音ではないのだが、不思議と響き、人々の注意を引き付ける。

一体誰のものだろうと皆が会話を止めその足音を聞いた。

コツン、コツンと静まり返った会場に足音が響く。

ハリーはその足音の主をすぐに見つけることができた。

会場の舞台の上をレミリアが歩いている。

その服装は統一感のある赤のドレスだったが、ハリーは装飾品が少し浮いていると

思った。

頭には銀のティアアラをつけており、胸には重そうな金のロケットをつけている。

右手の親指には指輪を嵌めており、その指輪も男物のように見えた。

「紅魔館へようこそ。人間と人狼と吸血鬼と……まあいろいろ居るわね」

レミリアは舞台の中心に立つとゆっくりと話し出す。

「今日はクリスマスイブだけど、あんまりキリストの誕生を祝う気分でもないわ。吸血

鬼だし。そう、私はただ騒ぎたいだけ」

レミアアがまつすぐ手を上げ、指を打ち鳴らすとテーブルの上に色とりどりの料理が出現する。

「飲んで喰らって大騒ぎしなさいッ！ 身分や種族なんて関係ないわ！ 今年は死者が出ないことだけを祈るばかりよ！」

一瞬の沈黙ののち、会場は爆発したように歓声が沸く。

そして盛大にクリスマスパーティが始まった。

私は妖精メイドの姿を借りて会場内を歩き回る。

給仕や客からの要望は妖精メイドが対応しており、私はその度に命令を与え妖精メイドを操っていく。

小悪魔はメイド服を着込みお嬢様の横に立っている。

美鈴さんはハーマイオニーに絡んでいた。

そして私が一番心配しているのはダブルドアだ。

お嬢様は今レイブクロウのティアラとスリザリンのロケット、蘇りの石の指輪をつけている。

挙句の果てにはハツフルパフのカップでワインを飲んでいた。

分霊箱を持ってこいというのは、こういうことだったのかと私は少し呆れている。隠す気云々の話ではない。

お嬢様は分霊箱が全てここにあると見せつけているのだ。

勿論ダンブルドアは喉から手が出るほどそれを欲するだろう。

だが、このような大勢がいる会場で力づくで奪うわけにもいかない。

私はダンブルドアを抱えているであろうジレンマを想像して内心ほくそ笑んだ。

私が会場内を見回すと、ダンブルドアはパチュリー様と共にお酒を飲みながら何かの話をしている。

だが、たまにちらりとお嬢様のいるほうを見るのだ。

パチュリー様は私の視線に気が付いたのかこちらを見て不敵に笑う。

どうやらパチュリー様に対してはポリジューズ薬でもあまり効果がないらしい。

完全に私だと見破られているようだ。

私は怪しまれないように2人へと近づいていった。

「普段あまりこのような場に出ることはないから、少し新鮮よ。アルバス、貴方は逆に飽きるほど出ているでしょう？」

パチュリー様はグラスに注がれたワインを一口飲む。

ダンブルドアは朗らかに微笑んだ。

「それが意外とそうでもなくての。パーティーの前の日の晩は眠れないぐらいじゃよ」
「そう」

ダンブルドアの冗談をパチュリー様は華麗に受け流す。

私たちが集まっているのが見えたのか、お嬢様が小悪魔を引き連れてこちらに歩いてきた。

手にはワインの入ったハツフルパフのカップを持っている。

小悪魔はその横でワインボトルを持って立っていた。

「メリークリスマス。いい夜ね、ダンブルドア。……と、そちらの彼女は初めましてかしら」

お嬢様はパチュリー様を見て言う。

「パチュリー・ノーレッジよ。ホグワーツで魔法薬学の教師をしているわ」

パチュリー様は他人行儀に答えた。

「そう、じゃあ貴方がかの有名なパチュリー・ノーレッジなのね。よろしくパチュリー。私はレミリア・スカーレット。今日は私が主催したパーティーに来てくれてありがとう」

お嬢様が胸を張るとロケットの鎖がシャランと音を立てる。

ダンブルドアはわざと意識していないかのようにお嬢様の顔を見ていたが、そこにはレイブンクローのティアラがある。

完全に目のやり場に困っているようだった。

「素敵なティアアラね。ゴブリン製？」

パチュリー様がお嬢様に聞いた。

勿論、パチュリー様はティアアラの正体を知っている。

つまり、その質問には何か意図があるということだろう。

「いえ、そんなちなけな物じゃないわ。これはロウエナ・レイブンクローが所有していた髪飾りよ。『計り知れぬ英知こそ、われらが最大の宝なり』、確か貴方はレイブンクロー生だったかしら。本か何かで読んだわ」

「詳しいのね。失われたって聞いていたけど、貴方が所有していたのね。じゃあもしかしてそのロケットは——」

「そう、サラザール・スリザリンのロケット」

お嬢様が蛇語で何かを囁く。

するとロケットがパカリと開き、裏側にある2つの目玉が露わになった。

その2つの目は生きているように蠢いている。

ダンブルドアが目を見開いた。

「面白いでしょう?」

お嬢様はケラケラと笑ってパタンとロケットを閉じる。

「生きた目が入っているロケットなんて素敵じゃない? これって誰の目なのかしら」

「サラザール・スリザリンの持ち物なのだから、彼のじゃない?」

パチュリー様は次にお嬢様が手に持っているカップを指さす。

「レイブンクロー、スリザリンときたらそれはハッフルパフ?」

「そう、ヘルガ・ハッフルパフのカップ。あとゴドリック・グリフィンドールの剣さえあれば完璧なんだけど、見つからないのよね」

お嬢様は肩を竦める。

確かグリフィンドールの剣は校長室にあるはずだ。

「ああ、それなら——」

「わしはその指輪が気になるのう。それもホグワーツの創始者に関わるものなのかな?」

パチュリーの言葉を遮るようにダンブルドアが言った。

パチュリーが剣のありかを教えてしまうことを恐れたのだろう。

「ああ、これ? これはもつと凄いわ。歴史があるだけのものではないもの」

お嬢様は右手をあげ、指輪がよく見えるようにする。

「死の秘宝つてご存知かしら。ペベルル兄弟が残した3つの魔法具なのだけど」

「ニワトコの杖、蘇りの石、透明マントね」

「Exactly. この指輪にはその蘇りの石が嵌まっているわ」

蘇りの石という言葉にダンブルドアの表情がピクリと反応した。

私は小悪魔から教えてもらったダンブルドアの過去を思い出す。

ダンブルドアはアリアナに一言謝りたいのではないだろうか、私は勝手に予想をつけた。

「蘇りの石……実在していたとはもう」

ダンブルドアは平静を装ってはいるが、私の目で見てわかるほどには動揺している。

まさにダンブルドアが今欲しいものが全て目の前にあるような状態だ。

「スカーレット嬢、パーティーが終わった後に少々お時間よろしいかの?」

「今じゃダメなの?」

お嬢様はそんなダンブルドアの心境を全て読み切ったうえで弄んでいるような風潮がある。

それはパチュリー様も同じだ。

「少し人には聞かれたくない話なのじゃ」

「そう、いいわよ。何時にこのパーティーが終わるか分からないけど、特別に10分だけ

時間を取ってあげるわ」

お嬢様は話は終わったと言わんばかりに何処かへ立ち去っていく。

ダンブルドアは手に持っていたグラスの中身を一気に飲み干した。

「何か人には聞かれたくないって、結構物騒な話？」

パチュリー様はダンブルドアの顔を見上げながらワイングラスを傾ける。

「少々野暮用があつての」

ダンブルドアは誤魔化すように笑った。

私は空になったダンブルドアのグラスにお酒を注ぎ、一礼してその場を離れる。

お嬢様はウィーズリーの双子の元に向かわれたようだ。

私はまた会場内を歩き出す。

近場ではムーディが魔法の目でトンクスのお腹を見ていたり、シリウスがルーピンの

肩を叩いて爆笑している。

その奥には少々見慣れない組み合わせが見受けられた。

ハリーとクイレルだ。

2人で何かを話している。

ハリーの横にはロンがおり、クイレルの横にはパーシーがいた。

「なるほど、ケンタウルスが教師を……珍しい者もいるのだな。彼らはあまり人と関わ

り合わないものだと思つたが」

「ダンブルドア先生が勧誘したそうです。ですがそのせいで群れから追い出されてしまつたようで——」

どうやら古い学のフィレンツエの話をしているようだ。

もつと生々しい話をしているものかと思つたが、面白そうな話は聞けそうにない。

私は更に奥へと進む。

先ほどハーマイオニーに絡んでいた美鈴さんは今はネビルに絡んでいる。

その様子は酔つ払いのようだったが、酒には酔つていないようだった。

まあ、いつも通りと言えるだろう。

ハーマイオニーの横を抜けて奥へと抜けると、誰とも話をせず、独りでグラスを傾けている青年を発見する。

ドラコ・マルフォイだ。

その様子を見て一瞬話す相手がいないだけかと思つたが、どうもそうではないらしい。

何かを考え込むように、神妙な面持ちでグラスを傾けている。

ドラコのいるその一角だけ、まるで葬式のような雰囲気が漂っていた。

「どうかなされたのですか？」

私はついドラコに話しかけてしまう。

今現在妖精の姿なので、私だと気が付かれることはないだろう。

ドラコは一瞬誰から話しかけられたのか分からなかったらしく、周囲を軽く見回す。そしてワインのボトルを抱えている私を見つけた。

「……いや、なんでもないんだ」

そう言つてまた一口酒を煽る。

そして何か思いついたように私に声を掛けた。

「君は十六夜咲夜という従者を知っているね？　この館で働いていたメイドだ」

「はい。十六夜咲夜メイドちよーですよね。ご存知ですよ。ご存知ご存知」

私は妖精の馬鹿っぽい口調を真似て答えた。

ドラコは少し私に興味を持ったように、体の向きを変えた。

「ここで働いていた彼女はどんな人物だったんだ？」

難しいことを聞いてくるものだ。

ドラコはどうやら私のことを考えていたようである。

「メイドちよーですか？　メイドちよーは……消えたり、現れたり……厳しい人です」

私のそんな答えにドラコは満足できなかつたらしい。

少し不満そうな、そして失望したような顔をしていた。

「そうか、もういい」

「しつれーいたします」

ペこりと頭を下げて、私はドラコの横を通り過ぎる。

ドラコは私の死をまだ引きずっているのだろうか。

私は会場内を歩きながら考える。

まあでも、姿を見せられないので死んでいるも同然だ。

私は引き続き会場内を徘徊し、妖精メイドに指示を与えながら自分も給仕をこなしていった。

結局この後パーティーは深夜の1時まで続き、パーティーの参加者はポートキーに乗って家まで帰っていく。

1時半には殆どの参加者が帰路につき、最終的にはダンブルドアだけが残った。

「んー……、疲れた。今年も楽しかったわね。で、用事だったわね。ここじやなんだし、応接間を準備させるわ。その妖精メイドB、応接間の準備をしてきなさい」

お嬢様は私を指さし命令を下す。

「かしこまりました」

私はペこりとお辞儀をすると応接間のほうへと飛んだ。

会場の後片付けは美鈴さんに任せればいいだろう。

私はパーティーホールを出ると廊下を進み応接間へと入る。

そして時間を止め簡単に掃除をし、紅茶の用意をした。

時間停止を解除し、しばらく待っているとお嬢様がダンブルドアと小悪魔を連れて応接間に入ってくる。

お嬢様とダンブルドアは向かい合って座り、小悪魔と私はお嬢様の両脇へと立った。

「さて、用事つて一体何？ 血生臭いものかしら」

お嬢様は冗談を飛ばすが、ダンブルドアの表情は真剣そのものだ。

「実はじゃがのう……スカーレット嬢。少々譲ってほしいものがあるんじゃないよ」
「譲る？ 席なら譲らないわよ。私は貴方より年配なもの」

私はお嬢様とダンブルドアに紅茶を出す。

お嬢様は何の躊躇いもなくそれに口を付け、逆にダンブルドアはそれに触れようとさえしなかった。

「決してわしの私利私欲でこのようなことを言っているとは思わんで欲しい。貴方の今身に着けている物を、わしに譲ってくれんか？ ティアラに、ロケットに、指輪に、カッブじゃ。貴方はこれが何かを知って身に着けておるように見える」

「欲張りさんね」

お嬢様が小悪魔に目配せする。

小悪魔は手をくるりと回し銀の盆を取り出した。

お嬢様は分霊箱を一つずつその盆の上に載せていく。

「ロウエナ・レイブンクローの髪飾り、サラザール・スリザリンのロケット、ヘルガ・ハツフルパフのカップ、蘇りの石がついた指輪。これはもともとゴーンの持ち物だったと言っていたかしら」

小悪魔は分霊箱の載った盆を持ち、お嬢様の横に戻る。

「さて、ダンブルドア。貴方このようなお宝が何の代償もなく手に入るとは思っていないわよね？」

お嬢様はまっすぐダンブルドアを見据える。

「ガリオン金貨ならたんまり貯め込んでおる。グリーンゴッツのわしの金庫をそっくりそのままスカレット家に献上しよう」

「人間の定めた価値を押し付けるな。反吐が出る」

お嬢様は冷やかな視線をダンブルドアに向けた。

「すまなんだ。気を悪くさせるつもりはなかった。……では、わしの杖腕でどうじゃ」

「あと半年とちよつとで死ぬ人間の一部分なんていらないわ」

「では、貴方は代償として一体何を欲する？」

ダンブルドアは困惑した視線をお嬢様に向ける。

お嬢様は真剣な顔でダンブルドアを見た。

「十六夜咲夜を返しなさい」

その言葉にダンブルドアは雷に打たれたような顔をした。

お嬢様の言葉に私もそう来たかと内心驚く。

どうやらお嬢様は分霊箱を渡す気など更々ないようだった。

「スカーレット嬢、彼女は魔法省で——」

「嘘……そんな話信じないわ。貴方が隠してしまったんでしよう!？」

お嬢様はソファアから立ち上がり感情的に叫ぶ。

その眼には涙が浮かんでいた。

「咲夜は騎士団の仕事中に死んだと貴方は言ったわ! 返して、私の……私の咲夜を返して……」

お嬢様は固く拳を握りしめる。

その力があまりにも強すぎたためか、拳からは血が滴り始めた。

「彼女のことは本当にすまなかつたと思っておる。じゃが彼女は貴方の為に行動していたと理解してほしい」

「死んだなんて嘘! 貴方が隠したんだわ! 返しなさい……返しなさいよツ!! 何度呼び出してもあの子は出てこない。何度も、何度も試したわ……」

お嬢様は乱暴に指輪を掴み取ると手の中で何回も転がす。

「あの子は生きているんでしょう？ 貴方の都合で、まだ何処かで働いているんでしょう?!」 十六夜咲夜は私の従者よ。私の……大切な……家族よ!!」

お嬢様の目から涙が溢れ、お嬢様はソファアーに蹲つてしまう。

私は静かに寄り添つてお嬢様の背中を優しく撫でた。

お嬢様の背中はずぶずぶと震えている。

私はこの感覚に身に覚えがあつた。

どうやらお嬢様は必死に笑いを堪えているようだ。

応接間にお嬢様の嗚咽が響き渡る。

ダンブルドアはどうしていいか分からないといった顔をしていた。

「ダンブルドア様、今日のところはお引き取りください」

小悪魔が単調にダンブルドアに言う。

ダンブルドアも今日は退散することにしたらしい。

ゆつくりとソファアーから立ち上がった。

「彼女はもうこの世にはおらん。あのアーチを潜ってしまったのじゃ。あの奥がどうなっているのか、あの中から戻ってきた者は一人もおらん。今日はすまなんだ。つらいことを思い出させてしまつて……失礼する」

ダンブルドアは招待状を取り出し、それに杖を当て何処かへ消える。

その瞬間お嬢様はむくりと起き上がった。

その表情は先ほどと打って変わって非常にケロリとしている。

「生きてる人間を蘇りの石で呼び出せるわけないだろバーカ！ あははははは！ お腹痛いッ——」

お嬢様はそのままソファを叩きながら大爆笑する。

私は耳を引っ張り元の姿へと戻り、紅茶を片付けた。

「お嬢様演技お上手ですね」

小悪魔は感心したように頷いている。

そう、私の死というのはダンブルドアがお嬢様に対して作った弱みだ。

これでダンブルドアは分霊箱の場所が分かっているのにそれに手出しができないという、ある種のジレンマを抱えることになる。

「さて、変人の間抜け面も拜めたところで私は自分の部屋に戻るわ。小悪魔、分霊箱の管理は貴方に任せるわね。咲夜、服が濡れてしまったわ。私の部屋で着替えるのを手伝って頂戴」

お嬢様は目に残っていた涙を手の甲で拭うと応接間を出ていく。

私は静かにその後を追った。

「あれでよかったですか？ お嬢様」

「いいのよ。これでこちらのさじ加減で戦争を起こすことができるわ。魔法省に、分霊箱。私は2つの鍵を手に入れた」

お嬢様の部屋に入り、ドレスを脱ぐのを手伝う。

お嬢様はいつもの服に着替えると机に向かった。

「じゃ、パーティーの後片付けをお願い」

「かしこまりました」

私は一礼するとお嬢様の部屋を出る。

そして廊下を進みパーティーホールへと戻ると妖精メイドの指揮を執り始めた。

恋愛とか、記憶とか、回想とか

ダンブルドアは校長室で憂いの篩と向き合っていた。

ローブから小瓶を取り出し、中に入っている記憶を水盆へと落とす。

その記憶はムーデイのものだ。

ダンブルドアは一度この記憶を見た。

だが、見返す必要があると感じたのだろう。

ダンブルドアは水盆へと顔をつけ、記憶の中へと落ちていった。

記憶は今年の夏、神秘部での戦いのものだ。

ムーデイ自身は床に倒れているが、彼の魔法の義眼のおかげでアーチはよく見える。

咲夜は一人でクラウチとレストレンジの2人を相手取り、魔法を撃ち合っている。

ダンブルドアはこのシーンで不思議に思うことがあった。

何故咲夜は時間を止めて2人を攻撃しないのかと。

彼女の能力を用いれば相手が何人いても関係ないはずだ。

咲夜と死喰い人2人の戦いは接近戦へともつれ込み、クラウチが咲夜の腹部へと蹴り

を入れる。

咲夜はそれを避けるように後ろへと飛び、アーチに気が付いて顔を真っ青にする。そして、もかく様に手で空を掻いたがそのままアーチを潜り抜け消え去った。

ダンブルドアはアーチを覗き込むが、向こう側が見えるだけである。

咲夜は完全にアーチを潜っている。

彼女は完全に死んだのだ。

ダンブルドアは校長室に戻ってきて考える。

レミリアの願いを叶え、分霊箱を譲り受けることはできない。

レミリアの話では咲夜を蘇りの石に戻ってこさせることはできないと言っていた。

つまり咲夜は魂ごと消滅してしまったと考えたほうがよいのだろう。

「ではどうするべきか……」

何百、何千もの方法がダンブルドアの頭の中で思いついては消え、思いついては消えを繰り返していく。

だがどれもよい方法だとは思えなかった。

新学期が始まって早々にダンブルドアとの個人授業が行われた。

ハリーはいつものようにガーゴイル像を抜け校長室に入る。

ダンブルドアはいつもと変わらない様子で部屋の中に佇んでいた。

「こんばんは、ダンブルドア先生」

「ハリー、こんばんは」

ハリーはいつものようにダンブルドアの前へと腰かける。

「クリスマス休暇はどうだったかね？」

「非常に楽しかったです。紅魔館でのクリスマスパーティーなんか特に」

ハリーは紅魔館で行われたクリスマスパーティーのことを思い出す。

ハリーが会いたいと思った人とは大体顔を合わせることができ、料理も今まで食べたことがないぐらい美味しかった。

レミリアが言った通り、飲んで喰らって、騒ぎまくったクリスマスだと言える。

「それは何よりじゃ。……さて」

ダンブルドアはローブから小瓶を取り出す。

「今日も少しわしの過去を見せよう。ノーレッジ先生とはどうじゃ？ ハリー。何か進

展はあったかのう？」

ダンブルドアのその言葉にハリーは表情を曇らせた。

ハリーはダンブルドアのその言葉を完全に忘れていたのだ。

「その様子だと忘れておったようじゃな」

「すみません」

ハリーは申し訳なきように俯いた。

「ハリー、これはとても大切なことなのじゃ。今日見せる記憶もそれに関係することじゃよ」

ダンブルドアはゆっくり小瓶の中身を水盆に落としていく。

そしてハリーを手招いた。

「お入り、ハリー」

ハリーは椅子から立ち上がり、憂いの篩へと近づく。

水盆へと顔をつけ、ハリーはそのまま記憶の中へと落ちた。

次の瞬間目の前にホグワーツの校庭が広がる。

ハリーが空を見上げると空はよく晴れており、絶好の飛行日和に思えた。

だが普段あまり人の集まるような場所ではないのでそこには2人しか人がいない。

ダンブルドアとパチュリーだ。

ダンブルドアは日向で芝生の上に寝転がっている。

パチュリーは逆に日陰の石段に腰を落とし、本を読んでいた。

大体3年生ぐらいだろうかと、ハリーは予想を立てる。

「こんなに天気がいいのに、パチュリーは日陰なのか？」

「日の光は物を劣化させるわ」

常識でしょう？ とパチュリーは冷たく答える。

ダンブルドアは肩を竦めて空を見上げた。

「知ってるか？ 何もしない時間っていうのは、頭の中を整理するのに必要な時間らしい」

だから本を読んでいないでこつちで一緒に昼寝をしようとダンブルドアは誘う。

「それは暇人の言い訳よ」

釣れないな、とダンブルドアは呟くが、あまり本気で誘おうとは思っていないようだった。

そもそも本当に付き合う気がないのならパチュリーは図書室で本を読むだろう。

ここまで出てきてくれたというだけでも奇跡に近いとダンブルドアは考えているようだった。

「ねえ、ダンブルドア」

不意にパチュリーがダンブルドアに声を掛ける。

ダンブルドアは跳ね起きるようにパチュリーの方を見た。

「どうした？」

パチュリーの方からダンブルドアに声を掛けてくることは非常に珍しいことらしい。

「友達って、なんなのかしらね」

パチュリーの間いは何とも答えにくいものだった。

ダンブルドアはその問いに悩む。

「仲のいい仲間？ いや、違う気がする……心を許しあえる……と言っても相手はどう思っているのか分からないしな……」

ダンブルドアは友達という言葉を真剣に考え始める。

「まず、貴方と私は友達ではないわよね」

「……そう、なのか？ ……そうなのかもな」

「貴方とドージは？」

「友達……のような気がする。……僕とパチュリーって友達じゃないのか？」

「友達なの？」

パチュリーはダルそうに視線をダンブルドアへと向ける。

ダンブルドアはその視線に少したじろいだ。

「難しいこと聞くなよ。変な本でも読んだか？」

パチュリーは本の表紙をダンブルドアに見せる。

その本には『友情』とだけ題があつた。

「その本にはなんて書いてあるんだ？」

「何も書いてないわ」

パチュリーが本のページを捲っていくが、そこには白紙のページが続いていた。

「白紙だな。ずっとこれを読んでいたのか？」

パチュリーはコクンと頷く。

ダンブルドアは何か考え込むように顎に手を当てた。

「結局、このとき答えは出なんだ。わしが友達、友情という意味を真に理解したのは卒業してから何年も経つてからじゃった。ハリー、君には勿論友達の意味は分かるね」

いつの間にかハリーの横にはダンブルドアが立っている。

「はい、ロンや、ハーマイオニー。それにネビルにルーナに、咲夜に、セドリックに……挙げ始めたらキリがありません」

ダンブルドアは咲夜の名前にピクリと反応したようだったが、そのまま話を進めていく。

「わしはこの前のクリスマスパーティーの時にパチュリーに同じことを問うたのじゃ。友達とはなんじやろうかと。彼女はこう答えた。『その者の為に自分を犠牲にできるかどうか。そして、その者と血縁関係でない』とな。至極真つ当な答えじゃ」

次の瞬間、ハリーは校長室に戻ってきていた。

ダンブルドアは杖で記憶を掬い、小瓶の中へと戻す。

「自己犠牲、つまりは愛じゃよ。ハリー。ヴォルデモートには全く無く、君には溢れんばかりにあるものじゃ」

「愛……ですか？」

「そうじゃ、愛じゃ」

ハリーにはそれが非常に曖昧なものに思えた。

だが先年度の終わりにダンブルドアはハリーに教えたのだ。

ハリーを守っているのはリリーの愛だと。

親の愛が、ハリーをヴォルデモートから隠し、守っているのだと。

「咲夜は愛されていた」

ハリーは無意識にそう呟いていた。

「先生、咲夜はとても愛されていました。友達から、学校のみんなから、そして何より彼女の主のレミリアさんから。先生、彼女は何故死んでしまったのでしょうか」

カチャンと何かが割れる音が聞こえる。

ハリーは一瞬何の音だか分からなかったが、ダンブルドアの足元を見て音の正体を知った。

それはダンブルドアが、手に持っていた小瓶を地面に落とした音だった。

ダンブルドアは明らかにその問いに狼狽している。

そして何かを噛み殺すように目を閉じた。

「そうじゃな。彼女は大切にされておった。道具ではない。ましてや都合のよい存在でもない。紅魔館という大きな家族の一員だったのじゃ。彼女の死は、わしの責任じゃよ。わしの愛が足りなかった。わしは彼女を愛してやれなんだのかもしれない」

涙が一滴、小瓶を追って地面に落ちていく。

「ハリー、よいか。愛じゃ。人間も吸血鬼も関係ない。愛なのじゃよ。ハリー」

「よくわかりません」

ハリーはダンブルドアの様子に困惑する。

このようなダンブルドアを、ハリーは今まで見たことがなかった。

「愛……愛って何だろう」

ハリーは談話室に戻ってきて今日の個人授業のことをロンとハーマイオニーに話した。

ロンとハーマイオニーはクリスマスパーティーで仲直りを果たしたようだ。

「ハリー、考え込まないほうがいいわ。今まで数えきれないほどの哲学者が愛について考察してきたけど、未だに答えは出ていないわ。貴方が思うままでもいいのだと思う」

それよりも、とハーマイオニーは続ける。

「私、分霊箱が何処にあるか分かった気がするわ。というよりも、気が付かないほうがどうかしてた。私も貴方もロンも、この目で見てた」

「どうかしてて悪かったな」

ロンがブスツとした顔で言うが、急に何かに気が付いたようで目を見開く。

「髪飾り、ロケット、指輪、カップ……レミアア・スカーレット！　そうだよ、彼女がその全てを身に着けてた」

そう言われハリーも思い出す。

レミアアの赤いドレスに少し合わない装飾品の数々を。

「ダンブルドアに教えた方がいいんじゃないか？」

ロンが声を潜めるが、ハーマイオニーがその考えに口を挟む。

「ダンブルドアが気が付いていないわけじゃないわ。私彼女とダンブルドアが話しているところを見たもの。ねえハリー、今日の授業でダンブルドアは一度でも分霊箱について触れた？」

「いや、触れてない。今日はノーレッツジ先生のことばかりだった。でもおかしいよね？　分霊箱のありかが分かっているのならノーレッツジ先生の手を借りることもないのに」
ダンブルドアが一騎打ちでヴォルデモートに負けるはずがない。

ハリーはそう考えていた。

「あのお嬢様が易々と自分の持ち物を他人に譲るとは思えないけどな」

「でも、手に入れないわけにもいかないでしょう？ あれは分霊箱で、壊してしまわないといけないんだから。……レミリアさんに分霊箱のことを教えて破壊してもらおうっていうのはどうかしら」

「それは、多分無理だ」

ハリーは直観的にそう断言した。

「もしそれがことが済むならダンブルドアがもうやつていると思う」

3人は頭を突き合わせて考え込む。

「じゃあ盗むとかどうだ？」

「それもできたらもうダンブルドアが……そうか！」

ハリーはダンブルドアの個人授業の意味を理解したような気がした。

「ダンブルドアは分霊箱を手に入れることができない。でも、ダンブルドアより優秀な魔法使いだったらどうだろう。例えば、ダンブルドアと同期で、首席のノーレッツジ先生だったら盗めるんじゃないか？ それだったらダンブルドアがノーレッツジ先生の力を借りようとしているのにも納得がいく。分霊箱を手に入れる手助けをして欲しいんだ」

ロンはそれだ！ と相槌を打つが、ハーマイオニーは納得していないようだった。

パチュリーを利用するということに嫌悪感を覚えたのかもしれない。

「でも、多分今はそうするしかないんだ。ノーレッジ先生の協力が得られたら分霊箱を盗めないはずがない」

「でもハリー、どうするの？ ノーレッジ先生は……先生の名譽のためにあんまりこういうことは言いたくなかったんだけど、……その、人とあまり関わろうとしないわ。卒業してからノーレッジ先生を見たという魔法使いは一人もいなかったの」

ハリーはノーレッジ先生と友達になるにはどうすればいいかを考えるが、あまりいい方法は思い浮かばなかった。

「何かきつかけが必要よね。先生と友情を作る何かが……」

ハーマイオニーは唸るが、やはりこれと言った具体案は出てこなかった。

次の日の魔法薬学の授業。

ハリーたち3人はいつものようにマグルの大学にあるような地下牢教室にきていた。

そこには既に多くの生徒が机についており、ハリーたちもネビルを加えて4人で机につく。

今日はついに既存の魔法薬ではなく、パチュリーが独自に開発した効能を持つ魔法薬

に入るという。

魔法省の教育方針を完全に無視した内容だったが、この授業に不満を持っている生徒は一人もいなかった。

「今日作る魔法薬は今までのような安全な物ではないわ。調合法が複雑な上に少しでも間違えると辺り一面に毒ガスをまき散らす。なので今日は私が作るところを見学なさい。私もこの授業で死者を出したくないし」

今日は生徒が魔法薬を調合しないと聞いて少し落胆の声上がるが、パチュリーは構わずホワイトボードに調合法を書いていく。

それを見て、文句を言う生徒はいなくなつた。

「まずバジリスクの牙を粉末状にするんだけど、この際全ての粒の大きさを40?にきっちり揃える必要があるわ。すり鉢では不可能だから特殊な無言呪文を用いる」

その後も不可能だと思われる調合法が立ち並び、黒板一杯に反応式が書かれていく。

ハーマイオニーは必死に理解しようとメモを取りながら唸っていたが、あの様子では間に合つてはいないだろう。

「さて、では調合していくわよ」

パチュリーが手を振るうと机の上に置かれた材料がひとりで動き出し、調合法に沿って規則正しく大鍋に入っていく。

パチュリーは大きな本を取り出し、呪文を唱え始める。

次の瞬間大鍋の中が光り輝き、そして急に薬が消滅した。

「これで完成。さて、これの効能が分かる生徒はいるかしら？」

生徒は鍋の中を覗き込むが、そこに何かが入っているようには見えない。

目に見えない……ハリーには思いつくことがあった。

「透明になる薬？」

「正解よ。グリフィンドールに10点あげましょう」

パチュリーは鍋の中の何かを匙で掬うと、ポチャポチャと鍋の中に落としていく。

音がするということは、確かにそこに液体があるのだろう。

「この薬は透明マントや目くらまし術とはわけが違うわ。完全なる消失。この薬を飲んだものも追跡することは不可能。足音はしないし、そもそも他人はこの薬を飲んだ人物を触ることができない」

パチュリーは小瓶にその透明な魔法薬を詰めていく。

「この小瓶1杯で効果は1年。解毒剤を飲むまでは透明のまま」

パチュリーは匙についた魔法薬をべろりと舐める。

途端にパチュリーの姿が見えなくなつた。

いや、目に見えないというレベルではない。

何処かに姿くらしをしてしまったのかのように、存在をまったく感じ取れなかった。

キュ、キュ、と何かが擦れる音が聞こえてくる。

ホワイトボードの上をペンがひとりで走り、文字を書き綴っていた。いや、ひとりで動いているわけではない。

誰かがそこにいるのだ。

『このように、着ている服ごと完全に透明になる。そして……』

急に机の上に置かれたナイフがパチュリーのいるであろう場所を通過していく。

『体も消える。姿の見えないゴーストのような存在になれるというわけ。今私がペンを持っていてるように、自分が意識して持っているものはすり抜けることはないわ』

パツとパチュリーがホワイトボードの前に出現する。

「この薬が危険な理由は、解毒剤を飲まない限り絶対に姿を現すことができないということと」

大鍋に手を伸ばそうとしていたスリザリン生が固まる。

「解毒剤を用意せずにこの薬を飲むと、効果が切れるまで待つしかないわ」

パチュリーが手を振るうと大鍋が浮き、大きな瓶に姿を変える。

パチュリーはその瓶に嚴重に蓋をした。

「調査はおすすめしないわ。危険だし、難しいしね。今日の授業はこれでおしまい」
パチュリーが手を叩くと生徒たちはゾロゾロと教室を出ていく。

その中でハリーだけが最後まで教室に残った。

「あの、先生。聞きたいことがあるのですが……いいですか？」

「言いなさい」

パチュリーは机の上を片付けながら言った。

ハリーは何か話さないといけないと思い、頭の中に思い浮かんだことを口走った。

「魔法省の神秘部にあるアーチを知っていますか。アレを潜ってしまった人間は何処に行くのでしょうか」

「死ぬわ」

パチュリーは簡潔に答える。

「戻ってくる方法は？」

「死んだ人間を生き返らせたいの？」

ハリーの問いにパチュリーが問い返す。

その目はまっすぐハリーの目を見つめている。

「おかしいわね。貴方のその目、どちらかというど誰かを殺したいように見えるわ。でも同時にアーチに入った人間をこちらの世界に引き戻そうとしているようにも見える。

面白いわね」

ギリりとハリーの肩が跳ねる。

確かにその通りだ。

ハリーはヴォルデモートを殺そうとしているし、同時に咲夜を生き返らせることはできないかと考えている。

パチュリーは片目を瞑り、何かを覗き見るようにハリーをじつと見た。

「思考が定まっていない、自分でも何を考えているか理解していない。思春期つて難しいわね。貴方の思っている問いに、1つだけ答えるとしたら……私には友と呼べる存在がいるわ。そしてそれは貴方でも、ダンブルドアでも、ヴォルデモートでもない」

次の瞬間ハリーは談話室にいた。

グルグルと周囲を見回すが、何処からどう見てもグリフィンドールの談話室だ。

「ハリー、大丈夫か？」

ロンが心配そうにハリーの顔を覗き込んでいる。

「えっと、なんで僕談話室にいるんだっけ？ さっきまで地下牢教室にいたはずなのに」

キョトンとしているハリーにハーマイオニーが呆れて言った。

「貴方、覚えてないの？ 眠そうな顔で談話室に帰ってきて、そのままそのソファアで寝てしまったじゃない。あれからもう2時間は経ってるわよ」

ハリーは必死に記憶を探るが、全く覚えていなかった。

だが、パチュリーと交わした会話の内容はしっかりと記憶している。

ハリーは誰にも聞こえないようにパチュリーから聞いたことを2人へと話した。

「つまり彼女には友達と呼べる人がいる。ホグワーツを卒業してからずっと隠れていたわけじゃない。少なくとも誰かとは会って、そして仲良くなってるんだ」

「そうとは限らないわ」

ハーマイオニーはハリーの推測を迷わず否定する。

「卒業する前にその人物と会っているかもしれないでしょう？」

「そうかもしれないけど……そうじゃないかもしれないだろ？」

考え込むように3人で唸ったが、結局結論は出なかった。

春になると紅魔館の庭園に花が咲き乱れる。

ここに植わっている花は全て美鈴さんが育てているものだ。

私は咲いた花を摘み取り花瓶に差していく。

そしてその花瓶を持って地下に向かった。

「失礼いたします。妹様」

「んー」

地下にある妹様の部屋の扉を叩くと中から妹様の生返事が聞こえてくる。

私は静かに扉を開け中へと入った。

「もうすっかり暖かくなりました。紅魔館の庭園で育った花を生けた花瓶です」

私は机の上に花瓶を置く。

妹様は机に向かっており、何かを書いている様子だった。

「何をお書きになつて居るのですか？」

私は少し遠くから妹様に尋ねる。

妹様は羊皮紙に書いている物を見せてくれた。

「これは……」

羊皮紙には7人の人物が描かれている。

「お嬢様に、妹様に……パチュリー様、美鈴さんに私に小悪魔。手を繋いで楽しそうですね」

ね」

だが、その絵で1つだけ不自然な点がある。

妹様と手を繋いでいる少女、私はこんな少女は見たことがない。

「妹様、彼女は一体どなたです？」

私の言葉を聞いて妹様はキョトンとした表情を見せる。

「なんで？ 貴方も夢で何度か会っているはずだけど。もしかして覚えていないの？」
夢で会っている。

妹様はそういうが、私には心当たりがなかった。

「アリアナよ。アリアナ・ダンブルドア」

「アリアナ……え？」

私は敬語を使うことも忘れて聞き返してしまった。

「呆れた。命の恩人の名前を忘れるなんて……もしかして、アーチを潜ってから生き返るまでのことを覚えていないの？」

妹様は大きく肩を竦める。

そしてまっすぐ私に手を伸ばした。

私は咄嗟に時間を止めようとするが、妹様の一言で動きを止めてしまう。

「動かないで。別に殺そうってわけじゃないわ。貴方の心の中にある壁を一枚壊すだけ。認識を阻害している物を崩すだけよ」

ゾクリと背筋を何か冷たいものが通るが、私はその場を動かなかった。

妹様は1歩私へと近づき、私の頭に向けて手を伸ばし、優しく握る。

パキンと、頭の中で音が響いた。

私はアーチを潜り暗闇の中を落ちていく。

もう向こうの世界には戻ることができないと、私は察していた。

そう、私は死んだのだ。

まっすぐ、時間の感覚など無くなる程下へと落ちていく。

いや、本当に落ちているのか？

空気を裂くような音は聞こえない。

そもそもこの空間には空気がないようだった。

「何もなければ落ちていても止まっても変わらないじゃない」

私は体の中に靈力を練り込み、好きな方向へと飛行する。

真つ暗で何も無い空間がひたすら続き、方向感覚が麻痺してくる。

いや、この空間に方向などないのだ。

「少し状況を整理しましょう」

私は自分の体を見る。

ホグワーツの制服を着ているようだ。

体はしっかりと存在しており、自分の体に触れることもできた。

「体はある。自分の声も聞こえるし、考えることもできる」

私は先ほどクラウチの放った蹴りを避けてうつかりアーチを潜ってしまった。

ここはそのアーチの奥、死後の世界というやつだろう。

「光源がないのに、私は自分の姿を見ることが出来る。何とというか、不思議な世界ね」
現世の常識はここでは全く通用しないということだろう。

私はロープの中を探りいつもの鞆を取り出した。

「鞆もあるし、杖もある」

私は鞆の中からいらぬ羊皮紙を取り出し、クシヤクシヤに丸めて空中へと投げる。

その羊皮紙はまっすぐ私から離れていった。

「相対的な動きを考えると、まああまり意味のない行動だけど」

私は霊力を使いその羊皮紙の後を追う。

いや、追えなかった。

「進まない。ということは先ほど霊力で進んでいると思ったのは錯覚だったってわけ
ね」

私は鞆の中からお嬢様から頂いたオークシャフト79を取り出し、もう一度羊皮紙を追ってみる。

今度は問題なく進むことができた。

私は羊皮紙に追いつき、それを掴み取る。

「箒での移動は可能。でも、今現在自分がどのように移動しているのか分からないから意味がないわね」

私はポケットの中に入っている懐中時計を取り出して時間を確認する。

チチチチチと針は動いており、確かに時間が動いていることを表していた。

「時よ、止まれ」

私は自分の十八番である時間操作を試してみるが、懐中時計の針は止まらない。

この懐中時計は私の能力の発動に合わせて針の動きが変わるようになっていた。

私が時間を止めたら針も動きを止め、時間の進みを早くしたら針の動きも速くなるのだ。

私はこの懐中時計を用いて時間操作の緩急の調整を行っているのだが、今現在針の動きが変わることはない。

「能力が使えなくなっている……アクション！」

私はもう一度羊皮紙を投げて今度は杖で呪文を掛ける。

羊皮紙が手元に引き寄せられることはなかった。

「魔法も使えない。でも箒で空を飛ぶことはできる。……んー、難しいわね」

「それでもないよ」

後ろから声を掛けられて私は咄嗟に振り向く。

そこにはブロンドの髪の毛の少女が浮かんでいた。

それも上下逆さまに。

「多分逆立ちしながらやってるから難しく感じるだけ」

少女はにこやかに笑うとふわりと私の方に近づく。

「お悔やみ申し上げます。ようこそ、天国へ」

そしてその少女が一礼した瞬間に、私は花畑に着地した。

空はどこまでも深く青く、暖かな風が吹いている。

「天国？ つまりここは、死後の世界ということよね」

「はい。……そのように裁判官から聞いておりませんか？」

少女はキョトンと不思議そうな顔をする。

「聞いていないわね」

「それはおかしいですね。では、私がお話ししましょう。私の家にご案内します」

少女は花畑に敷かれた石畳の上を歩いていく。

私はその後を追った。

1歩1歩踏みしめるが、現世の感覚と殆ど変わりないように感じる。

そして風が吹いているということは、ここには空気があるのだろう。

息を吸って、静かに吐く。

不思議と息を止めていても苦しくはない。

なるほど、現世に似ているが、現世ではないのだろう。

10分も歩かないうちに決して大きくない家が見えてくる。

「お父さん！ お母さん！ ただいま！」

少女は庭の手入れをしている男性と女性に向かって駆けていく。

どうやら少女の両親のようだ。

「お客さんかい？ アリアナ。ケンドラ、お茶の用意をしてくれ」

男性はアリアナと呼ばれた少女を抱き上げながら、私の方へと歩いてくる。

「ようこそ、ダンブルドア家へ。私はパーシバル・ダンブルドア、アリアナの父親だ」

私はパーシバルが差し出した右手を握り返した。

「十六夜咲夜と申します。ダンブルドア家ということは、アルバス・ダンブルドアのご家族の方ですか？」

「アルバスはうちの長男だ。さあ、ケンドラが紅茶の準備を進めているだろう。家に入ろう」

私は誘われるままに家の中に入っていく。

そして客室のようなところに通された。

「咲夜はここへきたばかりなの。でも裁判をした裁判官が説明を忘れたらしくて……」

「そんなこともあるのだな。彼らも完ぺきではないということなのだろうね」

「アリアナとパーシバルは裁判がどうか話しているが私には何の話かさっぱりだ。」

「お茶が入りましたよ」

「どうも」

ケンドラ……多分アリアナの母親が紅茶の入ったティーカップを4つ並べる。

私は一口その紅茶を味わったが、非常に美味しかった。

「その、裁判というのはどういうものですか？ 何せ死んでから直接ここに来たので」

「死んでから直接ここに来た？」

「パーシバルがおうむ返しに聞き返した。」

「そんなはずはない。死んだ者は等しく生前の行いを裁かれ、天国に行くか地獄へ落ち

るかが決まる」

「そんな記憶はないわね。もしかしてあのアーチって……」

私が3人の顔を見回すと、3人とも不思議そうな顔を私に向けている。

前例の無いことなのだろうか。

「もしかしたら正規のルートを通ってこなかったのかもしれないわね。私は少し特殊な

死に方をしたから」

私はアーチを潜ってしまったことを3人に簡単に説明する。

何か知っているかと思ったが、3人とも首を傾げただけだった。

「潜ったら死んでしまう石のアーチか……ケンドラ、何か知っているかい？」

「いえ、聞いたことはありません」

ケンドラは静かに首を振る。

次の瞬間アリアナが勢いよく立ち上がった。

「そうだ！ 博士に聞いてみましょう！」

「確かにあの人は物凄く博識だ。そうだね、アリアナ。案内してあげなさい」

パーシバルはにっこりと微笑んだ。

私は残っていた紅茶を飲み干すと、席を立つ。

「紅茶、美味しかったです。ケンドラさん。お邪魔致しました」

私は軽くお礼を言うとダンブルドア家を後にする。

アリアナは私の手を取って歩き出した。

「博士はですね、凄く物知りな人なんです。生前は優秀な魔法使いだったらしくて……

この世界では魔法は使えませんが知識はそのままあるはずですよ」

「博士の家まではどのぐらい歩くの？」

「歩きたい距離だけ歩けば目的地に到着しますよ」

その言葉通り5分も歩かないうちにその博士の家に到着する。

ダンブルドア家よりかは少し大きく、細かいところに蛇の装飾が施されていた。

「博士！ 今大丈夫でしようか？」

アリアナが家のドアを叩くと、中から白い髭を生やした老人が出てくる。

その老人はアリアナを見てにつこり笑うと、優しく話し始めた。

「おお、どうしたのじゃアリアナ。……そちらのお嬢さんは見かけん顔じゃのう」

老人は目をパチクリと瞬かせながら私を見る。

「私は十六夜咲夜と申します」

「そうか、そうか。わしはマーリンじゃ」

よろしく、とマーリンは右手を差し出す。

私も右手を出し、マーリンと握手をした。

「お噂は聞いておりますわ。まさかアリアナの言う博士が魔法使いマーリンのことだとは思わなかったけど」

「ほっほ、まだわしは有名なようじゃの。まあ、わしじゃからな」

凄じやろ？ とマーリンは曲がった腰を無理やり戻し胸を張る。

この人物はマーリン勲章のマーリンだとは思うのだが、こんなにもコミカルな人物だったとは思わなかった。

「それで、なんの話じゃったかのう？　アリアナよ」

マーリン博士は家の中に入っていく。

アリアナと私はその後が続いた。

「実は、咲夜は裁判を受けていないって言うんです。石のアーチを潜ったら死んでしまったそうで……」

家の中を歩きながらアリアナはマーリン博士に事情を伝えていく。

マーリン博士はアリアナの話を相槌を打ちながら聞いていた。

「なるほどのう。あのアーチを潜り抜けてしまったのじゃな」

私たちは書齋のようなところに案内される。

そこには何百という本が本棚に収まっていた。

「ご存知なのですか？　魔法省の神秘部に置かれているアーチです」

「今はそんなところにあるのか。あれはこの世とあの世を繋ぐ門じゃ。元々死者が現世に行くために用意されたものなのじゃが、早々に規制されての。特殊な魔法が掛けられて一方通行にされてしまったのじゃよ」

マーリン博士は1冊の本を取り出す。

そこには神秘部に置いてある石のアーチの絵が載っていた。

「ではもともとこちらの世界からでも、向こうに通り返けることができた？」

「そうじゃ。もつとも、今は一方通行になっておるが。咲夜君、君はどの辺に落ちてきたのじゃ？」

「私の家から少し花畑を進んだところですよ」

アリアナが思い出しながら答える。

「ふむ、文献とも一致しておる。じゃあこちら側のアーチはその辺にあるんじゃないの？」

マーリン博士はパタンと本を閉じ、本棚に戻す。

そして書齋の椅子にゆっくりと腰を掛けた。

「問題は裁判を受けずに天国に来てしまったことじゃの。多分今にも……」

マーリン博士が何かを言いかけたその瞬間、玄関のドアが叩かれる。

「ほらきた。最近は厳しくなったという話じゃからのう」

「誰がきたんです？」

「死神じゃよ。少々ここで待っておてくれ」

マーリン博士は髭を撫でつけながら書齋を出ていった。

私は書齋の窓の鍵を開けておく。

しばらくするとマーリン博士は一人の女性を連れてくる。

その女性は黒髪を腰まで伸ばしており、肩に巨大な鎌を担いでいた。

「彼女がそうですね」

私はいつでもナイフが投げられるように身構える。

「私は貴方を迎えにきた死神です。何百年ほどに一度貴方のように変なところからこっちの世界に迷い込んでしまう人間がいるんですよ。では、私についてきてください」

「何処に連れて行くこうつていうの？」

私は鋭く死神を見据える。

死神も目を細くした。

「貴方その眼……なるほど、これは一刻も早く天国から追い出さなければなりません」

その言葉にマーリン博士とアリアナが不安そうな顔をする。

死神は2人に向けて優しく微笑んだ。

「ご安心ください。貴方たちは何も心配しなくていい。十六夜咲夜、裁判官がお待ちです」

「残念だけど、その裁判を受ける気はないわ。私はまだ死んでいないわけだし」

私は少々オーバーに肩を竦める。

「お嬢様の許可なく勝手に死ぬことは許されないもの。じゃあね」

私は横つ飛びに窓の方へと跳ぶとそのまま外へと転がり出る。

そこには既に同じように鎌を持っている女性が数人立っていた。

「そいつが十六夜咲夜よ！一刻も早く捕まえて！」

窓越しに先ほどの死神が叫ぶ。

1人の死神が私に鎌で切りかかってきた。

私はそれをナイフで受け止める。

私自身の能力は使えないが、服や鞆に仕込んだ能力は問題なく使用できるようだ。つた。

「こいつ武器を持っていてるぞ!? 一体何処から持ち込んだんだ?」

切りかかってきた死神が驚いたように叫ぶ。

私は気が付いたことがあった。

「この鎌、刃が付いてないじゃない」

「刃なんてついてたら危ないだろう? ここは天国だぞ?」

私はそのまま後ろに飛びのき死神たちと距離を取る。

「随分安全管理が徹底されているのね」

私は全部で4人いる死神を見回す。

この中で戦闘ができるものは2人だろう。

あとの2人は鎌を構えているだけで、完全に腰が引けている。

「やはり……貴方のその目、人殺しの目です。貴方のような人間がここにはいけな
い」

先ほどの黒髪の死神が窓枠を跨いで外に出てくる。

「貴方を法廷に連行します。抵抗しても無駄です。引きずってでも連れていく」

死神が大きく鎌を振りかぶった。

「やめて!!」

私の目の前にアリアナが飛び出る。

そして両手を広げて死神の前に立ちはだかった。

「彼女を連れて行かないで!」

その様子に明らかに死神が動揺する。

一瞬アリアナを人質に取ろうかとも思ったが、状況が変わりそうなので様子を見ることにした。

「ですが彼女は裁判を受けていません」

「それを言うなら貴方たちの失態で彼女はこちらに来てしまったことになるんじゃないやがう」

マーリン博士がゆっくりと玄関から出てくる。

「あのアーチを作ったのは管理側の者だろう。現世にアーチを残したまま一方通行にしてしまったのも管理側の者じゃ。とすれば、彼女は被害者だとも言える」

「だとしても彼女を天国に残しておくわけにはいきません。彼女の素行を見るに生前は

殺人鬼か殺し屋でしょう」

「だとしても、彼女はまだ死んでいません！ 裁くだけでなく償う機会を与えるべきだと私は思います」

死神とアリアナの間で口論が始まる。

これが天国の争いごとの解決の仕方なのかもしれない。

「ちよつと待って、償う機会って、まるで私が何をしてきたか知っているみたいじゃない」

私がアリアナに問うとアリアナは分かりやすく動揺する。

今更気が付いたが私はアリアナの声に聞き覚えがあつた。

「そうか、貴方、私の夢によく出てくる——」

「何をしているのですか!？」

私の言葉を遮るように何者かが叫ぶ。

その大声にその場にいる全員が振り返つた。

私も死神から意識を逸らさないようにしながらも声がした方向を向く。

そこには少々奇妙な格好をした少女が立っていた。

和服とも洋服とも言えるような紺色の服を着ており、頭には重そうな帽子を被っている。

そして髪は深い緑色だった。

「ここは天国です。休暇に視察に来てみればなんということか。一体何があったのですか？」

その少女の横には背の高い女性が立っており、大きな鎌を持っている。

だがその鎌の先端は波打っており、実用性はなさそうだったが、他の死神のものと違い、相当丁寧に研がれている。

「小町に……それに四季映姫・ヤマザナドゥ。ああ、閻魔様が来てくだされば安心です」
黒髪の死神はホッと息をつく。

今閻魔と言ったか。

私は閻魔という言葉に聞き覚えがあった。

確か仏教では死んだあと閻魔に裁かれて極楽に行くか地獄に落ちるか決まるのだったか。

「なんで仏教圏の閻魔様が西洋にいるのよ」

「視察ですと先ほど申し上げたでしょう。人の話はちゃんと聞きなさい」

四季映姫と呼ばれた少女は厳かに答える。

「視察って言っても四季様、小旅行のようなものじゃないですか？」

「うるさい小町。黙りなさい。それが今の貴方に積める善行です。死神たちよ、この場

は私に任せなさい」

その言葉に死神たちは胸を撫で下ろした。

逆に小町と呼ばれた女性は顔を顰めている。

「出かけるたびに何か拾う癖治しませんか？」

「癖ではなく性分です。それで何があつたのですか？」

死神たちは四季映姫に一礼すると何処かへ霧散する。

「おっと、私としたことが。私は四季映姫。幻想郷の閻魔です」

「私は小野塚小町。鎌を見ての通り死神さ」

私はナイフを仕舞い名乗った。

「十六夜咲夜と申します。実はですね——」

私は閻魔にアーチのことを話していく。

マーリン博士も付け足すようにアーチの詳細を閻魔に説明した。

「なるほど、その話だけ聞けば貴方は白、完全にこちらの失態でしょう。ですが何故アーチに飛び込むようなことになったのか、そこがこの話の焦点となるでしょう」

閻魔は何処からか装飾の施された手鏡を取り出す。

そしてそれを覗き込んだ。

「……………これは」

一体彼女は何を見ているのだろうか。

「私が見た中でも断トツかもしれない。ここまで罪の意識なく人を殺す者を見るのは」

私はその場から動けなくなった。

「貴方は日常的に人を殺しすぎている。ですがそれは決して自分の為ではない。アーチの件にしても、貴方は他人の為に行動している。決して自分の利益の為ではない」

私の手をアリアナが握った。

その感覚で私は我に返る。

「この鏡は浄玻璃の鏡と言いまして、罪人の過去の行いを全て映し出すことができるものです。貴方の過去、全て見させていただきました」

閻魔は手鏡を消すと私の方へと近づいてくる。

「殺人、詐欺、盗み、それは決して許されるものではない。ですが、生い立ちを考慮するとそれが罪であるとも言えない」

閻魔は私の目を覗き込んだ。

「今回は見逃します。お迎えも来ているようですし」

「みつけた!」

急に私の腰に誰かが抱き着く。

私はその声に聞き覚えがありすぎた。

「妹様!？」

私は慌てて妹様を立ち上がらせる。

どうして妹様が天国にいるのだろうか。

「咲夜、こんなところにいたのね。アリアナが教えてくれなかったら気が付かなかったわ」

私はアリアナを見る。

アリアナは私から視線を逸らした。

「おふたりはお知り合いなのですか？」

私が妹様に尋ねると妹様は一度頷いた。

「あら、アリアナったら私のことを隠していたのね」

「まずいかな……って思ってた」

アリアナは恐る恐る閻魔の方を見る。

閻魔は怪訝な視線を妹様に向けていた。

「貴方はフランドール・スカーレットですね。しかもまだ生きている。どのようにこの世界に？」

「私にとってあつちとこつちを隔てる壁なんかないわ。あつたかもしれないけど、今頃

木っ端微塵ね」

妹様は肩を竦める。

その瞬間、私の体が何かに引つ張られるように宙に浮かんだ。

それを見て閻魔が慌てて口を開く。

「貴方は少し人間に冷たすぎる。このままでは川を渡れないかも知れない。川の幅は、その霊の歴史の幅。生前の行いで幅が決まるのです。貴方は人に生まれるべきではなかつた。人として生まれてしまつたばつかりに、自覚することなく罪を重ねてしまつた。私が判決を下すまでもなく、貴方は真つ黒です。ですが、まだその時では無いようです。行きなさい、十六夜咲夜。その罪で穢れた身を清める為に、善行を積みなさい」

「説教が長いですよ四季様」

「うるさい小町」

私はそのまま引き寄せられるようにアーチのある方向へと飛んでいく。

見下ろすとアリアナが私に手を振っていた。

「咲夜。置いてくわよ？」

妹様は私の少し前を飛んでいる。

妹様から見たら、私は後ろ向きに飛んでいることになるのだろうか。

「あ、そつか。慣れないとこの世界では動きにくいものね。大丈夫、私が導いてあげる

わ

突然暖かい風が途切れ、私が一番初めにきた真つ暗の世界になる。

妹様は私の手を掴んで引いた。

妹様に連れられるままにまっすぐ飛ぶと、暗い空間に石造りのアーチが見えてくる。

「これを潜れば生き返れるわ。本当なら一方通行だけど、パチュリーが何とかしてくるはず」

妹様は私から手を放した。

私はそのまま慣性でアーチの方へと飛んでいく。

「私は別ルートで帰るわね。紅魔館で会いましょう」

妹様は私とは反対の方向へ飛んで行ってしまった。

「人を死へと導く門よ。その中に取り込みし魂と肉体を現世に返せ」

パチュリー様の声がアーチの奥から聞こえてくる。

「咲夜、十六夜咲夜」

お嬢様の声だ。

「今戻ります。お嬢様」

私はアーチへと飛び込んだ。

「思い出した?」

妹様に声を掛けられて私は我に返る。

妹様はもう殆ど絵を描き終えていた。

そうだ、私は妹様の部屋に花瓶を飾りにきて……それで……。

「……。はい、思い出しました。私は天国に行つてアリアナ・ダンプルドアに出会つて、そして閻魔に説教されて。最後は妹様に手を引かれてこちらの世界に戻つてきた」

「正解」

妹様は最後に絵の端に自分のサインを書き込む。

「はい、完成。花のお札にこれをあげるわ。確かお姉さまが蘇りの石を持っていたわね。あれを使えば咲夜でもアリアナと会話できると思う。また今度試してみなさい」

妹様は描き終えた絵を私にプレゼントしてくれた。

色のついていない黒インクだけの絵だが、非常に上手く描けている。

「ありがとうございます。今は確か小悪魔が持つていたと思いますので近いうちに呼び出してみようかと思ひます。彼女によろしくお伝えください」

私は一礼すると妹様の部屋を後にする。

何気なく立ち寄つただけだったが、妙に疲れてしまった。

「人間に冷たすぎる……か。吸血鬼に生まれたら、私は天国に行けたのかな？」
善行を積みなさい。

何百何千と重ねた罪で穢れた私の身を、清めることができるとは思えない。

私は地獄へ落ちてもいい。

お嬢様が幸せなら、私はそれで幸せだ。

私は自分の部屋に妹様の描かれた絵を飾ると時間を止めてベッドで横になる。
うつらうつらとしているうちに、私は眠ってしまった。

分断とか、引つ越しとか、杖とか

『私が指導するのは生徒であつて、貴方ではないわ』

「そうか！」

魔法薬学の授業中、ハリーは夏に初めてパチュリーと会つた時のことを思い出し、叫んでしまった。

ハリーはハツと我に振り返り周囲を見回すが、皆キョトンとした顔でハリーを見ている。パチュリーはホワイトボードに反応式を書いているところだ。

「凄いいじゃない。この式が生徒に理解できるとは思わなかつたわ」

パチュリーは皮肉がましくそう呟いてハリーに座るように促す。

ハリーは恥ずかしそうに椅子に座りなおした。

30分も我慢して座っていると、終業のベルが鳴り生徒が地下牢教室から出ていく。

ハリーは教室に人がいなくなつたのを見計らつてパチュリーに話しかけた。

「ノーレッジ先生、教えて欲しいことがあるんです」

「何かしら」

パチュリーは相変わらずハリーの方を見ずに机の上を片付けていた。

「ホークラックス、というもののなのですけど。先生はご存知ですか？」

「分霊箱のことね。勿論知っているわ」

パチュリーは机の上を綺麗にすると、ホワイトボードに分霊箱の説明を書いていく。

「分霊箱とは、自分の魂の一部を体外に取り出してほかの容器に隠してしまう魔法よ。この魔法を使えば肉体が滅んでも生きながらえることができる」

「他人の分霊箱を見つけるには、何か方法があるんですか？」

「ないわ。ただ、近づけばある程度はわかるけど」

パチュリーは人間の魂を裂いた絵を描いていく。

「例えばだけど、ヴォルデモートは分霊箱を7つ持っているわ。分霊箱の説明に複数作ってはいけないことが書いてあるけど、その理由が分かる？」

分霊箱を複数作ってはいけない理由。

それよりもハリーには気になることがあった。

「分霊箱が7つ!? 6つではないんですか？」

パチュリーはそれを聞いてじつとハリーの目を見る。

「そう、ダンブルドアは教えていないのね。まあ6でも7でも説明には影響しないわ」

パチュリーは大きなビーカーに溢れんばかりの水を注いだ。

「ここに1リットルの水がある。これを命の残量とするわ。1つ目の分霊箱を作るため

に魂を引き裂くわよ」

パチュリーはビーカーの中身を半分別のビーカーに移し替えた。

「この分断された魂Aを、仮に日記と名付けましょう。本体の魂は500ミリリットル。日記の魂は500ミリリットル。さらに分けるわよ」

パチュリーは別のビーカーを取り出し本体の魂を2つに分けた。

「日記が500、本体が250、分霊箱B、仮に指輪とするわ。指輪は250」

パチュリーは更に本体の水を2つに分ける。

ハリーはパチュリーの言わんとすることを理解した。

「日記が500、指輪が250、分霊箱C、カップにしましょうか。カップが125、本体が125」

その後のパチュリーは次々と水を分けていく。

「日記が500、指輪が250、カップが125、ロケットが62.5、髪飾りが31.25、蛇が15.625、本体が15.625。最初に作った分霊箱と最後に残った本体の魂、その差は？」

「えつと……」

「32倍よ。まあ厳密には完全に半分にしてしまうわけではないから、これは単なるイメージね。つまり2つ以上作ると分霊箱の方が魂を多く持つてしまうことになる。今

のヴォルデモートはいわば搾りカスね。ヴォルデモートはそこまでの知識は持つていなかったと見えるわ。そもそも不死性を求めるのに分霊箱を作るのが間違いで——」

「先生、先生は先ほど分霊箱が7つあると言いました。では、最後の1つはどんな形をしているんでしょう？」

パチュリィは説明を遮られたことに嫌な顔1つせず、手を一度振るう。

その瞬間にハリーの目の前に大きな鏡が現れた。

「これよ」

ハリーはその鏡を観察する。

「最後の分霊箱は、鏡？」

「違うし、厳密には最後ではない。貴方、自分の両親がどのようにして死んだか知っているかしら」

パチュリィの無神経な物言いにハリーは少し顔を顰める。

パチュリィはその様子を見てため息をついた。

「リリーが貴方に守りの呪文をかけたとき、ヴォルデモートはリリーの命を奪ったわね。分霊箱を作る方法は知っているかしら」

「殺人を犯したときに引き裂かれる自分の魂を容器に詰める」

「そう。でも、魂が不安定だと意図せずにそれが起きてしまうことがある」

ハリーはもう一度鏡を見る。

「じゃあ、……その、まさか!」

「そう、そのまさか。6番目の分霊箱は貴方よ。そしてダンブルドアはこの事実気が付いているわ。貴方が蛇の中からアーサーを見たその時からね。貴方が蛇語を話せるのも、貴方とヴォルデモートが繋がっているのもそのせい。貴方が生きている限り、ヴォルデモートは生き続ける。貴方の中のヴォルデモートが死なない限りね」

「……………」

ハリーは衝撃の事実黙り込んでしまう。

自分が分霊箱であるという話は、考えてみれば十分納得できる話だった。

ハリーが何よりも衝撃に思っていることは、そのことをダンブルドアが話していないなかつたということである。

「つまり、僕は死ぬしかない?」

「ヴォルデモートを殺すなら……ね」

ハリーは鏡の前で髪の毛を持ち上げる。

そこには稲妻型の傷跡があつた。

「分霊箱を元に戻すことはできないのですか? その、魂を追い出すことは」

「分裂した魂をくつつけることはできるわよ。ヴォルデモートが自分の行いを悔い改め

たらしい」

そんなことは不可能だとハリーは思う。

あのような悪の権化が悔い改めるわけがない。

本当はハリーはどうしたらレミアアから分霊箱を譲り受けることができるか聞こうと思っていたのだが、聞けるような気分ではなかった。

ハリーは呆然と地下牢教室を出る。

そしてそのままフラフラと談話室に戻った。

パチュリーはその日の夜、城を出て禁じられた森を歩いていた。

勿論、目的無く散歩をしているわけではない。

自らの調査した魔法薬で完全に透明になっており、森にいる魔法生物にもパチュリーの姿を捉えられる者はいない。

パチュリーは禁じられた森を測量しているのだ。

禁じられた森は非常に広い。

だが今からパチュリーがやろうとしていることは、失敗は許されない。

少しでも大ききや場所がズレると酷いことになる。

夜の森の中で3時間ぐらい慎重に測量を進めていく。

そして魔導書を開きその中に魔力を籠めた。

次の瞬間時間が止まる。

パチュリーが止めたわけじゃない。

紅魔館にいる咲夜が合図を受けて時間を止めたのだ。

私はパチュリー様の合図を受けて時間を停止させた。

今現在紅魔館にいる者は妹様を除いて妖精メイドも全員が大図書館に集まっている。

集まっている全員はヘルメットや防災頭巾を被っており、私もいつものメイドカチューシャではなく工事現場用の黄色ヘルメットだ。

私はきちんと時間が停止していることを確認すると Hogwarts にある禁じられた森へと姿現しする。

そこで透明になっていないはずのパチュリー様の時間停止を解除した。

次の瞬間スウットとパチュリー様の姿が現れる。

「はい、パチュリー様」

私は紫色のヘルメットをパチュリー様に手渡した。

パチュリー様は一体何事だと私とヘルメットを見たが、受け取って被ってくれる。

「お嬢様の指示で、紅魔館の住民は皆被ることになっています」

「もし失敗したらヘルメットなんて意味ないと思うんだけど……まあ気分よね」

パチュリー様が手をかざすと森の一部分が光り出す。

その光はふわりと浮き上がり、小さな玉になってパチュリー様の中に入っていった。

「よし。咲夜、もう戻っていいわよ。時間だけしつかり止めておいて」

「かしこまりました」

私は姿現しで大図書館へと戻る。

そしてお嬢様と小悪魔、美鈴さんの時間停止だけを解除した。

「さて、もうすぐよね?」

「はい。準備は整っているようです」

お嬢様と美鈴さんは非常にワクワクとした様子で何か起こるのを待ち構えている。

小悪魔はそんな2人を見て笑っていた。

「終わったわよ」

次の瞬間お嬢様の前にパチュリー様が現れる。

お嬢様はキョトンとしていた。

「何も起きていないじゃない」

「咲夜、時間停止を解除していいわよ」

私はパチュリー様に言われた通りに時間停止を解除する。

その途端に図書館は妖精メイドの話し声で溢れかえった。

「全員注目！」

パチュリー様が魔法で拡大した声を出すと妖精メイドたちは一斉に振り向く。

「これから数か月館の外には出られないわ」

パチュリー様がそう告げると妖精メイドからブーイングが沸き起こる。

「どうか結界があるから妖精メイドは出られないけどね。レミイ、美鈴、咲夜、小悪魔、よく聞きなさい。紅魔館はホグワーツの禁じられた森の中に存在する」

パチュリー様はそう言った。

「さて、儀式は終了。一応起きたことを説明しておくわね」

パチュリー様の手の動きに合わせて黒板が現れる。

「まず私たちが向こうの世界に渡るときに紅魔館も一緒に送りたいって話になったのよね。それで戦いが起こりそうな場所に紅魔館を持ってきた」

黒板にホグワーツ城が描かれ、その敷地内にある禁じられた森に紅魔館が描かれる。

「もつとも、ただこつちに持ってきたただだとダンブルドアにその存在がバレるし、なにより目立つわ。だから私は紅魔館が移動してくると思われる場所に予め忠誠の呪文を

掛けた。これは生きた人間に秘密を封じ込める魔法で、私が秘密を漏らさない限り館にぶつかるまで近づいても紅魔館の存在には気が付けない」

パチュリー様は紅魔館のイラストに大きくクエスチョンを書いた。

「つまり紅魔館は今誰にも認知されない。同時にヴォルデモートの分霊箱も隠されてしまったわけだけど、まあいいわよね」

「ええ、問題ないわ」

お嬢様は大きく頷いた。

「でもつまらないわね。もっとガタンゴトンと大騒ぎになると思ったのに」

お嬢様は残念そうに防災頭巾を脱ぐ。

その様子を見てパチュリー様は肩を竦めた。

「私がそんなへまをするわけじゃないでしょう？ それと、美鈴。貴方門番の仕事はもういいわ」

「解雇通知!?!」

美鈴さんは啞然とするが、そうではないだろうに。

「あら、本当に解雇してもいいのよ?」

「おげうさま、冗談はよしてくださいよ」

美鈴さんはへらへらと笑うが、お嬢様の顔を見て無言で頭を下げる。

お嬢様も無言で美鈴さんの頭に拳骨を落とした。

「いった!?」 なんて叩かれたの私?」

「また少し出かけてくるわ。ホグワーツに」

パチユリー様は肩を竦めながら姿をくらました。

お嬢様は美鈴さんと私についてくるように言い城の中を歩き出した。

確かに館にある数少ない窓からはいつもと違う景色が見えている。

お嬢様はまつすぐ時計塔を上がっていった。

時計塔はちよつとした展望台のようになっている。

そこからは確かにホグワーツ城が見えた。

「面白いわね。ここちからは見えるのに向こうからは見えないなんて」

お嬢様はぼつりと呟く。

美鈴さんは城を観察していた。

「どう?」 咲夜、久しぶりのホグワーツは」

「……不思議な感じがします。そもそもこのアングルから城を見ることが殆どないので」

ここに紅魔館を移動させてきたということは、ここで戦争を起こすということなのだろ

つまりは関係のないホグワーツの生徒が大勢死ぬということである。

私は今日思い出した天国でのことを思い出していた。

「そうでしょうね。でも、ここともあと2か月でお別れよ。私は6月にここで戦争を起こす。多分大勢死ぬでしょうね。都合のいいことに。私たちは伝説になるのよ」

お嬢様はホグワーツを見て不敵に笑う。

美鈴さんものほほんと微笑んでいた。

「伝説に、ですか？」

「そう、伝説。異端である魔法界という世界から異端だと認識されるように。伝説、幻想、神話。まあ特殊な存在だったら何でもいいわ」

お嬢様はそのまま時計塔を下りていく。

美鈴さんもその後を追って時計塔を下りていった。

私はポケットから小悪魔から預かった蘇りの石を取り出す。

そしてそれを手の平の上で3回転がした。

私の隣に1人の少女が降り立つ。

アリアナだ。

アリアナは時計塔の窓に腰かけると私と向き合う。

「お久しぶり、アリアナ」

私が微笑みかけるとアリアナも微笑む。

「忘れていたなんて酷い人です……とは、言いませんよ。多分あの場にいた四季映姫という閻魔様が記憶が戻らないように細工をしたんでしよう」

蘇ったアリアナの姿はゴーストよりはしっかりとしているが、肉体があるわけではない。

悪魔に転生する前のリドルのような状態だった。

「聞かせてもらえるかしら。貴方と妹様、フランドール・スカーレットお嬢様の関係について。そして、私の夢のことも」

アリアナは困ったように目を伏せる。

だがゆっくりと話し始めた。

「そうですね。……フランと初めて会ったのは、私がまだ生きていた時です」

「つまりは100年ぐらい前？」

アリアナは頷く。

「私の生い立ちや、生前に関しては小悪魔さんから聞いています」

「今思えばだけど、よく話したわね」

「彼女は言葉が上手いですから」

フフとアリアナは微笑む。

「私は小さい頃にマグルの少年たちから暴行を受けました。そのせいで私は心を閉ざしてしまつた。魔法力を体内に隠してしまつた。ですが、それは長くは持ちません。風船に空気を入れすぎると破裂してしまふように」

ぷくう、とアリアナは風船を膨らまし始める。

なんとというか、とても一生懸命だ。

「はあ、はあ……とにかく、ガス抜きが必要なのです。ですがあの頃の私にはそれすらも難しかったです。そんな時、夢の中でフランに出会つたのです。フランは私に代わつて溜まつた魔力を抜いてくれた。ちよつとやり方が荒々しくて途中でお母さんを殺してしまつたけど……」

ふう……とアリアナは風船の空気を外に出す。

「アバーフォースお兄ちゃんは優しくかつたなあ……お母さんを殺した私を責めることはなかつた。アルバスお兄ちゃんは……私のことを煙たがつているようでした。そして、ついにことは起きました」

アリアナは私に右手を差し出す。

私はその手を握つた。

その瞬間私は暗闇に落ちていく。

しばらく落ちると小さな家が見えてきた。

そこには3人の青年がおり、そのうちの1人はアリアナを庇うように立っている。

「だから無理だ！ アルバス！ アリアナを動かすことはできない。僕は兄さんが何をしようとしているのかは知らない。でも、アリアナを連れまわすことは不可能だよ！」

アリアナを庇っているのはアバーフォースのようだ。

ということはその向かいにいるのがアルバス、つまり Hogwartz にいる ダンブルドアで、その横にいるのが グリンデルバルド だろう。

「しかしだなアバーフォース、僕らがしようとしていることはそんな小さなことじゃない」

アルバスは少し気を悪くしたように眉を顰めている。

だが グリンデルバルド は気を悪くした程度ではなかった。

「アルバス、お前の弟はお前には似なかつたみたいだな！ わからないのか？ 俺とアルバスで魔法界を変えるんだ。魔法使いが表の世界を闊歩し、マグルは地を這いつくばる。そしたらそこにいるお前の妹を隠しておく必要もなくなるんだ。それがわからないのか？」

「そんな横暴が許されるはずがない！ アルバスも グリンデルバルド もどうかしているよ！ マグルを支配するだって？」

「ああ、『より大きな善のため』」

「狂ってる!!」

「それはそつちだ! クルーシオ!」

ついにグリンデルバルドが杖を抜き、アバーフォースに呪文を掛けた。

「やめろ!!」

いきなりアバーフォースに磔の呪文を使ったグリンデルバルドをアルバスが止める。

だがそれで止まるならグリンデルバルドは犯罪者にならなかつただろう。

そのまま乱戦へともつれ込み、三つ巴の争いになる。

部屋中を閃光が飛び交い、爆音が鳴り響く。

3人の魔力に当てられたのか、アリアナが苦しそうに呻いた。

だが、命がけの戦いをしている3人はその様子に気が付いていない。

「きひ」

次の瞬間アリアナの様子が変わった。

「きやはは、あははははは!」

アリアナが不意にグリンデルバルドに手のひらを向ける。

それを見てもグリンデルバルドは気にも留めなかつたが、アリアナの目を見て考えを

一変させる。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハツツ!!」

アリアナの手の平から赤い光弾が放たれる。

グリンデルバルドは咄嗟にそれを避けた。

「なんだ？　いつもの発作か!？」

アバーフォースは心配そうな声を出す。

だがそんなことで3人の戦いは止まらない。

アリアナという固定砲台を部屋の中に置いたまま戦いは激化していく。

だがやはり一番の問題はアリアナだろう。

「——は、——あ——」

記憶を見ているだけの私にも感じ取れるほどの殺気がアリアナから放たれる。

3人は同時にアリアナに呪文を掛けていた。

私はその判断は間違っていないかと思う。

あのまま放っておいたら死体は1つでは済まなかっただろう。

結果的にアリアナは死んだ。

次の瞬間私は紅魔館の時計塔へと帰ってくる。

「私は自分の死を後悔していません。あのまま生きていてもお兄ちゃんたちの枷になるし、フランが私の体を借りて暴れなかったら、私以外の誰かが死んでいたでしょう。私は自由になった体で裁判を受け、天国でお母さんとお父さんに再会しました。フランも

私に会いに来てくれた」

「貴方と妹様の関係は分かったわ。というか、妹様が外の世界の情勢にお詳しいのはそういう感じで外と繋がるパイプを持つていたからということね。でもまだ貴方が私の夢に出てきた理由を聞いていないわ。っていうか、死んだ人ってそんなに簡単に人の夢に入れるものなの？」

「普通無理です」

アリアナはきつぱりと言った。

「ただ貴方の心……いえ、魂は少々不安定になっています。フランの協力もあつて私は貴方の夢に入ることができた。もともとフランも不安定だったからこそ私の心の中に入つてくれたわけですし」

「一体何の目的で？」

「フランと私の好奇心、では、駄目ですか？ きつかけというものは些細なものであることが殆どです。それがどんな結果を生むとしても」

アリアナは笑いながら答える。

とぼけているような口調ではあるが、嘘を言っているようには見えない。

「フランは貴方のことを気に入っているんですよ？ 吸血鬼と妖怪に育てられた少女。

若い頃から人の殺し方を教えられて、人間とは違う理を学んだ少女が果たして人間のま

ま生きていくことができるのかって。結果としては、夢でバランスを取ることによって上手いこと人間の世界に溶け込めたみたいですけど」

「どういうこと？」

「貴方がロンドンで人を殺す夢を見始めたのはいつ頃ですか？」

アリアナはまた風船を膨らまし始める。

だが今度は説明の為ではなく、ただ遊んでいるだけのようだが。

「ホグワーツに入学してからよ。枕が変わったせいかしら」

「人を殺さなくなったからです」

なるほど、と私は納得してしまった。

確かに今思い返せば休暇に紅魔館に帰ってきたとき、人間を殺した次の日はそのような夢を見なかったような気がする。

「つまり私は現実で人を殺さない分、夢で人を殺して精神面のバランスを取っていたということ？ とんだ殺人鬼ね、私」

私は肩を竦める。

少し異常だとは思っていたが、自分がそこまで殺人に執着しているとは思わなかった。

「そうではないです。貴方は殺人を特別なものにしたくはなかった。日常の1つの動作

として意識したかった。つまりは間隔を空けたくなかったんです。殺人が特別なものになってしまいますから、『罪』の意識を持ってしまいますから」

「何が言いたいのよ」

「貴方は結局何処までも人間だということですよ」

アリアナは風船に乗ってふわりと浮き上がる。

「今日は楽しかったです。また夢でお会いしましょう」

そしてそのまま風に流されるままに窓の外に出て上へ上へと昇っていった。

「何処までも人間、ね。言ってくれるじゃない」

私は窓に施錠をすると時計塔を下りていく。

そして蘇りの石を返すために大図書館へと向かった。

北海の中心に浮かぶ小さな島に建てられた魔法界の監獄、アスカバン。

現在、アスカバンは犯罪者の楽園になっていた。

監獄内は改装が加えられ、とてつもない大きさになっている。

周囲には闇市が並び、小さな街のようになっていた。

そんなアスカバンの監獄内の奥まった場所にある一室。

そこでは今まさにヴォルデモートとその部下たちの話し合いが行われている。

「巨人部隊はどうだ？ マクネア。戦場で身内を粉々にしてくれては困るぞ？」

「新たに巨人にも効く服従の呪文を開発しました。あと数週間もあれば十分に戦力となりえるかと」

ヴォルデモートの問いにマクネアが答える。

マクネアは元魔法省の死刑執行人だ。

今は巨人部隊の教育を行っている。

「グリンデルバルドのところから流れてきた奴らは使えそうなのか？」

「いえ、我が君。ただ居場所が欲しいだけの連中です」

「なら最前線に配置しろ。盾にはなるだろう」

レストレンジは恭しくヴォルデモートに一礼する。

「クラウチ、新しく入った死喰い人たちの教育はどうなっている？」

「ああ、使えん雑魚ばっかだ！ 一体奴らは学校で何を学んできたんだ？ このよう

情勢だというのに、まさに油断大敵!!」

「うるさい」

ヴォルデモートはクラウチにびしやりと言う。

クラウチは指摘を受けて口をもごもごとさせた。

「……なんにしても、使えるようになるまでにあとひと月は掛かるだろうな」

「そうか、ではそのまま続ける。クイレル、魔法省はどうなっている？」

「内部での工作は大方終了致しました」

ふむ、とヴォルデモートは考え込む。

「6月には全ての準備が整いそうだな」

ヴォルデモートは小さなガラス玉を目の前に掲げた。

そのガラス玉は薄く光っており、中には何かが蠢いていた。

「これはかの予言者レミリア・スカーレットが私に残した予言だ。あのバカが偶然発見したのだが、たまにはアレも役に立つということだろう。この予言によれば私は6月に大きな戦争を引き起こすらしい。つまりはそういうことなのだ」

全員がヴォルデモートの話に集中する。

「この予言には戦争が起こることの他に、もう1つの予言があった。それは6月の戦いの中でダンブルドアが死ぬということだ。だとしたら、この機を逃すわけにはいかない。予言通りに6月に戦争を起こし、ダンブルドアには死んでいただこうではないか」

ヴォルデモートは不敵に笑う。

クイレルはそんなヴォルデモートを見てほくそ笑んでいた。

ヴォルデモートは予言を重要視しすぎるところがある。

それはハリー・ポッターの予言の件で確認済みだ。

レミアアは予言という方法でヴォルデモートの背中を押した。

「ルシウスよ。馬鹿な貴様の息子は今どのような状況だ？」

ヴォルデモートは冷ややかな視線をルシウスに送る。

ルシウスはヴォルデモートから預かった日記を私利私欲の為に使用した為にヴォルデモートの逆鱗に触れてしまったのだ。

殺されることはなかったが、ルシウスの立場は現在とても低い。

「もうすぐキャビネットの修理が終わるとのことです。6月までには十分間に合うかと」

「そうか、では事を起こすのは7月だと伝える。スネイプにもな」

「ですが——」

「なに、保険だ。情報が漏れてしまつては奇襲にはならない」

ルシウスは深々と頭を下げる。

「さて、これで残る障害は一つになった」

ヴォルデモートは全体を見回す。

「今現在ホグワーツはパチュリー・ノーレッジを所有している。それだけで私たちは負けるかもしれないということを理解せねばならん」

「そのことなのですが」

クイレルがヴォルデモートの言葉に口を挟んだ。

「既に解決しております。我が君」

クイレルの言葉に部屋の中がどよめく。

ヴォルデモートはまつすぐクイレルを見つめた。

「どういふことだクイレルよ」

クイレルはその場からスツと立ち上がる。

まるで誰かに席を譲ったようだった。

次の瞬間先ほどまでクイレルが座っていた席に一人の少女が現れる。

パチュリー・ノーレッツジだ。

それを見て素早く周囲の死喰い人は杖を構えたが、パチュリーは気にも留めない。

「貴様！ 裏切りか!? 死ね!!」

クラウチが呪文を放とうとするが、杖の先から閃光が出ることはなかった。

「まあ待て。我が君、パチュリー・ノーレッツジは裏から私たちを支援してくれていたのです。アズカバンへの物資搬入ルートや吸魂鬼を制御する魔法、情報操作などなど、あまりにも高度な魔法が使われていると思つたことでしよう。全て彼女の功績です」

部屋がざわざわと騒がしくなる。

ヴォルデモートとパチュリーはそんなことは気にせず睨み合っていた。

いや、決して睨んでいるわけではない。

相手の目を見て互いに開心術を掛け合っているのだ。

「なるほど。嘘ではないようだ。賢者パチュリー・ノーレッツジよ。我々は6月にホグワーツで戦争を起こす。貴方はどちらにつく？」

それを聞いてパチュリーは眉を顰める。

「戦わないわ。趣味じゃないもの」

「どちらにも加担しないということか？」

「ええ」

ヴォルデモートとパチュリーは互いに探り合うように見つめ合う。

「そうか。クイレルもことごとくジョーカーを引き当てる男だ。悪運が強いとも言える。その言葉、決して忘れるな」

パチュリーはコクンと頷いて虚空へと消える。

クイレルは椅子に座りなおした。

「クイレル、今後もパチュリー・ノーレッツジを監視するのだ。邪魔されては敵わんからな」

「承知しております」

これで死喰い人陣営の準備は整ったとクイレルは考える。その後も10分ほど会議が続き、今日は解散となった。

クイレルは部屋を出て、アズカバンの中を歩いていく。

そして煙突飛行ネットワークを使って紅魔館へと移動した。

「……ん？」

クイレルの目の前には森が広がっている。

周囲を見回すが紅魔館らしき建物の影は見えない。

「なるほど、この前言っていた引越しというやつだろう」

クイレルは試しにロープのポケットを漁る。

そこには身に覚えがない羊皮紙が1枚入っていた。

『紅魔館はホグワーツ敷地内の禁じられた森の中に存在する』

「なるほど、忠誠の呪文か」

クイレルは後ろを振り返る。

そこには古ぼけた暖炉がぼつんと残されていた。

クイレルはその中に入りもう一度煙突飛行をする。

今度は問題なく紅魔館の大図書館へと出ることができた。

「お久しぶりですね、クイレル」

小悪魔がクイレルの存在に気が付いて近づいてくる。

「ホグワーツに紅魔館を移したのですね。流石はパチュリー様と小悪魔様です。ヴォルデモートの陣営は既に準備が出来ているとお嬢様にお伝えください。あとはお嬢様の匙加減で戦争を起こすことができます」

「そうですか、わかりました」

クイレルは小悪魔に頭を下げると暖炉に戻り魔法省に戻った。

暖炉の火で羊皮紙を燃やし、灰にしてしまふ。

そして何事もなかったかのように仕事を再開させた。

パチュリーがまた透明になり城へ続く道を歩いていると、ハグリッドの小屋の中ですすり泣く声が聞こえてきた。

何かあったのだろうかとパチュリーは窓から小屋の中を覗く。

そこではハグリッドが目から大粒の涙を流し泣いていた。

「ううおあ……アラゴグ……、かわいそうに……」

どうやら誰か死んだようである。

ハグリッドは全身に擦り傷を負っていた。

「お邪魔するわよ」

パチュリーは解毒剤を飲み干し小屋の扉を押し開ける。

ハグリッドはビクンと震えパチュリーの方を見た。

「なんだ、お前さんか。すまんが今日は帰ってくれ」

ハグリッドは入ってきたのがパチュリーだとわかるとまた机に伏せる。

パチュリーが手を振るうとハグリッドの傷が完全に癒えた。

「そういうわけにもいかないわ。一体何があったの？」

パチュリーはハグリッドの前へと回り込む。

そして椅子を引っ張ってきて腰かけた。

「……アラゴグが死んだ。俺が飼ってたアクロマンチユラだ」

「ああ、例の。弱っているって言っていたものね」

パチュリーは窓から外を覗く。

そこには大きな蜘蛛がひっくり返って死んでいた。

「埋めてあげないの？」

「あいつは夕暮れが好きだった。明日の夕方に埋めてやろうと思つちよる」

ハグリッドは大きく鼻を吸りあげた。

「俺あ、あいつを卵から孵したんだ。産まれたばかりのころにや、そりゃかわいい奴だつ

た」

「かわいいでしょうね」

パチュリーはごそごそとロープの中に手を突っ込む。

そして何処からともなく大きな酒瓶を取り出した。

「これ、私からアラゴグへの饞別」

パチュリーはその大瓶を机の上に置いて椅子から立ち上がる。

「ありがてえ。アラゴグもきつと喜んどの」

パチュリーは手を振りハグリッドの小屋を後にした。

4月が終わり、5月になる頃。

ダンブルドアは校長室で本格的に頭を抱えていた。

悩みの種はもちろん分霊箱だ。

紅魔館にあるということは確定しており、実物もこの目で見た。

だがレミアアが突きつけてきた条件は『十六夜咲夜』との交換。

死者を蘇らせ、連れてこれたら譲るといふ無理難題だ。

数か月ほどダンブルドアは十六夜咲夜の消息が掴めないか探し回ったのだが、結局手がかりは得られなかった。

そしてついに考え方を変え、紅魔館に盗みに入ろうと計画を立て始めたがその前に紅魔館は何処かへと姿をくらませてしまう。

そこから先は紅魔館の主であるレミリアは勿論のこと、従者の美鈴や小悪魔の消息まで掴めなくなってしまう。

まさにお手上げだ。

残された時間は残り少ない。

「……………」

ダンブルドアは机の中から便箋を取り出すと、手紙を書き始める。

この手紙が届くかどうかわからないが、これに賭けるしかないだろう。

「フォークス、この手紙をレミリア・スカーレット嬢かその関係者へ届けておくれ」

フォークスは便箋を啜えたとその場で燃え上がるように消え去る。

そしてダンブルドアは考え方を切り替えた。

四の五の言っている場合ではない。

これは魔法界の命運をかけた戦いなのだ。

「より大きな善のため。そうじゃったな、ゲラート」

ダンブルドアは校長室を後にする。

より大きな善のため、魔法界を救うため、そして何より過去の柵を清算するために。

「ん？　これは……不死鳥の羽根ね」

私は館の掃除中に紅い羽根を見つける。

そしてそれとともに1つの便箋を見つけた。

どうやらダンブルドアの飼っている不死鳥がここに手紙を届けに来たらしい。

「たしかパチュリー様の話では、手紙は普通に届くのよね。こういうのをご都合主義つていうのかしら？　魔法だから少し違うか」

私は便箋を拾い上げる。

お嬢様宛ての手紙のようだった。

私は時間を止めお嬢様の部屋の前まで移動する。

そして時間停止を解除し、扉をノックした。

「お嬢様、手紙が届いております」

「入りなさい」

部屋に入るとお嬢様は一人でチェスを並べていた。

「ダンブルドアからです」

お嬢様は私から便箋を受け取ると、封蝋を切つて手紙を取り出す。

そしてそれを読み、ニヤリと笑つた。

「女々しいわね、ダンブルドアも。過去に色々と背負い込みすぎているのよ」

「分霊箱に関する手紙ですか？」

お嬢様は私に見せても問題ないと判断したのか手紙を私の方に差し出す。

私はその中身を確認した。

そこには私に関することの謝罪文と魔法界の未来のことが書かれている。

そしてお嬢様の所持する宝がないと魔法省がヴォルデモートの手に落ちると書いてあつた。

「まだあと一か月早いわね」

「渡す気はあるんですね」

当然でしょう？ とお嬢様は胸を張つた。

「ヴォルデモートを殺すのはあくまでダンブルドアかハリー、つまり向こうの陣営の間よ。まあダンブルドアはヴォルデモートに殺されるんだけど」

私はお嬢様に手紙を返す。

お嬢様は手紙を跡形もなく燃やし尽くした。

「クイレルに伝えなさい。ホグワーツに奇襲をかけるのは6月13日にしなさいと」
「6月の13日……金曜日ですか」

「そう、伝説を作るにはピツタリ。楽しい夜になりそうね」

私は一礼するとお嬢様の部屋を出る。

そして煙突ネットワークを用いて魔法省に向かった。

「ふむ、13日の金曜日か。お嬢様らしい選択だ。わかった、調整しよう」

クイレルは仕事をしつつも私の話に頷いた。

「なんだかささらに忙しそうに見えるわ」

「殆どがアズカバンを隠すための書類だ」

「それはそれは、ご苦労さまです」

クイレルは疲れたような目をこちらに向ける。

私は大きく肩を竦めた。

「いい？ お嬢様の計画を成功させるためには貴方の働きが不可欠よ」

「言われなくても分かっているさ。君こそ、学校に行っていないんだからお嬢様のサポートをよろしく頼む」

「言われなくても分かっているわ」

私はおうむ返しにするようにクイレルに言う。

次の瞬間魔法大臣室の扉が叩かれた。

私は急いでその場から姿をくらました。

「首尾はどうじゃセブルス」

ダンブルドアは校長室でスネイプに声を掛ける。

スネイプの後ろにはマルフォイがおり、ダンブルドアの後ろにはダンブルドアと同じぐらい老けた老人が1人立っていた。

「あまり良いとは言えないでしょう。7月にホグワーツに総攻撃を仕掛ける計画を闇の帝王は立てております」

7月という言葉にダンブルドアの表情が少し緩む。

「7月、よろしい。それならわしらから攻め入ることができよう。ドラコよ、例のキャビネットはどんな具合じゃ？」

ダンブルドアが声を掛けると、マルフォイが1歩前に出た。

「ほぼ修復できています。ダンブルドア先生なら杖の1振りです使えるようにできるで

しよう」

マルフォイの顔は険しく、そこに幼さは感じられない。

まるでこの1年で何十年も歳をとってしまったように見えた。

「そうか、では外部に情報が漏れる前に母親とともに隠れてしまいなさい。死喰い人を裏切つたとなればただでは済まんで」

ダンブルドアは優しく語りかけるが、マルフォイはその場から動かなかつた。

「僕は逃げない」

「じゃがの、ドラコ——」

「僕は逃げない！ 僕はいつらを許さない。あいつらは……あいつらは……」

ギリツ、とマルフォイは怒りをかみ殺した。

「あいつらが咲夜を殺したんだ」

そう、この1年マルフォイはスネイプと共にスパイとして死喰い人陣営に入り込んでいた。

ボージン・アンド・バークスの件も、ネックレスの件も死喰い人として活動しているというアピール、言わば偽装である。

ネックレスは不幸な事故が起きてしまい、予定通りにはいかなかつたが。

マルフォイは死喰い人としての仕事で必要の部屋で姿をくまらずキャビネット棚の

修理を行っている。

姿をくまらずキャビネット棚というのは、対になったキャビネットからキャビネットへ移動できる性質を持っている魔法具である。

死喰い人たちはこのキャビネットを使ってホグワーツに奇襲を掛けようとしているのだ。

だがダンブルドアはそれを逆に利用してやろうと考えていた。

向こうから来れるならこちらから行けないはずがない。

つまりは奇襲作戦を逆手に取り、こちらから先に奇襲をかけるというものだ。

「ところでダンブルドア校長、その後ろにいる方は？」

スネイプが慎重にダンブルドアに問う。

ダンブルドアは朗らかに笑った。

「わしの古い友人じゃや。少なくとも今は魔法界の為に戦うと言ってくれた」

老人は目を瞑り腕を組んでいる。

寡黙な人物なのだろうか。

「……よろしい。ではドラコの成人を待つて戦力を集め、攻め込むことにしようぞ。そうじゃの、6月の17日など丁度よいかの」

ドラコ・マルフォイの誕生日は6月の5日だ。

その日を過ぎればマルフォイの体から臭いが消える。

つまり自由に行動できるようになるのだ。

「さて、ダンブルドア」

ダンブルドアの後ろにいた人物が急に口を開いた。

「俺は杖を持っていない」

「残念なことなのに、お主の杖は今わしが使っておる。わしのお古でいいか？」

ダンブルドアは引き出しの中から杖を一本取り出した。

次の瞬間老人はダンブルドアに拳をお見舞いする。

そして力づくで杖を奪い取った。

「何をする!?!」

スネイプが鋭く杖を構えるが、ダンブルドアがそれを制止した。

ダンブルドアは自分の顔に杖を向け、唇の傷を癒す。

「待て、セブルス。アレでいいのじや。杖の忠誠を移すためには力づくで奪われんとならん。今この瞬間にわしの古い杖はそこにいるわしの友人へと移った」

老人はダンブルドアの杖を確かめるように何度か部屋の中の小物に向けて振り、そして不敵に笑った。

「そこそこだな。死の呪文を使う程度なら十分だ」

死の呪文という言葉聞いてスネイプとマルフォイは身構える。

「……そうじゃの、紹介しておこう。こちら、わしの古い友人で、犯罪者のゲラート・グリンデルバルドさんじゃ。わしに協力するという約束でヌルメンガードから出てきた」

紹介を受けてもグリンデルバルドの興味は杖から離れない。

「では……彼があ有名な闇の魔法使いの……」

スネイプは仰天したような声を出す。

グリンデルバルドはギロリとスネイプの方を見た。

「そう、そして俺はそこにいる老いぼれに敗れた。過去の俺の部下がヴォルデモートの下についたという話を聞いたのでな。不甲斐ない部下を殺しに行くというわけだ」

「お主も十分老いぼれじゃろうて、ゲラート」

スネイプとマルフォイは顔を見合わせる。

確かに戦力にはなりそうだが、嫌な予感しかなかった。

「我が君、ついに完成致しました」

アズカバンの一角で2人の老人が床に転がっていた。

ワームテールは恭しく目の前に座っているヴォルデモートに一礼した。

そして一本の杖をヴォルデモートに差し出す。

「ほう、ようやく完成したか」

ヴォルデモートはワームテールから杖を受け取る。

次の瞬間部屋の中が魔力で満たされた。

ヴォルデモートは軽く振って杖の調子確かめている。

そして満足げに頷いた。

「魔力の消費が激しいが、私には丁度良い。むしろ、私にしか扱えない杖と言うことか。気に入ったぞ。オリバンダー、グレゴロビッチ。ワームテール、2人を牢獄に詰め直せ」

オリバンダーとグレゴロビッチはワームテールに引きずられていく。

そう、ヴォルデモートは新しい杖を2人の杖作りに作らせていたのだ。

オリバンダーとグレゴロビッチ、間違いなく今生きている中ではトップクラスの杖作りだ。

ヴォルデモートが2人の杖作りに求めた杖は最強の杖を超える杖。

そして2人の天才は半年の歳月の果てに、ついに作り上げてしまった。

今世紀最高の一本を。

「これでようやく全ての準備が整ったわけだ。クイレルが用意した日付は6月13日。

奴も憎いことをしてくれる。クラウチ」

部屋の隅で自分の酒瓶から酒を煽っていたクラウチがビクリと反応する。

「なんだ？ 我が主様よ」

「出撃の準備を整えておけ」

クラウチは数回相槌を打つと部屋を出ていく。

ヴォルデモートは新しい杖を指の間でくるりと回した。

「負ける道理はない」

ヴォルデモートは不敵に笑う。

戦争が始まろうとしていた。

戦争とか、戦いとか、殺し合いとか

1997年6月13日、金曜日、午後7時。

私と美鈴さんと小悪魔はお嬢様の部屋に集まっていた。

クイレルは魔法省に、パチュリー様はホグワーツにそれぞれいる。私たち3人はお嬢様が手紙を書き終わるのをじっと待っていた。

「——を送ります。レミアア・スカーレット。……と。これでOK」

お嬢様はその手紙を直接蝙蝠へと変化させ、窓の外へと飛ばす。

蝙蝠はまっすぐとホグワーツ城へと消えていった。

手紙の内容を簡単に説明するところだ。

貴方の欲した品々をお譲り致します。

従者をホグワーツに送ります。

その2つのことが書かれている。

小悪魔はいそいそと自分が身に着けている分霊箱を外していく。

そしてそれを銀の盆の上に載せた。

「……よし、ダンブルドアは手紙を受け取ったわ。咲夜、行ってらっしゃい」

「かしこまりました」

私はお嬢様に一礼して分霊箱の置かれた盆を持つとホグワーツの玄関ホールへと姿を隠さずに姿現しする。

なんとというかホグワーツに来るのは久しぶりなので少し新鮮だ。

メイド服で歩くというのも初めての経験かもしれない。

私は片手に盆を持ったまま玄関ホールを歩いていく。

そして大広間の正面の入り口を大きく開け放った。

そこはホグワーツの生徒で溢れている。

皆話に夢中になっており、私の存在に気が付いている生徒は少なかった。

私はまっすぐダンブルドアを見る。

ダンブルドアは信じられないものを見るような目で私を見ていた。

私はそのまま澄まし顔で大広間の中央の通路を歩いていく。

わざと目立つように。

「咲夜!」

ハーマイオニーの悲鳴のような声が聞こえてくるが、今は構っていられない。

だがその悲鳴で皆が私の存在に気が付いたようだった。

ざわつく生徒の中を私はまっすぐ歩いていき、ダンブルドアの前まで移動する。

そして銀の盆をダンブルドアの目の前に置いた。

「お嬢様からの贈り物です」

私はダンブルドアに恭しく一礼する。

そしてそのまま固まっているダンブルドアの目の前で時間を停止させると、ホグワーツの制服に着替えた。

時間停止を解除し、私はグリフィンボールのテーブルに向かう。

ハリーたちの横へと腰かけ、何事もなかったかのように夕食を食べ始めた。

「咲夜!! 生きてたのね!」

ハーマイオニーとジニーが私に抱き着いてくる

そのせいで私は手に持っていたパンを落としそうになった。

だがそんなことはお構いなしに大歓声が私の周囲で沸き起こる。

私は眉を顰めながらパンをもしやもしやした。

「死んだわよ。ちゃんね」

「でも生きてるじゃない! こんなにしつかりと体があるのにゴーストだなんて言わせないわよ?」

「放して欲しいんだけど……」

私は2人を体に付けたまま強引に体を引き起す。

ハリーとロンはまるで幽霊でも見たかのように固まっていた。

「咲夜……本当に生きてるの?」

ロンが恐る恐る聞く。

私はロンに向けて右手を差し出した。

「触ってみなさい」

ハリーとロンは私の右手に触れる。

そしてようやく理解したかのように顔を綻ばせた。

「生きてる……生きてる! 咲夜は生きてた! 生きてたんだ!!」

私は流れを無視して全員の注意を引くように手を一度叩く。

そして拡声呪文を使って大きな声を出した。

「敵が攻めてくるわ! 全員戦闘配置につきなさい!」

次の瞬間大広間の扉が開け放たれる。

そこには仮面をつけた死喰い人が杖を抜いて立っていた。

1人だけではない、その後ろに10人はいる。

いや、実を言うと10人どころではない。

既に100人近い死喰い人がホグワーツの敷地内に侵入しているのだ。

突如放たれる閃光と悲鳴。

大広間は一気にパニックに陥った。

第一条件クリア。

どうやらクイレルはやり遂げたようだ。

そう、クイレルは一時的にホグワーツの全ての暖炉を煙突飛行ネットワークに接続したのである。

勿論色々と障害はあつただろう。

だが魔法省大臣という権限と、パチュリー様の技術によってそれを可能とした。

私は時間を停止させ教職員テーブルの端で何事もないかのように夕食を取っているパチュリー様の時間だけを動かす。

パチュリー様はしばらく気が付いていないかのようにスープをすすり続けていたが、やがて私の方を見た。

「紅魔館へお戻りください。ここは今から戦場になります」

「わかったわ。貴方も死なないようにね」

パチュリー様はそのまま何処かへ消え去った。

それを見て私は時間停止を解除し、近くにいる死喰い人にナイフを投げつける。

既に大広間は乱戦になっており、生徒は逃げまどい教員は死喰い人と戦っていた。

周囲には赤や緑の閃光が飛び交っている。

床には生徒たちが折り重なるようにして倒れていた。

一部は既に死の呪文を受けて死んでいるだろう。

「ふん、誰もわしの教えを覚えていないと見える。どんな時でも油断大敵!!」
クラウチが逃げまどう生徒に呪文を飛ばしている。

上級生たちも必死に抵抗していた。

「睽夜! どういうことなんだ!」

ハリーが近くにいる死喰い人に失神の呪文を掛けながら叫ぶ。

「ああ、こうなることを伝えに来ただけど、思いのほか歓迎されちゃってね」
ハリーが失神させた死喰い人の喉元に向けて私はナイフを投げつける。

ドスツと鈍い音がして死喰い人は息絶えた。

「ハリー、貴方は校長室に向かいなさい。ダンブルドアもそこにいると思うわ」

ハリーも同意見だったのか、特に反論が飛んでくることもなくハリーは大広間から上の階に向けて走り出す。

ロンはハーマイオニーと背中合わせになり、死喰い人と戦っていた。

死喰い人一人一人はそんなに強くない。

だが数が数なのだ。

次から次へと沸いて出てくるように死喰い人が大広間に現れる。

「広い空間だと死角からやられる可能性が増えるわよ！ 皆廊下に出なさい！」
私は生徒の多くが死喰い人と鉢合わせるように焚き付けると、自分も大広間を後にした。

そのまま廊下を飛ぶように走り、死喰い人を蹴散らしていく。

次の瞬間私はムーディと鉢合わせた。

「なんだ?! 敵か! いや幽霊だな死ぬ!!」

私はムーディの放った失神呪文を躲す。

どうやらムーディ率いる不死鳥の騎士団のメンバーが駆けつけたようである。

いや、それにしては早すぎるか。

「咲夜?! どうして生きてるのよ?」

ムーディの後ろにいたトックスがすつとんきよな声を上げる。

妊娠したという話を風の噂で聞いたのだが、既にお腹は小さかった。

どうやら既に子供が産まれたあとのようだ。

トックスの後ろにはルーピンやブラック、キングスリーなどのおなじみのメンバーが揃っている。

「話は後よ。一番の被害箇所は大広間、敵は暖炉から湧いてきていると考えられるわ」

私は背後から走っていた死喰い人にナイフを投げつける。

そのナイフは死喰い人の喉元に刺さった。

「ほらさっさと動くー！」

私が大声を上げると慌てたように騎士団員が走りだす。

私は一度紅魔館へと姿現しした。

お嬢様たちは大図書館に移動したようで、既にお嬢様の部屋はもぬけの殻だ。

私は即座に姿現しで大図書館に移動した。

「おかえり、咲夜。いい感じに戦争が起ったわね」

お嬢様は満足そうに頷いている。

パチュリー様はホグワーツ城のあらゆるところを机の上に映し出していた。

「ふむ、現在死者はホグワーツの生徒が50人、死喰い人が30人。少し死喰い人が押し
ているように見えるわね」

パチュリー様は図書館の椅子に腰かけている。

何気ない動作だが、パチュリー様は懐かしむように椅子をさすっていた。

「パチエ、ダンブルドアは今どこ？」

お嬢様の言葉にパチュリー様は校長室の映像を出す。

そこでは今まさにダンブルドアがグリフィンボールの剣を取り出していた。

「生徒を見捨てて自分は分霊箱優先……より大きな善のため、ね」

ダンブルドアはグリフィンボールの剣で次々と分霊箱を破壊していく。

そして蘇りの石だけを自分のポケットに入れた。

「ちやつかりしてるわ。咲夜、ポップコーン」

「どうぞ」

私は鞆の中からバケツサイズのポップコーンの箱を取り出し、お嬢様に渡す。

お嬢様はどうやら映画でも鑑賞しているぐらいの気軽さなのだろう。

「さあ、賽は投げられた」

お嬢様は口を三日月の形に歪めて笑う。

まさにここまでの流れはお嬢様の計画通りだ。

ハリーは大広間を飛び出すと廊下を駆け抜け階段を目指していた。

廊下にも多くの死喰い人がおり、ハリーの行く手を遮る。

だがそれと同じぐらいの生徒がそれに応戦していた。

あちこちで閃光が飛び交い、その度に人が倒れていく。

ハリーは一気に階段を駆け上がった。

だがそこでふと窓の外を見てしまう。

そこで見えた光景に、ハリーは足を止めてしまった。

何百、いや何千という吸魂鬼が Hogワーツを包囲している。

まるで大きな結界を張っているように、Hogワーツからの逃走をできないようにしていた。

あれが一斉に襲い掛かってきたら、自分是对処ができるのだろうか。

いや、無理に決まっている。

ハリーは一目散に8階の廊下を駆け抜ける。

肺や喉が焼けるように熱いが無視した。

「れ、レモンキャンディー！」

ハリーは合言葉を言い校長室に転がり込む。

そこではダンブルドアが今まさに校長室を出ようとしているところだった。

「先生！ 一体何が起こったのですか!？」

ハリーはダンブルドアの後を追いながら訪ねる。

「今がどのような状態なのか、わしにも分からん。じゃからと言って校長室でのんびりと話をしているほど優しい相手でもないのです。今は一人でも多くの戦力が必要じゃ。ハリー、わしの後ろについてくるがよい」

ダンブルドアは廊下を進みながら次々と死喰い人を無力化していく。

ダンブルドアにかかれば死喰い人など赤子同然なのだろう。

ハリーは杖を構え警戒しながらダンブルドアの後ろについて歩いていく。

だがダンブルドアの後ろにいる限りハリーが危険な目に合うことはないと言えるだろう。

「先生、僕も戦います！」

「ああ、ハリー。全力で戦っておくれ」

「では何処かで散開して——」

「ダメじゃ」

ダンブルドアはハリーの方を見ずに言った。

「でも今は少しでも戦力が必要だと……」

「ハリー、君は死喰い人よりももっと凶悪なものと戦うことになっておる。それまで魔力を温存しておくのじゃ」

「ですが……」

ハリーは自分が分霊箱であることを思い出す。

そう、自分は死ななければならぬ身なのだ。

そのことはダンブルドアも分かっていることだろう。

ダンブルドアは8階にあるグリフィンドールの談話室に入っていく。

死喰い人は暖炉から煙突飛行してきているらしく、談話室は死喰い人で溢れかえっていた。

ダンブルドアはダース単位で死喰い人を蹴散らし、あつという間に談話室内を制圧する。

そして暖炉に特殊な呪文を唱え、煙突飛行をできなくした。

「元から断たんとキリがないのでは」

「では死喰い人は暖炉から？」

「そうじゃ。問題はホグワーツには暖炉が沢山あることじやの。次に向かおうぞ」

ダンブルドアはグリフィンボールの談話室を飛び出していく。

そこでマクゴナガルとすれ違った。

「アルバス、何故このような状況に……一体どうすれば……」

「ミネルバ、教員の部屋にある暖炉を順番に封鎖して行ってほしい」

「では死喰い人は煙突飛行で……ホグワーツの暖炉には繋げないはずなのに——」

マクゴナガルは顔を真っ青にして駆けていく。

「ハリー、わしらは談話室の暖炉を塞ぎに行こう。運がいいことにまだヴォルデモートは城に侵入していないようなのでな。魔法省がもし機能していたらじゃが、そのうち援軍も来るはずじゃ」

ダンブルドアとハリーはそのまま西塔の方へ進んでいく。

そして螺旋階段を上がっていった。

ハリーは入学してから一度もここへ来たことがない。

しばらく死喰い人を蹴散らしながら階段を上っていくと、古めかしい木の扉が開け放たれているのが見える。

ダンブルドアは杖を振りかぶり死喰い人を倒していく。

ハリーはレイブンクローの談話室にルーナが倒れているのを発見した。

「ルーナ！」

ハリーは急いでルーナに駆け寄った。

ハリーが抱きかかえると、ルーナが軽く呻く。

どうやらまだ息があるようだ。

「ハリー!!」

ダンブルドアの大きな声が聞こえてくる。

次の瞬間ルーナに緑色の呪文が当たった。

「チッ！ 外したか!!」

死喰い人が舌打ちする声が聞こえてくる。

ハリーは頭の中が真っ白になった。

腕の中のルーナは次第に冷たくなっていく。それはあまりにも現実感のないものだった。

「ルーナ！ ルーナ!!」

ハリーはルーナを揺するが、ルーナは先ほどと違いピクリとも動かない。いつの間にかレイブンクローの談話室の中は静かになっていた。

ダンブルドアがいつの間にか暖炉を封鎖して談話室内にいる死喰い人を片付けたのだ。

「先生！ ルーナが！ ……ルーナが」

ダンブルドアが杖を振るうとルーナが宙に浮かび、ソファーにゆっくりと置かれる。その様子はまるで眠っているようだった。

「ハリー、今は進まなければなるまいて」

ダンブルドアはハリーの肩をがっちりと掴む。

そして螺旋階段を下りていった。

「クイレル大臣！ ホグワーツが!!」

パーシーがノックもせず魔法大臣室に飛び込んでくる。

クイレルは何事かと顔を上げた。

「どういうことかね。パーシー君」

クイレルはパーシーに駆け寄った。

勿論何が起きているか、クイレルは知っている。

「ホグワーツから守護霊が届きました。死喰い人の襲撃を受けているそうです！」

クイレルはパーシーから書類を受け取った。

そして物凄い速度で目を通していった。

「魔法省にいる闇祓いを限界までホグワーツに送れ。魔法省が雇っている魔法戦士も全員援軍に送るのだ。各局に防御態勢を取らせ外部からの侵入を防げ。今すぐ伝達するのだ！」

クイレルの力強い物言いにパーシーは驚きつつも廊下を歩いていく。

クイレルもエレベーターに乗り込み地下2階、魔法法執行部の闇祓い局に急いだ。

そこは既に多くの魔法使いで溢れ返っており、皆慌ただしく準備をしている。

「大臣！ 出撃準備できております」

スクリムジョールが厳格に告げる。

「よろしい、全員緊急用の暖炉でホグズミードに移動するのだ。そこからは徒歩や箒で近づきホグワーツ内の死喰い人を制圧する。全員私に続け！」

クイレルは一番に暖炉に突っ込んでいく。そしてホグズミードへと煙突飛行した。

「なんだ!?! 今度は一体なんだ?」

どうやらホグズ・ヘッドに出たようだった。

バーテンが仰天したような顔をしている。

それはそうだろう。

いつもあまり人がいない店の中に次々と人間が煙突飛行してくるのだ。

「店主、緊急事態なのです。店の一角をお貸しください」

「ホグワーツの件か? 外部から近づくのは不可能に近いぞ。外を見てみる」

次々と闇祓いたちが店の外に出ていくが、絶句したように立ち止まってしまふ。

そう、ホグワーツを取り囲むように何千体もの吸魂鬼が取り囲んでいるのだ。

「隊列を組みパトローナスを前に出して1点突破するのだ」

クイレルの指示で数十人の闇祓いたちがホグワーツに向けて走っていく。

クイレルはホグワーツの横にそびえ立つ紅魔館を見た。

あの大きく赤い屋敷は一部の人間にしか見えていない。

そう、全てはレミリア・スカーレットの思惑通り。

「この店を魔法省の活動拠点として使いたい。ご協力をお願いします。」

「それはいいが……この状況を何とかできるのか？」

バーテンはクイレルの顔を睨む。

クイレルはその言葉に頷いた。

「なんとかするのが、私たちの仕事です」

魔法省がホグワーツの援軍に来るのは死喰い人のシナリオにはないことだ。

つまりクイレルは死喰い人を裏切ったことになる。

全ては少しでも戦いを大きくするため。

「なるほど、ダンブルドアも馬鹿じゃないわね。確かに暖炉を封鎖すればこれ以上死喰い人が入ってくるのを防げる」

お嬢様はポップコーンをもきゆもきゆしながら机に映し出された映像を見ている。

美鈴さんもまるで映画でも見るように興奮した様子で映像に熱中していた。

「いけ！ そこだ！ よし、いいぞー！」

「美鈴うるさい」

お嬢様は美鈴さんに冷ややかに言う。

パチュリー様と小悪魔は死んだ者の数を事務的に数えていた。

「やはり死喰い人の死者が圧倒的に少ないですね。死んでいるのは殆どが生徒です。死喰い人の殆どが気絶させられたりといった死とは違う方法で無力化されていつてます」

小悪魔がペンを走らせながら言った。

「死喰い人の本陣が到着したわね。やはりスリザリン寮を占拠し使う目論見みたいよ。」
パチュリー様がスリザリンの談話室を拡大する。

そこにはヴォオルデモートと、その側近たちが生徒を脅し跪かせていた。

「あ、ホッグズ・ヘッドにクイレルがいますね。どうやら闇祓いの本隊を率いてきたようです」

美鈴さんが机の端を指さす。

闇祓いたちは守護霊を出し、包囲網を突破しようとしている。

「さらに戦いは激化していくわね」

お嬢様はポケットを探ると逆転時計を取り出す。

「咲夜、持っておきなさい。あの時の答えを見せて頂戴な」

そしてお嬢様は逆転時計を私に手渡した。

「多分現存する最後の1つだわ。貴重なものよ」

「あの時の答え……ですか」

私は逆転時計を首から下げる。

あの時の答えと言われても、心当たりが多すぎて分からなかった。

ダンブルドアとハリーはハツフルパフの談話室の暖炉も無事に閉鎖し終え、残るスリザリンの暖炉を目指していた。

だがスリザリンの談話室がある地下牢に近づくにつれて死喰い人の技量の質が変わってくる。

「ハリー、スリザリンの談話室は後回しじゃ」

ダンブルドアは何かを察し踵を返した。

「ですが、先生。暖炉を塞がないと死喰い人が——」

「わしの推測じゃが、スリザリンの談話室にはヴォルデモートがおる。今本拠地を叩くのは少々危険じゃやろて。その前にあっちへちよこちよこ、こっちへちよこちよこじゃ」
ダンブルドアは既に100人単位で死喰い人を無力化していたが、死喰い人が減ったようには思えない。

魔法省が公開していた死喰い人の組織の規模は、数十人程度だったはずだ。

「先生、いくら何でもここまで多いのは不自然ではないですか？」

「どうやらヴォルデモートは、わしの予想以上に組織を広げておったようじゃの」

ハリーは先ほどから一つ疑問に思っていることをダンブルドアに伝えた。

「そういえばノーレッツジ先生の姿をまだ見ていません。彼女だったらこの事態を何とかできそうなのですが」

「どうやら、力を貸してくれる気はないようじゃ」

ダンブルドアは残念そうに呟いた。

前方からシリウスが走ってくるのが見える。

「どうやらまだ無事のようにだった。」

「教員の部屋の暖炉は全て封鎖した。それと……キングズリーがやられた。バーティ・クラウチ・ジュニアだ。今はマッドアイとトンクスが戦っている。ルーピンはレストレンジと一戦交えているが、少しきつそうだった」

「報告」苦勞。シリウス」

ダンブルドアは角が曲がってきた死喰い人に失神の呪文を食らわせる。

その死喰い人は後ろに吹き飛び、10人ほどの死喰い人を巻き込んで止まった。

今度はマクゴナガルが後ろにスネイプを引き連れて現れる。

「生徒の殆どが談話室に立て籠もっております。ただスリザリンの談話室がヴォルデモートに占拠されたらしく、多くのスリザリン生が人質に取られている状況です」

「予想外の事態ですな。校長。奇襲をかけるつもりが、まさかその裏をかかれるとは。」

「どうやら私は闇の帝王にあまり信用されてなかったようです」

スネイプはオーバーに肩を竦める。

マクゴナガルはたしなめるように睨みつけた。

マクゴナガルは続ける。

「魔法省の闇祓いが到着しました。現在は校庭に溢れ返った死喰い人と戦闘中です。次第に魔法省が雇っている魔法戦士も到着することです」

「全て承知した。ミネルバ、貴方は避難が済んでおらん生徒の手助けをするのじゃ。セブルス、スリザリン寮に潜入し、生徒たちの安全を確保してきなさい」

2人は弾かれるように別々の方向へと走り出す。

ダンブルドアとハリーとシリウスは1階へと急いだ。

1階の玄関ホールは今現在一番激しい戦場と言えるかもしれない。

美鈴さんもこの戦いを見て大いに盛り上がっていた。

床には多くの死喰い人と闇祓いが転がり、その上を縫うようにムーディとクラウチが走り回っている。

そして呪文を飛ばしあっていた。

「この若造が！ わしの喋りかたを真似するでない!!」

「ああ？ そりや一年以上もお前の馬鹿みたいな喋り方を真似していたら、そりや癖が移るだろうよ？ ええ？」

その横ではトンクスがルーピンと共にレストレンジの相手をしている。

「お熱いことで！ 子供が出来たんだろう？ おめでとさん！」

そう、レストレンジは何故かしきりに2人を祝っていた。

「呪ってやるよ、じゃなくて、祝ってやるよってこと？」

「呪うと祝うって漢字が似てますからね」

美鈴さんとお嬢様はそんなことを話しているが、そうではないと思う。

そもそもレストレンジが漢字を知っているとは思えない。

キングズブリーは先ほどクラウチの不意打ちで死亡した。

死の呪文とは何とも便利なものである。

「そういえば、私たちは戦いに参加しなくてよいのですか？」

美鈴さんがうずうずしながらお嬢様に聞いた。

お嬢様は呆れたようにため息をつく。

「あのねえ……私たちはこれから何をしに行くの？」

「日本にある秘境を侵略しに」

「じゃあその戦いの前に消耗してどうするのよ」

ああそっか、と美鈴さんは合点がいった様子だった。

そう、私たちにとってこの戦争はあくまで移動手段でしかない。

無駄に消耗するのは避けたいのだ。

「私たちが手出しするとしたら、ダンブルドアとヴォルデモートが死ななかつた時よ」

私は机の上の映像を見る。

丁度ムーディに死の呪文が当たったところだった。

「ああ、惜しい。新旧マッドアイ対決は2代目の勝ちですね。あ、トンクスが激情した。

おお！ 強い、まるで親を目の前で殺された子供のような怒りっぷりですよ？」

「なんですか？ その具体的な例えは」

小悪魔は紙に『マッドアイ（古）死亡』と書き加えた。

「あ、ロンが死んだわね」

私はグリフィンボールの談話室前で倒れ伏すロンを見つける。

ハーマイオニーはその死体を引きずりながら泣き叫んでいた。

だがそんな荷物を抱えたまま自由に動けるはずもなく、ハーマイオニーも死の呪文に

当たり死亡する。

私は不思議と何とも思わなかった。

「あら、貴方と仲の良かった人間じゃない？」

お嬢様が仲良く横たわっているロンとハーマイオニーを指さす。

「ハーマイオニーは優秀なはずなのですが、情に流されすぎましたね。」

「悲しくないの？」

美鈴さんは無遠慮に言った。

「本当に大切だったら何処か遠くへ隠していますよ」

私は映像の中に映る2人を見る。

あれは別にいらぬものだ。

私たちはこれからこの地を離れる。

つまりいてもいなくても何も変わらない。

私は自分にそう言い聞かせた。

ハリーはそのような地獄を今まで見たことがなかった。

床には多くの死体が倒れ伏し、その数は1人や2人じゃない。

床を覆い隠すよう倒れているので、ハリーは嫌でもその死体を踏まなければならな

かった。

今ハリー達がいる玄関ホールだけじゃない。

城のあちこちでこのこと同じようなことが起こっているのだ。

ハリーは床に倒れ伏す死体の中にルーピンとトンクスを見つける。

2人は手を繋いで倒れていた。

「リーマス!!」

シリウスがルーピンに駆け寄るが、静かに首を横に振る。

どうやら本当に死んでいるようだ。

「キングズリー、アラスター、リーマス、ニンファドローラ……」

ダンブルドアが慈しむように呟く。

ハリーはその呟きでムーデイが死んでいることを知った。

「この4人が敗れるなんて」

「ベラトリックスはクラウチとバディを組むことによつて劇的に強くなる。若い頃はと

ても手を焼かされたものだが、まさかここまでとは……」

シリウスが顔を顰めていった。

若い頃というのは、ハリーが生まれる前の頃の話だろう。

「2人はどうやら地下へと向かったようじゃの。すれ違つてしもうたか」

ダンブルドアは4人の為に少し祈るとすぐさま立ち上がる。

だがハリーは動けなくなっていた。

人が死ぬということは咲夜の件で十分理解したつもりでいた。

だが、実際に人の死体を、それもこんな数見たのは初めてだったのだ。

「先生……シリウス……これが、これが戦争なの？」

シリウスは目を伏せる。

まさかここまで戦いになるとは思っていなかったのだろう。

「ゲラートと一戦交えたときも、こんな感じじゃったかのう」

ダンブルドアは目を閉じ何かを考える。

だがすぐさま歩き出した。

「ハリー、立ち止まっている暇はない」

ダンブルドアがそう言った瞬間、ホグワーツの玄関が吹き飛ぶ。

ダンブルドアとシリウスは咄嗟に盾の呪文を掛け、扉の残骸をせき止めた。

「やっぱりのう」

玄関には巨人が立っている。

その奥にも何十人もの巨人がおり、駆け付けた魔法戦士たちと戦っていた。

「そのうち人狼もやってくるじやろう。ハリー、急ごうぞ」

ダンブルドアは目の前にいる巨人を杖の1振り引き止める。

そして城の外へと吹き飛ばした。

「ついに巨人と人狼部隊も到着したわね。吸魂鬼は動かないのかしら」

50人ほどの巨人がホグワーツの敷地内で暴れている。

ここまで地響きが聞こえてくるほどだ。

だが巨人は魔法を使うことができない。

本当に対処が難しいのは人狼の方だろう。

何せ、咬まれたら人狼になってしまうからだ。

「にしても凄いのはいクイレルね。こんな状況になってもまだ魔法大臣として指揮をしているわよ。少し考えたらクイレルが裏で手を引いていたことぐらいわかるはずなのに」

お嬢様の言う通りクイレルは実に上手く立ち回っていると云えるだろう。

ホッグズ・ヘッドに到着した魔法使いたちに的確に指示を与えている。

どうやって戦況を掴んでいるのかは謎だが、まるで城の中まで見えているような指示の出し方だった。

「ああ、彼にはマッドアイを与えているわ。義眼じゃなくて目に掛けるタイプの魔法だけだ」

なるほど、パチュリー様の言う通りクイレルは時折ホグワーツ城や紅魔館のある方向を見ている。

「そういえばクイレルはどの段階で拾いに行くのですか？ 紅魔館の敷地内にいないと一緒に移動できないですよね」

「私が合図を出すことになってる。戦況次第ね」

パチュリー様は小さな赤いボタンを机の上に出した。

何というかプラスチックでできているそれは実にチープだが、恐ろしいほど複雑な呪文が掛かっているのだろう。

「凄いですね。ホグワーツの中で一番平和なのがスリザリン寮ですよ」

スリザリンの談話室のソファアにヴォルデモートが腰かけている。

暖炉からは次々と死喰い人が煙突飛行で現れていた。

「暖炉を塞がれたのは痛手だが、まだ経路は残っている」

ヴォルデモートは不敵に微笑んだ。

まさかこんなところから覗き見られているとは夢にも思わないだろう。

ヴォルデモートの隣にはピーター・ペティグリユート、ギルデロイ・ロックハートが佇んでいた。

……というか、何故ヴォルデモートの横にロックハートがいるのだろうか。

「聖マンゴに行ったときにアレの運命を少し弄ったのよ。まさかこんなことになるとは夢にも思わなかったけどね」

お嬢様はしたり顔で微笑んだ。

弄ったと言えば、とお嬢様は映像の中を探す。

「いたいた、このデビルなんちゃらって子の成長もすごいわよね」

「ネビルです、お嬢様」

私はお嬢様の勘違いを訂正しながら映像を見た。

ネビルは今、古参の死喰い人であるアントニン・ドロホフと戦っている。

「まさかあそこまで劇的に成長するとは思わなかったわ」

ネビルはドロホフに失神の呪文を当て、無力化する。

「お嬢様、まさかネビルの運命も操っていたのですか？」

私は聖マンゴに行ったときにお嬢様が風船ガムの包み紙にメッセージを書き、ネビルに託したのを思い出した。

確かにネビルは休暇明けのDAから成長速度が上がったが、そういうことなのだろうか。

「厳密に言えば能力ではないんだけどね。簡単なメッセージを送っただけよ。がんばれよって」

お嬢様は両手を握り上下に動かす。

「パチエ、被害状況は？」

「ゼロよ」

「私たちじゃなくて」

パチユリー様は手に持っていた紙をお嬢様に見せる。

「あら、死喰い人の死者が一気に増えてるわね。一体どういうこと？」

パチユリー様は映像の一部、大広間を指さす。

そこでは老人が手当たり次第に死喰い人に死の呪文を掛けていた。

「ゲラート・グリンデルバルド。ダンブルドアは戦力になると思っていたようだけど」

「めちゃんこ強いっすね。このおじいちゃん」

美鈴さんが感心したように頷く。

そしてお嬢様のポップコーンに手を伸ばし、叩かれていた。

「グリンデルバルドというのはヴォルデモートよりも前に魔法界を征服しようとした闇の魔法使いです」

小悪魔が美鈴さんに教える。

私はお嬢様よりも小さなポップコーンの箱を美鈴さんに手渡した。

グリンデルバルドは床に倒れ伏している死喰い人にも死の呪文を掛けていつている。

「全くダンブルドアは詰めが甘い。それが奴の最大の欠点であり……あー長所でもあるが……」

そんなことを言いながらも杖を振りかざしていた。

「何とも都合いいじゃない」

パチュリー様は自動速記羽根ペンQQQに切り替えて映像を見るのに専念する。

「あ、先生それズルくないですか?」

小悪魔が羨ましそうな顔をしたのを見て、パチュリー様はもう一本QQQを取り出した。

「ありがとうございます」

小悪魔はにっこり笑って椅子に座る。

私はそろそろ頃合いかと思いい、皆の前に紅茶を出した。

「あら、クイレルが怒るわよ?」

お嬢様はクスクス笑いながらも紅茶を手取る。

「はい、ですので私も紅茶は無しです」

私はクイレルのいる方向へと軽く頭を下げる。

クイレルは軽くこちらに手を上げた。

次の瞬間グリンデルバルドが巨人に押しつぶされた。

「案外あつけないわね」

お嬢様は興味をなくしたように違う場所を映し出した。

「やあやあみなさん。H A H A H A H A！ お久しぶりですね！ 私を覚えていませんか？ 私は覚えていませんが」

ロックハートは談話室にいるスリザリン生に声を掛ける。

生徒たちは小さく悲鳴を上げた。

「ロックハート、それを言うのは既に3回目だ。お前の馬鹿のせいで生徒が怯えているではないか」

ヴォルデモートの横にいるスネイプが言う。

「私が？ 自己紹介をするのが？ 3回目？ そんな馬鹿な。ハッハッハッハ！ ハーハッハハハッ!!」

ロックハートは愉快そうに笑う。

スネイプは疲れたように顔を顰めた。

「我が君、どうしてこのような奴を近くに置いているのですか？」

ヴォルデモートはロックハートとワームテールを見る。

「働キアリの法則というものを知っているか？ スネイクよ」

「2割の働キ者と、6割の平凡な者と、2割の怠け者が生まれるというやつですな」

「そう、組織には怠け者、愚か者がおらねばならん」

まさかそんな迷信染みた理由で？ とスネイクは考えたが、これ以上は追及しないことにした。

「おや、生徒がいますね！ みなさんこんにちは！ H A H A H A H A H A!!」

ロックハートは生徒を見つけると4回目の挨拶をする。

その様子はあまりにも不気味だった。

「我が君、ダンブルドアがこちらに迫ってきています」

1人の死喰い人がヴォルデモートに報告する。

次の瞬間談話室の入り口が吹き飛んだ。

「こんばんは、トム。一言言わせてもらえば、やってくれたなこんちくしょう、じゃ」

ダンブルドアは油断なく杖を構えている。

ヴォルデモートも杖を取り出した。

「待っていたぞダンブルドア。ここさえ潰せばイギリス魔法界は私の手に落ちる。いや、違うな。貴様さえ潰せば、か」

ヴォルデモートは立ち上がりダンブルドアと対峙する。

ダンブルドアの後ろにいるハリーとシリウスは戦いが始まるものだと思い身構えた。だがヴォルデモートはあまりにも無造作にダンブルドアに歩み寄っていく。後ろにはナギニを従えていた。

「では参ろうかの」

ダンブルドアとヴォルデモートは並んで歩き出す。

その様子にハリーとシリウスの目が点になった。

生贄とか、疑問とか、旅立ちとか

「あひやひやひや！ そう来たか！」

お嬢様はお腹を抱えて大爆笑している。

美鈴さんは説明が欲しいとパチユリー様に縋っていた。

ブンブンとパチユリー様の肩を揺るのでパチユリー様の声が波打って聞こえる。

「だから——場所を——変えるって——ことでしょ？ いい加減やめなさいそれ」

パチユリー様は本の角で美鈴さんの頭を叩く。

「まあ会話を聞いてみればわかるわ」

パチユリー様は机の映像を大きくした。

するとダンブルドアの声が聞こえてくる。

「何も不思議なことはないぞ、ハリー。無駄な消耗が嫌いなのはわしもヴォルデモートも同じじゃ」

ダンブルドアはヴォルデモートと共に校内を歩いていく。

その様子を多くの魔法使いや闇祓いが見守っていた。

「ダンブルドア、先に確認しよう。私が勝ったらイギリス魔法界は私が頂く」

ヴォルデモートはまるで友人と賭け事をするように楽しみに言う。

「ほっほっほ、わしが死んだら確かにイギリスの魔法界はお主の手に落ちるじやろて。じゃがのう、トム。わしが負けることは方に一つもありえんことじゃ」

ダンブルドアも朗らかに答えた。

ヴォルデモートは知らない。

自分の分霊箱があと2つしか残っていないことを。

ダンブルドアがニワトコの杖を持っていることを。

ダンブルドアの自信の根拠はそこだろう。

一行は巨人が暴れている校庭に出ると、空に大きく花火を打ち上げる。

そして Hogwーツ周辺にいる者全てに語り掛けた。

『わしら今から戦うからのう。見たい者は Hogwーツのクイディツチ競技場にくるのじゃ』

『私は今からダンブルドアと一騎打ちの決闘を始める。全員戦闘を止めクイディツチ競技場に集合せよ』

その声は紅魔館の地下にまで響き渡る。

「何というか、あれね。初めからこれでいいじゃないと思うのは私だけ？」

パチユリーは今の状況を見ながら言う。

お嬢様はケラケラと笑った。

「戦争なんてそんなもんよ。利益を求めて戦争するのはあまりにも馬鹿らしいわ」
私は城の中を見る。

殆どの魔法使いと死喰い人は戦闘を止め、顔を見合わせていた。
そして杖を仕舞いゾロゾロと城の外に出てくる。

その光景を見て思うことは一つ。

あ、従うんだ。

「元々あの2人を中心として集まった勢力だからね」

お嬢様は紅茶を飲み干すと空のカップをくるりと回した。

突如背後の暖炉が燃え上がり中からクイレルが出てくる。

私はすぐにクイレルに紅茶を差し出した。

「あ、いや別に紅茶を飲みに来たわけでは……」

そう言いつつもクイレルはティーカップを受け取る。

「お嬢様、この状況どう見ますか？」

クイレルは紅茶を飲みながら机の上の映像を見た。

戦闘はぴたりと止まり、生きている人間の殆どがクイディッチ競技場目指して歩いている。

着実に競技場に人が集まっていた。

「丁度いいんじゃない？　これなら確実にダンブルドアとヴォルデモートのどちらかが死ぬわ。そして人が1か所に集まっていた方がこちらとしても都合がいい」

お嬢様は競技場の中央を拡大する。

そこにはダンブルドアとヴォルデモートが立っていた。

人が集まるのを待っているようだ。

「クイレル、そして咲夜。競技場に向かいなさい。貴方たち2人がそこにいない方が不自然だしね」

私はお嬢様に紅茶のおかわりをお出しし、クイレルと共に大図書館を後にする。

階段を上りつつ私はクイレルに話しかけた。

「お疲れさま、クイレル」

「私は指示を出していただけだ。もつとも、十六夜君は紅茶を出していただけだったよ
うだが」

クイレルは意地悪く笑いながら言った。

私は大きく肩を竦める。

「あら、一応仕事はしたわ。ダンブルドアに分霊箱を届けたし」

「残す分霊箱はハリー・ポッターとナギニか。ダンブルドアはどうするつもりなのだろう

うな」

私は玄関ホールを歩きながら考える。

「案外殺す気はないのかもね。肉体をバラバラにしてしまえばヴォルデモートはゴースト以下の存在に成り果てるわけだし。ナギニやハリーを殺すのはヴォルデモートを無力化してからでも遅くはないのかも」

「あの爺さんが考えそうなことだ」

私は扉を開け、禁じられた森へと出る。

そして箒を取り出しそれに跨った。

「クイレル、後ろに乗りなさい」

「すまないな」

クイレルは箒に腰かけ、私の肩を掴む。

私は力強く地面を蹴った。

禁じられた森から飛び出し、私とクイレルはクイディッチ競技場を目指す。

地面を見ると何人もの魔法使いが列を成して競技場へと歩いていった。

「争いが起こっていないのが不思議ね」

私はその様子を見ながら呟く。

「集団心理というやつだろう。日本人は集団行動が好きらしいじゃないか」

「彼らの殆どはイギリス人よ」

「原型を作ったのはイタリア人だ」

「フランス人もでしょう?」

よくわからない会話をしながら私たちはクイティッチのピッチへと降り立つ。

ダンブルドアは私を見た後、クイレルを見た。

「やってくれたのう、クイレル。そしてようやったと褒めるべきでもあるか。暖炉を繋いだり援軍を送ったり、一体何がしたいのじゃ?」

ダンブルドアはクイレルに聞いた。

「珍しく同意見だなダンブルドア。クイレルよ、魔法省は今回の件では動かないはずではなかったか? 何故闇祓いと魔法戦士が援軍として送られてきた? そのせいでやぬ消耗をってしまったではないか」

ヴォルデモートも肩を竦める。

クイレルは2人から問い詰められてもすまし顔だった。

「一体何の話かな? 私は魔法大臣だ。それ以上でもそれ以下でもない」

少なくともお嬢様の従者だからそれ以下だとは思うのだが。

ダンブルドアはしばらくクイレルを見ていたが、やがて私の方に振り返る。

そしてポケットから緑色の何かを取り出した。

ダンブルドアはそれをヴォルデモートには見えないように私に手渡す。

「これは？」

私はダンブルドアに問うが、ダンブルドアは何も答えずにヴォルデモートに向き直った。

私は時間を止め、クイレルの時間停止だけを解除する。

そして2人でその何かを観察した。

「クイレル、これなんだと思う？ 私予想ではダンブルドアの所持している灯消しライターだと思うんだけど」

「ああ、間違いないだろう。だが、問題はこの部分だ」

クイレルは灯消しライターをひっくり返す。

ライターの底には蘇りの石が埋め込んであった。

「いつの間にこのような加工をしたのだろうか」

「指輪を破壊したのは見たけど、このように加工しているところは見ていないわね。でもきっちり嵌まっているし」

私とクイレルは唖るが、結局結論は出なかった。

私は灯消しライターをポケットに仕舞うと元の位置へと戻る。

それを見てクイレルも時間を止めた時の位置へと戻った。

私は時間停止を解除すると競技場内を改めて観察する。

観客席は2つに分かれており、一方には闇の陣営が、もう一方にはホグワーツの生き残った生徒や闇祓い、魔法戦士が座っていた。

そして野次を飛ばしあっている。

何というか、その様子だけ見ると平和そのものだ。

私はホグワーツの生徒の中からハリーを見つけると、その横に移動し腰かける。

ハリーは何かに打ちのめされたような顔をしていた。

「どうしたの、元氣ないわね」

勿論理由は分かっている。

ハリーの横にはネビルがいるが、ネビルも今にも死にそうな顔をしていた。

大方ネビルからロンとハーマイオニーが死んだという話を聞いたのだろう。

「ロンとハーマイオニーが、死体で発見されたって。それだけじゃない。シエーマスも、ラベンダーも、ほかにも沢山。夢だ。これは悪い夢だ」

ハリーはそう言つて項垂れる。

私はハリーの胸座を掴んで引き寄せると、ハリーの頬に平手を食らわせた。

その衝撃でハリーは軽くよろめき、床に倒れる。

「甘つたれてんじゃないわよ。予言を思い出しなさい。『一方が他方の手にかかつて死

なねばならぬ』貴方が戦わなくてどうするの？　ほら、シャキツとしなさい。男の子でしよ？」

私はハリーを引き起こし、服を綺麗にする。

そしてまっすぐハリーの目を見た。

「魔法使いの決闘には介添人が必要よ。行きなさい、ハリー・ポッター」

ハリーは何かを察したのか、力強く頷いてピッチの方へと歩いていく。

その様子をネビルが心配そうに見ていた。

「えっと、つまりどういうこと？」

ネビルが私に聞く。

「ハリーがダンブルドアの介添人になるってことよ」

それを聞いてネビルはハリーの方を見る。

ハリーの足取りは覚悟を決めたように確かなものだった。

「でも、ダンブルドアが負けることはないよね？」

「そう願うわ。……あら」

ネビルと話していると見慣れた顔がこちらに近づいてきた。

ドラコだ。

ドラコはすっかり大人びた表情になっており、正直ハリーよりも頼もしく見える。

「咲夜……生きていたんだね」

ネビルは警戒するように杖を取り出すが、私はそれを制す。

「死んだわ。生き返ったけど」

私はドラコに微笑んだ。

次の瞬間ドラコの目から一筋の涙が零れ落ちる。

「よかった……本当に、本当によかった……」

そのままドラコは泣き崩れてしまった。

私はわけがわからないままドラコの背中を撫でる。

ドラコは泣きつつも少しずつ話し始めた。

この1年死喰い人の仲間のふりをしながらダンブルドアの手伝いをしていたことを。

「お前がなんでそんなことをするんだよ」

ネビルがドラコを睨むが、ドラコは答えない。

「ドラコ、どうしてなの？ 貴方のお父さまは死喰い人で、貴方自身ヴォルデモートを

慕っていたじゃない」

私と同じことを問うとドラコは顔を上げた。

そして涙に濡らした顔で告げる。

「僕は君のことが好きだった！ 愛していたんだ……ホグワーツ特急で最初に君に会っ

た時から。ひとめぼれだった……。君が死んだと聞いたとき、頭が真っ白になった。ああ、そうだ。馬鹿なことだったかもしれない。だが、後悔はしていない」

ドラコは叫ぶように言う。

なるほど、つまりドラコは私に告白しているのだろう。

なんというか、返答に困る。

「貴方は私の為に死喰い人を裏切ったということ？」

「……自己満足さ。復讐なんて」

ドラコは立ち上がる。

その顔にはいつもの笑顔が戻っていた。

「今のは忘れてくれ」

ドラコはそういうと私の元から去っていく。

ネビルは意外そうな顔をしていた。

「マルフォイが君のことを好きだったってのは分かる気がする。でも好きだった人の為にそこまでするなんてなあ」

「私が生きていたことによつていい感じに落ちが付いたわね」

私はクスリと笑う。

ピッチの中心を見るとダンブルドアとハリーが何かを言い争っている。

私は何事かと観客席から飛び降り、2人のもとへと急いだ。

「だから、僕の介添人をダンブルドア先生がしてください。僕はヴォルデモートを打ち破らないといけない」

「じゃからのう、ハリー。君がわしの介添人になればいいじやろうに」

「僕が、先生の介添人に？　ですがそれでは……」

僕が先に死なないとダンブルドア先生はヴォルデモートを倒せない。

ハリーが言いたいことはこのようなことだろう。

もつとも、ダンブルドアもそのことは分かっている。

「ハリー、わしは君に介添人を頼みたい。この意味が分かるかね？」

ハリーは首を横に振った。

「じゃつたら、黙って見ているがよい。介添人を頼んだぞ」

ダンブルドアはハリーを下がらせるとヴォルデモートと対峙する。

ヴォルデモートは後ろにクラウチを従えていた。

「ダンブルドア、流石に舐めすぎではないか？　介添人にその小僧を置くなどな」

ヴォルデモートはハリーを見ながら冷ややかに言う。

逆にダンブルドアは微笑んだ。

「そうではない、トム。実際ハリーは4回もお主と対峙し、生きて帰っておる。下手な闇

「祓いより実績では上じやろうて。お主の介添人はそこにいるクラウチ・ジュニアかの？」

クラウチはダンブルドアを睨みつける。

その視線はムーディそっくりだった。

「保険だ。あくまでな。私が死ぬなど、ありえない」

ヴォルデモートはそう言い両手を持ち上げた。

ヴォルデモートの体をナギニが這っていく。

それを見て対抗しようと思つたのか、ダンブルドアの肩にフォークスがとまった。

何というか、幼稚だ。

「では私が証人を務めよう」

クイレルが2人の間に躍り出た。

なるほど、これ以上にならない証人だ。

ダンブルドアもヴォルデモートもクイレルに不信感を抱いている。

まさに誰もが認める中立者といえるだろう、勿論悪い意味で。

次の瞬間、拡声の呪文で拡大された声が響き渡った。

「さあ、ついに今世紀最大の決闘が行われようとしています！ 実況はわたくし、リー・ジョーダンと、解説のギルデロイ・ロックハートです。さあギルデイ、この状況どう見

ます？ というより私はギルデイがどこに行こうとしているのかわかりませんね！
本を出版し有名人になったと思えば学校の先生になり、記憶を失って聖マンガに入院し
たり、そして今は死喰い人ですが？」

「H A H A H A H A！ まあ私だしね！ 何のことだかさっぱりですが。解説？ この
私？ 私はギルデロイ・ロックハート！ 初めまして！」

馬鹿が何かを始めたと、私はため息をつく。

私は別に気にしないが、不謹慎だとは思わないのだろうか。

ホグワーツ城には今も多く of の死体が残されている。

死者の数は100や200ではない。

その100倍単位でいるだろう。

だが、不思議と競技場からは歓声が上がっている。

どうやらことがことなだけに全員の感覚が麻痺しているようだ。

「あなたの顔を見たことがないやつなんていねえよ！ この有名人！ さあ今から行わ
れる決闘ですが、簡単にご紹介いたしましょう。死喰い人陣営、決闘者は闇の帝王でお
なじみの例のあの人！ 意外にもこの決闘を受けました」

随分度胸があるなと私は実況席を見るが、ジョーダン思った以上に震えている。

どうやら少しでも皆を元気づけようと必死なようだ。

「介添人はホグワーツの闇の魔術に対する防衛術を1年間教えていたこともあるバーティ・クラウチ・ジュニアです。その実力はお墨付き。この采配、どう思われますか？
解説のギルデイ」

「怖いよね！ 急に怒鳴るし……H A H A H A！」

クラウチはギロリと実況席を睨む。

ジョーダンの顔が一層に青くなつた。

その瞬間実況席の両側に人影が現れる。

「ビビるなら実況なんて始めるなこんちくしょう！ つていうか、なんでこのポンコツ死喰い人なんてやってんだ？」

「冗談は顔と名前だけにしとけよジョーダン！ ビビってんじやねえよ！」

フレッドとジョージだ。

両側からバンツと背中を叩く。

だがあの2人は知らない。

ロンが死んでいることを。

「フレッド!?! ジョージ!?!」

ジョーダンは驚愕と歓喜が入り混じつたような声を上げた。

「フレッドとジョージ？ 何言ってるんだ？ 俺たちは……」

死喰い人からはブーイングが沸き起こった。

「そして証人はこの人、クイリナス・クイレル魔法大臣です。さあ魔法界の命運を賭けたこの決闘、どう見ますか？　ギルデイ？」

「魔法界？　なんでもいいですが……あ！　サインですか!？」

「誰かこいつをどうにかしてくれー!」

ドツと競技場が沸く。

だが次の瞬間モリーさんが何処からともなく現れて、3人を実況席から引きずり下ろす。

「おわっ！　ちよい待ってウィーズリーママ、みなさん、実況はここまで！　また機会があればお会いすることもあるでしょうバイバイ………」

「H A H A H A！　私一人に実況を任せようということですね奥さん！　ご安心ください！　……なんで私こんなところに座っているのでしょうか？　きつと私がハンサムだからですね！　あ、およしてマダム………」

ロックハートもマダム・ポンプフリーに引きずられていった。

実況がなくなると途端に競技場は静寂に包まれる。

私は引きずられている3人のもとへと向かった。

「よう咲夜！　生きてると思っただぜ」

フレッドが仰向けになりながら私に言う。

モリーさんは今頃気が付いたように私の方を見て、3人を取り落とした。ガンと頭を床に打つ音が3つ聞こえてくる。

ジョージがモリーさんに文句を言ったが、モリーさんには聞こえていないようだった。

「咲夜！ ああよかった、生きていたのね！」

モリーさんは私に抱き着く。

なんとというか、非常に鬱陶しかった。

私は全身に肉感を感じながら3人に話しかける。

「本当によくやるわ。こんな状況なのに。ねえ？」

ジョーダン は力なく笑う。

フレッドとジョージはジョーダンを立ち上がらせた。

「さて、俺たちは騎士団員のいるスタンドへと戻るが、咲夜はどうする？」

ジョージが私に聞く。

「そうね、私も一緒に行こうかしら」

モリーさんの案内で私たちはスタンドを歩いていった。

案内された席にはブラックの他に、ドージやハグリッド、ビル、フラァー、ほかにも多

くの騎士団員が座っている。

ブラックは心配そうにハリーの方を見ていた。

「なんであの子が戦う必要がある？ 絶対に何かおかしい……」

ブラックはぶつくさ何かを言っているが、やがて私の存在に気が付いたようだった。

「ん、咲夜か。生きてたんだな」

「城の中で会ったじゃない」

「この戦いで死ななかつたんだなって意味だ」

ブラックは相変わらずの軽口を飛ばす。

「ムーニーも逝ってしまった。トンクスもだ」

「そう、それは残念ね。というか貴方は生きていたのね」

見ての通りだ、とシリウスは両足を叩いた。

「一体今まで何処にいた？ 昨日今日に生き返ったってわけでないだろうか？」

なるほど、流石に鋭い。

私はわざと大きく肩を竦める。

「あっちへちよこちよこ、こっちへちよこちよこよ。ダンブルドア風に言うならね」

私はブラックの横に座ってピッチを見る。

そこではクイレルの主導のもと決闘が始まろうとしていた。

ダンブルドアとヴォルデモートが互いに杖を構え、一礼する。

そして次の瞬間ダンブルドアとヴォルデモートの決闘が始まった。

一番初めに仕掛けたのはダンブルドアだ。

巨大な炎のドラゴンを出現させ、ヴォルデモートにけしかける。

ヴォルデモートはそれに水でできた大蛇をぶつけた。

なんてことはない、『インセンディオ』と『アグアメンティ』だが、呪文の規模が違いくる。

水と炎がぶつかり水蒸気が上がる。

それが軽い煙幕のようになってピッチ内を隠した。

だが次の瞬間水蒸気は一気に渦を巻いて消え去る。

そこには呪文を撃ち合っているダンブルドアとヴォルデモートの姿があった。

ヴォルデモートの杖からは死の呪文が、ダンブルドアの杖からは失神の呪文が放たれていく。

互いに使用している呪文の数は1つだが、手数が通常のそれとはケタ違いだ。

マシンガンでも撃ち合っているかのように次から次へと閃光が地面の上を滑っていく。

それと同時にダンブルドアの足元にある芝が抜け、無数のナイフとなってヴォルデ

モートに襲い掛かる。

あれは私がドラゴンと対峙したときにした技だ。

元々ダンブルドアが変身術の先生だったと聞く。

その技量は私でも息を飲むほどだ。

ヴォルデモートは襲い掛かってきたナイフを軽やかに避け、浮遊呪文を使って絡め取る。

そしてダンブルドアの方へと投げ返し、飛んでくるナイフをナイフで追撃した。

「やるのう、トム。正直びっくりじゃ」

ヴォルデモートが投げ返したナイフのうち一本がその場で大爆発を起こす。

その衝撃でダンブルドアとヴォルデモートは吹き飛び、互いに距離を取り合った。

「これぐらいで驚いてもらっては困る」

突如ダンブルドアの足元の芝生が人間の手に変わり、ダンブルドアの足を掴む。

そこに死の呪文が数度撃ち込まれた。

ダンブルドアは大きく体を反らしてそれを避けると足を掴んでいる手を引き裂き、その場から脱出をする。

だが次の瞬間ダンブルドアは足を止めてしまった。

引き裂いた手の持主が地面から這い出てきたのだ。

私はその姿に見覚えがある。
アリアナ・ダンブルドアだ。

「お、お兄ちゃん……」

ダンブルドアはその光景に驚愕し、動きを止めてしまう。

その瞬間にヴォルデモートの死の呪文がダンブルドアに迫った。

今だ、と思い私は時間を停止させる。

そして死の呪文の時間停止だけを解除し、ダンブルドアの目の前まで迫ったところで再度時間を止めた。

この距離なら避けることはできない。

時間停止を解除するとダンブルドアは死の呪文に当たり後ろに吹き飛ぶ。

だが死ぬ寸前に杖を振るい、油断したヴォルデモートの傍にいるナギニへと火をつけた。

あれは悪霊の火だ。

ヴォルデモートは火を消そうと努力するが、ダンブルドアの執念が阻止しているのか、うまくいかない。

次の瞬間ダンブルドアは地面に倒れ伏した。

ナギニという分霊箱を破壊して。

ドツと死喰い人たちが沸く。

そう、勝負が決したのだ。

クイレルが倒れたダンブルドアへと近づいていく。

そして完全に死んでいることを皆へと告げた。

「ダンブルドアは死亡した。介添人は決闘を引き継ぐことができるが、どうするかね？」

クイレルはハリーに問う。

ハリーはダンブルドアの死を見て混乱するものかと思つたが、その表情は落ち着き払つていた。

「戦います」

ハリーは杖を取り出す。

そう、ハリーにはダンブルドアが最後の瞬間にナギニを殺した意味が分かつていた。

あれは全てをハリーに託したという意味だろう。

これで残る分霊箱はハリーだけになった。

「勇敢なことだ。だが、ダンブルドアでさえ敵わなかつたこの私に勝てるだけでも？」

「勝てるさ。僕は一度お前を殺している。お前の半身である日記帳をだ」

日記帳と聞いてヴォルデモートは少し表情を変える。

ハリーは杖をまつすぐヴォルデモートに向けた。

「搾りカスであるお前に負けるわけがない」

「ほう、ならば証明してみろ。アバダ ケダブラー！」

ヴォルデモートの死の呪文がまっすぐハリーに襲い掛かる。

ハリーはその緑色の閃光を『わざと』避けなかった。

ハリーは後ろへと吹き飛ばされ、宙を舞ったが空中で体勢を立て直し地面に着地する。

そしてヴォルデモートを鋭く睨んだ。

「……何故だ。何故貴様は死なない」

ヴォルデモートはハリーを睨み返しながら問う。

「守られているからだ。愛されていたからだ」

ハリーは一步ヴォルデモートに近づいた。

「リドル。お前には分からないだろうな。ああ、一生分からないだろう」

ハリーは杖を振りかぶる。

どうやらハリーはこの短い間に何かを悟ったようだった。

そして武装解除の呪文を放った。

「エクスペリアームスツ!!」

「アバダ ケダブラー！」

ヴォルデモートの呪文とハリーの呪文が空中でぶつかる。

次の瞬間2つの呪文が重なり合い、まとめてヴォルデモートにぶつかつた。

ヴォルデモートの杖はクルクルと回りながらハリーの方へと飛んでいく。

ハリーはそれを片手でキャッチした。

次の瞬間、ヴォルデモートが地面に倒れ伏す。

そう、ヴォルデモートは自らの死の呪文を受け、在り来たりな死を遂げたのだつた。

勝敗は決した。

そして、お嬢様が計画した2人の死も達成された。

次の瞬間ガラスが割れるような音が競技場に響き渡る。

ヴォルデモートの死に目を奪われていた者たちも、咄嗟にそちらの方向を見た。

そして、愕然と目を見開く。

私は皆の視線が集まっている方向を見る。

そこには紅魔館がそびえ立っている。

ということは今の音は紅魔館の忠誠の呪文が解除された音だろう。

「皆、ッ苦勞だつた」

突然ピッチの真ん中にお嬢様率いる紅魔館の主要メンバーが現れる。

私とクイレルも姿現しでその中に加わつた。

レミリア・スカーレット、パチュリー・ノーレッジ、紅美鈴、小悪魔、クイリナス・クイレル、そして十六夜咲夜。

この事件の首謀者にして、全ての黒幕だ。

と、自分で言っているのだろうか。

「どういふことだ!?!」

ハリーがお嬢様に対して怒鳴る。

「邪魔だ小僧」

お嬢様の手の一振りでもハリーは何か殴られるように吹き飛ばされた。

「パチエ」

お嬢様が合図をすると、パチュリー様は魔導書を開く。

緑色の光の玉が空中へと打ち上げられ、私はそれを見て咄嗟に目を瞑る。

次の瞬間強い光を喰越しに感じ、私は恐る恐る目を開いた。

客席で人が死んでいた。

そう、その場の状況を一言で言い表すならそれだろう。

先ほどの光は死の呪文の改良版だ。

光を見た者全員が死に絶えた。

それだけだ。

死者の数は数えるだけバカバカしい。

だが、1人だけは確実に数えることになった。

クイレルが倒れ伏せた。

「あら」

お嬢様はすつとんきよな声を上げる。

「言つていなかったの？ パチエ」

「貴方が教えていると思つてたわ」

お嬢様は死んだクイレルを見下ろすと、一瞬惜しそうな目をしてすぐさま前を向く。

そして紅魔館に向けて歩き出した。

私は死んだクイレルを持つて帰ろうと肩に抱える。

「咲夜、捨てていきなさい」

お嬢様は私に冷ややかに言つた。

「ですが、今回一番の立役者ですよ？」

「持つて帰つても腐らせるだけよ。死体は死体。それ以下でもそれ以上でもないわ」

私はクイレルの死体を落とし、生きている者よりも死んだ者のほうが多い競技場を歩いていく。

何故姿現しで帰らないのかと不思議に思つたが、どうやら先ほどのどれだけの死者

が出たか確認しているようだった。

まあ結果から言えば、生きている者は数十人に満たない。

あの状況で私たちから目を反らしていた人間は殆どいないということなのだろう。競技場を出ると私たちはいつの間にか紅魔館の大図書館に立っている。

そこには既に大きな魔法陣が描かれていた。

「確認を取るわよ。まず死者は？」

「ホグワーツの戦いで367人。さっきのピカで453人」

小悪魔が事務的に報告する。

「800人そこそこ。生贄には十分よ」

パチュリー様が魔法陣に魔力を籠めながら言った。

「では参ろうか。新しい世界に」

お嬢様の言葉と共に魔法陣が赤く光る。

そして館がガタガタと揺れ始めた。

次の瞬間私の目の前が真っ白になる。

光に包まれたなどではない。

文字通り真っ白になった。

え？

私はこの感覚に身に覚えがあつた。

そう、アーチを潜つて死んだときのあの感覚だ。

私は周囲を見回すが、そこにお嬢様の姿も、ほかの皆の姿もない。

ただ白い空間に私の体だけが取り残されていた。

ここは一体何処だろうか。

もしや何かの拍子にクイレルみたいに死んでしまったのだろうか。

私は心配になり何も無い空間を飛ぶ。

いや、飛んでいるかどうか確証はないが。

「バックじゃないの？ 信じられない！ 人情つてもものはないのかしら！」

誰かが怒鳴っているような声が聞こえてくる。

どの方向だろうか。

いや、そうではない。

どこから聞こえるのではなく、そこから聞こえるのだ。

私が意識を集中させると、7色＋1つの綺麗な宝石のついた羽が見えてくる。

フランドールお嬢様だ。

「妹様？ 何故このようなところに？」

いや、まずここが何処かもわかっていないのだが。

妹様は私の方へと振り返る。

その顔は分かりやすいぐらいふくれっ面だ。

「それは貴方が一番理解しているはずなのだけどね。 咲夜」

妹様はそういうが私には見当もつかない。

私が困惑していると、妹様は呆れた顔で私の左ポケットを指さした。

「見てみなさい」

私は言われた通りにポケットの中に手を入れ、そこに入っている懐中時計を取り出す。

その時計の針は止まっていた。

「時間が……止まっている？」

「そう、貴方にしかできない芸当でしょう？ アリアナからも何か言っよ」

妹様は虚空へと話しかけた。

いや、そこに誰もいないのではない。

そこにアリアナがいるのだ。

そう思った瞬間、ブロンドの髪の毛が見えてくる。

アリアナが困り顔で立っていた。

「何か言つてつて言われても……まあこの事態は確かに異常だけどさ」

アリアナは私が見ていることに気が付いたのか、私の方を向く。

「えっと、本当にどういふ状況か分からないのですか？」

「本当に何が何だかさっぱりよ。お嬢様の目指していた日本の秘境というのは随分殺風景なですね」

私は冗談半分に周囲を見回す。

妹様は大きいため息をついた。

「まだイギリスよ」

「イギリスも殺風景になったものです。これが自然破壊というやつなのでしょうか」

「ふざけている場合じゃないわよ。本当にどういふ状況か分からないの？ 少なくとも

私には分からないわ。なんで私がこのような空間にいるのかとか、この空間に壁がないだとか」

妹様は退屈そうに椅子に座る。

私も座ろうと思つたら椅子が出現した。

「そういうえげなのですが、先ほどは何をあんなに怒つていたのですか？」

私は一番初めに聞いた妹様の怒声を思い出す。

妹様は分かりやすく頬を膨らませた。

「お姉さまよ。一体どれだけ殺せば気が済むのかしら」

どうやら妹様はお嬢様の計画にご立腹のようだった。

だが、妹様はそのようなことを気にするタイプだったのだろうか。

私の中ではうふふと言いつつながら人を殺すイメージしかないのだが。

顔に出ていたのか、アリアナが苦笑した。

「私の性格とごっちゃになっているみたいで。少し人情溢れる吸血鬼になっているのですよ」

「それはまた……一体？」

「分からないわ」

私たちは顔を見合わせて困り果てる。

私はポケットから鞆を取り出し鞆の中からティーセットを取り出した。

そしていつかホグワーツ特急の中で使った宙に浮かぶ机の上で紅茶を用意する。

「いい匂いですね。私もご一緒してよろしいでしょうか」

次の瞬間意識していないのに四季映姫が出現した。

私はそこで一瞬思考停止してしまうが、すぐに取り繕ってもう一つティーカップを用意する。

そして閻魔に紅茶をお出しした。

妹様もアリアナも驚いたような顔で閻魔を見ている。

だが閻魔はそんな視線も気にせず、すまし顔で紅茶を飲んでいる。

「仕事しなさいよ貴方」

妹様がポツリと呟く。

閻魔はそんなことを言われると思っていなかったのか盛大に咽込んだ。

「ゴホツ、ゴホツ、こ、これも仕事のうちです。うちの船頭と一緒にしないでください」

「いや、貴方の部下のさぼり癖は有名だけども」

妹様もティーカップを持ち上げる。

「貴方は日本の閻魔様でしょう？ こんなところでお茶していいの？」

閻魔はハンカチで口を拭くとすまし顔に戻った。

「いいのです、どうせ時間は止まっていますので」

そっか、と私たち3人は納得する。

私はテーブルの上に茶菓子と並べながら閻魔に聞いた。

「閻魔様、何故このようなことになっているのでしょうか。貴方の仕業ですか？」

「違います」

閻魔はぴしやりと言った。

「これは貴方のしたことです。十六夜咲夜。貴方の迷いが、このような事態を生んだのです」

閻魔はスコーンを一つ齧り、少し笑顔になる。

「あら、スコーンもいいものね。……説明が必要ですか？」

「スコーンの美味しさですか？」

「違います。このような状況でふざけないでください」

閻魔は口の周りにスコーンの欠片をつけながら話し始める。

正直締まらない。

「貴方は無意識中に自分の能力を発動させた。そして私たちをこの空間へと招待したのです。何かの答えを得るために」

私はいつもの癖でナプキンを取り出し閻魔の口周りを拭こうとする。

閻魔は私の手からナプキンを半ば奪い取るように受け取ると自分で口の周りを綺麗にした。

「……妹様とアリアナは分かれますが、貴方まで？ 理由が思い浮かばないですね」

「私に聞かれても分かりません。ですが貴方は私たちに何かの答えを聞こうとした」

私は何故か合点がいった気がした。

確かに今私は閻魔に聞きたいことがある。

それは私が幻想郷に行くことよりも大切なことだ。

「閻魔様、レミリアお嬢様は天国に行けるのでしようか？」

閻魔はキョトンとした顔で私の顔を見たあと、浄玻璃の鏡を取り出す。

「……ぎや、逆に何故これだけやつて天国に行けると思うのですか？ 図々しいにも程
——」
そして絶句した。

「……ぎや、逆に何故これだけやつて天国に行けると思うのですか？ 図々しいにも程
があります」

閻魔は平静を装っていたが、動揺を隠しきれていない。

「黒です。黒！ 真つ黒です！ 吸血鬼としての理も、生物としての理も、何もかも無視
しすぎている。今後どのような善行と積んだとしても、彼女は地獄に落ちるでしょう」

「それは困ります」

私は閻魔に訴えかけた。

「お嬢様には死んだ後も平穩であつて貰わなければなりません。そうでなければ私は一
足早く死んでお嬢様の為に地獄を作り変えます」

閻魔は私の目を見る。

「貴方のそういうところは美徳です。大切にしなさい。ですが、それとこれとは話が違
う。私の管轄する土地へと移動するためだけにあれだけの人を殺したのは許される行

為ではありません」

「私の管轄？」

「そう、貴方たちが目指していた土地の名は幻想郷。妖怪が創りしその世界の閻魔を務めているのはこの私です。私の役職名『ヤマザナドウ』の『ヤマ』は閻魔、『ザナドウ』は楽園を意味します」

「山田さん？」

「違います」

妹様とアリアナは既に机の端で絵を描いて遊んでいる。

私は紅茶を一口飲んだ。

「では逆に、どの程度だったらお嬢様が地獄に落ちないんでしょうか」

「難しいことを聞きますね」

閻魔は考え込む。

私は閻魔のティーカップに紅茶のおかわりを入れた。

「どうも。罪というのは数字で量れるようなものではありません。もし数値化できてしまったら、私は職を失うでしょうね」

閻魔は肩を竦める。

「なので厳密にこれをこうすれば天国に行けるなどといったことは言えない。まずはそ

れを理解しなさい」

そのうえで、と閻魔は続ける。

「まず最初に上がるのが、決闘後のよくわからない殺人光線です。無駄な殺生にも程があります。あとは死者を増やすために無駄に戦いを大きくしたことです。あれのせいで本来死ぬべきものが生き、生きるべきものが死んでいる。仲間であるクイレルを大切に扱わないのも罪です。そう、貴方はクイレルの一件でお嬢様の行動に疑問を抱いた」

それを聞いて私はハツとする。

「そうだ、確かにそうだ。

「今まで貴方はお嬢様の言うことは絶対で、何もかも正しいと信じ行動してきた。ですが、クイレルを弔わず自らの目的を優先したお嬢様の行動に、貴方は初めて違和感を覚えたのです。そして答えを得ようと無意識中に時間を止めた」

「では何とかしないと、お嬢様は地獄に落ちる……そういうわけですね」

私の言葉に閻魔は首をかしげる。

「何とかする？ どういう意味ですか？」

「お嬢様が何故これを私に託したのか、理解できました」

私は服の中から逆転時計を引っ張り出した。

そして右のポケットから灯消しライターを取り出す。

閻魔は2つの魔法具を見て目を細める。

「……なるほど。使い方はわかりますね？」

「今、理解致しましたわ」

閻魔は2杯目の紅茶を飲み終えるとソーサーに戻す。

「紅茶、ごちそうさまでした。では私はこのへんで失礼しましょう」

閻魔は椅子から立ち上がると私たちに背を向ける。

「貴方のお嬢様の為、そして貴方自身の為に多くを救ってきなさい。小さき幸せの為に大きな善を果たしなさい」

すうつと閻魔の姿が見えなくなる。

妹様が大きく伸びをした。

「話は終わったかしら、咲夜」

「はっ」

私は妹様に微笑んだ。

懐中時計を取り出し、今の時間を確認する。

1997年6月13日、午後11時59分。

「5回よ。クルクルって」

妹様はクルクルと人差し指を回す。

「行ってまいります」

「ええ、馬鹿な姉を救ってきなさい」

私は逆転時計を5回ひっくり返した。

その途端に凄い速度で目の前の光景が変わっていく。

そして私は午後7時の大図書館へと戻ってきた。

この時間、大図書館には人はいない。

お嬢様と美鈴さんと小悪魔と私はお嬢様の部屋に。

クイレルは魔法省に。

パチユリー様はホグワーツにいるはずだ。

私はパチユリー様お手製の透明になる魔法薬を舐め、体を透明にする。

そして大広間へと姿現しした。

そこでは既に夕食が始まっており、皆が思い思いに料理を口に突っ込んでいる。

しばらく待っていると私が分霊箱を持って現れる。

このとき私が分霊箱を持って現れたのには理由があるのだ。

ダンブルドアの注意を私に引き、死喰い人の侵入を気づかれにくくする。

実際にダンブルドアは大広間に死喰い人が突入してくるまでその存在に気が付かなかった。

私は時間を止め、グリフィンドールの談話室へと姿現しする。

そこでは既に何人かの生徒が倒れ伏していた。

談話室内は死喰い人で溢れ返っている。

私は死んでいる生徒の前で灯消しライターのボタンを一度カチリと押した。

その瞬間蘇りの石が底部で回転し、生徒の魂が現世に戻ってくる。

そしてそのまま灯消しライターに吸い込まれた。

そう、ダンブルドアが残したこの灯消しライター。

これが本来の使い方だ。

死んだばかりの者の魂を引き戻し、ライターの中に保存する。

私は死んだ者の前で灯消しライターのボタンを押していく。

カチリ、カチリと。

場所を変え、時間を変え、間に合わなかったら戻し、何度も何度も。

流石に肉体が壊れてしまっている人間までは生き返らせることができない。

死の呪文で殺された人間にしか効果がない。

だが、それでも一つでも多く。

カチリ、カチリ。

一度押すごとにお嬢様の罪が洗われていく。

逆転時計を使うのは初めてのことだ。

自分の能力に影響を及ぼす危険性があるため、今まで使つてこなかった。

カチリ、カチリ。

目の前でロンとハーマイオニーが死んでいる。

私がボタンを押すと、2人の魂が灯消しライターに吸い込まれた。

カチリ、カチリ。

目の前でムーディとキングズリーが死んでいる。

カチリ、カチリ。

目の前でルーピンとトンクスが死んでいる。

カチリ、カチリ。

ひとつ、ひとつ、多分それ1つとっても地球より重たいものなのだろう。

カチリ、カチリ。

時間にしてどのぐらいが経つただろうか。

いや、時間などない。

時間など、皆が感覚を共有する1つの手段でしかない。

一度押すごとに、この戦いでどれだけの死者が出たのかを思い知らされる。

何度も何度も、何度も何度も何度も何度も。

現実感がない。

いや、だからといって夢であるはずがない。

私は夢では人を殺すのだ。

人の命を救う行為が夢であるはずがない。

夢であつていいはずが……ない？

『誰も殺さなくて済む』

果たして誰の言葉だったか……。

とぼける必要はない。

私の言葉だ。

私が初めて殺したのは同じぐらいの歳の女の子だった。

次に殺したのは年上の男の子。

その次は大人の男性。

その次は女性。

そう、全て、全て覚えている。

全て、覚えているのだ。

カチリ、カチリ、カチリ。

私には全てを救うことはできない。

できることは限られている。

限られて……。

気が付くと、私の目の前で戦うものはいなくなっていた。

ダンブルドアとヴォルデモートが一時的に休戦し、クイディッチ競技場に集まるようにと皆に語り掛けたのだ。

私は皆と共に競技場へと移動する。

救えた命は330。

やはり、全てを集めきるのは無理だ。

競技場では既にダンブルドアとヴォルデモートの戦いが始まっていた。

2人は呪文を飛ばしあい、そしてヴォルデモートの奇策によりダンブルドアが敗れる。

ダンブルドアはそのまま後ろに吹き飛ばされ、地面に横たわった。

カチリ。

私がライターのをボタンを押すと蘇りの石が回転する。

ダンブルドアの魂はライターに入ることではなく、私の前に出現した。

「ふむ、ほうほうほう。ようやった」

ダンブルドアはぐるりと自分の体を確かめる。

そして私に向き直った。

「どうやら君はそれを正しく扱えたようじゃの」

ダンブルドアは朗らかに笑う。

今現在、ハリーがヴォルデモートと対決していた。

「ダンブルドア、この魔法具はなに？」

私が問うとダンブルドアは誇らしげに胸を張る。

「わしの最高傑作じゃやて。灯消しライター、その名の通り、灯（ともしび）を消したり、つけたりすることが出来る。そしてこの魔法具の凄いところは、蘇りの石との組み合わせを前提に作られているということじゃ」

「でも、貴方は蘇りの石を所持していなかった」

「そうじゃな。でも、どういう性質を持っているか推測を立てることができたら、それは持つていることと変わらん。そうじゃろう？」

私はライターを取り出しひっくり返した。

そこには亀裂の入った蘇りの石が嵌まっている。

「そして、そのライターにはもう一つの使用方法がある。使ってみて気が付いたはずじゃ」「生きている者の魂を、吸い取ることが出来る」

「そうじゃ、そのライターは魂の灯でさえ、中に吸い取ることが出来る」

ハリーがヴォルデモートに武装解除の呪文を掛け、ヴォルデモートは自ら放った死の呪文に当たった。

カチリ、私がボタンを押すと成長した姿のヴォルデモートが目の前に現れた。

「……………そうか、私は破れたのか。だが分霊箱は？」

ヴォルデモートの顔は蛇のようではなくなっており、若き日のトム・リドルをそのまま50歳前後まで老けさせたような見た目になっていた。

「すまんのう、トム。分霊箱はわしが全部破壊してもうた」

それを聞いてヴォルデモートは意外そうな顔をする。

だが、不思議と怒ることはなかった。

「そうか、貴様の自信はそこから来ていたわけだな」

何かが割れる音が聞こえて、お嬢様が競技場に降り立つ。

私は時間を止めた。

私が時間を止めてもダンブルドアとヴォルデモートの時間は止まらない。

「これでゆっくり話せそうね」

「そうじゃの、では、話してくれるか？ 君の見ていた世界について。君とお嬢様の物語を」

私は椅子と机、そしてティーセットを取り出した。

「お話しいたしますわ。ホグワーツ入学から今に至るまで。何を見て、何を感じ、何を思ったのか」

一体何時間私たちは話したのだろう。

だが、現実の時間は一秒たりとも進まない。

「そして私は閻魔の元を離れ、魂を回収しに戻ってきたのです。これが私の見てきた物の私の世界です。それはそれは硬く冷たく、温かみのあるものでした」

ダンブルドアとヴォルデモート、いや、リドルはもう何杯目か分からない紅茶を飲み干す。

「興味深い、非常に興味深い話じゃった。まさか全てが君のお嬢様に繋がっておるとは。う。パチュリー・ノーレッジも、クイリナス・クイレルも。戦争を起こすタイミングをコントロールしたり、君の死さえ武器にしたレミア・スカーレットには脱帽じゃ」

ダンブルドアは静かにカップをソーサーに戻す。

「疑問に残ることがある。レミア・スカーレットは何故お前に逆転時計を渡した？」

「このような状態になることをわかっていたとでもいうのか？」

リドルが首を傾げながら言う。

そう、私もそのことは疑問に思っていたのだ。

「神秘部の予言の間に、このような予言を置いたと、君は教えてくれたのう。『1996年 R. S. から L. D. へ ダンブルドア』 そう、レミアア嬢からわし宛てに送った新しい予言じゃよ。わしはこれをつい昨日神秘部で拝見した」

ダンブルドアは懐から小さなガラス玉を取り出す。

「内容を簡単に説明すると、沢山人が死ぬが、沢山人が生き返る。そういう内容じゃった」

「だから貴方は生徒を優先せず、分霊箱の破壊を優先した？」

「いかにも」

ダンブルドアはガラス玉を仕舞いなおす。

「わしはこの予言がどういうことか、ずっと考えておった。結論が出たのは、君がクイレルを箒の後ろに乗せて競技場に降り立った時じゃ。君の首元に金色の鎖が見えた。わしはこれでも記憶力はよいので。すぐにその鎖が逆転時計のものであると悟ったのじゃよ。逆転時計の在庫は神秘部の戦いで全て失われてしまったものと思つとつた。つまり、君が今首から下げているのが最後の逆転時計じゃと、わしは考えたのじゃよ」

つまり皆を救えるのは、灯消しライターを使えるのは私しかない。

「君の能力は時間に縛られることがない。少しでも多くの者をその手で救うことができ。そうじゃ、そうなのじゃよ。わしはその時予言の本当の意味を悟った。そして、わしは君に灯消しライターを委ねたのじゃ」

確かに分霊箱をダンブルドアのもとに持つて行ったときにはまだお嬢様から逆転時計を預かつていなかった。

「少し、時間を進めてくれるかの？」

ダンブルドアの言葉通りに私は時間を進める。

パチュリー様が魔導書を取り出したのを見て、私は目を固く瞑った。

「今じゃ」

ダンブルドアの合図で私は時間を停止させる。

そこでは多くの者が倒れ伏していた。

カチリ、私はクイレルの命を回収する。

「少し歩こう。暎夜よ。周囲を歩きながら、ボタンを押していくのじゃ」

私たち3人は静かに観客席を歩いていく。

カチリ、カチリと灯消しライターを鳴らしながら。

「つまりお嬢様は私のこの行動を予想していた？」

「予想ではない。あの時の答えを見せてほしい。つまりは答え合わせじゃよ」

答え合わせ。

一体何の答えなのだろうか。

「咲夜、何の答え合わせなのかではない。これが、すなわち答えなのじゃよ」

ダンブルドアは私の心臓を指さす。

「愛じゃ。咲夜。自己犠牲の果てにある、この世で最も美しいものじゃ。そしてトム、君が理解できなかったものでもある。人を愛し、友を愛し、お嬢様を愛したその答えが、咲夜、君の今の行動じゃよ」

競技場を一周し、私は453の魂を呼び戻す。

私の手の平に、皆の魂が詰まっていた。

「さて、わしはもう逝こうと思う。トム、ご一緒願えるかな？」

「一緒なものか。逝く先が違う」

「生き返らなくてよいのですか？」

私は思わず2人に聞いた。

ダンブルドアが振り返る。

「わしはもう十分生きた。そろそろ家族のもとに逝くのもいいじやろう」

リドルが振り返る。

「私の半身は形を変えて生きている。そう言ったのは君だ。惨めに余生を送るよりか

は、地獄の方がいくらかマシだろう」

2人は歩き出した。

どこに向けて？

決まっている。

どこかに向けて、アーチの向こうに広がる世界へ。

私は2人を見送ると時間停止を解除する。

紅魔館の周りに巨大な魔法陣が展開され、紅魔館が光に包まれる。

そして次の瞬間、紅魔館が跡形もなく消え去った。

お嬢様は幻想郷に旅立たれたのだ。

「少々お暇をいただきます」

私は解毒剤を飲み干す。

そして姿を競技場へと現した。

競技場では生き残った少しのものが不思議そうに周囲を見回している。

驚くべきことに、お嬢様に吹き飛ばされたハリーは生きていた。

大きく咳き込みつつも、ハリーは立ち上がる。

「ガホツゴホツ……はあ、はあ。い、一体、何が起こったんだ？」

よろよろと立ち上がり、ハリーは観客席を見回した。

「君のお嬢様が現れて、突然吹き飛ばされて……。なんでみんな寝ているんだ？」
ハリーは心配そうに皆を見た。

死者を尊ぶ声があちこちで聞こえてくる。

私はポケットから灯消しライターを取り出した。

「戻りなさい。自らの体に」

カチリ、私はボタンを押す。

次の瞬間灯消しライターが天高く昇り、そして爆発した。

いや、爆発したように見えただけだ。

中に詰まっていた魂が四方八方に飛び散り、体の中に入っていく。

魂の雨が、競技場に、ホグワーツ城に降り注いだ。

「いったいどういうことなんだ？」

ハリーが私に聞く。

「つまりですね」

私は微笑む。

「めでたしめでたし、というやつです」

幸せとか、笑顔とか、始まりとか

『クイリナス・クイレル、魔法大臣に就任 アズカバンとの懸け橋をつくるか』

私はふくろうに5クヌート支払うと、日刊予言者新聞を広げた。

あの戦いから魔法界は変わったと言える。

アズカバンは1つの魔法都市として機能しており、死喰い人の拠点ではなくなった。

その市長にあのルシウス・マルフォイが就任したという話だ。

死喰い人だった者はトップを失い、その殆どが心を入れ替えた。

元々ヴォルデモートに触発された者が多かったためだが、すんなり許した世間も世間

だと私は思う。

だが、一部思想が強い者は今だ革命家のように活動しているようだ。

レストレンジとクラウチのコンビなどその筆頭と言える。

そしてこの記事、クイレルは一度辞表を出し、大臣職を降りた。

だが、選挙の結果また魔法大臣に就任したのだ。

そしてこれが一番驚くべきことだとは思うのだが、ここまでの改革が1997年の夏

の間に行われたことだ。

全てが円滑に進み、ほんの数か月の時間で魔法界は安定した。

何故こんなにも円滑に、そして多くのものが改心したのだろうか。

私には詳しいことは分からない。

だが、推測を立てることはできる。

ホグワーツで死んだ殆どの者が一度灯消しライターの中に入った。

本来魂と魂が近づくべきでない距離まで、無理やり近づいたのだ。

思想や性格が互いに影響し合ったのではないか、私はそう考えている。

つまりお嬢様が指示したであろう、競技場での虐殺は後腐れをなくす為の行動だったのではないか。

私はそう思っている。

生き返った瞬間また全員で殺し合いを始めても不思議ではなかった。

だが、そうはならなかった。

皆が何かを悟ったように双方のリーダーの死を悲しんだのだ。

結局あの戦いで死亡したものは100にも満たなかった。

生徒の殆どは生き返り、今は休暇を楽しんでいる。

「クイレル、貴方って帰る気ないの？」

私は目の前に座ってトーストを齧っているクイレルに話しかける。

クイレルは不思議そうな顔をした。

「逆に君は帰る気があるのか？」

「当たり前じゃない。私の居場所はどこではないわ」

私もトースターからトーストを取り出すとバターを塗る。

クイレルは肩を竦めた。

「君の話ではこの平和を作ったのはレミリアお嬢様なのだろうか？　だとしたら私はこの

平和を全力で守るだけだ」

「あっそう」

私はそっけなく返事をするがクイレルは何故か嬉しそうだつた。

「でもそんな就任したての魔法大臣が休暇なんて取っていいの？」

「君こそ明日から学校だろう？」

今度は私が肩を竦めた。

「学校には行かないわ。私は今日という日を待っていたの」

私はトーストを食べ終わると椅子から立ち上がり帽子を被った。

それを見てクイレルも立ち上がる。

「では向かおうか」

私とクイレルはともに姿をくらませる。

そして隠れ穴へと姿現しした。

隠れ穴には既に多くの人がいる。

元不死鳥の騎士団メンバーに魔法省の役人、元死喰い人まで。

「咲夜！ 待つてたわ！」

ハーマイオニーがいち早く私を見つけたらしく、私に抱き着いてきた。

鬱陶しいことこの上ないが、こういうのもいいだろう。

「クイレル大臣も、本日は兄の結婚式にご参列くださりありがとうございますとございます」

ロンがわざと恭しく頭を下げた。

ハーマイオニーがその頭をぺしりと叩く。

そう、今日はビルとフラーの結婚式だ。

ビルとフラーが随分前から付き合っていたことは知っている。

だが、状況が状況なので今まで式を挙げる時間がなかったらしいのだ。

「やあ、咲夜」

ビルとフラーが私たちの方へと歩いてきた。

その横にはハリーもいる。

「今日はおめでとう。2人とも」

「結婚おめでとう」

私はフラーと、クイレルはビルと握手を交わす。

「クイレル大臣、お忙しい中本当にありがとうございます」

ビルは深々と頭を下げた。

「なんてことはない。2度目の就任だから時間の余裕はある」

「そもそも一度自分から辞めて再度就任つてのがおかしいのよ」

「民意は大切だ」

クイレルは大きく肩を竦める。

私たちはしばらく会話を楽しみ、そして会場へと座る。

今日クイレルは参列者として来たわけではない。

神父のまねごとをするためにここへきたのだ。

クイレルの前にビルとフラーが並ぶ。

「ウイリアム・アーサーとフラー・イザベルは今結婚しようとしています。この結婚に異議のある者は申し出るように。異議がなければ、今後何も言つてはなりません」

誰も何も喋らない。

静かにその様子を見守っていた。

「汝、ウイリアム・アーサーはフラー・イザベルを健康な時も病の時も、富める時も貧しい時も、良い時も悪い時も愛し合い敬いなぐさめ助けて、変わることなく愛することを

誓いますか?」

「誓います」

ビルは宣言した。

「汝、フラー・イザベルはウィリアム・アーサーを健康な時も病の時も、富める時も貧しい時も、良い時も悪い時も愛し合い敬いなくさめ助けて、変わることなく愛することを誓いますか?」

「誓います」

何百、何千と心の中で練習したのだろうか。

フラーの宣言に訛りはなかった。

「……されば、ここに2人を夫婦となす」

クイレルは杖を取り出すと2人の頭上にかざす。

すると2人の上に銀の星が降り注ぎ、抱き合っている2人を螺旋を描いて取り巻いた。

ビルは笑顔だった。

フラーも笑顔だった。

周囲を見回すと、皆笑顔で拍手をしている。

いつも仏頂面のクイレルさえ笑顔だ。

なら、多分私が浮かべているものが、笑顔なのだろう。

何の含みもない、人の幸せを願う笑顔なのだろう。

私は、これを確認したかったのだ。

皆が料理を楽しんでいるときに、私は一人ダンスフロアに上がる。

そしてバンドマンからマイクを奪い取った。

「みんな」

私はマイクに向けて話す。

何かが始まったと、皆が私の方を見た。

「私は今日、1つの幸せの形を見つけました。できればこの幸せをもつと皆さんと共有したい。でも、いつまでも浮かれ気分ではいけません。私には帰るべき場所がある」

皆が、私の話を聞いている。

式の間気が付かなかったが、ドラコも式に参列していたようだ。

「かつて2つの勢力の戦争を利用し、この地を離れていったレミア・スカーレットお嬢様。世間では伝説のお騒がせ者として有名ですが、私は彼女の従者であり、道具であり

――

「そして、家族です」

私は首に下げていた逆転時計を取り出す。

「クイレル、魔法界をよろしくね。ビル、フラー、末永くお幸せに。パーシー、家族と仲良くね。フレッド、ジョージ、あまりモリーさんに迷惑かけるんじゃないわよ。ロン、いいじしてないで告白しなさい。ハーマイオニー、来年気張りすぎないように。ジニー、ハリーと仲良くね。ドラコ、私がいなくなるからって泣くんじやないわよ。シリウス、親バカも大概にしなさい。ルーピン、トンクス、子供を幸せにするのよ。ハリー、貴方は選ばれし者から普通の男の子に降格よ。普通に生きなさい」

一人一人名前を呼びながら私は逆転時計を回していく。

「また機会があれば会いましょう」

そして私は勢いよく逆転時計を回転させた。

時間の計算はお手の物だ。

この逆転時計は半回転で1時間の時間を戻ることができる。

時計の回転と共に、目の前の光景が巻き戻っていく。

夏の間に伸びた草花は低くなっていき、太陽は反対から上り反対へ沈む。

そして800と数十回転を過ぎた頃、私はぴたりと逆転時計を止めた。

懐中時計を取り出し、時間を確認する。

1997年6月13日、午後11時59分。

「ジャスト。流石私」

そして次の瞬間私は時間を停止させた。

私は懐中時計を仕舞うとホグワーツへと姿現しする。

そして禁じられた森を進み、紅魔館へと入った。

そのまままっすぐ地下へと下り、大図書館に入り込む。

そこにはお嬢様とパチュリー様、美鈴さん、小悪魔、そして私が出た。

「はあい。何も知らない私」

私は時間の止まっている自分に声を掛ける。

当然、返事はない。

私は時間の止まっている私の逆転時計を5回ひっくり返す。

すると私は過去へと送られていった。

私は先ほど私が立っていた場所に立ち、時間停止を解除する。

そして目の前が白い光で包まれた。

目を開けると、そこには大図書館が見える。

お嬢様はバランスを崩したのか床に転んでおり、パチュリー様は倒れてきた本に埋まっていた。

「いやはや。今度こそヘルメットが必要だったみたいですね」

美鈴さんは転んでいるお嬢様を見てケタケタと笑っている。

「大丈夫ですか？ お嬢様」

私はお嬢様を引き起こそうと手を伸ばした。

お嬢様は私の伸ばした手を掴む。

その時、私の中から何かがお嬢様に流れ込んだ気がした。

お嬢様はその感覚を確かめるように手を強く握り返すと、満足そうに笑う。

「それが貴方の答えね」

私はお嬢様を引き起こした。

「はい、そしてお嬢様が望まれた幕引きでもあります」

小悪魔はパチュリー様を掘り起こしている。

美鈴さんは混乱して図書館に飛び込んできた妖精メイドをなだめていた。

「幕引き？ 違うでしょ」

お嬢様は大きく翼を広げる。

「始まりよ」

そして大きく羽ばたいた。

私の世界は硬く冷たい。

時間の止まった世界では、全てがダイヤ以上に硬く、何よりも冷たくなる。

そんな世界に生きる私も冷たい人間なのかもしれない。

人間に冷たい人間なのかもしれない。

でも、それでいいのだ。

私は人間として、お嬢様に仕えよう。

命尽きるその日まで。

その後は、ゆっくりあの世で待てばいい。

「さあ始めよう。私たちの戦争を」

「はい、お嬢様」

私の世界は硬く冷たい。

そんな冷たい私を、お嬢様はきつと温めてくれるだろう。

その紅き意思で。

それからどした

紅く偉大な私が世界

ランタンの小さな灯りが静かに机の上を照らす。

決して明るいわけではないが、本を読む程度なら十分だった。

レミリアは机の上に置かれている一冊の日記帳を開く。

その日記帳には特別な点は何もない。

何処にでもある極一般的な羊皮紙の日記帳だった。

「いつから付けているものだったかしら。」

誰に言うでもなくレミリアはぼつりと呟く。

一日あたりの文章量は少ないが、その一日を振り返るには十分な情報量だった。

「レミリア数十年、本当に色々あったわね。こんなものなくても思い出せるぐらいに。」

机の上に置いてある万年筆を手にとると、羊皮紙の上に滑らせる。

ある意味日課のようでもあったが、何もなければ何も書かないのがこの日記だった。

暫く適当に万年筆を動かして、文字を綴る。

そこまで時間も掛からずにレミリアは日記を付け終わった。

「咲夜。」

次の瞬間、レミリアの左後ろに咲夜が現れた。

その手には既にティーセットを持っている。

咲夜は慣れた手つきで机の上に紅茶を置く。

レミリアはティーカップを手にとると、ゆっくりと一口飲んだ。

「そういえば、最近人里で座敷童が失踪する事件が起きてるみたいね。」

「どうやら外の世界で座敷童がブームのようで。出稼ぎに出ているみたいです。」

「そう、うちにはいないから気が付かなかったわ。」

「でもその代わりに外の世界から屋敷しもべ妖精を輸入したみたいですよ。里の人たちはゴブリンと言っていました。」

レミリアはふむと顎に手を当てる。

「まあ妖精って見た目でもないしね。それに、外の世界の住民が座敷童を本当に求めているようには思えないわ。」

そのうち帰ってくるでしょうね、そうレミリアは断言した。

「そうなるよ、外の世界から輸入した屋敷しもべ妖精はどうなるのでしょうか。」

「帰るんじゃない？ 魔法界とかに。なんにしても、あの顔は受けない。特にファンシーなもので溢れている幻想郷ではね。」

レミリアはティーカップをソーサーに被せる。

そして人差し指一本で弾き、表に返した。

「まあ、うちで雇ってもいいんだけど。でもうちには妖精メイドもいるし。咲夜的にはどう思う?」

「そうですね。幻想郷に来てからというもの、紅魔館の内部は広がり続けるばかりですし、人手は欲しいですね。」

「そもそも紅魔館内で弾幕ごっこするのがおかしいのよ。」

外の世界にいた時と比べると、紅魔館の内部の空間はかなり広がっている。

エントランスなど、どこかの教会の大聖堂かと思えるほどだ。

「じゃあまあ、屋敷しもべ妖精が解雇される時はうちで引き取りなさい。」

「かしこまりました。」

咲夜は一礼するとティーセットを片付けて部屋から消えた。